

対魔忍世界へ転移したが、私は一般人枠で人生を謳歌したい。

槍刀拳

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

…彼女のことか…。

当然、知っている。

話せば長い。

けど、最近の話だな。

——知ってるか？

対魔忍は3つに分けられる。

親が対魔忍な奴。

突然、忍術が覚醒したやつ。

先祖が魔族と交配している奴。

…この3つらしい。

彼女は——

彼女は『消火栓の妖精』と呼ばれた一般人。

瞳の奥に不思議な煌めきを持った女——

——いい眺めですね。

ここから見れば、どんな君も然して変わらない。

俺は『彼女』を追っている。

…あれは紫先生が基礎能力試験を行った日だった——

※注意1：

私はBOOTHのクトゥルフ神話TRPGの『対魔忍シナリオ』を主に遊んでハマった勢です。小説を執筆するにあたって、対魔忍RPGを実際に遊び 攻略wikiも資料として確認しながら執筆をし

ていますが……登場するキャラが原作から離れているかもしれませ  
ん。ご了承ください。

※注意2：

本作品は、オリ主側の諸事情により特殊タグ（歪みや揺れ等）を、  
多数使用している作品”であります。（細かい理由に関してはEpi  
sode9のあとがき参照）

特殊タグの多用を好まない方は、『対魔忍世界へ転移したが、私は  
一般人枠で人生を謳歌したい+（ぷらす）』 <https://setu.org/novel/289171/>まで！

「てらG名様」より描いていただきました！

ありがとうございます！

「閃刀姫使いアルジエ様」より描いて頂きました！

ありがとうございます！

「うんどうるむ様」より描いて頂きました！

ありがとうございます！

※頂いた支援絵は小説の書き手にとって、耐えがたいほどの歓喜に  
満ちた超宝物です。

※投稿ペースについて：

現在、休載中です。

再開の目途はあります！2024/06/12 20:37に必  
ず！

対魔忍世界へ転移したが、私は一般人枠で人生を謳歌したい。

## 目次

序章 『転移に至ったワケ』

Episode—Null 『Dead or Alive』

1

1章 『占拠されたビル』

Episode1 『Goto Travel to another world.』

Episode2 『私は便器の上に座った…ただの人型をした肉

の塊。そう、つまり、これこそ肉便器』

Episode3 『Fight Song [fighting

spirit]』

Episode4 『対魔忍！ 推参！』

Episode5 『目が覚めたら白い部屋〜私は対魔忍から離れ、強く生きてます〜』

2章 『わくわく五車学園ライフ（！）』

Episode6 『入学初日から、不運と踊っちまった話』

40

Episode7 『“消火栓の妖精” 〜名付けの原因〜』

51

Episode8 『で、この状況が生まれたってわけ』

Episode9 『“ただの一般人”』

Episode9—EX 『□『青空 日葵』』

3章 『日常と違和感』

Episode10 『welcome to 修羅学園霸道ライ

フ』

Episode 11	『居るはずがないモノ』	79
Episode 12	『筋肉は裏切らない』	84
Episode 13	『休日の自宅での幸せな日常』	91
Episode 14	『脅威の身内の洞察眼』	97
Episode 14—Tips	『お昼のニュース』	108
4章 『群馬県まえさき市』		
Episode 15	『いざ、まえさき！』	110
Episode 16	『茶色?のケモミミフード』	120
Episode 17	『?????の?????』	126
Episode 18	『高位魔族』	134
Episode 19	『最高の再開』	139
Episode 20	『2つ名』	146
Episode 21	『ナーガ vs 探索者』	155
Episode 22	『残酷な勝利宣言』	165
Episode 22—Tips	『スネークレディの通話記録』	173
Episode 22—EX	『青空 日葵』	177
Episode 23	『探求者』としての観察眼』	182
Episode 24	『殺る気 スイッチ』	189
Episode 25	『妖精 来りて脳を衝く』	198
Episode 26	『大喰らいの泥濘／赤黒き花卉』	206
4章 『群馬県まえさき市』(裏)		
Episode—Inside 4—1	『ふうまと蛇子のお花摘み』	214
Episode—Inside 4—2	『倉庫調査』	222

Episode—Inside 4—3 『深淵の監視者』—— 229

Episode—Inside 4—4 『Episode 25の裏

側』—— 238

Episode—Inside 4—5 『意識不明の重体』—— 245

5章 『Bad End.』

Episode 27 『Bad End.』—— 253

6章 『入院生活』

Episode 28 『ホイツスルシャウト』—— 263

Episode 29 『偵察者』—— 276

Episode 30 『正義のヒーロー』—— 282

Episode 31 『病院での平和な日常』—— 288

Episode 32 『真実は時として毒となる』—— 296

Episode 33 『日程調整』—— 305

7章 『つかの間の平穩(?)な日常』

Episode 34 『光の陽葵／闇の日葵／Wひまり』—— 315

Episode 35 『噂の根源』—— 323

Episode 36 『五車学園の森の怖い話』—— 328

8章 『五車学園の生徒指導は超過激!』

Episode 37 『思考がヒヤッハー、学内ヒヤッハーする』

334

Episode 38 『地獄の生徒指導』—— 343

Episode 39 『追加条件提示』—— 351

Episode 40 『逃走経路』—— 358

Episode 41 『過剰な生徒指導の裏事情』—— 369

Episode 42 『暫定忍法』—— 376

9章 『言葉のボディブローは突然に♥』

E p i s o d e 4 3 『昇降口にて』

384

E p i s o d e 4 4 『憧れの人』

391

E p i s o d e 4 5 『校舎裏にて』

398

E p i s o d e 4 5—T i p s 『◇雨降洋館』

406

E p i s o d e 4 6 『調査前日』

413

10章 『対魔忍 With 悪霊の家』

E p i s o d e 4 7 『亡霊の洋館』

421

E p i s o d e 4 8 『意外な味方』

428

E p i s o d e 4 9 『狂乱発狂』

438

E p i s o d e 5 0 『惨糞クッキング♪』

449

E p i s o d e 5 1 『状況・事態の一変』

458

E p i s o d e 5 2 『激痛☆ネイマール!』

466

E p i s o d e 5 3 『情報共有と渾名とだいしゆきな手記』

475

E p i s o d e 5 3—T i p s 『犠牲者の手記1・2』

481

E p i s o d e 5 4 『指揮系統』

489

E p i s o d e 5 5 『謝罪と原因』

498

E p i s o d e 5 6 『行動制約と焦燥』

503

E p i s o d e 5 7 『休息の時間』

510

E p i s o d e 5 8 『神村 舞華』

517

E p i s o d e 5 9 『指揮系統は一任するわ』

524

E p i s o d e 6 0 『死に対する価値観』

528

E p i s o d e 6 1 『死体部屋』

534

E p i s o d e 6 2 『黄泉録り』

542

Episode 63 『失踪者』 | 550

Episode 64 『クローゼットの中身』 | 558

Episode 65 『無茶振り』 | 564

Episode 66 『ドレスを纏った／首のない貴婦人』 | 573

Episode 67 『狂気乱舞』 | 581

Episode 68 『洋館内で最大級の脅威が、最も警戒して  
たはずのブラッドドレスを纏った首のない貴婦人という恐怖対象か  
ら、穂稀なおという五車学園の一般生徒に切り替わっていた件につ  
いて』 | 589

### 11章 『洋館の外』

Episode 69 『ダイナミック☆お邪魔しました』 | 600

Episode 70 『探索者の意地』 | 608

### 12章 『真・悪霊の家』

Episode 71 『即堕ち2コマ』 | 616

Episode 72 『館の主』 | 624

Episode 73 『短期決戦』 | 631

Episode 74 『2回戦』 | 641

Episode 75 『本当の狙い』 | 650

Episode 76 『NKT：長く苦しい戦いだっただ…』 | 657

Episode 77 『脱出前の探索者ムーブ』 | 664

### 13章 『インターバル』

Episode 78 『見舞い客と“課外授業”の断片』 | 672

Episode 79 『増加する見舞い客』 | 682

Episode 80 『深まる絆』 | 693

Episode 81 『最後の見舞い客』 | 704



Episode 82	『愛し愛されるもの』	713
Episode 83	『ヒマリがやってきたぞっ』	722
Episode 84	『陽葵のプレゼント』	730
Episode 84α	『□報告書【雨降洋館／鋼人洋館】』	737
Episode 84β	『□報告書【青空 日葵関連】』	745
企画	『一周年記念＋100話投稿記念：設定資料集』	
Episode 85	『対魔忍RPG プレイアブルキャラクター(1)』	763
14章	『ほんとうは怖い五車町』	
Episode 85	『熱中症対策』	781
Episode 86	『男の娘でも頭皮は男の子』	790
Episode 87	『休み明けの違和感』	796
Episode 88	『〃転校〃生』	801
Episode 89	『真夏の昼間の悪夢』	807
Episode 90	『真夏の陽葵の乱入』	816
Episode 91	『日ノ出陽葵は天然』	825
Episode 92	『桐生 佐馬斗』	832
Episode 93	『Tips 『逆襲劇』＋『□血液検査の結果』』	842
Episode 94	『五車学園プールとプールサイドでの思い出語り』	854
Episode 95	『縁の下の力持ちな おじさん』	864
15章	『稲毛屋のソフトアイスクリーム』	

Episode 96	『稲毛屋道中』	875
Episode 97	『日葵ちゃんの良さ』	882
Episode 98	『稲毛屋』	889
Episode 99	『稲毛屋のソフトクリーム』	897
Episode 100	『信頼度を50アップさせるアイテム』	903
企画	『Episode 100 話投稿記念：設定資料集2』	
Episode 99—IF	『対魔忍RPG プレイアブルキャラ 化(2)』	913
Episode 100—IF	『対魔忍RPG プレイアブルキャラ 化(3)』	932
16章	『期末試験』	
Episode 101	『期末試験』	966
Episode 102	『3人1組』	972
Episode 103	『カフェテリアでの閑話』	980
Episode 104	『組み合わせ』	987
Episode 105	『作戦会議《前半》』	994
Episode 106	『作戦会議《後半》』	1009
Episode 107	『へトイレの破壊神(めがみさま)』	1022
Episode 108	『囷とは派手に散るものよ……』	1030
Episode 109	『実況側から、こんには!』	1042
Episode 110	『敵を騙すには、まず味方から』	1050
Episode 111	『手加減無用のキャットファイト』	1056
Episode 112	『フェラルグールの狂奔』	1065

	Episode 113	『試合に負けて、勝負にも負けた』	1073
	Episode 114	『ごめん、慰労会にはいけません』	1082
	Episode 114—EX	『□【Holyhock・デモ版】	1090
<hr/>			
	16章 『期末試験』（裏）		
	Episode—Inside 16—1	『一方、その頃…』	1100
	Episode—Inside 16—2	『日葵ちゃん流の作戦考案！』	1107
	Episode—Inside 16—3	『雲隠れゆきかぜちゃん孤軍奮闘へ口へ口大作戦！』	1112
	Episode—Inside 16—4	『チマチマと削る単純作戦！』	1123
	Episode—Inside 16—5	『恐ろしく早い動揺！私でなきゃ見逃しちゃうね！』	1135
	Episode—Inside 16—6	『孔明の罠!!!』	1143
	Episode—Inside 16—7	『私達の勝鬨あげよう！』	1155
<hr/>			
	17章 『<幸運>で埋め尽くして』		
	Episode 115	『2度目の悪質タックル』	1166
	Episode 116	『鹿之助くんの好きどころ』	1176
	Episode 117	『第2ラウンドの短期決戦』	1185
	Episode 118	『出席停止』	1196
<hr/>			
	18章 『夏休み前の幕間』		
	Episode 119	『今日もわちゃわちゃ』	1200

Episode 120	『五車学園勢との夏休みの日程調整』	1210
Episode 121	『青空、東京キングダム行くってよ』	1217
Episode 122	『流転する思考』	1224
19章 『対魔忍世界の夏休み』（前編）		
Episode 123	『完全アウェイ』	1232
Episode 124	『〈言いくるめ〉の貴公子』	1241
Episode 125	『本題と利害関係』	1249
Episode 126	『超フィジカルおっぱいオバケ』	1255
Episode 127	『致命的な勘違い』	1261
20章 『夏だ！海だ！水着だ！開戦だーッ！』		
Episode 128	『くさぶき城―海水浴場』	1271
Episode 129	『歩く性癖破壊兵器』	1280
Episode 130	『迎え撃て！（いざ行かん！）水着チャレン ジ！』	1290
Episode 131	『幼子、目を離すべからず』	1298
Episode 132	『NTRするときは狂犬に気をつけろ』	1305
Episode 133	『異世界転移知識無双』	1312
Episode 134	『トラップは最後の最後でほんの少なさ やかに』	1322
Episode 135	『クトゥルフ世界の（てめえの焼死体の上 で）様式美解決法（マイムマイムを踊ってやる）』	1332
Episode 136	『プロポーズ（誓いの言葉）』	1340

	Episode 137	『ムードブレイカー蛇子』	1352
	21章	『東京キングダムでの騒動』	
	Episode 138	『劇的ビフォーアフター』	東
		『魔都』	京
	Episode 138	— Tips	1359
		□東京キングダム対策装備	1367
	Episode 139	+ Tips 『廃棄都市 東京キングダム』	1382
	Episode 140	『表通り東京キングダム観光』	1389
	Episode 141	『東奔西走』	1398
	Episode 142	『Ⅱ歪み始める歯車（大切な制御装置の欠損）』	1405
	Episode 142	— Tips	1413
		□東京キングダムの各勢力	1420
	『5強』	—	1413
	Episode 143	『情報屋のマダム』	1420
	Episode 144	『いえーい！陽葵ちゃん、見てるうー？』	1420
		これから東京キングダムで高位魔族と会合を開いちゃいまーす！	1432
		(NTRビデオ風)	1432
	Episode 145	『CV・若本規〇』	1441
	Episode 146	『そこのお前！高位魔族1人に含まれる脅威は邪神1体分だぜ！』	1451
	Episode 147	『袋叩き84秒前』	1459
	Episode 148	『最終勧告』	1466
	Episode 149	『お客様アー!!! お客様の中に対魔忍はいらっしゃりませんか?!?』	1473

	Episode 150	『I'm scary.』	1484
	Episode 151	『人間風情が高位魔族3人に勝てるわけないだろ!』	1495
	Episode 152	『本格的な尋問』	1505
	Episode 153	『やべーぞ!レイプだ!!』	1513
	Episode 154	『けつなあな確定な』	1520
	Episode 155	『ハツタリ』	1531
	Episode 156	『よくある嫌がらせ』	1542
	Episode 157	『現地調達』	1550
	Episode 158	『ナーガ vs 探索者 (2)』	1559
	Episode 159	『ケツ叩きなマシン』	1570
22章	『蠕ウ隶舌☆纏丸? 纏ッ譚代←纏ゆj』		
	Episode 160	『だいはくはつ』	1579
	Episode 161	『エドウィン・ブラック vs 探索者』	
1588	Episode 162	『一難去って、つぎ災難』	1597
	Episode 163	『人生とは思いつりいかないものだ』	
1606	Episode 164	『空中で動けないなら、空を飛べばいいじゃない』	1614
	Episode 165	『魔族を率いる頭領としての器』	1619
	Episode 166	『老獪な策略』	1625
	Episode 167	『無敵の再武装』	1633
	Episode 168	『作戦は奇をもって良しとすべし』	1638

## 序章 『転移に至ったワケ』

# Episode—Null—Dead or Alive

喉を焼かれ呼吸するのが辛い。

関節の可動域を無視するように振られた指が機械に握り潰されたように痛い。

体中に空いた新しい穴から生暖かい赤い汁が首筋を伝って、頬を撫で頭から滴るのを感じる。

片目に映る重度の飛蚊症のような視界には、4、5、6体の口にするにも悍ましい白くてブヨブヨのヒキガエルのような物体がギンピーギンピーの葉を巻き付けた槍を持って吐き気を催すような笑い声を上げながら、歓喜の絶叫を上げていた。

周囲にはおもちゃのような、首を振じ切られバスケットゴールに入った頭部や、上半身と下半身が辛うじて腸だけで繋がった醜悪なパーティの垂れ幕、鼻と耳と顔と全身の皮を筆られた仲間達の死体が部屋を赤黒くりフォームしている。

明らかに準備が足りなかった。情報も、武装も、覚悟も。激痛に意識を失いそうになりながら、悔やむがもう何もかもが遅すぎたのだ。

やがて、細かく震える私に奴らも気が付いたのであろう。手のような器官で、あの致死には至らない猛毒の植物を持ち、にじり寄ってくる。これから、私は蹂躪され、凌辱され、仲間達と同様に醜悪なオブリジェクトにされるのだろう。

眼球からプスプスとサーモンが炙られるような胸糞悪い臭いを嗅ぎながら、半分の視界を真っ黒に塗りつぶされつつも私が辛うじて思ったことは、自分は長くないことと、『はやくこのくるしみから、かいほうされたい』

……ただそれだけだった。

……

……

：

次に目が覚めたときは、親の顔より見た布団の中に居た。

周囲を見渡しても、それは私の部屋であって、

『先ほどまで体験した拷問は、ただの悪夢』だったんだ』と思うことが出来た。

だが、胸を撫でおろし、視線を上げたのちにそれは居た。葬式業者のような、神父の格好をした、やけに浅黒い肌の男とも女とも似つかわしくない——おそらく「男」が卑しい笑顔を浮かべ私の部屋で正座する形で座っている。

「これは、これは くぎぬき 釘貫 しんそう 神葬 様。 “無事に” お目覚めになられたご様子でなによりです」

「……いろいろと聞きたいことはあるけど、無事に……と、いうことは、あれは……」

「ええ。夢ではございません。あの時、『釘貫 神葬』様はムーンビー・スト……ああ、月棲獣と言った方があなた様にはよろしいでしょうか？ 彼等によつてそれは、それは無様で凄惨な最期を遂げました」

実感のない言葉を正面の人型実体は、まるで友人がくだらない冗句を言うように笑いながら言い放つ。……脳の整理が追いつかない。

つまり、私は死んで死後の世界にいて、この私の家に見える空間も、私には、そう見えているだけで死後の世界とかそういう場所なのだろうか？ そもそもこいつは誰なんだろう？ 天使か？ それとも、生前に犯罪を起こした私を地獄に引きずり込みに来た鬼なのだろうか？

「さすが腐つても探索者ですね。まさにあなた様が推測されている内容で間違いありません。あなた様の部屋を再現したのも、突発的な白い部屋や宇宙空間で対面してパニックを引き起こされても面倒でしたから、このような形にさせて頂きました」

この人型実体は私の考えていることなど、お見通しだと言わんばかりに嘲笑を浮かべる。

気味の悪いやつ……。

「気味の悪いやつとは何と酷い。私は地獄の鬼などあなた様方人間が



妄想される存在ではありません。わたくしは、あなた様の救世主ヒーローですよ。前世で悲惨な最期を迎えたあなた様に、来世では実に愉快で悦ばしい性活を送ってもらおうと取り計らった次第で……ああ。申し上げ遅れました。わたくし、ナイ牧師と申します。短い間ですが、よろしくお願ひしますね」

「……」

「はは、怪しまれていますね？ でも、私はこれでも神ですから、あなた達人間の考えるようなことはすべてお見通しなのですよ。本題に入りましょうか、釘貫様。あなた様は実にダイスの女神クンピッチによって祝福された存在でして、あなた様はなんと、クトゥルフ神話事象で死亡された100万人目の犠牲者となります！」

「はあ……？ ……ッ!?!」

『何もめでたくはない』……そう、あまりにも私が死んだことが素晴らしいと称賛する人型実体に思わず、たてを突いた瞬間に背筋が凍り付くのを感じた。それは私に向き直った彼の光彩の中心にある黒目が、例えるならば、そう。流動するみそ汁のように水流などあるはずもないのにドロドロと濁り出したからだ。

「ほう？ ……では、あのまま月棲獣に嬲られ、復活の呪文で甦り……」

「永久的に玩具にされる人生の方が良かったと？」

「……そうは言っていない……です、が？」

「そうですね？ ……そうですね？ ……ま、あなたが望めば今すぐにも、拷問愛好家のファッシュンションショーに戻して差し上げても私は一向にかまわないのですが……どうされますか？ ……希望ある来世の話より永久なる地獄に参りますか？」

明らかに彼は、人間が抵抗のできない子犬を虐待するかのよう私を弄びからかっているようだった。だが、その瞳の奥で鈍く光る闇は、どこかきまぐれで……気分を害せば、彼の思うがままにされるという妙な信ぴょう性を裏付けている。

私は何も考えず黙って、首を横に振るほかなかった。

途端に彼は口元に加え目元まで垂れた笑顔を見せ、話を始める。

「それでは釘貫様のご要望に従い、輝かしい悦びの性活あふれる来世

のお話に移りましょう。釘貫様は異世界転生、異世界転移なるものを  
ご存知でしょうか？」

「……多少ではありますが……小説や漫画で……読んだことはありま  
す」

「では、話はお早いですね！ 釘貫様はその異世界転生に近い状態での  
転移ができるわけです。ま、よくある異世界転移ものとの相違点とし  
ましては、私から補助出来ることとして、ご自身に関する説明書を  
2冊、同送することぐらいですね。その他、釘貫様は私から与えられ  
る・特筆できるチート能力はございませんし、来世の世界観をお伝え  
することもございません、来世では自力で生き延びて頂きます、次の  
人生は1度きりです」

人型実体は、愉快そうに嘲笑う。

まるで、〃次〃失敗したら後はないぞと言われているようだ。で  
も、こればかりは本来、私があのお白くてブヨブヨしたムービースト  
とかいう獣に拷問される前に、踏まえて置かなければならなかった覚  
悟に他ならない。自分の行いを戒めるように力強く頷く。

「良き覚悟です。以上の点につきましてご質問は？」

「……記憶の引継ぎはどうなるのでしょうか？」

「異世界転移。ですからねえ……もちろん引き継がれますよ。それが  
役に立つとは限りませんが。他には？」

「……なら、この転移に際して何か………最終目標のようなものは  
ありますか？ 例えば……よくあるファンタジー作品でおける異  
世界転生ものとして、魔王を倒さなければならぬとか」

「目標……ですか？ ぷっ………ぷくくくくっ」

変なことを言っただろうか？ だいたいこういう美味しい話には  
裏がつきものだと思ったのだが。彼は顔を背けて吹き出すと左手で  
顔を覆いながらも、小ばかにしたような、珍獣をみるような目つき  
で眺めてくる。正直、不快だ。

「この転移には、目標のようなものはありません。転移後は、あなた  
の物語ですよ？ 今まであなたが生きてきたように自由に生きてくだ  
さい。負け組のあなたが必死に生き足掻くその様子こそが、私に

とつてのちよつとした暇つぶしになるのですから」

「……」

「これはゲームですが、〃人生ゲーム〃です。あなた様の好きなように物語を楽しんで下さい。他に質問は？」

彼の言い回しに腹が煮えくり返るような思いではあったが、わざわざ私を転生させてくれる代償として暇つぶしの駒になるのであれば、妥当であるとも思えるようになってきた。

それに他に質問と言われても、これ以上ふと思いつくことはなかった。恐らく、異世界転生に近い転移ということは、精神だけが来世に行くことになるのだろう。肉体は現に人に見せられるような状態ではない。結果的に、その場合、私が大切に使っていた持ち物などは所持できないと考えるのが妥当だ。幸い知識は持つていくことが出来る。どうしても必要なものがあるならば作るほかないだろう。……材料があれば。の話ではあるが。

……待てよ？

「他に質問はないようですね。それでは……」

「待つて下さい。私の想定では、元の私の肉体はズタボロ……の筈です。異世界転生では、精神だけ転移すると思つているのですがいかがでしょうか？ またその場合、転移する肉体はどのようなものですか？」

「ええ、ええ。想定してらつしやる通りでお間違いないですよ。あなた様が受肉される肉体ですが、14歳の少女を予定しておりました。優しく、時に厳しく。あなたを大学まで送り出せるほどの財力を持つご両親の娘様である。そう、ただの人間の14歳の少女です。もちろん、彼女にも特筆できるような特殊能力は一切ございません。ただ、あなたの介入でいくらか変容を遂げるかもしれませんね」

なるほど、肉体については大体把握することが出来た。……しかし、この質問をきっかけに、私の尽きることのない好奇心が溢れ出し、気になり質問したいことも増える。

「……私の元の肉体と、その転移先の少女の精神はどうなるのでしょうか？」

「……チツ。どうして探索者というのは、こつも次から次へと質問ばかり……用心深いのは結構ですが、物語のテンポも考えて質問をしてくださいねえ？ その質問はあなた様には関係のないことでしょうか？ あなた様は新しい身体を手に入れて、新しい人生を歩めるのですから、それでいいじゃないですか。元の持ち主がどうなるうが、元の身体がどうなるうが関係ないことじゃないですか。ねえ？」

「……。ありがとうございます。もう十分です」

「はあ……。では、気を取り直して……『魂魄寿業の流転』異世界転移を始めましょうか」

男は正面に座る私の額に向けて掌を向ける。それから日本語交じりの、少なくとも私の知識上では聞いたこともない言語でブツブツと……しかし、はつきりとした声色で何かを唱え始める。

「混濁の池沼へ逡巡の浅薄愚劣な仔羊、祝福乞いて信受祈願するならば、ph'nglui mglw'nafh r'lyeh wga h'na gl fhtagn……永刻の彼方より神威、拝領与えられん……。ツガー||ツガー シヤメツシュ・シユタン シヤメツシュ・ガンシャナ——」

視界が、めまいのように、渦を巻くように歪んでいき……そして――

# 1章 『占拠されたビル』

## Episode 『Go to Travel to another world.』

「ちよつと……！　ねえ……！　　ねえつたら……！……すうねえつてば!!!」

次に私が意識を取り戻した時は、まぶしくなるような青い空に白い雲が流れるどこかの屋上で、本を開いてぼーつと正面の虚無空間を眺めていた。声の方に視線を向けると同い年ぐらいの制服を着た少女が、私の肩を揺さぶっているのが見える。

「え、あ、うん？」

「さつきから、私が声をかけても無反応なぐらいに熱中していたみたいだけど……熱心に読んでいるその本、どんな本なの？」

「どうやら、私は幸先から豪運に恵まれているようだった。」

いきなり屋上で意識が戻ったことは衝撃的であり、見知らぬ娘から声を掛けられたことも焦ったが、どういうわけか私は彼女の言葉を理解することが出来ていた。彼女が話している言語は、地球上の言語でもマイナーな部類であるへ日本語であり、私の母国語でもあった。いきなり言語の壁により意思疎通不可能という危機的状况をへ幸運にも避けられたのだ。

彼女に促されるまま、表紙を確認する。

「……」

前言撤回。

表紙には明らかに日本語ではないタイトルで、開かれたページにも表紙と同じような幾重ものミミズが地面を這うような……焦点の定まらなくなってしまうような……冒流的な文字が綴られている。

だが私の知りうるクトゥルフ神話的な魔導書の類でもなさそうだな。文字筆かエノク語やアクロ語に少しだけ似ていることしかわからない。

「……ああー……ごめんね。この本は、露店の古物商のおじさんから買ったもので、私もよくわからないんだ。表紙が面白そうだから、買ったんだけど……。中身もこんな文字ばかりで……。君は読める？」

「……んとね……。私にも良く分かんないや」

「だよなー……。買い物、失敗しちゃったなー」

頭をポリポリと書いて、ドジっ子アピールをしてごまかす。

前世では扱われ、頭蓋骨がむき出しだった筈の頭部に頭皮と髪の毛があり、本当に転移できたという確信を得て自身に若干驚く。まあ……頭皮が無かったら、今頃、この子は絶叫を上げていると思うけど。「でも、それ魔族語か魔獣語じゃない？」

「へっ？」

想定もしていない思わぬ単語に変な上ずった声が出る。

魔獣語なんて……。聞いたことも、見たこともない。クメール語や、ミャンマー語、ヘブライ語ならまだわかる。でも魔獣語はちよつと斜め上過ぎる回答で、思わず挙動不審な行動をとってしまう。

だが幸いにも、私に話しかけてきた彼女は私が手にしている本に熱中しているようで、そんな私には気が付いていない様子だ。

「魔獣語と言ってもナーガ族や、アラクネ族とか種族によって言語が多岐に渡るから、この本に書かれた言語はどの種族が書いたものなのか正確にはわからないけど……。なかなかレアな本を買ったんだね！……どうしたの？ そんなに目を大きく見開いて」

「え。あ、いや、あははー。物知りだっと思って、ね？」

「え？ こんな基礎中の基礎、小学生で習うことじゃないの？」

えっ!? この禍々しい文書って、この世界では小学校で習う内容なの!?

……ちよつと教育内容が高度過ぎて、この世界の人についていけない感が否めない。そんな私を、彼女は『珍しい……。』というよりも、怪しいものを見るような目つきでまじまじと見つめてくる。

……これ以上不信感を与えると、あとでどんな仕打ちがあるかわかったものじゃない。

「うっ！ 急にめまいが！ ……もしかして長時間太陽にあたっていたから、熱中症にでもなっちゃったのかな？ そうだー水分補給しないとー……。ごめんね！」

急いで本を閉じ、傍らに置かれていたずっしりとバカみたいに重いリュックサックをひったくるように手にし、足早に屋上の隅にある出入口の扉に手を掛ける。

そこで初めて、街の全貌を目にすることになった。

高層ビルから見下ろす地上は息をのむような絶景で、ここはいくつもの大型高層ビルが立ち並ぶような都心であるようだ。いずれの建物も深藍色の鋼鉄製のビルと衛星アレイがいくつも乱立されており、サイバーパンクを連想させるかのような街並みであるにも関わらず、少し視線を奥に向ければ紫色に輝く山に森林地帯が広がっている。

もう少しこの景色を眺めていたいとは思ったが、後ろの少女に水分補給をすと言った手前もある。私は逃げるようにしてその場を去った。

………  
………  
………

ビル内部の様相を見たところ、ここはそれなりのボンボンが立派な紳士淑女になるため研修や各高校の説明会を受けるために訪れるような場所であることがわかった。廊下を徘徊していれば、私と同じような制服を着た生徒を見かけるし、各部屋の入り口には研修内容の札が掲げられている。また私が移動可能な上層階に備え付けられているフロントのパンフレットから、ある程度の情報収集ができたことも大きい。

パンフレットのおかげで、フロント嬢に決死の顔で「給水室はどこですか！」などと尋ねずとも、適切な場所で適当に水分補給を行い、だれにも邪魔されることのないトイレまでやってくることができた。

トイレの内装もそれなりに豪華であり、洗面台の鏡には、この世界“での私が映っていた。

ブラシで梳かして無さそうなボサボサの癖っ気のある黒髪には若

干のフケと白髪が混じっている。髪の毛は結うこともなく自然におろしていて長さはロングほどだ。近頃は不健康的な生活でも送っていたのか、目の下にはくまが出来ており、心なしかジト目の瞳は寝不足により目つきが悪化……三白眼であるように見える。発達段階にあると思わしい胸部はチャームポイントだが、そのチャームポイントを美しく相手に見せつけるための制服もところどころ皺やシミがあつて……。

……全体的に不潔……清潔感に欠けているように感じた。

「……陰キャって感じ……」

素直な感想をボソリと呟いて、両手を洗面台につく。

自身の顔をぐつと鏡に近づける。

……別段、容姿が「特徴的」<sup>ブサイク</sup>ってな訳ではないようだ。ただただ……基本的なことができていない。……それだけのようにも見える。ちゃんとした化粧や洗顔などを行えば、鏡に映る自分はそれなりに可愛くなる……可愛くなれると思った。

丁度、自分の容姿や服装を見直しているそんな時、偶然にも尿意が襲ってきたため個室の一番奥のトイレに入る。

……

……

……

「ほわあああ……♡♡♡」

私にとって何よりも嬉しかったのは、

1. まず、この世界でも便座が『洋式』であつたこと。
2. つぎに便座が『温かった』こと。
3. 最後に『ウオシュレットの「勢い」が優しい』こと。  
……これに尽きる。

前の世界では、トイレに、友人を3人も殺されている。

1人目は……和式便所で踏ん張りすぎて、脳血管が切れて死んだ奴が1人。

2人目は……真冬の便座が冷たすぎて、心臓発作を引き起こして亡くなった奴が1人。



3人目は……ウオシユレットの設定が最強で、噴射されたウオシユレットがウオーターカッター張りの激流による……肛門と直腸。そして内臓をズタズタにするデストラップによって……1人。失っている。

嘘のような……本当にあった怖い話。

トイレでは気をつけた方がいい……。油断していると……。死ぬ。

死亡カルテや墓石に『死因：トイレ』『死因：ウオシユレットによる裂肛／内臓破裂』なんて書かれたくないだろう？

……ひとまず、リュックサックの紐を解く。

なかには、おそらく肉体の主が使用していたであろうノートパソコン。私が意識を取り戻した時、手に持っていた〈魔獣語〉が記載された本。その他は上着と雑貨、懐中電灯。スマホが2つ、あとちよつとしたお菓子と財布などが入っている。

それから……私がこれまでの人生の中で、見たこともないB5判サイズの大型本が2冊入っているのが確認できた。1冊につき、約400頁はくだらないような分厚い本で、2冊で特大の司法辞典のような異様な分厚さを解き放っている。

それぞれの表紙には『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』、『新クトゥルフ神話TRPG』と文字が綴られている。

「……これが、私に関する説明書……。なのかな？」

誰も居ないトイレで独り言をぼそりとつぶやいて、『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』の本を開いた。

Episode 2 『私は便器の上に座った…ただの人型をした肉の塊。そう、つまり、これこそ肉便器』

『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』を読み始めて、ざっくり2時間が経過した。

途中、休憩終了とのアナウンス放送が入ったが、私はまだトイレ内で籠城中だ。但し、もうパンツとスカートは履いている。『あまりトイレ内の円座に尻を出したまま座りっぱなしになるのは止めた方がいい。脱肛の危険性がある』——とウオシユレットで死んだ友人が話していたことがあるからだ。

『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』を読んだ感想としては、魔導書を読んでいる気分であった。付箋を購入することを考えるほどに1つの情報が様々なページに散乱しており、1つの項目について理解するにしても、索引には載っていない情報を1度読み進めた記憶の中や、自分の薬指から人差し指に掛けた左右の手の指、合計6本を器用に使って内容を確認しなければ、情報の把握に困難を極めた。

最初こそ、これが『私に関する説明書』であるというのには信じがたいものであったが、『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』のカバー裏に前世での私の名『釘貫<sup>くぎぬき</sup> 神葬<sup>しんそう</sup>』の名と、恐らく私についてのステータス表が記載されていることから、たちの悪い冗談では無いと結論付けた。

(あれから結構時間が経ったし、そろそろ研修に戻らないとまずいかな……)

そんなことを思いながら、本を閉じた時。突然、視界が暗転した。  
「!?」

別段、意識が飛んだわけではなく、文字通り室内の電気が消灯音もなく消えたのだ。

(ああ……なるほど。もしかして、体動反応がないと自動的に電気が消えるタイプのトイレだったのかな? ……やはりトイレでは油断

すべきではないな)

この時までの私は、そんな呑気なことを考えながら、1人でカカポの求愛ダンスをトイレの個室で踊りだす。

だが結果的には、照明はそんなことでは電気を点けないと証明するように点灯する事はなく、代わりにそんな私をあざ笑うかのような……先ほどの女性とは異なつた館内放送が鳴り響く。

「ハアツ、ハアツハアツハー!!! この建物は東雲革命派しのめが乗っ取つた！ 館内にいる不良のガキども良く聞けエ！ パパとママに会いたいなら大人しく45階45-19講義室に今すぐ来い。抵抗して性奴隷、肉便器として奴隷商に売り払われたくねえだろおおお？ 15分だけ待ってやる。それが終わつたら狩りの時間だあツ！ ギヤツハツハツハツハツハアツ!!!」

数時間前まで、この近辺では日本語という言語が主流に扱われていることに喜んでいた自分を殴りたい衝動に駆られている。

魔獣語といい、中学生が授業中に考えるようなくもし学校にテロリストが現れたら編々のような、ナチュラルにこちらの常識をぶち抜いてくるような世界に困惑と驚愕、自身に降りかかった転移直後の〈幸運〉の致命的失敗な効果に胸が張り裂けそうになる。

館内放送からは悲鳴と威嚇射撃と思わしい連射火器のような銃声が続けざまに響いており、明らかに穏やかな展開ではなかった。……穏やかじゃないわ。穏やかじゃないわね。

「……………」

私が取つた行動は、便座に座り元の肉体が所持していたパソコンを開いてCドライブの中身を閲覧することだった。そう、元の肉体に対する当て付け恥辱の墓暴きである。

この場合、現れたテロリストに大人しく従うのが賢い選択のようにも思えるが、正直ここまでナチュラルにbadな展開が起こつてしまふような世界だ。仮に彼らの言う通り動いたとして、最良の結果で開放。最悪の展開は死を迎える予想はこれまでの経験から察することが出来る。

——カルティストはみんな、自己中心的な我儘で、基本キチガ

イダ――

……それは身に染みて、よく知っている。

それに一度拘束されれば、パソコンやスマホを使って悠長にこの世界について情報収集しているだけの余裕もないだろう。しかも、聞き間違いじゃなかったら今『肉便器』って言わなかった？

今は、捕縛されて無駄な『くっ殺女騎士タイム』を味わうよりも、少しでもこのトンデモ世界について情報を集めるのが先決。それが転移して数時間経過した私が導き出した結論であった。

……

……

…

―― 8時間後――

こんばんは、皆さん！ 『釘貫 神葬』ですっ！

東雲革命派というテロリストらしき集団が、私のいるビルを占拠し始めてから早8時間が経過しました。

夜も更けてまいりましたが、現在も私は家に帰ることはできておらず……。『おべんじょぐらしー』を強いられております。つまるところ、まだ見つかっていません。やはりトイレは、私の友人が3人死ぬほどの危険地帯ではありますが……同時に優秀な籠城地点として、非常に優秀なセーフハウスであると改めて痛感しております。

トイレの個室は最強です。粗相しても困らないですし、緊急時の飲料水もあります。そして何より、銃撃で便器が破壊されても床で胎児のように丸く伏せていれば大体何とか助かりますし、ついでにクソみたいな粹な匠の手によって、現在 私は好きな時に便所から漏れた汚水を飲めます。はい。

追加の情報収集結果としまして、『新クトゥルフ神話TRPG』が『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』に比べ読みやすいこと。パソコンを探るうちにこちらが把握したこととしまして……。

この世界のある程度の世界観をあつさり入手しました！ はい！

拍手！パチパチー。

1. まずこの世界では“魑魅魍魎”：つまるところ妖怪、魔物、魔獣なる怪物が蔓延っており、

それらは私たちの目に見える存在としてすぐ近くにいること。

2. それらは“人類に不干渉”という契約が存在していたもの

：

一部の悪人によって破棄され、その妖魔と結託した組織的犯罪が行っている世界であること。

3. この世界に生まれた我々 一般人はその怪物におびえながらも

必死に生き抜かなければならない過酷な世界であることを把握致しました。

……おそらく屋上で出会った少女が話していた“小学生で習う内容”とは、この世界にはそのような危険生物が存在しているという基礎的なことだったのでしょね。

そして前世とそこまで変わらない世界観に草が生えてますよ。クソが。

「ツウー……フウー……」

前世ではパソコンを触る際に眼鏡を付けていたからか、思わずため息とともに眼鏡を持ち上げるしぐさをするもその手は空を切る。

「……」

実は……私、この世界を知っています……。

前の肉体では、この世界に来たこともありました。かつて『目が覚めたらヨミハラの高級娼館で性奴隷として調教されかけた事件』について、最近の出来事で巻き込まれた記憶も鮮明です。

……この世界は『対魔忍』という世界ですね？ 正確には前世で、私たちの世界での一般的な知識として、L.I.L.I.T.Hソフトが販売しているハードリョナアダルトゲームにそういったシリーズの作品があったことは認知していました。

そんな世界で、私が一般人として異世界転生したと……。

「Hey. 尻。凌辱確定の抜きゲーの世界に住まうことになった一

一般人（わたし）はどうすりやいいですか？」

『Webでこちらが見つかりました。く抜きゲーみたいな島に住んでる貧乳（わたし）はどうすりやいいですか？く』

違う。そうじゃない。

私ができることは、対魔忍が到着するまでの間……。銃撃で粉碎したトイレの便座と汚水と一緒に、泣きたくなるような世界で懐中電灯を片手に私の説明書を読み込むことだけだった。

Episode 3 『Fight Song』  
[fighting spirit]

「そうか。……そうだな。そうだよな」

館内放送から響き渡るすすり泣く人質の女子生徒の声と、えずき汁による不快な粘着音、テロリストと思わしい男の愉悦に浸る薄汚い喘ぎ声をBGMに立ち上がる。

第二の生を受けてから導き出した答えはただ一つ。投降しようが捕縛しようが、どうせこのまま肉便器エンドが私に約束された未来なら、そのクソツタレな未来をぶち壊すために自由気のまま獣のように暴れて鬱憤を晴らし、テロリストから逃げ延びるだけだ。

早期な決断に誰かがこの正面突破脳筋法に異論を唱えるかもしれないが、現在私は致命的な情報不足下であり、最悪なことに望まぬ形で敵の手中にいるような状態だ。『もう少し何か考えようよ』『生きる努力をしようよ』『前世から何も学んでいない……』『お前も頭対魔忍かよ』と思うかもしれないが……。かれこれ12時間トイレに籠城しても特殊部隊や警察が現れるどころか……。誰か。そう、対魔忍が助けにくる様子も見られない。対魔忍の世界線なのにな。仕事してください。国家公務員。

最終的に今持っている携帯簡易食……。もとい、お菓子もなくなつて空腹で抵抗もままならなくなる前に、自分の身を護れるのは……。もう自分しかない。

——この世界に 対魔忍 はいるが、非情にも その対魔忍  
は不在だ——

さらに逆に。そう。ポジティブに考えれば、今の私は何も積み上げていない状態である。

ここで死のうが、私には失うものは何も存在しない。……であるならば、あのナイ牧師と呼称した人型実体には残念な目にあつてもらうが、対魔忍が一向に現れない今。丸腰の私が出ることはただ一つ。強姦される前に派手な抵抗をして、勝ち目のないときはさっさと死体

となつて転がることだ。

全身を処刑槍で穴だらけにされて、頭皮を抉られ、眼球を焼かれ、ギンピーギンピーを体中に刷り込まれることと。全身の穴という穴に肉槍を差し込まれて、髪姦され、眼窩姦に至り、精液を体中に刷り込まれること、何が違うのだろうか。

……カシャコン……

そつと音が響かないようにと細心の注意を払いながら個室の鍵を開き、ゆつくり外に出る。トイレは紛争地帯のようにひどく荒れていた。

実は4時間前。テロリストがこのトイレにも姿を見せていた。私は当然、居留守を決めたわけだが……結果的にそいつは、1マガジン分の弾丸をトイレ内で乱射していきやがった。きつとムシヤクシヤしてやったか、個室から悲鳴が聞こえれば大義名分のままに、便座の上に乗った私を文字通り肉便器にするつもりだったのだろう。

人の気配を察したとき、即座に〈隠密〉行動を取りながら床の上で胎児のように蹲つたのは正解だった。乱射魔である奴がいなくなるのを背中を伝う汚水を浴びながら床に蹲つて静かに我慢していた甲斐もあったものだ。早速『新クトウルフ神話TRPG』選択ルール：123頁『完璧な遮蔽』と124頁『伏せ状態』が役に立ったな。

現状、武器になりそうなものは手元にはない。つまり武器は現地調達となり、なおかつ14歳の少女でも扱えるような軽い得物が必要だ。

バラバラになった掃除用具入れから鉄製のモップを取り出す。明らかにテロリスト相手には、不十分な武器ではあったが……ないよりはマシだろう。

「ふふっ……」

この状況に失笑してしまう。

まさか、中学生が妄想するようなく学校にテロリストが侵入してきたときのムーブを本当に実行する日がやってくるなんて。私も過去に妄想したことがある。『痛い』記憶だ。

……私はヒーローにはなれないことぐらいわかってる。前世の記



憶を持っているが……この世界では今のところ “ただの少女” だ。

だからテロリストに馬鹿な正義感を掲げて突っ込み殲滅を狙うような真似はしない。戦闘はあくまでも遭遇時。最小限が大前提だ。

……ありえない結果ではあるが、私が万が一にも生き残った場合のことを考え、情報の詰まった電子機器類と『CALL of CTH ULHU クトゥルフ神話TRPG』、『新クトゥルフ神話TRPG』の2冊は無事な状態を保たせたいと思い、念入りにリュックサックの深部に詰めこむ。

ふとそんなことを想定している自分に『……本当は生きたいのでは？』と考えてしまう自分もいるが、前世も来世でも女として、性奴隷として性的搾取されるなどまっぴら御免なのは確かであった。

……

……

……

トイレの外に出る。

窓の外では警察ヘリのサーチライトが建物内を照らし、拡張メガホンでテロリストに呼びかけを行っていることがわかる。彼等も最善を尽くそうとしているのはわかるが、人質を取られている以上。彼等に出来ることは少ない。

屋上のヘリポートから突入できないところを考えるに、屋上にもそれなりのテロリストが展開していることが想定できる。……で、なければ今頃、機動隊とテロリストのレインボーシックスシージのようなド派手な撃ち合いがこのビルで起きていたはずだ。

そんな窓の外側を見つめ、街を眺める。昼間にも見た街は、どこか物々しい重厚な雰囲気であるが、点灯したライトがイルミネーションのように七色に輝き、東京都庁の景色と重なる。ノスタルジーに浸りたかったが、今はそんなことをしている場合ではない。

まずは〈隠密〉状態でパンフレットを片手にエレベーターの前を通過する。停電している時点で、初めから期待をしていなかったがとも乗れるような状態ではなかった。

何かバールのようなものがあれば、このエレベーターの扉をへ機械

修理〕で抉じ開けて、垂れ下がる中央のロープを〔登攀〕で降りることも考えたものだが……。流石にそんな道具を探す時間を設けることと、逃げ場も隠れる場所もない袋小路で頭上から鉛玉の嵐を食らうリスクは避けたい。

結果的に非常階段から脱出する場合、ルートは外の非常階段から降りるか、内部の非常階段から降りるかの2つだった。飛び降り自決の行える外の非常階段が望ましかったが、出入り口に備え付けられた警報装置付きの鍵と音が響きかねない鉄製の階段も避けるべきであると判断し、内部の非常階段からの脱出を図る。

……48階層降りるのは地獄だが……停電している今、それ以外の方法はない。

……

……

……

……やっぱり私は不運に愛されているツイていない。

現在、逃げ場のない非常階段の階段の中央で、4つ目の暗視装置に防弾ベストを着用した。まるで軍隊のような装備の兵士に挟まれてしまった。……これがテロリストならば、テロリストにしてはやけに装備がいい。恐らく恥辱の墓暴きであるCドライブ上に記録されていたような「魔物」とかと結託しているような連中なのだろう。

どうやら彼等はビル内部に設置された監視カメラをハッキングし、こちらの位置情報を割り出した上で挟撃に乗り出したことが、目の前で繰り広げられるあからさまな無線機での下種な笑み交じりの茶番劇から分かる。

……なるほど、技術にも長けた相手とは非常に厄介だ。彼等はこちらに敵意を向けて、更に股間を三角形に突出させ、しつとりと濡れて微かな栗の花や塩素系漂白剤ハイドロの匂いを充満させていた。

……バチバチバチツ!!!

彼等の兵装はスタンロット兵が3名。階下に2人、上階に1人。派手にスタンガンの音を鳴らす様子から、私を音で萎縮させるつもりなのだろう。耳障りな無駄に大きな音を立てこちらを威嚇してくる。

その3人のテロリストのうち階下にいる1人はアサルトライフルを背負っていた。銃器に詳しいわけではないが、AKと呼ばれる種類の銃であることはわかる。

(なるほど。四つ目だから、東雲……ね)

下手に刺激しないよう、恐怖で表情をこわばらせる様子を作りつつ、トイレから持ち込んだモップを構える。

恐らく彼等には私が「ただの中学生」にしか見えないだろう。今回はそれを逆手に取ってやるつもりだ。

バチイッ!!

下種めいた笑い声を漏らしながら、階下の方向に展開していた男が私にスタンロッドを押し付けようと腕を突き出してくる。すかさず〈応戦〉で腕を往なし、階段側へと相手を引き込む。いくら体勢を崩した相手と言っても胴体には厚いケブラー製のベストがある。正面から殴っても衝撃を緩和されるのは想像に難くない。

……ブオンツ!!

そこでだ。遠心力を付け男の膝裏に狙いを定めて、モップで思いつきりフルスイングする。膝にはプロテクターが付いていたが、関節の可動域の観点から膝裏は基本的に無防備だ。

バツティイングセンターでバツドを振りぬくようにツ!

超<sup>エ</sup>キ<sup>キ</sup>サイ<sup>イ</sup>テイ<sup>ン</sup>グ<sup>グ</sup>!!  
支点! 力点! 作用点ツ!

バアン!!! ……ポロツ……

「アツ」

「うぐっ……!」

「はっ! 油断してんじゃねーよっ!」

得物を振りぬいた瞬間にモップが瞬間的な負荷に堪え切れず、支点からポロリと、まるでひな人形の首が落ちるように地面に転がる。だが、1人の膝裏関節は致命的な痛みを与えることに成功したようだ。テロリストAは左膝裏を抑えて蹲る。

上階の1人のテロリストBはテロリストA……あるいは武器を破損させた私を嘲笑いながら、こちらの武器が折れた直後にスタンロッドから青白い火花を散らせ、剣のように大ぶりに振りかぶって振り下

ろす。

だが私に対する攻撃に数的不利によるボーナスダイスが付与（7版―104頁）されていようとも、相手より正確な動きでステップを踏めば、何も問題はない。身を仰け反らし、大ぶりな一撃を〈回避〉で振り抜かせる。発生させた隙に〈近接格闘（格闘）〉で報復する。振り抜いて姿勢が前傾に傾いたところを脇から擦り抜けて頭部を掴み、眼球部で出っ張った暗視装置ごと地面と眼球をディープキスをさせてやる。ちよつと無理をした私の膝に致命的なダメージが入るが、それは相手の眼球も同じことだった。ミュチュリ……という不快な圧迫感が腕に伝わり、テロリストBは絶叫と激痛で床をのたうちまわり始める。

残ったテロリストCは銃を取り出しこちらに構えてくるが……。

……実際には、そうなつてはしくはなかった。

だが知っているか？

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』の探索者は、銃撃を目視〈回避〉余裕なんだぜ？

即座に身を屈め1発目を〈回避〉する。それから、目の前でのたうつテロリストBを抱え遮蔽物として運用してみせる。彼の胴体に誤射ともいえる弾丸が数発撃ち込まれ、テロリストCは身をたじろかせて怯んだ。そこに眼球を潰され、味方に誤射された哀れなテロリストBを階段から突き落としてテロリストCを巻き込んで気絶に追いやる。最後に膝裏の痛みでよろめく階段の隅のテロリストAも首を手刀でトン。

……恐ろしく素早い手刀。『新クトゥルフ神話TRPG』選択ルール：121頁『ノックアウト打撃』と123頁『遮蔽を通して対象を射撃する』を一読していなければ、勝てなかったね。

「なるほど。私の説明書の使い方はある程度把握できました」

初戦としては上々ではあった。敵が所持している拳銃を抜き取り、リュックサックから上着を取る。腰に上着を巻き付けてから、その下に拳銃をおぼつかない〈手さばき〉で〈隠す〉。

それにしても……。魚眼型の監視カメラは全方位を映しだす傾向

があるため、これは非常に厄介だ。出来ることなら、今の光景を記録している本体の破壊を〈機械修理〉や〈電気修理〉で試みたいところであるが……まあ、それはこの場所からは不可能だろうし、そもそも警察は基本的に無能なもの。わざわざ映像記録なんて確認もしないだろう。これは私の世界での常識だ。

戦利品として得られたのはスタンロッド1本に、拳銃1丁、拳銃の弾倉2本、肘膝当てのプロテクター、暗視装置だった。AKなども持っていきたいのはやまやまだが、重量がかさばり先の戦闘で膝を負傷した少女には扱うには不可能な代物だ。それに倒れた相手に挟まった負<sup>スリング</sup>い紐を悠長に外している時間的余裕などはない。……誠に遺憾で不本意ではあるが、銃声も響かせてしまった。

下層の非常階段入り口から、輪姦目的と思われる敵がわらわらと集まってくる音が聞こえる。彼等のバカでかい会話から、私の肉体に開いた銃創へ、私の血液を潤滑油にチンポを突っ込むという会話が聞こえてくる。どうやらテロリストの中には変態<sup>リョナラー</sup>さんも混じっているようだ。

……私は『ジョン・ウィック』ではない。特に鍛えてもいないような身体で連戦は不可能だ。ゼロ距離射程外のクロスファイアを行う敵を返り討ちに出来るほど、強くはない。

「かつて私も昔はお前みたいな狂信者だった。だが膝に地面を受けてしまつてな……。『もちろん、武器はいくらでも持ってもいい』だが『拳銃に頼るときは、永久的狂気から逃れるために自分自身を撃つときぐらいなのかもしれない』……なんつって！」

負傷した膝を抱えながらも自分自身の説明書に関するフレーズを呟きながら、必要なものをまとめ、気絶し伸びているテロリストAの頭部にツツコミするよう叩いてから、足早にその場から去る。

今更トイレに逃げ込んでも監視カメラがその姿を捉えてしまう事だろう。

……残された道は屋上だけだった。

## Episode 4 『対魔忍！・ 推参！』

あれからむやみな交戦を避け、現在私はビルの屋上を活動の主軸として行動している。

屋上にはヘリポートから警察が突入して来ないよう見張り役のテロリストが数名、私を輪姦する目的だったテロリストが数名、私の工作活動によって破壊された監視カメラが数台ある。さらに大型の室外機やダクトなども設置されており、〈隠密〉行動できるスペースの多い、この場所は私にとって〈隠れる〉には都合な場所であった。

発見され、追いつめられるようなことがあつたとしても肉便器として使役・酷使される前に、ビルから飛び降り、自由にこの命を散らすことが出来る。あわよくば死出の旅は道連れ世は情けだ。

私はもう、既に1度。思い出したくもない拷問のさなかで死を待っていた。投身自殺による一瞬の衝撃で死ぬぐらい、あの悪夢に比べれば大したことはないと考えていた。

……シューツ……

グオオオオオン!!!

……テロリストの占拠から約12時間後。

それは薄青銅色に輝くビルの合間を縫うようにして隠密形態をとり、突如として屋上へ現れた。

形こそ前の世界で陸上自衛隊が保有するF-2のような形をしているが、F-2より分厚い……AKや高射砲にもたじろぐこともない重厚な装甲を持ち、空気抵抗の強そうなその機体からは考えられないほどの速度で、唸るような火竜ドラゴンの咆哮を響かせながら上空のビル直上に浮上していく。

それから上空50mぐらいの地点から屋上を目掛け、米粒大の何か  
が落下してきた。

「……！」

——航空機から何かが落ちてくる。

最初はテロリストが要求している物資かと思ったが、銃口を向け乱射する彼らの反応からどうも様子が違う。

落下してくるそれは、3つの人型実体であった。途中でパラシュートを開くこともなく、ターミネーターが登場するみたいに膝を地面につき、そのまま着地する。

うわっ。あれは、膝に地面を受けて冒険者やめてそう……。

そんなことを思う私を他所に、彼女たちは平然と立ちあがる。あれが普通の生身の人間であれば、鉄板の地面に叩きつけられて今頃、キンメダイの開きのように潰れ、高所から落とされたトマトのように内臓や骨粉をぶちまけているはずだ。だが彼女達はそのような様子はない。

それどころか、私は彼女達の1人に見覚えがあった。デッド オア アライブ<sup>A</sup>に登場するマリーローズのような赤いフリルの付いた黒をベースとしたスクール水着と、布地を尻に食い込ませ過度に大腿部と鼠径部、臀部を露出した引っ叩きたいプリケツ、野生児を連想させるスクール水着痕の残る褐色肌。……くりくりとした大きな瞳と膝裏まで伸びるツインテール。そしてプリントロック式の二丁拳銃。

あれは――

――『水城<sup>みずぎ</sup> ゆきかぜ』だ。

前の肉体で、私がヨミハラで『拉致監禁肉便器化調教』を強いられたようになった事件に巻き込まれたときに、別室でオークに激しく輪姦されて無様なアへ顔を晒していたが……。あのDOAのマリーローズのような服で、上空から降ってくるツインテールの気の強そうな貧乳<sup>まな板</sup>と言ったら彼女ぐらいだろう。

他の2人の1人は鮮やかなオレンジ髪ショートヘアの元気がよさそうな……。悪く言えばマヌケ面をした短刀を二刀流にした女性と、最後の1人は紫色に近い青髪を下ろし細目で紫色のラバーズーツを纏った大人びた女性だ。

……対魔忍だ。

そう直感した。『水城<sup>みずぎ</sup> ゆきかぜ』が混じっていることから、彼女等が対魔忍であることは確定的な情報ではあったが、こんな敵地の中心

部に 乳首ガシ 勃ち 好きな恰好の衣装で正面からカチコミを仕掛けに来るのは、この世界では対魔忍ぐらいであり、敵陣にそんな身体ラインが浮き彫りになるラバースーツを着用して見せつけるなんて、対魔忍を除いて普通の感性の人間はそんな恰好をするはずもない。

……ところで、転移・転生前から気になっていたのですが。その乳袋はどんな構造になっているんですかね？

私も今の身なりから、人のことを指摘する余裕はありませんが……  
「服装はその人を表す」って言いますが……その服は……頭対魔忍ですね？

「これが占拠中の本物のテロリストかあ……。訓練より弱そうやっちなあ」

「私たちは訓練通り、速やかに屋上を制圧して人質の脱出経路を確保すればいいのね！」

「常に状況は変わるものよ。各員油断はしないで。制圧開始！」  
「はーい！」

彼女等は、まるでピクニックに来たかのような気の抜けた会話と返事をするが、その実力は対魔忍をニコニコ大百科でしか知らない私でもわかるほどに確かなものだった。瞬きをするほどの一瞬で一般人では手も足も出ない分厚いケブラーベストのような装備を持つテロリストを「忍法」と刀や小刀、旧式拳銃でなぎ倒していく。

私にはこの光景を描写するだけの余裕も、状況の判断もできない。せめて分かることは、一番年長者の紫色の対魔忍が横を通過しただけでテロリストは血しぶきを上げながら倒れる。スタンロッドで動きを止めようとするテロリストに対してオレンジ髪の対魔忍が影の中から出てきたかと思えば猟犬のようにカウンターを決める形で屠っていく。一方『水城 みづき ゆきかぜ』は二丁拳銃から電撃のようなエネルギー砲を飛ばし制圧していく。……ゆきかぜのその活躍は、ヨミハラの「濃度3000倍」で見せてほしかったですね……。

15分もしないうちに、十数人は居た銃火器武装を含めた東雲革命派のテロリストは、突然現れた対魔忍によって骸として地面に伏すことになっていった。



「にやはははは。やっぱり最新鋭訓練施設のテロリストの方が手ごわかったよー」

「ふうまが装備設定したような多脚戦車も居ないしね！」

「こっちの首尾は問題ないわ。ふうま君、脱出経路の確保ができたことを、別動隊にも——」

どうやら制圧は済んだようだった。

よかった。身投げする必要はなさそうだ。彼女たちに保護してもらい、一足先に自宅へ帰らせてもらおうと一歩踏み出した時……  
パン!!!

私の大腿部に熱い何か貫通した。

視線を下ろせば、じんわりと赤いシミが太ももに広がって……同時に背中にも日大タツクルされたような激しい衝撃が走る。今の銃声に彼女たちも気が付いたようで、こちらに視線を向ける。

「動くな!!! この人質ガキがどうなってもいいのかわ!!!」

「いゝあゝっ……」

脚と背中への痛みが顔を歪めるが、テロリストはお構いなしに片腕で私の首を絞めあげ、私は宙吊りにされるような形で大型室外機の外に連れ出される。私の背後にはいつの間にかにテロリストが回り込み、のど元に鋭利なコンバットナイフを突き付けられる。ああああああああああ！ まずいぞ！ これでは、ビルから飛び降りれない！ 組みつかれて宙に足が浮いた状態では飛べないっ！

対魔忍たちも、すぐに武器を構えるがその表情からは焦燥の色が伺える。

「武器を捨てろ！ 武器を捨てないと……っ！」

「ッ……」

刃先が私の喉に刺さり、一筋の血が零れ始めた。痛い！

彼女たちは、お互いにアイコンタクトを取り合いどうするか悩んでいるようだ。だが最終的な決定としては、武器をその場に落そうと指先を緩めようとしている。

それはダメだ！ 彼女達がゲームと同じように対魔忍となってしまう！ 対魔忍が対魔忍になってしまう!!! それも私まで巻き込ま

れる形で!!! それだけは避けなければならなあああい!!!

「…………っ! ……ツツツ!」

「……………武器を捨てるから! 武器を捨てるから!! まずは、その子を離しなさい! それ以上は息ができずに死んでしまうわ!!!」

私に出来ることは、この完全にキマった首絞めを行っているテロリストに向けて呼吸ができるようにと解放されている手で高速でタツプすることだった。一番年長者っぽい大人の対魔忍はこちらの状況を察してくれたようだ。流石、対魔忍。……………さつきは頭対魔忍とか思つて、ごめんなさい。

テロリストは体をこわばらせたまま私を地面におろす。足を射抜かれ、低酸素状態によるふらつきで立てない私は当然、床に腰を打ち付けるわけだが……。テロリストはそんなことお構いなしに、今度は私の頭に銃口を突き付けた。

「カヒュツ…………。…………ぜえ……………はあ……………ぜえ……………はあ。ゴホツツ! ゴホツツゴホツツ!」

「ほら、さつきと武器を捨てる!!! そんなに、この女の脳漿が見てえのかツ!!!」

私が解放されたところで、対魔忍の彼女たちは仕方ないと言った表情のままゆつくりと武器を地面におろし始める。

——だが、おかげさまでこちらは話すことはできるようになった。今が逆転の好機だった。

「あ、あツ!? このクソ野郎が! 俺の予定がテメー等のせいですべておじやんだ!!! 見て見てえツ! 見てみてえなあツ!!! ほらツ! 撃てよツ! 俺は自分の脳漿を見てみてエつつつてんだ!!! ビビツてんのかツ!? オラア!! さつきと撃てえツ!」

大きく息を吸い込み。地獄から突き出た鬼のような声で、つい先ほどまで首を絞めていたテロリストに私は絶叫に近い〈威圧〉をし始める。

この行動に対魔忍とテロリスト双方の動きが……………止まった。

「だが、よく考えろオ!? テメーはたった一人だ! この対魔忍を強請る交渉材料は俺しか居ねエ!!! そんなテメーは俺を本当に撃ち

殺せるのか？ あゝあゝッ!？」

「な、なんだ……このメスガキ……」

「ほらあ！早く撃てよ!!!タマぐらいあんだろ!?ここでテメーの発言がハツタリじゃないってことを証明して見せるッ！ 撃ってみろよッ！ 俺は先に、テメーを地獄で待つてやる。テメーが地獄に来たら第二ラウンドで、真つ先に爪楊枝でお前の眼球をお裁縫セットの針刺し、ハリネズミ状にトゲ山にしたら、足の裏を炭になるまでガスバーナーで焼いて、ドラム缶に括りつけた後 缶の中に熱した石を投げ込んで前面と顔面の肉を地獄の業火で焼き切つてやるからよ」 おゝおゝおゝおゝッ!?!?!?!」

テロリストは明らかに動揺している。

まあ、それは対魔忍たちも同じで……陰キャっぽい気が弱そうで大人数そうな一般人の少女がいきなり豹変したら、誰だつてそー怯む。私だつてそーなる。

だからこそ、この好機を逃すわけにはいかなかった。素早く振り返り、頭に押し付けられている拳銃を掴み、頭蓋骨に接着させる。テロリストの手にそこまで力が入つておらず、引き寄せられるような状態で私の頭に拳銃の銃口が面する。

「陰莖と睾丸と直腸にギンピーギンピーを摺り込んで一年以上、死にたくなるような地獄の痛みでのたうち回らせてやる!!!便器に括り付けて脱肛させた上で、ウオシユレットで内臓をズタズタに引き裂いてやる! テメーの額に来世まで残る『死囚・ウオシユレット』いれずみつて刺青を刻んでやるよおおおお!!! 私を殺し、自身が死んだことも後悔するほどになああゝあゝあゝッ!」

「……きよ、恐怖で頭が……おかしくなったのか……?」

テロリスト側が明らかに動揺して私の頭の心配をしてくる。

……失礼な。おかしいのは元々だ。私は本来、ここにいるはずの人間じゃないのだから。

ここで私には2つの選択肢があった。一つは、テロリストが投降するように飴と鞭で揺さぶりをかけること。もう一つは、刺し違えても隙をつくることだった。

「——だが……今なら間に合う。テメーが大人しく武器を捨てて、対魔忍に投降するんだ。彼女等は正義の味方だから、大人しく投降すれば法で裁かれることになるが、これ以上の危害を加えることはねえはずだ」

「……」

情緒不安定な豹変の繰り返しで揺さぶりが効いているようだ。あともう一押し……。

パァン!!!

銃口を額に押し当てていた方の腕が、テロリストによって振り払われ撃ち抜かれ……。

——うがああああ!!!クソ痛え!!!

「うるせえ!!!黙ってるッ!俺にはもう後がねえんだ!!! ここで東雲様のためにも、一矢報いなけりや意味がねえんだよ!!! オラ! 対魔忍ども! このクソガキが——」

交渉は決裂した。

だが、致死となる脳から銃口をそらさらられ、奴の視線が一瞬、対魔忍側に向いただけでも十分だった。こちらも無事な腕で腰から鹵獲した拳銃を引き抜き、テロリストに突き付ける。腕と脚に開いた痛みが苛まれながら対魔忍<sup>強</sup>プレイ<sup>強</sup>を強要されるよりも、死んでしまった方が楽だと判断したことも1つの要因だ。……出血の状況と傷の状態から、この世界の私が助かる見込みは限りなく低い。

こちらが銃口を向けたことに相手が気が付き、こちらに向けられた銃の引き金が握られたとき。迸るアドレナリンにより、周囲がスロームーションのような光景になったような気がする……。直後、お互いにお互いの胴体目掛けてゼロ距離での発砲。鉛球をぶつけ合う。向こうは分厚いケブラーベストや軍用ヘルメットを着用しているため、私の攻撃では致命傷には至らない。だが弾丸の衝突による衝撃で言葉なんかよりも確実に怯ませることはできた。

……私との勝敗が決したとき。血だまりの中、意識が薄れゆく中。……背後にいた対魔忍たちが一斉に怯んだ最後のテロリストにトドメをさす。

「(斯くして、対魔忍を隷従させようという……テロリストの、根本的な、計画を阻止できるのならば1人の私の……死は……小さなことに過ぎない……)」

口の中が鉄さび味に満たされていくさなか、私は『新クトゥルフ神話TRPG』11頁の勝者と敗者のフレーズを思い出していた。

……異様に体中が熱く、心拍が通常の3倍の速さで鼓動を打つのを全身で感じる。

……大人びた対魔忍が、私を助けようと動くが、私はそれを尻目に……自分とテロリストの返り血で……おぼれていった……。

Episodes 『目が覚めたら白い部屋く私は対魔忍から離れ、強く生きてます』

「……ッ」

「ああっ！ ひまり!! ひまりいっ!!! 看護師さん！ 看護師さんっ！ 日葵がっ！ 日葵が目を覚ましましたあっ!!!」

次に目が覚めたとき、私は白い部屋に白いベッド、クリーム色のカーテンが掛けられた白い<sup>病</sup>部屋にいた。

私がリビングゲッドが起き上がるように、腹筋だけの力を用いて上半身を起こした刹那。40代ぐらいの女性が悲鳴のような声を上げ、自身の座っていたパイプ椅子に足を取られてもつれながらも部屋から出ていく光景を目にする。

「あの、ナースコールかスタッツコールを使えば……」

のちに知ることとなった1週間ぶりに出した掠れた声は、40代の女性を呼び止めるほどの大きさにはならず、彼女はどこかにそのまま行ってしまふ。ひとまずこっちから、ナースコールを一度押して意識が戻ったことを看護師に報告しておく。……ついでに、ナースコール越しに転げながら出て行った彼女の声が聞こえた。

私の身体には幾重もの包帯が巻かれ、沢山のチューブを繋げられ、ベッドサイドモニターには心電図が写し出されている。これだけの重傷ではあったが今はもう大した痛みはないし、このまま病院の売店にも遊びに行けそうならいには身体は問題なく動いていた。まあ、入院は前世の私にとっては<sup>毎回あること</sup>ルーティーンだったし、怪我に関してもそのうち治るだろうからあまり気にしていなかった。

ひとまず医師の話では、テロリストとの交渉が決裂し私に銃弾を撃ち込まれたあと、その場にいた特殊部隊の人たちが《応急手当》を行い、その甲斐があつて一命をとりとめることができたらしい。

……おそらく、その特殊部隊の人というのはあの対魔忍の事だろう。でも、そのあたりの記憶が朧げで何があつたのかよく思い出すことが出来ない。脳が度重なるストレスからの自己防衛反応として健

忘症でも引き起こしたのだろうか……？

……何がともあれ生き延びることはできたのだ。

聞く話によると東雲革命派とかいうテロリストから性的暴行を受けた学生もそれなりに居たようで、私は私の損害が肉体の傷害事件で済んだことを心のどこかで嬉しく思っていた。

今後の治療期間としては、全治2、3か月の見込みらしい。この2、3カ月という値は、あくまでも「特殊な」最新最先端医療を導入したときの予定であり、リハビリを合わせた普通の治療の場合もつとかかる（約半年以上）とのことだったが、私はこの世界についてもつと知る必要もあり、時間も十分にかけて調べものをしたかったために普通の治療を選択した。……まあ、でも。今までの経験から、この程度の怪我は2カ月以内には治癒してしまいそうなものだが……。とにかく今は時間が必要なのだ。それだけは確かだった。

そのうち警察の聞き込みも来るそうだが、しばらくの間は治癒に専念という名目で家族を除いて面会の拒否をするつもりだ。ほとぼりが冷めた頃合いにでも事情聴取を受けて「よく覚えていない」とでも言っておけば丸く収まるだろう。

……

……

——1カ月後。

……

……

私の傷は、ほぼ完治と言っては過言ではないほどの回復力を見せていた。

どうやらこの世界の普通の少女では「ありえない」回復速度らしいが、私やウオシユレットに殺された友人も含む私の友人達、面識のない警察官や専業主婦のおばちゃん、オカマバーの漢姉様<sup>おねえさま</sup>方などを含めた前世の住人達は、このごく一般的な治癒力を全員持っていたし……指摘されるまでは別段、特に何か思うことはなかった。

だが、主治医の反応を見る限り、この世界ではあまりにも異常らしいため「外傷は塞がったけど、筋肉の筋と日常生活動作に関連する

……何かすごい後遺症がまだ後を引いている” という体<sup>てい</sup>で病院に今も滞在している。

……この治癒力の早さから政府や国家権力に目を付けられ、『キミ、対魔忍の素質あるかもよ?』だの、『やっぱりキミも対魔忍だ!』だの、『やあー対魔忍の神葬ちゃん!』なんて絡まれても……正直困る。

——私は『対魔忍世界へ転移したが、私は一般人枠で人生を謳歌したい』のだから。

『……またワタシ何かやっちゃいました?』的なノリを出して、自分の首を絞めるような最悪な事態は、絶<sup>ぜつ</sup>ツツツ対に!!! 避けなければならぬ。

またこの治癒力は、私の説明書に記述されている『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』の64頁“治癒”に関する技法によるもの……と思われる。

どうやら『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』(61頁) “肉体的な損傷(負傷)” 基準なら、耐久値2ポイント以下になるまではかすり傷として扱えるようであり、『新クトウルフ神話TRPG』(116頁) “通常のダメージの効果” 基準でも『重症化さえしなければ』やっぱり、かすり傷らしい。つまり、何度でも“生きている限り” 現場復帰が望める。……これは前世では普通のことだと思っていたけど……。

でもこの世界での周囲の反応から察するにこれは異能のようだ。……可能な限り隠さなければならぬ。……それに一見、この世界の人間からは便利な異能には見えるのかもしれないが、普通に痛覚はあるし、殴打を加えられたり、怪我をしたり、拷問をされたりすれば……私が身に染みてよく知っているような永久的な地獄を強いられたり、場合によっては気絶だつてする。……決して万能ではない。

……とまあそんな経緯で長期入院することになった私だが、入院費に関しては何心配はいらない。

なにやら“対魔忍が” ちゃんと仕事をしなかったから 私の怪我が重度化したことになっており、国がお詫びを兼ねて意識不明の重体の時から、私の入院 治療費を負担してくれていたようだ。



いやあ！ たぶん、私から問題を起こしたと思うんだけど、  
国家公務員は大変だなあ！

——他にも……この1カ月で、ある程度分かったこともある。

まず私の肉体についてだ。私が肉体の器としている少女は『青空あおぞら日葵ひまり』というどこにでもいる普通の女子中学生らしい。学力、運動神経は共に平均以下で、個人的には一般人よりひ弱な印象。面会に来た中学教師からの話では、学校でも友達はおらず図書室で本が友達のような……私が思った通り、やはり陰キヤだ。学校から千羽鶴も送られてきたが、正直いらないうえ、折り鶴の中身に『そのまま死ね』と書かれていることから、いじめにも遭っていたことがわかる。テメーが死ね。

『青空 日葵』の両親については、ナイ牧師から説明があったように優しく良い模範的な親で……別に前世の両親に不満があったわけではないが、何かと怪我をした私を気にかけてくれる。私が病院生活は暇であることを伝え、ちよつと事件に巻き込まれたせいで記憶があまりないため社会勉強のため教科書を持って来てほしいと頼めば、味気ない病院食に対抗するための20種類ものふりかけと一緒に、その日のうちに必要物品を持って来てくれるような気の利く優しさと愛情深い人たち……と言えはわかりやすいだろうか？

それにしても若いというのは素晴らしい。知りたいことは山のよ  
うな量であったが、この記憶力と習得力であれば努力次第で私は充分  
に、この世界へなじめるだろう。

……

……

——6か月後。

……

……

「いいか！ 野郎TRPG Playerども！ 新クトゥルフ神話TRPGを遊ぶ以前に、TRPGを主催者側として遊ぶときは、G M「必ず」そのゲームのルールブックを所持して遊べよ!!!」

「「押忍！」」

「TRPGで裁定がわからなくなった時の為にも、常に手元に該当ル  
ルブを置いておけ！ わからないときはその都度確認だ！ だがル  
ルブには、七任意のほにや不思議があることもある！ そんな時は卓の仲間と相談  
をして、カスタム・ルールを用いるのも一つの選択肢だ！」

「「押忍！」」

「GMは公平かつ、ある程度PLの宣言とやりたいことをくみ取るこ  
とを意識しろ！ テメーの考えたシナリオ通りのゲームなんて、アナ  
ログゲームやコンピュータゲームと一緒に！ ある程度の自由を  
利かせてやれ！」

「「押忍！」」

「ひまり……？ あの……病院のお友達と遊んでいるところ悪いのだ  
けど……大切な話があつて……」

「よし！ 私はマツマと話があるから、それまで一旦休憩！ 各自、新  
クトウルフ神話TRPGのクイックスタート・ルール（無料版）を参  
照してキャラシートを練っておくように！ 困ったこと、わからない  
ことがあれば後でKP私に相談してね！」

「「「押忍ッ！」」」

「マ、マツマ……？？」

そんな、今日も今日とて病院のヒマな時間を他の入院患者と共に、  
内容を覚えるためにも『新クトウルフ神話TRPG』のKPとして遊  
ぶ私のもとへ、母が申し訳なさそうな顔をしながら面会に訪れる。

……ん？ なんか最後の返事で参加者一人増えているような気が  
するけど……TRPGの輪が広がるのは悪いことじゃないし、PLが  
3人だろうが4人だろうが捌き切れるし別にいいか。

……

……

…

ひとまず落ち着いて話ができる場所に訪れ、母親と向き合った。歯  
切れが悪そうな様子で今後の日程を告げられることになる。

「……日葵、あのね。お父さんの仕事の都合で、どうしても転勤しな  
きゃならなくなっちゃったの。……ごめんね」

「ああ、転勤ってことは引っ越し？ ……？ ……どうしてあやまるの？」

「どうして、って…あなた、学校にいっぱいお友達が居たんでしょう？ それなのに、仕事の都合で大切なお友達と引き離すことになるから…」

「あ。ああ、ああ…別にいいよ。お仕事なら仕方ないことだし、それにそれは新しい場所で新しいお友達を増やせるってことでしょ？」

それはそれで面白そうだし…。で、いつ引っ越しするの？ 移住先の場所は？ 近くに図書館はある？ ……あと数カ月入院予定だけど…引っ越し先に私でも行ける高校はある？」

「えっ。そ、そうね…。高校に関しては、その町にある学校の方から『ぜひ入学してほしい』ってお誘いと、日葵が入学したい気があるなら、入院が長引いたとしてもすぐに新入学対応してくれるらしいから安心して。一応、入学前に学力調査のためにテストがあるらしいけど…あくまでも学力をはかるためのテストみたいだから、入学自体に影響はないと説明を受けているわ」

学校側から入学のお誘い？ ……はて？ 『青空 日葵』は学力や体力的な状態から考えても推薦されるような人材ではないが…。

学校側が超少子高齢化の影響による廃校の危機とか……定員割れでもしているのか？

……何か、きな臭い気がする。……考えすぎだろうか？

「そっかあ！ それは良かった！ 学校側から誘われているなら、是非とも私その学校に行きたいな！ ああ〜！ 楽しみ！ ありがとう、お母さん！」

「……。……ねえ、日葵？」

「……ん？ どつたの？」

「その…日葵は環境の変化を嫌う方だったから…。……今回の話。……絶対に怒ると思ったのに……どうか、したの……？」

「……。……あー。どうしてだろうね？ 今は、そんな気分……って感じ？ ……だから」

「そ、そう……」

「うん……」

……なるほど。『青空 日葵』という少女は母親には嘘の学校生活を伝えていたようだ。

しかし、この話は逆に現在の私にとっても好都合な誘いであったため、少し大きさに話に好意的反応を返したところ、若干グクシヤクはしてしまっただが……。後日、その高校や転勤先の土地についての話の詳細を聞く。

……

……

……

どうやら、私は五車町ごしやまちという町に移住し、そして私は五車学園ごしやという学校に新入学となるようだ。

ええやん、学“園”ライフ。Hoooooooooooo!!!  
フウーツ!!! 学校や大学には前世で行ったことがあるけど、学園には行ったことがなかったんだよなあ。

住所は群馬県まえさき市の隣町のように、山間の小さな町ではあるが、今世紀に入ってから新たに建設された『ニュータウン』らしい。ニュータウン！ いい響きだ。

……ところでまえさき市とは何処だろうか？ 私の知識では群馬県には「前橋市」と「高崎市」があるのは知っているが、「まえさき市」なんて市は聞いたことがない。五車町という町も……この世界の特有の市町村なのだろうか？ 少し前世に似ている反面、ちよつとした違いがどうも気になってしまう。

……ともかく、試される大地グンマーで『いなかぐらし！』の予定だ。ご近所付き合いや、私も変な素行をしないようにしないと、町ぐるみで嫌がらせをされそう。だけどそんなことにはならないように善処するし『ニュータウン！』らしい！ きつと大丈夫なはずだ。

念のため入院中に一通りの『五車町 ニュータウン』について聞き込み調査と、ネット検索で情報収集はすることは確定事項である。

対魔忍の世界に異世界転生したわけだけど、危険な都心部から離れることで、ここから始まる ほのぼの学園生活スノーライフ！ 正気

と生皮を剥がれる殺伐ライフからバイバイしちゃうぞっ☆

## 2章 『わくわく五車学園ライフ(一)！』

Episode 6 『入学初日から、不運と踊つちまった話』

こんにちは！

私『あおぞら青空 ひまり日葵』！ 中身は『くぎぬぎ釘貫 しんそう神葬』というどこにでもいる

異世界転生者！

今。私は五車学園の学園長(校長)室に、軍帽を被った全体的に美味しそうなブルーベリー色をした服装を纏うSM系一本鞭所持の女教師に拉致され、さらに校長と全身純白色に染まった鬼教師と誰か他の教師の3人に囲まれる形で集団圧迫生徒指導を受けています！

私を取っ捕まえた軍帽を被った全体的に美味しそうなブルーベリー色をした服装を纏うSM系一本鞭所持の女教師が途中で退席したことは、現在発生している圧迫生徒指導の空気を緩和するかと思いましたが、決して！ 断じて！ そんなことはなかったです！

……私が引き起こしたことを考えるならば、妥当な状況なのかもしれません……入学初日にやらかした経緯は、不可抗力な案件だと思うのです。

結論から話します！ もう私に『わくわく！ 五車学園ライフ！』はきつと訪れません！ 修羅学園霸道ライフとなります！

S i e i s t o h n e E h r e (栄誉などあつものかーっ!!!)  
畜生めエーローツ

!!!

……  
……

「それで……どうして先ほどから瞼を開けないのかしら？」

「薬液が目に入ったせいかもしれません！ 病院を受診したいので、このまま救急車を呼んでもらって……もう帰っても良いですか!？」

「……どう見ても足元にしか かかっているように見えるが??？」

「……ごめんなさい。……正直なことを言うと、お二方からの圧が強

烈で、このまま目を開いたら恐怖で《心臓発作》をしかねなくて……怖くて目が開けないです……」

……この顛末は、私が病院から早めの自主退院を済ませ、五車町ごしやまちへの引越しを行い。周り近所への挨拶をして、五車学園へ1カ月遅れの新入学を果たし。入学初日の体育授業を受けたときに発生しました……。

……

……

……

「今日は新入生を紹介します。今日から『五車学園 高等部』へ入学することになった『青空』あおぞら 日葵』ひまり さんです」

「初めまして『青空 日葵』です。特技は工、工作。趣味はゆるキャンとカラオケ。まだ引越してきたばかりで右も左も分からない新参者ですが、どうぞ仲良くしてください。これからよろしくお願いします」

「はい、よろしくね。それじゃあ、青空さん、その空いている席を使って」

「はい……」

黒髪染を済ませた髪をポニーテールで束ね、好印象を得られるにこやかな笑顔で挨拶する。

そう。これが私。五車学園の制服を纏った『青空 日葵』もとい『釘貫 神葬』である。

相変わらず髪は癖っ気でボサボサ感は否めず……ストレートパーマをかけたが、それでもこの髪質が直ることはなかったので、頭頂部を髪留めリボンで抑えつつ、仕方ないとあきらめることにしたのだ。それだけでも、以前の自分よりはかなりマシな状態ではあると思える。アレだ。詐欺広告にある別人なレベル程度にはイメチェンしている。

まばらな拍手を背中に受けて 指定された席へ移動して、他の高校と変わらないような授業が始まるのだった。そう……。ここまでは

完璧なスタートラインを切って、休み時間に女子学生と軽いトークを交わす完璧な日常だったのに……。

……

……

……

「あ、青空……さん、だっけ？　次は体育だぜ。更衣室の場所とかわかるか？」

4限目も終わり、母親が作ってくれた美味しいお弁当を芝生で食べて、教室へ戻る。

クラスメイトである他の女子生徒が食堂からなかなか帰って来ないことに気が付き、周囲を見渡していると声が掛かった。そちらに視線を向けると五車学園男子生徒の制服を纏っているものの、艶やかな栗色の腰まで伸びる長髪に羽の髪飾りを付け、緋色の瞳をした少女のように見える身長約140cmぐらいの少年が瞳に移る。

一瞬、小学生かと思ったが……。制服が高校の制服であること、男子用制服の着用から、彼が男子高校生であることがわかった。

その言葉遣いは、ぶっきらぼうではあったけど、どこか優しい彼なりの気遣いを感じる。

「あ、いえ……まだこちらには来たばかりで……わかりかねます。もしご存じでよろしければ教えて頂いてもよろしいでしょうか？」

「おう！　もちろんだぜ！　そうだ、俺は上原うえはら 鹿之助しかのすけだ。この体育は他所より、ちよつとハードかもしれないけど、これから一緒に頑張ろうな！」

彼は『上原うえはら 鹿之助しかのすけ』と名乗り、更衣室までの学園案内を始めてくれる。

学内地図を見させてもらうが、ここは一度では把握しきれないほどに広大過ぎた。更衣室に移動する間にも10代未満の子供たちともすれ違う。それにしても、小中高一貫の学園というのなかなか珍しい。

……

……



…

私は案内中のつなぎの話として、彼と前の学校について(『釘貫 神葬』が経験した高校生活ではあるが……)を話していた。

「——とまあ、前の学校ではそんな感じでした」

「へえー……。青空さんって、勉強できる感じなのか？」

「そんなことはないですよ。平均的、ですかね。……どうしてそんなことを？」

「いや、さ。俺は工学とか物理学って内容は習ってないから、ちよつとよくわからないんだけど……。青空さん、座学の時間のとき。いきなり余裕そうに授業中サボって、その本を読んでいるとき凄く楽しそうにしているし、授業をサボっているのに先生から問題を投げられたのにアツサリと解いていたからさ、どうなのかなーと思っただけ」

「……。工夫してたんですけど、見られちゃってましたか……。実はあの授業の内容は中学生時代にもう『習った』内容でして……。あの本は好きなので読んでいただけです。へ工学とへ物理学の話なら、大人と比べれば齧った程度です。……それでも勉強は『平均的』ですよ。そういう、上原さんは？」

「俺か？俺はなあー……。人よりできない感じ……。だな。でも、いつかは周りのやつを見返せるだけの点数を取ってギャフンと言わせてやるんだ！」

「そうなんですか……。でも向上心があるのは、とてもいいことだと思います。……もしよかったら、ですけど……。勉強のことでわからないことがあれば、お手伝いしましょうか……。？」

「……。いいのか？」

「はい。代わりに……。この町に来たばっかりなので、町のことや怖い先生などいたら教えてくれると嬉しいですよ」

「おう！ ギブアンドテイクってやつだな！ もちろんだぜ！ そうだ。次の授業自体はハードだけど、さくら先生は優しいから多分青空さんでも大丈夫だと思う！ あ、ここが女子更衣室だ！ 着替え終わったら、今日は基礎体力作りの日だから校庭に集合な！」

「ありがとうございます。またあとでお会いしましょうね」

気が付けば、いつの間にかに更衣室の前に辿り着いている。

上原君にお礼を言って、私は更衣室に入り着替えを済ませる。室内には数人のクラスメイトが既に着替えており、なかなか来ない私を心配して待っていたと話してくれる。どうやら中々来ないことに気づいて呼びに行こうとも考えたらしいが、誰かが一緒に連れてきてくれるだろうと考えて待っていたらしい。……なるほど？

設備から考察するに多分、私立学園(?)ということもあってか、その授業の時間帯に貸し出されるロッカーに制服を入れ、貸し出されている体操着に着替えて部屋を後にした。

……この私立学園、かなり学費高そう。両親から支払いの問題なきような話は聞いていたけど……。

……そりゃあ、『青空 日葵』は学校側から推薦入学できるような学生じゃないが『ぜひ来てください』なんて言ってくれるよな。長期入院によって、受験勉強にも間に合わない金を搾り取れる絶好のカモだもん。

……

……

……

外に出るとグラウンドでは、既にほとんどの生徒が集まり ウォーミングアップをしている。

その中に混じって、明らかに青い顔をして脂汗ダラダラの状態であつむいている上原さんが居た。

「……上原さん？ その……大丈夫ですか……？」

「……！ 青空さん、ごめん！ 俺、いきなり青空さんに嘘ついた！ 本当にごめんな！」

心配になって体調が優れないのかと声をかけると、突然頭を下げ謝り始める。

「えっ？」

「今日、さくら先生。用事があつたみたいで不在で……！ 代わりに

<sup>ムラサキ</sup>紫 先生が引き継ぐんだけど……」

「……もしかして？」

「うん。……怖い」

『まじかああー』と、思わず心の中で晴天を見上げる。

でもこの時の私は『この教師ならいずれ顔を合わせることもあるだろうし、ある程度の把握は大事だろう。頑張れ、私。今日は家に帰って、ホームセンター 五車店に遊びに行くんだろ!』と自分自身を励ましていた。

「だ、大丈夫だって! 先生も今日入ったやつに厳しくしないとは思うし、運動が苦手なら俺も一緒に居てやるからさ! な! 一緒に頑張ろうぜ! な!」

「ありがとう……。頑張りましょうね……」

おしとやかなキャラ作りをしつつ、自分を鼓舞しながら開始のチャイムを待つ。チャイムが鳴った直後に明らかにクラスメイトたちの雰囲気が一変した。……よほど怖い先生のようにだ。

……そして。この鬼教師こそが、私が作り上げたかった学園生活を粉碎しに来た悪魔だったのだ……。

……

……

……

現れたのは藍色の髪に後頭部で髪を束ねなければ、地面についてしまふほどの長髪の女性だった。光彩はLED信号機のような輝かしい赤色をしている。彼女が怖い教師という様子も表情の雰囲気から察することができる。彼女の顔は眉尻が吊り上がっており、口元はきつく引き締まっている。彼女を一言で表すならクール系な美女と言えば一番伝わりやすいかもしれない。

「全員そろっているようだな。……お前が『青空 日葵』……か。話は聞いている。去年、ビルを占拠した東雲革命派、もといテロリストを4名、生身で返り討ちにしたそうじゃないか。まずは、その実力と基礎能力を見させてもらう。全力でかかってこい。他の生徒は見学! 彼女から盗める技術があるならば、それを習得しろ」

……。……!? ……今、なんだった……? ハアン?! 今! なんだった!? この女教師?!

なんで！ アアアツイ！ ナンデ!? なんてそんなことを知ってるの!? その件は、隠し通したかったのに！ ナンデナンデみんなの前でそれ言っちゃうの!?

周りの生徒たちの反応を見ても、「え。マジで？」って反応になってんじゃない!!! バカじゃないの!?

……そう。終わった。終わったのだ。私の『わくわく五車学園ライフ( )!』は初日で終焉を迎えました。悪魔<sup>紫先生</sup>の発言による。スタートダッシュに回避不能な高速足払い、衝撃の過去暴露によるきりもみスーパード回転のせいで。今日から1人浮いた修羅学園霸道ライフに切り替わります……。

クソ！ せっかくアヘアヘ対魔忍ライフから離れて、学園生活を謳歌しようと思ったのに初日でこれだよ!!! クツソ、本当に人生はクソだ! いや、これは人生がクソなのではない。

不運<sup>ハードラック</sup>と問題が、前世と同じノリで私に向かって突っ込んできているのだ。

そんな悪態を内心で吐きながらも、笑顔のまま凍り付く私を他所に、紫先生は羽織っていた上着であるジャージを脱ぎ、丁寧に折りたたむとクラスの学級委員長に持たせる。ジャージの下は、動きやすそうな深いスリットの入った白のチャイナドレスであり、巨乳を強調したソレは非常に扇情的だ。

それから自分の背丈以上の巨大な机を背負いあげ、私の目の前に置き、更にその上に武器を乱雑に並べる。……はい?!

いろいろツツコミたいところはあるが、どこから突っ込めばいいかわからない。というより、ツツコミが絶対に追いつかない。

「選べ」

「え?」

「この中から、好きな武器を選べと言っている」

え、何? 私なにを試されているの? 他の生徒を見ても、無言で私をガン見するだけだし、上原さんに至っては目を大きく開いて細かく頷いているし……。……ボブルヘッドみたいで可愛い。

紫先生は木製の戦斧を持ち始めるし……。え。待って。私の知って

いる普通の学校はこんな武器を持たせるようなことをしないんですけど？ え？ これはこの世界の常識だったりします……？　そもそも、思春期の生徒の前でそんな痴女みたいな恰好をする教師もどうかと思いますよ？　性癖が歪んじゃう！

「あの……質問をしても——」  
「……………」

あ、これ駄目だ。目が『これからお前を殺す、だが公平に戦うためにまずは体力を全回復してやろう』とか言っちゃやうような、そんなカルティストの目をしている。……相手がカルティストならやるべきことがあるが、目の前にいるのは学校の先生だ。

自分でもわかる嫌そうな顔をしながら、机上に並べられた武器を見る。刀、槍、鎖鎌、斧、杖、弓、拳銃……。うん。全部、高校の授業で使うようなものじゃないな。

病院にいる間、ほぼ座学しかしていなかったために、そこまで武器に関して扱えるものはない。一応、『釘貫　神葬』の方で格闘術や数点の武器の扱い方はいくらか習得はしているが、あくまでもテロリストに私の格闘術が通じたのは、相手が油断していたことや、完全な戦闘のプロではなかったことが大きい。ゆえに、体育の授業で戦闘訓練を始めちゃうような教師に対して私の格闘術が役に立つとは思えないし、それこそ素手で挑もうものなら……。その手に持った戦斧でフルボッコテンパンにされるのは目に見えている。

『新クトウルフ神話TRPG』選択ルール：i21頁　ノックアウト打撃？

……ムリムリ。攻撃が当たらないことも1つの要因だが、このタイプは、手斧ならぬ戦斧という重量と癖のある得物を武器として使用する観点から、それなりに持久力や体力にも長けているのが予測できる。ほぼ確定的に学生のノックアウト打撃なんかで気絶なんかしたりしない。

「ハアアアアア→→（明らかに地の利が悪すぎる）」

今まで出したこともないような裏声の奇声を発しながら、震えた手で武器に触れ始める。もうこの授業だけで、アヘンをキメたようなア

変ア変顔を2連続で行ったが、誰も笑わないのが逆につらい。

てか、誰か止めて。上原さん、助けて。ちよつと一緒に頑張つて。

「……せ……。……。せ、せんせえ……」

やった。何度か上原さんを見たことが功を成して……。1人、クラスの中でたった1人。静まり返り緊張した赴きでこちらをただ見ているだけの生徒達の中から手を上げてくれる。

「なんだ。上原」

「青空さんは……。その……」

「その？ ……なん だ？」

……否、やっぱいい。

ひと呼吸を置いて、私は大きく息を吸い込む。

「ヒヤアツハアアーツツ!!」

『?!』

「せっかくだから、私は黒の拳銃チャカを選ばぜエーツツツ!!」

甲高い奇声を発し、全員の意識を上原さんからこちらに集中させる。

手に持った拳銃を映画のような手さばきでコッキングを済ませ、ズボンの背中部に挟み。

……上原さんは震えていた。彼も本当は紫先生が怖いのだ。

だが、それでも誰も止めてくれないこの状況で、ただ1人……：勇気を振り絞って拳手をし、会ったばかりの私を助けようとしてくれる。もう……。もう、その気持ちだけで十分だった。

……可愛い者は下がっている。この場合は、やはり私が1人で何とかする。

……何とかするから、今の乙女をかなぐり捨てた世紀末覇者的な奇声は忘れてくれ……。

選んだ武器は、拳銃（と言っても電動ガンだったが）、六尺棒、そして先生が脱ぎ、学級委員長に託した『長そでのジャージ』だった。

「ほう……」

紫先生は眉をひそめる。それから、ウォーミングアップのようにその模擬戦斧を目前でぶんぶん振って見せた。あんなので殴られたら、

昏倒では済まされないだろう。すなわち死である。死。

学園長——！ 教育委員会——！ P T A ——！ それから児童相談所——！！ 仕事してえ——！！

「よし、では……」

「何を勘違いしている？ まだ私の

Battle preparationは終了していねーZee……  
ませんよ！」

「……なら早くしろ」

そのまま先ほど学級委員長から受け取った紫先生のジャージの両腕袖先を弄り、結び目を作って、五車学園の小学生が遊ぶ砂場まで持っていく……おもむろに地中へ埋め始める。

おそらく、予測していなかったのだろう。見学席にいた全クラスメイトの目が私に釘付け。上原君は、小刻みに震えながら利き手の指先を口の中に入れ、信じられないと言った様子。マナーモードバイブかよ。チクショウ!!! 可愛いなあっ！ あの子！

……紫先生は………あつ。怒っている様子……けどなあ——

——それは、クラスメイトにテロリストを4人シバいたことを暴露された私も同じ気持ちだよ。

「……」

間違いなく今先生に効果音を付けるなら、ゴゴゴゴゴ……と付けるのが妥当だろう。顎が上に突き上げ見下すような目つきで私を睨みつけている。

だが、これは私の戦術の一環にしか過ぎない。相手を怒らせることは予定にはなかったが、この際有意義にその感情を弄んでやる。この行為……。本来の目的としては、武器をつくることだ。これで私の武器は5つになった。即席にしては上等だ。怒らせるつもりはなかったのは本当だ。目的は別にあつた。

「よくも……アサギ様から頂いた……私の大切な……大切なジャージを……」

ゆつくりと腕に馴染むよう近接武器を素振りする私に、紫先生は何

かをボソボソとつぶやいている。

なるほど、誰かからもらったものだったようだ。遠くてよく聞こえなかったが……それはもう大切な人からもらったジャージだったらしい。結構なことだ。……家に帰ったらあのジャージをクリーニン  
グに出そう。

……生きて帰れたら、だけど。



Episode 7 『消火栓の妖精』 名付けの  
原因』

「……先生」

「……なんだ」

「コレ……。……失明したら……。責任取れないので」

一触即発なこの状況で恐れながらも、机上に置かれた密閉式の実験用ゴーグルを紫先生に手渡しに行く。いくら私の過去を暴露した教員だとしても、私のゆるふわ ニコニコ わくわく五車学園ライフをぶち壊した悪人でも、私が失明させてよい理由にはならない。

「……これはお前のために用意したものだ。人の心配をするぐらいなら、これからボコボコにされる可能性のあるお前が付けるべきだ」

あつ、私これからボコボコにされることは確定なんですね。

でもこれは最低限なモラルの問題だ。私も、はいそうですか、と二つ返事で引き下がるわけにはいかない。

「……」

「……」

「……」

「……わかった」

10分間の沈黙が続いたが、ようやく観念したのか先生は私の手からゴーグルを受け取ると着用する。……これで先生が失明する危険性は、ほぼ無い。

準備の出来た紫先生から距離を取りつつも、六尺棒を構え、衝撃に備える。

……先生が攻撃を外すか、〈応戦〉が間に合えば反撃の可能性はあるが……。

——バキヤアツ!!!

それは一瞬だった。

私が武器を構えた瞬間が、開始の合図だったのだろう。

一瞬で間合いを詰められ、斧による薙ぎ払いを受ける。心なしか先

生の目の光が墓地に揺らめくルーメン鬼火のように残像を残したような気がする。

攻撃を往なしへ応戦ししようとするも、相手の攻撃の方が何倍にも素早く本能による防御で武器を用いてへ受け流ししるることしかできない。

六尺棒は教師が振るった遠心力の込められた戦斧による破壊的な威力に耐えきれず、そのまま空高く上空に打ち上げられる。衝撃で腕がジーンとしびれ、一瞬で両腕が無くなったかのような感覚に心臓が強く強く高鳴るのを感じた。

先生はそのまま、2連撃目に移ろうと振りかぶっていた。こんなのは基礎能力の試験なんかじゃない！ 一方的な蹂躪だよ!!! 蹂躪!!! 私も必死の形相のまま、歯を食いしばり2撃目をへ回避する。今の一撃で地面が抉れた。地面が地割れのようにひび割れた……!! こ、殺す気だ……!! この人、私を殺す気だ!!! クソが! こつちも-googleなんか渡してフェアプレイなんか気取っている場合じゃなかった! でも失明させるのだけは嫌だったのも事実だ! 転生して、前よりも平和的でマシな人生を送りたいだけなのに! クソみたいな人生が向こう側からやってくる!

「ひえ……!!!」  
「……!!」

次に私が取った行動。……それは逃走だった。

丸腰の子供が、得物を持った本気の殺意むき出しの大人に勝てるわけがないのだ。もう逃げた。それはもう全力で。でも、後ろを振り返れば無表情で表情に殺意を込めている紫先生が、ぴつたりと背後にくっついて走る様子が視界に映る。もうあれは先生なんかじゃない。鬼だ。

振り上げられた武器が風を切る音に合わせて、ジャングルジムの中に転がり込みへ回避を試みる。

紫電一閃、模擬戦斧がジャングルジムに直撃し、金属が歪む。

即座に背中に携えてあった電動ガンを手に取り、反射的に血気迫る鬼の顔面を狙い発砲する。-googleは付けさせているのだ。容赦は

いらぬ。こんな攻撃であの鬼が止まるとは思えないが……ここで頭部に銃撃が直撃し、先生が降参宣言してくれなければ他にこの戦闘が終わる考えられる切っ掛けは私が死ぬ他なかった。ペチツペチツペチツ！

弾丸負傷余裕です。と言わんばかりにBB弾を顔面に受けていく。あの……これは模擬戦ですが……人って心臓や頭のような致命的な部位に銃を喰らったら「死ぬ」んですよ。まあ……私のように当たりどころによっては死なないと思うんですけど。

やっぱり目の前の鬼は私を殺しに来ているようだ。鬼には不利な地形であるジャングルジムにて籠城する私を引きずり出そうと腕を伸ばす。そんな鬼へ玉切れになった銃をへ投擲して、這う這うの体で逃げる。砂だらけになりながら、そのまま砂場に埋めていた先生のジャージを転がるようにして手にすることができた。

そのまま砂だらけのソレを第三の武器として、∞の文字を描くように振り回し始める。

あたりに砂が散乱し、私と鬼の視界妨害を始めるが……想定通りだ。また袖には砂が仕込まれており、遠心力によって勢いづいた塊は袖を遠慮なく引き延ばす。

その様子は目の前の鬼に効果てきめんのようだ。……塩でも詰めてやればよかった。彼女は引き延ばされるジャージの袖を目前に怒りと焦りが混じったよくわからない形相になっている。

ブラックジャックとなった凶器は初心者でも扱いやすいにも拘らず、その遠心力から凄まじい威力をたたき出す。前世では作成さえできてしまえば、即席最終兵器と化す。そんな得物だった。今回は1袖分のみならず、2袖分を武器として振り回している。鬼が模擬戦斧で振り払おうと思えば簡単であろうが、何せ素材は鬼の宝物。無暗に薙ぎ払えば、今よりひどい状態になるのは明白だ。

「この……っ」

「フハ……フハハハハ!!!」

……ブンブン……ブンブンブンツツツ!!!

「ホラ、ホラホラ、ホラホラホラホラホラア！ いいんですかあ!? 先

生がそんな馬鹿力で武器を叩きつけたら、宝物がボロボロになっちゃいますよお!？」

「くっ……!？」

私の言葉によって、正面の鬼は女騎士が見せるような悔しそうな表情をする。鬼のくせに生意気だ！

ひとまずの形勢逆転した！

このまま、相手が昏倒するか降参するまで、ブラックジャックと化した先生のジャージたからものを遠慮なく振り回し続ける。

セリフが既に悪役のそれだが、入学初日の生徒の秘密を暴露し、殺しに来ている教師が正義の味方かと問われれば……それは違うだろう。世間一般的には勝てば官軍……とされているが、勝ってももう私のほのぼの学園ライフは帰ってこないのだ。この鬼のせいで!!!（涙）

ブンブンブンブンツ!!! ……パシパシツ……

「……見切ったぞ」

「……!？」

……ブチチチツ……!

「……!？」

降参する前に鬼が私のブラックジャック捌きを見破り、掴み、そのまま腕力にものを言わせて取り返そうとする。引き延ばされるジャージ。響く糸が千切れる音。素人でもわかる紫先生の絶望と驚愕と悲哀の混じった顔。

……私は逃げた。それは、もういろんな意味で。幸い第四の武器は目の前にある。鬼がまた後ろについていることを恐怖で震えながら確認し———近い。さっきよりずっと近い。後ろ。真後ろ。真後ろの……ゼロ距離真後ろにいた。その顔に余裕はない。復讐鬼のような顔になっている。腕が伸ばされる……。捕まる……っ！

——間一髪。こちらの方が早かった。そのまま速度と助走をつけて、走り幅跳びの要領でサッカーゴールに向けて天井桙へぶら下がりへへ跳躍で飛び掛かる。勢いづいた重量あるゴールは私の体重と勢いによって倒れ……。

「ソイツー！」

「ほおうッ!!!」

背後にぴったり近づいてきた鬼を押しつぶした。

……流石、初めての授業で戦闘訓練を始めてしまうような鬼教師。持ち前の反射神経で私の不意打ち攻撃を防いでみせる。……だがこの教師。鬼のような恐ろしさではあるが、しょせん人の子。今の不意打ちは確実に効いたはずだ。なんといっても110kgぐらいはありそうなサッカーゴールの枠だ。そこに約60kgの私の体重も加算されているのだ。これを受けて平然と出来るわけがない。素早く身をひねり、わずかに開いた隙間から匍匐前進でゴールから這い出る。あの鬼が私に辿りつくには、サッカーゴールを引き倒して迂回するか、元に戻して迂回するか、サッカーゴールを持ち上げて、潜って、からまる網を私のように高速匍匐ムーブで避けるしかない。

……決着は付かないだろうが、時間は稼げるだろう。

こちらは体育館内部に身を隠して、『準備』をしたのちにわずかに開けた扉から様子を伺う。

彼女が降参してくれることを心壊れる！　こころ壊れちゃう!!!

おねえさんゆるして！と、期待して。

「……」

先生は人の子じゃないのかもしれない。

ゴリス・レッドフィールド……否。バケモノの子だったんだ……。

何事もなかったかのように仁王立ちをし、片手で110kgはある……倒れたサッカーゴールを元に戻す。それから、今の衝撃でやつとへし折れた木製の戦斧も捨て、体育館の扉の隙間からひっそりと様子を伺う私へ振り返り、指の爪を突き立てるような手の形と、眼球と歯茎がむき出しになるような狂気の形相で突っ込んできた。

……もう私には最後の手段しか残されていなかった。素早く首を引っ込めて、体育館の鉄扉と鍵を閉める。

……鉄扉を完全に封鎖したはずだったが、鬼は建付けの悪いふすまを蹴り飛ばしたように容赦なく吹き飛ばす。……なんなんだ、あの女教師は。





## Episode 8 『で、この状況が生まれつつわ け』

……そんなことをしたら、もう目も当てられない状況に目を開けられるはずもなかった。

両目を両手で抑えて、震えた現場猫のような状態になる。

「……」

「「……」」

沈黙だけが部屋を包む。

「……わかったわ。では、そのままでもいいから話をしてもいいかしら？」

「お、お願いします……」

「……今回、聞きたいことは2つ。まずどうして、非常ベルを押して学園中に『火事だ』と放送して、大混乱を起こしかねない嘘をついたの？ 次に、なぜ紫を……紫先生を消火栓の薬液で吹き飛ばしたの？」  
どうしてって……。命の危険を感じた上で助かる方法があれしかないと思っただけ以外にないんだよね……。

「そ、それは……」

「大丈夫よ。ね？ 落ち着いて。私は怒りたいわけじゃないの。どうして、あなたがあんなことをしたのか、ゆっくりでいいから、事情を話してほしいだけ……それだけだから。……ね？」

校長先生の温かい言葉と優しい声色を聞きながら、私は両目を固く閉ざしつつ片手をこめかみに当てて深呼吸を行う。確かに震えたままでは何も話すことはできないだろう。

……なんとか、落ち着いてきた。

「……むら……紫先生がいきなり体育の授業で、基礎能力を図るとおっしゃられ私に武器を半強制的に選ばせた後、明確な殺意を持って攻撃をしてきたからです……。この明確な殺意に関しては、他のクラスメイトにも聴取していただければ事の顛末を見聞きしているはずなので、私が嘘を話していないという証明になると思います。確かに



先生の大切な宝物であるジャージの上着を武器に変えたのは謝罪します。……申し訳ございませんでした。ですが、あの場には他に代用できそうなものがなくて……。……ふ、普遍的な女子高生が戦えるわけないじゃないですかっ！ あの時！ 紫先生は、いったい何を考えていたんですか!? ……あ。……ごめんなさい。取り乱しました……。……そう。だから、だから……。一番扱いやすそうな先生のジャージを選んで……。紫先生からは『好きな武器を選べ』とも言われてましたし、私の質問にも答えて頂けそうにもなかったから……。そのジャージを武器へと代えさせていただきました……。……」

「……。……そう、そうなのね。話してくれてどうもありがとう。上着の件はもう十分よ。でも、私は……。……もうちょっと非常ベルを使用するに至った経緯の方も教えて欲しいわ」

「はい。……。それで非常ベルを押し、紫先生を消火栓で吹き飛ばしたのは……。……もう生きてこの学校から出るには、第三者の介入が必要だと思つて……。……思つたからです。……現に先生たちは火元の体育館に来ていただけたでしょう?」

「ええ、そうね。蓮魔<sup>はすま</sup>先生が到着したときには、そこに火元はなくて……。狂つたように頭を振りながら絶叫を上げるあなたと、そして昏倒した紫が真っ白に染まつて、体育館と同化していたのだけだね。……なるほど、そういう経緯で、ね。……。でも、わからないのだけど……。それなら、どうして直接、職員室に助けを呼ばなかったの?」

「それは……。紫先生が……。変な話……。その、不死身の鬼? のような存在? ……に見えて。ちょっと考えすぎなのかもしれないし、たぶん錯乱していたこともあるので……。変なこと言っていますよね。ごめんなさい」

「……。いえ、いいのよ。そのまま続けて?」

「……。他の先生については、私はまだよく知らないし……。止められるかもわからない、誰に頼ればいいのかわからない、わからない。わからないことだらけだったので……。ひとまず第三者の警察に介入してもらつて、保護してもらうのが現実かな……。……と思つたからです」

「……。ふむ。そういうこと。そうよね、今日 入学してきたばかり

じや分からないことばかりで、そうなるのも無理はないわ。……ありがとう。私が聞きたいことはこれで以上よ。もう帰っても大丈夫」

校長先生もなるべく私を怯えさせまいと気遣っているのか、優しい声色で、私の話に相槌を打ちながら話しかけてくれる。だが私は知っている。人はその気になれば、声色だけで人を騙すのだと。オレオレ詐欺がまさにその典型的象徴と言っても過言ではないし、世界には人間の声真似を行える怪物がいるのだ。人間に出来ないわけがない。

それにしても……どこかでこの学園長。もとい校長からは……何か……とてつもなく嫌な予感を……ひしひし……と感じるような……そんな気がしていた。

「は、はい。それでは失礼いたします……」

「……それと、これまでのあなたの性格に関する書類も見させてもらったけど、今日の事件は、あなたが気兼ねることではないわ。だから、もし、退学に怯えていたり……“転校”を考えているようなら、難しいことかもしれないけど……“気にしないでいい”のよ。……あなたは無限の可能性に満ち溢れている。あなたのような人には、この学校を統括する校長として、ぜひこの学校に通い続けて多くのことを学んで欲しいと思っているわ」

「……」

私は目をつぶったまま立ち上がり、3人の気配のする方にお辞儀をし、薄目を開いてゾンビのように腕を正面に突き出して、床と障害物、扉を確認しながら部屋を後にする。

部屋を出ようとする私に、校長先生の寛大すぎる言葉が聞こえるが、当然 ガチガチにおびえていた私に振り返る余裕などはなく、怯えながら小声でお礼を告げて部屋を出ることしかできなかつた。

……

……

……

「はあ……」

校長室を出たのと同時に、安堵から大きなため息が吹き出る。まだ目をうつすらとしか開けることが出来ず、どこか視界が震えているよ

うに見える。視界に映るのは目に優しい色をした廊下ばかりだ。背後を振り返っても校長室の扉は固く閉ざされている。

「よ、よお……。その、大丈夫か？」

「……………」

突然声が掛けられ、ネコのよう<sup>へ</sup>にその場でへ跳躍してしま<sup>う</sup>。あわや天井に頭をぶつけかけるが、壁に手を付いて制御することで髪を掠めるだけで済んだ。目を見開き、いつでも逃走できるような姿勢で背後を振り返った先には……上原さんが立っていた。眉を八の字にし、非常に心配しながらも驚いた様子で、教室に置きっぱなしだった私の荷物を抱えている。

また彼以外にも、鮮やかな淡い青髪に引き締まった身体をした遊び慣れている雰囲気のある右目を閉じた男子生徒と、薄黄緑色の髪を毛先で結った黄金のはちみつ酒色の虹彩が輝かしい爆乳の女子生徒と一緒に立っていた。

「あ、紹介するよ！ こいつらは俺の親友のふうまと蛇子<sup>へびこ</sup>！ ふうま！ 蛇子！ 彼女が今日俺のクラスに編入されてきた青空 日葵さん！ 今日来たばかりで、まだ五車町のこととも学園の事よくわからないんだって！ 二人からも色々、教えてあげてよ！」

「ふうま小太郎<sup>こたろう</sup>だ。鹿之助から話は聞いている。まあ、その、なんだ……。そのぐらいのガッツがあつた方が、この学校では過ごしやすいとは思う……。ぞ？」

「日葵ちゃんっていうんだ！ 可愛い名前だね！ 相州<sup>あいしゅう</sup> 蛇子<sup>へびこ</sup>だよ。これからよろしくね♪」

「くぎ……。あ。あお、『青空 日葵』です……。初めまして、これから……お世話になります。どうぞよろしくお願いいたします」

危ない。一瞬、本名が出かかった。

あれ？ ……ふうま？ あれ……。今ふうまって言った？

……でもなんだっけ？ 思い出せない。どこかで聞き覚えがあるような気がするのだけど……。

「おいおいおい〜！ なんだよ〜！ そんなかしこまらなくても、こいつらはそんなに怖くないって！」

「わかる。わかるよ。まだ緊張しているんでしょ？ 初日だもんねえ。そうだ！ ねえ！ 時間的にも、そんなに遅くないし、稲毛屋に寄って行かない？ あそこのソフトアイスクリームすっごく美味しいんだよ！ 日葵ちゃんも来てくれるでしょ？ もちろん、おごつてあげるからささ！ ねえ、行こうよ！」

「俺、それ賛成！ あそこの白玉あんみつもモチモチしててうめえんだよな！」

「今日初めて学校に来ていろいろあつて疲れているだろうし、また今度でいいだろ。でも、どうする？ 青空さん」

せつかく、上原さんが私のために気を使って友人を連れて誘ってくれているのだ。ここで断るのは無作法というものだろう。私の答えは決まっているようなものだった。

「稲毛屋ですか……興味、あります……！ ……行きたいです！」

「お、ノリがいいねえ！ それじゃ、着替えたら行こっか！」

「はい！」

「そうだ。これ教室に置きっぱなしだったから、持ってきたんだけど……。結構重いなあ。何が入ってるんだ？」

「嗚呼！ いつまでも持たせてすみません。……大したものじゃないですよ。暇つぶしに読む本でして……『新クトゥルフ神話TRPG』という本なのですが……」

「ああ、それ俺も読んだことがあるな。図書館にその本があつて借りたことがある」

「えっ！ そうなんですか!? ということは、ふうまさんもTRPGに興味がおありで?!」

ま、いつか。そのうちに思い出すでしょ。

## Episode 9 『ただの一般人』

「……ありがとうございます……」

終始、彼女は私達に怯えた様子で、目を閉じたまま部屋を後にする。……最後はうつすらと目を開けて出口までの障害物を確認しているが、話す間……一度たりとも「こちら」を見ようとはしなかった。

……

……

……

『青空 日葵』が退室した後、この部屋に残されたのは、私の妹であり教師でもある……現在は忍法で影の内部に身を潜めている『井河 さくら』、そして今回『青空 日葵』について探らせていた消火栓の薬液まみれとなった教師『八津 紫』、そして校長である私。『井河 アサギ』の3人だけとなった。

まずは変装を解き、私は一般人の女性の姿から本来の姿へと戻る。さくらは影の中から姿を現わした。……彼女は終始目を閉じたまま、私の顔を見ることを怯えており、この変装をせずとも対応は可能そうであったものの、念には念を入れておくことに越したことはない。彼女はあのビルで私達2人の顔を見ている。私達の顔を見るや否や、状況に気が付いて取り乱す可能性もあった。

「さくら。あの子を見ていて何か思うことはあった？」

「ん〜にや……私を見る限りでは、あの子……お姉ちゃんが考えているより、普通の女の子じゃない？ 確かに同行したときに見たビルでのテロリストと対峙していた時は、同一人物とは思えないぐらいに勇ましかったけどさ……。今はもう、あんなにがちがちに震えちやつて……見ているこつちが寄つてたかつて虐めているみたいで、ちーとばかり、いやーな感じだったなあ……」

「ん、そう思ったのね。協力してくれて、ありがとう」

机上に置かれたお茶の入ったマグカップを手に取り、一口飲む。この妙に緊迫した部屋で朗らかな気分になるような香りが鼻孔を包んだ。

「でも、さ。……彼女、むっちゃん八津 紫の愛称の事を『不死身の鬼』に見えたって言うってたよね？ あれってどういうことなんだろうね。どうして、むっちゃんん特性を知っているのかな？」

「いつも幸せそうなマヌケ面<sup>ツッパ</sup>をしているさくらにしては、よく気が付いたな」

「それぐらいなら私にだって、わあー！かー！りー！まー！すうー！」  
そう。確かに2人のいう通りだ。……彼女は謎が多すぎる。

だが米連や中華連合、ノマドが用意した対魔忍に対する工作員にしては、間抜けすぎる振る舞いが目に余る。しかし魔族にしては魔力を一切感じられない。何か憑依している様子もない。だが、何か彼女からは素性と得体のしれない違和感があるのは間違いはない。

「紫。ずいぶんと入学の初日から無茶をした様子だけど……あなたの見立てでは、『青空 日葵』の評価はいかがかしら？」

それから一呼吸を置き、口元が緩んだ紫に向き直って探らせていた情報の整理に移った。

その探らせていた対象とは、もちろん『青空 日葵』についてだ。  
「そうですね……。危機的状况でも忍法の発動が見られないことから、ふうまや一部の学生対魔忍のように忍法の覚醒に至っていない可能性が現状極めて高いかと。近接戦闘を試みた観点からでは、彼女の腕力や脚力、体力に関しては一般人の女子高生とさほど変わらないように思えます。ただ……—」

紫は眉をひそめ、怪訝な様子でこぶしを造った右手の人差し指を口元に当てて、考えるようなそぶりを見せる。彼女も『青空 日葵』に違和感を抱いた様子だ。

「ただ？」  
「『ただの一般人の女子高校生』にしては、……実践慣れし過ぎているかと」

まさに、その通りだった。

学内に設置されている監視カメラの映像を振り返っても、最初の武器を紫にはじき飛ばされ、2撃目をまぐれのように避けた後。彼女の逃走の動きに迷いが無いし、瞬時に紫の武器を吟味し、どこに逃げ込

めば安全地帯か理解しているようにも見える。

それに初撃で最初の武器が弾き飛ばされたとき、彼女は自分の腕を正面に突き出して、手のしびれを確認していたが……同時に紫の得物から片時も目を離していないのも印象的だ。

“ただの一般人の女子高生”がここまで出来るはずがないのだ。本来であれば、初撃で武器を弾き飛ばされ、蹲ってそれで“おしまい”だろう。

だが『青空 日葵』は、ジャングルジムでの籠城戦のあと拳銃が紫を止める手段にならないと判断したあとは、即座にブラックジャックを拾い上げ防御から一転攻勢へ移り、紫を意図的にサッカーゴールの方へ誘導している。紫もそれを承知の上で誘導に付きあっている様子ではあるが……。

……そもそも、紫を煽る意味があつたとしても、どういう発想をしていればあり合わせの道具でブラックジャックを造って振り回そうという思考に至るのかも理解ができない。

「まさか、サッカーゴールを武器としてくるなんて……」

消火栓の薬液まみれになった紫が、バスタオルで消火栓の薬液を拭い落としながら私の隣に立ち、映像記録に記録されている彼女の立ち振る舞いを苦笑しながら眺めにやってくる。

……下級魔族や一般人相手であれば話も変わってきただろうが、紫も対魔忍だ。この程度の不意打ちであれば、彼女は難なく往なすことはできる。だが、映像記録を見る分では『青空 日葵』はあくまでもサッカーゴールでの攻撃はダメ押しで、本命としては“体育館に逃げ込むまでの時間を稼ぐ”ことだったようにも見える。

「……消火栓についてはどう思うかしら？」

「はい。……そうですね……。大半の人間は、本人の意図しない非常事態の状況下で周囲に助けを求める場合、これが大人であっても大声で“助けて”と命乞いをするものが殆どです。それは、アサギ様も十分ご存じかと思われます」

紫の言葉にこれまでの経緯を振り返って、深くうなずき返す。

……私も校長の座に就き若手を育成する前は、若き対魔忍として

様々な任務に就いては魔に加担し外道の道に堕ちた科学者や悪徳会社の社長を闇に葬ってきた。時には目に余る行為が過ぎた高級娼館を営む魔族を全従業員もろとも潰したことすらある。その時、追い詰められた大抵の人間やオーク達は口を揃えて、大声で周囲や私に助けを請いて来た。

「……しかし実際には、そのやり方では効果が薄く……金も絡まない。ましてや、自身に対して一切の利益も見い出せないような状態で、助けてくれるものが現れるのは極めて稀な例ではありません。ですが、彼女はどのようになれば、他人が自分に注目を集め、助けに来てくれるか」、なおかつ「救助が到着するまでの間、どのように自分を護り切るか」、も視野に入れて動いています。……本当に彼女を「ただの一般人」、『普遍的な女子高生』として見てもよいものでしょうか？ 大人でも難しいことを命の危機に瀕している状態で、そう実行できるものでしょうか？」

……あの場で彼女は火事という手法を取った。

『火事だ』と叫べば、それ以上の延焼を避けるために当然その周囲の人間は現場へ現実かつ即座に集まってくる。やがて騒ぎも聞きつけた野次馬もその現場の確認のために現地へ集結し、その当事者だけでは飽き足らず、第三者である国家権力すら多数の味方／中立者として呼び寄せられる。

それがのちに法で罰せられるような行為であろうとも、考え方によつては法外な仕打ちに面するよりはよっぽどマシな選択であるようにも思える。

おまけに自身に対する追跡者に対し、時間稼ぎとして消火栓を起動させ武器にして時間を稼ぐ。別に逃走や相手を打ち倒す必要など不要なのだ。一定時間経てば強制的に勝利の確率は跳ね上がるのだから。

「さすが紫、十分すぎる情報収集をどうもありがとうございます」

「嗚呼♡ アサギ様☆ ありがとうございます！ もっと褒めてくださいませ、紫はアサギ様に褒められればいくらでもこの命を賭して命令を遂行して見せます！」



「それは嬉しいわ。でも自分の身体は大切にしなさい。今回の情報収集のお礼で、私のお古の洋服で良ければいくらでもあげるから、……今回の件で大暴れした『青空 日葵』の事も許してあげてね？」

「アサギ様の新しいお召し物をお譲り頂けるのであれば、当然です！」

はわわわわ……♡ と身をくねらせ歓喜の表情に包まれる紫はさておき。

『青空 日葵』について政府機関に調査させたファイルを私は開く。彼女の正体をこの学園で暴き、敵対勢力に該当しない場合は、引き続き監視し、学園生活で善の立ち振る舞いが見られる場合には能力に応じて、正式な対魔忍への勧誘および教育を施す予定だ。

……早ければ早いほど良いだろう。学園生活 最初の期末試験が終わるまでには、彼女の素質を見極め一般人ではなく対魔忍になつてもらおうつもりだった。

# Episode 9—EX □ 『青空 日葵』

□ 『青空 日葵「あおぞら ひまり」』

性別：女性 年齢：15歳 誕生日：9／16

血液型：B 身長：162.3cm 体重：57.7kg (B M

I 21.9 (適正体重)

性格：大人しい、優しい、両親想い、我慢強い、消極的

趣味・嗜好：読書、オカルト

疾病・既往歴：現在は特になし。幼児初期に喘息の罹患歴あり

得意科目：世界史、英語、情報

苦手科目：数学、理科、体育

中学時代：

友達は一人もおらず、屋上の階段裏や図書館の隅でいつも物静かに本を読んでいたとのこと。運動神経は良くなく、長距離走を除いて常に体育の授業では5段階評価中2と悪かった。教師の話では運動面だけで見るのであれば、評価は1にも等しいとの情報を得られている。

また中学2年生の時にいじめられた経歴があり。顔に青あざが発生し、両親が学校側に指摘するまで明るみにならなかった。このいじめに関しては教師を含め学校側も黙認していたとの情報が同級生の話から浮上している。また入院中のゴミ箱に破棄されていた千羽鶴の中身から死を示唆する内容も見られ、いじめはその後も陰湿な形状に変化して続いていた様子。

□ 『両親について』

父：『青空<sup>あおぞら</sup> 源太<sup>げんた</sup>』

警察庁に務める警察官。元軍人。陸上自衛官として従軍した経験があり、台湾危機の際には、沖縄県へ進行してきた中華連合から国民を守るために派遣されている。米連共同で民間人に危害を加えていた中華連合との交戦経験あり。

警察官としての現階級は警視長。これまでに表ざたになるような

犯罪歴はなく、裏のつながりも特に見つからず。緊急時を除き仕事とプライベートをしっかりと分ける質で、休日はよく 家族を連れて国内旅行に出かけていたとの記録あり。

最近の活躍は、テロリスト襲撃時には機動隊に混じって突入し、拳銃のみで6名のテロリストを無力化。また裏でノマドと内通、隠蔽工作を行っていた警察関係者を法の下で裁くなどの行動力を見せる。

正義感と行動力のある家族思いの父親であるようだ。

母：『青空<sup>あおぞら</sup> 八雲<sup>やくも</sup>』

元エンジニア、現専業主婦。機械整備が得意で、自力で故障した冷蔵庫や水道を修理するほどの腕利き。

夫である『青空 源太』とは、彼が自衛隊に所属していた頃。自衛隊車両が突然のエンストを引き起こし、自衛隊に所属する整備士も修理できないトラブルではあったが、偶然 通りがかった『青空 八雲』が修理したことをきっかけに知り合う。その後、交際に発展し、結婚した模様。

また『青空 日葵』が事件に巻き込まれてからというもの、精神状態が不安定となり家族には秘密でメンタルクリニックに通院している。『青空 日葵』が入院中、医師との会話から、彼女には『青空 日葵』が別人であるように感じているとの発言が多数 見受けられる。家族の前では気丈に振る舞っているようだが、ノイローゼの傾向が見受けられるとの診断結果が出ている。

双方の戸籍や親族を徹底的に洗いざらい調査するも、不審な点はなし。模範的で悪に手を染めたこともない善良な一般家庭である。

□『研修会場で所持していた【本】について』

テロリスト（東雲革命派）が占拠した際に、青空 日葵が屋上にて『魔族・魔獣言語で記載された本』を所持していたとの被害に遭った学生の1人から情報提供あり。

本人いわく、露店の古物商から購入したそうだが、詳細不明。要調査案件。

また話し掛けたとたん、その場から早急に立ち去ったそうだが、そ

の後の消息はトイレに入室し、12時間 トイレ内へ籠っていた様子が監視カメラ映像に記録に残されている。

本件は『ふうま小太郎』に調査を委任。内容の確認及び、可能であれば書物の入手予定。

□『テロリスト襲撃後の行動』

12時間の潜伏している間、自動小銃を所持した東雲革命派のテロリストがトイレ内部に立ち入った様子があるが、特にその時には発見されていない様子。但し、現場検証結果よりテロリストはトイレ内で乱射したようであったと記録にあり(彼女は「無傷」で潜り抜けている)。

その後、トイレから退室。非常階段でテロリスト3名を「返り討ち」にし、装備を剥ぎ取り、笑いながら屋上へ出る様子が記録として残されていた。

屋上では監視カメラのケーブルを切断し、物陰に隠れる様子が記録されている。また当時、監視カメラをハッキングしていた東雲革命派を煽る目的として、したり顔で微笑を浮かべウインクしながら投げキッスをしている様子が映し出されている。

屋上に上った直後、しきりに高層ビルから身を乗り出す様子が記録に残されている。(投身自殺を考えていた?)

対魔忍が屋上に到着。『井河アサギ』『井河さくら』『水城ゆきかぜ』推参。

15分ほどで展開する全テロリストを片付け、その様子を大型室外機の影から覗く様子が破壊し損ねていた監視カメラに映されていた。

その後、潜伏していたテロリストに人質にされる。

対魔忍が武器を捨てようとしたところで、錯乱した様子でテロリストに何かを叫ぶ。テロリストは一時的に怯むも『青空 日葵』の頭部に突き付けていた銃口を肩へ向けて一発発砲。負傷した腕とは反対の腕で、鹵獲した銃をゼロ距離で撃ち合い、昏倒。その隙に『井河さくら』が最後の東雲革命派の残党を刺殺。

『井河アサギ』が緊急手当てを行なうも状態の安定にはならず。『相

州 蛇子』の『癒しのタコ墨』を投与し一時的に症状を安定化させる。駆け付けたドクターへりで救急搬送となる。

のちの調査で『水城 ゆきかぜ』が『初対面であることは間違いだが、何処かで出会ったことがあるような気がする』と彼女について言及する様子があったと、帰還中の対魔忍同士の会話記録より確認される。

□『ギンピーギンピー』

彼女が発言した言葉。 “すり込む” と発言していたことから、何かの薬品と思われる。

この名称を持つ物体について検索をかけるも該当する結果はゼロ。のちの病院での事情聴取でこの名称について本人に直接、探りを入れるも記憶が混濁しており有益な情報を得られることはかなわず。(当初、錯乱しており適当な内容を口走った可能性が高いと調査部は考えている)

→それにしては、当時の事件状況をレコーダーで振り返ると 怒りに打ち震えながらも、極めて冷静に対象に恐怖を与えるような言葉を選んで恫喝していることが分析結果で判明。

□『特に気になること』 筆：井河アサギ

彼女の一人称は『私』であるが、テロリストに人質として取られた際。彼女は自分自身のことを流暢に『俺』と呼称する様子が見られた。のちの学校や両親への事情聴取では、乱暴な言葉遣いはおろか、彼女が自身を『俺』と呼称したことは1度たりともないことがわかつている。

経過観察を行った医師の診断では解離性人格障害の症状は見られていない。以前の性格から人が変わったような状況であるが、医師の判断としては一度、死に直面したことによる人間に見られる症状でもあるため、本件に魔族的要因が絡んでいるのかは不明。

また彼女は対魔忍である私達ですら一瞬、動揺するような揺さぶりをかけたのちにテロリストへ説得を試みた。この時、彼女は私たちの

ことを特殊部隊ではなく「対魔忍」と呼称している。

対魔忍は秘密組織だ。一般人の女子中学生が知り得る筈のないものだ。

ゴースト（死霊）やスピリット形態の妖魔の類が彼女に憑依している線で一通りの調査も行ったが、彼女は依然として人のままであることしかわからなかった。

そして今回の『八津 紫』の特性を見抜いたこと……。

現状。米連でも、中華連合でも、ノマドでも、魔族でも、何物にも属していないこの一般人について、私たちは早急に調査する必要がある。

### 3章 『日常と違和感』

## Episode 10 『welcome to 修羅 学園覇道ライフ』

入学してから早くも約1週間が経過した。

現状、私にとって最高に〈幸運〉で目標として達成できている嬉しい事柄は、『対魔忍の世界なのに、対魔忍とは一切関わらずに今のところ順調に五車学園で学生生活を満喫出来ている』ことだろう。

ま、学生生活と言っても、入学初日に起きた事件のせいで思い描くような2度目の学生生活は半分破綻してしまっているようなものだが……。

……

……

……

現状、私に直接話しかけてくるようなクラスメイトは、上原くんを除き存在しなくなってしまった。……興味はいまだに持たれている。……持たれているのだが……あくまでもこちらから直接話しかけるまでは、ずっと遠巻きから眺められている状態だ。幸いにもいじめられてはいないとは……思う。話しかければちゃんと返してくれるし、無視されているわけではない。ただ遠巻きから眺めてくる。……ただ、それだけ。

……それだけならまだしも、周囲の状況は私に注目を寄せているようであった。ここ約1週間。授業の合間や昼休みに別のクラスの生徒はおろか、中等部の生徒や、上級学年の生徒、教員までこぞって私を一目見にやってくるのだ。……窓の外を眺めるなり、『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』を読むなり、上原くんとかくだらない話を咲かせて、聞かない。気にしない。ドラゲナイするようにはしているが……見物にやってくる連中が大体クラスメイトに私の名を出して尋ねていることで、ようやく慣れてきた私の名前がカクテルパーティー効果によって嫌でも聞こえてくる。

現在、注目を浴びている件に関して。これは自意識過剰ではないと断言できる。

「……………なあ、青空さん…………。難しいことかもしれないけど、あんまり気にしない方がいいぜ？ その…………外の野次馬とかさ」

「…………人の噂も七十五日とも言いますしね。わかっています。…………ですが、噂には尾ひれはひれが付くものとはいえ…………『校長先生を人質に取って脅迫した』とか、『サッカーゴールを片手で持ち上げて紫先生と互角に渡り合った』とか、拳句の果てには『非常ベルを拳で連打して、非常用の無線機をマイク代わりに“ヘッドバンギング”しながらグロウルシャウトの利いたデスボイスをまき散らした』なんて噂が何故、立っているのでしょうか？ 最後の噂なんか妙に詳細過ぎて明らかにクラスメイトの誰かが漏らしたとしか考えられないのですが」

クラス内をぐるっと一見する。半数以上がこちらを見ている。見ているが、目があったとたんにみんな目を背けていく。

…………この前のアレは不可抗力だった。ああしなければ、私は今頃死んでいた。仕方なかったのに。みんななら、あの状況をどうしたの言うのだろうか…………そもそもとして、基礎能力を測るからと言って、教師が生徒に力比べを挑むとか、国体出場したことがある部活の洗礼ぐらいなものだろう。

…………これは、この世界では普通なことなのだろうか？ 建前では超科学がハッテンしています！ 魔族とか異種族がいるよ！ でも本音はパワーこそ力だよ！ を掲げているのだとすれば、とんでもない世界へ転移・転生してしまったものだ。力こそパワー！ 絶対的な力を持つ、強者だけが世界を牛耳るような世紀末世界なんて Fallout や北斗の拳でしか知らない。…………もうそんなことなら、水商売をしつつナニニシマスか？ というヌードル生成器や皇帝の足を絶対に刺すターバンのガキになるしかない。

「…………参考までにお聞きしたいのですが、紫先生と対峙することになった場合。上原くんなら私のような状況に陥ったら、どのように対処していましたか？」

「そうだなあ…………。俺だったら、たぶん泣きながら逃げてたと思う。」



だって青空さん、紫先生と対峙してどうだっ「ぶち殺されるかと思いましたが」

「……だろ？ あの人を1人でなんとかするのは無理だって……。でも、青空さんは1人で何とかしちやっただよなあ。あれは率直に言つて “すげえ” と思つた」

「青空さん、居るか？」

「お、ふうまー！ 青空さんなら、ここにいますぜ！」

そんな時、教室の入り口からふうま君がひよつこりと顔を覗かせる。今日は彼に、この五車町で最も巨大で学園に備え付けられている図書室へ連れて行つてもらおう予定なのだ。ついでにそのまま授業をサボる予定である。

「それじゃ、上原くん。また6限目ね」

「あれ？ 5限目は？」

「先生には、昼食が当たつてトイレで神を握つて祈つてるとでも言つておいて」

「わ、わかつたよ」

「授業のことで、わからないことがあつたら渡した資料も併用してみても。たぶん、あれがあれば教師の話も分かりやすくなると思うからね」

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』と『新クトゥルフ神話TRPG』の入ったカバンを持ち席を立て、上原くんは手を振る。

ふとここで気が付くことがある。私を覗きに來た女子生徒たちの大半の視線が、ふうま君へと移つてゐることだ。まあ、彼は身長も高いし美男であるとは思ふ。私も彼の顔は好みではある。上原くんには劣るが。

……健康的な肌の色に引き締まつた身体、澄ました顔。これは『ふうまファンクラブ』のような何かありそうな予感がする……。

「お待たせ」

「問題ない。図書室はこっちだ」

彼に連れられて教室を出る。余程、異色な組み合わせだからだろう

か。私とふうま君が他の生徒とすれ違うたびに全員が振り返っている。……異様な光景だ。

……だが私には一つの懸念が浮上した。これは私の憶測にしか過ぎないが、仮に『ふうまファンクラブ』が存在する場合、彼と二人で歩いているのをこれ以上見られれば、誰かしらから反感を買いかねないだろう。

そこで私が取った行動は――

「……何しているんだ？」

「気にしないで。諸事情でこうする必要はあるんです。気になるようなら、距離を取って頂いても構いません。しっかりと後ろからついていきます」

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』と『新クトゥルフ神話TRPG』を両手に抱え、カバンを頭に被ったのだった。blood<sup>ブラッド</sup>borne<sup>ボーン</sup>の暗くトロけた脳液を欲する『アデライン』スタイルである。

こんなこともあるのかと、カバンには穴をあけており、その隙間から周囲の様子は見渡せるように改造を施してある。

正直、バカみたいな行動だが、人気者のふうま君と歩いていた非常ベルを連打する女として他の生徒に記憶に残るぐらいなら、人気のふうま君と歩いていた頭部がカバンの異形頭としてちよつと話題になった方がマシであるし、私の非常ベル連打事件のうわさが霞めばいいと思っていた。

………

………

――図書室――

………

………

「ここが図書室だ」

「ありがとうございます。おかげでゆっくりと調べものができそうです」

周囲に誰も居ないことを確認してから頭部に被っていたカバンを

脱ぎ、ふうま君に頭を下げる。二酸化炭素で充満したカバンの湿度と温度により髪が若干肌にくっついてしまったが、手櫛で整えてクリアファイルを団扇のように扇いで自然乾燥を促す。

「ちなみに青空さんは、この学園の図書室でどんな本を読むつもりなんでしょう？」

「そうですね……ひとまず、一週間前にふうまさんから聞いた新クトゥルフ神話TRPGのルルブを探して読むつもりです」

「もうその書籍を持っているのに、同じ本を読むのか？」

「はい。私の持っているルルブは、発行年が古いものなので……もしも図書館に置かれているものが、現在のものよりも新しければルールを書き足そうかなーと思っています」

とは、彼には伝えたものの。実際には、この世界にある『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』と『新クトゥルフ神話TRPG』のルルブが、私が読んでいるものと同一のものであるか調査を行いたいのが事実だ。

ナイ牧師は、この書籍は私の説明書だと言っていた。既存の販売物と比較することで、何か新しい発見があるかもしれない。そう思ったのだ。

「そうか……あの。もしよかったら、一緒に読んでもいいか」「ごめんなさい。私、本を読むときは1人じゃないと落ち着かなくて……」

「……それは残念だ。本を借りるときは図書委員さんに色々聞いてみてください。短気だけど、きつと力になってくれると思うから」

そういつて彼と別れた。すまないな。この書物だけは他人に見られてはまずいのだ。

……『青空 日葵』の所有する書物は、いずれも他人に見られてはまずいものだけど……。

……

……

……

「……っ」

彼を見送った後、重厚な図書室の扉を開け中に入る。

そこは明らかに賑やかな教室からは一変して、無音と本を捲る音、そして油断をしていると風邪を引きそうなほどの図書室外との「温度差」に気が付ける。

建物の構造としては、4階の吹き抜け廊下が入り口から見え、図書室という閉鎖的空間であるにも関わらず、吹き抜けを使用した部屋のつくりを利用することで開放感があつた。膨大な本の量から図書館と呼んでしまっても差し支えがないほどに広く。これには匠もニツコリである。

初めて訪れる場所であるため、少しでもよいイメージを残そうと、まずは受付カウンターで軽い挨拶をする。内側に座る。〃このハゲ 図書委員〃  
〃ハゲ さんは私の事をジロリと睨むような怪訝な眼差しで見ても、こちらがこの前入学してきたばかりでシステムがわからないと伝えるとざっくりと説明してくれた。

さっそく本を探しに行こうとする私に図書委員さんは  
「非常ベルは、各階層の突き当りにあるが……火災時以外では押さな  
いでくれよ……」

すれ違ふ私へ向けて、ボソリと奴が呟いたのを私は聞き逃さなかつた。思わずこの発言に眉間にしわが寄る。緩やかに視線を図書委員さんに移し、一週間前の紫先生のような視線で睨みつけるも、あちら側もジロリとした敵意のある目で一瞥した後、本を読みに戻ってしまう。

「(このやろう……贅肉に消火器の粉を吹きかけて『ゆきだるま』にしてやろうか……ッ!)」

内心ではそんなことを思う。その反面、ここまで噂が広がっていることに驚愕する私が居た。やっぱ、グンマーの僻地(田舎)って怖いなど思いました。

——だが、悪夢はこれだけでは終わらなかつた。

……翌日、私の噂が、頭にカバンを被り、ヘッドバンギング ヘドバンして、非常ベルを連打して、デスボイスで紫先生を脅した生徒へと噂が魔改造されるとは……この時の私は予想だにもしていなかつた……。

## Episode 1 『居るはずがないモノ』

当初の目的は達成した。

結論から。私がああ男……。ナイ牧師から説明書として受け取った

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』と『新クトウルフ神話TRPG』は、この世界で販売されている『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』と『新クトウルフ神話TRPG』とは別物だ。

説明書として受け渡された書物には魔術や選択ルールなどの記載が乗っているが、私がかれまでに遭遇したことのある神話生物の類の情報が一切記載されておらず、販売・配布されているルルブ一式には、説明書で記載されている魔術の記載が情報が大幅に異なり、神話生物らしきエネミーデータが記載されていた。

このことから私の説明書に記載されている「魔術」は、2週間から12週間の訓練次第で本当に扱えるようになるかもしれない。しかし、魔術の多用は狂気への大いなる一歩となりかねない……。何よりも対魔忍に目を付けられるきつかけになり得るかもしれない。私はこの世界では対魔忍と関わらず、ごく普通の生活をしたいのだ。だが、対魔忍に目をつけられておらずとも、状況によっては、オカルトや呪法、禁術等に頼らずに一般的な生活なんて、やっぱりできないのかもしれない……。どうしても使用するというのなら慎重に運用しなくては。

その他の情報として、この世界ではクトウルフ神話TRPGには『サプリメント』なるTRPGを楽しむうえでの拡張情報も販売しているようであり、絶版になる前に通販で購入してみるのも悪くはないかもしれないということぐらいだろうか。

気が付けば、6限目も『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』と『新クトウルフ神話TRPG』の相違点の解析に時間を当ててしまっていた。

本当にこれらのルルブは、真面目に解説を始めると時間が消し飛ぶ

のが早い。

「(6限目は古文だったっけ……上原くんに学んだ教科書の範囲を覚えてもらって勉強すればいいか……)……っと! ごめんなさい!」  
本を元の場所に戻し、出口へ向かおうと振り返った直後、誰かとぶつかった。ような気がし、反射的に謝る。しかし、謝罪したところに誰かがいる様子はなく廊下の突き当りが視界として映る。

今 確かに、誰かとぶつかったような気がしたのだが……。首を傾げつつ、図書室を後にする。

……

……

……

帰りのホームルームを済ませ、今日も上原くん、ふうま君、蛇子ちゃんと一緒に帰路につく。今日も昨日と変わらない他愛もない日常的な会話をしながらの下校。

「結局、6限目も帰ってこなかったよな……そこまで熱中できる本だったのか?」

「はい。なんといえればいいでしょうか。読めば読むほど、物語に没入できると言いますか……賢くなれるような気がすると言いますか……とても楽しくて……」

「青空さんが、そこまで言うなら俺も読んでみっかなー」

「おっ! 上原くんもこっちの道に来ますか!? いいですよ! その気なら勉強以上に手取り足取りお手伝いします! 世界を共通して、皆で世界を広げるゲーム。それがTRPG……TRPGはいいぞ……いいぞ……」

「日葵ちゃんって、この手の話になると目がいつも以上にキラキラするよね。こうも楽しそうにされると蛇子も気になっちゃうな!」  
「友達といつも以上に楽しい時間を過ごせて、なおかつ年齢層関係なくみんなで遊べるゲームですからね! ついでに英語と地理、歴史、法律、1920sアメリカ——米連に詳しくなれるっていう……。蛇子ちゃんも気になるようでしたら、是非に!是非に! ふうま君はどうです? 7版を読んだことがあるんですよね!」

「ああ。だけど読んだのは、あくまでも何気なく流し読みだったからさ……。でも鹿之助と蛇子がやるなら、俺も混ぜて欲しいな」

そんな会話をしながら下校する。本当に何気ない日常。

だが、そんな平和でほのぼのとした空気を粉碎するかのような凍てつく気配に、思わず我へと引き戻される。それは、3人ともつと会話をしたくてちよつとだけ遠回りしながら自宅に帰るため十字路を通過した瞬間の出来事だった。私の視界の端に……。何かが映る。

——それは、脳裏に染み付いた忌まわしい記憶と重なる。全身の毛が逆立ち、脂汗がじんわりと染み出し、無意識に歯を力強く噛みしめてしまう。

……白くブヨブヨとした肉の塊といくつもの返しが付いた白い肉に融合した凶悪な槍、頭部にはピンク色の喉ちんこが大量に付いたような器官を持つ怪物。

それが今、視界の端に映ったような気がした。

他の3人がTRPGについて盛り上がりつつある中、私だけが踵きびすを返し、そんなはずはないと十字路の先を見つめる。

「あれ？ 日葵ちゃん？」

「おいおい青空さん。そっちは蛇子ちん家とは逆だぞー？」

「……」

2人の声が、どこか遠くでの呼び声……。空気の膜を張った先に存在するかのよう聞こえる。

……そんなはずはない。あれは私の前世で『対魔忍』の認識が“L I L I T H ソフトが開発したマニアックな凌辱ハードポルノゲーム”であるように、あれはこの世界では架空の神話。TRPGに登場する……ハワード・フィリップス・ラヴクラフトが生み出した、ただの“創造物”にしかすぎない……。ここにいる訳がないのだ。

「……おい。大丈夫か？ 顔が真っ青だぞー？」

肩に衝撃が走り我に返る。半ば驚きながら、肩の衝撃の方を見ればふうま君が私の肩に手を置いている。

「……あ、ごめん。……。今、そこに……。昔の知人が居た様な気がして」

凍てつくような気配のした十字路に視線を向ける。……気のせいだったようだ。あれは白い燃えるゴミ袋と使用済みの割れた蛍光灯だった。

そう……アレがいるはずはないのだ。……絶対に。

「……もしかして、何か面倒な知人なのか？」

「まさか、ストーカーか!? だ、大丈夫だ！ 今日も、これからも俺達が付いているからな！ 皆で居れば昔のストーカーなんて、怖くないぜ！」

“面倒な知人”という言葉に上原くんと蛇子ちゃんも、私の元に駆け寄り十字路の先を見据える。

……あれは最近の学校生活による疲労が蓄積されて見えただけの幻覚。そうに違いない。

そう言い聞かせながらも、なぜか身体の震えが止まらない。脳裏で“あの惨状”がフラッシュバックする。フラッシュバックした光景が、目の前の3人に重なる。

——……駄目だ。それだけは避けなければならない。

「……心配かけてごめんね。でも、見間違いだし、大丈夫だから……」  
「ほ、本当か……? でも、お、おい！ すごい震えだぞ！ なあ、ふうま。蛇子ん家 経由したら今日は家まで送ってやろうぜ。俺、このままじゃ不安だよ」

「当然だ。青空さん、歩けるか? もし震えが辛いなら俺が背負うぞ」  
「大丈夫。本当にごめん。大丈夫だから……」

目を瞑り、掌をこめかみに添えて、大きく深呼吸を5度繰り返す。脳に酸素を行き渡らせ、変に高ぶってしまった神経を落ち着かせる。次に目を開いたときには震えも止まり、異様な興奮も収まっていた。

「日葵ちゃん……どう?」

「……うん。大丈夫。ありがとう、ごめん……皆は優しいね。アレは居るはずがないモノだから……もう大丈夫だよ。さてと。どこまで話しましたっけ?」

……あれは3人に言ったものか、それとも自分に言い聞かせたもの



かはわからない。

だけど万が一を考え、このままではいけないことは理解してもしる。……脳裏で魔術の使用がちらつく。駄目だ。私は普通に居たいのだ。魔術に頼ったカルティストの末路なんて、今まで腐るほど見てきたはずだ……。

あの後、3人と気を取りなおした何気ない会話は続いたが、頭の中は常に上の空だった。

## Episode 12 『筋肉は裏切らない』

ある日の朝。普段より、かなり早めに五車学園に到着する。

入学2日目から通学を共にしている3人には、今日だけは一足先に登校することは告げてある。この前の幻覚が心配で今日の登校時間も私に合わせてくれるとの嬉しい進言もあったが、流石にそこまで3人に護ってもらうのは悪い。私は人生2回目なのだ。彼等を護るぐらいの心持ちでなければ、また同じことの繰り返しになるのは間違いない。

それにアレは、私が疲労で生み出した幻覚のはず。『居るはずがないモノ』だと自分に言い聞かせる。

まだ朝練の部活動の生徒も来ていない時間帯だが、何人かの教師は出勤していることを事前にクラスメイトから話を聞いている。

教室に荷物を置き、職員室にてノックをして入室する。それから目的の教師のもとまで一直線で向かった。

……

……

…

「おはようございます。ムラサキ紫先生」

「青空か。おはよう」

目的は紫先生だった。先生は貴婦人が掛けるような細かいチエーン付きの眼鏡に新しいジャージを羽織って、新聞を読みながらコーヒを啜っていた。

私が声をかけると約2週間前、“あんなこと”があつたにもかかわらず至って普通の対応で、私の方を振り向き挨拶をかえしてくれた。

「……その、まずは改めて先生に謝りたくて……。……約2週間前。宝物であるジャージの破壊と消火器の粉塗れにしてしまい、申し訳ございませんでした」

「ああ、その件か。あれはお前がどこまで出来るか確認したい意図がこちらにあった。別に謝る必要はない。お前は良く立ち回ったな。見事だった」

授業中には生徒に喝を入れるばかりで、滅多に笑うこともない紫先生がニコリと微笑んで見せる。

私はまだ『ニコニコ わくわく五車学園ライフ』をぶち壊された憤りが募っていたままであるが、今の私は見た目は子供。頭脳は大人だ。私は許そう。だが、この笑顔がお前を許すかな!? ……なんて、某キリストのサブマシンガン乱射発言を試してみたただけです。はい。

こちらはニコニコ学園ライフ(約3年)、紫先生は宝物のジャージと消火栓液を浴びたという痛み分けとして、紫先生の寛大な対応に感謝をしつつ、こちらも和解の意味を込めた笑顔で返す。

……でも やっぱり、私の方が損害大きくなあひ?

「それで、今日はその謝罪以外の要件で来たんだらう?」

「はい。その……お聞きしたいこととお願ひしたいことがあつて……」

「何でも言ってみろ、出来ることなら手伝おう」

『……ん? 今なんでもつて?』と喉の奥から出てきてしまいそうな言葉が沸き上がるが、今日はギャグを飛ばしに来たわけじゃないので、前世のネタ発言をぐつとこころえる。

「先生は、その……基礎能力を凶る目的で戦闘を仕掛けましたが……普段の体育の授業でも、戦闘訓練などを行われていらつしやるのでしようか?」

「もし、『そうだ』と言つたら?」

「であれば、もし、先生が面倒でなければ、個人的に戦闘技術を授けて頂きたいです」

「……」

しばらくの沈黙。紫先生は、赤く燃えながらもほんのり桃色が混じった瞳で私の緑色の光彩を捉える。その表情は実に真剣な眼差しだ。

「私の指導はハードだが、その覚悟はあるのか」

「はい」

問いかけの答えに迷いはなかった。

どうも昨日の幻覚が、ただの幻覚には思えない、拭いきれない不安があった。魔術を必要最低限にしか使用しないという選択をした私には、これ以外に強くなる方法はない。……そう。筋肉だ。

最終的に落ち着いた解決策が脳筋であることに残念がるものもあるかもしれないが……私には、この五車学園の教師に助けを借りずとも科学的武器を作り出すだけの知識と技術は所有しているつもりだ。それに私がここで科学兵器を作るための知識を教えて欲しいなどと言及しても、鼻で嗤われて初歩的な知識しか教えてもらえそうにない。精々、アルコールランプを火炎瓶の替わりに使える程度の知識にしかならないだろう。素人火炎瓶め。

しかし、この学校には入学初日の一般人の女子学生に「基礎能力を  
図る目的」という口実のもと、戦闘を始めてしまうような脳筋<sup>八</sup>☆筋肉<sup>紫</sup>  
教師<sup>先生</sup>が存在する。戦闘や筋肉に関する訓練強化だけは信頼できると  
確信を得ていたことも私の中では大きかった。

「よし、わかった。いいだろう。特別な訓練をつけてやる」

「……ありがとうございます！」

「だが青空。まず、お前に必要なのは基礎的な体力だ。立ち回りはこの前の基礎能力試験で、それなりに機転が利くことがわかった。並大抵の不審者であれば襲われても太刀打ちできるだろう。だが魔族には立ち回りの技術だけで勝つのはまず無理だ。当然、基礎的な体力や筋力が必要な時もある。だから、ほら……」

そういつて紫先生は、自身のロッカーからダンベルを取り出す。カウインターが付いており、何回持ち上げたかわかるタイプのものようだ。

「重さは……30、15kgぐらいでいいだろう。これを授業の合間で使用するように。今日の授業までには、お前用の筋トレメニューを考えておく」

「よろしく願います……っ」

手渡されたダンベルはずっしりと重く、片手で受け取ろうとしたそれをすぐさま両手で持ち上げる。今の私には両手で何とか持ち上げられるレベルだ。



明日か、夕方には筋肉痛がやってきて……明後日には治ってるから……」

「……いいーいな♪ いいなー♪ 若いーって良いな♪」

「日葵ちゃん、虚ろな目で歌い始めちゃったけど……これ大丈夫なの？ この前の件もあるし……」ヒソヒソ……

新しい世界に キラキラ未来♪ ザエールの向こう側 世界の真実を 知らないんだろな

♪ 「いや……これは俺に言われたってよお……」ヒソヒソ……

今日は筋トレ♪ 明日は脳トレ♪ デンデン♪ ……デデンデンデ

デン♪ デンデンデン♪ ポア♪

「……上原くん……」

「……な、なんだ？」

「ちよつと寝ます……。……授業になったら起こして」

「お、おう……」

3人の友人が見守る中、私はルルブを枕に夢の中にダイブするのだった……

……

——時刻は午後。体育の授業——

……

半分死んだ魚のような濁った目で紫先生の授業に出る。

「なるほど。186回か」

……完全にペース配分を見誤った。

拷問ムーン狂いの異常嗜虐者ヒートに身体をズタズタにされる前の身体のノリで筋トレをしたのだが、先にこの身体の方が持たなかった。私がクトウルフ神話事件関連の事件に巻き込まれる以前よりもこの身体は貧弱であること、もしも仮に。この状態で 私が “幻覚” として見てしまった拷問狂いの異常嗜虐者と対峙しても一方的な蹂躪……最終的には拷問を受けることになるだろう。

「青空は、引き続きバーベルを持って校庭を5周ランニングだ」

「でも、先生……他のみんなのように……私もあつちの運動は……？」  
現在、私を除く他のクラスメイトは、五車学園の地下に存在する広大なバーチャルシミュレーターのような施設にて、ハードなアスレチックのような構造の舞台上で、全力での幅跳びやロッククライミングを行っている。その中には上原くんの姿もあり、彼は最後尾でなんとか食らいついている様子だ。

しかし “向こう側” でも “こちら側” が見ているのがわかるのか、こつちの様子に気が付くと高台に登り切った後に片腕で汗を拭って手を振ってくれる。こちらも、それに対して振り返す。

「……アレは青空にはまだ早い。言っただろう。お前には基礎体力が足りないよ。それにそんなヘトヘトな状態で参加しても何もできないのが関の山だ」

「はえ……」

「そして、これが今後の基礎体力向上のためのお前専用のメニューだ」

「……ありがとうございます……」

「……。……相州から少しばかり事情は聞いた。近頃は、魔族が関連していると思われる不審な事件も多い。これらも必ず相州達と一緒に下校してから、このメニューを家でやるようにな」

「……！ はい！」

蛇子ちゃんの優しさに口元を緩ませながら、大きな返事を返す。情けない。情けないが嬉しい。

それから一枚の金属板：タブレットが渡される。内容としては、腕立て伏せ、腹筋、スクワット、背筋上げ、ダンベルプレスをそれぞれ100回ずつと必ず開始と終了時にストレッチをやるというものだ。更にタブレットの前で筋トレをすることで、自動でカウントを入れてくれるらしい。この身体の負荷状態を考えるにはちょうど良い筋トレ内容なのかもしれない。

……それにしても、生徒に高価なタブレットをポイポイ渡してしまうような小中高一貫の学校がいまだに “国立学校” であることが信じられない。そもそも、前世では国立の学校でそんな学校は見たことも聞いたこともない。完全な設備にしろ、機材にしろ、学生の幅

にしろ……とつくに私立学校の域に達している。こんな学校、世間的に見たらこぞって学生が通学したくなるような学園であろうに……。「おい。何をボヤボヤしている！ わかったら、走り込みに行け！」  
「は、はいー！」

……今は、そんなことを気にする必要はないか。

さあ、私は私で頑張ろう！ 筋肉は裏切らない！ ヨシツ!!!

……

……

——放課後 下校——

……

……

……この後の帰宅時は既に身動きが取れないほどの筋肉痛により。ふうま君に背負ってもらい。上原くんは私の説明書が詰まったカバンを持ってもらい。蛇子ちゃんにはバーベルを持ってもらって帰ることになるのだった。

すごいなあ……蛇子ちゃん。それを片手で、軽々と持ち上げちゃうの……？ 私にはまだ無理だよ……。あつあつあつ……そんなペン回しみたいにくるくと……。

ふうま君、私をしつかりと支えて安定しているのは、筋肉痛に響かなくてすごくいなのですが……そこ……私のお尻を鷲掴みにしています。

上原くんは、その……がんばって。



Episode 13 『休日の自宅での幸せな日常』

吉報【昨日のような一切の筋肉痛が発生してない件について】

昨日はかなりの無茶をし過ぎたはずだったのに……翌朝ベッドから起き上がれない……なんてことはなく、普通に起き上がり、今、母親の作った朝食を食べている。若エっていいな!!!（2度目）

今日の朝食のメニューは、ごはんと半熟の目玉焼きに焦げめ付きのベーコン、レタスとオニオンの混合サラダ、わかめと豆腐入りの味噌汁だった。

なんとというか……人にご飯を作ってもらえて、それを食べる、しかも美味しいというのはなんと幸せなのだろうか。昨日、今日とて頑張ってもらった筋肉たちも喜んでいるに違いないし、私の脳と舌は確実に悦んでいるのは確かだ。かつての記憶である母親の味とは、大きくかけ離れているものの……肉体のほうは日葵の母親の味を覚えているのだろう。五臓六腑にじんわりと染み渡るような奥深い……涙が出てしまいそうになるような味をしている。

「うくん!!! 今日も美味しい!」

「……! ……」

「いつも美味しいご飯を作ってくれてありがとう! お母さん!」

「……え、ええ……」

幸いにも今日は休日で、学校の授業はない。

学校自体は部活動も管轄しているため、開校しているようだが私には関係のないことだった。

母親は専業主婦の為、今もこうして家事を生業として私たちの日常生活を支えるために動いている。

父親は、今日は休日出勤で家をあけていた。プライベートと仕事はきっちり分けるタイプなのだが、出勤していることを鑑みるに余程重大な事件なのだろう。詳細はわからないが、何でも隣のまえさき市で事件が起こったみたいだった。

五車町での仕事……というよりも、隣町に出張している資料の管理や対策本部の指揮、ハンコを押すだけの簡単だが面倒な仕事があるらしい。……国家公務員である警察官というのも大変そうだ。

私も父親と同じように仕事とプライベートはきっちり分けて、プライベートを充実できるような職業に就きたいと思っているが……今回はどんな職業に就こうかまだ決めあぐねているような状態である。ひとまずは現状の財力から大学へは進学するとして、その後は可能な限り、対魔忍なんかと関わらないような職種につきたい。となると、該当する職業は、医者、エンジニア、司書、作家、ミュージシャンぐらいだろうか。あ……でもミュージシャンはやっぱなし。デビューするため、スポンサーのおちんぼをしゃぶるのとかやりたくないし。

もうちよつと学校に慣れてきたらアルバイトも始めてみようと思うが……やるとしたら手軽に趣味の範疇で稼げる株とかFXかな。資産に関しては過剰に持っていたとしても困ることと言えば、納税と変な奴に絡まれることが多くなるぐらいだ。学校の友達とも遊ぶ時間も確保したい。とにかくやりたいことが多すぎて困る。今はそんな状況だ。

「……日葵。ちよつといい？」

そんな将来の事やアルバイトの事を考えながら、食べ終わった食器を流し台で洗い、砂糖とお湯を1.5の分量で制作した紅茶を片手に、父親が忘れて行った新聞紙を手にとって、株価を確認している私に母親が話しかけてくる。

「ん？ どうしたのお母さん」

「今日はよく楽しそうにお話してくれる鹿之助ちゃんとか、ふうま君とか、蛇子ちゃんとかと……どこかお出かけする予定とかあるのかしら？」

「ん、ないよ。今日の日程は筋トレをしたら、グンマーの僻地ニュータウン（笑）クソしょぼホームセンター五車店へ、DIY用の工具と材料を買い物しに行こうと思っていたぐらい」

「……そっか。それじゃあ、先にちよつと手伝ってほしいことがある

のだけどお願いしてもいいかしら?」

目の前の母親から、どこかよそよそしい態度に引つ掛かりを覚えるが、無理もない。

『青空 日葵』の中身は『釘貫 神葬』という別人で、母親の実娘である『青空 日葵』ではないのだから。……それでも私はなるべく正面の女を實の母親と思って接してはいる。

退院直後こそは『青空 日葵』の趣味・嗜好に合わせようとは努力をしたが、根本から無理な話だった。個人的には前世で顕著に見られていたオカルト系の道具とか、それがレプリカや偽物だとしても魔術的な書物は最低限・必要以上に見たくはないものだったし。『青空 日葵』の私物は処分こそしていないが、大方はダンボールの中に詰め込んで屋根裏部屋に収納、一部は庭の地中に埋めて保管している。

結局、『青空 日葵』というよりは『釘貫 神葬』の要素があまりにも多すぎるのだろう。だから『日葵』の母親はどこか、以前の「日葵」と「私」との違いに戸惑い、娘に遠慮しているようなよそよそしさなのだ。

「もちろん!」

「……そ。それじゃあ、準備が出来たらガレージに来てくれる? お母さんも準備しておくから、できるだけ動きやすい服装でね」

「うん!」

出来る限り威嚇な意味を持たない笑顔を母親に向ける。だが、彼女の母親の表情はどこか曇ったままだった。

……

……

……

動きやすい服装の指定があったため、学校の冬用ジャージに着替え、いくつかの髪留めを手にして、ガレージに赴く。

我が家のガレージは半分地下に埋まっているのだが、この五車町には氾濫を起こしてしまうような増水する川もなければ、土砂災害を引き起こすような山もない。内陸部ということもあり、当然 津波の心配もない。地盤も非常に安定しており、震災大国の日本では珍しい安

全な居住スペースとなっている。

防災オタクには、のどから手が出るほどに魅力的な立地だ。

ただ……問題として挙げるならば、ニュータウンを謳っている割には魅力的なものが学校しかないのはどうかと思う。入院していた病院でこの五車町について検索しても簡易的なホームページしか出て来ないし、その肝心なホームページも全く見つからないような場所に隠れて……ほぼ隠されているような状態で見つかったし。深夜にテレビはやってないし、田舎だから虫の存在やカエルの鳴き声、自然の環境音が都会と比べて騒々しい。……緑が豊かであることの象徴でもあるが……慣れるまでが辛かった。

小中高の学生の憩いの場もジャスコイオンではなく、まさかの稲毛屋という駄菓子屋ぐらいだ。商店街なる店が未だ最大勢力なのも珍しすぎる。時代は大正、昭和を終えて、平成、令和、その次々世代に来ているにもかかわらず……だ。

……それにしても。入学初日の下校の際に立ち寄った稲毛屋のソフトクリームを食べられなかったのは、すこし心残りであり、良き思い出である。

蛇子ちゃんが私に1つ奢ってくれようとしたのだが、財布から小銭を取り出そうとしたとき、手が滑って地面に落ちて転がった小銭はそのまま道路の排水溝の中に吸い込まれてしまったのだ。そんな不運な出来事のあとに、全員が財布からそれぞれ小銭を出して私にソフトクリームを奢ってくれようとしたときには、流石に悪いと思って断ったのだが……。あの光景を思い出すと、全員の慌てっぷりと捕まえようとするも逃げていく小銭が器用に避けて行った様子が面白くって思い出し笑いがこみあげてしまう。

それにしても、聞くところによると稲毛屋のソフトクリームは五車学園内で賭け事に用いられるほど、あらゆる学生達をメロメロにするほど魅了しているものという話を小耳に挟んだ。……たかがソフトクリームで、そんな賭け事に用いられるソフトクリームにはより興味が湧いた半面、恐怖も覚える。稲毛屋の店主である稲毛婆さんにはこんな思考を張り巡らせていることについて悪いとは思うけど……そ

のソフトクリーム。中毒性の強いコカインとか混じってるヤベー食べ物じゃないよね？

とまあ、五車町と稲毛屋での事件のことはさておき、準備を整えガレージに入った。ガレージには職人用のズボン履き、タンクトップ姿の母親が立っていた。おっさんの思考だが、将来 私の胸は大きくなる確率が高いと母親を見て思う。よい巨乳だ。祖母達には会ったことは無いが、写真からの情報として彼女等も巨乳なので隔世遺伝的な心配はいらないだろう。

そして、そんな巨乳なんかよりも私の好奇心と探求心を刺激されるものが母親の背後に駐車されている。それは、恐らくアメリカ……この世界では米連べいれんと呼ばれる国家から購入したであろうHMMWV……ハンヴィーの存在だ。これも、いつ見ても良い車だ。のつぺりとしているが、角ばった武骨なデザインに、サンドベージュの単色、巨大なタイヤ、ほればれする装甲……。素晴らしい。これでかなり旧式の装甲車とされているのだから、よほど新型の装甲車は私のトキメキを刺激するものなのだろう。

「日葵には、ちよつと整備の手伝いをしてもらいたいんだけど……」

「もちろん！ そのために来たんだから！」

「そ、それじゃ……取ってほしい工具とかいうから、それを取って……」

「もちろん!!! 何なら整備も手伝うよ！」

「え、ええ……あと機材も——」

「ももちろん!!! 必要なものがあつたら言つてね！ 『初心者でもわかる自動車整備に使用される工具・機材の名称の書』のおかげで大体わかるから!!!」

ああ〜 たまらねえぜ。

母親に指定された機材を、自分でもわかるほどに顔を蕩けさせた笑顔で渡していく。時には車体の下に潜り込んで一緒に整備したり……。こうして平和的に機械を弄ってるだけでも、幸せ過ぎてオーガズムに達せる。——アツアツアツ♡♡♡ もう、顔中幸せまみれや。こんな幸せが一生続けば私の人生はバラ色で間違いはない。

ああ〜　こころがびよんぴよんするんじゃ〜!!!

んはアーツ！　いいじゃない！　いいじゃない！　いいじゃない！　　こういうのでいいんだよ。　こういう日常で！

世間の影では対魔忍が世界を護っているらしいけど、そんな荒事から離れて私は何気ない日常を謳歌したいんだ！　世界の危機なんて解決できる奴が介入すればいい。　神話生物なんて存在しない世界で、一般人に転生した私がやるようなことじゃない。

前世で私は　　“すごく”　　頑張った。　それはもう本当にすごく。　だから人生の最後は散々だったけど、この人生では好きなだけ羽休めをして一般人として生活したいのだ。

だけど、腐つても対魔忍の世界線。　いざというときに火の粉が降りかかってきたとき、自分や周囲の人を護れるだけの力は必要だとは思っている。

だから、ある程度訓練はするが、『絶対、対魔忍なんかになつたりはしない！（キツ）』

ま、こんなクソザコ田舎に身を潜められている間は、対魔忍の誘いなんか来ないだろう！　私の一般人として生活するという未来は最高に輝いている！　ガハハ！

## Episode 14 『脅威の身内の洞察眼』

「……今日はこんなところかしらね……」

ハンヴィーの整備もひと段落つき、物品を片付け始める。時刻としては10時37分を指していた。丁度、今から昼食を食べ始めて午後から、残念なホームセンター 五車店に行けば6時間ぐらいは材料と工具の購入に時間をかなり使うことができるだろう。彼女も私の予定を踏まえた上で自動車整備を行ってくれたようだ。これは非常に嬉しい。

……いつかは私もこの肉体で大人になる日、18歳になる日がいずれやってくる。

その時は、この自家用車で日本の果てまで旅行するつもりだ。それに今の友人たちとの関係が続けば、彼等も誘って旅行するのも悪くはないだろう。

「……ねえ」

「ん？」

そんな想像を膨らませニヤけている私へ、使用した物品を片付け終わらせた母親がガレージ奥から姿を現わした。

屋内に続く扉の鍵を閉めてから、レンチを片手に私の事を見据える。

「——あなたは『誰』なの？」

「……………ん……………？　ん……………っ!？」

想定も予想もしていなかった思わぬ質問に思わずたじろぐ。

いつかは感づかれるだろうし、追求されるとも思っていた。でも今とは思っていないなかったし、前世では私や特別な人間を除いた存在は、みんな鈍感で世界ヴェールをはぎ取られた世界の真実も知らないNPC凡人ばかりであったことから、こちらの想定よりもあきらかに早い段階で私の正体に関する核心を突くこの質問には明らかな動揺を見せてしまった。

「……………」

「……………だ、誰って…。ひ、ひまりだけど……………？」

辛うじて、どもりながらも絞り出した言葉は、酷く怯えているかの様な、何とも無様な声色だった。

「嘘」

秒で看破される。

逃げることもできない。ここではぐらかして逃げてしまうのは、今後の私にとって必ず不利益が生じるし、自分が『青空 日葵』ではないことを裏付ける証拠にもなってしまう。

「……………以前の日葵はそんな子じゃなかった。私の知っている日葵は、私のご飯を美味しいって言ったことはなかったし、食器を自分で片付けたこともない。ろくに家事や私の手伝いをしたこともない。自動車の整備の手伝いなんてもつてのほか。新聞で株価を見るようなこともしない。人付き合いも下手で、学校ではうまくいっているような嘘をつく子だったけど……………あの子だった。……………もう一度『だけ』優



しく聞いてあげるわね。あなたは「誰」なの？」

マジかよ。新聞の下りは確かにこれからFXや株に手を出そうとしている『釘貫 神葬』の部分だけど……………マジかよ。日葵、お前……………私の転生前、お前……………そんな子だったの……………？ 学力と運動神経は平均以下、家では引き籠り<sup>ヒツ</sup>、趣味はオカルト少女、生活力は皆無、おまけの陰キャの5属性を制覇してたのか……………？ マジかよ……………。

ちよつと……………。ちよつとどころじゃない、かなり。かなりの衝撃を受けたが、今は衝撃を受けている場合じゃない。母さんの……………日葵の母親のレンチを握る手が力強くなっている。私に向ける表情も……………

……………ああ、この表情はよく知っている。

自分の理解の及ばない存在が目の前にいて、恐怖で怯えている顔だ。

「……………だから日葵だつて——」

「違うっ！ あなたは日葵なんかじゃないツ!!」

壁が揺れたように感じるほどの迫真極まる絶叫が地下をこだまする。

……………ここが地下でよかつた。これがリビングだったら、確実に声が外に漏れていただろう。だが、それは恐らく彼女も同じことを考えて私をここに連れてきた可能性が高い。

片目をつぶり、もう一方の片目はレンチからは決して目を離さず後頭部をかく。どう説明してこの場を切り抜けるべきか……………。

彼女は、今すぐにもその手に持っているレンチで殴りかかりに来そうな勢いで 私を問い詰め続けている。今の後頭部を搔く仕草も、落ち着<sup>深</sup>くために起<sup>呼</sup>こす行動も、リラックス<sup>音楽を聴くこと</sup>の仕方も……………新品の牛乳パックの注ぎ方や、なくなつたトレットペーパーを付け替える行動さえも「以前の私」とは違うと全指摘・全否定された。

……………戦闘になつた場合。素人によるレンチでの殴打など〈応戦〉や〈回避〉は共に容易ではあるだろうが……………。……………〈応戦〉をすれば関係が完全に崩れるのは目に見えているし、〈回避〉を行えば今度は『日葵

はそんな運動神経がいいわけがない』などと更に私が『別人である』という確信を深めてしまいかねない。……もう既に得物を向けられている時点で、家族関係は半壊しかけているとは思いますが、私は完全に崩壊してしまうことは望んではない。

いやいやいや、今後の人間関係を冷静に分析している場合じゃない。そう。考えろ……。考えるんだ……。この状況を打開する策を……。

自己中心的な意見となってしまうが、私がせめて18歳になってこの家を出るか、株で一儲けして、年末の確定申告を1人で処理できるようになるまでは、何としてでもこの家を追い出されるわけにはいかないし、今回の一家離散の事件がきっかけで対魔忍どもに目を付けられるかもしれない。……。それだけは避けなければならぬ。

それに外部には対魔忍やら、魔族やらが蔓延っている世界なのに財力も知識も劣っている存在わたしが平和な人生を歩めるわけがない。この世界は、ただでさえ女性という時点で生きにくい世の中なのだから。

「ま、待ってよ……。落ち着いて……」

「落ち着けるわけがないでしょっ！ 目の前にいる存在が日葵の姿をしているだけの怪物かもしれないの!!! 私……っ！ 私の日葵をどこへやったのっ!!!」

「私は日葵だよ……。？ だから、まずはそのレンチを置いて話し合おうよ……。ね？ 流星にそんなので殴られたら……。私、一発で死んじやうよ……」

……。正直なところ、一撃は耐えられるだろう。でも次は耐えられない自信しかない。いくら私の説明書に『新クトウルフ神話TRPG』116頁『ゼロ耐久力の効果』の記述——重症化せずに気絶するだけの効果があるとしても、気絶の状態トドメの一撃を貰えばそれは

『死』だ——

いや。『死』を迎えられればまだ良い死に方なのかもしれない。意識不明の状態瞬間によっては完全な意識消失とはならず『新クトウルフ神話TRPG』の117頁『意識不明と死』まで陥らせられて……。それこそ、対魔忍とか……。何か魔族を研究している機関

や組織に送られてしまうかもしれない。

こんな世界だ。あり得ない話ではないだろう。

「ええ、そうね。日葵だったら死んじゃうわよね……っ！　でも、今、私の目前にいるのは怪物よ！　そうやって油断させて、いい子を演じて！　最後は仲良く親子丼つてつもりなんでしょ！　この魔族！」

「ん、ん、っ……」

『親子丼』というそのサイコパス級ネーミングセンスを久方ぶりに耳にして、頭の中が大草原でサバンナでサンバ☆サンバしそうだが、今噛つたら確実に終わるるふっ……。……終わるため、吊り上がりそうになった口角を無理やり下に引き下げ上下の唇を噛みしめて堪えた。堪えている。それから、得物を片手に殴る気マンマンで　じりじりと歩み寄ってくる母親に、焦りと恐怖が混じったかのような顔を向けてじりじりと後ずさる。

「ま、っ……ん、……まって！　本当に待って！　なんでそう思うの！　これ以上はお互いに引き返せなくなっちゃうよ！　せめて！　せめて……！　痛恨の一撃を放ってくる前に、『私が魔族だって、そう思う理由』を教えて！」

「わかってるくせに!!!　これ以上、あの子の顔で！　あの子の身体で!!!　あの子の声で喋るのを止めるオツ!!!」

「だから、本当に私は日葵だってば!!!　お母さんの方こそ本当にどうしちゃったの……っ?」

『本当に私は日葵』と言葉を発した瞬間。チクリと胸を刺すような痛みが走る。改めて考えてみれば当然だ。仮に私が<sup>日葵の母親</sup>彼女の立場で、自分の愛する存在が存在<sup>ドッ</sup>を真似<sup>ペル</sup>ただけの存在<sup>ゲン</sup>だとしたら、きつと……私もあの時と同じように取り乱すだろう。

……本当に凄くわかる。友人が、恋人が、家族が別人にすり替わっていく、次は自分の番かもしれないという、怪物に世界が塗り替えられていく……夜も眠れぬ恐怖が迫る気持ちは。

「お母さん、お願い……やめて……お願い……理由を……せめて理由を話して……」

「じゃあ!!!　お父さんは、あなたがテロリストの籠城事件の後遺症で

おかしくなったただけっていうけど！　「私にはわかるのよ！」　あなたとは違う！　私の日葵じゃない！　じゃあ、誰なの!!?　私の日葵をどうしたのよ?!」

……私にはわかる”……か。論理的な根拠はない、直感的な感性だ。だが、その直感的な感性は時に真実を貫いていることも多い。今回は射ている。……ゆえに……すぐには何も言い返せなかった。でも、それで諦める訳にもいかなかった。今、彼女が漏らした言葉と情報から打開策を編み出し、告げる文章の組み立てを始める。

……どうか我儘で自分勝手な”私”を赦して欲しい。今は何もできないけど、いつかは”日葵”として自慢できるような娘になるから。……本当に……申し訳ない。

……それと、この世界の親父。彼女を窘めていてくれて感謝する。

「……私は……私は……っ！　……日葵……だと思う！」  
「だからっ!!!」

「最後まで聞いてっ!!!」  
「っ！」

ヒステリックには、ヒステリックな声で応戦する。

幸いにも向こう側は、こちらを信じられないし信じたくもないが得体のしれない怪物のような認識をしている。これは未知への恐怖だ。その未知について理由付けや理解を得てもらえば恐怖は緩和される。

何も私が海藻に覆われた、邪悪で、腐敗臭のする、刀のような鋭利な爪とホウライエソのような牙を持ったゲゴゲコ鳴く半魚人として、自分が人類に対し人畜無害であるという証明をするわけではないのだ。

たまに失敗するが、この手の敵意を持った相手を宥める修羅場はそれなりに潜ってきた。原因さえわかっていたら、”相手が正気を保っている限り”解決の糸口は必ず見つかる。

「……自分でもわからないの。私は、多分。たぶん、日葵……。……たぶん、ね?　……あの時テロリストに撃たれて、血の海に沈んだ時に……ああ、死ぬんだと思った時。いろいろ後悔が沸き上がってきたの。もしも”次”があるなら、もつといい子になろう。”次”ではお

母さんが自慢できるような素敵な娘になろうって……。だから幸運にも目覚められたとき、過去の私と決別して 新しい私として生きようと思つて」

「……」

「それでね……」

1時間かけて丁寧に、丁寧にこちらの心境の変化を綴っていく。最初は険しく得体のしれない怪物を見ていた彼女ではあったが少しずつ表情が和らぎ、私の普段の行動と発言を照らし合わせて納得しているような素振りが見受けられる。

そしてついに、あれだけ固く握りしめこちらに危害を加えるはずだったレンチを握る手も緩みを見せ始めた！ ……今なら押し切れるだろう。

テロリストと対峙した時との〈威圧〉を込めた〈値切り〉とは違う。外見上は身内に対する時間をかけた〈説得〉だ。私の言葉は時と場合、相手によつて重い言葉になることも多い。

積み重なる罪悪感に……ジクジクと胸が痛む……。だが、もうちよつと涙もろくなるようなことを言つて、それで私の変化に納得してもらおうほかに……現状この状況を打開できるような選択肢は追い詰められた私には見出すことはできなかつた。

「心配させてしまったのなら、ごめんなさい。自分でもわからないけど、一度 “死” を経験したことで何かしらの “スイッチ” が入っちゃったんだと思う。あれから、どんどんやりたいことも出来ちゃつて。前の嫌なクラスメイトをオカルトで呪つてやるよりも、新しいことに挑戦して未来を楽しもうって気になつて……。ねえ、お母さん。私、入学初日に学校の消火栓の中身、ぶちまけちゃったけど……私。……前よりも、いい子になつてるかなあ？」

〈説得〉を試み始めてからは、後ずさるのはやめている。両手を広げ、少し悲しそうな顔をしながら敵意のない少し恥ずかしそうな朗らかな笑顔を見せて無害を主張した。

大丈夫だ、『釘貫 神葬』。これなら……この〈説得〉なら多分行ける。

——カラン……カランカラン……。

日葵の母親はレンチを握りしめるのを止めて地面に落とす。それから私の事を力強く抱きしめた。

「お母さんの方こそ……っ、あぁっ、なんでっ……実娘を魔族だなんて……ごめんねっ。ごめんね……っ！ 日葵のそんな心境の変化にも気づいてあげられなくて……！ 怖かったでしょう！ 辛かったでしょう!? あぁ、ごめんなさい!! ごめんなさいっ！」

決まった。決着。

そんなムードではないことはわかっている。わかっているが、ここで私の内に存在する率直な感情も聞いて欲しい。

ツシアツ!!! オルアアアアア!!! やったぁぁぁぁぁ!!  
あぶねえええええっ!!! 人生最大の分岐点を何とか乗り切ったぁぁぁぁぁ!!  
あぁぁぁぁぁ!!  
あぁぁぁぁぁ!!  
あぁぁぁぁぁ!!!

第Episode14部 完ンンツ!!! コロンビアアアアア!!!  
……はい。

「まっつて、お母さん苦し……っ」

「ごめんね。本当に、ごめんね……。私は……日葵、あなたが病院で入院したときから、魔族の何者かが外見だけ真似したようにしか思えなくって……」

あ、うん……。えつと……。そんな前から、私の事を怪しいと思ってたんだ……。その推理、魔族であることを除けば、すべて合っている

んだけど。……本当に申し訳ない……。……今、その娘さんの肉体に転生しています。娘さんがどうなったのか、それは私にもわからない。聞こうとしたのだけど……脅迫されて聞けなかったし……。……でも拷問は嫌で……。怖くて……。その……。肉体を貰ったこと……。悪いと思っています……。胸が痛い。……。ごめんなさい……。……うん……。うん……。お母さん、私こそごめんなさい」

「いいのよ。いいの。あなたが謝ることじゃないわ……。いいのよ」

「……」

強く抱きしめられ、こちらを落ち着かせるように後頭部を優しく撫でられる。互いの顔が見えない今だからこそ、やるせない表情をそのまま表情としてあらわすことができた。

盛大に喜んだ反面、最悪で強烈な後味の悪さに反吐が出そうになる。……私はその原因である当事者なんだから、当然の報いではあるのだが、彼女の母親が真相に感づいたとき……。私は彼女になんて言葉を掛ければいいのだろうか。

……

……

あれから、30分。母親は私の胸を抱きしめながらすすり泣いている。そろそろ離して欲しいのだが、頼めば聞いてくれるだろうか？

「あの……。お母さん？ ……そろそろ……」

「ええ。でもね、日葵」

「……ん？」

「さつき『学校の消火栓の中身、ぶちまけちゃった』って言った？」

……

……あ。

これは余計なこと言った。しっかりと抱き着いた腕が、私を離さないし、私の力ではこの腕から逃れられない。

「それって、いつの事？」

「……い、に、2週間前の出来事かなあ……？」

「……その日って、日葵が初めて新しい学校に登校して、やけに隣市から応援が来るほどの消防車が走った日じゃなかった？」

「……たぶん」

「……」

「……」

嫌な沈黙。

どうやら母さんは、あれだけ派手にやらかし、短気でデブでハゲな図書委員にも伝わっていた話である体育館の非常ベルを片っ端から作動させて、消火栓をぶちまけ紫先生を巻き込んだことを知らなかったようだ。

うるませていた瞳を拭ったかと思うと、今度は私のようなジト目に早変わりしていく。この目、母親の遺伝なのかもしれない。

そんな別の要件で緊迫した地下空間で、私のスマホが鳴った。私はそんな突然の助け船にポケットに手を入れて相手を確認する。表示名は上原くん。一瞬緩んだ拘束を振りほどいて電話に出た。

「はぁーい？」

『よお、青空さん。俺だ』

「あ、上原くん。どうしたの？ ちょっと ママン 学校の大切な」  
初めての「友達からTELだから離して」

「……」

『あれから筋肉痛の調子はどうだ？ もう動けるようにはなったか？』

「おかげさまで。絶好調だよ！ 昨日はごめんね、皆に下校を手伝ってもらっちゃって……」

『まったく……一時はどうなるかとおもったぜ？ でも、気にすんなよ！ 俺達、友達じゃん！』

「……ありがとう」

『それで突然なんだけどさ……明日って暇？』

「……うん！ ヒマだよー」

『じゃあ、さー！ ふうまと蛇子の奴、明日 隣市のまえさき市に遊びに行くんだけど、青空さん……どうかなって、言ってるさ。あ、でも、青



空さんが良ければ俺も一緒に行きたいんだけど、ついていっても良いか……?』

「もちろん！ 私的には、上原くんが居てくれた方がもつとより楽しいし、いろいろ助かるから一緒に来てよ！」

『やった……!!! んじゃ、明日 五車駅に7時55分に集合な!』

「うん、わかった！」

母親の腕を振りほどき、電話の間にダッシュで自室に逃げ込む。もう逃げてもいいはずだ。

途中までびつたりと背後霊のようにくつついてきたが、あくまでも部屋の前までの話であって部屋の中には入ってくることはなかった。

携帯電話を切り、部屋の外へ〈聞き耳〉を立てる。どうやら、階下で固定電話で何処かに電話を掛けているようだった。

……二度の波乱を切り抜け、テレビの雑音から聞こえるニュースで足音を消し、こっそり昼食を冷蔵庫から盗み出すと リュックサックに詰めて、自宅の窓から脱出しホームセンターへ向かうのだった。

## Episode 14—Tips 『お昼のニュース』

『お昼のニュース』

今朝、群馬県まえさき市の誰にも使用されていない倉庫からドラム缶詰めされバラバラになった6人の人間と思われる惨殺死体が発見されました。

被害者はいずれも1年前、都心部のビルを不法占拠し、突入した特殊部隊によつて大半を殲滅された東雲革命派の残党であり、警察は倉庫に弾痕がいくつも残されていることから東雲革命派の残党と何者かがこの倉庫で衝突したのちに、東雲革命派をバラバラにしたとの見解を示しています。

事件は昨夜深夜3時ごろ近隣の住民から、だれも使っていない筈の倉庫から銃声が聞こえるとの通報を受け、特殊部隊が調査したところ発見したようです。

また魔族の関与も想定されており、周辺の住民の皆様は十分にお気を付けてください。

『警察の書類』 筆：青空 源太

本事件にはニュース報道の直後、魔族の死体も倉庫の地下から発見されることとなる。

魔族の死体は、東雲革命派の残党の死体の損傷よりも凄惨な状態であり、死亡するまでの間。何者かに“拷問”を受けたと思われる傷がいくつも残されているのを科学捜査研究所の捜査員が死体の損傷具合から発見した。

また一部は、完全な“白骨化”を遂げている魔族の死体があり、鑑識の結果ではその魔族は1週間前には存命していたことが科学検証結果で判明している。

以上のデータより、本事件には高位から中位魔族の関与も推定される。

さらに監視カメラの解析結果により、死亡したテロリストは6人であると報道がされているが 正確にはこの現場にいたと思わしいテ

ロリストの数は12人であり、6名ははまだ行方不明のままである。但し、行方不明となつている6名も無事で済んではいないだろう。彼等の武器や装備と思わしい備品が、6人の惨殺死体現場で発見されている。

：しかし、この事件。何よりも奇妙で気がかりなのは、東雲革命派の残党と対峙した何者かの痕跡が一切残っていないことだ。弾痕の数や、周囲へ落ちた薬莖の数から推察するに、彼等はそれなりの銃弾を市街地付近の倉庫でもあるにもかかわらず、遠慮もサプレッサーも使用せずにばら撒いたことが現場検証から分かっている。

また壁や床、天井に残された弾痕の数と床へ落下した薬莖の数が合わないことから、いくつかの弾丸は確実に直撃しているはずなのだ。だが、対峙した存在の血痕もなければ、死体一つすら上がってこないのは明らかに異常すぎる。

高位、中位魔族の仕業と仮定するのであれば何も不審な点は見受けられないが、その仮定を立てる場合。その高位、中位魔族は体に弾丸を食い込ませたままであることになる。例えば、ゾンビのような死霊の類でも何かしら証拠が残るものなのだが……。

さらにこの地域は特別な土地にも隣接しており、地元の高位官僚の話曰く「目前に『天敵がいる』ような場所で、東京都に存在するヨミハラや大阪湾上のアダミハラを拠点とする魔族が表沙汰に騒ぎを引き起こしたというのは非常に考え難く、本件はその他から流れてきた魔族の流れ者の仕業であると考えているようだ。

本捜査には、残虐性の高い魔族絡みの事件ということもあつてか、『対魔忍』なる特殊部隊も出動するそうであり、ここへの選出された特殊部隊は学生のようなのであるが、腐つても特殊部隊の卵。今回の事件の犯人の尻尾を掴んでくれる……もしくははこの残虐な殺人鬼の抹殺を済ませてくれることを祈ろう。

『青空 源太のメモ書き』

夜が明けたら日葵にメール ↓ 『まえさき市には近づかないように』

## 4章 『群馬県まえさき市』

Episod 15 『いざ、まえさき市！』

時刻は7時40分。私はあらかじめ用意した清潔感のある私服に着替え、3人とまえさき市に遊びに行くため、自転車で五車駅に向かっていた。

『青空 日葵』が所持している服は、正直に言って私の好みには合わないどころか、まさに夜中にコンビニへ出かけるようなヒツキー T H E 私服という類の服装であったためコーデイネートにかなり時間が掛かった。結局、母親の私服からいくつか拝借することで、まあ……釘貫<sup>わ</sup>神葬<sup>た</sup>の好みに合わせた悪くない状態まで私服を整えることが出来ている。

出発前、汚れが付着していないかどうか くるりとその場でバレエのように横回転して、うっすら笑みを浮かべてみるが特に問題はなさそうだ。

ところどころに前世の衣服傾向が出ているが、今回はグンマーの僻地『五車町』から外に出て、グンマーの中心部。そう都心に向かうのだ。少しばかり、この警戒した衣服の方が有事の際に役立つだろう。

……

——五車駅——

……

……

「日葵ちゃん、おはよう！」

「お、やっと来たな！ 待ちくたびれちまったぜ！」

五車駅に着くと既に蛇子ちゃんと上原くんが、ガードレールに腰を掛ける形で私を待っていた。私の到着に気が付くと大きく手を振ってくれる。

二人の私服は……実に“かわいい”ことには間違いない。蛇子

ちゃんはライトブルーを基調とし、胸元を強調したアダルトイナ服装のミニスカートにスパッツ衣装だ。そして上原くんは彼なりに男っぽい服をチョイスしてコーディネートしようとした形跡は見て取れるが、うん。それ全部レディース服。外見や容姿が女々しいからか普通に女の子と間違えられても仕方ないと言った様子。

「おはようございます。お二人とも、早いですねえ………まだ集合15分前ですよ?」

「えっへへっ♪ 早めに到着しておかないと8時の電車を乗り過ぎたが最後、次に乗れるのは2時間後ですからね〜!」

「うわあ……。流石秘境グンマー……想像をはるかに超えてきますね。……ニュータウンとは何だったのか。ところで、ふうま君は?」  
「ふうまなら、もう来てるんだけどよ。丁度、青空さんが来る2、3分前に『ううっ、トイレイレ』とか言つて多目的トイレに入つていつたぜ。ま、すぐ戻ってくると思うけどな!」

「彼は顔がいいですからね。ツナギを着た良いオトク……ナにホイホイ♪ついていていいと良いですが……」

私の言葉に、二人は首をかしげて頭頂部にクエスチョンマークを浮かべる。……おっとお? これは10代の2人には伝わりにくいジエネレーションギャップ要素だったようだ。

盛大に滑ったあたりで上原くんのいう通り、ふうま君も5分としないうちにトイレから携帯電話を片手に出てくる。顔の様子から少し憂鬱そうな顔であったが、私が到着していることにも気が付くと笑顔をつくる様子が伺えた。

「おはようございます、ふうまさん。すつきりしましたか?」

「ああ。青空さん おはよう。無事に終わったよ」

彼の私服は、五車学園の制服に似ている。青いジーンズに、薄い灰色のストライプのTシャツに長そでの黒い上着を羽織っている。

今日も今日とて、彼の右目は閉じたままであるが、私も気にしないように振る舞いつつ、4人で切符を購入し電車を待つ。チラリと一瞬、目だけをふうま君に向けるが、ふうま君が右目を開けない理由はそれとなく突っ込んだじゃいけないようなそんな気がしていたのもあ

る。

ほどなくして4両編成の列車が到着し、その電車に私たちは乗った。こんな辺境のグンマーへ訪れる人もおらず、列車は日曜日だというのにも関わらず4人だけの貸し切りのような状態だった。……正確には2人。他の車両に人は乗っているが、1人はノートパソコンに熱中、1人は爆睡している様子が見られる。

「はえー……ほぼ貸し切りだあ……。いつもこんな感じなのですか？」

「たまにしか乗らないが、だいたいいつもこんな感じだな」

全員で先頭車両に乗り込み、辺りを見渡す私に3人は慣れた様子で4人用の向き合って座ることの出来る座席に座る。窓際にふうま君と上原くん。ふうま君の隣に蛇子ちゃんが並んで座る。

私も座ろう……と思った矢先、ふと視界にあるものが映ったことに気が付き、そっちに近寄る。

「青空さーん。当分まえさき市には着かないから、座っておいた方が着いたとき足が棒のようにならなくて済むぞー」

「はーい。……でも、今どうしても気になることがあって……座席を取っておいてもらってもよろしいですか？　すぐに戻ります」

「おーう？」

それだけ告げると、3人から離れて、私はその気になったことに近づき眺めに行く。

……

……

…

「……。なあ、ふうま、蛇子」

「なんだ？」

「ん〜？」

「あの……青空さんが気になっていることってさ……」

「……防災意識が高いだけだろ」

「き、きつと非常時のための確認のためであって、深い意味はないと思うな〜」

「そつか……。そうだよな……。……あ、青空さん？ 見終わったのか？」

「いえ、少しだけ他の車両にも見に行つてきます。5分ぐらいで戻ってきますね」

「お、おう……」

…

……

……

全車両の確認を済ませ、最後尾の車両からすべての電車内を覗き見る。

この世界でも建築法がすっかり顕在しているようだ。列車の各車両同士の連結側の壁に消火器が備え付けられている。

私が消火器を眺めていることは そんなに珍しいことなのか……別車両で消火器と非常ベル、非常緊急停止ボタンの場所を確認する私に、パソコンに熱中していたはずの乗客が車両を仕切る扉越しに覗き込んでおり、目が合った。すぐに目を逸らされたが……。あの目は、  
“何をしているか？”という興味を引いている様子。というよりも、  
“押すなよ……！” 絶対、押すなよ!! いいか、これはフリじゃないからな……?” という謎の圧を眉間に寄った皺から察する。

……まさかとは思うが、私が非常ベルを連打した件が五車町近辺にも知れ渡っているのだろうか？ ……いや、まさかな。そんなはずはない。田舎とはいえ、そこまで情報が知れ渡るわけがない……はずだ。たぶん。……第一、私の情報が洩れているとしても、非常ベルを連打した女として顔までは割れていない筈だ。翌日の地域新聞にも五車学園での出来事はどういふわけか記載されていなかったし。

上原くん達が乗車している車両に戻るため、そのパソコンに熱中している乗客の目の前を通過すると彼の顔自体はパソコンを見ていたが、視線はパソコンから離れ明らかに私を注視していた。お互いに目が合うと、向こう側が慌てた様子で目を逸らす。

……そんな乗客に違和感を覚えながらも、3人のもとへ帰ってくる  
ことができた。

……  
……

3人は何をするわけでもなく、ただそれはもう……黙って静かに座っていた。いつもの3人からは想像できないレベルでの落ち着き……否、これは大人しくしていた。

「戻ってきましたー」

「おかえり〜」

「ただいまです。楽しくおしゃべりしているかと思っただんですけど、3人ともすごい静かですね」

「でしよ〜。でもこれは前回のことがあるからかも……」

「前回の事？」

蛇子ちゃんの言葉に私は首をかしげる。上原くんも、ふうま君も何も言わずにただ窓を魂の抜けたかのような表情で眺めている。一体、前回、彼等の身に何があったのだろうか……？

「ま、ま、ま。日葵ちゃんも座った方がいいよ。先は、すつつつごくおおおおく長いからね！」

「あ、はい。ありがとうございます……？」

手を引かれ促されるまま彼女と向かい合う形で、いろいろ詰め込んだリユックサクをおなかに抱えて座席に座る。

「……」

「……」

「……」

「……」

『……』

沈黙。ただただ沈黙。誰も何もしゃべらない。思わず神妙な顔になる。なんだこれは。私はまた新しい異変に巻き込まれているのだろうか？

「……あの……蛇子ちゃん。……前回、何があったんですか？」

「……知りたい？」

「……差し支えなければ」



「それじゃ、教えてあげよう！ あのね。これは前回と言っても、初めてまえさき市に遊びに行った中学生の時の話なんだけどね？」

「はい」

「その時の蛇子たちは、電車内でまえさき市に行くのがすつごく楽しみで、まえさき市に到着するまでいろんなことを話してたの。それはもう、とにかくいろいろなこと。将来の夢とか、好きな忍法とか、まえさき市に遊びに行ったら何をするかとか、学校での出来事とか——」

「好きな忍法の話題をする3人に少し驚くも、ここが対魔忍の世界であることを思い出し妙な納得感を得る。あれ？ でも、対魔忍の世界と言っても一般的には対魔忍は特殊部隊って扱いになっているっばいことを1年前、医者の説明していたような……。」

「となると当時、この世界で忍者の戦隊モノが流行っていたのかな？ 私の世界でいうところの『ミュータントタートルズ』や『ニンジャスレイヤー』『シノビガミ』的な。」

「——それは、もうっ、すつっつごく盛り上がってね！ 大笑いしながら、楽しい道中を過ごしたの！」

「はい」

「でもね……蛇子たちは一つ見落としていたことがあるの……」

蛇子ちゃんの表情が急に神妙な顔になる。

あ、もしかして……これは乗り換える駅を見逃して迷子になった奴かな？

「ここで、日葵ちゃんに問題です！ デデン！ 蛇子達は何を見落としていたでしょうか！ ちなみにヒントはね。……これでーす！」  
突然の問題に目を丸くするが、彼女はお構いなしに私の目の前に指を3本立てて、ニヘラ〜と笑う。

3……？ 見落とした3……？ 一体のことなんだろうか……？

3……。3……。さん……。スリー……。み……。？ 3番線ホーム？

「わからないかな？ ヒント2つ目。鹿之助ちゃんや、ふうまちゃんを見てみて！ 2人はどんな様子かな？」

……2人は窓の外を見て、無言で黄昏れている。

それはもう、何も考えていないような虚無、完全に妄想の世界に入り込んで 現世での出来事をすべて忘れ去ってしまったかのような……真っ白に燃え尽きたような魂の抜けた表情……。

「FXで有り金全部溶かしたかのような顔を……して、いますね……？」

「……ん？ ん？ ん？ んっ？ FX??? ……?????」

「あー……初心者でも始めやすい『株』みたいなものですか」

「蕪？」

「株」

「蕪」

「株です。……それにしても、3とFX、電車の中での出来事ですか……」

「……難しいかな？ それじゃ三つ目のヒント！ これは大ヒントだよ！ 今日、蛇子はこんなものを持ってきました！ はい！ 日葵ちゃんにもあげるね！」

「飴？ あ、ありがとうございます」

彼女は飴玉を取り出して私に6つ渡し、2人にも受け渡す。飴玉はリンゴ味だ。封を開けて食べる。さっぱりとした甘さだ。

窓際の2人も飴玉を真っ白な魂が抜けた状態で封を開けて頬張り、やっぱり黄昏れ始める。

それから彼女は3冊の薄い小説を取り出した。薄さから1冊辺り200頁にも満たないノベルズ・コミック文庫の大きさものだ。それを3冊……。

「んんんー……。……んんんんんんんんっ」

「の、喉に痰が絡んだみたいな声が出てるよ！」

頭を抱え悩む私に蛇子ちゃんは、わたわたした様子でツツコミを入れる。

「……蛇子。蛇子。あれはヘヴィメタルに使用されるデスボイスの『ガラテル』だ……」

「えっ。ふうまちゃんなんでそんなこと知っているの？」

「お前が言ったんだぞ……相手の好きなものを調べて理解しておくこ

とは、親しい「友人」関係を築く上で重要だった」

「あ、高坂先生が教えてくれた授業の……だね？」

私の目の前でふうま君が蛇子ちゃんに向けて何かヒソヒソ話をしているのが見えるが、残念ながらそつちの話に頭のリソースを割いているような余裕は私にはなかった。首をひねり、腕組みをしながら出題された問題の解答に全力を注ぐ。唸れ！ 私の〈アイデア・INTロール〉ツツツ!!

その時、PON☆ と私の脳裏に一つの答えが浮かび上がってくる。

「……あ」

「わ、わかったかな〜？」

「もしかして……到着までにすごく時間が掛かる？ ……具体的に……3時間ぐらい？」

「ピンポン！ピンポン！ だ〜いせいかうい!!」

彼女の正解の声は嬉しそうだったが、私は凄まじく長い乗車時間に思わず嬉しいような嬉しくないような顔で目をつぶって仰け反る。

3時間の乗車時間。それは千葉県で例えると『柏から館山まで』……もつと距離感に疎い人のために説明するならば、千葉県の『最北部から最南部』……チーバくんて例えると『鼻先から足先へかけて』電車で移動する際に掛かる時間に該当するぐらいの距離である。

しかも……。ここで思い出して欲しいのは、……。五車町はまえさき市に隣接している距離にもかかわらず、3時間だ。正気の沙汰とは思えない。

五車町……辺境の田舎ってレベルじゃねーぞ！ 未開の秘境の地  
THE・グンマーさんだよお!!!

ちなみにこれは補足となるが、西東京に存在する駅の1つ『奥多摩』から都心の『池袋』までの乗車時間ですら、乗り換えを含めても2時間10分ほどで到着ができる。……これで更に五車町がどんな辺境の地か非常にわかりやすくなったかと思う。

「こりゃ、早めに原付か自動車免許を取らないとなあ……ははは……」  
乾いた笑いとか細い独り言をつぶやきながら、後頭部をかきながら

片目を瞑る。

五車町が山間部を開拓したニュータウンにもかかわらず……外部から人が集まらないことがわかったような気がする。……とにかく交通の便が悪すぎる……！ 都心部に出かける私に母親が色々な田舎では手に入らないような物品の購入を依頼してきたのも頷ける。

そりゃ、新しく新設された街だよ！ 小中高校一貫の国立学園があるよ！ その他に自慢できるような建物は無いけど、とにかく学校は国立なのに立派だよ！ 機材もすごいよ！ 教育に熱心（）な優秀な教師がいっぱいいるよ！ あ、あと絶滅危惧種の商店街があるよ！

五車町から最寄りの都心部のまえさき市まで、電車で3時間だけどねっ!!!

……もうね、アホか……と。そんなの人なんか集まるわけがない。何がニュータウンだよ。オールドタウンだよ。過疎化の未来しか見えない秘境ですよ。……。はあ……。道理で通販プライム プレミアムつけているのに商品が翌日に届かないわけで……。海外の本なんか注文した日には、到着は半年後じゃあなからうね？

日葵の父親もとんでもない場所に転勤命令が出たものだ……。一体、何をしたんだか……。

……でも片道3時間も時間があるのか。これは逆に私としては、好都合だったのかもしれない。

おもむろにリュックサックを開き、中から私が増量版化させた『新クトウルフ神話TRPG』のルルブを取り出した。その瞬間、正面の蛇子ちゃんはもちろんの事、黄昏ふうま君の目の色も変わり、私が持つルルブにその視線が釘付けになる。

これにはドヤ顔をせざるをえない。 Good Job. 私。

「うお……マジか……ッ！ 持ってきたのか!? 今日も!?!」

「はい。このTRPG本、かなり重いので……筋トレのつもりで持ってきたのですが、やはり気になりますかね？ 黄昏ふうまさん」

「青空さん!?! それって……!?!」

「上原くん……そうですよ。例のアレです。一発キメたが最後……後戻りが出来なくなる悪魔的快感の坩堝……そう、ヤクです」  
TRPG

「や」

「や……う？」

「やりたい！ なあ、やろうぜ！ ふうま！ 蛇子！」

私のTRPGの声に上原くんも意識を取り戻したようでキラキラと輝いた目で食いつきを見せる。可愛い。眼福。正気度報酬。狂いそうになる。ステイツ ステイツ まだだッ まだだッ！ 抑えろ……ッ！ 6版(153頁)『信頼と公平さ』、7版(180頁)『初めてのキーパー』記載の概め GMは常にPLへ公平に接しなければならぬッッッ！！

他の2人も、おずおずと頷く。よし……！ いろんな意味で、心を抑えたッ！ 掴みは良い感じだッ！

「……今回、皆さんTRPGは初めてですもんね。本当は初心者向けの簡単なシステム『ウタカゼ』や『永い後日談のネクロニカ』あたりが遊びやすいのですが……まあ、何せまだ家にルルブが届いていませんので……。他にも初心者向けのTRPGはありますが、『永い後日談のネクロニカ』は電車でやると大体大変なことになりますし……今回は『新クトウルフ神話TRPG』になります。各自インターネット<sup>①</sup>で無料配布版『新クトウルフ神話TRPG (7版) クイックスター・ルール』を参照してキャラクター……自身の分身となるキャラを作ってみましょうか。わからないことがあれば、いつでも聞いてください。お手伝いします。」

準備してきた白紙のキャラシートを取り出し3人に配り、彼等の分身である『探索者作成』が始まった。

……ここにいる全員、私の実体験を交えた『ガチであった怖い話を残酷描写のソフト版で恐怖という快感の沼に落してやる。人は過度な恐怖を感じるとストレス緩和のために脳から麻薬分泌液が発生する。』

……やってみな……飛ぶぞ？

## Episode 16 『茶色のケモミミフード』

「ここがまえさき市……」

——改札を抜けた先は、前世で私がよく見た都会の中心部でした。時刻は約11時、道行く人々は、ほとんどが楽しげに笑いながら道を往来していく。どこからともなくお腹が空く様な美味しい香りが漂って……。五車町では学校を除いて聞けなくなった賑やかな喧騒音であふれかえっている。

近くには大規模な駐車場に大型商業施設や電化製品屋、大手飲食チェーン店、娯楽施設などと駅前ということもあってか、様々な店舗が競い合うように立ち並んでいた。もうこの周辺だけで1日時間を潰せ……。いや、1日あつても時間が足りなさそうだ。

「さて、と。ふうま君、今日はどこに行くのですか？」

「……なんで俺に聞くんだ？ 誘ったのは鹿之助だろ？」

……。ん？ あれ、なにやら話に食い違いがありますね。

でも昨日、確かに『ふうま君と蛇子ちゃんが、まえさき市へ遊びに行くけど……良かったら一緒に行かない？』と上原くん経由で誘いがあったような……。？ その後の話の流れでも、上原くんはまえさき市へのお出かけに誘われていなかったようですし……。

「はて？ 私の認識としてはふうま君が誘ってくれて、上原くんが翌日の日程確認の電話してきたと記憶にありましたが……違いましたっけ？」

「ふうま！ お前が最初に青空さんをまえさき市に連れて行こうって言い出したんだろ！ でも携帯電話番号を知らないから、俺に『電話をかけてくれ』って言ってきてきたじゃん！」

「……そうだったっけ？」

首をかしげる私に、上原くんの援護射撃が乗せられる。しかし、ふうま君としては、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしており、自身がそんなことを言ったのか思い出せない……。そんなぼんやりとした顔をしていた。

おやおやおや……。これは何か裏でひと騒動ありましたね。です

がこれ以上、真相を探るのは野暮つてものです。あとで、ふうま君にも私の携帯電話番号を教えてあげましょう。

「はは……ま、そういうこともありますよね！ それでは、この近辺でいろいろ買物とか楽しめるような場所はどこにありますか？」

「それなら、あそこのショッピングモールがいいだろう。品ぞろえが一番いい」

「あ〜！ でも待って！ 蛇子、お腹が減っちゃって……、買い物はご飯を食べてからじゃダメかな？」

「あー、俺も賛成。電車の中でしゃべりすぎて喉が渴いちまったしさ……食べに行くならドリンクバーの付いてる店がいいな」

ちらりとふうま君がこちらを見てくる。母親にはいろいろな買ってきてほしいとは言われているが、今回、私としては 〃友達と遊びに〃 まえさき市に来ているのだ。別にご飯を食べに行くぐらい問題ないはずだ。

「Hey. 尻。この辺のドリンクバー付きのレストランとファミレスを教えて」

『はい、見つかったのはこちらです』

「……この辺で近いのは学生の財布に優しく、コスパ最強のサイゼリアですね。丁度ショッピングモール内にあつて、今の時間であればまだ空いてますよ」

「マジで!? よっしゃー！ 俺、そこがいいー！」

「お二人はいかがでしょうか？」

「異論なくしー！」

「構わない」

道案内のため私が先頭に立って歩くことになる。その後ろにご機嫌な上原ちゃんと蛇子ちゃん、最後尾に辺りを見渡すふうま君が付いてくる。陣形としては、さながら守るべき対象のいないインペリアクロスと言ったところか。正直、私は現在、紙装甲なので 頑丈そうなふうま君に先陣を切ってもらいたいが、これと言って誰かと戦闘しているわけでもない。これはこれで問題はない。

「あ、ねえねえ 鹿之助ちゃん。アレなんだろう？」

「ええ？」

「ほら、アレだよ。アレ」

後ろをついてきていた2人の足が止まり、私も歩みを止める。

二人が指を指し、見ている方向に視線を向けると何やらケモミミのフードを被った茶色のローブ集団がショッピングモール内へ入っていく様子が見えた。……休日の昼間の駅前の光景として似つかわしくないシュールな光景だ。フードの中は影が濃く、彼等の顔を見ることはできない。

「獣人たちの集会かなあ？」

「えっ？ 獣……人？ あれってケモミミフードを被った人間ではないのですか？」

「うーん……。蛇子もそこまでよく見えたわけじゃないから……。ふうまちゃんは？ どうかな？」

「あれは人間ぽかったな。手が人間の手だった」

「もしかしてたまにやるイベントか？ メシを食い終わったら探してみようぜ！」

「いいね〜！」

わずかに見えた謎の集団について話題の花を咲かせショッピングモールに入り、飲食店を目指す。

……ああ、TRPGセッション？ うまく行きましたよ。上原くんはちよつと中二病が開花しました。素晴らしい。実に素晴らしい沼へ沈む大いなる第一歩です。蛇子ちゃんもじきに堕ちると思います。反応としては良い反応ではありません。ふうま君は……。どうでしょうね。楽しそうに笑ってはいましたが……。洗脳までに時間を要すると感じたのが今回の見解です。

……

——食後の買い物 ショッピングモール館内——

……

今、私は上原くんと2人きりでショッピングモールをめぐるま



す。

ふうま君と蛇子ちゃんの2人ですが、サイゼリアで昼食を食べた後、蛇子ちゃんは食べ過ぎでお腹を痛めトイレへお花を摘みに。ふうま君は蛇子ちゃんの付き添いで席を外しております。

蛇子ちゃん曰く『せっかくの休日を私のせいで潰しちや悪いから、鹿之助ちゃんと行ってらっしゃい』とのことで今、ケモミミフードの集団のイベントを探しつつ、買い物中ですが……。

「見つからないですね……。茶色のケモミミフードの集団。上原くんは見えましたか？」

「青空さんの高い身長(約160cm)で見つからないなら、俺の身長(140cm)じゃ見えないよ……」

一向に彼等が見つかることはなく、ショッピングモール内をウロウロ徘徊しています。

これだけ探しても見つからず、インフォメーションの店員も認知していないということは、イベント用の人員などではなく、お客様であるとして考えられますが……。あんな不審な格好でよく街中を歩けたものだと、ある意味感心しているところです。

「そうだ！　ここは、私が肩車しましょうか？」

「おいおい、いくら青空さんでも俺を持ち上げるとは無理だって。紫先生のバーベル15kgで一昨日疲れ果ててただろ？」

「上原くんって、身長140cmぐらいですよ？　確か身長140cmの人の平均体重は43kg。上原くんはどちらかと言えば、やせ型なのでその点を考慮して15kg。実重量は35kg前後だと思えます。35kgであれば、米袋1袋分の重さと変わらないですし、抱きかかえるわけでもなく、ある程度の足で支柱もある状態での肩車なので、負荷としてはバーベルよりは軽いかな？　と思っただけですが……。肩車。しましょうか……」

「……うん。ごめん、俺の言い方が悪かった。俺が恥ずかしいからやめて」

「そうですか……。残念です。わかりました」

じりじりと彼ににじり寄る私に今、彼は顔を赤らめて両手で口元を

隠している。かわいい。

……もしや、蛇子ちゃんとの別れ際、彼女は私に対してウインクをしていたが、もしかすると、あれは……そういう……？ トイレに花を摘みに行ったのも、『私はふうま君と。日葵ちゃんは上原さんと親睦を深めてね！』という意図が……？ だとすれば、蛇子ちゃんは見かけによらずできる女だろう。大学生になって合コンとかしても、雰囲気の良いなった相手をこっそりお持ち帰りできるようなタマだ。

ここで一抹の不安が沸き上がる。私は電車内で公平にGMをできていただろうか……？ 彼の可愛さに盲目になっっていないだろうか？ それはGMの責務として越えてはならない一線でもある。不公平なゲームはほぼ必ずと言っていいほど、全員が楽しむということにはならない。

「……青空さん？」

「はい？」

「今、すっごい小難しい顔をしていたけど、どうかしたのか？」

「ああ。すみません 気にしなくても大丈夫ですよ。『自転車の鍵を  
かけ忘れたかも……』と心配になるぐらいの事情を思い出してしまっ  
て」

「そっか……」

ああ、その少し一緒に悩んでくれるようなしぐさが、彼の優しさが  
酌み取れるし、何よりもかわいい。

ああ〜。かわいいなあ。眼福。眼福……。

彼は男の娘に分類されるような属性の持ち主であり、オカマでは無  
い、無さそうではあるが……。以前聞いたことのある『男は度胸、女  
は愛嬌、オカマは最強』とは、まさに今、私の目の前にいる男の娘に  
置き換えても当てはまるのだろうか……。最高。

「な、なんだよ……。今度は突然ニヨニヨ笑い出して」

「大したことじゃないですよ。……私にも良い友達ができたなーと実  
感があります、少し嬉しくなっているだけです」

「そ、そうなのか？」

「ええ、そうです」

「ならいいんだけど……」

邪悪な笑みをこぼさないように穏やかに笑って見せる。ああ、きつと子供を連れ去ってしまふ犯罪者の気持ちというのは、こんな邪悪な気持ちなのだろう。本性を隠しつつ、暗黒微笑（草）を浮かべて近づく。

「さてと、どうしますか？ 私の買い物は殆ど終わりましたけど、上原くんはどこか行きたいところとありますか？ 今日のおでかけは筋トレも兼ねているので上原くんが持ちきれなくても、私が代わりに全ての荷物を持ちますよ」

「……青空さんって、そういうところが勤勉だよなあ……」

「？ 何か言いました？」

「い、いや！ えっと、それじゃあ、服を見に行きたくて……」

……これはのちの道中で聞いた話ではあるが、上原くんは学校の制服2種以外に男物の服を所有していないそうだ。

これはつまり、今日 全レディース服でコーディネートしてきたのも合点がいくし、彼の家にはもつと彼に似合うレディース服があるのだろう。……是非ともそれはそれで拝見させて頂きたい次第ではあったが、彼の制服姿から考察するにメンズの衣装はメンズの衣装できつとベクトルは異なるが『かわゆい』に違いない。

と言ったわけで、彼とはこの後。2人でメンズ服を取り扱う服屋に向かうことになったのだった。

……

……

……

# Episode 17

「????????????  
????????????」

「待って！そこ、まず行って！あれ魔族の店だよ!!! 駄目だつてツ!!! そこは俺でもまず行ってわかるううう!」

「でも、こんな大型ショッピングモールで表向きに店を開いている魔族だよ？ ちゃんと警戒もしておくから……ね?」

「見て！青空さん！和訳こおう！魔族語で！リラクゼーション マッサージ店！ 魔族の経営する！大人の！マッサージ店ツツ!!! ここが合法的な店でも、青空さんみたいな人が入って行ったら絶対、逆に餌食にされちゃううっ!」

「でも、私はマッサージを受けたいんじゃない……中にいる魔族の方々に聞きたいことがあるだけで……。そう、入り口……。そう、先つちよ！ 先つちよだけさあ。受付の人とお話したら、すぐ戻ってくるから。ね。ね?」

現在、その上原くんと押し問答中です。

事の発端は、母親に頼まれた物品（クソ安い強力洗剤とか、芳香剤とか……）を大量購入し 次に上原くんのメンズ服の購入をも済ませたのですが……。

入口に私が去年 目覚めたときに発見した本と同じ文字表記に似た店を見つけまして。筋トレとして説明書である2冊に加えて、例の〈他の言語（魔獣語）〉だか、〈他の言語（魔族語）〉で書かれた本も持つて来ていたので何語であるか尋ねようとその店に入ろうとしているのですが、強固に引き止められています。

『対魔忍』の世界ですし、言いたいことはわからないでもないですが……。でもここでこの機を逃したら、この店に一生足を踏み込めなくなるような、そんな気がして私は行きたい衝動に駆られています。

やめられない。止まらない。探索者前世の私としての性さが。みなぎる私の好奇心。

「無理無理ムリムリ！無理だからツ！ 絶ッ対に！帰って来れないから！ ふうまー！ 蛇子ー!!! 早く帰って来てくれーつ!!! 青空さん！ 日葵さん！ 日葵が魔族のチャームの術に掛かって 危険地

帯に突っ込もうとしてるうーっ!」

「……だから、上原くんはこの先のフードコート付近の休憩所でカレーでも飲みながら荷物番をしててくれればそれでいいですってば。ほらお小遣いもあげます。おつりは自由に使っても良いですよ。5分ぐらいで戻ってきますから」

「絶対に譲らないからなっ?! 賄賂を渡されたって俺は絶対に首を縦に振らないからな!?! 無理だから! 青空さん、魔族を舐めちゃだめだよ?!」

あと、カレーは食べ物!!!」

「……うーん」

半分、私に引き摺られている上原くんを目前に片目をつぶって後頭部を搔く。目を丸くし眉を八の字にして、今にも逃げ出しそうな雰囲気にもかかわらず必死にこちらを引き留めてくる彼からは、何か過去に魔族関連でえらい目に遭ったのではないかと推察することができる。

しかし絶対、引こうとしない彼に根競べで押し負けて『今度の機会でもいいかな』と揺らぎかけていた。

「……うん……わかりました。わかりましたよ。そこまで言うんだったら——」

「あらあらあら♪ 店先がやけに賑やかだと思ったら、お嬢ちゃんたちがお話していたのね♪ でも相談事は別の場所か、私の店に入ってからやってもらえると嬉しいのだけど……どうかしら?」

そんな時、不意に魔族の店の扉が開き、軽快な鈴の音が辺りに響く。振り返るとそこには一人の女性が顔を覗かせて、ニコニコと愛想のよい微笑みを浮かべながら 穏やかな物腰と言葉遣いで私と上原くんに声をかけてきた。

「……!」

「……ああ、ごめんなさい。すぐに居なくなりま——」

その言葉と声を聴くのと同時に上原くんは声の主を目を四角く強張らせ、飛びのくように私の影に隠れる。そして、そのまま身動きが取れなくなっただかのように固まってしまった。

私もその魔族の女に対して離れる趣旨を伝えようと思ったところ

で言葉を失った。魔族の店から出てきたのが普通の人型をした妖艶な女性……ということもあつたが、それは一瞬、私たちの友人である『相州 蛇子』にそっくりでもあつたからだ。

衣服と身長に関してはシークレットシューズや別の服装に変えてしまえば、いくらでもごまかせるため、なんとも言えないが……。黄金のはちみつ酒色に輝く虹彩に、若干のウェーブが掛かっているが薄黄緑色の髪色、男性であれば思わず目が釘付けになってしまうような爆乳。それは蛇子ちゃんと同一の姿であつた。

……でも、そこはかたなく顔から美人だがキツめな性格が滲み出ているような気がしなくもない。私の知る蛇子ちゃんは、もう少し可愛らしくて……。ニヘラ〜と笑いが絶えない優しい顔と認識していたが……。化粧のノリのせいだろうか？

「——蛇子ちゃん？」

「……フツ。確かに私は蛇子だけど、いったいそれがどうかしたのかしらあ？」

「えっ、相州 蛇子ちゃんなの!?!」

「フツ……。何をそんなに驚いているのよお。そうだって言ってるでしょ♪」

思わず怪訝に目を細め少し軽蔑したようなまなざしを向けながら彼女の名前を呼んだ。だが、それを正面の彼女は否定することもなく、ただただ妖艶に、胸を突き出して爆乳を協調するかのよう前かがみになって上目遣いで誘惑するような声色を出しつつ、スローペーすな速度で寄ってくる。

え？ ……えっちなお店でアルバイト？

あの時のウインクって『あとで、この店に来てね♡』はあとってサインだったの？

え、でも、蛇子ちゃん。……サイゼで食い過ぎて、お花にうんこビックフットしに行ったじゃん???

「え、でも、蛇子ちゃん。サイゼで食い過ぎて、お花にビックフットこしに行ったじゃん???

「!?!」

ちよつと衝撃が強すぎて頭に浮かんだ言葉が隠語としてではなく、そのまま口から放出される。

それに伴って、強張った状態の上原くんの視線が私へと向けられ、空気が凍り付いた。すれ違う通行人の動きも一瞬固まる。

あ、いけない。トイレって付け加えるのを忘れてしまった。そっか、このままじゃ、野糞しに行つたみたいじゃん！ それは皆 動揺するよね。まずい まずい。修正しないと。

「ま、待って！ 違つた！ これは決して、屋外に野糞しに行つたつて言いたいわけじゃないわね?! トイレ！ そう……トイレへお花を摘みにうんこしに行つたよね?!」

セーフ。これで語弊を産み出さないし、排便をオブラートに包んで、周囲の通行人から蛇子ちゃんの尊厳を守つたはずだ。額に伝う汗を掌で拭つてやり切つた顔になった。これでホツと一息つくことができる。流石、私。アフターフォローまで完備している素敵な女。

「フ、フフフ♪ そうね♪ その話を聞く分にだけど、人違いだわ♪ それは私じゃないわね」

「なんだあ……人違いでしたか。ごめんなさい。友人にあまりにもそっくりだったもので……。では——」

私の言葉に彼女は、一瞬自身のペースをかき乱されたように見えたが僅かな時間プルプルと震え始めたのちに、落ち着きを取り戻して別人であるようなことを口走る。

なんだ。よかつた。ただの他人の空似か。ひとまず『えっちなお店で働いている蛇子ちゃん』という疑問は私の中で解けた。

固まって動けない様子の上原くんの手を引いてその場から離れようと一歩踏み出す。この妙な空気が流れる空間に私の方がそろそろ耐えきれないこともあつたからだ。

……あれ？ でも……この人、さつき……

「あら、店先で賑やかに相談するわけじゃなければ、そんなに急いでどこかに行こうとしなくても良いのよ?」

「……え?」

「あなた。私に聞きたいことがあつて、店に入店するかどうか そつ

ちのお友達のお嬢ちゃんとお話していたんじゃないの？ せつかく出向いてあげたんだから、それを聞いてみたらどうかしら♪」

彼女が現れてから、メデューサに睨まれて微動だにしない石像のようになってしまった上原くんを見る。彼はいまだ固まったままで、視点を私から蛇子ちゃんモドキに戻して……今、私が見ていることにも気が付いてすらいないようだった。

こちら辺は人通りもそれなりに多い。さっきの私の爆弾<sup>野糞</sup>発言で多少なりとも、私を視界に入れつつ正面の彼女に注目が集まっている。……ないと思うが、万が一。何かが起きても、対処はしやすいだろう。

「……では、お言葉に甘えて……。この本の文字が何の言語かわかりますか？」

「本？ ……………」

「はい。露天商のおじさんから、購入したものなんですけど……何が書いてあるのかわからなくて。面白そうなので読んでみたいとは思っているのですが、読み込むにはまずこの本の言語が何であるのか判別して辞書を購入しないといけないですよ」

上原くんをつないでいた手を離し、彼女に近づきリユクサクを開いて『魔獣・魔族の言語で書かれた本』を差し出す。

蛇子ちゃんモドキはその本を受け取り、ペラペラと本を捲り確認をしてくれる。その表情は終始 面白そうな微笑みを浮かべた顔をしていたが、表紙を読んだ瞬間に 一瞬わずかに下瞼が持ち上がり目を細めたのを私は見逃さなかった。

それにしても……。良からぬ事実の暴露を掛けたのに、今のところこちらに何もせずなにも言わずに本を確認してくるあたり。上原くんが想定していた魔族よりは多少マシな部類の魔族だったのかもしれない。

ひとまず彼女は私が渡した本に熱中した様子でペラペラと本を捲っている。少しなら目を離しても大丈夫だと思い『ね、大丈夫だったでしょ』と言わんばかりのしたり顔と微笑を浮かべ、背後にいる上原くんの方へ振り向く。だが、ここで彼の異常に 私は思わず本を読



んでいる彼女側へと後ずさるような戦慄と固唾を飲み込むような経験することになる。

……彼は凄まじい勢いで首を横に振っていた。まるで水浴びを終えた犬が水滴を散らすような勢いで首を左右に振り抜いている。髪が乱れ、静電気の溜まった下敷きで髪が持ち上げられたように大きく膨らむ。私が後ずさった直後に、その首振り行為が一層素早くなったように見えた。

「うっ?!」バチッ!

「いッ!?」バサッ

突発的に予測もしてない状態で、首筋に激しい痛みが走る。まるで巨大な静電気が弾けたみたいだった。首を抑えて痛みには振り返れば、蛇子ちゃんモドキの魔族が本を床に落として、左手を抑えている。どうやら、友人の豹変に戦慄し固まる私に声を掛けようとしてもしたのか、触れようとして静電気が発生。自身の手を見ながら驚いたようにも見えるが……一瞬、怒りで顔をしかめたようにも見えた。

……やつぱり、この蛇子ちゃんは性格がキツそうだ。他人の空似で間違いなさそうではある。

「っ……や、やだなあ……もう。時季的に梅雨だっていうのに……。静電気……? ですかね? すみません驚かせちゃったみたいで」

彼女が落した本を素早く拾い上げて脇に抱える。

上原くん側に一瞬、視線を戻すが彼は頭を振ることを止め、乱れた髪を整えながら青い顔をして、私に早く戻ってくるように高速で手招きを始めている。そんな切羽詰まった顔もかわいい。

かわいいね。上原くん。

「それで……この本の言語、〈魔族語〉か〈魔獣語〉らしいんですけど何の言語かわかりました?」

「……残念だけど。……力になれなくて ごめんなさいね。私には分かりかねる言語だったわ」

「そうですか……。でも確認していただいて、ありがとうございます。ありがとうございました」

一礼をして、鋭い痛みの走った首筋をさすりながら上原くんのそば

に駆け寄る。

そんなにこの魔族が怖いのだろうか？ 私は先に上原くんに一瞬恐怖を抱いたわけだが……いま彼は、かなり震えている。記憶に新しい紫先生の強行を目撃したとき以上に震えている……。

確かに人は見かけによらないともいうし……悪人こそ善人のふりをして近づいてくることもある。今は無害そうに見えても、早めに離れた方がいいのかもしれない。

「ねえ……♪ あ な た？」

「……なんです、か……ッ!？」

ここで左手を抑えていた魔族の女が再び私に声をかけてきたため振り返る。

彼女は音もなく私の真後ろにいた。つい先ほどまで、数メートル離れていた位置に居たにもかかわらずだ。あの場所から、現在の場所まで蛇子ちゃんモドキの足でも最低10歩は必要なほどの距離なのに。接近を試みるにしても走り寄りでもしない限り間髪入れずに話しかけられるような位置でもなかったのに。コンクリートの床にもかかわらず、音もなくまるで影のように真後ろに居たのだ。咄嗟に1歩左にズレて上原くんをかばうように彼女の毒牙が届かないよう遮る。

「あらあら、驚かせちゃったかしら？」

「は、ははは……ごめんなさい。突然だったのです。びつくりしちゃいました」

「別に謝ることなんてないわ。こちらこそ驚かせてごめんなさいね♪ ……実は、その本の事で話しておきたいことがあって♪ 私にはちよつとよくわからなかったけど、私の“親友”なら読めるかもしれないわあ♪ もしよかったら連絡先を交換……とか、どうかしら？」

「えっ……。あつ。ほんとうですか！ それは、嬉しいです！ あー……でも、ごめんなさい。お恥ずかしながら、スマホゲームダイスロールのやりすぎで今 電源が落ちていて——」

「なら私の店で充電していくといいわよ♪ 充電器も貸してあげる♪ ……安心して？ そつちの子が恐れているみたいに別に取って喰いやしないから♪ ……それに。お嬢ちゃん達は可愛いから特別

サービスもしてあげるわ♪」

「ああ！ もうそれは本当に素敵なお誘いですね！ すっごく嬉しいんですけど、この後に他の友達との待ち合わせもあるので……！」

「そう……？ なら残念だけど、仕方ないわねえ」

改めて考えれば、今度はこの女魔族が怪しく思えてくる。

離れようとする私に対し、やけに食い下がってくることも1つの要因だが……ここは魔族の店であり、自身の店だと話していた割には人の姿でこちらに姿を見せていることも……。合法的に店を開いて特にやましいことがないのであれば、本当の姿で現れたってかまわないはずだ。既に看板でミャンマー語に似た〈魔族語〉を使っているわけだし、通行人もこの店は『魔族が営む店』であると認識しているはずでもある。……私達に『気を使って』とも考えられたが……彼女は、どうして初対面の時に友達のフリをした？ ワンチャンこの人が『アイシユウⅡヘビコⅡチャン』という名前の可能性もあり得なくはないが……。

そもそも、私はなんでかわいい上原くんがこんなにも嫌がつているのにこんな店に入ろうとしたのだろうか？ いくら前世の私の好奇心があつたとはいえ、意地でも入ろうとしていた自分に対しても恐ろしくなってくる。

「はい！ 協力ありがとうございました！」

一応、大人として社交辞令的な返事を返して、その場から上原くんを立ち去る方向に押し込みながら競歩のような動きでその場から離れようとする。本当は、走ってでもその場から離脱したい気持ちがあつたが、どういうわけか足が震えて棒のようにしか動かなかつたためだ。まるで蛇に睨まれたカエルのような……。

振り返っても追いかけては来ていなかったが、私達が見えなくなるまで ずっと笑顔で手を振り続けていた。……否、あの手の振り方は……。こちらに手招きしているようにも見える。

彼女から言いようのない恐怖が更に湧き上がってくる。それは……見えなくなるまで……ずっと。

## Episode 18 『高位魔族』

「あの……うん……。えっと、本当にごめんね……?」

「ごめんねじゃないよ!!? 本当に危なかったんだからな!!?」

上原くんが声を荒げる。

私たちは、あの魔族のお店から逃げ去ったあと、休憩所にある窓付近のテーブルで足を休めていた。あの場から逃げるように去ったあと、途中で半分魂の抜けたようになってしまった彼の手を引いて、適当な座席に座らせ、一息をつくためにお茶を渡したところで彼は正気を取り戻したようだった。

彼いわく、彼女が顔を覗かせたときから凄まじいと称するレベルの高位魔族的な波動（上原くん曰く『瘴気』と言うものらしい）が滲み出るように放たれており、私は平然として話していたが、彼にとつては本当に足が動かなくなつて、全身の震えが止まらなくなるほどの存在だったらしい。

「日葵には見えていなかったのか?! あれは本当に危険だったんだつて! なんてあんなのがこんなショッピングモールにいるんだよ……! あんなのは普通は魔界にしかないらしいし、魔界でもそうそう出会わないような存在だぜ?!」

「……本当?」

「俺が嘘を言ったことがあるか!?!」

「ない……けど……や……」

彼が両手で頭を抱えながらも、迫真極まる声の覇気から相当危険な状況だったと再認識することが出来る。

それにしても、上原くんが意地でも止めてくれなかったら……。蛇子ちゃんが食べ過ぎてうんこに行つてなかったら……。間違いない。私は彼女の言葉を鵜?みにして、好奇心のままついで行つたに違いない。引き止めてくれた上原くんの存在と、食べ過ぎた方の蛇子ちゃんと、蛇子ちゃんのうんこに感謝するばかりである。

「はあ……。もうあの店に行くなよ……」

「本当にごめんね……」

「いいよ、俺は青空さんがわかってくれたならそれで……」

彼は真夏の車内に放置されたアイスクリームののように、その場で椅子にもたれ掛かりながらドロドロと崩れ落ちる。余程、緊張していたのであろう。もしも彼に骨と皮がなければ、そのまま肉団子のようになつて蒸発してしまいそうだ。

「ちなみに……『高位魔族』って……なに？」

……そんな魔族についてなんて、病院にいるときには学んでなかった。確かに『青空 日葵』のノートパソコンの中身からそれらしい情報は見つけてはいたが……。自分は対魔忍とは無縁のクソ田舎へ引越すから、今後は遭遇することもない存在だと思っていたし、あの入院生活や退院後にはオカルトや魔術的なものは目に触れなくなかったし……。まさか、こんなところで不利益に働くなつてこつちは想像すらしてない。

「……青空さんが入学してきたあと、つい最近にも先生から授業で習ってただろ？」

「……。忘れちゃつてえ……」

「……青空さんってさ」

「はい……」

「俺が言うのもアレだけどよ……。一見、しゃべり方とか、立ち振る舞いから勉強できるように見えて……。そこまで実はできない感じなのか？」

「ははは、何言ってるんですか上原くん。一般知識は人に教えられるぐらいには得意ですよー？ 上原くんもよく知っているでしょー？」

「じゃあ、魔族知識は？」

「んー……はい」

「……」

「高位魔族について、教えてください……」

「お、おお、おい……。な、泣くなよ……。そんな責めるつもりはなかったんだ。ご、ごめんって」

彼は、筆記用具を取り出すと机に置かれていた口拭き用ペーパーで高位魔族と呼ばれる種族について解説してくれる。

現在、人間側が認知し設定している高位魔族には、吸血鬼、淫魔族、レイス族、ナーガ族（蛇神族）、鬼族、鬼神乙女の6種類がいるらしい。その他にもはぐれものである高位魔族が魔界から現れることもあるらしいが……。ひとまず最低限、門を潜って人類に干渉してくる可能性の高い魔族と言え、この6種類が主な種族のようだ。

説明を聞く分に高位魔族とやらは、私の世界でいうところの『グリード・オールド・ワン』……あるいは、脅威度が若干落ちるが『伝統的な怪物』みたいなものと理解する。これ等は『神格』とまではいかないが、人類にとつて十分な脅威的で恐ろしい存在だ。おまけに人間の行動にちよっかいを仕掛けてきたり、個人的に接触を試み信奉者に変えたり、簡単に破滅的な未来を齎してくる。

私が有している知識として、私が定めている脅威度は

『夢幻の始祖と終焉』 > 外なる神 || 旧き神 > グレート・オールド・ワン > 奉仕種族 ≧ 伝統的な怪物 ≧ 独立種族』  
と、なっている。

この表の外なる神、旧き神を まとめて異形の神々と称したり、その異形の神々や奉仕種族には上級のく、下級のくという細分化がされるのだが……。現状は細分化する必要はないだろう。だって、ここに彼等は居ないのだから。……あれは見間違いなんだ。居るはずがないモノなんだ。

「——とまあ、こんな感じだな」

「なるほど……かなり面倒な連中ですね。……上原くんは、先ほど出会ったショッピングモールの高位魔族種はどの分類にあたると思いますか？」

「俺の見立てでは……そうだな。……青空さんがチャームの術に引っかけた様子があったから淫魔族かなあ……って思ったんだけど。でも淫魔族にしては、俺は魅了に掛からなかったし、動けなくなるほどの威圧と気配があつて素で怒ったときの蛇子に似てたから、あれはナーガ族かも……」

「ナーガ族……ですか……。ところで蛇子ちゃんって怒るとあんな感じになるんですか？ 想像が付かないのですが……」

「おう。まあ……普段の口調にドスが入って、真顔で敬語を話す感じかな……。……一時期、ふうまの奴がいじめられていたことがあるんだけど、そのとき蛇子が虐めている奴にバケツ1杯分ぐらいの墨をぶっかけて強制的に辞めさせたことがあってさ……」

「墨をツ!？」

ええ……。？ いじめを止めさせるために墨汁をぶっかけるって……なかなかないよな。

前世で親友であり幼馴染のような存在だった巴ちゃんとちえのように硯すずりでカルティストの頭を力チ割ってないだけ、良心的な止め方なのかもしれないけど……。いつもニコニコ朗らかな蛇子ちゃんからはイメージが出来ない……。

……。巴ちゃんは、元気かな……。

「虐めてたアイツ……。3日間臭いが落ちなくて、逆にクラスメイトから煙たげられてたっけなあ……」

3日間臭いが落ちなかったあ!？」

販売されている書道用墨汁液ではなく……。まさか、天然の香りを追求して硯で墨を磨り出したのだろうか？ 私も学生時代に書道溶液の墨汁ではなく、墨から錬成したことがあるが……。磨るだけなのに、すごい手間暇と労力がかかった記憶がある……。最後は飽きて、墨を粉になるまで乳鉢と乳棒で粉碎して水で溶かしたっけ……。

そんな手間暇の掛かる貴重な液体をいじめを止めるためにバケツ1杯分貯めて……。ぶっかけて……。……。凄……。

「すごい。……私にはとても真似できません……」

「俺にも出来ねえよ……」

「私なら直接、ガツンと——」

「言って止めに行くのか？ それもそれで勇気があるなあ!」

「いえ、墨でいじめっ子の頭と墨。どっちの方が固いか試しに行きます。それを蛇子ちゃんはその墨で……。平和的に……」

「えっ?」

「え?」

「墨の話……。だよな?」

「墨の話……ですね？」

「え？」

「えっ？」

「なんだろう？ 何か私はおかしなことを言ったのだろうか……？」

でも、墨と言えば習字か、キャンプで火起こしか、エルフの村を全カルティスト焼させる目的とか、練炭自殺に見せかけるとき以外使わないしなあ……。キャンプで墨をぶっかけに行くなんて……。そんなに、ないよなあ……。

でも、やはり……。キャンプで？ 熱した墨をぶっかけた……？

ちよつと小中学生でそれはバイオレンス過ぎないかな……。？ 3日間臭いが落ちなかったのって……。皮膚が焼けただれて？ ……蛇子ちゃん、外見に寄らずアグレッシブ……。

「……ちよつと蛇子ちゃんに詳細を聞きたくなりました」

「それじゃあ、帰りの電車で聞いてみるといいぜ！ 蛇子の中で一番思い出深いと思うからな！」

「そりゃあ……。ねえ？ そんな手間暇かけたら……。そうなりますよね」

「手間暇……。？ ……えっ？」

「え？」

「えっ？」

「えっ？」

「「え??？」」

「今日も、こうして平和な時間日常は過ぎていく……。



## Episode 19 『最高の再開』

蛇子ちゃんの墨汁ぶっかけ事件の話を終えた時点で、既に30分が経過していた。魔族の店の出来事や買い物巡りを含めると既に3時間が経過し、現在の時刻は15時00分だ。

しかし……。いくら待ってもトイレに花を摘みに行った蛇子ちゃんと、付き添いのふうま君は帰ってこない。それどころか連絡の1つも寄こしてこない。うんこ……大便をしに行っただとしてもあまりにも遅すぎる。今の今まで便座に座っていたとすれば、今度は蛇子ちゃんのおしりが心配になってくる。下剤と痔の薬を買っておこうかな……。……。

仮にとつくの昔に花摘みを済ませ、2人だけでお出かけしているのであってもそろそろメールか何か連絡を入れてくれないはずだ。だが、そのように考え始めてしまった今『蛇子ちゃんとふうま君は本当にトイレへ向かったのだろうか?』という変な勘ぐりの感情が沸き上がって来てもいた。『最初から2人だけでお出かけするつもりだったんじゃないか?』そんなふうにも考えてしまう。

——そんなわけがない。

自分に言い聞かせる。きつと五車町に来たばかりの私を氣遣って、ふうま君が企画してくれたに違いない。どうしてこんな風友人を疑ってに思ってしまうのか。疑心暗鬼も甚だしい。結果的には上原くんも一緒に誘うことが出来て、ちよつとしたハプニングには見舞われたが 十分に楽しめているではないか。

スマホを確認しても迷惑メールが1件……入っている以外に何も変わったことはない。念のため、現在地と安否確認のメールを送っているが、まったくもって返信はない。

「ふうま君と蛇子ちゃんから、何かメールは来ましたか?」

「うーん。……特に来てないなあ」

「……お花を摘みに行ったにしては長すぎませんか?」

「うん。そうなんだよなあ……」

リュックサックによって、ほぼ座面を奪われた椅子にずり落ちるか

のような姿勢で天井を見上げながら取り残された相方に確認を取るが、どうやら上原くんの携帯電話にも2人からの連絡はないようだ。彼は私とは真逆に机に顎を乗せて、腕を前に突き出しながらジト目でスマホを弄っている。

「……よし、ちよつと俺見てくるよ」

「では、私も……」

「青空さんは、ここで待っていていいぜ。その背中に背負ってる大荷物重いだろ？ 見つかったら電話するからさ、すれ違わないようにここで待っていてくれよ」

「了解しました。では、よろしくお願いしますね」

「おう！ 俺に任せておけ！」

ぴよんぴよんと跳ねる身長140cmの男の娘の後ろ姿には心配しかなかったが、彼の声は自信に満ち溢れており元気も有り余ってそうだったため、何も言わずに彼を見送った。

上原くんが飲み終えた紙コップを片付けて、背中を荷物に預ける形で天井を見上げ一息つく。先ほどまでの邪推を忘れるように頭の中身を空っぽにして。

春の日光がショツピングモール内をほのかに照らしており、日光によつて照らしだされた真実<sup>埃</sup>が映し出されたカスタードクリーム色の天井を眺めれば眺めるほど、前世での荒事からはオサラバして平和な隠居生活を送ることが出来ているのだなと思うことができている。……自然に微笑みが浮かび、普遍的な人々の声が私をリラックスさせる。

瞼を閉じて、ヘッドホンをスマホに繋げた。あとはスマホに掛かってくる上原くんの連絡を待ちつつ、声を掛けられたときに気が付ける程度の音量で激しいヘヴィメタルの音楽にリズムを刻みながら身をゆだねる。

……

……

…

「ハイ、空いているかしら？」

「ええ。あいていますよ」

しばらくして。不意に先ほどまで上原くんが座っていた椅子の方向から、あの女魔族よりも1オクターブほど高い女性の声が聞こえてきた。

「失礼するわね♪」

「…………自由どうぞ」

…………きつと休日ということもあって、他に座る席がないのだろう。そう思つて仰け反つた姿勢のまま右へ視線を向ける。しかし、そこには誰も座っていない座席が目についた。

…………あれ？

違和感を覚え そのまま左側の座席も見る。右の座席と同じ状態だ。それどころか、先ほどまで休憩していた客の姿が1人も見えなくなっている。先ほどまで座っていた客が食器も片さず、不自然にも食べ残した状態で忽然と姿だけ消して…………。

ギョツとし、首だけ正面に戻す。正面には、不気味なほど妖艶な微笑みを浮かべ、こちらの反応を楽しむように頬杖を突くあの女魔族がいた。今、彼女はこちらを愉快そうに眺めながら手を振っている。

「アイシユウ!!ヘビコ!!チャアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!? ……アツ?!?」

…………ゴチンツ!!!

あまりの驚きにバランスを崩し、悲鳴のような絶叫を上げつつ、みつともなく腕を振り回しながら椅子にバックドロップされるような形で後頭部を強打してしまった。そのまま後転でんぐり返しをしながら、めまいのする視界でよろめきながら立ち上がる。

周囲を見渡せば、つい先ほどまで休憩所にいた他の客が次々と出口から出ていき、出入り口には人間とは思えないような全身緑尽くめででっぷりとビル樽腹の太った肉の塊が、壁ぞいで身を潜めながらこちらを伺っているのが見える。

おまけに窓の方では、雨戸用のシャッターが降りてきており床との重厚な接着音と共に外部から内部、内部から外部へと通じるすべての光景を遮断されてしまった。恐らく外部からこちらの様子を見られ

ることが彼女たちにとって都合が悪いのだ。……この調子だと、頭上で休憩所を映し出している監視カメラの映像も、あの東雲革命派テロリストどもの時と同様に、ハッキングされてこちらの異変に気が付けていないのかもしれない。

「あらあらあぁ♪ 大丈夫う?」

椅子に座ったままケラケラと笑う正面の女の問いかけに答えず、迅速に彼女から距離を取りつつ、一緒に転がった自分の荷物を引き寄せ、荷物に振り回され遠心力が掛かるのを感じながら背中に背負う。先ほどまで十分に水分を取ったはずなのに、口の中が渴いていくような感覚に苛まれる。

視野を広げ、眼球だけを動かして別の突破口を探すが……駄目だッ！ どの出口にも緑色の浮腫／苔りよくしよくに覆われた棘奴隷のような全身緑の太った肉の塊……デブ腹が見える。通常の出口からの逃げ場はどこにもない……！ でも消火栓と非常ベル、消火器はある！

「そんな怯えなくても大丈夫よ。あなたとは邪魔者なしでお話したいと思ってね♪ まずは落ち着いて席に座って?」

「……………」

彼女は立ちあがると日葵用……。つまり私専用の席だと言わんばかりに、先ほどまで座っていた椅子を起こして掌を座席へと向けてきた。

だが私にはそんなエスコート通りに従うほどの余裕はない。

丁度この時は……他に武器になりそうなものとして、大型観葉植物と木製の大量の椅子を振り回そうと考えていたぐらいだ。他に役に立ちそうな武器は清掃員が使用していた大型掃除機が置きっぱなしになっている。武器として振り回した経験談として大型掃除機は最高の得物だが、とっさに改造するための刃物が近場にはない。リュックサックの中身を漁れば見つからないことはないだろうが……。そんな悠長なあからさまな隙に正面の女魔族が動かないわけがない。

……出入り口に脇目も降らず椅子か消火器を片手に突っ込むか？ だが、皆が想定する以上に椅子は案外脆い上に、消火器も噴射時間

は14〜15秒……なおかつ1度でも薬液を噴射させてしまったら中身が空になるまで止まらないのだ。小分けに温存……だなんて器用な使い方はできない。消火器は、数人の目を一時か永久的に失明ぐらいはできるかもしれないが、その特性ゆえに後ろに“控え”がいた場合には対処できない。

「それとも♡ 私のリクレーションルームで“じっくり”大人のお話しが好みかしら♪」

エスコートを無視し続け逃走経路を模索する私に、地声より更に高めの……子供がお気に入りの玩具を見つけて声を上げるような声が投げかけられる。……否。そんな無邪気と言っても、愛くるしい子供とは違う。これは母親が子供を恋人と勘違い……。……違う……。もつと背筋が凍り付く様な……。まるで、母親が子供へ自分自身の兄弟姉妹に向けて発したもののような甘える声色に似ていた。余所向きの猫なで声とは違う……。とにかく目も合わせたくなるような、鳥肌とうなじの毛が逆立っていくのが感覚的に理解できる。

……だが目を離すわけにもいかない。……彼女は人間じゃない。……上原くんの予測通り、ナーガ族なのかもしれない。彼女のはちみつ酒色の光彩の中にある黒目が夜行性のハブの瞳のように縦割れの蛇目へと変わっていた。

大人しく、彼女には近づかず、最寄りの椅子を引きずって、机2個分の距離を開けた場所に椅子を置き座る。逃走案なき今は『椅子に座れ』という彼女の指示に従うしかない。

「そう♪ それでいいのよ♪ ごめんなさいねえ、怖がらせちゃったかしらあ？ あなたがあんまりにも聞きわけがないものだから♪」

「……」

「そんな険しい顔しないで♪ ほらもつとこっちに 近くにいらっしやい？」

「……」

「それじゃあ……♡ こっちから行くわね♪」

「……」

「そんな逃げることないじゃない♪ でも鬼ごっこがしたいのなら、

話は別ね♪ ……良いわよお？ あなたの気が済むまで付き合っ  
て、あ げ る♪」

ゆるやかに接近してくる彼女に対し。席から立ちあがって逃げるように距離を取るも、彼女は明らかにこちらの逃走速度よりも早い速度で距離を詰めてくる。それは、例えるなら……夜間。屋外外套に照らされた自分と自分自身の影……とでも表現すればいいだろうか？

現在、こちらは彼女と目を離さず以前野生のクマに出会った時のように机を盾にしながらから逃げているが、背後を見せようものなら一瞬で毒牙にかけられる。そんな予感がして後ずさりでの逃亡を止めることはできなかつた。

だからと言つて、このチェイスもいずれ強制的に終わらせられるかもしれない。今は彼女が楽しんでいるから付き合ってくれているよ。うだが……飽きるか、気分を損ねれば、きつとそれだけでは済まされなくなる。それは分かっていたし、私がこのように単独になった所を狙つて絡まれているのだ。……上原くんにも追手が向かつて——  
—いや、もう私と同じ状況下にいるかもしれない。この魔族の女がこちら側に来ているとはいえ、到底 彼一人で出入り口を塞いでいるような緑色の浮腫モドキに囲まれてしまったら？ 店の中に潜んでいた高位魔族が他にもいたら？ ……彼では手も足も出ないだろう。早く——早く、助けに行かなければ。

彼女から逃げつつ、深呼吸を繰り返す。

気分を落ち着けて、正面の怪物と1人で対峙し有事には殺り合う覚悟をキメる。

それから、紫先生が私にやつてのけたように適当な机を持ち上げて私と彼女の間に叩きつけるように置き、その机の端に私が座る。

一瞬、彼女も机で攻撃を仕掛けてくるのかと残像が残るような動きで左にそれた動きを見せるが、それが机を設置する動作であること。こちらが爪で対面上に座るように無言のままこちらがノックをしてエスコートをするとニツコリと笑つて座席につく。

……向こうが戦闘を仕掛けてくることを望んだ場合。私がこの女から逃れるには目前にある机を蹴り飛ばし胸部を強打させて、座つて

いた椅子で弧を描くように頭部目掛けて叩きつけるほかないだろう。

## Episode 20 『2つ名』

まずは下手に刺激しないよう、丁寧な日本語を使いながら穏便にこの場を脱出することを目指す。

ここで時間を取られて「上原くんになんかが起きてから」では遅いのだ。正面の相手は人語の通じる、「今は」中立的な立場にいる『グレート・オールド・ワンだと思つて接しろ』と自分に言い聞かせる。……こちらを見下しているような態度が癪に障るが、攻撃を仕掛けるのは相手側がこちらに明確な害意を見せてからでよい。そう考えて。

なに、不意打ちを仕掛ける準備は既にできているのだ。最初の先制攻撃は私が取る。

「フフっ♪ ……もう鬼ごっこはおしまいな？」

「——はい。このまま続けても、私がジリ貧になると思いましたので。……お付き合いいただきありがとうございます。こちらも気持ちの整理が付きましたので、誠に勝手な御申出ではあると認知しておりますが、お話を始めて頂いてもかまいません」

「もちろん♪ そっちがその気なら私は合わせてあげるわ♪」

「——ありがとうございます」

「さて……と。まずは何からお話しましょうか……♪」

「……特に話題を決めていらつしやられないようでしたら、まずこちらから話題を振らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「ん？ もちろん、いいわよ♪ ……なあに？」

「単刀直入にお尋ねします。あなたは……高位魔族と呼ばれるナーガ族の方ですか？」

「あら……っ！ まだ中学生ぐらいなのに、ちゃんとお勉強しているのね〜！ 偉いわあ〜♪」

彼女はこちら側の質問を想定していなかったのか、驚いたように蛇目の状態から虹彩部分を丸くさせた後。まるで姪っ子の頭を撫でるように気安く腕を伸ばしてくる。だが、こちらも身体を仰け反らせその手を空に切らせる。

ここで頭を撫でさせて気分を損ねないようにさせるのは重要な事



ではあったが、先ほど盛大に弾けた静電気が私に対して……「彼女に身体を触れられることに関して」何か嫌な予感を警告していたようにも感じたからだ。

「——あらあら……♪ 頭を撫でられるのは……嫌い？」

「撫でられるのが嫌い……というよりも、初対面の相手にこちらのパーソナルスペースを侵害されたくないだけです。……えっと。それで、質問には答えては頂けない・または答えづらいような内容でしたでしょうか？」

「いいえ♪ そんなことはないわよ♪ あなたが予想している通り、私は「高位魔族のナーガ族」に属する1人で間違いないわ♪ 名前はスネークレディっていうの♪ よろしくねえ♪」

「日本語訳で「蛇子ちゃん」ですネ？」

「だから最初に出会った時から『そうだ』って言ったでしょ？ ……そういうあなたはなんてお名前なの？ かわいいこちゃん♪」

「……ゼラト。Z e a l o t s e e k e rです。またお目にかかりましたね「蛇子ちゃん」」

私の回答に彼女は一瞬目を丸くし、下瞼を持ち上げて目を細める。肩を竦ませて小ばかにしたような、それか正気じゃないものを見るような目つきで鼻で嗤った。だが、どうせスネークレディも本名じゃないのでしよう？ だったら、私の偽名も彼女と同じ対応に過ぎない。完全に彼女はこちらを見下していた。私は前世から見下してくる上位者は、それが神だろうが、人外だろうが一発噛みついて痛い目を見せてやらなきや腹の虫がおさまらない質だ。だが、今日は新しい友人のためにも、ぐつとこらえる。この対応は、いくつか譲歩して私に関する情報を交えた偽名で対応したまでだ。

第一、ここで『青空 日葵』という偽本名を出して五車町まで付きまとわれても困る。『鈴木 琴音』のような完全な偽名を出しても、私の方がこの名前を自分自身であることをインプットできていない結果として、会話の最中にいずれボロが出てしまい相手の逆鱗に触れる可能性もあるだろう。……これは幾分かマシな対応なはずだ。

……。いや……でも、なんだか………厨二病っぽいネーミングセ

ンスになつちやつたな？

でもGod<sup>神</sup>entomb<sup>葬</sup>じゃ直球過ぎるし……。噛みつくものとして、God Eaterはバンダイ〇ムコ商標登録されているし、偽名を名乗ろうとした時点で咄嗟に何も思いつかなかったのは痛いよなあ……。Dismiss<sup>退散</sup>とか、Disperse<sup>分散</sup>とかsearcher<sup>探者</sup>とかいろいろあったのになあ……。なんで、Seeker<sup>探求者</sup>が出ちやつたんだろうなあ……。私、主観的にはそういうタイプじゃないと思うんだけどなあ……。

「……あなたって無謀者とか、死に急ぎ野郎って呼ばれたことはないかしら？」

「癪に障ったようでしたら謝ります。申し訳ございません。……ですがそうお話される蛇子ちゃんも、その名前は本名では無いのではありませんか？　ここは“お互い様”ということで矛を収めて頂けますと助かるのですが……」

「世間知らずなお嬢ちゃん。あなたはイマイチ“自分の立場”つてものをわかってないんじゃない？」

そういつて彼女は頬杖を突いている腕とは反対の手で『パチンツ』と指を鳴らす。その音と共に出入り口側から全身緑尽くめで手には棍棒を持ったでっぷりとビル樽腹の太った肉の塊がその姿を現わした。こちらを　その膿のような塊で覆われた黒目のない眼球で凝視してくる。

……よお、前世でのヨミハラぶりだな！　カルティストのクソオークども……！　お前等、この世界では一匹残らず屠殺工場行きにして民族浄化してやるから覚悟してろよ……ッ!!!!

「あら♪　萎縮させるために見せたのに……そんな殺気立たないで♪　オークは嫌い？」

「ええ。力があればミキサーに放り込みたいぐらいには」  
「ウフフフ♪　素直ねえ。じゃあ、特別に教えてあげる。スネークレディっていうのはね？　私の数あるうちの一つの名前にしか過ぎないのよ。……決して偽名なんかじゃない。それで？　この話をここまで聞いたゼラトシーカーちゃん。あなたの本当の名前を教えてください」

くれないのかしらあ？」

「ええ。残念ながら。どうやら、私たちは似ているようです。私も、この『ゼラトシーカー』というのは数あるうちの1つの名前でございます。そして、これもまた私の名前でございます」

「……この状況でそれを言う？ ……度胸があるんだか、状況を理解できないお馬鹿さんなのか……。生意気ね。すべてを奪ってあげたくなるわあ♪ ……でも、気に入ったのも事実♪ 今日のところはゼラトシーカーちゃん満足してあげる♪」

「寛大なお言葉……恐縮でございます」

許すような口ぶりだが、彼女の光彩は形を変えてより鋭利になった蛇目になった素敵な笑顔が私に向けられた。もちろん、こちらは何も気が付いていないかのような一端の小娘のような愛想笑いで迎撃する。

……そしてここで、ふと閃いてしまった。『ゼラトシーカー』だなんて名乗らずに、前世の親友。巴ちゃんいかつちともえの『雷 巴』の名を借りればよかつた。だが後悔しても遅い。言い切ってしまったのだ。今更弁明しても無意味に終わる……どころか火に油を注ぐ結果になりかねない。

「本題に戻りましょう。私からお聞きしたいことは、あなたのお名前と種族以外に現状はございません。……ですが、そちらはまだ何かあるのではないですか？」

「そうよ♪ これをあなたに渡しておこうと思って♪」

座ったままの彼女から一枚の黒を基調とした名刺が片手で差し出される。名刺には何か文字が書かれており、それは桃色の文字で……  
〈日本語〉で書かれている。

名刺を受け取った瞬間に腕を掴まれないように、と細心の注意を払いながら相手に失礼に当たらないよう立ち上がり、一礼をしながら両手で名刺の端を掴み受け取ってから座った。受け取った名刺には蛇子ちゃんが店で使用している源氏名と、電話番号が書かれていることが最低限見て取れた。

「……」

「さつきは連絡先を交換する目的で店へ誘ったのだけど、断られちゃったからね♪ だから渡し損ねちゃった名刺を渡しに来たの♪  
これが私の携帯電話番号♪ ——充電し終えているなら、登録して  
“今”電話して来て頂戴？ あなたのその本を解読したいのなら、“  
親友”と予定をすり合わせないといけないからね♪」

こっちのスマホの電源が切れているという嘘は見抜かれているようだった。彼女はニコニコと微笑みながら足を組んで私のポケットに指を指す。

仕方なくポケットからスマホを取り出して、机の下で名刺に記載されている電話番号に184を追加した状態で入力し、名刺とスマホ。蛇子ちゃんを忙しなく見つめながら目の前でかけて見せる。数秒もしないうちに“蛇子ちゃん”のポケットから着信音が鳴り響き、彼女はそれを手に取った。

「……あら？ これ、非通知じゃない。これじゃあ、あなたの電話番号がわからないわよ……？」

「あれ？ 故障でしょうか？ こちらは普通にお掛けしたのですが……。おかしいですね。ですが、こちらとしましては電話番号の方は把握致しました。また時間が出来たときにお電話させて頂こうと思います。他にお話ししたいことはございますか？ 今、友人からメールが来まして魔族が休憩所の入り口を塞いでいて入れないから別の場所に集合という連絡が入りまして……そろそろお暇させて頂きたいのですが」

「……そうなの♪ それは大変ねえ……。だけど、私はこれっぽっちのお話じゃ物足りないのよねえ……♪」

彼女は余裕そうに前傾姿勢になりながら、両手で頬杖を突いて足を組むのを止めてニタア……と口元を口裂け女のように笑顔で歪ませる。

……面倒なことになってしまった。確かにこの状況に陥ったのは、少し小生意気な反応を返した私にも要因はあるだろうが、とてもじゃないが最初から逃がしてくれる雰囲気でもなかった。仕方がない。斯くなる上は——ここは大人しく本を渡して引き下がってもら

おう。

「や、やめてください……ぼ、暴力は嫌いです……。も、もしかして……今回 もう一度会いに来たのは、連絡先の交換じゃなくて、あの本が目当てだったりしますか？ ほ、欲しいのであれば、お譲りいたします！ だ、だから暴力はやめて……！」

「今更そんな演技をしたってダメよ♪ さっきまでの威勢はどうしたの？ いくら何でもその代わり身は杜撰ずさんすぎるんじゃないかしら？

私はさっきまでのオーク達を煌めく殺意の目で睨みつけて、脅しにも屈しない姿を魅せてくれた勇ましいゼラトシーカーちゃんを買がったのだから、そのオークどもを嗾けしかけなかったのに……虚勢。……なわけないわよねえ♪♪♪」

「すみません！ 虚勢張ってました！ 無理です！ 小娘がナーガ族に勝てるわけがないです！」

「嘘つきね♪ それにしては目の奥が闘志で燃えて揺らめいているように見えるわあ♪ それに……そんな本はいらあなあい♪ それ“写本”でしょ？ 私が欲しいのは、“本物”の在処と……。……そうねえ、勇ましいけどかわいい悲鳴で鳴いてくれそう……ゼラトシーカーちゃん♡ あなたが欲しいわあ♡♡♡」

震えた手でリュックサックから本を取り出そうとする私に、彼女は目だけが笑っていない表情ですべてを見抜いているかのような口ぶりです。目的を暴露する。

……チツ。この本だけは転生した直前から開いていた本ということもあって、唯一『青空 日葵』のオカルト本で即座に収納をせずに残していた一部の書物だったのだが……。東雲革命派テロリストどもに占拠されたビルで『魔族語』か『魔獣語』の言語で記載されているのではないかと教えられてから、こういう面倒な輩魔族に絡まれた時用のレプリカを用意していたのにバレてしまっているようだ。

……結構な自信作だったんだけどなあ……。でも、この女はどうしてこれが写本だと見抜けた？ 有り余る入院生活の間に本の質も、文字体も可能な限り近づけて『製作』したはずだ。もしかすると“本物の存在がどんなものかを本当は知っているんじゃないか？ 写本

であることをあえてバラすなんて、相手は絶対にこちらを逃がす気などないのではないか？ ……色々と思うことはある。だがひとまずは、この場所から脱することが先決だ。

それに目的が私自身というのとは一番厄介なパターンでもある。 ……この手の邪神は追い払うなり、八尺様や姦姦蛇螺かんかんだらのようにテリトリー内から逃げ切らない限りはどこまでも追いかけてくるのが目に見えていた。

でも、こんな絶世の美女に『あなたが欲しい』だなんて愛の告白をされることは、ノンケでも心臓がときめく程に嬉しい言葉であることには違いはなかった。 ……彼女が悪意の詰まっていないグレート・オールド・ワン級に属する高位魔族じゃなければ、私達は良い友達になれたかもしれない。

——だが、残念だが現実はそのようにはならなかった。 ……彼女の言葉を前世の言葉で翻訳すると『汝我を崇める司祭の素質ありきあなたが欲しいわあ♡♡♡』が妥当だろうか？

……そう考えると嬉しくねえなあ。

まあ、女の言う『かわいい』は男と違って、汎用性が広すぎる意味合いが詰まっているし、ここで彼女に捕まっても周囲にオークが同伴していることから、絶対碌でもない最低な未来しかみえない。

ヨシツ！ ここはひとつ大きな騒ぎを起こして、対魔忍に目を付けてもらおう。いくらか私にも彼女達から注目を浴びてしまうことになるが、ここでこの魔族の女に拉致監禁されるよりは天秤にかけても雲泥の差でマシな方は対魔忍だ。 ……ただ、2つ問題を上げるとするならば、私は対魔忍と接触する方法を知らないこと、対魔忍は到着が遅いことが最大級のネックだ。

……まあ、結局のところ……この局面。半分ぐらい人生を詰んでいく。

しかし、このまま大人しく捕まるのは私が癩に障るので、せめて一矢報いてから捕まってやるつもりだ。震えた様子を見せながらも……机の支柱に掛けた足へ力が入る。

♪♪♪

その時。この殺伐とした空間に似つかわしくない着メロが流れ始める。

……この可愛い唯一無二のメロディ設定は上原くんからだ。よかつた。電話を掛けて来られるというこのことは、まだ彼には魔の手は差し迫っていない。……あるいは正面の面倒な連中に捕まっていないようだ。あのクソオークどもが彼を捕縛してこちらを脅迫しに来る線も考えられるが、蛇子ちゃんの様子から鑑みればその確率は非常に低いだろう。

とにかく、彼が無事ならこのショッピングモールから離れてもらって、人の目が大勢ある『まえさき駅』に逃げるよう促さなければ……。不意打ちによる先制攻撃を仕掛けてやろうと意気込んでいたにもかかわらず、締まらない状況の発生による恥ずかしさで唇を噛みしめつつ、正面の蛇子ちゃんに『少し待って』と人差し指を立てたジェスチャーを送って、目尻を下げて今にも泣きそうな顔でお願いをしている。

……話が分かるタイプではあるらしい。……それとも本当に気に入られてしまったのか。はたまた強者ゆえの余裕か。仮に私が助けを呼んでも、それまでには捕まえられるぐらいに思っているのだろう。……随分と舐められたものだ。

こちらが通話に出ると、彼女はあくびのような溜息のような息をこちらに向けて吹きかけようとしてきたため、こちらとしてはひとまず露骨に嫌そうな顔をして席を立てて距離を取った。くつついて電話の内容を盗み聞きをしようとして来ない分、高位魔族でも最低限のデリカシーは持ち合わせているらしい。

「……はいお世話になってます。いつもイアイア這い寄る狂宴。ゼラトシーカーちゃんです。お電話番号にお間違いはございません。ご用件をどうぞ？」

『はあ……っ！ はあ……っ！ えつと……青空さん!』

「ああー！ 上……アツ！ アツアツアツアツ………Wow!

upper! マイフレンド! そっちは大丈夫!? ふう……

Hulu君と蛇子ちゃ……ああ、えつちなお店で働いてない方のス

ネークレディちゃんと合流できた？」

『な、何言ってるのか分からないんだけど、い、いま、それどころじゃなくて……！早くそこから逃げてっ！このショツピングモールは……っ!!!あの茶色のケモミミは……！……うわっ！やめろっ！離せっ!!!離せよっ！離せええええええっ!!!』

「……My friend? My best friend!? Hey?! My honey?!?」

電話越しから、これからこの休憩所で発生する未来を予見しているかのような乱闘音。

遠くの方から上原くんの必死の抵抗音と叫び声、口元を抑えられぐももった悲鳴、ガムテープを引きはがすような音、何かの《呪文》のようなおどろおどろしい声、その電話が掛けられている周囲からは不気味で異様なほど環境音が聞こえてこな……いや、微かに何か聞こえた。少しでも情報を集めるため、蛇子ちゃんを警戒していた脳のリソースを全てそちらに注ぎ込む。〈聞き耳〉を立て、全神経を電話の受話口へと集中させる。……この微かに聞こえてくる音は……店員呼び出しの館内放送だ。『二トロ』の家具コーナーの呼び出し音が聞こえる。それと男子トイレの自動洗浄水の流れる音と、奥から搬入口が締まるような……。

ここで視線の端に映る両指を組んで腕を上げながらゆっくりと伸びをしている蛇子ちゃんにも聞こえてしまうほどの音量で、スマホが思いつきり踏みつぶされる異音が鼓膜をつんざき電話が切れる音に切り替わった。



Episode 21 『ナーガ vs 探索者』

「……」

「……最後の通話は終わったかしら♡？」

彼女はまるで恋人が急用の電話を仕方なく眺めるかのように、あれから手出しもせずに、ただ余裕そうに……これからどう弄んでやろうかと画策する強姦魔のような目でこちらを眺めていた。

私は……私は携帯をポケットにしまい、リュックサックを背負いなおして、貰った名刺は財布に入れて、礼儀正しく彼女の正面の椅子に座る。それから彼女に向けて突き立てていた人差し指側の手を人差し指の立てていない手でそつと中指、薬指、小指の3本をそつと立てた。

……私がこれから雰囲気でも穏便にお開きしようと言を持ち掛けようとしたことに気が付いたのか、蛇子ちゃんが笑顔のまま無防備に前かがみになりながら両肘を机について鼻から溜息をつき、視線を私から外す。

その瞬間を見計らって、こちらは机を渾身の力の限りに蛇子ちゃん目掛けて蹴り飛ばした。

「……それで？ 次はどうするのかしら？」

しかし不意打ちによる先制攻撃は、指を組んでいる状態からでは考えられないほどの機敏な動きで悠々と片手で受け止められ、ゆっくりと眉を持ち上げながら視線がこちらに戻される。

……うん！ さすが、グレート・オールド・ワンに該当する高位魔族！ まともに正面からじゃ勝てないわ！ …… あー。クソツ。12ゲージ・ショットガン（2連）が欲しい。ショットガン1つでもあれば、戦術は雲泥の差で広がる。蛇子ちゃんが両手口の牙／傷口に膿を齎すもの程度のグレート・オールド・ワンなら従者もろとも一点突破撤退／強制物理退散という選択肢も取ることもできた。

だが無い物をねだっても、そんな武器が天から落ちて来て手に入るわけでもない。……この場にあるものでやるしかなかった。一瞬でも彼女から逃げることでできる隙を作り、あの包囲網を突破できれば

いいのだ。噛み付いてやるのは変わらない。だが最終的な目的はこの場からの離脱だ。

奇襲を防がれ、彼女が私に視線を戻した時点で、こちらは座っていた椅子を正面のナーガ族の脳天に叩きこもうと椅子を掴み上げていた。

……しかし紫先生の戦斧を振り下ろす速度より圧倒的に素早い、その場に残像が残されるような動作で背後へ周り込まれてしまう……！

彼女の動きを追って、振り返った時には不気味に微笑んだ顔が目と鼻の先まで接近していた。

無論 手に持った椅子を使った防戦を試みるが、断然相手の方が素早く遠慮と情けと容赦のない顔面への攻撃が私に振るわれそうになる！

こちらも顔面への攻撃は避けるために瞬時に椅子を手放し、両腕でバイオハザード8のイーサンガードを繰り出す。しかしプロボクサーの拳のように重く、蜂の毒針による一撃のように鋭利な拳が腹の中央を抉り突き上げるように……胃へのボディブローとして突き刺さった。

「ミ。ユッ?!」

凄まじい衝撃に防御したものの見間違いで無防備な腹部への殴打でふわり……と浮かび上がったかと思えば、次の瞬間には身体が『くの字』になって後方に吹き飛ぶ。

高校生の身体とはいえ、人体が約2.5m吹き飛んだのだ。外見からは想像できないほどの馬鹿力でただ啞然とし、自身が何者と対峙しているのか状況を再認識することになった。

そして、何よりも こいつ……! <武道「立ち技」の「フェイント」を放ってきやがった!!!

「ゴッ……オッ ツ オエッ ツ……。オエッ ツ……オエロッ ロッ  
ロロロロ……」

ビチャビチャビチャビチャビチャビチャビチャ!!!

今の一撃で胃の内容物が、激しく刺激され 上原くんと一緒に飲ん

だ水やらお茶が食道を遡り、鼻と口から逆流。休憩所の床を汚す。

えつちなお店の蛇子ちゃんは、まるでプロレスラーが花道を歩くように、母親が久しぶりに再会する我が子を出迎えるように優しく腕を広げて、邪悪でサディスト的な笑顔を張り付け優雅に着実に歩み寄ってくる。立ち上がるうにも、胃液は次々に込み上げて止まらないわ、内臓へのダメージが重すぎて視界は歪むわ、やっと立てたと思えば足が生まれたての小鹿<sup>バンビ</sup>だわ……こちらとしては、ひどい有様だった。

とにかく、上原くんはこの惨状を見られなかったのは最高にへ幸運だ。こんなゲロ女の醜態は彼だけには “絶対” に見せたくない。口から滴るゲロを袖で拭い、口腔内の残渣物を自身の足元に粘り気のある唾液と共に吐き捨てる。

「ほらあ、まだ一発目よお？ ああ、ごめんなさいねえ♪ 本当の予定では優しく眠らせてあげて♪ 腰が砕けちゃうほど♡気持ちよくさせて、あげて♡ 『カオス・アリーナ』に招待してあげようと思っただけけど……礼儀の成っていないメス豚が目の前にいるものだから……つい軽うく♪ 小突いちやった♪」

「ゴホツゴホツ！ ツアツ！ ……ハアツ！ ハアツ!!!」

「——でも私の動きに付いて来られるなんて凄い反射神経ねえ♪ 対魔忍でも中々できることじゃないし……お嬢ちゃんは何者なのかしら？ ……対魔忍……じゃないわよね？」

「……フツ……はははは。ゼラトシーカーだツて言っているでしょ……」

「そつかく♪ まだお話したくないのね♪ それは残念だわあ……。それじゃあ、もう少し肉<sup>コッ</sup>体言語<sup>チ</sup>でお話合いしましょう♪」

遠心力すら入っていない筈なのにゼロ距離で放たれる重い上腕<sup>ラ</sup>二頭筋<sup>アット</sup>が、立ち上がったばかりかつフラフラの私をはじき飛ばす。並べられていた机や椅子、食器を巻き込みながら——私は錐揉み回転して飛んでいく。背中に背負っている大荷物のおかげでだいぶ落下の衝撃は緩和出来ているが、今の太胸筋への一撃は、私を呼吸不全に陥らせるには十分だった。

「ガツ……ア ツー……ツ!!!……ツツツ!!!」

肺を潰されて、息が吸えない。息を吸おうと口に息を取り込もうとするが、のどの奥に何かが詰まったような感覚があり、息が吸えない。何も詰まっていない筈なのに……ッ！ イキガ……！スえナイ……ッ！

両手で首を抑えながら息を吸い込もうと白目になりつつ、足を痙攣させながら床に叩きつけ、左右に転がりながら悶える私を入り口で陣取っていた緑色でブヨブヨの醜悪なモノが姿を現し嘲り笑う。

胸部圧迫による窒息で意識が朦朧とする私の胃にオーバークルに等しい殺傷力のある心臓マツサーズが突き刺さる。吐瀉物が噴水のように吹き上がった。普通に意識が消し飛びそうになるぐらいには痛いし、加えて窒息による攻撃も私に加えられている……！

「ゲホッ!!!!ヴェオッ、ロッ、ロッ、ロッ、ロッ……ッ!!!!」

「今更『やめて』って言ったって止めるつもりはないからね♪ 素直になれなかった自分を恨みなさいな♪」

腹部を守り、吐瀉物が気道を防がないようにするために、うつ伏せになってミノムシのように悶える私の髪を掴み上げて顔を無理やり引き上げる。ブチブチと毛が抜ける音が聞こえる。頭皮も痛い、内臓への痛みが絶大で気にする余裕なんてなかった。

「ヒュッ。ヒュッ……ヒュウー……。ゴホッ！ゴホゴホッ!!!」

「……わ……」

「……わ？」

「……笑わせるなよ……厚化粧……ババア……！……フアンテーションが剥がれてるぜ？」

これ以上猫を被っていても彼女はその攻撃を緩めることはないだろう。彼女等は魔族。人語が通じるとはいえ……私が彼女たちについて理解するまでに至るまでは。少なくとも今は。人間の道理など通じない畜生どもとして接するべきなのだろう。

胸部を抑え、鈍く響く痛みを左手でかばいつつも 頭上から見下ろす高位魔族に飛び掛かろうとする猟犬のように睨みつける。

「♪ いいわあ♪ やっぱり、それがあなたの本性なのね♪ その反抗的な目つき……それが屈服して、怯えた目になったとき……それは

私にとっての最高のエンターテインメントで、ゾクゾクしちゃうの……っ！」

だがこの行動は彼女を悦ばせる行動に他ならなかった。トロン……とした恍惚に溺れるような淫らな眼差しで舌なめずりをして見せる。その舌は小柄で綺麗なイチゴ型の桃色をしており、その仕草から淫靡で妖艶な彼女を引き立てていた。

……だがそんな舌は、スネークレディの名にフアンキーさに欠ける。

——お前の身動きを一切封じた暁には、その舌を真つ二つに蛇らしく引き裂いてやる。

彼女は掴んでいた髪を一旦放すと、今度は頭蓋骨をまるでトロフィーを掲げるように片手で掴み上げ、こちらの足が宙ぶらりんになるほど高く持ち上げる。同時に頭を握り潰されるような激しい痛みが……！ あゝあゝあゝッ……！ お前はバイオハザードRE3のネメシスか……ッ！ 痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いッ！！ 割れる割れる割れる割れる割れる割れるっ！ 脳漿が飛び出るうッ！！

鼻頭の裂傷や顎への一撃、眼球を抉り出してやろうと腕や足を伸ばし逆転の一撃を狙うが……。相手の方の腕が長く私の手足は彼女の目の前で空を切るばかり。

そんな状態にも拘わらず、彼女は微笑を浮かべて私が見せたように軽く仰け反るようなしぐさをしてみせた。

「えーつとお……。こういう時はなんていうんだっただかしら……。そう！ 私は〃撫でられるのが嫌い……というよりも、初対面の人間にこちらのパーソナルスペースを侵害されたくないだけです〃……だったわねえ♪♪♪」

まるで私の頭は砲丸だというように、大きく振りかぶったかと思えば力任せにぶん投げられる。

——こいつ！ 私の発言を皮肉返しとして……!!!

上空で強制的に側転し荷物をクッションに着地するものの、床に叩けつつけられた胴体は、まるで粘着質なスーパーボールが跳ねるかのよ

うに鈍いバウンドを発生させ、荷物からの圧迫と着地の衝撃が背骨を軋ませた。拳句の果てには、周囲の家具が吹き飛ぶ音を響かせながら床を滑っていく。反射的に頸椎を守る姿勢になるが、その分腕や肘に衝撃が走る。

『ああああーッ！ 痛いーッ!!! 痛い痛いーッ!!!』なんて駄々をこねる子供のようにその場で、四肢を投げ出して全力で泣き出したような気持ちと痛みに悶えそうになるが、それは正面の女を悦ばせるだけの行動にしか過ぎない。だから痛みでおかしくなりそうになりながらも、声を出さないように堪える。

この痛みは具体的に特殊部隊 “楯の会” に装甲車で撥ねられたときや、味方だと思っていた存在から12ゲージショットガン（散弾）を約10mの距離で浴びせられたときと同じぐらいに痛い。

「フッフッフ そんな激しく距離なんか取っちゃって……♪ 私の事がそんなに怖く見えたのかしら？ そんなに怯えなくても大丈夫♪ あなたが意識さえ手放してしまえば、きっとラクになれるわ♪」

……心から面白そうに嗤う彼女を見て奥歯がガチガチ鳴り始める。  
——これは恐怖か……？ 否。4割は怒りだ……ッ！

彼女は横転していない机上に乗せられた他客の喰いかけであるラーメンを手にとつと、私の頭からジャバジャバとラーメンの汁と麵……

——カポツ……

おまけに頭部に器までかぶせてきた。こっちは激しい衝撃の連続で意識を失いそうになりながらも、怒りを振るい立たせてCG版<sup>初</sup>搾精病棟のアマミヤ先生の如く白目を向き、震えがピークに達させて意識を保つ。

殺す……テメーも今まで対峙してきた異教徒同様、宇宙の彼方までブチクロス……ッ!!!

「フッフッフ……怖がらせちゃったかしらあ？ 貴方が悪いのよ？

もっと下手<sup>したて</sup>に出てくれば……今頃、私の店で天国に上るような気持ちいい♡体験ができたのに。ここまで痛い思いをせずに簡単に墮<sup>お</sup>としてあげたのに……♪ ウッフッフ♪」

どうやら、蛇子ちゃんの声が耳元まで聞こえる。どうやら顔を近づけてこっちの怯えたご尊顔を拝見したいようだ。……見たけりや見せてやるよ……!!!

「あら〜♪ すごい可愛いお顔♪ そう。その眼。その眼が見たかったのよお♪♪♪」

ああ、素人による〈芸術・演技〉にも気が付けない馬鹿野郎に私は今最高にキチまってるよ……!! バカ女の勝ち誇ったバカみたいな笑い顔になあッ……!!! 城之内スマイル ほんのり線が浮かんでんぞッ! 化粧の厚さが足りてねえみたいだなア!!!

「……でも。気に食わない。気に食わないわあ……」

「……」

「その瞳……表面上は震えていて舐め啜りたいぐらいにかわいいのだけれど……。奥は全く震えていないどころか、決して消えることのない炎が燃えているような……。そんな目」

「……」

「抉り出したら面白いかしら♪ いいえ、そうだわ♪ せっかく観客もいるのだから彼等にも楽しんで、もつと徹底的に自分の立場を理解して貰いましょう♪」

「……ゲヒッ」フゴッ

オーク達がにじり寄ってくる。……ああ、これは俗に言う凌辱対魔忍タイムパーティか……。クソッ! 平和を謳歌していると思った矢先にこれだ! 今日は不幸がプロレス技のフルコースを仕掛けてきた!

クソが! ジツパーチャックを下ろす音! おちんちんランド開園の音がする!!!

「でもお……♪ さすがにまだ中学生っぽいし……さすがに初物がレイプは可哀そうかなあ……? ……いいことを思いついちやっただ♪ 『スネークレディ様、身の程を弁えず 無礼な振る舞いお詫びいたします。私は人類以下の卑しいメスブタです! ぶひい! ぶひいっ!』って鳴泣いて みて せて♪ そうしたらあ……♪ 許してあげないこともないわ」

蛇子の笑いにつられるように周囲の下種どもがゲラゲラと笑い始める。

私もその笑い声につられそうになるが、肩をプルプル震わせる程度で堪える。いやあ……実にこのセリフを呟く黒幕は最高だぜエ……。相手にそのセリフを言わせるために真つ先に自分が人以下、豚発言を自分の意志で発言するんだからなあつ!!! 私も滑稽で嗤つちまいそうだアーーツ!!!

「……」  
耐えろ……！ まだ嗤うな……っ！ ここは屈服している感を見せて形勢逆転してやるのが、最高にツ!!! 面白い展開になる……ツツツ！

「ほら、言つてくらんなさい？ 恥ずかしがらずに……♪ ね♪」  
ま、私に非戦闘時のような余裕そうな笑みを浮かべるこの魔族蛇子ちゃんの女は結局のところ。最終的な終着地点として『許すとは言つてない』つて言つて、こつちが絶望に歪む顔を見たいだけなんですよね。わかります。と脳内に残された僅かな冷静な処理部分で思う。

……わかりますとも。私も——駆け出しの時。カルティスト異教徒にしてやりましたから。……相手にこの発言を強要させるのは、自己満足ですよね？ どちらかと言えばそちら側の人間なのでわかります。その考えていることも。やりたいことも。……これであれですよね？ 『メスブタ』つて言わせて『メスブタに人権なんてないわよねえッ!!!』の流れですよね？ わかります。やりました。やりましたとも。私もそつちの加害者側で王道を通過済みです。経験者です。同類なかまです。

「……スネー……レディ……」

「なんですつて？ 聞こえないわよお？ もっと大きな声をだして♪」

「……スネークレディさあ……ッ！」

「もっとよ♪ もっと、大きな声で♪♪♪」

彼女は私のか細い声を聞き取るために耳元まで顔を近づける。うつけめが……。





なる……！ まじいつ!!!

「お遊びはここまで……♡ 続きは『カオス・アリーナ』で思う存分遊  
びましょう♪ あなたは長く♪ ずっと♪ 楽しい玩具おもちゃになりそう  
ね♪ くすくすくす……♪」

「ガア……クゲ……ッ」

## Episode 2 『残酷な勝利宣言』

「お遊びはここまで……♡ 続きは『カオス・アリーナ』で思う存分遊  
びましょう♪ あなたは長く♪ ずっと♪ 楽しい玩具おもちゃになりそう  
ね♪ くすくすくす……♪」

「ガア……クゲ……ッ」

四肢の一本も動かせないような拘束に、ただただ目の前のオークど  
もを誘惑し喜ばせるストリップパーのように身をくねらせることしか  
できない。遠のく意識で微かに聞こえる嘲笑に殺意が煽られるが  
……もう何もできない。

全身が小刻みに痙攣し始め、股から生暖かいアンモニア臭のする液  
体が噴射していくのをズボン越しに感じる。まずい！ これは、本当  
にまずい！ もう最初からまずいけど、全部がまずい!!!

首を絞められつつも、いまだに僅かだが自由に動かせるのは頭部だ  
けだ。この頭部すら完全に拘束されたらガチで即墮ちた2コマ肉便器ま  
になつてしまう!!!

それだけは嫌だッ！なんで、蹂躪されて対魔忍世界に来たのに！

また凌辱されなきゃいけないの!!!

「対魔忍の子たちなら、もう落ちていいる頃合いなのだけど……。しゅ  
といのね♪ なら……♡♡♡」

アレ!? ちよつと待つて！ 今の微かに聞こえた“なら♡”て何  
?! 凄まじく嫌な予感しかしない！ ウオオオオオオオオ!!! こん  
なところで肉便器になんかなつて、嫌ッ！嫌あつ!!!

—— あゝがッ♡♡♡!

あがつ、あがががががががががががあつ♡♡!? な、なに?! 身  
体と身体が面している部位から……っ♡! 何かがっ! 何かが流  
し込まれてえっ♡♡♡♡! ……痛いのに! 苦しいのにいっ?!  
気持ちいい♡!? 頭の中でキラキラ! きらきら! きらきらあつ♡♡♡  
♡♡♡! 星が輝いて♡ 屋内のはずなのに♡♡♡!? 夜空が♡! 星  
が♡! 星辰が揃う♡♡! 我が主よ♡♡♡! ああつ♡♡♡! 心の臓が  
♡♡! 体の芯が♡♡♡!

ずりずり……♡ ずりずりつてえっ♡♡ お尻の割れ目に♡

脈打つ棒状のモノがコスられてツ♡♡♡!? 膣から甘酸っぱい蜜  
が滴るのが、ぐちよぐちよ♡とこすれ合うシヨーツ伝いに……♡♡♡

♡♡♡ 子宮<sup>ポルチオ</sup>入口付近が熱を持って♡ 膣や子宮の形をはつきりと認  
識が♡♡♡ 女<sup>メス</sup>として、奥まで挿入れられたいって♡♡♡ 疼いてっ♡

♡♡♡ あひっ♡♡♡

「ほら……♡♡♡ だんだん気持ちよく……♪ ゆっくりと夢の中へ……  
♡♡♡」

耳元で蛇子ちゃんの声だけがツ♡ 甘く囁く毒のように脳を支配  
して♡♡♡! 周りにオーク達が居るはずなのに♡♡ 蛇子ちゃん  
以外何も見えないっ♡ 何も聞こえないはずなのにいいっ♡♡♡!  
お星様♡♡♡! しゅごい♡♡! しゅごいいいいっ♡♡♡ 鬼塚キ  
ララあっ♡♡♡♡

身体が細かく激しく痙攣し始める。これは絶頂を感じて肉体が悦  
んでいるのか……。それとも立て続けの酸欠によって限界を迎えつ  
つあるのか……——

それでも濁流のような快樂……否、活力の波が全身に行き渡ってい  
くのは理解できる。

みなぎってきたゼエツ！！！！

水に浸された布のように滲み広がっていく暴力的な快樂の波が、ドライヤーを押し当てられ乱暴な乾燥をしていくように意識が聡明に澄み渡って勝っていくのを感じていた。相変わらず四肢は一切動かないけど、身体に力があふれる！ 目の前でお星様がきらきら！ きらきらするうっ！ ああ！ ああ！ 我が主が力を授けて下さった！ 素晴らしい！ いあ！ いあ！ 先ほどまで蕩けてしまっような熱を持ち、生命の危機に瀕して敏感になっていた性感帯が生存本能むき出しの過剰反応を引き起こして局部から全身が過敏な状態に切り替わっていく！

「……グピツ♥ ……クヒツ…… グイギヒキヒキキキキツツ！！」

「……。おかしいわね。対魔忍でもイキ狂うほどの媚薬を……スネークポイズン  
蛇の神経毒で流し込んだはずだけど……。 ……どうしてまだ堕ちないの？」

狂いそうになる感覚に飲まれながらも無意識のまま、麻薬を過剰摂取したときに経験したサイケデリック体験と同調するように激しくオーケストラの奏者が音楽メロディに合わせて首を振るようにヘッドバンギングさせる。まるでE・ツァンの譜面／狂宴の頌歌様の寵愛を授かった時の如く指揮と慰安曲を奏できるように首を振る。痙攣する指でリズムを刻む。入学初日や前世でよくやっていたアレだ。なにやら、この魔族はならをするつもりらしいが、なら使われる前ならをならして、アレをならして、私も全力で奈良をする。（おめめグルグル）

そう、略して絶叫を上げながら、頭ヘッドバンギングだを振る。（おめめグルグル）

これは私の経験論にしか過ぎないが――

暴れまわるグレートオールドワンには、外なる神をぶつけければ 大  
体何とかなるんだよ！（暴論）

半分意識は飛びかけていて、白目を向き、上の口からは大量の泡、下  
の口からは粘液がトロトロ……と垂れ流していたが、一向に問題はな  
かった。

……そう。ここには上原くんはいないのだ。……上原くんには見  
せられない。……絶対に見せられない。ほんつとに居なくてよかつ  
た。ありがとう制御リミッター。ウィーイヒヒヒッ!!! グギ、グギ  
ギギツギギツギギギッ!!!（よだれダラダラ、おめめグルグル）

……覚えておいて欲しい。女つてのはな、周囲や環境に一切の男が  
居なくなるとおっさんになるんだ。……前世の女子高の時がそう  
だった。異性のいる共学が一番平和で“かわいい女子”をふるまう  
ことができるのだ。ありがとう上原くん。そのまま待つてて。

——今、助けに行くから。

「ッ！ どこにそんな暴れられる力が……っ！ 痛ッ！」

乱れる髪、蛇子ちゃんの眼球に侵入したと思わしい私の髪！

——振れ!!! 振り散らかせ！響かせ、震わせるッ!!! 私の魂！ 臍物の

芯から熱く焦がすハードなメロディ!!!

神にも認められ、退散させた私の魂からの絶叫!!!!

そうだ!!! 肉便器たいまにんになつたら絶対にへヴィメタルは二度と出来な  
いッッッ!!!

「ヴッオッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ —— ツッ  
ッ!!!」

——ガッンッ!!!  
「ギッ!!!」

今！ガッン！ガッンって確実に言った！言った！言った！痛つ  
たアッ！ 後頭部に蛇子ちゃんの歯がぶつかったような、私の頭頂部  
に激痛が走った!!!

先ほどまで見えていた星とは別の星が見える！ 薄汚い掃除の行  
き届いていない天井が見える！ これは私の「頭突き」が決まった!!!  
そう。私の切り札！ さつきは外したが、今度は確実にブチ当てる

ことができた！ これは勝った！

〈頭突き〉によつて拘束が一瞬緩んだところを狙つて、水中の鰻うなぎのようにするり……とすり抜ける。

——『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』の〈頭突き〉は“相手の戦意を失わせる強烈なもの”（81頁）なんだゼエーツ！ よーく、覚えておきなア!!!

奴の身体から逃れた瞬間、身体全体を支配していた暴力的な性的熱が冷水に浸されたフライパンのように冷たく冷静になつていく。指先をグー・パー・グー・パーと何度か動かして、身体の調子を確認するが一切問題はない。

こっちは『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』（63頁）“負傷のスポットルール《毒》”の効果によるものか……あるいは『新クトゥルフ神話TRPG』選択ルール：124頁“毒”によつて得られる効果のおかげだろう。

火照つた身体が急激に冷えていく現象に関して 彼女は私の身体に何かをしていたのであろうが、今はのんびりとこれ以上の解説と考察を広げている時間はない。

だが、これだけは言わせて欲しい。

常に切り札つてやつは1つか2つは残しておくつてもものが戦いのセオリーつてモンだツ!!!

まずは先ほど引きはがされてしまった荷物をひつたくるようにして、リュックサックの回収！ そのまま負傷者とは思えないような軽やかなフットワークで机に登つて、SASUKEのギミックを踏破する要領で〈跳躍〉を用いて、腕を伸ばしてこちらを捕らえようとするオークどもの包囲網を頭上から飛び越えて振り返る。

背後を振り返つて視線を向ければ、2人のオークに両脇を抱えられそうになるのを突き飛ばして振り払う……えっちなお店で働いている蛇子ちゃんの姿があつた。歯がよつぽど痛むのか、身動きを取れずに口を抑えて両目に涙を浮かべてナーガ族にふさわしい顔でこちらを睨みつけていた。

「ギヒッ！ ギヒヒヒ……」 あらあらあらあ？ 怖がらせちゃつたか

しらあ？ そんな険しい顔しないで、ほらもつとこつちに近くにいらつしやいな♪」

「……コ、コノツ！」

トリップ体験の余韻が響いているかのような素振りを見せながら、さつきのお返しとばかりに先ほどまでの彼女の仕草を真似ながら全力の皮肉返しを彼女にぶつける。

彼女のアイコンタクトで、彼女を取り巻くオーク達が全力で接近し捕縛を試みってくるが、私は慌てない。最大の脅威である蛇子ちゃんは私が放った〈頭突き〉の効果で1D6ラウンドの間は、12秒から72秒の間は〈頭突き〉の衝撃で身動きを取ることが出来なはずだ。(6版161頁) 衝撃を受け、われを失ったことによる身動きの制限が掛かるはずだ。

これこそ、勝利を確信している強者の余裕だと見せつけるように可愛らしくウインクを飛ばし、こぶしを振り上げ勝利宣言をする。

……明らかに私の方が吐瀉物ゲまみれだし、頭からは歯で抉られたことによる流血が激しく噴き出し、口端から大量の泡を吹きながらも異様に笑顔で歪めて、よだれがこぼれ落ち、上半身はラーメンの汁塗れ、下半身はいろんな体液を漏らした状態。露出している皮膚はどこどころ擦り切れ打ち身だらけで……でも、こういうのはそれっぽい雰囲気を出したほうが傍から見れば勝ったように見えるものだ。それも相手が、小物っぽい発言をしているのならば、自分を輝かせるには今しかない。

ほぼグレート・オールド・ワンと同格な存在に対して……噛みつき、一矢は報いた。精神的に。

それから約2週間ぶりの非常ベルを叩き押し、休憩所から火の手が上がったことを大声で知らしめる。私も鬼ではない(ゲス顔)。蛇子ちゃんとそのオトモ達が放火したけど、自主的に消火活動に勤しんでいる的なマツチポンプ情報を拡散してやる。

——オラッ！ 本件が対魔忍どもの耳に入って二度と表立って商売ができなくなっちゃえ!!!

何。彼女たち側から勝手に窓の雨戸を閉めてしまったのだ。〃中で何が起こっているかなんて〃本当の事は、その場に居合わせた当事者しか知らないし、私はその場にいた当事者であり、その当事者が非



常に「中での惨劇」を表すかのような姿で盛大に騒いでいるのだ。床を転がり続けた結果、衣服は床の埃によって黒ずんでまるで煤が付いているように：火災発生を裏付けるかのような状態を見せつけることが出来ている。内部事情を何も知ることの出来ない一般人は、突然鳴り響いた非常ベルの騒音と私の扇動によって、ただそれを鵜呑みにするほかない。

こちらの予測通り即座にショッピングモールの休憩所付近の人間たちは非常ベルと火災発生宣言に驚いて我先に逃げ出し始める。私は、その光景を目にしながらかくそ笑んで、逃げ出す人々の進行方向に逆らって混じり、一目散で逃走を開始した。

「ボウ♪ ボウ♪ ボウ♪ ほらほら♪ 早く逃げないと、みんな焼け死んじゃうぞ♪」

魔族のオークどもが発しているかのような低い声を意図的に発しながら、周囲の人間に恐怖を伝染させるための「言いくるめ」を放つ。

魔族のオークどもでは凶体がデカく、いくら一般人どもよりも腕力が勝つていようがパニツクを引き起こし、出口へ殺到する人間の津波を押し退けて小柄で機敏な私を捕まえるだけのことはできない。最高の勝利宣言の如く、嘲笑うかのようなカラカラという笑い声を蛇子ちゃんにも聞こえるように高らかに響かせながらフードコートコーナー付近の出口より脱出する。

オーク達の前から完全に姿をくらます前に最後に投げキッスをして、外に逃げたように見せかけた。オーク達も外に出てきて私の事を探し始めるが、既に私は他の建物内で「隠密」行動を取っている。

……  
……  
……

……私はこのまま逃げ帰るわけにはいかない。

このショッピングモール内には上原くんが居るのだ。彼の身は今危険に晒されている。助け出してからここから脱する必要があるし、3時間もお花に肥料を撒きに行った2人にこの情報を共有しなければならぬ。

スマホを開くが、トイレで農園を開くつもりふうま君と蛇子ちゃん  
のどちらからもメールは来ていなかった。代わりに迷惑メールが  
5件追加で入っているようだ。お返事が欲しいのはお前じゃないん  
だが……。……。開いたことはないが、どうせこのタイミングの迷惑  
メールだなんて日葵時代の怪しいオカルトサイトで登録したメール  
の名残に違いない。2人はちゃんと別個に登録しているのだ。迷惑  
メールには入らない。

物陰に隠れつつ、ショッピングモールから今すぐ離れるような趣旨  
を書いた新規メールを頼むからメールを見て欲しいと祈りながら一  
斉送信する。

………

………

………

## Episode 22—Tips 『スネークレディの 通話記録』

月に数度掛かる “部品” を蛇スネークポイズンの麻痺毒によって身動きを封じた後。人体保存用保管箱に詰め込んでカオス・アリーナ行の運送業者オークどもに受け渡しを行う。私の行為は、すべてシヨツピングモールの監視カメラに記録されてしまっているが、既にシヨツピングモールの管理者は買収済みだ。

私の目前で行われている映像は、その日のうちにすべて加工された映像に差し替えられる。

哀れな部品の愛液や、私が分泌した精液で薄汚れている店内の掃除は下卑なオークどもに任せ、完全防音室となっているオフィスでソファーに背中を委ねて、私の姿が映る空のコップを片手に、忌々しい今日の出来事を振り返っていた。

……  
……  
……

真つ先に思い出したのは、あの今思い出してもはらわたが煮えくり返るような……あの稀観本の写本を手にした “一般人の姿をした何者か” の姿だ。彼女については後にノマドと癒着している政府関係者から横流しされる極秘資料から判明することとなるが、現在こちらが手にしている情報に彼女の情報が見当たらないことから、最近発見された部類なのだろう。

それに彼女は魔族ではないことは断言できる。彼女からは身体を密着させ、命の危機に瀕させたときでも狂気的な笑い声は絶えず出していたが “微塵にも” 瘴気を感じられることはなかった。

私が彼女と初めて出会った時、身動きを封じるためにも触れようとしたところで発生した静電気は行動を共にしていた『上原 鹿之助』の忍法で間違いはない。彼の放つ忍法は一切の脅威を感じられなかったが……それでも彼女を逃がす要因に繋がったのは、今でも忌々

しい存在だったと言える。

……奴さえいなければ、すべて上手く物事が運んでいたはずなのに。

……ピキツ……パリンツッ!

……ああ。コップを握り割ってしまったなんて、私らしくもない。だが、彼女は実に惜しい存在だった。

手加減したとはいえ、対魔忍でも3発も受ければ満足に動けなくなるような攻撃に対して耐えてみせた。その耐久度も申し分なかったが、店に仕掛けていたヨミハラのインキュバスに描かせた特別なチャームの術に掛かったということは、外見から想像できないくらいには、心が躍るような人種” だったのだろう。邪魔立てしてきた『上原 鹿之助』によつて、その術すら破られてしまったことは非常に残念だが。……確かに、遊んであげた感想として。その予想は的中させていた。

更に彼女を逃がしてしまった死骸オーケの話では、彼女は愚かな群衆を焚きつけて自身が確実に逃走できるように仕向けたそうじゃない。

そういう人材を私を含め、カオス・アリーナの連中は常に求めている。最近では、”良くない噂話”ばかりが先行して質の悪い観客が増えた一方で、有能なファイターが次々に ”使いものにならなく” なってしまったって困っていた。

今回は逃げられてしまったが、焦る必要はない……また捕獲するチャンスはいくらでもあるだろう。

……そのためにも、私は ”親友” に電話を掛けるのだった。

……

……

……

幸いにも友人はすぐに電話の受話器を取ってくれた。

「——ハァーイ♪ エドウィン、最近の調子はどう?」

「——カリヤか。こちらは可もなく不可もなくと言ったところだな。そつちは、近頃 ”新しい事業” は うまく行っているようだが……娯楽施設の方からは ”よろしくない噂”ばかりを耳にするな」

「知ってるくせに……ほんつと、意地悪な人ね♪ でも勝手に壊れちゃう。『備品』が悪いのよ。それでも、いいでしょ？ 代わりの『部品』は自主調達しているんだから」

「……フン。それで要件は？ 俺も長々とくだらない世間話に花を咲かせているほど暇ではない」

「でしようね♪ ……でも。この話を聞いたら、きつと♪ 食いつくわよお♪」

「なんだ。勿体ぶらずにさっさと話せ」

「——『アラガルノーヴの書』」

「——！」

「……あれがね、見つかったのよ」

「……一体、どこで？」

「フフフ……♪ それは秘密♪」

「わかっているだろう！ あれは——」

——そう、あれは『親友』のエドウィン・ブラックですら目の色を変えてしまうほどのシロモノ♪

「もちろん、わかっているわ。『独り占め』しようなんて気も起きない……だから『親友』にこうして電話しているんじゃない♪」

「——問題があるということか」

「そ。すつごく簡単で単純だけど面倒な問題……。とにかく、彼女の資料をこちらである程度纏めたら送るわね」

「……アサギか紅くれないか……良いぞ。アレ等は血がた「アサギちゃんや、あなたの娘さん絡みじゃないわ。ヨミハラでも見たこともない子だし、それに対魔忍ですらない……見たところ『中学生一般人』ね」

「……」

「露骨にがっかりしないでよ『アラガルノーヴの書』絡みよ？ ……と

にかく『青空 日葵』ちゃんには『2人で』会うのだから、抜け駆けや独り占めは『なし』よ」

「——わかった。では、準備が整い次第、私も日本へ向かうとしよう。

『その時』になったら、また連絡を寄こせ」

「ええ……。きつと♡ 気に入るわよお……♪」

通話を終了し、受話器を置く。

別に私が彼に報告しなくても、あの子が対魔忍と一緒に行動しているという事はいずれ、フルスト経由で耳に入るのでしょうけど……私が見つけた獲物なのに抜け駆けされるのは、それはそれで気に食わないし……これで私は彼に貸しを一つ作ることができるもの♪ 利用しない手はないわよね♪

先ほどまでの苛立ちが嘘のようだ。

機嫌がよくなった思考回路で、鼻歌を歌いながら差し替えられる予定の監視カメラに映った彼女をトリミングし拡大して、カラー印刷する。

丁度、私の配下から逃れる瞬間の映像のようで、毒を流し込まれていたことなど、最初から感じていなかったかのような「ケロツ」とした態度をしていた。頭から大量の血が滴り落ちているにもかかわらず、気にも留めていないかのような余裕な顔で嗤わらいながら、ウイנקをして投げキッスまでも飛ばしている。

……どこまでも肝が据わっていそうな娘だ。

「フフフっ……♪ また会う時がすごく楽しみだわあ♪

『青空 日葵』……いいえ、ゼラト シーカーちゃん♪」

……

……

……

## Episode 22—EX 『青空 日葵』

■ 『青空 日葵「あおぞら ひまり」』

性別：女性 年齢：15歳 誕生日：9／16

血液型：B+ 身長：162.3cm 体重：58.5kg

忍法：不明

愛称：『青空さん』『日葵ちゃん』

蔑称：『汚い対魔忍』『サッカーゴールで一騎当千した女』『入学初日にカバンを頭に被って学校集会の自己紹介でデスメタルした女』『命を値切る女』『瞳に宿る狂気』井河アサキ『校長を人質に取る度胸の塊』『猫を被った消火器』『素の垂直跳びで自分の身長分飛び上がる女』『自称運動音痴』『散歩で真っ先に崖を上りそう』『あいつはいつか空を飛ぶ』

評価：『手段を択ばぬ無法忍者』『“妖精”』『弱者なのを理由にやりたい放題やるやべー奴』『えげつねえが忍者らしい忍者』『暴走列車』『思考がヒヤッハー』

性格：積極的、問題児、猫かぶり

趣味・嗜好：読書、ヘヴィメタル、機械弄り

疾病・既往歴：1年前の事件により、解離性同一性障害の疑いあり。

得意科目：とくになし。（“常に”平均的）

苦手科目：魔界学、体育（？）（要精査）

まえさき市の監視カメラ情報：

『ふうま小太郎』『相州 蛇子』『上原鹿之助』と共にまえさき駅より出て、共に行動するのを確認。戦闘力が対魔忍の中でも最下層に属している『上原鹿之助』はともかくとして、対魔忍であり実地経験のある『ふうま小太郎』『相州 蛇子』と行動を共にし、親しげな様子から友人とは彼等の事であると断定。またホームセンターでの遊戯も要参照。事件記録を情報添付。Episode 19~22

### ■ 『学校生活』

捕縛した対魔忍からの評価としては『消火器／消火栓の“妖精”』。はつきり明確化すると入学初日から騒ぎと問題を引き起こし、校長

である『井河アサギ』。教師の『井河さくら』『八津 紫』『蓮魔はすま 零子れいこ』にこつてりと絞られ、入学初日に生徒指導を発生させたという問題児に分類される。

と、言っても教師達の評価は決して悪いものではなく、授業中に関係ない書物を読んだり、授業自体を欠席することがあるらしいが、その場合でも授業には問題なく付いて行くことができ、なおかつ教師から指名された問題に詰まったクラスメイトをフォローする様子もみられる模様。こちら辺の人柄評価も不良にも優等生にも属さない平均的な評価である。

学力は入学試験から小テストに至るまで “常に” 平均的。学年順位として見ても中間……よりやや下の位置に属しているが……この試験や小テストの情報は当てにはならない。

性格診断では有益な情報は得られず。偏った性格……というよりも、どこからが『青空 日葵』の真の性格であり、どこまでが作られた性格であるか判別が行えなかったのが大きい。

現状の交友関係として『ふうま 小太郎』『相州 蛇子』『上原 鹿之助』と最も仲がよく、通学や放課後には常に4人で帰宅する様子が確認されている。

### ■『町での評判』

入学初日に非常ベルを悪戯で使用した不良として認識されている。

第2印象こそ、そこそこ最低な評価を貰っていたが『ふうま小太郎』『相州蛇子』『上原鹿之助』と良好な関係を持っていることや日常的な挨拶、困っていた人を見掛ければ助けるなどの行動から見られる優等生的な素行から町内の信頼は回復しつつある模様。

またこの最低な信頼の回復は、彼女の両親が非常に好意的なふるまいを事前に挨拶回りなどで根回ししていたことが、村八分となるような事態に陥らなかつたのではないかと推察されている。

### ■『テロリスト襲撃時の動き』

警察関係者から提供された監視カメラの情報から、襲撃前より屋上



で『アラガルノーヴの書』を読んでいたことは特筆すべき。

また他の街中に存在する他の監視カメラ映像や過去の購入記録から、彼女が『アラガルノーヴの書』は購入したのではなく、どこかで入手したものと考えるのが妥当である。

特に屋上で『アラガルノーヴの書』を読んでいる最中、何度か痙攣反応を見せたのは興味深く。現在、五車学園へ潜入中の魔科医師である『フルスト』による見解によれば、この痙攣は人が『幽体離脱』『魂が抜ける』『死に直面したとき』に発生するものと同じの症状であると思いを貫っている。

更にテロリスト襲撃以降、日常的な立ち居振る舞いは以前の彼女とは思えない程変化しており、まるで別人のようだ。襲撃時、監視カメラに残されていた記録からは、テロリストを複数人相手にしながら応戦している姿が映し出されていた。その際、卓越した身のこなしや銃弾を避けるという人間離れした離れ業は、彼女がただの女子高校生ではないことを如実に物語っている。

これらの以上の点を踏まえ、彼女が入院した先の医師が診断した解離性人格障害は、テロリストと相打ちになったときに発症した精神疾患……というよりも『アラガルノーヴの書』を読んだ事による……『別の何か』が『青空 日葵』に成りすましてしていると断定。

対魔忍どもは、彼女には何か「裏」があるとして。彼女の父親を国家権力によって異動させた上で観察・身辺調査を行っているようだが、現状、彼女自身も『青空 日葵』として振る舞っており、対魔忍どもが『アラガルノーヴの書』について知り得ない限りは彼女が何者か判明させることはまず不可能であろう。

彼女が、『ゼラト シーカー (Z<sub>狂信的・熱心な</sub>ealot S<sub>探</sub>eer)』と名乗ったのも、彼女の「中身」に繋がる情報の可能性が高い。

#### ■『アラガルノーヴの書』

起源不明の魔導書とされている本。

エドウィン・ブラックの所有している古文書には以下の情報が添付されていたとされる。

『アラガルノーヴの書』

とある魔術師が異界に通じる闇から掬い上げたときれる。たった1冊しかない手書きの文字で書かれた本。言語は高位魔族に該当する吸血鬼語。

現在、その魔術師は星辰魔科医病院に永久入院を強いられているとされているが、面会しても支離滅裂な言葉しか話さず会話は成り立たない。最後にその魔術師が放った意味がありそうな言葉も『3つに分かれた燃える目!』という狂気的な笑い声と共に発せられた言葉のみである。かつて魔術師が会得したことに興味を持った高位種族レイスが憑依し脳内に存在する情報を確認したところ、そのレイスも漏れなく即座に永久的な狂気に陥ったらしい。以来『蠢く闇の触手、粘着質なよだれを垂らす黒い渦……金切り声が響く』と繰り返す口にしてきたとのこと。

追記：その魔術師とレイスだけど、いかなる手法を用いたかは分からないけど精神病院を抜け出して行方知れずとなっているそうよ。こちらの調査も私たちにとって有意義なものになるかもしれないわね♪

研究期間：260週間（約5年）

正気度喪失：3D10 +x

クトウルフ神話：+10%/+20%

神話レーディング：89

魔術：《螺旋を描く蛇竜の追従》《荒野の狩猟の神との接触》《鏡面反射》《天使ティラエの命令》《蠢く森の使役》《馬龍の奇声》《ブラッドレインの加護》《焼肉》《ウロボロスの輪》《悪魔祓いの魔法陣》《淫獄》《終焉の神の名》《不老不死の宴》《輝く宇宙のたんぽぽ酒》《邪気眼》《溺愛》《死神の腕》《達磨》《ボルゲーノ・レインコート》……他。

■『今後の接触予定』

ひとまずは本人からの連絡を待ち、電話が来ないようであればこちら側から接触を行う。

猶予は彼女が五車町に帰宅してから5日程度を目安とする。

接触を拒む場合、本人の拉致を予定。

即座に潜入中のフルストあるいは、臆忍軍をいつでも動かせるように準備しておいて頂戴。

敢えてここでも忠告させてもらおうけど、絶対に1人で勝手に接触をしないように！

## Episode 23 『探求者』としての観察眼』

血眼になってこちらを探し出し、スネークレディ<sup>蛇子ちゃん</sup>のもとに連れ戻そうとしてるオークドモの追手を巻きつつ、家具販売店『ニトロ』と食料スーパー『ナガト』を繋ぐ通路に私はいる。

上原君の最後の電話からは、人の声や外気 of 環境音が聞こえないうえで、ニトロの定員呼び出しのアナウンスだけが微かに聞こえてきていた。恐らく、その通話を行っていた場所がここではないかと推測を立てながら全体的に白く塗装された通路の奥へと進んでいく。

上原くんを拉致した人物は、最後に力強くスマホを踏みつぶしていた。〈物理学〉の観点から、あの時に聞こえてきた音、踏み下ろされた角度、威力から状況を整理すると、スマホに使用されているガラスが通常よりも多量に飛散したはずである。そのため現在、床を舐めるようにして踏みつけたであろう箇所を探してはいるものの、それらしい飛散物は残念ながら見つかってはいない。

途中、お客様用トイレがあるのを発見し、念のため男女関係なく内部を確認したが上原くんの姿は見当たらなかった。ふうま君も蛇子ちゃんの姿もなかった。

代わりに、洗面台に備え付けられた鏡の中にはひどい姿の女がいた。顔面に鮮血が流れていき、髪に麺やら鳴門巻きやら、嘔吐物がまわりついている。白かったインナーは茶色の醤油味と赤色に染まって、ズボンの股下では、大腿部にナメクジが這ったあのような粘液が乾燥して鈍い光を放っている。ブーツの中には大量の黄色の透明な液体が注がれていた。

目糞鼻くそみたいな状態にしかならなかったが、様々な己の体液によって汚染したショーツを脱ぎ捨てるなり、ラーメンの汁色に染まった服を簡易的に洗うなどすることで、洗面台の鏡に向き合って凄惨な自分自身の姿を少しはマシな状態へと持ってくる。少なくとも髪の毛に付着したラーメンのカスや顔にこびりついていた流血の痕を洗い流すことはできた。

今、思い返しても、あの蛇子ちゃん<sup>スネークレディ</sup>に対し〈頭突き〉による不意打

ち以外に有効的な打撃を加えられなかった自分に、苛立ちと悔しさが沸き上がってくる。確かに精神的にはこちらの方が最終的に勝っていたが、それでも腹の奥底にある赤黒い臓物の煮えたぎる血流がブクブクと沸騰し、火山の火口のように真っ赤つかに染まりつつあるのを自覚していた。

「今に見てやがれ……。今度は私の完全勝利で、テメーのもつと情けねエ姿をオークどもに見せつけてやる……」

こちらが首を絞められて意識が落ちかけていた時。たしか、あの女は『カオス・アリーナ』とかいう場所で続きを楽しもうと話していた。これはつまり、逆にあの魔族が出入りしているであろう活動拠点の1つの情報を抜くことが出来たことにもなる。上原くんを連れて帰ることができたら、そちら方面の情報を調べるのも 今後何か自分自身にとつて有益に働くかもしれない。

悪態を付きながら、苛立ちの衝動に振り回されるような形で、傍に置かれているゴミ箱を蹴り飛ばす。転がった内容物がある種の生物の内臓が飛び出たかのような光景で、鬱憤も晴れていく。

だが通路の先の調査に向かおうとした時。転がったゴミ箱の中から見覚えのあるスマホが姿を現わしたのを見逃さなかった。

「——ッ！ このスマホっ……！」

飛びつくように掴み、スマホを拾い上げる。

ゴミ箱の中身を洗面台の上でひっくり返し、他に入っているものも確認する。

踏み壊されたときに飛散したであろうガラス片もこの中にまとめて破棄されている。道理で通路でこれら<sup>飛散物</sup>が見つかからないはずだ。スマホを破壊した犯人が綺麗に掃除してしまったのだから。通路で見つけられるはずがない。

これは休憩所を見たスマホカバーや機種からみて、上原くんのもので間違いないだろう。踏みつけられたあどきに破損して、画面は蜘蛛の巣状にひび割れ、粉碎した画面の一部は欠けてなくなっている。ゴミ箱内にある破片と照らし合わせるが、おおよそ当てはまる。

……これがここにあるということはこの近くに彼は居るはずだ。

あたりを忙しく見回して掃除用具入れまで念入りに調査する。  
……ここに彼が居ないことは理解していたが、誰かにこのゴミ箱から他人の携帯を拾い上げるといふ行為を見られるのは避けたかった。

誰も居ないことを確認し、ここで遭ったことを想像しながら、上原くんを連れ去った彼等が最終的にどこへ逃げて行ったのか思考を張り巡らせる。

……

……

……

——彼の身長は約140cm、体重は38kg前後。

彼をどのような用途で連れ去ったかは皆目見当も付かないが……拉致犯がじっくり監禁してえつちなことをすると仮定して、別の場所に連れていく場合。

……簀巻き……それよりも体育座り状態で縛り上げれば、チェーンソーで四肢切断しなくともスーツケースに詰め込めるだけのサイズにはなる。しかし、いくら数人がかりで彼を取り押さえようとしたとしても、本気で抵抗する高校生をコンパクトにたたむことはできないだろうし、四肢切断などしようものなら後始末を事前に考えておく必要がある。そもそもこの手法は監禁後にやるべき手法であって、こんな人気の多い場所でやるべきではない。騒音問題や手間暇がかかり過ぎる。切断した時点で失血性ショックで死にかねない。焼きゴテで傷口を焼いてしまう素晴らしい方法を取れば1度で2度美味しい玩具おもちゃに成り得るが……もしも彼等がこの手法を取ったのであれば、このトイレか廊下に人の焼ける……バーベキューに行きたくなってしまうような臭いが残っているはず。

ちなみに私は上原くんを拉致するのに四肢切断だなんて、新しい反応を得られなくなった時の最後の手段であり、最高の楽しみを不意にするようなマネはしない。シンプルに睡眠薬サリーツか……私も被害者のフリをして雇った人間と一緒に拉致される方法を選ぶ。

仮に私が犯人として彼を監禁できたら、どんなことをするだろうか……。

まず四肢は残すだろう。それから何度も生え変わる爪を気まぐれに剥がしたり、力強く握りしめられないよう「悪いこと」をするたびに両手小指を各関節ごとと脚の指を計16回に分けて切断する。目隠した状態で椅子に縛り付け、開口器で口をこじ開けさせて、下剤を服薬させて尊厳を打ち砕く。辱めを受けて俯いた瞬間に閉じることの出来ない口から、よだれがダラダラと滴り落ちる姿を眺めながらゆっくりとペンチで抜歯をして……。……何故そんなことをするか？　かわいい反応を見たいからに違いない。なるほど。

でも彼は、この世界での初めての友人であり、かけがえのない存在だから私実際に彼に対してそんなエッチなことをしたりはしない。私は今、彼を助けるために動いているのであって、この想像は犯人が彼に何をするかイメージを更に膨らませるための一環にしか過ぎないと自分に言い聞かせる。

……私はまだ理性を保った人間だ。

……話を戻そう。私は早く彼を助け出さなければならぬ。

上原くんは共に紫先生の戦闘訓練指導を受けている学生だ。生半可な抵抗ではなかったことは想定ができる。

……まあ、相手に電話が行えるだけの余裕と暴れるだけの猶予を与えている時点でそこまで拉致のプロの仕業と考えるにくだらう。プロの犯行なら善人だった頃の「蛇子ちゃん」のように音もなく近づいてきて自分のテリトリーに引き込むか……。あるいは抵抗が激化する前、姿を見られる前に……。私なら頭に巾着袋をかぶせて、紐で首を絞め背中にナイフを突きつけて抵抗も悲鳴も出せないようにしてしまう。

……彼は可愛らしい悲鳴を上げる前、「茶色のケモミミ」と言っていた。ほぼ確定的に私達がファミレスに向かう前に見たアイツ等のことだろう。そんな恰好をしたやつが駅前とはいえ周囲に空港もない場所で、休日の真昼間に物音のするスーツケースを引きずっているのを見られれば、外にいる警察官や警備員の目を引いてしまう。だからと言って、外に駐車している自動車のトランクに重量のあるものを投げ込むには大きすぎる。……他人の目を不用意に引きかねない。

以上の点から、彼はまだ建物内にいる確率が高いことが予想できる。

そういえば……あの時。電話の向こう側から奥の方の扉が開く音が聞こえたような……。

…

……

……

私の方針は定まった。

トイレから出て通路の更に奥。突き当たりに『従業員以外立ち入り禁止』と書かれた両開きの搬入口に辿り着く。

音が出ないようにそつと、室内に入って 周囲を見渡す。

通路は非常に薄暗く電気は付けられていない。それどころか、この通路に存在する すべての通路の蛍光灯が取り外されていた。通路に留まっている台車には潰された大量の段ボールが山のように積み重なり、わずかな光源と言えば ぼんやりと照らし出された非常口を指し示す非常灯がバチバチと点滅している。

……

……

…

気配と足音を殺し、慎重に周囲の探索を始める。

現在いる通路は従業員専用通路のような場所であり、手前に倉庫のような部屋。更にその奥には従業員専用の休憩所があった。

こういう探索は手前側から無人そうな部屋に〈目星〉を付けてしらみつぶしに調査するに限る。今、私は情報を何も持っていないような状態だ。最低限であっても、この施設で何が起きているか、何が行われているのか調査する必要がある。

従業員専用通路には、ざっくりと〈目星〉を付けて調査を済ませたが……特に気になるようなものはなかった。潰されたダンボールの詰まれた荷台は長年使い込まれているようで、移動させようとすると1つキャスターが地面に面しながらくると回転してしまい非常に取り回しづらい。ダンボールも一通り組み立ててみるが、このぐら



いの大きさでは人を隠せるほどの大きさのものは僅かではあり、一時的に隠せたとしてどう使うか用途不明のものばかりだ。

……それ以外に気になるものと言えば、一定の間隔で消火器がいくつか並べられていること、非常ベルの配線が何者かによって切断されていることぐらいか。

……

……

……

ひとまず、倉庫のような部屋に入り搜索を始める。懐中電灯のような光を発して、こちらの位置情報を発信するようなものは使用せず〈聞き耳〉と雑多な道具が立ち並んでいる工具置き場に〈目星〉を付けて、上原君の姿や目撃されたら面倒な存在の索敵を行う。

……

……

……

……事態は常に悪化している。業務用ダストシユート付近のゴミ箱から、上原くんが私と別れたときに着用していた新品のメンズ服を発見する。それだけではない。ダストシユートを開けた瞬間、生ごみが密封されて腐っていくような甘くも胸糞悪くなるような悪臭。手で薙ぎ払えるほどのハエが噴出してきた。近場に置かれていた殺虫剤で即殺するも、私がある程度の免疫のある光景でなければ、今頃の顔面に20ゲージシヨットガンの散弾のようにぶつかってきたハエの集合体に対し、悲鳴を上げていたに違いない。

……彼の衣服は鋭利な刃物で断裁されていた。この断切り方は、本人の目の前で『お前は逃げることはできない』あるいは『家畜に服など要らない』と見せつけた意図があったようにも捉えられる。パンツも丁寧に……おほっ！……こ、これはパンツではない。シヨーツだ。シヨーツ！しかも女兒もののシヨーツだア!!! 女兒もののシヨーツであるが、鹿之助くんのお……においにおいがすることから、彼のもので間違いはないことは、私の五感に通ずる〈聞き耳〉(6版判定, 77頁)と〈目星〉(7版判定, 198頁「知覚ロール」)で

今、証明、確定された。正気度が回復する。ひゃっほい！

高鳴る鼓動を抑えつつ、倉庫のような部屋の調査を終える。

他に見つかったへ目星<いものと言え、食料スーパー『ナガト』の従業員用作業服。その隣に、私達がこのシヨツピングモールへ入るときに見た、あのケモミミフード付きのローブだった。ひとまず、バラバラで着用には使い道のない上原くんのショーツと衣服は、口惜しいが誰の手にも渡らぬようにゴミ箱の中に放り込みつつ、他の2種の衣服を手にして部屋を後にした。

……

……

……

## Episode 24 『殺る気 スイッチ』

「~~~~グア」

「……！」

倉庫での探索と調査を終え、ダストシユートに人の死骸を放り込む程度には異常事態が発生しているこのショツピングモール内で次の部屋を目指す。

次は、従業員通路の突き当りに存在する従業員用休憩室だ。扉の前に立った時、室内からは何者かのくぐもった声が聞こえ、言い知れぬ違和感を覚え瞬間的に身構える。

この部屋の扉の前に来た瞬間に、倉庫とは異なる身震いしてしまうようなチリチリと皮膚が炎で炙られた火傷のような違和感があった。何かこの部屋からは嫌な気配を感じたのと同時に、念仏のようだが念仏より早まきしている念仏が、その違和感を煽り立ててくる。おどろおどろしい声。何か《呪文》のようなもの。携帯電話越しに微かに聞こえてきたあの声のようだった。

《聞き耳》を立て、更に細部の部屋の様子を探る。

「ウガア、クトウン、ユフ」の大合唱の中、さらにその奥。最深部にあたる位置から、聞き取れないようなモゴモゴとした発語だが、いっ息継ぎを行っているかもわからないような声で永い詠唱を続けている大合唱とは別の言葉を呟く男の声が聞こえた。

それに、その詠唱呪文のそばから上原くんが身をよじって拘束を解こうとする音、うめき声が聞こえてくる。

間違いない。彼はここに居て、何か良からぬことに巻き込まれている……！！

扉を乱暴に蹴り破って押し入りたい気持ちや、『開けろ！デトロイト市警だ！』宣言を行って扉を吹き飛ばしたい気持ちを飲み込んで、そつとわずかに扉を開けて内部の様子と、室内の空間の大きさを測る。

……室内は異様だった。

窓一つのない異様な部屋には電気が灯っておらず、蠟燭使用のラン

タン光だけがぼんやりと足元を照らしている。室内には家具らしい家具はすべて撤去されており、代わりにペンキにしては赤黒くてところどころ塗料が足りなかったかのようにかすれた線を引き出すような塗装液を用いて円型の魔法陣が描かれている。円型の魔法陣の内にはまえさき駅前で見えたケモミミフード付きのローブを纏った人間が16人。円陣を組んで「ウガア・クトウン・ユフ」と合唱しながら詠唱に合わせて左右にユラユラとメトロノームがリズムを刻むように一定の感覚で揺らめき、左右に上半身を動かしている。

……えらいぞ私。ここでゴールドシツプ式<sup>ド</sup>デトロイト市警<sup>キツ</sup>をしていたら、間違いなくいろいろ終わっていた。

「ダズマ エルマエ ウガア<sup>ク</sup>クトウン<sup>ユフ</sup> クトウア トウル  
グブ ルフ<sup>グ</sup>グスグ ルフ トクグル<sup>ヤ</sup> ウガア<sup>ク</sup>クトウン<sup>ユフ</sup>  
ユフ クトウルグブ ルフ<sup>グ</sup>グスグ トウルグブ ルフ<sup>グ</sup>グ  
<sup>ル</sup>ヤ ダズマエ イルゴス ダルヴァ<sup>ク</sup>……」

「うんむう……むうふっ……!」

その奥。台座のような白く塗装されたコンクリートの上、鉄棒での姿勢の1つである豚の丸焼きのような姿勢で、ガムテープを用いて手足指先までミトン状に拘束された……両目にいっばいの涙を浮かべ、口には猿轡をされた全裸の状態の上原くんを発見する。あの男子高校生、すけべ過ぎないだろうか……?!

——違う。今はそんなことを考えている場合ではない。

その白い塗装が施されたコンクリートの台座の周囲には装飾品として肉片がこびりついた頭蓋骨が数個並べられ、台座は次亜塩素酸ナトリウム臭のするフレンチドレッシングのような白い粘性の液体と黄色の液体が振りかけられていた。やはり、スケベだ……!

そしてその台座の奥で、このカルト教団の教祖らしき男が両手に波状の刃を持つナイフを片手に本を読み上げている。ナイフの位置から、直下にあたるのは……上原くんのへそ付近。つまり腹部。詠唱終了と共にそこに突き立てられるのだろう。あの場所なら、犠牲者を即死させることなく何度も突き刺して反応を弄ぶことが出来る。最高のショーになるのは間違いない。えっちだっ!

「イア イア グノス ヌタツガ ヌハ イア イア……！」

だが詠唱を繰り返す彼等は焦点が定まらないような虚ろな目をしていた……。……あれはとても正気の人間の目ではなかった。典型的な邪神崇拝しているカルティストの瞳だ。私が殺してよい人種の目をしている。そうだ。カルティストだ。殺さなければ。殺異教徒どもして良い連中だ。よし、殺そう。殺す。

……

……

……

リュックサックを下ろし、何か武器得物になりそうなものを探す。まともな武器として見つかったのは、工具店で購入したポケットナイフとホームセンター五車店には販売されていないDIY・近代工具セット一式、ブーツの下に着用しているストッキングをブラックジャックに転換させるぐらいだが……。これを二刀流の武器として、女子高校生が全17匹の人間大の人型物体を相手にするのは骨が折れる。

……骨が折れるどころの騒ぎではない。理論上では可能だが、無理だ。現実的には、皆殺しに出来ない。それにこんなカルティストどもだ。ある程度 殺しにも慣れているだろう。テロリストの人間と同じように人質も取ってくるだろう。頭数もあるのだから、応援を呼ぶために逃げるものもいるだろう。

——カルティストは逃がしてはいけない。その場で1匹残らず殲滅くじよしなければならぬ。それも相手に気づかれる前に確実に。

もつと別の方法を考えなくては……。

次に考えたことは、塩素系漂白剤と酸性タイプの洗浄剤を混ぜ合わせて塩素ガスでゴキブリの如く一毛打尽にする方法だ。奴らをガス室送りにして、出口に殺到し ドアストツパーと私の工具セットを使つて固定した、強固なチェーンで開かない扉を爪が剥がれるまで必死に叩き引き剥がそうとする獲物の姿を扉の前で椅子に座つて紅茶を啜りながら優雅に眺める。

……自身の崇める邪神を投げ出して必死に生に縋るカル破ティ戒スト者どもの姿は、実に滑稽で最高の光景かもしれないが……。これは絶対に

駄目だ。上原くんも確実に巻き込んでしまう。

他には……室内には蠟燭と火を使ったランタンがあった。

幸いにも近くには食品スーパー『ナガト』がある。

安易な火炎瓶……は素人な発想だ。火炎瓶ガチ勢としての意見は、消火設備の行き届いた施設でそんな武器を振り回すのは向こう見ずとしか言いようがない。20〜25%以上のアルコールなら火が付かないことは無いが……火力が弱すぎるし、相手に致命傷を負わせられない。サラダ油を利用すれば……まあ——即席としての代用は可能だが、これも却下。

愚直でその後のことを何も考えてないプランだ。仮に上原くんをこのプランで助け出すことができたとする。逃走ルートには、まだ14匹の元気なカルティストが残る。彼を連れて急ぎ足で逃走するも、焦っている状態で足元が疎かになって滑る。私が燃えるだけなら、展開としてまだ可愛いものだが……。上原くんが燃え上がるのは本末転倒だ。

第一、現代の瓶は多少の衝撃では割れにく過ぎる。即席の火炎瓶の効果など、せいぜい一瞬の隙を作ることができる程度の効果しかない。

それに非常ベルの配線を切っているような連中だ。炎が燃え上がったとして……第三者の注目を集めるための火災報知器が正常に作動する保証なんてどこにある？ 何本も一気に投げつけるとしても限度がある。殲滅しようとして投げまくったとして、カルティストどもが保身のため上原くんを人質に取る未来は容易に想像ができてしまう。そんな展開を迎えてしまえば……私は恐らくカルティストを燃やすことができない。

もつと広範囲かつ、しつかり確実に焼き殺したいのなら、もつと別の本格的な材料がいる。祖母は品が無いと嫌ってはいたが、戦後生まれ団塊世代の祖父から習った……薬局に出向くような本格的な材料が。

それに要救助対象の上原くんに火傷でも負わせたら、それこそ見境なく人を襲う獣同一のカルティストと変わらない。

ああ……♡ でも、手足をガムテープで拘束されて炎に追い詰めら

れて、泣きべそをかきながら炎に巻かれてやけどで悶え苦しむ上原くんも、皮膚が焼け焦げる臭いも……きつと官能的な絶頂が出来るほどにかわいいのだろうか……。

——違う。彼は友達だ。可愛いからって燃やしてはいけない。燃やしているのは、私や友人に危害を加えるような奴と神話生物とカルティスト、カルティストの居住地。カルティストの家族、ンカイの森、それと異教徒と邪神カルティストの信奉者だけだ。

……もつと落ち着いて冷静に、正気になるべきだ。

奴等はカルティスト異教徒。異教徒なら何をしても構わないが、一般人を巻き込んでほならない。やむを得ない犠牲を除いて一般人を巻き込むことは私の戒律に反する。

……殺してよいのはカルティストだけ。殺してよいのはカルティストだけだ。

よし。他に使えそうなものと言え……茶色のケモミミフードローブぐらいなものだが……これは使えない。……やっぱりだめだ。

これは衣服を喪失した上原くんにと着せてあげるんだ♥ 全裸に、ローブ、最高にえつちじやん。ドスケベじやん♥♥ ああ、今最高に煩惱が……♥ 子宮入口ポルチオがきゅんきゅん♥する。だが、これはあの女に《組みつき》されて何かされたことが私の煩惱炸裂・誘発させているに違いない。スネークレディ蛇子めえ……! (歓喜) 姑息な呪法を使いやがってえ……っ! (大歓喜)

今は救助に集中しなければいけないのに、祭壇の上の彼が私の煩惱を刺激する。〃蛇子ちゃん〃に砲丸投げをされたときに強打したせいか、鼻から遅延性の鼻血が噴き出す。えつちじやん?

やめろ、私の悪魔。今、ここで彼の命が潰つぶえるのを鑑賞した方が一生分のオカズになるとかいうな。——ん? なんだって? 私の良心天使? ……ふむふむ。……今、見殺しにするよりもここで救助して、〃また なにかあった方が〃……もつと?!?

……いいだろう。完璧で平和的な天使の停戦協定に私と私の悪魔が同意した。行ける。

カルティスト異教徒を殺そう。すぐ殺そう。お前らの敗因は上原くん

手を出したのが、運の尽きだ。

カルティスト殺すべし。慈悲はない。

これ以上、煩惱が暴走しないように自身に暗示をかける。  
殺してよいのはカルティストだけ。

……上原くんが炎に巻かれて、窒息して、腹を裂かれて、はらわたを引きずり出されて、はらわたで首を絞められて、艶めかしい手足が細かく震えて、悶え苦しむ姿を妄想することは帰宅中でもできる。そう。口に出さず妄想するだけならセーフだ。これは誰もがやること。私以外だつてやること。だから、これはセーフ。だから、今はカルティストだけを殺す方法を考えなければ。そうだ。殺す方法。カルティストを殺す方法。

《呪文》の詠唱のフレーズもまだ中盤が終わった所だ。

上原くんを処刑する方法やカルティストが口走る呪文列から、私が有する《クトウルフ神話》知識から何をしようとしているのか分かったことがある。カルティストは上原くんを太古の夜の父／偉大な旧き這うものに生贄として捧げたいようだ。獲物のモツ抜きは非常に重要だ。人体最大級の毒素である便をまずは取り除かねばならない。そう考えると腹部を刺して獲物を弄ぶあの行為は非常に合理的であるとも捉えられる。

観察して気が付いたことがある。詠唱がなかなか終わらない理由の1つの要因として、先ほどからカルティスト達が静電気でバチバチいつている。……それなりの衝撃と痛みなのか、目玉の親玉は詠唱中に術書を落とすわ、信者たちは演舞に乱れが発生しているわで……今は5月下旬に入りかけの時期。もう梅雨なのに……。……何かが変だ。そういえば、私が「蛇子ちゃん」と初遭遇したときも静電気が発生していたような……。？

もしや、あいつ等……失敗しようが何があろうとも鉄の意志で太古の夜の父／偉大な旧き這うものを招来しようとしている……。？  
でも、この世界では……クトウルフ神話はラヴクラフトの「創造物」で……。でも決めつけはまずい。私だつて元居た場所<sup>前</sup>で世界の真実が剥がされるまで世界の本当の姿を見ようとだつてしなかった。現実



の確率論に100%など “ないにも等しい” のだ。よくわかっている。……だから、私は為すべきことをここで為さねばならない。

上原くんがえっちな目に遭うとかの騒ぎじゃない。捕食はえっちなだが、丸呑みがえっちなだけで、とある寺の僧たちに降りかかった惨劇を目撃した上で言えることは、咀嚼はそこまでえっちなじゃない。

口の中で肉団子のようにこねられて、歯の隙間から見える 皮膚から突き出た砕けた骨と、裂けた皮膚から飛び出た内臓が、滲み出る薄汚い白濁した涎と混ぜ合わされてイチゴシユークリームのような色になった人間の成れの果ては顔をそむけたくなる程度には悲惨で身震いするような光景だった。

……少し上原くんを傷つけてしまいうりスキーな手ではあるが、現状自分の周囲にあるもので構築した作戦は1つしかなかった。

彼には無傷のまままで居て欲しいと心の奥底から願うことだが、私にはこれ以上の17匹の異教徒を1人で殲滅する方法だなんて “あの作戦” しか思いつかない。……彼もまた同じ紫先生から戦闘訓練を学んでいる。この作戦を遂行するにあたって、ブリーフィングができない以上——こればかりは彼の反射神経に賭けるしかない。

即座に真顔のまま鼻孔内へ詰まった巨大ナメクジのようにも見える血の塊を、鼻をかむ要領で除去し滴る血液を拭う。それから先ほど回収した従業員用の服装に着替え、マスクを付けて鼻から下が真っ赤に染まった顔を隠した。筆記用具とまえさき市に向かう道中に使用した新クトウルフ神話TRPGの白紙のキャラクターシートを取り出し、その裏面を使って計算式を立て始める。

計算式を使用する場面なんぞ、私がクトウルフ神話TRPG(6版)を布教した病院メンバーにしかわからないだろう。『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』(62頁) “負傷のスポット・ルール《爆発》” の項目だ。

上原くんをまとめて吹き飛ばさないためにも、爆発物の威力は慎重に計算しなくてはならない。彼はあんなに小柄でひ弱な体つきなのだ。直撃すれば十中八九、若くてツヤツヤしたハリのある四肢と健康的な内臓が千切れ飛んで死ぬ。でも、まったりと安全な火力計算をし

ている余裕はない。

太古の夜の父／偉大な旧き這うもの  
最悪のグレード・オールド・ワンの復活……もとい招来は目前なのだ。

復活すれば、上原くんは真っ先に死んでしまう。蛇子ちゃんやふうま君だって例外じゃない。みんな死ぬ。グンマーが終焉を迎える。あの下級の野良グレート（スネークレディちゃん）・オールド・ワンなんて目じゃない。

ああ……クソ！クソクソクソッ！！クソがつ！この短時間で煩惱に花を咲かせたり、殺意を沸かせたり、怒りを露わにするだなんて、情緒不安定か私は！

……クソがッ！ふざけんな！目頭に熱いものが溜ってくる。駄目だ！今は我慢しろ……！それは世界終焉してからでもできる！まずは邪悪な異教徒どもを殺すんだろ！クソツタレ！

私のもっと平和的に生きたいだけなのに。そのために対魔忍の世界に転生したって言うのに！人の人生と肉体を奪ってまで転移してきたのにッ！どうしてだ!?私はずっと平穩に一般人として暮らしたいだけなのにッ！本当にふざけた人生だ！

……だから、生きているかぎり平穩（人生の邪魔立てしようって）を打ち砕こうってんなら何度だってぶっ殺してやる……！

……何度だって日本を。平穩を。友人を守ってやるッ！やることは前世とそう変わりない。

一定の確率で訪れる最悪な未来から世界を護るためにまたやってやるッ！

……

……

……

「……できた。奥行約8m×幅約6m×高さ約2.5m∥約120?の空間の適切な爆発物（影響範囲1m）の計算式。爆弾の必要数は6つ。6つなら調達できるし……36秒……40秒……。『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』153頁、当然の推論”さえ用いれば……。起爆まで—8秒、宣言3秒、設置2秒、即死範囲起爆地点から半径3m圏内……退避時間3秒……調合もでき

る。大丈夫。遮蔽物さえうまく機能すれば、きつとうまく行く」

不安定な精神を宥めながら目尻から零れ落ちたものをぬぐい、扉の先の祭壇に掲げられた邪神<sup>上</sup>への供物<sup>原</sup>を見据える。

それから計算式を片手に。短時間で必要材料を集めるため、従業員の休憩室の連中から気づかれぬよう足早にその場を去った。

……

……

……

## Episode 25 『妖精 来りて脳を衝く』

やってきたのは、食品スーパー『ナガト』だ。ここに私の目的物である爆発物の材料はそろっている。まず、縁の低いカートをいくつか入手し、その中から新品……もといキャスターの動作が安定しているものを手にする。

カートを手に入れたら、真っ先に雑貨コーナーで漏斗6つとバンテージテープ、レインコート、ゴム手袋、分量カップ、千枚通しを数本手に入れる。……本来であれば、ホームセンターへ向かってゴムツナギを入手した方がこれから行う作業はスムーズに事が進むのだが……。今はスーパーにある安価のレインコートで代用するしかない。

そのまま流れるようにサービスカウンターへ従業員を装ってドライアイスを大量に入手。途中、客に捕まりそうになるが、そんなのは無視だ！ 無視！

外でオークどもが必死にこちらを探し回っているが、従業員の制服にマスクまで完全に着用しているこの格好の私を見つけることはできないだろう。

そのまま酒売りコーナーへ直行。4Lペットボトルの焼酎を6個カートに乗せ、従業員専用通路へ向けて走り出す。

これに必要なものはそろった。家具販売店『ニトロ』と食品スーパー『ナガト』を繋ぐ全体的に白く塗装された通路にあった消火器も2本奪う。100%OFFの週末終末セールだ。

♪♪♪

「……！」

私が準備を整え、上原くんが拉致にあつたと思わしい通路でカートを押していた時のこと。私のスマホへ不意に着信が入る。

……相手は、トイレで約3時間もお花を摘んでいた方の蛇子ちゃんだ。

「もしもし……!?! 蛇子ちゃん?!！」

「日葵ちゃんっ！ 今どこにいるの!!!」

突然の怒声に耳がキーンと耳鳴りを引き起こすが、正直怒鳴りたい

のはこっちのセリフだ。3時間もこの終日が近づく世界で、どこのトイレで週日ウンコをしていたのか問いただしたい。

「それはこっちのセリフですよ?!? 蛇子ちゃんこそ、3時間もどこのトイレでうんこしていたんですか?!?!」

「うん……っ?!?」

「言わなくていいですから黙って聞いてください! ケツからどんなぶっといデカブツが出たかの話は生きて帰れたら聞きます!!! 柔らかくする下剤や痔の薬もあげます! まえさき市で3時間もうんこしてたつて、学校中に言いふらしてやります!!! ふうま君もそこに一緒にいますね?!? 群馬県から鳥類が一齐に逃げ出す光景が見えたら、それは合図です! 何も言わずにそのまま群馬県から離れてください! 日本の地形なら越後山脈か関東山地が盾に出来ます! しばらく時間が稼げます! 新潟か山梨へ! 急いで!!! 上原くんはこっちでなんとか助け出します!」

言葉に詰まる蛇子ちゃんに避難指示を送る。指示を送ったところで携帯を切り、カートを押そうとするが今度はふうま君からの連絡だ。

こいつら……人が、世界の命運をかけて決死の準備をしているのに悠長だなあ?!? おい?!?

「はい?!? ふうま君?!? 蛇子ちゃんから、話は聞きましたか?!?」

「青空さん! 今 俺達は、お前の父親と共に行動しているんだ!

今、ショッピングモールの何処だ?!? そこは危険なんだ! すぐに迎えに行く、場所を教えてください!」

「ええ!?? なんで私のお父さん??? 今は家具販売店『ニトロ』と食料スーパー『ナガト』を繋ぐ通路にいますが、ここが危険なことぐらい知ってますよお! ちとら上位だか高位だか知りませんが、蛇子ちゃんモドキにプロレス技5回ぐらい決められて、おまけの日本滅亡事件に巻き込まれているんですからね!」

「わかった! そこを動くなよ! 青空のお父さん、青空さんはショッピングモールの家具販売店『ニトロ』と食料スーパー『ナガト』を繋ぐ通路だ!」

「テメエ！ 何もわかってねーだろ！ この昼（ブチッ）アンツ！  
……………チツ」

ここで通話が切れる。舌打ちをしてスマホをしまう。  
理解してもらえない友人に苛立ちを覚えながらも、その苛立ちを押し殺す。これから大事な奇襲作戦なのだ。奇襲直前に電話を掛けられて、全てが台無しにならないようにとスマホの電源を落とす。私は、こんなことをしている場合ではないのだ。従業員専用の搬入口から内部に侵入し、カートの走行音が聞こえないように注意を払いながら先に進む。

……………  
……………  
……………

定位置で消火器を下ろし、内部の様子を伺う。

内部ではまだ詠唱が続けられている。静電気も相変わらずだが、弱弱しくなっている。

……………少し様子がおかしい。経験上、招来が近づけば近づくほどこう言った超自然的な現象はより強く大きくなるものだが……………何か《呪文》の詠唱に致命的なミスがあったのだろうか……………？ それとも、この静寂は…嵐の前触れか…。

いずれにしろ……………上原くんは……………まだ生きている。だが泣きつかれた子供のように虚ろな瞳で涙を流しながら、ピクンツ……………ピクンツ……………と細かく痙攣をしていた。あの姿と表情なら『事後です』と言われても納得してしまうような顔だ。

——チャンスは1度。

私が失敗すれば、私が肉塊になって終わる。カートや上原くんが失敗すれば上原くんが肉塊になる。だが、やらなければ世界が滅ぶ。やるしかない。

まず、この後の爆発物起爆時に身軽に動けるよう通路にリュックサックを置く。

ゴム手袋を付けてから、レインコートを上下とも着用しフードを深く被る。複数存在する千枚通しの全てにバンテージテープを巻き付

けて滑り止め加工を施す。6つ用意した全焼酎の中身の破棄分を分量カップで計測しつつ、不要な分は清めの意味を込めて自身の周りに撒く。蓋の開いた焼酎に漏斗を6つ挿入し、それらを全てカートの上のせて、髪留めのリボンを使い焼酎がカート上で転がって重心の移動や、途中落下しないように縛り上げた。カートの下の荷台にはプラスチック製の買い物かごバスケットを入れ、その中に消火器を1本入れる。床の置物や多少の段差でカートごと転倒しないよう重石として運用するためだ。また途中で横から勝手に転がり落ちないように腰に巻いていたベルトで買い物かごも固定する。

左腕に付けていた4つのブレスレットでキャスターの角度を固定し……準備は整った。

ひと呼吸を置いてから、漏斗の突っ込まれた4L焼酎ペットボトル内にドライアイスを流し込んでいく。

——そう、消防でもY o u t u b eでも消防庁が注意喚起を行っている絶対に真似をしてはならないへ物理学＜反応を用いた大人の簡易爆薬だ。ドライアイスを注ぎ終えてから、すべての焼酎の蓋を閉める……！ 膨れ上がり始める4Lのペットボトル焼酎。

ここまでの所要時間は……36・5秒……！

「鹿之助ちゃん！奥の壁側に飛んで!!」

上原くんが自分に対して指示しているのだと認識しやすいように。普段 蛇子ちゃんが彼を呼称している呼び方で、出入り口を開け放ちながらマスクを外して大声で怒鳴りつけた。

集中している連中を除いたカルティスト邪悪な異教徒どもの注意がこちらに向く。私を見るや否や、最奥の教祖が狂気的な笑みを浮かべていたが、いつものこと。親の顔より見たカルティストが勝ち誇ったような顔だ。

——勝手に嘲笑わらつてろ。二度と笑えねえようにしてやる。

……現時間は39秒。カートの上で膨れ上がるドライアイス入りペットボトルを17匹のカルティスト達へ向けて押し出す。

上原くんは、私の声が聞こえた瞬間に眼を見開いて、指示通りに波状のナイフを持っているカルト教祖の方へ転がり落ちた。

私も扉を閉めコンクリートの壁を盾にする。それから消火器とバ  
ンテージで滑り止め処置の済ませた千枚通しを手に携える。僅か数  
秒後、激しい破裂音が室内に轟き、内部から十数人の断末魔が響いた。  
破裂音と断末魔をスタートダッシュの合図として踵を返し、まるで特  
殊部隊が突入するかのよう。PCゲーム『青鬼』でUターンドアバ  
グをキメるひろしのようにマスクを着け直して突入する。

……従業員休憩室は酷い有様になった。破裂したペットボトルの  
破片やプラスチック片が、室内のコンクリートを抉り、周囲のカル  
ティストをズタズタに引き裂いている。辛うじて生きているものも、  
喉から湧き水のようにあふれ出る血を必死に止めようとする形相で  
止血しようとしているが……。ま。無理だろうな。抵抗をされても困  
る。千枚通しで、気絶している奴も含めて入念にトドメをさしてお  
く。

ピツリ——ブツブツブツ……。ギュルングルングルン。ブツツ——  
ズゾゾツ……。グリユグリユグリユ……。

タコ焼きをタコ焼き機の上で回転させるような工程を人間の脳に  
対して行う。

……頭数が多いのだ。時間をかけるわけには行かないし、叫ばれて  
も困る。祭壇を隔てた向こう側に純粹無垢な上原くんもいるのだ。

まずはうつ伏せに転ず。無防備になった首の後ろから、頸椎の繋が  
る大後頭孔に千枚通しを突き刺してクランクを回す要領で柄を回転  
させ、なかみをほぐして確殺<sup>かくせつ</sup>を目指した。

……身動きの取れない仲間がうつ伏せにされて、首筋に針のよう  
なもの刺されて殺されているのだ。頭の回転の速いやつはひつこ  
り返されないように踏ん張ってみせるが……。殆ど無駄な抵抗に過ぎ  
ない。うつ伏せに出来ないのなら、エジプトでミイラを作っていた古  
代人のように鼻孔から千枚通しを突き刺して白くて皺のあるプルプ  
ルとした内臓をかき混ぜる。引き抜くのと同時に赤色と半透明の粘  
液が私のレインコートにまとわりつく。私と古代人と異なるのは、彼  
等は熱した棒を鼻から突っ込んでいるが、私は……。カルティストも  
が己が起こした罪の意識から寒気を感じることができるようにと異



質な冷たさを放つ鉄の棒をねじり込んでいることぐらいだろうか。

獸共がうつ伏せにも鼻を隠すようであれば、瞼越しから視神経の穴をねらって、体重を掛けながら千枚通しを深く差し込む。熊に対する防御姿勢を取ってしまった、すべての千枚通しが途中でひしゃげ折れてしまったのであれば、もう片手に携えた消火器の底面を奴等の額に叩きつけ頭蓋骨を陥没させて殺す。とにかく脳に傷害を与えて殺す。抵抗される前に殺す。邪悪な異教徒どもは全員殺す。倒れている次の獲物めがけて、踊るように軽やかなステップを踏みながら。円舞曲ワルツを舞いながら、笑顔を添えて手短に一人残らず、殺す。殺す。殺す。

こちらに掛かった薄汚い体液は、ゴム手袋とレインコートを脱いでしまえば始末が付く。どうせ今着ている制服も私のものではない。ポリエステルはよく燃える。燃やしてしまえ。私がこよなく愛する死体の遺棄方法は海中派だが……代用が利くものとしてマンホールもある。ダストシュートもある。今までのように、これまでのように、すべて破棄してしまおう。人間を運ぶのには、道具と根気、コツさえあればいい。

前世と同じように、どうせ警察は私を捕まえることはできない。

それに……方が一死体の処理が間に合わず、彼等が生きながらえたとしても……私としては問題ない。彼等は脳に障害を負ってしまったのだ。脳に障害を負ってしまった人間が、まともに今後の生活を送れるとは思わない。……逆に生き永らえて罪の清算をしてくれた方がカルティスト奴等を養わなければならないカルティストの家族にも、いくらかの一時的な保険金が入るとはいえ彼等の治療による経済的な打撃や、殺せない……先が見通せない介護による精神的苦痛を与えることができるだろう。まあ、私の代わりに彼等家族等が殺したとしても、社会的な抹殺や心的ショックを与えられる破滅に追いやることのできるため私には嬉しい結果であることは変わりないが。

……どのみち私はもつと彼等から、不幸という名の甘い蜜を啜ることが出来る。

……

……

最深部で倒れている親玉を除く、全ての害獣どもを無力化したのち……不気味な表情を曝け出している死体をうつ伏せに転がして、この部屋を出るとき鼻から脳が飛び出て……こちらとしても思わず鼻で嗤ってしまふような面白い死体が上原くんの視界に入らないように配慮を行う。

私によって邪神への供物返しとなった贄が慈悲を乞うためにしがみつき、血の手形が付着したレインコートを速やかに脱ぎ捨て、血液の付着したマスクとゴム手袋もビニール袋に丸め入れる。それから彼が良く知る『青空 日葵』がやってきたとわかる格好で彼が捧げられた祭壇の裏に回り込み、彼の状態を確認する。

「上原くん！」

「んんっ……い！」

……ああ、よかった。

彼は小柄ということもあつてか、祭壇を丁度 盾とする<sup>装甲</sup>ことができたようだ。露出している綺麗な皮膚のどこにもプラスチック片による怪我を負ってはいない。

「今、ほどくから……！ もう大丈夫だからね……っ！」

可愛らしい声で心配する声を放ちながら新品のポケットナイフを取り出し、しゃがみ込んで視線を合わせながら……彼の手足、指先までもをえつちなミトン状で拘束しているガムテープを痛くないように丁寧に優しくゆつくりとはがす。彼は今も震えて、両目から大玉の灰かにしよっぱいが甘そうな蜜を零している。……かわいい。

生唾を飲み込みつつ安心できるように、こちらとしては聖母のように微笑んで安全であることを示す。最後に口についているガムテープも剥がして、裸のままでは寒いだろうからケモミミフードのローブをかけてあげる。胸開きのローブから見える裸体が、全裸の時よりも扇情的だ。

……とにかく無事でよかった。今はそれだけで十分だ。

「……あ、青空さん……て……て……て……」

「？」

手？ ……まさか、カルティスト<sup>害獣</sup>にトドメをさした時の薄汚い返り  
脳脊髄液や血液がまだついていたというのか!? くっ！ 怖がらせ  
ないように、いつもとは違って入念に準備をして、カルティストを屠  
殺できたと思っただのに…！ ……って…あれ？ 別に脳漿など付  
着しているわけではない。

では…。彼は、何にそんなに怯えている？ 何を見ている？ 何  
が言いたいのだ？

「大丈夫ですよ。危険なあのヒトたちは無力化しました。もう大丈  
夫。私が居ます。ゆっくり落ち着いてください」

「ち…ちが……て……て……て……て……に、にげ…逃げ  
て……」

Episode 26 『大喰らいの泥濘／赤黒き花弁』

「大丈夫ですよ。危険なあのヒトたちは無力化しました。もう大丈夫。私が居ます。ゆっくり落ち着いてください」

「ち……ちが………て………て………て………に、にげ………逃げ………」

「――！」

わなわなと震える彼の視線は、微笑む私の背後。震えながら突き出した指先も天井を指している。その意味を理解した瞬間……冷汗が背筋を伝う。

背後を振り返らなきゃいけないのに……怖い。でも、後ろにいる。でも振り替えなければ、見えなければ〈回避〉すら許されない。

……だから、それでも、彼を護るために意を決して背後の天井を見上げた。

それは恐らく、私が最初にこの部屋を覗いていた時からいたのだらう。あの時、私を感じ取った“身震いしてしまうようなチリチリと皮膚が炎で炙られた火傷のような違和感”はコイツが存在していることを直感していたことによる不快感であったようだ。

この部屋は非常に薄暗く、光源と言えば床に置かれた蠟燭仕様のラントンばかり。足元しかほのかに照らされない部屋にそのインクのように黒くて透明なゼリー状で無形物の物体が天井に隠れることは実に容易であったのだ。

ソレは常に天井に張り付きながら様々な形状を造りながらも、天井に走った巨大な亀裂から……書道半紙に注がれた墨汁のように想像を絶する漆黒のインク塊が滴る雫のように具現化していた。

バラのような多歯症、二重歯列の口の中のように幾対もの歯を持っていたが、ループするGif画像のように生えては消失しの繰り返しを行っている。無形胴体がうねるたびにごぼんごぼんと粘性の液体から空気が爆ぜるような音を響かせていて、爆ぜた空気からは

人間の死体が炎天下の中……腐り落ちていくおぞましい悪臭を噴出していた。その不定形な塊には、“目”という器官は存在しない筈なのに、こちらの様子を観察するかののような動きで触手を左右に振るのだ。

私はこれを知っていた。太古の夜の父／偉大な旧き這うものよりは、多少“マシ”かもしれないが出会いたくはなかったし、これがないということは……対魔忍世界の世界にもかかわらず、その他のラヴクラフトの“創造物”は、存在することの裏付けにもなってしまったのだ。

「大喰らいの泥濘……。赤黒き花卉……」

引きつった顔でそれを見上げる。コレと出会うぐらいなら、まだ“スネークレディ”の方がマシだ。あれはまだ人の形を保っているから。これは……見たくはなかった。知りたくもなかった。

大喰らいの泥濘はこちらの様子を伺いつつも、私がとどめを刺したカルティストや血の付着した道具を舂めとり、分解していく。シエフに切り分けられた肉を、頬張る客のように。その取り留めない食欲で、片っ端から飲み込んで“吸収”して……。取り込まれた肉の外皮が溶けて、半透明の肉体の中で、まるでアメーバーが爆ぜるように分解されていく。眼球が……内臓が……骨が……何一つ残さずに。

黒に赤が混ざって……花のように……。

体外に吐き出されたのは肉が付着していない無い道具だけ。排便するように地面へ、べちゃり……という痰が地面に吐き捨てられるような不快な音と共に落ちていく。

「——っ。……上原くん……動け……ますか？」

天井の泥のような塊を可能な限り視線に入れながら、震える呼吸で静かに大きく深呼吸をする。ガチガチとなる歯を抑えて彼を大喰らいの泥濘から見えないよう庇いながら、一瞬ちらりと振り返った。

……駄目そうだ。彼は激しく震えながら、細かく首を振っている。当然だ。人生の初めてでこれを見て……世界の真実を目の当たりにして、正気を保っていられるほうが異常なのだ。

……できることなら、こんな世界の真実。ヴェールの裏側……彼には……彼には

知ってほしくはなかった……。

「……そうですか……」

詰まるところ。この場で何とかできるのは、また私しかないよう  
だ。

今度はチラリとペットボトル爆弾で気絶している邪教の親玉に視  
点を移す。あの雄は、まだ波状のナイフと魔導書を手にした指が痙攣  
し、胸部が上下に動いている。

泥濘を刺激しないよう取り計らいながら、上原くんを完全に祭壇の  
真後ろに移動させて泥濘からの射線を切らせる。それから私は、ゆっ  
くりとナメクジより遅い速度で邪教の親玉に近寄り、手にしていた波  
状のナイフと魔導書を奪う。

恐らく……この書物に目の前の泥濘を消散させる方法があるはず  
だ。現にあの吸収されていった邪悪な異教徒<sup>衆</sup>どもは、私が爆散させて  
いないときはずっと泥濘と居場所を共にしていたはずなのだ。

だが目の前で悠長に読んでいる暇などあるわけもない。

……だから私が……この場で行ったことは……。

「——上原くん」

「……な……な……な……に……？」

魔導書は背中にナイフはハンカチでくるんでポケットにしまい、ま  
たゆっくりと動いて、上原くんに近づき意識をこちらに集中させる。

ガチガチに震えて動けない鹿之助くんに向けて、頑張つて「慣れて  
いる」ように作り笑いを浮かべながら、彼の手や肩を卵黄を掴むより  
も優しく握つて、早口になるのを抑えながら ゆっくりとした口調で  
穏やかに声をかけ始める。

「怖いのは分かります。……ですが、大丈夫です。——今度は私が居  
ます。私がついています。——私が「必ず」貴方を無事に安全な場  
所まで送り届けます。約束です。——これから、この消火器で一時的  
な壁を作り出します。そうしたら大人しく私に担がれて——私が  
『大丈夫』というまで私のお気に入り曲でも聞きながら、耳を塞ぎ  
目を瞑っていてください。……お願いしても、良いですか？」

短く言葉を区切ってわかりやすい言葉にしながら、彼にしてほしい

ことを指示するのだった。

「……うん……。……うん……。っ」

「すぐに終わりますからね……。任せて」

震えながらも私の励ましによって力強く頷いたのを確認してから、彼にヘッドホンを装着させ鼓膜が破けない程度のヘビイメタル……。ではなく、彼が引いてしまわないような気分の上がるハードロックを流し始める。祭壇を隔てた向こう側から二日酔いをしたときのような胸焼けした感覚に苛まれるような啜り咀嚼する音が聞こえてきているが、これで彼はこの音に心を蝕まれることはなくなった。

それから手に持っていた消火器を作動させられるよう静かに安全ピンとホースを抜き取る。いつでも発射可能な消火器のホースを真上に向け我が主への祈りを済ませた。

大丈夫だ。いままでと同じ。慣れてきた作業にしか過ぎない。

……。そうだ。……。恐れる必要なんかない。……。この俺に何度も汚ねえツラ見せやがって、そう。〴〵何度も同じ姿で襲ってきたって陳腐にしかならねえんだよ。クソ神話生物。邪神の奉仕種

ギラついた笑顔で大喰いの泥濘を睨みつける。心の中で中指を立ててやる。私は何をビビってやがる？ 何度も見てきた。陳腐な怪物。なんぞ、恐いことなんて何もねえだろ？ 自分を鼓舞する。……。自然と口角が上がって来た。気分もノって来た。俺は、いつも通り殺るだけだ。……。やってやる。

……。鹿之助くんには何食わぬ澄ました顔でアイコンタクトを送り、向こうも震えを抑えながらも私のヘッドホンを両手で固定し頷き返してくれる。かわいいし、その健気な様子に勇気づけられる。

それから一気に消火器の薬液を天井に浴びせた。吹き出た薬液は、何もいない天井にぶち当たり、一時的ではあるが大喰らいの泥濘と不可視の壁をつくる。

もちろん、生きた獲物が本格的に動いたのだ。満腹を知覚できぬ憐れなヤツも黙ってはいなかった。一本鞭のようなしなやかな触肢が、消火器で遮られた煙を避けながら私を狙う。だがこちらは『新クトゥルフ神話TRPG』の選択ルール『完璧な遮蔽』123頁が発動して

いるのだ。加えて『新クトウルフ神話TRPG』の数的不利（104頁）が発動していても、初撃の2回攻撃は当たらない。こちらも外した攻撃に対して わざわざ居場所を教えてしまうような〈庇戦〉行為は行わない。反撃したって、現状 コイツには「効果が無い」。腰が抜け、立ち上がって逃げ出すことの出来ない上原くんを火事場の馬鹿力で首に抱える。徒手搬送法のファイアーマンズキャリアで背負い込んで、消火薬液煙の中を突き抜けた。

私の説明書には、前世のヨミハラで遭遇した対魔忍『秋山 凜子』に対して やつてのけたように、彼の重量を無視するような荒業は存在するが……。彼にそんな非道な仕打ちをするわけにはいかない。鹿之助くんは護るべき対象なのだから。

また現在、鹿之助くんを抑える反対の片手には異教徒を統べるものが、胸倉を掴まれるように背中衣服を掴まれ引きずられている。ヤツはカルティスト。運搬方法など気にする必要はない。ここでどうせ死ぬし、私が確実に殺す。

大喰らいの泥濘による またもや2連撃の攻撃。だがこちらも抜きにはない。そのための異教徒を統べるものだ。遠慮なく飛んできた鞭のような一撃を、寄生獣でパラサイトが逃走する際に市役所の間を散弾の雨から身を護る術として盾として流用した時のように、淡々とこちら側への衝撃を淡々と緩和させる。

荒業、そのイチイツ！ 『クトウルフ神話TRPG系統』では装甲は重量に含まれない！

初撃で肉壁の胸が引き裂かれ、鮮血が周囲へと車に撥ねられた泥水のようにまき散らされる。激痛ではね起きたときの絶叫が響くが私には関係ない。お前はここで死ぬべき存在なのだから。2撃目では、『うるさい』と言われ、まるでゴルフで頭部を殴られたかのように殴打された首が千切れて鮮血を撒き散らせながら、跳ね飛ぶ。だがまだ肉壁は使える。腹の中の内臓詰まっていれば、十分な衝撃緩和剤として継続運用は可能だ。

生暖かい血が私達に降り注ぎ、上原くんの身体が一層強張るが、こちらとして一切の問題はない。何か固いものが頬にあたっているが、



そのステイック♥ペロペロキャンディをもつと押し当てたって私は一向にかまわん！ 子孫を残すという本能がきつと刺激されているのだろう。生理的現象だ。これは仕方がない。不可抗力だ。そう、仕方がないんだ!!! 合法だツ!!!

今度は扉から逃げようとする私達に大きな人の歯が生えた口で噛みつこうと襲い掛かってくるが、まだ肉装甲は使える。その怪物の口の中に新鮮な人肉を〈応戦〉で押し込んでそのまま部屋を後にした。もちろん、入り口に残されたリュックサックの回収は忘れない。

肉壁装甲をなくした私達を、大喰らいの泥濘はまだ追いかけてきている。しかし、ヤツが口の中に放り込まれている人肉に興味を引かれ、動きが鈍っていることはその緩やかに伸びていく触肢の動きを見れば火を見るより明らかだ。まあ、あれくらいの凶体のでかさともなると、触手の射程も30mぐらい伸びたっておかしくはない。

目前の視界は薄暗く、足元は見にくい。だが転んでしまえば……ヤツに追いつかれることは間違いないかつたし、上原くんに必要な怪我をさせてしまう。だからこそ、転ばないよう足元に注意を払いながら可能な限り最速を保ちながら通路を走り抜ける。

その間にこの薄暗い通路の出口は目の前だった。残り僅か数mの位置に明るい蛍光灯に照らされた従業員専用の搬入口がある……!

「あともう少し——ツ!!!」

しかし、私達が通路の外に出るのよりも先にリュックサックと胸部に鋭い衝撃と、背中にじんわりとした生暖かい感覚。テロリストに撃たれたときのような熱が襲ってくる。

「ツツツツツ?!!」

視線を下ろせば、黒い鋭利でしなるようなタケノコのようなものが胸から肺を貫通して生えていて、熱されたアイロンを内蔵から押し当てられて、内側から溶かされているような激痛が胸部に奔った。

「っ——グ……ウウウウツ! —— (アイツ! 槍のように突き刺して……ツ!!!)」

……ファイアーマンズ士搬送送キヤリー方法で鹿之助くんを運搬していいよかつた。抱きかかえてでもしたら、今頃 彼も貫かれていたに違い

ない……。

絶叫を上げて意識が暗転しそうになるが『鹿之助くんを、怖がらせずに』安全地帯へ絶対に送り届けるのが私の使命だ』と自身を鼓舞し、歯が欠けてしまうほどに食いしぼり声を抑える。自分を奮い立たせて、前進し続ける。槍が引き抜かれ、開いた穴からボタボタと血が床に落ちるのを感じる。引き抜かれるときに槍が蛇のようにしなつて、内臓を抉っていく。私の鮮血が飛び散る。足が止まり、膝が笑いはじめ。息をするのが苦しい。膝をつきそうになる。痛い。苦しい。熱い。息が出来ない。

——それでも。私の〈幸運〉を使い切ったとしても。

——鹿之助くん、だけ』は助けるといいう固い決意だけは変わらな  
い。

（あのクソ牧師……！ 一般人粹希望の私にどれだけ無茶させるつもりなんだ……！ 私は、私は……！ 対魔忍じゃねえんだぞ……ッ！）  
心の中で悪態を付いて 痛みと窒息による狂いそうなストレスを  
発散させる。

ギリギリ、ビキビキと噛みしめる歯音を立て。口から一含み分の血  
が零れ落ちながらも、従業員以外立ち入り禁止の搬入口の扉も越え  
る。光が私を包み、それでも大喰らい泥濘の触肢は執拗な追撃してこ  
ようとするが……不意にそれは止まった。光に一瞬怯んだかと思つ  
たが……アレは違う。突然、触肢が毒物でも浴びたかのように、のた  
うちまわり、通路の壁を破壊して、従業員休憩室の方へと引つ込めて  
いく。

そう……だった……アイツには、火や化学製品が効くんだっつけ  
……。  
……へっ……サンキューママ……。クソ安い洗剤があいつには  
致命的だったみたいだ……。

……  
……  
……

私が最後の意識として覚えているのは……途中にあったトイレ付

近の通路で、鹿之助くんをゆっくり下ろして、リュックサックを抱え傷口を隠してから……ヘッドホンをはずさせて『大丈夫』であることを伝えて……。白い壁に背中を預けながら“少しだけ休む”私に彼が、何かを必死に叫びながら……。泣いている顔だった。ああ……。そんな顔もかわいい……。

……ああ。良かった……。無事で……。ほんとうに……。よかつ……。た……。

#### 4章 『群馬県まえさき市』（裏）

Episode—Inside 4—1 『ふうまと蛇

子のお花摘み』

「さてと……事件のあつた倉庫は駅前から少し離れた郊外だったな。駅のロータリに送迎の車両が来ているらしいが……」

「確か五車町に在住している警察官の人が蛇子達を現場に連れて行ってくれるんだよね？」

「ああ。確実に魔族の息のかかかっていない安心できる相手だとはアサギ先生からは聞いている」

サイゼリアでの昼食を済ませた後。

俺達は鹿之助と青空さんと別れ、2人からは見つからないようにシヨッピングモールを出て、別件での集合地点であるまえさき駅前のロータリへ足を運んでいた。

「それにしても、ふうまちゃん。蛇子が『お腹が痛くて動けない』なんて、嘘を咄嗟に思いつかなかつたら……どうする気だったの？」

「その発想に至るまで……思案を重ねていたな。……元は人込みに紛れて、行方を眩ます予定だったんだ。それで分かれてメールで『バラバラになってしまったし、今回はお互いにそれぞれの休日を謳歌しよう』って提案するつもりだったんだが……」

俺は青空さんが困ったときに見せる後頭部を掻く仕草をする。

そう。本来であれば、もっと早い段階で人ごみに紛れる方法を用いて鹿之助達とは別れて別行動を取るつもりだったのだ。しかし意外にも青空さんが目敏く、人ごみに紛れていつものようにぼんやり考え事をしながら離脱しようとするやと即座にこちらを発見し、鹿之助の腕を引いて近づいてくるものだから中々離脱することができずに困っていたのである。

そこで、俺の様子を見かねた蛇子がお腹を抑え『食べすぎたみたいでお腹がいたい……。ふうまちゃん、トイレまで連れて行って』運んでと言ってくれたおかげで何とか2人と離れることができた。

別れ際に何やら蛇子と青空さんが、お互いにウインクで何か合図を送り合っていたし……俺と鹿之助には分かり合えない女性同士として通じ合える『何か』があったんだろうが……。……あれはいったい何の合図だったのだろうか？

「蛇子に感謝してよね！」

「ああ、助かったと思っっているよ。あとでみたらし団子を奢ってやるさ」

「ほんと!? やったあ！」

元はと言えば、蛇子が青空さんと共にショッピングモールで休日を謳歌してもらっている間に、俺だけが途中離脱して昨日のニュースで報道されていた例の倉庫へと向かって魔族絡みの事件捜査の協力をする予定だった。

しかし、直前に鹿之助がまえさき市に付いてくるという話を聞きつけ、蛇子が俺へ同伴の提案をしたことで予定が変わり、最終的に俺と蛇子で東雲革命派というテロリストが惨殺されたという例の倉庫に向かうことになったのである。

また五車町では、現在 青空さんが外出中のうちにアサギ先生の指揮のもと青空さんの母親に協力してもらって。俺がアサギ先生から、任務として課せられている青空さんが1年前所持していたという魔族語で書かれた本の搜索を3年の秋山あきやま凜子りんこ先輩が家宅調査する手筈になっていたわけだが……。あちらの方はうまくいっているだろうか……？

更にアサギ先生から、2週間前に五車学園へ入学し、対魔忍になりたての青空さんに不審な動きがないか監視して欲しいとの指示を受けている。そこで戦闘能力は持たないが、危機察知能力や青空さんと最も仲の良い鹿之助を同伴させたのだった。

ただ……俺もアサギ先生がどうしてそんなことを俺に言ってきたのかは分からない。彼女が手にしている魔族語で書かれた本というのは、魔族に繋がるような危険なものなのだろうか？

また今回の監視の件や詳細については鹿之助に教えてはいない。『監視』などという言葉を使ってしまうえばアイツは動揺してしまうだ

ろうし、監視として見張らせるよりも「初めてまえさき市に遊びに来た青空さんが、迷子にならないように一緒に居てやってくれ」と言った方が鹿之助も変に緊張せずに済むのに違いないからだ。……蛇子曰く『あの様子なら二人は別行動を取ることはない』と話していたし、大丈夫だろう。

だが武闘派ではないアイツを同伴させることは、少し心もとなくは思う。……それでも鹿之助はやるときはやるやつだし、時に将来の夢である正義の対魔忍として悪からは一歩も退かないことから、友人として信頼できるやつであるのは間違いない。

まあ、鹿之助と青空さんどちらが武闘派かと言われれば……紫先生に對して情け容赦なく消火栓を当てる青空さんではあるが……アサギ先生から事の顛末を聞いた身としては、青空さんも追い詰められて致し方なくあの手に出ただけであって、自分から周囲へ喧嘩をふっかけるような好戦的なタイプではないことが分かったし、きっと問題は起こらないだろう。

表側に立地しているまえさき市のショッピングモールへの買い出しとはいえ、万が一都合が悪い事態が発生したとしても鹿之助のことだ。何かが起こる前に彼女を危険から遠ざけて、2人だけで対処できるように立ち回るはずに違いない。

「……えーつと？ それで送迎してくれる人の車種は……銀のクラウンだっけ！——アレかな?! ……あれ？ でも、あの人って……」  
みたらし団子を奢ってもらえると聞いた蛇子は、子供のように跳ねながらご機嫌な様子で、今回俺達がお世話になる送迎の人物を探し始めていた。

5分もしないうちにその車を見つけて指をさしたかと思えば、今度は途中で歩みを止める。俺もその指に釣られるようにして指した方向へと視線を移した。

そこには俺の身長(177cm)なんかよりも遥かに高い190cm以上はありそうな大男が、汗をかきながら炎天下の中……スーツ姿で、銀のクラウンの傍で誰かを待っているように立ちつくしていた。彼の外見として髪はわずかな白髪が混じって、くすんだ黒色をしており、刈り上げ

アップバングの髪型で整えている。左頬の中央から首元にかけて刀創と火傷の傷跡が走っており、その眼は細目であったが、彼の目の動きから熟練の兵士を連想させる鋭利な眼差しと何処か眉間にしわが寄った顔からは威厳のある風貌が漂っていた。おまけにスーツ越しからでもわかるほどの盛り上がった筋肉が特徴的である。

蛇子が呟いたように俺もあの人については知っていた。……以前、帰宅する際に友人の家の中で見たことがある。

「蛇子——」

それゆえに俺の言葉で少し浮足立った蛇子へ、事前に伝えておかなければならないことがあったのだが……。俺の静止よりも早く、彼女は彼へ向けて大手を振って走り寄って行ってしまった。

……

……

…

「日葵ちゃんのお父さーん！」

「……ん？」

「青空 日葵ちゃんのお父さんですよね?!」

「あ、ああ……? そうだが……。君は?」

「初めまして! 相州 蛇子って言います! 日葵ちゃんとは学校で普段から仲良くしてもらっている友達です! 蛇子達を現場に送ってくれる人は、先生が信頼できる人って言うので、どんな怖い人とか厳格な人かと不安だったのですけど日葵ちゃんのお父さんだったんですね! ああー。蛇子、変に緊張してたけど……日葵ちゃんのお父さんで安心したあ」

「というと……もしかして君が——」

「はい! 今日はお世話になります! あと、今回は蛇子だけじゃなく……ふうまちゃん!」

輝くような笑顔をこちらに向けて、蛇子は俺を手招きする。これに関して俺も片手を口元に当てて苦笑を隠して笑うしかなかった。

……今、俺達は『お腹を壊して』トイレへ行っているという体<sup>てい</sup>で鹿之助と青空さんとは別行動をしている。そこに青空さんの友人が、青

空さんの父親と車で何処かに出かけたという話が本人の耳に入ってしまう事態は避けたかったのだが……蛇子がすべて言ってしまったのだ。もう逃げられそうにもないし、この場合はできる限りこの話を青空さんには伏せさせるような流れに話を持っていく必要が出てきてしまっていた。

「……初めまして。青空さんのお父さん。ふうま小太郎と申します。今回はよろしく願います」

「なるほど。君達があの日葵が学校の出来事で楽しそうに話してくれる……『ふうま君』と『蛇子ちゃん』か。私は青空 源太だ。2人も、こちらこそよろしく願います。まあ、暑い中での立ち話もなんだ。詳しい話は車の中でしょう」

俺も近づき、蛇子の隣に立って頭を下げながら挨拶をする。そんな俺に対して、彼はまじまじと見つめた後に、まるで対等な立場のように頭を下げた挨拶を返してくれた。

軽い挨拶のあと、青空さんの父親は素早く後部座席の扉を開けて車に乗るように誘導する。開け放たれた扉からは、冷やされた風が俺達を包み込み……蛇子はよほど扉を開けられて乗り込むように促されたことが新鮮な体験だったのか、さらにキラキラと笑顔を輝かせながら俺に対して「まるでお嬢様にでもなったみたい」と小声で話しながら車両に乗り込んだ。俺も蛇子の言葉に相槌を打ちつつも、また彼に促されるようにして爽やかなミント臭のする車に乗り込んでシートベルトを着用する。

「よし。乗ったな。寒かったら、こっちで冷房の調整をするから遠慮なく言ってくれ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます！」

俺達がシートベルトを付けたのを確認すると車は発進する。その走り出しは動いていることを感じさせないようなスムーズな動きだった。

世間は休日であり、道はそれなりに混んでいる。しかしカーナビを器用に操作すると、比較的 道の空いているルートを通して送迎をし



てくれているようだった。

……

……

…

「……それにしても、意外と世界は狭いのだな。まさか日葵の友達が“対魔忍”だったなんて」

「ええ、俺もまさか今回の送迎の方が、青空さんのお父さんだとは想定していませんでした」

「となると、アレかな？ 対魔忍というのは学校の中で優等生だけが成れるものなのかい？」

「えっと——「はい。今回の任務内容は他の学生には伏せられています。ですので、今回の事は青空さんのお父さんも青空さんには俺達を送迎したことは御内密にして頂きますでしょうか？」

「もちろんだとも。私も組織で働いている人間だ。家族と言えども守秘義務は守るさ」

ここで蛇子が余計なことを口走る前に俺の方から、蛇子の言葉を遮る形で押しつぶす。言葉を遮られたことに対して、不服そうな顔でこちらを見ていたが……こっちは気づいていないような顔で、彼との会話の主導権を握って話をする。

男同士で和気藹々と話していると次第に蛇子も、自分たちが『トイレに行く』という建前で離脱したことを思い出したのか、その後の世間話には割って入って来たが納得した素振りです。3人での五車学園での出来事を会話のネタとして楽しみ始めた。

しかし……『対魔忍というのは学校の中で優等生だけが成れるものなのかい？』というのはどういうことなのだろうか。青空さんが五車学園に通っているということは、彼女も対魔忍としての素質があるから、俺達と同じ学校に通っているわけであって……。アサギ先生も彼女が対魔忍になりたてとも言っていた。遅れて入ってきた新生とはいえ、入学時には対魔忍を目指す学校である趣旨の説明を受けているはずだ。だがこれでは、彼女……自分の娘がまるで一般人のような口ぶりだった。……となると、青空さんの母親が対魔忍の家系で、父

親はそのことを知らないのだろうか？

確かに対魔忍の秘密を知ることが、すなわち必要以上に命を危険にさらす危険性も上昇する――

こればかりは五車学園に帰って、アサギ先生に尋ねてみなければ分からないことだが、ここでは余計なことを言わず、彼がそのような思っ、それを否定しない方が後ほどの青空さんとの話のこじれに繋がらなくて済むものには間違いない。

だから俺は、ここでは彼の話に合わせた。幸いにも俺達が対魔忍であり、青空さんには伏せていて欲しいという言葉に彼は疑いや気にする様子もなく、豪快に笑いながら秘密を承諾してくれる。

「ところで本題になるのですが……これから向かう現場で何が起こったんですか？」

「……詳しいことはE p i s o d e 1 4 ― T i p s を読んで欲しい。既にニュースで耳にしていると思うが、口頭で簡単に説明すると、まえさき市の郊外にある倉庫から人間の遺体が見つかった。遺体の数は6体だが、どれも陰惨な死に方……。人間だけならまだしも、倉庫の地下から先週末までは生きていたはずの魔族の死体まで発見された次第で……本件はどうやら魔族絡みの事件であるようなのだが、対魔忍として経験を積んでいる君たちには関与していると思われる魔族についての調査の手伝いをしてほしいというのが上層部の考えだ」

ある程度の世間話が盛り上がり、一区切りついたところで今度は事件について口を開く。途端に先ほどまでの蛇子との世間話とは一転して彼は重々しい口調となった。俺はバックミラー越しに映った彼を見る。彼の目元は、こちらを一瞬チラリと見た後に、正面へ視線を戻したが更に目を細め考え込むような形相となっていた。

「――6人がバラバラになって死亡、6人は衣服と装備だけを残して失踪。魔族の死体に至っては拷問を受けた上で、完全な白骨化を遂げていた……ですか」

「……そうだ。ここは俺達が住む五車町に近い場所にある。そんな場所で致命的な脅威がすぐそこまで迫っている状況だ」

「遺体の方は何とも言えないけど……その6人が失踪している方の遺体は、羅刹オークとか、パーピーとかの仕業じゃなさそうなのは確かだよね」

「ああ、現状の情報では、サラマンダーや知性を持たないスライムが関与している可能性は十分に考えられるが……更に詳しい判断をするには現場をみて状況整理をしてみないとわからないな」

そんなことを話して約1時間……建物が少なくなり、工場地帯を抜けた先に 未だに事件現場であった倉庫を取り囲むような人だからのできている古びた廃屋にも見える施設に俺達は接近するのであった。

………

………

………

俺達を乗せた車両クラウンは、立ち入り禁止と印刷された黄色のビニールテープを潜り抜ける。そのまま水色のブルーシートで覆われ内部の様子が一切分からぬ倉庫手前の搬入口まで進んでいく。

車両に搭乗したまま立ち入り禁止線より内部へと入って行ったのは、おそらく彼は現場周囲の状況を見てからの判断した行動だったのだろう。

現在、俺たちが乗っている車両のガラス窓には黒のフィルムと、後部座席の窓にはカーテンが取り付けられており、外部から内部の様子は見えないものだったが、内部からはひそかに外部の様子が見ることができた。

……立ち入り禁止線の周囲には、現場の情報を発信しようとするマスコミの姿があった。他にニュースもなく、話題として取り上げられるような内容も無いのだろう。そんな報道陣が集まる場所へ、俺達のような無関係そうな若い学生が、事件現場に入つて行けば彼等は確実にそれを映し報道するに違いない。マスコミに関しては、俺たち対魔忍と通じている政府関係者によつて情報統制させることで、いくらか俺たちがこの場所に立ち入つたことをもみ消せるとしても……ゴシップ記事や週刊誌、興味本位でこの場に訪れている野次馬達の写真はその簡単には制限することはできない。それにきつとあの野次馬の中には、人間の姿の魔族が混じつて情報収集をしている可能性だつて考えられる。

……彼の判断は、そういうことを見通したうえでの措置だと思われる。

車はブルーシートで囲われ 上空で飛び回るへりからも俺達を映さない場所。倉庫の搬入口前で停止する。

「よし。ここならフラッシュを浴びせられることもないだろう。もう降りても大丈夫だ」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます——うっ!？」

それは、青空さんの父親が素早く降りて蛇子側の扉を開けたときの出来事だった。唐突に蛇子が眉を潜めて、口を抑え今にも吐き出ししまいそうな苦しそうな表情をする。

「っ！ 大丈夫か?! 俺の運転が荒いせいで乗り物酔いをさせてしまっただろうか……? そうだとすれば申し訳ない!」

「すみません……のりものよいとかじゃなくて……ちよつと気分が……」

「そう……か? ……もしよければ、これを使うといい」

「ありがとうございます……でも大丈夫です……うつぶ」

彼女の反応に青空さんの父親も、一瞬だがやってしまったか……? というような反省するような失敗に悔やむような表情を見せたが、即座に車のダッシュボード内から未使用のタオルを取り出して蛇子に差し出す。しかし蛇子は苦い顔のまま やんわりと受け取ることを拒否して、代わりに自分のハンカチを小物入れから取り出して口に当ててから車外へ出て来て俺を待った。

俺も警戒しながら車外には出たが、蛇子のように気分が悪くなった……ということはなく今のところは至って平然を保つことができている。流石につい先ほどまで、青空さんの父親と世間話でケラケラと笑っていた蛇子が突発的に様子がおかしくなったことに対して、俺は彼女が心配で声をかけた。

「どうしたんだ? 唐突に気持ち悪そうな顔をして……」

「うう……。……ここ、すごい死臭がしたの」

「死臭……か?」

「……ううん……正確には死臭じゃない………のかも。炎天下に人が腐るような臭いに混じって……いままでに嗅いだことのないような……初めてのにおいなんだけど……嗅いだ瞬間に全身の毛穴が膨れあがつちやうようなトリハダになつちやうって……今すぐここから逃げなきゃいけないって思つちやうような猛烈なひどい匂い」

蛇子は今にも吐きそうな顔をしながら、軽くえずいている。

俺も深く呼吸するように鼻をひくつかせて、この倉庫から漂うにおいを察知しようとするが……蛇子の言うような特筆できるにおいを

感じ取ることはできなかつた。確かに人が死んでいるため、少し鉄錆っぽい匂いはしているが……蛇子が話してくれた『炎天下の中、人が腐るようなにおい』は一切感じ取ることはできない。

しかし今回の嗅覚に関する情報で、なおかつ蛇子が言うからには彼女の勘違いではないと俺は確信し断言できる。

蛇子は、獣遁の術使いである「獣化忍」で身体に獣の力を宿す能力を有している対魔忍だ。彼女の獣化のタイプは Devilfish ……。つまりタコ化<sup>蛸</sup>することができるといふ名にもかかわらず、どうしてタコに変化するんだ？という疑問については、誰もが通る道だ。まあ、俺が蛇子自身から聞いた話では、蛇子の母親が蛇子を妊娠している際……無性にすっぱいものが食べたくなって、大量のタコの刺身やタコ酢和えを出産するまですつと食べたことが蛇子が蛸化する原因になったんじゃないかと話してくれた。……余談として故人ではあるが、蛇子の曾祖母は大蛇へと変貌できたらしい。

……それはそれとして、ゆえに蛇子はタコっぽいこと……。口から墨を履いたり、下半身をタコの足のように変化させたり、足に付いた吸盤で壁に張り付くことやその足を伸ばして強力な巻き付きと吸盤で相手を拘束したり、その吸盤が高性能センサーになっており人間では感じることでできない微かな異臭や気配を察知することなどができるのだ。

入り口でこの状態……。倉庫の中身は、どのような惨状なのか……。彼女の様子から俺もやや恐怖に飲まれ気味になる。

しかし蛇子の姿は普段の人間の姿と変わっていない。変わっていないが……。つまり、彼女がその悪臭を察知できたということは、スカートの下でいくつか短いタコ足を生やし高性能センサーを用いて周囲の異常の察知に努めていたということだ。その結果、扉をあけられた瞬間にその異臭を察知してしまったということが推察できる。

——きつと気配りのできる蛇子のことだ。俺たち対魔忍は彼女が変身した姿は見慣れた光景かもしれないが、そんなに魔獣や魔族を見慣れていない一般人である青空さんの父親や捜査員達からしてみたら動揺することは間違いない。だからそのような対応をしたのだら

う。

「そうか……辛かったら無理しなくていいからな。この場には俺もいることだし。蛇子は本来ここに来る予定じゃなかったんだ。アサギ先生には話を通して同伴の了承は得ているが、引いたとしても事情を説明すれば退却理由を分かってくれるさ」

「……心配かけさせちゃって、ごめんね。でも、蛇子は大丈夫だから気にしないで。この現場はふうまちゃんだけじゃ荷が重すぎるから……ちゃんと調査に付きあうよ」

「すまない。俺も蛇子たちのように力が覚醒してさえいれば……無理をさせることなんかなかったのに……」

「気にしないでよ。私達、幼馴染でしょ？ もっと気にせずに頼って」

「ありがとな。……行くこう」

蛇子の肩を支えながら、俺達は外気と隔てられているブルーシートを更に潜って倉庫に入る。

……俺は蛇子や鹿之助、他の対魔忍と違って「忍法」の开花はしていない。この閉じた右目さえ開けばふうま家の忍法である「邪眼」が扱えるのだが……いつまで経ってもこの目が開くことはなかった。それどころか他の忍法すら開花することもない。……俺は他のふうま一門の者達が言うように『当主失格の目抜け』だ。今まで他の分家の奴等が俺に対してそのように言及することに関して、あまり気にしてはいなかったのだが……。流星にこの時ばかりは忍法が开花していない自分を恨んだ。

蛇子は俺を気遣って気丈に振る舞っているが、結果的にそれは蛇子に無理をさせてしまっていたのだから――

……

……

……

「うッ」

それは倉庫に入った瞬間の出来事だった。

突然、蛇子は俺から飛びのいて両手で自分の口を抑える。彼女の喉元からゴキユンという異音が聞こえて、目だけがまるで高性能セン

サーで感じ取った異臭を探すように上下左右満遍なくギョロギョロと蠢き、目を見開いて顔は真っ青になった。頬がハムスターのようにむくむくと膨らんでいき、今にも口を開けば食べたものを全て吐き出してしまいそうな勢いだ。見かねた青空さんの父親も、無言で即座に黒スーツの内側からエチケツト袋を取り出して蛇子に差し出し、蛇子も遠慮することなく受け取ると踵を返して俺達の入ってきたブルーシートの向こう側に消えていった。

……ブルーシートの向こう側で何やらマライオンが初めて口から水を噴き出すような初期排水のような音が聞こえてきたが、本排水されエチケツト袋内に着弾する前に、そつと青空さんの父親が俺の背後に立って俺の両耳を塞いだ。見上げる俺に『それ以上は何も考えな』といった表情で、口と目を固く閉ざして首を横に振っている。

俺は彼に両耳を塞がれながらも、室内を見渡し状況の確認を開始する。

倉庫は今にも倒壊しそうなほどにボロボロだった。俺達は車内で資料を目に通してはいたが、想像していた光景よりも5倍は酷い。

資料にあつた通り、壁から床、天井や柱までも視界をどこに移したとしても、そこには弾痕の形跡が残されており、この場で乱射事件が起こったのは明白だった。床に落ちた薬莢は証拠品として紛失しないよう、すべて回収されていたが——俺がもつともこの状況で不審に思ったのは、残された血痕の位置だ。

資料によれば、テロリストと対峙した高位中位魔族の存在に関する血痕は見当たらなかったそうだが……天井や壁、床には乾燥した血液が……まるでみずみずしい絵具が付いた筆を勢いよく画材に叩きつけた様な状態で残され、天井を支える骨組みには内臓が干されたタオルのようにこびりついている。

俺はこの事件を多少の銃弾ではものともしない外甲殻を持つサラマンダーや、貫通するような物理的攻撃は殆ど意味を為さないスライムの仕業だと考えていたのだが……考えを改めなければならぬ。ここで大暴れした怪物は、ただ目前の獲物を惨殺するのみならず、抵抗する相手を壁や天井に叩きつけて弄ぶことのできる「何か」らし



い。

このような芸当が出来る魔族は限られてくる。まず人間よりも知能の低い魔獣や魔族、獣人は犯人の枠から取り除かれる。その上でここで暴れまわった奴は、凶体が天井まで伸びるようなとてつもなく大きな奴か、人間でフリスビーが行えるような筋力に特化し、更に相手を残虐に弄ぶだけの知能を有する魔族に違いなかった。

だが俺は、親父の秘書だった災禍さいかが管理する俺の自宅の蔵書庫の中に存在する古書で読んだことのある資料の、どの魔族の古書情報とも一致どころか該当すらしないことに気が付いた。

第一、そのような魔族だとしてどのようにして人目を憚はばって、この場を去ることができたというのだ？ 凶体が天井まで伸びるような巨大な奴なら、倉庫に野次馬などの人が取り囲んでいたのであれば誰かの視界には捉えられてしまう程に目立ってしまうし……。人間だけでフリスビーが行える奴が、外に集まった人間の特殊部隊程度の相手に対して恐れて逃げるなどの行動は到底考えられない。

現時点の情報で暴れまわった魔族について、辛うじて類似している存在を上げるなら……。レイス種か、やはりスライムが妥当なのだが……。いくらスライムでも、弾丸を浴びせられ、銃床で殴打されたのであれば、弾丸によって千切れた破片や証拠品にそのような痕跡が残るはずだ。でも、それは残っていない。それどころかスライムは食欲に忠実かつ貪欲で、獲物をいたぶるよりもそのジェル状の巨躯で相手を取り込んだら即座に獲物を溶かすはずだ。となると、天井や壁に叩きつけられた血痕や、残された6人の死体と装備の説明が付かなくなってしまう。

レイス種は死霊の類で、幽霊や悪霊のタイプなら本人の自由自在に透過することができるといえる。ゆえに弾丸では多くの場合傷をつけることが叶わない。しかしいくら魔族知識がない一般人であっても、弾丸が彼等に当たらないなら、そのことに気が付いて固まって逃げるなり他の手法を取ったはずだ。でも、テロリストはそれをせずに持てるだけの弾丸を使って応戦に打って出た。それはつまり、対峙した相手には実体があったか、逃げられない状態まで追い詰められていたというこ

とになる。俺の知る限りでは……レイス種は敵の一部装備だけを残して、人だけを……それも複数人だけを都合よく行方不明にしてしまおう力などは持つてはいない。

「……うえっ……。……どう……。？　ふうまちゃん。何か思い当たる魔族は居たかな……。？」

「……残念だが……。」

「そっか……。」

と、ここで青白い顔をした蛇子がブルーシートの向こう側から帰って来る。

青空さんの父親は音もなく俺から離れ、蛇子が背中に隠し持っているエチケツト袋をさりげなく受け取るとまたスーツ内側……。今度は腰付近から新しいエチケツト袋を渡し、使用済みのパンパンに膨れ上がったエチケツト袋は自身の身体で現場の捜査員や俺に見えないように隠しながら、そつとゴミ箱の中に捨てていた。

俺はそんな彼を視界に収めながらも、見当も付かない相手に対して、ただ力なく首を横に振るほかなかった。

一応、現場に残されていた12挺のアサルトライフルや弾倉、膨大な量の廃薬莖も見せてもらったが……。これと言って銃で受け流した時に付けられる防御創もまったく見られず……。この場にいた捜査員・警察関係者と共に首をかしげるほかなかった。

進展と言えば、蛇子は証拠品を保管していたジップロック式のビニール袋から取り出して、実際に見せてもらったところで……。再びブルーシートの向こう側に消えたことぐらいか。

どうやら猛烈な腐臭は倉庫内部のみならず、装備品にも付着しなおかつ装備品の方が濃厚な香りが残っているようだが……。俺達にはやはり、その臭いは感知することはできなかった。

……

……

……

地上の倉庫ではどんな存在があの場合で暴れ回ったのか、少なくとも『蛇子がこの場から逃げ出したくなるような危険な悪臭を放つ魔族』ということ以外で何も進展を得られないまま、俺達は地下室に足を踏み込み拷問された魔族についての調査を始める。

こちらもちちらで酷い有様だ。天井からは首を吊るためのような輪っかがつけられたワイヤー製のロープがいくつも垂れ下がっており、ロープには拷問された魔族の血液が染み込んで、ロープの一定の位置から先が元の色よりも変色していた。床はボールを転がさなければ、分からないほどの緩やかな斜面が形成されており、一番低い位置には排水溝が常に沼っぽい臭気をただよわせている。おまけに部屋中央の床には全長1?50cmもの巨大な亀裂が走っており、その深さは光源の少ない地下ではその穴がどこまで続いているのかわからないほどの闇が広がっていた。人が落下してしまうほどの大きさではないが、捜査員が躓かないようにロードコーンと警告色のコーンバーで注意喚起はされており。俺がその深淵を覗き込むと、深淵もまたこちらを覗き込んでいるような錯覚があった。

ここでの蛇子は、表情を曇らせて亀裂には近寄ろうともしなかった。他にも、意を決したような表情になると、青空さんの父親から3枚目のエチケット袋を受け取って準備を整え、またスカートがわずかに持ち上がった。再びわずかに獣化して状況の把握を始めたのだろう。露出している足が人のままであること、2回もエチケット袋を使用したこともあって足首の毛がぞわぞわと逆立ち、表情は曇り、青いままだが3枚目のエチケット袋を使用することはなかった。

「……………ここで死んでいた魔族はオークっぽい……………ですね。それも、1体や2体じゃない……………えっと……………少なくとも7、8体? 資料だと拷問されて死んでいたんですよね?」

「その通りだ。こちらから詳細を伝えずとも現場の状況からここまで

判断できるとは……流石は対魔忍といふべきか。……発見された遺骨や肉片を採取してDNA鑑定にかけた結果。8体のオークがこの場で亡くなったことがわかっている。いずれも顔面の器官や指、表皮がそぎ落とされたあとに白骨化されたような状態だね。だがいずれの遺体も、1週間前には存命して 町中の監視カメラの映像記録にその姿が残されていた」

「ありがとうございます。……ふうまちゃん。上では嗅いだことのない酷いにおいだったけど……こっちは別のおいにする……。この匂いは色々混じっているけど……多分、蛙っぽい？ ……でも……ちよつと油がすえたような……栗の花とラズベリーも混じった甘いのに憂鬱なおい……かな。ふうまちゃんの知識で思い当たることはない？」

「……そうだな。残虐的なのは魔族全般に言えることだが……4種類のおいが混じるような魔族……」

再び考え込む俺の顔を青空さんの父親が緊迫した表情で見つめてくるが……。これだけの情報では1種しか思い当たらない。だが仮に俺の推測が当たっているとすれば、それは厄介な状況でもあった。……油っぽい臭気と言えば、蛇の魔族……。それも栗の花ということから両性具有者のナーガ族が連想できるが……。そんな都合の良い、骨だけ残すような毒を投与できるものだろうか？ そもそも、拷問には何かしらの見せしめや情報の入手などの意図があったのではないかと推測できるが……。役目の終えた相手の骨だけ残す意図が掴めない。出来ることなら、遺体が見つからない方がその魔族にとって足が付くこともなく都合だった筈だ。

「考え得るのは、高位魔族のナーガ族がやったのではないかと俺は睨んでいます」

「ナーガ族？」

「はい。高位魔族の一種で『妖魔』とも呼ばれる存在です。消してしまえば足は付かなかつたのに、遺骨を敢えて残すなどのいくつか不審な点は残りますが――」

自信の疑問点を織り交ぜながら、青空さんの父親に説明を行う。

他の捜査員が俺達のことを場違いな存在としての目を向けていたが、彼だけは話を真剣な目で見据えて頷き聞いていた。事前に対魔忍であることを伝えてあるから……という前提もあるだろうが、それだけが理由ではなく俺達が日葵の友人で、自宅で常日頃から聞かされていた俺達の話から信用するに値すると思われるようである。

「さらなる詳しいことや今後の事は一旦、学校に戻って上席に報告して指示を仰がなければなりません。ですが、ここまで詳細に警察の皆様が調べて頂いて対魔忍との共同捜査を始めたのですから即座に。とはいきませんが……足早には事件が収束するとは思いますが……そういえば先ほど『1週間前には彼等は存命しており町中の監視カメラの映像記録にその姿が残されていた』とおっしゃられていたのですが、具体的にどこの監視カメラに記録されていたのか？ などは判明していただけますでしょうか？」

「ああ。それなら、君達を拾ったまえさき駅の近辺のショッピングモール内であったことがわかっている。……近頃の出来事だと魔族が経営する新店舗がオープンしていたはずだ。被害者たちは、その店の従業員だったことも判別はついていないが、現状は差し当たりのない事情聴取のみを行っている。あの店が一枚噛んでいた場合、下手に勘ぐらせて対策を練られても厄介だからな」

彼の言葉に一筋の汗が俺のこめかみを通って頬を撫で首下に流れて行ったが……心配する必要はない。と自分に言い聞かせる。

青空さんは現在、鹿之助と行動を共にしているはずなのだ。学園内でたまに……。いいや、ときどき。時々、突発的に始める突拍子もない行動をしない限り、鹿之助の方から危険を遠ざけてくれるはずだ。いくら何でも、嬉々として魔族の店に入ろうとはしないはずだ。それは鹿之助が止めるだろうし、青空さんもそこまで魔族に関する知識がないわけじゃない。魔族が危険だということは、義務教育の段階で学んで知っているはずなんだ。君子危うきに近寄らず……彼女が、そんなことをするはずがない。

「そ、そうですか……ではそのショッピングモールの『魔族の店』についても少し対魔忍側でも調査するようにと伝達させて頂きますね」

「……先ほどから、油汗がにじんでいるが大丈夫かい？ 相州さんも倉庫に入ったとたんにお……お体調を崩してしまったようだし……君たちはまだ日葵と変わらない学生なんだ。無理は禁物だぞ。調査は早めに切り上げて、あとで君達の気づいたことを私に教えくれたつてかまわないんだからな。君達の内容を纏めて、こちらも君達の上層部に情報を上げることだってできるから——」

「心配おかけしまして、申し訳ございません。ですが、大丈夫です」「蛇子も、だいじょーぶ。……です」

……でも青空さんならやりかねない。そんな言葉が脳裏を過ぎる。オークを発見し『抹茶アイスクリームだ！』と叫んで、オークのハゲ頭に齧りついたり……。オークに絡まれたからと言って、頭部を緑色のボールと見間違えたと棒読み発言して、死んだ目を向けながら消火器をバットの代わりにオークの後頭部へフルスイングするような光景が思い浮かぶ。

でもそういつた行動を予め抑制するためにも、鹿之助がいるのだから、そんなことが起こり得るはずがないんだ……と、何度も自分に言い聞かせる。蛇子も『日葵ちゃんも鹿之助ちゃんと一緒なら大丈夫。蛇子と一緒にいるより安心』だと後押し推薦するほどの組み合わせなのだから……。

「あの……それよりも、日葵ちゃんのお父さん」

そんなオークの姿が確認されたシヨップینگモールで、暴れまわる息抜きをしている青空さんと振り回される鹿之助を思い浮かべていた時だった。

蛇子が何か疑問や不審点に気が付いた顔で、身体をぺったりと一辺の壁に押し付けながら声を上げた。

「どうかしたか？」

「このトタン板の向こう側に通路があるようなのですが、この先は調べられましたか？」

「……いや。調べたのはこの部屋だけだ。先に通路があるのか？」

今、別の捜査員を呼んでここをこじ開けさせるから少しここで待っててくれ」

それだけ告げると青空さんの父親は、駆け足で階段を昇って行ってしまう。

地下に取り残された俺と蛇子だったが、蛇子は手で口元を隠しながら少し意地悪そうな半目と笑みを浮かべて近づいてきた。

「蛇子が吐いちゃったこともあるのかもしれないけど……。日葵ちゃんのお父さん以外、ここの警察の人たちって蛇子達のこと邪魔者か完全な部外者を見るような目だったよね。でもこれでこの先に何か重大な情報を見つけられた場合、私達も立派な捜査員として見てもらえるに違いないね！」

「それに違いないな。でかしたぞ、蛇子」

「えっへへー♪ でしょ？ それじゃあ、稲毛屋でソフトクリームもおごつてね？」

「はいはい……」

にへらあくどだらしく笑う蛇子を見ているうちに、先ほどまでの膨れ上がっていく不安に押しつぶされそうになっていた気持ちほぐれていく。そうだ鹿之助と青空さんなら大丈夫だ。こんな要らぬ心配などしなくても、今ごろ何も気が付くことなく2人で仲良くおやつを食べているに違いない。

そんな会話をしているうちにボールのようなものを手にした捜査員を引き連れて青空さんの父親が戻ってくる。彼の指示の下、トタンの隙間にボールの先端を突き入れてバリバリと音を響かせながら俺たちの目前で剥がしていった。

その先には蛇子が感知した通路があり、その最深部には焦げ茶色の木製の扉が一枚つけられていた。

捜査員が緊張した赴きで索敵の為、拳銃を取り出すも……。蛇子が真っ先に捜査員たちをすり抜けて、彼等には分からないように配慮をしながら先頭で吸盤によるセンサーで索敵を済ませる。それから最深部の部屋に罠が仕掛けられていないことや、誰かが潜んですらも居ないことを告げてみせた。

……捜査員達は依然俺達を信用していない様子ではあったが、青空さんの父親が彼女がこの隠し部屋を見つけたことを他の捜査員に告

げ、堂々と無防備に先陣を切って歩いて行ったことにより、他の捜査員たちも黙って続いた。

……

……

……

隠されていた奥の小部屋は、こじんまりとした作戦会議室のような一室だった。両サイドには未使用の銃火器が飾られ保管されており、正面の壁には紙媒体の資料が詰まった資料棚が並べられている。部屋の隅には大型のプリンターとプリンターに接続されたスリープ中のノートパソコンが備えられていた。中央には1m四方の机が置かれ、その上にはテロリストが関わったであろう様々な作戦資料が乗せられていた。捜査員たちは現場の様子を写真へと収めると、ジップロックの袋に証拠品として資料を詰め込んでいく。

どうやら俺達の出る幕は終わったようだ。忙しなく出入りする彼等を邪魔しないようにと、蛇子と相談をして先ほどの拷問があった地下室で、指示を出している青空さんの父親を待とうとした時だった。

「青空警視長！ これを！」

不意に1人の捜査員が直接資料を渡して、渡された彼は唇を固く閉ざし顔色が悪くなり始めた。俺はこの場から去るつもりだったが、青空さんの父親と打ち解けていた蛇子は俺から離れ青空さんの父親と一緒に、背伸びをしながらその資料を覗き込む。

「ふうまちゃん!!」

資料に釘付けとなった蛇子が悲鳴のような声と、素早い手招きで俺を呼び寄せてくる。他の捜査員が蛇子や青空さんの父親を凝視している場所には近づきたくはなかった。しかし、彼女のスカートの下で動いている触手が見る見るうちに大きくなりスカートのすそからはみ出しつつある。俺が接近しなくても、その触肢で巻き付いてでも引き寄せるほどの情報かもしれないと思い俺も覗き込みに向かう。

「なんだ？」

「へ、これ……」

俺が近づくと青空さんの父親も、俺に対して資料を見やすいように



少しだけ資料を俺側にズラして見せてくれる。

資料には紙に印刷された2枚の写真と『作戦事項』について記述されているようだった。だがその資料に添付されている写真を見たとき、俺も目を釘付けにせざる負えなかった。

1枚目の写真には、俺も初任務のサポートとして任務に就いた事件。アサギ先生とさくら先生、ゆきかぜが事件を解決した……例の殲滅されたテロリストと思わしい男性が2人ほど地面に転がり、その転がる中心で1人の少女が、装備を剥ぎ取りながらそのテロリスト1人の禿げた後頭部を叩きながら笑っている様子だった。俺達は彼女についてよく知っている。……俺達の友人『青空 日葵』その人だった。

2枚目の写真には、休憩所のような場所で、巨大なりユックサックを椅子に預け、今朝別れる直前まで着用していたものと同じ衣服を纏った青空さんと、五車学園の制服やアイツの対魔忍スーツとは異なる新品の男物の服を着た鹿之助が椅子に座って何か……真剣な様子で机上の紙を見て、熱心に青空さんと鹿之助が勉強のようなことをしている様子が盗撮されていた。

「……君達、この子は知っているかい？」

「はい。こいつは、俺達の友人の鹿之助です……。でもどうしてこんな写真の印刷物がここに……？」

「ん？ 彼……いや、これは彼女が、鹿之助くん……ちゃん？ か？」

「あ、えっと。日葵ちゃんのお父さん。鹿之助ちゃんは男の子です」

「ん？ ん。ん？ ……ん？ 男の娘……？ つまり、これは彼の……しゅ……み？」

「……鹿之助ちゃん家には特定の年齢まで女の子として育てる風習があつて……その名残で鹿之助ちゃんは普段から女の子の姿をしているんです。ほら、でもこの写真での服装は男の子の服ですよー」

「あ、お、あ、ああ……そ、そ、そうなのか……」

俺達でもわかりやすいほどの動揺を見せながらも、写真の確認を終えると彼は付属している作戦資料を俺達にも見やすいように机上に広げてくれる。俺達は鹿之助も撮影された写真もあつてか食い入る

ようにその資料を見つめた。

『作戦資料：土星の主様への生贄選定』

諸君等は1年前のあの日。祈願を達成できなかったことに憤りを覚えていたであろう。

我々の祝福された聖槍で、256人の高潔かつ純情な乙女の処女を散らし処女の鮮血を我が主へと捧げるのに失敗したのは、すべて1枚目の写真に写る悪魔の女による企てだったのだ。

この女があの時、黙って我らに犯されてさえいれば我らの神は大いに満足し、我等に更なる祝福を与えたであろう。だが、この女が姑息な手で抵抗した結果。我々の祈願は叶うことなく、空から落ちてきた3人の汚らわしい痴女どもによって仲間の大多数を失い。今日。今、この日まで日陰者のまま裏でコソコソと這いまわるドブネズミのように過ごさなければならなくなった。だが思い出して欲しい、その環境を作り出したのは、誰か！ そう、この女なのだ！ この女こそが元凶であり、我々を破滅に導いた悪魔の女。我々の宿敵なのだ！

本来であれば、いつものよう居場所の特定後、拉致を行い 罅る手筈ではあったのだが……私は神託を受けた。こいつに神の裁きを受けさせるには、決して一筋縄ではないかないと。

そこで、2枚目の写真に添付された悪魔の女と行動を共にするメスガキをエサとして使用する。このメスガキはどうやら、この女のそれは、それは、とても大切な情婦らしい。こちらが観察した上では、常に自身の視界から外そうとしない様子を確認することができた。

そのような存在を奪われれば、奴もきつと我々が奪われた痛みを知り、冷静に判断できぬまま取り戻そうと躍起になり、こちらの罠であることも察知できず獣のように向かってくるだろう、そこがチャンスだ。女子高生がどのようなにして加護を受けし29人の結束した我らに勝てる道理などあるのだろうか？ 最終的に奴の処女と贓物を供物として捧げることが出来るであろう。さすれば我々への祝福と土星の主様の招来は目前だ。

現在、こちらの隠れ家で待機中の神の子等は私を含め17名。分隊

のお前たちさえ、この拠点に隠している銃器の回収……及び、土星の主の使者を君達の方隊長が扱うことがさえ叶えば、我等29人と使者2体でこの悪魔の女を罫り葬り去ることができるので。人質を取られた女の処女を奪うことなど、容易な蹂躪であることは神託を受けし私が保証しよう。

「……私はこれから本部に連絡を入れる。しばらくの間は娘と鹿之助くんには警護を付けさせるが……娘は大丈夫なはずだ。ひとまずは今朝の段階で、まえさき市に遊びに行かないようメールを打っているし、返信は来ないが……あの子のことだ。きっと今日も家で筋トレをしているはずだからな。……2人とも鹿之助くんには連絡を取れるかい？ もし彼もこの場に来ているようであれば、今すぐ人通りの多いところで待機するように告げて欲しい。居場所も分かれば、現地の警察官に保護するように今から連絡を入れ………2人ともどうした？」

彼の言葉に俺達は水漬けになるかのように固まるほかなかった。冷汗がポタポタと衣服に染み込んでいく。

……数時間まで俺達は青空さんと鹿之助と例のショツピングモールで別れているのだ。でも、この最新の写真が添付されているということは……既に青空さんと鹿之助は、既に奴等から捕捉されているわけであって……。

Episode—Inside 4—4 『Episode  
de 25の裏側』

「青空さん……！俺達も連れて、今すぐショッピングモールに向かってください……！」

「……何——」

「青空さんは、鹿之助と一緒にまえさき市のショッピングモールに居るんです。今すぐ、駅前のショッピングモールに車を回してください！」

そこからは事態が目まぐるしく動き始めた。

青空さんの父親が地上の外の外止めてある車両に備え付けられた無線機でショッピングモール付近の警察官に対し、2人の緊急保護をするように連絡を入れている間。俺と蛇子は、鹿之助に連絡を入れようとスマホを取り出して、連絡を入れようとする。だがしかし、スマホの電波はそもそも圏外を指し示していた。

急いで階段を上がり、倉庫を飛び出して少しでも電波が届くようになった反応が出れば鹿之助に対して電話を入れる。

「鹿之助ちゃん……早く出て……ッ！」

『プチ——』

「もしもし、鹿之助ちゃん!？」

『お掛けになった電話番号は現在電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないためお繋ぎすることはできませんでした』

俺達の願いを裏切るように、どういうわけか鹿之助には連絡が入らない。

何度、電話を掛けても『電源が入っていないか、電波の届かない場所にいる』というアナウンスが入り、鹿之助に繋がることはなかった。

青空さんの父親も同じ状態のようだ。青空さんのスマホに連絡を入れていたが、数コールなって電話が取られたかと思えば通話中であるとアナウンスが流れているような状態らしい。5分おきに掛けなおしたとしても同じ状態で、繋がらないというのだ。一応、安否確認

のメールを4件入れたそうだが……返事はまだ返って来ていないようだ。

どのようなにしても、2人と繋がらないことに対して焦り戸惑う俺達だったが、スマホに完全な電波が入ったところで約30分前に2人からのメールが入ってきていたことに気が付ける。

内容としては2人とも共通で『シヨツピングモール内のどこにお花を摘みへ行ったの??  
トイレに行っただけ?』  
現在、フードコート付近の休憩所で休憩してるんだけど。15時30分には帰るんだよ?』という内容だった。

更にもつと悪い情報までもが入ってくる。

現地の警察官に鹿之助と青空さんの保護を頼んだそうだが、シヨツピングモール内で発生した非常ベルが作動したことによる、客の避難誘導やパニック、魔族が暴れまわっているという事態の收拾のために動ける署員が全出勤してしまっていて、2人の保護に回せるような人員や状況ではないという返答が帰ってきたらしい。

さらに数分遅れて俺達の2人のスマホには、青空さんから『2人もシヨツピングモールから離れて! 上原くんを見つけたら、また連絡するからまえさき駅で私達の分の電車の乗車キップを買って待って! Ps:あなた達を廁籠城罪と友人放置罪で訴えます! 理由はもちろんお分かりですね? あなたの方が私達にお花を摘みに行くと言え、シヨツピングモールの便所を独占したからです! 覚悟の準備をしておいて下さい。ちかいうちに聴取します。快便の秘訣を教えます。消化器科にも問答無用できてもらいます。受診料の準備もしておいて下さい! 貴方達は友人です! 尻ケツから内視鏡をぶち込まれる楽しみにしておいて下さい! いいですね!』……とのことだった。

……なんといえはいいか。青空さんの父親のいる手前、下手に口には出せないが……彼女が何を考えているのかわからない……その余裕の長文はどここの知恵から絞り出した長文なのかは俺には予測できない。

すぐさま乗ってきた車両に搭乗し、この現場から俺達は離れることになった。

緊急事態ということもあり、俺たち以外にも倉庫の現場から青空さんの直属の部下である捜査員が1人助手席に座り同伴する。クラウンに予め備え付けられていた反転灯を屋根に付けての出発。なるべく最短ルートでシヨツピングモールを目指したが……。

……

「クソッ！　なんだこの渋滞は……！」

こればかりは不運としか言いようがなかった。シヨツピングモールへ迅速に消防隊が駆け付けるための交通整備による渋滞に巻き込まれ、サイレンを鳴らしているにもかかわらず道が空けられるようなスペースのない致命的な状況に晒される。渋滞から他の道に逃れようとしても、既に背後には別の自動車が張り付いており、自動車だけを置いて抜け出すわけにもいかない状態で、時間だけが刻々と過ぎ去っていく。

やっと道が開けられ渋滞を抜け出せたときには、時刻は15時を大幅に回っていた。その間、何度も俺達の方で鹿之助や青空さんのスマホに連絡を入れはしたものの、鹿之助は相変わらず電源が入っていないとアナウンスが流れ……青空さんの方は通話中ではないものの電話に出ることはなかった。

「もしもし……!?! 蛇子ちゃん?!」

「……!?! 日葵ちゃんっ！　今どこにいるの!!?!」

もう2人はテロリストに捕まっているのかもしれない……と、そう半分諦めかけたとき、何度も電話を掛けなおす蛇子のスマホから青空さんの声が聞こえた。即座に蛇子はスピーカーカーに切り替えて、車内にいる全員に聞こえるように機能の切り替えを行う。

聞き耳をそばだてて、彼女が今どこにいるのか情報収集を行う。

現在、彼女は人気の少ない場所にいることがわかる。シヨツピングモール内で非常ベルが作動したと話を聞いたとき、真っ先に青空さんの顔が浮かんだのだが……今回ばかりはどうやら無関係そうだ。

いくら何でも対魔忍が何度も非常ベルを連打するような事件を引

き起こすわけがないよな。そうだよな。

「それはごっちのセリフですよ?!? 蛇子ちゃんこそ、3時間もどこのトイレでうんこしていたんですか?!?!」

「うん……っ?!?」

「……」

「オフツ……ゴホツゴホツオオオツ」

蛇子にどこにいるのか続けて聞き出そうと促したとき、蛇子の声を大きく上回る怒声が電話越しから響き渡る。余程大声だったのだろう。車の隙間をすり抜けていたバイクが、赤信号でこちらを振り返って二度見するほどだ。

まさか自分の娘が開口一番にうんこ宣言をするとは思っていないかったのだろう。青空さんの父親は真顔に近い仏頂面をしていたが、隣の捜査員は一瞬吹き出した。咳で誤魔化すような素振りをしているが、誤魔化せていない。見る見るうちに蛇子も目が点になったまま固まって顔も赤く染まっていく。ついでに捜査員の顔面は、青空さんの父親の真顔を向けられたことで顔が真っ青に染まり、そこでやつと笑うのを止めた。

俺がスマホを受け取り、氷漬けになった蛇子の代わりに話を続けようとするも相当ヒートアップしているようだから話が話す暇も与えられない。

「言わなくていいですから黙って聞いてください！ ケツからどんなぶっといデカブツが出たかの話は生きて帰れたら聞きます!!! 柔らかくする下剤や痔の薬もあげます！ まえさき市で3時間もうんこしてたって、学校中に言いふらしてやります!!! ふうま君もそこに一緒にいますね!?! 群馬県から鳥類が一斉に逃げ出す光景が見えたら、それは合図です！ 何も言わずにそのまま群馬県から離れてください！ 日本の地形なら越後山脈か関東山地が盾に出来ます！ しばらく時間が稼げます！ 新潟か山梨へ！ 急いで!!! 上原くんはこっちでなんとか助け出します！」

——ブチツ……ツ……ツ……

彼女は言いたいことを言い終えたのか、そのまま電話を切ってし

まった。

蛇子のスマホのスピーカーからは通話が切れた音のみが響いており、蛇子はまだ動けそうにない。だが、彼女の言葉から分かったこともある。既に鹿之助は倉庫の資料にあつた通り奴等に捕まり、そして青空さんは奴らが計画している術中に何も気づかず突つ込もうとしているらしい。

だが不可解な言葉に引つ掛かりを覚えていた。彼女の声色は、鹿之助を救助すること以外の発言に関して何かに非常におびえているようだった。群馬県から鳥類が一斉に逃げ出すのが合図？ 越後山脈か関東山地が盾にできる？ 新潟か山梨へ向かえとは、彼女は一体何をそんなに怯えているのだろうか？ テロリストと対峙していることに気づいているにしては俺たちに対する大げさな避難指示だ。……いろいろ勘ぐることはできるが、彼女をこれ以上危険地帯に1人で赴かせるわけには行かない。それは、彼女が対魔忍だとしても頭に血が上った状態ではあまりにも無謀な試みだ。少しでもこちらに注意を引いてその歩みを止めさせるために、今度は俺のスマホから彼女に連絡を入れる。

「はい!? ふうま君?! 蛇子ちゃんから、話は聞きましたか!」

蛇子の連絡の直後だからか、彼女は即座に電話を取ってはくれる。

先ほどの怯えているような発言からはうつつかわって強気な口調で怒鳴り散らす。スピーカーモードにしていないのに車内に響き渡る青空さんの声。これはモードを切り替える必要はなさそうだ。だが、このまま普遍的な返事をしたのではまた通話を一方的に言葉をぶつけられた後、即座に切られて先に向かつてしまうことだろう。

少しでもいいから、彼女をその気にさせるような言葉かけをしなくてはならない。今、ついに俺達の目前にショッピングモールへの看板が見えてきたのだ。このまま俺が時間を稼いで合流ができれば……。

「青空さん! 今、俺達は、お前の父親と共に行動しているんだ!

今、ショッピングモールの何処だ?! そこは危険なんだ! すぐに迎えに行く、場所を教えてください!」

「ええ!? なんて私のお父さん??? 今は家具販売店『ニトロ』と食料



スーパー『ナガト』を繋ぐ通路にいますが、ここが危険なことぐらい知ってますよお！ こちとら上位だか高位だか知りませんが、蛇子ちゃんモドキにプロレス技5回ぐらい決められて、おまけの日本滅亡事件に巻き込まれているんですからね!」

「……? 今、なんて言った? 高位? 高位と言ったのか? 蛇子ちゃんモドキにプロレス技を5回とは? ……まさか……やはり?

魔族と殴り合っ……?」

彼女の発言に俺も思わず固まってしまう。

「……いや、いやいやいや、鹿之助がテロリストの残党に捕まる前までは同伴していたはずだ。そんな高位魔族だなんて、危険な奴に目前で突っ込ませて逃げ出すようなことをアイツはするような奴じゃないし……。鹿之助には青空さんが五車駅に到着する前の段階で、俺が五車駅前のトイレに籠って凧子先輩と今日の打ち合わせを始める以前に、彼女を危険な魔族とかに近づけないようにと釘を刺しておいたんだ。……接敵する前に瘴気を感じ取って避けるはずだ。

あともう少しで、ショッピングモール内の駐車場に入ることができるのだ。ここで彼女にペースを乱されるわけには行かないと頭を振って気持ちを整える。

「わかった! そこを動かすなよ! 青空のお父さん、青空さんはショッピングモールの家具販売店『ニトロ』と食料スーパー『ナガト』を繋ぐ通路だ! そ——」

「分かった!」

「ッ……と!」

「ダメエ! 何もわかってねーだろ! この昼(ブチッ)」

青空さんの父親も相当焦っているのだろう。俺達を現場まで送迎した時の運転からは考えられないような勢いで、曲がり角をサイドブレーキを使った非常に荒々しい急カーブで乗り切った。

ショッピングモール内の駐車場に入るには、待機列に並ぶ必要があったのだが……それを無視して交差点から大きく割り込むように駐車場内へと乗り込んだのだ。駐車券を取る際に警備員が慌ただしく近づいてきたが、車両の屋根に付けられた赤い反転灯と警察手帳を

見せられると、後方で割り込まれたことに対して怒り狂う客の対応に奔走し始めた。

シートベルトを付けていたこともあつてか、俺達が車内の壁に体をぶつけて怪我をすることはなかったが咄嗟の出来事で手から滑り落ちる形でスマホを床に落としてしまう。すぐさま拾い上げ、画面を確認したが通話は切断され、掛けなおしても再び繋がることはなかった。

駐車場に乗り込んだ時には放心状態だった蛇子も正気を取り戻し、怒声と絶叫を上げていた青空さんへ電話を掛けなおしていたが……それでも繋がることはなかった。

「駄目だ！ 切れた！ 青空さんのお父さん！ あと、どれくらいで着きそうですか！」

「5分あれば……チツ！ こっちは急いでいるつてのによ！ 人が多すぎる！ 15分は掛かる！ 緊急事態だつていうのに！」

『えー緊急車両、緊急車両が通ります。道を空けてください。』

緊急事態、緊急車両です。立ち止まってください。至急、道を空けて下さい』

フロントガラスからは道路を往来する人々の姿が見える。

今、覆面警察車両に備え付けられた警察用拡張期とサイレン音、反転灯、クラクション……すべてを併用して退くように人々を促しているが、彼等はこちらを少し尻目に確認するばかりで、『きつと誰かが止まるだろうから、自分達は別に立ち止まらなくても大丈夫だ』と言いたげに、その蛇のような列を途切らせることはなかった。それどころか、ポケットからスマホを取り出して、今度 速度違反で捕まらないようにと車種とナンバープレートを写真に収める通行人すら現れる。

おそらく公務員の警察官が、自分たちを轢き殺してまで押し通ったり、通行の邪魔をしたからと言ってそんな些細な事で自分たちを逮捕すると思っではないのだ。それどころか緊急車両が目前にいたとしても、集団心理が働いて歩行者優先ぐらいに思っている可能性がある。

「こんな状態なら、蛇子達は走った方が早いかも」

「青空さん！ 俺達とは、あとで合流しましょう！ 先に家具販売店

『二トロ』と食料スーパー『ナガト』を繋ぐ通路に向かいます！」

「分かった！ 俺もすぐに到着はするが無茶はするなよ！」

後部座席の扉を開けて、途切れない人々の波を避けながら現場に向けて一直線に現地へ走り抜ける。走りながら上着のボタンを外して、いつでも対魔忍スーツへと着替えられるように準備を済ませた。

シヨツピングモール内に潜伏するテロリストと対峙し、青空さんや鹿之助を助けられるようにとお互いに武器を抜刀できるよう最大限の準備を整えた状態で――

……

……

……

「ふうまあ！ 蛇子お！ 青空さんが！ 青空さんがっ!!! どうしよう

！ 俺を助けて！ 血が止まらなくて!!!」

「……う……そ。……日葵……ちゃん？」

「あおぞらさん……う？」

「――」

――俺達が現場に辿り着いたときには、全てが終わったあとだった。

……間に合わなかった。

家具販売店『ニトロ』と食料スーパー『ナガト』を繋ぐ全体的に白い通路のお客様用トイレ付近の壁に2人は固まっていた。

通路の最深部突き当りにあたる従業員専用通路へ続く扉付近の通路は、倉庫での惨状を連想するかのような……壁や床……。いたるところに、ひき肉片入りのペイントボールをぶつけてそのまま放置したかのような赤黒い塗料があちらこちらに飛散している。

……今。この通路の床には、仰向けで寝転がり首だけが鹿之助の方を向いて口と目が微かに開いたまま口端からトクトクと喀血している青空さんと、その傍らには茶色のケモミミフードだけを羽織い、青空さんが愛用していた赤いヘッドホンを首にかけた泣きじやくる鹿之助がいた。タグのついたままの清潔な洋服で止血しようと号泣しながら奮闘していたが……それでも血が止まらず、白い床には不気味なほどの赤黒い水溜まりがじわりじわりとその範囲を広げていて

……。

「日葵ちゃん！ 日葵ちゃんっ！ ……ッ 酷い……！！ 胸から背中にかけて一突きされて……」

「青空さんっ！」

俺達も駆け寄って彼女の容態を確認する。死んだような濁った瞳が動くことや、まばたきをすることはなく意識は完全に消失しているようだった。俺は彼女の首元に指を当て脈があるかどうか確認を取る。……！ まだ彼女は辛うじて生きている！ まだ生きていた！

彼女が息絶えていないことに対して安堵の感情が沸き上がるが、彼女の容態は極めて悪い状態にある。今もなお生死の狭間を綱渡りしているような状態……いいや、これは死の沼へと完全に沈みかけているような状態だ。このまま何もしなければ死んでしまうことには間違いはなかった。

即座に蛇子に彼女が生きていることを告げると蛇子は完全な獣化……と言っても上半身は人のままで下半身が完全なタコ化する程度ものだが変身を済ませる。それから鹿之助と入れ替わり、青空さんの傷口に対して口から真っ黒で生魚臭のする墨を吹きかけた。この行為にも、当然意味は存在する。蛇子のタコ墨には、相手の視界を遮断する目晦ましという役割の他にもタコの再生能力や治癒力を含んだ効果を墨に織り交ぜて、他人に吹きかけ治療するという効果があるのだ。

「俺……おれ……っ。 対魔忍なのに……何もできなくて……。でも、ひまり……。 日葵だけが……！ 俺を……っ！」

「鹿之助！ しっかりしろ！ 彼女は “まだ” 生きている！」

蛇子と入れ替わった鹿之助は、俺達の後ろで その場にへたり込み後悔の念を泣きながらぶつぶつと小声で事情の説明をしていた。恐らく鹿之助の心情なかで自身の将来の夢と、目の前で起きてしまった現実、それによって生じた自責の念によって混乱してしまっているのだろう。

だが俺はそれをぴしやりと混乱する鹿之助を正気に戻すために宥める言葉を発する。

「！」

「お前がここで取り乱しても、何も状況は変わらない！ それどころか助かるかもしれない青空さんが本当に死ぬぞ！ …… 『対魔忍』として彼女を助けるんだろう!? だから今は懺悔は後にして彼女の救命活動を手伝ってくれ！ お前はここで俺の携帯を使って、救急車と着信履歴にある青空さんの父親を急いで呼べ！ 俺は隣の施設で緊急治療キットやAEDを借りてくる！」

「わ、わ……わかった！」

俺の言葉に鹿之助は泣くのを止めた。八の字にしていた眉と下がった目尻を持ち上げて、抜けていた魂が戻ったかのように俺の指示のもと、蛇子と協力しながら青空さんの救命活動にあたり始める。

………

………

…

………対魔忍は常に死別の連続だ。

里の外に出て任務に勤めていた対魔忍が死んだという話はいつも聞かされていたし、里の誰かが侵入者を排除しようとして死ぬだなんてことは……よくある日常的な話だ。

俺も身内なら10年以上前にはなるが、親父との死に別れを経験している。まあ、あのクソ親父の死は、古きしがらみに囚われ五車を根城とするアサギ先生より前世代の井河一門に対して反旗を翻した結果、敗死した……今となっては自業自得とも考えられる部類の死に別れではあったのだが……。

だからこそ、心のどこかで『対魔忍の死別なんて、日常茶飯事だ』という諦めがあったし、次に同じことが起きても、起きそうになっても平常心を保っていられるものだと思っていた。しかし、それは俺の思い込みに過ぎないと思い知らされる。

直前の会話内容が楽しい内容ではなかったとはいえ、つい約10分前まで会話をしていた新しい友人が、数時間前まで元気だった友人が……今、俺の目の前で死にそうになっているというのは流石に動揺するものがあった。

それに彼女は、いくら2週間前に五車学園へ入学し対魔忍になったとは言えども、対魔忍になった定めだからと言ってこんな場所で死ぬべきじゃないことは、はっきりと分かっていた。

食料スーパ〖『ナガト』のサービスカウンターでドライアイスがごっそり無くなったとざわつく店員に事情を話して緊急治療キットとAEDを片手に、彼女のもとまでひた走る。

そのころには青空さんの父親も到着しており、あの覆面警察車両のトランクには緊急医療用具も詰めているのか、それを用いて止血をしているところだった。俺が持ってきたキットも受け渡し、更に頑丈で強固な止血治療を開始する。彼女の唇や指先は紫色に染まり、チアノーゼを引き起こしていた。血中酸素飽和濃度が低下しているのは明らかだ。青空さんの父親と捜査員が協力しながら止血を続け、四肢を高い位置へと挙上し血を心臓の方へと更に送り込む。鹿之助が青空さんが意識を戻せるように声掛けを、蛇子は癒しのタコ墨を傷口に投与しながらも鹿之助と一緒に意識が戻るよう声掛けをする。俺は外に出て救急隊員の案内役を務めた。

やがて担架を持った救急隊が到着し、俺が誘導して彼女に酸素マスクを取り付けられた。そのころには浅い呼吸であった彼女の呼吸は安定したものとなっていた。更に機械から酸素が吹き込まれたことで容態は、より安定しつつあるように見えた。事前に準備されていたんじゃないかと思ってしまうほどに素早く一時的な入院と手術が行える病院が決まって……。

青空さんの父親はそんな悠長な状況でもないのに、俺達と別れる際。彼女の延命治療をしたこと、捜査の協力をしたことの労いと感謝の言葉を送ってから、救急車に乗り込み そのまま青空さんと共に最寄りの病院へ搬送されて行った。

現場に残された俺達は――

……

……

青空さんの父親と一緒に生きてきた捜査員に、まえさき市と五車町

を繋ぐ市町村境まで送迎される形で五車町に帰って来たのだった。

ひとまず事情をアサギ先生に報告をして迎えに来てもらい、その日は突然の出来事に俺達は何も言葉を交わすこともできず散々な休日を経て解散となった。

……

……

……

〈後日談〉

のちに鹿之助に対して、何があったのか尋ね事情を聴いたときは俺達は驚くほかなかった。

青空さんが “1人で” 17人のテロリストと “巨大な怪物” を相手に大立ち回りを話したからだ。鹿之助も彼女が “怪物” との対峙を除いて、テロリストとの対峙した実際の状況を見ていたわけではないそうだが……。青空さんが鹿之助に祭壇の後ろへ隠れるように叫び、指示通りに転がり落ちたあと、強烈な破裂音が響いて、3分もしないうちに鹿之助のもとへ消火器片手に食料スーパ―『ナガト』の制服を纏った対魔忍ヒーローのように相応しい彼女が現れたと。

また、その時。鹿之助が拉致監禁された部屋の天井には “強大な黒い花卉の怪物” がいたと話していたが……。鹿之助を診てくれた五車町で医者をしている対魔忍の話では、極度のストレスに晒されて錯乱したことによる一時的な幻覚を見た可能性が高いと先生達には説明していたそうだ。

調査第三部セクションスリーとしても鹿之助の話が何処まで本当のことなのか協議しているそうだが、やはり何者かに突然、拉致監禁されたことよってストレスで幻覚を見たのではないかと結論付けられそうになっているらしい。

俺も鹿之助に、どんな外見だったとか、特徴的な鳴き声とか、攻撃方法などを一通り聞いてはみたが……。やはり災禍の管理する蔵書庫にあったどの古書にも鹿之助が話した特徴一致する魔族・魔獣・獣人は存在しなかった。

……でも本当に鹿之助の話した出来事は “ストレス” として処理



してもよいものだろうか？

……鹿之助が怪物と対面したというならば、その場に駆け付けた青空さんも当然、その怪物を見ているはずだ。この件に関しては、今度時間のある時に彼女に聞いてみることにする。

更に、その鹿之助が拉致された現場に他の対魔忍……上原うえはら 燐先生りん（鹿之助の従姉）が調査を向かったそうだ。事件のあった問題の場所には空になった消火器と綺麗な千枚通し、破裂した形跡の残る4ℓペットボトルの一部、横転したカートと買い物がご、空になった消火器とは別の破裂した消火器、燃え尽きた蠟燭使用のランタン、鹿之助の話にあった祭壇と天井にはダクトまで伸びる巨大な亀裂しかなかったそうだ。

いくつかの奇妙な引つ掛かりはあったが、それでも心のどこかでは調査第三部や医師達の話も誤った診断判断ではないのではないだろうか？と思うところはあった。

そもそもの話として……。……どこの世界に17人のテロリスト相手に、たった1人で 3分以内にテロリストを殲滅できる女子高校生がいる？ どの世界に俺達が到着する約10分間のあいだに、17人のテロリストを薙ぎ払い。鹿之助を救出し。怪物を出し抜き。逃走の最中で生命に関わるような致命的な負傷したにもかかわらず、あの通路まで鹿之助を抱えて逃げ出せる……。つい最近まで一般人だった、対魔忍の任務にも就いたことのない五車学園1年生がいる？ ……そんな芸当を成し遂げられるのは、空想世界のゲームやアニメだけの存在にしかでき得ないことだ。

……対魔忍なら、不可能ではない芸当なのかもしれないが……。アサギ先生、さくら先生、ゆきかぜが屋上の制圧を成し遂げたときの出来事を思い出し、俺はさらにアサギ先生から “とある話” を聞いた上で、今。『青空さんは、対魔忍』だという考えを改めている。

これは別談ではあるが、今回のまえさき市郊外の倉庫の地下で隠し部屋の大発見や、鹿之助や青空さんの救助に対する的確な指示や判断による功績、凜子先輩と協力した書物の搜索判断により、アサギ先生の指示のもと独立遊撃隊が結成となった。隊長は俺だ。

……隠し部屋の発見は蛇子の手柄なのだが、いつの間にかに俺の手柄になっていた。アサギ先生に説明しても信用してもらえないし……いったい何がどうなっているんだ？

現独立遊撃隊のメンバーは俺と蛇子、鹿之助の3人だが……。

鹿之助は、青空さんが無事に目が覚めたら 独立遊撃隊に組み入れたいと俺に相談をしてきた。気持ちはわかるが……。その時が来た時……。

……俺は、アイツにはなんて説明するべきか……。未だに悩んでいる。

## 5章 『Bad End.』

### Episode 27 『Bad End.』

「……ッ！」

目覚めたときには、やつぱり薄暗い白い部屋でした。はい。またですよ。はいはい。ルー毎回あることティーン。ルーいつものことティーン。

上原くんは近くに居ませんし、ここはホテルHotelじゃなくて、ホスピタルHospitalです。名詞の最初と最後の文字が同じでも、中身が違ったら別の施設ですよ。わあお！ びっくりしちゃいますね！ まじでクソ

しかも、今度は両親の見守りもないと来ました。服もパジャマから手術衣です。ツハア！ 現在時刻が夜とはいえ、メモ書きも何も残されていらないとなると……いいよ本格的に嫌われちゃいましたかね？ サバンナ サンバ☆サンバ。

……あれから何週間経過したんでしょうか？ 体は動きます。痛みもあります。でも、なんか生魚臭いです……。身体が東北に存在する蔭洲インスマス升へ足を運んだ時と同じ悪臭がする……。

ひとまずナースコールで意識が戻ったことを伝えます。はい。

……

……

……

「……」

……おかしい。鳴らし始めてから30分以上が経過している。……誰も来ない。ナースコールの反応は正確だ。点滅して呼び出し中となっている。

もしかすると認知症患者が点滴を腕からぶっこ抜いて、血まみれ大暴れの大脱走の壁やベッドに糞を塗りたくる弄便行為をして、夜勤の看護師の看護助手が手を焼いているのかもしれない。しかたないにやあ……。もう、しばらく待つてようっと。

……

……

…

「ツウー……」

1時間30分が経過したが誰も来ない。おかしい。これは、明らかにおかしい。

我、意識不明の重体だったと思うけど……誰も看護師が迎えにも様子を見にも来ないので、どうなの？ 巡視は？ ねえ、巡視はどうしたの？ ちゃんと巡視しないと翌朝、冷たくなってるかもよ？ 警察の事情聴取が入って しばらくの間おうちに帰れないよ？

ざんぎようだいは でないよ！ 私が、巡視をサボってたことを警察官に言<sup>チカ</sup>つちやうからね！

……

……

…

「フウー……」

おい。3時間30分経過したぞ。巡視に誰も来ねえし、ナースコールは鳴りっぱなし。1時間前にムカついて、心電図のパルスモニターを0にしたのに誰も来やしねえ！ どうなってるんだ!!! この病院は！

コノヤロウ……。

こうなったら、直接 ナースステーションに乗り込んでビビリ散らかさせてやる。

「——冷たっ……うう……」

……やれやれと肩を落としてベッドから足を下ろして冷たい床を素足で歩く。

居室を出た私のペタペタという足音だけが廊下をこだまする。どうやら、廊下から各居室に付けられた小窓から内部を覗いた感じでは、他の病室の患者はカーテンを閉め切ってちゃんと寝ているようだ。

「今回、主治医の先生の見立てでは何カ月間入院かなあ……。肺に一突き程度だったし、前世での入院経験では2〜3週間ぐらいかなあ

……。欲を言えば2週間ぐらいで学校に行きたいけど……。この世界ではどうなんだろう……。長く入院生活を強いられたら夏休みにも入っちゃうし……。……上原くんの安否確認や紫先生に筋トレの成果報告もしたいし、ああ。そうだ。邪悪な異教徒カウルティストから奪った……。たぶん、魔導書も読みたい」

消灯されているため、非常灯だけが光源となっている やや薄暗い廊下を勇気付けるように小声でぶつぶつと独り言を呟きながら歩く。聞こえるのは私の独り言と、素足の足音だけで他は何も聞こえない。そもそもナースコールを鳴らして来ているはずなのに、ナースコールの反応音すらも聞こえない。

「ははあ……。さては、消しやがったな……。？ ……とつちめてやる」

その後は長い廊下を黙々と歩いていく。途中で、外の景色を眺めることのできるはめ込み式の窓があり、そこから外の景色を覗く。……視界の殆どが木々で鬱蒼としており、遠くまでは見ることが出来ない。月は出ておらず……。新月なのか、はたまた分厚い雲が空を覆っているだけなのかすら、目を凝らしても何も見えない闇が広がっていた。

遠くの方には町らしき光すら見えないことから、グンマーの僻地五車町付近にすることは確かだった。すくなくとも『都心部』と謳われているまえさき市市街近辺の光景ではない。

適当なところで外の景色を眺めるのを止め、温かい掌で素足の裏を温めながら再びナースステーションを目指す。

途中、自動販売機を見つけた。そういえば、喉が渴いたような気がする。意識が戻らない間は、ソリターT3輸液で水分補給はされていたと思うが……。今は乾いた口の中に刺激の強い炭酸を含みたくなっていた。ポケットから硬貨を取り出そうとするが、今着用している衣類は手術衣で小銭など持っていないはずもない。

今から病室に戻るのも面倒で、ひとまず小銭返却機に拳を突っ込んで前の客の取り残しがないかチェックする。

……。横領罪だが、判明しなければ罪にはならない。

「……………」

無かった。

しかし、代わりに自動販売機の下でキラリと何かが光るのに気が付くことが出来た。しめしめと笑いながら、自動販売機の下を覗く。

やった！ 100円玉を見つけた！ やった！ やった！

が……ダメだ。炭酸水を買うにはあと30円足りない。仕方ないので、紙パックタイプのジュース（バナナ味）を購入する。刺激は無いが、それでもきつとこれなら、口の中に甘い味と香りを楽しめるに違いないと思っただからだ。

お金を入れて、ボタンを押して、反応音が響いて、商品が落ちてくる音が聞こえた。取り出し口のカバーを開いて、ジュースを取ろうと手を入れたとき――

「……ッ!？」

自動販売機の取り出し口の中で 何者かに腕を掴まれた。この中に人なんか入ることができるようなスペースなんかない。でもそれは5、6本の指があつて、ふにやりとした指先の肉の感覚があつた。不自然な格好のまま、腕が自動販売機の内部に引きずり込まれて行く……ッ！ 腕が何者かに捕まれて折られそうになっている……！ 嫌だッ！ 自動販売機に喰われて死ぬなんて、肘と肩の関節が外れて、鎖骨、胸骨、顎、頭蓋骨の順でベキベキと不快な音を立てながらじわじわと圧縮死を堪能するなんてッ!! まっぴらごめんだ！ あんな凄惨な死に方なんてしたくない！

即座に片足を地面に、片足を自動販売機に当てて、人々を取り込んだまま地割れの口が閉じていく現象を目前に、地面に押しすりつぶされる前に友人を助け出した時と同じ姿勢になりながら全身の力を使って腕を引き上げる。

ガリッ……!!! ……スポッ！

腕が抜けそうだと思つた瞬間、手の甲に夢とは思えない凄まじい強烈な痛みが走る……ッ！ 痛みに顔を歪ませて引っこ抜いた反動で転がりながら、手の甲を見れば……手の甲が……私の手の甲が……大工道具の鉋カンナで力強く引き裂かれた様に……でも、人間の歯で噛み剥かれたように皮が捲れあがっている。骨と血管が浮き彫りになってい

て、ポタポタと熱い血のような黒い汁が傷口から床に滴り始めた。

取り出し口に視線を移す。……そこには2つの人間の目玉がこちらを覗いていた。

全身の毛が逆立っていくのを感じる。血の気が引いていく。

鼻のない人間の歯にホワイトニングをかけたような……。

不気味な白さで闇に輝く怪物が、大口を開けてこちらを嗤っている。

鼻のない目と口だけの怪物の歯には、テラテラとお歯黒のように私の血肉で赤く染めていて……。

後ずさりする私に怪物が追撃するが如く、20cmもない自動販売機の取り出し口から人間のような四肢を生やす。大柄な人間ほどの凶体を持ち、影のようなのに質量があるように見えて……輪郭がザトウグモの集団のような動きでうねっている。ヒトがブリッジしたような姿勢で……まるで私が折ったことのあるカルティストの首のように座らない頭部をブラブラと左右に揺らしながら、カシャカシャと四肢だけは機械のような小刻みでぎこちない動きでこちらへ向かってきた。

手の甲に受けた患部を抑え、脱兎のごとくその場から走り去る。扶かれた手の甲を止血のため、震えを抑えるため、固く握って逃げ出す。

……あれは影だ。あの光のある場所に逃げ込むことが出来れば、きつと “あいつ” は入って来れない。何故だかわからないが

……そう思つて。手術衣を手の隙間から溢れ出る自分の血液で赤く染めながら、痛みを耐えつつ、恐怖にのまれないうう ほくそ笑んで逃げる。

……

……

……

やがて何とかカウンターより差し込む光の下に辿り着いた。頭上には『ナースステーション』の文字が目に移る。

あんなことがあった後では、巡視や様子を見に来ない看護師や看護助手のことなんて、もうどうでもよかった。人の出来損ないのような

影に『ざまあみろ』と悪態をつきながら、安堵して中に入る。

中には様々な患者に繋いでいるであろうモニターが映し出されており、画面が3面もある大きなデスクトップパソコンの前に白衣を着た薄黄緑色の髪をした女性が、顔の見えないような後ろ姿でキーボードを打っている音だけが聞こえていた。

「あの……」

「……」

「あのっ。……お忙しい中、すみません……。手を……。怪我しちやつて……。手当してもらえますか？」

「ええ♪ いいわよ。そこに座って？」

「ありがとうございます」

パソコンの前に座った女性は、こちらに振り返ることもなく彼女の傍に置かれた円座の椅子を指さす。指示された通りに椅子へ座り、抑えて止血していた腕からゆっくりと反対の手を放す。ベリベリベリ……というガムテープを剥がす音と鈍い痛み。……手から骨が出て見えているのが、とにかく気持ち悪かった。自分の傷だが……痛々しくて顔を背けるほど、目すら開けていられない。けがをした手が正面の女性によって添えられる。すべすべとして柔らかい手だった。

「あらあらあらあ？ ずいぶんと派手な怪我ねえ……。この傷はどうしたの？」

「変な話ですけど、自動販売機の取り出し口から商品を拾おうとしたら何かに噛まれたんです。……あんな自動販売機の内部にヒトが隠れるスペースなんか無いのに……」

「それは確かに変な話ねえ……」

正面の女医は私の話を流すような口調で聞きながら、怪我した方の手を両手で触り処置が始まる。消毒液に浸された脱脂綿をピンセットで摘みながら、丁寧に傷口の消毒がされる。骨にあたる度に響く様な痛みが、腕全体を支配する。

「……いっつ」

痛みで声が漏れる。目から涙が零れる。

「女の子でしょう？ そんな怯えた顔しないで♪ その顔、すごく



……♪ 私の好みだから♡ はい、終わったわよ。神葬ちゃん♪」

……。

……え。

——今、なんていった。この女医。なんで私の本名を知っている？

この女は——

「え？ 今……なんて——」

顔を向け、目を見開く。固まるほかなかった。

……あの女だ。あの女魔族が私の目の前にいる。私の怪我した手を持って……。真つ赤な鮮血が付着した白衣を着用して……。享樂的で加虐を楽しむような笑みを浮かべて……。

……動けない。彼女が添える手は、振り払えれば簡単に解けるほどに優しく掴まれているのに。筋弛緩剤を盛られたみたいに。両足へ力が入らない。逃げなきゃ、逃げなきゃいけないのに——

「処置が終わったって言ったの♪ 神葬ちゃん♪ ゼラト シーカーちゃんと呼ばれたほうが嬉しかったかしらあ？ 釘貫くぎぬき 神葬ちゃん♪」

なんで。なんで、この女が、病院に……。どうして私の本名を……。誰にも話していない名前を……。だって、あいつは、あの時、〈頭突き〉で——

「神葬ちゃんの世界では大喰らいの泥濘っていうんだっけ？ あれねえ……。私が従順な家来を使って使役させていたの♪ まさか、その家来たちを蹴散らして囚われの『上原 鹿之助』ちゃんまでも、助け出すことなんて想定はしてなかったけど♪ でも……残念ねえ……。♪ ちゃんとあの怪物から逃げ切ったのに、その魔術師の支配人に捕まっちゃうなんて♪」

そうだ……。あの時、私は……。

——上原くん。上原くんは!?

「ああ、彼ね♪ そんなに焦らないで♪ 会いたかったら会わせてあげるわ♪」

指をパチンと鳴らす。天井の一部が、マンホールの蓋が開けられるように穴が開いて……。暗闇の中から2つの物品がゆつくりと降りて

姿を現わす。

1つは、様々な機械に繋がれて半透明色のホルマリンにつけられた脳みそが詰められた水槽。

もう1つは、上原くんの髪と顔面、頭部の皮だけになったフェイスマスクだった。内部には瘡蓋かさぶたのような紫黒い乾燥した肉が付着している。

彼女は、上原くんのフェイスマスクを掴み、クシャリと音を立てながら……輪切りにされた首の皮を被れるように引き延ばして着用する。

それから、脳に繋がれた機械の電源を入れて……マスクの口をパクパクさせて――

「ああ……あああ……」

『よお日葵！ どうしてあの時にあんなところで倒れたんだ？』

お前のせいであんなに俺はスネークレディに捕まって生きてままだ皮を剥がれちゃった！ 見ろよこのからだ！ 脳みそだけになっちゃった!!!

……痛い。痛いよ日葵。痛い 電流が！ 助けて！ 痛いッ！ やめてくれ！ やめて。神葬。たすけて！ いたい。いたいいたいいたいいたいいたい――』

「あああああああああ?!?! やめてッ！ 鹿之助ちゃんにひどいことしないで！ 謝ります！ あやまりますから！ だからっ、お願いっ！ やめてっ！ ああ、ごめんなさい！ ごめんなさいっ！ ごめんなさいっ！ ごめんなさいッ!!!」

今度は。今度こそは。……助けられたと思ったのに。

あの時。……あの時。自分があの場で倒れたりしなかったら……。

……結局、何も学べてなんかいなかった。

……私は経験からも学べぬ愚者だ。

「……ほんつと、馬鹿な子。……でもね？ もう何もかも遅いのよ」

涙が留めなく溢れ返り、叫びながら地面に崩れるよう丸くなりながら、地面に額を付けて必死に許しを請う私の髪の毛を彼女は掴み乱暴に引き上げる。ブチブチと毛の抜ける音がする。喉仏を押しつぶされるように首が掴まれる。

にじみ震える視界に、光彩の色だけが蜂蜜色に鈍く輝いた鹿之助の顔が映る。

「最後に良いこと教えて、あげる♪ 蛇ってね、執念深いのよ♪」

——次に意識を取り戻した時、病院のベッドの上で寝転がっていた。

周囲は真つ暗でベッド以外何も見えず、スポットライトのような明かりだけが私の寝ているベッドを照らしている。四肢はすべて堅牢な鎖のようなもので固定されていて、身体でXの字を描くように拘束

されていた。衣服は何も纏っておらず、なだらかな胸部と整えられた陰毛の森林が見える。こんな状態でも、首だけは自由に動かすことを許されていた。

ベッドの正面。私の足側の先でスポットライトが点灯する。上原くんの頭部フェイスマスクの皮を被った彼スネークレディ。女が上原くんの声でオペラのように声高らかに言葉を発し始める。

「さあー。皆さん、今宵は人体解体ショーにご参加いただき。誠にありがとうございます！ 今回の生贄は口が達者な小娘です。この娘、ただの人間の小娘ではございません。なんと中身には、今回ご来場である皆様が仇が！ とある憎き精神体が憑依しております。皆様が今回のショーに楽しんでいただけるよう、既に彼女の感度を3000倍にしております。心行くまで解体をお楽しみくださいませ」

スポットライトが切り替わり、再びベッドの周囲のみが大きくうっし出される。

そこには説明できないほど、大量の……目がらんと輝く前世の怪物やカルティストの残党たちが私を取り囲んでいた。

震えて……尿道から零れるように尿が弧を描きながら漏れ出す違和感を大腿部のみで感じながら、迫ってくる手に持った刃物やかぎ爪から逃れるように身をくねらせて、本当の小娘のように……ただただみつともない悲鳴を上げながら全身をゆすることしかできなかった。



の大きな五車学園の女性教師が1人。

細身で長身の糸目で白衣を纏った男性が1人。……こちらの集団も私の病室へ、また驚愕の形相で雪崩のように乗り込んでくる。

「……」

今までの光景と体験が夢であつたこと、やっと現実に戻つて来れたことを理解することができる。

……だが、私が引き起こしたこの惨状で私に『ハツハツ！ 生きてるうー！ ハツハアツ！ あー生きてるよ!!!』などと言っている余裕などなく……せめて出来たことは……。

「……オ」

「……」

「オ、オハヨウゴザイマス……。こ、これこそが……寝起きドツキリい……。な、なんちやつてー……いえい……」

「……」

「い……いえい……」

「……」

「……。……あはあ……」

引きつってはいるが……なんとなしにおどけたような表情で、固まった両親に対して左手の親指を立てて、右の扉から乗り込んできた個性的で濃厚なメンバーにも機械のような上半身の動かし方で両手の親指を立てた。それからやつとの思いで、顔面に滴る冷や汗を手のひらで拭ってから……上半身を正面に戻して 魂が抜けたように安楽な姿勢で背中を壁に預ける。

……無理やり引き抜き、余計に広がった点滴の穴から血があふれ出る状態で呆然と高速の瞬きをすることだけだった。

……

……

……

……のちに聞いた話では、私が「危険な状態」にあつて先生方同士で、どうするべきか壁1枚隔てた場所で話し合いを行っていたらしい。

……危険な状態。つまり、私は危篤な状態にあったのか。……でも言われてみれば、あの拷問が夢の中で永遠に行われていたとしたら……きつとあれだけでは済まない狂氣的奇行に及んでいたはずだ。現状、どこから説明すればいいかわからないが、ひとまず今、この病室にいる人物紹介ぐらいならできる。

まず紺スーツを纏った男性、こちらが『相州 蛇子ちゃん』のお父さん。頭がつるつぱ——……タコ坊主みたいですね！

次に艶やかな藍色の長髪に毛先が赤い魔乳の五車学園の女性教師、こちらが『上原 鹿之助くん』のいとこにあたるお姉さんである『上原 燐』先生。上原くんを窮地の状況から身を挺して助け出したことについて、まだ状況の整理が完全に済んでいない私の両手を包み込むように握って、振りながらすくお礼を言われた。……上原くんも無事だったと聞いて、こちらとしても先ほどまで見ていた夢もただの悪夢だったと確信を更に得ることができた。お礼を言いたいのはこちらの方だ。

最後に女性陣で残ったのが……。五車学園で教師もしている『ふうま 時子』先生。時子先生だけは、私が消火栓をぶちまけた後に1回……避難誘導する姿を見たことがあります。あの時は、なんか痴女みたいな恰好してませんでしたっけ？ 今は降ろしているその髪を後頭部でポニーテール状に結って、黒の革製品のSMボンテージみたいな服で……。私の記憶違いではなかったと思うのですが……。

あとこっちの白衣を纏った糸目の男性が……。五車学園の校医も務めている……。退院するまで私の主治医として怪我の治療してくれる『室井 光彦』先生。私の事を苦笑いしながら「噂通りの子」と言っていました。どんな噂か、あとで「誰に」聞かされたか詳しく話してもらってもいいですか？ 噂によっては吹き込んだ奴を処す。

私の噂の事はさておき。……彼女等が飛び込んできた理由は、主に……。主にというより確実に、この五車学園の地下に設立されている病院中に響き渡ったとされる私の咆哮のせいである。

病院までも備え付けている五車学園は一体なんなんだ……。……そんなツツコミはひとまず置いて。

……  
……  
……

「日葵ちゃん……ものすつごい絶叫だったけど、大丈夫？」

「……すみません。驚かせてしまったようで……あの時はちよつとした悪夢を見ていたみたいでして。今は体に穴が増えてしまいました  
が問題はないです」

放課後にあたる時間、私が入院している病室へ、学校で配布された私の私物によつて大荷物ふうま君と蛇子ちゃんがお見舞いに来してくれる。

ひとまず、病院に置かれている丸椅子スツールに座った蛇子ちゃんの尻を凝視するが、座った直後の様子から痔になつたような様子は見られない。3時間も便座に座っていたのに脱肛もしていないようだ。あれだけ長時間 便座に座っておきながら痔にもならないというのはある意味才能だと思う。その様子なら消化器科で尻ケツから内視鏡をぶち込む必要性はないな？

一方、私は無理やり点滴を引き抜いたことによつて、体中が先ほどよりもひどい状態で……あと数巻きしたらマミー包帯女にはなれそうなくらいに包帯を巻かれていた。ハロウインで名誉仮装に選ばれそうなくらいだ。おまけに、おむつまで履かされて、今度は勝手にベッドを抜けて飛び出さぬよう、警報が鳴り響く機能付きの拘束具までも付けられている。布団が無かつたら、いろいろ尊厳を失っていた。ありがとう布団。ファツキユー室井。

「まさか、地下に通じるエレベーター内まで響き渡るなんて……。あれがデスポイスで使用されるホイッスルシャウトつてやつか？  
……こうして、また青空さんの伝説が増えるんだな……。なかなか  
ビブラートが利いていたと思う」

「ふうま君。素敵で能天気なフォローは結構ですが、今日の件を学校で話そうものなら……きつと……！ 翌日には素敵なサプライズがあなたをお迎えすることになりますよ……。あの咆哮を耳にした時子先生にも口を酸っぱくして話しておいてくださいね……？」



「わかってるよ。他言無用だつてことも時子——時子先生にも伝えておく」

「よし……。それはさておき、今日は二人ともお見舞いに来てくれてありがとうございます。……。あと、先ほどから上原くんの姿が見えないのですが、彼はどうしてますか……。？ 上原くんの従姉である上原 燐先生から聞いたのですが……。無事だったんですね？」

私の言葉に2人は顔を見合わせる。なんだ。何があった。

「うん……。鹿之助ちゃんは……。日葵ちゃんのおかげで、無事だったんだけど……」

「ああ。鹿之助は青空さんのおかげで問題は何もなかったが……」

二人とも少し俯きながら、とても歯切れの悪そうな様子で私に伝える言葉を選んでるように見える。

……。彼はアレを見てしまった。……。まさか。それで狂ってしまったというのだろうか？……。そんなはずはない！ 私は精神科ではないし、メンタルに関する知識は疎いが、それでも彼と対面したとき、彼は腰が抜けて動けないようだったが、それ以外に何か致命的な症状は見られなかったはずだ。

……。でも、やはり絶対とは言えない。一見、症状には出ていないが潜伏期間を経てまた再発したという患者の話聞いたことがある……。もしや彼も……！

「ま、まさか……。精神に重篤な障害が!? 良い精神科知ってますよ!!!」

『スナック漢姉』<sup>オネエ</sup> っていうんですけどね!!! あそこの鬼塚先生なら

鹿之助くんの場合喜んでタダで喜んで診てくれます！ 今、アポイン  
ト取りますね！ アツ！ 携帯がない!? なら番号!!! 番号は03—  
2021—4746—10—<sup>に、おにい</sup> <sup>シー</sup> <sup>メール</sup> <sup>と</sup>

「待つて待つて待つて！ 落ち着いて?! 鹿之助ちゃんは無事だよ！

ローブの下は全裸だったけど、祭壇から転がり落ちたときに付いたって本人が言っていた擦り傷以外に大きな怪我はどこにもなかったし！ 私達が現場に到着したとき、虫の息だった日葵ちゃんを介抱してくれていたのも鹿之助ちゃんで!!!」

「蛇子も一旦落ち着け。……。——青空さん聞いてくれ。鹿之助から事

情は粗方聞いたが、本当になんともないんだ。あいつは大怪我もしてないし、気もおかしくなったりもしていない。無事だったんだ」

慌てた様子でポケットや床頭台の引き出しを漁る私に対し、ふうま君が両肩を抑えて片目で私の目を見据える。その気迫から、彼が私を一時的に落ち着けるための嘘を言っているようには見えず、その言葉によって落ち着きを取り戻すことができた。

「……。じゃあ、どうして2人とも そんな意味ありげな含みのある言い方をしたんですか。……。率直な意見として、ものすごく驚いたんですけど」

「……………」

……またこいつらは顔を見合わせて……。

3時間電車に乗って、3時間もまえさき市でウンコしていたこと言いふらしてやろうか。

「その、だな……。シヨックを受けなくて欲しいんだが……」

「シヨックう!? シヨックって何ですか!？」

「……………」

「……わかりました。なるべく耐えます。……よし。……どうぞ?」

「鹿之助ちゃんは……日葵ちゃんに『会いたくない』って、言ってるの……」

「」

弱点補正4倍のダメージ

クリティカルの音が、私の頭に響き渡った。

「!」

こちらのおんぐりと開いた口と心情を察したであろう2人が即座に自分自身の両耳を塞ぐ。なんだ。お前等、また私が咆ホイッスルシヤウト哮でもあげるとでも思っているのか。……そうだよ。今、出かかっているよ。二人の手前、出てないけどなあ……!」

「……シヨックを受けない方が変だよ。日葵ちゃんはさ、私達とも入学初日の付きあいだけど、同じクラスメイトとして鹿之助ちゃんとはすつごく仲がよさそうだったもんね……」

「」

「ちよちよちよっ! ちよつと、日葵ちゃん!？」

……遠くなる意識。蛇子ちゃんとふうまくんがとつさに肩と背中を支えてくれたおかげで、後頭部をベッド柵へ強打せずに済む。

……散った。……いろいろ散った。何もかもが散った。……終わった。

……何がいけなかったのだろうか。私は上原くんの前では普通にふるまっていたはずだ。えっちな妄想を本人の目前ではそんなにしていないし、なるべく怯えさせないように、おしとやかにも見せたいはずだ。あのカルティストの殲滅の時だって感づかれないように丁寧な素早く害獣処理をしたはずだ。……私の何がいけなかったんだ。

さくつと爆弾を作った事？ 大喰らいの泥濘に対して挑戦的な笑みを浮かべたこと？ カルティストを防御壁にしたことかな……？ それともゲロとアンモニア臭のする女に担がれたことだったりする……？ ちよつと心当たりが多すぎて何が原因だったのかわからない。非常事態とはいえ、冷静になれなかった自分を悔やむ。

……無事だったのは本当に嬉しい。……嬉しいけど。……こんな仕打ちはあんまりすぎる。

「……。……でも、上原くんは無事だったんですね？」

「うん……」

「……なら。……なら、よかったです。彼に何事もなかったなら……それで」

喉まで出かかった悲鳴を押し殺して、蚊の鳴く様な声で彼が無事だったことを安堵するような声を作り出す。

気分を落ち着けるような大きく息を吐いて 少し苦虫を噛み潰したような顔かもしれないが、笑ってみせる。でも視線だけは……2人には合わせられなくて、左下に視線を向けて顔だけを2人に向けての発言となった。

「……そうか」

「上原くんとは、もっと いろいろお話がしたかったですけど、仕方ないですね！ それじゃあ、せめて『伝言』をお願いできますか？」

「……なにかな？」

「……言いたいことはいっぱいありますが……そうですね……。悩むなあ……」

「今、思いつかないんだったら……また今度だつて良いんだぞ？」

「そうそう！　また蛇子たちはお見舞いにくるつもりだからね！」

どうやら、私の友達は1人減ってしまったようだが、あの場の事情を知らない正面の2人は私と友達を続けてくれるようだ。これは実に喜ばしいことには違いなく、こっちの心情を察してもいるのか、そつと更に近づいてきた蛇子ちゃんが私の手をぎゅつと握つてくれる。

すごく温かい掌。私と同じ……私なんかより女性らしい、モチモチとした柔らかな手が私を包んだ。

「いえ……ここで決めないと、次はどんな言葉が出てしまうかわからないので……少しだけ待ってください」

「……」

目をつぶり走馬灯のような思い出から、彼に送る言葉を選ぶ。クラスメイトなんだから、学校では会えるだろうが……。……きつと向こうは極力接触を避けたがるようになるだろう。頭の片隅に恨み言のような言葉もふつふつと湧いてくるが、それは2人に任せなくても、この先、いつでも本人にぶちまけられる機会はある。もつと、今、彼の親友から経由して伝えられる言葉を伝えるべきだ。

「……あ」

「なんだ？」

……ここでふと、今まで伝えられなかった言葉を思い出した。

「……」入学した初日から、今まで困っていた私を助けてくれてありがとう。特に初日から紫先生に戦闘を強いられたとき、1人だけ助けようとしてくれたのは正義のヒーローみたいで嬉しかった。もう二度と会わないようにするから……最後に怖がらせちゃったのなら……ごめんなさい……。これでよろしく、お願い……。します……」

怖いはずなんてないのに、また校長室へ連行されたときのように目が開けられなかった。

目頭が……瞼の全体が……ホットアイマスクを当てられたようにじんわりと熱い。今、目を開けたらきつとどちらにしろ2人の顔は見えないし、情けない姿にしか映らない。だから目を固く強く閉ざしてやり過ぎす。うつむいて下唇を少し噛みしめて表情を出してしまわないように努める。蛇子ちゃんに握られていないほうの手で、掛け布団を力強く握りしめる。

でも2人は『伝言』を真剣な様子で聞いているのが瞼越しからでもわかった。私の手を重ねるように握る蛇子ちゃんの手と肩を支えてくれているふうま君の両手は、そのまま擦り抜けて行ってしまうような私を現世に繋ぎとめているようで、どこかに消えてしまいたいようになって私の意識はそこだけはつきりしている。

「……鹿之助ちゃんに伝えておくね」

「……お願いします」

ここでやつと瞼に乗った重しが消えたかのように瞼が開けるようになった。よし、笑える。感情の山は越えた。仕方ないさ。こういうことだってある。私はどちらかと言えば、友達が多いと思うけど人に好かれることなんて多くないんだから。……これは今までと同じ。これからも変わらない私の個性のようなもの。それに弱点は少ない方がきつと生きやすいに違いない。

……よし、切り替えていこう。宇宙には、たくさんの星があるように次の新しい友達を見つければいいし、二人は私のためにお見舞いに来てくれたんだから。これ以上、過度な心配や気遣いをさせてはいけない。……難しいことじゃないだろ。

「……すみません。お二人とも、せっかく見舞いに来てくれたのに……」

「大丈夫だよ！ 蛇子もふうまちゃんも日葵ちゃんのこと分かっているから！ あっ……そうだ！ 日葵ちゃんに渡さなきゃいけないものがあるんだった！」

「お？ なんですか？ 蘇生祝いのTRPGルルブですか？ 個人的にはシナリオ集の『黄昏の天使』が欲しいのですが」

「……それは探しておくね……。えつと……これ、なんだけど……」

よし。大丈夫だと思い、目を開けて2人に謝罪をしてから、受け渡されたのは大量のプリントの山と『追試試験』と書かれた案内のプリント……。……は？

蛇子ちゃんの顔と追試試験案内のプリントを交互に見る。彼女は、凄く気まずそうな顔で私の顔を見ている。

「中間テスト……追試の……お知らせ……？」

「日葵ちゃん、ずっと入院していたから……さ……退院したら頑張つて……ね？」

ペラペラと捲つて出題範囲を調べるが……問題はなさそうだ。

一通り『昔の授業』で習った内容であることもそうだが、ポイントさえ押さえていれば五車学園で配布される教科書のいくつかのペー지를読書する感覚で読み込めば問題なく解けるような範囲だ。高校3年間の授業から出題される大学の一般入試試験の範囲に比べれば大したことはない。それに別に満点を取る必要はないのだ。適当に最低限、点数を稼げれば良い。一般教養問題に関しては何とかかなりそうだと思い 頷く。

そんなことよりも……私にはもう一つ気になることがあって、そっちの方が気が気ではなかった。

「ありがとうございます。これくらいの出題範囲なら赤点を取らなければいいので何とかできます。……そんなことより、上原くんは大丈夫でしたか？ 彼には事前にテストで出題されるであろうポイントと予想される出題範囲をまとめた資料を渡しておいたのですが」

「えっ」

蛇子ちゃんの表情が、驚愕したように目が見開かれ口が三角形栗みたいなの形を作り出す。

……確かに私は上原くんには嫌われて『会いたくない』とは言われてしまい、私も2人へ別れの『伝言』を頼んでしまっているが、それはそれ、これはコレである。

追試の案内に記載されている出題範囲のプリントを見る限り、私の上原くんに指定した出題予測範囲はおおよそ的確な範囲であったことが見て分かる。教師たちの授業の進行具合と、ふうま君たちのクラ

スでの授業の進行度をすり合わせして……おおよその出題範囲を予測し抽出したものではあったが……。

それに私はビックイイベント中間試験をおもクソ逃したことも方も衝撃がデカイ。中間試験と言えば、ちよつといい点数を取っておいで、後日の結果発表の際に友達同士で点数を競い合ったり、次回の勉強会を開くきっかけにもなるクラスメイトとの親睦を深めるためのメインイベントだ。これを逃したのは人生一般人粹エンジンヨイ希望勢としての意見として凄まじく痛い。まあ、卒業するまでに残り約8回の中間テストと9回の期末テストがあるわけだが……。こういうのは出だしが肝心なのだ。

クソ！ あの大喰らいの泥濘！ やりやがったな!!! 退院して次に会ったら殺す……！ 弱点も分かった事だし物理的に強制退散させてやる……ッ！

……これ。『入院は私のルーティーン（キリッ）』とか言っている場合ではなさそうだ……。このまま入院を繰り返していたら、勉強にはついていけても学校のあらゆるイベント行事に乗り遅れてしまうことは間違いがない。今後の方針が、入院を繰り返さないように立ち振る舞いながら、一般人ムーブで立ちはだかる障害から逃れる方針でいかなければ。特に修学旅行や社会科学見学、体育祭、音楽祭、学園祭、スポーツ祭こころ辺の高校時代大5ビッグウェーブは逃せない。

入院生活なら入院生活なりに、株やら魔導書の研究やら資格試験勉強など……できることは多いが……。それは大人になってからでもできることだ。

「えつと……。青空さん。鹿之助は大丈夫だった」

「ホッ……。なら、よかった」

「……でも……。アレは……。青空さんが作ったのか……」

「ええ。上原くんとは、五車学園の事や町のことを教えてもらう代わりに勉強を教えるという約束でしたからね」

『マジかよ』と言いたげな顔をふうま君がしている。蛇子ちゃんに至っては先ほどと目の開き具合は変わらないが、私から視線を逸らし次になんて言葉かけをしたらいいのか分からないと言った様子で口

を梅干しでも食べたようにすぼめている。

あれ？ ……もしかして、これ『また私にかやつちやいました？』  
案件であったのだろうか？ 否、それはないはずだ。それを “避け  
るため” に、あの資料はクソ分かりづらい五車学園の教科書のやり  
方を敢えて採用する形で作成している。もつと簡単な方程式や覚え  
方、問題の解き方は、いくらでもあったが……わざと小難しい方法を  
流用しつつ、それを基盤に上原くんの理解度に合わせてわかりやすく  
したものだ。簡略化させたほうがきつと呑み込みも早くなるだろう  
が、もしかすると『授業や教科書で教えていないやり方で問題を解い  
たから、答えは合っているけど不正解』みたいな採点をされる可能性  
があり、それを避けるためでもあった。他には……多少の暗記術も記  
載してあるものの……。それも『体育の授業などで運動しながら方程  
式を口に出す』という初歩的なものだし……。それだけで、ましてや  
一般人の彼等が、そのことに気が付けるはずもない。

「……お二人は試験どうでした？ 無事に抜けられましたか？ 赤点は  
避けられましたか？」

「俺も今度、追試を受ける予定なんだ……。まあ、その……頑張ろう  
な。あの資料を作れる青空さんなら大丈夫だろうけどさ……」

「へ、蛇子は、そ、それなりだったよ……。そ、そっか。アレは日  
葵ちゃんが……」

……おかしい。話を逸らしたはずなのに、私の資料を作った話から  
逃れられない。

なんで？ そんな変なモノ作ってないよ？ 君達、一般高校生だよ  
ね？ なんでそんなに私の参考資料に突っ込むの？ 細かいことを  
気にしていたら、余計なことに気が付いて長生きできないよ。

……でも、よき観察眼でもある。時として見落としても人は死ぬ。  
私は一度死んだ。

……

…

……どうやら上原くんは2人の話によると、中間テストで好成绩を



取ることができたらいい。それはとてもいいことだと思う。私も資料を作って、以前渡した甲斐があったというものだ。

……だが問題はここじゃない。好成绩過ぎたのだ。具体的に、全科目 赤点以上。70点前後を取ったらいい。最初は『ほーん、ええんとちゃう？ 100点満点中、半分以上取れたんだし』と軽く流していたのだが、小中等部と五車学園で勉強のできなかつた……小テストで悪い成績ばかりだった彼が、いきなり好成绩を収めたことがまずかつたらしい。

で。ふうま君と蛇子ちゃんが、それとなくどんな勉強をしたのかと聞いたら入院して昏睡中だった私の資料が出てきたと。なるほど。おまけに今、私の口から資料を作った張本人だと確認を取れたと。なるほど。

……なるほど？ ま、ままままま、あの資料はただの普遍的な資料だし、まだ焦る段階じゃないって。勉強の資料で私の中身が別人だなんて見抜けるわけがない。適当に本屋で見つけた参考資料を基に五車学園の教科書も併用して作ったとか適当な説明をしておこう。私はその資料を作った事よりも『引用元や参考文献を掲載しなかったことが法に触れるのでは？』と心配している素振りをしていれば、きつと大丈夫だ。

彼等は世界の真実を知らない日常を平穩に過ごす一般人なんだし。そう、大丈夫だ。問題ない。

そう思いながら『会いたくない』とは言いつつ、渡した資料をちゃんと有効活用している彼の姿を思い浮かべて、微笑まないように私も蛇子ちゃん同様。上がっていく口角をすぼめて誤魔化した。

## Episode 29 『偵察者』

「先生、もう退院しても良いですか!？」

「(こらこら、これは何度目のやり取りなのか……もう数えるのも止めました、君は何者かに背中から貫かれるようにして肺を一突きされているのですよ?) いくら桐生先生きりゆうの魔科医療まかいりょうで治療されて、人の顔面に飛び蹴りを入れられるほど元気になったから……:~:~:~ととってもまだ少し退院は早すぎるのではないですか?」

入院から1週間。蛇子ちゃんとふうま君が、お見舞いに来た翌々日の朝の出来事。

まだ私は入院生活を余儀なくされている。もう傷は十分に治っていると思うのだが、この病院と五車学園で校医を兼任している室井先生が退院を認めてくれなくて困っているところだ。

それどころか、病室の出入り口には監視のような男女を2人も付けられる始末。一昨日までは誰も居なかったのに……。

ちよつと気分転換がてらに散歩へ行こうと病室を抜け出すため、昨日、私の服に付けられた警報装置が作動しないよう〈電気修理〉で細工を施して無事に取り外して……扉を開けて出ようとしたところで2人を見て初めて存在を知った。

事前に何も知らされていなかったし、『お疲れ様です』とだけ笑顔で友好的に告げて目の前を通り過ぎようとしたら特に理由を告げられる訳でもなく2人はこつちを取り押さえようとしてくるしで……。  
看護師でもなかった服装だったため、顔面への飛び蹴りキックを男の方にかましてしまったのだ。すぐに女の方に取り押さえられて、彼女の方から出入り口で『とある事情』のもと私を監視しているとの説明を受けたのだが……。まあ『とある事情』などと内容を伏せられていようとも、薄々察する事はできる。室井先生による、私をこの病室からとことん逃がさんという固い決意のような信念に違いない。クソが。

だから、こうして経過観察の度に自主退院の直談判を穏やかに毎回行つてはいるのだが、まあこの通り……のんびりとした口調で入院継続のお達しを告げられる。現状そんな状態。

室井よお……。自主退院を認めず、ガツチガチの警報装置が鳴り響く拘束具を付けて、病室に閉じ込める行為の事をなんつーか教えてやろうか？

監禁っていうんですよ。監禁。処すぞ？ お？

「あの方の顔面を蹴り飛ばしたことは申し訳なく思います。……ですが先生。去年こそ私は鉛玉を至近距離から十数発ブチ込まれ、あの時は脳と心臓を除いて全身の内臓と腱をやられ、適度なりハビリが必要な程度には追い込まれましたが、なんとかなっています。大丈夫です。退院しても激しい運動はしませんし、体育の授業は見学します。私は自宅療養通常登校に切り替えたいだけです」

「そうは言ってもですね……魔科医療を応用しているからと言って、最低2週間は本来入院するような大怪我だということを理解していますか？ ……それを1週間と3日で退院というのは……あと4日なのでですからもう少し我慢してください」

とまあ、こんな感じで一昨日の夕方から平行線上で退院の目途は立っていない。

以前入院した際には私の説明書の『CALL of CTHULHUクトウルフ神話TRPG』の64頁『治癒』に関する技法を使っていたが、今回はそれに加え『新クトウルフ神話TRPG』（117頁）『通常のダメージの回復』を併用している。

しかし、魔科医療まかいりょう、魔科医学まかいがくなる特殊療法で超回復している体で療養生を行っているゆえ、この治癒力の早さに関して周囲を驚かせることはないだろう。いいから早く退院して学校に行きたい。上原くんとはもう会えないが追試を受けたいこともある。他の学校行事だって何かしらあるはずだ。

これは社会人になってからの理解ではあるが、何と言ったって学生生活が一番楽で楽しい。家に帰れば、温かいご飯や、清潔な洗濯物が準備されている。学校で勉強するだけで良いというのは本当に大きい。過去に戻るなら、私は間違いなく事件にも巻き込まれたことが無く、ただ『純粹』で楽しかったモンキーだった頃の学生時代に戻ることだろう。

「おい、ここに『目抜け』の友人がいると聞いたが、それはお前か？」  
そんな退院の交渉をしていると突然、乱暴に扉が開かれた。私の病室に五車学園の制服を着崩した6人ばかりの男生徒達がズカズカと入ってくる。ちよつとまつて、今 室井先生と大切な話をしていたところなのに。

集団の中央先頭には『メヌケ』と発言した熟れたザクロの果肉色をした赤髪に、右目には自分だけはカツコイイと思っていそうな厨二病真つ盛りの時期によく見られる……ふざけた黒色の眼帯を付けた身長180cmぐらいの細身でやや筋肉質な男が現れた。左目は翡翠色の光彩がキラキラと輝いていてまるで白目に浮かぶ星のようで見惚れるものではあったが、人を睨みつけるような三白眼が些か彼の人相に圧を作り出してしまっていた。

残念だが、私は彼との面識はない。だが、彼にくつついて歩いていく取り巻きの数人は顔を見たことがある。私が消火栓片手に正当防衛を行った翌日から、私の顔を一目見ようとクラスに訪れた他のクラスのスの生徒や上級生だ。

またこのグループのリーダー格をしていそうな黒眼帯を付けた男からは、私に対する僅かな殺意のような感情がくみ取れる。

はて……？ 何か恨まれるようなことを学校ではした覚えがない。……消火栓事件関連だとしても……あれから少なくとも約3週間は経過しているはずだ。いったい今更、私に何の用だろうか？

それに彼は『メヌケの友人』とも言っていた。メヌケとは、マヌケ的な罵倒の類の秘境グンマー五車町の方言か何かだろうか？ マヌ

ケな友人……。

・ 思考ふが能ま天氣小な友人太。

・ 顔相が能州天氣蛇な友人子。

・ 学上力が能原天氣鹿な元友人助。

3人の顔が思い浮かぶが……。

……いったい誰の事を指しているのだろうか？

「ああ、はい。それはたぶん……私ですけど……？」

ベッド上で布団によって下半身を隠しながら、長座位を取る私のも

とまでその男と取り巻き達は歩み寄り、ベッド脇に佇む室井先生を押し退けた。そしてベッドから逃げられないようにぐるりと取り囲んだのちに、取り巻きどもはニヤニヤとした様子を見下ろしながらこちらを眺めてくる。なんだろう、この光景。まるで私がカルティストに生贄に捧げられる光景を連想してしまう。

カルティストなら殺さなければ。

不幸にも私がいるこの場所は地下だが……いくらでも武器はある。腕に刺さっている点滴針を引き抜いて眼球に突き立て、血液感染と激痛で怯ませたところに、そいつを窓に頭から突っ込ませて割れたガラスで首を撫で切りにすれば1人は殺せるし……違う。彼等は同じ学校に通う五車学園の学生だ。でも、ワンチャン 学生の服を纏ったカルティストという可能性もあるし……？

カルティストなら殺していいよね……？

「二車くん。彼女は先週まで肺に穴の開いていた重傷者ですよ。ここで彼女に何かしようとするなら、私が許さない」

押し退けられたとはいえ、室井先生が仲裁に入ってくれる。流石先生。女1に男6は分が悪すぎますよ。……対魔忍の世界線ですし、今回の来訪がレイプが目的だとしても眼球に2人、口に1人、肛門に1人、膣に1人で……1人余ってしまいます。……あ、そっか。肺の穴がありましたね。……ちようど、これで6人を慰められる。やべーな対魔忍世界。強姦の規格がやばい。

だが彼等は、室井先生の仲裁で引いてくれる様子は見えない。……これは先生も買収されたら、口か尻にもう一本……二本刺しになるのだろうか？ だが校医に止められているのに引かないのは、やはりカルティストなのかも。よし、殺すか。殺そう！

このまま一般人枠で人生を謳歌するなら、目撃者が残らないように皆殺しにしなければならぬ。そうだ。室井先生がどちらに付くか見当も付かないが……彼等を殺す必要性が出たときには全員を気絶させて、床とベッドの間に頭を挟んでベッドを降下させて頭蓋骨を砕いてしまおう。これなら全員事故として殺すことができる。完璧だな。さすが私。

「そうですね。喧嘩が目的なら後日にお願ひします。先生の忠告を聞くことは、手負いの獣を追い詰めず。平穏な生活を送ることが出来る  
“人生の分岐点”になるかもしれません」

自ら手負いの獣と称したのが彼等にはよほど滑稽だったのか、ゲラゲラと取り巻きが笑う。

私は優しい。にっこりと優しく嗤って、うつすら目を開けて脅迫混じりの警告はしてやる。今は笑ってればいい。手を出した瞬間が、血液感染の開始のゴングだ。感染症への将来の不安と失明、激痛のコンボ……最悪脳挫傷で二度と親族もろとも乾いた笑い以外で笑えなくしてやる。

「お前等は黙れ！」

だが彼の一喝で周りのモブが水を打ったように黙った。

それから二車にしゃと呼ばれた男がこちらを見下ろす形でさらに一歩歩み寄ってきた。だが、その程度の身長で私を見下せると思うなよ。小童。

おもむろに私はベッド柵に掛けられているベッドリモコンを操作し始める。

「……怪我人と喧嘩する気なんかねえよ。今回はお前に警告をしに来た」

「はあ……。警告です、か？」ウイイイイイン……

「3週間前、非常ベルを起動させて大暴れしやがって。おかげで俺達の計画がおじやんだ。次、邪魔を試してみろ。お前も“目抜け”と同じようにタダじゃ済まされなくなるぞ」

「それ警告じゃなくて、脅迫って言うんですよ。警告なら『邪魔するなよ』で止めないと。でもそれでいいと思います。わかりました。次は気を付けますね？」

ほう。1週間と3日ぶりのカルテイスト掃討戦になるかと思つたが……その線はなさそうだ。

しかし揚げ足を取られたことにと、こちらがベッドの高さを調整して、逆に見下すことができるの高さまで持ってきた事に少し苛立ちが増したのか、その眼付きが更に鋭いものと化しジロリと見上げながら

睨みつけてくる。だがこちらはニタリと見下しながら微笑みで嗤い返してやる。同じ一般人同士の争い事なら、相手を殺す目的が無い場合に限る、先に手を出したほうの負けだ。

あとは法廷で会うなり、示談に持っていきなり、……そのまま相手が気絶するまで自由にタコ殴りにしたって良い。こつちには点滴針だけじゃない。ベッド柵だつてあるのだ。……だが、ひとまずは正当防衛を成立させる必要がある。

血液が付着した点滴針で相手を滅多刺しに28か所の刺し傷を与えるにすることは過剰防衛になりうる可能性も十分に存在するが、先に訴えた方が勝つ。私の知りうる日本の《法律》はそうなっている。それに性別が女性という時点で暴力に関する優劣はついているようなものだったが、それは法廷に立った時も同じだ。次の法廷では性差で私側が優位に立つことができる。男6人に対し、女1人の暴行事件レイプであれば世間も私に味方してくれるだろう。

## Episode 30 『正義のヒーロー』

……しばらくの間。室内が沈黙で包まれ、二車は私のベッドリモコン操作によって高く持ち上げられたベット上の私を見上げながら睨みつけ、一方私は内心あくどい顔、外面状はニタリとした不敵な笑みで彼を見下ろしながら開戦のゴングが鳴り響く瞬間を待つ。

「お、お前等ー。あ、青空に何してんだよお!!!」

まさに一触即発な空気が漂い始めてはいたものの、僅か十数秒後。その沈黙は1人の男の乱入で終結を迎えることになった。

一週間と3日ぶりの声。もう二度と彼から会いに来ることはないと思っていたはずの女の子のように甲高い声。視線が自然と出口に向けられる。

「……お前は、目抜けとよくつるんでいる……」

『正義の対——』あつ。『正義の対魔忍』の上原 鹿之助だ!」  
間違いない。上原くんだった。

彼はどこか泣きそうで、へっぴり腰ではあったが……ファイティングポーズを取りながら、たった1人でこの正面の二車にしゃと呼ばれた男と取り巻きの5人に対峙している。

……うーん。なんかいろいろ言葉がいろいろ出てくるけど、ひとまず その容姿、仕草、巨悪に立ち向かう姿勢……全てが かわいい。猛獣の群れの中に迷い込んだウサギみたい。食べちゃいたい。うーん、正気度が回復する。

よーし、今うかつにも私に背中を向けたこの男に私の身体から引き抜く予定の点滴の針をテメーの喉仏と鼻頭に二度突き刺すのは止めてやる。あくまでも今の私は乙女で居なければ。

テメー等、上原くんきみたち、上原くんに感謝感謝しやがれッ!

ついでに最大限の高さまで持ち上がるようにリモコンで調節したベッドを、上原くんがベッド傍へと来たときに私を見下ろせるような最低床状態までへと持ってくる。

「正義の対魔忍オ? バツカじゃねーの?」

上原くんの言葉に二車周囲の腰巾着どもがゲラゲラと笑い始める。



さつき二車から『黙れ』って言われたこともう忘れたのか。よし、前  
言撤回。お前等は上原くんが気絶しようものなら刺していいな？  
青空 日葵がどんな病気を持っているか知らないけど、睾丸と陰茎の  
損傷。子作りファーム終了のお知らせ。血液感染から発症まで検査  
室でガタガタ震える準備は良いか？

「……。……ほら、彼女に次のお見舞い客が来たようですよ。二車く  
ん達は もう出なさい。これ以上の滞在は校医として認めることは  
できません。君達。……主に青空さん、ここは病室なのですから大声  
は控えてくださいね」

病室の出入口でファイティングポーズを取る上原くん、私のベッド  
の隣で上原くんを睨みつける二車、ベッドの周りで嗤う腰巾着、そし  
て点滴針を皮膚からいつでも抜去して突き刺せる準備を整えた私と  
いう一触即発なこの現場で、先ほどまで空気を決め込んでいた室井先  
生が静止の一手を打ってくれる。

流血沙汰になる前に止めるなんて流石、先生！ よつ！ ナイスミ  
ドル！ ……でも、それは彼が私に脅迫している時点で止めて欲し  
かったですね。……若干ストップのタイミングが遅いと思いました。

それに外で見張っている2人は何をしているんですかね……？  
今から完全な大乱闘が始まる雰囲気にも関わらず、存在感を一切感じ  
られなかったのですが。やはり、私を取り押さえるだけの要員だつて  
ハッキリわかんかね？

「チツ……。お前ら行くぞ」

「えっ。あ、はいー！」

素直に部屋から退室する二車に、腰巾着どもはぶつくさ文句を言い  
ながらも二車と室井先生に連れていかれる形で部屋を去っていく。

途中、出入り口で構えたままの上原くんと小競り合いが発生しそう  
ではあったものの、流石 校医である。上原くんの正面に立ち、病室  
外にいる2人に指示して速やかに二車のグループを追い出す。私も  
ベッドから飛び降りて参戦しかねない大乱闘に発展してしまうよう  
な本格的な喧嘩にならないよう事前制御に務めていた。

「それでは青空さん、私もこれで失礼します。それと……あなたがそ

んなにも退院したいというのであれば、4日後に再検査して異常がなければ退院と致しましょう。これ以上の談判は受け付けません。私も他の生徒たちの手当てがありますのでわかって頂けますね？」

「……はい」

それから退室間に絶対に退院を認めない趣旨を告げてから先生はそのまま扉を閉めて出て行ってしまふ。あの糸目の瞼が若干、開いてこちらを見つめていたことから「本気」の発言だったのだろう。

やはり無茶を言い過ぎたかなと思いつつ、上原くんしか居なくなつた室内で諦めの返事を返しておく。

……

……

…

「……」

しばらくの沈黙。部屋には2人いるはずなのだが、私一人だけになつてしまったようだ。

「……もう “二度と会いたくない” んじゃなかったの？」

お見舞いに来てくれたのは嬉しかった。でも口から出たのは意地悪な言葉だった。せつかく、彼は「私」を知らないのだから 来てくれたことを喜べばいいのに。素直に喜べない自分が恨めしい。

「……！ ……違う！ ……違うんだ！ ……あれはそういつた意味で蛇子に伝えたわけじゃなくて！」

「……」

「あの “会いたくない” って伝えたのは、蛇子の伝言で聞いた “二度と会いたくない” って意味じゃないんだ！ おれ……俺っ！ 正義の対魔忍<sup>ヒューロウ</sup>を目指しているのに……。あの天井の見たこともない生き物を見た時、身体が石みたいになつて。動けなくなつて……。！ それなのに日葵は、俺をあのローブ連中から1人で助けてくれただけじゃなくて、あの天井に張り付いていた見たこともない怪物を直視しても余裕そうに笑つて、あの怪物からも俺を守ってくれて……。っ！ だから、俺……正義の対魔忍<sup>ヒューロウ</sup>を目指しているのに何もできなかった自分が情けなくつて……。！ 日葵が目覚めたって聞いた時、どんな顔で会

えばいいかわからなかったただけなんだ……!!!」

彼は走り寄ってきて、私のベッドのそばでそっぽを向く私の顔側へ回り込んで「会いたくない」と言った裏事情を赤裸々に話してくれる。

その顔は……アッ！ その今にも泣きだしそうな、子供が母親にご機嫌を取ろうとする顔はずるい。そんな涙目で庇護欲をそそるえつちな顔はずるい。いろんな意味で私のハートに突き刺さる。T w i n t e rなら今頃、リップ欄に『てえてえ』の画像が大量に貼られているに違いない。私の天使が助けて良かったら？ つてそそのかしてくる。このクソ天使め！ ありがとう！

耐えろ……ッ！ 私のポーカーフェイスと心臓！ 尊死を迎えるのは心だけで十分だ！

「だから……！ だから……っ！ “二度と会わないようにする”だなんて言わないでくれよお……」

「……えっ……ふっ」

アッ。むり。まぢむり。決壊する。

不意打ちによる急激な鹿之ニユウムの過剰摂取で尊死感情オーバーフローからデーモン・コアが臨界突破。蒼き閃光がマンハッタン計画。……ごまかさねば。

「ふふっ……くつくつくっ……。見事に私の話術に見事かかりましたね？ 上原くん……」

「……えっ？」

「ハアッ!!……あ。大声は、まずい（蘇る現実の悪夢）……コホン。……ハアッハッハッハッハッハッ！ そう。蛇子ちゃんに伝えたあの最後のフレーズは君をおびき寄せるための罠だったのでよ！ いやー、ここまで素早く効果が表れるとは、迫真な様子で蛇子ちゃんも伝えてくれたんでしょねえ！ ……。……でも、意地悪言っでごめんね。こうでもしないと上原くんの真意が読めませんでしたから」

彼はキョトンとしている。いまいち状況を飲み込むことが出来ないと言った様子だ。

こちら嬉しさのあまりこみ上げてくる感情を押し殺そうと片手を口に、もう片腕を腹に当てながら笑って、どうあがいても喜びの感情で崩壊するポーカーフェイスをこまかす。

「あ、ああ……もし、かしてえ……？」

「そうですね？ やつと気が付きましたか？ なるほど、なるほど。上原くんの将来の夢は『正義の味方』ですか。いいですねえ……。でしたらイザって時の為に、もっとTRPGで遊んでカッコイイ決め台詞や立ち振る舞いを勉強しなくてはいいけませんねえ？」

こちらがお腹を押さえながらケラケラと笑っていると向こうも次第に私が何を言っているのか理解した様子で、袖で涙目をぬぐったかと思えば 見る見るうちに怒った形相へと変わっていく。

「青空さん！」

「別に鹿之助くんなら『青空』と呼び捨てにしてもいいですよ。もちろん『日葵』でもOKです。……土壇場で、何度か呼び捨てにしていたのを私はしっかりと覚えていきますからねえええ？ それと病院ではお静かに。既に3回 悪夢のせいで咆哮を放って怒らせましたけど、室井先生は怖いですからね」

「……。『病院では静かにしろ』なんて、それだけは日葵には言われたくなかったぜ」

「……ヌッフッフ。ヌッフッフッフウ」

腹を抱えて笑っている私がそんなに不服なのか、頬を膨らませてふてくされた様子でそっぽを向きながら、隅に置かれた面会用の椅子に座って私と視線を合わせてくれる。ああ……嬉しいなあ。

「なんだよ。気色悪い笑い声なんか上げてさ」

「……いえ、ね。正義の味方になりたくい——ですか」

「ひ、日葵まで俺の夢をバカにするのか!？」

「違いますよ。……蛇子ちゃんの伝言で聞きませんでしたか？ 鹿之助くんは私の中では、最初から十分に正義の味方だったんですよ」

「……………」

「……ですがヒーローにだって、できないことぐらい1つや2つはあります。でも、それでいいんです。1人 1人に足りないところが

あつても、みんなで補い合えればよい」のですからね。それに……  
1人でなんでもできてしまうようになる、最後に残るのは「虚しさ」や「寂しさ」だけですし……。時として、それが自惚れや高慢にもつながることすらあります。鹿之助くんはまだ学生なんですから、じつくりと……。できることを増やしていけばいいんです」

「……ボソボソ」

「え？ 何か言いました？」

「なんでも！ ……それよりも、日葵ってさ。……周りから大人びてるって言われたことない？」

「そんなことないですよ。至って普遍的な何処にでもいる女子高生です。うえーい。お稲荷様ウィツシュ」(☒☒) ヌ)

両手の指先を狐状にして彼に見せつけるように、胸の前で腕をクロスしておどけた様子でふざける私に対し。彼は半目状態で『どうしようもない』と言った顔つきで見つめてくる。でも、しばらく顔を見合っているうちにクスクス、ケラケラと互いに笑い合ってしまう始めた。

……ああ、良かった。二車と呼ばれた男に囲まれたときには、また波乱の一日が始まりそうな予感がしていたが……。上原くんが仲裁とお見舞いと誤解を解きに来てくれた。

これだけで私は十分、幸せものに違いなかった。

## Episode 31 『病院での平和な日常』

お見舞い品として、いつの間にかに置かれていた果物盛り合わせセットに積み込まれていたリングゴを手取る。

添えられたカードによると差出人は……接点のあるクラスメイト一同からだ。裏面を見ても自殺を示唆する内容は書かれてはいない。それどころか、早く元気になって欲しいという励ましの言葉が綴られていた。

……あんなことを入学初日からやらかした私ではあるが、今のところクラスメイト達からは嫌われてはなさそうだとわかる。

「はい、どうぞぞ」

「お。ありがと……」

ひとまず手に取ったリングゴを食べるためにも、裁縫セットに入っている断切りばさみをへ機械修理で分解したのちにアルコール消毒液で綺麗に消毒する。その分解したハサミでリングゴに切れ込みを入れて適当に半分に分けた。ひとまず育ち盛りの鹿之助くんには、リングゴの皮がウサギ耳状になるように剥いてから食べるように差し出す。

残った半分のリングゴは、いつものように私が皮ごとバリムシャとかみ砕こうとするも、皮ごと齧りつこうとする私に目をまんまるにした上原くんがこつちを見ているのに気が付いたので、冗談のように笑ってからきちんと皮を剥いて頬張る。

「それで？」

「……なんだよ」

「正義の味方さん。今日の学校はどうしたんですか？ もうとつくに朝のホームルームが終わって2時間目に突入しちゃってますけど？」

それから意地悪な口調で口内にいっぱいリングゴを詰め込んで、おそらく学校をサボったであろう彼に病室でたむろしていることについて尋ねた。

「何言ってるかわからねえよ……そんなことより、食べ終わってから喋れよ。汚いぞ」

「おっほお……これは辛辣う……。もぐもぐ……。……ゴツクン……」

それで、学校は？」

「……今日はサボった」

「おやおやあ？ 正義の味方<sup>ヒーロー</sup>が勉学をサボるのは感心できませんなあ？ ちゃんとする程度の一一般教養を身に着けませんと、大人になったとき大変ですよ??？」

「んもう！ さつきから正義の対魔忍<sup>ヒーロー</sup>、正義の対魔忍<sup>ヒーロー</sup>って連呼してやっぱり俺の夢のことをバカにしてるだろ!!!」

「ハツハツハ。まさか。是非とも、そのまま夢を追いかけて正義を貫き通して欲しいですし、私はその夢を応援しますよ！」

リンゴを食べながら学校の休み時間に会話しているような会話をここでも行っている。まるで、この時だけ日常生活に戻っているみたいだった。

「本当かあ？」

「もちろん本当に決まっています。将来、正義の味方<sup>ヒーロー</sup>になった鹿之助くんが、資金調達で困ったことがあったら私に言ってくださいね。私がパトロンになって金銭に関する補助は支えます。……私はいつまでもあなたの味方で居ますよ。……ま、有り金が全部溶けてしまわない限りですけどね！」

「パ、パト……？」

ああ。パトロンの意味が分からず、彼の困惑する顔がたまらなくかわいい。脳が溶ける。頭わるわるくわくるわるくになってしまいきそうだ。

「ああ……パトロンというのは『出資者』とか『支援者』って意味合いですよ。何しろ正義の味方<sup>ヒーロー</sup>には金が常に入用ですから……。とにかく、私も私で夢が叶えることが出来たら、将来ヒーロー活動で頑張るあなたを支援するので覚えておいてくださいね」

「わかった……。……ありがとうな！」

はうあ。

その、納得が行っていないようなけど、味方で居てくれるということだけは分かって向けてくれる笑顔は輝いているように見える。

正気度がまるまるもりもり確定で回復していくのがわかる。心に

平穩が訪れる。素晴らしい。X O P P O Ⅲ O .

「ところで、学校をサボったこと以外の話で聞きたいことがあるのですが……」

「ん？ なんだ？ 何か困りごとか？」

「さっきの扉から出て行った赤髪で半面を黒の眼帯で覆った三白眼の男……あの人が誰か知っていますか？ 随分と上からの物言い、元気になったら正式なぶつ飛ばしに行こうと思っっているのですが……」

「アイツ？ ……あいつは……。日葵は関わらない方がいいよ」

おや、ここで先ほどまで笑っていた鹿之助くんの顔が曇る。

なんだ？ やっぱりなにかと面倒な奴なのだろうか？

五車学園では男女問わず学生はネクタイを着用することが義務付けられている。またそのネクタイの色で、1年、2年、3年と色が判られて一目で相手が何年生なのかわかるようになっていた。たまに着用していない生徒もいるが、それは大体制服を着崩しているタイプの生徒だったり、不良や素行の悪い生徒なことが多い。

あの男は私と同じ青色<sup>1年</sup>だったが、その取り巻きのネクタイの色の中には赤色<sup>3年</sup>……つまりあの中には先輩方も混じっていた。1年が2年や3年の取り巻きと従えている理由なんてわずかしかない。3年を従えるような喧嘩番長を気取っているか、親が権力を持っているか、よほど金持ちかのいずれかではない。

まあ、まだ5月の下旬であることもそうだが……あいつが喧嘩番長であり五車学園で頭を張っているとは思えない。彼から滲み出る頭としての器もそうだが……。ここの普遍的な学生たちが “鬼のような” 強者揃いの教師陣に対し、イキリ黙れ<sup>二車と呼ばれた男</sup>太郎を慕って束になって襲い掛かっても……まず真つ向勝負では勝てないだろう。きつと私も得意とする奇襲攻撃や不意打ち攻撃で、やつと出し抜ける程度だ。

そうになると、親が名の知れた権力者であるか。金を持っているか……。おおよそはそのどちらかのパターンだと考えていい。

どちらに転んでも私的には美味しい。何も物理的にシバいて捏ね



くり回すなんかよりもじわじわと毒沼に突き落として没落させた方が楽しみは大きいからだ。零れ出るほくそ笑みをリンゴを頬に詰め込みながら隠した。

「わはひ分はかり……ゴツクン——ました。正式なアイサツぶつ飛をばしに行くのは止めます。でも、彼が何者であつて、どういつた経緯で関わらない方がいいのか知りたいので……もう少し詳しく教えてはもらえませんか？」  
「そこまで言うなら教えるけど……。あいつは二車にしゃ骸がいざ佐だよ。俺達と同じ同級生で、ふうまの幼馴染。……ふうま家 一門に存在する二車家 頭目で、ふうま宗家の当主が、ふうまだからふうまの家来みたいなやつだ」

「うっわ、人のこと言えねえと思うけど、すつげえキラキラネーム。SNSで実名登録していたら簡単に即特定できそう。やべえ。えっ  
「?????」

「あ、そっか。日葵は外から来たからな……。……えつと難しいよな！ えつとお……。今から分かりやすく噛み砕いて説明するからな？」  
本音が口から漏れ出ないように努めていただけなのだが、余程まったく理解していないという顔を私がしていたのであろう。クエスチョンマークを大量に浮かべた私に彼なりに噛み砕いて説明をしてくれる。凄く助かる。

そして、その小さな口に少しずつリンゴウサギを食べる姿は……やはりすごく可愛い。

……

……

……

……鹿之助くん曰く。

先ほどの『二車骸佐はふうま一門』とは……つまり、一族みたいな、同じ家系のふうま君の親戚みたいな存在で、ふうま君の幼馴染であるらしい？ ここでの一門がどのような意味を持っているかによって、意味合いが異なってくるが、ここでの一門は仏教での同じ宗派という意味や、武道・芸能などで、同じ師匠を持つ人である意味では少し考え難い。

彼の話をややこしくしないために、親戚という意味合いで分かったふりをする。

で、そのふうま君の親戚間には『二車家』という苗字の家柄があつて、骸佐は頭目……つまり、あの若さで二車家の当主。二車家のまとめ役であることまでは理解できた。

それで……ふうま君は、そのふうま宗家……。本家にあたる人物で、一族で一番偉い人物現当主だから、骸佐は……家来という流れになるらしい。

……まるで武家の習慣のようだ。時は140014、16世紀～1600戦国時代の日本じゃない。既に200021世紀の現代日本sに入っているのにもかかわらず、古臭い習慣に草が生えてしまいそうだ。

……巴ちゃんが好きそうな話だが、私は言いたいことがあるぞ。

「これでわかったか？」

「うん……。うん……。ここつてニュータウンだよね？」

「うん。そう聞いたことがあるけど……。？」

「……うん……」

カツつと大きく目を見開き絶叫を上げそうになるが、正面に鹿之助くんがいるのだ。表情を一切変えることなく、心の中で大声を放つた。

なーにが、ニュータウンじゃ！ このクソボケ広報ホームページめがああああああ!!!

ここは古い習慣に囚われ過ぎた江戸時代に鎖国を続けた日本みたいな僻地じゃねーか!!!

理解した。大体を理解した。これまでのバラバラだった情報の欠片ピースが繋がってきた感じがする。

ここは市街地なんかじゃない。市街地になりかけの土地でもない。本当に田舎の僻地の僻地限界集落。もう先が見える、若者は都心部に移住し 地元の有権者以外はこの地に残らない限界集落の未来が見える。恐らく、あのホームページの内容も “人を呼び込む” ための嘘八百だけが並べられたクソホームページだったに過ぎない。まあ、見つけにくいところにある // ホームページを作ったアホは素人だったということだろう！

……少し気がかりなのは、やはりこんな地盤が安定したクソ秘境に国立学園が建てられていることぐらいか。

もつと建てるならいい場所もあったはずだ。凄く設備もいいのに……これでは馬の耳に念仏。豚に真珠、ネコに小判という言葉が否めない。それに……いくら国立とはいえ、資金繰りは一体どうなっているのだろうか？ 私のいた日本では超最先端と言われた技術が、この世界の五車学園では至るところで「普通に」見ることができるとし、一端の学生……。それも機材の価値を理解できないような子供が触れて扱うことが出来てしまっている。退院したら、「探索」してみるのも学校の面白い裏の顔が何か見えるかもしれない。

私がここにやってきたことで良い出来事は、対魔忍の目を欺けられそうな僻地だということと、辺境の秘境で彼<sup>上原</sup>鹿之助<sup>くん</sup>という存在に出会えたこと以外に考えられない。

だがしかし危なかった。二車 骸佐という男。五者町の権力者のようだが、まさかふうま君の親戚であるとは予測外だった。ヤツを没落させることは、ふうま君を地獄に突き落とすことと同義だ。

チツ……。黙れ<sup>二車</sup>ドン太郎<sup>骸佐</sup>め……。ふうま君に感謝するんだな。

「……心の整理が付きました。なるほど……。なるほど？」

「……さては、何もわかってないだろ」

「分かっていますとも。……あと、彼は私に対して、メヌケの友人……とも言っていました。たしか鹿之助くんにもメヌケとつるんでいるって……。」「メヌケ」ってどういう意味ですか？」

「えっと、それはふうまに対する蔑称で……。あ……。うん……」

彼は側頭部を掻いて、私から顔ごと目を逸らした。

なるほど、ふうま君に対する蔑称でしたか。

となると、彼の開けない右目に何かしらの関係があるのか……。それとも、能天気そうな友人から取られてそう呼ばれているのか……。黙れドン太郎について話してくれた時と違って、彼はとつさに言葉が出て来ない様子だ。

「えっと、この話は他言しません。あくまでも、どういう意味なのかな」と知りたくて……」

「うん……うん……」

頭を抱えてじつくりと言葉を選んで様子から察するにみると説明しづらい内容……というよりも、話しづらい内容なのが〈心理学〉上、推測できる。鹿之助くんの喋り出しは流暢であった。これでふうま君の右目が失明しているだとか、能天気だからと言ったような理由であれば……これまで行動を共にし、見てきた彼の性格で言えることとして、鹿之助くんはポロリと言ってしまおうような<sup>少しデリカシーに欠けている</sup>怖いもの知らずであるところがある。……そんな彼が言葉を濁している。

「能天気なふうま君の事ですし……マヌケって意味だったりします？  
ほら五車町特有の方言みたいだな。丁度、同じマ行ですし、方言で訛ってメヌケになったとか、あるいは右目を失明しているから人の障碍を嘲笑った健常者の愚かで傲慢な蔑称ですか？」

「……そう！ マヌケって方の意味。たぶん、方言だと思う！  
なんて表現すればいいかわからなくて困ってたんだ！ サンキュー  
な！ 日葵！」

なるほど。マヌケという意味ではないらしい。人の痛みが理解できない愚かな健常者の残酷な蔑称というわけでもなさそうだ。しかし、今はこれで十分だろう。友人にだって話したくないことの1つや2つぐらいある。追求するのは野暮だ。

……私も、彼に話せない秘密を抱えている。

「そういうことでしたか！ なるほど、なるほど。納得しました」  
「な、なあ。わかっていると思うけど……」

「分かっていますよ。今 聞いたことは他の人には言いませんし、友人のふうま君に”メヌケ”なんて暴言なんか吐く訳ないじゃないですか」

「そっか、だよな……！」

(この前、まえさき市で『この昼行燈』<sup>ひるあんどん</sup>とは言いかけましたけど……)

鹿之助くんの表情が、雲が晴れていくような顔になり笑顔を取り戻す。こちららもつられるようにして優しく笑いかける。

「それで話題をまた変えるのですが……」

「今日はとことん付きあうつもりで来てるからな！　どんな話でもいいぜー！」

「……では、このあとの授業は？」

「……。……その話題は意地悪だなあ」

うん、そのコロコロと変化する感情豊かな顔。すごく　かわいい  
なあ。

## Episode 32 『真実は時として毒となる』

彼がお見舞いに来てから早数時間。

何気ない楽しい時間はまるで綿あめが水に溶けるように消えていく。ふと時計を見上げれば時刻は昼間の14時過ぎを指していた。

ずっと喋りっぱなしではあったものの、お見舞い品のフルーツバスケットの中の果物を二人で食べていたこともあってか別段、小腹が空いたり喉が渇くと言ったことは無かった。

「……ところで鹿之助くん、嫌な記憶を呼び起こさせてしまうかもしれません……。あれから体調の方はいかがですか？　悪夢を見るとか、何処か身体が痛むということはありませんか？」

ここでふと、彼の様子を聞くために適度なタイミング、ふうまくんや蛇子ちゃん達がまだお見舞いに来ない段階で『あれからの事』を尋ねる。デリケートで、彼のトラウマを刺激しかねてしまうかもしれない出来事のため、ゆつくりとした口調で彼に何か異変や怯えが無いか観察をする。

冷静に考えれば、前世に腕の立つ精神科医がこの世界にもいるとは限らないが、それでも世界の真実を知らない精神科医でも多少なりとも腕のいい精神科医の存在を把握しているつもりで、異常があれば彼の治療に役立てられるように彼の状態を聞き出すことが目的だった。「あれから……？　あつ！　おう！　別に特になんともないから、もう安心しろよな！」

こちらが心配する必要がないほどに、鹿之助くんは笑いながら気にしてない様子で笑う。彼のその笑顔が私のために無理して笑った作り笑いだったのか、それとも本当に自然な笑顔だったのか……これまで私が事件や探索で培ってきた〈心理学〉で推し量ることはできなかったが……それでも私の目には、現状は問題なさそうに見えた。

「そうですか。それならよかったです」

「おう！　……そうだ、忘れちゃいけないことを言い忘れていたんだけどさ。……笑わずに聞いてくれるか？」

「……？　もちろんですよ。どうかしましたか？」

「日葵。……あの時、危険を顧みず俺を助けに来てくれてありがとう。俺、きつと日葵が来てくれなかつたら今頃……」

彼は、私に泣きそうだが嬉しそうな照れるような顔で礼を告げてきた。

『今頃』と呟いたところで幼子が初めて激辛のキツめのメンソールガム（黒色）を噛んだような表情をしてしまったが……きつと今、鹿之助くんの中では私が助けに来なかつたときの最悪な想定を連想しているのだろう。

あの邪悪なカルティストに腸をいじくり回されながら、下手をする  
と大喰いの泥濘に生きたまま溶かされるといふ身の毛がよだつような最悪の事態を。

「気にしないでください。私達、友達じゃないですか。それにあれは私の入学初日の紫先生との仲裁に入ってくれた私からのお礼も含んでいるんですよ。鹿之助くんは気にすることはありません」

「でもよ。あの時は結局止められなかつたし……。今回の事は、俺がドジ踏まなきや……。こんなことには……」

鹿之助くんは更に辛そうな顔をする。……この話題を振つたのは彼だが、こうまで辛そうな顔をされるとこちらまで辛くなってくる。

「私を助けようとする——その気持ちだけで充分救われましたよ。……何をそんなに物悲しそうな顔をしているんですか！ ベつに私が死んだ訳じゃないでしょう？ その顔は私の葬儀まで取っておいてください。死ななきや、こんな傷はすべて “かすり傷” です。この傷は、今回を期にとある意味での戒めにもなりましたし……良い経験ができたと思つています。だから気にしないでください。私は大丈夫ですから」

「……」

「今はベッドの上でくすぶつていますが、実は即退院できるほどには超元気なんですよ？ この忌々しい警報装置さえ付けられていなければ、今にもベッドから飛び出して登校できるぐらいなんです」

それゆえに、数秒ごとに気分が落ち込む様子が目に見てわかる彼を  
明るい声色と笑顔で励ました。励まし続ける私に上目遣いでこつち

の様子を見て、少しだけ彼もその申し訳なきような辛そうな表情を緩和させて上目遣いでこちらを見つめてくる。

「とにかく私としては、鹿之助くんが無事ならそれで満足です。別に今回は身体の一部が欠損してしまっただけじゃないですし！ 日常生活には一切の支障をきたすこともないですしね！」

「……本当に、ありがとうな」

「いえいえ、こちらこそ。無事でいて下さってありがとうございます」

よし、数時間前は鹿之ニユウムの枯渇と過剰摂取現象よって取り乱して、ポーカーフェイスから蒼き閃光がマンハッタン計画の臨界突破事故してしまっただが今回はなんとか感情の制御がうまく行きそうだ。私のデーモン・コアは正常作動している。

「まあ、それはそれとして、他にも少しお伺いしたいこともあるのですが……」

「ん？」

「あの時の出来事」 って誰かに話したりしましたか？」

鹿之助くんが安定したところを見計らって、ふうまくんと蛇子ちゃん、他の誰かが病室に来る前に尋ねたかった話題を振ってみる。

それは割と私の今後の日常生活に關係してくる大切な話題であり、鹿之助くんにとっても今後の人生を左右するかもしれない内容でもあるからだ。

「えーっと……話したな」

鹿之助くんは、利き手を胸元に当てて、顔を正面より少し上側に持ち上げて、その視線は天井に向いている。そんな彼には分からないように、私は口端の内側の肉を軽く噛んだ。

そうか。……話してしまっただか。

「誰に？ 誰に話しましたか？」

「事情を聴いてきた警察の人と、学校の先生と……校長先生と……  
上原 燐と母ちゃんと父ちゃんと……」

指を折って、誰に話してしまっただか数えていく。

……つらつらと話していく様子から、結構な人数にあの時の事を話



してしまっているようだ。これには私も漢方薬を水なしで口に含んだような何とも言えない苦い顔になる。

……これは……まずいかもしれない。私の計画的な日常生活が脅かされることもそうだが、今この状況で一番、危ないのは鹿之助くん自身だ。

「ふうま。ふうまにも話したな！」

ン　ツン　ン　ツン　！　　相当、結構な人数に話している。結構な人数に話してしまっていた。これはどうするべきか。彼が何処まで話したのかにもよるが、事件の被害者である彼が事件を鮮明に語っていた場合、今回は健忘症や記憶障害のフリはできないぞ。

まあいい。対策は今日のお見舞い客が帰った後で練るものとして、今は鹿之助くんに迫る危機を片付ける必要がある。厄介な問題を目前に頭を抱えたくもなかったが……彼に余計な心配をさせるわけにもいかないため、片目を瞑って後頭部を掻きながら彼と話を続ける。

「えつと……。どんなことを話しました？」

「どんなことって……あの時、あつたこと全てだな」

「もうちよつと具体的に話してもらっても良いでしょうか？」

「……日葵も、先生達みたいなこと言うなあ……」

「別に私の場合、先生方のように特別な事情はないんですよ？」

……ただ、あの時の出来事を鹿之助くんに事情を聞いた……ということは、つまり私にも事情聴取をしてくるでしょうから。どんなことを聞かれて、どんなことを話せばいいのか……事前に知っておきたいのです」

「そういうことなら……さあ」

メモは取らずに、傾聴するように彼が多数の人間に何を話してしまっただのか確認を取る。

結論から。彼が見た本当に　“全て”　を話してしまっただようだ。テロリストとの対決、怪物の存在、怪物とのチェイス、私が血溜まりに沈む瞬間……。

不幸中の幸いとも呼べるのは、彼は祭壇の反対側に隠れていたため。私がカルティストに行ったペットボトル爆弾による直接的な爆

殺の瞬間と、爆殺し損ねたゴミ共への処分用処理・加工を直視していなかったようだ。カルティストの教祖を衝撃緩和剤へと代用した事実も目撃していなかったらしい。よかった。

でも、まずいな……。まずい。まずいことには変わりない。よりによって『大喰いの泥濘』のことを他人に話したことが一番まずい。

今後、私に対して行われるであろう事情聴取で話さなければならぬカルティストが消化されて存在が無くなった件についても、どんな言い訳をするべきか悩む案件ではあるが……。

それよりも今は彼が話してしまった『大喰いの泥濘』の存在についての隠蔽が最重要だ。

本当に鹿之助くんが今一番、危ない。

「……なるほど、なるほど。ありがとうございます」

「今の話で、役に立ったのなら何よりだよ」

「……その上で、鹿之助くん……。私からも少……。かなり重要なお話があるのですが、ちよつと顔を近づけてもらっても良いですか？ あまり大きな声では話せないような内容なんです……」

「ん、ん？」

彼は異性とあまり顔を近づけ合って話すような機会はあまりないのだろう。私が背中に付けられた警報装置が引っこ抜けないうように細心の注意を払いながら、鹿之助くんのいる方に顔を近づけると、彼もまた顔を少し赤らめながら恥ずかしそうにガチ恋距離へとその顔を持つてくる。

それは初心な反応だなあ！ 私はそれについては気にしてもいなかったよ！ ちよつと待って?! 私の口臭大丈夫かな!? 毎日3食後にはちやんと歯磨きはしているけど、今 果物を食べたばかりだし。話を始める前に床頭台の中に入っている、買ってきてもらったブレスクエアを一錠食べておこう！

「……えつとですね……。これは他の人には秘密にしてほしいこと……。今後、鹿之助くんが再び事情聴取されたときに思い出して欲しいことになるのですが……」

「な、なんだよ……」

「私達が共にあの場所を見た　〃天井のインクの塊〃　については、これ以上誰にも話さず。話してしまった相手にも、アレについての言及は必要最小限にしてください」

「え……う？　えっ？」

困惑する鹿之助くんには、私は声のトーンを抑えながらガチ恋距離で周囲を警戒しつつ、集音機でも聞き取れない声で　彼に忠告を続ける。

「考えてもみてください。見たこともない魔族・魔獣が天井に居て……仮にそれらが未発見の存在だった場合、他の一般の人はどんな反応をしますか？」

「え、えっと……」

「――大体はその証言を真面目に聴いているような様子を見せながらも、嘘だと思うか……または幻覚を見たのだと結論付けるでしょう。では、その幻覚を見続けているような発言をする人物に対して、真実や事情を知らない人達ヴェールの裏側を知らぬ者達はどうするか……。良くて一時的な幻覚を見ただけと処理される。悪くて　〃正気に戻すため〃と　精神病院への入院手続きをしてくるでしょうね」

「――！」

やけに神妙な顔で想定できる事態について話す私に、鹿之助くんの表情が恐怖で強張る。

これは怖がらせることは目的ではないが、周囲の人間に　〃アレ〃　について言及し続けるということは、そういう危険性を秘めているということを理解・認識して欲しかったからだ。

健常者を気取っている異常者ヴェールの裏側を知らぬ者共は、アレについて理解しようとしてもないだろう。これまでの私の経験談としては、きつとアレを説明したところで『極度のストレスに晒されて錯乱したことによる一時的な幻覚を見た』と処理されるはずだ。

もしこれが魔を払う対魔忍ならば……。少しは別の見解を示すかもしれないが……。それでも対魔忍がいままで遭遇してきた、どの魔族や魔獣とも一致しない存在だとしたら？　その存在の確認が今回が初めてだとしたら……？　私個人の……推測にしか過ぎないが、初

回こそ彼等も同じ判断をするに違いない。これが何度も目撃情報を得られれば話は変わってくるのだろうが……。彼等も少し特殊能力を持っただけの人間だ。本質的には人間と変わらない。

「ですから……。あの時に見た天井のシミは、他の人には話さないようにしてください。一度、精神疾患を患ったことになってしまった場合、現代日本では今後就職活動に難が出る可能性だつて考えられます。将来のためにも……。わかりますね？」

そう。彼は未来ある若者なのだ。そんな彼が “真の真実” を語り続けた結果、精神疾患診断をされて社会に出られなくなってしまうのはあまりにも残酷だ。

世間は個性のある若者を……。なんて耳の良い言葉を使つてはいるが、本心としては機械化された一般テンプレと化した愚かで無知なこれまでで異常のなかつた若者を欲しがる雇用主の方が多い。だからこそ、ここで “ズレ” のレットルを張られて欲しくはないのだ。

「う、おう……」

鹿之助くんは納得していないような顔で視線を逸らしながらではあつたものの、返事は返してくれる。

……彼の気持ちは痛いほどに、よくわかる。

……かつて私も同じ経験をしたから。……真実を知りながら死んでいった友達や、同じような事件に巻き込まれたことのある知人たちにしか、その世界の真実を理解してもらえないこの葛藤を。

……私と彼とで違うことは、私には精神異常者認定される前にヴェールの裏側について言及することを止めてくれる親しい友人に出会えなかつたことぐらいか。

「……。……今、他の人には話してはいけないとは言いましたが。私には話しても大丈夫ですよ。私もアレを見ました。鹿之助くんが嘘をついていないことは、私は知っています。だから辛くなつたら、いつでも私を頼ってくださいね」

だから、それでも、少しでも……。あの時や、今後そういうものに遭遇した時の痛みを分かち合えるようにはする。

アレを……。一人で抱え込むのはあまりにも辛いから。

……発散できず、ため込んだ狂気が爆発してしまった友人を何人も見てきたから。

そうならないようにこっち側の先輩として、できる限りの事はするつもりだ。

それに新規探索者をサポートするのは継続探索者の役目には違くない。

「……」

彼は何も言わなかったが、視線を戻して小さく頷いてくれた。……私も少しやるせない顔だったかもしれないが、微笑んでは頷き返してみせた。

「ごめんね。重い話で」

顔を離して小声で話すことを止める。

彼は大丈夫というジェスチャーを送ってくれた。

コンコンコン――

そんな時、病室の出入り口の扉がノックされる。

いいタイミングだ。病室に掛けられた時計を見れば、時間は6限目が終了する15時を回っていた。……となると、この場所に来てくれる相手は大体想像がつく。

「はぁーい?」

「だれだー?」

先ほどまでの真面目な口調から一変した、爽快で軽快な声色で扉の向こう側の相手に返事を返す。鹿之助くんにはウインクで合図を送った。向こうもまた頷くと出入り口である扉に首だけを振り返り返らせる。

「日葵ちゃん! お見舞いに来たよ!」

「よ。鹿之助、今日は一日中。青空さんと一緒にいたのか?」

扉が開かれ、見慣れた友人二人が入ってくる。今日も今日とて、まえさき市で3時間もウンコしていた2人組は幸せそうで、能天気な顔をしている。だが、非日常を知らない彼等がいるからこそ、私は日常を謳歌できていると実感を得ることができるのだ。これはこれで1つの幸せなのかもしれない……。不謹慎だが、あんな話の後ではそんな

ことを思ってしまった。

それから面会終了時間の17時になるまでの間。今度は “4人で” 雑談を楽しむのだった。

## Episode 33 『日程調整』

監禁生活 入院生活 1週間と6日目。

私の身体は、完治して以前と同様に問題なく動くことができている。……と言っても負傷した状態であろうが、さほど身動きに關しては変わらないのだが。

ついに病室内であれば、自由に歩いていいという許可も無事に下り……。ついに今朝。やっと忌々しい警報が鳴り響く拘束具を取り外してもらった。

入院生活5日目。どうしても紫先生のバーベルでベンチプレスをしたかったのだが……。青空日葵の母親に持って来てもらうことは叶わず、仕方なく家へ取りに帰るために私の病室出入り口で門番が昼食休憩とトイレでいなくなる時を見計らって抜けようとこの前のように警報装置の停止を〈電気修理〉で試みたのだが……。

まあ、必要以上に盛大に警報を鳴らして室井先生に叱られたのだ。その日は最終的に、四肢に加え胴体までも拘束ベルトでベッドに括り付けられ、猿轡を嚙まされた挙句、食事と水分はすべて点滴、24時間監視カメラで室内を監視されたときには、新しい性癖に目覚……お見舞いに来た鹿之助くんや蛇子ちゃん、ふうま君にこの姿を見られるんじゃないかと……。かなり焦った。しかし〈幸運〉にも彼等が訪れることはなく、このまま無事に明日には退院できそうな状態までこじつけることができている。

「青空さん、あなたのお友達からお電話が入っていますよ」

ダンベルの代わりに床頭台を用いた筋トレで汗を流していると、室井先生が病室に入ってくる。

……友達からの電話？ 首から下げたお風呂用の手拭いで汗を拭ってから、肌着に前開きのパジャマを羽織る。この病院は五車学園の地下にある……。3人の友人たちの顔が思い浮かぶが、その場合 これまでのように直接、ここまで足を運んでお見舞いに来ればいいだけの話だ。

……何か3人同時に風邪を引いたのだとか、何かお見舞いに来れない

ような事情が発生したのだろうか？と首をかしげながら室井先生に付いて行く。

連れて来られた部屋は、誰も居ない部屋だった。内装は数個の内線電話が乗せられた台座と椅子、銀行やコンビニに備え付けられているATMコーナーで見られる仕切りが並べられた電話室のようだ。

つい先ほどまで清掃員が掃除していたのか、床は少し生乾きで塵一つないほどに清潔に保たれている。

「3番の受話器を使用してください」

「はあ……。ありがとうございます。……誰だろ？ 鹿之助くんかな？」

先生が部屋を出ていくのを見送ってから、眉と視線を上を持ち上げて独り言を呟きながら受話器を取り、耳に当てる。

「はぁーい♪ 日葵ちゃん、元気かしら？」

「……」

受話器から聞こえてきたのは、すごい軽快でご機嫌そうな女性の声。私を『日葵ちゃん』と呼ぶ友達は今状況一人しかいないが……。この声は蛇子ちゃんではない。されどつい最近、耳にした聞き覚えのある声だった。

思わず耳から受話器の受話口を離して、そこから響いてくる声を凝視してしまう。

「あらあ？ 繋がっているわよねえ？ もしもしー？ もしもーし。そこにいるのでしょうか？ 青空 日葵ちゃん♪ いえ、『ゼラトシーカー』ちゃん♪の方が良いのかしら？」

……間違いない。えっちなお店で働いている方の蛇子ちゃんの声だ。彼女は可愛い方の猫なで声を出しながら楽しそうに私の返事を待っている。受話器の先に生唾を飲み込む音が聞こえないように配慮しながら、喉元に手を当てた。

「ああ。どうもどうも、お久しぶりですー。一瞬 誰かと悩んじゃいました。元気ですよー♪」

声を弾ませて、口角を上げられるように努めながら、そのまま内線電話の正面に置かれている椅子に腰を掛ける。



「それなら良かった♪ まえさき市に来たその日に病院へ入院したって聞いて、私……夜しか眠れないぐらいに心配したのよ?」

「それは……心配をおかけしてすみません。私も1日3食とオヤツしか食べられないぐらいには、別れ際 寂しそうにメソメソとみつともなく泣いていたほうの蛇子ちゃんを心配していたんですよ。まあ、どっかの高位魔族が私の事をサンドバッグにしなきゃ入院生活なんかしなくて済んだのですけどね?」

「あらあら♪ それは大変ねー? でも聞いた話によると、サンドバッグになったことは入院の大きな理由じゃなくて鋭利な槍のようなものが肺に突き刺さったことが原因で入院しているって噂話を聞いたのだけど?」

彼女の言葉に眉をひそめる。一体、彼女はどこまでこちらの情報を握っているのだろうか? 少なくとも現状を整理してわかることは、私の偽本名、入院先、入院理由は割れているようだ。しかし、学校の地下に存在する入院先が割れているということは、彼女の事だ。口には出さないだけ通学している学校も割り出しているに違いない。

「やだなあ……それは、リラクゼーションマッサージ店を開いているとあるおまえナーガ種が私で砲丸投げプレイしたとき、着弾時に机の脚に突き刺さったのが原因ですよ。あー思い出したら痛くなってきた。あいた、あいたたたた……」

「まったく、面白い冗談ばかり言って♪ こちらとしても、もうあなたの心臓に毛が生えているって聞いても驚かないわ♪」

私の言葉に電話越しでクスクスと彼女の愉快そうな笑い声が聞こえてくる。私としては全く笑えない内容であり、悪夢での彼女の発言や振る舞いが脳裏を過ぎったが、幸いにも相手にもこちらの表情は分からない。愛想笑いとしてケラケラと笑い返してやった。

「……それで? 日葵ちゃんのこと。私は、どちらで呼べばいいのかしら?」

「そうですね……どちらでもいいですよ。私はスネークレディちゃん  
の事は、敬愛を込めて蛇子ちゃん。って呼びますけど。私達、お友達」  
「なんですよね?」

「ええ、あなたもそう望んでくれるのなら♪ そうね……それじゃあ、私も日葵ちゃん……じゃなくて、敬愛を込めた上で あなたの本名に近そうな “ゼラトシーカー” ちゃんって呼んであげられるわね？」

彼女の言葉にした瞼が持ち上がり、目を細める。閉じていた口がわずかに開く。受話器を握りしめる手の力が強くなる。

思わず反射的に座っていた椅子から立ち上がってしまう。

「凶星……って感じかしら♪」

「……と、思うじゃん？ 目の前にクモが居たんですよ。ああ……朝蜘蛛は殺しちやいけないでしたっけ」

「それは変な話ね？ 先ほど、その部屋は私の良く知る清掃員が虫一匹立ち入ることができないように入念に掃除させたはずなのだけど」「フツ……」

「友達の言葉が信じられないのかしら？ そう思うなら電話の裏を見てごらんさい♪ きつと、証明品があるはずよ」

鼻で嗤うように失笑つつ「まさかな」と思いつつも、受話器を肩と頭で挟みつつ言われたとおりに内線電話をひっくり返してみる。

……。

……そこには蛇子ちゃんが私に渡してきた名刺が挟まっていた。引きはがして手に取り、名刺の裏を確認する。そこにはやはり蛇子ちゃんの名前と電話番号が記載されていて……。

「どうだったかしら？ それは私からのプレゼント♪ もしかするとゼラトシーカーちゃんの財布の中に入っている名刺が悪い虫……そう。対魔忍悪い虫の紙魚の教師に食べられちゃったかもしれないからね♪」

「――」

結果的に彼女から軽いジャブのような拳が顎に叩きこまれたような気分になる。息と言葉がつまり、目だけが左右にギョロギョロと泳いでしまう。前髪を掻き上げながら、大きなため息が送話口に入らないよう配慮しつつ、内線電話自体を膝に乗せ、置かれていた台座に腰を掛ける。それから足を組んで、先ほどまで腰を掛けていた椅子に足を乗せた。

「……魔族害虫ってものは、隙間六があればどこからでも入ってくるもので

すからね。あいつ等、本当に網戸の隙間でも平気で潜り抜けて入ってくるので……。あーあ……。これからの時期 参っちゃいます。……。残念ですが、内線電話の裏には何もありませんでしたよ」

「フフっ♪ そう？ それは残念♪」

自分でもわかるほどに彼女に自分のペースを乱されているのがわかる。早口になって、膝に乗せた内線電話を支えている手の指でリズムを取っていた。

「……えーっと。……。それで、蛇子ちゃんが私に電話してきたのって、安否確認だけですかね？」

「いいえ？ どちらかと言えば本命はあの本についてかしらね。こちらとしては親友への連絡と話が着いたから、あとはゼラトシーカーちゃんの予定次第なの」

「あー……。……。そんな話もありましたね」

「そうなのよ♪ ゼラトシーカーちゃんは病院暮らししていたから、時間の感覚が狂っているのかもしれないけど。世間では2週間、時間が経過しているのよ？ 心配して様子を見に行ったのだけど、残念ながら面会拒否されちゃって……。♪ あーあ、私も見たかったわあ♪ 寝返りも打てない程に意識大人しいとき不明時のゼラトシーカーちゃんの可愛い寝顔。四肢拘束で猿轡を噛まされている時も、十分に可愛かったけどね♪」

動悸がする。クソッ。学校の監視カメラまでハッキングしやがったのか、この魔族アマ……。！

「……待てよ？ 私の寝顔を見たかった？ 見に行つた？ 面会拒否された……。？ もしかして……。私が絶叫で目覚めたとき、教師たちが話して居た危篤ではなく、危険な状態」というのは……。外に2人 私の監視役が付いていたというのも……。？

入院中に身の回りで起きていた不可解な状況に対し、合点が行つたのと同時に背中に伝う汗が異様に身体を凍えさせる。だが、この女に察されてはいけない。まばたきの回数が異常増加するが、平常心を取り繕え。送話口を手元で抑え目を閉じて深呼吸。

……。早く電話を切ろう。強制的に通話を終了させてもいいが、そん

なことをしようものなら次にコイツが何をしてくるか何もつかめない。……だから、今はなんとか丸く収めて　この場から逃げよう。逃げて電話を切ろう。そうしよう。

「……………」。「……」。「丁寧にありがとうございます。あ、でも、カレンダーを確認してからまた折り返しお電話でもいいですか？」

「ええ。今も真っ青な顔をしてそうだし、病み上がりで体調も優れなさそうだからここ等辺で……と、言いたいところだけど……。『逃げ上手』のゼラトシーカーちゃんのことだから、きつと♪　そういうと思ったわ♪　もう予め色々準備してあるの♪　そのまま見上げてみて♪」

私が取ったのはひとまずは話を持ち帰って、社内検討するという社会人が得意とする建前的な逃走戦法だ。されど彼女は逃がしてくれるほど甘くはなかった。

「そんな苦い顔してないで、ほら早く♪」

「……………」

どこまで見抜いてくるんだこの女は。

嫌々ながらも彼女の指示通り視界を上へと上げる。私のジト目が大きく見開いていく。

そこにはカレンダーが貼り付けられていた。何よりも気味が悪いのは、こちらの様子はすべてお見通しな彼女の千里眼発言より、その天井に張り付けられたカレンダーの存在に他ならなかった。カレンダーには予定が書き込めるようになっており、その空白の部分には私の学校行事の日程や、私が……私しか知り得ないプライベートな予定までもが既に書き込まれていたことであつた。

まるで『お前の事は何もかもがお見通しだ』とでも言いたげに。

「すうすうすう……ふうふうすうすう…………………」

もう電話越しの蛇子ちゃんを警戒した振る舞いすらできなくなつてしまった。今にも嘔吐しそうな苦い顔をして、震えたような大きな深呼吸をしよう。

「……………大きな溜息ねえ？　もう感情を隠し通すのはやめたのかしら？」

「ええ。……ひとまず蛇子ちゃん。次の日程のすり合わせを行いましょう。ひとまず、こちらも予定調整というものがございいますので、おそらくご存じの通り、現状は予定が詰まっていますので……そうです。8月中旬。お盆に入る前の週……平日にお会いしたいのですが、そちらの日程はいかがでしょうか？」

「あら、もつと悩むかと思っただけ。案外あっさり決めて、決めた割にはかなり先の日程になるのね？」

「あれえ、言ってますでしたっけ？ 私、事前準備予定調整に時間をかけるタイプの人間だって。予定には書かれていませんがT w i n t e rの友人を誘ってのTRPGのコンベションとかも企画していますし、どこかの自分の店を気軽に休業にできる魔族の女ほどこっちも暇じゃないんですよ」

「短命で脆い割に忙しい人間さんは大変ね♪ でも、ちゃんと調整してくれるのなら、すぐこちらとしても楽しみだわ♪ 問題ないわよ♪ 親友にも連絡しておくから、何処で何時に会うかの詳細はメールでやり取りをしましょう♪」

「かしこまりました。では、お会いできる日を楽しみに……」

「そうそう……」

「……」

「約束だけど『すっぱかしたら、お盆に直々に迎えに行くから』……忘れないようにね♪」

「もう……本当に蛇のように執念深いんだから。……肝に銘じておきますよ」

「それじゃ、2カ月後ね？」

「え？ 何言っているんですか？ 約86カ月後(7年と2カ月後) 私が大学を卒業したらに決まっ

ているじゃないですか、フフフ♪ 長寿種つぽいのにせ っ かち

なんです——」

「おちよ2くるカのも月いい加減後にしなねさいね？」

「はい。2カ月後」

この言葉と共に受話器が切られた音へと切り替わった。

受話器を戻して、体内で張りつめていた空気が抜けるように大きく

深いため息が口から漏れ出て、壁に背中を預けるが……。私としてはこれで終わりではない。手に持っていた内線電話を元の位置に戻して、天井を見上げる。

何度か目頭を指で押し込み、まばたきをするが……。やはり天井には私の日程表が赤裸々に綴られているままであり、今。私の目の状況は幻覚ではないようだ。

ご丁寧に>>>青空 日葵ちゃんの日程♡<<<と大々的に書かれており、日程には筋トレ、筋トレ、筋トレ、試験勉強、追試、買い出し、ヘヴィメタル、筋トレ、DIY、DIY、筋トレ、筋トレ、筋トレ、ヘヴィメタル、筋トレ、筋トレ、ヘヴィメタル、筋トレ、DIY、筋トレ、筋トレ、7月中旬に期末試験！……ざっくりこんな内容だ。

両足を椅子に乗せて太ももに肘を突き、うなだれるように頭を垂れて、手で顔を抱える。

「……蛇子ちゃん。……あんな天井に、私の予定表なんか貼り付けちゃって……。……あんな場所のカレンダーどうやって剥がせばいいんですか……。？……。貼り付けたところ少しは考えてくださいよ……。高位魔族だからって、世の中にはやっていいことと悪いことがあるんですよ……。？」

こんな予定表、誰かにでも見つかりでもしたら碌なあだ名ランダム生成表に使用される筈に違いなかった。こちらとちら学校では半壊した猫被ってんだからよお……。ヘヴィメタル女はまだしも、日程表☆筋トレ女なんてあだ名は嫌なんですよ……。

台座から降りてもう一度、部屋全体をぐるりと見まわす。

天井までの高さは約3・5〜4mといったところだ。この部屋にあるものを再確認する。並べられた複数の内線電話と、内線電話が置かれた台座、その前に椅子があつて、内線電話は仕切りによつて遮られている。

……五車学園の廊下のように天井が3mぐらいの高さであれば、垂直飛びの〈跳躍〉で手が届くのだが、4mもの高さになってしまうと私の身長では、どんなに背伸びをして飛び跳ねても手が掠りもしない。

脚立を借りてきて剥がす方法も考えたが、脚立を探している間に誰かが入ってきて、私の予定表を見てしまうかもしれない。それは避けねばならない事態だった。

……で、あれば。自力で取るほかないだろう。大きく息を吸い込んで呼吸を整える。……覚えてやがれ、えつちなお店で働いている方の蛇子ちゃん。次に会った時こそ、お前にまた吠え面をかかせてやる。

上着を脱ぎ、ズボンの裾を捲り、半ズボンのような状態で、壁をボルダリングの要領で走り抜く準備を整える。病み上がりだとか言っている場合じゃない。これは私の今後の学生生活が懸かっているのだ。これは、そのための努力だ。出し惜しみしている場合じゃない。

……いつやるか？ 今でしょ。

……

……

「とうとううるうる♪ るるるるる♪ るるるるる♪ るるるるる♪ るるるるる♪」

5分後。そこには完全勝利した私が、機動戦士ガンダムユニコーンのテーマソング（サビ）のメロディを口ずさみながら、破れたカレンダーを両手に興奮を促すような真つ赤な視界で自分の病室へ向けて歩いていった。

そう、蛇子ちゃんから突き付けられた悪意に。自分の将来を脅かす予定表に。立ちほだかる壁に。私は “また” 勝った。勝ったのだ。腕を頭上に突き上げ、最大級の喜びを表現する。

この調子なら蛇子ちゃんの親友がどんな存在だろうが、私に敵意を向けてこようが、この破けたカレンダーのように粉になるまで刻んで、頭からゴミ箱にぶち込めるだけの自信が湧いてきた。だが、慢心は死だ。全力で対策を練らせてもらおう。

さあ、明日には、この忌々しい白い部屋から私は脱出する。脱出できるだけの力を持っているのだ。楽しみで仕方がない。

……

……

：

『蛇子ちゃんとのメール』

RE：RE：RE：RE：RE：RE：RE：RE：RE：RE：頭から流血して入院  
が伸びたって聞いたわよ？ 今度は何をしたの？

日時：『今年の』 8月中旬 第2週 19：00～

場所：魔都 東京（東京キングダムZ街Y丁目X番地）

補足：使いにはこちらから話を付けておくから、渡してある名刺が  
あれば問題なく私の元に来れるはず。名刺を無くしちゃったのなら  
……自力で何とかしてみせてね♡ また会える二カ月後を楽しみに  
しているわ♪

そうそう、ゼラトシーカーちゃんの愉快なお友達の……上原 鹿之  
助くんを紹介してくれてもいいからね♪



## 7章 『つかの間の平穩(?)な日常』

Episode 34 『光の陽葵／闇の日葵／Wひま  
り』

あれから何事もなく無事に白い部屋病院から脱出退院した私ですが、身体は相も変わらず絶好調な状態を保っています。

無事にすごくつまらない中間テストをふうま君とササツと適当に終わらせてから、まえさき市での出来事に関する事情聴取も適当に鹿之助くんの証言に合わせる形で説明をしました。あの場にはカルテ誘拐犯イストしかおらず、動画サイトで見たペットボトル爆弾で不意を突いて助けた趣旨の説明だけサクツと済ませて。

6月上旬には楽しい日常を鹿之助くん、ふうま君、蛇子ちゃんと過ごそうと考えていたわけですが……現在トラブルが発生してしまいました。

3人が揃いも揃って「課外授業」とやらに出かけてしまっているようで、普段つるんでいる友人が誰も居ない日常を一人寂しく送っています。たまに3人はフラツと数日に1回は帰ってくるのですが、どこかその顔は疲れていて声をかける余裕もないほどに疲れきっていて……いまの私にできることは、3人を余分に疲れさせてしまわないよう疲労に効く紅茶やホットアイマスクを通販で取り寄せて3人に配って回ることぐらいです。

「はあ……」

時期も梅雨となり、ふと窓の外に視線を移せば雲は鉛空で、雨のにおいを充満させながらしとしととまるで私の心の中のように泣いています。

……なんて、ポエムを刻んでみたものの、要はすることが無くて暇だった。……家に帰ってからであれば、対蛇子ちゃん8月へ向けての時間が足りなくなるほどにやることだらけなんですけどね……。

基本ルルブ私の説明書である2種はひとまず斜め読みの形で全部読むことは済んでしまっている。あの大喰らいの泥濘に背中を一突き刺された

わけだが、〈幸運〉にも説明書は血と洗剤で汚染してしまうようなことはなく、私が使い込んだ程度には劣化していたそうだが本自体そのものは無事だったようだ。

また、私があゝの魔術師から回収した魔導書は『クトウルフ2010』『クトウルフコデックス』という『クトウルフ神話TRPGのサプリメント』だったようだが、一介の魔術師が、TRPGのサブリを魔導書として運用しているとは到底考えにくく、つまるところ。これ等は私の説明書の拡張セットではないかと仮定している。どういう経緯でこれが、あのカルティストの手に渡ったのか。これ等の魔導書を手する規則性については掴めていないが、現状としては使えるものは使っていく。そのつもりだった。

ひとまずはコデックスから読書を始めていく予定だ。

『クトウルフ2010』と『クトウルフ コデックス』は160頁からなる小冊子であり、『コデックス』から読み進めることを決めたのはこっちの方が面白そうなゾンビに関するシナリオが同封されていたことが大きな要因であった。

「ねえ！ キミが『青空 日葵』ちゃん!」

「つうおあッ!」

窓を眺めて、暇な日常をどう過ごすか考えていたところだったが、バンツと音が響き渡るほどの勢いで自分の机を叩かれ、名前を呼ばれたことよって微睡んでいた意識が現実に戻される。

窓の外から叩かれた机の方向へと視線を戻すと、1人の一目で元氣つ娘系女子とわかるような少女が目キラキラと輝かせているのが視界に入ってきた。その姿は暖かな太陽のようなオレンジ色の光彩に、二つの豊満な乳。その髪型は梅雨のシーズンであるということにも拘らず私以上の癖っ気で、彼女の髪型を一言で簡潔に言えば、モンハンライズに登場するベリオロス女性頭装備のような髪型と言えはいだろう。その肌はこんがり小麦色に焼けていたが、私が前世で唯一知っている対魔忍の片割れ『水城 ゆきかぜ』よりは薄い……鮮やかな小麦色をしていた。

「ごめんね！ びっくりさせちゃったかな？」

「ええ、まあ……少しだけ。確かに私は『青空 日葵』ですが……。  
……えつとあなたは？」

「私も『ひまり』！ 日ノ出ひので 陽葵ひまりっていうの！ 私と同じ名前です  
たような苗字と同名の子が5月から新入学したって聞いて会いに来  
たんだ！」

ニコニコと笑う彼女は、その名にふさわしく後光が差すかのような  
太陽のように輝かしいオーラが放たれていた。御馴染みの3人が、  
課外授業”に出かけてしまい気力が喪失し、ジメつとした梅雨に気が  
滅入っている私とは対となる存在のように感じられる。

「あー……そうでしたか。えつと日ノ出さんは……」

「陽葵ちゃんって呼んで良いよ！ 私、同じ名前を持つ日葵ひまりちゃん  
もつと仲良くなりたいたいと思っているの！」

「ひまり、ちゃん……？」

「うん！ いいね！ すっごくいい！ 私ね、日葵ちゃんのこと噂で  
聞いていて、どんな子なんだろうって思っていたんだけど、会いに来  
た感じだとすっごい普通の子だね！」

思わずこれには苦い顔をする。自分がやらかした行いとは言え、や  
はりやらかし案件を面と向かって言われるものは、若干堪えるもの  
がある。

……いえね？ 私は普通にニコニコ五車学園ライブを送りたかつ  
たんですけどね？ あまりにも命の危機に瀕したから、消火栓という  
得物に手に出ただけであって私は悪くないんですよ。紫先生も『全力  
でかかってこい』って言っていたような気がしますし。

「いやあ……。あはは……。そういう陽葵ちゃんは、すごい元気っ娘で  
すね。かなり体力が有り余ってそれで疲れ知らずって感じがします」  
「うん！ よく友達からそう言われるね！ それで日葵ちゃんはさ、  
音楽は『地獄デスメタル』が好きだって聞いたんだけど、楽器とか弾  
けるの？」

彼女は私の目の前で、ギターを弾く様なエアギターを始める。

……うん。……うん？ また彼女の言葉から、まだ私の噂が非常に  
錯綜していることをなんとなく察することができる。

それにしても、私の噂は『地獄デスメタル』とはまたコアなヘビイメタルのサブジャンルを突いてきているようで……。私は細かく分類されたサブジャンル系統の話なら、地獄デスメタルはあまり好みではない。ジャンルの的にはシンフォニック・パワーメタルやクルーヴメタル、シンプルなヘビイメタル派なのだけど……。

でもきつとこら辺の会話は、初心者には分かってもらえないし……。無益な好みの違いで戦争が始まりかねない話題だから、そつと修正する程度に留めて質問には答えることにした。

「うん……楽器に関しては、大体できますよ。ベース、ギター、ドラム、キーボード……いずれのポジションでも、バンドで欠員が出てても即参戦できるよう一通りは扱えるように練習はしています。陽葵ちゃんはどうですか？　楽器とか嗜みますか？」

「んー。私はどちらかというと身体を動かす方が好きだから、……あまりそういうのはやらないかな？　ごめんねっ」

「そうですか……気にすることはありませんよ。でも、1点だけ修正しても良いですかね……？」

これはやはり初心者。ヘビイメタルのサブジャンルというもの自体をわかって無さそうだ。ひとまず 私が地獄デスメタルを好きだという噂を聞いて興味本位で聞いてみたと言った様子であって、この話は膨らみそうにはない。だが、私も修正したいことはある。それだけは告げなければならぬ。

「どうしたの？」

「私は地獄デスメタル好きというよりも、ヘビイメタル自体が好きな感じです」

「うん……？　地獄デスメタルとヘビイメタルは何が違うの？」

こればかりは『聞いてみれば、わかる』と一蹴したような返答になりかけるが……。まあ、興味本位で聞いている以上、自ら進んで音楽を調べて違いを視聴する……なんてことはしないだろう。だからどういう違い程度の説明だけは行おうと試みる。

「地獄デスメタルというのは、ヘビイメタルに分類されるサブジャンルの事を指していますね。私たち学生の身近なものに例えるなら、そ

う……。五車学園に所属する各クラスの雰囲気やイメージしてくだ  
さい。ほら、クラスによつて、そのクラスごとの特色や雰囲気があ  
りませんか、そのようなジャンル分けとなっている様式です」  
「……………んう？」

いまいち理解していないような顔をしている。まるでこれがア  
ニメなら、吹き出しに黒い竜巻のようなぐじゅぐじゅの線が出てい  
るような素振りや表情だ。

私も彼女になんとたえ話をすればいいか、顎に片手を当てて左側  
に視線を移した。写した先にはクラスメイトの机があつて、次の授業  
で使用される『数学Ⅰ』の教科書が私の目に留まつた。

「今の説明でピンとこなければ、高校で習う数学で例えてみましょう  
か。数学と言つても、高校で習う数学には5種類。数学Ⅰ、数学  
A、数学ⅠⅠ、数学B、数学ⅠⅠⅠとあるようにヘビイメタル  
にも様々な種類があるわけです。地獄デスマタルはそんな大きな  
ヘビイメタルというジャンルのⅠつでしかないわけですよ」  
「……………」

私のジェスチャー入りの説明に今度は、彼女は目を丸くして聞いて  
いる。この様子だと、私の話を真面目に聞いているうえで、わからな  
いこともあるけど少しは納得していると言つた表情が散見される。

「……………すみません。……………今の説明で理解していただけましたか？」

「なるほど……………ヘビイメタルにも色々種類があつて……………うん！ わか  
りやすい説明だったよ。ありがとうね！」

「だと、いいのですが……………」

梅雨の時期かつ、雨が降つており気圧などによつて気が滅入つてい  
る私に対して彼女は太陽のような態度は変わらない。なんというか、  
彼女が光の陽葵だとすれば、さながら私は闇の日葵だろう。クラスメ  
イトには私達のことかどのように見えるのか……………？ 少しばか  
り気になった。

「あとね！ ……あとね！ 今日私は私、日葵ちゃんに見て欲しいものが  
あつて、持ってきたものがあるんだ！」

「見て欲しいもの？」

「じゃじゃ、じゃじゃつくん！」

そういつて彼女が取り出したのは、オレンジ色で前開きのライダーズジャケットだった。右肩には太陽の紋章が刻まれており、過度な総丈詰めによって 胸部周囲しか衣服として機能しなさそうだ。まるで子供用の服を着ているかのようなサイズ感の合っていないジャケットにも見える。

「このジャケット、どう思うかな？ 私の対<sup>勝</sup>魔<sup>負</sup>忍<sup>服</sup>スーツの上着なんだけどね？」

「これは……なんというか——」

しかし、広げて彼女がその勝負服とやらを纏った瞬間、そのサイズの合っていない服という第一印象は払拭された。

思わず私の目もキラキラと輝いて、瞼が普段よりも自然と大きく開いていくのを感じることが出来る。私も着てみたくなるような……。思わず、席を立ちあがって、貴重な芸術品に触れるかのように、そつとライダーズジャケットに手を置く。艶やかな触感とほんのりと温かい感触が指先に伝わった。

「カッコいいですね……！ その幅の広く立った襟もさることながら、オレンジをベースとしたライダーズジャケットに黒のライン。右肩についている太陽の紋章も陽葵ちゃんにマッチしていると思います！ 最初こそ総丈が短く子供服のようなイメージでしたが、あえて総丈を詰めることによって自身のくびれとへそを強調し、なおかつライダーズジャケットの重量を無視したデザイン。キマってますね……!?!」

「でしょー!!? ヘビイメタル好きの日葵ちゃんなら、この感性っ！ 絶対にわかってくれると思っただよ！ いいでしょ?! いいでしょ!!?」

「え、なんですか?! その勝負服!! なんですか?! 最高にロックだと思えます！ いいですね！ 好きです！ 好きッ!!」

「なんなら、日葵ちゃんも着てみる!! 着て見ちゃう!! 絶対に似合うと思うよー!」

「え、いいんですか?! いいんですか?! 着ていいなら、着ちやいますよ?! 着ちやいますよ?!」

クラスメイトがうるさいのが2人に増えたという眼差しをこちらに向けてきているが、そんなことは今の私には知った事ではない。さらば、過去の私。闇の日葵として認識されるよりも……そんなことより今はジャケットだ。

彼女が脱いだライダースジャケットを受け取って袖を通して纏う。短時間にも関わらず彼女の衣服はポカポカと太陽に照らされているような温かさがあった。恐らくこれは、彼女の体温が他の人に比べて高いためだろう。まくり上げられ、袖上げされた袖が上腕の中ほどに來ており手首付近が非常に快適であった。窓に反射した私に対して、ファイティングポーズを取ってみる。ジャブを2く3発放ってみる。彼女がやっていったようにエアギターの動きを試してみる。

……すごい動きやすいし、総丈を詰めているとはいえそれ以上に素材が羽のように軽い！

良い！ この服、良い！（語彙力崩壊の音）

「似合ってる！ 似合ってるよ！」

背後からの同名の新しい友人のあいの手も入ったことにより、こちらのテンションが梅雨の憂鬱をブチ飛ばすような勢いで跳ね上がっていく。『ちよろい』と言われたらそれまでだが、この服でテンションがブチ上がらない方が私にとってはおかしなのだ。

しかもこのファッションは今だからできるし、今じゃないとできない”ファッションだからいいのだ。考えても見て欲しい。20代までならまだしも、三十路後半を越えた大人の女性が、こんなファッションで街中を闊歩してみたら……周囲から痛い目で見られるのは間違いない。これは学生だからできる、許される年相応のファッションなのだ。

………

………

………

授業開始のチャイムの音が鳴り響き、ここでやっと我に返る。

テンションが振り切ってしまった結果、時間を忘れてまで陽葵ちゃんの あいの手に乗っていたようだ。

少し記憶を振り返ってみるが、途中からあいの手がボデイビル大会の掛け声（伝道者!!）に変わっていたような気がしなくもないが……楽しかったことには違いない。

「ご、ごめん！ 熱中しすぎちゃったみたいで……えっと、返しますね！」

丁寧に脱衣をして、綺麗に服を折り畳む。授業開始のチャイムがなったのにもかかわらず、椅子に座りニコニコと満面の笑顔で手を叩き、こちらにあいの手を入れ続ける彼女に謝罪と一緒に勝負服を返却した。

「いいの！ いいの！ 日葵ちゃんが楽しそうにしてくれていたみたいだし、私はなによりだよ！ ねえ！ 今度の放課後は暇？ 暇なら一緒に帰ろうよ！ 私、もっと日葵ちゃんのことを知りたいな！」

「もちろん空いていますよ……！ 放課後ですね！ よろしくお願ひします！」

「そんな『よろしくお願ひします』だなんて、気にしないでいいよ！ 日葵ちゃん、最近憂鬱そうだって聞いてたからね！ 元気になってくれたのであればよかった！ それじゃあまたね！」

先生と入れ替わるようにして彼女は、大手を振って私のクラスから退室していく。その笑顔は本当に心の底から笑っているようで、星の瞬きとは違う 太陽のようなキラキラとした笑顔で、その温かさでこちらにも自然と笑顔になるのだった。



## Episode 35 『噂の根源』

時刻は夕方。

今日も1人っきりのでの帰宅……ではなく。久方ぶりに友達と2人で共に帰路についている。その友人とは以前、学校から一緒に帰る約束をした日ひの出で陽葵ちゃんひまりだった。

空はどんよりと鉛色で、傘をさす必要があるぐらいには雨が降っていたが、不思議と彼女のそばにいますとカラッと乾燥したような空気と不思議な雨であった。

「それでね、その時ここね心寧ちゃんここねが日葵ちゃんここねの存在とクラスを教えてくださいましたね！」

「なるほど、その方が 陽葵ちゃんに私が『入学1週間で突然 頭にカバンを被って廊下で地獄デスメタルをゲリラライブ放送した印象派ファンキーフレンズ』と……『現場を見た上で』教えてくれたんですね？」

「そそっ！ 今度、日葵ちゃんも私のクラスに遊びに来てよ！ その話を教えてくれた時に心寧ちゃんここねがね、日葵ちゃんとは『一度でいいから、ゆっくりお話ししたい』って言ってただけど……ほらっ！

日葵ちゃんって学校中の人気者だから、会いに行く勇気が出なくてずっとクラスで嘆いていたんだ！」

「ほうほうほう……。そうですね、そうですね……。いやあ……奇遇ですね？ 今のお話を聞かせてもらって、私もその速水はやみ心寧ちゃんここねに、すっごおおお会いたくなっちゃいました！」

そして判明する私の魔改造された噂の発生源。

現在、帰宅路の道に二つの笑顔が通り過ぎていく。

1つは言わずもがな、陽葵ちゃんの私と楽しくお喋りをしながら、自分の友達を紹介して心の底から自然と沸き上がった溢れる感情を見せている楽しそうな笑顔。

もう1つは、どういう経緯で噂を流そうと思いついたかは知らないが、日に日に悪化していく魔改造した噂を垂れ流していた本人に対し、怒りの衝動に駆られ 張り付いたような口角を上吊り上げた私

の威嚇的な笑顔だ。

なるほどお……。その速水<sup>はやみ</sup> 心寧<sup>ここね</sup>ちゃんという方が、陽葵ちゃんに『入学1週間で突然 頭にカバンを被って廊下で地獄デスマタルをゲリラライブ放送した印象派ファンキーフレンズ』と吹き込んだわけですか……。

入学から約2週間後のふうま君に連れられて図書館へと向かう  
(変装ファンブル)あの現場を見た上で? へえー? なるほどおー? 良い度胸しているじゃねえか……。そしてお前だったかあ、私の噂に背びれ尾ひれ付けて拡張しているやつこさんはよお……? どうかそうか、つまりきみはそんなやつなんだな?

「日葵ちゃん! すごい良い笑顔だねっ! 心寧<sup>ここね</sup>ちゃんはね。いつも大人しくて、あまり笑わない方だけど……そんな笑顔で人気者の日葵ちゃんとお話できたら、きつと喜んで日葵ちゃんにも、笑ってくれると思うんだ!」

「ええ、きつと飽きさせることのない巧みな話術で彼女も笑顔にして見せますよ。見せてやりますとも……。今から既に凄まじく……。実に次お会いできる日が楽しみです」

ニコニコとした笑顔でお互いの顔を見合わせる。彼女の顔は一切の陰りも見られなかった。それどころか自身が濡れるのも気にする様子もなく、傘を閉じたかと思えば爽快に飛び跳ねて、心の奥底から嬉しそうに大きく万歳の姿勢を取る様子が見受けられる。彼女の髪に当たった雨のしずくは、吸収されるわけでもなく撥水性のレインコートのように弾け跳ねのけていた。まるで太陽の化身のようだ。

だが、こちらの笑顔だけなら負けてはいない。一切の曇りのないジトジトとした闇の籠った笑顔で、傘を差したまま彼女の後を追いかける。

「ほんとに!? それじゃあ、日葵ちゃんのことを心寧<sup>ここね</sup>ちゃんに伝えて」

「いえ、陽葵ちゃん。その必要はありません」

「? どうして?」

「なあに……。ちよつとしたサプライズですよ……。考えてもみてくだ

さい。陽葵ちゃんの気になる人が、中々会いにくい学校中の人気者で、そんな人気者が突然目の前に現れて、自身に会いに来たことがわかったら……その時、陽葵ちゃんはどうな気持ちになりますか？」

「……！ そっか！ すっごく嬉しいよねっ！」

「そうでしょう。そうでしょう……？ きつと……ッ！ 心寧ちゃんも喜ぶに間違いありません……だからこのことは秘密♪ ですよ♪」  
「わかったよ！ 日葵ちゃんってさー！ 人を喜ばせる天才って言われたことない？ 私は全然思いつかなかったよー」

「わあはっはっは。そんなことはございませぬよ。姑息で狡猾、小賢しいクソアマと（前世で）卑下されたことは何度かありましたけど」  
その純粹な笑顔を向ける彼女の肩に手を置いて、余計な事しようとする彼女を止める。それからこちらも笑顔のまま人差し指を自身の口元に添えて、とっておきのサプライズ計画をしていることをウィンクしながら話す。そんな私に彼女は更に目を輝かせながら褒めちぎった。

……純粹・素直な彼女を見てると心なしか、将来が心配になつてくる。私はどちらかと言えば、これまでの会話の殆どは殺意と悪意が籠められた発言であるのに対し、彼女はそんな様子を気づく様子もなく前向きにとらえて私と言葉を交わしていたからだ。

……忠告すべきだろうか？ でも。彼女とはこの前の授業の合間の出来事で仲良くなったとはいえ、出会ったばかり相手だ。まだそんなに交友関係も深いわけじゃない。そんなことを言うのは野暮か……でも、それでも心配だ。……悩む。

……彼女は出会ってから早数日で性格が大体理解できてしまうほどの元気っ娘で、素直なその性格と仕草の1つ1つや言動が男好みな可愛さを持ち合わせ、私と同じ高校1年生にもかかわらずスタイルが良く胸が大きい。……W蛇子ちゃんよりは、小ぶりだが……それでもDくEカップはあるだろうか。大きい。……ゆえに、よってたかつてくるような男や魔族がいるのが容易に想像できてしまう。

「こ、姑息で狡猾!?! 話した感じだと日葵ちゃんそんな感じはないよ!?!」

「そうですか？ ふふっ、ありがとうございます」

「あ、今の！ そんなふうにも笑うんだね！ 照れて笑う日葵ちゃんも素敵だと思うな！」

とまあ、ごらんのとおり、私の言うこと話すこと。今の握りこぶしを作ってクスリと本心からの笑い方から仕草まで、ずっと全肯定である。

私なんかより、お前の方が何十倍もかわいいぞ。

……そんな彼女がモテないわけがない。仮に彼女の魅力に気が付けない男がいるのであれば、そいつは確実に女を見るセンスがない。はつきり言ってカスだ。

この底抜けのポジティブ思考を伴侶にすることができた場合、自分が辛いときや苦難に直面したとき、一緒に絶望的な現状を打破する案をくれるような素晴らしい女神のような存在にもなり得るだろう。

「そういう陽葵ちゃんは全身全霊でポジティブな性格って言われたことはありませんか？」

「うん！ クラスメイトからよく言われるよ！」

「ですよー。その性格、すごく……いえ、『すごく』なんて単語で語ることができるようなものではないですね。類稀なる良き個性ですので、これからもその性格を大切にしてくださいね」

「ありがとうございます！ 日葵ちゃんも、その色々と機転が利く性格を大切にしてほしいな。日葵ちゃんなら、学校を卒業した後ももっと多くの人を笑顔にできるに違いないと思うからねっ」

お互いに顔を見合わせながら、ケラケラと笑い合う。いま私が今見せている笑顔には他意は含まれておらず、心の底から晴れ晴れとした談笑の笑みだった。

……でも、『もっと多くの人を笑顔にできるに違いない』か……。そんなことを私は成し遂げられるのだろうか？ 私は学校を卒業した後は大学に通って、医師か、エンジニアか、作家か、司書になるつもりだ。株の資金繰りがうまく行ったら、仕事を趣味活動にして、鹿之助くんの正義の味方の支援者となる予定で……。極力、対魔忍とは関わらないようにひっそりと世界の真実を知らない一般人として過ごす

……。そんな私が……。

人の身体を奪ってまで転生した私が……？ もっと……多くの人を

……？ 笑顔に……？

「……あれ……？ ……日葵ちゃん？ 日葵ちゃん？」

「え。あ。ん、ごめん。ぼーつとしてた……ごめんね、何？」

「すごく難しい顔していたけど、大丈夫？」

気が付けば、陽葵ちゃんが眉を八の字にしながら、不安そうにこちらの顔を覗き込んでいた。

……いけない。悪いスイッチが入った。自分を咎めるのなんて、これは自宅に帰って布団の中でもできるはずだ。

「……うん。……雨がね。これで傘をささないで楽しくおしゃべり出来たらなあーって思っちゃって」

傘を少しずらして、曇天を見上げる。天より降り注ぐ水滴のいくつかを眼球にわざと直撃させて、ずぶ濡れになった犬のように頭を振りながら目をこすって、落ち込む気持ちを整える。

「あうっ」

「あはは！ 日葵ちゃんってば、おっちょこちよいだね！ こんな雨なのにお空なんか見上げたらそうなたっちゃんよ！ だけど今度日葵ちゃんと帰るときには、確実に良いお天気の時に戻れるように晴れ乞いしといてあげるねっ。私の晴れ乞いは効果てきめんだから！」

「うん……ありがとね」

「気にしないで！ 私達、友達でしょ？」

彼女は私の隣で童話の『あめふり』のような歌を口ずさみ始める。ここで『あめふり』のような歌と称したのは、途中で口に出していた歌詞の内容が雨が降ることを願うような内容物ではなく、それどころか晴天を願うような歌詞であったためだ。これがこの世界の特有のものなのか、それともただの替え歌なのか、私には分かりかねる内容ではあったが、それでも楽しそうに歌う彼女を見ると、どこか心が落ち着いていき……それに先ほどまで降っていた雨の強さも、小雨に変わっていつているようなそんな気がした。

## Episode 36 『五車学園の森の怖い話』

「あつー！ そういえばっ！ ねえ！ 日葵ちゃんは怖い話って好き？  
こんな雨の日にぴったりな怖い話を知ってるんだけど、1つどうかな?!」

ハミングを口ずさみながら私の隣を歩いていた陽葵ちゃんが、唐突に何かを思い出したかのような閃いた顔でこちらの顔を覗き込んできた。しかし……とてもじゃないが、彼女の顔は面白い話をするときの顔つきで怖い話をするようには見えない。

だが、怖い話と聞いた瞬間、私の中でふと興味が湧きあがる。これは、前世でもよく見られた感情だ。怖い話には常に裏の歴史や隠された真実に絡んだ気になる事情が1枚か2枚絡んでいる。私はある時に境に、この裏の事情や謎を解き明かしたいという好奇心があふれるようになっていた。

それに今回は裏の事情を探ることや謎の解明のみならず、もしも彼女の話がシナリオフックとして流用できそうなものであれば、クトゥルフ神話TRPGのネタにして鹿之助くんや、ふうま君、蛇子ちゃんにTRPGシナリオとして回したって良い。

陽葵ちゃんから告げられた“怖い話”という単語に今回も片眉がスツと持ち上がり、自然に顎へと手の親指と人差し指が張り付く。

「おおうっ!! 興味があるって顔だね!」

「ええ、かなり気になります。是非とも聞かせてもらっても良いですか?」

「もっちろん! そのためにも話題を振ってみただから!」

先ほどの、少し落ち込んだような状態から一変して、わかりやすい興味のある仕草に対して彼女も気が付いたのだろう。傘を差し直して、ゆつくりと歩幅を小さくして私の横に並んできた。

「これは卒業した先輩が、先輩の友達の友達の恋人から聞いた話なんだけどねっ? 五車学園の北に位置する深い森の中に雨の日の夜になると、洋館が浮かび上がるそうだよ!」

「ふむふむ……。少しメモを取りながら話を聞きますね」

「いいよ！ それでね。そこには、本来その場所には草木も一本も生えない朽ちた瓦礫の山が転がるばかりで何もなければずなんだけど、学校の先生達は口を揃えてその場所には行ってはいけないうつていうの。日葵ちゃんはまだ学校集会には出たことないから分からないとは思うけど、生徒指導部の蓮魔先生はすまがお話する時にそのことはしてくるから、今度注意深く聞いてみるといいよ！ それでねっ！ 理由は分からないけど、とにかくその場所に行っちゃいけない場所で、夏休みに入ると学校側がアルバイトとして卒業生を何人か呼んで森に入ろうとする生徒を捕まえる程でね！ 私も実際には行ったことはないんだけど……確かに私が物心ついたときあたりから、その場所には近づいちゃ駄目ってお母さんやご近所さんから聞いたことがあるんだ」

「その雨の降る日だけに現れる洋館なんだけど……その先輩の話では名前の通り雨が降ったその日だけは完全に復元されていて、正面には木製の大きな両開き扉があつて建物内に入ることが出来たんだって！ 外は視界が悪くなっちゃうほどの雨で、晴れた日には何もなければずなのに建物内は雨漏りをするどころか完璧な洋館つて作りだつたんだって！ それで、その先輩が友達と洋館を探索していたら、突然赤と黒、白を基調とした中世のドレスを纏つた首のない女の亡霊が出て、洋館に入った侵入者を地獄に導きに襲い掛かつて来てね!!! もうブワーつて！ブワーつて!!! こうやってヒグマが立ち上がつて襲い掛かるみたいにブワーつて！脚も動かさしないで、足がないのにその先輩たちが洋館から出ていくまでずっと休む暇がないぐらいに散々ブワーつて！追いかけてまわしてね！ こうやって腕を振り上げて、抱きしめるように捕まえて動けなくなつた無防備な先輩をガブーっ！

つて噛みついてね！」

彼女の発言を忘れてしまわないように、スマホを取り出してメモ帳機能を使つてメモを取る。更地に雨の日の夜だけに現れる突然の洋館。襲い来る赤と黒、白を基調としたドレスを纏つた首のない女の亡霊。先生方も入るな。遊びに行くなというほどの禁足地……。

陽葵ちゃんの話し方も少しはあるだろうが、怖い話としてはインパクトとして欠けていた。というよりも、そんなニッコニコの笑顔で怖

い話をされても……。こちらを怖がらせようとヒグマの下りから、傘を放り投げて威嚇するレッサーパンダの姿勢を取りながら私に抱き付かれても……。傍から見れば面白い話をしている女子高生が感極まってじやれついているようにしか見えない。

……あつ♥ 威嚇するレッサーパンダの姿勢から、メモを取る私に抱き着いてきた陽葵ちゃんから良い匂いがする。まるで、快晴の日に干した布団のような……。お日様のおい……。怖いどころか和んでしまう。

一旦、陽葵ちゃんから和やかな香りがすることは置いて、TRPGのシナリオブックとしての情報としては十分だった。

舞台は雨の日の夜だけ姿を現わす洋館。なぜ亡霊は洋館と共に姿を現わすのか……。謎を解き明かすための重要NPC……。首のない女の亡霊。シナリオ傾向としては、シテイ、クローズド……。どちらでも行けそう。シテイなら、どうやって雨の日の夜だけに姿を現わす洋館を見つけるか調査をしての洋館への調査、暴れる亡霊の鎮魂。クローズドなら、ハイキングに遊びに来ていた探索者が突然の雷雨に見舞われ追われるように向かった先が、雨の日の夜にしか現れない洋館、しかしそこはシリアルキラーの屠殺場だった。

……どちらの線でも面白いシナリオが書けそう。

「でね!?」 なんとかその先輩の恋人は逃げられたんだけど、他の人はみんな首のない亡霊に捕まって……。行方不明になっちゃったんだって! この話、怖かった!」

「そうですね、その先輩の恋人を除いた全員が行方不明になってしまった下りは怖かったです」

「ほんと!?」 やったあ! 怖がってもらえた! この話で怖がってくれたのは日葵ちゃんです2人目だよ! クラスのみんなにも一通り、今と同じように話してみただけど、みんな『怖くない』って言うんだよ! 私はずっと怖かったのに!」

「……同じように話したんですか? ……男子生徒にも、今のようか?」

「うん!」



うん。……うんじやないが。そりゃ、怖くないだろうよ。話の最後で、こんな女から見ても顔つきがかわいい。仕草もかわいい。スタイルは羨ましくなるぐらいにムッチリとした……お日様の香りのする異性からハグしてもらえるとか、その男子生徒共は最初どんなご褒美かと思っただろうよ。

話の題材としてはTRPGの素材として用いれるぐらいには良い題材だとは思うのですがね。語り手がね……。語り手の口調とボデイランゲージと、ボディタッチと満面の笑顔がね……。うん。どう見ても怖い話をするソレじやないんだ。抱き着かれて、陽葵ちゃんからお日様のおいがしてきたときは、私も抱きしめ返したくなるぐらいにかなり和んだ。

「ちなみに他に誰が、その話を怖がったのですか？」

「それがさつきお話した日葵ちゃんに会いたがっている人……心寧ちゃんだよっ！」

うん。……これは友達として怖がってあげたのだろうか。私には分かる。

「そうですか……。……でも、首が無いのにどうやって亡霊は噛みついたのでしょうか？ 疑問が残りますね」

「あ、やっぱり日葵ちゃんも気になるでしょ!? でしょ?! それでね！ 今度、話をしてみて興味を持ってくれた3年生の先輩2人と、私と、心寧ちゃんと、同じ学年の神村ちゃんと一緒に週末の大雨の日。その洋館へ行って首なし亡霊の正体と、本当に洋館が出現するのか真相を掴んでみようと思うんだけど……。日葵ちゃんもどうかなっ!?」

いつもの私なら、現地調査。……ということであれば喜んで食いついていただろう。

しかし、でも……。そんな視界の通らないような雨の降る夜に人工的な光が1つも無い森の中に入っていくのは……。少……。いや、かなりリスクが高すぎやしないだろうか？

「あー……。そのお誘いは嬉しいけど……。陽葵ちゃん？」

「ん？」

「その調査は……。やめておいた方がいいと思いますよ？ いえ、盛り

上がっていると恐縮かつ白けてしまう発言ではありませんが……。いったん一緒に調査へ向かう人たちと話し合って、今すぐその調査を取りやめた方がいいです。雨の日の夜に森の中に入るだなんて、急な段差からの滑落の危険性があるかもしれないです……。遭難した日には、いくら初夏とはいえ雨風に晒されて低体温症で凍死の危険性だってあります。危ないですよ」

ニコニコとして、どこか危機感が足りていない彼女を咎めるぐらいの強い口調で静止を入れる。

流星にそんな場所に学生だけで行くというのは、危険だと少し考えればわかることだ。私も先ほどのメモを取っていた時のような笑顔を止めて、危機感のない彼女をしっかりと見つめた。

森の中は、空や地上共に障害物が多く、搜索ヘリや携帯会社によっては電波が届かない可能性だって出てくる。特にここは秘境の町、グンマーなのだ。関東なのに他県より警戒するに越したことはない。

「あれー？ 日葵ちゃんなら神村ちゃんと同じように『幽霊なんて、私があぶつ飛ばしてやるぜー！』ぐらいの勢いで『首がないのに噛みつける亡霊の構造を説明してみせます！』って乗ってくれると思ったのに……。もしかして、日葵ちゃんって噂で聞くよりも幽霊とかは苦手な感じ？」

「違います。私が危険で恐ろしいと言いたいのには、そんな視界の悪い雨の日に視界の悪い森の中で、雨の日の夜にしか現れない洋館を探しに行くこと自体が危険だって言っているんです。陽葵ちゃんその調査……。考え直していただけますか？」

「あはは！ 大丈夫だよー！ そのために光源役の私と神村ちゃんがいるんだし！ いっぱいライトをもっていく予定だから道中は昼間みたいに明るいよ！ それに舗装はされていないけど、ちゃんとした道は通るし！ 道中に関しては何も恐いことなんてないよ！」

あ、駄目だ。彼女は自分たちが、まさか遭難するなんて思っていないような……。ちよつとした近所にピクニックしに行くぐらいの遠足に行く前の小学生のような顔をしている。私が真面目な顔をして話をしているけど、危険性をまったく理解していない。

彼女はまず異性や魔族に襲われてしまうような心配をするよりも、その底抜けのポジティブ思考で危険な場所に自ら突っ込んでいってしまうような習性を心配すべきだったか……。くっ……。前世で大体、事件を持ち込んでくる数多くの友人達の顔と重なって、ちよつと頭が痛くなってきた。

「……わかりました。ですが、私が一緒に付いて行くかどうかはひとまず保留でもいいですか？ 私も色々事前の『情報収集』をしたので……」

「もちろん！ その洋館調査は来週の土曜日の18時30分に五車学園裏門に集まって向かう予定だから、それまでには気持ちと準備を整えておいてねっ！」

「かしこまりました。来週の土曜日、18時30分に学校の裏門に集合ですね？ ……予定を予め空けておきます」

この場で押し問答しても仕方ないだろう。彼女には聞こえないような小さな溜息を吐いて、先ほどまで彼女の怖い話をメモしていたスマホを弄りスケジュールに洋館探検の項目と、その前日までの期間に事前準備期間の設定を加える。

どうやら、彼女は彼女を含めた5人でその洋館に向かう予定だったようだし、彼女がダメなら主催者を見つけ出して全体解散を促すか、陽葵ちゃん以外に直談判をしていって多数決で諦めさせるほかない。

流石に1人になれば、そんな危険な場所に向かったりしないだろう。……向かわないよな？

## 8章 『五車学園の生徒指導は超過激!』

### Episode 37 『思考がヒヤツハー、学内ヒヤツハーする』

陽葵ちゃんと一緒に帰った翌日以降の出来事。

昼休み。

私はアコースティックギターを首から下げ、頭には例の**カバン**を被り、穴の開いた部分から陽葵ちゃんのクラスを出入り口から覗き込んでいた。

現在、陽葵ちゃんは薄紫が混じった黒色に蛍光灯の光が反射するほどの艶やかなロングヘアに、長い髪の一部をサイドテールとして黄色のリボンで結っている少女と話している姿が見える。顔はこちら側からは分からないが、手ぶり身振りのボディランゲージが激しく出る陽葵ちゃんと違って、反応は薄い……控えめの子らしい。今からすごく楽しみになってきたぜエ……ッ!!!

ところで、私の持っているギターが何故エレキギターではなく、アコギなのかは突っ込まないで欲しい。……青空家にはこれしかなかったんですウツ!!!

オタマトーンやココナツツカリンバを持ってくるよりマシでしょうっ!?

陽葵ちゃんがこちらに気が付いてアイコンタクトを送ったところで、私は突入する。陽葵ちゃんの異変に彼女もこちらに気が付いたようだ。足先を器用に使って片開きのドアを蹴り開けるッ!

「やあ! やあッ! やあッ!!! 我こそはアツ! 『入学1週間で突然頭にカバンを被って廊下で地獄デスメタルをゲリラライブ放送した印象派ファンキーフレンズ』様だアッ!!! ヒヤツハーアッ!!!」

入場と共に激しく弦をはじきまくってカチコミを仕掛ける。

陽葵ちゃんだけが、こちらを見ながら拍手で私の登場を歓迎してくれた。クラス内外が私に釘付けになる。だからどうしたア!

この程度暴れたぐらいで、対魔忍なんかに! 対魔忍なんかに目を

付けられるわけがねエツ!!!

制御リミッター  
鹿之助くんも課外授業で居ねエ! 新しい噂を立てられても  
制御リミッター  
鹿之助くんなら『また変な噂が立ってる……きつと噂へ更に背びれ尾  
ひれが付いちやっただらうなあ……』程度で気にせず流してくれる  
はずだ!

今日は絶好の演奏日和だぜエ!? これは青春と私の復讐の一撃だ  
! 噂のとおり、最高にゲリラライブを開く女として楽器を奏でてや  
るぜエ! キエエエエエイツ!

「オオオク……フアアアアクラアアアイ……ユア……デエツト……  
シユアアアアアア……」

陽葵ちゃんの手拍子に合わせてアコギで曲を即席の地獄デスメタ  
ルを作曲しながら、ゴキゲンなインコのように頭を上下に緩やかに動  
かし、フラフラと足元の覚束ないゾンビのような挙動だが、まっすぐ  
私と『ゆつくりお話しをしたい女』の元へ、カバンの下では狂氣的な  
笑みを浮かべたまま接近していく。

なるほど、なるほどお! 彼女が速水 はやみ 心寧 こころね ちゃんかあ! 一言で  
言って彼女の容姿は、大人しそうな女の子のような風貌をしている。  
垂れ下がった一本線の眉に、タレ目をしたジト目、小さな鼻に小さな  
口イ! 赤子のような愛くるしさを持つ、かわいい子じやねえか!!!  
人って本当に見かけによらねえなあツ!!!

「——アツ!アツアツアツ——」  
……だが、私はここで致命的なミスをしでかしていることに気が付  
かなかつた。

この鞄を被った異形頭『アデライン』スタイル……。正面の視界は  
確保できているのだが、足元が全く見えないのだ。地面が平坦のよう  
に見えていた私は彼女に走り寄ろうとするも、机の脚に躓き、よろけ  
て……それでも姿勢を立て直そうとして……。

——ガツシヤアアアアアン!!!  
……入場した時の勢いを殺すことなく、そのまま出入り口とは対面  
上にあつた窓ガラスに頭から突っ込んだ。

度胆を抜かれ 呆気を取られていたこのクラスの女子生徒の悲鳴

と、男子生徒のどよめき。どよめき。めどよき。みんなメドヨキ。

……パラパラとガラスの破片が制服を伝って地面に落ちていくのを感じる。視界に銀色の虫が映る。シエラー現象だ。

だが、ここで倒れる私ではない。一度は止まってしまった『地獄デスメタル即興曲』だが、これは曲の前座でしかない。エラー反応を連打表示するパソコンのように激しく弦をはじきまくって、突っ込んだ勢いを殺すことなく窓ガラスから頭を引き抜く。

はじけ飛ぶ窓ガラス。カバンの外でガラスが飛散で太陽の光でミラーボール。私の視界もミラーボール！例のカバン ヘルメットが無ければ即死だった。

「センキュウウウウウツツ!!」

キメの一撃は共にカバンを掴んで勢いのまま地面に叩きつけるように脱ぎ捨て、片手で荒ぶるアコギギターを抑えながら、もう一方の片手で人差し指を天井に高らかに突き上げてセリフも忘れない。最後が良ければすべてヨシツだ。現場猫もそういつている。

陽葵ちゃんだけが満面の笑みを浮かべて、頭上での盛大な1人拍手で教室を包む。

「はあ……はあ……はあ……」

「」

呼吸制御しているような状態で激しい動きをしたため、まるで犬が全力疾走したときのような吐息が口から漏れ出る。

だが第一印象としては最高だ。彼女は言葉を失っている。言わば絶句という奴だ。やはりサプライズはこれぐらいしなくては。

「これが地獄デスメタルです。いかがでしょうか？ 頭にカバンを被って教室でゲリラライブ放送した印象派ファンキーフレンズの生演奏を聴いた感想は？」

「」

「感動に言葉も出ませんか……陽葵ちゃんは？」

「これが地獄デスメタル……！ 今朝、日葵ちゃんに聞かせてもらった激しい即興へヴィメタルと違って、地獄から魔族がはい出てくるよ。うなおぞましさがあって……！ それを表現できる日葵ちゃんって

本当にすごいねっ!」

「ふっ……そうでしょう? そうでしょう」

勝ち誇ったように鼻で笑い、歯を見せてニカッと微笑む。

それからアコギギターを教卓の上ののせて、教室後方に備え付けられている掃除用具入れのロッカーからバケツ1個と塵取りとホウキを取り出して、飛散させたガラスを綺麗に履き取ってはバケツの中に捨てていく。

「さてと。学校中の人気者が直々に会いに来ましたよ。『一度でいいから、ゆつくりお話ししたい』んでしたよね? 私も心寧こころねちゃんとお話ししたくて、今日はこんなSurprrrrrriseをしたわけです」

「……それは……えっと……ありがとうございます、ごさいます……す?」

彼女はこれからまるで説教をされる子供のように身体を小さく縮こませながら、こちらを上目遣いでおどおどとした様子で見ってくるが……私の敵意が籠った笑顔と愛用しているダクトテープで割れた窓を封鎖している私の方が何よりも、今のところは勝っている。実物としての第一印象は完璧だ。

「陽葵ちゃん、お願いがあるんですけど頼まれてくれませんか?」

「何かな!」

「多分、今の騒ぎを聞きつけて『紫ムラサキ先生』か『蓮魔先生』が飛んでやってくると思うのですが、彼女と『じっくり』お話ししたので先生が来た時に教えて頂いてもよろしいですか?」

「いいよー!」

陽葵ちゃんに向けて、神社での動作である柏手かしわでのように1回手を合わせた音を高らかに鳴らし、両手を祈るように合わせる。このクラス全体が私に注目を浴びている中で唯一、顔見知りかつ素面で冷静に見張り行動の移せるのは彼女しかいないからだ。頼む。頼んだ。

本当であればここまで大事になる予定はなかったのだが……。最後の予期せぬフィニッシュムーブは流星に教師が集まってくるだろう。

だが、これは好都合だ。使えるものは全力で使って情報を引き抜く

のが私の特技でもある。彼女から、どうして『入学1週間で突然 頭にカバンを被って廊下で地獄デスメタルをゲリラライブ放送した印象派ファンキーフレンズ』という噂を流したのか。『一度でいいからゆっくりとお話してみたい』内容について、と『雨の降る夜に出現する洋館には立ち入らないように』促さなければ。

「さて……と。もう猫は被らなくても結構です。クラスメイト達は、今の衝撃で こちらに近づいては来ないでしょう。時間はあまり残されていないかもしれませんが、二人つきりなら『学校中の人気者』と『ゆっくりとお話して』みるのができますが？」

じっくりと彼女を観察する。大人しそうな小動物のような彼女だが、私の言葉に少し目つきが変わったような気がする。具体的に先ほどまでは怯えた様な目ではあったが、陽葵ちゃんが離れた今。彼女はしっかりとこちらの目を見据え、対話ができるような眼になっていた。

なんだ。やればできんじゃない。こちらもうつつすらと微笑みを浮かべる。

「あの、それでは単刀直入に聞かせていただきますが……あなたはふうま君とどういった関係なのですか？」

「……。……へあつ？ ふうま君？」

「……」

予想から大きくかけ離れた質問に、思わず再び窓ガラスへ側頭部から突っ込みそうになるが、これ以上、無意味な窓ガラスの殺生は生徒指導部の教師たちが総動員で駆け付けかねなくなるため、背筋を使つて堪えた。

「(ああ、そういう心配ですか……)……ふうま君とは、5月に入学して以来の友達ですよ。それ以上の関係ではないですし、ふうま君は私に一切の興味はないですし、逆もしかりです。彼の反応を見る分に……多分、私のことは珍獣か何かだと思つておもいます」

「本当にそれだけですか？ ……彼、あなたと一緒に歩いていた時、すごく楽しそうに笑っていましたけど——本当にそれだけの関係ですか？」



「はい。きっとそれは愛想笑いだと思いますよ。……逆にそれ以上の関係に見えますか？ それは困っちゃいますね。……まあ、もしかすると私は先々月あたりに引越す。先月入学したばかりなので。あの日は……皆さんご存知の通りちよつとした事件もあって、友達も鹿之助くんしか居なかったです。こちらを氣遣って、友達になつてくれたのかもしれませんが。ちなみに接点は、私のクラスメイトの鹿之助くんが紹介してくれました」

「……それで、一緒に図書館まで廊下を歩いていたり、一緒にまえさき市にお出かけしたり、入院のお見舞いに行っていたんですね。……ふうま君は本当に優しいんだから……」

うん。彼女は彼に恋をしていますね。彼女は私から視線を外し恋する乙女のように両手を頬に当てて、顔を赤らめながら首を横に振っている。そんな私は彼女を真顔かつ、普段よりも一層ジト目で見下ろすばかりだった。

『だって彼には相州蛇子ちゃんという幼馴染がいるんですよ……？ 私たちのような部外者が入れるようなスペースがあるわけじゃないですか』と。渾身の火の玉ストレートをぶつけてやってもよいが、それは彼女が噂を拡大風潮している情報を確実に掴んでからでも遅くはないし、怒りに任せて敵を増やすのは得策とはいえないだろう。

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』(3  
2頁) “情報の収集” 第4段落目にも『親しくなるように努力』する趣旨が掲載され、仲間をつくることを推奨されている。

やっぱり私が予想していたとおり『？ふうまファンクラブ』は存在していたようで、あの時の危機察知予測回避直感能力は間違っていないかったと。……彼女にそのカバンを頭に被ることさえ見られていなければ。

それにしても心寧ちゃん、だったか？ どうして、私がふうま君と図書館に行ったことや、まえさき市に彼と出かけた事。彼が入院のお見舞いに来た事を知っているのだろうか？

この女……。ストーリー——いや、単独行動する崇拜系のカルティス

トと同じにおいがする……。この世界は対魔忍の世界だし、一般市民が魔術に触れることは限りなく低いだろうが……。殺すとしてもまだ判断を下すには早いか。

それにしても……。重いな。重い。お前の愛がヘビイメタル。地獄デスメタル。

「誤解が解けたのであればよかった。……。それで？ 私がふうま君と一緒に歩いているときに現場を見た上で『入学1週間で突然 頭にカバンを被って廊下で地獄デスメタルをゲリラライブ放送した印象派ファンキーフレンズ』とお話されていたそうですが……。？ それに関して、何かそちらから弁明はありますか？」

誤解は解けたようで、ペア……。と陽葵ちゃんのように明るくなった彼女の顔がこちらに向けられるが、視点が合ったときその笑顔のまま凍り付いた。

……。それもそのはず。こちらは教卓の上に乗せられたアコギギターを手に取って肩たたきのように自分の首にトントンと当てながら、笑みを浮かべるのを止めて真顔で見下ろしているのだ。このへ威圧でビビらないやつはまず居ない。

真顔のまま元よりジト目の目を一層細める。……。私が演奏したのはデスメタルだが。……。ロックバンドが持った楽器は最後までどうなるか知っているか？ まだ私の演奏は終了してないんだぜ？ これから私は、お前の脳天に巴サンダーの雷ショック。

……。『親しくなるように努力』？ 実行犯に慈悲はいらない。事情と状況、正面の女がカルティストなら遠慮もしない。それが私だ。

「え、えつと。それは……。私が実際に見たわけじゃなくてですね……。他の学生から聞いたのを……。陽葵ちゃんに話して……。」

「ああん？」

彼女は俯いてしまったため、表情がよく見えない。よく見えないが、私が目を見開いて側面からまばたきもせず彼女の顔を覗き込めば、今彼女がどんな表情をしているのかよくわかるので一切問題はない。

「ひうつ」

「……」

手で私が覗き込んでいる方向の隙間をシャットアウトしてしまっ  
た。

だが一切の問題はない。反対側から同じように覗き込む。

「ホオ、ン、ン、ドオ、ニ、イ、イ、イ、イ？」「デデデデン♪ デデデ  
デン♪」

「本当ー、本当です！ 確かに、陽葵ちゃんには噂の信憑性を持って  
もらうために、私が見たとは言いましたが、噂自体は1週間前に他  
の学生が話して居るのを聞きまして……！」

呪怨のような声色で、容赦なく彼女を尋問する。彼女は両目を両手  
で抑えてしまった。

アコギギターを構え、可能な限り低い音色を用いて『世にも奇妙な  
物語』のテーマソングを不協和音風にアレンジしながら流し始める。

私はヴェールを剥ぎ取るもの／多次元に歪む金属集合体か何かか  
と思われているらしい。それで心寧ちゃんが自分自身の眼球をくり  
抜きでしたら——完璧だな？

……ふむ。ここまで彼女を〈威圧〉観察した様子から、嘘を言っ  
ているようには見えない。まあ、このくらいでいいだろう。この尋問は  
あくまでも次のステップへ移るための仕込みでしかない。いわゆる  
飴と鞭だ。

パチパチパチパチパチッ！

次の話題に移ろうとしたとき、廊下側から拍手が響いた。……案の  
定、陽葵ちゃんだった。地獄デスマタル以上の拍手をただ1人。私に  
送ってくれている。……本当にいい子だなあ。

親指だけをぐっと突き出してファンサービスを送り付けた。

きつと陽葵ちゃんの目には、友達と友達がふざけてじやれ合ってい  
るように目に映っているのかもしれない。あの曇りなき笑顔がそう  
語っている。

「そうでしたか！ はっはっはっは。いやあ、誰が私の事を『入学1週  
間で突然 頭にカバンを被って廊下で地獄デスマタルをゲリラライ  
ブ放送した印象派ファンキーフレンズ』と噂を流していたのかすごく

気になっていました！ 他の学生から聞いたのでは、誰が話して居たかなんて、わからないですよねえ！ これは良からぬ疑いをかけてしまい、失礼いたしました。わあはっはっはっはっはっはっはあー」

傍から見れば私の行動は情緒不安定者のそれだが、これぐらい感情に温冷感を付けなければ、1人で飴と鞭の効果を通用させる場合 加減が難しくなってしまう。

私はできる限り、明るい声を出してシンバルモンキーのように手を叩き豪快に笑う。……その陽気な様子に彼女もそつと指をわずかに開いてこちらを見ている。

「それじゃあ、もう2点。今度『雨の降る夜にのみ出現する洋館』へ遊びに行くそうじゃないですか。メンバーは、あなたと陽葵ちゃんと、神村さんと3年生の先輩とか。その神村さんのクラスと3年生の先輩 2人のお名前を教えてくださいよろしいでしょうか？」

「神村さんでしたらお隣のクラスにいらっしやられます……。……3年生の先輩のお名前は『穂稀<sup>ほまれ</sup> なお』先輩と『コロ先輩』。……あ、『死々村<sup>しむら</sup> 孤路<sup>ころ</sup>』先輩と言います……」

「なるほど、なるほど。隣のクラスに神村さんが居て、3年生の先輩のお名前は『穂稀 なお』『死々村 コロ』先輩ですね？」

対馬でパンジャンドラムしてそうな叔父上が好きそうな名前だなと思いつながら、スマホを取り出して、3人の情報をメモをした。

——よし、こちらの聞きたいこととしてはこれでおしまいだ。あとは、雨の降る夜に森の中に入っていく行動自体を止めることができれば……。

Episode 38 『地獄の生徒指導』

「日葵ちゃんっ!」

そんな時、廊下で善意の元。見張りをしてくれていた陽葵ちゃんが教室に飛び込んでくる。

あともう少しだったんだが……残念、時間切れのようだ。だが、問題は無い。まだ別日に時間はある。

しかし、ここである違和感にも気が付いた。普段から笑顔の陽葵ちゃんが、その笑顔を今まで見たことのない迫真の慌ただしい表情に変化させながら両掌をこちらに突き出して抱き着かんばかりの勢いで走り寄ってきたからだ。

「ありがとうございます。陽葵ちゃん、そんなに慌てなくても大丈夫ですよ。来たのはどっちですか？ 紫先生ですか？ 蓮魔先生ですか？」

「両方! でもね! でもねっ! 蓮魔先生が大好きな黒田先輩くろだと戦闘狂さなだで有名な眞田先輩、それと氷室先輩ひむろも一緒に、かなりすごい物騒で険悪な雰囲気だったよ!」

「えっ!? 両方+αあ!」

ちよ。陽葵ちゃんの言葉にこのクラスの学生たちが騒めきだした。

え、ちよつと、待つてくださいいよ……。皆さん、何なんですか？

なんなんですか!?! そのどよめきは……!?! 成り行きとはいえ、他のクラスの窓ガラスを1枚、叩き割ったぐらいじゃありませんか。な、な、なん、なんでそんな総動員なんですか!?! たかが窓ガラスを1枚、割ったぐらいですよ!?! 成り行きで!!!

「でも、氷室先輩は紫先生に野次馬を近づけないように指示されていて、直接はこの教室には来ないみたい!」

陽葵ちゃんの発言で、凄まじい速度で我先へと教室から外へ逃げ出していく生徒たち。生徒の中には、そのまま帰宅するようなノリで鞆を抱えて出ていく生徒の姿すら見える。

なんだろう!?! その氷室先輩という方が、こっちに向かうのを止めたってという報告は喜んで良いものなのかな!?! でも素直に喜んで

いる場合でもないんだろうな！ だって、みんな蜘蛛の子を散らすように脱兎のごとく散っていくじゃん!!!

……私の手が震えはじめた。

非常ベルを作動させて消火栓をバラ撒き、校長室に呼び出されただけでもあんな恐ろしい殺気だったのだ。前回の2.5倍の数の殺気に当てられたら、私がどうなってしまうかわかったものではない。ひとまず、震える手でチョークを手に持って黒板に、謝罪の一文『窓ガラスを割って、ごめんなさい』と大きく文字を書き残す。

それから、出口に向けてダッシュ——

「また貴様か……青空 日葵」

「ヒアッ……」

扉が開く音共に、ドスの効いた地獄デスマタル以上の恐ろしい女性の声と、ベルトを二つに折り畳んで勢いよく引き延ばしたかのような強烈な彼女が手にする鞭のしなる音。

……緊張で身体が強張っていくのを感じる。

振り向いた先には軍帽を被って、全身が美味しそうなブルーベリー色の服を纏い、眼鏡を掛けた一本鞭を手にした……女教諭蓮魔はすま 零子れいこ先生。

……その背後に、赤色3年のネクタイに五車学園の制服を着用し、これからお前を殺すという宣告の日本刀の鍔つばに親指を掛けた……ああ……。磨き上げた鋼のような髪色をした、毛先を少しロールを加えた これまたロングヘアの美女が現れた。私と同じようなタイプの白色をした髪留めカチューシャ……いや、あれはハチマキ？を着用したパールブルーの光彩をした女子生徒だ。キリツとしたその顔はどこか、蓮魔先生と同類……他人や自分に厳格な性格が滲み出ているような気がする。……彼女が、蓮魔先生大好きっ娘。黒田先輩だろう。蓮魔先生と彼女をよく見比べるとパールツクな白色の髪留めと鍔の背後に伸びる刀の鞘の色が蓮魔先生の服と同じ青に近いブルーベリー色をしているのに気が付ける。

そしてこれは余談だが……彼女、私の前世での友人『雷いかづち 巴ともえ』ちゃんに似ているような、そんな気がする。……なんていうか、特に雰囲気

気が。私と同じように中身が巴ちゃんだったりしないよね？

「貴様はどうして……こうも、問題ばかり引き起こすのか……」

「いえ、待つてくください！ 私はまだこの学校では1回しか問題を起こしてないですよ!？」

「1回しかじゃない。1回もだ。……今回で2回も問題を起こした。それも入学してから2カ月も経っていないにも関わらず、だ。わかっているのか?」

「待つて！ なんだか、私が主原因みたいな言いぐさですけど！ あれは紫先生が——」

教室、前方側の出入り口を封鎖する蓮魔先生。

そして蓮魔先生を潜り抜け、鏢に手を掛けたまま居合の要領でにじり寄つてくる黒田先輩。

片手にチョークを持ったまま窓際に追い詰められる私。

その時。教室後方側の扉からインターっぽいメガネを掛けた紫先生と、赤を基調とした私服に金属の槍を持った完全なブリーチ色の髪、自然に下ろした長髪にギラついた笑顔。プラチナブロンドの光彩をした勝気の強そうな女性が入ってくる。……となるとあの人が、眞田先輩か。

……姿は見えないけど廊下には氷室先輩も居るんでしょう？ 既に完全な包囲網を敷かれている。

「青空……」

「ああ！ 噂をすれば紫先生！ どうもお世話になっていきます！ その眼鏡似合ってますね！ それと先生のおかげで、鹿之助くんを持ち上げられるだけの筋力が身に付きました！ ありがとうございます！」

「ふむ、ありがとう。そして、上原を抱えられるようになったこととてもいいことだな。いいことだ、が……。……そうだな。お前以外に居ないよな……。他のクラスで頭にカバンを被りながら、その頭で窓を叩き割つて絶叫LIVEを開く女子生徒だなんて」

「ちよ、ちよつと？ む、紫先生……？ その失望の仕方は私の心へナチュラルにダメージが入るのでやめてもらつていいですか?」

じわりじわりと近づいてくる黒田先輩を視野内に収めながら、紫先生には明るい挨拶をしておく。先生の筋トレのおかげで（翌日で筋力が付くとは思えないが……）まえさき市での事件では、鹿之助くんを護ることができたのだ。本当であれば、授業の際に伝えるつもりだったのだが……まあ、こんな形で会えたのも何かの縁に違いない。それにお礼は早いことに限る。

……でも、そんなに大きなため息をつきながら、残念そうな声色で目を伏せられると私だって心に傷がつく。

「それで、そちらの女性が眞田先輩いー……ですか、ね！ お初にお目にかかります。『青空 日葵』です。だからっ……その……眞田先輩も黒田先輩のようににじり寄ってくるのをやめてもらっていいですか!？」

「ああ、紫から話は聞いてるぜ？ 教師をぶっ飛ばして、病院で何度もお祭り騒ぎを開くだけの骨と度胸がある問題児だっとな？ おい、私と勝負しろよ。私に勝ったら窓ガラスを叩き割ったことはチャラにしてやるって蓮魔と紫に話をつけてやったからさ。いい条件だろ？」

「ま、負けたら……？」

「お前を殺す」

「……ああはっはっははあ……ほんとにすみません。この前、胸に穴が開いて退院したばかりなんですよ……。まだちよつと本調子じゃないっていうか……ノーマルなあ方の……生徒指導でお願いしたいのですが……」

両手を前に突き出して、ジュラシック・ワールドに登場するラプトルを静止するポーズ  
プラット・キーピングで止まってくれるようお願いをする。……まあ。止まってくれるような人たちではないことは分かっていたが……やらないよりはマシだ。

「何言つてやがる……？」

「……………」

「これがお前用のノーマルな生徒指導だぜ!!!」

「ッ！」

「……………」



眞田先輩が、血に飢えた獣のように大きく目と口を開いて、頭上で槍を大旋回させる。その大きな動きに私が釣られた瞬間に、黒田先輩の抜刀術による一閃がこちらの右上腕に飛んでくる。

彼女の居合術の有効範囲がどれだけ広いか何も情報を握っていない。この攻撃はノックバックして逃げるよりも屈む形で一撃をへ回避した。

バァン!!! —— ガシャン!

ま、窓枠うううううっ!?

嘘だろ!? 今の一撃で、私がダクトテープで補強した窓枠が拉げて吹き飛んで外に落ちたぞ!?

クソッ! なんだあの抜刀術! 刃先がまったく見えないどころの話じゃなかった!!! そもそも人に振るって良い技じゃない! クソッ! クソッ! 身体で完全に刀身と鞘を隠してやがる! あれじゃあ、有効攻撃範囲 刀の長さをすら測れないッ!!!

「オラオラア! よそ見してる場合じゃねーぞ!!!」

今度は槍撃が飛んでくる。彼女は階段を駆け上がるように軽やかに容赦なく机の上に登ると、高台から槍を振り下ろしてこちらの腹部を突き刺すかのように突っ込んでくる。すかさずこちらも着弾地点から走る形でへ回避する。へ応戦なんて余裕はない! あの攻撃は、槍+腕力だけの攻撃じゃない。槍+彼女の全身の重量の乗った攻撃だ。捨て身の技だが開幕からそんな技を放ってくるということは、よほど腕に自信があるのだろう。こちらがカウンターとしてへ応戦に成功すれば会心の一撃を叩き込めるかもしれないが、失敗したときを考えてへ受け流してへ応戦するだなんてリスクは冒せない!

ちよつとまって!? 確かにこれは私が撒いた種だけど、私は窓ガラス割っただけなのになんでこんな目に遭わなきゃいけないの!? おかしくない!? ねえ、おかしくない!?

「あー! わかりました! わかりましたよ! 今回の私の生徒指導が暴力で解決されることはよくわかりました! ですけどね! 他の一般生徒を巻き込むのは間違っていると私は思うんですよ! 私にだってそれくらいの良識はありますう!!! そこで、この場で一番ま

ともそうな紫先生エ！　せめて心寧ちゃんが退避してから生徒指導の方をですねえ——」

気合と自分に喝を入れるため、首を上に向けて声を張り上げる。わずかな隙を作るためだけに速水　心寧ちゃんを出汁にするのは忍びないとは思うが、これも私の作戦のためだ。陽葵ちゃんに噂を吹き込んだツケとして付き合つて……——

「青空。速水なら既にここにいるぞ？」

「……」

「えっ……っ？」

……この企みは早急に瓦解を告げることになる。

彼女は何食わぬ顔で紫先生よりも奥の廊下で佇んでいた。こちらにあの表情の変わらないタレ目で悲しげな目を向けている。そのまましばらくの間はこちらの様子を眺めていたが……黒田先輩と眞田先輩の初撃の攻撃を避けた私を、紫先生の隣であしらう紫先生に対して健気に話しかけながら褒めちぎっている陽葵ちゃんの手を引つ張つて連れていく形で見えなくなっていく。

え？　つい眞田先輩さっの攻撃が床に着弾きしたときまで、その椅子に座っていたよね……？　逃げ足早すぎない……？　瞬足シューズでも履いているの？

「オラアツ!!!」

こちらの僅かな思考停止を読んで、付け込むかのような激しい槍による怒涛の連続突き。

即座に紫先生のときと同じように、私も机の立ち並ぶ長物を振り回しにくい地形に逃げ込み防御姿勢を取る。私の注意力を目の前の眞田先輩ばかりに向けてはいけけないことは理解していた。背後を取られないように黒田先輩からも逃げ回る。

「そんなもので私の槍撃が止められるとでも？　随分ナメた真似してくれるじゃねえか！」

「ぐ……っ」

しかし、私の読みは甘かった。彼女の槍は容赦なく。教科書が詰め込まれ、それなりに重量があるはずの机をまるでホウキで埃を撒き散

らすかのように薙ぎ払って、こちらに対する砲撃の玉として飛ばしてくる。ぶつかればそれなりのダメージは确实。飛んでくる机の軌道を読んで直撃を避けるが……それでも机の中に入っていた教科書などが私と衝突し、僅かに痛みでひるんでしまう。

鍵のかかった防火扉を蹴り飛ばして抉じ開ける紫先生といい、完璧な〈隠密〉にも関わらず 正確にこちらの居場所を突き止めてくる蓮魔先生といい、机を羽毛のように跳ね飛ばす眞田先輩といい、窓枠を吹き飛ばす黒田先輩といい……なんなんだ!? 一体なんなんだ!

この国立学園は!? 登場人物、全員バケモノか!!!

もう、お前等が対魔忍に勧誘されて対魔忍になればいいと思うよ! 神話生物どもの方がまだかわいく見えてきた! あいつ等はカルティストに招来されるか、闘技場にでも現れない限りこうやって事前情報も無しに真正面から殴り合う必要なんてほとんどないからな!!

「……私から視線を外すなんて、『噂通り』度胸はありますね——  
—ですが、蓮魔先生の手を煩わせる必要もありません」

「——あ、ぐッ!」

眞田先輩と眞田先輩の槍撃へ気を取られている間に、黒田先輩による刀による突きが背中に刺さる。彼女なりの手心として、こちらが背骨を損傷して下半身不随にはならないようには骨の無い内臓を突いてはくれているもの……それでも身体が弓なりに仰け反って、耐えがたい痛みと共にその場でチョークを握りしめ粉にしながらかつた。

「蓮魔先生に鍛えられたこの剣技——素晴らしいでしょう?」

背後から真剣であれば付着していた血液を振り払うかのような風を切る音と、凜とした勝ち誇ったかのような声が聞こえてはくるが……。残念ながら、彼女の言葉は私の右耳を通してそのまま左耳に抜けていく。

……どうやら、大喰らいの泥濘の時のように貫通していかないことから彼女の鞄の中身は鉄の棒か何からしい。それでも痛い……激痛であることには変わりはない。先端が鋭利な槍のようになっていなかったから、貫通はしなかっただけで……。

……これが生徒指導で良かった。

## Episode 39 『追加条件提示』

「おいおい、もう終わりかよ?」

「蓮魔先生。いかがでしたでしょうか? ……それと……私の太刀のことで♥ また「個人指導」をお願いできますか?♥♥♥」

黒田先輩による背後からの牙突攻撃ガトツによって痛みを悶え苦しむ私に対し、眞田先輩は子供のような無邪気な笑みを浮かべながら槍の鋒先を用いてまるで芋虫でもつくつくように突き刺しながらこちらを見下ろしていた。眞田先輩の槍も鉄製ではあったが、刃が付いていないことはこの近距離でやつと理解できる。だが、彼女がこちらをつつく威力に生ぬるさはなく、一刺し一刺しに悶えてしまうような激痛が走るほどの一刺しであった。

一方で黒田先輩は先ほどまで私に見せていた殺意を完全に解いて、まるで子供が母親に走り寄って自慢できる作品を見せつけるかのように蓮魔先生へと寄り添いに行っている。

……ちつくしよう。

そりや、2対1逃げ場なしのチームデスマッチならそうなるよな!

……でも言い訳をするべきではない。これが神話生物との「実戦」なら私はまた死んでいたはずだ。こればかりは私の読みが甘く、また同時に弱いのが悪い。もつと、もつと強くならねば。この世界でもまた食い物として、いつかは生涯を閉じてしまうことになるだろう。だから、私はここで生徒指導でボコボコにされておしまい……ではダメなのだ。

この状況から2人を打ち負かすような逆転方法を考えつかねばならない。

周囲の状況を見渡して、情報を整理する。

……黒田先輩の方は眼中から完全に外れているが、眞田先輩はまだやる気みたいだ。……このままでは、本当には殺されずとも必ずと言ってもいいほど病院送りにされてしまうことは違いない。ここは学校だから病院送りで済まされるが……なんとしてでも今はこの生徒指導に打ち勝たねば、死を迎える代わりの代償として……愉快的な

学校生活のイベントを片っ端から逃してしまふ。それどころか『雨の降る中、出現する洋館』に遊びに行く陽葵ちゃんを止めることすらできなくなってしまう。

……ときどき悪さをすること以外は、普遍的な女子高生として振舞って居たかったが。もう今はそんなことを言っている場合では無い。それに暴れたところで、この場の目撃者はこの青空　日葵より年上の4人しかいないのだ。これを逆手に取ってやる。

教室にあるものを思いだす。

現在この教室にあるものは、真田先輩に幾つかは吹き飛ばされて並びは乱れているものの7個×5列の35個の机と。天井には蛍光灯とエアコン。教室前側部には教卓。教室の前方部分には取り外し不可能な黒板、黒板の真下には教室の床より1段(15cm)高い花壇がある。あと役に立ちそうなものと言えば、掲示物を止めている画鋲と花瓶、チョークの粉が塗された黒板消しだ。教室後方は生徒の私物を入れるための鍵付きのロッカー、手洗いうがいのための流し台。掃除用具入れのロッカー……掃除用具入れには確か、もう1つ分バケツが入っていてその中にホースがあつたはず。

窓側は……私が片付けたガラスの入ったバケツに、黒田先輩が破壊して永遠に開きっぱなしになった窓。窓の外にはバルコニーは存在せず、直下には地面が広がっている。ここは4Fだ。地上までの高さは12mぐらい……。屋上の排水用雨どいパイプが壁伝いに1階まで伸びていたか……。それ以外には、たしか1階の縁には用務員のおじさんこと沼津　彦四郎さんが管理・手入れしている花壇や茂みがあつたと思うが……その花壇はレンガで囲われていた記憶がある。

……消火器や消火栓は残念ながら、この教室に設置されてはいない。それらを取りに行くには蓮魔先生と紫先生を突破する必要があるが……まあ。まず無理だ。狭い出入り口を完全に封鎖している2人を突破する算段は、目前の2人を打倒する以上に作戦が何も思いつかない上に、教室の外には氷室先輩なる存在もいる。どう考えたって消火器を取りに行く方が難易度インフェルノだ。

……普遍的に嫌がらせ目的なら、流し台の水道を教室にぶちまけた

り、エアコンによじ登ってエアコンを叩き落したり、窓ガラスを片っ端から叩き割っていく方が効果的なんだろうが……。それだと、学校への嫌がらせとなるだけで、『真田先生と黒田先輩』には致命的な嫌がらせにはつながらない。……窓から2真田先輩と黒田先輩人を放り投げるのも……。まずいだろう。そんなことをすれば、学内だけの出来事として処理されようとしている生徒指導が、私の親を巻き込んだ3者4者面談ならまだしも警察沙汰に発展しかねない。

……この現状の情報から状況を切り抜ける方法は……。

——— 一つだけ残されている。

「さ……真田先輩……」

「お。まだ喋れるだけの気力があるなら、続行できるよな？ 立てよ。もつと紫が話していたようなガッツを見せてみるよ！」

ズンズンと響く様な痛みに耐えながら、横転した机に背中を預け彼女の顔を見据える。息絶え絶えになった私の正面で真田先輩は蹲踞座りでしゃがみ込みながら、ペットを呼び寄せるための手のひらを上へ向けて指先を動かす手招きで挑発的な態度を取る。だが、私は戦闘狂ではない故、そんな安い挑発などには乗らない。

まずは彼女達に勝つ土台を組み立てることだけを考えていた。

「……黒田先輩と真田先輩。2対1なんですから、私に勝利条件を1つ増やして頂いても……よろしいでしょうか？ それで……フェアな生徒指導にしては、いかがでしょうか……？」

「はあ……？」

「それとも……。たかが15歳年下のの1人の一般学生をいを生徒指導するのに2人掛かりじやなきや勝てないんですか？ 最つつつ高に！シヤバダサイですね。しかも今のダウンは黒田先輩の一撃でダウンしただけですし、それは真田先輩の力じゃないですよねえ？」

「……面白いことじゃねえか」

幸いにも私は……せんとうぐるい戦闘狂いの煽り方はよく知っている。鼻で笑って、吐き捨てるように相手が自分よりも格下であるように嘲り笑ってやるのだ。

そして今のダウンは、特に彼女の闘争心を煽るには絶好のシチュ

エーションでもある。自分は、彼女真田先輩には、負けてはいないと煽り立てることが出来るのは最大の強みだ。幸いにも真田先輩はまだ続行する気なのだから、今の決着では満足していないのだろう。更にその不満部分を煽れば……あとはこちらの予想通り食いついてきた。

彼女はどちらかと言えば、鹿之助くんから聞いた黙れドン太郎二車ハナ骸佐のよう  
にチームで群れるようなタイプではないのは明白だ。最初から腰巾着を連れていない様子や、誰よりも素早く殺意を放ってくる立ち振る舞い。開幕に頭上で敵の注目を引き寄せるかのような槍を大旋回させる動き、周囲に配慮しない障害物を遠慮なく投げつける遠慮のない範囲攻撃から推測できる。

……兎にも角にも。真田先輩をその気にさせることは成功した。1人目は釣れられた。

だが私が大義名分の元。彼女に追加条件を飲ませるためには、もう一人の黒田先輩も釣り上げる必要がある。彼女は今、蓮魔先生に私がダウン状態から復活しつつあることを聞いて、再びその武者のような殺気を向けてきている。あの様子ならまた2対1での戦闘続行するのは容易ではありそうだが……確実性を固め、攻撃の正確性、連携も乱したほうが私はより戦いやすくなるだろう。彼女をその気にさせる適切な煽り方は……。

「はんっ……黒田先輩もツメが甘いですね。私はまだ動けますよ。真田先輩が作った隙……ああ、これは漁夫の利とも言えますね。それについておいて、私を完全な気絶まで持っていけないとは……蓮魔先生に鍛え上げられた剣技も……蓮魔先生の個人指導も……——それを教えた蓮魔先生自体も大したことないんじゃないですか？」

「——はあっ——?!」

目を細めてあきれた様な表情……進撃の巨人でサシャ・ブラウスが入団式の際、教官に芋を差し出した時のような哀れみに満ちた表情をしながら、こちらも鼻から吹き出す溜息とともに嘲笑ってやる。

このタイプに効く煽りは、彼女自身を貶すよりも……自分の大好きな存在を本人のいる前で面と向かって貶してやることだ。

今の私の発言で、彼女は明らかな動揺と声の震え、右目の瞼と眉が



ピクピクと痙攣している。先ほどよりも鋭利に砥がれたナイフのよ  
うな殺気が私に向けられる。……とてもいい傾向だ。そうだ。怒れ。  
狂え。冷静さを失え。

「あーあ、失望しました。これは今さっき聞いた話でしかないのです  
が、お二人は私より先輩なんですよね？」ということは、私以上に蓮  
魔先生や紫先生からあんな過酷な訓練を受けている経験者。にもか  
かわらず……今月、入学して半分以上の日々を病院で過ごしている  
……か弱い凡人に、気絶の一本すら取れないなんて……さぞ又ル  
い学校生活だったんですね。そんなんじや、後輩に簡単に追い抜かれ  
ますよ」

「……」

「撤回しなさい！ 今の発言、直ちに撤回しなさい！」

彼女が鞘から抜刀して、首……元に突き付けてくる。良い感じに燃  
え上がっているようだ。こちらは両腕を中途半端に広げて、おどけた  
表情で肩を竦めておちよくる。

突き付けられた刀は模擬刀の為、刃先はついていない。ゆえに私  
は、タイミングを見計らいそれを掴んで握りしめてやった。

……おかげさまで、こちらも情報が抜けた。黒田先輩が振るっ  
てる得物だが、これは日本刀じゃない。彼女が私に背中を見せたこと  
よって、やつと見ることでできた納刀している鞘の曲線向きや、抜き  
身の刃渡りを計算して……これは太刀だ。大太刀か、まで判別する知  
識は私にはなかった。だが、そもそも大太刀ほどの長さの得物は、彼  
女の腕の長さと納刀している腰の位置を考慮すると居合術には適さ  
ない。どのように初撃を放つとしても、太刀という刀の構造上、横に  
振り払った一閃の刃、あるいは切り上げるような刀の抜き方となる。

……掴んだ彼女の抜き身の太刀の長さと、私の握りこぶしを比較し  
て……おおよそ刃渡り95cm前後。柄の長さも考慮すれば、  
鹿之助くんより12.5cm短い  
全長1m15cmぐらいか。これである程度の彼女の攻撃範囲を把握  
することができた。上等だ。

「ええ、撤回してあげてもいいですよ？ ま、私の提示する条件を飲ん  
だうえで、フェアに戦って、勝てたらですけど」

私の言葉で眞田先輩の殺意が風船のように更に強まった気配がし、黒田先輩の歯を噛みしめる音がここまで聞こえてくる。

よし。狙い通り怒りが激おこステイックファイナリアリティぶんぶんドリームだ。

「それで？ その条件ってんだよ？」

「簡単です。現在の生徒指導の勝利条件は私が2人を倒すこと。この勝利条件に この場……。ああああ……。ああ、生徒指導から逃げ出すことができたなら私の勝ちという条件を付け加えてください。出入り口には蓮魔先生と紫先生もいましたね。おっと、ははあー。廊下には氷室先輩ですかあ。実質5対1。いかがでしょう？ どう考えても……。そちらにとつて悪い条件ではないと思うのですが」

ニヤニヤとした完全に馬鹿にしたような笑顔を2人に向ける。もう十分すぎるくらい煽りだ。私の〈値切り〉交渉の〈言いくるめ〉は確実にうまく行った兆しを見せている。

だが私は倍プッシュをここでは止めない。更に黒田先輩の太刀を手すりのように掴まって立ち上がった。彼女たちが私でも鼻をそぎ落としてやりたいくらいにクソ生意気な私に対して、瞬時に攻撃を加えてきていないところを見る分に、生徒指導は一時中断していることを察せる。

……。だからこそ、あえて脅威でもないように2人から視線を外し。無防備にも教室の床で悶えたときに付着した汚れや砂埃を確認しながらスカートやブラウスからゴミを振り払ってみせた。

それに対して2人の顔はほぼ真顔だ。それなりのプライドが新人でなおかつ2人よりも低身長チビの私によって踏みにじられればそんな顔にもなるだろう。

「……上等だよ。だがテメーがそこまで辿り着けるなんて思ってたのか？」

「……骨が10本折れることは覚悟しておいてくださいいね？」

「人間には215本も骨があるのですから、10本ぐらい……。なんですか？ 私はその高慢なお二人のお鼻をへし折ってやるつもりですから。あとで負けて鳥の雛みたいにピーピー泣かないでくださいよ」

「……………」

動きやすさを重視するため、彼女等の目の前で横倒しになった机を元に戻して、あまつさえその机に腰を掛けて余裕そうな様子を見せつける。この時、視線は上目遣いにして三日月のように口は歪めたままにする。その場でストッキングを脱いで片手に巻き付け、靴、靴下すらも脱ぎ捨てて逃走経路の1つである廊下側に投げ捨てた。その場で軽く飛び跳ねて、身体が動くのを確認。動作には申し分ない。あとは、こちらを睨みつけ武器を構える2人からまた視線を外して離れ……先の戦闘で吹き飛んでいったアコギギターも回収して、持って帰れるように負い紐で背中に回す。

そのまま近くの椅子に片足を乗せ、もう片足を机に乗せて、大きく息を吸い込んで……。

「黙ってさっさと、かかって来いやア！ この一般人凡人どもツ!!」  
力強く吼えて身構えた。

## Episode 40 『逃走経路』

……こうして昼休み、生徒指導・激戦の火ぶたが切られた。

2人同時にこちらに突っ込んでくる。だが、改めてよく観察してみれば……えっちなお店で働いている高位魔族の蛇子ちゃんなんかとは比べものにならないほどに動き自体はノロマだ。

それに予め冷静さを欠かせるように仕向けた作戦が効いているのか、先ほどまでのような連携行動がとれていない。それどころか、どちらが先に私を泣かすかに競い合っているような素振りすらみえる。……今のところは計画通りに事が運んでいるようだ。

「死ねエ！ オラアッ!!!」

「ぜえええいつ!!!」

「ほっ、ほっ、ほっ、ほっ」

目では捉えられないほどの速さで振り回される、剣先と槍先。それをマヌケな掛け声を出しながら、ゲームで綱渡りするように机上を軽々と逃げていく。靴下を脱いで、蒸れた足裏が、見事に机上での滑り止めとしての役割を果たし、蛇子ちゃんから痛い目に遭わされた初撃経験を生かして繰り出されるフェイントも細かいステップを織りなして避けることが出来ている。

具体的に眞田先輩の攻撃は、得物を持っている腕の動きと持ち手の角度から攻撃を予測して〈回避〉し、居合の抜刀術で腕の動きも得物すらも見えない黒田先輩の攻撃は、先ほど測定した太刀の長さで繰り出される風圧、黒板に溜まっている砕いたチヨークの粉を空気中にばらまいての影響範囲の確認、及び眞田先輩が飛散させた教科書をちぎっては投げ、ちぎっては投げの要領で〈投擲〉することによる〈回避〉が間に合わない場合の攻撃のキャンセルとして扱っていた。

……まあ、ここまで、メンチを切って、煽りまくった私なんですけど。普通に戦って勝てるなんて相手だなんて思っていないです。はい。

黒田先輩は、あまり実戦経験はないのだろう。頭に血が上っている彼女は、その真面目な騎士。あるいは誉を重んじる武士のような立ち振る舞いで、正々堂々と言った小細工なしの攻撃が顕著に見られてい

る。太刀筋が素直……というわけではないのだが、これまで殴り合ってきた神話生物の関節可動域を無視するような予測不能な攻撃や、前世で一発でも槍撃がかすってしまった時点で負け確定の巴ちゃんとの模擬戦に比べれば「回避」を試みるには簡単な部類の剣撃だった。だが一方で、眞田先輩が私と同等……。否……。私以上に実戦慣れしている様子が顕著にみられる。

それに様々な対魔忍と同じように「魔族」ども戦った経験すらあるのだろう。一見、私に対して怒り狂ったような攻撃を連続して繰り出しているが……。常に冷静(?)で変則的な攻撃が単調な剣撃である黒田先輩より厄介この上ない。握りしめて碎いたチョークの粉を使った不意打ちの目つぶし攻撃すら躲されてしまった。

やりすぎると紫先生や蓮魔先生に咎められるからか、彼女は最低限ではあるものの天井の蛍光灯をいくつか叩き割って裸足の私の動きを止めるためのマキビシとして活用している。それに私が次に足場とする机を「自然」に槍撃で薙ぎ倒して逃走経路を寸断。黒田先輩がこちらの動きを完全に止められるようサポートしているが……。……肝心の黒田先輩が私の計略に嵌まっている以上、すぐには思い通りにはいかないだろう。

それに足場が崩されているとしても問題はない。机がひっくり返っていいようが、机が安定した状態で転がっている限り、青空彼女のDEXと釘貫た神葬知識の経験を活かしてそれをいくらでも足場として活用してみせる。むしろひっくり返してくれた方が、飛散したガラス片によるマキビシが振り払われ安全にその新設された逃走経路を猿のように跳ねまわることが出来た。

紫先生と蓮魔先生は……。現状、私の様子の観察は行っているが手出しはしてこないと見てほぼ間違いはない。私が彼女たちも警戒し3m圏内に入らないことも1つの要因だろうが……。

少なくとも蓮魔先生は鞭をいつでももしならせ、初日のように捕縛できる体制にはなっている。だが、そのような状態になるよりも先に『黒田先輩と眞田先輩の2人だけで決着が付く』と考えているようだ。……それでもこちらを警戒した様子は変わらない。

紫先生は身構えることもなく、何かを話すこともなく、身動き一つ取ることなく、ただ淡々と眼鏡越しに視線をこちらに向けながら何か考えているような様子がみられる。

ともかく。勝利条件を増やせた以上、私の逃走経路は決まっていた。あとは相手<sup>4人11人</sup>に悟られないように振る舞いつつ、眞田先輩側が黒田先輩の攻撃に合わせることに気づく前にさっさと逃げるだけなので……。

「——ッ！ 眞田！ 黒田！ 攻撃をやめろ！」

不敵な笑みを浮かべながら片手の5指を床に面するスパイダーマツの着地ポーズでバランスを取り眞田先輩と黒田先輩を見据える。それから頃合いを見定め、割れたガラスを詰め込んだバケツ付近の机へ飛び乗ったとき、紫先生による静止の一声が入った。

その眼は何かに気が付いたように驚愕で見開かれており『確証はないし、信じられないが、でも青空<sup>釘貫 神葬(私)</sup> 日葵ならやりかねない……』そんな不安と焦りに板挟みにされたかのような顔をしている……。

……まさか、な。……私がこれから何をするのか見抜いたのか？

「止めるんじゃないやねえ！ 紫！ このクソガキは殺さねえ程度に、一回殺す必要がある!!」

「……」ギリイッツツツ

「ほっ。ほっ。ほっ。……ほっ?」

「眞田落ち着け。もう十分だ。怒りが収まらないなら青空の代わりに私が特訓の代役を務める。……青空。この勝負。お前の勝ちでいい。だから、そのまま。大人しく、机から降りて、こっちに来い」

あ。これは気づいている。彼女は私が何をしようとしているのか。紫先生の絞り出された声は細かく区切られて、まるで家族を人質に取られて どのように犯人をなだめるようか交渉を試みる警察のような……。私を心底、心配しているような素振りすら見える。じりじりところちへの接近もして来ていたが、私が離れるため僅かな動作を見せた瞬間に接近することすら止めた。これには紫先生の観察力と判断力に驚いて、思わずギョツとした顔をしてしまう。しかし、すぐにその顔を挑発的な笑みに戻すことはできた。幸いにもその顔を見

られたのは真田先輩を除く、怪訝な顔をした蓮魔先生、齒軋りがここ  
まで聞こえてくる黒田先輩、そして紫先生だけで済んだが……。

「いいんですか？ まだ私は2人を倒しても居ないですし、そっちの  
逃走経路まで約、あぁー……約8mもありますけど……？」

「構わない。この勝負は『こちらの棄権負け』ということで良い。生徒  
指導は終了とする」

おちやらかながらも負い紐を外し、背面に背負ったアコギギターを  
弾くふりをする。もちろん、この行為は挑発だけではない。

紫先生の言葉に先ほども、怪訝な顔をして紫先生の棄権に信じら  
れないという顔をしていた蓮魔先生の気配が変わったのだ。具体的  
に出る幕のない傍観者から、新たな挑戦者としての目つきに変わっ  
た。

アコギギターが鞭による一閃で破壊されてしまう事は……きつと  
青空 日葵の父親に叱られることは違いないが、それでもそんな高威  
力の一本鞭を身体に受けるぐらいならアコギギターの粉碎など、コラ  
テラル・ダメージにしか過ぎない。例え鞭で〈巻き付き〉捕えようと  
試みようが、私はこのアコギギターを生贄に捧げるつもりだ。

これから私がしてかそうとしていることなど悟られぬような声を  
出して、無警戒な女子高校生つぼくへラへラと笑いながら机上でくる  
りくるりと回りアコギギターを軽く奏でも、紫先生は真面目な顔を  
して片腕を突き出し手のひらを下に向けながら指先で穏やかに手招  
きをする。

「ムラサキイッ！」

当然だが、真田先輩と黒田先輩は納得していないらしい。相手が教  
師であろうが、関係なさそうな怒声が教室を反響しているし、それに  
……どうやら、あの槍はどうやら仕込み槍だったようだ。具体的に鉾  
先とは真反対の石突の部分から爆発音と炎が激しく吹き始める。

……切り札は残しておくべきだもんな。私も蛇子ちゃんを嘲ると  
きに思った気がする。

「真田ッ!!!」

「……チッ。……今のは悪かったよ」

恐らく紫先生を威圧する目的で眞田先輩が切り札を見せたところで、更に紫先生が烈火の如く叱りつけた。それはナイス叱責です紫先生。……忘れては困りますが私は素手ですよ？ 正確には脱ぎ立てのストッキングとアコギギターを手にはしていますが……。

それ以前に年上2人が年下を得物片手に追い回している絵図も中々香ばしいものがありますが、火薬入りの武器を振り回そうとしてそれを止めるのは本当にナイス叱責。そんな槍撃を受けようものなら流石に本当に死んでしまいかねない。

そんなことよりも学校に爆弾を持ち込むのはまずくないです？

あれれえ？ もしかして、これは私は眞田先輩の弱みを握ることができたのでは？ えっと、確か爆発物の所持は〈法律〉で……。刑法何条だったかな？ ……思い出せない。

まあ、ひとまずスマホを出して脅迫でも……。ああ。スマホは私の教室だった。ちえっ。

「……」ズズズツ……

「……お。ほーっ、と」

〈法律〉で一歩リードしてやろうと画策するも、うまく行かずに内心悔しがる私に対して黒田先輩の方は、眞田先輩の火吹き矛に気を取られている隙を狙ってきた。私がショッピングモールのカルティストから儀式用ナイフと魔導書を奪い取ったときのようにじりじりと近づいてきている。私はアコギギターを盾に、更に紫先生が待機している入り口から更に離れた窓枠が花壇に落下していった付近の机に飛び乗り距離を取った。

「蓮魔！」

「……。……聞いただろう。そこまでだ」

「ですが……ッ!!!」

「聞こえなかったのか？」

「……いいえ。……わかりました」

蓮魔先生は紫先生の方を一瞥したのちに黒田先輩を静止させる。教師陣によるあのアイコンタクトには、どんな意味が込められているのか私には分からないが……。蓮魔先生の不意打ちも防御されている



今、紫先生には私を止められる自信がないのかもしれない。だが慢心はしない。私の警戒を解いた瞬間に捕縛……という流れも頭に詰め、作戦を続行する。

ここで蓮魔先生の静止の声が入り黒田先輩が私への接近を止めた。居合術の姿勢である前傾姿勢を解き、鐔に親指を掛けるのを止め、小刻みに震えながらも吊り上がった目尻と鬼の形相でこちらを睨みつけ、下唇を血が流れるほどに噛みしめている。

……これには下手な独立種族や奉仕種族の神話生物と対峙するよりも肝が冷えた。私も探索者として様々な異形の神々や超自然を相手に立ち回ってきたが、今の彼女の怒り狂う顔はソレに匹敵するぐらいの恐ろしい形相だ。

「……青空。約束する。決して不意打ちをしたりはしない。……だから早く机から降りろ。……また上原を悲しませるつもりか？ お前が五車町に帰ってきてから意識不明の重体だった時、アイツはな——」

なかなか警戒状態を解かない私に対して、今度は紫先生がまえさき市で私が大喰いの泥濘に胸部を貫かれた後の昏睡状態の際。鹿之助くんが『毎日』私の見舞いに来ていたこと、見舞いに来たあとその日、学校であったことを昏睡中の私が病院で1人寂しくないようにと色々聞かせていたことを真剣な様子で話してきた。

ああああ……ああああ……ず、ずるい。そ、それはずるい。ちよつと待って。反則技つてレベルじゃない。崩壊する。こわれる。語彙力がぐしゃつてなる。すごい精神攻撃に私もた、た、たじろぐ。やめて。嬉しさと恥ずかしさ、甲斐甲斐しい鹿之助くんの行動で私が尊死する。ば、〈爆破〉しちゃう。事情を知らない3人に、そんな私が昏睡して意識が無いときに鹿之助くんの見舞いでの行動について永遠と詳細に赤裸々と語らないで。動揺する。

ど、どどどどど、ど、動揺する。ほんつと、ずるい。ああ、ダメダメ。ダメだって。やめて。ダメだってば。

鹿之助くんの裏話を暴露されたまま、こんな教室に居座るなんて頭がフットーしそうだよおっつ!!!

……でも、こちらの身体が痙攣するほどの明らかな動揺を見せて、ペースが乱されているのを他の3人は見ているが一向に攻撃を仕掛けてはこない。今、攻撃されたら確実に反応が遅れてノックアウトされていたことに間違いのないのだ。これは紫先生の言葉を信用しても良いかもしれない。

……早く、はやく、ここで予定していた作戦を強行するか、指示に従うかしないと『試合には勝ったが勝負に負けた』みたいな状態になっちゃう。

「……あ、あう。はあ、はあああああ……むらさき先生エ。ここで上原くんの名前を出すのは反則ですよ。は、反則う。わかりました。わかりましたよ。降りますよ。降りればいいんでしょ。あ、上履きを、と、取ってもらえます?」

鹿之助くんについては私にとつて最大の弱点であることを考えながら、深い溜息を吐き力なく首を横に振り机から降りる。……床に足を着いたペタリという足音が教室で響く。この行動で少し紫先生の表情が和らいだが、それでもまだ緊張したような顔をしている。

大丈夫ですつて。もうやりませんよ。だからそれ以上、他人や周囲に惚気話を広めるのをやめて。こっちは先輩2人から研ぎ澄まされたナイフより鋭利な殺意を向けられてシリアスしているのに、今そのタイミングでその惚気話をされると変な色恋沙汰な空気が入り混じって混沌の神が招来した結果みたいな状況になっちゃうから。やめろお前。まじで。

……  
……

投げ渡された靴を受け取り、対蓮魔先生の鞭対策で取り出していたアコギギターを背負い直して、踏みつぶされパキパキと音の鳴る蛍光灯のガラス片と机と教室が散乱した教室を歩く。

……だが私が勝利を勝ち取って、紫先生が私の弱点を暴露して、これでおしまい……ではない。この空気が混沌と化した状況で、私のしなきやならないことは残されている。

……紫先生のせいで、風邪引きそうな温度差なんですけど。

「……黒田先輩」

「……」

「……先ほど発言した蓮魔先生への暴言は撤回させて頂きます。大変失礼な発言や嘲る態度、申し訳ございませんでした」

こちらを睨んで動かない下唇からボタボタと血が滴り、制服を自らの血で汚していることすら気づいて無さそうな黒田先輩の正面に立つ。その恐ろしい眼光だけで、あの校長室の2人の殺意をはるかに凌駕するほどの殺気が私に突き付けられたが、引く訳にはいかない。これは私に非があり、絶対に私がしなくてはならないことだ。目前で彼女がその気になればいとも簡単に首を刎ねることもできるような距離で深々と頭を下げ、謝罪をする。

「ツ~~~~!!! どういう……風の吹き回しですか……ツ! 身の安全を……ツ! 確保できたから、謝罪を私に……?! 人をバカにするのも大概に……ツ」

彼女の言葉が詰まりながらも吐き出される激しい感情の爆発ももつともだ。私がそうなるように仕向けたのだ。そう考えるのは至って普通の事だった。

でも彼女はそう思い発言した言葉は、こちらの真意から大きくかけ離れている。誤解は解けないかもしれないが、勝ち誇って何も告げずに去るよりはよっぽどいい。

「違います。これは本心からの謝罪です。私が貴方に蓮魔先生の目前で悪口を直接告げ、煽ったのは、あなたが蓮魔先生を敬愛しているという情報を踏まえた上で、貴方を怒らせ眞田先輩との連携を断ち切る目的がありました。流石に息の合った先輩2人を相手に新入生が勝てるはずもないですし。……姑息な手ですが、それ以外に作戦が思いつかなかったもので……。この謝罪は私が勝利しようが敗北しようが最初からする予定だったものです。現に黒田先輩の剣撃は蓮魔先生の鞭先のように先端が見えず、刀の鞘が身体に隠れており、これらの技は非常に熟達と精錬された居合術であるとお見受けいたしました」

「……」

「……………」

「……蓮魔先生も、窓ガラスを割り。先生自身や先生を敬う生徒をバカにするような態度を取ってしまい申し訳ございませんでした」

「……ああ」

鬼のような形相である黒田先輩から一旦、目を逸らし今度は同じように教室の出入り口で佇み、こちらを眺めている蓮魔先生に対しても同様に頭を下げる。先生の方は、声が聞こえて頭を上げたとき、冷たい眼差しではあったが、最終的には視線を逸らし掌を左右に振って気にしていないと言った様子で手を振っていた。

「……わかりました。ですが、次、蓮魔先生を貶してみなさい。その時は『確実に』骨の100本をバラバラに砕きますからね」

「寛大なありがとうございました。感謝いたします」

黒田先輩はそれを見て、青筋の浮かび上がった地獄のミサワのような顔のパーツが中央に寄せたような怒りで歪む顔を緩め、蓮魔先生が許すなら……と納得したようだ。

……今のを許されなかったら、本当に殺されるかと思った。

「……おい、クソガキ……」

頭を上げて、2人の様子を確認した後、背後からもう一人の謝罪すべき対象から声が掛かる。相変わらず真顔で怒って……。違う。……少しだけ口角が上がって笑っている？ 矛先を天井に向けながら槍を肩に担ぎ、こちらを見下ろしている。まるで先ほどまでの心算ちゃんと私の構図のようだ。

「真田先輩。真田先輩にも、身の程をわきまえない無礼な物言い、申し訳ございませんでした。あの時こそ、あのようには言いましたが、黒田先輩が私に会心の一撃を叩き込めたのは、真田先輩の陽動があつてこそその結果でしたし——」

私の胸倉が掴まれ、激しく引き寄せられる。その衝撃は、頭頂部がぐんと真田先輩に突き刺さりそうになるぐらいの勢이었다。脳が震えて、めまいを覚える。

「黙れ。私はテメエの作戦や称賛の言葉なんてどうだって良いんだよ

……！ 今度は紫に “頼まれて” じゃねえ。私の “意思” でテメエをキツタギタにしてやるためにここに居るんだからさ。今度は邪魔の入らねえ地下のシユミレーションルームで第二ラウンドだ”

彼女の何処か甘い吐息が掛かるほど、鼻頭同士でキスしあうほどのゼロ距離まで顔を引き寄せられる。それから他の3人には見えないような状態で、彼女は出会い頭に見せていたような狂氣的な笑みを浮かべて笑っていた。まるで面白い獲物を見つけた狩人のように…… ああ……。紫先生はどう仲裁に入ろうか悩んでいる様子だが……。まあ、こりや……。仲裁に入ったとしても駄目そうだ。……きつと逃げられない。

しかし “頼まれて” とはどういうことだろうか？ 開戦する直前までの会話では確か真田先輩が主体となって生徒指導の内容を変更したような話をしていたはずだが……。

「……真田先輩。まずはこの荒らした教室を片付けて、その後も……」

「3度目は言わねえ。黙れ。今すぐにな」

「……わかりました。もう余計なことは言いません。……ですが、えつと……。その時には私にも武器を使わせて欲しいのと……。大事な予定が差し控えていますので、その……。骨は折らないでくださいね？」

「ハッ！ まだその減らず口を叩ける度胸と余裕は認めてやるよ！

——そんなに折られたくねえなら、必死にあがいてみせろ」

私の胸倉を振るように掴んだまま、ギラつく笑顔で荒らした教室を退室する真田先輩。

廊下には水色髪で、毛先を緋色のビーズ球のような髪留めで髪の毛を結っている……。雪国で使用される雪薬合羽ん子のような髪型をした女子生徒が人だかりの出来た野次馬の整理をしていた。恐らく彼女が氷室先輩だろう。……そして、ネクタイの色から彼女もまた黒田先輩と同じ赤色だ。<sup>3年生</sup>

真田先輩に胸倉を掴まれ、野次馬に対して天皇陛下のように優しく

手を振りながらずると引きずられて行く私。

眞田先輩に引きずられていく私を見物する『またアイツか』とでも言いたげな目をして見つめてくる生徒たち。

そしてそんな状態の私に、内心嫌そうな顔をしている心寧ちゃんの手首を無理矢理引つ張りながら、目を輝かせ興味津々で犬のようについてくる陽葵ちゃんの姿。

……なに？ 陽葵ちゃんも眞田先輩と一緒に戦ってくれるの？

コンビ名『<sup>ダブル</sup>Wひまり』として。

……

……

…

斯くして、この日から……避けることのできなかつた運命によって、私は学校の病院で4日間も夜を過ごすハメになった。

そんな顔しないで。私もできることなら会いたくはなかつたよ。

室井先生。

……二度と、頭に、カバンを被って、絶叫ライブを開く様な真似はしないとここに誓います。

## Episode 41 『過剰な生徒指導の裏事情』

『……青空。約束する。決して不意打ちをしたりはしない。……だから早く机から降りろ。……また上原を悲しませるつもりか？ お前が五車町に帰ってきてから意識不明の重体だった時、アイツはな——』

私は校長室にて、紫が回収してきた問題児だらけの乱闘騒ぎ生徒指導の映像記録を紫と共に閲覧している。この映像記録は紫が着用していたインテリ眼鏡のフレーム端に着けられた小型カメラから撮影されたもので、紫は撮影者としてブレのない質の良い映像記録を入手してきた。

「はああああ……」

映像記録もひと段落ついたところで私は報告書の筆を置き、深いため息をつきながら、机に肘をつき両手で顔を覆った。

何を隠そう、この机上に大量に並べられた報告書や修理伝票はすべて今回、『青空』あおぞら、『日葵』ひまりと『黒田 巴』くろだ とまえ、『眞田 焰』まなだ ほむらが教室で暴れまわったことによる窓枠、窓ガラス、机と椅子、蛍光灯、花壇、その他もろもろの修理費と何故ここまで騒ぎが大きくなってしまったのか、事の経緯と事故報告書、生徒指導とは無関係な『速水 心寧』はやみ こころねを巻き込みかけたヒヤリハットに再発防止策の立案によるものである。

確かに事件が発生したときの学生からの報告では『ダブルひまりの閨属性。消火薬液をバラ撒いたほうが、頭にカバンを被ってデスメタルを始めた挙句に他クラスの窓ガラスを頭で叩き割ってそのクラスの女子生徒へ絡みに行った』と聞かされたときは真っ先に青空 日葵の顔が思い浮かんだものだが……。

まさか入学から2カ月目。学園生活では1カ月も経過していないにも関わらず、流石に2度も問題を起こすことは無いだろうと……入学当初は緊張と紫の基礎能力試験で追い詰めたこともあって、あんなことをしてしまっただけであって……。その後の経過観察を他の先生方から聞かされていた情報からや、まえさき市での事件で上原鹿之助を単身で一般人にも関わらず助け出したという功績を聞く分に

根としては問題児ではないだろうと心の奥底で考えていたこともあった。だが、その予想は大きく外れたことになる。少しばかり優等生になっていると聞いて期待していた半面。裏切られたようなそんな複雑な心境だった。

「ア、アサギ様……」

紫の狼狽える声が聞こえ、顔からゆっくりと両手を離し、部屋を見渡す。

今、この校長室には紫と私以外にも蓮魔先生の姿もあつた。彼女は深いため息をつく私に対し、壁に寄りかかりながらも『青空 日葵』の経歴資料を片手に顔だけをこちらに向け、心底気の毒そうなものを見ようような眼でこちらを見ている。

「紫。私のことは大丈夫よ。こればかりは嘆いても仕方ないわ。もう起きてしまったことだもの。それで、蓮魔先生。その『□青空 日葵』の資料を読んだ上で貴女の意見も聞かせて貰いたいのだけど、彼女の振る舞いについて どう思ったか意見を聞かせてもらえるかしら？」

「アサギ校長。……あなたは私が冗談は嫌いであることを御承知の上でこの資料を見せて居おられるのだな？」

「もちろんよ。その資料に書かれた情報は内務省公共安全庁 調査第三部へセクシヨン スリー〜諜報部に収集させた情報よ。決して誤りではないわ」

「……………ふっ。それは酷い。本当に酷い冗談だ。……………この際、はっきり言わせて貰うが。彼女を “ただの一般人” として評価しているのであれば、私からは誤りだと指摘させてもらう。いくら紫の指示のもと忍法を制限した生徒指導模擬戦闘とはいえ、紫から基礎体力作りの訓練以外に大した戦闘訓練も教わったことも無いはずにも関わらず。私の一番弟子である黒田の初撃を咄嗟の判断で避けてみせた。それどころか真田との共闘連携戦ですら、 “しばらくの間” 武器も無い素手の状態で耐え凌いでみせたんだぞ？ 彼女を除いて、日本の何処にそんな一般人が居るといふのだ？」

「……………」



蓮魔の言葉に肘を突いた両手の指を組み、視線は報告書に向けたまま一点を見据え何も返事することなく顎を乗せる。こればかりは何も言い返せなかった。

私も、彼女と同じ状況であれば、その資料に書かれている情報が誤りに違いないと鼻で嗤ったことだろう。だがその資料は紛れもない事実なのだ。

『これがお前用のノーマルな生徒指導だぜ!!!』

『見て見て！ 紫先生！ 日葵ちゃん、素早い身のこなしで黒田先輩の攻撃を避けちゃったよ！』

『ああ』

『あつ！ 眞田先輩の……躲したあーっ!!! 心寧ちゃん、早く早く！

紫先生！ 日葵ちゃんはやり過ぎちゃったかもしれないけど、ああやって心寧ちゃんが巻き添えにならないように立ち振る舞って、実は今回の件も心寧ちゃんへのサプライズで……ああつ！ だからあんな酷い生徒指導を止めてあげて！ お願い！』

『ああ。心配することはない日ノ出。眞田も黒田もお前よりも先輩だ。ちゃんと理解して手加減をしている（大嘘）』

『ほんと!?!』

『ああ。ひとまずここは危険だから離れる』

『で、でも、日葵ちゃん……。よし、私も対魔忍として日葵ちゃんと一緒に生徒指導を——』

『速水、日ノ出を連れて教室の外に出ろ』

『はい。行きますよ、陽葵ちゃん』

『え？ え？ えっ。え……』

映像記録がループして再生され始める。組んだ指に顎を乗せた姿勢によつて自然に猫背な姿勢となり映像記録へと視線が移動する。

この紫の映像記録に入っているこの声は……最近『青空 日葵』と友好関係を結んでいる『日ノ出 陽葵』によるもので間違いない。学生達の言葉を借りれば『ダブルひまりの光属性』とは彼女のことだろう。さしずめ『太陽熱や元気を放射する方』という二つ名になりそうではある。

……それにしても「目は口程に物を言う」とは言うが、まさに『青空 日葵』はその通りだった。

記録に残された彼女のその目の動きは常に目まぐるしく動き続けている。常に眞田と黒田の動きを注視し、出入り口で逃走経路を阻んでいる紫、蓮魔……時折、廊下で野次馬整理をしていたという氷室にも注意を払っていた。

紫の斧撃を防いだ時のような立ち回りでは、流石に眞田が槍を振り回して机を吹き飛ばすことは想定していなかったようで、教科書が彼女の身体に当たり怯んだ一瞬の隙を付け込まれて回り込んだ黒田に背中を一突きされ教室の床に転がったが……。その後も、追撃、身悶えしながらも薄目を開けて何か突破口を探している様子がなんとなくにこの後の展開を鑑みることによって推測することができる。

しかも、寝転がっている際、彼女は単純に執拗な眞田の追撃による痛みを悶え苦しんでいるだけかと思いきや、どこか自分の境遇に対してか、それとも攻撃を加えてきた2人に対してか、何か情けないものを嘲笑うかのような苦笑をしている様子も見られた。

そしてその後で展開したのが、眞田と黒田、2人の連携を断ち切らせるため、2人が『青空 日葵』自身に食らいつく様な言葉で嗾け、更に自然な流れで自身が勝利を達成できるために条件の提示を行ったのだ。

『青空 日葵』と眞田 焰、黒田 巴の2人は初対面のはずだ。

……3年生の黒田に関しては普段から蓮魔と連れ添って歩いていることから見たことがあるかもしれない。だが眞田は今回も長期任務を終えて、気まぐれにふらりとこの学校に立ち寄ったばかりなのだ。彼女がどのような人物像であるか知っているはずもない。例えば噂で小耳に挟んでいるとしても出会って数分で乱闘しているような状況にも関わらず、彼女は2人の性格に適した煽り文句を吐いて、更に怒りを煽る行動を示しその気にさせた。

おまけに一見、黒田の武器を手摺りのように掴まるようにして握りしめてはいるが、これは居合による抜刀術で攻撃を放つ太刀の長さを計測しているのだろう。現に以降の戦闘で一定の間合いで戦う素振

りが見られる。

これは、世間知らずで学校以外に外を知ることもない15歳の子供が見せるような洞察眼ではない。

……それから彼女は紫と蓮魔の前で何をしてみせた？

「紫。あなたが、この映像で棄権を宣言したのは……」

「……………はい」

「……………正気とは思えないな。この資料を貰った今だからこそ言えるが、本当に奴がその気だったなら……………。仮に『青空 日葵』が一般人だったとして不死身や肉体強化、空遁の忍法すら開花していないのに本当にそんなことをするという確信があったのか？」

「ああ、あった。日ノ出は青空を擁護していたが、アレも違う。そう魅せていただけだ。あの場で青空が速水を出汁に逃げようと画策したように、私も上原を出汁にして青空を止める必要があった」

「……………正気じゃない」

「『ただの一般人』にも関わらず、その正気ではないことを平然とやってのけるのが彼女だ」

吐き捨てるような言葉を放ったあと、蓮魔は資料を私の机の上に置き、連携が完全に乱れている眞田と黒田との戦闘記録を紫と一緒に覗き込んできた。

記録された戦闘記録は戦闘用プログラム視線追跡ソフトも併用され、現在『青空 日葵』が何処を見ているか事細かに表示されている。『青空 日葵』は頭に血が上った2人に対してあからさまで露骨な逃走経路を提示し、確かにその視点は紫や蓮魔のいる出入り口を注視しているように見えるが実際には異なる。彼女の視線は黒田が破壊した窓枠の外を多く指し示していた。

紫は…………『青空 日葵』が生身の一般人にも関わらず、地上4階の高さ…………約12mの高さから飛び降りることを危惧したのだ。

「…………」

ごくぐりと固唾を呑み込む。

医師の桐生 佐馬斗がいくら魔科医療のプロフェッショナルだとしても死者を蘇らせるような力は持っていない。例え一種の蘇生術

として死体から細胞を採取し『青空 日葵』のクローンを生み出すことができたとしても、それは私達が監視対象としている『青空 日葵』だとは言いがたい。クローンはあくまでも同じ肉体と性格を持った別人だ。……肉体も精神も記憶も全て同じ状態で蘇生、復活させられる等そんなことができるのは高位魔族の死霊騎士ぐらいなものだろう。

そして紫にはテロリスト襲撃時の『青空 日葵』の立ち振る舞いについて記録を見せ、自身も実際に対峙した経験があるからこそ、そのような反応を示したのだ。

逆に蓮魔は彼女のそのような強行手段に出たことを知らないが故にあのような反応を示した。

紫と蓮魔。どちらの気持ちもよくわかる。

「蓮魔先生。今後はあなたにも『青空 日葵』の監視を命令するわ。今回、彼女の資料をみせたのもそれが理由だったりするのだけど。頼めるわよね？」

「ああ、いいだろう」

「ア、アサギ様?!?!」

一呼吸を置き、振り返って蓮魔へと視線を合わせる。彼女は私の指示に二つ返事で承諾し、代わりに……と言ってしまったのは難だが、紫は右隣で青ざめた顔をしながら悲鳴のような声で私の名を呼ぶ。まるで私一人では役者不足だと言いたいのか。今回の一件で私を失望させてしまったのか？ 不安そうなそんな顔だ。

「紫、今度あなたは長期任務に出かけるでしょう？ 今後もそういうことが続くはず。それに監視役は多いことに越したことはないわ。……私とさくらは顔が割れてしまっている。さくらなら陰ながらに監視することはできるけど、常には無理。それに今の段階では彼女に私達の事を悟られるわけには行かないの。残った信頼のできる教師は蓮魔先生ぐらいなのよ。私には『青空 日葵』がある程度恐れていて、彼女の問題行動をけん制することができるのは蓮魔先生以外に考えられないわ」

「ぐ……っ。そのような事情があった上での判断であれば……かしこ

まりました……」

「アサギ校長、一つ質問がある。青空日葵に尋問をかけなくていいのか？ 彼女が一般人ではないことは明らかだ。何者であれ、あのような狂人を野放しにするわけには行かないだろう？ 必要であれば私が担当ぞ」

「それについてはまだよ。今はまだその時ではないわ」

そう。蓮魔先生の言う通り彼女を尋問するとするなら早いほうがいい。

彼女は何者なのか、何処の組織に属するものなのか、なぜ“ただの一般人”にも関わらず対魔忍について知り得ているのか。様々なことを知ることが必要だ。

しかし彼女はまだ現状私達に“見せている力”以外にも、別の力を隠して生活しているような気がしてならないのだ。急ぎ足な尋問をしてしまい、彼女の『切り札』に気づかずこちら側が致命的な痛手を受けるのは避けたい。

この生徒指導の映像記録でも『青空 日葵』は、眞田 焔が見せてしまった長槍から噴き出る火遁術に驚くどころか冷静なままで何かを納得する素振りが見られた。更にスカートのポケットに手を入れて“何か”を探し、“何か”が無いことが分かると落胆するような素振りも見せている。

更なる内務省公共安全庁 調査第三部の調査によれば、学生にも関わらず臆することもなく株に手を出して取引の類稀なるセンスで儲けを出しているようだ。これは小遣い稼ぎと考えるべきか、それとも何か事を荒立てる際の軍資金を整えていると考えるべきか……。

## Episode 42 『暫定忍法』

——バァン！

「よっ♪ アサギに、紫、蓮魔までなにを雁首揃えて見てんだよ♪」  
その時、ノックもせず荒々しく校長室の扉が開かれる。

今回の一件で憂鬱な気持ちのまま視線を向けた先には、今回の被害  
拡大要員の第一号眞田 始が上機嫌な様子で姿を現わしていた。恐らく『青空  
日葵』の血液であろうごく少量の返り血を、身体の至る所に付着さ  
せている。またその血液を拭うこともない姿で長槍を悠々と担いで  
いた。

即座にパソコンにて再生していた映像記録を停止させ戦闘用プロ  
グラムソフトごと閉じる。それからゆつくりと息を吐きながら、猫背  
のようになつた背中を背もたれへと倒した。

「随分な身なりだな眞田。これが貴様の今回の長期任務の報告書と、  
貴様の給与から差し引かれる破壊した教室の机と椅子、蛍光灯の修理  
伝票だ」

「はあっ？　なんで、私の給料から差し引かれなきゃなんねえんだよ。  
おかしいだろ！　これは教室で暴れまわっていた問題児への生徒指  
導の流れで破損したんだから、経費で落とせよ！　経費で！」

「その生徒指導は、地下のシミュレーションルームで実施すれば良  
かったものを、先輩であるお前が黒田を焚きつけるようにして、教室  
で暴れたのがそもそもの原因だろう？」

「うっ……それは……」

蓮魔から差し出された伝票と報告書を払いのけ、食ってかかる眞田  
だったが紫の正論も入り途端にたじたじになる。一度は払いのけた  
修理伝票と報告書を受け取り困つたような顔をしながら後頭部をか  
きむしり始めた。

紫と蓮魔が校長室に到着した際、紫から机と椅子、蛍光灯の修理伝  
票は書かなくていいと進言してきたのは、そういうことだったとい  
うのね。

思い返してみる分にあの映像記録を見る限りでは最初に『青空 日

葵』に危害を加えたのは眞田ではなく、黒田からではあったものの……開戦の火蓋を切るような発言とその模擬専用の槍を頭上で大旋風させていたのは眞田だったはず。

「ここは紫の進言を尊重し、今回の修理費の一部は眞田自身に負担してもらおうことにした。」

「お帰りなさい。眞田。……それで？　紫の話だと、教室での生徒指導のち問題児の第三号青空 日葵と追加の訓練をしたそうだけど……彼女と戦ってみてどう感じたかしら？」

「率直なことを言わせてもらえば、まだまだ弱え。だが、アイツは私が見込んだ通りガッツはあるぜ。何度気絶に持って行っても、全身を打身だらけにしても、叩き起こせば即座に食らい付いてきたのは評価できたな」

「……。……続けて」

「後半は茄子みたいになっていたにも関わらず、私の槍撃にも慣れてきたのかSEKIRONINのように槍を踏みつけてきやがったかと思えば攻撃を受け流して、顎目掛けて殴ってきやがった！」

彼女は私の問いかけに対して報告書を面談用の机の上に放り投げると、面白そうにギラギラとした笑顔に戻って当時の状況を語ってきた。

……余程、青空 日葵との殴り合いが楽しかったのだろう。実際に殴られた顎の部分まで人差し指で指して、少し皮が剥けて赤くなったのを見せつけてきた。

「まさかあのひよつこに、急所を的確にぶん殴られるなんてな。流石の私も一瞬だが脳が揺れて怯んじまったぜ。ま、即座に地面と抱擁させてやったけどな！　……アイツはもつと鍛えてやれば、間違いなく強い対魔忍になれる。そしてあの1年は日ノ出 陽葵だったか？」

アイツの介入を拒否して、最後まで単身で立ち向かってきやがった。紫の話では忍法はまだ覚醒してねえみたいだが、アイツが任務に出られるようになったら真っ先に私に教えてくれ！　アイツの芯には決して諦めねえ……なんつーかな……。決意。そう、決意の炎が宿っているそんな気がするんだよな。お前等が見て忍法が覚醒しないと判

断しても将来は火遁衆に引き入れてえし、火遁衆期待の神村 舞華ほどじゃねえが、みっちり鍛え上げれば前線を張れる絶対に良い対魔忍になれる！ 私が保証する！」

「……ええ、考えておくわね」

彼女はまるで子供が新しい玩具を見つけたときのような目で、キラキラとした目を見せつけてきた。正直、これ以上、対魔忍の問題児を抱えるのは私としても胃が痛くなるような思いだったが、ここで渋ったとしても正面の眞田が納得するはずもないため生返事しておくのだった。

……彼女には『青空 日葵』が一般人であることは伝えてはいない。彼女に対して『青空 日葵』が一般人であることを伝えることは、彼女の感情が高ぶった際。ふとした拍子に事情を知らない教師や生徒、本人へ対し、余計なことを直接的に口を滑らしてしまう危険性があると考えた上での対応だった。現に、今回も紫が計画した『青空 日葵』の生徒指導について口を滑らせてしまっている。

しかし対魔忍と同等の訓練を付けられても、何度も立ち向かっていくだけの耐久力と気合には見入るものがあるのは確かなことだ。

「……念のため聞くけど、殺してはいないわよね？」

「殺すわけねえだろ。将来有望な対魔忍って言ったろ？ ひとまず半殺し程度には留めておいた……と言っても、死なないギリギリのラインまで痛めつけて室井の緊急治療室送りにしたけどな」

「そう。既に紫からは彼女の忍法が覚醒していないことを聞いたみたいだけど。貴方との戦いの中でも忍法に目覚めた……あるいは何か気が付いたことはないのね？」

ふと先ほどの彼女が言った『私達が見て忍法が覚醒しないと判断しても』という話口調に引つ掛かりを覚え尋ねてみる。まるで、何か気づいたが隠したいような……そんな気持ちが浮き彫りになっている発言のように聞こえたからだだった。

「……。さあな……私が見た感じだと何にもなかったが」

「……」

やはり。先ほどまで饒舌だった彼女が途端に言葉を濁し小声に



なった。

何か彼女は隠し事をしているようだ。万が一の事故に備え、シミュレーションルーム内での出来事はすべて記録として残されている。例えば真田が『青空 日葵』の変化に気が付いた上でそのことを隠蔽したとしても、今、目の前のパソコンで内容を即確認することはできるのだが……。しかし、その変化が戦った張本人しか分からないものだった場合。手の打ちようがない。結果的にここで聞き出す必要が出てきていた。

彼女が言葉を濁し小声になったところで、こちらは何も言葉を発することなくすうつと目を細め睨みつける。

「……………」

「おいおい、流石に『最強の対魔忍』と特訓する気はねえよ。本当は……火遁衆へ引き入れるチャンスを不意にしたくないから言いたくはねえけどさ。アイツが今後、対魔忍として活躍することを考えるなら……チツ。しょうがねえな。私が見た感じだと、それらしい忍法と言えば何度気絶に追い込んで意識を取り戻せば即座に動けるその<sup>ガッツ</sup>気合じゃねえか？」

……なるほど。

何度気絶に追い込んで意識を取り戻せば即座に動けるその<sup>ガッツ</sup>合、ね。

真田の気づきの確認のため、机上のパソコンを操作してシミュレーションルームの映像記録を閲覧し始める。

映し出された状況によると、戦闘結果としては真田の一方的な蹂躪で終わったようだが……彼女の発言通り、一般人にしては気絶からの活動復帰行動が他の対魔忍と比較しても早いことがわかった。真田による手加減が一切感じられない攻撃によって気絶したとしても、水を頭から浴びせられて目が覚めたその瞬間から苦痛と疲労に顔を歪めながらも教室で見せていた動作をそのまま体現している。

流石に今まで彼女を気絶に追いやっては、即目覚めさせるような拷問まがいの検証は執り行なってはいなかった。それゆえに気が付くのが遅れてしまったが、この映像を見て確信を得る。

だがしかし、どうしても不可解なのはDNA鑑定では確実に『青空 日葵』は父親の青空 源太と母親である青空 八雲の子供であり、血液やDNAの情報にも魔族の血が混じっているという記録が無い。五車学園に在籍している3年生の鬼崎おにざききららのように片親が魔族であるならば、彼女の忍法の覚醒について納得が行く部分もあるのだが……。……ここ等辺に関しては更なる調査を加えていくべきだろう。もし仮にそれが彼女の忍法とする場合……。紫の忍法に関する分類ということになる。特に似ている者と言えば、青空 日葵と入れ替わるようにして卒業した五車学園生の仲森なかもり 奈々華ななかのような驚異の耐久力と回復力を持つ忍法に近い。

ここでふと紫と蓮魔の方を見る。彼女達も私の顔を見て頷いていた。それは『青空 日葵』の一連の立ち振る舞いにも納得することができたと言った顔だ。

それが忍法であるとするならば、仮に気絶するような負傷をしたとしても……。何かのきっかけで気絶から意識を取り戻せることができればその場からの逃走は可能である。それに、その忍法が彼女の特性であるとするならば彼女が提示してきた『この場生徒指導から逃げ出すことができたなら私の勝ち』という条件にも合致していた。

1週間前に危篤状態から病院で目覚め、即退院するために大暴れをし元気であることをアピールしたという話にも合点が行く。

さらに言ってしまうば『青空 日葵』は自身の特性忍法についても理解しているように感じられる。

五車学園の図書室に保管されている蔵書によれば。本来、対魔忍は忍法が覚醒したとしても。原則どんな対魔忍であれ1つの忍法しか開花しない。ふうま八将を継ぐとされていた心願寺しんがんじ 紅くれなゐのように2つの忍法に開花する特例中の特例な対魔忍も存在するが……。その存在は極めて稀だ。しかし、絶対には無いというものは無い。ゆえに現状を暫定的に『彼女の忍法は気絶復帰後からの即行動』のみだと結論付け、対魔忍であるのであれば早期に勧誘や尋問をしよう事は、早計な判断である気がしてならなかった。

「……ところで、SEKIRONINって何かしら？」

「ああ？ SEKIRONINを知らねーのかよ。SEKIRONINってのはな——」

「ふっふっふっ。そこは私が解説しよう！」

考えれば考えるほどに頭が痛くなるような彼女の情報に、ここでふと彼女の説明にあつた『SEKIRONIN』について問いかけてみる。これについては聞いたこともない名詞だ。もしかすると何か重要な気づきに対するきっかけになるかもしれない。そう思ったところで、不意に真田の影からさくらの声が聞こえ、ぬつと真田の影から飛び出るように対魔忍スーツ姿でその姿を見せた。

『SEKIRONIN』とは！ ふうまくんとゆきかぜちゃんが遊んでいるフロムソフトウェア開発のゲームの事なのだー！ ほむほむの聞いている話だと、どうやら日葵ちゃんは、そこに登場する主人公が使用する突き攻撃を伴う敵の攻撃を受け流す技の『見切り』を使ったんだと思うよ！」

「げっ……さくら。テメエ、いつのまに私の事の影に入り込んでやがったのか！」

「めんご☆ お姉ちゃんから簡単な任務を済ませて帰ろうとしたところに、丁度 お姉ちゃんの元に行こうとしているって話を聞いたちゃったからね。ついでだから楽しんで連れて行ってもらおうかな〜って思っただけ！」

「このっ……！ あと、ほむほむって呼ぶのやめろっつってんだろ！」

ぶっ飛ばされてえか!!」

「だから、めんご☆めんご☆だつてばー」

「真田！ ここで暴れまわるのはやめろ！」

「……………はあ……………」

さくらの登場により、校長室の内部が一層賑やかになった。

直ちに可愛らしい渾名呼びされた真田が激昂し槍を構え振り回す際の動作に入ったが、さくらは跳ね回る猫のように悪びれていない笑顔のままの謝罪を繰り返しながら、家具の影へ次の家具の影へとその身を潜める。

更に校長室内の家具が破損する危機が迫ったかと思いつめたところ

ろで、先に紫が静止の一声を放ち大事には至らずに済んだ。

蓮魔はというと、小さくため息をつきながら鼻頭側へと落ちた眼鏡を調節して呆れたような顔をしている。

「……それでさくら、頼んでいた任務の結果は？」  
おっかい

「うん。何も起きてなかったよ」

「何も？」

「何も。それどころか『またか』『また奴が暴れているのか』『いい加減にしろ』みたいな顔をしていたね！」

さくらの言葉に思わず顔をしかめる。

実のところ言うと、今回さくらには『青空 日葵』は騒ぎを起こす裏には何者かに工作や反乱のチャンスを与えているのではないかと、その反乱者および工作人員の監視を行わせていたのだが動きはなかったようだ。この話を聞く限りでは、その反乱者は呆れすら覚えていたようにも聞こえる。

……つまり、この情報から導き出される情報としては、青空日葵のあの問題行動は本人が意図していたかどうか完璧に差し測することはできないが、日ノ出 陽葵の発言やこれまでの『青空 日葵』の行動を観察してあり得る可能性は『本人も意図していなかった成り行き』で窓ガラスを頭で叩き割ったのだろう。でなければ、あの生徒指導宣言前の狼狽っぷりと黒板に残された文字の心理的状況の説明が付かない。

もしもそれが演技であるというならば彼女はとんでもない役者に違いないだろう。

「はあ……」

部下に見せるべき溜息ではないことは分かっているが、これは溜息をつかざるをえなかった。在学している1カ月以内の話に限っても、彼女が起こした事件だけを換算した場合、『紫の基礎能力試験』、『まえさき市』、『入院中での暴走』、そして『今回の出来事』……きつとこんなトラブルメーカーの事だ。近いうちに絶対、何か別の騒ぎを起こすようなそんな気がしてならない。

しかし、今回の一件で大きな進展もあつた。それは間違いなく彼女

の弱点ともいふべき存在の発見。ふうま小太郎を隊長に独立遊撃隊に任命した際、『青空』日葵』を部隊へと参加させて欲しいと進言してきた『上原 鹿之助』の存在に他ならない。

紫から制止のために告げられた時の反応は充分な効果を発していた。あの感電したかのような身体を震わせる動揺に顔を赤らめ凄まじい恥辱に晒されたかのような顔。本人もまた外へ飛び降りるか、それとも紫の指示に従うか少し迷った反応を見せた後で、上原鹿之助の話題を出すことはやめて欲しいと言及し素直に机から降りている。

彼はきつと今後も彼女を制御するうえで必要不可欠な存在だ。存在だ、が……上原鹿之助を独立遊撃隊からは外せないという点と、期末試験開けの判断が下り、正式な対魔忍として属するまで『青空』日葵』は独立遊撃隊に参加させることができないという点を除けばの話ではあった。

……。一瞬、彼女の牽制の為、問題を引き起こすたびに上原 鹿之助へ報告するという案も浮かんだが……。これはこれで予測不能な事態が引き起こされかねないのでは？ と脳裏に一抹の不安がよぎり、口に出すことなくそつと胸の中にしまい込むのだった。

9章 『言葉のボディブローは突然に♥』  
Episode 43 『昇降口にて』

眞田先輩と黒田先輩との生徒指導から翌日の出来事。

今日は！ ついに！ “課外授業” から帰ってきた3人が学校に登校してくる日だ！

五車学園の地下に備え付けられた病室を飛び出して『休んでいる暇はない！ 室井 光彦先生、すぐに出撃だ！』と青空 日葵が前の学校で使用していたと思われるジャージを片手に今日は無理やり登校にこじつけたのだ。もちろん、あの室井先生が首を縦に振るわけがなく、また病室に軟禁しようとしてきたため『私には学校で授業を受けの権利がある！ 学ぶ権利があるー！ 日本国憲法―第二十三条、二十六条 知らねえなら調べろやオラー!!!』と叫び散らしながら『法律』を振りかざし強行突破したところ今度はあの押し問答に勝つことができたのだ。突破口を見つけてしまったな。

無理やりエレベーターに乗り込んだ際に、室井先生は力なく首を横に振っていたが私の知るところではない。これは私の持つ当然の保証された権利なのだ。権利を主張して何が悪い!!! やはり『法律』は強いな。くっ……眞田先輩の時にも爆発物を教室で放つた際に思い出してさえいれば……。

だが、後悔してももう遅い！ 今はそんなことよりも、このわずかな時間でも一般人枠の生活として普段の日常を取り戻そうと3人を長袖長ズボンの上下ジャージ姿で昇降口で出迎えるため、他の生徒にジロジロと見つめられながらも番犬ハチ公のように今か今かと彼等を待つのだった。

「おはよう！ みんな！」

「よお！ 日葵！ なかなか、いつもの場所に来ないから お前の家に寄ってお前の母ちゃんから——ウオオアアアアアアアアアア!!!」

「え、鹿之助ちゃん何かあったの……日葵ちゃん!!!」

「えっ!? 青空さんっ!」

やがて3人が昇降口から姿を現わしたので、現状可能な限りの大きな声で気が付けるように挨拶をする。

しかし……なんだろう。このやり取りは約2週間前にやったようなデジャヴがある。

このまま流れで合流して、のんびりと教室まで雑談をしながら一緒にと歩いていきかけたのだが……開幕そんな余裕はなさそうだった。

でも彼等は目を見開き、持っていた荷物を落とすほど……鹿之助くんに至っては『漂流教室』の恐怖顔で驚くのも無理はないだろう。

現在私の顔は、熱膨張でパンパンに膨れ上がったパンの生地のように顔面がはれ上がり、露出している顔面の1/3は内出血で真紫色に染まっているからだ。唇の端が到底見せられる姿でもない重症化した口角炎のように千切れてしまっているため、テープで固定しその上からマスクで覆い隠しているもの……。それでも昨日の眞田先輩との第三回戦目によって発生した側頭部のたんこぶに溜まった血が降下し、下瞼に溜まった結果。まるでパンダのような出で立ちになっていたのも衝撃として大きいのだろう。

でも3人と会いたかったんだもん!! また私が入院している間に課外授業に出かけちゃって、暫く会えなくなっちゃうのは寂しかったんだもん! こればっかりは不可抗力! しかたないよね! 痛みはコントロールできる! それは前世で学んだこと!

「えっ、えっ? えっ、えっ。え? 何があった? 俺達の居ない間に一体 何があったんだ!」

「ねえ?! 冷やした?! ねえ、日葵ちゃん! ちゃんと眼窩を冷やした?! それはあまりにもひど過ぎるよ?!」

「わあはっはっはっはっは! 大丈夫、大丈夫。所詮、内出血です。死んでないので、かすり傷ですよ。かすり傷」

余程ひどい有様なのだろう。私より身長の低い2人が、まるでしばらくと会っていない子犬のように飛びついてきたので、爽快に笑いながら抱きしめ返す。鹿之助くんは無い胸の中にすっぽりと埋まる形で捕まえられたが、蛇子ちゃんは機敏な動きでこちらのハグを避ける

とポケットからハンカチを取り出して、近くの蛇口で濡らした後、血がたまってパンダのようになった眼窩付近をペタペタと冷やしてくれる。

「……青空さんはさ。俺の中のイメージだと、いつも突拍子もないことをしてかすような破天荒的なキャラな位置付けだったんだが……本当に今回は何をしたんだ？」

「とある御仁に強くなれるように戦闘訓練を付けて頂いたんです。……いやあ、クツs……とても。とても強いなの。私なんて全く足元に及びませんでしたね。ですが、最高に燃えます。彼女と戦って、戦闘技術に関しては自分にはまだいくらでも伸びしろがあることがわかったんですから」

あたふたとする蛇子ちゃんと、私の腕の中で引き？そうともがいている鹿之助くんとは一足遅れてふうま君も近づいてきた。流石に彼は私との久方ぶりの再開であつても飛びついては来なかったが、彼の性格らしくまじまじと舐めるようにこちらの全身を眺めてくる。

こちらとしては蛇子ちゃんに託されたハンカチで患部ではなくデコを冷やしながら、笑って片目を瞑って後頭部を搔いて何事でもないように振る舞ってみせた。そんな私を彼は、正気とは思えないと言いたげな顔で見た後にそっぽを向いて何か考え事を始めてしまう。表情や仕草から〈心理学〉を用いて推察するに恐らく今頃『一体誰と殴り合ったのだろう……』とそんなことを考えているに違いない。

「日っ葵ちゃん！ おっはよー!!!」

そんな昇降口でのバタついた朝の登校時間に背後から誰かが抱き着いてくる。背中に質量と張りのある巨大な2つのはんぺんが張り付き、あすなろ抱きのように首の付近を小麦色の腕がマフラーのように巻き付いてくる。

それに目前に氷水の入った蛇子ちゃんが駆け寄ってきているのだ。となると、私を日葵ちゃん呼びしてくれる友人は1人しかいない。

「おはようございます。陽葵ちゃん。今日も朝から元気ですね」

「えっへへー♪ 元気なのは昨日、私を日葵ちゃんが……うひいやあっ！ ひ、日葵ちゃん……昨日よりは青あざとか腫れは引いている



と思うけど、それでもすごいね……。でも担架で運ばれて行ったのに、もう動ける回復力もすごいけど……」

デコを冷やしている私に蛇子ちゃんはひったくるようにハンカチを回収すると、私には任せられないと言った様子で氷水を持った手で私のパンダになった眼球付近を冷やし始める。滴る冷水がマスク越しの口の中に入ってくるが、拭く訳にも取るわけにもいかない。

背後から私の事を抱きしめている陽葵ちゃんは、更に背中に体重を乗せてこちらの顔を覗き込むようにほぼゼロ距離で眺め、それから目をぱちくりとさせてほつぺたを人差し指でぷにぷに突いてきた。はっはっはっ。陽葵ちゃん。あの……地味に痛いです。あの……？

その隙に鹿之助くんが私の腕の中から抜け出す。でも鹿之ニユウムは充分補充できた。満足。

「担架で運ばれて行ったのか!? 日葵?!」

「担架で運ばれて行ったのお!! 日葵ちゃん?!」

「担架で運ばれて行っただと!! 青空さん!!」

「わお。息ぴったり」

流石に担架で運ばれて行ったのは想像にもしていなかったのか、3人は同タイミング音程の異なる音声で調和のとれたハーモニーで目を丸くして私の背中に抱き着いている陽葵ちゃんに迫る。私に出来たことは、片目を瞑り後頭部を掻きながらはにかむことぐらいだ。

今の叫び声で昇降口に居た生徒の数人が視線をこちらに向けて来てはいたが、どいつもこいつも私が視線を返すや否や片っ端から目を逸らしていく。意気地なしめ。

「うん! 眞田先輩と地下に続くエレベーターに乗って行ったから、私もあとを追いかけて行って一緒に戦おうとしようとしたんだけど……日葵ちゃんが自分一人で戦うって言って」

「え? 眞田先輩って……あの、眞田さなだ 焰ほむら先輩か……?」

「そうだよ! それで30分後ぐらいかな? 流石に酷い蹂躪だったから止めたんだけど、その時には昏睡した状態で……シユミレーショナルルームからそのまま病院のベッドに担架で運ばれて行ってね! 室井先生が、頭を抱えてたね!」

「え？ 待ってくれ。青空さん……。眞田先輩に一人で立ち向かっていったのか……？」

「ええ、まあ。絡まれました。私は別に（慣れているので）いいですけど、流石に陽葵ちゃんが全身青あざまみれのは忍びなかつたので……。それに、あの人は手加減という言葉が頭の辞書になさそうですし。その場でできる最善策を取ったままです」

「でもね、でもね！ 日葵ちゃんもつとすごいんだよ！ 眞田先輩の他にも黒だ——」おつと陽葵ちゃん それ以上はNGです。思い出したくない記憶なので言わないで頂けると助かります」

『おつと、それ以上はいけない』と背中から抱き着いている陽葵ちゃんを、まるで柔道の一本背負いするかのようにつくりと背中に乗せて前屈姿勢となる。それからロデオマシンや土木で用いられるタンピングランマーが起動したかのように彼女を背中に乗せたまま、その場で何度か屈伸運動をして更なる言葉を余計な一言を3人。特に眞田先輩の名前を聞いただけで驚愕のあまり既に固まっている鹿之助くんには、これ以上の情報を暴露してしまわないように努める。

眞田先輩の名前を聞いただけで、この状態なのだ。黒田先輩の名前を聞いた日には昏倒してしまいかねない。

「あはははははははっ！ やめてよお！ くすぐりたいよおっ！」

「……今、なにかもつと すごいこと」を言おうとしていなかったか？」

「ははは、何言っているんですかふうま君。こうなった要因は、眞田先輩 だけ」に特訓をしてもらったからですよ。それ以上でもなければ、それ以下でもありません」

そのまま誤って投げ飛ばしてしまわないように加減しながら、屈伸振動する私に陽葵ちゃんは脱力状態で全身を私に委ねご満悦のようだ。

ふうま君は陽葵ちゃんが言いかけた追加情報に気が付いてしまったようだが、背中に乗せた彼女をタンピングランマーロデオマシンの刑に処しながらも、鹿之助くんにはこちらの表情が見えないように角度調整後、頭だけを持ち上げて「それ以上はやめろっつってんだろ」と

言いたげに下瞼を持ち上げる形で目を細める。

……ふうま君って、蛇子ちゃんからの猛アタックに気が付けないほど、鈍感メンズなんですけど……こういう気配の察知は早いので感心しつつも、同級生の方の蛇子ちゃんにももつと関心を向けて欲しいとは思う。

まあ他の生徒達のあの狼狽ぶり、今の鹿之助くんの信じられないと言った反応から、私が『成り行きで』昨日やらかしたことを聞かれるわけには行かないし、眞田先輩に加えて黒田先輩とも同時にやり合ったなんて暴れまわった話は。いち乙女としてされたくはない。

でも……鹿之助くんには、簡易爆薬を〈製作〉してカルティスト17人を〈爆破〉一網打尽にした女として認識されているかもしれないけど……。悪人を吹き飛ばしたのと、学校の先輩方とやり合ったことではきつとまた別の衝撃を与えかねないのは避けたかった。

「蛇子、室井先生の心中お察ししちゃうな……。数日前に元気に退院して行った日葵ちゃんが、その数日で戻ってきたら頭を抱えちゃうのわかるよ……」

「あ、ああ……多分、そういう意味で頭を抱えた訳じゃないと思うが」  
「おい、<sup>はて???</sup>今度、<sup>何か言いましたか?</sup>余計なことを言う<sup>か?</sup>と口を縫<sup>ふ</sup>い<sup>ま</sup>合わせるぞ」

今、お前が言った言葉。私は聞き逃さなかったぞ。ふうま君。

につこりと笑って〈威圧〉を込めておく。

「い、いや、なんでもない」

うん♪ 分かって頂けたようであるならば、もう何も言うことはあるまい。

「そ、そうだ！ 青空さん。話題が変わるんだが……桐生先生が青空さんと会いたいって言ってる……。今度の暇なとき、俺と一緒に研究室へ来てくれないか？」

「桐生先生……というと。室井先生が以前、話していた……私の身体の治療のために【魔科医療】を施してくださいました人ですかね？」

「ああ。間違いないだろう【魔界医療】を施せるのは桐生先生しかいないからな」

「でしたら、喜んで！ 結局、桐生先生とは退院したその後も、お会い

できなかったですし……お世話になったのにお礼の1つも言えてなかったもので……是非とも今度紹介してください」

「そうか……。それなら、俺も助かる。また時間のある時に声を掛けるよ」

「宜しくお願い致します」

そんな会話を交わしながら、ふと昇降口に備え付けられた時計を見上げると時計は8時10分を指していた。荷物を拾い上げたのちに揃って各教室を目指して、階段を上る。

その際新しい友人を紹介するも、4人は既にお互いのことを知っているようだった。どうやら学年総合授業の体育の体術に関する戦闘授業の際に顔を一度は見合わせたことがあるらしく、聞く限りまだ私だけが入院などの兼ね合いで他のクラス合同の戦闘授業に出席できていないらしい。いつかは参加してみたいと思う。

……

……

…

## Episode 44 『憧れの人』

お昼休み、久方ぶりに4人で集まって食堂でご飯を食べようと誘われたが……私は1人教室で売店購入したサンドウィッチをトイレの個室に籠城する形で頬張っていた。

それもそのはず。マスクで隠してはいるものの唇の端が裂けて、ひどい有様で到底見せられるような姿でもなかったからだ。……口を軽く開いた瞬間に、これ以上口が裂けてしまわぬように貼り付けていたテープが外れ、食べたサンドウィッチは鉄錆の味であったが……それでも痛みと共に腹は膨れたためヨシとした。……そして、この痛みは私のもっと強くならなければならないという戒めだと心に刻みつける。

サクッと人生初めての便所飯を済ませ、しばらくのあいだ3人が食堂から帰ってくるのを待つ。軽食を食べ終わった私はマスクを付けた状態で彼等を笑顔で出迎えて、ふうま君の教室に集まって雑談を始めるのだった。

……

……

……

「それで今回の課外授業はどうでしたか？ うまく行きましたか？」

「あー……うん！ まずまずだったぞー！」

「鹿之助くん……いつも『まずまず』って言いますけど、私としてはもっと具体的な内容を知りたいのですが……？」

適当な雑談で話が弾んだところで、いつものようにサラッと課外授業について触れてはみる。だがしかし、3人は今日も詳細を教えてくださいることはなかった。

私がこの課外授業についての話題を振ると鹿之助くんも蛇子ちゃんも、私からそっと目を逸らす。なんとなくしに触れられたくないのはその仕草から察することはできるが、ここまで露骨に頑なに教えてもらえないとなると知りたくなってしまうのが私の性。それに、これまでの言葉の言い回し具合や視線の動きを見る分に〈心理学〉の観点か

ら『触れられたくない』というよりも……彼等の中で何をどこまで話して良いものか迷いが生じていて、安牌をとった結果話せないと云ったような様子なのだ。

それに別段、彼等自身について話しにくいことを聞いているわけではない。私は学校行事の1種である『課外授業』について尋ねているだけにしか過ぎないのだ。

3人が居ないときに、一応親しくなったクラスメイトに対しても、3人がどこに出かけているのか。『課外授業』とは一体どのようなものか。どうしたら参加できるのかと色々尋ね回ってはいるものの『田舎町グンマーから離れた都心部に出かけて、何か色々状況に応じた活動をしている』というボランティア的な情報しか掴めず困っている。

うーん……。毎回、話の終着地点がこうなってしまうと私に情報を渡さないために口裏合わせをしているのではないかと勘繰ってしま

う。いやいやいや。3人は学生としての友達だ。そんな社会に出たときの会社で作る裏切り裏切られのビジネスストライクな交友関係とは違うのだ。よっぽど、何か、言えない事情があるのだろう。疑うなんて最低だ。

「青空さん……毎回、話しているとは思いますが、俺達の口から『対魔忍としての任務』については教えられない、教えてはいけな知られてはいけな決まり事機密情報になっているんだ」

「はあ……課外授業で出題される小テストの『公平性』を保つため……でしたっけ？」

「ああ。ため息をつかせてしまったって悪いが『一般人は知るべきではない情報』なんだ。……今回も諦めてくれると助かるんだが……」

「もちろんですよ。残念です。今の会話の流れならポロリと情報を口走ってくれそうな雰囲気だったんですけどね……」

「蛇子、日葵ちゃんのそういうしたたかなところ　ちよつと怖いかなー？」

ふうま君は前髪を触りながら、いつもの通りの流れを作り出していた。私が尋ねる。鹿之助くんか蛇子ちゃんがはぐらかす。ふうま君がシメるめる。これが前回と同様の流れだ。

私も片目を瞑りながら後頭部を搔いて残念そうに振る舞いつつも、3人の表情をつぶさに確認していく。鹿之助くんは話をよっぽど振られるのを避けたいのか視線を真下の膝に落としてこちらを見ようとせず、蛇子ちゃんは私の言葉に苦笑いしながら率直な気持ちをぶつけてくる。ふうま君は、毎度のやり取りに少し頭を抱えた様子を見せていた。

「なるほど。私がつと露骨なら情報を引き出せるというわけですね？ うわーん！ 鹿之助くんが日葵をいぢめるー！ 私に隠し事してるー！ わーん！ おしえて！ おしえて！ おせーて！ おせーてくれよお！ ……チラツ」

「……………言わないぞ。俺は言わないぞ……………」

「声が震えていますね。なるほど、ではもうひと押し——」

『もうひと押し』や『チラツ』じゃないんだが……………」

「日葵ちゃん…………。ふうまちゃんや蛇子じゃ口を絶対に割らないことを考えて、あえて規則と良心に板挟みにされた鹿之助ちゃんに尋ねているでしょ。…………既にそういう部分が露骨じゃなくて、したたかだつて言えると思うんだ」

「…………こちらの考えていること、そんなにわかります？」

「うん」

こうして今日も彼等が受けている「課外授業」について尻尾を掴むことはできない。しかし、いつかは「課外授業」について情報を掴んでやるつもりだ。

僅かに掴むことができた情報の中には好成绩を残すことができた学生には、なんでも「金一封」が贈られるようではないか。株の投資に金が入用なのだ。まあ学生に送られる金一封なんて高が知れているが、それでも好成绩を残すだけで軍資金を荒稼ぎできるのだ。この手を逃さないわけにはいかないだろう。

「では話題を替えまして……………そういえば、お三方つて1年生の『神村さ

ん』と3年生の『穂稀　なお』先輩『死々村　狐路』先輩はご存じだったりしませんか?」

「……!」

鹿之助くんは僅かな反応があったが、まだ下を向き続けていた。これはかなり私を警戒してらっしやられると見受けられる。大丈夫ですって。私が隙を生じぬ二段構えを鹿之助くん達に放ったことはないでしょう?」

そんな鹿之助くんはさておき、残った2人は顔を見合わせている。この様子だと2人はそこまで3人の情報を持っていなさそう。私が視線を外すと、少しだけ顔を持ち上げチラリと視線を向けてくる鹿之助くんは何か知ってそうだが……。私が鹿之助くんの方に顔を向けると、また俯いてしまう事からまだ警戒しているようだ。……聞き出すことは厳しいか。

やはり、ここはクラスの1つ1つに顔を出して行って直接相手を探す方が早いかもしれない。

ただ……。私には自業自得な噂もあるが、良からぬ噂が立ちすぎてもあるし、おまけに今はこんな顔だ。二車にしゃ骸佐がいざの取り巻きの中には3年生の姿もあった。私が出向いてこれ以上の良からぬ事態の発生および更なる噂の派生は避けたかったのだが……。

「……」

「神村さんっていうと、『神村かみむら　舞華まいか』さんのことか?」

「おそらくですけど。他に1年生で神村さんという方がいらっしやらないのであればその方だと思われれます。ふうまくんはご存じなのでですか?」

「ご存じも何も、鹿之助の奴だって知っているぞ。鹿之助の奴なんだけどさ、朝の昇降口でも話した体術のクラス合同授業では神村さんを見掛けるといつも見つめてさ。どうやらぞっこんらしくて好す——「ちよっと!」　ふうまちゃん?!?!」

急いだ様子で席を立ちあがって大声を出した蛇子ちゃんに、ふうま君は腕を引っ張って廊下へ強制的に連れていかれる。

何故、俯いたままなのか判明した鹿之助くん……ふうま君の言



葉が “課外授業” について、しつこく聞いてくる私に対するカウンセターの要領で突き刺さり、衝撃だけが走った私の2人だけがその場に取り残された。

ひとまず……ありがとう蛇子ちゃん。最後に聞こえてきた一文字は蛇子ちゃんの声で書き消されたような気がした。したと思いたい。

余計なことを口走ったので、ふうま君の口は縫合予定ですが……今日は蛇子ちゃんに免じて許す。それにふうま君は、その、疎いから……きつとあれはカウンセターなんかじゃなくて、何も考えていない昼行燈ムーブをかましただけだと……思う。

……でも次は首の骨を折って死ぬほど疲れさせる。

「……」

「……」

「……えつと。鹿之助くんは神村 舞華さんを御存じで……よく見つけて……らっしやられる……？」

おかしい私は日本語を喋っているはずなのに、脳が日本語認識せず別言語を喋っているような違和感に捉えられる。一回落ち着くべきだ、私の脳みそ。まだ思考停止するには早い時間なのに思考がうまくまとまらない。足元をすくいあげられたかのようなめまいがし始める。

目が白黒して、普段よりもぱちくりと瞬きの数が増えてしまう。心臓が不整脈のように小刻みに震えているようなそんな気がする。

「……えつと？」

「……えつとだな。ふうまの言っていたのは、別に俺は神村さんのことが好きってわけじゃないんだ。……俺の憧れってだけでさ。日葵もクラス合同の体術の授業に出ればわかると思うけど、神村さんって男子より体術に長けていて すっげー強いんだよ。日葵には話したと思うけど俺の将来の夢って正義の対魔忍だから 対魔忍としてこ  
うありたい存在でさ……」

「な、なる……ほど？」

両目を瞑って頭頂部をかく。うん、そっか。憧れ。憧れね。うん。うん。憧れ。うん。うん。

あ、憧れかあ。た、たはは……。憧れ。うん。うん。

「ご、誤解するなよ?」

「は、はは、は、大丈夫ですよ。うん。分かっていますって……。うん。あの……。その神村さんのところまで、連れて頂いて貰ってもよろしいですか……。?」

「お、おう! な、なあ。なんか日葵ちよつと様子が変わだぞ……。?」

彼は眉をひそめて、平常心を保とうとするも半分機械のような声しか出ない私の顔を覗き込む。

……。うん。神村さん。憧れ。うん。うん。うん。憧れ。うん。息切れ、うん。

「……。大丈夫ですよ。低酸素血症の症状ですね。今、呼吸を整えます」  
大きく深呼吸。

そう、神村さんは鹿之助くんにとっての憧れである存在。落ち着け。テメエ<sup>わたし</sup>は鹿之助くんの何だ? まだ何でもないだろ? 取り乱すな。……。だけど、鹿之助くんを将来パトロンとしてサポートするためにも、彼が将来目指している存在について理解を深めておくべき必要性があるだろう。そうだ。もしも彼が道を違<sup>たが</sup>えたり、道を見失ってしまったら神村さんを思い出させるため……。ぐっ……。……。思い出させるためにも……。一目。一目見て置こう……。そうしよう。

「案内をお願いしますですよ。一目見てもいいですか?」

「おう。その、すっごく体調が悪そうだぞ?」

「鹿之助くん……。これは不正生理<sup>女の子にはよくみられる普通の</sup>出血による貧血の一時的な症状です。気にしなくて大丈夫です」

「そ、そうなのか。でももし本当に辛くなったら教えてくれよ……。?」

真田先輩に訓練してもらった翌日なら猶更さあ」

「ははは……。鹿之助くんは優しいですね。そういうとこ、好きですよ」

「はははっ! 正義の対魔忍<sup>ヒールロー</sup>を目指しているんだから、当然だろ?」

……。うん。うん。今は、その不安が払拭された曇りなき笑顔を見れただけでも満足です。うん……。

……

⋮

## Episode 45 『校舎裏にて』

「あの人が神村さんだよ」

「あの、人が……？ 神村さん……？」

私は鹿之助くんに連れられながら、校舎裏までやってきていた。

……彼女が教室ではなく、こんな場所にいると即知っている以上……。彼は……。彼は彼女のことが好きなのかもしれないが、今は私が果たさなければならぬ目的のために感情を抑える。

物陰から顔の半分を覗かせて鹿之助くと2人きりで覗き込み、私は私が探していた女の顔を確認した。

……視線の先には1人の女子生徒が壁に寄りかかって、未成年にも関わらずタバコを吸っていた。髪は鮮やかなオレンジ色をしており、その毛先は地面に付くほどの長髪でどこどころ跳ね上がった癖っ毛な様子が見受けられる。どちらかと言えば、昨日。拳を交えた眞田先輩と雰囲気似通っており、ハチマキと特攻服、エナメルブーツ、そしてバイクが似合いそうな気の強そうな女性……と言った雰囲気纏っている。

光彩はピンクトパーズ色で やや吊り上がった目と眉。何よりも彼女の特徴として挙げられるのは魔乳まにゅうと称してよいほどの巨乳だった。あれは陽葵ちゃん……蛇子ちゃん以上の大きさがあるように見える。陽葵ちゃんが夕張メロン級の大きさとすれば、こっちはスイカ級と言った方がいいだろう。

Hey. 尻。お前の検索結果は間違っていないかったよ。

『爆乳抜きかゲームかみたいな世界対魔忍世界に住んでる貧乳わたしはどうすりやいいですか？』

……いつかは大きくなるはずだ。はずなんだ……。隔世遺伝的な観点から見ても、私の将来は保障されているはずで……。

やめよう……。凄まじく虚しくなってきた。そう。将来的には『青空 日葵』だって大きくなる。まだ……。まだ、多量の女性ホルモンの発達が来ていないだけであって……。『わ青空 日葵』だって大きくなるもん。隔世遺伝の可能性を秘めた『水城 ゆきかぜ』とは違うも

ん。

「おい、さつきからチラチラこつちを見やがって、俺に用があるってなら堂々と来やがれ！」

「……………」

彼女がこちらを見ながら睨みを利かせてくる。急いで首を引つ込めるが、鹿之助くんは目が合ってしまったらしい。憧れの存在に声を掛けられたからか、それとも彼女の〈威圧〉に萎縮してしまったのか分からないが、緊張してその場で硬直してしまう。

……こりや駄目そうだ。彼をこのまま、お姫様のように抱き上げて逃げるのも良いが……。今回は鹿之助くんの憧れの人の偵察……。…と、『雨の降る中のみ出現する洋館』に行くことを止めるための有効的なアプローチ方法を探ることが目標だった。だが彼女がこちらを認識してしまい、その状態で逃げ帰るのは芳しくはないだろう。陽葵ちゃんの口ぶりから、主催者ではないだろうが……。彼女のタイプからグループが解散したとしても1人でも行ってしまいうに違いない。

まあ、だからと言ってこちらが止めたとしても「はい、そうですか」と二つ返事で調査を取りやめてくれるタイプにも見えないが……。少なくとも鹿之助くんがいる状態でいろいろと話すより、彼が居ない方が腹を割って話せることに違いはない。

「出て来ねえってんなら、俺から——」

「…………おやおやおやおや、これは失礼致しました。あなたが『神村 舞華』さんですね」

「おつ、お、おつ、お、お、て、てめえは……………」

小声で鹿之助くんにお礼を言っただけで表校舎側の奥に追いやる。それから校舎の角からジャージのファスナーを完全に開き紫色の肌を露出させた状態で、利き手を真っ平な胸に手を添えて、もう片手ではマスクを外して裂けた口を見せ口角を上げながら姿を現わした。丁度、彼女は壁に寄りかかるのを止めて、こちらに殺気を放つ戦艦クラスの眼孔を携えながら数歩進んだところに居る。

だが彼女は姿を現わした途端、瞳を大きく開いて一歩、二歩、三歩と後ずさった。……これは奴も私の噂を知っているパターンか。反

応から察するにたぶん碌な噂じゃないことは確かだ。

「お初にお目にかかります。『青空 日葵』と申します。実はあなたにお会いしたくて、友人に連れて来てもらっていました。驚かせてしまったのであれば、申し訳ございません」

「べつ、別にビビッてねーよ！ ただてめえのツラがあまりにもつ……。あまりにもナスみたいでひどいから引いちまったただけだ！」

「おやおや。おやおやおやおやおやおやおやおやおやおやおや」

「それで俺に何の用だよ」

彼女はそのまま、先ほどまで寄りかかっていた定位置に戻ってタバコを啜えたまま、こちらを睨みつけてくる。あまり友好的なタイプでもなさそうだ。先ほどまでのリラックスした状態とは異なり、彼女の形相と姿勢からこちらを警戒しているようにも見える。しかしその様子は何処か狼狽した様子で、第一印象はこちらの方が勝<sup>まき</sup>っているようだ。

「今週の週末に速水 心寧さんと、日ノ出 陽葵さん、3年のなお先輩とココロ先輩、あなたの5人で『雨の降る中のみ出現する洋館』に遊びに行くというお話を耳にしまして」

「あ？？ なんだア？？ てめえ、先公にチクろうって気か？」

「いいえ？？ その気なら初めから恐ろしい蓮魔先生辺りに報告を行っています。ですので、今回お会いしに来たのは洋館へ向かわれることを考え直して頂きたく思っただけです」

「は？」

「雨の日の夜に森の中に入るだなんて、滑落の危険性や遭難、雨風に晒されて低体温症で凍死の危険性があります。洋館の調査を取りやめて頂けませんか？」

なるべく丁寧な言葉遣いをしながら、悠々と近づいて彼女に理論的な調査への危険性を告げて解散を促す。本当であれば彼女の様子だけ見てさっさと引き上げ、情報を集めた上で止める予定だったのだが……こうなってしまった以上、仕方がない。

「へっ……。ンだよ。非常ベルをノリで押し、頭にカバンを被ってギターを奏でた挙句に他クラスのあらゆるガラスを頭で叩き割るやべ

え女が入学してきたって聞いたけど、所詮はうわさってことがよく分かったぜ！ 蓋を開けてみりゃあ、とんだチキン野郎じゃねえか」

うん。本当に酷い噂だなあ。誰がそんな噂を立てているのだろうか。

「……聞いては頂けないでしょうか」

「そりゃ無理な相談だな。日ノ出には『幽霊なんてぶっ飛ばしてやる』って言っちゃまったし、ここでシツポ巻いて逃げるなんて そんなシヤバいことなんかできつかよ！ 俺は一人になっても行くぜ、その首のない亡霊をぶっ飛ばしてまやかしてことを証明してやつからな！」

予測通りこれは何を言っても無駄なタイプだ。むしろ こちらが 静止するだけ激しく燃え上がって絶対に現場へ行くことを諦めることはないだろう。

……ステゴロで無理やり病院送りにしても良いと思ったが……。あの角で、鹿之助くんが私の事を心配して待っていないという保証はどこにもない。彼には憧れの人が友人にボコボコに伸されるなんて 光景を見せるわけには行かないのだ。

それに昨日の今日で面倒ごとを引き起こすのは……少し面白そう だとは思ってしまったが、蓮魔先生の仏の顔も三度までだろう。次は 黒田先輩同伴の元、本当に殺されてしまうようなそんな気がする。

「……かしこまりました。お昼休みの貴重な時間を割いて頂きありがとうございます」

彼女に一礼して、マスクを着けなおし、ジャージのジッパーを引き上げそのまま立ち去る。

チツ……命拾いしたな。

そうだ。私はこの限られた貴重な時間をこれ以上余計な事に割く訳には行かないのだ。

それから……。やはり途中で私の事を心配して待っていてくれた 鹿之助くんと共に、次の授業の準備のため教室まで戻ってきた時この 時点でやはり彼女との接触は誤った判断だったかもしれないと後悔する。

……確かに彼女はこちらが否定すれば否定するほど燃え上がるヤンキータイプかもしれない。だが、あのタイプは彼女より上の立場の人間。教師や親のような存在ではなく、彼女が自分より格上だと慕う存在からの鶴の一声が掛かれれば、その矛先を丸く収めたかもしれない……と気づいたのだ。

また私の言葉によって彼女は『雨の降る中のみ出現する洋館』へ向かうことの決意を固めてしまった。その状態で、彼女より格上の存在に行くことを止めさせるように仕向けても、よほど彼女が尊敬するような存在でもない限り、彼女は意地を張ったままで首を縦に振ることはないだろう。

それどころか、今回 私が彼女を窮地に追いやってしまったかもしれない。このまま『穂稀 なお先輩』『死々村 狐路先輩』に会いに行き 解散を促し、彼女たちが解散したとしても彼女は先ほどの言葉通り『雨降洋館』目掛けて突撃してしまうだろう。単独で危険地帯に向かうことは、集団で雨の降る森の中に入るよりも危険な行為だ。私が余計なことをしてしまったことには違いない。何とかして彼女を安全に追い返す方法を考えなければ……。

確実なことは、洋館に向かうまで時間はまだ残されている。洋館に向かうメンバーは現状5人。先輩方2人には神村さんと洋館に向かつてもらうものとして、何としてでも陽葵ちゃんと心寧ちゃんには諦めてもらうように仕向けよう。

3人なら、きつと警戒心も高まって1人だけはぐれて遭難してしまうような状況は防げるはずだ。

……そして現地に紫先生を呼び寄せて置いて侵入を止めてもらうと……。  
……それにしても、鹿之助くんは一体彼女の何処に憧れているのだろうか？

確か彼は彼女のことを『正義の味方ヒーローとしてこうありたい』と話してはいたが……。……うーん？ 現状の情報としては、私が知りえた『神村 舞華』はただの反発心の強いヤンキーなんだよなあ……。アレだろうか？ 彼はどちらかと言えば、かわいい系の男の娘だ。自分



と相反する屈強で強い女に憧れているとか？　そういうのだろうか？　あるいは彼女の言動から、自分の放った言葉は一貫して成し遂げる責任感とか……？　うーん……。もう少し彼女に関して探る必要がありそうだな。

現状、おっぱい、ヤンキー、おっぱいぐらいしか頭に入ってこなかったが。やっぱり、おっぱいか？　……おっぱいなのか？　男の子はおっぱいが好きだもんな！　わかるよ！　前世で痛いほどよく知っている！　どいつもこいつもおっぱい星人め！　……でも、本当におっぱいだとしたら勝てねえなあ……。

……最近、儲けた株のお金を使って女性ホルモン剤を打ちに行こうかな……。

……  
……  
——放課後——  
……

「えーっ！　日葵ちゃん、今日は一緒に帰れないの!？」

「えへへ。すみません。今日も学校にお泊りなんです。ほら、こんな顔じゃあ……お母さんやお父さんに心配かけちゃうので……」

「うう……。懸賞金が入ったから、今日こそ日葵ちゃんに稲毛屋のアイスを奢ろうと思ったのに……」

放課後　いつもの4人で教室に集まるも私が一緒に帰れないことに関して、残念そうに蛇子ちゃんが机に胸部を突っ伏してシクシクと泣きそうな顔をしていた。それでも3人を昇降口まで見送ることができるため、廊下は行動を共にして普遍的な会話を交わす。

……  
……  
「それじゃあ、また明日ね!」

「じゃあな　日葵!」

「安静にしろよ」

「はい。また明日。明日は我が身ですからね！ 皆さんもお気をつけて！」

別れ際、半身をこちらに向けて手を振る3人にこちらも大手を振って笑顔で見送る。

……3人が見えなくなつたところで私も真顔へと戻つた。ふと背後を振り返ってみれば室井先生が廊下の端からやや険しい表情でこちらを見つめている。流石に夜は逃げられそうにもない。だが地下へ降りて、風呂に入つて病室の空きベッドで休むまでもう少し私には時間が残されてもいる。

ゆえにこの残された時間を有意義に使い、少しでも『雨の降る中のみ出現する洋館』について調査するため。探索者として。室井先生からは逃げるようにして。学校に備え付けられている広大な図書館へと走り出した。

だいたいこのぐらいの怪我は病院なんかに入らなくても、魔界医療と自然治癒力の併用で十分に治るのに室井先生は大袈裟なんですよ！  
大袈裟！

……

……

…

「青空ア……」

「すみません。蓮魔先生。本当にすみません。廊下は走りません。歩きます」

「それ以外にも改める部分はあるだろう？」

「すみません。二度と階段の手摺りを滑り台の代わりにもしません。すみません。階段は踊り場での衝突事故を避けるため、緩やかに左側通行で使います。すみません」

「……『すみません』を連続利用して本当に反省しているのか？」

「申し訳ございません」

「違う、そういうことが言いたいのではない。まったく。お前という奴は——」

「はい……すみません、はい、おっしゃる通りでございます……」

本当についてない。廊下を全力ダッシュして、階段に備え付けられた手すりを滑り降りているところを蓮魔先生に見つかってしまったのだ。寄りにもよって、こんな急いでいるタイミングで。

トホホ〜！ 生徒指導はもうこりこりだよお〜！

## Episode 45—Tips 『雨降洋館』

◇『雨の日の夜に出現する洋館』

五車学園の北に位置する森の中に現れるとされる洋館。

タイトル通り『雨の降る中のみ』出現し、その姿は廃校であったり、城郭であったり、その建物の造形に関する目撃情報は多種多様。しかし、噂される際に最も使用される形態というのは古ぼけた洋館らしい。

なぜ雨の日に限ってそれらの建物が出現するのかは、いまだ解明されていない。原因は遭難者による集団幻覚によるものとされていたり、それらの建造物がその雨の降った日に何らかの形で破壊され、当時の人の思念や亡霊たちの思いが強くなつた雨の日にのみ出現するのだと言われている。雨の重みで草木の形を変形させ木陰がそのように見せているという説もあるし、理由は不明なものの魔族が五車町を侵略しようとする中継拠点として拠点を構築している……なんという話もある。とまあ、以上の通り理由は多岐に渡っている。

但し探索した情報を精査したところ、確実なことが1つだけわかった。複数人でこの洋館を目視した場合、その形状は、統一された1つの姿にしかならないという事だ。

◇『洋館について』

江戸時代 天保6年 吾妻国（現五車町近辺）で、かつて大？栄を遂げた商人がいた。彼は当時、鎖国中であつても貿易交流を行つていた異国（オランダ）に渡り、そこで嫁を貰つた。その嫁を連れて渡日……もとい帰国し、祖国を離れた嫁の為に西洋式の洋館を建てた事が、悲劇の引き金だったようである。

この大繁栄をした商人だが……帰国してからというものの病を患い、幸せな家庭としては長くは続かなかつたようだ。

そう。ある日、病かそれ以外の要因かは不明なままだが突然死去してしまつたそう。この時の死因だが、商人の金銀財宝に目がくらんだオランダ人の嫁が、夫の財産目当てで毒殺したと村人達に噂された

そうだ。

また商人が死去した同年の11月、森の奥深くに存在し人目に付かないことが災いして、寒さと飢えを凌ぎ、財産を強奪するためにある賊”がその洋館を襲撃したらしい。

洋館側は護衛を雇ってはいたものの戦力は賊の方が勝っており、冬が一層厳しくなる12月には賊に落とされた。オランダ人の嫁は賊たちによって散々嬲者・慰みものにされ、出産した子供は人買いへ出された。オランダ人の嫁も、賊の子種で妊娠できなくなったところで斬首され、その死体はしばらくの間は死姦の材料とされたそうだが……。賊たちの為の性処理道具として利用できなくなったあとも、埋葬されることはなく洋館へと通じる三ツ辻へ地元の農民たちを威圧する目的で飾られ、誰にも弔われることなく獣や犬畜生に食い荒らされて放置されていたらしい。

その死体が飾られた当時、オランダ人の嫁の首はなかったという。

賊の頭領の名は 壁田かべた 鋼人こうびと。

藩主が当時この吾妻国近辺を根城としていた魔に対抗する忍びなるものである”対魔忍”を討伐メンバーに加えた本格的に掃討作戦である江戸時代 慶応2年まで、その洋館にて31年間の長きに渡り、のさばったとされている。

また付近の住民は、この屋敷のことを『鋼人屋敷』こうびとやしきと呼称していたらしい。

◇『ドレスを纏った首のない貴婦人』

天保6年に商人が異国で娶り、渡日してきたオランダ人女性の亡霊とされている。

享年は20代。天保6年 11月の賊の襲撃の際、斬首され死してなお嬲られ弄ばれたらしい。

夫の財産に目がくらみ、毒殺したとの噂が残されているが真偽は不明。裕福な生活をしている彼等に農民たちが妬み、風潮した出まかせの噂説が濃厚とされている。

生前は無残に嬲られ、死後も粗末に扱われたということから怨念化

し、弱点である頭部を失った今、洋館に入るものを塵殺（みなごろし）にしようとする躍起になっている。紛失した頭部を探しているとの噂話が現代の今ですら絶えることはない。

また強姦され、斬首された際の死に装束が、赤と黒と白を基調とした中世ヨーロッパ時代のクラシックプリンセスドレスであったようであり、その衣装で不用意に洋館へ侵入してきた憐れなものを悲観するような悲鳴とも笑い声とも捉えられる叫び声を上げながら追い回すらしい。

◇ 『壁田 鋼人』

かつて吾妻国にて、猛威を振るっていた賊。

最期は藩主の軍が放ったとされる火矢の雨によって焼け落ちる洋館と共に亡くなったとされているが、その死体は見つかっていない。

彼に関しては様々な逸話が残されており、

・『空に浮かぶことができた』

・『藩主の武士を口先一つで同士討ちにさせた』

・『人間の部下の他に、付喪神の魑魅魍魎を手駒として加えている』

・『対魔忍でも歯が立たず、壁田の苗字にふさわしい、恐ろしく頑丈な（火縄銃や日本刀で切り付けても死なない。血の一滴すら零さない）肉体を持っていた』

・『側近の護衛として10フィートもある顎が4つに裂けた猿のような巨大な黒い人を従えていた』

・『血を好み、捕らえた忍びの女を拷問に掛け干からびるまで啜った』

・『不老不死であった』

・『第六天魔王 織田信長の転生した姿（『織田 鋼人』と呼ばれた）』  
・『織田ではなく織田と呼ばれていたのは、藩主の心を折ったという逸話が残されているから』

との文献が今も残されている。

大？ 栄した商人よりも、名や逸話が残るとはなんとも皮肉である。

◇『五車町新聞に載った事件（15年前）』

五車学園の学生6人が、学園の北の森で失踪したというもの。

五車学園の教師や警察官総出で捜索活動を行い、茂みの中で身を潜めていた学生1人のみが発見され他5人は依然失踪したままである。  
（現在は死亡扱い）

当時の事件の際。保護された学生は『洋館に肝試しに友達5人と出かけた』と証言しており、その6人の中で唯一生還することができた学生は当時の出来事に関して

・『首のないドレスを纏った貴婦人がずっと俺を追いかけてきた』

・『洋館は生きているようで、壁がうねっていた』

・『出口である玄関の扉を開けたはずなのに、扉を開けたら別の部屋だった』

・『貴婦人は人の首を簡単に撥ねることのできる鋭利な鎌を持って、目で捉えられないほど素早く、恐ろしい力であらゆるものを刈り取った』

・『友人は食卓に乗った蟲の死骸を美味しそうに食べていた』

・『貴婦人は最初は泣き叫んでいるようだったが、自分が館から逃げた時は品の無い下劣な笑い声を響かせて嘲笑っていた』

・『みんな死んだ。首のない貴婦人に頭を奪われて殺された』

という証言を残している。

その後も行方不明者の捜索は引き続き行われたが、捜索隊の中から行方不明者が出る事態に陥ってしまったため捜索は中断。行方不明者は死亡したものととして処理された。

五車学園は今後の対策として、北の森に出現とされる洋館には絶対に近づかないようにと生徒たちに注意喚起をすすとしている。

◇『生存した五車学園の生徒について』筆：青空<sup>釘貫</sup> 日葵<sup>神葬</sup>

残念ながら不慮の事故に巻き込まれ故人と化しており、あの時洋館で何があったのか話を聞きに行くことは叶わず。

彼の親族を見つけ出して、形式上の話を聞かせてもらったが……そ

れでも最低限わかった事として、彼は生還してから4カ月もの間。自室は常に煌々と電気を付け、恋人の遺品であり託された御守を握りしめ、室内が暗闇に閉ざされることを極度に嫌ったそうだ。また光に照らされている間も寝ている時と、食事を食べている時以外は記事にも書いていた証言を永遠とぶつぶつと早口で繰り返すつと喋り続けている。とても正気であるとは言えない状況であつたらしい。

しゃべり続けていた内容については親族に尋ねても、親族の方も既に15年前の出来事ということもあり記憶は風化してしまつて進展するような情報は得られなかつた。この情報に関しては、新聞記事に掲載されている情報の方が鮮明な記録として残されているようだ。

御守に関しても実際に見せてもらったが、〈鑑定〉の観点から言わせてもらえば、パワーストーンや数珠玉のような魔術的なアーティファクトでもなさそうに見えた。

〈クトゥルフ神話〉知識の観点から見てもあの御守にどんなご利益が秘められているのか見当も付かない。

ひとまず『遊戯用』として市販販売品で購入したクトゥルフ神話TRPGのサプリメント『クトゥルフ2015』掲載のアーティファクト記載形式に乗っ取って情報を記録する。

◆『御守』筆：青空<sup>釘貫</sup> 日葵<sup>神葬</sup>

名称『御守』 カテゴリー『護符?』

外見、状態

巾着：ボロボロ。使用劣化による皮脂や汚れ、血痕で黒ずんでいる。

中身：梵字のような文字列が書かれたプラスチックによく似た板。

材質、大きさ

巾着：布製。御守の口が開かないようにする紐は切れている。

中身：プラスチック類の板?、クレジットカード大。

製作者・製作年代『不明』

出自・発見場所『生還した学生の恋人の遺品』

威力『なし』 耐久『粗末に扱えば破壊の危険あり』 希少度『不明』

特殊能力・呪い『不明』

来歴『15年前の雨降洋館で生還した学生(故人)が所有していた



もの』

一言『中身に関しては、出されたお茶の継ぎ足しで親族が席を外した間に勝手ながら拝見し、得た情報。御守（巾着）に直接触れて良いかどうかは親族の了承を承諾済』

◇『実地調査』筆：青空<sup>釘貫</sup> 日葵<sup>神葬</sup>

陽葵ちゃんに晴れ乞いをしてもらい、よく晴れた日。

午後の授業を休み、新兵器である改造を施した消火器を片手に直接現地に赴き、その地域の近辺調査を行う。図書館で調査した文献をもとに 三ツ辻の先。その洋館が出現するであろう場所を発見する。

発見はしたものの、その場は大火事で消失したチャペルのような大量の瓦礫が目立つ、瓦礫の中に立ち入って探索する必要もないと思うほど……どこにでもありふれた、取るに足らないような……膝下まで草が生い茂る残骸の残る原っぱであるように感じられた。一通り瓦礫近辺の森の中の散策は済ませたが……あの場所を除いて、その他の場所に洋館を立地させられるような十分なスペースがあるようには考えられない。

念のため近くの木々の表面に、星型の中央に横幅楕円の目玉のような記号である旧き印<sup>エルダーサイン</sup>を刻んでおく。この印は私がここに来たという証拠として残すものであって、魔術的な効果は含まれてはいない。

また当日、私の制止行為が功を成さなかった場合に備え、視界の悪さによる遭難の危険性を事前に防ぐためあらかじめマツピングを行い、滑落死の予防のための警告色に塗装した簡易柵の設置を済ませる。

更に探索・調査を進めていく過程で、森の中で赤いバンダナを巻き付けた熊や蛇の骸が転がっているのを発見した。蛇は餓死したような状態で、熊は一見した様子では餓死のようにも見えたが……カラカラに干からびたような状態で見つけられる。

熊が学園近辺に存在していることも十分致命的な脅威情報ではあるが、干からびて死亡している状況も非常に珍しい。餓死が要因であると仮定するなら、山に食べ物が無ければ人里に降りて来て何かを探

して食べるのものだと思っただが……。  
……とにかく、この森では何かが起きているのに間違いない。

◇『探索を終えて一言』筆：釘貫 神葬  
話のスケール規模がおおよそ対魔忍世界基準<sup>後尋確定</sup>で草。

鬮り殺しにあったオランダ人の貴婦人には悪いが生々しい展開に  
大草原。

だが草を生やしている場合ではない。これは先生方に報告をして、  
何としても止めるべきだ。この場所には一般人の学生が立ち寄って  
良い場所ではない。

しかし、個人的に引つ掛かる部分もある。ここは対魔忍世界である  
こと……つまり、エログロ凌辱NTRヒヤツハー！な世界だ。首のな  
い貴婦人に馬乗りにされてえつちな搾乳・搾精プレイの強要……もと  
い、絞り取られたという情報が何処を探しても見つからない。

……やはり、アレか？

世間一般に流布されるニュースとして、『えつちなこともされまし  
た！』なんて、変態で嗜好きの馬鹿どもを引き付けるような情報は添  
削したのだろうか？ それとも本当にそんなことは無かったのだろ  
うか？ 謎は増えるばかりだ。

P s : 図書委員<sup>あのハゲ</sup>。次、図書館内以外で見つけたら消火薬液で雪だる  
まにしてやる。

ヘッドホン両耳で閉館の音楽に気が付かなかった私も十分に悪い  
とは思うが、閉館時間と共にアナウンスもせず<sup>???</sup>に図書館内の電気を消  
灯して、出入り口の扉を施錠する奴がいるか???

あってよかった非常ベル。教えて貰ってよかった非常ベル。あり  
がとう非常ベル。また頼むよ非常ベル。ズツ友さ非常ベル。

## Episode 46 『調査前日』

陽葵ちゃん達が『雨の降る中のみ出現する洋館』へ調査しに行く前日の放課後。

ついにほほほ顔の痣や唇の裂傷が治った普通の顔で、陽葵ちゃんと心寧ちゃんの2人を呼び出し校舎裏で待つ。

手には2人が諦めるようにと祈りを込め『雨降／＼鋼人洋館』について調べ尽くした事前情報資料を手にとって。

「やつほー！ 日葵ちゃん！」

「こんにちは。陽葵ちゃんから聞きました。私達と一緒に『洋館調査』に参加されるんですね。……真田先輩と渡り合っていた日葵ちゃんが一緒にあれば、更に安心できます。明日はよろしくお願いします」

二人は約束した時間通りに校舎裏へと姿を現わす。

この場所は神村さんや他の不良共のテリトリーとなっている。私を訪れた時には既に先客が居たのだが……。私がこのスペースを貸して欲しいと頼み込んだところ彼等は快く明け渡してくれた。また普段なら前述の理由から他の学生生徒は近寄って来ないような場所ではあったものの……。洋館への調査ということで、神村さんと面識のある陽葵ちゃんと心寧ちゃんは私の誘いに渋ることなく姿を見せてくれた。

陽葵ちゃんは、また私を喜ばせる為か制服の上にあのキマったライダースジャケットを羽織り、初めて出会った時のような笑顔を浮かべて大手を振っている。

一方、心寧ちゃんの方は極めて無表情であったが、ここである時には気が付けなかった彼女の容姿に気が付けた。それは彼女の両足だ。彼女の両足は膝より少し上部の位置から足先にかけてすべての部位が義足装具が付けられており、側面には金色の人工筋肉のような筋が歩くたびに伸縮しているのがわかる。

……彼女は足が悪いのだろうか？ だが、そうだった場合、真田先輩と黒田先輩の大乱闘が発生したとき彼女はどうかやって、その足の悪

さで瞬時に出口まで辿り着いたのだろうか？

……否。今はそんなことは重要じゃない。足が悪いのであれば、なおさら雨の日に森の中へ調査など向かわせるべきではない。

「……」

こぶしを握り締め、芽生えたばかりの友情を踏みつぶす覚悟で陽葵ちゃんに向き直る。

「……う？ 日葵……ちゃん？ なんだか、顔が怖いよ……う？ ほら、いつもみたいにニコって笑ってよ！ 私、日葵ちゃんが笑う顔好きだし、日葵ちゃんが笑うと私も元氣付けられ——」

「——単刀直入にお話します。陽葵ちゃん、心寧ちゃん。悪いことは言いません。直ちに明日の『洋館調査』を取りやめてください」

「えっ……日葵ちゃん？」

「……」

「あなた方がこれから向かおうとしている森は熊も居るような危険な場所なんです。道は泥でぬかるんで滑りやすく、視界は雨と草木で視界は最悪。さらに滑落の危険があつて、お二人が想定しているよりも人間という種族は脆く、たった1mの高さから落ちただけでも簡単に死んでしまうんです。遭難したら雨風に晒されて凍死してしまうような場所なんです。お願いですから、『洋館調査』に行かないでください」

陽葵ちゃんは私の言葉に狼狽するかのように両手を胸元に当てて内股気味の立ち方になる。一方、心寧ちゃんはというとジト目の無表情で感情を読みづらく何を考えているかわからない。だが、ここであるとしてでも諦めさせなければ悪い未来が訪れてしまう。そんな予感がしたのだ。

「……。……。……わかりました。そんなに危険な場所であれば考え直します」

「えっ!? 心寧ちゃんも!?!」

「!」

「ご心配をおかけしました。陽葵ちゃん、行きましょう。やはりあの場所は本当に遊びに行つて良い場所か、ちゃんと検討するべきところ

だったんですよ」

「えっ。えっ。ま、待ってー！」

「……………」

……………

しばらくの間、彼女の反応に拍子抜けしてしまいその場から動けなかった。その場に茫然と1人取り残されることになる。

彼女たちが最初の制止で諦めなかったとき用に作成し、握りしめていた資料が手からバラバラと落ちる。足元にそれらが衝突したところから我に返ることができた。既にその時には彼女たちの姿は校舎裏からは消えていて、私一人だけが立ち尽くしているような状態だった。

まさか。まさか、こんなにも心寧ちゃんが話の分かる子だったとは想定しては居なかった。私はてつきり神村さんのように反発してくものかと睨んでいたのだが……………。

何がともあれ〈言いくるめ〉や〈説得〉することもなく丸くは収まったのだ。

落として飛散してしまった資料を拾い上げる。

今は陽葵ちゃんと心寧ちゃんの事よりも残り3人を止めに行くべきだが……………。私1人で3年生の教室に遊びに行くのは些か心細い。だからと言って最も親しい3人の誰かに付き添って貰うというのは……………悪くはない。悪くはない案であるが、話を聞いた友人達が『洋館調査』の話に興味を持たないとも限らない。

それに昨日の段階で洋館調査に同行する先輩2人について一通り調査はしたものの、人柄に関する情報を掴むことは叶わなかった。最低限わかった情報が『穂稀 なお』先輩の性別は男、『死々村 狐路』先輩の性別は女……………それぐらいだ。具体的な性格が掴めなかった以上、神村さんのように反発してくる可能性だって考えられる。

……………ゆえにこの状況下や時間帯を考慮して私が行うべき適切な行動は……………

……………

……………

……

「何!? 明日『森の鋼人洋館』に立ち入ろうとしている生徒がいるだど!?!」

「はい。3年生2人と、1年生が1人。計3人です。18時30分に五車学園の裏門へ集合して、19時頃には現地で集合したメンバーでそのまま入ると……」

「はあ……あの洋館には近づいてならないと入学当初から話していたはずですが……いかがいたしましたでしょうか、蓮魔先生」

……職員室に赴き、蓮魔先生への密告をしていた。

本当は放課後などではなく、早め早めの昼休みにでも密告をするべきだったのかもしれないが、昼休みは色々とごたついていたことや蓮魔先生に会えないことも重なって頼ることができず……。また私の中では、話を大ごとにはせず今までのように『タイムリミットまでには事態を収束させることができる』と過信していた部分もあった。

更にここだけの話として言ってしまうえば、私個人の意向として教師陣の中でも比較的声の掛けやすい部類である紫先生に是非とも相談したい内容ではあったのだ。

……残念ながら紫先生は出張により不在。今日もつい先ほどまで職員室に居たらしいが、一度も会ったことはないけれどクラスメイトの話では優しいことで定評のあるさくら先生も不在。しよつちゅうふうま君の世話を焼く時子先生も不在。鹿之助くんの従姉にあたる上原先生、男子生徒から大人気の帰国子女っぽい英語教師の高坂先生も不在。

……残った教師と言えば斎藤半次郎先生。彼は目が信用できるタイプの目だけ……怖いし。あの人のマイペースは乱すと碌なことに発展しそうでないような気がするため却下。用務員のおじさんこと沼津彦四郎さんは、世間話にはびったりの相手なのだが……あのオークのようなビル腹から、あまり荒事には頼りにならないさそう……。一部の生徒からは汚物のようにあしらわれている節があるし

……。校医の室井は論外。

……。以上の情報を査定し、その中でも頼れる教師が全身の衣服のコーディネートが美味しそうなブルーベリー色の不良生徒の天敵。蓮魔はすま 零子先生と……。プラス黒田先輩アルファの存在だった。

……。黒田先輩はどれだけ蓮魔先生のことが好きなのだろうか？

初め。そのべったり具合から『洋館調査』について言及してしまったり、ついてきそうな予感があったが、頼れる女教師陣が居ない今、頼れるのは蓮魔先生だけであるのもまた事実だった。

「それで？ その『洋館調査』に向かおうとしている生徒の名は？」

「3年の穂稀 なお先輩。死々村 弧路先輩。そして、1年生の神村 舞華さんですね」

「……」

私が現状『洋館調査』とおもむく、生徒の名を告げると蓮魔先生は視線を外して、机の正面に向き直ると考え込むような素振りをはじめた。その様子は〈心理学〉の観点から推測するに、生徒の無謀な挑戦に無念がり頭を抱えた様子……というよりも、肘をついた顎に手を当て、依然として何処か納得が行っていないような怪訝とした顔つきだ。

「はあ……。穂稀さんに、コロさん、神村さんですね。今日はもう下校してしまっただしょうから……。蓮魔先生は明日、私と一緒に張り込みを——」

「黒田、待て。——青空。本当にこの3人だけが洋館調査に向かおうとしていたのか？」

黒田先輩が解決案を述べるのを遮るように、考え込むのを止めたかと思えば言葉を発して私に視線を合わせて問いてくる。これは生徒のことをよく理解しているのか……。それとも長年の教師の感か……。まるでこちらの隠し事を見抜いているかのような問いかけだった。

「……また、どうしてそう思われるのですか？」

「いいから答えろ。本当にこの3人だけが洋館調査に向かおうと  
していた」のか？」

「……はい」

「……」

少し苛立ちを孕んだかのような強い口調で放たれる〈威圧〉のこもった彼女の言葉に対して、私の視線が一瞬、右上に向く。

彼女もそれを見逃さず、先ほどよりも鋭い目つきでこちらを睨みつける。この無言の圧力から逃れることはできそうにもない。

「確かに……あと数人ほど向かおうとしていましたが……」

「名は？」

「……わかりかねます。廊下を歩いているときに、たまたま、聞こえてきたので」

……私はこれまで、自分以外の<sup>ヴェールの裏側</sup>世界の真実を知らない凡人を<sup>ポンコツなものども</sup>愉快なNPCたちとして考えていたが……この新しい世界に来た上で、この認識は蓮魔先生に対してのみ改めた方がいいのかもしれない  
と思い始める。

彼女の眼は世界の<sup>ヴェールの裏側</sup>真実を知る者と同じ目で私に疑いの目を向けていた。

「そうか。報告、ご苦労だった」

「はい。それでは失礼します」

だがしばらくの視線を合わせたにらみ合いののち。彼女側から、獲物から興味を無くした猛獣のような眼光をそつと私から外して、足を組んで机に向き直った。

こちらも引き締めていた緊張の糸が解けるように、張りつめていた気持ちを少しだけ緩める。

……現状、私ができることはやった。しかし、まだやるべきことは残っている。ゆえに踵を返して、足早にこの職員室から立ち去ろうと動こうとした時だった。

「——とっころで」

しかし背中を見せたとたんに蓮魔先生が口を開き、黒田先輩も私の進行方向に立つ進路妨害により足が止まる。蓮魔先生が口を開いて0.2秒の出来事だった。黒田先輩からは蓮魔先生と剣技を教え合う師弟以上の絆よりも、教祖と信奉者のような関係があるようなそんな気がする。



……カルティストかな？ 殺すか？

「……。まあいい。どうしてお前が森に洋館が『危険であること』を知っている？ お前はついこの間。この町、五車学校に来たばかりの新参者だ。ましてや “たまたま聞いた” だけにしては教師に助けを求め、学園から洋館までの距離と時間の把握や、洋館の名称……『鋼人洋館』について知っているほど、話を聞いただけにしては “妙に” 詳しいじゃないか」

「……………」

「正直に吐いた方が、お前が庇っている奴のためにもなるぞ」

……まいったな。そんなことを思いながら背後で言葉を投げかける蓮魔先生へ視線だけを左側に映して捉えようとする。そっちの2人に関しては話が無事にまとまったから、あまり責めないでもらえると助かるのだが。蓮魔先生は斎藤先生とは異なるベクトルで怖いし。

そして蓮魔先生の言動から、これから洋館に向かう3人は計画するタイプではないことがわかった。と、なると……残った主計画候補は1人しかいなくなる。

底抜けにポジティブで行動力があることは良いことだが……。新しい友人としてほどほどにしてほしいとは毎前世の時から回思う。

だがこちらは心寧ちゃんが引き止めていたし、今回ばかりは陽葵ちゃんも諦めて明日蓮魔先生達の手を煩わせることもなく解散するだろう。……主計画者を抑えられることができたのであれば、蓮魔先生に助けなど求める必要はなかったのかもしれないが、調査の段階で主計画者を見抜けなかった今。それは結果論にしか過ぎない。

「……私、ホラー小説が好きなんですよ。女5人、森の洋館、奇妙な噂。ラッコ鍋……。何も起きないはずが……。……ってね。で。興味を持って図書館で調べたら15年前いろのな記事報が出てきたという次第です。そこで危険であることを知り、先生にご報告したままでして。……もう帰っても良いですか？ 私、通販プライムで届いた宅配便の受け取りがあるのですが……」

「ああ。それはすまなかつたな。もう行っても良いぞ」

「失礼します」

「だが……分かっていると思うが。森で洋館を見つけてもお前は立ち入るんじゃないぞ」

「……善処します」

軽く首だけ振り向き会釈程度に頭を下げ、進路に立ちはだかる黒田先輩を避けて今度こそ職員室を後にしようとする。首の可動域の都合上、蓮魔<sup>彼女</sup>先生の表情は見えなかったがよほどどこまで釘を刺してくることからやはり危険な場所なのだろう。私は陽葵ちゃん達に道中に“ 何があるか分からないから、調査をやめるように諭したが……彼女のおかげで私の調査結果が今確固たる真実であり、危険であることの裏付けとなった。……ゆえにやるべきことが増えてしまった。

今日は、家に新しい筋トレ機材とスズメバチを確殺するマグナムジェット一式が届く。きつと母親が荷物の受け取りをしてくれるだろうが、その筋トレの道具をDIY魔改造することが本命だ。この改造にどれだけの時間を要するか見当も付かない。時間はあまり残されていない。

私は——為すべきことを為さねばならない。

10章 『対魔忍 With 悪霊の家』  
Episode 47 『亡霊の洋館』

天気予報の通り、その日の朝から視界が白く染まるほどの大雨が五車町を襲った。

時刻は15時30分。私は昨日、帰宅してから整えた装備を背負って、普段より少し高価なポンチョ型のレインコートをすっぽりと約2、3週間前のカルティスト共の返り血を防いだ時のように深く被る。

玄関に設置されている等身大の鏡には背中が異様に膨らんだ私の姿が映っていた。洋館調査に向かうには心もとない装備や武器であるが、手ぶらで赴くよりは何倍もマシな装備であることを願ってこの日のために準備を整えてきたはずだと自分を励ます。

「……日葵？ こんな状態なのに何処へ行くの？」

重装備のままドアノブに手を掛けた私へ背後から声が掛けられる。方向転換もままならないような、実にノロマな動きで振り返ると、そこには心配したような顔をした母親の姿があった。壁に寄りかかりながらも、腕組みをして神経質そうに眉をひそめている。

「ちよつと畑と用水路の様子を見に……」

「……」

「なーんちゃって。体力作りのメニューをこなしに。きつと夜までには戻れるよ」

呼び止められるような声が背後から聞こえた様な気がしたが、そのまま外へ出て駆け出す。同時に背後の声やヘッドホン越しの音楽を掻き消すほどの雨音が全身に降り注いだ。音量を上げて先を急ぐ。

陽葵ちゃん達の日程では18時30分に裏門へ集合、19時には洋館調査を開始するといった予定だったはずだ。いくら蓮魔先生と黒田先輩が、その時間帯に裏門で張り込みをするかもしれないと言って、もこんな大雨であれば約15分前からの張り込みになるに違いない。

あの洋館跡地近辺を探索した調査結果として。事前にそのような

休息地点を築かない限り、羽休めできるようなポイントは一切なかった。いくら骨のある蓮魔先生であろうとも、こんなバケツの水をひっくり返したような雨の中、木陰に隠れて神村さんたちの到着を待たずにはしないだろう。つまり、私としては早くても18:40頃から洋館跡地に張り込みを始めるのではないかと目論んでいる。学校の裏門を張り込みを行う可能性も考えたが……その場合、先生方と生徒たちがすれ違いを起こした場合、間違いなく生徒たちは先に『森の洋館』に侵入してしまうという観点から、その場所で張り込みを行うとは考えにくいと判断し、あの洋館の出入り口を監視できる場所にやってくるとして目標を定めた。

「よし」

鬱蒼と茂る森を見上げ、足元を煌々と照らす登山用ライトを付けたのちに安全確保のもと森の中に入る。

事前にこの辺りの森についてのマッピングとルートの確保は済ませてある。

現在時刻は16時。空はどんより鉛色で雨は一層激しくなっていた。それでも陽葵ちゃんの晴れ乞いの効果がまだ適応されているのか、周囲だけはまだ明るく現状は油断でもしない限り遭難の危険性はなさそうに見える。洋館跡地から森の出口までに要した時間は最短ルートを通って20分。雨で進行速度が遅れたとしても30分。今から向かえば、もしも蓮魔先生が18時40分ごろに見張りに来ると言っても、それ以前の時間は私が見張ることができる。

心寧ちゃんが諦め、陽葵ちゃんに検討を促し、主計画者を断念させた確率は高く。蓮魔先生への密告を済ませた今……見張る必要などはないのかもしれないが……。引くことを知らなさそうな神村さんのことだ……。穂稀　なお先輩と死々村　狐路先輩がどんな先輩か検討もつかないものの、この2人をうまく焚きつけて向かっていると  
いう可能性は十分に考えられる。だが今回は陽葵ちゃん2と心寧ちゃん1に対して使用することがなかった資料も持参しているのだ。例え先輩方が同伴していたとしても、相手が理知的な会話ができるような相手であれば、危険性を説明し理解してもらえ

ればこちら側の味方につけることだってできるはずだ。先輩方と協力し、神村さんを何とか説得までとはいかずとも……最悪、縛り上げてでも蓮魔先生の到着まで時間を稼げれば良いし、もしも蓮魔先生の姿が見えたとしてもそれまでの時間に3人が姿を現わさなければ、あのことは先生方に引き継げば済むだけの話だ。

……

……

……

16時30分。今。信じられない光景が私の目前に広がっている。

私の目の前に洋館が建っていた。

実地調査に来た際に、付近の木々に対して効力を持たない旧き印エルダーサインを刻んでおいたのだが……それすらもこの場、あの木々に印として残されているということは私は誤って別の場所に来たのではなく……以前は何もなかった草原だった場所に足を運んでいることに間違いない証明でもあった。

現状神村さん、なお先輩、コロ先輩の3人の姿はない。ゆえに私は先に外観からだけでも情報を手に入れるためその周囲を徘徊し探索を始める。

洋館は2階立てのレンガを用いたバンガロー風の洋館だった。雨が降っている時点で、放火には適さない環境だが……レンガという素材から見ても燃えにくそうであることは明白だった。有象無象に壁や屋根から垂れ下がったツタがこの洋館の不気味さを余計に引き立て、これだけなら燃やせそうだとは思う。今回は特別に燃やすための材料や起爆させるための道具一式は持ち寄っては居ないのだが……。更にこの洋館からは、まだ燃やしても燃えてもいないのにも関わらず木材が焼けるような臭いが立ち込めていた。

そつと壁に手を当てて、そこに実体が本当に存在するのかどうか確認を取ってみる。

ゴツゴツ、ザラザラとしたレンガの感覚や味、腕を押し込んでそこにある存在感が目前の光景が雨による幻視が造り出している存在ではないことを証明していた。

さらに窓から洋館の中を覗き込もうとするも、どの部屋も光が無いほど真つ暗な闇が広がるばかりで何も見えない。足元を照らすための登山用ライトの出力を高めにセツトして、内装を照らそうと試みたが……結局は光が闇に吸収されて、やはり何も見ることはできなかった。

裏口はなく、陽葵ちゃんの話にあったように正面には木製の大きな両開き扉だけが、まるで不浄な崇拜者／六肢兎口症の巨人の器官である縦割れの口のようにも見えて……何を考えたらここから調査を開始したくなるのか……私には見当も付かない。

一通りの探索を終え、表玄関を監視できるようなポイントである少し小高い丘、斜面の天辺の上に足を運び、その場所で雨風に晒されながら簡易的なテントを設置し始める。テントと言ってもキャンプで使用するような寝泊りの出来る本格的なものではない。森林迷彩柄に塗装を施したブルーシートを三角形に折って、それらの3隅を木に括りつけた本当に簡易的な雨や日光を凌ぐための簡易的なものだ。

雨を凌ぐ準備を整えたら、雨合羽からはみ出て濡れた顔面や胸元をタオルで拭き、折りたたみのアウトドアチェアを監視方向に設置する。あとは彼女等と接触時の簡易的な装備を整えるだけだ。洋館へ侵入するのを思いとどまらせる資料と、遭難時に使用するための衛星電話＋GPS、洋館から悍ましい貴婦人が出現したときの為の得物2種、発煙筒、簡易応急手当キット、スマホ、ヘッドホンを含めた音楽機器などだ。それらは纏めて背負ったあと、再びレインコートを羽織ってアウトドアチェアに座った。

それ以外の物品はひとまず雨の濡れない場所に置いておく。

時刻は16時40分。蓮魔先生等が張り込みにやってくるまで、残り約2時間……このまま取り越し苦労。誰も来ないことを願いながらジメジメと蒸し暑く雨音が響く簡易テントで待機する。

……  
……  
……

「――」。

「。」  
「。」

17時00分。張り込みを始めて、約20分。

雨音に混じって、私に通ってきた道と同じルートの方角からビジャビジャという複数人の足音と誰かの話し声が聞こえてくる。声が聞こえてくる側へと視線を向ければ、まだ姿までは視認はできないが、それでも光源が3つこちらに近づいてきていることだけは確認できた。

食べかけのエネルギーバーを口の中に放り込んで、暇つぶしで聞いていた音楽を止め、その光源の主の姿が見える位置で息を潜め待機する。

「ここがその例の洋館ですか……」

「なるほどね。雨降る洋館の話は噂には聞いていたけど、まさか本当に存在するとは僕も思っていなかったよ」

「ケツ。2階建てか……ひとまず2階は俺の獄炎でぶっ飛ばしていいかあ!?!」

「それは駄目だよ! 幽霊以外に誰か私達以外にも探検している人が居たら消し飛ばしちゃうよ!」

「……………」

その姿が見えたとき、溜息をつかざるを得なかった。

現れた5人のうち3人は見知った顔の3人かつ、うち2人は諦めたと思った相手だったからだ。

今この場に『穂稀<sup>ほまれ</sup> なお』『死々村<sup>しむら</sup> 狐路<sup>ころう</sup>』『神村<sup>かみむら</sup> 舞華<sup>まいか</sup>』『速水<sup>はやみ</sup> 心寧<sup>こころね</sup>』……そして『日ノ出<sup>ひので</sup> 陽葵<sup>ひまり</sup>』……この5人が全員そろって洋館前に姿を現わした。

それにしても5人はこんな大雨のなか何を思ってそんな恰好でこんな場所に来たのか、特に陽葵ちゃんに関しては蓮魔先生が到着する1時間30分の間、懇々と説教をした。

現状この大雨の中、雨合羽を着ている人間は私を除いて2人しかない。1人はレインコートから義足がはみ出して見える速水 心寧ちゃん。そしてもう1人は物静かで何も言葉を発していない3年の

先輩のうち1人だ。

……それ以外の3人？ よし。それじゃ、解説していこう。

まず鹿之助くんの憧れである神村 舞華。彼女は股間部や臀部を覆い隠すには明らかに布面積が短い袖のないチャイナドレスと……何故そんなものを持っているのかこっちの知った事ではないが、ロケットランチャーのようなものを肩に背負っている。……出身や親が修羅<sup>福岡</sup>の国<sup>岡</sup>の間人であると仮定すれば持つていても何処もおかしいところはない。前世で私の友人にもいた。彼は一見善良で人畜無害な市民だったが、出身は福岡県北九州市戸畑区浅生、職業は暴力団組員だったか。暴力団関係者ならロケットランチャーの1つや2つを持つていても不思議ではない。

……。鹿之助くん。ちよつと彼女は……目標にしちや駄目かなあ……。

次にもう片割れの女性っぽいのが、一人称が僕と言った3年の先輩の片割れ。彼女は背中にライフルを背負つて その服装はエヴァンゲリオンに登場するプラグスーツを赤と白と黒を織り交ぜて露出度の高くアレンジしたかのような、ネコをモチーフにしたような尻尾付きの衣装を纏っている。……趣味はコスプレイヤーかな？ ……もしかして、相方の3年生の先輩つてカメコだったりするのだろうか？ ライフルに関してはモデルガンとかだろうか。

そして最後の……。日ノ出 陽葵ちゃんは……彼女が一番ひどい。首に黒のチョーカーを付け、私に見せて着用も許してくれた橙色のライダーズジャケット。その下には衣服らしい衣服は纏つておらず、おそらくあれは水着だ。黒のチョーカーに繋がったホルターネック式のモノキニと呼ばれる胸元と腹部のくびれが協調できるハイレグ水着で、靴は内股が強調されたサイハイブーツ。傘も差さずに一番目立っていた。

あれは全体的にオレンジ色の目立つ服装で遭難対策はばっちりだけど、雨の降りしきる森に入る装備じゃねえんだよなあ……！ 思わず観察している私の顔がゴルゴ13のような仏頂面になってしまう。

彼女からは『どうせ濡れるんだから水着でも変わらないよね！』ぐ



らしいノリがひしひしと伝わってくる。……うーん、うーん……陽葵ちゃん……。そんなに露出しているお肌の面積が広いと、森の中では枝とかで身体が傷ついちゃうんだよ……？

それにあ(Episode 36)の時時で光源をいっぱい持っていくとか言つて、何も持つてねえしよおお……。今は明るいからいいのかもしれないけど、帰り道は真つ暗ぞ？ てか陽葵ちゃんの左手に持っているの何？

ねえアレ何？ ハンマー投げ？ え？ 森の洋館に来て、ハンマー投げでも始める気なの？ 無くすよ？ 洋館でハンマー投げなんかしたら、片っ端から壁やら窓やらが粉碎するよ？ 大丈夫なの？ あの子??? 一番、不安な友人が 一番不可解で意味不明な装備で森に来ている件について。

……予定の時間よりも2時間は早いけど、彼女たちが来てしまったのであれば仕方はない。洋館に入る前に止める。それ以外に方法はなだらう。予め通販で購入した衛星電話を使い五車学園に連絡を取り始めようと試みる。この話を早めに先生方に伝えて、私の引き止める行為が仮に失敗したとしても〈説得〉で時間を稼ぎ、到着した教員にまとめて連れて帰ってもらう方が確実に違いがない。

そうして、まずは衛星電話を取り出すため視線を彼女達から外そうとした時だ。……レインコートを着用した先輩の1人がこちらに指を指しているのが見えた。

さらに、こちらの嫌な予感を裏付けるかのように、神村さんが口ケットランチャーを――

――あ。っ――

Episode 48 『意外な味方』

——ズガアアアアアアアアアアアアン!!!

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!!!!!

放たれる炎の塊のような砲弾。

手近にあつた荷物だけをひったくって、死ぬよりはマシと些細な怪我を恐れることなく正面の茂みに向けて〈回避〉する。

結果的に、先ほどまでいた場所から吹き上がる火柱からの直火焼きから逃れることはできた。だが火の粉混じりの台風の暴風域のような爆風が私を吹き飛ばし、そのままバランスを崩して倒れ込んでしまう。みつともない話だが、滑落の注意喚起を行っていた私が、一番最初に滑落するような勢いで急な丘の斜面を転がり落ちていく。

目をがっちりと睨り、突き刺さる茂みの枝で角膜を損傷しないよう腕で最大限の防御を努めてはいるが……転がり落ちながら有言実行とはまさにこのことか?と自嘲する。

「やったか?!

」……」

「残念だけど……仕留めそこなつたみたいだよ。このまま、こっちに転がり落ちてくるね」

「ならもう一発……!」

「それはやめておいた方がいい。何度も君の火柱があがることで、先方や余計な第三勢力の注意を引くかもしれない。今、転がり落ちてくるアレが潜入してきた魔族ならば、ここに着地した瞬間を狙って狩ろう」

何やらいろいろ物騒な会話が聞こえてくるが、こちらとしてはそれどころじゃない。

何かに掴まろうと両目を保護している腕とは逆の片腕を振り回し、必死に藁をも掴もうとするが……。何も見えていない状態ではその手は空を切つて、無様に5人の目前まで転がり落ちるばかりだった。ベチャツ——

三半規管がひどく混乱し、即座に立ち上がれないほどの状態で乱暴

に顔面から地面に叩きつけられる。大回転した勢いを殺せず、身体がシヤチホコのように逆海老反りに引つ張られたのち地面へと沈み込む。

「うえっ……ゲー！ カーツ！ ペっ！ ペっペっ！」

うつ伏せの姿勢のまま、わずかに顔を持ち上げて口の中に混ざり込んだ泥や葉っぱを吐きながら、ゆっくりと目線を持ち上げる。目まぐるしくゆがむ視界の先に映り込んだのは、ライフルの銃口を突き付ける3年の先輩と、脳天にその鋼鉄の義足で踵落としを脳天にいつでもぶち込めるように足を空高く振り上げた心寧ちゃんと、レインコートを羽織った茶色の光彩をした先輩の姿だった。

「ひ、日葵ちゃん!? まって、みんな!!! その人、青空 日葵ちゃんだよっ！」

「……知り合いかい？」

「先輩方も恐らくご存じだと思います。……彼女は私のクラスの窓ガラスを『頭突き』で叩き割った……」

「噂こそ熊みてえだが中身は洋館に近づくなとか注意してきた腰抜けチキン野郎だよ」

「……」

「ああ、噂の……入学初日に消火液をバラ撒いた今も性懲りなくスナック菓子を開封する感覚で非常ベルを押すことで有名なヘヴィメタルの伝道者……」

「……」

「え？ あ、本当だ。コロちゃんの言う通り、彼女。消火器を背負っているね」

「ねえ?! 大丈夫!? あんなどころで何をしたの?! 一歩間違えたら黒焦げになっちゃったよ!」

5人中3人は好き勝手言っているが、口の中に詰まった異物を吐き続ける私に対して真っ先に陽葵ちゃんが走り寄ってくる。そこから自身が泥まみれになるのも気にせず、正面から抱き寄せるようにして引き起こしてくれた。……ほんつとに……こんなに優しい子なのに……どうして。

……どうして？（現場猫感）

「ひ、陽葵ちゃん……。それに心寧ちゃんも……。ここへ来ることを考え直してくれるんじゃないかなかったですか……？」

「え、えっと……。それは……」

私が悲しげな声で問いかけると、陽葵ちゃんはすぐバツが悪そうな顔を浮かべ、全身泥まみれ擦り傷まみれのボロボロになった私から視線を逸らす。よほど彼女にとっては、自身がここに居ることに関して私に対して後ろめたいのだろう。

……抱きかかえていたその腕をほどいて一歩後ろに下がってしまった。その為、宙ぶらりんな状態で引き起こされていた私は再び泥だらけの地面へ乱暴に腰を下ろすことになったが、つい先ほどの爆風と滑落によってこちらはズタボロなのだ。これ以上汚れたからと言って何の支障はない。

陽葵ちゃんは、そんな私を見て『落としちゃった！』という自分のしでかしたことを悟り慌てた顔をして近寄ろうとはしたが、それでも物悲しげに見上げる私の顔も見て……。最初の一步を踏み出したころでに立ち止まった。

「——ええ。考え直しましたよ。考え直した上で、ここに来ることを決めたんです。そんなことより、大丈夫ですか？ 立てますか？」

そして私の問いかけに口を開いて応じたのは、レインコートを纏った心寧ちゃんの方だった。

積み重なった罪悪感で動けない陽葵ちゃんの代わりに彼女が私の前に立って、レインコートの隙間からその手を差し伸べてきた。私は差し伸べられた手に掴まり、それを軸にして立ち上がる。

丘から滑落したこと、直撃は免れたものの獄炎によって炙られた身体節々や肌はヒリヒリチクチクと痛んでいた。しかし私の身体構造上『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』（61頁）“肉体的な損傷（負傷）”によって、この程度の傷や怪我で身動きが取れなくなることはなかった。

「……ありがとうございます。ですが、考え直した上で……心寧ちゃん！ ここがどんな場所かご存知ですか?! ここは！」

5人を止めるために奥の手の資料に手を伸ばす。

……だが手は何も触れなかった。振り返って確かに持参したはずの資料を探す。ない。……どこを探しても見当たらない。まさか……。先ほどの爆炎に巻き込まれたとき、資料を坂のどこかで落としてしまったんじゃないか……。

顔を強打した時に、胸元から入り込んだ泥による冷たさとは別の悪寒が背筋を凍りつかせる。

「もちろん知っています。ここは、森に熊も居るような危険な場所で、道は泥でぬかるんで滑りやすく、視界は雨と草木で最悪。滑落の危険があつて、雨風に晒されて凍死してしまうような場所なんですよね？」

「違う！　ここはそれだけじゃない！」

焦りながらも、声を荒げながら自身の周囲を探す。

やはり事前調査なんかしていなかった！

だが今はそんなことを気にするよりも、資料の方が大事だ。

あれが無ければ『どうしてこの洋館に入つてはならないのか』という事情を私が説明したとしても、それは事実無根な個人の感想による引き留めにしかならなくなってしまう。情に訴えかけることは、このほぼ女性しかいないグループでは有効的な手段かもしれないが、これまでの似た状況と〈説得〉成功例を整理すると、やはり理論的に話す方が成功率がよい。その為にも情報と証拠は欠かせないのだ。まずい……！

背後を振り返り、茂みをかき分けて紛失した資料を探す。〈幸運〉にも資料はすぐに見つかった。今、ちょうど上半分がメラメラと炎をあげながら、下半分を泥の中に沈ませている。

機敏な動きで飛びつき、紙を叩きながらそれ以上の延焼を防ぐ。……それでも拾い上げたときには1/3は既に燃え尽きてしまったあとだった。だが何もない資料で洋館の危険性を語るよりもマシと思ひ、約半分燃えた資料を手渡す。心寧ちゃんは目を細めて、雨と泥によって読みにくくなったその資料に目を通し始めた。

しかし実際にその渡した資料を確認してくれたのは心寧ちゃんだ

けであり、他の4人は見向きもしない。

陽葵ちゃんは俯いて私から顔を逸らしたままだし、ライフルを持っているレイヤーの先輩と神村さんは自身の得物をいじくりながら洋館の扉の目前まで歩いて行ってしまっている。もう一人のレインコートを着た先輩は、心寧ちゃんが資料を読み終わるまで一步後ろに下がった場所で何もしゃべることなく黙って待っていた。

クソツ。3人ぐらいの編成なら1部刷っておけば十分だと勝手に思ってしまった。

……今から自宅に取りに戻るか？ ……駄目だ。片道30分、往復60分。彼女たちがこの豪雨の中、洋館の正面で馬鹿真面目に待つてくれるはずがなければ、ついてきてくれるはずもない。それに私が調査して判明した熊の出現だって考えられる。あの時は餓死しているようにも見えたが……次に出会ったときはそうとは限らない。おまけに5人中うち2人は洋館内へ入ろうともしている。この場所は5人が思い浮かべているような、好奇心半ばで入っていいほどやわな場所じゃない可能性の方が高いつてのに。

心寧ちゃんは資料を読み終えたのか、こちらに視線を戻す。彼女は感情の反応が薄く、その顔を見たとしても私には何を考えているのかわかめない。こちらとしては、諦めないのであれば……と険しい表情をしながら次にかかる言葉を準備して、あの洋館の調査を断念するよう仕向けるつもりだった。

「神村さん！ なお先輩！ 二人とも一旦、戻って来てください」

「ああん？」

「どうかしたかい？ 今、戻るよ」

「コロ先輩は先にこの資料を読んでもらってもよろしいですか？」

……陽葵ちゃんも。いつまでしょんぼりしているんですか？ いつものクラス一番の元気はどこに行っちゃったんです？ もしも他にすることが無いのなら、コロ先輩と一緒に日葵ちゃんが作成してくれた資料を読んでください」

しかし、反応としてはこちらの想定を大きくそれるような事態へと変わりつつあった。

1つ目は、グループ結成の中心的存在であった動けない陽葵ちゃんに変わって、心寧ちゃんがグループの中心となって指揮を取り始めたことだ。心寧ちゃんの招集に洋館前で待機していた2人も彼女の元まで集まってくる。

2つ目としては『考え直した上で、ここに来ることを決めた』と宣言した彼女から聞けるとは思っていなかった言葉が聞けたことだった。

「皆さん。やはり、この洋館調査はやめましょう」

この言葉に4人……私も含めた5人が話を続ける彼女の顔を見る。

「今回 私達は森の中に入る前。入念な準備を整えて入りました。視界が悪くてもお互いに目を離さないようにする心構えをして……。万が一、分散してしまっても凍死しないよう陽葵ちゃんか神村さんからは絶対に はぐれないようにする話し合いをして。泥でぬかるんで滑りやすい地面を判断するための光源役の神村さんと陽葵ちゃん、穂稀先輩が頑張ってくれて。……熊が出るとのことです危機察知の為には、コロ先輩が役割を担ってくれました。それに私たち以外にも、事前に下見へ来た日葵<sup>親</sup>ちゃん<sup>切</sup>が道中にあの滑落防止のロープを張ってくれたみたいで」

「……」

「ですが、いま改めて日葵ちゃんの資料を見て思ったんです。ここは本当に「入っちゃダメな場所」なんだって。……やっぱり、今日は洋館の周囲だけ見て帰りましょう。そして二度とここには近づくこともしないようしましょう」

どうやら心寧ちゃんは事前判断には誤ったようだが、現状の事態を察する能力には長けていたようだ。

資料を見た後から、洋館への侵入を窘める私側に立って他の4人を〈説得〉する側に回っていた。そのうえ彼女は滑落防止の柵について言及する際、こちらに振り返って誰がその柵を設置したのか具体的に言葉には出さないものの4人に示唆してみせる。

そんな心寧ちゃんと他4人の姿を目の前に映しながらも、最悪の事態に備えてまだ装備の確認を済ませていた。手元に残ったのはGP

S付きの衛星電話、洋館から悍ましい貴婦人が出現したときに用いる得物1種、発煙筒、神葬力スタム簡易応急手当キット、スマホ、ヘッドホンを含めた音楽機器、木の枝にひっかけてズタボロになったポンチョ型レインコートだけだった。それ以外の物資は神村さんが放ったロケットランチャーによる爆炎によって燃え尽きたか、丘から転がり落ちるときに落としてしまったようだ。だがこの装備の中で最高級品であるGPS付きの衛星電話が手元にある以上、私の精神状態は穏やかだった。これを喪失していれば……きつと今頃……。

ひとまず、茂みの枝によつて出血を伴う怪我に対し、簡易応急手当キットで〈応急手当〉を行う。……本当は目前の5人が負傷した際に使用する予定の物資だったのだが……こうなつてしまった以上。使用するには誤りではない判断ではあつた。

「苦勞してここまで来たのに何を言つているんだい？ 今更引き返すなんて、そんな臆病な事は男が廃るね。君が『消火器の妖精ちゃん』に感化されて立ち去ることは構わないけど、僕はこのまま洋館に入らせてもらうよ」

そんな私は自身の手当てをし、心寧ちゃんが〈説得〉していると、真つ先に声を上げたのはライフルを手にしてプラグスーツのような衣服を纏つた3年の先輩だった。

彼女……否。彼は、片足に重心を預けながら楽な姿勢で、片手に持っていたライフルを両手で抱え、臆病風に吹かれた心寧ちゃんに対して、あきれた顔をしながら溜息をついていた。

彼曰く、レインコートをすっぽりとかぶり、私の事を真つ先に見つけた人物を『コロちゃん』と呼んでいたことから、レインコートのこちらの人物がコロ先輩であることが分かる。つまり、この猫っぽいプラグスーツを纏い、クリーム色のショートヘアに、ぱっちりとした目。翡翠色の光彩と男にしてはかなり小顔の彼が『穂稀 なお』先輩らしい。

……ちよつと思つたこともある。鹿之助くんにしろ、なお先輩にして、男の娘率が高くないですかね？ 男子校ならまだわかりませんが、共学の高校で男の娘がこんなに多いのはレアなケースだと思うの



ですが。

「……………? ……」

「別にどうもしないよ。五車学園風紀委員として、五車学園の生徒をもれなく魅了する怪しい洋館の謎を暴きに行くだけさ。コロちゃんは好きなようにしたらいいよ。僕としては幽霊洋館を立ち入り調査するわけだから、霊魂情報を読み取れるコロちゃんも一緒に来てくれると嬉しいんだけど……。真相は定かではないが、消火器の妖精ちゃんの資料の事もあるからね。無理強いはしない」

「……………。」

「…………それは本当かい? そう言って貰えるなんて嬉しいよ!

じゃ、僕たちは行くから。残りの2人も好きなようにすればいいんじゃないかな」

「……………? ……」

コロ先輩は、というと……。レインコートの下で何かぼそぼそしゃべっている様子が、口元から分かるもの……。実際に何を言っているかは、この豪雨によってほとんどが掻き消されてしまいよく分からない。ただ、なお先輩の発言から 彼女も洋館の中に入って行ってしまうことは確かだった。

私も引き止めるため行く手を阻もうとするが、それよりも先になお先輩はそんな私を最初から存在しないもののように私の妨害を避けて洋館の中へ消えてしまう。コロ先輩も洋館へ入って行ったなお先輩を目線で追ったあとに首をかしげてから、私の方を向いたかと思えばボソボソと何かを喋って彼女もまた入って行ってしまった。

残ったのは心寧ちゃんと陽葵ちゃんと神村さんだけとなる。残りの1年組、2人だけでも入っていくことを阻止しようと振り返るが……。

「はぁ……。失望したぜ、速水。てめえもチキン野郎と同じ 〃 そっち側”だったなんてな。俺も穂稀先輩と同じく変わりねえ。帰るんだったら2人で帰んな。ま、道中 熊が出ても知らねえけど。行こうぜ日ノ出」

「……………うん……………」

「陽葵ちゃん！」

「……。心寧ちゃん。実のところ、私もすつごく洋館の中がみたくなあって……。その、心寧ちゃんも一緒に行かない？ 日葵ちゃんはあいつているけど、心寧ちゃんも来てくれたら5人で纏まって行動しようよ。そうしたらきつと安全に違いないよ」

いつの間にかに、呼び止めようと動いた私の背後へ2人が迫っていた。

陽葵ちゃんはいつもの元気な様子はどこへやら……。心寧ちゃんを諭すような口調で、洋館探索へと誘い……。神村さんに至っては、再びこちらにロケットランチャーを軽く突き付けて無言の圧力で退くように睨みつけている。だが、たかだが小娘2人の進路を遮ることなどこちらとしても造作はない。

それにそんな脅しで退く程、私はチキンじゃない。お前は私のゼロ距離範囲内にいる。

「ま、待っててください！ 2人とも！ この状況を何もおかしいと思わないんですか！ 日葵ちゃんは私と陽葵ちゃんは来るはずがないと思つて居たにも関わらず、先輩方や神村さんの為にここまでの資料を事前に準備して、大雨の中張り込んでまで私達を止めるために来てくれたんですよ!？」

「だから、なんだつうんだよ。このチキン野郎は噂よりもただの優等生ちゃん……。ただのイキリデスメタル花子だったって話だろ？」

それ以上、私の不名誉なあだ名を生成するのはやめろオツ！ とは思いつつも、逃がしてしまつた先輩方のように侵入を許してしまわないよう1年生の2人はこのまま通すわけには行かなかった。それゆえに彼女たちがこのまま入って行かない方法を画策する。心寧ちゃんによる〈説得〉は成功する兆しを見せていなかったが、それでも神村さんの注意を一時的にだが引いてくれたのは好都合だった。

このまま彼女が視線を心寧ちゃんに向けている間に『新クトウルフ 神話TRPG』選択ルール：121頁「ノックアウト打撃」で気絶に持つて行こうと身構える。彼女が気絶さえしてしまえば、陽葵ちゃんは心寧ちゃんと私で抑え込める。

「——ッ!？」

「——はっ。そんな攻撃で俺を退かせられるとでも？ チキンイキリデスメタル花子どころか、この不意打ちシヤバ野郎がッ!!」

……直前まで当てられると確信をしていた私は、そんな風に考えていた。

心寧ちゃんに注意が向いている間に、彼女の頸動脈を目掛け1年前テロリストを気絶まで追い込んだ実績を持つ手刀を振るう。

だが、彼女はそれを悠々と手首を掴みかかる形で受け止め、ロケットランチャーを手放し〈応戦〉としてスネーク<sup>蛇子</sup>レディ<sup>ちゃん</sup>が放ったストマックブロー……よりも若干 下腹部目掛けて拳をぶちこんできた。「ぐ……ッ！」

鈍く子宮が潰れるような衝撃に、内股になり腹を押さえながらも再び顔面から泥の地面に沈む。レインコートを纏っているはずなのに下半身の股の部分からじつとりと生暖かい液体が染み渡ってくるのを感じる。

「日葵ちゃん！ ……神村さんッ！」

「カツカすんなよ。俺は攻撃されたからやり返したただけだけだぜ？」

「じゃ、そういうこって」

「……残念だよ、心寧ちゃん。……じゃあね」

「ま、待って……」

心寧ちゃんの呼び止める声も虚しく、全ては更に雨足が増した雨音に掻き消される。

先行して洋館へ入って行く神村さん。

動けない状態で、陽葵ちゃんだけでも止めようと腕を伸ばして足を掴んだものの蹴り払われてしまう。彼女の目は何処か、いつものキラキラとした光が宿った瞳から、濁った魚のような淀んだ目をしたまま洋館の中に侵入していつてしまった。

## Episode 49 『狂乱発狂』

泥の中で芋虫のように蹲る私の元へ心寧ちゃんが近寄ってきて、先ほどと同じような要領で伸ばしてくれた手に掴まるとそのまま引き起こしてくれる。

「ひ、ひまりちゃん……」

「……だ、大丈夫です。それよりも、入って行ってしまった皆さんを何とかしないと……!」

私の言葉に心配をする心寧ちゃんは、力強く頷くとスマホを取り出して学校へ連絡を入れようとするが……まあ、当然の如く電波は圏外を指し示しており、スマホからの通報はできそうにはなかった。

……これだから田舎は嫌いなんだ。ファツキユー。秘境辺境の地グンマー県。ゴシヤア町。

だが、私はそのための対策は既に練っている。そう。私はできる女だ。一度の<sup>前世</sup>の過ちで学習はしている。

そして、これがこの状況を打開することのできる20万7,985円の衛星電話だ。前世での同じ轍<sup>てつ</sup>を踏まないようにと購入した私の心に平穏を齎<sup>あづか</sup>していた20万7,985円の衛星電話なのだ。前世の初任給手取りの1.1か月分に値する20万7,985円の防水加工された衛星電話。これを使って学校に連絡を取り、学内にいる教員に事情を説明して救援を乞うほかない。

本来であれば、神村さんから爆炎を食らう前に、彼女たちの姿を発見し次第、連絡を取る手筈だったのだが……。いくつかのハプニングが重なってしまった結果、使用のタイミングがズレてしまった。

電波が繋がらないことに対し、焦燥の顔色を浮かべる心寧ちゃんの目の前で自分でもわかるほどのドヤ顔を浮かべ、彼女に対して大丈夫だと親指を立てて視線を集めたのちに早速暗記している学校の電話番号を入力しようと20万7,985円の衛星電話ボタンを押す。

「……」ポチッ!

「……」

「……?」ポチッ

「……………」

「……………??？」ポチポチッ

「……………」

おかしい。画面が真っ暗なままで、電源が付かない。ここに来るまでに充電は済ませていつでも使えるようにしたはずだ。そもそも、私はいつでも使えるようにと電源は入れておいたはずなのだ……。それが真っ暗なのは……。どう考えてもおかしい。

こ、この20万7,985円の防水加工された衛星電話は防水加工だ。あ、雨や泥水に浸かった程度で壊れるはずがないものなんだ。

では……………どうして画面が真っ暗なんだ……………?

……………。

……………。

……………まさか……………。

先ほどの神村の放ったロケットランチャーを避けてあの丘の上から滑落した衝撃で……………?」

「に、にじゅ……………」

「……………」

「にじゅうまん……………ななせん……………きゅうひやく……………はちじゅうごえん……………」

「日葵ちゃん……………」

「にじゅうまん、ななせん、きゅうひやく、はちじゅう、ごえん」

身体の震えが止まらない。これは寒さによるものでも、洋館に対する恐怖の震えでもない。

震えながら私の名前を呼んだ心寧ちゃんの方へと首が振り向く。ロボットのようなきこちない動きで細かく視界が震えている。

口から何か言葉が漏れ出ている。私は今、何を言っている?

「え? 207,985円……………ですか?」

「にじゅうまはっせんえん! にじゅうまん はっせんえん!!! ししゃごにゆうして、にじゅうまはっせんえん!!! アハハハハハ!

ハハハハハハ!!!」

「えっ! ちよ、ちよつと?」



私の元居たクトウルフ神話TRPG世界線上にて記者会見の最中、温泉に180回近く訪れながらも明確な活動内容を開示しなかった男の号泣会見のように。

ギョルルルルルという効果音がなりそうな勢いで回転しながら言葉にならない悲鳴と言語を叫び散らしながらとにかく転がる。

……

……

…

…

……

……

言葉にならない絶叫を挙げながら、ひとしきり暴れた後。放心しながらも豪雨に打たれ空を見上げたところで正気を戻して、まさにキチガイを見つけて恐れ慄く心寧ちゃんが視界の端に映しながら、妖怪のドロドロな泥田坊のようになった体を起こす。

……暴れまわった途中から記憶が無いが、私が起き上がった瞬間に心寧ちゃんが身体をビクリと震わせ、視線を向けた瞬間にガタガタと震え出した。

腕時計を確認して、現時刻を確認する。17時20分だ。蓮魔先生達が到着するまで、まだ1時間20分も時間が残されていた。

「……さて、と」

「……は、はいー」

……相当激しく暴れまわったようだ。かなり。かなり体育会系の返事を返してくるほどに彼女はドン引きしている。

「こちらも片目を瞑りながらも後頭部を搔いて『てへへ』と笑ってごまかそうとするが、彼女の表情は非常に強張ったままだ。……記憶が無いときに、何か前世に関するまずいことを口走ってないといいのだが……。」

「……私は。私は4人。特に友達の陽葵ちゃんを放っておくわけには行きませんので、このまま準備を整えて突入しますが……心寧ちゃんはどうされますか?」

「え、えつと……」

「……まあ、こんなこと言われて、すぐに思いつきませんよね。ですので3つの選択肢があります。ここから好きな選択肢を選んでいただいても構いませんし、それ以外の行動を選んで頂いても構いません」  
ここで心寧ちゃんに提示した選択肢は以下のものであった。

1. 蓮魔先生が約2時間後に到着するのを待ったために、この洋館前で待機する。

2. 蓮魔先生の到着を待たずに1人で森から出て、学校に事情を説明しに行く。

3. 洋館に突入する私についてくる。

……いずれも降り注ぐ雨で頭の冷えた私が思いつき得る最大で苦渋の選択肢だった。

彼女がこの簡易テントもない雨の降る森の中で、2時間もの間ただひたすらに教師の到着を待つことができるのかと尋ねられればできると言い切れる自信はないだろう。また彼女を1人来た道を帰らせるというのも、両足義足の彼女が迷子や熊に襲われる危険性を考えると選択肢としては取り下げたいものではある。私が同伴して送り届けることは、心寧ちゃんの生存率をわずかに上げ五車学園の教師を連れてくることには繋がるかもしれないが……。

それは同時に今洋館の中へ入ってしまった4人を見捨てることと同意義だ。ドレスを纏った首のない貴婦人がどれほどの存在かは計り知れない。仮に私が心寧ちゃんを連れて森から無事に出られたとして片道30分、往復60分の間に4人は貴婦人と遭遇してしまうだろう。



——確実に間違いなく無事では済まない。

仮に神村のロケットランチャーがあつたとしても、私の経験から言つてしまえば常に「銃火器」が必ずや役立つとは限らないことはよく知っている。穂稀　なお先輩のライフルのようなモデルガンなら猶更だ。

詰まるところ。どのような選択肢であれ、生徒の誰かが窮地に陥るのは違いなかった。

「……。……日葵ちゃ……日葵さんに付いて行きます。ここで分散するよりも2人でなら、たとえ危険に直面したとしてもお互いに助け合えますから……私も、日葵さんと同じようにいつも明るくて元気な方の陽葵ちゃんが心配ですし」

「ん。そうですか」

心寧ちゃんは少し俯いて一頻り考えたのちに私についてくることを選んだ。そう、この場合、分散するのは危険だ。死に直結しかねない。

ゆえに彼女の言葉に対して、少しほつとした。彼女は状況によつて適切な行動を取ることのできるタイプの子だ。

「あと別に同年代なのですから、以前や陽葵ちゃんのように心寧ちゃんも私の事は『日葵ちゃん』呼びでも構わないのですよ?」

「は、はい。そ、それは……お気遣い、あ、ありがとうございます……」

「……」  
とまあ、ここだけはどうしようもない一線と壁を築かれてしまったようだ。しかし20万8千円もの物品が未使用のまままで破壊されたことは、私にとって致命的過ぎたのだ。

いずれ彼女も親元を離れ、一人暮らしを始め、一般企業に勤めて、おちんぎんを貰えばわかる日が来る。家賃、食費、光熱費、電気代、スマホ代その他もろもろから差し引かれた給与で生活する現代社会の中で、20万8千円がどれほどの価値を持つかを。

彼女の決断を見届けた後、泥まみれになりながら脱ぎ捨てた得物を背負う。消火器に繋がれた対スズメバチ用マグナムジェットの特リガーを作動させて正常に作動するかどうか確認を取る。

シユゴツ！シユゴーツ！

……問題はなさそうだ。トリガーを引いたときのみ空気中に白い粉末が煙のように吹き上がり、地面を白く染めた。

「日葵さん……それは……？」

動作確認をする私の背後から、ひよつこりと覗き込み恐る恐ると言った様子で尋ねてくる。

「改良型の射撃用消火器です。3連結しているので容量は従来のものの3倍で、本来の消火器は1度噴射させると14秒間射出したままになるのですが、本製品は改良型ということでのホースの先端に付けられたマグナムジェットグリッブの銃把トリガーを握り引き金を引くことで複数回に分けて射出できるようにしています。今回の場合。消火用としてはなく、あくまでも目つぶし用ではありますが……。空になった消火器は鈍器として運用が可能ですので遠近両用の武器となります」

「そ、そうなんですね……」

「……ええ。それでは行きましょう。……洋館の中に入ったら、決して私から離れないようにしてください。異常があれば即座に知らせるように」

「……わかりました」

少しギクシヤクしたような会話になりながらも、4人を追いかけるようにして私達はこの洋館の中へと入った。

資料での事前情報を踏まえ、玄関には壊れて使い物にならなくなったGPS付きの衛星電話を扉に挟んで、完全に扉が閉まってしまふことが無いように細工を施した。

……豪華なドアストッパーだなあ!!! クソが!!!

—— 神村あッ!!! ——

……

—— 鋼人屋敷（屋内） ——

……

洋館の内装は、無人となつてからしばらく……具体的に数カ月、時

間が経過したあとの廃墟のような状態だった。室内には埃っぽい匂いが立ち込めており、本来は存在しないにも関わらず天井のある廊下は、屋外で降り注いでいるはずの雨が身体に当たることがなければ床に水たまりが張っている様子すらない。試しに埃の溜まった床を指でなぞったり、身体に付着した泥を掌で拭つて天井に叩きつけてみるも擦り抜けることはなく、確かにそこに存在するかのようには泥が飛散し、指には埃が付着した。

流石にとてもじやないが舐める気は起きない。

木製の床である廊下には中央に置くまで続く紫色のカーペットが敷かれており、一瞬土足で立ち入るか悩んでしまうような高価な品であったが……全身に泥が付着している以上、私が館内の清潔を保つことはできないものとしてそのまま上がる。壁には高級そうな額縁の中に日焼けし、何が描かれていたのか一切不明な絵が飾られていて、額縁と額縁の間には紫色の炎と光が灯る燭台が掛けられていた。

部屋の構造としては、玄関口から右手には2階へと昇る階段が設置されており、上り階段の脇には人が入ることができそうな大きさの扉に南京錠が3重にも嚴重に付けられている。ノックした感じでは、中は空洞になっていることが推測できる。しかし、鍵が3つも掛けられているということはここに4人が現状入って行ってしまったという線はない。それゆえにまず1階に視線を向ける。正面には暗闇で視界の悪い廊下と、両側の壁に3枚ずつ扉が備え付けられていた。

先行した4人は、あの泥の中を進んでいて玄関で靴を脱いだ形跡も残されていないのにも関わらず、侵入した直後の足跡がどこにも見当たらなかった。

「陽ま「ツ!!!」」

唐突に背後で大きな声を心霊ちゃんが出そうとするので、神速で振り返って彼女の口を抑える。レインコートのフードを脱いだ彼女の口元や髪に私の手に付着していた泥が大量に飛散し、彼女の顎元から泥と泥水が滴っていく。

「あっ」

「……」

「……ごめん。でも、大きな声は出さないで」

汚れた手や身体から滴り零れる泥をカーペットを千切って、心寧ちゃんの顔に飛散させてしまった泥を拭い取り謝罪する。彼女は抑えられた当初は目を丸くしていたが、泥が拭われると目と眉を顰めながら今までの震えとは異なる鋭い敵意のある目でこちらを見つめていた。

だがそれでもこちらの指示に関しては理解と了承を得られたようあり、自身のハンカチで私の手では拭いきれなかった泥を落として黙って真後ろについてくる。

ひとまず改良型の消火器を構えながら、玄関口に近い左側の扉を開ける。この部屋は来客用の応接間だったようだ。西洋式の椅子と机が部屋の中央に置かれ、壁沿いには今は使用されていなさそうな暖炉がくすぶって、その周囲にはオーバーコートなどを掛けるハンガーラックなどがそのままにしてある。

この部屋の何処にも4人の姿は見られない。ふと、心寧ちゃんの方に視線を送るが、彼女は私の指示通りついてきていた。ただ、彼女の顔は燭台による効果もあるのか青白く気分が悪そうに見える。

「大丈夫？」

「……大丈夫です。すみません」

「ならいいのですが……あ、聖剣ヒカキボルグ」

短く言葉を交わして、私は暖炉の中を漁る。

暖炉はつい最近にも火が灯されていたのか、灰はまだ温かく炭と化した木材が積まれている。その中から炭の欠片を取り出す。またへ目星<によって火が付けられるときに着火剤として使用されたのか炭の山から燃え残った書物の断片を発見し手に取った。

ついでに傍に立ってかけられている聖剣ヒカキボルグを腰に携える。

「……それは何に使うのでしょうか……？」

「聖剣ヒカキボルグの使い道のこと？ これは熱してカルティストを片っ端から焼印……ではなく、片っ端から殴り倒すのに有用です。心寧ちゃん……もしかして、使いたいのですか？」

「あの、そちらではなくて……そっこの……」

「炭？ 炭ならマッピングに使います。こうやって入ってきた扉や出入り口の床に印や数字をつけて……。心寧ちゃんは私の資料を読んで頂けましたのでご存じだとは思いますが……。玄関の扉を開けたはずなのに別の部屋だったという証言の元このような対応をしていません。しかし、先に入ったはずの4人の足跡が無いところを見るとこれは無駄な行為なのかもしれないですが……。まあ、しないで後悔するよりは、してから無意味な行為だと判明してから後悔した方がマシと判断したためです」

「……なるほど。あの……。もしよろしければ私がその役割をしましうか？」

「心寧ちゃんか？」

「はい。負担軽減のためにも……。それに日葵さんの方が、その、私より戦い慣れているような……。この状況に慣れているようなそんな感じがしまして……」

「そうですか？ ……そう見えます？ 私は普遍的な女子高生じこうせいですけど……」

「あの……。普遍的なJKは頭で窓ガラスを叩き割ったりしませんよ？」

「それは……。……あれはハワイでお父さんに訓練してもらったからです。『いいか、日葵。サプライズで相手の度胆をブチ抜くならへ頭突きで窓ガラスをブチ破れ！ 相手の肝を叩き潰してやれ！』ね？

……この理由なら正統的な普遍的な女の子でしょ？」

「まず前提の話として、普遍的な女子高生は頭突きで窓ガラスを割ったりしないのですが……」

「……………」

「……………」

「それではマッピングの方、よろしく願います」

「はい」

……彼女に炭を託し、私は次の部屋の調査をするための準備を整え、泥水によって低体温症による死を免れる〈応急手当〉措置を済ませるのだった。

この際、泥を落とすためのタオルすらないので私は乾燥した泥田坊

スタイルを貫くことにする。

## Episode 50 『惨糞クツキング♪』

——ガシャン！ ドゴオ！ カランカラン！ ガシャン！

心寧ちゃんと共に通路を正面に、出口から最も近い左の部屋のすべと右側突き当りの部屋を搜索し終えたときの出来事だった。

壁一枚を隔てた隣の部屋から、瀬戸物やコップ等のガラス品、ナベやフライパンなどの金属物が落下し転がる音が聞こえてくる。明らかに何者かが介入して響かせている騒音に対して2人そろって身構えた。

私は左手に抜刀したヒカキボルグと右手に消火器銃を二刀流の型で備え、心寧ちゃんは騒音のする方向への振り向きざま、その義足の両足で片足立ちになるとハイキックを敵に叩き込めるように身構えた。

……私はてつきり、今まで彼女の足は悪いものだと考えていたのだが……。器用に片足立ちをして攻撃の手段として扱おうとする限り、あくまでも仮定の話にしか過ぎないのだが、あの義足はある種のワードスーツ的な役割を果たしているのかもしれないと考察する。

互いに言葉は発せずアイコンタクトと私の一方通行にも近いハンドサイン、うなづきのみでコミュニケーションを取り行い、私が先行する形で音の発生源の確認へ向かう。改造した消火器の銃口を廊下に突きつけながら素早く部屋から出る。

……廊下には誰も居ない。代わりに正面の3枚の扉中央からまだ家財を叩き割るような音が響いており、非常に騒々しい。この先にいるのは五車学園の生徒か、それとも首のない亡霊か……確かめるために扉近くの壁に面して〈聞き耳〉を立て、内部で暴れ回る何者かの存在に目星を付けようとした。

しかし耳の周りに泥が詰まっているせい、亡霊によるポルターガイスト反応か、何者かが暴れているのか具体的には分からない。代わりとして先ほどとは異なる違和感と異質な空気が辺りを包み込んでいる。違和感については、何がどう違和感を感じるのか一言には言えないのだが……端的に言ってしまうと、先ほど見た廊下とは別の廊下

に出てしまったかのような錯覚とも違和感とも言い難い感覚だった。しかし、その廊下には嗅ぎなれたにおいが私の鼻孔をつく。1990年代、いつでもどこでも嗅ぐことが日常的だった香り。漂う副流煙。……ニコチン。そう、タバコのおいだ。こんな場所でこんな香りを漂わせている人物について、私は出会ったことがある。

あの野郎。抵抗なんてした日には、今度こそ顔面をこの鉄拳でノックアウトして一発殴つてやる。

「……。——！」

扉をそつと開けて内部の様子を伺う。

そこはダイニングキッチンのような部屋で部屋の奥には『神村 舞華』がこちら側に背中を向けた状態で立っていた。

どうやら彼女は、これから食卓の周りがある椅子に座らされている……おせいじにもマトモな人形とはいいいがたい悪趣味なぬいぐるみに対して、力作の料理を振る舞うつもりのようなうだ。背中には(恐らく)親の私物であるロケットランチャーを背負い、火のついていないコンロの前に立ってタバコを蒸かして鼻歌を歌っている。フライパンと周りに置かれた腐った食べ物と調味料を振るいながら『ジュウー、ジュウー、ジュウー、ジュウー』と口で何かを焼く声を発して料理をしていた。……明らかに異常だ。

扉の隙間から伺える範疇に陽葵ちゃんの姿が見えないことから、おそらく別行動をしているらしい。……緊急事態に分散とは、面倒なことをしやがって……。

「神村さん……う？」

背後から心寧ちゃんの声に思わず振り返った。

彼女も内部の様子を探りたかったのだろう。少し身を縮こませながら扉と私の隙間から室内を覗き込んだようだった。

また知人の明らかな奇行に私の奇行を直視した直後と同じぐらいにはガタガタと心寧ちゃんはその身を震えだしている。それから何度か、私と神村の後ろ姿を交互に見る。その眼には恐怖の色が浮かんでいて、寒さで震えるかのような動きのまま、最終的にはチラリとこちら側を見つめ指示を扇いできていた。



一旦はその場で待機するように合図を送る。周囲を警戒しながら問題が発生した場合、即座に飛び出せるようなジェスチャーを送った。私は彼女が今、具体的に何の料理をしているのか、こっそり背後まで〈忍び歩き〉による〈隠密〉行動で彼女の背後に忍び寄る。

食卓の机上には3つのぬいぐるみと薄汚れて欠けた皿、その皿の上にはゴキブリ……大きな黒くて6本足の長い触覚を持つ黒光りする昆虫が乗せられている。それもまだ生きていよう、足こそ腕がれて大量の黒豆の山のように見えるが、細長い触覚だけはそのままウニヨウニヨと蠢いていた。肝心のこの黒い昆虫の足は、まな板の上で分散して……。

残念ながら彼女の方が私よりも身長が高く、菜箸でかき混ぜられているフライパンの中身まで確認することはできない。しかし、今料理されているものも大凡は理解できてしまう……。

「もうちょっとでできるからな〜♪ 完成したら、俺の友達も呼んでみんなでメシにすつぞ！」

……もうみなまでは言うまい。

これ以上の奇行を取りやめさせるためにも背後から〈組みつき〉に掛かった。

ヒカキボルグを腰に差し、フリーな状態となった二本の腕を素早く神村の首に回して、〃楽しく〃料理しているつもり彼女の氣道を圧迫するように締め上げる。

この状況で確実に相手を昏倒させることのできる『新クトウルフ神話TRPG』102頁〃先制の一撃(奇襲)〃および『新クトウルフ神話TRPG』選択ルール:121頁〃ノックアウト打撃〃の併用を行わなかったのは、いくら何でも彼女によって恐らく故障となった<sup>20</sup>防水加工<sup>7</sup>の衛星電話<sup>9</sup>の件<sup>8</sup>があつたとしても……! 彼女を顔面から炒めているつもりの得体のしれない長い触覚の付いた黒豆だらけで、排せつ物臭のするフライパンに顔面を突っ込まれても困ると判断したからだ。

……鹿之助くんの憧れが、不潔な館に住まう生き物を材料におままごとをするのは私にとっては滑稽な姿にしか過ぎないかもしれない

が……。流石にそれを口や顔面に張り付けるのはアウトだ。私は最高に嘲笑うネタであつても、鹿之助くんを曇らせるのは——状況によつてはアリだが今はNGだ。だからこの手法を取つた。

「——っ！」

「——ッ!? なに……ぐえっ……しやがるッ!!!」

「それはこっちのセリフですがッ?!?!」

彼女が正気に戻つたかなんて知る術はない。だからこそ、彼女の意識が落ちるまで首を絞めるつもりだったが、こちらの想像以上に暴れ始めた。

自身の背中を壁や、窓に叩きつけて私を押しつぶす。

「この野郎ッ!!!」

「ギユッ?!」

彼女の背中に背負われた鉄製のロケットランチャーと、私の背中に背負われている消火器によつて身体がサンドウィッチのように挟まれる。その衝撃でこちらの拘束も緩んだ。彼女はすかさず首を絞めていた腕を掴んで『お前が料理だ』と言わんばかりに、一本背負いの要領で机へと叩きつけてきた。

机上の皿が私の体重と装備によつて叩き壊される。同時にガラス片が周囲にまき散らされ、痛みで悶えたお陰で側臥位となつた瞬間には、零れ落ちた例の虫がぶちゅぶちゅと潰れる感覚が腕を伝わって……蟲の体液が嫌に冷たく感じた。

「この……っ！ 泥まみれだが、てめえっ！ チキン野郎だな!? ふっぎけんよ！ さつきまで洋館に入りたがらなかつたくせに、いきなり首なんか絞めてきやがって！ そんなにブツ殺されたきやここでブツ殺してやる！」

叩きつけられ、背中が消火器で余計なダメージを負いながらも痛みで固く瞑つた目を開く。目を開けたときには鬼のように怒り狂つた彼女が口にタバコを唾えながら、ロケットランチャーを鈍器のように振り上げ私の頭部を叩き潰そうと振り下ろす瞬間だった。

「ッ」

3人から得物を突き付けられたときよりも、明確な殺意と迫る死を

確信し恐怖で反射的に瞳孔が開き、先ほどよりも周囲の景色が鮮明に映る。

同時に背骨に走る痛みを忘れるほどの汗が噴き出て……。

——ガキインツ!!!

「やめて！ 神村さん！」

しかし、ロケットランチャーが振り下ろされ私の頭蓋を粉碎する前に、心寧ちゃんが間に入ってその義足でロケットランチャーによる殴打を往なした。

私もその一瞬の隙にゴロゴロと横へと転がって、椅子に座らされている気色悪いぬいぐるみと食器をなぎ倒しながら神村と距離を取る。

そんな私を神村は睨みつけてくるが……なんだ？ 今度は早打ち対決でもするってか？

「速水！ 邪魔すんじゃないやねえええ!!! てめえも、そのチキン野郎と一緒に帰ったはずだろっ！ なんでまだここに居やが———むぐっ!」

「いいから、声を抑えてこれを見てください！ 陽葵ちゃん！ 日ノ出 陽葵ちゃんはどこにいますか!? 今すぐここを出ますよ！ 日葵さんをイキリデスメタルチキン花子とか言っていましたけど、神村さんも『首無し亡霊をぶっ倒す』とかイキっている場合じゃないんですっ!」

「あ、ああ?」

彼女は大声で凄む神村の口を私が心寧ちゃんにしたように塞ぎ、自身のスマホを神村へ突きつけた。それから大声は出さずに、急ぐ気持ちを抑えながらも可能な限り声のトーンを落としながら……それこそクラスの委員長が不良を叱りつけるような声色で神村さんに詰め寄る。

そんな心寧ちゃんに、神村は驚いた様子で差し出されたスマホの画面を確認する。やがてたじたじになりながらもその映像に対し目を丸くして見入っていた。彼女が神村にどんな映像を見せつけている

のか、私には分からないが突き出されたスマホから神村の声で『ジュー、ジュー』と聞こえてくることからおおよその内容は察することができる。

凝視する神村は、見る見るうちに私に対する怒りで狂うその面構えから、自分自身に対する困惑と信じられないといったものへと変わっていく。

……心寧ちゃん。あとでその神村 舞華☆ゴキブリパーティーの映像を私のスマホにちょうだい。五車学園の裏掲示板にスレ立てしてその映像をアップロードするから。

「状況は理解できましたか！ わかったなら大声を出さないでください……！」

コクコクと首を縦に振る神村に、心寧ちゃんはゆっくりと彼女の口を塞いでいた手を離す。

彼女はまだ自分のしていた行為が信じられないのか、つい先ほどもで彼女が「正気の状態だと思っていた状況」を確かめるように散々に乱れたダイニングテーブルへと視線を移す。

「な、なんだよ……これ……。俺……おれ……そのガキどもが腹減ったって言うから……メシを作ってやろうと思つて……うあつ……！」

「痛いっつっつ……心寧ちゃん、援護ありがとうございました。……神村さんも資料なんか確認しなくても少しはこの洋館のヤバさが理解できましたか？ ……それで。料理中につまみ食いとかせてませんよね？」

「お、おう。なんで、俺は……俺は……こんなこと……」

先ほどまで見ていた光景を再確認して、現実を直視したのだろう。自分が今まで何をしたのか理解をし、口から火のついた煙草をポロリと落とした。洋館が延焼してしまわないように、私はそれを即座に消火器で消火する。

「狼狽するのは後にしてください！ 陽葵ちゃんを探すために日葵さんと洋館に足を踏み入れたら、あなたがそんなことをして私だつて状況の理解が追いついていないんです。それで、陽葵ちゃんはどこ

に行きましたか!」

消火薬液が彼女の靴の先端に僅かにかかってしまったが、そんなことを気にするよりも自分のしていたことの方が衝撃的だったのか、往なされたロケットランチャーも床に落として膝を突き頭を抱え始めた。

心寧ちゃんはそんな彼女の両肩を掴み、心寧ちゃんにとっての親友の名を口にして更に問い詰める。

「日ノ出……。そうだ……。日ノ出! アイツ、俺がこの部屋に入る前は一緒に行動してたんだが、突然 洋館から出るとか言い出して……。もしかして、あの様子も……?」

「あの様子? 何か陽葵ちゃんに異変でもあったんですか?」

「おう。……アイツ、いつもならうるさいぐらいに元気だったのに、洋館に入ってしばらくの間はバカみたいに静かだったんだよ……。最初はビビッてやがるとばかり思ったんだが、俺がこの部屋に入る1つ前の部屋で急にスイッチが入ったみたい、賑やかにベラベラと喋り出して……。『洋館の中で何が見たかったんだっけ?』『心寧ちゃん』と日葵ちゃんが心配だから私も帰る』とか言っただけで急に居なくなっちゃって……」

神村の言葉によって私は色々思うことはあったが、心寧ちゃんが熱い視線でこちらを見つめていることに気が付き顔を見合わせる。

彼女の表情は、今にもこの場から走り出して親友を探しに行きたそうな表情をしていたが、それでも感情を抑えて「状況に慣れている」私の指示を待っていた。

非常に厄介な状況だ。一旦、彼女から視線を逸らして片目を瞑りながら後頭部を掻く。3人で纏まって行動することはそれだけ生存率を上げられるが、こうしてはぐれた友人を探すことには向いていない。だからと言って異常しかない洋館で分散するのも愚策だろう。先ほどの神村のような状況になりかねないし、二度と合流できなくなる事態や1人で首のない亡霊に遭遇するのは避けたかった。

「……この部屋で物音を立て過ぎました。ひとまずは別の部屋に移動して、私達の身の安全を確保しましょう。心寧ちゃん、適当に机上の

割れ物を片付けてください。それから机に直接、炭でエセ中国語を用いて『玄関から入って通路を正面に左側奥の部屋で待つて欲しい』と書いてください。その机の上に私が渡した資料の裏面を置き、私達がここに来たことを陽葵ちゃんに知らせます」

「エセ中国語……ですか？」

「はい。この首のない亡霊の出身国はオランダです。日本語なら多少理解してしまうかもしれませんが、中国語ならわからないでしょう。『陽葵宛也。玄関扉背中通路正面左最奥扉緊急至急集合。二十分間待。心寧』とお願ひします」

「わ、わかりました……！」

「神村さんは、自分の荷物を持ってください。移動しますよ。ロケットランチャー以外に武器は？」

「……ねえよ」

「では、これを持って行くと良いでしょう。  
（武器：フライパンデータ日本刀で コデックス記載（77頁）  
武器：日本刀データ同 クトゥルフ2010（36頁）参照）  
ね。私達が先に探索した部屋に暖炉がありましたので、あとでライターを貸してください。暖炉に火をつけてそのフライパンをよく熱したフライパンに改良して、更に火力を底上げします。急いで」

当初、神村は私の指示に対して納得していない様子ではあったが、心寧ちゃんがそんな神村を鋭く睨みつけるとしぶしぶと言った様子で準備を移動の準備を整え始める。

私もこの部屋の出入り口に警戒しながらも、部屋にフライパンという武器以外に有益な武器や情報が残されていないか〈目星〉を付けて探索を行う。しかし、これと言ってその他に武器や兵器として利用できそうなものは何も見つからなかった。ガスの元栓を開いてガス爆発を引き起こそうとは考えたが、残念ながらガスの供給自体止められているようだ。

しかし……この洋館は天保6年西暦1835年に建てられた物のはずだ。何故、そんな時代に建てられたはずの建造物に近代的なコンロが設置されているのか。資料では確か洋館は藩主の軍が放った火矢の雨で焼け落

ちたはず……この建物は残っているはずはなく、更に言ってしまうば  
今 見ている建物が過去の残留思念や幻覚だとしたら、この場には本  
来あるべきものではない筈なのだ。怪奇現象を省いたとしても、一体  
この洋館は何なんだ？

謎が深まりながらも隅から隅まで調べる私に天は褒美をくれたよ  
うだ。ガス栓が固く閉ざされているコンロ底から古びてカサカサに  
なった手記のようなものを発見する。

謎は一旦保留とし、一通りの探索を済ませ部屋移動の準備を整え  
る。

それは、そんなこの室内からの移動の手筈が整った時の事だった。

——ギイイイイイ……ガガツ……ガツ……

不意に入ってきた扉が歪な音を立てながら、ひとりでに勝手に開い  
ていく。

即座に机を間に挟んで消火器ジェットと聖剣ヒカキボルグを引き  
抜き扉側へ向けた。その動きに釣られるようにして神村はロケット  
ランチャー、心寧ちゃんはその義足で接近してきた怪異を蹴りつけら  
れるように身構え、2人とも恐怖から逃れるように私の傍へとやって  
くる。

## Episode 51 『状況・事態の一変』

……扉は開いたものの誰かが入ってくる様子はない。

入ってくる様子はなかったが、こんな異様な空気によってピリピリとした空気が張りつめ、過去に様々な実績が残る異常事態が付きまとう洋館なのだ。むしろ勝手に扉が開いたこと、誰も室内に入っていないこと、その現象自体にこの部屋の誰しものが恐怖に怯えている。

扉を開けた何者かに対して声をかけることすら、自身の命を死神へ差し出してしまう行為になってしまいそうで……あの洋館探検に意気込んでいた神村ですら、余計な口を開くつもりが一切起きないようだ。

片手に聖剣<sup>近接</sup>ヒカキボルグ<sup>武器</sup>、もう片手に改造消火器<sup>射撃武器</sup>を持ち、二刀流で構える。武器を持つ手にじつとりと汗が滲んでいき『滑り落ちてしまわないように』と握りなおすたび、ヌルヌルとする掌内で誤って得物を落としてしまいそうになる。されどその状況下であっても、私ですら一瞬たりとも出入り口から視線を外すことなく一点をただ見据えた。その「何者か」がその姿を現わす瞬間をただ待った。その何者かが陽葵ちゃんで、私達を驚かせるために仕掛けた悪戯<sup>ドッキリ</sup>であることを切に願いながら……。

……

……

…

「……………」

……あれから何分たったのかは分からない。

結局、扉を開けた存在は陽葵ちゃんではなかった。いつまでたってもその姿を見せないこともそうだが、私がどんなに〈聞き耳〉をそばだてても、鼻をひくつかせ彼女特有の香りを確認しても何も感じられない。壁の反対側に誰か人のいる気配が一切感じられなかったこともある。

これによつて私達は現在、単独行動を行っている陽葵ちゃんを探す必要性が発生している。だがチラリと一瞬だけでも……その開け放



たれた扉から視線を逸らすこと、何分経過したのかと腕時計を確認する時間すら惜しいと感じてしまい、動きだすことはできなかつた。

「……………ケツ……………ンだよ。勝手に扉が開いただけじゃねえのか？  
ビビらせやがって」

この誰も動かない空間で、真っ先にしびれを切らしたのは神村だつた。

彼女は先ほどまでの恐怖で萎縮した状態から持ち直す。片手でトリガーを反対の手でロケットランチャーの砲身を掴み、しっかりと銃身を固定していたが……………今はその手を離し銃口を下げて構えること自体をやめている。

心寧ちゃんはというと、私の視界の端で正面の空きっぱなしになつた扉から視線を外しこちらを見ている。

私も警戒を解くように消火器ジェット銃口の銃口を上へと向けて、近接用武器として構えていたヒカキボルグを脇に抱え手汗をその辺にあつた茶色にくすんだ適当な布巾で拭きとつた。

——ガアアツンツツ!!!  
こちらが警戒を解いた瞬間を狙つたかのような大きな音がダイニングキッチン中に響き渡る。

心寧ちゃんが陽葵ちゃん宛てに書置きを残した机が、まるで竜巻によつて巻き上げられるかのように凄まじい勢いで縦軸回転し、机に乗せられた僅かなガラスの破片を周囲に撒き散らせながら天井に目掛けて突き刺さつた。

——バキヤアツツツ!!!  
本当に一瞬の出来事だつた。突き刺さつた机は、不可視の何者かによるちやぶ台返しに遭つた威力に耐えられず、自身の破片をバラバラの粉々に撒き散らす。

油断していたというわけではないが、気のゆるみを狙われた目の現象によつて思わず脇からヒカキボルグを落としてしまう。金属製の部位が重みと重力の関係上、地面に叩きつけられて鈍い金属音が部屋全体に響いた。即座に拾い上げたが、今の衝撃音は十分に大きな物音だ。

「直進を避けながら出口目掛けて走ってッ!!!」

シュゴー!!! シュゴーツ!!!

不意打ちによつて固まる2人に対して即座に号令を放ち、聖剣ヒカキボルグを抱き上げるように拾い上げながら消火器ジェットを、何者か” が存在するであろう場所に吹きかけながら出口へ向け疾走する。

クソツ！ 目の前には何もいなかった！ 何が起きたのかも分からない！ しかし、確実なことは周辺に散布した消火器ジェットの消火薬液は何にも直撃しなかったッ！ だが、このままダイニングキッチンに居座ることは、自分たちが天井に突き刺さってバラバラになった食卓のように天井の肉片のシミへと変えてくれと言っているようであるとも捉えられたッ!!!

それでも何度も何も存在しない虚空へと消火薬液を吹きかけて、見えない”何か”を特定しようと奮闘する。幸いにも真っ先に消火薬液を吹きかけた入り口には誰も居ない様子だった。

心寧ちゃん。青空<sup>わ</sup>。日葵<sup>た</sup>。神村の順番でダイニングキッチンから躍り出るように飛び出す。

「アレが噂の亡霊か！ 全部丸焦げにしてやるッ！ 吹っ飛べやあああああッ!!!」

「ちよ、お——」

「奥義：愚麗寧怒ッッ!!!」

部屋から脱出ぎまに神村が先ほどまでいた部屋に向けて、<sup>20万7千985円</sup>防水加工の衛星電話の故障に至った弾丸を室内へと容赦なくぶち込む。

そんな大胆な行動に出た彼女を止める為にも『ちよっとお前、やめろ!』という言葉を出そうにも呂律の回らないまま、その砲撃を止めるよりも先に彼女が引き金を引く方が速かった。

一瞬で、ダイニングキッチンは炎に包まれ、その火力によつて壁や天井が全て吹き飛び 私の2度目の人生そのものが終わったと思っただが……。あれだけの威力にも関わらず、私が巻き添えを食らうと懸念していた壁が衝撃によつて崩落、飛散する様子はなく九死に一生を

得る。

——…：…今のは死んだかと思った。今のは、流石に死んだか思った…：…つ！

こちらとしても即座に『新クトウルフ神話TRPG』選択ルール：124頁「伏せ状態」で、彼女の火器攻撃の巻き添えから、逃れられる確率の高い姿勢を取っていた。

まあ、そのような姿勢であつても壁が爆風によつて崩落、飛散して破片や炎に巻き込まれて死ぬ可能性もあつたが…。

彼女が無反動砲式のロケットランチャーを放つた直後に発生する、後尾からのバックブラストに巻き込まれて死ぬ懸念もあつたのだ。

親が暴力団関係者なら所持していても何もおかしいところは無いが、やはり大した専門知識を有していない学生がロケットランチャーなんて気軽に撃つていいものじゃない！ どうして、室内戦になることが予め予測できた状態で、そんなものを持ってきたのか。どうして幽霊退治の洋館調査でそんなものを持って来ているのか。武器選択のセンスに、ツツコミどころは満載だがこんなロケットランチャーを連射するずぶの戦闘の素人がいたんでは『首のない亡霊』に首を挽ぎ取られて死ぬよりも先に、ロケットランチャーのバックブラストに巻き込まれる形で私と心寧ちゃんが真っ先に死んでしまう…！

だからと言って、彼女を気絶させて私が運ぶのは論外だ。方法としてはできないことはない。そう。『CALL of CTHULHUクトウルフ神話TRPG』における「荒業」を利用すれば運搬に関して不可能はないのだが…。何分、その「荒業」を実行するには心寧ちゃんという面倒な「目」が残っている。

ついこの間まで、たかが15kgのダンベルを持ち上げるだけでゼヒゼヒ息を上げていた青空。日葵が、米袋1袋分程度の重量ならまだしも。『青空』日葵より背丈も体重も重そうな神村 舞華と、彼女の得物であるロケットランチャーを両手に洋館内で爆走していた。『なんて情報が五車町に流出したら…：…その後の事後処理が面倒になることは無いだろう。』

「…」

「やったかッ!!!」

虚空に対して完璧なロケットランチャーの直撃を決め、目をギラギラと眞田先輩のように輝かせながら勝利の歓喜とともに、片腕で力強いガッツポーズを取る神村。それを私は冷めたジト目で見つめる。

とにかく。何処か一時的な安全地帯セーフゾーンに逃げ込むことができた暁には、そのロケットランチャーを室内で何発も問答無用でぶち込むのはやめるように説き伏せなければならない。

……緊急時だ。最悪、こちらの言うことを聴かなければ、あのロケットランチャーが機能しないように〈機械修理〉での破壊も視野に入れる。

——くくくッ……

「!?!」

「!」

——ウウウウウ……ヒ……ヒ……ヒ……ヒヒヒッ……ウウウウウ……

そんな、完璧なフラグも建設した彼女を嘲笑うかのように、何処からともなく微かに聞こえてくる苦しそうな女のうめき声と笑い声。

ああもう……まずい。

確定的に致命的な音を響かせてしまった。

もうこれでは首のない亡霊に対して『私達は貴女の屋敷に不法侵入し、ここで大暴れしています。制裁を加えてください』と言っているようなものだ。まずい。

来る。来る。来る。……来るッ！首のない亡霊が来てしまう。

私が声を抑え、物音を最小限にしていた理由。一番避けたかった事態の到来だ……！

「日葵さんッ！」

伏せ状態から立ち上がる私の背後から、今まで大声を抑えていたはずなのに悲鳴のような心寧ちゃんの大声が廊下にこだまする。

私が隣の部屋で身を隠すようにと心寧ちゃんに声をかけるよりも、先に振り返った時には彼女に説明を求める必要もないぐらいに更なる事態の悪化による状況を理解してしまった。

……そこには長い廊下が続いていた。気が遠くなるほどの長く、暗

闇によつて先の見えない長い廊下。つい先ほどまで、廊下をほのかに照らしていた紫色の炎が灯る燭台の炎はすべて消えていて、入った直後には両側の壁に各3枚しかないあの通路はどこへ行つてしまったのか。20万8千円のドアストッパー付きの玄関扉は？ 玄関の傍にあつた階段は？ 階段の隣に存在していた嚴重に南京錠が掛けられた扉は？ こんな扉が多いのでは床に付けた印を悠長に調べている時間も残されてはない。相手が視覚も聴覚も持たない筈の首のない幽霊が相手とはいえ、相手がどのような存在なのか理解や情報を手に入れられるまでは、こちらの居場所を示すような光を出すものは使いたくはない。ただでさえ、砲撃による爆音でこちらの居場所が割れてしまつているのだ。

——…まずい。まずい。まずい。まずい……ッ！

血の気が引いていく。ロケットランチャーをぶつ放して満足している神村の事など気にも留めなくなるほど。…自分でもわかつてしまうほどに真つ青な顔をしている。

私の知りうるどのようなへクトウルフ神話の事象とも状況が合致しない。こんな状況は初めての出来事だ……ッ!!!

「…この場からとにかく離脱します！ 2人とも離れないでください！ 離れたら最後、二度と合流できなくなるものだと思え!!!」

「は、はいー!」お、おう?!」

——ヒヒヒ……クカカカ……ウウウウウウ……クヒ……ヒヒヒウウウ……ケケケケケッ!

耳に詰まつた泥を掻き出し、手を耳元に当てて首のない亡霊がどちら側から接近しているのか、迅速に見当をつけて2人を引率しながら走り出す。

どれだけ2人を連れて走つても、壁のあちこちから立体音響のようには聞こえてくる女の泣きながらも混じる笑い声からは振り切ることはできなかつた。

声の位置の判別は行つたが、それが正解かどうかは私にも確証を得ない。ゆえに正面からの奇襲をされても私が2人の肉壁となり守ることができるよう先頭を走る。疾走中、2人が付いてきているか適

宜確認しながら洋館を走り抜けていく。

五車学園の図書館で発見した新聞記事にも掲載されていた『玄関を目指したはずが他の部屋に来ていた現象』と似ているが……まさか、こんな通路が伸びるなんて想定はしていなかった。怪異が変異しているのか？ それともこれは私が知り得ない魔術的效果によるもの？ それとも幻覚を見せられているのか？

……こんな状況では下手をすれば首のない亡霊に殺される前に、こちらが脱水症状を引き起こしてゲームのコープスパーティーの高校生達に降りかかった悲劇のように餓死して野垂れ死ぬ可能性も考えられる。

五車学園の超人教師たちや彼女たちの親御さんたちが、『絶対に入るな』と注意喚起していた理由が私にもおおよそ把握ができた。いくら超人教師どもであれ、どれほど腕っぷしが強かろうが人としての生命活動に関わる条件を絶たれてしまえばどうすることもできないからだ。

警官隊の搜索を打ち切り、教師も忌み嫌う禁足地。……これでこの場所がどのような場所か彼女達にも十分によくわかっただろう。私も十分に理解した。二度と踏み入れたくない場所だ。まあ、もう悔いても遅いのだが……。

せつかく対魔忍世界へ転移したのに、遭遇していることや現在の状況が前世とあまり変わらなくて少し物悲しくなる。だが、それでも一般人としての後悔はあっても、探索者として後悔は不思議と感じなかった。きっと私が介入しなければ酷い状況になっていたことには間違いないのだ。

だから今は頑張る。いつかは……対魔忍世界だけど、一般人枠で人生を謳歌できると信じて。

「2人とも大丈夫?!」

「はい！ ちゃんとっ！ いますっ！」

「クソッ！ クソがつ！ 何が一体どうなってやがるんだよ！」

二人とも必死な形相で私の後をついてきている。ついてきてはいるが、軍隊でもないのに私と神村は重装備で全力疾走。心寧ちゃんは

もともと義足にも拘らず、そんな全力疾走の私達についてきている。このままでは……体力も限界が来てしまうだろう。それこそ、ここで全ての体力を使い果たしてしまい動けなくなってしまう事は避けたい。

「何が起こっているか?! それは私も知りたいですね! ……このまま逃げ続けても、いずれは走れなくなってしまうよ! 今はこの部屋に隠れてやり過ごしますよ!」

ゆえに袋小路となってしまうかもしれないが、即席のバリケードを設置して首のない亡霊をやり過ごすための安全地帯セーフゾーンを作り、彼女達を休憩させるつもりで泥まみれの身体のまま、適当な扉を開いて中を確認しようとしたのだった。

## Episode 52 『激痛☆ネイマール!』

——ミシツ……ゴキュリ……。……ゴスツ……パキュリ……。

だが避難をして、一時的な安全地帯セーフルームを築こうと扉を開けた私を襲つたのは、何が起こったのか理解できないながらも一瞬で涙が吹き上がるほどの脛とつま先に走った激痛だった。

「アツ……ツツア……ツ?! あああああ……あぐぐぐぐ……ぎい……っ」

弁慶右の泣き所ねに何か突き刺さったうえ、つま先を潰したのだ。それもトゲや、刃物の類ではない。ましてや不幸中の幸いにも、砥がれたピアノ線でもなかった。もっと分厚い辞書のような、質量と重量のある重い何かが私の脛に突き刺さったのだ。それが、つま先を潰した。脛に刺さった。

これは今度こそ、顔面から痛みにに悶え苦しむネイマールのようにその場に転がり、痛みで苦痛に悶える膝をついたNYN姉貴によの『泣きべそNYN姉貴』みたいな状態になる。

「日葵さん!」

「おいデスメタル花子!」

あああああああ! 痛い! すっごく痛い! 即座に服に噛みついて声を出さないように堪えたけど、胸を一突きされた傷とどこいどっこいなレベルで痛い! まずいを越えて『やばい!』抑えた脛がへこんでる! 蛇子ちゃんに胃をぶん殴られたぐらいに『くの字』に脛が曲がつってるっ! 骨が途中で途切れてる! 砕けてる! やばい! 痛い! 痛い!! ああああああ! 私が真っ先、一番最初にこの洋館で離脱しそうなぐらいの激痛ウウウウウ! 呼吸するだけで痛みで息が詰まるツ……!!!

「その声! ……ああああつ! ごめんね! ごめんねつ! 日葵ちゃんっ! そんな! ごめんねつ! そんなつもりじゃなかったの! 泥の怪物が入ってきたから迎撃しなきゃいけないかと思って! 日葵ちゃん! 日葵ちゃん!」

そして脛が砕けた痛みで、声を最小限に抑えながらも転げまわる私



に駆け寄ってくる見覚えのある褐色肌の巨乳とオレンジ色のライダースジャケット……。

お前の仕業か。

だから、洋館でハンマー投げをするのはやめろと……あううううう……痛い痛い。

でも……直接的には言っていないから……陽葵ちゃんは責められないいいいい——こんな頭のとつぺんから、つま先まで泥まみれで徘徊していた私も悪い——通路にい——消火器向けなきやいけないのにいい——痛みで動けない……——

「陽葵ちゃん!？」

「心寧ちゃん!？」

「君達も無事だったのか!？」

ゴロゴロと転がりながら上空に視線を向けた先には、見覚えのある出来の悪いエ○アンゲリオンのプラグスーツのコスプレを纏った男の娘が映った。

無事じゃねえよ……! 今、足にハンマー投げの鉄球の脛の骨が折れている奴が1人。お前等の目の前にいるよ!

あうううう……! 骨が折れるのってこんなに痛かったつけ!? ここ最近、4階立てのビルから飛び降りたり、マフィアに掴まってゴルフクラブで顔面をフルスイングされたりしなかったから忘れていただけで、こんなに骨折って痛かったつけ!?! あぐぐぐぐぐつゝ

「……!……。」

「そうだな。ひとまずは中へ! 話はそれからにしよう! コロちゃん は『消火栓の妖精』の足を持ってくれるかい?」

「……!」

室内には見覚えのある人物が2人。それと初めて見る顔が1人いた。

1人は私の脛にハンマー鉄球を直撃させた陽葵ちゃん。もう1人は外見こそプラグスーツを纏った女の子だが、その正体は鹿之助くんと同じタイプである男の娘のなお先輩。

そして、なお先輩が彼女のことを　「コロちゃん」と呼んでいる  
辺り、彼女が『死々村 狐路』コロ先輩で間違いな……ア。ツ!!!　オ  
。オ。オ。オ。オ。ツ!!!

か、彼女の外見としての情報は、まず彼女はあのレインコートの下  
にはオフショルダー型のメイド服う……とも、喪服う……とも言い難  
い服を纏っていたようだ。紫色の負い紐を肩から掛けて、背中には日  
本刀のような柄だが刀身は剣の刃を持つ得物を手にしている。そし  
てアレという仕組みなのかは分からないが、彼女の周りには2つの  
青く燃え上がる人魂がゆらゆらと揺らめいていた。……私は、どうや  
ら痛みで幻覚が見えているらしい……。しかし……不思議とその人  
魂からは邪悪な気配が感じられることはな……。……いたたたた!  
あ、当たり前か……。私の幻覚なんだから……。つ。げ、現に、誰もコ  
ロ先輩の人魂を見て驚いてないもんな。

髪は心寧ちゃんと同じ色合い（黒をベースに薄紫色が混じった色）  
をしたセミボブストレートヘアで、長い前髪で右目から右顎にかけて  
顔の半分を髪の毛で隠している。眉と目は垂れており気弱そうな雰  
囲気を漂わせていた。鼻と口は小さいめで今は通路から聞こえてく  
る女の笑い声以外に物音はないはずなのに、彼女の声はそれ以上に小  
声で何を話しているのか全く聞こえない。おっぱいは女性陣の中で、  
私の次には大きい……。それでも、Cカップぐらいはあって……。痛い  
！　お願い！　優しく下ろして！　優しく！　やさしくう！　や。あ  
。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。ツ!!!

あつ……。あつ……。あつ……。……。もうだめ……。あの……。それはそれ  
として、誰かプラーシーボ効果のモルビネ取ってくれない……。？　致命  
的に痛くてそろそろ鼻水は決壊、涙腺が崩壊しかけて……。大声で泣き  
叫びそうなんだけど……。？

……  
……  
……

『……』

この部屋で6人そろって息を潜め、身を寄せ合い、私は地獄のよう

な痛みにも耐えながら約10分。やっと立体音響で響き渡っていた亡霊の笑い声が遠のき聞こえなくなっていた。

「……行きましたかね？」

「わかんねえ……。さっきみたいに扉がいきなり開く可能性もあるよな……。クソ。部屋全体に対して俺の奥義・愚麗寧怒をぶち込んだにも関わらずピンピンしてやがった……。そもそも、あの部屋に亡霊はいたのか？ 姿すら見えなかったが」

「フーツ！ フウーツ!! 私にも……。っ！ 何も見えませんでした……ッ！ 消火薬液でも姿は捉えられずッ！ ヲウウウッ！」

「ポルターガイスト反応でしょうか……。？」

「……かもしれねえな」

心寧ちゃんと神村がひそひそと話をしている。彼女達の話にも私も割って入り情報を最低限渡したが、それ以上の会話に割って混ざれるほどに余裕はなく、ロケットランチャーの使用をやめるよう促すとか、もう痛くてそれどころじゃない。正直なところ彼女がロケットランチャーを放つのは避けてほしかった。おそらくあんな爆炎を放ってしまったては家具が全て丸焦げになってしまったはずだ。そんな状態では、あの現象がポルターガイストによるものか、それとも見えな何かがあったのか……。あの部屋に戻って検証のしようもない。

しかし、プラス思考に考えるならば……。っ！

こ、この洋館の壁や窓が超耐久であることは理解できた。彼女達を連れて窓を叩き割っての脱出はできないと考えてよい。その件については余計な労力を割かなくて済むのだ。感謝すべき点だろう。バックブラストについては、もう彼女の背後には立たないように振る舞う。これで現状は凌いでいくほかない。

「……？」

両目から留めなくみつともなくボロボロと大粒の涙を零す私に、私の右隣で額に滲み出る脂汗と泥をハンカチで拭きながら看病をしているコロ先輩が口をぱくぱくさせながら非常に聞き取りにくい声の大きさで何かを喋っている。

私は〈読唇術〉は習得していないが、それでも『だ い じょう

ぶ?』と心配してくれているのは何となく察することができた。とりあえず上下の唇を噛みしめながら、痛みで小刻みに震え指で歪なOKのハンドサインを作って答えた。でも、正直なところをいうと大丈夫じゃない。全く大丈夫じゃない。ぜんぜん大丈夫じゃない。脛は駄目だつて。陽葵ちゃん、その獅子舞の頭みたいな造形をしている鉄球で脛を狙うのはダメだつて!!!

「……駄目だな。これは骨が完全にバツキリ折れてしまっている……。何か近くに添え木はないか?」

知ってるう……!! それ知ってるうううう……!!! もう自分で確認した! 自分で確認しました! 穂稀 なお先輩!!!  
「……………」

「ああ。何か椅子の足や壁の板が剥がせればいいんだが……」

待って。やめて。今、物音を出されて首のない亡霊が戻ってきたら死ね。たぶん、私が真っ先に死ぬ。死ぬんだつたらせめて何か残せる形で死なせて! 無駄死には嫌ッ!

「そんな僕の腕をがちり握りしめなくても分かっているさ。……音を出したら、またアレが戻って来るかもしれないことを危惧しているのだろうか? だが、君をこのままにしておくわけには……」

「……な、なお先輩……。でしたら……。私が拾ってきた聖剣ヒカキボルグを使ってください。あと、誰でも良いので 私の簡易応急キットからモルビ……。青ラベルのモルヒネ取ってもらえませんか……?」

「モルヒネ……?」

「こ、こびんの……」

「あ、えつと! 日葵ちゃん! これかな?!」

「陽葵ちゃん、ナ、イ、ズ、です……。それです。それ、それと……注射器とアルコール綿も取り出してください」

コロ先輩となお先輩が暖炉のあった部屋で、私が拾ってきたヒカキボルグで骨折した患部を固定している間にズボンを膝上まで脱ぎ、泥の付着していない大腿部の皮膚をアルコール綿で消毒し、注射器にモルビネを入れた後、注射器内の空気抜きを行った後に自分に投与した。注射器の押し子をゆっくりと痛みを耐えながらだが確実に内用

液を注入していく。生理食塩水と混ぜ合わせて点滴でゆっくり投与……なんて悠長な時間もない。

まさか、5人に使うための応急キットが自分でしようすることになるなんて。

医師免許もないのにこのような行為を行うことは違法であるが、この際 四の五の言っている場合でもなかった。

それにモルビネ、モルビネとは言っているが……これはモルビネ（鎮痛剤）ではなく実際にはモルビネただの生理食塩水だ。だ。これはすべてはプラシーボ効果で脳みそを騙すための……思い込みで痛みを緩和するためのプラシーボ効果に期待と望みをかけた<sup>〈応急手当〉</sup>荒治療である。

本物も所持しているが、彼女達が負傷した時のイザというときに取っておきたい。入手経路については秘密だ。ちよつと、人様には話せない経路で手に入れている。

「あああああ……ああ……ああ……ああ……」

投与から数分、足全体が痛むような鋭痛がじんわりと痛みが引いていく感覚がする。そんな私をなお先輩、コロ先輩、陽葵ちゃんは困惑しつつも、『そんなことができるのか』と言いたげな顔でこちらを見ていた。緊急事態なんだ。何も見なかったことにして。

「えつと……それで、君達2人は帰ったんじゃないのかい？ どうしてここに？」

使用済の注射器が他の5人を傷つけてしまわないように片付けていると、なお先輩が不思議そうな顔をして素朴な疑問を投げつけてきた。あれだけ洋館に入ることを拒否して引き止めたのに、洋館の中に存在していれば……そう思うことは……まあ、至って普通の反応だ。「片道だけでも30分掛かり、最低往復しても60分……五車学園の教師を連れて戻って来るとしても約75分は時間を要する場所。それも危険な場所に先輩方や大切な友人が乗り込んでいるとわかっていて、そのまま何もせず帰る人間が何処にいますか？」

私の言葉に心寧ちゃんも力強くこくりと頷く。心寧ちゃんもまた陽葵ちゃんが心配だったのだ。だからあの時、一人では帰らずに私と一緒に洋館へ突入した。

「だがよ……。だからって2人同時に入っちゃったら、誰がどうやって俺達がここにきているってことを他の人間に伝えんだよ……。結局、俺達の危機的状況は変わらねえじゃねえか」

「そのことについては……」

「ええ、御心配なく。こんなこともあろうかと既に学園の先生方に話を通してあります。と言っても先生方が到着するのは本来 貴女方が洋館に訪れる19時なので……。あと約1時間。この洋館で耐え凌げば、玄関に救援隊が来るって寸法です」

ふうま君が普段しているように、片目を閉じながら前髪を弄りドヤ顔で話す私に対し5人は一瞬歓喜の表情を浮かべた。しかし、わずかに思考を巡らせたことで私が行った行為によって自分達がどうなるかも同時に理解したのだろう。少しばかり動揺をしてその身をたじろかせている。

「心中お察し申し上げます。……ですが。先生方に後で叱られることは、この場で誰にも知られずひっそりと骸を晒し、異変に気付いた人がこの洋館に足を踏み入れ、被害拡大および私達の無残な遺体を発見されるよりはよっぽどマシだとは思いますが」

ただ正直なところ……100%、教師陣が直接ここに助けにきてくれるとは言い切れない。教師陣が来たとしても洋館の状況や事前情報だけに何もせず帰る可能性も十分に考えられた。これまでの収集した情報から推察するに余程、無鉄砲な教師でもない限り……この洋館の危険性を理解し、私達が入ったことを確認したら被害者宅に連絡を入れることぐらいで済ませてしまいそうではある。

それに……私の行った行為はこの5人を助けるどころか、僅かな確率ではあるが教師陣にまで被害を拡大させてしまった可能性が出てきてしまっていた。ゆえに個人的にはこちらが想定しうる不確定で最悪の事態に陥る前、あと約1時間弱以内に。教師陣がこの洋館に足を踏み入れてしまう前にこの洋館から脱出できるように手引きしないとならない。

……やるべきこと、達成条件が多くて少し泣きたくなる。

しかしここで5人に対して『教師陣は何もせず帰るかもしれない』

い』という情報は敢えて伝えなかつた。ここで士気を落とすことは、内部分裂や自暴自棄などの良からぬ事態を発生させかねない。つまり。モチベーション維持の為、ある程度の希望は見せ続けるべきと判断したためだつた。

5人は私の事を見つめてくる。救援を予め呼んでいるという行動を讃えて……ではないだろう。その視線がむき出しの下半身へ向いていることから、粗方『そろそろズボンを履け』とでも言いたいのだ。はにかみながら片目を瞑って後頭部を搔く。それから注射箇所へ、インジェクションパッド注射用保護パッドを貼り付け、泥まみれのズボンを履く。

そして今は痛みがそこまででもない、つま先を見るために靴と靴下を……ウツヒイっ!? つ、爪が洋式トイレの蓋みたいに割れてるツ?!!

あーあーあー……五指中、4指もぱつきゆりと……あーあーあー……。開いた口が塞がらない。モルヒネの空の小瓶に入れたモルヒネ生理食塩水が無ければ即死でした。事前準備って本当に大事ですね……。

「そんな顔しなくても大丈夫ですよ。……叱られるときは、私も一緒です。なんて言つたつて、私もこの洋館に足を踏み入れてしまったのですからね。まあ、無事に心寧ちゃんと森の外へ出て先生を呼びに行つて戻つて来るにしても、6人で生存戦略を練るにしても、時間的には然して変わりませんので。私はあくまでも皆さんの生存率を上げるために最善を尽くしたまでです」

それからまったりとした動きで壁面に備え付けられた窓の縁に手を掛けて、ゆつくりと立ち上がる。……問題はなさそうだ。モルヒネと固定された聖剣ヒカキボルグのおかげで歩くことに支障はない。完全にプラシーボ効果で痛みを無効化させられるようになるにはもう少しだけ時間が掛かりそうだが、それまでにアドレナリンなどを効かせて走ることができるよう持つてこなければ。

「最善を尽くして、生存率を上げるため……てめえが一番ポロポロじゃねえか。てめえが一番危機的状況に直面していることは、わかつてんのかよ?」

「ははっ。これは手痛い指摘です。それはそう……かもしれない

ね。ですが——こう見えても、意外と神村さんより足が速いかもしれませんよ?」

「……ふざけたことぬかしやがって」

微妙に残る足への違和感と痛みで時々顔を歪めながらも、最初こそ冗談でも言うように私は笑ってから、真面目な声のトーンで彼女にクトウルフ神話TRPG世界での常識を語る。

彼女の言葉はもっともだ。常人であれば誰かに肩を貸してもらった上で、手負いの鹿が足を引きずりながら走るように走らなければならぬだろう。だが私は映画に登場する負傷者とは違う。痛みは凄まじく、薬が無ければ歩くこともままならないが、それは思い込みに過ぎないと自分に言い聞かせる。

前世での仲間や友人たちは、ヘチエーンソ〜によって片足を分離されても12秒間で8〜45m走ることができたのだ。恐らくあの光景、あの原理は私の説明書である『CALL of CTHULHUクトウルフ神話TRPG』57頁(58頁)『移動の取り扱い方』、61頁『肉体的な損傷(負傷)』4段落目あるいは『新クトウルフ神話TRPG』203頁『移動』による記述の効果に違いなかった。

そうだ。私の足は折れても、くつついている。足の無くした友人たちに出来て、私にできないわけがないはずだ。彼等とは違って、私にはまだ足があるのだから。

——そう、たかが脛の骨が砕けただけなのだ。



Episode 53 『情報共有と渾名とだいしゆきな手記』

「今は少しでも生存率を上げるため、情報共有させて頂いてもよろしいでしょうか？」

「あ、ああ。もちろんさ」

窓の縁に掴まりながら……だが、なんとか……やっとの思いで健側の足を軸にして立ち上がる。ジンジンとした鈍痛は続いているが、この程度の痛みなら我慢できるはずだ。それに痛みはコントロールできるもの、コントロールできるはずのものだと自分に言い聞かせて堪える。

そんな姿を見せられたなお先輩は、こちらの様子に少し引いたような様子を見せながらも快くこれまでにあった出来事を共有してくれた。

……  
……  
……

どうやらあの後。洋館に入った先輩2人は2階を探索していたらしい。

2階の構造としては寝室が2つ、子供部屋が1つ、バスルームが1つあったそうで、突き当りの寝室からバスルームにかけて奥から順にしらみつぶしに調査したとのことだった。

彼等が探索した状況としては特に変哲もない一室と判断したらしい。たまに雨漏りや外部が豪雨ということもあつての窓が激しくガタガタと震えていたこと、染みのある鉄パイプ製のベッドがあつたぐらいで……。ほかに特筆できるような部分と言えば、バスルームから水が出るかどうか蛇口を捻った所。血のように赤色に変色した液体がトロトロと流れ出て、バスタブの底面を赤く染めただけだったそう

だ。

『……その赤い液体って、ただの水道管の内部が錆びてできてし

まっただけの錆じやあ……?』と、こちらとしても思う部分はあったものの。その水が錆か血液かと言う情報はこの洋館から脱出する手段として重要性が低いと判断し、野暮なことは追加の探りを入れずに話を聞いておくだけする。しかし、その液体が血液にしろ、錆にしろ飲み水には適さないだろう。飲めば一時的な喉のうるおいは癒せそうではあるが、長時間脱出が叶わなかった場合の状況を考慮し、その上で飲料水と活用した場合。赤痢を発症して下痢で逆に脱水症状を引き起こしかねない。

ただ……風で窓がガタガタ揺れていた現象については少し考え込む。少なくとも……私と心寧ちゃんがこの永遠に続く廊下へと迷い込む前の部屋では、そのような現象は一切見られなかった。

それに神村のロケットランチャーの直撃を受けてもなお、その爆風や破片でピクリともしなかった窓がガタガタ揺れていた? ……そこだけは話の中で、明らかかな怪しさしか感じられない。そこが、この洋館から脱出する唯一の脱出口なのか? いやでも、その場合。何故その場所のみ(2階にも関わらず)を脱出経路と指定している理由について検討が付かないし……。わざわざ人が来た時にガタガタと揺れたりするのはあからさま過ぎる。

あるいは――?

……なお先輩の話聞く限りでは、2階の部屋は本当にそれだけだったようで再び1階へ降りてきたところで先の見えない廊下が広がっていたのを確認したようだ。やはり先輩方も、階段を下りた先は正面に玄関があったにも関わらず消失していること。2階へと戻ろうとしたところで今まで下ってきた階段すら消えてしまったことに気が付いて、洋館から脱出しようとしていたらしい。

そんな洋館の廊下を歩いていたら、単独行動に出た挙句。洋館で迷っているものの『まっすぐ歩いていけばいつか外に出られるだろう!』の精神で、明るく元氣よく玄関を目指して歩いている陽葵ちゃんを発見。一緒に神村と出口を探している際に、激しい砲撃音と首のない亡霊の声に驚いてこの部屋に息を潜めていたところに私達が合流してきたと言った流れだったようだ。

彼の話を一通り聞いたところで、今度はこちらの顛末を話し、互いの状況についての情報共有は無事に終える。

「それで消火器の妖精ちゃんしょうかきのようせいちゃんは、僕たちとは違って色々洋館に残された物品を回収しているようだけど、何か役に立ちそうなものは見つかったかい？」

もうこの際、私の渾名あだなについては突っ込まない。突っ込むまいとは思っていたが、やはり思うところはある。その消火器の妖精そちゃんまは変わらないんですね。神村が私のことを『デスマタル花子』と呼ぶみたいになんな渾名で呼ばれるのも……それはそれで嫌ですし、困っちゃうんですけど……。

折角、心寧ちゃんや陽葵ちゃんが『日葵さん』ひばいちゃんって呼んでいるのだから、それに合わせてくれればいいのに……とは思う。

……それともアレかな？ 女性のような見た目だが、なお先輩は股間にはイチモツが付いた御立派アツ!!な男性だ。初対面の私をいきなり『日葵ちゃん』って呼ぶのは、気が引けるのだろうか？ きつと苗字の『青空』を知っていれば、『青空さん』と呼んでくれるのかも知れないのだが……。

あつ。そういえば、この場には私の事を『青空さん』って呼んでくれる人間がないことに気づく。人のことを苗字で呼ぶ肝心の神村でさえ、私の事をデスマタル花子と呼んでいる。

まあ、デスマタル花子に比べたら『消火器の妖精ちゃん』はかわいい方なので良いんですけど。

……まだその渾名に馴染めない。

「こちらとしましては手記を2冊ですかね。1冊は暖炉に残された燃えかけた手記と、もう1冊はコンロの下に隠されるようにして残されていた手記です」

「なるほど、何者かが残して行った手記か……中身はもう読んだかな？」

「いいえ。安全地帯があるかどうかわかりませんが、安全地帯を見つければ読もうかと思っていたところなので……まだ確認できていません」

「では、ここで確認を済ませよう。幸いにも人手は充分にある。僕と妖精ようせいちやんで解読を進めるから、他のみんなは出入り口の防御を固めて欲しい」

私の言葉になお先輩は、すみやかな行動でコロ先輩を引き連れ私を除いた1年生3人に対しテキパキと指示を与えていく。一同は解散し指示されたことを作業し始めていた。具体的に、神村は有事の際の攻撃役。心寧ちゃんと陽葵ちゃんはこの室内に存在するバリケードの設置。コロ先輩は首のない亡霊が接近してきていないかどうか索敵をしてくれるようだった。

ところで、今。なお先輩が私のことを『妖精ようせいちゃん』って呼んでくれた。『消火器の“妖精ちゃん”』って呼ばれるよりも、喜んでいる自分がいる。でも『消火器の妖精ちゃん』と『妖精ちゃん』それぞれバラバラに呼ばれてしまうと、なんだか“消火器の”という部分が二つ名や称号みたいな感じに聞こえてしまう。

そんな渾名に関して内心葛藤している私だったが、なお先輩に拾ってきた手記を1つ渡す。1人で手記を解読するよりも、2人で読み込んだ方が早いのは確かだ。

黙読の準備も整ったところで、陽葵ちゃんが私のために椅子を1脚持って置いてくれて……。

「そんなに落ちている手記を拾うなんて、日葵ちゃんは手記がだいしゆしゆきなんだね！」

「……」

「……」

「……………ごめん」

なお先輩に暖炉で見つけた手記を手渡す私に、陽葵ちゃんは彼女なりのギャグもセットでぶちかまして行った。

多分、彼女なりに緊迫した空気を少し和ませたかったこともあるのだろう。あるいは私の足を折ってしまったことに関して、負い目を感じ少しでも笑いで痛みを緩和させたかったのか。

いずれにせよ真意は分からないが、彼女の渾身のギャグに対してすぐに反応を返すことができずに陽葵ちゃんを固まらせる。それから

一言謝ってそそくさとその場を去ろうとしていた。

「……コホン。ええ、そうですね。手記にはその人物が死ぬその直前に書き残した最後の記録が記されていることが多いので。この不可解な現象から逃れる鍵になりえるかもしれない。だから、手記はだいしゆきですよ」

「……！」

「陽葵ちゃんも今回に限らず次にも同じようなことがあったら、まずは先駆者の手記を探してみてください。彼等の手記を収集することで、それらは志半ばで倒れて行ってしまった彼等が築き上げた軌跡を犬死では終わらせない一種の供養にもなりますので」

「……うんー」

私の言葉に陽葵ちゃんは自身の名前を呼ばれた犬のような顔で振り向いたのちに、少しだけ救われたような嬉しそうな顔をした。力強く頷いた後には、心寧ちゃんの元に駆け寄って空になった本棚やタンスを持ち上げて扉付近にバリケードを築き上げ始める。

私は陽葵ちゃんが持ってきた椅子に座り、犠牲者の手記を広げて〈図書館〉ルールは用いずに全文書を読み上げ、必要な部分を箇条書きにして重要な情報の引き抜きの為の解読を始めるのだった。

さて、ここで問題です。私が何故〈図書館〉ルールを行わなかったか。

確かに〈図書館〉ルールは文書の束や図書館内から、重要な情報を的確に引き抜くには大事な技能ではあるのだが……。

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』8  
2頁「図書館」における技能定義が根底に存在したからであった。  
『新クトゥルフ神話TRPG』71頁「図書館」の技能定義によって若干の緩和はされていたもの……。それでも私がここで〈図書館〉ルールをしてみれば、情報の引き抜きに数時間〜4時間も要してしまう。そんな悠長なことをして居ればドレスを纏った首のない貴婦人に襲われること、洋館に訪れる予定の蓮魔先生達と入れ違いになってしまうことは当然の流れだと判断した事であった。

……

⋮  
⋮

## Episode 53 — Tips 『犠牲者の手記1』 2』

○『犠牲者の手記1』 暖炉の中の手記

著者：おそらく15年前の五車学園の生徒

日付：不明（最短15年前?）

洋館に入ってから何時間経過したことだろう。

否、実際にはもう何日も経過しているのかもしれない。

外は相変わらず雨が降って、窓に打ち付ける音が休憩を取る俺の睡眠を妨害する。

最初はちよつとした肝試し感覚でこの洋館に来ていた。雨の日にしか現れない不思議な洋館があるって。先生方も入っちゃいけないなんて注意喚起していなかったし、俺達としてはちよつとした冒険感覚だったんだ。

それにその洋館で何かがあっても俺達の力で何とかできると思っていた。

結果はこの通りだ。出られない。みんなともはぐれた。今もなお、扉の向こうで友人の誰かが右から左へとずっと走っている音と悲鳴、首のない亡霊の嘲る笑い声が聞こえている。

窓を破壊する試みは、どんな武器で殴っても技を使ってもヒビすら入らなかった。それどころか銃弾1つ通さない。意地になって破壊しようとするれば物音で亡霊が寄って来るおまけつきだ。どうやったらここから出られるのかも想像がつかない。

ある時、救助隊らしき人達や学校先生がこの場所に来た。でも俺の事は見えていないらしい。窓を叩いても呼んでも叫んでも、まるで興味のないものを見るようなそんな動きで俺を無視して居なくなってしまう。代わりにやってきたのはヤツだ。感動的な出会いだよな。

でもおかしなこともあった。外は雨が降っているにも拘わらず、先生や救助隊の人たちは雨合羽を着ていなかった。それに衣服も濡れていなかったような気もする。

もしかしたらもう出られないのかもしれないという絶望感から見  
てしまった希望の夢なのだろう。それか幻覚を見たに違いない。

ああ、寒い。でも幻覚のせいで、裂かれた背中  
の傷だけが異様に熱い。でも雨に打たれた身体が洋館の中の冷気に晒されて震える。お  
かしい。夏なのに。傷口からばい菌でも入ったのか？ おなかの調  
子も悪い。

今日洋館探検なんかしていなかったら、きっと今頃、こんな場所  
でシヤリシヤリぬちやぬちやする蟲なんかじゃなくて、家で暖かいご飯  
を食べていたに違いない。苦い赤い水なんて啜らなくても良かった  
のかもしれない。

お母さん。おなか減った。会いたい。

● 『犠牲者の手記2』 コンロ下に隠されていた手記

著者：現場監督

日付：15年以上前

△月×日

洋館の地下に魔界と繋がる門が存在するとの話を聞きつけて、我々  
はこの廃墟へと訪れた。

実に不気味で、いつからこの場所に建っているのかは、こちらとし  
ては知ったこっちゃやないが今も十分な形を残した廃墟だ。

おまけにここの家主は高度な幻術を使う幻術師であったことが推  
測できる。我々の中に魔術に長けた者が居なければ危うくこの建物  
を……現場の無能共の言葉を借りるなら “どこにでもありふれた、  
取るに足らないような” 家屋として見過ごしてしまうところだっ  
た。

何しろ、ここは五車町内都心部の近くだ。我々が何度も気軽に訪れ  
ることのできるような場所ではない。今回の調査で発見ができてよ  
かった。

気づかれでもしたら一巻の終わりだ。

△月○日



我々是我々の計画の為、廃墟を調査および拠点化の為、生活基盤を整えるように改築をしている。

しかし、いずれは奴等もこの存在に気が付いて調査に乗り出してくるかもしれないことを危惧し、既に家主がかけた幻術の他に別の幻術を掛けることにした。

それは雨の日に限り、この建物が具現化し、その建物が豪勢な洋館に見えるという幻術だ。豪勢な洋館として決定したのは我々の雇い主がえらくこの場所を気に入ったようで、魔界への門を発見した暁には侵略のための駐屯地拠点にすると望んだからであって、我としては目立ちにくい廃墟で済ませたかった。

また雨が止むのと同時にこの廃墟は瓦礫だけが散らばる草原変更。焼け落ちたチャペル地帯に見えるようになっていた。またその際には何人たりともこの洋館に侵入することはできない。誤ってこの館内に迷い込み事情を知られてしまったものには、逃げられてしまわぬように鍵がなければ脱出することができないよう細工を施しておく。

△月◇日

この建物は元々1階に6部屋、2階に4部屋、地下に小さな倉庫が1つの構造になっていた。

駐屯地拠点としてはあまりにも小さすぎる構造ということ、雇い主の意向の元、空間を歪めることで地上1階部分の室内を50倍へと増やした。空間を広げた分、下等な人族に近い魔族にとっては迷いやすくなってしまうようだが我々であれば些細な問題にしか過ぎないだろう。2階の増築はまた今度の時間のあるときで良いだろう。

地下の倉庫に魔界の門を発見する。しかし、残念ながらこの門は百数年前に閉じられたままのようだ。それでも時間と手間暇さえ掛ければ再び開くことも可能だろう。

△月◎日

今日の深夜、作業員であるハイオークと魔族の女が窓ガラスを突き破る形で叩き割って、二人そろって地面に叩きつけられ首の骨を負って死んだ。

ハイオークは普段から素行の悪い奴で、女の方は運悪くヤツに掴まったのだろう。痴情のもつれで無理心中と言ったところか。

毎晩ベッドでギシギシ、窓に女を押し付けてガタガタ激しく露出プレイしていた罰だろうよ。

窓のすぐそばには体液の染み付いたベッドがあつたらしいが、今夜は立ちバツクではなく、ベッド上で騎乗位プレイでもする予定だったのか？

窓の修理費は奴の財布から支払った。もう奴には必要のないものだ。

△月△日

最近、作業員から幽霊が出ると噂をしているのを聞いた。聞くところによるとハイオークチーフほどの背丈(約3m)をした毛むくじやらの黒人のような大男の姿を見て、女がすすり泣く様な声が聞こえたことらしい。

バカバカしい。ここは五車町だぞ。そんな亡霊が居れば今頃、五車学園のガキどもの話題になって教師共が対策に出ているはずだ。

△月●日

今日、現場作業員の死体を発見した。何者かと争ったように肉がズタズタに引き裂かれていて頭がなかった。……まさか、対魔忍がここを嗅ぎつけたのか？　とも思ったが、諜報員の話では対魔忍どもに動きはないようだ。

奇妙なのは奴はオークの体液を全身に浴びているはずにも関わらず、この惨殺死体を作った相手は媚薬効果が効いていないようにも見える。となると米連の兵士だろうか？　アイツ等はパワードスーツを身に纏っている分、発情しにくい。

今日は総出で忍び込んでいる侵入者を搜索することになった。何も発見できなかったわけだが。

☆月◆日

今日、作業員が消えた。きつとあんなことがあつたから逃げ出したのだろう。

この前、現場作業員の死体が上がった時、そいつは消えた作業員の

友人だったこともあった。きっと嫌気が差したに違いない。

☆月×日

数日後、消えた作業員が戻ってきた。ソフトクリームを片手に、腕には大量の駄菓子を抱えて。

話を聞けば、わざわざ五車町にまで観光客を装って赴き、この廃墟での作業の息抜きのための駄菓子を『稲毛屋』とかいう店で買うために、全財産をはたいていたらしい。とりあえず勝手なことをして計画がご破算しかねない行動だったが、今日の我は気分が良い。厳しく怒鳴って半殺しで済ませてやった。

殴られて怒られているのにヘラヘラしやがって。ま、次、ミスを犯した上でそんな顔をしたら適当な口実を付けてぶっ殺してやる。

☆月◎日

戻ってきた作業員だが、以前と比べて人が変わったようによく働くようになった。

ぶっ殺してやろうと思っていたが、気遣いもできるようになって低級魔族のオークにしては使える奴にはなった。どうやら私の説教が余程聞いたと見える。

それでもたまに奇妙な行動をするが、ミスしたわけでもないゆえに殺すことはできない。この前、遊びで作業員を一人殺したら上から減給のお達しが来ちまったからだ。作業員なんて変わりはいくらでも見繕えるだろうに。

まあ、前よりも道具として使えるならいいだろう。もつと馬車馬のように働くがよい。

☆月▽日

地下から銅色の肌を持つ小汚いおっさんが見つかった。この廃墟に棲みつき根城としていた浮浪者と思われる。

発見経緯は作業員が壁に寄りかかった所、脆くなっていた壁が崩落し、隠されていた部屋とおっさんを見つけたという寸法だ。

おっさんの身ぐるみを剥いだところ、物陰から顎が4つに裂けた猿のような巨大な黒い蟲と人が融合した3mもの実態が襲撃してきた。作業員であるザコオークどもが恐怖のあまり気絶するような一言で

は名状しがたい不気味な奴だったが、鉛玉を大量にプレゼントしてやったところ、そいつは銅色の肌を持ったおっさんを抱えて点滅しながら消えやがった。何十発も弾丸をぶち込んでやったし、きつと今頃どこかで野垂れ死んでいるだろう。それに邪魔者が同時に消えてせいせいした。ざまあみろ。

ここに魔界の門が開通するんだ。こんなところで邪魔されてたまるか。

×月▲日

今朝から作業員の様子がおかしい。どいつもこいつも、朝礼が終わった直後から青ざめた顔で身動き一つ取らねえ。全員、目が虚ろで何処を見ているのかも分からねえような視線だった。数人をぶん殴って床に昏倒させたのに、他の奴等はまるで電源が切れた人形のように突っ立ったままだった。

ぶっ倒れたやつもおきやしねえ。試しに数人のオークの前でぶっ殺したのに動かねえ。

何が一体全体どうなつてやがる!?

×月□日

なんだ！ なにが起こっている！

突っ立ったままの作業員たちを放置して、次に俺があいつ等の元に来た時、アイツ等の半数以上がカサカサに干からびて死んでやがった！ それに話で聞いていた女がすすり泣く声が聞こえたかと思えば、私の目の前で作業員の首がビンに詰められたコルクを栓抜きで振り開けられるように次々に首が飛んで。血液がスプリンクラーのように周囲へ撒き散らされて……。

◎月×日

我は今、クローゼットに隠れながらこの手記を書いている。

どいつもこいつも皆死んだ。ここで魔界の門を開くための作業をしていた作業員はもちろんのこと、本部からバケモノ退治に来た応援も、見えない亡霊に首を振り切られて、カミソリのような刃で引き裂かれて、天井や壁に叩きつけられて、腕が4もある不気味な怪物に腕を振り切られて、みんな、みんなしんじまった。

隙間から覗いていて分かった事だが、あの虫と人が融合した怪物と亡霊はグルだ。頭の回る本部の連中が怪物同士ぶつけたが、あいつらはグルだった。

遠くから仲間の悲鳴が聞こえる。もう銃撃は聞こえない。走り回る音。命乞いの声。断末魔。

殺したはずのおっさんの声も、耳を塞いでいるのに聞こえるようなそんな気がする。

わからない

何も聞こえなくなった。

だれかがコンロでもやしていた。

かくにんしたら、出るためのカギだった。だれかが我らのカギをもやしている。

我は、われはちかの倉庫ににげる。

出るためのカギ、ふん失にそなえて2枚はつねにもっているが、正面玄かんなんてまち伏せされているに決まってる。

地下へつづく、とびらせじようされていた。なんきんじようのカギをさがさないと。

まかいの門さえ、ひらけばにげられる。にげられる。にげるんだ。

……

……

……

手記を読み終わり手記に書かれた内容の情報共有も済ませる。読み終えて互いの顔を見合わせたときの第一印象としてはなお先輩もきつと良からぬことが書かれていたことを薄々察することができた。それぞれの手記の要点を総括すると……

○『犠牲者の手記1』

記  
・おそらく15年前にここに訪れた五車学園の生徒によるものの手

・暖炉の中にあつて、それが燃えかけているということ＝暖を取ろうとしていたか。

・時間の感覚を失うほど長時間滞在していた。

・通路はループしている可能性がある。  
・窓からの脱出は不可能。それどころか首のない亡霊を引き付ける可能性がある。

● 『犠牲者の手記2』

・洋館の地下倉庫の魔界の門を開こうとしていた魔族の現場監督（仮）が執筆したもの

・『◇雨降洋館』の資料同様に壁田 鋼人は魔術師の類であった。  
・雨の降る日にのみ姿を現わすのは、この魔族達が掛けた幻術によるもの。

・洋館から出るには『鍵』が必要。

・部屋が増えたのは空間が歪んで増設された部屋に迷い込んだか。

・首のない亡霊の存在は、この時点から確認されていた。

・外の熊や蛇と同じようにカサカサになって干からびた死体が出た様子。

・顎が4つに裂けた猿のような巨大な黒い蟲と人が融合した実体は今もいるかも。

・現場監督（仮）は鍵を2枚持っている。その鍵が脱出のキーとなる。

・地下への道は閉じられたまま

？ 肝心の現場監督（仮）は洋館で骸を晒している可能性が高い。  
ということらしい。

ひとまずは次に私達が為す必要のある脱出のための小目標は見つけることができた。

準備を整えたら蓮魔先生達が異常に気が付いてこの洋館に侵入してしまう前に脱出を目指す。

きっと自分から入るようなバカな真似はしなないとは思いますが……脱出時間を間に合わせなければ、今度は蓮魔先生達が次の犠牲者となり得てしまう可能性も出てくるだろう。

## Episode 54 『指揮系統』

手記を読み終え、なお先輩と共に互いの手記に書かれた情報の共有を済ませる。

ひとまず内容の長くなってしまったものは、手記の空白の頁を取り出してその部分に現状必要そうな情報だけをピックアップして要点としてまとめ上げた。

筆記用具などは持ち合わせてはいなかったが、代用できそうなものは幸い拾い上げているので問題はない。心寧ちゃんに声をかけ、暖炉で拾った炭を受け取ってそれを筆記用具の代わりに即席のまとめを作り上げる。

「……君は情報の整理が上手だね。以前もこういうことをやったことがあるのかい？」

「……ええ、まあ」

「ふむ。それは噂で聞いている君の人物像からしてみれば実に惜しい人材だな」

「……。……？ ——お褒めに預かり光栄です」

手短かつ簡潔を心掛けて手記の空白のページに情報の整理をしていると、頭上からなお先輩がひよっこりとこちらを横から覗き込んできた。

その言い草はこちらをまるで値踏みするような言い方で、私の感情を逆撫でされているような憤怒が沸き上がってくる。だが、きつとこの怒りは一時の感情。あくまでも怒りで脳を騙し、痛覚をマヒさせるための快樂物質であるドーパミンを分泌させるために潜在意識がそういう風に仕向けているのだと自分をなだめた。

……それにしても、今すぐにも彼に飛び掛かって両目の目玉をくり抜いてしまいたくなるような激情だが、流石にカルティストでもない彼へそんな仕打ちをしてはならないと自分の身体を制御する。怒りなんて、よっほどのことが無い限り6秒経過すれば自動で静まるのだ。

一瞬ではあるが、感情の制御をしていなければ実行に移そうとして

いた自分自身の思考に違和感を覚える。しかし、ここで考え込んでしまつては不信感を沸かせかねないと判断して、なお先輩にはこちらの殺意を悟られぬように笑顔を向けて誤魔化した。

「なお先輩。今後の洋館からの脱出方針の決め方ですが——皆さんに對する指揮系統を譲つて頂いてもよろしいでしょうか？ 普段であれば、こういった非常時には上級生であるなお先輩やコロ先輩が指揮を執られるのが世間一般的であることは存じ上げております。……ですが、今回は事態が事態だけに年功序列を謳っている場合でもないのです。——お願いします」

「……」

高ぶつた感情が完全に鎮火したところで、椅子から立ち上がり彼に頭を下げる。

骨折している足は、道中で拾い上げた聖剣ヒカキボルグによつて固定され比較的な安定感を得ていたものの、それでも少しだけ立ち上がった瞬間によろめいてしまう。その姿はまるでロバート・ルイス・ステイヴンソンの小説『宝島』に登場するジョン・シルバーの様で、よろめいたことは彼の目に少し指揮を執るには頼りなく映つたかもしれないと思つた。

なお先輩は何も言葉を発さない。今の私には彼の表情を見ることはできないが、漏れ出る僅かな吐息からどうするべきか決めあぐねているように感じる。

「——なお先輩。日葵さんは、普遍的な女子高生を自称する割には行動がちよつ……。……。いえ確実に、かなり。かなり、アレな人ですけど、この状況に関してだけは頼れると思います。私からもお願いしたいです」

「わ、私もっ！ 日葵ちゃんはね！ 噂はすごいけど、人を喜ばせる為にいろいろ機転とか気遣いとかできる私の友達で！ 1年生で3年生を指揮するつていうのは聞いたことないけど、真田先輩と黒田先輩の生徒指導にも素手で渡り合える実力者だし、先輩にこんなことを言つたら失礼だつて分かつてるけど……。私は日葵ちゃんの方がリダーとして安心できるかな！」



私のお願いに対し、背後からの声援……ウインザー効果が乗せられる。

こちらをディスプレイしているのか、それとも推してくれているのか……。ちよつと判別に悩むところだが、この少しだけ毒の入った言葉と声は心寧ちゃん。でもそこは、強調しているところじゃなくない？  
そしてもう1人は普段から私が見せている人格を推して、こちらを褒めちぎっている陽葵ちゃんの声だった。

二人の推薦はとても嬉しい。でも、でもね。知っておいて欲しいこともある。

確かに洋館あに突入のした直後とは……洋館内に広がる張りつめた空気を少し和ませたかったのと私に対してドン引きしていた心寧ちゃんの手前。ウケ狙いで……無表情の心寧ちゃんにちよつとでも、クスツと笑ってほしくて『ハワイで親父に習った体』で話しただけなのだ。

しかし、結果はものの見事にネタに対する真顔マジレスのド正論。……うん。なんか、まえさき市に行くために五車駅へ集まったあの日の鹿之助さんと蛇子ちゃんに『いさじテクニク』のネタをスルーされた時のような……そんな寂しい気持ちになったよ。それに本当は、あの窓ガラスをへ頭突きでぶち破ったのは不慮の事故なんだってば。紫先生を消火薬液まみれにした件も、紫先生が『全力でかかって来い』って言った……そう、互いの合意の上なんだってば。

んー……でも、こちら辺は弁明していなかったから、噂のみの情報で彼女達がそうやって判断してしまうのも無理はない。紫先生の件はあとで弁明しよう。

窓ガラスの件は……。もう弁明しても聞き入れてもらえなさそうな空気だし、今はいいや。

「——はあ……君達は、この僕がそんな年功序列ような古臭い仕来りで、この非常事態の指揮系統の隊長を決めるとでも思っているのかい？ ……それは心外だな」

と、ここでなお先輩が考え込むのをやめて口を開いた。

90。以上、深々と頭を下げてお願いをしていたのだが、彼の声が掛かった時点でその礼の角度を45。まで持ち上げた姿勢で彼を上

目遣いで確認する。

彼は片足に重心を掛けながら腕組みをしていた。顔の向きはそっぽを向いているが……時折、頭を下げ続けている私のほうをチラチラと細目な横目で確認している。

「確かに僕は五車風紀委員であり、五車風紀隊の隊長を務めているが……。僕自体は消火器の妖精ちゃんが今回の指揮を執ることに關して異論はないよ」

「わあ……っ！ ほんと!？」

「本当だとも。実際に彼女は、この場にいる誰よりもこの洋館について事前調査を済ませて、僕よりも洋館の背景や事態に詳しいのだからね。それに噂はあくまでも噂だ。僕も妖精ちゃんに出会って僅かだけど、噂ほど酷い人柄じゃないってことは分かっている。それでも……怪我の状態が——と言った視点では気になるところではあるけど、隊長を務められるのなら務めても良いと思うよ」

「やったね！ 日葵ちゃん！」

「部隊の指揮、よろしくお願いしますね……！」

彼の言葉に背後から私を推してくれた二人の歓声が上がる。

ここで頭を下げるのをやめて姿勢を元の状態に戻すと、なお先輩もこちらを見つめ若干微笑みの表情を見せてくれた。コロ先輩は相変わらず背後に青色の魂魄が浮かんで見えるものの、私が彼女の方にも視線を向けるとただ頷いて『きいたいいしているから』が がんばって。』と口を動かしているように見える。

ただ……今回の指揮系統の申し出について全員の賛同は得られないことは分かっていた。食堂では心寧ちゃんの介入もあって、多少の揺さぶりをかけられた間は一時的な協力をすることができたが……流石にあんな取っ組み合いことがあった後では——

「はあ？ デスメタル花子が隊長？ 姐御や黒田先輩と渡り合ったつっても、最終的には全身ナスビ色になるまでボコボコにされてたじゃねーか！ そんな実力で指揮を任せられっかよっ！ たかが年上の2人に素手喧嘩で耐え凌いだ程度で調子こいてんじゃねえぞ、ああ!?! その程度なら俺にだってできるっての！」

神村は私を隊長とするこのグルーヴの輪から少し離れたところで、新しいタバコに火をつけて口から副流煙を吐き出していた。彼女は今、明らかな苛立ちと怒りをこちらへと向けている。そして私が校舎裏で出会った時よりも、タバコを吸いきるのが早い。恐らく私が指揮することに對して、彼女にはよっぽどなストレスがかかっているのだろう。

やはり。先ほどから懸念していた通り、端からこの人物からは賛同を得られるとは思っていなかった。

本音を言ってしまうえば、防水加工の衛星電話の件もあるし、反抗期むき出しの己の感情で我儘を突き通したいというのであれば、彼女のこととは見限っても良かった。それに前世では、しつこい荒らしやグルーヴの輪を乱す奴に適した対処法とは、「好きなようにさせる」ことや「無視すること」だと学んだ経験もある。そうすることで相手は失敗の過程を経て学ぶこともあるからだ。

これまでの経験上、こちらがどんなに引き止めたとしても全員生還の活路を導き出そうとしても、中には助けられないNPC一般人は実際に存在する。

私が神村を見限れば、彼女が間違いなくこの洋館で命を落とすことになるのは分かっていた。私は彼女が嫌いだ。それと同時に私の恋路を阻む邪魔者とすら感じていることもある。だから私が彼女を排斥すれば、どんなことになるか想像に難くはない。

……しかし、それでも彼女を見放して見殺しにすることはできなかった。彼女の訃報を聴けば……鹿之助くんはきつと悲しむのだ。私は彼のそんな顔は見たくはない。彼を曇らせることは、それはそれで「おいしい」のだが……そんなことで曇らせたくない私も居た。……それに……本ツ当に悔しいが……鹿之助くんには正義の味方として「憧れ」である神村の存在が必要なのだ。いつかは鹿之助くんからお前の座を私が奪ってやるが、今は、今だけは——だからこそ、私が彼女を無事に洋館から逃がすためにも掛けるべき

次の言葉は——

「では、消火器の妖精ちゃんは僕達を指揮する隊長の役割を担うわけ

だが、僕も隊長リーダーを担おうじゃないか」

「!?」

「……ああ?」

「そして、僕は君に指揮と指示——いや君みたいなタイプは助言がいいのかな? 助言をするから、君はその助言をもとに好きに動けばいい。それならば異論はないだろう?」

「……」

「それとも君は、消火器の妖精ちゃんが隊長として自分の指揮してくることが嫌だが、3年生であり五車風紀隊の隊長も務めて実務実務経験が豊富である僕の指揮すら嫌だと言いつ出すのかい? だったら、もう自分勝手に好きにすればいいよ。僕は止めないよ」

「?!」

脚の違和感のせいとか、普段より回らない頭を無理矢理にでも動かし、しかめっ面をしながら神村をうまく動かせる方法が無いか知恵を振り絞る。

神村をここからどのようにして洋館から脱出させるか考え込んでいると、ピシヤリとなお先輩が輪を乱す神村を言い切った。彼の言葉に、考え込んでいたのを中断して目を丸くする形で彼の顔を見る。その顔は一切、見捨てる発言をしたことに関して悪びれていないような冷酷な顔のようにも見えた。

待て待て待て待て待て待て! 待って!

その流れは私が困るのだ! 今、神村を見捨てるのは私が困るのだ! 彼女は見捨てられない……!!! だからと言って、反目する彼女を護るために立ち回った結果、私を慕って指揮者リーダーの後押しをしてくれた陽葵ちゃんや心寧ちゃんを危険に晒せるのかと問われれば痛いところではあるが……。

しかし、そんな言い方をして彼女が癩癩カカを起して、勝手な単独行動を取られたら困としては非常に有用だが『神村 舞華』の生還は成し得ない!

私が比較的波の立たない仲裁するための言葉を選んでいる間にも、なお先輩の口は止まることを知らない。

「もしそうなれば、間違いなく君はこの洋館で骸を晒すことになるだろうけど。君には眞田 焰という慕う先輩がいるようだけど、君が死んだとして彼女は君の事をどう思うかな？」

「……姐御は関係ねえだろ」

「いいや。関係あるね。——君に『姐御』と慕われ、自信家で無鉄砲な彼女のことだ。ひよっとすると、洋館に囚われたままの君を助けるためにここへ乗り込むかもしれない。それこそ、僕が知りうる彼女の性格を考えるなら、消火器の妖精ちゃんのように周囲に自分の居場所を知らせることもなく、*“単身で”* だ。君が僕の指揮や助言に従わなかったばかりに。君は、*“君のみならず”* 慕う先輩を殺してしまふ事に関して何の気持ちも湧かないのかい？」

非常にこちらの肝を潰されるような会話のやり取りだが、ここでハッと彼に気づかされる。

今、なお先輩が話している内容は『神村 舞華を見捨てる』という宣告ではない。

これは私には知り得ない情報。なお先輩は、五車学園に長いこと在籍しているがゆえに知っている情報。

私が事前に洋館探索をすることを制止して回っていたころ、捜し求めていた相手である神村 舞華が姐御として慕っている人物とは、あの生徒指導で槍を派手に振り回していた眞田 焰先輩だったか。

なお先輩は一見、見捨てるような口調で話しているが……正確には彼女が慕う眞田先輩にも影響が及ぶことを絡めて最悪の事態を説明している。これは彼女が眞田先輩を慕っているのであれば、彼女としても猶更避けたい事態のはず。そこに付け込んだ一種の*“威圧”*に近い*“言いくるめ”*だった。

それにしても『眞田 焰』と『神村 舞華』……。改めて考えると似通っている属性は多い。オラオラ系のヤンキー属性に、槍の石突部位から噴き出た爆炎と爆炎系ロケットランチャー。周囲の事など何も配慮しない遠慮のない攻撃方法……。あの姐御にして、この舎弟あり。そんな言葉がぴったりの関係性だ。

「チッ！ わーっつたよ！ ……穂稀先輩の指揮だっつーなら、聞いて

やる」

彼女はまるで嫌々ながらも最善策の妥協案として、なお先輩の案を受け入れてくれた。それから私とは顔もあまり合わせたくはないのか、私から視線を外すように口グェットランチャーを肩に担ぎ直して出入り口の見張りを始める。

一時はどうなるかとひやひやしたものだが、話がうまく纏まったことに関して私としては溜息を吐きながら片目を瞑って後頭部を掻いた。

そんな私に対して、なお先輩はゆっくりと近づいて肩に手を置いてくる。こちらの心情を察してもいるのだろう。その顔、目には同情の色も浮かんでいた。

「話は纏まった。さて、これからどうするつもりだい？」

「そうですね。……数秒だけ考える時間を下さい。それから隊長間の相談を挟むのと、今後の方針について順を追って説明をしていきます」

「了解したよ。……——ところで消火器の妖精ちゃん」

「はい。なんででしょうか？」

「君は先ほどまで、君に反発する神村さんまで救おうと色々策を練っては居なかったかい？」

「！……ははは……どうでしょうね……」

「隠さなくなってきたいい。彼女と君の反応を見る分に、そりが合わないことも分かっているつもりだ。でも君は、僕が2人でこの部隊の指揮を取ると言い出すまで眉間にかんりの皺を寄せて、彼女を助けるために必死に悩んでいるのは分かったよ。……君は彼女を見捨てずに策を練ろうとするあたり有情だな。速水さんはともかくとして……日ノ出さんが洋館の道中や今この状況で君の事を推してくる理由も分かった気がするね」

彼の言葉に、こちらは少し照れるのを誤魔化すかのような口をすぼめ苦虫をかみつぶしたかのような顔をする。

……別にそんな褒められるようなことはない。救えないときは見捨てる。駒に使う。それが釘貫わ神葬たの本来のやり方だ。……あの

時は「鹿之助くん」という存在が居たから、打開策を模索しただけなのだ。

それに、無事に五車学園に帰ったら帰ったで、心寧ちゃんにスマホで取った映像を私に送ってもらって神村を社会的にぶつ殺す予定ではある。ついでに鹿之助くんにも初期段階の幻滅してもらおう。そちらの方がもつと面白くなる。そんな裏事情も孕んでいたのだから。

## Episode 55 『謝罪と原因』

「さて、さっそく隊長同士の作戦会議と行きたいところだが……まず初めに君へ謝らせてはくれないだろうか？ 洋館に入ることを必死に引き止めてくれた……というのにも関わらず、君の警告を無視し……。五車風紀隊の隊長という身分にありながら、このような場所に率先して入ってしまい申し訳なく思っている。すまなかつた」

私の頭の中で戦略が纏まったあたりで、『よし。話そう』としたときに今度はなお先輩が頭を深く下げてくる。

何事かこちら側が驚いていると彼は目を伏せながら、当時。あの時何があつたのか事情を話してきた。

「実はだな……僕達も消火器の妖精ちゃんと同じように、五車風紀隊のメンバーとして。雨降洋館に侵入しようとする1年生3人……日ノ出さんから聞いていた話なら、君を含めて4人か。君達4人を止める予定で、この洋館には赴いていた筈だったんだ。それまではあくまでも、洋館調査隊に参加する体で加入してね。他にも誰が洋館内部に侵入するのか把握したいこともあって、あの場に赴いたんだが……」  
チラリ

「……」コクリ

なお先輩が、コロ先輩とアイコンタクトを取る。コロ先輩はというと……何も言いはしないが、その顔は真剣でなお先輩の言葉に心から同意しているように見えた。

「洋館の前に辿り着いて、神村さんが森の中で潜んでいた君を打ち落とし、速水さんが君の制作した資料を見せるために僕達を呼んだ時だったかな……？ ……自分でもどうしてあんなことを言ってしまったのか……。自分の行動に対して、いまだに理解が及ばないんだが、勝手に……いやでもあれは自分の意思……？ とにかく、気が付いたら洋館の中に入ってしまっていたんだ。あとは説明した通りさ。事態に気が付いてしらみつぶしの戦法として、まずは僕たち以外にも2階で洋館探検している1年生たちが居ないかどうか調査して、1階に降りたところで日ノ出さんと合流、その後に君達と……という流れ



でね」

彼の言葉に、こちらとしては顔を怪訝な顔をして首をかしげる。つまり、その、なんだ。彼の話を纏めれば、彼等は初期段階では私と似たような立場で動いていて、元々から入る予定がなかった。でも、どういうわけか……自分自身でも理解できないままに入って、気が付けば洋館の中に居たという事か？

私は、軽い握りこぶしを作った左手を自身の口元へ持つてくる。

そういえば、神村も似たようなことを言っていたような……。あれは陽葵ちゃんだったか。入った直前は物静かだったのに、ある部屋からスイツチが入り出したように喋り出して、それまでの記憶が曖昧なような言葉を口走っていたと……。

それについさつき私もお先輩に対して激情を……——  
「……………」

「あの。えっと、日葵ちゃん……。実は私も……なお先輩と同じことがあって……。日葵ちゃんは必死に洋館に入ることを心寧ちゃんと一緒に止めてくれていたのに。でも、なぜだか分からないけど『洋館の中に魅力的なものがある』って、こう……うまく表現はできないんだけど、誰かに誘われた感じがあって……。気が付いたら——ごめんね。言い訳だよ。日葵ちゃん、それに心寧ちゃんも……私達の事、必死に止めてくれたのに……本当にごめん」

考え込む私に対して、陽葵ちゃんも声をかけてきた。ここでふと彼女を見る。彼女もお先輩と話している内容が聞こえていたのか、こちらを見つめており視線が合うと自分の行動に理解ができておらず気分の悪そうな、不安そうな顔で当時の状況を話してくれた。

……2人の証言をへクトウルフ神話〈技能に照らし合わせて考えてみる。通路が伸びる現象については、何の検討も付かない状況ではあったが、その結果や犠牲者の手記の内容だけで今回の事件が魔族によるものと判断を下してしまうのは早計だろう。

現に手記の中では、その魔族達も何者かの襲撃を受けていた。それがクトウルフ神話的事象だったのか、それとも以前鹿之助くんが私に教えてくれた高位魔族によるものだったのかで対応はかなり異なっ

てくる。

ひとまず謝る2人と、こちらを見つめてくる心寧ちゃんとコロ先輩に対して『大丈夫。分かっているから。怒ってないよ。でも今は、少しだけ考え事をさせて』と少し微笑みながらジエスチャーを送る。それから軽い握りこぶしを作っていた左手で、頭をコンコンと叩きながら目を瞑り前世での記憶を甦らせる。

……  
……  
……

……  
……  
……

「——まさか」

ここでふと一つの呪文を思い出した。

この呪文は私の祖先を名乗る親戚が愛用していた呪文であり、彼女の実家、元日元旦の親戚一同の集まりの際に武装警察官<sup>襲撃者</sup>が現れたときや、私が従姉弟の甥姪達の面倒を見ながら眺めていた彼等の遊び『昆虫王者ムシキング（昆虫リアルファイト版）』を練り広げているところ<sup>あの人</sup>に祖先がふらりと割って入ってきて、《陰陽道呪術・蟲毒》を目前で何度か見せてもらったこともある。

そして、『雨降洋館の壁田 鋼人』について調査した際の『藩主の武士を口先一つで同士討ちにさせた』という情報。

私がお先輩に抱いてしまった破壊的衝動。

2人から聞かされた、洋館へ入る直前にあれだけの会話がありながらも『気が付いたら』洋館内に居たという情報。

あの日、親戚の先祖の家で起きた出来事……。

——祖先が唱えていたあの呪文の名称。あの呪文の名称は——  
——確か……《魔術師の支配支配》……？

……断定的なことは言えないが、それでも犠牲者の意に反して何者かの思惑通りに行動させることのできる魔術と言えはこの呪文が妥当だろう。私の知る限りでは、この呪文を掛ける際には、犠牲者が術者の最長10m以内に存在していなければならないという制約があるのだが……。あの場に居なかったという保証はどこにもないが、もしやこの呪文は肉眼で捉えていなくとも発動が可能なものなのか？

他の可能性も鑑みるが……洋館の外あの場では、私には《歌姫の讚美歌セイレーンの歌声》は聞こえてこなかった。私の視界に、見事にカットされたダイヤモンドが宙に浮かんでいた……。などという状況もなかったのだ。これまでの情報で、考えられるものと言えればこれしかない。

ここで追加の問題を上げるとするならば、術者は誰なのか？という事だ。ドレスを纏った首のない貴婦人か？ それともつと別のクトゥルフ神話的存在なのか。

ひとまずはクトゥルフ神話的存在が一枚噛んでいる……と見ておくべきだろう。玄関付近でのやり取りを見ていた何者かの仕業だと考えることは間違いはない。

これが例え対魔忍世界側の高位魔族による魔法の一種だと仮定した場合でも、呪文の効果が消えるタイミングや、神村が大きな物音を出すまでの間。侵入者が何者からも襲撃を受けなかった疑問点などが上げられる。ここから考えられる推測として、術者が《魔術師の支配》を用いていた場合、その人物は対象2人……あるいはあの場に居た全員に《魔術師の支配》を掛けた結果、MP切れ……あるいは目的を達成したことが予測できる。

こんな死地同然の洋館に獲物を侵入させるような存在だ。きっと正気ではあるまい。この対魔忍世界線で協力関係を築けそうな仲間探索者ではないことに遺憾の意を覚えるが、むしろ危険人物であるならば遠慮なく危険の芽を摘み取る大義名分も得られる。必然的に邪魔者に対する私の殺意と決意は塗り固められていく。

呪文の持続効果に關しても、さほど長時間のあいだの拘束をされなかつたことから、術者の区切りとしては洋館内におびき寄せるのが目的だったのだろう。あとは神村自身の身に起こったように、精神的な揺さぶりを仕掛けて冷静な判断を鈍らせる目的とか。私が抱いた激情は仲間割れを促す行為だったとか。

何がともあれ私が介入している以上、これ以上は友達や先輩を術者の思い通りにはさせない。

## Episode 56 『行動制約と焦燥』

「お待たせしました——なお先輩。それに陽葵ちゃんも。なんとなく、こちらでも整理がつかまりました。もう起こってしまったことは仕方のないことなので、過去を振り返るよりも今後どうするか考えましょう」

「……日葵ちゃん」

「陽葵ちゃん、涙ぐむのは後です。その涙は脱出できた時のために取っておいてください。私は泣いている陽葵ちゃんよりも、この洋館から脱出する方法を探る前向きな陽葵ちゃんを見て居たいです」

「……うん……」

「なお先輩から聞きましたよ？ 陽葵ちゃん『まっすぐ歩いていればいつか外に出られるだろう！』の精神で、ループしている可能性のある廊下で玄関を目指して歩いていたんですってね」

「……あ。その話は……」

「思わず笑っちゃいました。でも、それこそ陽葵ちゃんらしいと思います。だから、ね？ その明るさで私を励まして貰ってもいいですか？ 陽葵ちゃんが元気で居てくれると、私も頑張ろうっていう活力が湧いてきますし、みんなも『脱出しよう！』って気力も湧いてきますから」

「うん……ありがとう、日葵ちゃん。泣きべそをかくのはやめる。うん！ 脱出、するぞー！」

「ははは。その調子です。さて……陽葵ちゃんが明るくなったところで、なお先輩。私が皆さんに指揮することとしては、3つです」

陽葵ちゃんを励まし彼女が本調子に戻ったあたりで、こちらを微笑ましそうな顔で見ているなお先輩へと向き直った。私のスイツチの入った引き締まった表情に切り替わったことに釣られてか、彼も緩み切った顔が緊急時上級生として相応しい顔へと変わった時にこちらの指揮の内容を伝える。

指揮と言っても、伝えたものは非常にシンプルなもので、主に部隊グループとして動く上で “必ず” 守ってほしい行動制約であった。

・守ってほしい行動制約

【1つ目】 極力。大声や大きな物音を出す行為を控えること。  
【2つ目】 室内を除いて「必ず」6人全員で固まって行動すること。  
【3つ目】 当面の目標として洋館を脱出するための『鍵』を探すこと。

以上の3つを守ってくれるだけで、生存率は雲泥の差となる見込みだ。

それ以外の事についてはこちらから求めるつもりはない。

これはクトゥルフ神話TRPG世界線上での経験論だが、こうしろ、ああしろと口うるさく人に指示ばかり出している軍師様って奴は嫌われる傾向にある。

その人物がどんなに他の探索者からは慕われていたという話<sup>設定</sup>としても、必ず一部の探索者<sup>仲間</sup>からは反感を買っていた。私も初心<sup>ルーキー</sup>だった頃、あれこれ命令ばかりして動きの効率化を求めてきた輩に反感の意を抱いたこともある。反面教師からの学びとなるが、こういうのは1つの目標を設定し互いの利益・生存にもつながる最低限の指揮<sup>ルーラル</sup>に基づいて、様々な主体性を促しながら行っていくほうが円滑に進むことが多い。無論、逆効果の場合も存在するが、今の状況や離反者<sup>神村舞華</sup>の可能性の事を考えるならば今はそうした方がいいと判断した。それに、この手法をとることは悪いことばかりじゃない。その枠組み<sup>ルーラル内</sup>で、比較的安全に新規探索者<sup>キー</sup>たちは自分で物事を考え、成長もしていく。

そして『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』39頁「5段落目」にもあるように『次の世代へと託し。育て。自分達よりももつと強くなつた世代に任せる』ことにもつながっていくことになる。

それに私達は軍隊や警察のような組織じゃない。五車学園という学校に集う、ただの一般的な何処にでもいる学生集団なのだから。

「……必ず全員で生きて洋館を出しましょう。約束です。……その為にもこの協力をお願いします」

私のお願いに對し、向こう側で扉の警備を行っている神村を除く4人は希望のある表情で首を力強く縦に振る。これは、とてもいい傾向

だ。皆がこの洋館から出ることに関して、出られる・出ようと思っ  
ているという証拠でもあった。

「……では神村<sup>彼</sup>さん<sup>女</sup>には、僕から伝えておこう」

「えっと、鍵……鍵と言うと日葵ちゃんが纏めてくれた『犠牲者の手記  
2』に書かれていた鍵のことだよな？ その鍵を探すのは大変そうだ  
けど、6人で探すんだからきつと見つかるに違いないよね！」

「一体、どんな鍵なんでしょう？ 魔族が用いる鍵でなかつ、この  
ループする通路や洋館から抜け出すようなものですか、鍵穴に用い  
る金属製で棒状の鍵ではなく特殊な形状の場合も考えられますよね  
？」

「うーん……どんな形なんだろう……いざとなったらそれっぽいものを  
全部持って歩くとか？」

さらに、さつそく私のお願いを実践してくれているのか、先ほども  
で賑やかな声色だった陽葵ちゃんもまた少しだけ声のトーンを落と  
して、無謀とも思える『鍵』の搜索に前向きな姿勢を見せてくれる。

「……………」

「ん、分かった。頼むよ」

ここでコロ先輩はなお先輩にのみ聞き取れるような声で、何かを話  
しかけると一足先に神村さんの方へと駆け寄って行く。横目で確認  
する分に私の案をなお先輩の代わりに伝達……しに行ったわけでは  
なく、何やら出入り口の一点を集中して見つめているようだった。

「ああ、気にすることは無いよ。万が一を考え、彼女も神村さんの補助  
に向かったのさ。真田先輩の舎弟という事もあるし、彼女1人だと何  
かと心配だからね」

私の視線に気が付いたのかコロ先輩の行動について、なお先輩が補  
足を入れてくれる。その後も神村の動向を観察するが、流石に3年の  
先輩に対してまで無差別に突つかかるようなことは無く、時々襟足を  
かき上げながら、ジロリとこちらに『話はまだ纏まらねえのか』と言  
いたげに見つめてくるぐらいだった。

ここで心寧ちゃんと陽葵ちゃんへと視線を移す。彼女たちはまだ  
鍵について話し合っている。いろいろ想像を膨らませてくれている

ところ悪いとは思ったが、私の中で既に『鍵』について検討はついていた。

おそらく……というよりも確定的なものとなるが、15年前この洋館から無事に脱出することができた学生が所有していた御守りの中身。あの梵字のような文字列が書かれたプラスチックによく似たクレジットカード大のカード、あの『カードキー』のことだろう。

親族の了承を得ることなく、危険を承知で形見の品を暴いたりスクが、ここでリターンとして帰ってくるとは……。これだから少し踏み込んだ探索は止められねえな。

ひとまず、話が一段落ついた頃合いで、鍵の形状についても3人に情報共有する。

……

……

……

なお先輩が神村とコロ先輩に対し隊長間で話し合った内容を共有し、陽葵ちゃんもまた探す必要のある『鍵』の形状を彼女達へと伝達してくれる。

ひとまず鍵を搜索する進軍スタイルは、ドレスを纏った首のない貴婦人が消えていった方向へと進むものとし円陣型に展開した。

一番危険なポジションではあるが先頭に私、青空<sup>釘貫</sup>、日葵<sup>神葬</sup>が立つ。突然の襲撃でも消火器で〈へ応戦〉できるように進む。私の右隣に、相手の骨を優に砕くことのできる近接戦に特化し、獅子舞の頭の装飾を施した鉄球を両手で持つ陽葵ちゃん。その後ろにモデルガンを構えた援護射撃型のなお先輩が着く。神村を私の真後ろでありかつ殿とし、万が一ロケットランチャーを頼る状況になったとしてもバックブラストが直撃する可能性を最小限に。直撃したとしても被害は私のみ。他の4人は最寄りの扉を遮蔽物にするか、しゃがみ込むか壁側に身を寄せて躲せるような布陣とした。神村の左隣には心寧ちゃん。後方の警戒および外敵にゼロ距離の位置まで近接を許してしまった場合の攻撃役だ。心寧ちゃんの背中、私の左脇を護ってくれるのがコロ先輩となった。いざとなればその背中に背負っている剣を抜いて戦つ



てくれるだろう。

本当であれば、私、神村、なお先輩の射撃武器型3人は後方で援護射撃することが望ましいが……背後からの奇襲やバックブラストの犠牲者にも備えた布陣を考えると遠近混合の立ち位置が安定している。

『……………』

誰も何も話さずに淡々と調査を進めていく。部屋に入るときは全員で侵入し、室内に置かれたベッドの下やクローゼット、時にはメモの裏まで細かく鍵らしきものを見落とさないように〈目星〉を付けながら調査をしていく。

またその際に、亡霊からの襲撃に備えて室内側から神村となお先輩は廊下と出入り口の警戒にあたっていた。

最初は慣れない様子で、クローゼットの中身やタンスの引き戸、本棚の中を調べる陽葵ちゃんと心寧ちゃんの2人だったが、次第に私が〈目星〉をつけて探しているポイントも分かってきたのか部屋の調査を重ねるごとに探索の手際もよくなっている。

彼女達がNPC的存在でなければ、さぞや優秀な新規探索者として期待できただろう。

——いいや。私はなんてことを酷いことを考えているのだろうか。探索者なんて毎度厄介ごとに巻き込まれ、いずれは……最後は狂気に侵食され世界から乖離した存在となるのだ。そんな人生なんて、送らない方がきつと幸せに違いない。

彼女達が探索者になつてくれるなんて、酷なことが頭に思い浮かんだ瞬間。邪念を振り払うかのように首を横に振り、鍵探しへと戻るのがあった。

……………

……………

……………

…

……

……

「ぐっ……」

しらみつぶしに室内の調査を始めてから、少なくとも60部屋を越えた辺りでズキリと脚が痛み始める。怒りによるアドレナリンやドーパミン物質を分泌できるような状況が無かったせいかな脳内麻薬も切れかかっているようだ。

……まずいな。……でもよかった。今の呻いた声は一緒に鍵を探している3人（陽葵ちゃん、心寧ちゃん、コロ先輩）には聴かれなかった様子で、彼女達は黙々と室内の家具を事細かに調べ上げている。その隙を見計らって、部屋の隅に寄って頭をひねり考える。

——考える。考える、私。

——いつもはどうしていた？

マフィアに掴まった際。尋問として受けた顔側面にゴルフ用のドライバーを叩きつけられたあの時にはどうしていた？ そうだ。顔面の骨と頭蓋の一部を叩き割られたときだ。他にも狂気に陥った仲間の放火で逃げ道が飛び降りる選択しかなかったとき、私はどうやって痛みを耐え凌いでいた？ 深海に潜む亜人／奇妙な皮膚病患者から槍を突き立てられたときは？

……駄目だ。この思い出は参考にならない。厄介ごとに巻き込まれたときには、他の探索者仲間に〈医学〉や〈応急手当〉に長けている仲間が居て彼等に治療をしてもらったり、時には神秘的な魔術の力で治してもらったり、その負傷を受けた直後にアドレナリンが激しく分泌するような怒濤のイベント出来事があつて耐えられていただけだ。

こんな時には『新クトゥルフ神話TRPG』選択ルール：幸運を消

費して意識を保つ 121頁は役には立たない。あれは、あくまでも  
気絶してしまうような肉体的損傷を受けた場合でも、意識を無理矢理  
にでも保ち続けるような荒業であり、この耐え難い肉体の苦痛を緩和  
させるような効果は持ち合わせていない。最悪な事にそんな都合の  
良いルールは存在しないのだ。クソツ……………

## Episode 57 『休息の時間』

幸いにも私達の移動速度は落ちてはいない。私の左足が碎けて激痛は走ったままだが、神村から心配されたときに啖呵を切った時と変わらない移動速度で……歩む速度だけは落とさずに進むことができている。

あれから鍵はまだ見つかっていない。クレジットカード大のカードキー状の鍵なのだが、それらしいものが見つかったと思えば……現場監督の手記にあったように、誰かが燃やしたかのようなカードキーの残骸ばかりだった。

しかも、それがベッドの下やマットレスと枕の間、グズグズに崩れた本の隙間から〈目星〉をつけて発見する必要がある分、こちらは希望を見せつけられながらも嘲笑われているかのような……希望は見えているのに手が届かないようなもどかしさを煽られる。その脱出のためのカードキーを燃やした輩は、相当性格の悪いクソ野郎だと容易に想像がつく。

しかしそんな状態であろうとも、ポジティブに振る舞ってくれている陽葵ちゃんは『殆どが半分以上、燃え尽きちゃっているけどもしかしたらどれかはまだ使えるだけの鍵になるかもしれないから、見つけたカードキーは全部 持っていくね！ 大丈夫！ 大丈夫！ こう見えて、私すごい力持ちだから！』と明るく、これまでに見つけたカードキーの残骸を全てジャケットのポケットやモノキニの隙間……時には胸の谷間に埋め込んで所持してくれている。

しかし……やはり、あの御守りの中身のように原形を留めて居なければ意味はないのだろう。

未だに私達はループから抜け出せていない。

……

……

……

誰も何も喋らずに歩き続けている。

でも、心なしか青空 日葵を除いて、チームのムードは悪くない。

陽葵ちゃんがムードメーカーが空気を盛り上げてくれていることもそうだが、あれから私達は1度たりともドレスを纏った首のない貴婦人と遭遇して<sup>エンカウンター</sup>いない。警戒はしているが、ずっと出会っていない。おかげで恐怖に怯えて、無理に走り回って逃げていないという状況がある程度、心に余裕を持たせているのだろう。私の極力、物音を出さないようにするという指揮はプラスの傾向へと傾いていた。

周囲から聞こえるのは、外が土砂振りのような雨音のみ。視界で得られる情報も代わり映えしない景色で、進行方向には先が見えなくなるほどにズラーっと左右の壁に規則正しく並んだ閉じられた扉。後退方向には進行方向となんら一切変わりのない扉の景色が、こちらも先が見えなくなるほどに並べられている。そんな扉だが、心寧ちゃんは一見しただけでは分からないような位置に炭で印をつけてくれていた。

室内も代わり映えがなく、大体同じような作り。……ここを拠点として用いていた魔族の寝具と作業台、作業着用のクローゼット……適度な感覚で娯楽室がある程度だった。各部屋の相違点と言えば、争いがあったかのように辺りに飛び散る血痕模様が不規則なことぐらいで、この血痕の様相が異なることや落ちているゴミや廃棄物の位置、そして心寧ちゃんが印をつけていないことが、私達は『この部屋に初めて訪れている』という実感を与えていた。

「妖精ちゃん。少しこちら辺で休まないか？」

「……」

同じ景色、同じ雑音、同じ部屋の造りで精神にガタが来ている私になお先輩から声が掛かる。

ロボットのよう<sup>に</sup>に心を殺して周囲・前方向の警戒・奇襲に対応するため進行方向の扉を開ける私はまるで、彼が次の攻撃目標であるかのように振り向いてしまう。

その声の大きさはきつと彼が考えているよりは抑えているのだろうが、外部から雨音しかしないこの廊下ではやけに大きく、響いて聞こえた。

「おつと……声が大きかったかな？」

「……いえ、そんなことはありませんよ。流石、なお先輩<sup>リィダ</sup>。皆さんもそろそろ疲れましたよね。この部屋で少しだけ休憩を挟みましょう」

私が声に反応し、振り返るのと同時になお先輩は自身の口を抑えるような素振りをした。なお先輩の前を歩いている陽葵ちゃんが私の顔を見てびつくりしたことから、きつと余程恐ろしい神経質そうな顔をしてしまったのだろう。

私の顔のこわばりがほぐれるよう両手で自身の両ほっぺたを挟んで回し揉み、笑ってみせる。

……

……

……

この部屋でも、休憩の前に一通りの探索は済ませたが鍵はなかった。

窓から見える僅かな空は、どんよりと鉛色の雲があつて空からは霧がかつたかのような雨が絶え間なく降り注いでいる。窓の外はすぐ森があり、先ほど入った部屋と変わってないのではないかと錯覚するほど、こちらに変哲のない景色だった。

陽葵ちゃんはこの部屋の調査を済ませる前。真つ先に私の元へ椅子を引きずつて持つて来てくれたが、自分でも座つたら最後……立ち上がる事ができなくなってしまうような……そんな気がして、やりわりとした言葉で左足の痛みは立っていた方が楽だと伝え壁に寄りかかる。

「ねーえー？　心寧ちゃんほどのカードキーなら機能しそうだと思うー？」

「そうですね……やはり最低でも半分以上は残ったものでないと、鍵としては機能しないのではないのでしょうか？」

「だよねー！　そう考えると、拾ってきたカードキーで機能しそうなものは——」

この休憩時間中。陽葵ちゃんと心寧ちゃんはこれまでに集めたカードキーの残骸を取り出して、どのカードキーが脱出のカギとしてまだ機能しそうか相談し合っている。あの2人の周りだけ穏やかで

日常を連想させるような空気がただよい、彼女達を外へ逃がそうという気持ちと、こちらを励ます暖かい気持ちにしてくれる。

コロ先輩はドレスを纏った首のない貴婦人の犠牲になつた魔族達を追悼しているのか、壁に付着した血液に手を当てて俯いていた。人魂は彼女の周りをまだぐるぐると回っており、その様子は成仏しきれない魔族か他の犠牲者が自分達も外へ連れ出してもらおうと必死にアピールしているようにも見える。その頃、なお先輩は持つてきたライフルの整備をしているようだった。

それにしてもなお先輩のライフルだが、その造形は私の前世で『FN F2000』と呼ばれていた銃の形と似通っていた。私の知っている『FN F2000』と異なる部分と例えば、本体を横長に引き延ばして、それに本体を覆うような装甲とSF要素とサイバーパンク要素を追加しているような見た目をしていることだろう。また彼のお気に入りのカラーでもあるのか、銃もまたプラグスーツと同じ赤、黒、白の3カラー要素で彩られていた。

「……」

「！」

「ん……」

「……♪」

私がいままじとその銃を見ていると、彼もその視線に気が付いたのかこちらに視線を返してくる。だからと言ってどうという事ではないのだが……そのまま視線を気にすることもなく『良い銃ですね』と顎と指先でサインを送ると、にっこりと笑って私がその銃を眺めやすいような立ち位置で整備をし始めてくれた。

私はここでふと腕時計を見る。体感ではかれこれ2〜3時間は調査したつもりで居たが、時計の針はどういうわけか20分程度しか進んでいない。スマホも同じだ。泥が染み込んだことが災いしてかその機能を完全に停止させてしまつて分からないが表示されている時刻は先ほどからそこまで進んでいないような気がした。

一瞬『時間軸までもが歪んでいる』などという可能性も脳裏に過ぎる。だが、ここで日常オーラを放っている1年生2人組を含めた彼・

彼女達の士気を落とすわけにもいかなかった。モチベーションは大  
事だ。それがなければ人間は今の作業を続けることを止めてしま  
う。だから、そつと何事もなかったかのように懐へスマホをしま  
った。

「おい、なにコソコソとしてやがんだ？」

「——ッ！」

なお先輩とは反対側からの不意を突いたドスの効いた声掛けに加  
え、患側の脚に痛み。

重心を掛けている健在の足がビクンツと跳ねてしまう。おかげで  
私はバランスを崩し、患足側から倒れ込みかけてしまった。

「チツ！ ボーツとしてんじやねえよ！」

「ぐえっ！」

彼女<sup>神村</sup>は倒れ込む私の襟首を、まるで母猫が子猫の首根つこを加え持  
ち上げるように支える。結果的に衣服で締まる気道。

まるで随分の食堂での出来事をそのまま仕返しされるような形で  
はあったが、間一髪。不自然な姿勢のまま更なる負傷を重ねそうにな  
る前に持ち直すことができた。

「ゲホゲホッ！」

「ちったあ首を絞められる側の気持ちも分かったって顔してやがる  
な。——大丈夫だ。ちよつとした世間話だよ。別に揉め事じゃねえ。  
今のはデスメタル花子のヤツが転びそうになったから、俺が襟首を掴  
んで支えてやっただけだ。今は休憩時間なんだろう？ なんだよ。俺  
達を指揮する隊長<sup>ヤツ</sup>と今後の事を話しちゃ悪いっていうのか？」

首が締まってむせる私に、他の4人が異変に気づき近寄って来よう  
とするが神村が先に周囲をへ威圧する。それでも4人はお互いに仲  
の良い相手同士と顔を見合わせたあと、心配そうな顔をして近づこう  
としてきた。でも私としてもここで、揉め事を引き起こすつもりは毛  
頭なかったため『大丈夫だ』と仕草を彼女達に送る。

しかし最終的には、なお先輩がいつでもこちらの喧嘩を止められる  
ような位置で待機をはじめ、陽葵ちゃんは広げていた鍵の残骸をそそ  
くさとベッドの片隅に片付けると心配そうな顔でこちらを眺め始め  
ていた。



「ゴホッ……倒れ込むことを支えて下さったのは感謝します。それで、話とは？ ……手短に済ませましょう」

「そんな邪険にすんじゃねーよ。ちよつとした世間話だよ。世間話」  
「はあ……」

「……タバコは吸うか？」

「……結構です。未成年の身体で喫煙を行うと、がんや虚血性心疾患、ニコチンへの依存度が高くなる傾向があるので」

「ケツ。やっぱてめえは優等生ちゃんだな。噂に基づいた行動は、やべえ」のに、こういうことは遠慮しやがる」

「ええ。健康は何物にも代えがたいものですからね。神村さんもいつから喫煙しているのか存じ上げませんが、将来の事を考えるのなら辞めておくことを推奨します。厚生労働省が掲載しているWebページ『Q. 未成年者の喫煙について』を閲覧したことはありますか？

今の時代では魔界医療があるため、そのような疾病などいとも簡単に治せるのかもしれませんが……百害あって一利なし。恰好がついて苛立ちは抑えられるかもしれませんが……鎮痛剤にはならないある種の薬物ですよ？」

「ああ？？」

彼女との会話で空気がピリピリとし始める。

これは私がアドレナリンを分泌するために彼女にわざと敵意を向けているのか、それとも様々な彼女のことを嫌いになる要素が累積しすぎた結果なのか……。ともかく身長の関係上、こちらを見下ろし睨みつける彼女を、下から不快そうな顔をして上目遣いで見つめ返す。

でも会話を振り返れば……私の方が悪かったかな。発言に余計な一言があまりにも多かつたような気がする。

「……すみません。話題を変えましょう」

「……そうだな。で、日ノ出に砕かれた、左足の調子はどうなんだ？ 俺の見立てじゃ芳しくないようだが」

彼女の言葉で陽葵ちゃんが、勢いよく立ち上がりベッド上に並べられていた鍵の残骸がバラバラと地面に何枚かが零れ落ちる。

大した物音ではないが、過敏になっている私の注意を引くには十分

な物音だった。彼女は今まで見せていた明るく振る舞う様子が、取り繕っていた仮面が剥がれてしまったかのように涙目になってわなわなと震え始めてしまう。すぐに心寧ちゃんが、陽葵ちゃんの肩を持ってフオローに入るが……彼女の顔は晴れるどころか、今にも罪悪感で潰れてしまいそうな……そんな顔だ。

ダメだ！ 今、ムードメーカーの要ともなっている彼女が沈んでしまったら、次第にチームの士気はガタ落ちしてしまうに違いない。ここは私も励まさなければ――

「神村さん、言葉を選んでから発言してください。――そんな顔しなくても大丈夫ですよ。陽葵ちゃん。事前に私が用意していた薬のおかげで、へっちゃらです。こんな傷なんともないですから。泥まみれの姿で徘徊していた私が悪いんです。だから、気にしないで。陽葵ちゃんは悪くないですよ。でも、ちよつと体調悪そうに見えるなら……今日という日のために夜更かしと早起きをしたこともあって……少し、眠いですかね？ ふぁーあ……」

なんともないような顔をしてヘラヘラと笑ってみせる。痛いけど。笑う。それから、辛そうに見えるのは睡魔と戦っているせいだと言いたげに大きなあくびをして見せた。

……うん、よし。少しだけ落ち着いたな。

今、彼女は心寧ちゃんと一緒に床へ落としてしまったカードキーの残骸をせっせと拾い上げている。でも、拾い上げているその様子も何処か上の空で、私の事が気になるのか耳だけはこちらに向けて会話の内容を探っているようにも見えた。

Episode 58 『神村 舞華』

神村は、陽葵ちゃんから視線を逸らして小声で『……悪りい』と呟いている。

きつと彼女も今の軽い発言で、陽葵ちゃんがあんなふうに取り乱すとは思ってなかったのだろう。タバコの煙を激しく肺へと取り込んでは噎せ込み始めた。

「……………」

「ゴホツゴホツ……！ ……お、おい、そんな目でこつちを見んなよ。……本当に悪かったって……」

「……………」

「ああ、日ノ出。悪かった。すまねえ」

「う、うん……でも日葵ちゃ——」

「大丈夫ですよ」

「……うん」

「……」

「……」

「……だがよ。俺がこんな話題を振ったのは、別にてめえの友達である日ノ出に意地悪したかったわけじゃねえ。なあ？ ……自分でも分かってんだろ？ 我慢して無茶な行動してるってよ。少なくとも、他の4人の目は誤魔化せても俺の目だけはごまかせねえぞ」

「……………」

しばらくの沈黙のあと。それでも彼女は言いたいことがあるのか、陽葵ちゃんには聞こえないような声の大ききさでこちらの容態についてつついてくる。確かに神村の言葉は的を射ていた。

本当は足はズキズキとして——今は眠気なんかが吹き飛ぶぐらいにズツキンズツキンと痛んでいる。早く休憩を切り上げて、歩き出したい。別に新たな痛みを自ら加えることに喜ぶ『マゾヒスト』というわけではないが、痛みを新たな痛みで麻痺させたいほどには現在の状況を煩わしく思っている。

——それでも私は説明書上では歩く事、走ることは理論上可能なの

だ。あとは実践するだけ。実践するだけ。なのだ。

だから必要以上に心配させたくなくて、陽葵ちゃんにも罪悪感も抱かせたくなくて……。先ほどは何とも無いような顔でにつこりと笑って、眠そうな顔して問題が無いように振る舞っていた。だって、陽葵ちゃんは悪くない、わるくないもん……。私が泥まみれで徘徊していたから――

「てめえが太ももに射ち込んでいた薬も、ありやホンモノじゃねえんだろ？ てめえの薬箱にはてめえで使用した薬瓶以外にも、きちつとラベルの張られた小瓶があった。日<sup>ヤ</sup>ノ出<sup>ツ</sup>を気遣って自分の身体に鞭を入れて動くのはてめえの勝手だ。だがな？ 俺もなお先輩に似たようなことを言われたが、我慢しすぎて後遺症が残った場合の日<sup>ヤ</sup>ノ出<sup>ツ</sup>の事を考えたことはあんのか？」

「……………」

胸倉を掴まれ引き寄せられる。でも、その手はすぐに離されて――少し彼女らしくもない他人を気遣うような言葉に、思わず向けていた不快そうな視線を取りやめ顔を上げて直接神村を見つめた。彼女もまたこちらを睨みつけることはやめ、いたって真面目な顔でこちらを見つめ返している。

しかし、今の一言で都合の悪いことに自身に掛けていた自己催眠が溶けてしまったような感覚もあった。折れた足が更に金づちで骨折部位を殴られているようにズキンズキンと再び痛み始める。それも先ほどよりも強く鋭く。これまでに負傷してきた身体の至る所が、これ以上の無理は止めると反乱を起こすように痛み始める。奥歯がガチガチする。無理やり歩いたことで肉のみで繋がっている部位の骨が、近辺の血管や筋肉をズタズタに引き裂いてしまったかのような痛みが響き始める。

隠そうとはするが……。駄目だ。顔が歪み始めてしまう。視線が左右の足元に移ってしまう。俯き、目を瞑り、隠す。コントローラだ。コントローラ。痛くねえ。こんな怪我、今の私なら1週間ぐらいで完治できる。私はモルヒネを打った。打ったんだ。まだ効果が来てないだけ。プラシーボ効果じゃない。わたしは誰がなんとおとうと

打ったんだ。

ぐっ……うまく考えが纏まらなくなる。まずい。でも返事を返さなきゃ。何か、返さなきゃ……。誤魔化しだつて思われないうように、やっ神村の目をみて、なにか……

「……っ……では、どうしろと？ 私も最初こそ歩けなくなつたら、捨て置けと言おうと思つていましたが……そんなことを話そうものなら、きつと陽葵ちゃんは私の事を背負つてでも連れて行こうと思つていますよ。そ、そんなことになれば必然的に鍵を探す移動速度も遅れます。襲撃があれば対応できる人数だつて限られてきます。であれば、多少の障害が残ろうとも私が歩いた方がいいでしょう？ 私が……わたしがいけないんです。あの時、泥を落としていけば……あの時、よそ見なんかしなければ……あのときわたしが、〈回避〉ロールができる状況にしておけば……わたしが、がまんすれば済むはなしなんですから」

——そう。私の身体は、説明書にあるように「キーパー」という存在が障害さえ認めなければ、どんなに酷使しようが、砕けて映画に登場する普通の人間では何もできない状態であろうが、あまつさえ四肢を失うハメになったとしても。死さえ迎えない限り肉体的に壊れることはないのだ。これは持論ではない。私の説明書である『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』61頁 肉体的な損傷（負傷） 4段落目に明記されていること。月棲獣によつて証明されたこと。だから彼女が心配しているような後遺症が残るなんてことは決して起こりえない。

つまりこの痛みも『人生』という長い視点で見れば、この洋館にいる一瞬のことにしか過ぎない。あの月棲獣共に拘束されて、いつ終わるかも分からない数日、数週間にわたる拷問に比べたら、ほんの短い僅かな期間。終わりのある痛みなのだと言ひ聞かせて堪える。

もちろん、あおぞら青空 ひまり日葵には頭の上がない悪いことをしているつてことも自覚している。もし彼女が無事で身体を返却することになつた時、万が一の可能性として足に障害を患つたキズモノにするのは私だつて心が痛い。その万が一が起きずとも、私の心臓付近を貫いた刺

突による傷跡は残っているのだから、足の表面にも何か痕跡が残るかもしれない。でも、私は今も無事かどうか定かではない青空 日葵の……彼女の身体を大切にするよりも、目前の助けられる可能性のある5人を優先したいのだ。

まるでトロツコ問題のようだが、わたし、釘貫 神葬はそうする。そうさせてもらう。

「……てめえの悪いところが分かったぜ。お前。1人で何とかしようとするタイプだろ」

「――」  
それは違う……。

でも、何も言い返せない。痛み of せいではない。これは神村 舞華に事情を説明できるほど転生者の説明は、単純な内容ではないのだ。

「……ッ！」  
彼女の言葉に、かつてピンチの時、自分の憧れていたヒーローになれなかった鹿之助くんへかけた言葉がフラッシュバックする。

――「1人1人に足りないところがあっても、みんなで補い合えればよい」のですからね。

やめろ。そんなことは分かっている。十分に承知している。

だが、今はそんな周囲の協力を得られるような状況ではない。自分でも分かっているだろう？

この場には五車学園の生徒は居ても他の探索者は居ない。私、1人だけなのだ。だから私1人でなんとかしなければならない。なんとかしなければならぬ状況なのだ。たかが足の骨が折れた程度で弱音を吐いている場合ではないのだ。頑張らなきや。わたしは頑張らなきや……。

誰が他に頑張るといふのだ……？

「……ええ。……今は……他の探索者が居ないですからね。わたしが……私が……高校生の皆さんに甘えるわけにもいきませんし」

両目を瞑って、うつむき後頭部を掻く。

「はあ？ 俺達が頼りねえって言いてえのか？ それに、てめえも高校生だろうが。なに大人ぶったことをほざいてやがる。ふざけてん

じゃねえ」

「ああ——そうですな……今は……いま、は……そう、でした……そう  
でした……ですが——」

「ああ、じれつてえなあー！　ですがもクソがあるか！　俺は面と向  
かってこういうこと言うキャラじゃねえし、こつちがよそ見している  
間にいきなり首を絞めてきたり、不意打ちで人の頸椎をぶん殴って来  
ようとするてめえが死ぬほど気に食わねえ!!!　だがな！　危険を顧  
みず他人を助けに来るときながら、真っ先に弱って脱落しそうなヤツを  
黙ってみてることなんかできねえし、それを見捨てるほど俺も性根は  
腐ってねえ！　日ノ出を気遣って無理するぐらいなら、俺が背負って  
やるから辛いなら頼って来いって直接言っただけだ!!!　俺がてめえに  
言いたいことはそれだけだよ！　この大馬鹿野郎！」

神村は不器用ながらも言いたいことは言えたのか、彼女の方がア  
ドレナリンとドーパミンが激しく分泌しているかのような怒りを散  
らして去っていく。それから、こちらを凝視していた陽葵ちゃんと心  
寧ちゃんも座っているベッドの対面側にあるベッドに腰を掛けると  
拗ねた子供のように胡坐をかいて壁に向き直った。

それでも彼女なりの気遣いは分かったし、鹿之助くんが彼女を好き  
かどうかはひとまず置いて、〃憧れ〃として尊敬している部分も  
理解できたような気がする。

この神村　舞華という人物。こんなヤンキースタイルで周囲を寄  
せ付けないような怖い雰囲気を持っているが、本当は不器用で根は優  
しい……皮肉を込めた言い方ではあるが、平成の時代SNSで美化さ  
れていたような〃昭和時代の不良〃というやつなのかもしれない。

絵空事、漫画から飛び出してきたような人物だが、元々この世界は  
私の認識だと凌辱ハードポルノゲームの世界だ。そんな美化された  
〃昭和のヤンキー〃と呼べる本物が実在したとて、何もおかしくはな  
い。……それに五車町って、ニュータウン（笑）な田舎町だし……性  
根は曲がってない不良少女なんてありそうな話ではある。

惚れこそしないし、嫌いという感情が苦手に戻った程度ではある  
が、彼女に対する気持ちが少しだけ改まった。

「スウ……………フウ……………スウ……………フウ……………——大丈夫。大丈夫だ。まだ歩ける。歩ける。わたしは、ベテランだ。わた、しは……………おと、な、だ……………。まだ……………たえ、られ……………る。こんな、場所で……………倒れない……………。いざとなったら……………ひやく、21ページの『幸運を消費して意識を保つ』で……………意識を——」

ヨロヨロとよろめいたりして他4人に余計な心配させないように、ひとまず壁に手をつけて身体を支えながら平常を装って最も近い部屋の角に行く。

彼女等に私の表情が見えないようにと壁に向かい合うようにして〈瞑想〉に入る。痛みをコントロールするためにも大きな深呼吸と励ましの言葉を小さな声色で繰り返す。

頭の中で『いつそのこと、あのオフショルダーの喪服を着用した少女の忍者刀で左足の膝から下を切断してしまえば、きつと苦痛が和らぐぞ』と、誰か。誰か？ 私が。私か？ 私の頭の中の声だから、わたししかいないだろ。わたし。私が語りかけてくるが判断力が低下しているのに違いないと自分に言い聞かせて正気を保つ。嫌に固い固形物と化した唾が喉を通っていく。

そうか、あのコロ先輩の背中に背負っているのは、剣じゃなくて忍者刀なのか……………対魔忍世界にぴったりの武装だ、なあ。

陽葵ちゃんが心配そうな顔で見ている。くつ……………視界が霞みダブって見える。額に流れる脂汗を拭う。大丈夫だ。限界は引き延ばせる。気を強く保って。笑う。笑え。笑え。笑え。笑え。

洋館を出たら、五車学園の病院に入院して、魔界医療で治療する。きつと元通りになる。きつと後遺症もなく元通りになるから。大丈夫だと。自分に言い聞かせる。

「——さて、そろそろ行きましょう。長いこと休憩していると蓮魔先生達が到着してしまいます。……………逆に考えてみてください。蓮魔先生よりも早く脱出ができれば、おとがめなしですよ。はははっ。最高でしょ？ 口裏合わせて、おとがめなし。です。さあ、もう少しだけ。もう少しだけ頑張りましょう」

自分にも言い聞かせるように5人を鼓舞する。希望も見せる。笑



いかける。なんともない。なんともないんだ。大丈夫だ。あともう少しだけ。あともう少しだけ……。

そして先ほどと同じように何事もないように歩き——歩ける。幻覚だ。痛くない。足が捻れて、肉から骨が飛び出しているようにズボン越しから見えるけど、きつと疲れて幻覚を見ている。休まなきや。痛い。痛くない。大丈夫。あ、歩ける。歩く。歩け——

## Episode 59 『指揮系統は一任するわ』

次に一歩、前に踏み出した時。気が付いたら地面にうつ伏せで寝転がっていた。動けない。身体を引き起こさなきゃいけないのに、身体が動かない。視界が真っ暗だ。

ああ、この状況は……まずい通り越してやばい。まずい通り越してやばい状況は、まえさき市でえっちなマツサージ店を開いている方の蛇子ちゃんに、背後から骨が軋むほどに熱く抱きしめられてアへらされて以来だ。いや、あの時のレベルはまずいか？

やばいだと、やっぱり陽葵ちゃんの獅子舞モドキの頭部装飾された鉄球で左足の脛の骨を折った瞬間ぐらい？ でも今回のやばさレベルは、何処から選択を誤ったのか後悔し始めるレベルでやばい。

私の説明書の情報上では、問題なく動けるはずなのに動けない。何も見えない。データ説明書が使用が適応えなされていない。

すぐに皆が駆け寄って来てくれて、仰向けに床へ寝転がされる。

視界が、完全なブラックアウトから、ほのかに窓から差し込む淡い光で辛うじて照らされている室内と皆の顔が映し出される。みんなだ。この場にはみんながいる。

なんかみんな何か言ってるけど、よく聞こえない。突発性難聴を発症してしまったか？

ああ……ふと思うことがある。葬儀の棺桶から見下ろされる視界ってこんな感じなのかあ……。

手が誰かに握られる。なんだか入院先で、蛇子ちゃんやふうま君から『鹿之助くんが私と二度と会いたくないって言っている』だなんて、そんな話をしてもらった時にも似たようなことをしてもらったっけ。でもあの時のような温かい手ではないけれど、崖から落ちそうな私をしつかりと支えてくれているかのようなそんな安心できる手だった。誰の手かわからないけど。

いや、待ってくれ。今はそんな納得や関心を得ている状況ではない。そんなことを実況している暇がないほどに、まずいことが目の前で起きようとしている。起きてしまいそうになっている……！

ああ、まずい……！ 陽葵ちゃんが決壊する。決壊する。決壊した。決壊した！ 希望が！ ムードメーカーが!!!

これは何が急いで取り繕わないと！ ここで前向きなムードをガタガタにはいけない！

大丈夫！ 眠いの！ そう、これは眠い！

大丈夫！ 大丈夫だって。安心しろよ。すぐ、よくなるから！

ちよつと寝たら、よくなるから。でもずつと同じ場所に滞在するのは亡霊から発見されやすくなるし、私の事は捨てて行って良いから。そうそう。……なんでみんなそんな愕然としたり、困惑した顔するの？

『私だけをベッドに寝かして、少し仮眠を取らせる』って話だよ？

ちよつと眠いだけ。そう、これは眠いだけなの。言っただでしょ？ 昨日は夜更かした上で、今日は早起きしたから、眠いつて。これは皆にも言えることだよ！ こういう探検をするときはちゃんと事前に十分な睡眠を取ろうね！

だから、泣かないで陽葵ちゃん。ほら心寧ちゃんを困らせちゃだめだよ。あはは、陽葵ちゃんつて普段から体温高いでしょ。ぬぐった涙がすつごく熱いよ。私には金属ベッドとヒカキボルグがあるし、私だけ少し休んで、後でみんなと合流するから。鍵を見つけて先に外で待つて良いから。

みんな、なお先輩のいう事をよく聞いてね！ 脱出の『鍵』はこれぐらいの……クレジット大のカードキーだよ！ 私のいないところで分散したり、脱出の『鍵』を回収し忘れたり、私の合流が遅れているからつてどこかで待機しちゃだめだよ！ その時は私は私で打開策をちゃんと練っているから、大丈夫！

それじゃ、なお先輩と細かい引き継ぎのお話があるから、少し離れていてね。

大丈夫！ すぐ済むよ！

……

……

……

穂稀さん。年端も行かぬ貴方に指揮系統を委ねることは酷かもし

れませんが、あとのことは宜しくお願い致します。

……不安なのは分かります。ですが希望的観測を持ってください。脱出の糸口は見えていて、少し前に神村さんにお話されていらつしやられました。穂稀さんは……風紀隊の隊長を務めた経験があるのでしょう？ ならば、この状況は容易に打開できるはず。ここまで来れたのですから、亡霊と遭遇しない対策はバッチリでしょう？

錯乱なんかしてないですよ。私はわたしですし、これは私に定められている概念を実行しようとしているだけです。

錯乱されているのは穂稀さんの方ですね。落ち着いてください。

リーダーたるものが部下……いいえ、この場では仲間を錯乱や混乱させてはいけません。……今は年下であり、噂では問題児に分類されている私が言っても説得力がないでしょうけど。トップが混乱すること、すなわちその下につく仲間達も混乱してしまいますからね。

でも穂稀さんには、死々村さんという慣れ親しんだ友人がいるのですから、混乱を抑えきれないときや困った時は彼女を頼ってみるのも私もありだと思いますよ。貴方は彼女を信頼しており、彼女もまた貴方を信頼しているでしょう？ 言葉にしなくても、洋館内でのあなた方の関わりを見ていれば察することはできますよ。

報連相  
ホウレンソウの鉄則は知っていますか？ あれは報告、連絡、相談をしろという単調なルールではなく、本来の意味としてはリーダーのその仲間が気軽に話しやすい環境や態度を整えることなんです。そして、この鉄則はチームプレイには欠かせないものです。

……私はできませんでした。貴方に声を掛けられるあの時まで、険しい顔で指揮を執ってしまいました。でも、穂稀さんならできると思えます。なんて言っちゃって、あの神村さんをうまく懐柔されたのですから！

そのチームプレイを成し遂げるために、今の私から貴方に助言できることとして……。

まず陽葵ちゃんはムードメーカーなので、ここのご機嫌は適度に取って前向きな姿勢を保持させてください。私について触れてきた時は『すぐに合流する』と楽観的な姿勢で対応を。この場を離れると

ききという事を聞かなかつた場合には私に頼ってください。うまく説き伏せます。

心寧ちゃんは頭の回転が速いので、有事の際は戦闘よりも索敵や調査に回した方がいいと思います。それに両足が義足なのでこの部位を破壊するような事態になつた場合、私の二の舞を演じることになりかねません。そして彼女は何よりも頭の回転がはやいので……つまり。その分、繊細ではあるので適度に調子と様子を見守つて心のケアをしてあげてください。

私と言えた夕子ではございませんが、神村さんは猪突猛進なトラブルメーカー。ははは、知っているって顔ですね。ですが目標を狙撃する砲撃の腕は悪くないかと。彼女の放つ砲のバックブラスト……つまり彼女の背後にだけは立たないようにする・密室空間での砲撃を避けさせる警戒を常に怠らないようにさせてください。

……私はここで、亡霊を引き付けます。大丈夫です。いつものように今回もうまくやりますよ。だから――

ゴッ

……

……

……

Episode 60 『死に対する価値観』

…

…

…

「うっ……うう……?」

「あ……。なお先輩。日葵さんが目を覚ましました」

「速水さん、報告ありがとう。……さて、と。気分はどうかかな？ 妖精ちゃん」

「あれ……？ なお先輩？ 私は……えつと……？」

「まだ混乱しているようだが……錯乱はしていないようだね。まず僕の声は聞こえるかな？」

「あ……はい。聞こえますが……？ ツア……！」

——次に目が覚めた時には、いつの間にか神村に背負われる形で鍵の搜索を再開していた。神村のフワフワフワフワとしたオレンジ色のくせつ髪がこそばゆく、それが目を覚まさせる要因になったようだ。

しばしばとする目を凝らしながら周りを見ようとすると、鼻頭が痛いことに気が付く。鼻血こそ出ていないが、触れてみると青あざを押したかのような痛みが走る。この痛みはまるで小学生だったころ、正面に鉄棒があることに気づかず全力疾走で顔面をぶつけたときのような……ガンガンとした響く痛みだった。

「つたく。余計な手間ばかり増やしやがって！ 俺はてめえの悪いところをもう1つ見つけたぞ！ 自分が囧になる」 だとか、捨てて行け” だとかよ！ 動けなくなった時の自決や自己犠牲の判断が早過ぎなんだよ！ もっと他人を頼って妥協策を選択肢に増やしやがれ！」

「妖精ちゃん。君の本気を無に帰したことは謝るが、これは僕も神村さんの意見に賛同するよ。そうは言っても神村さん、もう少しばかり声を抑えてくれないか？」

「五車町に移住したばかりの新人のクセに、ベテランヅラをした青空 日葵がベラベラと自己犠牲前提の作戦を立案しやがって、俺を余計にイラ立たせなけりや大声は出さなかつただろうよっ！」

「そうだとしてもね、君の大声で洋館の亡霊を引き寄せる可能性があるんだ。だから、部隊全員の安全のためにも感情を制御してほしいわけ……」

「……おう、分かったよ。これ以上はしねえ。だがな？ 最後にもう1つ愚痴らせてくれたっていいだろうが、穂稀先輩に青空 日葵」

「聞くだけ聞こう」

「隊長つつても、穂稀先輩より青空あおぞら 日葵ひまり。俺はてめえに言いたいことがある……！」

「……あ」

「てめえ！ 隊長の癖に『必ず全員で生還しよう』って自分が言いだし  
た作戦のことを忘れてんじやねえよ！ 穂稀先輩との作戦を盗み聞  
きさせてもらったが、日アイツノ出とあんなに仲いいのに、見テキトリーな理由え透いた嘘で  
日ノ出を説納得させられるき伏せられる”とでも本当に思ってたのか!?”

「……………それは……………」

「そうだよ！ 日葵ちゃん！ 私は絶対に日葵ちゃんを置いて行つた  
り、捨てたりなんかしないよ！ 付き合いは短いけど、日葵ちゃんも  
心寧ちゃんと同じぐらい大切な友達だもん！ 見捨てるわけがない  
！ 見捨てられるわけがない！」

「……………すみません」

「まあまあまあでも、もうだいたいしょうぶあんせいにして……………」

目覚めて顔を上げたところで、ほぼ耳元から聞こえてきた神村から  
の怒声で、私の意識は冷や水を顔面にかけたかのように覚醒する。そ  
んな彼女にすぐになお先輩が仲介に入って、彼女の制御に入ってくれ  
たが彼は私のことを残念そうな顔でこちらを注視していた。

その後も顔の見えない神村に懇々と叱られたところで、陽葵ちゃん  
が神村の前に踊り出て、ふてくされたように頬を大きく膨らませて唇  
を尖らせる。

そんな四方八方からお叱りを受ける私に、やがてコロ先輩の仲裁と  
劳いの言葉が掛けられた。

話もひと段落ついて、意識がはつきりしたところで『仮眠終了！

あとは自分で歩けるから！』と降りようとすると、今度はコロ先輩と  
心寧ちゃんが背中を押さえつけて降りることもできない。そんな状  
況で廊下を進んでいる。

「なお先輩。こちらは大丈夫です、進行方向や背後からあの声は聞こ  
えてきてないですよ。はい。はいはいはい、隙あらば日葵さんは神村  
さんの背中から降りようとしなくてくださいね？」



「いやあ……でもお……神村さんの背中に泥がべつたりと……」

「ああ？ 泥なんか、この洋館から出られた後に洗濯すりやいいだろ！ てめえはぶつ倒れちまうぐらいの怪我人なんだから、このまま大人しく “お荷物” として背負われてやがれ!!!」

「……………はい」

「日葵ちゃん。ずっと寝言でも『陽葵ちゃんわたくしは悪くない』って言ってたけど、元はと言えば私が一番悪いよ。ちゃんと相手を確認せずに鉄球をぶつけたし……」

「だからそんなことはないですってば。その件は泥まみれで徘徊していた私が一番、悪いって何度言えば……。ところで……陽葵ちゃん。その私の改造消火器、重いでしょう？ それは置いて行って構わないんですよ?」

「何言っているの！ 片足の折れた日葵ちゃんが運べたんだよ？ これくらいへっちゃらだよ！ 軽い軽い!」

「いや、あのそれは……総重量が約15kgはあるはずなので重いはずですよ。私が作ったものなので重量ぐらいは把握しています。ほんとに無理しないで……。3連結しているんで、せめて2連結分は外して。それだけでも十分に扱えるから。ね？ お願い」

「それじゃあ、次の休憩時間の際にお願いするよ!」

「ケツ。……何が『無理しないで』だ。その片足が折れたままその15kgもある消火器を運んでいた奴が何かほざいてやがる……」

……………

……………

……………

あれから倒れて完全に動けなくなった後、私は軽く気絶してしまっただけらしい。

その後、すぐに意識を取り戻したらいいのだが……。

その時を境に、私との会話は基本的に一方通行。うわごとのように『これは眠いだけ、眠いだけなの』と繰り返し、泣きじゃくる陽葵ちゃんを励ましながら、ヘラヘラと笑って私をあの部屋に置いていくように促していたそうだ。それどころか、なお先輩と2人

きりの時間を設けて指揮系統の譲渡および私が動けなくなった時の作戦をひどく真面目……人格が完全に切り替わったかのような様子で垂れ流して居たらしく……随分と彼を混乱させたらしい。なお先輩曰く、洋館の中に入ってしまった自分を見ているようで気が気でなかったらしい。

最後はその状況を見かねた神村が、死角である頭上から私の顔をぶん殴って、一発派手にノックアウトした今度は確実に気絶させた後。殴った彼女が責任を持って背負い、『鍵』の再捜索に出たことが陽葵ちゃんの証言により判明した。

これは殴られたことによる一時的な記憶喪失なのか、それとも何者かによる《魔術師の支配》を受けていた影響か個人的には分かりかねるが……。私の記憶上では、陽葵ちゃんを慰めたり、見捨てるように促していたという会話の記憶が一切ない。しかし、この場にいる5人が口を揃えて同じことを言うという事は……嘘ではないのだろう。

私としても記憶上の有無は置いといて、そんな発想に至るような、思い当たる節はいくつかある。

まず今回の自己犠牲に関する作戦は、この対魔忍世界にやってきてから1回目初めの展開した作戦ではない。1年前の……ビルを占拠した東雲革命派と名乗るテロリストから、私の不注意のせいで対魔忍達が対魔忍するハメになりかけてしまった為、自分の尻拭いと対魔忍達を守るために実行している。結局あの時は、テロリストとゼロ距離で撃ち合ったのに、どういうわけか死亡することなく病院に入院したのだが……。

まあ、あの時のことなどはどうでもいい。今はこの行動原理について整理すべきだ。この行動はすべて私の説明書に記載された『新クトウルフ神話TRPG』11頁『勝者と敗者』の第二段落目に基づくものである。その定義文には、『超神話的存在の根本的な計画を阻止できるならば、1人の探索者の死は小さなこと』と定義されている以上、私が死ぬことに対してそれが彼等グループの生存に繋がるのであれば……。拷問狂の時のように苦しまずに死ぬるのであれば……と。時間を稼ぐための捨てすてがまり奸戦法として私が彼／彼女達を逃がす最終手段

として想定はしていた。

それでも、そもそもそんな私の胸の内にある真実を知れば、負い目を感じてしまうようなことを本当に私が言っていたのか疑問が浮かぶところではある。でも……切羽詰まっていたことで、口から漏れ出ていた可能性も……あるっちゃあるんだよなあ……。『私が敵を引き付けるから、棄てていけ』なんて、この作戦は周囲に事情を説明してから実行しないと認めぬ二次被害を齎してしまう事もある。それ故に、こればかりは何も断言できない。

されども、彼／彼女から話を聞く限りでは、その時に私の説明書である『新クトウルフ神話TRPG』や『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』のような、私の世界に関する単語を口にしていなさそうなのは不幸中の幸いかもしれない。

死が確定しているのであれば、この情報を漏らしてしまっても問題ないだろうが……この生還する可能性のある状態で『青空 日葵』の中身が、『釘貫 神葬』という別人だという情報が露見するのは非常に避けたい事態ではある。一般人がそこまで気が回るかという問題は置いといて、彼／彼女等の証言があつた蓮魔先生はすまの耳はすまに入つて面倒ごとに発展するのは避けたかつた。彼女は世界の真実を知る者と同じ目をしている。

ともかく、そんな事態に陥らないように最低限、立ち回っていた自分を少しだけ褒めつつ。

この世界では御伽噺の住人でしかない釘貫わ神葬たのことを、1人の人間として大切に扱ってくれる対魔忍世界での友人達に対して感謝をするのだつた。

## Episode 61 『死体部屋』

「さてと、妖精ちゃん。同じ指揮するものとして目覚めた君に話しておきたいことがあるんだ」

私が神村の背中に乗りながら、重い改造消火器を背負う陽葵ちゃんと話しながら、当時の状況を振り返っているとなお先輩が横に並んでくる。

「あれから君が気絶している間にも、僕達で調査できる場所は調査したんだが……奇妙なことに気が付いてね。是非とも君と情報共有して、相談もしておきたい」

「奇妙な事……？ ……ですか？」

「ああ。これまでの部屋には大量の血痕が残されていただろう？」

「そうですね……。似たり寄つたりの部屋ばかりでしたが、惨状を物語っていた血痕だけは毎度部屋ごとに異なっていました……それが？」

「……何かおかしくないかい？」

彼は腕組みをしながらこちらに問いかけて来ていた。

こちらとしては気絶から目覚めたばかりで、意識ははっきりしているものの頭がぼんやりとしてはいるが、そんな状態であっても神村の背中に揺られながらもあることに気が付く。

「……死体が何処にもない？」

「ああ、その通りなんだ。どの部屋にも明らかに致死量の血痕があるにも関わらず、そのどの部屋にも死体が一つもないんだよ」

なお先輩の言葉に眉を潜める。

それは由々しき事態……というわけでもないが、死体が無いという事はつまり、誰かがその場から持ち去った。あるいは移動させたと考えるのが妥当だろう。まあ、そこまではよい。

問題は……『誰がそれを行ったか』だ。

これまでの情報から考えられるのは、やはりドレスを纏った首のない貴婦人という線で考えるのが……妥当ではあるが……。そもそも実体があるかどうか分からない亡霊がそんなことをできるだろう

か？

でも陽葵ちゃんが私に聞かせてくれた怖い話では、実体のあるような描写をしていたから……あり得ない話ではない。

………今ここで一番、考えたくない可能性としては 《死体が勝手に歩いて行った》 という状況だ。……クトウルフ神話世界線上では割とザラにある状況ゆえに、そんな自体になっているとすれば——ここにあった死体の数から考えて頭までもが痛くなってくる。死体を持ち去った時に生じるはずの、引きずった痕跡がない説明まで可能になってしまう。

それでも少し安堵できることもある。今回、死体が勝手に歩いて行ったという状況になっている可能性は極めて低い。そう、《呪術師の傀儡》を作るには頭部が必要で、《闇の束縛》の場合でも墓の中に死体があることが前提条件だったはず……。

「とにかく今はその謎も踏まえて——」

「なお先輩！」

「——どうかしたかい？」

神村の背中で首を傾げ唸る私に対し、更なる調査すべき情報を告げようとするなお先輩であったが、その言葉は次の部屋の扉を開けた心寧ちゃんによって遮られた。

私も切羽詰まったかのような心寧ちゃんの顔を見る。視線の先には心寧ちゃんが扉を開けて、陽葵ちゃんは客観的に見ても分かるほどに身体を硬直させて固唾をのみ込んでいるのが見える。

やがて私も何故、上級生を呼んだのか。どうして硬直させていたのか理解する。次第に部屋の中から臭いが漏れ、私の鼻孔にも伝わった。

それはバナナが熟したのを越えて、腐ったかのような甘くもわずかに酸っぱい匂い。それとこれまでの部屋の壁から漂っていた悪臭よりも強めの鉄錆の腐臭。そして、押し入れに詰め込んだ布団が飛び出るように隙間からは緑色に変色した人間の手のひらが見えていた。

まさに話題のタイムリーとはこのことを言うのだろう。

「……！」

固まる陽葵ちゃんを掻い潜るようにして、コロ先輩が真つ先に室内へと入って行く。続いてなお先輩。最後に、私を背負った神村が開けた扉の前に立った。

「うわ……こりゃひでえな……」

神村がボソリと言葉を漏らす。彼女が室内を覗き込んだという事は、否応なしに背負われている私も確認するという事になる。

確かにこれは酷い。室内は死体の山が築き開けられていた。比喻ではない。本当に多数の首のない死体が、1つの部屋に押し込められ積み重ねられている。中には天井まで積み上げられている死体の山まであって……。床には足の踏み場がないほどに死体が散乱しており、四肢は重なり合っているおかげで、もしも仮に神村が私を背負ったままこの部屋に入ろうものなら、投げ出された四肢を踏んでしまい転んでしまいそうなほどに敷き詰められていた。

「これは……なかなか……」

私としても、この惨状に対して出てきた言葉はこれがやっとだった。

心寧ちゃんは出入り口で蠟人形のように固まっている。死体を見るのは初めてで、なおかつ死体の腐敗具合から衝撃を受けている様子も薄々感じられた。陽葵ちゃんは気を緩めようものなら、吐いてしまいうような顔をしている。

君は心寧ちゃんと比べて、本当に喜怒哀楽の感情が顔と態度に出るなあ！ わかりやすく素直な反応、私は好きだよ！

なお先輩とコロ先輩は死体との遭遇に対し、特に意に返す様子もなく真つ先に入って行ったが……そんな2人に2人は自分達も入るべきか顔を見合わせて……。でも本音としては入りたくない、死体を踏み荒らしてまで入りたくないような顔をしている。

……それは至って普通の感性である。なお先輩やコロ先輩みたいに高校生にも関わらず、ズカズカ死体の山の中へ入って行ける方が特殊なのは違いない。

「神村さん。背負ったままでは転倒リスクが高いかと思われます。私の事はここで降ろしてください。背負って頂き、ありがとうございま

した」

「当たり前前だろ。ウゲツ……ひでえ臭い」

神村もしやがみ込む形で、折れた足に衝撃が入らないようにと丁寧に私を降ろしたあと、腕で鼻を抑えながら入っていく。

ひとまず私は自分の役割として、心寧ちゃんと陽葵ちゃんの2人を廊下で待たせるわけにもいかないため、入り口に積まれている死体を引きずっては部屋の奥に積む作業を始める。

足は相変わらずの痛みだが、神村が私に僅かばかりの休憩時間を割いてくれたおかげで問題なく動くことはできていた。

「さて、と。これで少しは片付きましたかね？ 陽葵ちゃん、心寧ちゃん2人ともこれで入れますよ。あと消火器は一旦、分解するのでこっちに下さい。持って頂いてありがとうございます」

「あ、あははー……日葵ちゃん、ありがとー……。でも………大丈夫………」

「は、はい。私達は別に廊下で待っていても……大丈夫なので………」

お。なんだか、2人とも私がうわごとのように言っていたらしい、時のようなことをゲンナリとした顔で話している。

ああ。私がおんな感じだったときの2人の気持ちが分かったような気がする。そりや、置いて行けるわけがないよな。心配かけて本当にごめんね。

「……。……すみません。2人の心情は分かっているつもりですが、この状況での分散の可能性は確実に潰しておきたくて。……だめ、かな？」

死体を4、5体分片付けたところで、やっと2人が入れる分だけのスペースが確保できた。

2人への説得は、愛らしい小動物を連想させるくりくり・うるうるとした〈魅惑〉でお願いをしてみる。2人に対して手招きをして感情に訴えかけた。

「あー……うん………」

「ええ……。ええ………」

「……わかりました。では、私もそちら側で待ちましょう。なお先輩

にも話を通したいので扉の内側に立って少しだけ待っていていただけますか？」

もの見事に慣れない私の〈魅惑〉は無事に失敗し、2人はそれでも入ることを渋る。ゆえに分散は避けたいが、少しでも死亡リスクの高い方に私が身を置いて2人を守れるようにと私も廊下側で待機することに決めた。

……やはり一般人。これは当然の反応だ。私からとってしてみれば、親の顔より見た凄惨な死体ではあっても……特に高校1年生には荷が重すぎる光景には違いない。

「あ……。すみません。——いえ。陽葵ちゃん、行きましょう。きつとこういう慣れも今後は必要になってくると思います。次にこういう死体を確認したときに、そのつど狼狽していたら色々支障が出るはずです。だから——慣れる為にも」

分散は避けたいが……ここはなお先輩に事情を説明し、私が彼女たちの引率役を担おうとしたとき心寧ちゃんが口を開いた。それはちよつと意外な言葉で、個人的には耳を疑うような一言だった。先ほどもでは俯いて自身の足元を眺めていた心寧ちゃんの方が顔を上げ、私の方へと陽葵ちゃんの手を引きながら足を一歩踏み出している。

「……そうだよね……。……私達は——対魔忍だもんね。うん。ありがとう！ 日葵ちゃん！ これも訓練だと思って頑張つて慣れるね！」

陽葵ちゃんもそんな心寧ちゃんに勇気づけられ、最初こそぎこちない笑顔を浮かべて居たものの死体の積もった部屋に入る瞬間には、まるで初めて訪れる観光地の風景を眺めるかのような顔を周囲に向けてながら室内へと入ってきた。

その直前に何かボソボソと私には聞き取れない声で喋っていたが、恐らく鼓舞的なものだろう。

「あ、いや。あの……。2人には、そんな無理矢理にでも『死体に慣れろ』って言っているわけじゃなくて、分散して欲しくないだけで……。そのつ、死体は直視しなくていいですからね？ 部屋の中に入って、部屋の隅で壁を向いているだけで良いだけですからね？」

「いえ、そういうわけには行きません。私達もカードキー探しをしま



す」

「日葵ちゃん！ 死体の持ち物を調べるときは、どういふふうを探つたらいいのかな？」

「アノツ。エツト。ハアイ」

……一応。こちらの意図が誤って伝わっていないかどうか、確認と遠慮をしながら少しズレて解釈してしまったと思われる二人をなだめる。

現在この部屋に広がっている光景は、ゲームでいうところのCORE<sup>18歳以上のみ</sup>“Z”指定に加えた海外ソフト張りにゴア描写の激写された室内だ。それを思春期真っ只中の15〜16歳のうら若き乙女に『見ろー！』なんて強要するわけがない。

あくまでも私がして欲しいのは、この部屋に入って部屋の隅で壁とお話してくれているだけで十分なのだが……。

2人は先ほどまでの嫌気は何処へやら、やる気に満ちた眼差しでこちらを見つめていた。

これはもう『部屋の隅でおとなしくしてて』なんて言っても無理があるだろう。

「えっと。ここにある死体は腐敗の兆候が現れているし、細菌の温床になっているから触るときは手袋とかあった方がいいんだけど……」

さつそく黙々と出入り口の死体を漁る心寧ちゃんに対して、片目を瞑って後頭部を掻く私の死体の荷物あさり講座を陽葵ちゃんは熱心に聴いている。

ちよつとここの反応は意外だった。私としては心寧ちゃんの方が講座を聴きに来て、陽葵ちゃんの方がまず独学で。うまく行かなかったら、私のやり方から学びを得るのではないかと推測していたのだが……。

「手袋ね！ あるよ！」

陽葵ちゃんは、今着用している勝負服にぴったりなオレンジ色の皮手袋を着用していた。

「ヨシッ」

ヨシ。ヨシじゃないが私。話の流れで現場猫のポーズを取る自分

にノリツツコミを入れる。

……待てよ？ 普段このような状況に遭遇した時には、まず警察に連絡するとか、不用意に死体を触ってはいけないということから説明した方がいいのだろうか？

いや、でも陽葵ちゃんはきつと普段は死体漁りなんて行為はしはずだ。それぐらいの最低限の知識はあるだろう。これはあくまでもこの場だけでの話に違いない。

「探る場所は衣服のポケットとか、首のネックレスとか、上着の裏ポケットなんかを探ります。またこの時、死体のガスが爆発する恐れがあるので、飛散物が体内へ入ってしまわないようにゴーグル・マスク・フェイスシールドなどがあると良いと思います」

「ゴーグルかあ。確かに飛散した肉片が体内に入ったらまずいこともあるもんね！ 私の忍法特技と照らし合わせて考えてみても、ゴーグルがあった方がいいかもしれないよね！ 今度装備に追加してもらおうと！ ありがとう！」

「ひとまずはそんな感じですよ。……無理だけはしないでね？」

「あはは！ それは日葵ちゃんもだよ！ でも、わかった！ ありがとうね！」

「は、はあ……」

こうして6人で死体の山を舞台にカードキー探しが始まった。

ふとここで、死体の事、他の彼女達を観察していくらか気づいたことがある。

まず初めにここに転がっている死体だが、いずれも首は無いことは確定的であり、すべての死体がミイラのようにカサカサに干からびていることがわかる。中には私が懸念していた餓死らしき死体も見つかるが、不可解なことにその死体も、まるで、体液が消失したように干からびていた。

次に死体の原型についてだ。少なくとも私が事前調査した段階では、この洋館が完全な幽霊屋敷と化したのは15年以上前の話だ。にも拘わらず、この死体はすべて肉がついたままで、カビは存在しているのか緑色に変色はしているものの蟲に食られた死体はない。な

おかつ先ほど死んだばかりのように肉が痙攣……蠢いている個体も見つかった。つまり、死体の殆どがそのままなのだ。顔こそ分らないが、衣服やオークなどの異種族肌から大体の職業は分かるのは幸いだった。

中には銃火器を所持している死体もあり、ポケットからは弾薬が手に入った。これは私が求めていた念願の2連ダブルバレル10ゲージ・ショットガン……ではない。手記に記述されていた本部の魔族達<sup>マガジン</sup>が使用していたアサルトライフルだ。ガリルARの外見に酷似しており、弾倉の中身は撃ち尽くして大抵は空っぽなのだが、根気よく探索を進めるうちに弾倉1個(20発分)と13発の弾薬が見つかった。私はどちらかと言えばへショットガンの扱いに長けているのだが、私の説明書によれば『新クトウルフ神話TRPG』においてへショットガンは技能はライフル技能と統一されて、正式にへ射撃(ライフル/ショットガン)という区分に変わっている。ゆえに別段、アサルトライフルだから使用できなくなるなんてことは無かったはずだ。

ま、『CALLOFCTHULHUクトウルフ神話TRPG』79頁 ショットガン、84頁 ライフルには、どちらかの扱いにしか長けていなくとも、扱えなくもないような趣旨が掲載されていたと思うが……。あちらは記述が曖昧過ぎるので、確実な方を使用するに越したことはないだろう。

## Episode 62 『黄泉録り』

さて、死体の違和感と発見したアサルトライフルはさておき次は――

「……………」

「そうか、それは残念だ……。コロちゃんなら、何か分かるかもしれないと思っただが……………」

「……………」

「ん？ 消火器の妖精ちゃん？ そんなに僕達をまじまじと眺めて、どうかしたのかい？ そんなに熱っぽい視線を送られちゃうと照れるじゃないか」

「チッ！ おうおうおう！ さつきから、なにガンつけてやがる！」

この3人に対する違和感だった。

先ほどまでコロ先輩を除いた2人……。なお先輩と神村は、死体が着用している衣服をまさぐってはポケットから役立ちそうなものを探っている。

一方でコロ先輩は、というと……。相変わらず他の部屋で血痕に対して執り行っていたように、死体へ手を当てて長時間うつむいていたかと思えば、適当な間隔でなお先輩に何かを話しかけていた。

それは一種の弔いのようにも見えるが、なお先輩との会話では彼が情動的な意味合いで残念がっていることから、コロ先輩が行っている行為は弔いとは異なるようにみえる。

……………この3人は……………陽葵ちゃんや心寧ちゃんの2人とは異なり、*“逆に”* 死体慣れ過ぎてはいないだろうか？ 死体発見時の初期反応もそうだが、初めて死体を目撃したにしては非常に淡白な反応を示している。死体を目撃したことに対して現実味がないように感じている……。と言った心理的作用が働いている可能性も考えられるが、3人を眺めていると別段そういった感じでもないように見える。彼、彼女たちは本物の死体であることを理解した上で、慣れた素振りのまま調査を行っているような……。そんな感じだ。

そもそも話として、いくら私が鍵を探すように指揮を執っていて

も。洋館に閉じ込められるような非日常に巻き込まれたからと言って、探索者のようにやむ終えない事情や、特殊な職業についている人間”でも無い限り、自ら率先して死体を触ることなど避けるはずだ。

「神村さんは自惚れ過ぎです。別に大したことではありません、なお先輩はコロ先輩が何を話しているのか理解できることに興味を持つただけです。私には、どうしてもコロ先輩が何を話しているのか聞き取れず、初歩的な〈読唇術〉で読み取れる程度なので……」

「お、お!? 元気になったとたん、今度は喧嘩売ってんのか! てめえ!」

「……だから私は貴女の奥に居たコロ先輩となお先輩を見つめていただけですよ? 視線はあなたより奥を見ていることに気が付きませんでしたか?」

「上等だよ……。素直に謝れねえってんなら、次はその減らず口を二度と叩けねえようにしてからためえを運搬してやるよ」

「助けて貰った手前、あまり言いたくはないのですが……貴女と眞田先輩。〴〵類は友を呼ぶ〴〵とは言いますが、まさにその通りですね」

もしもこの景色がアニメーションであれば、今頃私と神村はバチバチと火花を散らしてにらみ合っているシーンが適当だろう。

彼女はロケットランチャーを手にして大きな棍棒のように掴み上げる。きつとあのぶつとい大筒で私の事を殴ろうとしているのだろう。……でも、何だかんだ言って即砲撃して来ないところや少しだけニンマリしているのを見ると、断定的な事は言えないが〈心理学〉上では本当は怒ってなんかいなくて冗談を言っているようにも見えた。それにそのやや無邪気な笑顔が、私を五車学園の地下に存在するシミュレーションルームでボコボコにしていたときの眞田先輩と重なってみえる。

「君達、やめたまえ! 先ほどまで協力的な関係になったかと思えば、今度は喧嘩か! 喧嘩なら洋館から出た後でも好きにだけできるだろう!」

「……め……て!」

彼女の笑顔に釣られるようにして不敵の笑みを浮かべる私に接近する神村だったが……その間になお先輩とコロ先輩が入って制止をかけてきた。神村側には彼女に情報を伝達する係のなお先輩が。私側にはコロ先輩が眉を持ち上げ厳しい表情で、陽葵ちゃんから受け取った改造消火器の銃把グリッパへと忍ばせた私の腕をがっちり掴んでいた。

ここで神村がつまらなさそうな顔をしながら先に視線を逸らした。私もコロ先輩に抑えられていながらも、改造消火器の銃把へと伸ばした強張った手をゆったりと脱力させる。

「……………」

「……………」

——されどコロ先輩の眉は持ち上がったままであり、口元は固くキツく、への字に閉ざされている。

言葉こそなかったが、彼女が何を言いたいのかは分かる。……ごもつともであり、彼女の性格をある程度把握している私が煽らなければ、ここまでに発展しなかったはずだ。それに彼女神村舞華の真意を計り知れず、あと数歩近づいてきて何か動きがあれば、こちらも〈応戦〉しようとしていたこともあった。

「——すみません。道中助けて頂いたにも拘わらず、失礼なことを」  
「気にしてねえよ。が……今のは俺も悪かったよな。すまねえ」

互いに視線を逸らしながらも謝罪の言葉を述べる。彼女から似たような返事があった所で、やっとコロ先輩は掴んでいた手を離してくれた。

はあ……。神村は冗談だったかもしれないが、私は半分本気だった。

でも、その選択は避けるべきでもあった。『CALL of CT HULHU クトゥルフ神話TRPG』153頁「信頼と公平さ」  
第三段落にも余程《魔術師の支配》のような特殊な場合を除き、仲間を騙すような裏切りや内輪揉めによって、探索の核心を見失うことは避けるべきだと記述されていたはずだ。

「それで……その死体や血痕に触れてはしばらくの間、何か追悼のよ

うなことをしてましたけど……その直後にコロ先輩はなお先輩と何をお話されていたのですか？」

「……よく観察しているね。」

神村との悶着がひと段落ついたところで、話が流れてしまう前に気になっていたことを尋ねる。問いかけに対してコロ先輩は口元をパクパクと動かしながら、〈聞き耳〉で辛うじて聞き取れる声の大きさを私の行動を褒めてくれた。

「ああ、コロちゃんは僕に対して彼女が　　〃黄泉録り〃　で得た情報を教えて貰っていたんだよ」

「読み取り……？　ですか？」

「そうだ。……妖精ちゃんは最近転校してきたばかりだし、僕達3年生とも接点はあまりなかったから知らなくて当然だよ。コロちゃんは、死体や切り離された部位……この場合だと血痕も該当するかな。その遺留物に対して長い間、集中しながら触れることで霊魂に刻まれた情報を読み取ることが出来るんだ」

「!？」

「霊魂に刻まれた情報っていうのは、その人物の死因や遺伝情報といった科学情報の他、強く残っている思念、記憶といったものの事だね」

「……………」ドヤアアア……………」

なお先輩の口から発せられるスピリチュアルな発言に信じられないものを見るような目でコロ先輩を見る。彼女は私のそんな目に、少し口元を緩ませ誇らしげな顔で私と向かい合っていた。

正直、コロ先輩がそんな特殊能力を持ち合わせていたことに面を食らっていた。まさか対魔忍世界とはいえ、そんな能力を持った人間とこんな形で、こちらの世界に来て約1年程度で遭遇するとは思っていなかったし、何よりもそんな能力を持った人間が存在することに對して驚いたのだ。

……しかしよくよく考えてみれば、私の元居た前世でもとある研究所がそのような超能力に関する実験や実験体<sup>素材</sup>を手に入れていたという話を小耳に挟んだことはある。確か……マホロバP S I<sup>サイ</sup>研究所

だったか。そこではPSIの種類にサイコメトリ（過去感知）と呼ばれる。物体に残る「記憶」を読み取り、過去にその場所で何があったのか知覚することのできる能力”があつたはずだ。つまり、コロ先輩はそれに類似した力を持つ……超能力少女なのだろう。……まさか、こんなところでそんな力を持った少女と出会うとは思つてはいなかつたが。

すこいでしょ。  
「……………」フンスフンス

「え、ええ。正直驚きました。それに、今、この場で、この物言わぬ死体に対して何があつたのか知ることのできる必要不可欠な人材じゃないですか！ でもだつたら——あ」

「……………」シヨンボリルドルフ

ここまで言及したところで、先ほどのなお先輩とコロ先輩のやり取りが思い浮かび、私としても合点があつたのと同時に何かを察したような表情をしてしまった。コロ先輩の先ほどまでの誇らしげな顔は何処へやら、2021年ニコニコ動画で一躍ブームとなつたウマ娘のためき画像……シヨンボリルドルフ顔へと切り替わっている。

しかし、私としてはそれだけでも十分だつた。例えば何か直接的な手掛かりや情報にならずとも、何もない状態とわずかな手掛かりならば、わずかな手がかりとなる情報を私は優先したい。

「コロ先輩は、何が見えたのですか？ なお先輩は残念がついていますが、私としては今は少しでも多くの情報を得たいと思つています。私にもその情報を教えて頂けませんか？」

いいよ。私が黄泉録——  
「……………」

「え？」

されど悪いタイミングで外の雨足が強くなり、雨音によつてコロ先輩の声が〈聞き耳〉でも聞こえなくなつてしまふ。なんとか、彼女の口元の動きと耳に手を当ててこの声を読み取ろうとするが……聞こえない。

「す、すみません。外の雨音で……コロ先輩の言っていることがよく聞き取れなくなつてしまいました」

「それじゃあ、僕が代わりにコロちゃんを読み取つた情報を伝えよう」



「……お。ありがとう。」

「いいんだよ。さて、妖精ちゃん。さつきコロちゃんはね——」

コロ先輩の言葉を聞き取れなくなった私になお先輩が代弁をしてくれる。

先ほどのコロ先輩による読み取りサイコメトリによると、ここにあつた死体の殆どの記憶は死の間際に見た光景を捉えていたようだ。

だがしかし、肝心な内容としてはほぼすべて、犠牲者の手記2の後半に記載されていたような出来事だったらしい。……あちらでは

「瓶に詰められたコルクが栓抜きで振り開けられるように」との描写がされていたが、コロ先輩が読み取りサイコメトリで読み取った情報では、目の前で見えない太刀で斬首されたように首が吹き飛んだという事、亡霊がすすり泣くとは違った……まるで生者を嘲るかのような笑い声しか聞こえてこなかったことしか分からなかったそうだ。

そして痙攣する死体だが、こちらはもつと不可解だったらしい。こちらの犠牲者たちは全員が全員、『誰かたすけてくれ!』『闇に喰われる!』という魂からの叫びをあげていたが、肉体としては死を迎えるその刻ときまで外面上では何も変化はなかったそうだ。更にその犠牲者たちは、死に方も1点を除いてまちまちだったらしい。ある時まで棒立ちだったものが突然足に力が入らなくなり倒れ込んでから死亡したり、前述したように首が跳ね飛んで死亡するもの、中にはその場に立ち尽くしたまま壮絶な絶叫と共に死を迎えたものもいたようだ。こちらはこちらで、首が跳ね飛んだ者以外は亡霊の声が聞こえてくることはなく、本当にプツンとマリオネットの糸が切れるようにその場に倒れ込んだとのことだった。しかし共通点も存在し、すべての死の引き金は身体が急速に青ざめ、干からびていくことは変わらなかったというものだったらしい。

『敵の姿は確認できなかつた』それがどうやら、なお先輩が残念がつている理由でもあつたようだ。確かにコロ先輩の読み取りサイコメトリ情報が確実なものであれば、コロ先輩は敵の姿の情報を得られたかもしれない。

だけど、私としてはコロ先輩が『その怪物達の姿を確認していなく

てよかった』と思う。『必ずしもそうなるとは限らない』が、この洋館で作業員たちを塵殺皆殺しをした存在が、クトウルフ神話世界線上の神話生物だった場合……どうなっていたか。

……既に 『前例』 はあるのだ。彼等も例外なく 『発狂』 をする危険性は存在する。鹿之助くんの時、彼は発狂状態に陥ってしまった。もしもコロ先輩がその読み取りで怪物と間接的に遭遇し、それがクトウルフ神話生物としたら？ 『発狂状態』 に陥ってしまったら？ ……分散を避けたいこの状況で、考えたくはない状況が発生した可能性は極めて大きい。例え、分散するような狂気状態ではなくとも私達にとつて何かしらの悪影響は及んでいたはずだ。それが発生しなかっただけ、良い状態ともいえる。

「それで、妖精ちゃんは今の話を聞いて何を思ったかな？」

「そうですね……。コロ先輩が発狂せずに読み取りを終えたことは良かったと思います」

「？ ……？？」

「妖精ちゃん何を言っているんだい？ コロちゃんの黄泉録りはあくまでも記憶や思念を読み取るものだから、危険なことは何もありません？」

私の言葉に対して二人は、同じ方向に首をかしげて私に変なことを言い出していると言った目で見始める。

ああ、そうか。恐らく先輩たちは読み取りを行うことによって正気度が削られた経験がないゆえに、読み取りでの情報収集に危険性を感じていないのだろう。これは対魔忍世界の住人とクトウルフ神話TRPG世界線の住人の大きな認識の差によるものに違いない。

「あ……。そうなんです。ごめんなさい、コロ先輩の能力についてあまり詳しくないものだから……。余計な勘ぐりをしてしまいました。すみません」

「……。……。」。

「いいさ、謝ることじゃないよ。誰だってそういう事はあるものだから、コロちゃんも言ってる」

「ありがとうございます」

3年の先輩方に励まされながら、ここで1つの違和感も新たに抱え込んでいた。

コロ先輩の読み取りサイコメトリによる話の中には、ドレスを纏った貴婦人の笑い声のようなものと、死後も痙攣する不気味な死体のその瞬間についての情報を得ていた。

しかし……あの手記。『犠牲者の手記2』の中には『顎が4つに裂けた猿のような巨大な黒い蟲と人が融合した実体』の情報があつたはずだ。でもコロ先輩の読み取りサイコメトリからは、その怪物による被害報告はされなかつた。コロ先輩が読み取りサイコメトリでその怪物を直視しなかつたことは本当に良かったとは思うが、どうも腑に落ちない。

手記の中では、確かに暴れまわつたような記述がされていたような気がするが……。私の記憶違いだろうか？

「みんなー！ー 見つかったよー！」

そのような考え事をしている辺りで、周囲の空気が再び平穏を取り戻すような声が響く。

死体の山の反対側から、初めて陰惨な死体に直面し、初めて死体の身ぐるみを剥いでいるとは思えないほどの明るい陽葵ちゃんの声が室内に響いたのだ。

## Episode 63 『失踪者』

陽葵ちゃんは、天井まで積み重ねられた死体の山の中腹部まで登って探して居たのだろう。死体の山を下山するために『よいしょ、よいしょ』という掛け声が聞こえてきた。

迎えに行ってもよかったのだが、すれ違いを防ぐためにもその場でしばらく待つ。

やがて私が五車町で関係者に話を聞きに行ったときに、御守りの中に入っていたカードキーと同じ鍵を左手の指先に持った陽葵ちゃんが、つい先ほどまで死体をまさぐってきたとは思えないほどの笑顔で戻ってくる。その顔を例えるならば、犬が投げられたフリスビーを笑顔で持つてやってくるようなそんな満面の笑顔だった。

「陽葵ちゃん。焦らなくとも大丈夫です。こちら辺は足元が不安定なので、転ばないようにゆっくりと来てください」

「わかってるよ！ 日葵ちゃんは慎重屋さんだね！」

彼女はこちらの忠告など気にしていないかのように死体の絨毯を器用に小走りで走り寄ってくると、真っ先に私に対して鍵を手渡してきた。受け取ると即座にその鍵を確認する。……確かにあの鍵だ。僅かばかり乾燥した血液が付着しているが、この『鍵』は電子機器に通すものではないためあまり気にする必要もないだろう。これまで肩透かし品のような欠損部位は無いようにみえる。

一通り鍵を確認した後は、その鍵をなお先輩に手渡し、彼に渡った鍵はコロ先輩に、その次は神村の手に渡っていく。3人とも発見した『鍵』を大事そう……かつ『本当にこんなもので外に出られるのか』と訝しげに眺めている。

「お手柄ですね。これが上手く機能すれば、全員で出られそうです」

「えっへへー♪ 勝利のピースサイン！ ブイ！」

「GJ. ……ブイです」

本当に嬉しそうな満面の笑顔でピースサインを突き出す彼女に、こちらも応じるようにしてウィンクをしながら親指を突き立てたGood jobサインを返す。

でも、やっぱりこの陽葵ちゃんに突き出したサインは何か違うなど思って、陽葵ちゃんのVサインに並べるようにしてVサインを送る。彼女はそのサインの意味を十分に理解しているようで、これまでに見せたことも無いような煌めく満面の笑みを浮かべていた。

「えへへ。ブイとブイが並んで、タブリユW！　つまりダブルひまりで！  
任務成功ってことだね！」

「そういうことにもなりますね。小目標達成、次は洋館脱出ですよ」  
「よーし！　最後まで頑張るぞー！」

「ふふふ。……とここでこの鍵は何処で見つけたんですか？」

「あの死体の山の中腹部分に死体で出来た小さなトンネルがあるんだけど、その奥にあった死体が持っていたかな？　でもどうして？」

そして、あの鍵を見つけた場所について尋ねる。それに対する陽葵ちゃんの疑問は尤もだった。

「いえ、ね。恐らくあの鍵を所持していたのはここの現場責任者ですから、他に何か有益な手記とか残してないかなあと思った次第です」  
「なるほど！　しゆき！　だいしゆき！　それじゃ案内するよ！  
こっちにきて！」

陽葵ちゃんに連れられて、その鍵が発見された死体の山を登る。

乾燥し、死してなお硬質化した肉體でありながらも、生前の柔軟な肉體とは異なり脆くなった肉の山は思うように登れず……。陽葵ちゃんに案内と足を踏み外して滑落しそうになる私を時々、引っ張り上げてもらう形での〈登攀〉となった。

「おお……まさか、死体の山の中腹部にこんな洞窟地形があるとは……」

「私も最初見つけたときはびっくりしたよ！　ふもとにある死体を調べてたら、上から死体が音もなく落ちてきてね!?　危ないし、何だろうと思つて上を見上げたらこんな洞窟があつたの！」

「……落石ならぬ、落死体ですか……」

「山から転がり落ちてくるなんて、死体も楽したいんだね！」  
「」

「♪」

「……陽葵ちゃんのそういう、恥ずかしげもなく 自信たっぷりで発言するところ好きですよ」

「えへへ♪ ありがとう♪」

「……。それで、その『鍵』を持っていた死体はどちらですか?」

「あの奥にある死体だよ!」

小粋なギャグを飛ばしながらも、陽葵ちゃんが見つけたという死体は、死体で組み上げられたトンネルの最深部。指さす先にあった。

その死体も首から上が消失していたが、それ以外は他の死体と変わらない干からびたミイラ上の死体だ。生前はぶくぶくに太っていたのか、死後に残された薄い皮のようになった身体からは、ボコボコとした前腕の皮膚を捻った時のような脂肪が露出・浮き彫りになっている。

死体の崩落に気を付けながらトンネルの中に入る。陽葵ちゃんが調べた死体にもう一度〈目星〉を付けて、情報の取りこぼしはないか精査した。念のため死体もひっくり返して調べるが、それらしいものとしては小さな金属製の扉などについている鍵『南京錠の鍵』が見つかった。

そして陽葵ちゃんには『手記を目的とした再調査』とは告げているものの、本当の私個人としての目当て品に〈目星〉をつけて、目的物を手にいれる。

「クキキキキキ……」

思わず汚ねえ笑みがこぼれる。

それは現場監督と思われるこの魔族が着用していた衣服のポケットから見つかった。

今、私の掌の中にあるのはキラキラと赤ルビー、青サファイア、緑エメラルド、黄色に輝く色とりどりの宝石の付いた指輪や金色や銀色の簪かんざし、ネックレスなどの装飾品、使い道の分からない護符など、その他もろもろ軍資金に換金できそうなものだ。特にこの簪かんざしは素晴らしい。仮にこれ等が純金属製であれば、硬貨や紙幣と異なっており突然価値が消失するなんてことはなく、いつの時代でも一定の金額で買い取ってもらえる。

それに、この死体にはもう必要のないものであり、こんな死体が持つていても無意味だろう。この死体も以前、手記で似たようなことを言っていたはずだ。確か……『もう奴には必要のないものだ』だったか？ きつと奴も私が有意義に使用することを喜んでるに違いない。死体のポケットの中で燻ぶらせるよりも、私が持つていた方がもつとうまく扱えるというものだ。神村に破壊された防水加工の衛星電話の亡霊も、私は許そう。と言ってくれたに違いない。

「よつこら……瀬戸ノ内」

「日葵ちゃん。どうだった？ しゆき、見つかった？」

「いえ……残念ながら。ですが『犠牲者の手記2』に記載されていた地下に降りるために必要な『南京錠の鍵』を見つけました。地下も調べられるかどうかは別として、探索関連で役に立ちそうなものはこれぐらいですかね」

「わあ……っ！ 私は洋館から出るための『鍵』を見つけた時点で満足しちゃったけど、細かいところまで気が付く日葵ちゃんは目が利くね！ さすが！」

「むふっ。ふふふ。もう、陽葵ちゃんったら褒め上手なんですから」

「あはは！ それじゃあ、もつと褒めちゃう！ 照れる日葵ちゃんもかわいいよ！」

死体でできたトンネルの出口で、つつきあうように乳繰り合う。

それから死体の山の下山では、まずは消火器を転がして落下させ、その後に陽葵ちゃんに背負われる形で死体の山を滑り降りた。

下山を終えたところで、改造消火器の分離・軽量化する作業を思い出し手を加える。射撃可能回数は減ってしまったが、軽量化を済ませた改造消火器を背負って暖かい懐で皆の元に戻った。

先ほどから心寧ちゃんが見当たらないが、きつと既にカードキーを所持した3人の元に行ったのであろう。そんな想像を膨らませて。

……

……

「あれ？ 心寧ちゃんは？ こつちに来てないの？」

「なんだ。君達が探しに行ったわけではないのか」

しかし、そこには心寧ちゃんの姿はなく、先ほどと変わらないメンツの3人が部屋の片隅で私達を待っていた。

残量の少なくなったタバコを蒸かしながら腕組みをする神村。『鍵』をちゃんと所持していることを教えてくれるコロ先輩。そしてFN2000に似たライフルを携えるなお先輩の3人だ。

「私は日葵ちゃんと一緒に、私が見つけた死体に取り残しがないか調べに行っただけで……心寧ちゃん？」

陽葵ちゃんが、外に声が漏れ出してしまわないほどの大ききで彼女の名前を呼ぶが……返事はない。

だがこれと言って、これまでの時間で外に出たような物音は聞こえてはこなかった。

——彼女が魔術的な転送や何者かに暗殺されていなければ、返事の1つぐらいはあっても良いはずなのに。

「全員、武器を構えてください……心寧ちゃんを探します。異常事態発生です」

ここでふとコロ先輩の読み取りサイコメトリによる情報、記憶が隆起する。この作業員たちは全員、見えない存在によって首を一瞬で刈り取られていた。つまり……。

私の言葉にコロ先輩を除いて全員が武器を構える。それから室内の死体をうまく避けながら、前進しはじめた。

ああ！もう！私の馬鹿馬鹿。大馬鹿！

これまでの探索でも問題はなかったから、室内なら大丈夫だろうと思つて心寧ちゃんと陽葵ちゃんを2人きりにして、死体の山で隔てる形にして2人を視界から外してしまった！

2人は私が離れた後に室内で、別行動を取ったのだろう。陽葵ちゃんは死体の山。心寧ちゃんは床や壁の死体といった役割で。2人だけで放置してしまうなんて……そもそも、第一になぜ室内での分散は大丈夫だと思つてしまった？ コロ先輩の読み取りサイコメトリ情報を聴いた時に即集合を呼びかけなかった？ 亡霊の笑い声が聞こえなかったから？ それともクトゥルフ神話世界線での経験則に頼り過ぎたから



？

自分を責めながら先ほどまで通ってきた陽葵ちゃんと歩いたルートを逆走する形で歩いていく。出入り口を過ぎ、死体の山を越え、元の場所に戻ってくる。

——本当に何処へ消えた???

「陽葵ちゃん。陽葵ちゃんが死体の山で鍵を見つけて、私達の元に戻ってくるとき心寧ちゃんは何処に居ましたか？」

「さっき通ってきたルートの壁側に居たよ！ 私が鍵を見つけたって言った時は、『後で行くから待って』って言って！ 日葵ちゃんと鍵を持っていた死体を探しに行ったときには居なくなってたから、きつと私達とは反対側のルートから なお先輩たちと合流したんだと思って…………！」

陽葵ちゃんの言葉を聴いて、自分自身の親指の爪を噛む。

これはつまり、陽葵ちゃんが『鍵』を見つけた直後はこの場に居たってことだ。私達と合流して、私達がこの現場に戻ってくるほんの僅かな時間で姿を消した。それも悲鳴を出すこともなく忽然と。そういう話になってくる。

心寧<sup>彼</sup>ちゃんが消えた場所は、私が死体漁りに向かった時には通らなかったルートだ。仮に亡霊にやられたわけではなかったら…………陽葵ちゃんが話してくれたように死体の山が雪崩れて…………死体に埋もれて……………圧死しかけているってことは無いよな？

「もう一周、室内を探ります！ 何でもいいです。気になるものがあるれば教えてください！ その特に死体の山！ その中に心寧ちゃんが混じっていないか搜索を！」

私の言葉に4人の表情にも戦慄が走る。彼女達には、私の発言は心寧ちゃんは殺されているかもしれないと言っているように聞こえたのかもしれない。

だが、その線が100%決していないなどと言い切れなかった。最悪の事態であるが、それを事前に告げておかねばその状況に直面した時、私達は正気を保っていられるかは分からない。

再び死体の山を眺めながら、心寧ちゃんを探す。干からびた死体の

中に心寧ちやんらしき身体は混じっているように見えない。『幸い』  
“ と言つてしまつても良いものか悩むところだが、彼女の両足は白  
を基調としたパワードスーツ型のような義足だ。それさえ見つけれ  
ば発見はたやすいものだと思つていたのだが……。」

「……………」  
不意にコロ先輩が私の肩を叩く。振り返れば何と言つているか分  
からないほどに口をパクパクさせて、一点を指さしていた。強くなる  
雨音で〈聞き耳〉をしても彼女の声は聞き取るに至れなかった。

その指の指す先にはクロゼットが置かれており、クロゼットの  
前にはこの部屋のそこら中に転がっているような首のない死体が、も  
たれ掛かるようにして座り込んでいる。服装は梅雨に適した薄汚れ  
たチノパンに無地のTシャツ、紺色のベスト、体格からそれが男性だ  
ということ。その死体は胸元が大きく切り裂かれており、クロゼッ  
トに自身の血糊をべったりと……まるで絵具の付いた筆をキャンバ  
スに対して薙ぎ払ったかのように叩きつけていた。

「コロ先輩、クロゼットがなんですか？ 貴女の無口な性格上。声  
の大きさを上げると言うのは、こちらとしても大変恐縮かつ酷である  
ことを存じておりますが、今だけ！ 今だけで良いので、もつとはっ  
きり大きな声で喋つてもらつても良いですか!？」

「……………」

口調が強くなつてしまふが、コロ先輩は動じた様子はなく先ほどと  
同じ一点のクロゼットを指さしていた。彼女の口元を見て何を言  
いたいのか掴もうとする。

なんだ？ 彼女の唇の動きを見ながら、もう一度〈聞き耳〉をそば  
だて、なお先輩がコロ先輩の代弁を始める前に彼女の言葉を聞き取  
り、聞き取った言葉をそのまま発語して神村や陽葵ちゃんにも彼女が  
なんと喋っているのか共有をする。

彼女は……『な』……『に』……『か』……『い』『る』と言つてい  
た。

——ガタン！

その時、私の読み上げる声に反応するかのようにして、クロゼッ

トの中から物音が響いた。

## Episode 64 『クローゼットの中身』

——ガタンツッ!

クローゼットからの物音。

その音に反応して、神村となお先輩の2人が真っ先に銃口をクローゼットに向ける。コロ先輩はそのまま佇み、クローゼットを睨みつけていた。その中、陽葵ちゃんはクローゼットの中身を確認するために既に駆け出して——

「陽葵ちゃん! 待って!」

声を掛けるが、もう遅い。心寧ちゃんの親友である彼女は、願いに希望を掛けてクローゼットを開けてしまう。

こちらを開ける直前には、射程の長い拾い上げたアサルトライフルへを即座に構えてはいた。クローゼットから陽葵ちゃんを襲う怪物が居れば、鋭いかぎ爪が彼女の引き裂く前に吹き飛ばすつもりだった。

クローゼットに潜むプギーマンが陽葵ちゃんとのゼロ距離の間合いにいるとはいえ、私の射撃の方がより正確で確実に頭蓋をブチ抜ける。

「日葵ちゃん!」

ゆつくりと陽葵ちゃんが振り返る。その表情は安堵で緩み切った顔だ。

次第にクローゼットの中身もこちらから見えていく。

クローゼットの中には2人の少女が入っていた。1人は、両足が義足の少女。速水 心寧ちゃんだ。彼女はまるで今回の冒険で疲れて寝入ってしまったような少女のように寝息をスースーと立てて寝ている。

「ひっ……」

もう1人は見たこともない少女……というよりも幼女に近い子だった。

身長や顔のつくりから、小学1年生ぐらいが妥当だろうか? 彼女は怯えた様子で身を縮こまらせクローゼットの奥隅に隠れている。

彼女はサラサラとしたオレンジブラウン色の長髪で、この場にいる神村よりも鮮やかな茶色寄りのオレンジ色の髪だった。くりくりとした大きな目には濃藍色の光彩が伺える。纏っている衣服からは凹凸なく、青空　日葵のような胸元はぺたんとしていて、細い腕に細い脚。ロリータコンプレックス……否この表現は正確ではない。アリスコンプレックスを患い飢えている男には喉の奥から手が出るほどに、たまらないルックスだった。今、怯えている表情も非常に庇護欲をそそらせている。

「なんでこんなところにガキが……」

「震えているじゃないか！　もう大丈夫だよ。君はこんなところで何をしているんだい？　ここには一人で来たのかな？　それともお友達と？」

「おちっいて。」

緊張していることもあって、バイオショックに登場する正気のリトル・シスターのような幼女に対して、アサルトライフルを構えたまま固まっている私に。コロ先輩がそつと銃に手を置いて銃口を下げさせた。これを機に引き金からも指を外す。

そのやりとりの間にもなお先輩と神村が近寄って行き、クローゼットを取り囲む。なお先輩は、クローゼットの奥で身を潜めている少女に対して、優しい声色で声掛けしながら幼女の不安を取り除いてあげようと接している。

「日ノ出、どけ。……速水、おい速水。起きろよ」

「待って！　そんなに心寧ちゃんの頬を叩かないで！　私が代わりに起こすよ！　心寧ちゃん！　心寧ちゃん！　ねえ、起きて！」

神村は陽葵ちゃんと場所を入れ替わり、心寧ちゃんの頬をペチペチ叩いては目覚めさせようとさせていたが、彼女は唸るばかりで一向に目を覚まそうとしない。

結局、神村は何度も心寧ちゃんの頬を往復ビンタの要領で叩くあまり、陽葵ちゃんが神村と場所を交換し、肩を激しく揺さぶる形で目を覚まさせていた。ガクンガクン揺さ振られるたびに据わっていない心寧ちゃんの頭がゴン。ゴン。ゴン。ゴンゴンゴンゴン。タン

スにゴン（クローゼット用）のCMの要領でクローゼットに叩きつけられる。陽葵ちゃんの方がよっぽど、神村の起こし方よりも乱暴ではあったが、たぶん……いや絶対にアレは本人に悪気は一切感じられないような気がする。

「う…………う…………う……っ！ う……っ！！ う……っ！！ う……っん……………？ はれ…………？ 陽葵ちゃん？」

何度もクローゼットにゴン。ゴン。ゴン。と頭を叩きつけられている心寧ちゃんも、次第に鈍い悲鳴と共に目を覚ました。目を擦りながらまるで先ほどまで昼寝していたような反応をする。

「心寧ちゃん！ ああ！ 良かった！ 心配したんだよ！」  
陽葵ちゃんが声を上げる。

私も心配したよ。今は居なくなっていたことよりも、主にクローゼットに叩きつけられまくっていた心寧ちゃんの頭の方が。

「クローゼットなんかで昼寝なんて正気かよ？」

「陽葵ちゃんに、神村さん？ クローゼット？ ……あれ？ なんで私クローゼットなんかで寝ているのでしょうか…………？」

「それはこっちも聞きたいぐらいです。探しましたよ。すごく心配しました。…………頭とか…………怪我していませんか？ そこから降りられますか？」

「あ…………。…………すみません。ありがとうございます…………」

状況が飲み込めていないという心寧ちゃんに対して私も近づき、神村と陽葵ちゃんの間を割って入るようにして手を差し伸べる。彼女は她的手を取って、ゆっくりとクローゼットから降りた。

少しフラついているが、死体の道で数歩歩いたところで感覚を取り戻したのか見失う直前のような安定した歩行へと戻る。

やがて後方で状況を見守っていたコロ先輩も近づいてきては、なお先輩の元で幼女に対して警戒を解くためのアプローチを開始していた。

……………

……………

……………

「心寧ちゃん、あの後。私と別れた後何があったの？」

ひとまず1年組の4人は3年組を見失わない距離まで離れ、心寧ちゃんにどうしてクローゼットの中で寝ていたのか尋ねる。

「はい……陽葵ちゃんと別れたあの時、変な死体を見つけたんです」

「変な死体……ですか？」

「もつとこう、詳しく言ってくんなきゃ、俺達にはわかんねえよ」

「……そうですね。……すみません。ここの死体って全部、首が無くて、干からびていて、緑色で、骨と皮……あとたまに痙攣する死体しかないじゃないですか」

「ああ。たまにあったな、痙攣する死体」

「うん……痙攣する死体は私も鍵を探している時に見ちゃったけど、確かに変だよな」

「死後間もないわけではないのに痙攣する死体は変ですね。確かに」

心寧ちゃんの言葉に3人そろってウンウンと頷く。

痙攣する死体について初めはヴードゥーの犠牲者／従順な下僕／魔術師の傀儡かと身構えたものだが、ただ単に皮膚が痙攣する緑色の死体は変な死体ではあった。

「いえ……あの、私の言いたい変な死体っていうのは痙攣する死体のことじゃなくて……。意図的にバラバラにされたみたいな肉片とか骨がいつぱい落ちていて……。同じく乾燥しているんですけど……他にそんな死体もなかったの……その死体の事です」

知らぬ間にすごい状態の死体を心寧ちゃんが発見していた件について。彼女の発言に3人まとめて彼女を凝視する。

え？ 意図的にバラバラってなに？ その話を聞く限りだと、四肢と頭を分断したなんて生ぬるい死体じゃないよね？ カチンコチンに冷凍したマグロをクラッシュ歯車に巻き込んだ時のような肉片って言いたいなの？

「え？ ちなみにその死体は何処に？」

「丁度、今いる位置から反対側に位置するところですね。それで、その死体の肉片を調べていたのですが、あのクローゼットの付近で唐突に誰かから抱き上げられる感覚があって……。さ、最初は陽葵ちゃん

が私をびつくりさせようとじやれついてきていると思ったんですけど……」

抱き上げられるとのくんだりから、心寧ちゃんの様子が変わる。自分をまるで抱きしめるかのように腕をクロスさせ肩を抱き、真下を向いてカタカタと震え始める。

「違うんです。アレは……。ぶよぶよの肉の塊みたいなんですけど……イソギンチャクの触肢のようにいっぱいあるんです……。……。冷凍庫の保冷剤みたいに異様に冷たくて……。でも凍り付いていなくて……。滑らかだったんです……。それが背中をなぞって、まるで多数の舌が私を……。舌で全身を嘗め回して凌辱するみたいに……」

「助けを呼ぼうともしたんですけど……。怖くて……。声も出なくて……。逃げようともしましたけど見えない何かに押しつぶされるような感覚が支配して……。……。……。……。……。気が付いたら陽葵ちゃんが私の肩を揺さぶっていて起きたんです」

やはり室内とはいえ、分散したのは悪手だった。

彼女の話聞く分に異質な存在に襲われたのは明白だ。それがドレスを纏った首のない貴婦人だったかどうかは定かではないが、心寧ちゃんと生きて再開できたのは不幸中の幸いでもあるだろう。次こそは、同室内であっても絶対に分散するような真似はしないと固く決意を抱いた。

「日ノ出。お前は どう思う？ その仕業はドレスを纏った首のない女か？」

「うーん……。私の聞いた話では、ドレスを纏った首のない女の亡霊はドレスを着てたって言ってたよ？ 肉の塊だと違うんじゃないかな？ ……抱きしめるのは同じだけど……。心寧ちゃん、どこもガブーってされてないし……」

「てめえは？ てめえはどう思う？」

「……。え？ 私ですか？ 私は……」

神村に話を振られて、一応。心寧ちゃんの証言をもとにヘクトウルフ神話の技能で該当しそうな神話生物を模索してみるが……。私の知り



うる神話生物には、いずれも該当しなかった。

やはり神話生物を判別するには、その神話生物に関する決定的な情報や、実際に自分で体験、その症状について明確にわかるものでなければ判別しかねる。

クトウルフ神話における不可視の神話生物はいくらでもいる。私の知り得る限りで十数種にも及ぶ……その中で本人に物理的な攻撃を食らわせなかった存在と絞って言えば、ナチュラルに『ゴースト(亡霊、幽霊)』ぐらいなもののだが……。

「……どうでしょうね。現存の情報のみでは判別しかねます……。ですが、ひとまずは心寧ちゃんが無事に合流できたことが何よりも嬉しい知らせですよ」

「！ うん！ それはそうだね！ 私も心寧ちゃんが無事でよかったですって思うよ！」

「そればかりは日ノ出と青ぞ……ひまり達に同意する」

「ああ……ありがとうございます……！」

私達の言葉に心寧ちゃんは感極まったのか少し涙ぐむような声と指先で目尻のしずくを拭って、あの表情があまり出ない彼女がほんのりニコリと笑った。

さて……あとで心寧ちゃんが見つけたというバラバラ粉砕死体は、向こうで幼女の警戒を無事に解くことのできたなお先輩とコロ先輩、そして新たに脱出メンバーに加わりそうな幼女を交えて調べるとするか……。

今、彼等は新しい仲間を引き連れて私達の方へと歩み寄って来ていた。

……  
……  
……

## Episode 65 『無茶振り』

7人メンバーという大所帯は、私の前世であるクトゥルフ神話TRPGの世界線で考えてしまえば、1人、2人いつ死んでもおかしくない状態だ。

そんな大所帯となった私達は一旦、死体部屋のクローゼットで身を潜めていた幼女の精神的影響を鑑みて、死体の山で構築された部屋から隣の別室へと移動をしていた。

ここにも壁には血糊がべつとりとしていたが、一切の死体がない分だけいくらかマシな光景に見えてしまう。

ここでは室内に置かれているベッドになお先輩が腰をかけ、その隣にあのクローゼットに隠れていた幼女。幼女の向かい側にコロ先輩。窓際の壁に寄りかかる神村。出入り口に心寧ちゃんと陽葵ちゃん。書き物机近くの椅子に私が座っていた。

心寧ちゃんが発見した……死体部屋の床に散らばった粉碎死体？

幼女の精神状態の兼ね合いの元、早急に立ち去る必要があるということので一切の調査はできなかったよ！

心寧ちゃんが一時的と言えど失踪したのだ。あの出来事の直後で分散することなんか、私達の選択肢にあるわけがない！

……  
……  
……

コロ先輩が幼女の面倒を見ている間に、なお先輩が何故、幼女があのようなくローゼットの中に隠れていたのかを説明してくれる。

どうやら彼女は一昨日の段階で父親と母親、そして姉の家族4人でハイキングに来ていたそうだ。

しかし突然の悪天候。ニュータウン（笑）な田舎町である五車町へ入ったあたりから、カーナビの調子がおかしくなり山中にて迷ってしまっただらしい……。

そうこうしているうちに自動車はガス欠でエンスト。JAFに相談しようにも携帯の電波は届かず、車の中で雨が上がり活動できるの

を待っていたが……。どこからともなく車体をかぎ爪で凹ませ、タイヤをかみちぎることのできる大熊に遭遇。窓を叩き割られて、あわや熊パンチで死にかけてところ、熊が他の得物に気を取られその場を離脱。その隙に、車の中は逆に危ないと判断した一家は森の中を彷徨い歩いていたところ、洋館があるのを発見。道を尋ねようと洋館の中に入ったところでフワフワのドレスを纏った亡霊に襲われて……――

なお先輩の見立てでは『両親・姉は既に惨殺されたのではないか』という話をかいつまんで話してくれた。

彼女がクロゼットに隠れていた件については、彼女の父親が彼女をクロゼット内に隠したらしく……。あのクロゼットの前で干からびていた首のない死体こそ、今コロ先輩が見守っている幼女の父親だったようだ。

また幼女の話によれば、心寧ちゃんは非常に慌てた様子で自らクロゼットの中に入ってきかとも話してくれたらしい。心寧ちゃんの記憶が曖昧な以上、こればかりは真実か嘘か確かめようはない。しかし、なお先輩は幼女の話信じているようだ。

まあ、こんな状況で嘘をつく利点が特に見当たらないのは充分にわかる。

例え彼女がドレスを纏った首のない貴婦人が化けた亡霊であったとしても……なおさら、心寧ちゃんを生かして私達と合流させたことに道理と理解できない。複数の虫けらを一度に薙ぎ払うよりも、犠牲者の手記や事前情報にもあったように邪魔者を1人ずつ消して行った方が確実性は取れるだろう。

そもそもクトゥルフ神話における神格や生物は、我々人間の思考などで考えつくような存在ではないが……亡霊にとつての利点が何も思い浮かばないこの状況では、私達がこの幼女を疑うような状況にはなり得なかった。

「えつとまず初めに自己紹介と行こうか。僕たちは、これからこの洋館を脱出するために最低限、お互いの名前を知っておくべきだと思うんだ」

事情を話したなお先輩は室内にいる全員に聞こえるほどの声の大

きさで話を始めた。

必然的に全員の視線が、なお先輩と幼女へと向く。一瞬にして私達の注目を集めた彼女は、ビクツとその身を震わせて注目を集める原因となったなお先輩の腕に縋り寄っている。

「大丈夫だよ。彼女たちは全員、僕のかわいい後輩……そう、わかりやすく言うなら妹たちなんだ。だから決して怖くないよ」

そんな幼女を落ち着けるようになお先輩は彼女の頭を撫でる。頭を撫でられた彼女は、まるで子猫が母親に舐められ心地よさそうにするかのように目を細めて撫でられていた。

「それじゃ、まず……そうだね。君から自己紹介をしてもらえるかい？ 妹たちも君の名前を知ればもっと仲良くなれると思うんだ」

彼は幼女の緊張がほぐれるまで優しく頭を撫でた後は、ゆつくりとその手を彼女の肩に回してポンポンと叩く。

「うん。あのね。わたしは、『影本<sup>かげもと</sup> 鹿子<sup>しかこ</sup>』って言うの。来年から小学1年生になります。好きなものはアイスクリーム、かな」

それからまずは幼女から、幼さとおぼつかない日本語で簡潔に自己紹介をした。

『鹿』という名前を聞いた瞬間に条件反射的にも私の体がビクンと跳ねてしまったが、幸いにもその様子は誰にも見られていないようだった。

鹿子ちゃんかあ……いい名前だなあ。

「いいね。よい自己紹介だよ。それじゃ、次に自己紹介をしてくれる妹は誰かな？」

「はい！ はいはい！ 私がする！ 私がするね！ 私は日ノ出陽葵だよ！ よろしく！ 好きなものは運動かな！ 身体を動かすのって気持ちいいよね！」

「日ノ出お姉ちゃん……」

「せっかくだから、鹿子ちゃんにも陽葵ちゃんって呼んで欲しいけど、ここにはもう一人日葵ちゃんがいるからね。日ノ出お姉ちゃんでもよろしくね！」

流石、ソーラーブライトポジティブウーマン。彼女特有の長所<sup>元気のよさ</sup>を

全面に押し出して、扉から少し離れる形で鹿子ちゃんに近寄って明るく挨拶している。

「それじゃ、次は心寧ちゃん！ 自己紹介、いつてみよー！」

更に自然な流れで次の人に自己紹介を振る。陽葵ちゃん、自己紹介で自然な流れを作るのうまいなあ。

「速水 心寧です。好きなものは……ふうm——ポツ……は、恥ずかしくて、い、言えません。言えませんけど……私もアイスクリームは好きですよ。味はバニラ味。五車町のアイスは滑らかでクリーミーなんです。無事に出られたら一緒に食べに行きましよう？」

「バニラ……いー！ バニラ！ 私も好き！ 心寧おねえちゃん、よろしくね！」

心寧ちゃんは自己紹介の最中に顔をほつと赤らめて、恋する乙女のように首を左右に振って見せた。

……今、こいつ……好きなモノ紹介で『昼行燈』ふうまくんって言おうとしなかったか？

ざっくりと他の5人の様子を伺うが、誰も何も今、心寧ちゃんの『ふうまくんは私の思い人だから手を出すんじゃねーぞ(偏見)』という忠告に反応した様子はなかった。まあ、少なくとも？ふうまファンクラブに関してはここにいるメンバーは彼の話題を挟んでも大丈夫そうだ。

一歩間違えれば、陽葵ちゃんがせっかく温めた空気をサツバツと化させない発言をする女、心寧ちゃん……！ 恐ろしい子……っ！

否。これは敢えて鹿子ちゃんという子がいる手前、怒れないという状況を利用した自己主張だったのか……？ もしそうだとすれば……計算高い！ 計算高いわ！ この子！ でも計算高い行為を瞬時に思いついて実行できる知略が練れるからこそ、洋館へ突っ込もうとした彼女達を止めに来た私の意図を誰よりも素早く察知したのだと思うけど……。

そしてバニラというオーソドックスな味で、この子の心も掴むことにも成功している。

「えーつと……それじゃ、白羽の矢で……神村さん」

「ゲツ……俺か。スーフウー……。しゃーねーな……。俺の名前は神村舞華。夜露死苦よろしく！ で、好きなモンだったか……。そうだな。んー……バリバリにカツコイイモンだな。ビシツと決めてバシツと恰好を付ける。最高だろ？」

「舞華……お姉ちゃん」

神村は心寧ちゃんが私に順番を回してくると睨んでいたのだろう。不意を突かれた順番に動揺をみせるが、タバコを少しだけ吸い込むと煙を噴き出して、気持ちを整えたのちに相手の肝を潰してしまうような挨拶をかました。

それからハードボイルド風の話し方で恰好を付けていたが……夜露死苦などと気合を入れてしまえば……。怯えた鹿子ちゃんがな先輩に縋り寄るのも当然の流れだ。

「大丈夫だ。彼女はあれが普通なんだ。別に君の事を怒っているわけじゃないんだよ」

「う、うん」

そして私の順番が回ってきた。鹿子ちゃん是不安そうな目でこちらを見ている。

だからこそ、ここで一発逆転。彼女を落ち着かせ安堵させてできるだけ女として一世を風靡するべきだ。ふっ……。わたしに任せてくださいよ。陽葵ちゃんの時ような元氣を取り戻して見せましょう……！

頭張れ♪(想像)

コイツか……(想像)

先に日葵さんに振るべきだったでしょうか？(想像)

彼女を最後にするのは悪手では？(想像)

うん……。 (想像)

え？ 何さ？ なんで陽葵ちゃんを除いて、そんな心配そうな顔してこつちを見るの？

私は群馬県まえさき市で、あわや高位魔族の名誉棄損しそうになったことに対して、完璧なアフターフォローをしたできる女ですよ？ そのあと、ボッコボコにぶん殴られたけど。

でも全員、口には出さないがなんとなしに、そんなことを想像して

いるような気がしてきたぞ。

「最後は私ですか……。青空 日葵です。好きなものは音楽。今後ともよろしくお願いしますね。鹿子ちゃん」

「青空……お兄……えっと……お姉ちゃん？」

「おやあ……？　なんか既に不穏なんですけど???　てか今、この子、私の事を見てお兄ちゃんっていうか、お姉ちゃんと言うか迷ってなかった？」

「……おい、ガキ。今どこ見て私を判断しやがった？　声か？　胸か？　まさか胸で判別しやがったわけじゃねえよな？」

「あら。いけない、いけない。うふふ、相手は年下だ。<sup>メスガキ</sup>そんなマジになつてどうする。ここは盛り上げられなさそうだったら、頼れるお姉さんアピールだけでもしておこう。」

「はい。そうですよ。何か困った事や気になることがあったら相談してくださいね」

「あ、それじゃあ」

「オッ。さつそく聞きたいことがあるのか。いいでしょう、いいでしょう。」

完璧な回答をして『このお姉ちゃん、できる』というポジションを確立させましょう。

「なんで、お姉ちゃんは泥だらけなの？」

「えっ」

「どうして足に棒を巻き付けているの？」

「うっ」

「手にフライパンを持っているのは、なんで？」

「うえあ、それはあ……」

「ねえ、どうして？」

ここでふと皆の顔を確認する。

心寧ちゃんは真つ先に私から顔を逸らし、陽葵ちゃんは両手を合わせて俯き謝罪のポーズになっている。神村は呆れ返り、コロ先輩は面白いものを見るような期待している眼でこちらを見ていた。なお先輩は……どうフオローすべきか迷っているそんな顔だ。

ここで神村に宝物を破壊されて暴れまわって泥だらけになったことや、陽葵ちゃんに足を砕かれた事実を話すわけには行かないだろう。つまり、ここで求められているのは彼女に理解ができて無難な回答。かつ、つまらなかつたり私が変人だと思われるような解答は避けるべきだ。

「ああ……これですか……。これは——楽器ですよ」

「がっき？」

「?!?!」

「……………」

「ええ、そうです。私は音楽が好きなので、身体に楽器を括りつけて、いつでも演奏できるように準備しているんです」

私の言葉に鹿子ちゃんは興味をもったようだ。神村による怯えた目から一転。好奇心旺盛なキラキラとした眼差しを向けてきている。一方で陽葵ちゃんとコロ先輩を除く、五車学園の愉快的仲間たちは『正気?』『何言ってるのこイツ』『それは無理があるんじゃないかなあ』という顔や目が向けられる。

でも、子供って純粋だなあ……。君だけは私の渾身の嘘を真実だと信じ込んでいるよ。

陽葵ちゃんとコロ先輩? そりやもう、2人ともそろって声を殺しながら大爆笑ですよ。声を抑えてケラケラ笑ってます。ありがとう。笑ってくれて。

「それじゃあ、一曲歌って欲しいな!」

「うえ……………」

うーん、ちよつとそれは想定外だったかな? 待ってね。ちよつとアイコンタクト会議をするから。

再び五車学園メンバーへと顔を向ける。流石にそれは止めるべきか悩んでいる心寧ちゃんと陽葵ちゃん。笑顔を浮かべるコロ先輩。『あーあ……』とでも言いたげな顔をした神村。大きな物音は出さないうようにとジエスチャーでGOサインを出すなお先輩……。

「だめ、かな?」

「うっ……………」



渋っている私の反応を見たのだろう。鹿子ちゃんは、うるうると目を潤ませて、自己紹介をした他の3人には近寄りもしなかったのに、私に対しては接近してきた。

！  
……間近で、そんな目で見られちゃ……。子供って残酷だなあ

やってやろうじゃねえかよ！ この野郎!!!

「歌います」

もう。これはやるしかなかった。

なお先輩の言う通り、部屋の外に漏れ出ない程度まで音量を落とじて演奏すれば大丈夫なはずだ。

碎け折れた左足を反対の膝にのせて、右手にフライパン、左手にアサルトライフル、腰には改造消火器の銃把の位置を調節する。

……  
……  
……

『daily necessities』

作詞・作曲：釘貫 神葬 演奏：青空 日葵  
ジャンル：ドロ・メタル 意味：日用品

〔青空 日葵 演奏中〕

〔釘貫 神葬 演奏中終了〕

……  
……

「——はあっ……はあっ……はあっ……！——せんきゅう——……」  
シュゴ——！ シュゴ——!!!

パチパチパチパチ  
パチパチパチパチ!!!

ドレスを纏った首のない貴婦人がいるという洋館の一室に、少女の小さな拍手と陽葵ちゃんのそこそこ大きな拍手が重なる。叩く度に生じる激痛に耐え忍びながら、精神的にも肉体的にも、消火器を頭からかぶって物理的にも真っ白に染まった私を労う。

ヒカキボルグの音が想像以上にいい音を響かせたおかげで、ヒカキボルグを連打しなくてはならない事態に陥った。

激痛が限界に来た時には、ライフルのリロード音とコツキング、薬莖の落ちる音、フライパンドラムで場を繋ぎながら、踵を軽く鳴らしてリズムを刻み、身体に付着した泥を床に叩きつけてビートを旋律したのだ。

「青空お姉ちゃんってすごいんだね。私、すごく楽しかった」

「喜んでもらえて……なにより……ですよ……。でも………続きはWe bで……ガハッ」

転がり落ちた薬莖を拾い上げて弾倉に再装填した後、椅子の背もたれに寄りかかりそのまま沈み込む。

二度とやらねえ……。

怪我した足の固定具をゴンゴン叩いて

楽器にするなんてクソみたいな所業は二度とやらねえ!!!!!!

そう、固く誓って。

Episode 66 『ドレスを纏った／首のない貴婦人』

「さて。少しばかりの休憩も取ったことだ。このままこの洋館から脱出しよう」

「……！……。」

「そうだね。それはコロちゃんの言う通りだ。まだ僕達には亡霊の脅威が残されている。寄り道はせずに早急に逃げ仰せるべきだ」

ちよつとした音量の落とした演奏会のうちに、天井を見上げながら真っ白になった私の代わりで今はなお先輩が6人の指揮を執っている。

……おかしい。休憩時間はずなのに、休憩時間にならなかった人が居るのですが……。それは？

でも休憩していたとしても、この鋭くも鈍い足の痛みが軽減されるわけではない。むしろ叩きまくったことで、敢えて負傷箇所を刺激を与え激痛によるアドレナリンの分泌を促しこの後の活動がスムーズになればよいことを考えれば……。これはこれでアリだったのかもしれない。

現在、脱出の為の『鍵』の所持者というところコロ先輩が所持している。周囲からは神村が親からくすねたロケットランチャーを準備する音。心寧ちゃんが鹿子ちゃんの近くで励ましている様子が聞こえていた。

陽葵ちゃんはどうと……。

「日葵ちゃん……大丈夫？」

「多分、大丈夫です。……走れると思います……。」

「!? 走らなくていいんだよ!? でももし走ることになったら、私も神村さんみたいに日葵ちゃんのことを外まで頑張つて連れ出すから遠慮なく言ってね!」

「大丈夫。大丈夫ですつてば。陽葵ちゃんはずは自分の心配をしてください」

私の傍で左足の様態と励ましに訪れていた。私の身体はボロボロだが、ここまでまえさき市での出来事の時と同じように今のところ5人。誰一人として欠けさせることなく持ちこたえているのだ。このまま彼女たちを無事に洋館から脱出させて、日常に戻さなければならぬ。

幸いにも今のところ洋館の主であるドレスを纏った首のない貴婦人の亡霊には遭遇してはいない。……一度は遭遇しているのかもしれないが、あれはあくまでも声だけの存在で……こちらは誰も認識していない。

ともかくとして、このまま噂は噂。遭遇しないなら、遭遇しないで無益な戦闘は避けてさっさと脱出することがベストだろう。できることならば、このまま超自然的な存在である可能性を持つドレスを纏った貴婦人とは遭遇せずに、ちよつとドキドキハラハラした廃墟探索だったねー。でもお気軽に変なところに入ると今回みたいに永久に閉じ込められて出られなくなる危険性があるから、今度は学校の先生方が『入るな』と言った場所には入らないようにしようね！ ということや……事前に情報収集を行って、その場所がどんなところか調査するという事さえ学習してくれればいい。

そんな展開になれば、きつと……彼女たちの未来は正気のまままで明るく照らされているように見えるかもしれない。

「……っ！ 鹿子ちゃんツ!？」

突然の心寧ちゃんの悲鳴。

脱出を目前にして垢抜けた状態の視線から、勢いよく上半身を起す。

そしてすぐに目の前で何が起こったのか理解できた。

新しく脱出のメンバーとして加わった鹿子ちゃんが、痙攣をしている。それも何か変な痙攣の仕方だった。死体に発生していた痙攣とは異なる。まるで電気椅子に座らされて感電するかのような痙攣を、立った状態……MMD初期ポーズのような姿勢で痙攣していた。心寧ちゃんが彼女の肩を掴んで震えを止めようとしているが、残念ながら彼女の痙攣は止まらない。

「どうしたんだ!!」

「わ、わからないです……っ！ 彼女を整容して居たら突然……震え出してっ！」

現在、鹿子ちゃんは激しく痙攣しながらも白目をむいて口からは血あぶくを噴き出している。

先ほどまで穏やかな関係を築きあげて、これから一緒に脱出できると絆を深めた相手が目の前でこんなことになってしまうのは、心寧ちゃんにとっても心的ダメージが大きかったようだ。頭を抱え過呼吸気味になり、その場で膝を突いてしまう。そんな心寧ちゃんを助けるために、なお先輩が飛び込むように間に入って事情を聴いているが今は心寧ちゃんの方がパニックを引き起こして……このまま過呼吸の症状が続こうものならノイローゼを引き起こしてしまいそうな勢いではあった。

「ウゲ……ガ……ポ……アア」

ズゾ……ズゾズゾズゾ……

それから、私達は信じられないものを目撃することになる。

痙攣し、白目を向き、血あぶくを噴き出し、失禁する鹿子ちゃんが十字架に掲げられているイエス・キリストのような姿勢のまま宙へと浮かび上がる。何者かによって持ち上げられていく彼女を止めようと、男手であるなお先輩が彼女の足を掴み引きずり降ろそうとするも、持ち上げる力の方が強いのか彼の方が彼女に引っ張られて持ち上げられてしまう。

更に大腿部頸部からゴキユンツという骨が脱臼するかのような鈍い音。即座になお先輩の方が彼女の足から手を離すが、脱臼した状態で重力が掛かった結果。左右非対称となった彼女の2本の足が、非対称のツララのようにダラン……と垂れ下がっている。

それから彼女の背後にまるで献血の採血チューブが繋がっているかのように赤い翼が生え始めた。幼い身体に対する僅かな貴重な血液や体液……複合有機液体が背後の翼状に姿を形成している存在に取り込まれて行く。

今の鹿子ちゃんの姿は、自らの体液を代償に手に入れた赤い翼の天

使にも見える。

だが、それはそんな神々しいものでなければ、ましてや美しい造形でもない。

やがて、それは姿を現わす。

鹿子ちゃんの体内に存在する赤、錆色、黄色3色の複合有機液体を啜るもの。

絡まった血液チューブに体液が流れ込み、血液循環のように全身を模っていく。

まるでストローでコップに入った残り少ない飲料水を啜る嫌悪感を齎す音。

半透明の何かを彩っていく。

それは一見すれば筒状の物体。

噂では、首のない亡霊と言われていた。

それは恐らくヤツの身体がすべてドレスのフリルに覆われているようにみえるからだろう。

風も無いのにその全身に及ぶフリルは自由意思を持っているかのように蠢き、

規則正しきがあるようで不規則なヒラヒラと動くウミウシの足のように脈動している。

4本のどれもクラゲのストロピラのようなイボイボとした腕が備わっており、

指先はまるで鷹や鷲のような獲物を駆り立てる猛禽類の鋭利な爪がギリリと光っている。

総丈で3 m以上、横幅奥行共に2 m以上もあるのだ。

その腕は簡単に人間の胴体を鷲掴みにし連れ去るだけの大きさがあるように見える。

そんな腕で薙ぎ払われれば、死神の鎌のような切れ味であつてもおかしくはない。

その怪物は幼気な少女の体液を啜り、僅かばかりの満足感を得られたのだろう。

上品だが、哀れな獲物を目前とした不快感を感じさせる笑い声を響



いの笑い涙を浮かべている。心寧ちゃんは軽自動車と並走できそうなほどの速度で室内から悲鳴を上げながら逃げ出して行ってしまった。コロ先輩は白目をむいて仰向きに転がっている。それを見たなお先輩はドレスを纏った首のない貴婦人に対して、モデルガン突きつけ……神村は陽葵ちゃんが洋館に入って行ってしまった時のような目つきでロケットランチャーを怪物に突き付けて――

(まずっ――せめて陽葵ちゃんだけでも助ける！)

笑い転げている彼女に覆いかぶさり、両腕で彼女の頭頂部を覆うようにして護る。大口を開けて笑う彼女の喉が焼けてしまわないように無い胸で塞ぎ――

「あははっ！ ひま――」

ズガアアアアアアン!!!

……。……。死んだ。今のは流石に私も死んだ。今度は廊下じゃない。密封された室内なのだ。バックブラストや彼女の放った爆風に巻き込まれて私は死んだ。

そう思っていたため、目は固く閉ざされ、体も硬直しているのが分かる。激しい爆音が聞こえ、熱風が私の頭上を通り過ぎる。陽葵ちゃんは無事な様子でモゾモゾと私に押しつぶされながら動いていた。折れた脚の痛みで全身が焼かれる苦痛を緩和してくれると必死に祈るが……。いくら待ってもその死の瞬間が訪れることはなかった。

あれ？



ズガアアアアアアン!!!

再度の爆裂音。

自分は死んでいるものと思いつつも、眼球が焼けることに恐怖を抱きながら、そつとほんのり瞼を開けて再び聞こえてくる爆裂音を放っている主を神村みた。

ここでやつと、神村のロケットランチャーの仕様について気づきを得られる。

さてはて……あれはどういうわけか。どういう原理である状態になつているのか、私の〈物理学〉〈工学〉では判断できかねるものだが……。

私を見る限りでは、彼女が連続して放っているロケットランチャー……バックブラストが影響していないようにみえる。バックブラストが発生していないにもかかわらず、無反動砲のように微動だにもしていない。ロケットランチャー自体が玩具……な訳ではない。現に砲身から激しい炎は噴いているし……。いや、今はバックブラストよりももつと突つ込むべきところが可視化されていた。装弾されている砲弾は多くても2発程度しか入らない構造をしているにも関わらず、彼女は連続で何発も赤き霧に対して弾丸を浴びせ続けていた。

これまでの私の警戒は杞憂にしか過ぎないものだど証明されたが、彼女のロケットランチャーを見て、次に率直な感想としては……。

「なにあれ私も欲しい」

この一言に限る。

実際に触つて分解してみれば、科学的には説明可能な兵器なのかもしれない。だが、現状私の長けた〈物理学〉と〈工学〉で推察できないことを踏まえたうえでは超科学ロケランじゃん。

カルティストの拠点に対してロケマサし放題じゃん。軽率に〴〵したら、釘貫のアネゴが1人でその場に行つてなア。ロケットランチャーを連続でぶつ放して、ルルイエを出てくるカルティストもろとも木つ端微塵、瓦礫の山にしてもうたんじゃ”ごっこができるじゃん。

まあ、そのためには〈砲〉の取扱い方についてももう少し訓練やトレ

ニング期間を設けて、あの神村が連射しているロケットランチャーが超科学によるものなのかと調査・分解したいところなのですけどね。

ブラッドドレスを纏った首のない貴婦人は、流石にロケットランチャーの連撃が効いたのか、たじろいで掴んでいた獲物をその足元に落とす。ゆえに奴の拘束から解放された鹿子ちゃんは、不自然な格好のまま地面に叩きつけられ、うつ伏せで寝そべっていた。

なお先輩はというと、持ってきたモデルガンがジヤムを引き起こしたのか「こんな時に限って！」と言いながら神村の放つロケットランチャーの炎に銃を向けている。

あの、なお先輩？ 銃はソーラーパネルじゃないんだから。モデルガンを神村の炎で、バーベキューしても銃身が温まるだけでジヤムは直らないと思うのですけど……。あの行動の意味が分からない。もうあつちはあつちで支離滅裂な行動をとっている。

## Episode 67 『狂気乱舞』

さて。状況は最悪の一途をたどっていた。

五車学園の生徒、6人中5人が発狂状態。そのうち1人は爆速で室内からフェードアウト。手の付けられない行動をしているのが2人。自分の力で動けないのが2人。

ひとまず、爆速で室内からフェードアウトして行ってしまった心寧ちゃんは後で探すものとして今は置いておく。この神話生物を目前にして、狂気の状態にある4人を放置することは見殺しにするよりも惨い行いに違いない。更に言ってしまうえば分散を避けることを目標として定めたのに、私がこの場から去ること自体誤った判断だろう。

ブラッドドレスを纏った首のない貴婦人がここにいる間は、今のところ得てきた情報や遭遇してきた怪奇、心寧ちゃん彼女の行動を観察する分にはさほど致命的な脅威になるようには考えられない。

話は変わって、神村と最初に合流したときにはロケットランチャーをためらいなく撃つ彼女に対し、気絶させ装甲として持ち運ぼうとしていたものの……あの時は心寧ちゃんの目を気にして実際には、その方法は実行しなかった。今こそ、その方法を解禁すべきだろうが……確実にその光景は3人に見られてしまう。

「これならば!!!」

『何やっているんだか……あの人は……』と、もぞもぞ動く陽葵ちゃんを下敷きに伏せ状態で呆れ返る私は信じられないものを目撃することになる。

なお先輩がブラッドドレスを纏った首のない貴婦人に対してFN 2000に似通った穂稀プラグスーツカラーのモデルガンの銃口を向ける。そしてトリガーを向けて……――

――ビュンツ!!!

モデルガンだと思っていた銃口から、オレンジ色に近い赤色の閃光が放たれたのだ。

――チュイン!!! チュンチュンチュンツ!!!

驚きの連鎖は止まらない。初め、何が起きたのか理解できなかつ

た。

なお先輩の銃口から放たれたビームのようなレーザーが、その爆炎にたじろいでいるように見える怪物に直撃をした！ 直撃をした筈なのに……光が分散したかと思えば壁や床、天井に焦げ目を残したではないか。でも怪物は嫌がつているように腕を振り上げてはクネクネと白旗を振る様に、その鹿子ちゃんの体液で満たされた半透明の赤い腕を振っている。

ちようどその焦げ目を残す光は私達が伏せている目の前の床にも着弾する。そつと焼け焦げた床を触り、何が起きたのかを確認する。

——ジユツ

「ぐっ………！」

触れた指に刺したかのような痛み。指先を見れば皮膚が赤く爛れている。

でもレーザーを出していた銃は怪物に直撃していたはずだった。でもそのレーザーは分散して、床や天井に刺さり今は地面を焦がしていたことを考慮すると……まさか、レーザーが鏡に当たったかのように光の屈折と反射を引き起こしている……？

更によく見れば怪物の方も鹿子ちゃんの複合有機液体を啜った直後よりも、輪郭が薄れつつあった。アイツはアイツで、また不可視の状態に戻ろうとしている……！

「こっちは、まだまだいけるよ！　くらえっ！　集光解放！　フルバースト！」

「マツスグネラツテブツコロス。マツスグネラツテブツコロス。マツスグネラツテブツコロス。マツスグネラツテブツコロス。マツスグネラツテブツコロス。マツスグネラツテ——」

「」

「きやははははははは！」

「陽葵ちゃんは伏せてろ!!!」  
ズガアアアアアアアン!!!

——ビシユンツ!!!

——チュイン!!!　チュンチュンチュンツ!!!

再びなお先輩の閃光が怪物に直撃した。同時に拡散し、地球防衛軍2から皆勤賞のウイングダイバーが用いる初期装備であるレイピアのような挙動を発生させる！ 起き上がった反射でミラーボールのようにキラキラと煌めくレーザー砲を触ろうとする陽葵ちゃんを制止・介護しながら、『新クトウルフ神話TRPG』選択ルール：124頁「伏せ状態」を保ち続ける。

反射した光線の直撃は免れられるものの……反射して床に直撃した光線だけでも軽い火傷を引き起こしてしまうのだ。そんなものが直撃すれば……自分の肉体が穴だらけのチーズにされるのは想像に難くない。レーザーを連射している本人と、ロケットランチャーから放たれる爆炎で己の身を護っている神村は無事だがそれも時間の問題だった。

苦肉の策ではあるが、やはり私が『CALL of CTHULHUクトウルフ神話TRPG』の荒業を用いてこの場を離脱する他はなさそうだった。言い訳は後で考えるものとして、今は人命の方が優先されるべきなのだ。

運べるにしても精々同時に1人の人間、特に鍛えているとしてもさほど筋力の付いていない青空 日葵が持ち運べる人間は2人が限度。

この場には4人いる。誰か2人を諦めねばならない。

——いいや。ここまで来たんだ。鹿子ちゃんは助けられなかったかもしれないが、今はこの場にいる五車学園の生徒達だけでも可能な限り生還させるべきだ。

力を出し惜しみしている場合じゃない。アレを使えば……私なら一度に3人は運べるはずだ。

即座に作戦を頭の中で構築する。

それぞれの様子から「精神分析」によって、おおよその発狂内容を推測する。

陽葵ちゃんは感情爆発。神村は暴力衝動。なお先輩は常軌を逸した行動。コロ先輩は分かりやすい気絶あたりだ。この場において自力で動けそうにないのはコロ先輩と陽葵ちゃんの2人。あとの2人は自力では動けるが……あの様子では簡単に連れて逃げることはで

きそうにもない。

ならばどうする？

いつものノックアウト打撃？

ブラッドドレスを纏った首のない貴婦人が再度透明化をしている状況から……そんな時間も惜しい。

神村のロケットランチャーの弾薬もいつまで持つかも分からない。なお先輩のレーザー砲のチャージ時間はおよそ約<sup>約3.6秒前後</sup>3ラウンドで、あとどれほど何発打てるのか想像が付かない。

彼女たちの狂気状態がどれほど続くかも分からない。

不確定要素が多すぎる——！

多すぎるが……！ それでも、私がやらなきゃ誰も助けられない！

「陽葵ちゃん！ 聴いてください！ 笑って居る場合じゃないです！ この洋館から出ますよ！ 私の肩に掴まって、背中に乗ってください！ 出口まで走り抜けます！」

「んっ？ んふっ ♡ ちゅちゅっ ♡ ♡」

「」

ちゅぽんっ ♡ ♡ ♡

「あうー？ うーひひ！ あーはー！ あはははは！ あむっ ♡

んー♡ふうー？ ♡ ♡ ♡」

ちゅぱっ ♡ ♡ ちゅ ♡ ♡ ちゅちゅちゅ ♡ ♡ ♡

こいつはなにをしているんだ。

洋館から脱出するための算段を立て、神村のロケットランチャーから放たれる爆風から陽葵ちゃんを護ったと思った。『護った』と思っていたら、陽葵ちゃんが日葵ちゃんの下で日葵ちゃんの上半身にある日葵ちゃんをしゃぶっていた件について。

一瞬目の前の状況が理解できなさすぎて、完全に言葉を失ってしまった。

ごめん。今、そういうお色気要素は要らないから。そういうギャグはもつと別の時にするべきだから。

ちゅぽん！

自身の片手で彼女の頭を抑え、青空 日葵の太陽へとしゃぶりつく

日ノ出 陽葵を引きはがす。

いつの間にか胸元の衣服がはだけて、青空 日葵の初日の出が『コンニチハッ!』と……。仄かに温かくじつとりとした唾液で濡れたことで、日葵の太陽がテラテラと発光をし、外気によってハッカ油でも塗られたかのような冷気を感じられる。

陽葵ちゃんと友達じゃなければ、渾身の〈精神分析(物理)〉をかましてやったところだ。

まずはこの狂ったメンバーの中で実害は出ているが比較的は無害そうな陽葵ちゃんを背中に背負う。背負うためにも、改造に改造を重ねた消火器は取り外して傍らに投げ捨てた。消火器とは異なった陽葵ちゃんのズンとした重みが足に。ああ！ 折れている脚に！ 脚に！ ぐっ……伝わるがっ、運搬自体に問題はなさそうだッ！

「んむっ♥ んっ♥ んっ♥♥♥」

ちゆるっ♥ ちゅぱっ♥ ちゅちゅちゅ……♥ れろっ♥

おい！やめろっ!!! やめロツテ！

耳を舐めるな！ニジエに投稿されている細型触手のような舌使いで私の耳を舐めるなあっ!!!お前は感情の噴出をしているんじゃないのか!!!

わたしにソツチの趣味は無いんだ!!!黙ってケラケラ笑ってろッ!!!

シュゴオーツ！ シュゴオオオーツ!!!

耳をしゃぶられ首が傾きながらも、投げ捨てた消火器を拾い上げて完全な透明可を果たしてしまいそうな赤き霧／磯八目巾着鰻に対し消火薬液を全て吹きかける！ これでまたしばらくの間は、私は奴の姿を肉眼に捉えることができ、なおかつ奴の身体の一部が消化薬液まみれとなったおかげで、立ち位置的になお先輩のレーザー砲が私へ反射して跳ね返ってくる心配もない！

空になつた消火器は今度こそ放り投げ捨て、今度は背後から神村の首根っこの衣服をねじり上げるように掴む。この運搬方法は私がまえさき市のショツピングモールの裏方、カルティストに対して利用した荒業、その1ツ！『クトウルフ神話TRPG系統』では装甲は重量に含まれない！『荒技を流用して彼女をロケットランチャーごと引っ

張っていく。

そして、そのまま寝転がったままのコロ先輩へと近づいては、彼女の両足首を掴み持ち上げた。これこそ『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』（72頁 冒頭）記載、私が前の肉体で対魔忍世界へ訪れた時。アンダーエデンで成し遂げた対魔忍・秋山凜子に使用した荒業……そのにいッ！『気絶した人間を』途方もなく大きな棍棒”として流用する”だ!!!

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』70〜71頁 “武器の表”には掲載されてはいないが、物理的近接武器最強の『木斧』と並ぶ火力を併せ持つ、様々な物体を転用させることのできる汎用性の高い棍棒だ！

「うぐあああああああああああああつ!!!」

左手に神村、右手に気絶したコロ、背中に私の耳をしやぶり続ける日ノ出 陽葵を背負って、自分を鼓舞するように絶叫と唸りを上げながら駆け出す！

もう折れた脚が足として機能していないが……固定したヒカキボグが私にとつての新しい足として、簡素で粗悪な義足として地面を蹴りつけ前へと出る。

「待て！ コロちゃんをいっただい何処に連れていくつもりだ!!!」

背後からなお先輩の声。振り返れば、彼は今 物言わぬ死体となつたであろう鹿子ちゃんをあゝの現場から背負って私目掛けて走って来ていた。

乱射魔のいねえ安全な所だよッ！と心の中で悪態をつきながらも、思わぬ好機に笑みが零れた。海老で鯛を釣る。棚から牡丹餅ということわざが存在するが、そのことわざは今の状況にピッタリだろう。いわば、コロでなおを釣る、なおから鹿子ちゃんと言うべきか。

だが、物事は早々に楽な方へとは流れては行かない。なお先輩の手には、神村の炎で充填された不気味に赤く輝くレーザーを放てるライフルがあつて――

——おいおい、マジかよ。今、そのライフルを向ける相手が間違つてんだろッ――！





いている神村が私の背後を目掛けてロケットランチャーを放っているのではないか。

——やっと正気に戻って援護にまわってくれたのか?! と思ったが……私の判断は甘かった。彼女の口元はまだパクパクと動き、『目標をセンターに入れて引き金』のような碇シンジくんみたいなことを言い続けている。しかし、彼女のロケットランチャーの爆炎は私達を覆い隠し、なお先輩のレーザーを相殺あるいは無力化してくれていた！

これは状況的に『新クトゥルフ神話TRPG』109頁「掩蔽と遮蔽」の効果と123頁「戦闘の選択ルール：『完璧な遮蔽』および『掩蔽を通して対象を射撃する』」の効果に適応されていると考えて良い！

なお先輩は、全力疾走しながらライフルを射撃、その上でペナルティ・ダイスを2つも取得し、攻撃対象が炎に隠されている状況で正確な狙撃技術を要求されている！ 地獄に仏とはこのことだろう！ この件にしては現在も発狂している神村に感謝だ。お前の砲撃のタイミング、最高だぜエツ！

……でもこれ。もう状況も、誰が敵で味方かもわかんねえな。

Episode 68 『洋館内で最大級の脅威が、最も警戒していたはずのブラッドドレスを纏った首のない貴婦人という恐怖対象から、穂稀なおという五車学園の一般生徒に切り替わっていた件について』

レーザーで焼かれた皮膚がヒリヒリ、ジユクジユクと痛むが、私は引き続き彼から逃走し続けることができています。

金属製のヒカキボルトの足音を響かせて走る私に、背中に笑い狂う陽葵ちゃん。左手には装甲の役割を果たしながらも砲撃を続ける神村。右手には途方もなく大きな棍棒と化したコロ先輩を近接武器として洋館からの脱出を目指す。

背後へ少し視線を送れば、青ざめた鹿子ちゃんを首からひっさげた、神話生物とどっこいどっこいな白き閃光／プロミネンスキャットがレーザーを乱射しながら、こちらを全力で追尾し続けてきていた。

——ビュンツッ!!!

「逃がさない！ 逃がしてたまるものか！」

「……ッ！」

しかし、コロ先輩が所有しているカードキーのおかげだろう。明らかに先ほどもどとは洋館屋内の状況は一変している。6人で鍵探ししていた時では燭台に炎は灯っておらず、薄暗い雰囲気の中が闇の中に溶けるように延々と続いていたのだが……。今では私達が入った当初と同じように燭台に炎が灯り、先が見通せるようになっていた。

既に希望は見えている——あともう少しだけ。あともう少しで、この現存している最低限のメンツを引き連れて外に出られるのだ。だから、例えそれがどんな無茶だろうとやってのける覚悟はできていた。

この終わりなき廊下絶望の出口も見えている。廊下絶望の突き当りに位置する部分からは、縦に亀裂の入った一筋希望の外部の光が差し込んでいた。アレは間違いなく私が築いた20万7千985円！ 防水加工

された20万7千985円に違いはない！

おい！ 防水加工された衛星電話 20万7千985円!!! 私はお前の代わりに50万ぐ

らしいしそんな指輪とかネックレスとか装飾品を見つけたぞー!!!

「待てえええええっ!!! コロちゃんをー! コロちゃんををおをを!!!」  
「……………」

背後から響くは絶叫。

出口側へと煌めいていた光線が止んだことに気が付いて、もう一度だけ背後を振り返る。

なお先輩は、そのモデルガンのように見えているレーザー砲の再充填を行っていた。マガジンの部分に該当する箇所が紫色の光で満たされて行く。

先ほどの室内では、神村の炎であるレーザー砲を炙っている行為に對し、何をしているかさっぱり理解できなかったのだが、何度も繰り返される行動と彼の攻撃方法で構造を理解した。彼の持つあのモデルガンのように見えるレーザー砲は、光を貯めてそれを武器として扱うことのできる超科学的な銃だったのだ。

私の知り得る知識で類似した存在を例えるなら、充電の必要な冥王星ユゴスの科学者／医学的甲殻類の持つ電気銃のような……。だから、あの一見側からみれば支離滅裂な行動は、彼の武器の理屈を考慮すれば合理的な行動であったのだ。

……。ところで、なお先輩。頭の中身の脳みそを奪われたり、冥王星の科学者／医学的甲殻類が入っていたりしてませんか？ ……恐らくその人間的な感情が暴発しているところを見るとそんなことはないのでしょうか。

——ビシュンツ!!! ビシュンツ!!! ビシュンツ!!! ビシュン!!  
そんな、なお先輩の頭の中身の話は置いて……。

いくら『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』のルールによって、神村とコロ先輩の体重と2人の装備の重量を無視して運搬しているような状況とはいえ、背後から銃撃を受けるという事態は着実に私の精神を蝕んでいる。

この場で逃走劇チエイイスに持ち込み、逃げ果せても良いが……彼が私との距

離をじわじわと詰めてきているという事は、彼は私よりも移動率(MOV)が勝っている走的速度が速いのだろう。では、そんな状態で私の説明書にあった楽しい逃走劇タイムに入ったとしても滅多撃ちにされるのは間違いないなかつた。

それどころかどのようなチェイスルールを用いれば、彼を出し抜くことができるのか皆目見当も付かない。それどころかチェイス・ラウンドに入れば私だけに不利益が生じることは想像に難くない。

だが、このままでは埒があかないのも事実だ。なんでも良いから、こちらからも行動を起こして少しでも身の安全の確保をすることが必要であることは理解していた。

幸いにも、どういう訳かブラッドドレスを纏った首のない貴婦人は背後から追いかけてきている様子はない。既に完全な不可視化によつて視界に捉えられない可能性もあるが、それにしてもこれまで館内で聴こえて来ていた貴婦人の嘲笑う『くすくすくす……』という鳴き声は一切聞こえてこない。

追跡を中止したということに、妙な違和感を覚えながらも同時に好機と捉える。今は洋館内で、一番の脅威として猛威を振るっている穂稀なお先輩をなんとかするべきなのだから。

「……ッ……しかたねえなあ！ そつちがその気ならやってやるよツ！ コロ先輩、ごめんなさい！」

——ブオンツ！ ガツ ゴロゴロゴロゴロ……

□

「コロちゃんんんんんんんん!!!」

出口まで残り20m程の距離に迫っていたが、骨折のしていない方の足でブレーキを掛けつつ彼に向き直る。その際に、途方もなく大きな棍棒として運用していたコロ先輩を追跡の足を止めるため、彼を目掛けて謝罪と共に〈投擲〉した。

分かっていたことではあるが、安定した重心で完璧な〈投擲〉を成し得なかつた結果。コロ先輩は埃まみれのカーペットの上をスーパールのようにボインボインと。悪代官から帯回しをされる遊女のように横回転しながら跳ねていく。時々伺える白目や、投げられ

て打ち付けられても無反応な様子から、気絶しているという発狂状態にあることだけは確定的にわかった。

結果として。なお先輩はこちらの思惑通りにその足を驚愕しながら止めてくれた。陸にうち上げられた拳句トラックに撥ねられたコイキングのようにビタンビタンと跳ねるコロ先輩へと走り寄っている。そんなコロ先輩を彼が注視している間に、装甲兼砲台として扱っていた神村の手を放し、魔族が用いていたガリルARを新たな障害である白き閃光／プロミネンスキャットに向けて構えた。

背中にしがみついている陽葵ちゃん、振り落とされまいと首に手を回しており、遠心力が加わったことも相まって私の首を……グエッ！！

「……よくも！ ボクは……っ！ 僕はッ！ 僕は絶対に君を許さないッ！ 君は僕達に指揮を執るとか言いながらも本心では、自分の指揮の有能力をひけらかして、僕から隊長の座に加えてコロちゃんまでもを奪おうとしていたんだな！ 君みたいな問題児は外に出してはいけないんだ！ いや！ 君みたいな人間は処分されるべきだっ！ ここで五車風紀隊の隊長として君を処分するッ！」

「ゲホッ!? ゴホッ！ ゴホッ!!!」

『いつになつたらなお先輩の支離滅裂な暴走は治まるんだ』と思うほどに、彼は彼らしくもない冷静さの欠いた血走った眼でこちらを睨みつけ、ブラッドドレスを纏った首のない亡霊がこちらを襲撃してくる可能性さえも厭わず大声でこちらをへ威圧してくる。

<sup>1</sup> おまけに銃口を完全にこちらへと向けていた。まさに射殺される<sup>2</sup> 1ラウンド前<sup>前</sup>とはこのことを言うのだろう。

私としてもコロ先輩をへ投擲したあたりで既に銃を向けてはいた。彼がこちらに銃口を向け私から撃たれる覚悟が整った瞬間に、既に構え終わっているガリルARを全弾連射するつもりであったが……。

流星にあまりにも勘違い男の支離滅裂な言動にカチンとくるものがあって引き金を引くよりも先に口を開いてしまったこと。20発全弾を彼へ向けて放つことによる様々なリスクの誘発を恐れるあまり、20発の弾丸が込められた弾倉<sup>マガジン</sup>から、13発の弾薬が込められ

た弾倉<sup>マガジン</sup>へ交換を行ってしまったことが災いして射撃に出遅れが生じてしまっていた。

「この……勝手にほざいてる！ どいつもこいつも、ふうま君だの、コ口先輩だのそっちの勝手な勘違いで暴れやがってえっ！ 私は洋館から全員無事に脱出させたいだけだっつってんだろうがあっ！ 心寧ちゃんはどっかに行っちゃおうし！ 背中からは撃たれるし！ 濡れ衣を着せられるし！ 大体、こちとら【鹿之助くん一筋】なんだよ！ はい！ ここ大事ッ！！ 私<sup>だあれがッ</sup>は！！ あんな昼行燈<sup>ふうま君</sup>と超能力少女<sup>先輩</sup>を好きになるか！ このボケカスウー！」

狂気的な状況にある分、彼の反応は仕方のないものであるとは理解しているが、私の堪忍袋の緒も限界が来ていたのだ。首にしがみついている陽葵ちゃんの腕を掴んで締まった首を緩めながら、彼へとこれまで抑えていた恨み言を怒鳴り返す。

冷静でない相手には、1年前のテロリストと交渉した時と同様に感情かつ荒っぽい訴えかけの手法を用いた「交渉ロール」の方が好ましい。冷静に論ずことはヒートアップしてしまっている相手の頭脳では処理・理解されにくいからだ。まあ、荒っぽい言動は相手がよりヒートアップすることが間々あるものの、冷静さを欠かせて隙を作るには持つてこいではある。諸刃の剣な場面になる可能性も高いけど。

案の定、私の発言に歯を食いしばり怒りの表情を露わにしたなお先輩はトリガーに指を掛け、完全な銃撃の体勢に入った。紫色の光が充填されたレーザー砲の焦点が私へと突きつけられる。うーん。これはへ言いくるめ〳失敗した感じがある。もう一発、今度は身体の前面をレーザーで焼かれそうな流れだ。

……ふとここで、援護射撃が欲しい時に限って砲撃が止んだ神村へと視線を落とす。

カチツ　カチツ　カチツ　カチツ　カチツ　カチツ　カチツ　カチツ　カチツ　カチツ

彼女は何も出ないロケットランチャーのトリガーを一定の間隔で引き続けていた。やけに周囲が静かだと思えば………これ、暴力衝動の発狂じゃねえな？

「……ひまりちゃん？　　しかのすけくんひとすじ」って、どういうこと？　ひまりとはあそびだったの……？　　こんなにひまりちゃんのこと、ひまりはだいすきなのに？　　あいしているの……？」

そんな中、今にもなお先輩の引き金が引かれようとする瞬間。静寂に包まれた部屋で私の耳元から背筋が凍るような一言が——いただだだだ！　耳を噛むな！　耳を噛むな！　耳を！　噛むなあっ!!!

マジカミツ!!!

ちゅぱっ♥　ぺろっ♥　ちゅちゅちゅ♥♥♥

あっ♥　やゝめゝろゝおゝおゝっゝ!ゝゝ!ゝゝ!

飴と鞭とか言いたげに、私の耳を舐め始めるな！　こそばゆい快樂で転びそうになるんだよ！　おいコラ！　耳の中！　それも更に奥へ舌を細めて入れるな!!!　中耳炎になるだろうが!!!　陽葵ちゃんは5人の中で特に仲が良かったから大事にしてたが、そっちがその気なら陽葵ちゃんもこのまま床に叩きつけてやろうか!!!

大体、いつ私が陽葵ちゃんとそんな関係になった！　今こそこの場には居ないけど、陽葵ちゃんには心寧ちゃんという大親友がいるだろ!!!　狂気に陥っているからってやっていいことと悪いことがあるんだぞ！　陽葵ちゃんツ!!!

「ふふふ……♥♥　しかのすけくんはひまりちゃんに、こんなことシてくれないでしょ？　ひまりはひまりちゃんのためならいつだってシてあげるよ?♥♥♥　ほおら……からだはしようじきだね♥　ひまりちゃんのとつきぶも……♥　もう、こんつつつなに、ガツチガチにかたくなってるよ……?♥♥♥」

「なっ……!　君はコロちゃんのみならず、日ノ出さんにも手を出していたのか!？」

「うん、陽葵ちゃん!!　これ以上は話がこじれるから黙っててくれませんかねツ?!　あといつか鹿之助くんにはシてもらおうから！　私がやるから!!　だから、彼からされなくてもいいの!!!　私が！　するから！　私が！　彼を！　食べるんだアツ!!!」

「……ひどい。ひまりちゃん、ひまりのことをすてるの……?」

「まだそんな関係にも——バツ！　い、いまあ……く、くびを！　くび



を絞めるなア……！」

「不潔だ！ 君は不潔だ!!! やはり君は、不純異性交遊……！ いや  
！ 不純同性交際により……だがこの場合は……不純異性同性交遊  
によって、ここで処分する！」

「ひ、ひまありちゃん！ なおせんぱいがかわいいこといつてる！ こ  
わーい！」

「だからツ、くびを……絞めるなア！」

会話の内容が痴話喧嘩のそれだが……風紀委員で真面目君らしい、  
なお先輩には目前の光景に対する衝撃が大きかったのだろう。

陽葵ちゃんが私の外耳道から舌を引っこ抜き、甘い声で囁きなが  
ら、片手で私の日葵ちゃんをつまみ、コリコリ。カリカリ。さすりさ  
すりと弄ってくれたおかげで。明らかな動揺を見せたなお先輩の照  
準が私からズレて床へと、動揺のあまりあわやライフルを地面に落と  
しかけている。あれでは正確な射撃はできない。いや、なお先輩が  
所有しているのはライフルなのだ。この戦闘ラウンドでは私の事は  
狙えないに違いない。

「ひ、ひま、あ……ちゃん！  
自分の耳を塞げえ！」

首を絞められてダミ声になりながらも、隙を作るのに貢献してくれ  
た陽葵ちゃんに『首を絞めるのを止めて、耳を塞ぐよう』指示を送る。  
ここでやっと、窒息の危機から脱して……。

「ひまりちゃん、やさしー！ これはもう、絶対！ そうしそうあい  
だねっ！ じゅんび、おっけー！」

「……」

陽葵ちゃんは自分の両手で自身の耳を塞ぎながら、ぷにぷにとした  
肘近くの上腕筋で私の耳も挟み込むように塞いでいた。……陽葵  
ちゃんさあ、発言はアレだけど。こういうところがあるから憎めねえ  
んだよなあ。

ともかく。悪いな。なお先輩。ライフルの早撃ち、ここで決めさせ  
てもらおう。

ズガガガガガガガガガガガッ!!!

先ほど定めた照準のまま、引き金を引く。もちろん、射撃方法はフルオート連射だ。

なんと言ったって、私には『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』68頁「火器のスポット・ルール〈自動火器、連射〉」が適応される。加えて■2つ目の収束弾道ルールまでもが命中率に加算されるのだ。これにより、私の攻撃命中率は最大2倍まで跳ね上がる……ッ。

そう。命中率が2倍まで上昇する。これが何を意味しているか。

それは『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』49頁「技能ポイント」3段落目の概念『どんな技能も99%を超えることはない』という概念を「払拭」することができる。現在、私の「命中率」は99%を突破し、確実に弾丸をブチ当てられる！ それは同時に、最初の一発目しか適応させられないが66頁の「戦闘のスポット・ルール」貫通……相手にとって致命的な部分に命中して重傷状態を発生しやすくなっているという事でもある。

更に『新クトゥルフ神話TRPG』における「貫通」の定義・概念を適応させれば、99頁の「イクストリーム・ダメージと貫通」を流用できるだろう。『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』の貫通などよりも比較にならない程の一撃だ。その威力は具体的に、12ゲージ・ショットガン（散弾）を10m圏内で放つたぐらいの期待値を持った火力にはなる。

「ッー」

私の狙った弾丸は正確に彼の武器を捉えた。

（新）クトゥルフ神話TRPGには、部位狙いルールなるものは存在しない。サプリメント『クトゥルフ・ナウ』には部位狙いルールが掲載

しかし、『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』67頁「戦闘のスポット・ルール〈一部が隠れている場合〉」に露出した部位狙いについて。更に77頁「キック」の『股ぐらやアゴを狙った』という部位の指定、おまけに『新クトゥルフ神話TRPG』109頁「掩蔽と遮蔽」には半分以上その姿を現わしてい

れば「狙える」趣旨が掲載されているのだ。

ゆえに私はこれらの手段メソッドを用いて彼の武器。それも弾倉部位を狙った。

殺すことは目的じゃない。

この場から私の背中を焼くつもりの厄介な銃火器の無力化さえうまく行けば、今はそれで充分なのだ。

バキンツ！

「ぐうっ！」

「ビューテフォ……」

私の思惑通り、幾発かの弾丸がなお先輩のレーザー砲に突き刺さる。そのほとんどは効果が無いように見えたが……私の世界線でのバフをかけまくった最初の弾丸だけは異なつた。その弾丸は光のエネルギーをチャージしていると思わしい貯蔵タンク部位に突き刺さる。

まるで沈没していく船内に、水圧に耐えきれなくなったガラスへヒビが入るかのようなビシイツという異音が響き、バキンと弾倉部分が弾ける音がした。見る見るうちにチャージされていたレーザー砲のエネルギー源が漏れ出て空へとなっていく。

彼はそんな銃火器に対して、再び光のチャージのために燭台へと近づくが……もう充電はできないのろう。目頭にしわを寄せて怒りをあらわにこちらへと振り返っていた。

「消火器の妖精……！」  
「しよつかきのピクシー」

「へッ……グピツ?!」

「ひまりちゃん……? おへんじは……?」

「わかった! わがっだっだっ!」  
陽葵ちゃん!

陽葵ちゃんが一番好き! 陽葵ちゃんが、一番「すき」だ「か」

ら「っ!」

「——ムフー♥」

「ムフーじゃねえよ……おえっ……」

「そんな乱暴な口調のひまりちゃんも、ひまりだあーいすき♥♥♥」

「はあ……嘘つけ。その感情。(発狂しているだけだから)絶対、今だ

けだぞ」

「そんなことないもーん！ あ、そうだ！ ひまり、ひまりちゃんのすきなところいってあげようか？ 100いじょうあるけど……えへへ♪」

「……勝手にしろ」

「はい！ それじゃあね、まずひまりちゃんのすきなところは——  
♥」

「陽葵ちゃん……」

「ちくびが——ん？ なあに？」

「そんなこと言われたって、突っ込まないからな？」

「ひまりちゃんは、つつこむよりつつこまれるのがすきなの!? いが  
い〜！ あぐれっしぶなところとかから、てつきりつつこむがわかと  
——」

「……。……よっこいしういち」

「……！ 待て！」

脅威を完全に排除した後は簡単だった。首を絞めて気絶させたのちに、こちらの身体を弄ばんとする陽葵ちゃんをなだめる。彼女からの愛を受け止め応えると、大人しく首を絞めるのを止めて、肩からうなじに掛けた部分に顎を乗せては幸せそうな声を上げていた。

そんな陽葵ちゃんを適当にあしらいつつ、燭台に注目しているなお先輩からコロ先輩を奪取する。床に転がっているコロ先輩が『鍵』を所持しているか確認をして、途方もなく大きな棍棒での運用として持ち上げた。もちろん、一度は手放した神村の回収も忘れない。

それから、我先へと出口目掛けて走った。振り返れば遠距離からの射撃攻撃手段を失った先輩が追いかけて来ている。着実に距離を縮められてはいるが、あの精神的負荷の掛かっていたレーザー光線は飛んで来ない。

うん。実に完璧な戦闘だった。実にスマートな戦闘。

やはり戦いつてのは、状況に応じて頭と知識を駆使して問題に立ち向かうべきなのかもしれない。『CALL of CTHULHUクトウルフ神話TRPG』33頁 “頭を使う”の項目にもそのよう

な趣旨が書かれていたはずだ。

……  
……  
……

洋館の外まであと数歩というところで、ある異変に気が付く。

それはこの洋館に訪れた当初とは異なる点だった。

この洋館の入り口には2階へと登れる階段と、南京錠で封印された地下へと続く階段が存在するのだが……。

その、肝心の地下に続く階段の封鎖地点が、1階の廊下側から強引な一撃でも貫ったかのように叩き開けられ、周囲にはなお先輩のレーザー砲で焼かれたかのようなコゲ目が木の板から煙を放っている。煙の先には怪物の口のような漆黒の闇が広がっていた。

あの時は……鍵がかかっているから、この中に誰かが入って行く心配はないモノとして探索することを見逃していた。でも今は……—

「うおおああああああアアアアアッ!!」

「んなあああああああ!?! お、うえっ?!」

地下への階段の前で、異変を眺めている間になお先輩による膝裏を目掛けた日大悪質タックルが突き刺さった。膝が関節にとって適したくの字になって吹き飛ぶ。メイド・イン・アビスのナナチとおそ松さんの十四松が混じり合ったかのような声が出る。

陽葵ちゃんの『わあ—』という気の抜けた悲鳴が聞こえる。く、く、くびが。首が締ま……るう。

おかげさまで洋館からの脱出は、質量と重量が込められた膝カックンを強制的にさせられるような姿勢で、土砂降りの洋館の外に私達は鹿子ちゃんを加えた6人で洋館を文字通り転がり出たのだった。

## 11章 『洋館の外』

Episode 69 『ダイナミック☆お邪魔しました』

悪質な日大タックルによって膝裏から吹き飛ばされた私は、雨ざらしの屋外へと飛び込むことになった。

目前には泥の地面が広がっていたが、いくら泥とはいえこの質量と重量、速度が加わった衝撃を緩和するためのクッション材としては微々たるものにしか過ぎない。

そんな地面に陽葵ちゃんを下敷きにするわけにもいかず……。腹筋を使って無理矢理にでも上半身を起こして、歯を食いしばって決死の覚悟で私の顔面から泥の中に飛び込む。

ズザザザザザザザザザザーッ!!!

地面に顔面からもみじおろしにされるようなノリで顔面スライディングをキメる私。本日2、3度目の顔面から泥に飛び込む出来事に涙が出てくる。しかも、ストレスで感覚器官がおかしくなったのか、この泥が人肌並みに温かいのが……。なんか泥にまでも慰められているみたいで……。私の涙腺を余計に刺激する。

やめろよお……。そんな私の涙を拭わないでくれよ……。泥にまで同情されたら、私が本当に残念な奴みたいじゃないか……。

地面への顔面スライディング。当然、激突の衝撃で左手に持っていた神村と右手のコロ先輩も手放し、周囲に彼方へと転がっていく。

(おんなのこにしている仕打ちじゃない……。！　こんなの、女の子にしている仕打ちじゃない！)

そんな泣き言を心の中で叫びながら、泥の中に突っ伏していると次第に私の膝にしがみついていたなお先輩の重量が消失し、右手側から誰かが走り寄ってくる音が聞こえた。

「おい、大丈夫か？　立ち上がれるか？」

ここでふと、再び泥まみれになった顔面を泥に突っ伏したままになりながら、泣きたい気分になっている私に対して、誰かが泥の地面に

膝をつき手を伸ばしてくる。重たい頭を持ち上げてナスDのような顔で見上げるも、首の可動域上その人物の顔までは見えなかった。しかし、どデカい爆乳と1年前に見たことのある井河アサギのぴっちり対魔忍スーツじみた紫色のロンググローブと紫色のサイハイソックスは最低限確認できる。

「ううう……どこのどなたか存じ上げませんが……すみません。まずは背中に乗っていると思わしい、背中の陽葵ちゃんを降ろしてもらってもよろしいでしょうか……？」

「……わかった」

「わたしの……わたしの首を絞めてくるので……ゲホッ……。剥がすときは慎重にお願いします……」

「……うむ」

「やー！ やあー！ ひまりはひまりちゃんといっしょなのー！ まだひまりちゃんのすきなところ874こも、いつてないー！ ひまりちゃああああああああ!!!」

「日ノ出 陽葵！ 大人しくしろ！」

「ひまりちゃああああああああ!!!」

陽葵ちゃんの絶叫と共に背中が軽くなる。あー……なんだろう。もう十分に頑張り切ったし、ここでダウンしてもいいかなと再び顔を泥に突っ伏した。

病院の一般病棟でも、患者16人に対して医者1人、患者3人に対して看護師1人の割合とか比率が決められているけど、私はそれらの職業についているわけでもないのに発狂者4人の面倒を1人で見たのだ。

もうちよつとしばらくこのまま休んでいたい。折れた脚も確認したくないレベルで何も感じないし……。先ほどまで人肌ほど温かいと感じていた泥も、今では『慰めの時間は終わりだ』と言うように冷たいし……。動けない私に、そんな思考が錯綜していた。

「おいおいおい……？ この前ナスビ色にしてやったばかりなのに、今度は真っ黒じゃねーかよ。1人だけスプラチューンな奴がここにいるとは——オラ。起きろよ」

ゲツ……。聞き覚えのある声。脇腹に軽く足の甲で蹴られたかのような衝撃。……このタイミングで出会いたくないヤツの声。

この状況では関わりたくもないため、しばらく死んだふりをしていると、今度は私が神村にしてやった時のように首根っこを掴まれ強制的に引きずり起こされる。虚ろに開いた瞼の先に映ったのはブリーチ色の髪、自然に下ろした長髪にギラついた笑顔。私の左手に握られていた神村と似たような赤いチャイナドレス風の服を纏った——プラチナブロンドの光彩をした勝気の強そうな女性。

そう。陽葵ちゃん談では、戦闘狂で有名ならしい真田 焰先輩だった。

「ああ……………」

「ンだよ、露骨にがっかりした顔をされると、助けに来てやったのに損した気分だぜ」

「……………助けに……………」

「そうだよ。ほら、その顔面についた泥を拭って周りを見てみるよ」  
「……………うわっぷ！ や、やめてくださいよ。自分で泥は拭う！ 泥は自分で拭いますから！」

ふらつきながらも2本足で立ち上がる。真田先輩から泥を拭うため往復ビンタをされるのを避けるように身体を前傾姿勢で屈めながら、手で顔面の泥を拭って周囲の状況を確認した。

「……………」  
周囲には、様々な五車学園の生徒や教員。雨合羽を纏った警察関係者が洋館の前で洋館から転がり出た5人の治療や保護にあたっていた。

洋館を中心にベースキャンプが築き上げられており、何をどうしたのかは分からないが、洋館の周囲は5mもあろうかというほどの隆起した土の壁で覆われている。あれならば外周の森林地帯から熊に奇襲されるような心配はないだろう。

その中には現場の指揮を執る蓮魔先生とそんな蓮魔先生に付き添う黒田先輩の姿もあって……………。

あ、ヤベっ。目が合った。



「青空ア……」

「……………」

「げえっ！ はすまア! 関羽！」

目の逢った瞬間に『あなたは今、私と出会ってどんな気持ちでいるの？』なんて疑問を投げかけなくても、彼女が建設重機喧嘩バトル ぶちギレ金剛状態なのは火を見るよりも明らかだった。

あの殺気だった目つきに加えて、まるで膝まで浸かる程の沼の中をズンズンと力任せに突き進むかのように肩を大きく揺らしてこちらに近づいてくる。さらに言えば、この土砂降りの雨の中。2人とも傘や雨合羽を着用しておらず、そのありのままの自然体で雨に濡れる姿が私の恐怖を煽り立てていた。

とつさに『バケモノにはバケモノをぶつける理論』で、真田先輩の背後に隠れて首筋側からひよっこりと2人の様子を伺う。

まあ。真田先輩が壁になるなんてことはなく、真田先輩はやるべきことはやったと背中で語りながら両手を自身の頭の後ろに回して、やつと正気に戻ったらしい神村の元へ歩いて行ってしまった。

私としても真田先輩の両肩に手を置き、俯き、両腕で顔を隠して威嚇するカマキリのようなポーズになりながら、電車ごっここのノリでその場から離れようとするも、黒田先輩と蓮魔先生に両肩を抑えられて強引に引き離される。

「蓮魔、先生でしよう！ 青空 日葵ッ！」

「すみませんッ！」

「まったく貴様という奴は……。事前に私に対して報告してきたことは認める。だが、あれほど洋館には入るなど言っただろう？」

「おっしゃる通りです！ おっしゃる通りでした！ 蓮魔先生！ でも、私はその件に関して洋館には入らないとは言ってません!!! 『善処する』(Episode 46 参照) って言った記憶があります!」

「あのなあ、そういう問題じゃない。そういう問題じゃないんだ。お前は入ってはならない場所に不法侵入した。この意味がわかるか？」

「わかります！ その件は、すみませんッッッ！」

その構図はさながら親父狩りに遭う。オバサンの凶だった。

「まあまあまあ。蓮魔先生、そのくらいでいいじゃないですか」

「……室井先生。しかしだな、青空は……」

「説教であれば学校に帰ってからでもできます。まずは彼女の様態と怪我具合を校医の私に確認をさせてもらってもよろしいですか？

彼女。私の見立てでは片足を粉砕骨折以上の怪我をしているように見えますよ？」

「あつー！ あいた！ あいたたたたたたつ！ そうなのー！ ワタ

シ、足がー！ 足が折れてるのー！ イタイヨー！ イタイヨー！

イタイヨー！ んほおおおおおおおおお！（白目で舌出しアへ顔ダブルピース）」

「馬鹿にしているのか貴様……」

「チ、チガウヨー！ ウエーン！」

そんな親父狩りの構図を繰り広げているところに、私を五車学園の地下に存在する病院へ監禁することで（私の中で）定評のある室井先生がビニール傘を片手に、看護師を1人引き連れて会話に割り込んできた。

さらに私の足の状況も一発で見抜いて助け船を出してくれる。本当は脛から足先までの感覚はなかったが、こちらも痛いふりをして大袈裟に騒ぎ助け舟に乗りつける。

おまけに対魔忍世界ジョークとして、無様アへ顔ダブルピースを晒したのに理解してもらえなかった。対魔忍世界のはずなのに。なぜだ。

「ふん。本当に白々しい痛みがり方ですね。青空さん、あなた本当は足など痛くなんかないんじゃないですか？」

「ソ、ソソソソソ、ソソナコトナイヨー！ ウエーン！ イタイヨー！

イタイヨー！ 足の骨を折っちゃったのー！」

「本当ですか？ では、本当ならその足を今ここで見せてもらってもよろしいですよね？」

「エツ……それは……良いですけど……。……黒田先輩、私の脚……。本当に見ます？（素）」

「……何故そんな含みのある言い方をするんですか？ やはり貴女――

」

「黒田。もういい。室井先生の言う通りだ。……そうだな。続きは学校で話そう」

「……承知致しました」

「イヨツシヤアアア！ あつ、イタイヨー！ オーン！ おんおんおん！（かにかま流あえぎ声）」

「……。……今回の彼女の活躍は目を見張るものがありますよ。あなた方の流儀に乗っ取って考えた場合、私としては彼女の今回の件をおとがめなしで対応しても良いとは思うんですけどねえ」

「そこは生徒指導部である私と校長、他の教師が判別することだ。校医が判断することではない」

「ははは……蓮魔先生は真面目なんですから。はいはい。わかりましたよ。では、青空さんはこちらでお預かりしますね？」

「好きにしろ」

やったぜ。

なんとか、この場合は蓮魔先生と黒田先輩を撒くことに成功する。

そんなことよりも、あの私を地下に縛り付けることに定評のある室井が今日はイケメンに見えるわあ！ 何かしら？ 心はトキめかないけど、これまでの監禁を許してあげられそう！

許さねえけどな。措置入院で私の学校生活のイベントを潰した罪は重い。

……

……

……

その後、室井先生に追従した看護師が私と室井先生が濡れないようにビニール傘をさし、腰が抜けてしまった私を室井先生がお姫様だっこするような形で医療用簡易テント内のストレッチャー上に寝かされる。

寝かされると言ってもそれは一瞬の出来事であり……私としては長座位になる姿勢を保ち、室井先生の指示の元、他の生徒の治療の為に去って行く看護師と治療の準備をし始める彼の背中を眺めていた。

室井先生は非常に細身で、背後から野球のバットでフルスイングしようものなら、骨を簡単に折ることができそうなほどの貧弱な身体をしているのだが……。意外とああ見えて、体重が68kgある私を御姫様抱っこで悠々と持ち上げられるほどに筋力はあるようだ。

私としては、室井先生の容姿は非常に好みなのだが……。どうもこれまでの行為が彼を嫌う要因となっていた。容姿だけは私好み。そんな感じ。

私の好み的な話では、鹿之助くんはキング オブ レジエントな存在ではあるが、男性教師陣で好きな容姿順をあげるならば。やはり室井先生が一番に上がってくる。その次に斎藤 さいとう 半次郎先生、その次に話の世間話内容は面白い用務員のおじさんこと沼津 ぬまづ 彦四郎さん。さては、私。細目好きだな？ でも性格や中身を考慮するとこのランキングが逆さまになるのは面白い。ランキングが逆さまになっても、鹿之助くんは常にナンバーワンのオンリーワンな存在には変わりないがな。

そんなことを考えながら室井先生を眺める。彼は医療袍から様々な薬品を取り出して、それを机上に並べていた。そのほとんどが室井先生の身体に覆われてしまっており、何をしているのかは分からないが、チラリと見えた注射器の空気抜きをしているのがぼんやりと眺める私でも理解することができる。

私も大したことはできないが、治療を受けるにあたってそばに置かれていた清潔なバスタオルと飲料水で患部を洗い流す。第二次世界大戦、塹壕戦を繰り返したドイツ兵のように真っ黒になった顔や腕の泥が取れて多少はマシな姿にはなった。

「さて、と。早速ですが青空さん。治療のために、この乱暴に固定している火かき棒を外して、ズボンを裁断してしまっても構いませんか？」

「もちろん。手当してもらえるのであれば構いませんよ」

「……」

『先ほどまでの痛がる素振りは何処へやら……。』とでも言いたげな室井先生が、ハサミを片手に近寄って来る。

それから脚に付けていた聖剣ヒカキボルグが取り外され、断切りハサミで衣類が切除されて行く。さてはて、実際に見るのは初めてだが私の脚はどうなっているのかな……つと——

「——ん、っ！」

「これは——……青空さん？ あなたは一体、あの洋館で何をしたのですか？」

「あ、あ、あ、——……ん——……」

ズボンが断裁され現れた患部を見た時。室井先生に原因を問われたとき。何も答えることはできなかった。

これは、ひどい。一言で言って、ひどい。でも自分の脚なのに、なぜ途中から感覚や痛覚が途絶えたのか、これではつきりもした。

今。私の脚。丁度、膝の下。脛の部分。その脛の皮下には、ハリネズミが存在していた。ズボンで保護されて泥こそ付着してはいないが、骨が皮膚を突き破って飛び出た血潮が靴下を赤黒く染め上げている。弁慶の泣き所の中心がまるで圧縮されて、ハンバーガーを真横から見たような……その上から皮膚をかぶせたみたいな側面をしていて……。

「室井先生」

「……何でしょうか？」

「これ、桐生先生の魔界医療で治ります？」

「……おそらくは」

即答しない部分が余計に私の恐怖を煽る。

ま、まあ。大丈夫だって。なんとかなるでしょ。なんとかならないから、その時は心寧ちゃんみたいにサイボーグの義足を付けてもらおう。そう。心寧ちゃんだって、あんな素敵な義足を付けて、あんなに洋館内を爆速で走りまわっていたのだから、きつと大丈夫だって……って……あ。心寧ちゃん——

## Episode 70 『探索者の意地』

「ずっとこの状態で洋館を徘徊していたのですか？　ひとまずはその水で患部を洗って、抗生物質をうちましよう。敗血症を引き起こしかねません。後のことは私がやります。そのまま楽な姿勢になれるよう寝そべって頂いて——」

「——室井先生」

「……なんですか？」

「洋館から無事に出られたのは誰ですか？」

「今度は何ですか？　まずは君の——」

「最重要事項なんです！　はぐらかさなくていいから、とつとと答えてください！」

「……。……わかりました。洋館から出てきたのは、君と。君の背中に乗っていた日ノ出さん。君が引き倒した神村さん。君が放り投げた死々村さん、君の膝裏にしがみついていた穂稀くん。そして穂稀くんが連れてきた重度な貧血状態の少女の6人だけです……。全員無事です。穂稀くんの背中に乗っていた少女だけが重症ではありますが……。輸血さえすればあの程度の貧血はすぐに治ります。君の脚ほどではありません。さあ、横になってまずは治療を——」

義足で心寧ちゃんの存在を思い出す。

そうだ。

こんなことをしている場合ではないのだ。

室井先生の洋館から脱出したメンバーを再度、頭の中に入れたことによつて我に返った。

僅かな可能性に望みをかけて、心寧ちゃんが一足先に洋館から抜け出せたんじゃないかと思つたが、やはりそんなことはなかった。

……地下へと続く階段の扉は蹴り破られていたのだ。きつと力任せの義足で無理やりに粉碎したため、最初に洋館へ入ったあの時には南京錠で封鎖されていたはずの扉から煙が立ち上っていたのだ。そうだ。きつとそうに違いない。地下への突入が煙が残るほどつい先程の出来事ならば、まだ追いつけるかもしれない。



最小限に抑える。ショック状態に近い反応が出た際には、痙攣しながらもエスピペンを即座に大腿部へ突き刺す。

(ははは……こんな絶叫と痙攣。鹿之助くんには聞かせられないな……)

自嘲しながら、震える手でコンドームを開封し、完全に引き伸ばす。先端をハサミでカットする。筒状になったコンドームを足にリストバンドを付けるようにしてハリネズミ状になった足を保護するために、2重にしてかぶせる。ひとまずは、これで傷口から新たに細菌が入ってくるリスクを下げる事ができた。

更に噛みしめていたバスタオルでヒカキボルグの泥を拭い去ったあと、テーピングで再び折れた脚を聖剣ヒカキボルグで固定した。

身支度を整えながらも、これまでの洋館脱出作戦で負傷した傷口に絆創膏やレーザーで焼かれた部位を氷で冷やすなどをしてへ応急手当する。

実に荒々しい〈医学〉とへ応急手当の連続治療だが、せっかく今この場に必要なたん治療機材が揃っているのだ。治療することに関して、この機を逃してはいけない。

「青空さん……君は……」

「む、むろい……ぐっ……室井先生。室井先生の説教もあとで聞きませ……！ やることがあるんで！ じゃー！」

険しい顔をして、呆れ返っているような少し怒りに触れたかのような顔をしているまま出入り口を塞いでいる室井先生を押し退ける。それから、壁に立てかけてあった松葉杖と再突入用の武器を片手に外へと踊り出た。

外では私が放り投げたことで泥まみれになったコロ先輩が、意識を取り戻して別のテナント内で五車学園の教員やスーツ姿の警察関係者に事情を説明しているのが視界に映った。

やった！ 丁度良いタイミングだ。探す手間が省けた！

「コロ先輩ー！」

「……！」

私の突然の乱入に周囲がざわつくが、構っている暇はない。群衆を



押し退けて、彼女に抱き着くように、崩れ落ちるようにして彼女の正面に躍り出た。

正常な群衆の9割は乱入してきた私に夢中で、名状しがたいことになっていている私の左脚に気づかない理論だ。

『鍵』を下さい！ 再突入します！』

「!? ……!? ……?! ……?! ……?! ……?! ……?! ……?! ……?!」

「な、なんだね、君は――」

「すみません！ 時間がないので!!!」

明らかに動揺し戸惑うような表情をするコロ先輩の懐からカードキーを強奪するように手に取り、乱入したことを咎められるが全てを無視して踵を返す。コロ先輩は私に対して色々と話しかけていたが、何と言っているか等まったりと取り合っている時間などあるはずもなかった。

時は一刻も争う。ここで、搜索隊や保護隊が去ってしまったえば、僅かな生存の確率が残された心寧ちゃんは死亡扱いとなり、死が確定してしまう！

だから、今だけなのだ。今しかないのだ。

「よしっ」

転がるようにその場から離れ、適当な木陰に座り込み太ももを露出させる。エタノール消毒液に浸された脱脂綿で注射箇所を消毒して、室井から奪った鎮痛剤やらアドレナリン薬、抗生物質を適量。オーバードーズには注意して片っ端からぶち込んで行く。ボスミン……アドレナリン薬は多めに投与して意識を保ち続ける。心拍数が跳ね上がるのを感じる。まだ私は動ける。まだ動かせる！

私の行為に、私の目の前を通り過ぎていく大概の大人たちは不思議そうな、信じられないような顔をしていたが……別段、何か邪魔立てしてきたり手を出してくるという事はなかった。所詮はNPC<sub>モ</sub>PC<sub>ブ</sub>ということだ。今日のところは、そこまで気を払う必要はない。

私が歩くたびに泥水が跳ねて患部の皮膚付近に付着しているが、事前に固定したコンドームが絆創膏の役割を果たしていた。おかげで更なる汚染および細菌の侵入、出血を最小限に防ぐことができている。

る。避妊具の誤った使い方だが、このコンドームによる防水機能、止血帯への転用可能性は本当に素晴らしい。

「よしッ!!」

元気よく立ち上がり、松葉杖を付きながら洋館出入口前まで急ぐ。

洋館の扉は、今は完全に閉ざされてしまっていた。なお先輩の日大悪質タツクルによって、私の20万7千985円はまたもやどこかに行ってしまったらしい。されど、20万7千985円の代用品は見つかったのだ。指輪やら護符は質屋に入れて、また新しいのを買えばいい。

「青空…そこで何している!?!」

ドアノブに手を掛け、身体の半分を洋館内に侵入させたとき。背後から蓮魔先生の声が掛かる。

首だけ振り返れば蓮魔先生が、黒田先輩、眞田先輩、氷室先輩、大人しそうな顔をした巨乳の五車学園1年生、そして鹿之助くんの従姉である上原 燐先生を引き連れて私の事を注視していた。

……なるほど、あの衣服。先ほど膝について私に手を差し伸べてくれたのは、鹿之助くんの従姉さん上原 燐先生だったのか。

今、私を見つめている誰もかもが傘も雨合羽も着用せずに、私と対峙していた。まるで映画のワンシーン。なんとも異様な光景だ。

「貴様ツ……なんだその足は!?! 室井の応急処置はどうした?!」

「すみません。蓮魔先生、まだ洋館内の地下に心寧ちゃんが入り残されているんです。今は治療なんかより、助けに戻らないと」

「治療なんか? 治療なんか、だと? 貴様、自分で何を言っているか……いや正気か? 正気なのか!?! 貴様はツ!?! それに心寧……?」

速水の事か! 速水の事は……問題ない。我々教師陣で向かう! だからお前が行かなくてもいい!」

蓮魔先生の言葉に完全に振り返って、彼女を見る。

これが教師として誰が聞いても素晴らしい判断を下している蓮魔先生の言葉に感激をして……なんて理由だったらどんなに良かったことか。これまで探索を重ねてきたからこそ。知り得ていた

情報があるからこそ。あからさまな動揺を見せる彼女の言葉の真意をへ心理学〉を用いずとも見抜いてしまったためであった。

でも憶測にしか過ぎないが、教師としての彼女の気持ちも分かる。きつと、これ以上の被害を広げたくないのだ。私まで死ねば、彼女は私……青空 日葵の両親に面目が立たなくなる。責任問題にも発展する。彼女は今厳しい立場に立たされている。

「――すみません。生徒指導ならば後でちゃんと受けます」

「私はそういうことがいいのではない！ どうして貴様には私の意図が伝わらない？ 人の話を聞く気がないのか、そもそも話を聞いていないのか――」

やるせない表情を浮かべる私に、蓮魔先生のくどくどとした語り出しから、私が彼女に注意を向けている間に対面している6人のうち3人……。黒田先輩、氷室先輩、赤い服を纏った名も知らないし大人しそうな赤渕メガネのブロンドボブショートヘアの1年生に動きがあった。

黒田先輩と氷室先輩は、私に呆れ返って興味がないようにそれぞれ別方向に離れようと動いているが、実際にはじわじわと距離を詰めつつある。一方で、大人しそうな赤渕メガネの1年生は靴紐が解けたのかそれを直すように前かがみになっていく。その動きは、交渉役の刑事が犯人に悟られないように警戒しながら銃を抜く……。その仕草にそっくりだった。

黒田先輩と氷室先輩が私を取り押さえるために分散しているのは、言わずもがなとして……。靴紐が解けたのであればすぐに結び直せばよいはずの1年生が、私の動きを注視しながら不審な動きをしているのが妙に引つ掛かりを覚える。

「――1時間で戻ります。先生方は私が1時間経過しても戻らなかつたら、探しに来てください。……大丈夫です。出るための『鍵』はちゃんと所有しています」

ここで敢えて洋館内で手に入れたカードキーを6人に見せつける。蓮魔先生と学生たちは無反応、私を捕まえることに躍起になっているため『鍵』に興味すら向けなかったが……。燐先生と眞田先輩は私の取

り出したカードキーに視線を向けていることに気が付く。

『鍵』を左右に振ると、『鍵』の動きに合わせて瞳が細かく左右に動いている。

「私達はきつと地下に居るはずですよ。洋館入り口にある地下で何か逃げられないトラブルに巻き込まれているんだと思います」

「何を言っている!? 貴様は『鋼人洋館』について知っているといるという事は、その細部まで既に調べ上げているのだろう?! ならば、洋館に入った学生はどうなるか知っているはずだ!」

「ええ。分かっています。分かっていますとも。ですが——」

そしてやはり、大人しそうな1年生の挙動がおかしい。

彼女はここでやっと私の視線に気が付いて、靴紐のない靴の靴紐を結ぼうと地面に蹲った。視線は靴に向いているが……たまにチラリとこちらを見てタイミングを計っている。何かが変わる。彼女がそんな姿勢になっているのに、蓮魔先生側のメンバーは誰も気にも留めない。

ここから導き出される答えは……。泥に手をつけて、泥を〈投擲〉して私の視界を一時的にでも塞ごうとしているのか……? そうすれば一時的に私の視界は塞がれ、その隙に左右へ分散した黒田先輩と氷室先輩が私の事を取り押さえられる。

私の〈回避〉ロールの性質上、目で攻撃が見えていなければ〈回避〉は行えない〈回避〉の定義、6版—76頁、7版—57頁。それに<sup>基本</sup>私の説明書の戦闘ルールに基づいた〈回避〉ロールの細かな性質上、この状態・この状況で何度も〈回避〉行動を行いたくはない。

これは……タイミングを見て、直ちに洋館へ再侵入しなければならぬ。

「この人食いの館で貴様や他の連中が生還できたのは、ただの奇跡だ! うぬぼれるな! 過信するな! 命を無駄にするな!」

「……すみません。約束……したので……」

「青空あつ——!」

蓮魔先生が私の名を叫ぶのと同時に、1年が動くが私の方が早い。

1年生が靴紐ではなく地面に手を突く前に、洋館の中に転がり込

む。扉が閉まるのと同時に背後から何かの衝撃波。しかし、その衝撃波で扉は完全に閉まり、再び洋館内には静寂が訪れた。

「……さーて、もうひと踏ん張り。探索者の意地を見せてやりますか！」

この世界では一般人枠で居たい私にとって、この救出行為はその目標からかけ離れた逆張り行為に通ずるものがあるが……。今回の事件は最初から探索者として始めたことだ。

それに、他者の目という制限がなくなった今。私は好きなだけ自由行動を取れる。

——さあ、最後まで “探索者の意地” ってやつを見せてやる。大きく伸びをして深呼吸。

埃が喉に張り付くが、のどの痛みと共に準備を始めるのだった。

## 12章 『真・悪霊の家』 Episode 71 『即堕ち2コマ』

おそらく、洋館の地下へと逃げ込んでいったであろう心寧ちゃんの救出のため、また1人きりで準備を整える。

今手元に残された真面な装備と武装とえば、アサルトライフルであるガリルAR、ガリルARの弾倉1つ（20発）、松葉杖、注射器、半分以上使用した神葬カスタム簡易応急手当セット、腕時計、室井からくすねた複数の薬小瓶、洋館を脱出するためのカードキー、質屋に入れば買取価格50万は下らなさそうな高価そうな指輪、ネックレス、その他貴金属の装飾品、謎の護符ぐらいなものだった。

それ以外のものは、すべて室井先生の治療室に置いてきてしまっている。

「心もとねえ……」

ボソリと呟いて、白き閃光<sup>穂</sup>／プロミネンス<sup>お</sup>キャット<sup>と</sup>戦で空になった弾倉を破棄し、新しい弾倉をライフルに装填する。人間相手であれば20発もあれば、奇襲攻撃さえ決まれば十分な気もするが……。何せこの洋館にはクトゥルフ神話における神話生物が潜んでいる。

なお先輩と神村の銃撃と砲撃でたじろいでいる様子から、私がヘクトウルフ神話の技能で判断を下した赤き霧／磯八目巾着鰻という存在は誤った認識だと思ふ。でもあの外見と特徴、吸血行為は確かに……。赤き霧／磯八目巾着鰻で間違いない。と思いたいところだが……。火器が通じていたという事から断定的なことは言えなくなっていた。……この装備は赤き霧／磯八目巾着鰻<sup>モドキ</sup>の神話生物程度なら対処ができるのかもしれないが……。

そもその話として、赤き霧／磯八目巾着鰻とドレスを纏った首のない貴婦人が同一の存在であるかどうかかも不確かな話だ。

「……………やっぱり、なにか引つかかる」

うーん……。やはり、これまでの既出の情報をすり合わせて、何度も考え直してみても『ドレスを纏った首のない貴婦人』<sup>は</sup>赤き霧／磯八

『目巾着鰻』と限りなく同一の存在だとは思……でも火器の効果があつたことで、100%そうだと言い切ることができないもどかしさが残る。

単純な話。なお先輩と神村の銃撃・砲撃の火力が勝つていたという線も考えられることには考えられるのだが……。

「……。備えあれば憂いなし……ねえ」

ひとまず考え事を止め、ブツブツと独り言を呟きながら腕時計のアラームタイマーを45分でセットする。

次にカーペットを引き裂いて松葉杖に巻き付けた。紫色の炎が煌めく燭台も手にして、シャンデリアKBTIT BBのように持ちながら光源と新たな武器を手に、こじ開けられた地下の階段を下りていく。

またその地下へと続く階段の途中で、心寧ちゃんの黄色のリボン髪留めが落ちていたのを発見した。拾い上げて匂いを嗅いでみるが、間違いなく彼女の匂いだ。確定的に彼女は今、地下にいる。

アサルトライフルを片手、反対の手に火の灯った燭台を握り、松葉杖は背中に背負って階段を降り切る。階段は途中まで木製の階段が続いていたが、地下の床に辿り着くころにはコンクリートとなっていた。

辺りは薄暗く、逆に蠟燭の光が光彩を縮小させてしまい室内の奥の方を眺めることは叶わない。地下は階段付近の小部屋と、犠牲者の手記にあつた魔族が壁に寄りかかったところである出現した広間の2部屋に分かれているようだ。

……

……

——地下 小部屋——

……

……

スイ……

「……心寧ちゃん？」

しらみつぶし式による調査のため、まずは小部屋の方から探索を開

始する。

やけに重い扉を身体全体で押し込むように開く。この部屋は……

「ウゲツ……」

この部屋にも、いくつものオーク族や人間の死体が転がっている。いや、転がっているという表現は正確ではない。正しくは両足をロープで結われて、天井の梁から逆さづりに吊り下げられている。

首にはナイフで引き裂いたかのような刀傷が残り、床には傷口から滴り落ちたであろう血溜まりが広がっていた。足元を燭台で照らすと血は既に渴ききつていて、ぬるりと滑って転ぶような心配はない。

またこの死体はどうやら、吊り下げられてから首を搔つ切つて殺されたようだ。死体を回転式カタログスタンドのように回してみるが、残存している肉の部位にどこにも青あざなどの外傷は見当たらなかった。つまり、争った形跡が見当たらない。

逆さ吊りにされたが故に、血液が頭部に溜まった弊害として赤く充血した眼球が飛び出て2つの鞏丸のように飛び出て垂れ下がっているが……。死体の特徴としては、歪な点としても些細なものだった。

またこれまでに発見した死体とは違い、この死体は干からびてはいない。更に言ってしまうえば、どの死体も奇妙な痙攣もしていなかった。

ただ、まるで食肉工場で吊り下げられる牛のように放置されて、所々の肉や内臓が切り取られている。部屋の戸棚には切り取られた肉が、シヨーウインドウ内に並べられたブランド品のように陳列されていた。またここでは、蛆や羽虫も湧いている。

「……」

残念ながら青空 日葵の身長では、天井の梁には背伸びしても、背伸びをしたままへ跳躍しても手は届かない。へ跳躍しながら松葉杖でやっと手の届く高さ……約4〜5mほどの高さだ。

つまり。この憐れな犠牲者を地面に落として、肉盾装甲や蛆を捏ねて作った蟲爆弾として用いることはできなさそうだと理解する。

「……」



死体はさておき一通り〈目星〉をつけた探索ののち、この部屋には心寧ちゃんは居なかった。

最低限わかった事として、壁に血で描かれた紋章が浮かび上がっていることぐらいだ。

確か、この紋章の意味は……。……見覚えがある。でも思い出せない……。間違はなく〈クトウルフ神話〉関連の紋章だったはずだ。……何だったかなあ？

思い出そうと頭をコンコンコンとノックするが……。呪文の名称が出て来ない。

でもどんな用途に使用するかはこれまでの情報や、前世で他の探索者が描いていたため思い出すことはできる。たぶん……。移動系の魔術に用いたはずだ。恐らくこれが魔界への移動手段として扱えるのだろう。

しかしクトウルフ神話的魔術を用いている時点で、それが本当に“魔界”に通じているか疑問視できる部分があるが。

無事にこの洋館から、迷子の心寧ちゃんを引き連れて、脱出した暁には私の説明書を読み返そう。この紋章を関連する呪文の記載が見つかるとはしない。

——ガシガシガシッ！ ガシッ！

「んぐっ!」

調査を一通り終えて考え込むのをやめて、手に持ったアサルトライフルの銃口を下に下ろした時の出来事だった。

何かが、私の喉仏と口と腕と腰を掴む。しまったと振り返り持っている銃弾を叩き込もうとしたときにはすべてが遅かった。

私の身体の4か所を掴む手。人間の手じゃない。

三本指で動かたびにガチガチとギシギシと錆び付いた歯車がきしむような音。

溶接に失敗したかのような金属製の腕。

触られただけでも鳥肌の立つ皮膚の肌触り。

息を潜めると背後にいる何者かの体臭が漂ってくるような気がした。

鼻が曲がってしまうような異質な錆っぽい悪臭。

カメムシのようなパクチーに下水道の汚水を混ぜたかのような臭気。

直上からカチカチと火打石を叩くような音。

肩に掛かるこの世のものとは思えないよだれ。

肩甲骨あたりに感じられるゾリゾリとした

スチールウールの塊を擦り付けられているかのような感触……！

「グッ……ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……ハッ、ハッ、ハッ」

クソッ……！ 体の震えが止まらない。呼吸は過呼吸になって、そ

の速度を上げていく。

探索者としての覚悟を決めたはずなのに『心寧ちゃんなんか見捨てるべきだった』『やっぱりこんな洋館に入るべきじゃなかった』なんてクソみたいな自己中心的な言葉が脳裏に過ぎる。

拘束されて居ない腕の方で、背後にいる奴を撃たなきゃいけないのにッ……！ 三本指で4本の腕を持った怪物が気まぐれに軽くひねっただけでっ、私の命も振られてしまいそうでッ……動けない……！

今、私の背後にいるのはきつと犠牲者の手記に残されていた、ブラッドドレスを纏った首のない貴婦人と協力関係にある顎が4つに裂けた猿のような毛むくじやらの巨大な黒い蟲と人が融合した実体に違いない。

身体が引つ張られて、小部屋から外の大部屋へ……。

——闇の中へと引きずられて行く。

ここでもオークの死体が逆さ釣りにされている。

床には肉を削がれて、微量に肉片のついた白骨自体がゴロゴロと

……！

小部屋を出て、作業員が破壊した壁の向こう側へズルズル……ずるずると……ああ………紋章に気を取られ過ぎた……！

……ここに何かがあることなんて、分かっていたのに！ 分かっ

ていたのに……！ これじゃ、まるで！ まるで——

……

…  
…

——ピピピ……ピピピ……ピピピ……ピ——ガシヤン！

…  
…  
…

「——うっ……うう……？ どこだ……？ 私は……」

何処から鳴り響く腕時計のアラーム音と破壊されたような音で目を覚ます。次に目が覚めた時は、馬小屋に存在する藁のような人間にとって粗悪なベッドで寝転がっていた。

周囲は闇に包まれている。アラームが鳴っていた腕時計に触れようとすると、持ち物はすべて奪われていた。装飾品も、銃も、カードキーも、服までも……あ。でも、現場監督の魔族から奪った宝石

の付いた指輪だけはそのまんまだ。ラッキー。

……クソ。でもこれじゃ。やっていること、やられていることが対魔忍と変わらないじゃないか。私の馬鹿。頭対魔忍。蟲と人も言えぬ怪物に抑え込まれて……。

……あれから何時間たった？　だが、腕時計のアラームが鳴っていたという事は、最低でも45分。心寧ちゃんを見つけて洋館から脱出する合図の時間まで経過してしまったか？

まずい。はやく心寧ちゃんを見つけて、カードキーを手にしてこの洋館から出ないと……！

「……ッ。……ッ」

手探りで何かないか探る。

私の装備は奪われてしまったが……この際、なんでもいい。小さな石でも、布切れでも。欲を言えば、小さな石と布切れさえあれば、入学初日で紫先生と対峙した時のようにブラックジャックを〈製作〉できる。それさえ有れば、無い状況よりは事態をより打開しやすくなる。

「……！」

「ビクンッ」

今、何かに触れた。ふにととして、柔らかい。ビクンッ……と震えた。今もビクンッ、ビクンッと握ったハムスターのように鼓動を脈打っている。人肌ほどの何か。触れたものをゆっくりと触りながら感触と輪郭を確かめ、闇に慣れつつある目を凝らしてそれが何かを探る。

「ひうー！」

さわさわと。どこに触れても素肌の存在を撫でてみると、それは可愛らしい声をあげた。聞き覚えのある声。触っている物体をなぞる様に両手を添わせ、対象の肩を掴み顔を近づける。

「——心寧ちゃん!？」

「そ、その声……その顔……ひ、日葵さん……?」

「ああ！　良かった。急に走り去ってしまったので……お待たせしました。助けに来ましたよ」

「だ、駄目です！ 何しているんですか!? 外に出られたのでしょうか!?! 私のことなんか構わず逃げてください……!」

「大丈夫、落ち着いてください。逃げるときは一緒ですよ。陽葵ちゃんが今、丁度おかしくなってしまっていて、治すにはどうしても心寧ちゃんの助力が必要なんです。いや、ほんとにもう手が付けられなくて……どうして私が外に出たことを知っているんですか?」

「駄目です！ 駄目！ あの人の見つかる前に逃げてください！ 逃げてっ！ これは罠なんです！」

「……罠？」

必死に訴えかけてくる心寧ちゃんの言葉に顔をしかめる。

罠……ね。実は、もうその罠にハマった後なんだけど……。なんて、ここで正直に答えて彼女の不安を余計に煽る必要性もないため、少し考える素振りをして誤魔化した。

それから念のため私達以外の存在。つまり敵影を確認しようと周囲を見渡すが、闇に包まれていて何も見えない。心寧ちゃんもまたこの暗闇の中で目が慣れていないのだろう。きっと私が完璧な泥まみれの装備をしているのだと思っっているに違いない。さて……ここら辺の部分はなんて彼女に説明しようか。

それにあの人の見つかる前にとは？ 誰かほかに罠を仕掛ける人物が居るといふのか？

それに外の事情も知っっているようで……まさかとは思うが――

## Episode 72 『館の主』

パーツ……………

その時、不意に正面の一角にスポットライトが灯る。

位置的に、私達がいる場所から数メートル離れた広間だ。電球に三角錐型のカバーの付けられた天井からつるされるようなシンプルなタイプのライトで、何者かが電気をつけたらしい。

「あああああ……っ！駄目駄目駄目!! 来てしまった！もうダメツ！ごめんなさい！ごめんなさい!!日葵さんはせつかく外に逃げられたのにッ！私のせいですっ！ごめんなさいいいいっ！」

あの心寧ちゃんが両目にいっぱい涙を浮かべて、私の肩に抱き着くようにして泣きじやくり始める。あの感情をあまり表に出さないことで定評のある心寧ちゃんが、私の肩に抱き着くようにして泣きじやくっている。大事なことなので2回も描写するぐらいには、感情を露わにして泣きじやくっている。彼女の熱い涙が肩を伝って横腹へと流れていく。

怯えた鹿子ちゃんのように、継り寄ってくる心寧ちゃんの頭をそつと撫でながらも、ゆっくりと立ち上がってスポットライトに対して身構える。座ったままの心寧ちゃんは私の掌をハンカチのか代わりのようにして、好戦的な私を宥めるように手を引っ張り、顔を必死にこすりつけて来ていた。細かく震えながら泣いているのか、ビクンビクン震えるたび掴まれている手の甲に温かい雫がじつとりと広がっていく。

「Ladies Annnnnnd? Ladies!!! Welc  
me To The 水龍敬ランド！ 今日も！ 明日も！ 永久とわ  
に！ ずっこんばっこん！ 大騒ぎ！ 素敵な麻呂の屋敷へようこそ！ Are you tough girl?? 泣き顔が可愛らしいお嬢ちゃんに、勇気のあるお嬢さん！ 二人は私の最愛の妻として選ばれたのじゃー！ いっぱい愛し合っつていっばい子供をこさえるでおじやるよ！ によっほっほっほっほっほ」

「誰だッ！」

スポットライトの中には誰も居ない。

しかし、ひょうきんそうな男の声だけが、何処からともなく聞こえて来ていた。発声地点を模索するが無駄なようだ。声は四方八方から聞こえてきている。

こちらとしても立ち上がり、声を荒げ、身構え、視界を左右に忙しなく移動させて声の主の位置を探る。

奴の声が聞こえるのと同時に、心寧ちゃんの悲痛な鳴き声が一層強くなる。先ほどまでは掌に縋り寄っているだけだったのに、今は震えながらも私と同じように立ち上がって、顔を手の甲、前腕、上腕、肩へとこすりつけて、指を絡めあつて握りしめてきていた。

「Meの名前は、織田・鋼人!!」ウオルター そちらの勇敢なお嬢さんは麻呂の事をしているでおじやろう? なんと言つても麻呂の屋敷について、それはもうミッチミッチーに調べておるらしいのじやからぬう! ハハツ!

麻呂の屋敷? ミーの名前は織田 鋼人? ……やはりコイツ。

「によっほっほっほっほ♪ Youのそのface! 理解したでおじやるな? それにしても撒きエサにこんな早く食いついてくるとは思わなかったでおじやる。それにそちらのMy first ハニーは『こ・こ・ね』ちゃん♥というのでおじやるか! オツホツホツホーツ! 心寧ちゃん♥♥♥」

——ブシヤツ♥ブシヤツ♥♥♥  
「イツ♥……イウツ♥」

「!?」  
なんだ!? 今の水っぽい……凍結した氷が詰まった蛇口から水が吹き出る音は!?

真つ暗で何も見えないが、腕にしがみ付いている心寧ちゃんが艶っぽい声を出した音に、ちよつと一線超えたような音が聞こえたんだが!?

………大きく息を吸って、スウー……。あと………なんか、私の下半身。大腿部から足先にかけて暖かい液体が掛かった気もするんですけど。心寧ちゃん? ねえ、心寧ちゃん? 今、私に何をした?

ナニした？ 怒らないから言つてごらん？ ねえ、このしよっぱい液体はなに？ 涙？ 涙にしては、ちよつと——かなり。かなり粘性が高い気もするけど。涙だよね？

「ひ、日葵ひや……♡♡♡♡♡ご、ごめんなひや……♡♡♡♡」

あ、ごめん。やつぱり皆まで言わなくていいや。そのまま黒塗りされた視界で達しているんですよ。なんだか何かにしがみついていると勢いよく尻もちついてしまいそうだし。

そんなことを口に出せば本人の尊厳に関わりかねないので考えはしながらも、腕にしがみついてくる心寧ちゃんの腰にそつと手を回し、倒れてしまわないように引き寄せる。……うん、すっごいガクガクしてんなあ……。すっごいガクガクしてる。足も。腰も。尻も。そんな私に心寧ちゃんは腕にしがみついた状態から首に腕を回してきたが……。く、首に温かい生息が……。

ま、ま、ま。私としては、ひとまず言うことは言わねばなるまい。

「……心寧ちゃんに何をした？」

大体、想像はつくけど。

「心寧ちゃん♡「あああああ♡♡♡♡♡」とは “勝負” をしただけでおじやる。麻呂が勝つて、心寧ちゃん♡「がはッ♡あッ♡あッ♡」が負けたから代償を支払って貰っただけでおじやる。でもその代償にはちよつとした My first honey の真名しんめいが必要だったんでおじやるが、敗北して淫紋を付けた途端に黙って “ すらしなくなってしまうてのう……日葵ちゃんが来てくれたおかげで無事に解決できたでおじやるよ♪ かたじけのうござるう♪」

うん。なんか織田 鋼人がなんか言っているけど、となりの心寧ちゃんのおかげでまったく頭の中に内容が入ってこない。でもふわつとは何を言っているのかわかる。わかるけど……。つてやつ。

今すっごい、心寧ちゃんが私の半身を抱き枕みたいに掴みながらガクガクしてる。何が起こっているか、詳細には言わないけど、すっごいガクガクブシャブシャしてる。すっごい細かくて暖かい吐息が、たくさん、私の肩に、鎖骨に、脇にかかっている。



でも何も見えていない。辛うじて心寧ちゃんの艶のある髪が見えるぐらい。私の視界は真つ暗なままだ。だから感覚的な描写しかできない。

でも、まるでテレビアニメ『異種族レビュアーズ』の黒塗りムービーを見せられている気分だわあ……。音声のみでお楽しみくださいのテロップを見ている気分だわあ……。これは台湾に高飛びして無修正版を見なければいけないやつだ。

迸る汗に関しては、ふなっしーが連想される。アダルト業界に居そうなふなっしーだなあ。TENGAカラー。レッドドット・デザイン賞2021を受賞。〇〇汁ブッシュャー！

すげえ。やっぱり私、今は対魔忍世界に居るんだなあ。なんかこんなところで、すごい実感を覚えてる。対魔忍世界だなあ。対魔忍世界だわあ……。この世界。クトゥルフ神話的事象に巻き込まれているのに対魔忍的事象にも巻き込まれているなあ。私。

あれ？ 今回、対魔忍世界に訪れてから初めてってこともあるけど……。この状況。なかなかレアなケースでは？

「……勝負で負けたから代償を支払ってもらった？ 一つ疑問があるのですが……。私と鋼人卿、私達は勝負もしてないのに、私の持ち物はすべて没収されているようですが？」

「によっほっほっほ♪ それは麻呂の屋敷に2回も不法侵入した入場料でござるよー♪」

「はあ？。では、カードキーは？ わたしが受け取った……。親愛なる友人陽葵ちゃんが死体から剥ぎ取ったアレは、最初からあなたの物ではないでしょう？」

「麻呂の屋敷で持ち主が死んだので、ぜんぶ麻呂の物でおじやる。」

「麻呂は自分の物を窃盗犯から取り返しただけでござるよー♪」

「さてはテメー、日本の〈法律〉に疎いな？」……そうですな。まあ、ある意味、理はありますね。

「によっほっほっほっほ♪」

さて、ここからどうするべきか。闇の中で目だけをギラギラと光らせて考える。

心寧ちゃんを連れて脱出するには、あのカードキーが必要不可欠

だ。つまり、私と心寧ちゃんがここから脱出するには、奴と最低1回は勝負しなきゃならない。だが、1回アイツに勝利したとして……カードキーが手に入っても、心寧ちゃんを蝕んでいる肉体改造はそのままだ。それに、カードキーを手に入れたとしてもやすやすと逃げる私達をこいつが見逃すとも思えない。ゆえに完全に見逃すことを条件に、もう1回勝利する必要がある。

話を聞いている限りでは、心寧ちゃんは奴に敗北した。これは揺るぎない事実だ。

そして支払った代償とその効力は、術者に名前を呼ばれるたびに累積的な性的緊張からの突然の解放……つまりオーガズムに達するよくなヤツだ。心寧ちゃんを蝕んでいる肉体改造された状態から元に戻すにはカードキーと見逃しとは別に追加で1回、勝利する必要がある。

つまり3回。コイツと悪趣味なゲームを3回もしなければならぬ。

でもこいつの性格を分析するに、いきなりえっちな方の肉便器や対魔忍になること強要するせっかちなタイプじゃない。対魔忍の初期過程はいきなり与えてくるかもしれないが、主な傾向としてはじっくりじわじわと苦しめて、従順にしていくようなクトゥルフ神話側らしいネチネチとしたやり方を好む黒幕タイプだ。

逸話通りなら、きつと希望を見せて、浮かれたところをつけ狙って私の心を折ってくる。

(……1回でも敗北すれば、恐らく私も心寧ちゃんと同じ状況にされる)

私は『青空 日葵』という肉体に転生した『釘貫 神葬』という一介の異世界転生者の為、名前を呼ばれたからと言ってオーガズムには達しない……とも言いきれなさそう。

……あの状況。あれは肉体の無差別かつ強制的なオーガズムだ。肉体の持ち主が『青空 日葵』という個体名を持つならば、あの呪術に反応してしまう可能性は……無きにしも非ず……だ。

(……チツ。これだから、真名しんめいつてのは嫌いなんだ)

これでは、一回敗北した時点であとは芋づる式に、例え奴が敗北し  
そうになっても、私の名前を呼びまくってオーガズムに達せさせ強制  
的に敗北を認めさせればいいだけの事だ。

「ひ、ひまりひゃ……♡♡♡ たたひゃ……♡♡ ら……め……♡  
♡♡」

今、心寧ちゃんは座り込んだ状態で最後の力を振り絞りながら、私  
の腕を引つ張るようにして警告をしてくる。

闇が完全に覆い隠しているため、彼女の表情は分からない。しかし  
声や瞳を閉じれば、目元が垂れて、甘い瞳。だらしなく半開きになっ  
た口でこちらを見つめている様子が想像につく。

でも、目を開ければ文字通り真っ暗で何も見えないんだけど。

「大丈夫です。約束したでしょう？ 『必ず全員で生きて洋館を出ま  
しょう』って」

「ひまり……ちや……ん」

「心寧ちゃん。世の中にはこんな言葉があります。私は  
クトウルフ日本の神話世界線都会で生まれました。対魔忍世界絵空事の住人住人じゃあり  
ません。我が国日本のオリジナル会っ子です。初手は遅れをとりましたが、今や  
巻き返しの時ですよ」

「……」

「……」

「……」

「……逆転は……好き。ですか？」

「逆転は……好き……です……」

「逆転がお好き？ けっこう。ではますます好きになりますよ。さあ  
さあ、どうぞ。探索者わたしの乱入。大逆転劇の始まりです。……安心でき  
るでしょう？ んあああ、おっしやらないで。身体は生身。でも武器  
防具なんて見かけだけで、銃はジャムるし、防具は脆いわ、すぐ慢心  
に繋がるわ、ろくなことはない。自信もたつぷりありますよ。どんな  
苦難の連続でも大丈夫。どうぞ眺めてみてください。余裕の音だ！

馬力育ちが違いますよ！

「……」

「えっと。つまり……。大丈夫ってことです。私に任せてください」  
「……………」

やはり彼女は私の言葉にキョトンとしている気がするが、片手で握りこぶしを作って、親指側をドンッと自分の心臓付近の胸を一発叩く。たぶん心寧ちゃんには、一切このネタが伝わってないんだろうな……。

五車駅での鹿之助くんとまえさき市で3時間もウンコしていた方の蛇子ちゃんとのやり取りでもそうだったが、ジエネレーションギャップがづらい。

彼女に対してウイंकをするが、無反応ってかそもそも見えていないだろう。

だが私には若干の賭けも混じるが勝算はあった。だからこそ力強い声で、心寧ちゃんの胴体にもう一方の片腕をまわして強く引き寄せ心寧ちゃんを励ます。

「最高でおじやるね〜♪ これこそ、百合！ ああ〜麻呂もあの百合の間に挟まりたいでおじやる〜♪」

姿の见えない織田 鋼人は、ふざけたことを余裕な様子でほざくが今のうちに笑っておけばいい。最後に笑うのは私……私達だ。

## Episode 73 『短期決戦』

「さて鋼人卿。勝負内容はどうかやって決めましようか？」

「Youの好きな方法を選ぶ形で麻呂は構わぬでおじやるよ、すべて許可するでおじやる♪ 麻呂はレディには優しいでおじやるからなあ。によっほっほっほっほっほ♪」

そりや、一見こちらにとつては好都合な条件だ。

外面は敵意むき出しのポーカーフェイス。内心、ほくそ笑む。

私も諸説を調べて多少なりとも、ヤツの手の内は把握しているのだ。本来、奴に空中を歩かせるような勝負や、物品を用いた勝負、単独での素手喧嘩は避けるべきだが……。

しかし下手に私にとつてはフェア、奴にとってアンフェアな挑戦を突き付けて変に警戒されるよりも、無難で奴を悦ばせるような内容の方が浮き立たせることもできるだろう。私は奴についてある程度知っているが、奴は「私」についてそんなには知らない筈だ。心寧ちゃんゲロってが話してしまった部分もあるだろうが、それでも絶対に奴が『釘貫わたしについて 神葬』を知らないことがある。

それをひた隠しにしつつ有効な戦略を編み出すのならば、1回戦目の挑戦内容は……——

「じゃあ、1回戦目は相撲なんてどうですか？ 肉体同士がほぐれ交わう雅な日本の国技武道です」

「によっほっほーっ♪ 最高でおじやるな！ 麻呂はリヨナもいけるタチでおじやるう♪」

「じゃ。決まりですね。支払ってもらう代償は、脱出経路である玄関扉を開けて……ああ、出るには『鍵』が必要でしたか。ですが条件として私達のような侵入者へ、ドレスを纏った首のない貴婦人を含め妨害・危害を加える行為をしないこと……どうですか？」

「によほ♪ 麻呂はすべてを許可するでおじやるよう♪」

私の言葉に下卑な笑いが聞こえてくる。奴がどんな顔をしているか知ったこつちやねえが、あくまでも奴の中では想定内なのだろう。こちらにも、奴がどんな手札を切ってくるか想像はつく。

神話生物はともかく、こうして前世側の人物に出会うまでは、異世界転生したのは私だけだと思いついていた。これまでの情報や手札から察するに、奴が私と同じ『クトウルフ神話世界線』から来たのであれば、きつと私のことも対魔忍世界の住人だと思っっていることだろう。

その状況で、対魔忍世界の住人が最も遭遇したくないものは何か。奴はこれまでの経験上、知っている筈だ。そして私も当然知っている。

「土俵は、スポットライトの円の中にするでおじやるよ〜」

「女が土俵に上がったからって、『神聖な場所が汚れた〜』とか老害じみた言い訳をして不戦勝とかつまらない展開はないですよね?」

「うえひひひひ♪ 日葵ちゃんの肉体を撫でまわし放題でおじやるよ? そんなことするわけないでおじやるう♪」

ならば安心です  
「言つたな?」

奴の誘いに乗ってスポットライトの中に立つ。

やはり、衣服どころか何も持っていない。でも指輪はある。何の役に立つかは知らない。メリケンサック程度にはなりそうだ。……もしや、奴が私からこれを奪わなかったのって……婚約指輪とかそういう……? うわ、そう考えると気持ち悪くなって来た。やめよう! やめよう! 他のことを考えよう!

他のこと。他のこと……そうだ!

今、天井からは眩いスポットライトで謎の光が放たれている。おかげで、きつと心寧ちゃんからは私の下半身の大切なところは眩しくて見えないだろう。せめてもの救いは、義足の代わりをしているヒカキボルグと脚の止血・防水・防菌としてのコンドームの着用は許されていることぐらいだ!

——さて、素直に姿を現すとは思えないが……ご尊顔を拝させていただくとするか。

腕を組み、片足に体重をかける形でジト目のまま待機する。

やはり現れたのは<sup>約3メートル</sup>10フィート級の巨人。

獣のような胴体には剛毛とも呼べる毛がくせ毛のように生え伸び

ていた。

頭部にはカマキリの顎のように4つに分かれた顎と巨大な複眼が私の姿を電気屋に並べられたテレビの画面のように複数に反射させている。

腕らしき器官はすべて昆虫の脚のような細長い物体で、先端には3本の指が付いていた。

体臭はカメムシやパクチーに近く、異界の錆と下水が混じったかのような臭気を放っている。

その怪物の首にはネックレス状のカメラレンズ付きラジオがぶら下がっており、そこからは『織田 鋼人』の声が絶え間なく流れていた。

だが、この程度で動じる私ではない。もう既にこの神話生物とは1時間以内に接触している。

「ほっほお〜！ 次元の蟲人／残虐な人攫いを見ても正気を保っていらられるでおじやるか♪ 麻呂の見立てでは、心寧ちゃん♥「アツギウツ♥♥」のようにここで尻もちをついて、日葵ちゃんは負ける予定だったのいく♪」

「ふ ふっ …… 慣れのルールが適応された  
そこまで甘ちゃんじゃないつてことですよ  
クトウルフ神話TRPG世界線の住人を舐めるな」

狂気仕様がお前の土俵だけだと思うなよ。 “ある程度の期間”が過ぎるまで、私がそう何度も発狂すると思っただら大間違いだ。

そんな言葉には出さぬへ威圧を込めながらも私は策を練る。

さて。時間も押している。状況的に決着は1ラウンド<sup>1</sup>以内に収めるのが最も望ましいが……。ここは、奴を盛り上げる為にも5ラウンド<sup>5</sup>は耐え凌いだ方が……。――

「はあーっ♥ はあーっ♥ はあーっ♥♥♥」

……そんな余裕はなさそうだ。姿こそ見えないが、心寧ちゃんの方の肉体の限界も近そうに見える。あの息遣いや嬌声の様子からだど、前世で私が欲求不満時に陰核を用いて自慰した時よりも数段強いオーガズムに達しているように感じた。あの鋼人卿に5回名前を呼ばれただけであんな状態だ。そろそろイキ過ぎで呼吸困難に陥って

もおかしくはない。

「……。心寧ちゃん。お辛いところ大変恐縮なのですが……。相撲における行司の役割を担って頂いてもよろしいでしょうか? 『はっけよい』のこった』コレのみで構いません。……。できそうですか?」

「まって……。そのしようぶ……。はあーっ ♡ ……まって、ください……。日葵ちゃん……。そんな脚……。足が……。っ。足が……。ッ! 相撲なんかできる状態じゃ……。っ!」

「大丈夫です。既に即放性の強オピオイドとスプラレニンを打っています。これに関して痛みは感じておりません。さ、掛け声をお願いします」

「す、すぶら、れ……。?」

「ほらほら〜♪ はやくするでおじやるよ〜♪ 心寧ちゃん ♡」

「あああああっ ♡ ♡ ♡ ♡!!」

闇に包まれて見えないが、心寧ちゃんの達する声が響く。

それを目の前で対峙している獣けだものは楽しそうな声を上げていた。私に対する精神攻撃のつもりでもあるのだろう。その獣を私は冷めた目つきで睨む。

——やっぱ、遊びはなしだ。

作戦を一から構築し直す。 “一瞬” で決着をつける。一刻も早く、彼女を蝕んでいる呪縛から解放放つ。この勝負は12秒もいらぬ。6秒……。いや、約3秒で決着をつける。そう気構えて相撲とは程遠いとは理解しているが、陸上競技におけるクラウチングスタートの姿勢をとった。

ヤツ綱人脚はそんな私を鼻で嗤うが、お笑い種おわらいぐさなのはテメエの方だつて分かってやる。

「……。心寧ちゃん。——私を信じて」

「は、はあっ ♡ はつきよ……。 ♡ はつきよい ♡ のこったあ ♡ ♡」  
「——ッ!」

非常に色っぽい開始のゴングが鳴る。

悠々と構える次元の蟲人／残虐な人攫いに対して目を見開き一気に接近し、圧倒的な体格の差のある奴の脚にへ組みつき〜することに



成功した。

奴の素肌に触れた瞬間、異質な触感で生理反射的な鳥肌が全身に及ぶが強張る指にさらに力を籠める。

「ほう♪ そこか r——」

「シィッ!!」

あとは、そのまま流れるようにひっくり返して地面に押し倒す。

ドスンという音と共に、次元の蟲人／残虐な人攫いはスポットライトの上で、私に下敷きにされる形で寝そべっていた。

「へ? あ……う?」

織田 鋼人は、次元の蟲人／残虐な人攫いの身に何が起こったのか理解できないのか、マヌケな声をラジオ機器から漏らしている。

こちらとしても地面に押し倒した次元の蟲人／残虐な人攫いの上に重なるのを止めて、右手首を左手で握り、右手をニギニギとグーパーグーパーと動きを確認する。

そのまま、次元の蟲人／残虐な人攫いの正面に立ち、ヤンキー座りで膝を用いて肘をつき頭を支えた。ドヤ顔をしながら、次元の蟲人／残虐な人攫いのブサイクな面に対してメンチを切る。奴から私の姿は生まれたままの姿、大事な秘部も全て曝け出しているがカメラ越しの奴を見下すには丁度良い角度だった。

「まずは一勝、敗者は代償を支払って貰いましょうか?」

「……。……によっほっほっほ♪ 約束でおじやるからなあ……。くいくいくっとな♪ によほほほ♪ 今、洋館の玄関を開けたでおじやる♪」

「……。フッ」

「今のは油断したでおじやるよ……。まさか、日葵ちゃんが、My first honeyのようにサイボーグ強化されていないにも関わらず、こんな武闘派だったとは……。……によほほほっ♪」

「や。2回戦目行きましょうか……」

「そんなに焦らなくてもいいでおじやる♪ 勝負はあと2回あるのじゃから、すこし休んでも構わないのでおじやるよ?」

やはりな。1回戦のあっけなさや自分自身の思考を客観的に見て、

そうじゃないかと薄々感づいていたが……ヤツは私が3回勝負で挑んでくると思ってたやがる。勝負でも盛り上がるのは大体3回戦というのも相場が決まっていることもあるし……。

私も先ほどまで作戦を構築し直す前までは、そのつもりで居た。

……何せ私は、カードキー。心寧ちゃんの淫紋もとい肉体改造。安全な脱出の確保をしなければならないのだ。そして今、私は奴の思惑通りに安全な脱出ルート確保に努めた。奴が3回戦で仕掛けてくると思うのは当然の流れ。

その状況を裏付ける証拠として、奴は私に1回でも勝てば後は心寧ちゃんと同じ状況に陥らせて容易に勝利を掴むことのできるのだ。奴にはまだあと2回ものチャンスが残されている。

これが神話生物なら人智では計り知れない思考で、こちらの虚を突いてくる計略に出ているだろうか……今、次元の蟲人／残虐な人攫いを操っているのは『織田 鋼人』……またの名は『壁田 鋼人』というちよつと魔術を嗜んだ程度の賊だ。同じ人間の知恵比べなら、ある程度の想定はできる。

だが、正直装備も何も持たずに、このまま逸話だらけの織田 鋼人を粉砕できるとも思っていない。せめて幸運な勝利を掴めたとしても、2回が限度なはずだ。3回目はどんな手を使ってでも、それこそ《魔術師の支配》や心寧ちゃんを出汗にしても、このタイプは本気で私を負かせにくる。

……だが、今回はその2回目も少し危うい。あまりにもあつけな過ぎて奴を楽しませられなかった。2回目から潰しに来るか……？ いや、その方がこちらとしては好都合か。逆に来なかった場合の事を想定して、状況に応じて臨機応変に動いた方がいい。

だから、今はわずかに油断している次の2回戦目で決着をつける。それには第二プランに関連するような賭けにも出るわけだが……。

「そうでおじやる♪ そうでおじやる♪ ここは楽々1回戦を突破した日葵ちゃんに敬意を表して特別にMeのfaceを見せてやるでおじやる♪」

「……別に興味はないのでいいです」

「まあまあまあ、そうは言わずに見るのでおじやる♪ 生涯、未来永劫 My first honeyと共にこの洋館で沢山の子供を抱える大切な孕み袋……マツマとして生活するのじゃからな♪」

お前、なんJ民かよお！とツツコミを入れそうになるが、その前にスポットライトがまた消失する。

そして次元の蟲人／残虐な人攫いによると思しきドラミングが聞こえてきたあと。再びスポットライトが私を中心に照らすように点灯し、『織田 鋼人』は私の目の前へと姿を現わした。

銅色の肌につぺりとした平たい顔。容姿に関しては全裸であることと、身長が170cm程度と私よりは大きい、ふうまくんよりはチビだ。梅毒のような性病を持っているのか。それともここに訪れた魔族達にも降りかかった病を発症したのかは定かではないが……奴の皮膚には不気味に輝く斑紋が浮かび上がっている。斑紋はこういう原理なのか、蟲が表皮を移動するかのようには蠢いていた。

そして、股間には立派な謎の光が……なんだ？ あの光。テレビド라마のTRICKのようにモジャモジャしていてキメエ。光の角度によって光がカシャカシャと音を鳴らして蠢いている。大きさにして700m1のコカコーラペットボトルほどの直径と長さだ。

「うおっほう♪ 間近で見る日葵ちゃんの肉付きの良いお尻と引き締まった身体♪ お胸は心寧ちゃん「あぐっ♥♥♥」に劣るもの……慎ましやかでプニプニな裸体を見ていたら、麻呂の大黒柱が！ 江戸幕府が隆起してしまったあっ!!!」

そんなことを言いながら奴は、テレビゲーム『The forest』の原住民がエフェジーを作り上げるかのような奇怪な行動を取り始める。私は奴を闇の中から観察するためにも飛びのいて闇の中に身を隠した。

そうだな。ヤツを率直に言えば……キモい。そして私が掛けるべき言葉は――

「あと……2回戦で……その砂の一夜城を倒幕して差し上げますね？」

「によっほっほっほっほ♪ 生娘が言いよるわ♪ これは麻呂の手中

に収めた時が楽しみじやのう……♪」

「……………」

「して……日葵ちゃんほどのようにして、我が与助をあんなにも簡単にひっくり返してみせたのでおじやるか？」

闇の中に身を潜める私を奴は目で追いつけている。視姦とはこういうことを言うのであろう。

クソが！ 鹿之助くんにはしたことはあるけど、まだされたことが無かったのに!!! ギョロギョロとした目が、頭のとっぺんからつま先まで舐めるように何度も繰り返して眺められる。

そしてまだあの勝敗に納得が行ってないのだろう。次元の蟲人／残虐な人攫いを押し倒した方法について触れてきた。

だからこそ、ニヤリと笑って言い返してやる。

「次に私が鋼人卿に負けたときに支払う代償が決まりましたね？」

「お……………」

「そして、先ほど鋼人卿は私に対して私から支払う代償を言わなかった。それでも勝負は執り行われ、私が勝利し、貴方はその勝利条件を黙って飲んだ。これは、片方の代償が決まっていれば、片方は言わなくてもよい、また同時に勝敗が決まれば敗者は勝者ののぞみを聞かねばならないという誓約があるのではないのでしょうか？」

「♪。麻呂は賢いおなごは何よりも好みでおじやる。でも麻呂も賢いでおじやるからな。きつと次は……………」

「ひっ……………」

「さしずめ『彼女』の肉体を元に戻すように言ってくるのでおじやるろう？ 日葵ちゃんは外へ出られたにも拘わらず、そのような脚でも構わず『彼女のため』に、麻呂の洋館へ戻ってきたのでおじやるからな」

「う……………」

「心寧ちゃん。気を病む必要はありません。鋼人卿は貴女を動揺させて、反応を楽しみたいだけです」

「によほほほ♪ 流星は日葵ちゃん！ 麻呂の魂胆は筒抜けでおじやるか？ さて次の願いが『彼女』の肉体を元に戻すこと以外な

ら……カードキーの譲渡でおじやるかな？」

「……どうでしょうね」

奴はやけに長い舌を出して、下品な舌なめずりをする。

こちらも闇の中でわずかに口角を上げて、愛想よく笑い返してやる。

「ぐすっ……ひっく……」

「……。大丈夫……。大丈夫ですからね……」

「うっ……あ……」

「泣かなくても大丈夫ですよ……。心寧ちゃんは何も負い目を感じることにはないです。ここには自分自身の意志できたのですから、気に病むことは何もないのですよー？」

それから連続したオーガズムとストレスによって、やや過呼吸気味に息絶え絶えになっている心寧ちゃんに近づく。しやがみ込んで彼女の背中をさすり、恥辱と凌辱の限りを尽くされた女騎士のような嗚咽を零す彼女が落ち着けるよう、慰めの声掛けをしながら介抱するのだった。

ときに私が次元の蟲人／残虐な人攫いに対して行ったことは特別でもなければ、大した技ではない。『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』77～78頁における “組みつき” 78頁 ■1つ目のサブオプション『対象を “自動成功” で押し倒す』ことを用いただけにしか過ぎない。

そう。本当に〈組みつき〉を実行しただけなのだ。〈近接戦闘（格闘）〉の  $m n v r$  ではない〈組みつき〉だ。それがあの戦闘のタネだった。

それ以上でも、それ以下でもないシンプルな答えだ。

そしてそれが神話生物に対しても有効なのか？という疑問については『新クトゥルフ神話TRPG』の〈近接戦闘（格闘）〉101頁 “ $m n v r$ ” で説明がされている。

そう。『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』の定義では用いられていなかった。『新クトゥルフ神話TRPG』で詳細化したという事は、『CALL of CTHULHU ク

トウルフ神話TRPG』でも〈組みつき〉のルールが神話生物に使用されたという場面はあったという裏付け証拠としても捉えられ、運用は可能であり。今〈組みつき〉を使用出来たこと。……それこそこの世界では正解のルールなのだ。

まあ、そんな小難しい話を持ち出さずとも『CALL of CT HULHU クトウルフ神話TRPG』の77〜78頁 “〈組みつき〉”のルールでは、“神話生物には使用できない”というルールは存在せず、〈組みつき〉を行った対象に対して用いることのできるオプションルール裁定になっているのだから、使用しない手はない。

そこに相手を円の中から押し出す・相手を地に伏せさせるという競技である相撲は私にとって有利なのは明らかで、〈組みつき〉が決まった時点で私の勝利は約束されていただけだ。

## Episode 74 『2回戦』

「さて。次の競技ですが……これは代償を希望したものが決めるものですか？」

「そこに誓約はないでおじやる♪ 麻呂はLady first主義者でござるから、日葵ちゃんが好きな競技を決めても構わぬでおじやるよ」

「さようございますか。……。……心寧ちゃん。心寧ちゃん？」

「はい……♡？」

全裸の心寧ちゃんの背中を摩って彼女の様態も落ち着いてきたところで、奴には聞こえないような小声で微かに身を震わせる心寧ちゃんに声を掛ける。

彼女は、まだ細かい息を吸っては吐いての繰り返しこそしているが、先ほどよりは動ける状態ではあるらしい。

「心寧ちゃん、お願いがあります。2回戦目はどうしても心寧ちゃんの協力も必要不可欠でして……」

「……何をっ、すれば、いいの、ですか……？」

「2回戦目。私は……チームデスマッチを挑みます」

「うくうっ……♡ そんな……勝てるわけが……ない……んくっ♡♡

♡です、よ……。いくら……日葵ちゃん……でも……♡♡♡ あの人に勝てるわけが……♡」

掌の中で心寧ちゃんはびくびくと小さく細かく跳ねている。

……。おそらく、私達が洋館の中を爆走して、悪質タックルを食らって、説教を受けている間に正気に戻った彼女は奴に勝負を挑んで……。鋼人卿に対して勝てないという刷り込みを心を折られてさされてしまったのだろう。

その声はか細く、震えている。艶っぽい声で震えているが、官能に支配されて……ではない。これは恐怖によって、だ。

「でも、このまま何もしなければ、私達は一生、洋館から出られません。あまつさえ、あの鋼人卿に身体をいのように弄ばれ続けるのですよ？

……。もう心寧ちゃんは、大好きなふうま君にも会えなくなっても良

いというのですか?」

「ふうま……くん……っ♡」

「ふうま君です。私も……。あの時。一人で歩けなくなつた時、諦めかけましたが……。私にも、外に鹿之助くんが居ます。鹿之助くんがいます。鹿之助くんがいます。鹿之助くんがいます。……だから、どうか……。奴に感づかれない為にも……。一時だけ力を貸してください。——お願いします」

震える彼女に対し、背中をさするのを止めて深々と頭を下げる。お互いにお互いの姿は見えてはいないが、せめて誠意だけでも伝わることを祈って。

「……………」

「……………」

「わかり、ました……。任せて、ください。そうですね……。っ。ふうまくん……。に会うためにもっ。……。日葵ちゃん……。だけに……。っ。大変な、思いは、させません……。させられ、ませんっ。私も、戦い、ます……。っ!」

「ありがとうございます……。! ……作戦は次の通りです。心寧ちゃんは、あのブラッドドレスを纏つた首のない貴婦人から逃げた時のように、室内を走り回って敵を攪乱させて、私から離れたところでヤツの隙を狙つた攻撃をして頂きたいのです。……。できそうですか?」

「ええ! この脚と……。対魔粒子の限り……。日葵ちゃんのっ、はあっ♡ お手伝いをします……。っ」

「……………そして——もう1つお願いが……」

「……………」

「次にオーガズムに達する時——」

「えっ???」

……………

……………

……

「お待ちせいたしました」

「話は纏まつたでおじやるかあ?」



奴はスポットライトの中心で、木製の椅子に座っていた。

待ちくたびれたような顔をして、次元の蟲人／残虐な人攫いに肩を揉んでもらい、本を読んでいる。

「もちろん。無事に話を付けてきました。次の勝負はチームデスマッチで、どうでしょうか？ あなた方とわたしたちのチームデスマッチです」

「おほっ♪ それは日葵ちゃんと心……My first honeyが麻呂に向かってくるといいう事でおじやるな♪ これはこれは……酔狂な……でも……しかし——」

「先ほどは百合に挟まれたとかおっしやっていますでしたか？

1回戦目はあまり、あっけなさ過ぎてつまらなかつたでしょう？ 2

回戦目では鋼人卿の嗜好にも配慮したのですが……」

「ほあっ?! 麻呂の嗜好に合わせてとな?! さすが！ 流石！ 流石

My second honey！ 勝負ごとに関して、自分一人で

楽しむだけではなく麻呂の事も悦ばせるためというでおじやるか！

よきよき……。日葵ちゃんが麻呂の手中に収まった暁には存分に可愛がってやらねば……♪」

鋼人卿は口の端から零れる粘着性のあるよだれを啜り飲み込み、こちらを嘲る。その様子を肩を揉んでいる次元の蟲人／残虐な人攫いもまた、好戦的なカチカチカチという火打石をこすり合わせるような甲高い音を出していた。

「開始の合図は、今 鋼人卿が座られている椅子から立ち上がられて、『椅子を引き倒した音と共に』……で、いかがでしょう?」

「ほうほうほう！ この状況で、まだ麻呂に有利な条件を提案してくるのでおじやるか!? 1回戦目で圧勝したからとて、余裕をぶつておると足をすくわれるぞよ?」

「できるものなら、やってみてくださいよ。逸話が本当かどうか。証明するチャンスですよ?」

「にょほ♪ ……いいよるでおじやる……。では麻呂も日葵ちゃんが1回戦でして見せたように、瞬時に決着を着けてみせるでおじやる」



「くっ！ 卑怯ですよ！ 私を降ろして正々堂々と戦いなさい!!」

私も鋼人卿がしているように水泳のクロールの要領で腕や足をばたつかせる。だが前に進むことはない。とてもいい傾向だ。最高に相手の術中に私はその身を置いている。

いやあ、それにしても自分で言うのも難だが、似合わないセリフだなあ。命や人生が掛かっているような勝負に正々堂々なんてクソ喰らえだろ。試合じゃねーんだから。

あー青臭い。実に世間を知らなさそうな生娘っぽいセリフだねえ。ああー反吐が出る。そもそも現実なんざ、金と権力で不正がまかり通る世界だろうが。

演技だと理解しているが、自分自身の言葉に思わず失笑しちまいそうになる。

「勝負に卑怯なものにもないでおじやるよ？ さて、後は……」

奴はあざけるようにクスクスと嗤いながら、心寧ちゃん側へと視線を移す。

今、彼女は私から少し離れたところで室内を疾走し、常に次元の蟲人／残虐な人攫いと織田 鋼人の背面を取り、隙があれば鋼鉄の脚を叩き込めるようにと迅速な動きで室内を駆け回っていた。私には成し得ない、とても良い動きだ。流石両足が義足……もといパワードスーツ……もとい鋼人は彼女のことをサイボーグ強化されていると話していた。サイボーグ強化を行っているだけはある。

民間にそんなサイボーグ技術が出回っているという事は、私の時代にはなかった超技術はまだまだあるのだろう。なお先輩のレーザー砲のようなものや、神村のバックプラスチックが発生しない無反動砲。

私の〈機械修理〉〈電気修理〉〈物理学〉〈科学（工学）〉を用いての魔改造のし甲斐がありそうで、ちよつとワクワクする。

「ッ……捉えましたッ！」

鋼人卿と次元の蟲人／残虐な人攫い共に背後を向いた瞬間を狙って、心寧ちゃんは「わざと」大きな声で攻撃の宣言を行ってから鋼人卿の背後を取る。遠心力の入った鋼鉄の脚部が確実に鋼人卿の後頭部を捉えて……。

ここから見える範囲での実況・解説をすると……そりやもう……。……ブラジャーで固定されていない素っ裸のお胸がぼるんぼるんしてる。……もう、コロ先輩より少しばかり大きな2つの双丘がぼるんぼるんしてる。

駄目だ私。首を持ち上げ続けるんだ。心寧ちゃんを眺め続けるッ！今、うつむいてはいけない。今、首を重力に任せて、うつむいてはいけないんだッ！！

そして私は、こんなに青空 日葵の目が良いことに対して悔やんだ日はない……ッ！！

「見事でおじやるなあ……でも、まだまだ詰めが甘いでおじやるよ。ここ ね ちゃん♪」

「イツ……！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ここで鋼人卿の呼称で、心寧ちゃんの遠心力の入った回し蹴りの軸が反れる。まるでバレリーナが片足での回転中に床で滑ってしまつたかのような崩れ方で、床に転倒すると同時にその身を快楽に震わせていた。

やはりな♂ 絶対に使つて来るとは思ったよ。だがそれもこつちの想定範囲内だ。

「日葵ちゃんの案だったのでおじやるか？ 麻呂たちが彼女に注視している間に、サイボーグで火力の乗る心寧ちゃん「アッ！♡ イツ♡ イキたくなっ♡♡ああっ♡♡」が背後から攻撃すると？ 甘い。甘いでおじやる♪ この呪縛は視界外であっても発動するのでおじやるよ♪ 先ほど麻呂が暗闇の中にいるY o uのことを呼んだのをト口けた頭では覚えてられなかつたのでおじやるな？」

「あっ♡♡おっ♡♡」

崩れ落ちた心寧ちゃんに鋼人卿が近寄っていく。私の浮遊地点から距離にして約8 mの位置。

心寧ちゃん、めっちゃビクンビクンしてる。両脚が持ち上がって、クワガタの角のように歪曲してる。めっちゃタコ焼きに振りかけられた鰹節みたいになってる。アレさ、腹上死しないよね？

あー！ あー！ なんだろうな！ あのクジラの潮吹きみたいなの

お水はなんだろうな!? 黄色く見えないけど、あれなんだろうな?! アレなんだろうな! わっかんないや! (すつとぼけ)

「も、もうやめ……で……っ♡♡♡」

「によっほっほっほー♪ 雅でおじやるなあ♪ 心寧ちゃん♪」

「あぎっ♡♡♡♡♡♡」

……心寧ちゃんが全身を細かく痙攣させながら、とろけた表情のまま横目でこっちを見ている。よく頑張った。鋼人卿と次元の蟲人／残虐な人攫いが私から視線を離している間に、洋館の侵入時から彼女との意思疎通で用いていたハンドサインで『バトンを渡してくれ』と送る。

彼女もまた鋼人卿に分からないように嬌声を上げながら頷き返してくれた。

「ま、負けを認めますっ♡♡ 私はまだ負けましたっ♡ 反抗してっ、ごめんなさい♡♡♡! ごめんなさいいっ♡♡♡ 私なんか、こうびつとさまに勝てるわけがっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ ご主人さまあああっ♡♡♡ 身の程を弁えずごめんなしいいっ♡♡♡♡♡♡」

「おほっ♪ 敗北宣言えらいでおじやる♪ それに麻呂をご主人様と呼べるなんて! によっほ♪ そんな偉い子には……♪」

「あ、あはっ♪♡♡♡」

「ご褒美でおじやるよー♪ 『心寧ちゃん!』」

「やああっ♡♡♡ ああああああっっっ!!!♡♡♡♡♡♡」

室内を震撼させるほどの絶頂による絶叫。

よくやった。よく頑張った。よく、つらい中で持ちこたえた。

——さて、次は私の番だ。

「——さて……」

ぴくぴくと痙攣し白目を向いたまま動かなくなった心寧ちゃんは床に転がされたまま放置され。鋼人卿と次元の蟲人／残虐な人攫いはこちらへと実に卑しい笑みを浮かべ振り返った。そんな2人組に対して、私は怯えたような表情を作る。

やがて鋼人卿は、そんな私の絶望の表情に満足したのだろう。ブツ

ブツと口元を動かしながら掌を天井側へ向け、まるで日本人がペットを呼ぶかのような……。対魔忍世界流でいえば手マン行為の……。これから私の瞳に対してナニをするかのような手の動きで私を呼び寄せるような仕草をする。

「っ……」

こちらとしても、生娘をシャブ漬け戦略に吞まれそうなるのを嫌がるような素振りを空中で悶えて示す。

「……………」

「いやっ……やあ……」

「……………」

私が空中で悶える中。約30秒の間も鋼人卿は、ブツブツという口の動きといやらしい指の動きをし、やがてそのニヤニヤとした口を閉じて約8mもの距離を歩み寄ってくる。

……そうかそうか。そんな離れた距離を歩み寄ってくるのか。

「クククっ……残るは日葵ちゃんだけでおじやるな？」

「ひっ……。ぐうっ……」

「そんな悲鳴を押し殺し、悔しそうな顔をせずとも敗北を認めるだけで良いのでおじやる。失うものはたった1つでおじやるからなあ」

「わ、私がどのようにして次元の蟲人／残虐な人攫いを転ばしたか……ですよ、ね？」

「ん？ なんのことでおじやるか？」

「……………え？」

「麻呂が勝った暁には、日葵ちゃんの下腹部に淫紋を刻むのが代償でおじやるよ♪ によっほっほっほっほっほっほ♪」

奴は私の真下に潜り込むとへその周りの腹部を人差し指でなぞり愛撫してくる。しわしわとした老人のような手にも関わらず指先だけは若人のように張りのあるつやつやとした指先だった。

「そ、そんな！ 話が違うー！」

「によっほっほっほっほっほ♪ 何も変わらないでおじやる。あれは勝手に日葵ちゃんが言い出しただけでおじやるよ？ 麻呂は適当に相槌を打っただけでおじやる」

「この……いや、じゃあまだ負けてない！」

みつともなく空中に浮遊したまま腕を振り回し、近づいてきた鋼人卿にへこぶしを振るうが、その攻撃は下に潜り込みしやがみこんでこちらの裸体をプラネタリウムでも見るように見上げる奴には届かない。

まあ、奴の性格を考えれば、すべて想定範囲内だ。いやあ、初々しい生娘のロールプレイって最高に面白いな。これで、片腕で乳頭とか、掌で秘部を隠せばもつと捗りそうだが……いや、中の人の実年齢を考えるとそんな歳でもねえんだよなあ……。

でも、ここはロールプレイの一環として演技をする。

……なかなか、えつちで、そそるだろう？ 実に対魔忍世界らしい振る舞いだ。くっ殺！

「このっ！ このっ！」

「によっほっほっほっほ！ 当たらぬ。当たらぬでおじやる！ ほっほっほー♪ 両腕を使わなくてよいのでおじやるか？ 両腕ならば麻呂に届くかもしれぬぞよ？」

いいぞ。その調子で見上げていろ。余裕で私の攻撃を避け続けている。その余裕ができるのは今だけだ。お前の気持ちは狩る側に居るんだろうが、それは大きな誤りだっということを見せてやる。

これはそれなりの「賭け」になるが、私の「エイデア（INTロール）」による予測が誤りでなければ、99%。低く見積もっても60%の確率でこちらの第二プランは発動する。発動しなかったときの第三プランや第四プラン、第五プランも当然用意してある。

まあ、70%は信用できないが、60%なら十分な成功率だ。

「この……っ！ ……ハッスアアアアアアアアアアアアアアアアッ  
!!!」

「によほっ、によほほほほっ」

## Episode 75 『本当の狙い』

「ゼエ……ゼエ……ゼエ……」

「によほほほほほほほ♪ そろそろ負けを認めては？ 日葵ちゃんは麻呂には勝てぬのでおじやるよ♪」

「誰が……誰が……っ」

「強情でおじやるなあ……。それもよきよき。いつでも麻呂は日葵ちゃんの肉便器敗奴隷北宣言宣を受け入れるでおじやるよ？ グフっ♪  
どれ、そろそろ味見として試食でも……」

「ぐうっ」

「悲鳴を上げて麻呂を喜ばせまいとしておるのか？ かわゆい奴め」

約7155ラウンド分ほど、私が一方的ながむしやらの空中戦を試みるが……。最も有効射程の短い〈頭突き〉はもちろんのこと。〈こぶし〉〈キック〉〈組みつき〉、素手の〈近接戦闘（格闘）〉はすべて空を切り、奴に当たることはなかった。

梅雨のシーズンという事もあってか、蒸し暑い湿気によって全身からは汗がにじみだし、にじみは他のにじみと一塊となって雫となる。スポットライトに照らされて仄かな温かみを帯びた背中のかぼぼみに汗が溜まっているのを感じる。私が暴れるたび、雨漏りをした天井のように汗が鋼人卿へと降り注ぐ。それを顔面に浴びた奴はぬぐうこともなく、えっちなお店で働いている方の蛇子ちゃんよりも長い舌でベロリと舐めとっていた。

やがて息を上げながらガクリと首を降ろす私に鋼人卿は楽しそうに周囲を徘徊し始める。

「いぎっし！」

「によほほほほほっ♪」

そこから更に奴は次元の蟲人／残虐な人攫いを顎で使うと、宙に浮いた私の両足を乱暴に掴み脱臼しない程度に広げさせる。でも、いくら痛みを緩和させるために薬漬けになっているとはいえ、患部を乱暴に扱われたらそりや糞痛い。

でも鋼人卿。こいつアレだわ。アダルトビデオを見て、ガシガシG



スポットをかき混ぜる方が女の子は喜ぶとか思ってた、実際の彼女にもやってブチ切られる悪手をするパターンの奴だ。

『馬鹿野郎！ 膣は内臓だぞ!! テメーのアナルや尿道に指ぶち込んで爪でズタズタに傷付けてやろうか!!』ってやられた方は思うやつ。

まあ、そんなツラと性格じゃ伴侶すら見つかりそうにねえけどな。それにしても、まだか？ 6割の宛ては外れたか？ ……味見はまじい。そろそろ処女膜を喪失しそうな流れなんだが。ブチ抜かれるのは、大喰いの泥濘による横隔膜だけにしたいのだが……。それはちよつと想定範囲外なのだが。

「ふふふ。胸部は板にも等しいのに、尻は大きいのでおじやるな♥」  
「ヒんつ！ ……や、め….:ろお….:つ」

「大きなお尻を揉めば揉むほど、日葵ちゃんの意に反して 〃甘露の蜜〃 が大量に滴るでおじやる♥ 身体は実に正直でおじやるなあ？ もしかして被虐願望が強いのでおじやるかあ♥♥♥？」

私の2つの尻が、奴の両手で鷲掴みにされ、そのまま乱暴にかき回される。足を閉じようにも次元の蟲人／残虐な人攫いの拘束は、革ベルトで固定されているかのようにピクリとも動かない。

ここで、そんな状況で本当に濡れているの？と思つたら….:マジじゃん。胸が平坦だからこそ下半身側や地面がよく見えるけどマジじゃん。

え？ でも、去年のテロリストに捕まって人質にされた時にはこんな生理現象なかったんだけど？ え？ な、なんで？ なんて興奮しているの？ ど、どうなってるの!?! 私の身体!?!

….:ま、ま、まずい。ちよ、ちよつとまずい。自分がというよりは、自分の身体がどういうわけか変態マゾヒズムの道に片足突っ込んでいることに對する動揺に加え、尻を鷲掴みにされて揉まれているこの状況。

対魔忍世界では挨拶程度の感覚、日常風景なのかもしれないが、個人的には本当にまずい。

次は絶対に….:肛門か秘部に指か、舌か、鼻か、鼻息が刺さる。

幸いにも1.5mの高さに浮遊しているから、奴の700m1コ

カ・コーラ級のペットボトルは突き刺さらないが、他のモノが突き刺さる。そんな気がする。

それはまずい。声が震えてくるレベルでまずい。いろんな意味でまずい。語彙力が落ちる。まずい。

「では……ぎしゅしゅ……」

……じゅるりっ♡

あー!!! あー!!! 待って！ 正直に申告します!!! 想定外の事態が起きてる!!!

第二プランは発生しなかった! ならばただちに第三プランを実行する必要がある! 第三<sup>打</sup>プランは<sup>開</sup>あるけど!!! ちよつと今はできない!!! 鹿之助くんの救出活動の最中に見つけた『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』のサプリメント『クトウルフ2010』にその第三<sup>打</sup>プラン<sup>開</sup>があつたのだけど!!! それを実行できるのは両手・両足が自由でないと使えないことが前提条件なんです!!!

しかも第三プランを阻害されたときの第四<sup>突</sup>プランは、この状態<sup>一</sup>に<sup>空</sup>に<sup>中</sup>で<sup>浮</sup>遊<sup>二</sup>された状態じゃ人体の可動域の影響で実行できないの!!!

ああーツ!!! まずい! 対魔忍<sup>にくべんき</sup>! 余計な事に首を突っ込んでいければ、いつかは対魔忍<sup>にくべんき</sup>化は想定してたけど! 今じゃないの! 待って! 奴の! 奴の鼻息が!

鼻息がくっ!!! まずいですよ! まずいですよ! まずいですねえ!!!

情けない小娘みたいにヒンヒン言っちゃうつ! あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝつゝ!ゝ!ゝ!ゝ!ゝ!

心寧ちゃんが気絶している今こそ代償<sup>コスト</sup>の重い第五<sup>緊急時の切り札</sup>プランのチャンスだけで、代償が重すぎて使いたくないいゝ!!!でもこのままだと本当に対魔忍世界の洗礼<sup>入</sup>にイっちゃう!!!ああつ!行く往く逝くイクいくッ!!!先輩!!何してんすか!やめてくださいよ本当に!おまえのことが好きだったんだよ!お兄さん許してく〜く〜!

「ほ、ほーつ、ホアアーツ!!ホアアーツ!!!」(せいっぱいの威嚇)!!!

「おい、お前。私の生徒に何をしている？」

「へあ？」

危うくスジや下半身の唇を押し広げられ、滴るよだれごと舐め回されることによる——私の実況と解説つきのR—18禁な……まさに対魔忍世界ならではの通過儀礼を済ませる直前。

何処からともなく凜とした女性の声が掛かる。

——私はこの声を知っていた。

——首を痛めることも厭わず、足元へと振り返る。

——そこに居たのは、初めての五車学園入院時に私の両手を掴むように握った人。

——悪質タツクルでの顔面スライディングのあとに手を差し伸べてきてくれた人。

「——はあああああああああああああつ!!!」

——ザスザスツ!!! バチバチバチバチバチバチバチバチツ!!!

鹿之助くんの従姉さんおねえこと上原うえはら 燐先生りんだった。

「おぎよぎよぎよぎよぎよつ?!」

「ほう……まだ喋るだけの余裕があるとはな……! もっと激しいのが好みだとみえる！」

「がががつ?!」

——ツ!

——ツツ!!!

彼女は両手に電極の棒を両手に持ちそれを鋼人卿に突き立てていた。青白い電流が電極から激しく火花のように散り、漏電している。鋼人卿は感電しているようで激しく身体を上下に振動させて、人間の皮膚が焼けるような悪臭を充満させていた。やがて奴の口が大きく開かれ、そこからも激しい電流が天井へ向けて吐き出される。

教師陣へ『鍵』の所持を示し脱出できる趣旨の情報の開示。その時に見せた食いつき具合から、保険として賭けていた第二プランの作戦が功を成した！と内心でガッツポーズを取った時、1つ疑問が沸き上がる。

「??？」

鋼人卿の背後には私の開脚を固定する役割を任されていた次元の蟲人／残虐な人攫いという神話生物が居たはずだが……。どうやって、燐先生は私の秘部にちよっかいを出そうとしている鋼人卿の背後を取ることができたんだ？

次元の蟲人／残虐な人攫いを、興奮した鋼人に気づかれずに暗殺したとしても、奴の物理的な装甲を射抜ける電極を用いた雷撃技ならば脚を掴まれている私も感電してしまうはずだ。でも私は感電していない。となると、次元の蟲人／残虐な人攫いはその持ち場に居なかったことになる。

残念ながら、首の可動域上の関係と燐先生の放つ雷撃の眩さで、肝心の対象の姿が確認できない。

「ギャツハツハツハツハ！ 見たことねえ魔獣だな！ 面白れえ！ ぶっ殺してやるよ！」

しかしその疑問は直ちに、室内で響いた豪快な笑い声と蛮族じみた声によって解決されることになった。

続けざまに、私の脚を掴んでいるはずの次元の蟲人／残虐な人攫いが、1対の手首が千切れた状態で吹き飛び、地下倉庫の壁に突き刺さったのだ。コンクリートの壁がへこみ、劇場版第11弾「ドラゴンボールZ 燃えつきろ!!熱戦・烈戦・超激戦」に登場した「新惑星ベジータ」の山岳地帯にそびえたつ巨大な岩石のクレーターのよう沈み込む。

背後から聞こえてくる爆裂音、長物を振り回すかのような風を切る音、『オラオラオラオラ』という一方的に蹂躪しているような特徴的な声。その姿や顔を見なくても分かる。あの戦闘狂で有名な眞田先輩だった。

狂気に打ち勝ち普段と変わりのない彼女の登場は、同時に私の中の燐先生に対するすべての疑問が解ける。そして形がどうであれ、連続した賭けに勝ったことを証明してくれた。

「……ははあ……」

空中に全裸で浮遊した状態で、ほつと胸を撫でおろす。

神村さんや陽葵ちゃんみたいに……撫でる胸なんかないけど。

頭を重力に任せ、臀部側の状況を確認すれば、相変わらず鋼人卿は私の秘部を目前に燐先生に高圧電流が流れる2本の電極で焼かれている。頭を持ち上げれば、眞田先輩によつて吹っ飛んでいった次元の蟲人／残虐な人攫いがボコボコに……まるで童話『うらしまたろう』の冒頭で、子供からリンチに遭っている亀のように叩かれている。

「ツ！——ツ!?——ツ!!」

再び頭を重力に委ねた時。鋼人卿は青い電流で痙攣しながらも、最期に私を見ながら何かを言っていることに気が付く。コロ先輩が話している内容をへ読唇術で解読していたこともあつてか、最期に奴が私になんて言っているか読み解くことができた。

だからこそ、ここぞとばかりにニヤリと嗤う。先ほどの半分本気で甲高い声を出していた生娘のロールプレイから一転、低い声色でファイアのボスが商売敵に一杯食わせてやったかのように言い返してやる。

「ああ、何も違わないさ。私と心寧ちゃんだけ” あれは勝手に鋼人ちゃんが言い出したただけだろう？ 私は適当に相槌を打っただけで、チームデスマッチの仲間が1人だけだなんて言っていないね。2人だけだと思って、油断した鋼人ちゃんが悪いのさ」

小娘がアーツ!

いやそれよりもツ!

ツ!

なぜ私が体力を温存し呪文を使用できないタイミングで増援がツ!?

お前ツ!

まさか、まさかまさかまさかツ!!

まさかお前エーツ!!

ツ!?

「へっ……。今更、気づいても遅いんだよ。バーカ。」

中指を立て舌を出し、鋼人卿を嘲笑う。ちようど、燐先生は鋼人卿の身体で私の姿は遮られていて何も見えていない。侮辱のオンパレードをやりたい放題だ。そして奴が私の真私と同郷であることの正体に気が付き、非常に悔しそうな表情で完全に白目をむいたところで唾も吐き捨てて……ここでやつと緊張状態を解いた。

「はあー……疲つかれえ」

クソでか溜息を一息つき、全身の力を抜く。それから瞼を閉じて安堵する。

だがしかし、私は一つ見落としていることもあった。鋼人卿は呪文を私に掛けていた。今その肝心の術者は死亡、あるいは気絶したのだ。

つまり……この流れで何が起きたかというと……。

「……危うく対魔忍になるところだっ——タアツ!？」

ビタンツ!!!

「ぎゃふんっ!!!」

呪文から開放された私は、車のタイヤで潰されたカエルのような姿勢でクツションも何もないコンクリート質の地面へと叩きつけられる。1.5mほどの高さの為、骨が折れる程でも怪我をするほどでもないが体の前面。特に額と鼻頭が凄まじく痛い。下半身から水っぽい音が聞こえる。

「うぐっ、うぐぐぐぐぐ……ぐふっ」

……そうか、そうだったわ。

空中浮遊されることは想定していたけど、第二プランがうまく行った時の降りるときのことを考えてなかったわ。私。

……

……

……

# Episode 76 『NKT：長く苦しい戦いだつた…』

戦闘狂と鹿之助くんの従姉おねえさんがこの地下に突入して、早<sup>180秒(3分)</sup>15ラウンド……。

この部屋に私と心寧ちゃんに対して危害を加えてくるものは存在せず……。

チームデスマッチは私達の勝利で締め括られる。

織田 鋼人は燐先生によって途中から炎を噴き始めて炭化していったし……次元の蟲人／残虐な人攫いは眞田先輩に滅多打ちの滅多刺しにされ、蟹を茹でたかような生臭さを放つ銀色の体液を残して時間と共にしぼんで点滅したかと思えば、最後は溶けてその姿を消してしまった。

「眞田！ 上原！ 何処に居るツ!？」

「蓮魔先生、ここから一帯の足元は暗いので足の踏み外しに注意してください……ヒツ」

それから……。一足遅れる形で、蓮魔先生と黒田先輩もこの地下までやってきた。

死体姿とはいえ、次元の蟲人／残虐な人攫いを見た黒田先輩は少しばかり驚いて蓮魔先生の背後に隠れてしまったこともあった。

しかし、今では平常心を取り戻していつものように大好きな蓮魔先生の傍に寄り添っている。

勝利した私達に奴等が支払ったものは『死』だった。

こうすることで、心寧ちゃんの腹部に淫紋を刻まれていることは、私と心寧ちゃんだけの2人きりの秘密となり——術者も死亡したため淫紋が発動する条件を部外者に知られることや発動されることも、今後一切なくなった。

カードキーも、織田 鋼人は死亡したのだ。奴にはもう必要はない。相続として私とそのカードキーを貰えばすべて穩便に丸く収まる。

奴の思い込みにしかな過ぎないが、私が奴の妻であるならば相続は当然の権利だ。相続税はこの館を売地に出して支払ってやる。なんて合理的で完璧な報酬だろうか。

「……青空、大丈夫か？」

「ええ……。またもや顔面から地面に衝突したことを除けば、大丈夫です……」

戦闘の終わった部屋で、痛みによって顔面を抑え悶える私に燐先生はキンキンに冷えた濡れタオルを渡してくれる。私は全裸のまま受け取ったタオルで、強打した額から鼻頭までを冷やしていた。

いま燐先生は、全裸で強打した患部を冷やしている私と、オーガズムに達しすぎて気絶した全裸の心寧ちゃんの介抱をしている。

遅れて参上した蓮魔先生とおまけの黒田先輩、眞田先輩の3人は、そんな介抱されている私達を助けに来たことに関して大揉めし始めていた。

「ほらな？ 私の言ったとおりだったろ？ コイツが突入してから、ほぼ1時間後。私達を招くように扉が独りでに開いて、速水の悲鳴。続いて青空の雄たけび。雄たけびも蓮魔、お前の名前を叫んでいた。隠密ってのは好きじゃねーが……上原の奴が必死に隠密しろって懇願するから、言う通りに忍んで駆けつけて見ればあの状況。突入して大正解だったのは違いねえよ」

「今回ばかりはそれを認めるが、本来ここに入ったものは死亡扱いにとすると決まっている！」

「いいじゃねえか。元凶はぶっ飛ばしたんだしよ。脱出に必要な『鍵』は青空が持っているんなら、あとはそのまま無事に脱出できたら何も問題ないだろ？」

「そういう問題ではありません！ 眞田さん！ あなたはいつもそのような結果論を展開しますが、もしその方法が上手くいかなかったときのことは考えているのですか？ それに蓮魔先生は最終的な結果についてではなく、前提規則について話しています！」

「うまく行かなかったときイ？ はっ!!! だったらその時は、全て突破できる力で突破して解決すればいいだけの話だ。黒田お前はまだ



現場にそんなに出てねえからわかんねーだろうけど、社会人は結果が全てなんだよ。それに学園で鍛錬を積んでいる途中のひよつこのためえが、この方法のまま現場で実績も挙げている私へ意見するなんていい身分になったもんだな、おい?」

「それは……。今は、たまたまうまく行っているだけであつて……。今後もそうだとはい——」

「あ? いま、『たまたま』つつつたか? てめえ……。学生の方で何様の——」

「黒田。……。真田のいう事はもつともだ」

「ハンツ! ほら見ろ」

「は、蓮魔先生!」

「黒田。——まだ私は最後まで話し終えていないぞ」

「……………申し訳ございません」

「……社会人になれば、過程は評価されず結果が全てを言うことだろう。これについては、私も十分に理解している」

「さすがは長年現場で働いて、その後に教師になった奴は違うな。ちゃんと理解してんじやねえか。わかってねえのは、どっちだったんだろうなあ?」

「つ……………」

「だがな。過程を軽視して結果だけで成果を見ること、語ること。それは魔族やノマド、不正や汚職を働く外道どものやり口と同じことだ」というのを、真田お前は理解しているのか?」

「!」

「……………」

「私達は——」

「ケツ。あー、はいはいはい。人魔外道を外れねえ程度には過程も大事にすりゃあいいんだろ! わかった! わかった! 今度からは過程を大切にしながら全て突破できる力で解決するぜ! 私はあの怪物に用事ができちゃったから行ってくる!」

「真田さん! ……………蓮魔先生……………」

「今は放っておけ。ああは言っているが、きっとアイツも根底では理

解しているはずだ。頭を冷やせば落ち着く」

「……………」

「それよりも、先ほどの眞田への咎め。なかなか的確なものだった。褒めてやろう」

「あ、ありがとうございますっ♥」

「……………だが、今は眞田よりも、私としては問い詰めたい人物がいる」

「……………ギリッ……………青空、日葵……………ッ！」

(……………あ、やべ……………こつちに歩み寄って来てるわ。怒りの鋒先がこつちにくるわ。その対象、間違いなく私だわ)

向こう側の揉め事が一旦お開きになったかと思えば、今度は蓮魔先生がこちらを向いた。続くようにして黒田先輩の鋭い視線と重々しい歯軋りが私に刺さる。

一難去ってまた一難。

死を覚悟しておいた方が良いほどの怒りの波動を纏い、接近してくる蓮魔先生に対して私は身を強張らせる。似たような状態の黒田先輩は、確実に私の顔面を見据えながら般若のような顔で背後に付いてきている。ポーカーに例えるならダブルアップ状態だ。

咄嗟に両手に持っていた濡れタオルで顔面を覆い隠し、説教に対する防御態勢を取った。

「——上原先生！ あなたもだ!!! 五車学園の教師、臨時講師という身でありながら、眞田を止めることもなく、眞田よりも先に自ら率先して洋館に侵入するなどとッ！ どういうつもりだッ！」

「!？」

しかし、そんな冷やしてへ応急手当する私には触れられることなく、蓮魔先生はそのまま私の傍らに立つ燐先生に対して食ってかかりに行った。

私はそれをそつと、タオルの端から覗き込む。

怒りの鋒先

黒田先輩も、この対象怒りの鋒先に対して即座に理解が及ばなかったようで、

青空わ 日葵たと蓮魔先生、上原 燐先生の3人を交互に見まわした後、

自身が介入できるスペースは無いと悟ったのか、次元の蟲人／残虐な

人攫いの死体跡を怒りのまま踏みこむ真田先輩を止め、離れていった。

「蓮魔先生。同じ学園に勤める教師として、あなたの気持ちはよくわかる。しかし青空は過去に、その命を賭して上原家宗家の跡取りである鹿之助を助けてくれた。彼女には、感謝してもしきれない程の恩がある。今度はその恩人が助けを求めていた。それは上原家としても、教師としても、助けに行くのは当然の道理だろうか？」

「そうは言ってもだな！教師である貴方という存在が、定められた規則を無視して個人的な私情や感情で動くことは、事態を更に悪化しかける可能性や対m——五車学園の生徒に対する示しがないだろう！上原先生はその部分をどうお考えか——」

それを燐先生は真剣な様子で受け止めながらも、自分の意思を伝えていた。

これには私も驚かざるを得なかった。私の中では真田先輩が、第一プランが失敗した時の第二プラン要員として釣れると見込んでいた。

しかし洋館の外で見せびらかした『鍵』に対して、同じような反応を示した燐先生が同伴するか・してくるかは、あくまでも同伴者という形で確率に組み込んでいたのだ。それが今、彼女の言葉によって、なぜそんな教師という身分でありながらも真田先輩と共に突撃したのか理解に至る。

だが……まあ。本件に関して私は、当事者として巻き込んだ側の思想だとは思えないような無責任な思考だとは理解した上で、実は蓮魔先生側の意見に賛同できる部分が多く蓮魔先生の意見は尤もだとも思っている。

15年前の鋼人洋館絡みの事件では行方不明者はすべて死亡扱いとされていたし、蓮魔先生の静止を聞かなかった『五車学園の生徒2人』と、『優秀な人材の喪失・犠牲者増加のリスク』を天秤にかけて考えた時、どちらを優先すべきかは明白だ。

それでも、言わせてもらいたいこともある。

彼女たちはきつと私に対して『馬鹿な学生が自分の実力を過信し、私情を持ち込んで死亡確定の洋館へ準備もせずに突っ込んで行った。』

あまつさえ、教師でも手がつけられない戦闘狂を扇動した上で』と  
思ったことだろう。

されど言い訳がましいが、元より有事を除き第二プランは最初から  
使用するつもりはなかった。あくまでも第一プラン『個人のみの  
心寧ちゃんの救出（制限時間：60分以内）』がうまく行かなかったと  
きのプランが、第二プランなのだ。それがうまく行かなかったときの  
第三、第四、第五プランも当然考えていた。

それに……。鋼人卿も最後は気が付いた  
私に開く素性のクトゥルフ神話TRPGの住人のことで、発覚しても面倒なだけなの  
で直接的には言わないのだが……。

今回の鋼人卿の討伐は、私の名演技と鋼人卿のMP調整があったか  
らスムーズにいったわけであって……。

結果論  
眞田焰論にはなってしまうが……。

確かに心寧ちゃんを諦めて、私があの場合でおとなしく室井先生の手  
当てを受けて去っていけば、その場は更なる侵入自体は未然に防げた  
かもしれない……。

だが私が介入していなかったら、間違いなく心寧ちゃんは鋼人卿専  
属の対魔忍にくへんぎになっていただろうし……。

でも十数年後、あの小部屋にあった魔法陣や鋼人卿による呪文に  
よって、心寧ちゃんの子供たち……いや、もしかすると心寧ちゃんま  
でもが闇堕ちののち、10年間かけて開発された親子丼の一味とし  
て、新たな禍を五車町に振り撒いていた可能性もあった。

（やはり……。改めて考えると私の『カルティストは一匹残らず抹殺』  
理論は間違つてなかった）

さらに私が先行する形で洋館内に潜入し鋼人卿のMPを削り切つ  
たこと。1回戦目で耐久値生命力を温存させる程度には警戒心を持たせた  
こと。2回戦目では空中浮遊MPが完璧に枯渇していることで自ら歩いてきたことを確認していな  
ければ、新たに突入してきた4人も同士討ちで大変なことになってい  
ただろう。

日を改めての救出作戦では、奴のMPも完全に回復しきってしまい  
更に状況は困難を極めたはずだ。

(……………)

でも。ここにいる誰も彼もが、そんな私の影の努力なんか知らない。

きつと、ただの『馬鹿な学生』だと思っている。だからこそ、あとで生徒指導は入るのだからけど、この場で蓮魔先生が私に対して直接的に叱ってこないのだ。

私的には『馬鹿な学生』が真実隠ツエールルになることは、喜ぶべきことだ。しかし、それでも、別腹として満足感や自尊心は欲しい。

私は、よく頑張った。頑張ったよ。頑張った。えらい。ほめて。でも、ほめる人が居ないから自分で褒める。えらいぞ。ご褒美は何が欲しい？ 今はひたすらに鹿之助くんが恋しい。鹿之ニユウムがほしい。OK。準備しておく。あとでいっぱい吸おうな？ うん。

さあ、ラストスパートだ。もう少しだけ頑張れるか？ 頑張れる。探索者としてここで詰めของ甘さをみせて終わりにはいけない。そうだ、探索者として最後までやり切ろう。そのつもりで侵入したんだから。うん。

## Episode 77 『脱出前の探索者ムーブ』

すべてが終わった室内で、ぼんやりとした頭の中とドツとする疲労感に呑まれながらもゆっくりと立ち上がって、濡れた冷やしタオル片手に蓮魔先生と燐先生の間に入るように向き直る。

私が洋館再突入時に定めた探索者としての意を貫くならば、ここでまだ休むわけにはいかないのだ。

「あのー……私のせいで揉めているところ大変恐縮なのですが……」

「分かっているのであれば、黙ってそこで大人しくしている!!」

「すみません蓮魔先生。でも……どうしても聞きたいこともあって……。……あそこの鋼人卿の死骸を調査してもよろしいでしょうか?」

「………………。はア~~~~ア!? 死骸の調査アツ?!」

私のほぼ真正面に居る蓮魔先生と燐先生の2人はもちろんのこと。いまの蓮魔先生の絶叫で、黒田先輩と眞田先輩を加えた4人が黙ってこちらに注目してきた。気絶した心寧ちゃんを除いた全員が信じられないものを見るような眼でこちらを見てくる。

特に蓮魔先生は、最初私が何を言っているのかうまく聞き取れなかったのか、ひと呼吸開けてからの反応だった。少しいつもよりも甲高いキーでのクールポンポコのような『は?』が出る。顔と上半身の動きもクールポンポコの動きと連動していた。『やっちまったなあ!』なイントネーションで『死骸の調査ア!?』と高らかに叫ぶ。

……でも、なんでさ? こればかりは、私は何もおかしいこと言った覚えはないんですけど?

この鋼人卿はこれまでの性格上。死んだふりをして、油断している私達に陰湿な報復を加えてくるタイプの奴だぞ。『新クトウルフ神話TRPG』275頁『怪物を殺す』にも掲載されている至って真面で普通のことを話していると思っただけだなあ……?」

「えっ。……駄目ですか?」

「青空……1つ聞かせてくれ」

「はっ」

「……………どうして……………どうして死骸の調査なんかするんだ?」

「え? どうしてって……………。え?」

「えっ」

「お?」

「え?」

「は?」

「えっと……………これは奴と対峙した上での感想なのですが、奴の性格からして今は死んだフリをしてやり過ぎ、のちに陰湿な報復をしてきそうだなと感じまして。その場合に備えた死骸の調査と死体蹴りトドメを……………しようかな?と……………?」

「……………正気か?」

「しよ、しよ正気ですよ!?! 失礼な——」

「……………」

「……………」

周りを見渡すも……………あれ? 空気が固まったままなんですけど。

さつきまであちら側で揉めていた眞田先輩と黒田先輩までもが、マヌケな顔してこつちをガン見しているんですけど。

私になぜ蓮魔先生も質問してきて、最後の質問が私の正気を問いてくるんですか?

私は正気ですわよ??? 陽葵ちゃんみたいに人の耳を齧って愛の告白をして来たり、神村みたいにロケットランチャーぶっぱなしまくったり、なお先輩のようにコロ先輩に執着して人のことを殺そうとなんかしていない。

報復が怖いから、死骸を調べさせてくれって言っただけなんです? 蓮魔先生。『は?』じゃないですよ? あまりへ威圧へばっかりしている、私が今度は『は?』って言うぞ?

そのへ威圧へロールが蓮魔先生の専売特許だと思わないでください  
ね?

「……………報告はしたんで……………調べますね」

「……………。上原先生、あ青空の問題児日葵を頼む。私には手に負えん……………あの情報を知った上なら猶更な……………」

「分かった。……待て、青空。死骸の調査か。私も同行する」

「……！ 補教員！」

「……………？」

「あ、……すみません、なんでもないです。伝わってねえなコレ。……えっと、鹿之助くんの従姉さんが同行

してくれるですか？」

「……何かあった時、守ってやるためにもな」

「わあ……！ それは嬉しいです。ありがとうございます！」

「……」

「あ、それと先ほどはありがとうございました。おかげで、最後に鋼人卿へ『ギャフン』と一発言わせられました！」

「……青空、最後に『ぎゃふん』と叫んでいたのはお前じゃなかったか？」

「そ、それは言いつこなしですよ！ あ、今回のこと、鹿之助くんには言わないでくださいね?! 特に鹿之助くんには言わんでくださいよ!?!」

「ああ、分かっている。そんなに必死にならなくても、同じ女としてこのところは分かっているつもりだから安心しろ」

……………

……

…

さて、インテリ眼鏡を取り外して頭を抱え始めてしまった蓮魔先生と、蓮魔先生の機能停止ストツパーのダウンに再び揉め始める真田先輩と黒田先輩の2人は放っておいて……。

上原 燐先生と一緒に黒人と化した鋼人卿の死骸を調査する。首元や手首に指を当てて脈をとるが……完全に脈と息は止まっていた。それどころか、触った部分から皮膚組織がボロボロと炭として零れる。

しかし、息は止まっているが、身体に浮かび上がっている性病のような不気味に輝く、斑点だけは皮膚を蠢いて……。

「青空……？ その斑紋は何だ？」

「なんででしょう……？ 性病……ですかね？ 不特定多数と交わうの



が好きそうなタイプでしたし……。性病なら梅毒とか……。性病  
じゃなければ、たいじょうほうしん帯状疱疹とかるいてんぼうそう類天疱瘡……。？」

「……それらの病気は、光ったり、移動したりするの？」

「基本的に膿めば、黄色がかった体液によってテラテラと輝きます。  
類天疱瘡は水ぶくれが大量にできるので、それが光の反射で煌めくつ  
てこともありますね。移動に関しては、転移はあったとしても、こん  
な目視で移動したり、蠢くって症状は聞いたことはないですが……」  
「……」

「あつ！……もしかして、『移動』を感染的な意味合いで聞かれ  
ていましたか？ その場合、類天疱瘡は大丈夫です。本人の抗体組織  
が原因なのでうつりません。帯状疱疹はうつる人とうつらない人が  
居ます、燐先生が水疱瘡になったことが無いのであれば大丈夫です。  
梅毒は駄目です。うつりません」

「……そうか」

「はい。参考になれば何よりです」

死体の傍らで細かく調査する私に、鹿之助くんの従姉さんは立った  
状態でこちらの方を感心するようなそんな様子で見守っている。

調査の結果。

鋼人卿は完全に死亡していた。

しかし、死んでいるにもかかわらず、皮膚の不気味な輝きを放つ斑  
点だけはまだ蠢いている……。いったい……。なんだ？ これは私の  
つたない〈医学〉知識、〈クトゥルフ神話〉技能でも分かりかねるもの  
だった。

妙に気になるのは、死んでからも浮かび上がったまま左右に蠢くこ  
の意志を持つているかのような気色悪い斑紋は、一体なんだというの  
だろうか？

是非ともこの部分の皮膚サンプルを切り取って更なる調査をした  
いところだが……。触れた瞬間から皮膚が崩れてしまう以上、残念なが  
らサンプルの回収は不可能だ。

それに背後を振り返れば、燐先生が私のことを感心しているような  
……。興味深そうなものを見る目で監視している。ここで死骸をベタ

ベタといじくりまわして、その行為を鹿之助くん<sup>に</sup>報告されるわけには行かないだろう。だからこそ、ここは調査の断念を決めた。

一通り調査を済ませたが、ほかに興味の湧くものとしては首から掛けられたチェーン状の黒い宝石ぐらいなもので……ひとまずこれは慰謝料として私がもらっていく。

チェーンごと引きちぎり黒い宝石を振り回す。これは好きでもねえ男に尻を揉まれた慰謝料だ。

(精密調査して無害な物体だったら鹿之助くん<sup>に</sup>あげよつと♪ えへへ、喜んでくれるかな?)

このネックレスを付けた鹿之助くん<sup>の</sup>ことを想うと、ニヤけてしまう頬の口角を両手の指先で隠しながら、おもむろに冷やしていたタオ<sup>ル</sup>を鋼人卿の顔にかけて頭蓋を踵で踏み抜いておく。

炭化している分、最後の一撃はあつけなかった。まるで巨大ではあるが脆い霜柱<sup>しもぼしち</sup>を踏みつぶしたかのような感覚と音で簡単に潰れた。

こうやって頭を入念に潰して置けば《魔術師の傀儡》としてよみがえることもないだろう。

うん、個人的にも気分が晴れてすっきりした♪

「隣先生。ヤツは黒焦げでしたが、案の定死んだふりをしてました。どこまでもずるい奴ですよ」

「ふむ……」

そしてさつくりと鹿之助くん<sup>の</sup>従姉さんにへ言いくるめ交じりの報告を済ませる。先ほどの死体調査宣言の時と比べ、私には彼女が落ちついて見えた。

そう、これは私の行動について疑問を抱かないようにしなければ。大好きな鹿之助くん<sup>に</sup>余計なことを吹き込まれては困る。特に今の死体<sup>死</sup>へストンプ<sup>死</sup>キック<sup>蹴</sup>行為<sup>キ</sup>については特にだ。これはあくまでも正当防衛。報復を未然に防いだだけ。いいね?

……  
……  
……

「青空、帰るぞ」

「はい」

死体の調査及び死体蹴りが終わった後は、蓮魔先生、黒田先輩、オーガズムに達し過ぎて疲れ、動けなくなつた心寧ちゃんを背負つた眞田先輩のグループと合流する。

「青空、お前さ。気になることがあるんだが1つ聞いてもいいか？」

「生徒指導でまたフルボッコにされる、してもいいか尋ねられること以外なら何でもいいですよ」

「私の事を何だと思つてやがる……？ ……まあいい。お前……恥じらいとかねーの？」

多少の戸惑つたような反応を見せる眞田先輩に、自分の身体を確認する。

左足は確かにぐしやぐしやだが、私は特に心寧ちゃんのように下腹部に淫紋を刻まれた訳でも、心寧ちゃんのように体液を飛び散らせ下アンダーヘアの毛がガビガビになるほど性的興奮に達したわけでもない。

……そりや蜜壺から汁をいっぱい溢こぼしてしまつたかもしれないけど。ちゃんと拭いたし？ 別にガビガビじゃないし。そもそも、『青空 日葵』の肉体には下の毛が存在しないパイパンだからカビカビにはならないし。目立たないし。何も問題はないはずだ。

ゆえにどこが恥じらうべき部分なのか少し頭を捻る。……。

「……。」

「……………」

「??？」

思い当たる部分が特に思いつかないが……。おそらくだが客観的に鑑みて、眞田先輩が言っているのは一糸まとわぬこの姿のことだろうか？ いや、でもこの環境なら別に見られて減るものでもないし……。

前世で探索者だつた頃は、持ち物を奪われて全裸異変解決スタートも数多くあつた。だから全裸徘徊について今更『恥じらい』とか言われても……と思う。

でも、このまま沈黙を貫き通すことは自分にとって不利益を被ることになりそうだった。

「恥じ……？ なーに言っているんですか。真田先輩。この女しかいないメンバーで恥じらいなんかありませんよ！ でも洋館の外に出た先には異性が沢山いたので……雨合羽とか身体を隠せるものが欲しいですけど……。そりゃ流石に、聖剣ヒカキボルグと本と鹿之助くんへのネックレス戦利品のネックレス」

「お、おう」

「やだなーもう。変なことを聞かないでくださいよー。あははははははははは」

「……………」

だから私は、真田先輩には差し当たりのない返事として、鋼人卿が所持していた本を拾い上げながら豪快に笑いかけて気にしてないように振る舞う。

不幸中の幸いにも私の他の荷物は不気味な紋章が描かれた小部屋で見つかった。

しかし服だけは入念に燃やされていた。私の雨合羽……。

ちよつと今回、金品の損失が多すぎやしませんかね？ 湯水のようにお金が溶けていくそんな感覚がある。代わりに宝石とか護符とか収入はあったけど……。まだ換金前だから利益を出した実感が無いし。

また、私の持ち物の中からカードキーが見つからずに一瞬焦った場面もあったが、〈目星〉を付けながら搜索したところ。奴が読んでいた本の中にカードキーがしおりとして挟まれているのを発見する。

これさえあれば無事に洋館から出られるだろう。

「さて、と。無事にカードキーも見つかりましたし……脱出の道は開いてあります！ 外に出ましょう！ 出口、ここ→こ← 全員生還やつたぜ!!! いええええええい！」

「騒ぐな、走るな、先導するな！ この愚か者！」 スパーンツ!!!!

「あいたつー！」

しかし無事に出られることを確信して、最後に駆け出しながら野獣先輩のポーズからの、全裸のドヤ顔「コロンビアのポーズ」でサンシャイン……なんとかの真似もしていたところを蓮魔先生に後頭部を小突かれる。

暴力反対！ 今のは明らかな体罰ですよ！ 体罰！ 教育委員会に言いつけてやるうー!!!

外では全裸の私と心寧ちゃんに対する配慮もあってか、出入り口は四方がブルーシートで囲われており、その目の前には医療用の担架と救急隊員が出待ちしているのを確認する。室井先生じゃないことは意外であったが、そういえば心寧ちゃんと私は生まれたての赤子のような姿だ。

室井先生は男性だし、ここはプライバシーに配慮してという奴なのだろう。

よかった。これなら堂々と全裸のまま外に出る必要も無ければ、新たな噂を生じさせることはないにも等しいに違いない。

動けない心寧ちゃんと私はそのまま担架に乗せられ、蚊帳のようなかまぼこ型の防水性を持った袋の中に詰め込まれて、豪雨の中。森の外。五車学園地下の病院に緊急搬送されるのだった。

13章 『インターバル』

E p i s o d e 7 8 『見舞い客と “課外授業” の断片』

「日葵！ 姉ちゃんから聞いたぜ！ また入院したって聞いたけど、大丈夫なの——ウオオアアアアアアアア!?!」

「え、鹿之助ちゃん！ やっぱ日葵ちゃん!?!の容態そんなに芳しくないの……日葵ちゃん?!」

「あ、青空さんっ！ 病院で、それはまずいと思うんだがっ!?!」

五車学園の地下に位置する病院へ入院してから、まだ1日目。

看護師さんの『廊下は走らないでくださいっ!?!』という怒声の直後、勢いよく個室の扉が開放たれ、この状態での救世主とも呼べる3人がお見舞い臨時救援に来てくれた！

もうなんか様式美にも近い、3回ぐらい聞いたような悲鳴だが、いから早く助けて欲しい！

「ひまりちやあああああ……!!」  
「たすつ!」はんひんほおほひへなひへ! たすけて!! ひまつ、陽葵ちゃんを剥があああつ! はがして! はがしてえつ!?!」

現在、私は日ノ出 陽葵に襲われていた。

折れた上に肉を抉った骨でハリネズミ状になった足には固定用のギプスを付けられ、安静にするため○という大義名分の元に天井からギプスは吊り下げられている。更に自分では勝手に外すことができないうようにしっかりと固定されていた。そのおかげで、私はちよつとやさつとではベッドから抜け出せないような体勢であり……そんな身動きの取れないことをいいことに、私の真上から陽葵ちゃんのしかかっているような状態だ。

なんとか無事な両腕で彼女の両腕を抑えるも、ちよつと鍛えたぐらゐの青空 日葵の腕力では陽葵ちゃんの力を抑え込むことは叶わず、上半身に関してには既に敗北状態にある。健康な右足で迫り来る彼女のお腹を蹴り上げるように押さええてはいるが……。あくまでもこの

防衛姿勢は、陽葵ちゃんから接吻されない程度の距離を保つことが限度だった。

いま彼女の片手は、私が大声を出せないようにかつ、頑なに閉じる口を無理矢理こじ開けようと頬を抑えているものだから、大声も出せず……。

もう7時の朝食配膳直後から5時間もこの調子なのだ。そろそろ……！　そろそろ……ッ！　色々、限界が……!!!

「お、おとおおい！　お、おとおお前は他のクラスの日ノ出だよななな！　ひ、ひひひ日葵になな何してんだよお?!」

「……」

「陽葵ちゃん！　ダメだよ！　何がどうしてそんな状況になっているのか、蛇子にもわかんないけど、怪我人にそんなことしちやダメだよ!!!」

病室内でのベッド上キヤットファイトの静止で、真っ先に動いたのは蛇子ちゃんだった。

蛇子ちゃんはアスリートのようなフットワークで私のベッドの傍に近づき、陽葵ちゃんを羽交い絞めにして私から引き剥がそうとする。

「やあああああ!!!　ひまりはひまりちゃんといっしょなのおとおおお！」

しかし、頭のネジが一本抜けてしまっている陽葵ちゃんの方が力強いようだ。歯を食いしばり、顔を真っ赤にして引き離すことに全力を出し切っている蛇子ちゃんでも陽葵ちゃんは剥がれない。

残りの2人はというと……。

うぶな鹿之助くんは蛇子ちゃんの肌白い肌と陽葵ちゃんの肌褐色の肌が入り混じる光景に、顔を赤らめ両手で顔を覆って指の隙間からこちらを見ている。

ああ！　生きて帰れてよかった！　かわいいね！

……ふうま君はというと、何かを考えているような素振りを……

「お前は動けエエッ！　鹿之助くんは背が小さいから分かるけど！　ふうまア！お前は身長もたっば筋力も十分にあるだろうがア！　見せものじゃねーんだぞオオオオオオオオ?!　ゴルアアアアアア!!!」

「そうだ！ ナースコール！ ナースコールは何処だ!? ナースコールを探せ！ 看護師さんと呼んで人手を集めるんだ！ 鹿之助、ナースコールを探せッ!!」

ああッ！ なるほどッ！ ナースコールねッ!!! うん！

さすがふうまくん!!! 最高に良い判断だなあッ！ この肉弾戦が繰り広げられている中で他の増援を呼ぶのはとてもいい判断だと思うよ！ わたしも最初から3人にナースコールを押しつつていえば良かったなあ!!! チクショー!!!

「ナースコールなら……むぐつ……!? ベッ! ベッドの下です!

フヘットほひはあ!!! ベッドの下あ!!! 陽葵ちゃんに……んぐつ……おほほ……  
おほさへれまひま! 落とされました!」

そう！ その名案が実行できるのは『押せば』の話なんだけどな!!!

「べべべべべべべべの下だな?! 下だな?! あ、あつた! あつたけど、俺やふうまの腕じゃ届かないところにあるぞ! うわ! ベッド柵に絡まって上からも取れない! 蛇子オ!」

私の言葉に、3人の中で最も体の小さな鹿之助くんがすぐにベッドの下を覗いてくれる。

でも、ナースコールの配線の位置的にそんなことだろうと思った!!!  
「駄目! 手が離せない!!! ふうまちゃん! 陽葵ちゃんを! 蛇子と一緒に抑えて! 陽葵ちゃ……っ! 力強つ……!」

「鹿之助! だったら、ナースコールを引っこ抜け! 引っこ抜け! 異常を感知して看護師さんがやって来る! 看護師さん!!!」

「お、おとおおう!」

ふうま君の指示に鹿之助くんが動く。引っこ抜かれたナースコールは点滅し、異常をナースステーションへと送信してくれる。同タイミングで蛇子ちゃんの応援要請にふうま君も加わり、そこでやっと陽葵ちゃんが私から引き剥がされた。

安心して、持ち上げていた頭を枕へと沈みこませる。

ああああああ……青空 日葵の肉体でファースト接吻。ファースト接吻を奪われるかと思つた。ファースト接吻を奪われるかと



思った……。

対魔忍世界……つべーわ。やつべーわ。

昨日は鋼人卿に秘部や肛門を舐められそうになって、今日は同性の同級生にファーストキスを奪われそうになったわ。

クトウルフ神話TRPG世界でも、こんな一部の層が喜びそうならやまけしからんな事態になることなんかなかったぞ！ 素直に喜んでいい案件なのか、これもうわかんねえな?!

「ひまりちゃあああああ!!」

ふうま君と蛇子ちゃんに引き剥がされた陽葵ちゃんは叫んでいる。ナースコールの異常によって看護師が到着する。

看護師が異常事態を把握し、応援を呼ぶ。

館内放送でコード・ホワイト（いつもの）が発令される。

応援が到着。

看護師さん方がベッド上の私を見て、また青空おま日葵えかという顔を  
する。失礼な。

しかし、友人2人に取り押さえられた暴れん坊将軍こと、日ノ出陽葵の存在を確認。

大人数で抑えられる陽葵ちゃん。

その光景を例えるならば、大乱闘スマッシュスターズ。

しかし、7人の看護師には勝てない陽葵暴れん坊将軍ちゃん。

リスペリドン精神安定剤が強制投与されて、暴れん坊将軍が大人しくなるまで別室に連行されて行く。

この一連の騒動……。

……これは憶測にしか過ぎないが……陽葵ちゃんの狂気状態は深層である不定の段階まで行ってしまったのだろう。

だからこそ、ああなつてしまった。彼女が私にしていることについて罪はない。もしあるとすれば『鋼人洋館』への探検の好奇心を実行に移してしまったことぐらいだ。

……

……

……

やっと病室に静かな時間が訪れる。

陽葵ちゃんを抑えることに尽力し、息を上げたふうま君と蛇子ちゃん。そして安堵した様子で病室内のパイプ椅子に座る鹿之助くん、ベッドに横たわったままの私が部屋に取り残される。

「……お疲れ様でした。見舞いに来てもらって早々にドタバタとしていてすみません」

ベッドのギャツジアップ機能を利用してベッドの頭の角度を持ち上げて3人を労う。3人とも気力を削られたかのような顔をしているが、私の見立てでは怪我をしてしまった様子はなかった。

一番、陽葵ちゃんに対して善戦していた蛇子ちゃんの衣服が少し乱れているぐらいか。

「なあ……日葵。……日ノ出さん、どうしちまつたんだ？ あんなに目をギラギラさせて、日葵に飛び掛かってよ……」

「ああ。大したことに見えるかもしれませんが、大したことじゃないですよ。彼女はベッドから起き上がれない私のために、朝食を食べさせてくれようとしたんです。ちよつと乱暴なやり方でしたが……」

「ええ……？」

「えっ??？」

鹿之助くんは、あの光景が朝食を食べさせようとしている光景には見えなかつたらしく首を傾げる。ふうま君も蛇子ちゃんも私の言葉に目をぱちくりとさせて顔を見合わせていた。

きつと彼等には、あの状態からどのようにして彼女が私に朝食を与えようとしていたのか想像が付かないのであろう。でも……それはもののけ姫を見るか、巫女の口噛み酒を知るようになった暁にはきつと理解できるようになっているはずだ。

「まあまあまあ。彼女のごとは他の医療従事者に任せて、今日はお見舞いに来てくださってありがとうございます。私も課外授業から戻って来ても元気そうな皆さんを見られて、ひと安心ですよ。調子は調子ですか？ 順調ですか？」

「えー……あー……まずまずだぞー！」

「そうですね、まずまずですか。でも私は皆さんが事故に巻き込まれ

ることなく無事に帰って来てくれるだけで、大満足です。私も全力で生存戦略を練った甲斐があるというものですよ」

私の流れるような様式美の質問に対し、真つ先に反応を返したのは鹿之助くんだった。

彼は「課外授業」とやらで成長しているのか、ついこの間までは俯いて私からは露骨に視線を逸らしていたが、今では顔は私に向けたまま視線を右横へと逸らしていた。しかし、今回このような質問を投げかけたのは「課外授業」について探りを入れたいではなく……。私が3人。特に鹿之助くんに対して生きて会うことができたことを喜びの流れとして伝えたいことにあつた表現方法だった。

だからこそ私はいつものように探りを入れるときに見せているであろう真顔ではなく、ほがらかな笑顔でニッコリと笑つて必要以上に詮索する気はなさそうな様子を見せる。

「青空さんは……その、どうなんだ？ 足の調子とか」

「ひとまず、ふうま君が以前教えてくれた魔界医療の先生である桐生先生に、足を治療してもらっているそうなので早く7月には学校に戻れるそうですよ。あと2〜3週間もこの病院ぐらしをしなきゃいけないのは気が重いですけどね」

そつぽを向いた鹿之助くんとは異なり、ふうま君は私の容態を窺うようにベッドの足元側の柵に寄りかかつてこちらの顔色を覗き込むような顔で足の状態について尋ねてきた。

まあ、彼にとつてしてみれば流石に青空 日葵の骨折はやはり友人として心配になるような怪我なのだろう。だからこちらもなんとなく様子で肩をすくめ、また4人で並んで登校できないことを残念がるような素振りをしながら、苦笑するような形で治療期間を伝えた。

「日葵ちゃん……さつき全力で生存戦略って言っていたけど、日葵ちゃんも蛇子やふうまちゃん。鹿之助ちゃんがない間に何か特別な授業を受けていたの？」

「あー……授業？ いいえ、休日に同じ五車学園の友人たちとキャンプに出掛けて、そこで私だけが崖から滑落したり……熊のように獰猛

で鋭利な爪を持つ怪物に襲われたりして負傷した感じですよ」

「ひ、日葵ちゃんも日葵ちゃんです。蛇子たちとは、また一味違った『課外授業』を受けているみたいだね……」

私の言葉に蛇子ちゃんは引きつった笑顔。それも私がみせたような軽めの苦笑というよりも、目こそにつこりと微笑んでいるが口元だけはぎこちなくピクピクと持ち上がるような笑みを浮かべている。

そして、今。私は蛇子ちゃんが口を滑らせたのを聞き逃さなかった。なるほど、なるほど。

課外授業とは、命の危険を伴うようなことを……え？

待つてほしい。私がこれまでに集めた情報で課外授業では、学生の成果に応じて金一封が出るとは聞いていたけど、そんな危険な内容を学生にやらせているのか？ だってそうだろう？ これが蛇子ちゃん達が私に秘密で行っている課外授業が安全なものであれば、そのようなニューアンスは普通は出てこないものだ。

蛇子ちゃんは私の怪我の経緯を聞いたことや、陽葵ちゃんの錯乱した様子によって揺さぶりをかけられたのか？ だったら聞けるこのタイミングを見計らって情報を抜くべきだろう。

表情は崩さずにこれまで通り無警戒を装って、だ。

「そうです。そうなんです。学校で格闘技やバーチャルシステムを用いたややハードなアスレチックで身体を鍛えています。それを応用したかのような状況で今回ばかりは気が滅入ってしまいました」

「うんうん。蛇子も日葵ちゃんの気持ちわかるな。でも学校で訓練しているからこそ、実戦で役立つこともあるよね」

「あー！それです！それ！人間はやった事のある行動しかでき得ない、避難訓練はその非常時に備えて実施しているのと同じような感覚ですよね！ほんっと、実際に起きてしまうと辛いですよね」

「うん、今回もふうまちゃんの機転と鹿之助ちゃんの索敵、蛇子の体術でなんとか耐え凌げたけど多勢に無勢なクモ型ドローンや戦車のような強化外骨格には歯が立たなかったし……。紫先生が助けに来てくれなかったらと思うと――」

「蛇子ー」

「わあー。それは本当の災変でしたね。でも凌げたのは蛇子ちゃんにしか成し得ない技ですね  
!?」

「ありがとうございます。日葵ちゃん。それで、なに? ふうまちゃん。大きな声

なんか出してどうしたの?」

そうですね。ふうま君! どうしたんですか?

「…………いや!?!」

私の女性的な同調行動に蛇子ちゃんは、目を瞑りうんうんと頷きながら3人が出向いていたであろう「課外授業」の内容を断片的に漏らしてくれた。喋りすぎた途端にふうま君が彼女の言葉を遮るがもう遅い。私は同調しつつ、はつきりと話を聞かせてもらった。

しかし、今の会話の中で確実に『クモ型ドローン』や『戦車のような強化外骨格』って単語が聞こえた気がするけど? そこから紫先生が助けに来てくれた状況って何? クモ型ドローンについては後でこつちで徹底的に洗いざらい調べ上げるとして、戦車のような強化外骨格ってそれって軍用の強化外骨格ってこと? ……私の中の強化外骨格ってというと、パワースーツ的な何かとしてのイメージだったけど、『戦車のような』って二つ名を聞いた後では、Failout 4に登場するT-51パワーアーマー(ミニガン持ち)が脳裏にちらついたぞ。それを何とかしちゃう紫先生も紫先生ですし、私の中での課外授業の定義がガタガタに崩壊し始めているぞ。

命を懸けるような課外授業ならば金一封の話にも何処か落としどころがある。更に言ってしまうえば、仮にこの五車学園自体がますますきな臭くなってきた。

まさかとは思うけど……………ここが、対魔忍の育成学校だったりしないよね?

もう、それは、これまでの消火薬液をぶちまけた事とか、生徒指導とか、洋館の件とか、その他もろもろ……………やらかし案件が多すぎて切腹するレベルの事態なんだけど。

前世の肉体で遭遇した対魔忍『秋山 凜子』の発言を借りるなら、失態魔忍なんだけど……………。

それとも、やはり……………この世界の標準的な事情・実情だったりするのかな? 『青空 日葵』が所持していた歴史の教科書からの情報で

はあるが、この世界での過去の出来事は私が生きていたころの世界情勢と似ている部分が多い。世間は超々少子高齢化が加速していたところまでびつたりと同じだ。

そこに魔族が介入してきて、人魔外道が蔓延するような日本になってしまい……日本の治安を保つために、防衛大学のような自衛隊員育成学校のようなものを作ってもおかしくはない……。

魔族の件くだりからは私の推測にしか過ぎないが、『未来の出来事について』こればかりは何も言えない。何せ私の知り得る2022/04/01の日本では、成人年齢が20歳から18歳に引き下げられてしまったのだ。この時代では成人年齢が、旧女性結婚可能年齢が16歳だった頃のように成人年齢が16歳まで引き下げられていてもおかしくはない。

世界情勢でいえば、とある戦争をきっかけに誰が中立国であるスイスが中華連合付近国家の資産を凍結するなんて予想していた？ 常に日和見主義の日本国が経済制裁に加わると思った？

神話生物が実在することもそうだ。

常に現実、小説の中でしかありえないような出来事を乗り越えて実現するのだから。

……それと、冷静に考えてみれば現在の時代は2070s。これは私が生きていた時代よりも半世紀以上未来の世界。昭和、平成、令和……ときて次々世代の時代だ。半世紀も違えば、そりゃジェネレーションギャップも生まれるというもの。それならば探索者としての調査の最中、前世ではちよつとした清涼剤として場を和ませる効果を持っていた私の持ちネタが彼等には通じないことは当然だろう。

蓮魔先生の曾、祖父母世代ぐらいで、やっと『商標登録：ゆっくり茶番劇事件』について知っているのが関の山に違いない。

「……なあ。一つ気になったことがあるんだが」

表面的には何でも無いように振る舞う私と、『課外授業』でのつらい体験を漏らす蛇子ちゃんの話に割って入るように鹿之助くんが会話を中断させる。

「日葵はさ、紫先生の体育の授業ではアスレチックの踏破の授業は受

けたことはないよな？ その時の授業中は基本的に中等部で行われるような筋力とか持久力とかの体力作りばかりだし」

……おっと。蛇子ちゃんは流れで「課外授業」の内容を断片的に話してしまっただが、ふうま君の他にも彼も違和感に気づいたようだし。ちよっぴりムツとしたような顔で私の虚言をつついてくる。

ふうま君のような単純な制止よりも、具体的な鹿之助くんの言葉に蛇子ちゃんも『まさか……』と言った驚いた顔でこちらを見てくるものだから、私はすつとぼけた顔で知らんぷりを決め込み……。

「私は蛇子ちゃんが「課外授業」で大変そうだなあと思って聴いていただけですよ。え？ 何か今、重要なこと話してました？」

と軽い口調で、何も気づいていないかのような顔をする。

それからキョロキョロと首を振って、サラツとうそぶいておくのだった。

Episode 79 『増加する見舞い客』

ずっとぼけた表情でシラを切り続ける私に、微妙な空気が病室内を流れ始めた時。

再び病室の扉が開かれる。

現状のシーンがアニメであれば、ぼのぼのにて主人公ぼのぼが見せる焦りのエフェクトが私に表示されていることだろう。

その状態でゴリ押しは何食わぬ顔を見せる私に、怪しいと目を細め怪訝な顔した鹿之助くん。こちらを厳しい目で見つめながら考える人のような仕草をするふうまくん。私を見ながら唾然としている蛇子ちゃんではあったが、開かれた扉に釣られるようにして全員が出入り口を注目する。

そこには彼等<sup>3人</sup>にとってどうかは分からないが、私にとってみればみんな見知った顔の4人であった。

彼、彼女達は私の狭い病室内がすし詰めになることを厭わずに入ってくる。

でもおかげさまで、一瞬のうちに病室内は賑やかになった。

「日葵ちやつー！」

(心寧ちゃん！ ステイツ ステイツ！ まだだッ まだだッ！)

「おっと、先客がいるとは」

「こんにちは」

「え、えーつと……お邪魔します？」

病室内に入ってきたのは、集団の先頭で私のハンドサインに反応する心寧ちゃん。

なお先輩と、コロ先輩。

そして最後尾には……私が洋館に再突入したときに、洋館の外で不審な動きをしていた下部が赤渕メガネでブロンドヘアの女子生徒だった。

(えっ、でも……っ)

(そんな)とよりふうま君だぞー！ ふうま君!!! 私よりふうま君!!! 今だ行けっ！ ゴー！ ゴー！ 日葵!!!

「あつ……ああつ！ ふうまくん……！ ふうまくんっ!!! お久



しぶりですっ……！ ああ、足を折って動けないでいる日葵ちゃんの病室で会えるなんて……あの日を彷彿させますね……っ！」

「君は……まさか、速水さん？」

「はい、そうですっ……速水、心寧ですっ！ あなたが応援してくれたから、失った両足をサイボーグレッグにする手術を受け入れて……それにこの前の危機だって、あなたという存在心の支えが居てくれたからこそ私は……っ。わたしはっ……！」

「?!?!?!」  
「ざあ、この乱入で、さっそく微妙な空気が混沌と化してきた。」

まず最初に動いたのは心寧ちゃん。彼女は私のお見舞いで来てくれたのだろうが、私としては彼女にアイコンタクトで私のお見舞いよりも想い人に挨拶するように仕向けさせてもらった。

一瞬の目の動きから〈心理学〉上では彼女は、義を通すか、私情を持ち込むか考えた素振りを1・2秒みせたが、私の何度も繰り返しされるふうま君に想いを伝えるに行くことのGOサインに従ったようだ。

『ふうまファンクラブ』の会員だけはある。蛇子ちゃんという幼馴染がいる前で、ふうま君に対して両眼を涙で潤ませて飛びつく勢いのまま足元で崩れ落ちる。

当然、何も考えてなさそうな昼行燈ことふうま君は、彼女に掛け寄っては崩れ落ちた彼女の手を取って引き起こす。

それを蛇子ちゃんは信じられないものを見るように、獲物を横取りされた昼ドラマの女優のような顔で心寧ちゃんを凝視している。もうそれは、完全に私が「課外授業」について情報を諜報していたことを忘れていたようなそんな顔だ。

私がGOサインを出したとはいえ正妻幼馴染の目前でふうま君を独占するあたり……。あの子のメンタルはステイールハートが強すぎる。でもよくやった。おかげ様で、「課外授業」の情報流失事件はそのまま触れられることなく流れるぞ。いいぞーこれ。

私……一周まわって、心寧ちゃんのこと好きだわあ。

いくら私によるアイコンタクトとハンドサインでの誘導があったとはいえ、見舞いを終えてからふうま君……ではインパクトが弱いこ

とを見通しているところとか。目の前に想い人が居たとしても、まずはちゃんと私に対する義を通すか私情を持ち込むか悩むところとか。私の骨折の件もうまく使って運命的な出会いを演出するロマンチストなどところとか。足元から崩れ落ちることのでふうま君が引き上げるように仕向ける相手を引き込む作戦とか。正妻幼馴染を近寄らせない小技とか……全部ひつくるめて強したたかで好き。

まあ、それはそれとして、あの場所の空気だけがクツソ修羅場になりつつあって笑いそうになる。だいたい私のせいなんだけど。

すべては「課外授業」の情報から逃れる為なんだ！ 蛇子ちゃん、許してクレメンス……！」

「クフ……くふふふふふ……」

——トントントツ

こちらの思惑に通りに事が運んだことに対しても、笑いが漏れ出てしまっている私はとっさに布団を被った。そのままシートおぼけのような状態で肩を震わせる。

そんな折に、外側から布団が何者かに叩かれる。口角は上がってしまっているものの、なんとか笑い声だけを抑えながら布団を被るのをやめると、視界には私から見て右頭側に スツル なおコロ先輩コンビが丸椅子スツルに座り、こちらを見つめていた。

「？」

「やあ。妖精ちゃん。僕は君の険しい表情しか見たことが無かったから、その顔は新鮮だよ」

「……。……？？」

「ああ！ これはこれは、コロ先輩に、なお先輩じゃ……ない……です……か？ ……ええ？」

「なんだい？ その反応は」

元気そうな2人の姿を見てホッと一息を付いたのも束の間。私は首をかしげることになった。

目前の視界にはなお先輩とコロ先輩がいる。

コロ先輩が女子生徒の服を纏っているのは、まあ普通の光景だ。

で、視線を横にズラしてなお先輩を見ると……うん。私の目に狂い

はない。

今、彼は五車学園の女子生徒の服を着用している。上半身には白のワイシャツに赤いネクタイ。それと猫の肉球スタンプワツペンが右胸についている。下半身には私が普段学校生活で着用している短い丈の紺色スカートと120デニールの黒タイツ、両手には黒のハーフグローブを着用していた。

初対面で出会った場合、絶対に女性と見間違えてしまうような恰好をしている。

「ああー……？　なお先輩……で、間違いないですよ？」

「妖精ちゃん。昨日の今日で、僕の顔を忘れちゃったとでも言いたいのかい？」

「あの……いえ。ほら……」

直接的には口に出さず、ボディランゲージで自分の衣服を撫でるような仕草をしてなお先輩の顔と服を交互に見る。

「服の事かい？　これは可愛いから、僕が気に入って着用しているだけさ。先生達からも許可は貰っているし、別にLGBTに配慮してとかではないよ」

「あー……。五車学園って性別に凝った制服を着用しなくていいんですね。そういうところは、ニュータウン……なんです……ね？」

「そうとも言えるかもね。……それにしても今日は随分と楽しそうな顔をしているね！　何かいいことでもあったのかな？」

「あ、はい！　やっとまた日常が帰ってきたな……」と思つて少し嬉しくなつてしまいました……。お二人とも（私にへ投擲されたたり、悪質タックルをした割には）何処も大した怪我がなく、元気そうで何よりです」

「……！　……。……。」

「君は重傷のようだけどね……。……あの時は我を失っていたとはいえ本当にすまなかつた」

「いえ、良いんですよ。なお先輩の親友を思う気持ちを考えれば当然の行為だったと思います。私もコロ先輩に大変申し訳ないことを致しました。私もあの時の行為をお詫び申し上げます」

「? ……? ……? ???」

コロ先輩は相変わらず、耳を澄ませば何かを喋っているのがわかるが……。足元側での心寧ちゃんと蛇子ちゃんとふうま君の修羅場による茶番劇で殆どが掻き消されてしまい、何を言っているのか分からない。

それでも怪我の心配をしてくれたり、私が彼女を〈投擲〉したときに出来た擦り傷についても彼女自身はなんともないと言いたげに小声だが話していることがなんとなくわかった。

なお先輩はというと、狂気状態に陥っていたとはいえ自分のやってしまった行為や光景は覚えているのだろう。軽い挨拶と私の疑問を解消したあとで、間髪を入れることもなく謝罪の言葉を述べてくる。でも陽葵ちゃんにも似たようなことを思ったが、狂気状態ならば仕方がないと思う。彼女たちは、あくまでも中立的立場にいる一般人なのだ。

私の説明書の定義における『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』153頁「信頼と公平さ」のように仲違いで目的の核心を見失うことは避けるべきと言った内容は適応させられない存在なのは理解している。

「えっと、日葵い……この人たちは?」

「ああ、鹿之助くん。彼女達は、私が足の骨を折る切っ掛けになった冒険の苦楽を共にして以来の私の友達ですよ。こちらは3年生の穂稀

なお先輩。そしてお隣の方が死々村 狐路先輩です」

「妖精ちゃん……君に対して、あんな仕打ちをした僕を友達と言ってくれるのかい?」

「違うなら違うと否定してくださいさっても、大丈夫ですよ。寂しい気持ちにはなりますが……私もなお先輩のレーザー砲を破壊して、コロ先輩に酷いことをしましたし……」

「……?」

「……君は本当に優しいな……ふふつ。えっと……鹿之助くんだったかな? 妖精ちゃんの紹介にあった通り、友達の穂稀 なおだ。よろしく」

「ともだち。しむら。ころ。おなじく、よろしく。」

「よ、よろしくお願いますっ!」

見舞いに来てくれたなお先輩たちの相手をしていると、今度はなお先輩たちの対面側に座っている鹿之助くんが私の左頭側へと寄ってきた。彼にとっては見たこともない五車学園の生徒に戸惑いながらも事情を伺ってきたため、紹介をする。

そんな紹介に2人も快く応じて、鹿之助くんに対して握手をした。今、私の目の前を通して鹿之助くんのか細い右腕となお先輩のほっそりとした右腕が握り合われる。男の娘と美少年の熱い握手が目の前で交わされている!

右をみれば美少年が、左を見ても男の娘がッ! ……やばい、荒ぶる。

かわいいとキュートがイリユージュョンして、パンデモニウムが形成される。

織田 鋼人は『百合の間に挟まりたい』とほざいていたものだが……。私は私の意に関係なく男と男、薔薇に挟まれている……! 最高かよ! 生きて帰った報酬が鹿之助くんと会えるだけじゃなくて、薔薇に挟まれる貴重な経験をできた件について!

まあ、純粹に私の目前で握手をしている鹿之助くんの手のひらのニオイを嗅げて、ハイテンションになっていることもあるんですけど。

「ひ、日葵? 顔が真っ赤だぞ……?」

「鹿之ニユウム」

「え?」

もう今の光景だけでご飯3杯いけそう。

おお! ナムアマミダ・ブツダ! 私は今、この瞬間死んでも構わない!

お手でのシワとシワを合わせて、幸せ。ナームー。お仏壇の羽瀬川。

「さて、鹿之助くん。あと、私の正面に居るはずのふうま君に泣きながら抱き着いているのが、速水 心寧ちゃん。私を組み伏せようとしていた陽葵ちゃんの親友です」

「アイツが日ノ出の——……。……な、なあ……。……なんかあの場所、空気が歪んでいないか……。？」

鹿之助くんの若干、引いたかのような顔している。さらに空気が読めない彼でも、空気が読めたようなことを話していたため、手を合わせて拝むのを止めそちら側に顔を向けた。

……。ベッドの足元側での修羅場は更に混迷を極めていた。

この瞬間、心寧ちゃんは念願のふうま君と遭遇することができ、我を忘れて縋り寄っていると云った状態なのだが……。初動で出し抜かれた蛇子ちゃんが張り付いた笑顔のまま、ふうま君の左腕に自身の腕を絡ませて正面から彼の胸に抱き着いている心寧ちゃんに笑顔の〈威圧〉を放っている。

〈威圧〉の方法もやや露骨で、彼女は同級生の事はおおよそ『○○ちゃん』とちゃん付けで呼ぶのだが、心寧ちゃんにだけは『速水さん』と苗字で呼び、やんわりとふうま君から離れるような言葉かけをしている……。。

しかし、そこで引く心寧ちゃんでもない。というか蛇子ちゃんの声なんか一切聞こえていない。何だったら、田舎特有の蛙の鳴き声ぐらいの環境音的に対する反応ぐらいの反応を見せていた。

そして、この心寧ちゃん非常にしたたかな女である。幼馴染の蛇子ちゃんに敵意を向けてはいるが、あくまでもその様子は微塵にも見せてはいない。ふうま君の手前では男心をくすぐる乙女モード・乙女モードで、ふうま君の正面の視界は彼女が独占しているのだ。つよい。この女は本当につよい。恋愛クソ強女だ。大好き。

やっぱり恋愛はこれぐらいガツガツ行かないとな！好きな異性がいる場合、待っているだけじゃダメなのよ。私も鹿之助くんとは、もうちよつと親睦を深めたら、心寧ちゃん攻勢に出ても出ても良い頃合いかと思っっている。

……。まあ、そのためには “鹿之助くんの憧れの座” を会得する必要があるのだが。

早く退院したいなー♪ クラスの合同格闘訓練に出たいなー♪

神村舞華と♪  
手合わせしたいな♪

「……………。鹿之助くんも、あの状況・空気の淀みが認識できますか。そうですね。今は関わらない方が吉な空気ではあります。…………さて、私の友達紹介に戻りますね。そして…………えーっと、あちらの人は私も知らないです。はじめましての人です」

心の奥底でメラメラ、パチパチと炎が沸き上がって来ていたものの、一旦気持ちを落ち着ける。

それから視線が蛇子ちゃんと心寧ちゃん、ふうま君の3人組に釘付けになっている鹿之助くんへ、私はベッド上から身を乗り出し彼のモチモチの両頬に対して両手で挟むように掴み、首のすじを痛めてしまわないようにゆっくりと下部が赤淵メガネのブロンドヘアの女の子へと視点を移動させた。

彼女はこの部屋で何をするわけでもなく、部屋の隅で3人組の混沌とした空気にタジタジになっている。時々、ベッドの周辺で固まっている私達を見ては、助け舟を出してほしそうな顔をしていた。口の形を凹の字をひっくり返したかのような口にして、涙目でこちらを見つめている。

私の病室に何をしに来たのか分からないが、このまま放置していても一人ぼっちの居心地の悪い経験しかないだろうとこのことで手招きをして彼女を呼んだ。呼ばれた彼女は頷くと今にも泣きそうな顔で駆け寄って、恋愛戦場を潜り抜け、人口密度の控えめな鹿之助くんの横へとやってきた。

彼女の特徴と言えば何度も取りあげた通り、下部が赤淵メガネを掛けた女性であった。

制服のネクタイの色が青いことから五車学園1年生。私達と同級生であることがわかる。首にはセーラー服に用いられるスカーフを小型化させたかのような赤色のチョーカーを巻いていた。光彩は水色で、くりくりとしたぱっちりとしつつも垂れた目は大人しそうな雰囲気漂わせている。アメリカ(米連)やヨーロッパからの留学生説

が持ち上がりそうなほどに、髪色は輝かしいゴールドブロンド色に染まっております、ミディアムショートな髪量は彼女が見かけによらず活発な動きをすることを示しているようにも見えた。

そして……これは、私……。青空 日葵としてのコンプレックスだが……。

彼女も胸部が大きい。比較対象として挙げるならば、神村ぐらいだろうか。……あのね、ネクタイがね。ネクタイが……パイズリみたいになってるんですよ……。しかもスカートの丈もクソ短いです……。青空 日葵もお尻が大きいことと、この第二成長期で買い替えるのがもったいなくて2周り程大きなスカートを購入しているわけだけど、彼女はそれを上回っているんですよ。

何あれ？ こっちに走ってくるたびに胸はばるんばるん。何も無い病室の床で、すつてんコロリ。メガネがポロリ。スカートからは淡いピンク色のショーツがチラリ♥して?????  
それを鹿之助くんに見せ?????  
「はあ……う」

無意識に私の左の瞼の下が痙攣する。

更にそんな状態で落としたメガネを『眼鏡、メガネ』と探すそのノリは昭和のギャグ。それに、その足首のくしゅくしゅのルーズソックスは何さ？ そのファッショセンスは、平成初期のギャルのソレなんですが???

いくら流行は20年ごとに繰り返される傾向があるとはいえ、もうその私からしてみれば時代錯誤のメガネにドジっ子属性にしろ、ファッショセンスにしろ、どこから突っ込んでいいのかわからない。

「……」

「……ひ、ひまりっ」

「……」

……ふふふ。蛇子ちゃんの気持ちが見える。今こそ分かるわ。手に取るように分かるわよ。

これが問い詰めから逃れるために私が行った行為のインガオホー



という奴なのかしら？

でも私は大人だし、前世の年齢を加えたら私の方が先輩だし？ 私  
は鹿之助くんが、大大大、大好きだが、鹿之助くんが私の事をどう  
思っているかは分からない。だからこそ、死屠殺姉なんかしないわ。え  
え。しないですとも。大人だもの。

私だってデカくなる。水城 ゆきかぜよりも平たい胸部まな板からいず  
れは脱却する。流石に女性ホルモンの働きがあるし、筋肉のない男並  
みに平たい胸板が完成するという事はないだろう。……無いと思  
いたい。

そんな誰かの性癖の詰め合わせ特盛セットなドジっ子属性系の平  
成初期ギャルが、今。鹿之助くんの隣に座った。

この妖怪爆乳乳袋共！ 今に見てるよオツ!!!

「……。お嬢さん。先ほど転んでいらっしやられましたか……お怪我  
はありませんか？」

「心配おかけしてすみません……急いでそちらに行こうとしたら、脚  
をとられちゃって……あ、あ、あの。わ、私は篠原しのはら まりつて言いま  
す。速水さんと日ノ出さんとは同じクラスで……委員長を……………」

実にクールな口調で、鹿之助くんの隣に座った妖怪爆乳乳袋篠原まりの安否  
を確認する。

彼女の話し方は常に上目遣いで、ちよつとおどおどとした頼りのな  
い乙女のようなイメージだった。あ？ガン飛ばしとんのか？ コラ？

名探偵で覚えたパラパラ踊ってやろうか？ あ？

声色は心寧ちゃんよりは低く、陽葵ちゃんや私よりは甲高い乙女の  
声だが、男はこういうものにキュンっ♥としてしまうものだ。同じ女  
としては、あまりにも男の前であざとすぎるとイラツとするのだが。

あざあざあざあざ、あざとい♥ アザトース♥ 鹿之助くんに色目  
を使い過ぎると、カルティスト認定して家族もろとも宇宙の彼方まで  
ぶっ殺飛ばししちゃうぞ★

しかし……心寧ちゃんと陽葵ちゃんのクラスの委員長さん……か。  
私那不慮の事故で生徒指導になったあの時は教室に居なかったよう

な…………？

(ま、いつか…………今はそれよりも…………)

「…………」

「ここで、ふと鹿之助くんを見る。

そんなアマが隣に来てしまった彼は顔を赤らめて、視線を真下へ向けている。

……この様子から、ほぼ確実に女性経験はないと見た。そしてまた純潔童貞でもあるのだろう。

初心満載で純粋な部分も、ほんつとにかわいいなあ。

私の中で鹿之助くんポイントS Pが累積され、粘つく深淵が浄化されて行く。

「その、こうやってちゃんと会うのは初めまして、ですよね…………？」

「ええ。そうですね。あの洋館での出来事を除けば、初めまして、です。ドーモ、篠原まり〓サン。『青空 日葵』〓デス」

とりあえず挨拶はされたら、返すのが礼儀というもの。

それに——どうせこちらのネタはジェネレーションギャップで伝わらないのだ。ちよつと特殊なアイサツで返したとしても彼女には伝わらないだろう。ゆえに顎を引いて、彼女と同じように軽い上目遣いでのガンを飛ばしながらも、ニンジャスレイヤーのような作法で挨拶を交わした。

私の獲物鹿之助くんに手を出してみる。

ニンジャ殺すべし。ハイクを詠め。カイシヤクしてやる。慈悲は無い。

Episode 80 『深まる絆』

「それで篠原さんは、今日はどういったご用件で……?」

「は、はい。実は青空さんにお聞きしたいことがあります……」

「えっ。あつ。私に聞きたいこと?」

「は、はい!」

粘つく深淵は鹿之助くんのおかげで浄化されていたが、それはそれとして黒炎が湧き出ている私に彼女は忍び無さそうな顔で　聞きたいこと”　と申し出てきた。

これには脳裏へチャリと、これまで鹿之助くん達が　訳あり課外授業”　に出かけていた時に引き起こした数々の蛮行うわさが蘇る。そのせいで、くすぶっていた黒炎も同時に冷や水を頭から被されたかのよう鎮火されていく。

う、うーん。その話なら、今は。この鹿之助くんがいる状態では避けたいかな?

そういえば、陽葵ちゃんにも、心寧ちゃんにも弁明していないがアレは……その偶然起きてしまった事故だと話していない。つまり、ここで彼女が私に対して『青空さん、(頭突き)で窓ガラスを叩き割った挙句、生徒指導で乱闘騒ぎを起こしましたよね?』みたいなことを聞かれるのは非常に困る。

「ファッ!?　ウ、ウーン……噂に関連する事以外なら何でもイイデスヨ?」

「青空さんの噂……?　ああ!　私のクラスの窓ガラスを――」

「ンョ、ハー、!!!」

「ひゃもっ!」

左足に激痛は走るが彼女が余計な事を言い出す前に、飛び掛かるようにしてへ組みつき、口を塞ぐ。

一瞬の出来事に、篠原さんの隣で俯いていたはずの鹿之助くんの目が点になっているが……。私がよそのクラスの窓ガラスを頭突きで破って、真田先輩と黒田先輩に生徒指導されたって話をここで暴露されるわけには行かないのだ。

馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前。こんなところで暴露されてたまるか、この野郎。てめえ、それを口にしたらテメーの命はねえぞ。

口には出さないが眼球の角膜と彼女のメガネのレンズがキスし合う距離まで顔面を持つてくる。もちろん、瞼はガン開いてこちらも緑色の光彩を釘付けにさせるぐらいだ。

この状況を例えるならばウサビッチでキレネンコ（赤兎）がカンシュコフ（看守）に対してのぞき窓越しに顔面を接近させたぐらいの距離感で、である。

「すみません。私に関する噂話は聞きたくないのです。分かつて頂きますね？」

「んんっ。んんっ……！」

怒らず。騒がず。おしとやかに。

しかし、それでも冷たく悪寒を覚えるような声色で殺すぞと告げる。

彼女が頭を動かすたびにゴンゴンツと彼女の額が私の額に刺さるが、これは恐らく頷いているのだろう。でも分かつてもらえたのであれば、それはそれで満足だった。ゆっくりと背中をベッドに委ねる。抑えていた手を彼女の口から離して優しい笑顔を向ける。

念のためベッドの反対側にいるなお先輩とコロ先輩にも、鹿之助くんには見えないように配慮しながら君達もですよ。コノヤロウと笑顔を向ける。

なお先輩は口を固く閉ざして首を縦に頷き、コロ先輩もまた両目を瞑って『私は何も言いません』と言いたげに首を左右に振つての反応を返してくれた。

鹿之助くんは、驚いてこそいたが……。私が一通りの口封じを済ませてから、照れた様子で片目を瞑りながら後頭部を掻く仕草を見せた途端に、何処か納得するような連続した頷きを見せてくれた。きっと彼の中で、納得できるような噂があったのであろう。

まあ、私がつとも危惧していたのは（頭突き）で窓ガラスを叩き割った真実と、真田先輩と黒田先輩の2人を同時に相手取って生徒指導を受けたという話ではあるが……。

「それで？ 噂に関する以外で、聞きたいことは？」

「は、はい……。これは個人的にどうしても気になっていることでした……。青空さんは洋館前で私の不意打ち攻撃を見切りましたよね？」

「……………不意打ち攻撃……………」

篠原さんの言葉に人差し指を自身の唇に当てて、上を見上げる。

きつと、私が心寧ちゃんを助けるために洋館へ再突入しようとした際に、泥を浴びせて視界を奪っている間に、黒田先輩と氷室先輩が私の事を取り押さえる手はずだったあの段取りの事を言っているのだろう。

ちなみに余談だが、私がこの仕草をしたのは他でもない。鹿之助くんに私の可愛さアピールするためである。

はつきりと言い切るが、このあざといドジっ子に彼がなびくのはシンプルに私が面白くない。だからこそ、ここで可愛いさをアツピールする……………しているのだ。

「ほら、私が地面に手を突こうとしたときですよ」

「ああ、あの時の！」

「思い出してくれてよかったです！」

手づちをポンつと一度打ち思い出したような素振りをする。篠原さんもまた、私が思い出してくれたことを喜ぶように、殺意を込めたあんなことがあつた後も目を細めて笑う。

……………これはきつとへ威圧の意図が伝わってないかもな？

「それで、どうしてあの時。青空さんは私が攻撃してくるってわかつたんですか？」

「どうしてって……………あの中で一番、不審な動きをしていたからですかね？」

「でも私は青空さんとは面識はなかったですし、青空さんも転校してきたばかりで私の事を知らない筈でしょう？」

……………なんか話が、かみ合っていないような気がする。

あの時の私は、彼女が攻撃手段として泥を掬い上げてへ投擲で目つぶししてくると思って、彼女が地面に手を突いたタイミングで洋館

の中に転がり込んだ。

その後、泥が壁に当たったと思われる衝撃波があつて……。でも、今考えてみればあの衝撃波は泥を私に対して浴びせかけてきたにしては衝撃波が大きかったような……。？　しかし扉越しから伝わってきた振動の大きさから石をぶん投げられたつてわけでもなかったわけだし……。

彼女が　「何をしたか」　なんて、あの状況で考えられるのはそれぐらいなのだが……。彼女の話と、かみ合わない部分を考慮すると……。まるで彼女の攻撃方法を知らなければ避けようがないもののように言われているようにも思えるのだが……？

あの状況で地面に手をつけて出来ることを考えた時……。泥を浴びせて目つぶししてやること以外に、他に何か出来ることなんてあつたか？

「そこは……予測ですかね？」

「予測……ですか？」

「はい。篠原さんが、泥に手を突いた時点で何か妨害を試みてくるだろうってことは、蓮魔先生が私から注目<sup>ハイト</sup>を集めていたことや、黒田先輩と氷室先輩が呆れるようにその場から離れるように見せかけて、彼女達が私を取り押さえられるポジション<sup>ン</sup>への移動で予測がついていましたので……。あとは何か2人が私を取り押さえるためのきつかけを……。と考えた時、篠原さんが靴紐を結ぶフリをしながら、ゆつくりと手を地面に持って行っていつているのを確認し発覚に至った……。というわけです」

「なる？　ほど……」

「????」

引つ掛かりを覚えながらも、私も彼女の疑問に答えているような返事を返した。

なるべく状況を織り交ぜての適した回答をしたはずが、やっぱり話が噛み合っていない違和感に、お互い揃って考え込むような表情となってしまう。

「な、なあ。さつきから気になってたんだけどよ。『洋館』ってなんの

話なんだ？ 話題から、はぶられている感じで、お、おれ、す、少し寂しいぜ」

そんな悩み込む2人の沈黙を破るように鹿之助くんが話題に入ってくる。

その顔は『盛り上がっているところ悪いけど……』と水を差すような発言に気を引かれるかのようなえっちな顔だった。

ああああああああ！ そうだよね！ そうだよね!? 身内にしか分からない話をされても、当人は楽しいかもしれないけど周りの人間からしてみれば状況とかわからないから、つまらないよね!? ごめんね！ 鹿之助くん！ 寂しい思いをさせてごめんね!!!

でも『鋼人洋館』の事を話して興味を持って、突撃されても困っちゃうんだけど！ あの洋館、今はドレスを纏った首のない貴婦人が徘徊するただの脱出不可能な異世界クローズドな洋館だからね??!

「あー……寂しい思いをさせてごめんねえ。えっと、まず話す前に。鹿之助くんはこの話を聞いても、その場所に向かわないって約束はできますか?」

「ほっ……。なんだよ、改まって。俺は日葵が行かないでくれって言っただけだよ」

「良かった。では『鋼人洋館』……あるいは『雨降洋館』という噂は聞いたことはありませんか?」

「おう！ 知ってるぜ！ かーちゃんやねーちゃん（ねーちゃん＝上原 燐）、先生達も近づくなくなって言ってる雨の降った時のみに現れる洋館の事だろ? ……って、もしかして……日葵」

「早い。察しが早い。察しが早いですよ。流石、鹿之助くんですね」  
鹿之助くんは本当に表情が豊かです。

私が前置きをしたときは、何処か安堵したかのような溜息をついて、話混ぜてもらえとわかったとたん嬉しそうな顔をしたかと思えば、今度は『鋼人洋館／雨降洋館』の話と、これまでの事情を聴いていた流れから彼の中で理解したのだろう。見る見るうちに青ざめた顔になり、私の事を正気じゃないものを見るような眼で見つめてくる。

その目は私の中でゾクゾクと背徳感をそそるような魔性の瞳であつた。しかし、そんな様子を露骨に見せれば気持ち悪がるに違いないと判断し、片目を閉じ、片目で鹿之助君を捉えながら、腕組みをしながら彼に指を指した。

「じゃあ、この怪我つていうのも……」

「大正解です」

「……。日葵さあ……」

この呆れ返つたかのような彼の顔、彼の声、ASMRを聴いているかのような感覚に陥る。

聞くリラックスボイスとはまさにこのことを言うのだろう。ト  
レース♥ドゥーオ♥ウーヌス♥ニーヒル♥ニーヒル♥ニーヒル♥  
♥ ウエハラアイズマアイン♥♥♥ ニヒヒツ♥♥♥

ニヤけそうになるのを必死にこらえる。これはきつと私の中で、彼に“かまってもらいたい私が喜んでいる印だろう！”

あー！ あー！ ダメダメダメ！ ニヤけちゃう！ ニヤけちゃう!!!

でも本人の前でニヨニヨしたら、たぶん別の部分で呆れ返られちゃう！ だから、そつと布団の縁を持って口元を隠してからニヨニヨしはじめる。

「……………」

ニヨニヨと布団の中で、口元だけ微笑む私に鹿之助くんは、青空日葵における普段のジト目張りにこちらを見つめていた。きつとあの顔は、私の今の気持ちも見抜いているに違いない。

いやー！ かわいい！ かわいい！ かわいいね！ しかのすけくん！

あつあつ。目元まで垂れちゃう。目元まで垂れちゃう！

きゃー！ 感情が高ぶつて、頭まですつぽりと布団を被っちゃう！  
「……鹿之助君。これは僕からのお願いになるのだが……。妖精ちゃんのことはそんな軽蔑するような目で見ないでほしい」

お布団の中で鹿之助くんからバブみを感じ取り、赤子のようにキヤツキヤと喜んでいた時、ここで意に反してなお先輩が鹿之助くん



の対面側から彼のその眼を静止させる。

流石に上級生から止めるようにと言われたせいで、彼は私をジト目で見つめる行為を止めてしまっていた。私も顔の半分を布団から覗かせて、その様子を捉える。

待って、やめないで！ 私が悪さをしないように、あともう15分ぐらい見つめてて！

私はね！ 鹿之助くんが傍に居れば悪さをしないことに定評があるんだよ!!! だから、そんな危なげな情報盛り沢山な “課外授業” なんかに出かけないで私の御守をしてて！

傍に居てくれさえすれば鹿之助くんのこと、全身全霊で護るから！

「彼女はね。確かに洋館に入って行ってしまったのだけど、それは僕達を含めて友人達を助けるための行為だったんだ」

「……………」コクン

「！」

「妖精ちゃんはね。僕たちの侵入を制止した側なんだ。僕やコロちゃんも冷静になって理論的に考えれば、そこが入っちゃいけないって分かっていた筈だったんだけどね。あの時はどうしても感情的になってしまって入ってしまった」

「…………」(\*・ω・)(\*—ω—)(\*・ω・)(\*—ω—)ウンウン

「…………」

「それでも彼女は……。妖精ちゃんは、僕達を見捨てるチャンスがあったにも関わらず、自らの危険も顧みず突入してくれたんだ。そして最後は文字通り誰一人欠けることなく、その身を粉にしてまで全員助け出してくれてね…………」

あゝっ!!! なお先輩上級生からの迫真の〈説得〉ロールに鹿之助くんの表情がまた変化する！

ジト目の軽蔑するかのような目から、目が見開いて行って尊敬するようなものを見るような目になってるう!!! あゝっ! あゝっ!

しかのすけくんのあのジト目も良いんだけど、見開いてるあの目も良

い! 良い! ヨヨイのヨイ♪ 良きかな。良きかな。良きかなあ…………。

あ、迷っちゃう！迷っちゃう！どっちの視線を向けられても良いものは良いな!?

でも本気で照れちゃって彼の顔が真面に見られないぞ！ だから、つい反応が布団をベースにしたアーケードゲームのモグラ叩きを4倍速にしたぐらいの動きになっちゃう！ 2倍速のラグトレインみたいな動きになっちゃう！

しかのすけくんを見ていたい自分と、ニヨニヨ気持ち悪い笑みを浮かべている私が交互に出たり隠れたりしちゃう！

「そうなのか……。俺はてつきり、この前の休暇での出来事みたいにか。まえさき市で日葵が高位魔族の店に嬉々として入って行こうとしたときのように、また自分から危険に突っ込んで行ったのかと思つてよ……。日葵。事情をよく知らずに呆れ返って、ごめんな……」

それから鹿之助くんはしょんぼりとしたような顔で、モグラ叩き状態の私から視線を落とした。

あああああ?!?! その顔は、すっごく私の好みだよ!!! スマホは何処!? 私のスマホはどこ!!! その顔はえっち! えっちだよ!!!  
ねえ!?! 自分で気づいてる!?! えっちだよお!?

その顔メスよりメスした鹿之助平面展覧会最優秀賞作品永久保存版ンンンンンツツツ!

これには思わず鼻息を荒げながら布団をお腹側に叩きつけて、頭部から病院服を纏った胸部までを完全に露出させる。ギラギラと目が輝いてしまう。これには野獣の眼光。

目の保護が半端ねえ〜! これが見るブルーベリーことアセットシカアノニンかあ!

あっははあ……。鹿之ニユウム充電中……。鹿之ニユウム充電中……。

「妖精ちゃん……。それは本当かい?」

「こ、高位魔族の経営するお店に嬉々として入って行こうとしたんですか……。?」

「うわさどおり。」

私の頭の中は既にA<sup>ア</sup> P A R A P P A<sup>パ</sup> T H E<sup>パ</sup> R A P P A<sup>パ</sup>だが、

なんとか外面上では平然を保つ。

鹿之ニユウムを充電して、彼の顔を肉眼に焼き付けながらほのぼのとしていたところで今度は鹿之助くんの隣や、鹿之助くんの対面側から言葉に詰まるような喋り出しでのな先輩や篠原さん、コロ先輩の声が聞こえてきた。

名残惜しくはあるが、いったん鹿之ニユウムとアセットシカアノニンを放出している鹿之助君から目を離す。

それから、それぞれ彼等の顔をつぶさに確認するが、苦笑交じりな顔、信じられないという顔、諦観したかのような顔をしているのを確認した。

「え、いや、それはあ……。理由があつて入つて行こうとしただけなんですよ？　ちよつと露天商のおじさんから買った魔族語の本が手元にあつたので、文字を判別してもらおうと思つて……。べ、べつつにい……。嬉々としては入ろうとしていないしい？　入り口だけで済ませうとしましたし？」

「は、入つて行こうとしたことは認めるんですね……」

このひと、しんぞうにけがはえてる

「妖精ちゃん……」

こちらとしても視線をチラチラと鹿之助君に向けながら、バツが悪そうな顔、反省しているかのような表情を作る。

それから自分の胸元で両手の人差し指をツンツン合わせながら、言い訳をするが3人の表情は変わる様子を見せない。

「いやいやいや。誰にだつて若気の至りつてもものはあるじゃないですか。ソレですよ！　ソレ！」

「若気の至りつて……。君は充分に若いだろう？　何を言っているんだか……」

あー……。うん。それはそう。

たまに肉体と精神が乖離しちゃうの。肉体は青空　日葵だけど、中は釘貫　神葬だからね。そこに關してはあまり突っ込まないで欲しいな。

「……………。」

「？」

「……………！」

そんな時、コロ先輩の方に動きがあった。何か話している。何かを話しているのだが……肝心の言葉が何を言っているのかが分からない。室内が静かなら分かるかもしれないが……。

まだ、蛇子ちゃんと心寧ちゃんはふうま君を間に……今は遠慮なしのふうま君争奪戦をバチクソにやり合っている。ふうま君の顔は相当困惑しており、当分の間こちらには介入できない……介入してはならないことは確実だった。

せめてあそこの2人がもう少し声を落としてくれたら、コロ先輩の声が聞こえそうではあるのだが……。

「ああ、コロちゃんは妖精ちゃんに対して『その魔族語で書かれた本に興味がある。もしよかったら今度見せて欲しいな。もちろん、日葵ちゃんが良ければだけど』って言っているよ」

「なお先輩、通訳ありがとうございます。えっと、コロ先輩。それは本当ですか？ 私としてはあの本を解読したくてウキウキしていますので、多少なら見せることは構わないのですが……。コロ先輩は魔族語が読めるんですか？」

「……………（コクン）……………」

「えっと、『なんの魔族かにも依るけどね。そういう語学に通じている友達も居るから、彼女達にも掛け合ってみる』と言っているよ」

「えっ！ ほんと!? やったー!」

「……………♪」

『洋館から連れ出してくれたお礼』だっけ。それにしても……君は時折、本当に嬉しそうな顔をするね。先ほどまでは年寄りっぽいことを言っていたのに、今度は子供っぽくみえるよ」

首を傾げる私と、何度も同じ言葉を発しているコロ先輩になお先輩が見かねて助け舟を出してくれる。おかげさまでやっと話が通じた。

その話は私にとって願ってもない話だった。うまくここで魔族語の種類が判別できれば、東京キングダムでえっちなお店を開いている方の蛇子ちゃんと蛇子ちゃんの大親友とわざわざ出会う必要性はな

くなり、面倒事のキャンセルを1つ済ますことができる。

さらに言えば、夏休み。その開いた時間を鹿之助君と楽しく過ごす時間に割り当てられるようになるのだ！

と言っても……『魔族語を翻訳・判断するという』こちらの都合が済んだから、えつちなお店で働いている蛇子ちゃんとの約束をキャンセルする……というプランがうまく行くような気がしないのはなんだろうか？ 何かにつけて理由をこじつけて会いにきそうな予感がある。

神様ってこっちの都合を考えてくれない、自分第一・自己中心的な要素が大きいし。

## Episode 81 『最後の見舞い客』

「あー……っ!!」

ここで突然の篠原さんによる立ち上がりながらの絶叫。

一瞬で、病室内の全員の注目が彼女へと向けられる。

——良い絶叫だ。

声が喉から発せられるものではなく、腹の奥底から雷鳴が轟くように太く通った断末魔にもふさわしい声だった。バンドを組んだ時に彼女もメンバーに加えたとも思ったが、その絶叫からはただならぬ気配を察する。

「あ、あ、あ……」

彼女は何かに怯えているようだった。やがて旧式の洗濯機のようにガタガタと震え、やがて私へと向いていた身体の向きは出入り口へと向けられる。当然、全員の視線もそちらへと向けられる。

「……チツ」

こちらとしても粗方事情は察した。彼女が見ている扉の先——  
——隙間からとある女性がこちらをものすごい形相で……まるで四谷怪談に登場するお岩さんのような恨めしそうな顔で睨みつけていた。またたく間の出来事ではあったが、私は既に彼女が何者であるかが分かっている。

紫がかったアツシユ色の光彩に、鮮やかなオレンジ色の髪、まえさき市で3時間もウンコしていた方の蛇子ちゃんよりも巨大な胸。〈聞き耳〉と〈目星〉をつければ漂ってくるニコチン臭。〈威圧〉ロールにボーナス・ダイスが付与されていていそうな舌打ち。

——……鹿之助くんの “憧れ” である神村 舞華だ。

何の用かは知ったこっちゃやないが、おおよそ篠原さんの紹介……あるいはタイミングを見計らって、この病室内に入ってくる手はずだったのだろう。それが病室内で色々あったことよってフルハウスからのフルカオスと化し、入るタイミングを完全に見失ってしまった感じに違いない。

で、だ。先ほどの篠原さんの絶叫、彼女がタイミングを見計らって

神村さんを室内に呼び込む予定だったが……うっかりそれを忘れていた、そんな事情が〈心理学〉で何うに見え隠れしている。

私としては鹿之助くんもいることだし、外にいる彼女が見えなくなってしまうそのままいなくなってしまうたのであればそれで良かった。また日を改めて……でも一向に構わない。それでも何か用があるのか、チラチラと彼女の制服の裾と、時折横顔が隙間から見える。それでも私と視線が合うと隠れてしまうのだが……。

「篠原さん、あれは……？」

「か、神村さんです……。青空さんに言いたいことがあるって、病院内で途中から合流したんですけどお……」

「もしかして……話が落ち着いたタイミングで声を掛ける予定だったけど、話が色々盛り上がり過ぎて篠原さんも彼女の存在を忘れていた？」

「は、はい……」

白々しくはあるが、彼女がどうして出入り口でスタンバっているのか、立ち上がったまま凍りつく篠原さんに尋ねてみる。結果はやはり私のご明察の通り。そんなことだろうと思った。

「え？ 神村さんって……あの神村さん？」

「鹿之助くん。そうです。君の『憧れ』の神村さんですよ」

「ん」  
そんなやり取りに当然、鹿之助くんも私と篠原さんの会話に入ってくる。彼には私が他の友人達に聞こえないように、オネエの仕草のように手を口元に沿わせてコツシヨリと耳打ちをする。鹿之助くんは教えた途端に、女の子のような甲高い小さな一言を呟くと顔を赤らめて俯いてしまった。

うん！ おいしい！ ……おいしい展開に、鹿之助くんはかわいいんだけど……私としては好ましい可愛さではないんだよなあ……。

さて、この空気。一体どうするべきか……。

「……やあやあやあ。そこにいるのは神村さんじゃないですか！ まさか、神村さんも私のお見舞いにー？ いやあー嬉しいなあー。そんなところに居ないで入って来てくださいよー！」

外で待つ彼女に、元気よく入室できるような声掛けを行い、タイミングを作り出す。

しかし、私側のセリフがほぼ棒読みだ。感情がうまく乗らない。んー……鹿之助くんのいる手前、もうちよつと愛想よくした方がいいのだろうか、彼女に対しての「苦手意識」が先行してしまい……うまく……その……ね？

彼女の良い部分も、洋館内で知ることができたが……それでも……という部分があった。嫌いじゃない。嫌いじゃないんだけど……ね？

好き：■ ■ ■ □ □ □ 45ポイント

嫌い：■ ■ ■ □ □ □ 50ポイント

彼女への好みをパラメーター化するなら多分こんな感じだと思う。好きな部分もあるんだけど……。その、女性の好みってやつは複雑なの。

「ああ!? 誰がてめえの見舞いに来たって? うぬぼれてんじやねえぞ!」

それでも彼女は私の挑発じみた言葉に乗って、室内へと入ってきてくれた。

扉が荒々しく開け放たれる。勢い余った扉がバウンドして、再び神村さんを挟み込みに襲い掛かるも、再びけたたましい衝突音と共に壁へ叩きつけられた。

そのままツカツカツカと小走りにも近い早歩きで篠原さん側へと近寄って来ては、ベッド柵に猛禽類が獲物を鷲掴みにする勢いで掴む。

あまりの威勢の良さにこちらとしても、いつものジト目に加えて挑戦的な笑みがこみあげてくる。

「おーおーおー。その様子であれば、特にどこか怪我したとかなさそうですね。元気そうでした。良かった。良かったー」

「ああー! どうかのおせっかい野郎が、人様の首根っこ掴み上げて振り回した拳句にぶん投げて、俺の武器がぶつ壊れた以外は元気だよ!」



「イシシシシシ……。そうですか、そうですか。それは大変です。ねえ。こらちもどこかの見敵火柱をあげた判断が早い人必殺火力馬鹿のおかげで21万衛円星分の株話が1台オシヤカになったのですが……洋館で素敵な収穫を得られましたし、神村さんの壊れてしまった武器を弁償いたしましたでしょうか？」

私と神村さんによるバチバチとした雰囲気を感じ取り、彼女の登場によって完全に俯いている鹿之助くんを除いた見舞客はじわじわと距離を離していく。

鹿之助くん？ 鹿之助くん？ ちよつと今から喧嘩に発展するムードになりつつあるから離れておいた方がいいと思うけど。そろそろ気づいた方がいいと思うなー。

「……………フフツ」

「……………へへッ」

……なーんて。彼女は怖い顔をしてあんなことを言っているが、本気マジじゃないことぐらい私だって分かっている。

だって、彼女の顔は私の顔に釣られるようにして、笑いかけているし、『鋼人洋館』の食堂で私を机の上に叩きつけて、頭蓋骨をその壊れた武器で潰そうとしたときのような鋭い殺気が微塵にも感じられない。この威勢のよさは、遅れて室内に入ってきたこと。寄りにも寄って私から呼び込まれたことに対する恥ずかしさを隠しているだけだ。

「要らねえよんなもん。……そんなモンをカツアゲにきたわけじゃねえし、俺は怪我人をいたぶる趣味はねえ」

「では、今回はいったい私の病室に何をしに？ 篠原さんのお話では私に『何か言いたいことがある』とのことでしたが……」

「ああ。そうだよ。これを言わねえってのは、俺の信条にも反することだからな。それを伝えに来た」

「ほう？。では聞きましょうか」

「チツ、上から目線でムカつくな……」

「ははは、すみません。では神村さん、話したいこととは何でしょうか？」

「言い方を変えても対して変わってねえよ。……………青空 日葵。あの時、怪物を倒すことに躍起になっていた俺を強引にでも洋館から連

れ出してくれて助かったよ。生きて姐御にも会うことができた。  
……ありがとな」

彼女は突入してきた当初とは異なり、だんだんしおらしくなるような態度に一変させながら小声で奥歯に物が詰まったかのようなもどかしそうな言い方ではあったが、ぼそりと礼を告げてきた。

きつとあの流れなら『果たし状』でも突き付けてくるように、何かしらの挑発的な言葉を威勢よく告げてくると身構えていた。しかしまさかその逆で『しおらしくお礼を告げてきた』ということに衝撃が大きく、余裕な笑顔が崩れてしまう。

「俺が言いたいことはそれだけだ！　じゃあな」

「お。あ……………」

私が鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていると、彼女は言いたいことは言い終えて、そっぽを向きながら人差し指で自分の頬をポリポリと掻く。やがて、この場にいることすらも恥ずかしくなったのか踵を返して部屋から出て行くこうとする。

こちらとしても引き止めようと声をあげるが、彼女は振り返ることもなく外の扉の方に…………ほんつと、神村さんってば、水臭いよなあ。

「神村さん！　なーにを言っているんですか。私もあなたに助けられましたよ。倒れて動けなくなったときには背負ってもらいましたし、『捨てていけ』なんて馬鹿馬鹿しいことを言い出した時には黙らせてくれました。脱出の時に背中へ地上絵を描かれたレーザーで焼かれたときには、私が陽葵ちゃんとコロ先輩を連れて尻尾撒いて逃げる援護もしてくれました。私からも礼を言わせてください。その件は助かりました！　ありがとうございます」

「……………そうかよ」

なんとか、彼女が扉を開けて部屋を出る前に、こちらも『告げなければならぬこと』を身を乗り出す形で言い済ませた。彼女は振り返ることはなかったが、こちらの言葉は聞こえたようで小さくボソリと不愛想に呟いてから今度こそ部屋を後にする。

「……………ふう……………」

ピシヤリと扉が閉まる音でほっと一息をつき、枕へと頭部を倒す。

彼女が退室したところで場の空気が再リセットされ、ここからまたどうやってあの和やかな空気に戻そうかなと……あ、そうだ。心寧ちゃん、それはそれ、これはコレな案件としてスマホで撮影していた神村さんの惨糞クッキングの映像を私に頂戴——と言おうとしたところで再び扉が開いた。

神村さんがタバコの落とし物でもしたかな？　なんて気楽な事を思いながらそちらを見つめる。

「……青空さん、また貴女ですか」

「モヒョッ!」

室内に響くは、ダンディな声。ほっそりとした身体に茶色の革靴。桑染め色のチノパン。山吹茶色のタートルネックのインナーに白衣。糸目のにっこり第一印象は優しそうなお医者さん。

……最後のおみまい客、室井先生の乱入だった。

いつも白衣のポケットの中に入っている両手は外に出されていて、手には抜き身の注射器が握られている。キラリとぶつとい針が光で反射する。

ああ……うーん？ 『また』も何も………今日は悪いこと………今日はあ………わたし、何もした覚えはないんだけどなあ………。

「や、やあ！　む、むろいせんせい！　わたし、きようは　なにもわるいことして　ないよ！　そりや、きのうは　せんせいの　いりようよう　かばんから、ちりようやく　やら　ちんつうぎい　を　うばいましたけど、きようは　なにもしてないですよ!!!　だから　その　てにもった　ちんせいぎいかな？　ちんせいぎいを　うつのは　やめてね！　やめてね?!　わたし！　きようは　なにも　わるいことしてないよ!?　ぼくは　わるい　にんげんじゃないよ！　ぶるぶる！」

「そうですか、そうですか。——では先ほど響き渡った絶叫は、誰の絶叫だと弁明するのですか？」

ゆっくりと注射器が持ち上げられ、注射器内の空気抜きが行われる。鎮静剤の液体が針先からピューッと……。更に室井先生の糸目である脛が1cmだけ開いている。

ああ、あの絶叫ね……でも、それは私じゃないんだよなあ!!

「あ、それ私じゃないです! 篠原さん? 篠原さくん?! たすけて! あなたの絶叫が私の問題行動だと思われてるっぽいです!」

「は、はい! む、室井先生あの絶叫は私です!」

「——それは本当ですか?」

「絶叫上げたら、それは私だと思うのは大間違いですよ?! み、みんなも弁明して! 見てたでしょ! 私が感極まってへビイメタルを出してたやつてた訳じゃないって!」

「あ、ああ……確かに妖精ちゃんは、その絶叫の時。僕の通訳を込みでコロちゃんと話していたね」

「かのじよと、おはなししてました。」

「お、俺もちゃんと見てたぞ! 日葵は死々村先輩と話してたし、絶叫なんか上げてないぞ!」

「……そちらのふうま君達はどうでしたか?」

「へ、蛇子は直接的に見た訳じゃないけど、日葵ちゃんの声とは……違ったかな?」

「振り返ったら、篠原さんが立ち上がって口を開けたまま天井を見上げていたのは確かな情報だが、室井先生。あの声は青空さんではなかったですよ」

「ここに来る前の話なら、陽葵ちゃんが日葵ちゃんの名前を絶叫しながら運ばれて行くところは見ましたけど——今の大声は日葵ちゃんじゃないですね」

「ちよつと恋愛クソ強女、この窮地の状況で語弊を生むようなことを言い出すのはやめようか!? あつ。ねっ? ねっ? 室井先生、さっきのアレは私じゃなかったでしょ!」

「……。はあ……わかりました」

弁明してくれるみんなの証言に便乗して、ここぞとばかりに冤罪だと叫ぶ。いや、これぐらいした方が、私Ⅱ病院で絶叫を上げる女という先入観に取り込まれている室井先生を牽制するには丁度いいのかもしれない。いやでも……。過去の入院期間では 悪夢を見た結果として” 反射的に絶叫をあげてましたが……意図的に絶叫をあ

げた覚えはないんですけども……。

8人全員の証言が取れた頃には、注射器に蓋をかぶせて再びその両手をポケットにしまつて扉の戸当たりに寄りかかり首を傾げながらも、納得をしてくれたようだった。

結論！ わたしをボコボコにしたけど、結果的には私に泣かされた高位魔族でえっちなお店で働いている方の蛇子ちゃんが悪い！ わたしに過剰なストレスなんか与えるからこうなっちゃうの！

「篠原さん。既に1週間前にも入院した青空さんには特に、毎度の、如く伝えてはいるのですが、病院では静かにしてくださいね？ いくらここが、ほぼ青空さん専用に用意された隔離用かつ僻地の個室とはいえ限度というものがありませんよ？」

「す、すみません……」

「皆さんもです。青空さんの怪我の頻度や度合い、彼女を一人にすると暴れまわることを考慮すれば。お見舞いに来る回数や人数が増えるのも当然かもしれませんが、病院ではお静かに。その元気は授業で発散してください。よろしいですね？」

確認の取れた後、彼はまるで病室内でつい先ほどまで何があつたのか知っているかのように室内にいる全員に注意をしていく。

当然と言えば当然だが、叱られたことでやはり空気が沈む一行。

まーた、空気がリセットされてしまったよ。この空気は何回リセットされるんだ。

でも室井先生が注意に来た今、それはそれで相談したいことのある私には好都合かもしれないなかった。

「そんな……人を手のつけられない猛獣みたいに言わんでも……。そうだ。そんなことよりも室井先生。お願いってか、頼みがあるんですが」

「そんなことよりも……？ ……いえ、今は聞くだけ聞きましょう」

「イリザロフ手術人工的に骨を折って身長を伸ばす手術って出来ます？ 身長をあと10cmぐらい伸ばしたいところなんですけど……」

「日葵！ 俺や蛇子よりも身長高いのに、まだ身長を伸ばす気かよお



## Episode 82 『愛し愛されるもの』

月日が経つというのは早いもので……。

私が足の骨が砕けてから、入院生活を強いられて既に1週間が経過しようとしていた。

魔界医療様様ってところで足の骨は完全に元通りになり、いつでも退院できるような状態ではあった。

実際の季節は6月のままだが、病室内の窓の外は早めに7月に切り替わっていた。人工ホログラムは、青い空と巨大な入道雲、そしてうるさくない程度のセミの鳴き声が響いている。

流石、2070s。私の時代では考えられないようなシステムだ。今日こそは優雅に1人で病院食の昼食を――

「はい！ 日葵ちゃん♪ あーん♪」

今日は優雅に1人で病院食の昼食を……。

「日葵ちゃん！ あーん♪」

せめて……1人で昼食を……。

「あーん♪」

「あーん……もぐもぐ……」

「ムフー♪」

「もぐもぐもぐ……」

「美味しい？」

「味に馴染ましては……味気なくて、もう嫌……。主食は粥だし……おかわりはできないし。家のご飯とか、五車学園の食堂のご飯が食べたい……」

「そっか……。でも、元気になって退院できるようになったらきっと好きなだけ好きなものを学食で食べられるよ！ だから、それまで一緒に頑張ろう!？」

「……」

「そんなジト目で見られてもお菓子は持ってこないからね！ はい！

あーん♪」

「……あーん……もっちゅもっちゅもっちゅ――」

……優雅に1人で病院食を食べられるなんてそんな理想的なことではなく、につきこにつきこの陽葵ちゃんの食事介助の元ご飯を食べている。いや、食べさせられている。

あれから陽葵ちゃんも別室に入院し始めて、約4日目。

他の看護師さんの話では、私に対する執着の落ち着きを取り戻したと聞き……一時は安心したが……。実情はそんなことなかった。

以前のように収容房の扉をぶち破ったり、ベッドの拘束具を引きちぎって私のベッドに潜り込もうとしたり、口移しで食事を食べさせにきたりなどの行動をしなくなった程度の変化だった。

彼女はまだ発狂・狂気状態なのか？ それともシラフなのか？

〈精神分析〉に長けていない私には計り知れない。発狂していると言われれば、発狂しているように見えるし。看護師さんがマトモだというのであればマトモに見える……そんな状態に見える。

「青空お姉ちゃん、おなか空いてないの？ 鹿子が食べてあげよっか？」

「あ、はい……。いいですよ。まだ手の付けてないご飯半分とおかず全部あげます……。鹿子ちゃんは育ち盛りなんですから……。いっぱい食べて、どうぞ」

「わーい。やったー！」

「鹿子ちゃん、ダメだよ。日葵ちゃんは怪我人なんだから、栄養を付けなきゃいけないの。鹿子ちゃんはもう食べたでしょ？」

「えー……」

そしてこの部屋にはもう1人、五車学園地下の病院の患者が混じっている。今、陽葵ちゃんに叱られているこの少女……。私達が、『鋼人洋館』のクローゼットに隠れていた幼女こと『影本かげもと 鹿子しかこ』ちゃんだった。

彼女は洋館から出る間際。赤き霧／磯八目巾着鰻、またはブラッドドレスを纏った首のない貴婦人に襲われ、重度の失血状態に陥っており私は助からないものとして見捨てていたのだが……。なお先輩が彼女を背負って洋館から連れ出したのだ。

その後、私の粉砕骨折だろうと横隔膜破裂だろうと治している魔界



医療で治療され、彼女はたちまちに元気を取り戻し……今はすっかり元通りである。

「はい、日葵ちゃん♪ あーん♪」

「アーン……もぐ……もぐ……もぐ……もぐ……」

「……青空お姉ちゃん元気ないね……。どうしちやったのかな、日ノ出お姉ちゃん」

「うん……そうだね。一人でご飯を食べるのは寂しいと思って、私達もお見舞いに来ているのに……」

二人そろって、ベッド上で死んだ目のまま食事を咀嚼する私の顔を左右から覗き込んでくる。その顔色は実に心配しているように感じられるが……。

私に元気がないのは、別に陽葵ちゃんによつて味気ない病院食を無理矢理食べさせられているわけでも、1人で優雅な病院食の昼食を邪魔されたからなどではない。そりゃ、最初の食事介助が鹿之助くんではなく、陽葵ちゃんという部分に多少なりとも不満はあるけど……そんなことは私の元気を低下させる理由として微々たるものだ。

私はこの2人、特に陽葵ちゃんを見ていると沸々と沸き上がってくる感情があるがゆえに元気がないのだ。

キーンコーン…… キーンコーン……

「あ、お昼の休み時間が終わっちゃった……。ご飯の途中だけど……ごめん！ 午後にも授業があるから教室に戻るね！ 本当は日葵ちゃんともつとずつと一緒に居たいんだけど……今度授業をサボったら、『二度と面会させない』って蓮魔先生に言われちゃって……。また放課後も、いつものように夕ご飯を食べさせに来たいけど……今日のはちよつとできないや！ ごめんねっ！ 鹿子ちゃん、日葵ちゃんのご飯を食べちゃダメだよ！」

「はい……」

陽葵ちゃんは病室から退出するまでに、名残惜しそうに何度も何度も振り返りこちらを見る。

まるでお気に入りのペットを飼育籠ゲージの中に入れてから部屋を後にする子供のような動きのようだった。

「……………」

「青空お姉ちゃん？　口をムの子にしてどうしたの？」

……なんで、陽葵ちゃんは退院できて学校生活を送れてんのに、私はまだ入院したままなんですかね？　自主退院は相変わらず認められないし、治ったはずの脚のギプスは天井から吊るされたままで外して貰えないし……。おかげで立ち上がることも、紫先生に与えられた筋トレのノルマも腹筋と床頭台を用いたダンベル上げでしか鍛えられないんですけど。

あと足が蒸れてクソ痒い。

それにおむつぐらしにも慣れたとはいえ、やはり個人的な尊厳のダメージがある……。いくら看護師さん達が「仕事」として清拭、陰洗、おむつ交換をしてくれると言っても限度があるんですよ……！

これも対魔忍世界だからか？　対魔忍世界だから、私はおむつプレイABDLを強要されているのか？　こんな羞恥プレイはクトゥルフ神話TRPG世界線でもなかったぞ???　あ、いや。あつたか。ABDLが初めてなだけで。

それでもいくら同性の御姉様方、看護師一同にとっては業務上の一環、何百人と相手しているがゆえに何とも思っていない作業とはいえ、ペットボトルに入れられたぬるま湯で、股ぐらをぬらぬらさわさわ……時にはガシガシと洗われる私の気持ちもちよつとは考えたことはあるのか？

私の身体は何故か、媚薬を盛られた女騎士張りに正直になっているんだぞお!?　室井イ！

「……………」

「今度は、口がへの字になっちゃったー！」

しかし、怒り狂ったとて何か状況が変わるわけでもない。少し笑い話っぽく鬱憤を募らせてみたが、鬱憤あることには変わらない。更に気分が落ち込む。

……こんな時に限って、室井先生の言葉が記憶から想起される。

『青空さんの場合は身長を伸ばすことよりも、慎重を伸ばすことを優先した方がいいと思いますね』か……。あの時は笑えたが……言わ

れなくても分かっているよ。そんなこと。

私だって最初はそのつもりで居たさ。大喰いの泥濘に横隔膜をブチ抜かれた時から、学校のイベントを逃さないように入退院を繰り返さないようにしようとしたよ？ でもね。でも、今回の骨折はどうしようもないのよ。気が付いたときには、陽葵ちゃんの鉄球が脛に刺さっていたんだからさ。ま、アレに関しては私の注意不足な部分の方が大きいから、どうしようもなくもない案件ではあるけど。

そもそもの話、自主退院を認めないってまずどうなのよ？ それさえなければ、今頃私は学校のプールで、水着の鹿之助くんとキャツキヤウフフしていた筈なんだが？

「……………」

「今度は『いっつ』の口だ〜！」

いくら青空 日葵の母親に五車町の電気街でボイスレコーダーを購入してもらって、室井が私の自主退院の申し出を一蹴しているという確固たる事実を録音しているとはいえ……。

やむ負えない事情の元、学校を欠席しているという揺るぎない情報を手にしているとはいえ……ッ！

「はあ~~~~~!!」(クソデカため息)

私の貴重な青春イベント(2回目)が潰されて行く！ 入院(2回目)という形で潰されて行く！ こんな青春はこちとら望んでねえんだよ!!!

鹿之助くんの水着見たかったアアア〜!!! 合法的にボディタッチしたかった！

大人になってからわかったこと！ 学生時代の男はねえ！ 基本的に！お花畑な人が多いから、かわいい女の子がセクハラをかましてもセクハラされていると思われなかつたりするの!!! 青空 日葵の顔はセクハラセーフラインなの！

ああ〜鹿之助君の!!! 乳首と水着を!!! 拝みたかった!!! 鹿之助君の乳首と水着ツツツ!!!

ドンドンドンドン!!!

「すっごーい。ベッドをそんなに叩いて、まさか太鼓の達人！」

私の両親や鹿之助くん達は見舞いに来てくれるし、そっち方面の不自由は何もないのですが……。でもさ、違うんですよ。こういう充実感じゃないんですよ。もつと学校内で充実してるイベントがさ、欲しい訳ですよ。……わかります？ 私は、分かります。だって当事者だもの。

鹿之助くんの水着姿が見たいなら、病室内で着替えてもらうことも考えたのですが……。それは違うんです。それだと私はただの変態になりますし、学校、プール、水着姿という一つのセットだから萌えるわけであり、合法的に見られる訳で……。

それに病室でそんなことをしようものなら、絶対に室井から『青空さん、貴女の病室はイメクラ・プレイルームではありませんよ（キツ）』ってお叱りが来るのは目に見えてるんです。はあ……。ここまでイメージできてしまう私の想像の豊かさがつらい。

そして『イメクラ』したその日のうちには、青空 日葵の両親の耳にも入ると……。そんなことになったら、目も当てられるはずがない。絶対、蓮魔先生の耳にも話が行くゾ。蓮魔先生が、お固い思考をお持ちの黒田先輩と氷室先輩を引き連れてやってくるゾ。折檻だけじゃ済まされないゾ。そんな気しかないゾ。

「はあ……」

鹿之助君の水着姿……。きつとぴつちりの……。ボクサーパンツ。

……待てよ？ なお先輩の制服は女子生徒の服を着用していた。

……これは鹿之助くんもワンチャンスで、スクール水着（女児用）

……は、流石に……。ないか。

いくら私服が全てレディース品だとしても、学校の制服は男子生徒の制服なのだから、水着も男子生徒用の水着で統一されている可能性の方が高いだろう。そもそも、公立学校という公的機関でいくら男の娘でもスクール水着を着用するのは勇者すぎるでしょ。性癖が歪んじやうよお!!!

「青空お姉ちゃん！ 青空お姉ちゃん！」

「ん、ん、ん？ ん？ 鹿子ちゃん、いかがされましたか？」

「青空お姉ちゃんの、ドンドンドンドン！ ってのすごかった！ あれ

も楽器なの？ また弾いて！ ねえ、また弾いて！ お願い！」

小さな鹿子ちゃんの手が、私の腕を掴み大縄跳びのように左右にブラブラと揺らしたところで、私も現実へと戻ってくる。彼女は、歓喜の表情を浮かべて今ベッドのマットレスをへこぶしでドンドンと叩いている。

……まさか、鹿子ちゃん。私に病室で演奏会を開けと申すか？

「あー、あれは頭に浮かんだ嫌な記憶を紛らわせるためにやっただけです。申し訳ございませんが、流石に病院では演奏会はできませんね。他の患者さんの迷惑になってしまいます」

「えー……そんなこと言わずに1回だけ！ 1回だけ！ ねっ!!」

断る私に鹿子ちゃんは、うるうると目を潤ませて自分の指を祈るように組んだあと、私の事をプルプルしながら見上げてくる。

その顔が、幼い頃の鹿之助くんに似ているような……そんな気がして……。

幼い頃の鹿之助くんは知らんけど。

1回だけなら……。1回だけならバレへんやろと……。いやいやいや。駄目だ。駄目だ。室井に強制鎮静剤を投与される確定演出みたいな行為にしかならない予感がする。

「残念ですが……」

「そんなあ〜……」

「でも、そんな鹿子ちゃんへ演奏会よりもいいものをあげましょう」

「えっ！ いいもの!? なになに?」

大きな声で喜ぶ鹿子ちゃんに対して、子供ってチョロい。そんなことを思いながら、陽葵ちゃんにちゃんと食べるように促された……。ほぼ冷めた昼食の御膳上に乗ったミルクプリンと使い捨てのスプーンを手渡す。

「陽葵ちゃんには内緒ですよ」

「わーい！ プリンだ！ プリンだ〜！」

「鹿子ちゃんの部屋に持って行くといろんな人の目についてしまいますので、食べるときはここにお願い——」

「ありがとう！ 青空お姉ちゃん」

鹿子ちゃんは私からお昼ご飯のミルクプリンを受け取ると、その場でピョンピョンと嬉しそうにジャンプして、お礼だけ言ってそのまま部屋から出て行ってしまった。

……うん、誰かに見られるリスクを抑えるために室内で食べて欲しかったんだけどなあ。

まあ、でも彼女が私のプリンを片手に部屋を出て行ったことで、少しの間だけ見舞客が誰も居ない自分の時間が作れる。

さて、看護師さんの昼食の食器回収が来てしまう前に病院食の昼食を全部食べてしまおうと！

病院食って味気は無いんだけど、青空 日葵の母親が買ってきてくれるふりかけとか、食塩があれば結構味が出るようになって美味しくなるんだよね。『塩分の過剰摂取は身体に悪いよ！』って言うほかに没収されちゃうから陽葵ちゃんには内緒だけ。

ぱくっ

「へっへっへっへ……ねればねるほど、塩分がご飯に染みわたって……もぐもぐもぐ……。うつまうい！ テーレツテレー！」

そういえば、『鋼人洋館』の小部屋にて発見された紋章だが……。

あれは『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』における《異次元への門(門の創造)》なるこちら側の呪文だった。あの場所に描かれていた紋章と私の説明書に書かれている紋章では、異なる部分がいくつか見つかるも……恐らく小部屋に描かれていた紋章の方は魔族が修復作業をした際にそれっぽく上から追記されたものだと思われる。

また織田 鋼人が読んでいた本だが『クトゥルフ・ダークエイジ』と呼ばれる私の説明書における拡張本<sup>サプリメント</sup>であった。頁数にして176頁。これは既にまえさき市のバックヤードで入手した『クトゥルフ2010』『クトゥルフ・コデックス』よりもわずかに分厚い。もしや拡張本の特徴はすべて160頁で構成されているのではないか？ と考えていたものだが、そんなことはないかと改めて把握することになった。

緊急搬送後の入院の際に持ち込んだ『クトゥルフ・ダークエイジ』を開く。

『クトゥルフ・ダークエイジ』中身には中世ヨーロッパ時代物のシナリオや、当時の武器、病に関する情報。新たな魔術について記載されていたため、何かの役に立つかもしれないという望みを込めて研究を始めるのだった。

……

……

……

## Episode 83 『ヒマリがやってきたぞっ』

入院から2週間目へ突入しましたが、今日も今日とて私は五車学園の地下の施設で、入院暮らしが続いています。

毎日毎日入れ替わり立ち代わりで、私のお見舞い客は様々な人たちが訪れていますが、頻度的な話をすれば……。主に顔を見せに来てくれるのは陽葵ちゃん。次に鹿之助くん。その次に青空。日葵の母親、鹿子ちゃん、蛇子ちゃんとふうま君の6人が主に見舞いに来てくれるような感じで……。

陽葵ちゃんは言わずもがな私の食事介助。もう『ここはお前の家か』って頻度で訪れて長居する。

鹿之助くんは学校での出来事を話しに。たまに陽葵ちゃんが、学校の出来事を話そうとする彼の話を遮って妨害することも度々あったけど……。鹿之助くんは利尿剤を盛って彼が尿意を催して席を外した時に陽葵ちゃんへ「ヴ〜〜〜つ」と唸ったへ威圧を込めたところ、妨害はあれからできてはいない。貴重な鹿之助とアセトシカアノニンを補充する。そして自身の頻尿に理解ができなくて不思議な顔をしながらトイレへ走って行く鹿之助くんは可愛かったです。またやろう。

その次にやってくる『青空 日葵』の母親はパジャマの交換やふりかけの追加、足の容態の確認。

同じく入院している鹿子ちゃんはデザートをせびりに。

蛇子ちゃんは授業の進捗具合を教える。

ふうま君は図書館で本を見繕っては、私に本を貸しに持って来てくれる。

その他にも、心寧ちゃんやなお先輩、コロ先輩、神村さんと眞田先輩、燐先生までもが顔を見せに来てくれた。

入院した翌日こそどたばた☆神社な騒動のおかげで、うやむやになっってしまったもの……。

心寧ちゃんからは、ちゃんと正式な感謝の気持ちも伝えてもらったし、無事にコロ先輩には『魔族語で書かれた書物』のメモ端を渡すこ



とも叶った。

コ口先輩には、退院したら写本を渡そうとも考えていたところもあつたが、そもそもあの本はあのまえさき市でえっちなお店を開いている蛇子ちゃんが、わざわざ会いに来てまでこちらを色々と探つて来ようとする代物なのだ。私の目の届かないところでコ口先輩が被害に遭うのはこちらとしても気分が悪い。だからこそ、記憶を頼る形にはなるが写本の一文をメモに書き写して渡す形となつた。これならば文字を知る人間がメモを拾つたとしても意味までは理解できないだろう。

……なんだかんだで、毎日楽しい。確かに私の学校生活でのイベントは潰れてしまつてはいるが、このお見舞いのおかげで私の2度目の青春は、それなりに充実はしていた。

……  
……

タツタツタツタツタツ……

今日も早速お見舞い客がやってきたようだ。

この足音は陽葵ちゃんに違いない。

病院で走り寄ってくる人物は、陽葵ちゃんか鹿子ちゃんしかいないこともそうだが……。

走つた時の足音の間隔が鹿之助くんの場合、1としたとき。〈物理学〉的な音の到達速度を計算した時、陽葵ちゃんは0.8倍遅く、鹿子ちゃんは1.1倍速い足音の間隔に差が生じている。

鹿之助くんは身長が低い分、足の歩幅も短いからね！ かわいいね

！

バンツ！

荒々しい扉の開閉音と共に、その人物は入ってきた。

私はそれを慣れ親しんだ微笑みの表情で出迎える。

「いっちばん乗り〜！ 日葵ちゃん！ 私が居なくて寂しくなかつた？」

予想は的中。そこに立っていたのは陽葵ちゃんだった。彼女は私

に対して、死体の山でカードキーを見つけたときのような笑顔で、しかし両手は後ろに隠した様子でウキウキしながら入ってくる。

「いや、別に……」

「またまたあゝ そんなこと言って！ 顔はにっこりしているから、本当は嬉しいんでしょ!? 嫌よ嫌よも好きのうち〜っていうもんね！」

「……。まあ、ほぼ毎日欠かさずにお見舞いに来てくれるのは確かに嬉しいのですが……」

「ほらっ！ やっぱり！ あははは！ 今日も来てよかつたあ！」

「ところで、一つ疑問を投げてもよろしいですか？」

「なに！ なに!? 日葵ちゃんの知りたいことならなんでも答えてあげるよ！」

彼女は日光や電気の光に当たると、ユラユラと左右に揺れるフラワーロックのように身体をクネクネと揺らしながら、一步一步着実にその距離を縮めてくる。

別に彼女のことが、嫌いになつたり嫌な存在ではないのだが……身動きの取れない状況で繰り広げられる、不審な動きと彼女の浮かべる悦ばない表情。それはこちらの警戒心を煽り立ててくる。

彼女が未だに背後に隠しているものが、何なのかは知る由も無いが……。催淫スプレーならぬ、催淫スプレーの可能性は……。なんとと言っても対魔忍世界なのだ。彼女の精神状態も鑑みて、ありえない話ではないだろう。まあ、一般人の学生つてことを考慮すればありえない話だろうが。

ところで催淫スプレーとはどんなものなのだろうか？ 折角、対魔忍世界に転生したのだから、記念に一度は浴びてみたいとは思う。前世で対魔忍世界へ訪れた……。というよりも拉致された際に聞いた程度の情報なのだが……。快楽で身動きが取れなくなるほどの強烈な媚薬らしい。だが、そんなご都合主義なシロモノ、私の世界や時代には存在しないものでもあった。

「えーつと……。親友の心寧ちゃんとの関係は大丈夫ですか？ 私ばかりにかまけて、彼女との交流をおろそかにしてはいけませんよ」

「心寧ちゃん？ もー日葵ちゃんたら、心配しなくても大丈夫だよ！  
心寧ちゃんとは、学校内で仲良くしているし、ちゃんと日葵ちゃん  
のお見舞いに言っていることも伝えてあるから！」

陽葵ちゃんは、本当によく笑う。

今の彼女の笑顔を例えるなら、幼児が描く太陽に笑ったようなペ  
カーっとした表情と例えるのが一番だろう。

〈心理学〉で彼女の発言に後ろめたい部分がないかどうか一通り見  
定めるが、あのニコニコの笑顔には一点の曇りも感じられず、ちゃん  
と心寧ちゃんとの交流は継続しているように見えた。

「それならいいのですが……。なんだかんだで陽葵ちゃんと心寧ちゃ  
ん。異色の凸凹コンビでしたが息は合っていましたし……。友達は大  
切にしてくださいね？」

「うん！ もちろんだよ！ あっ、そうだ！ 心寧ちゃんも日葵ちゃ  
んが早く治りますようにって言ってたよ！ 今週もまたお見舞いに  
来るって言ってたし、最近はふうま君とも一緒に帰れるようになった  
から、日葵ちゃんにまたお礼を言いたいんだって！」

「マジで？」

陽葵ちゃんの言葉に、目を丸くせざる負えなかった。

「ってことは、だ。帰り道が混沌と化しているのが、容易に想像がで  
きてしまう。」

「……心寧ちゃんは恋愛クソ強女だ。でも、蛇子ちゃんは心寧ちゃん  
に比べるとその押しは弱め。これはとんでもないサークルクラッ  
シャー（破壊神型）を乱入させてしまったかもしれない。」

面白半分で見たい反面、まえさき市で3時間もウンコしていた方の  
蛇子ちゃんに対して申し訳ない気持ちが始き上がる。

「あははははー。わたし、日葵ちゃんのそういう想定外の時に敬語が  
崩れるのも好きだよ！」

「それは、どうも。……えっと、鹿之助くんには既に伝えてあるのです  
が、来週は……。いらっしやられる日時は水曜日以降が良いって伝えて  
もらえますか？」

「わかった！ 水曜日以降ね！ 伝えとく！」

「ありがとうございます」

「ところで日葵ちゃん。どうして水曜日以降がいいの？」

「あー……それは……」

来週の水曜日以降の面会が良いと日時指定する私に陽葵ちゃんは、やや食いつき気味にベッド柵から内側へ身を乗り出し、こちらの顔を覗き込んでくる。その口元は笑っていたが、目だけは鈍く光る輝きを秘めていて……。

私も彼女の圧から逃れるよう目を逸らす。目を逸らしても、より激しくベッド柵から身を乗り出して来ては、確実にこちらの視界に入ろうとしてくるんですけどね。

「あと来週の面会は水曜日以降がいいって話、私は初めて聞いたけど……？」

なんか愛の重い彼女みたいなことを言っている友達が目の前に現れたが、そっちの理由であれば割と遠慮と容赦なく言えるぞ。

「陽葵ちゃんは毎日、通い妻張りに来るじゃないですか。それに『来週は水曜日以降に来てください』って伝えて、今週の金曜日から来週の水曜日までの6日間。我慢できま——」

「せん!!」

「でしようね!」

うん! 正直で、素直!!!

陽葵ちゃんの素直かつ私の発言に被せながらも、できないことを力強く宣言する陽葵ちゃん。素直だわ。素直すぎる。そして正直。〃  
隠そう〃 つて気が微塵にも感じられないもん。でもね、だったら猶更 看護師さんの勤務の都合上入浴介助がして貰えない 〃 金曜日から来週の水曜日まで面会を拒否したいか〃 なんて理由は話せないわけですよ。

理由を話そうものなら彼女から私への 〃スキンシップ〃 が苛烈の猛烈を極め、ベッドから降りることすらできない身動きの取れない私はたやすく蹂躪されるに違いない。……特に今の陽葵ちゃんのお見舞いムーブを考えれば猶更だ。

「えへへ……♪ でも日葵ちゃん、今、私のこと 〃通い妻〃 つて言ってくれたの嬉しいな」

おいしい？　なんか変なこと言い出したぞ。

陽葵ちゃんの言葉に思わず変な顔になる。そんな顔で、陽葵ちゃんの方を向くが彼女は今モジモジと身体を揺らしながら恋する乙女のように顔を赤らめていた。

確かに6月の上旬では、陽葵ちゃんのことを生涯の伴侶として迎え入れたら女神のような相手だとは思ったよ？

そのハツラツとした元気で、洋館侵入時では部隊の士気を上げてもらうのに助けて貰ったし、W蛇子ちゃんよりは小ぶりだけどDとEカップ程の胸はカードキーをしまうのに貢献してもらったさ。それにその素直な反応と仕草は今も癒されるし、感情表現が豊かだから今どんな気持ちかも分かりやすくてこっちとしても付きあいやすい子だけど……。

でも私が言ったあの「通い妻」っていうのはあくまでも例え話であって……。

前世も今世も私はノンケなのだ。オトコノコIIガスキー。  
Normal Love  
N L ……おわかり？　将来の伴侶がどうなるかは分からないけど……今は鹿之助くんが大好きだし……。

「……例え話ってご存じでしょうか？」

「え？　本気でしょ？」

「いいえ」

彼女は真顔で答える。

うん。そっかー。本気にしちゃったのかー。

でもね、私としては例え話で深い意味はないんだよ。でもきつと看護師さん曰く発狂状態から持ち直したって話していたし、こちら辺は拒否すれば分かってもらえ——

「なんでー!?　洋館でも、病院でもあんなに愛しあったのに!?　日葵ちゃん『突っ込むのは苦手』って言ってたから、『誘い受け』な日葵ちゃんの為に私がいっぱい突っ込んであげたのに!？」

なかったわ。

彼女の大声が、病室内に響き渡る。でもこれだけ大きな声だと、絶対に病室の外まで響いちゃっているよなあ……。語弊を生むような

ことが、病室の外に響いちやつたよな。

でも、私まで大声で反論してはならない。ここはあくまでも冷静に、宥めるようにして彼女を落ち着かせよう。

陽葵ちゃん。私達すごい死線を潜り抜けた仲だけど、まだ2週間ぐらゐの関係なの覚えているかな？ 対魔忍世界とはいえ、一般人同士でそんな肉体関係を結ぶのは早すぎるんだよ。

私と陽葵ちゃん、ダブルひまりだけどセフレじゃないんだからさ。

「えっと、陽葵ちゃん。病院で誤解を生むような内容を叫ばないで頂けますか？ 文脈も誤っていますよ？」 “私の口にご飯を” が抜けているんですけど？」

「間違っていないもん！ 私は、ご飯以外にも舌を日葵ちゃんのコリコリとした突起耳珠のついている穴外耳道に突っ込んだもん!!! 私の舌を突っ込んだもん!!! 肉厚でぷにぷにの部分耳垂（耳たぶ）もいっぱいしゃぶったもん!!! すごく、すごく、しょっぱかったあつ汗!!!」

「OK. 陽葵ちゃん。ちよつと落ち着いて黙ろうか」

確かに間違つてはないね。間違つてはいないけど、そんなに目を固く瞑つて、頬を赤く染めて首を横に大きく振りながら大声という事じゃないと思うんだ。

あと君が心寧ちゃんと仲が良い理由もわかったよ。余計な一言が加わる意味で、発言の方向性が似ているね。

でも、やめて貰つても良いかな？ その言い方はかなり語弊を生むから。恐らく今の絶叫で『耳』を嘗め回したことだと連想できる人は数えられる程度だと思うんだ。大多数の人は、今の発言は下半身の『ある部分』を嘗め回したって連想すると思うんだ。

それに陽葵ちゃんの声つてすごく通る声なの。響くの。遠くまで聞こえるの。だからやめてね？ やめてね???

そもそも “誘い受け” なんて単語を何処で覚えてきたのかな  
……?

おばさんね。数日見なかった友人が、明らかな専門用語に関する語彙力の上昇についていけてないの。そのうちリバーシブルとか、攻守逆転とか、オメガバースとか覚えてこないよね？

「ところで、誰から誘い受けそんな単語を教えて貰ったのですか？」

「“誘い受け”は他クラスのおもちゃちゃんに教えて貰ったよ」スンツ

……

「うわあー！いきなり落ち着くなー！」

「日葵ちゃんって、キャンプも好きなんだよね！ おもちゃちゃんに、キャンプ好きの日葵ちゃんの事を聞かれたから色々教えてあげたら、日葵ちゃんみたいなタイプを“誘い受け”って、にこやかに笑いなから教えてくれたの」

「ああー……うん」

その『おもちゃちゃん』とやらは……本当ににこやかに笑って陽葵ちゃんにそんなことを教えたのだろうか？ 腕組みをして何度も頭を捻つても、会話の文脈が分からない以上、確実なことは言えないが……にこやかに笑って教えてくれたというよりも、引きつった笑いで教えてくれた感じが否めないのだが……。

うーん。どうしてそんな話になったのかは分からないけど、退院が怖くなって来たぞ？ これ、陽葵ちゃんの絶叫も含めて、退院した後には誘い受けなクレイジーサイコロズみたいな噂話や不名誉なあだ名が増えていないよな??？ そもそも、おもちゃちゃんって誰だ？ 私のクラスには、そんな名前や愛称のクラスメイトはいなかったと思うし……。

「日葵ちゃんが突っ込めないって話もしたんだけど、そういう人のことはバリネコって言うんだね！ それじゃあ、私はやっぱりバリタチかな!？」

「看護師さーん？ 看護師さーん？ やっぱり陽葵ちゃん正気じゃないですよー？ まだ私に異常な執着か奇妙な性的思考、特殊性癖マニエラを発症していますよー？ 聞いていますか？ 看護師さーん??？」

はあはあと息を荒げながら、私のベッドに身を乗り出して……いやベッド上の私の身体に押し掛かって、ギラギラと輝いたいつもの調子とは明らかに異なる陽葵ちゃんに若干引き気味になりながらも、ナースコールを押しマイクに向けて助けを呼ぶ。

そろそろ貞操の危機を感じ始めた。

## Episode 84 『陽葵のプレゼント』

「うわーん！ 看護師さんと呼ぶのやめてよお！ 冗談！ 冗談だつてばー！ ね?! ごめーんーねっ！」

マイク越しの看護師さんに助けを求める私に、陽葵ちゃんはNYN姉貴のイントネーションで謝罪しながらナースコールのリセットボタンを連打してサービステーションと繋がる私の通話を強行手段で断切った。彼女の両胸が私の鼻頭に突き刺さりかけたが、それを右手の甲で防ぎきる。

同時に陽葵ちゃんがゼロ距離まで近づいてきたことで、入室時から背後に隠し持っているものの全容も掴めてきた。あれはプレゼントボックスだ。クリーム色の箱に、萌黄色のリボンと黄赤色のリボンがひどく絡み合うように……まるでこれから起きる痴態を予言するかのような嫌な結ばれ方をしている。

「陽葵ちゃんの目が冗談じゃなかったんですよ……ところで、先ほどから背中に隠しているプレゼントボックスは何が入っているのですか？ この流れから嫌な予感しかしないんですけど」

ナースコールを手放したところで、陽葵ちゃんも私を胴体で跨ぐような姿勢になるのをやめてくれた。そこで意を決して、背中のプレゼントに尋ねてみる。

「あっ！ これ？ 別に変なものじゃないよ！ 日葵ちゃんへのプレゼントだよ！」

「……………」

「あ、その目！ 私のこと疑ってるでしょ！」

「そりゃ、ねえ……………」

「でも、そんな普段のジト目よりも目を細めた日葵ちゃんは、シリアスな顔でかつこよくて好き！ でもこればかりは本当だよ。変なものじゃないし、もし変なものだったら木の下に埋めて貰っても構わないよ！ だから開けてみて！」

そういつて彼女は私に萌黄色と黄赤色のリボンが絡み合ったプレゼントボックスを照れたような笑顔を浮かべながら両手で突き出す



ように差し出してきた。

そのセリフは、のちに左手と左足だけが地上に突き出る形で、左半身犬上家の一族の刑になるような流れではあったが……。

きつとこのまま開けなければ、私が開くその時まで居座るようなそんな気してプレゼントボックスを両手で受け取り、リボンを解いて箱のフタを開ける。

「ババーン!!」

その効果音をお前陽葵ちゃんが言うんかい！　と言いたくなるようなツツコミをこらえながらも、箱の中を覗き込む。

箱の中にはオレンジ色のレザージャケットが入っていた。

——私は——これについて見覚えがある。

「ねっ？　変なものじゃなかったでしょ？」

「陽葵ちゃん……これって……」

両手を後ろ手に回して、こちらを覗き込んでくる日葵ちゃんに視線を返した。いま彼女は折部やすなバリのドヤ顔で、さながら驚くソーニヤちゃんのような私を見つめている。箱の中に手を入れて入っていたものを広げて、驚く私を見てその反応から想定を出し抜いたことを大いに喜んでいる。

「これね！　日葵ちゃんの為に、新調してもらったの！」

「ほあ」

「でも、日葵ちゃん。初めて私の対魔忍スーツ勝負服の上着を纏ってくれた時、半丈が短いのは好みじゃないのかなと思って、普通のジャケットと同じような長めにして私服でも使えるようなデザインにしてみました。……どう、かな？　気に入ってもらえた？」

「気に入ったも何も……」

陽葵ちゃんの顔と、プレゼントボックスの中から取り出した陽葵ちゃんとお揃いのオレンジ色のライダーズジャケットを交互に見る。こんなの、こんなのって……。

「最高ですよ……！　大切にしますね！」

「ほんと!?　やったあ！」

嬉しさのあまり彼女からもらったライダーズジャケットをぎゅっ

と抱きしめる。私の心はキルミーベイビーだ。

そんな様子に、陽葵ちゃんは先ほどまでの喜んでもらえるか不安が募ったような顔は一瞬で払拭され、大きな万歳をしながら私の喜びに合わせて一緒に嬉しそうな顔をする。

改めて彼女からプレゼントしてもらったジャケットを細かく確認し始める。

基本的には陽葵ちゃんが着用しているジャケットと同じ物だったが、相違点としてはまず、陽葵ちゃんが言うように総丈が着用したときに私の腰に来るほどに伸ばされている。袖口は季節や時期に応じて腕捲りしやすいような材質で、見方を変えれば丈の短いトレンチコートのような形だった。さらに陽葵ちゃんが着用していたものよりもポケットが多く、外面に4カ所、内面に4カ所とポケットだらけだが、私としてはバッグなどを持ち運ばなくても小物をしまうことのでき、なおかつ深い構造のポケットはスリから身をまもるこのジャケットはとても魅力的に映る。

試しに早速羽織るが、重量はあ(Episode34)の時と変わっていないような気がする。保温に適しているのか、ポカポカと温かい熱が溜まっていくのを感じた。

「はわあ……！ あれ!? ポケットに革手袋も!？」

「うん！ 基本的にジャケットとセット品だからね！ それに、ただの革手袋じゃないよ！ この手袋は従来品と違ってこの手袋は細かい作業もできるんだ！ すごいでしょー！」

「それはすごい！ すごいですね!? え？ こんなにいいものを貰ってもいいんですか?!」

「もっちゃん!!! 日葵ちゃんがそんなに喜んで受け取ってくれるなら、本望だし……」

先ほどよりも素早い速度で、プレゼントの品と陽葵ちゃんの顔を交互に見る私に彼女は少しだけ表情を曇らせた。

そんな普段は見せたこともないような初めての表情に、彼女の顔に私の視線が釘付けになる。

「……日葵ちゃん。鉄球で日葵ちゃんの足を折っちゃって、本当にご

めんなさい」

「?!」

「そのジャケットは贖罪のつもりじゃないけど……結局、あれから色々あってちゃんと謝れてなかったから……。こうして渡すものができて……。2人きりになれたら、ちゃんと謝ろうと思つてて……」

「陽葵ちゃん——」

「いいの！ 弁明しないで！ これは私の誠意なの！ だからこのまま謝罪を受け取って！」

「……」

陽葵ちゃんは両目をぎゅっと瞑つて頭を深々と下ろしてきた。

正直、足の件は私が洋館内で自身の〈幸運〉に頼り切つて、突発的な奇襲でも即座に〈回避〉ロールを振れる状態で扉を開けなかったことが全ての原因に起因すると考え、度重なる彼女の謝罪も私が悪いということでは丸く収まったのだと思つていたのだが……。

——彼女はそれでは納得しなかったのだろう。

「それでね……？ 贖罪は別に用意してて……これはトップシークレットな情報んだけど……」

「？」

首をかしげる私に、そつと彼女は近づいてきて耳打ちのような姿勢になる。耳を舐めてきたら、その月曜のたわわをビンタしてやろうと一瞬身構えるも〈心理学〉上ではそのような悪意は感じられなかったため、そのまま耳を澄ます。

「期末試験は、3人1組のチームを作つてキャンプをするみたい」「！」

「内緒ね?! 内緒ね?! 上原先生と紫先生と校長先生が職員室で話しているのが聞こえてきたから、この情報はほぼ確実だよ。辛うじて聞こえてきた話では、野外で生き残るサバイバル力を学生に付けることが目的なんだつて」

「なるほど……」

陽葵ちゃんの言葉に今度は私が目を瞑つて、ウンウンと頷く。

確かに五車町は市街地から離れれば、ほぼ森と山に囲まれた田舎

だ。遊びに出かけて遭難した場合、そのサバイバル力を身に付けて実戦に挑むというのは理に適っている。何分、森の中には熊や蛇もいるのだ。そういった獣に対する対処法や蛇を捌いて食べる訓練も教師の監視の元、訓練することは非常に有意義に働くはずだ。

それに私について尋ねてきた「おもちちゃん」なる存在がキャンプ好きの私について、陽葵ちゃんに尋ねてきたことも辻褄が合ってくる。

「どうかな？ この情報……」

「陽葵ちゃん……」

「う、うん」

「でかしました！」

「やった！ V！」<sup>ブイ</sup>

「Vです」<sup>ブイ</sup>

お互いのピースサインを並べて、ダブルひまりのサインを作り上げる。

陽葵ちゃんが私の脚を砕いたことは、最初から怒っても居ないし恨んでもいないが、彼女がその罪悪感を無効化させるには十分と感じられるほどのトップシークレットな情報ではあった。

これで私は登校復帰に時間が掛かってしまった挙句に、若干の筋力低下で本調子は出せないものの……この陽葵の情報が情報があるのと無いのでは優位性は雲泥の差となるだろう。

それにしても3人1組のチームか……。

どんな方法で組み分けが決まるのかは分からないが、私としては鹿之助くんをチームに加えて、あと1人を陽葵ちゃんが望ましい……。だが、陽葵ちゃんは心寧ちゃんと組むに違いない。そう考えると、ここは私個人の意向を押し殺すことで、慣れ親しんだ鹿之助くんは蛇子ちゃんとふうま君と組ませた方がいいか。

もしも彼がキャンプ中に困った状況に陥ってもサポートしに向かえるし、鹿之助くんを蛇子ちゃんとふうま君をうまいこと引き離せれば、私は合法的に彼を押し倒して単独行動は危険なことをその身に染み込ませることができる。

ふっ……期末試験までの期間、何をしなければいけないか明確化できたな。

「あくっ！ 日葵ちゃん、悪いことを考えるとき顔になってる！」

「ん、ん？ なんのことか分かりませんね??？」

「もうっ！ 嘘ばっかり！ あっ！ あとね！ あとね！ 日葵ちゃん、7月の頭には退院できるみたいだよ！ これは室井先生の情報！」

「ははあ……退院。やっつですか……」

「よかったね！」

「長くも苦しい……いえ、一人ぼっちではなかったもので、ちよつとは楽しい入院生活でした……」

「♥♥♥！」

コンコンコン——ボタン！

「ー！」

「……日ノ出か。貴様等は、いつも2人で仲が良いな」

「蓮魔先生！」

「こんには、蓮魔先生。できることならノックだけではなく入室しても良いか尋ねてからにしてほしかったですね」

「……そんなことをして、素直に私の入室を認めただか？」

「拒否しましたね」

「貴様は……質問に対して自身の感情を全面に押し出した即答ではなく、相手の気持ちを憚る解答も少しは学んだ方がいいな」

「はははっ。蓮魔先生みたいなタイプには自分の感情を押し殺すよりも率直な気持ちを伝えた方が良いと思ったので、つい」

「はあ……まったく」

更に陽葵ちゃんによる追加情報を聞いていると扉が開き、クリップボードにノートを挟んだ蓮魔先生が呆れたかのような顔をしながら私の病室へと入ってくる。近くに黒田先輩の姿はない。今回は私の病室に目的があったのだろう。それも黒田先輩を交えない、交える必要のない。あるいはもつと2人つきりで話す必要のある話題として。

でも何をしに来たのかなんて、おおよその目安はついている。

「日ノ出、見舞いに来ているところすまないが、私は青空に事件の事情聴取をする必要がある。しばらくの間、席を外して貰っても構わないか？」

「……はい。……日葵ちゃん」

「残念ですが、今回の生徒指導に関わる事情聴取は長くなりそうな予感です。陽葵ちゃん、また明日です」

「うん。またね！」

流石、蓮魔先生。陽葵ちゃんに駄々を捏ねさせる隙も与えずに部屋の外へと誘導している。陽葵ちゃんも、物悲しげな顔をしながら、それでも別れの挨拶は元気よく部屋を後にして出て行った。

「さて、蓮魔先生。洋館事件の事情聴取ですね？」

「ああ、そうだ」

「ちよーつとばかり、来るのが遅いんじゃないやありません？ 2週間前の出来事なんてざっくりとしか覚えてませんよ？」

「ざっくりとで構わない。報告書をあげるのに必要な形式上の物だ」

「それじゃ、よろしくお願いします」

「では、まず——」

Episode 84α | Tips 『報告書【雨降  
洋館／鋼人洋館】』

□侵入した生徒一覧

◇【穂稀<sup>ほまれ</sup> なお】

性別：男 学年：3年生 忍術：光遁の術 属性：科学

役職：対魔忍（五車風紀隊隊長）

負傷：なし

破損：あり（1カ所）

破損物品 破損箇所 原因 バルドル 弾倉部の破損 青

空 日葵がライフル狙撃したとの証言あり

心傷心の傷のこと。造語：あり（1症状）

症状 状態 原因 短時間の心因反応常軌を逸した振る舞

い（死々村 狐路の保護） 回復済み 恐ろしいものを見たことによ

る恐怖症

備考：

風紀委員として死々村 狐路と共に【雨降洋館／鋼人洋館】へと侵  
入しようとする学生の人数の把握、個人の特定、侵入の阻止を任され  
ていた。

任務継続困難な際には洋館内への侵入はせず、五車学園へ報告する  
ように告げてあった。

生徒指導部主任である蓮魔 零子も認知、任務を承認済。

実際には洋館内に侵入していたことをのちの聴取・脱出時の状況で  
発覚。

◇【死々村<sup>しむら</sup> 狐路<sup>ころ</sup>】

性別：女 学年：3年 忍術：魂遁の術 属性：魔性

役職：対魔忍（五車風紀隊、隊員）

負傷：あり（2カ所）

負傷箇所 傷の症状 備考 肩甲骨 打撲 特になし（不

明) 左肩 擦過傷すり傷 青空日葵が投げたとの証言あり

心傷：なし

備考：

風紀委員として穂稀 なおと共に【雨降洋館／鋼人洋館】へと侵入しようとする学生の人数の把握、個人の特定、侵入の阻止を穂稀 なの補佐として任務を任されていた。

任務継続困難な際には洋館内への侵入はせず、五車学園へ報告するように告げてあった。

生徒指導部主任である蓮魔 零子も認知、任務を承認済。

実際には、穂稀なの指揮の元で洋館内に侵入していたことをのちの聴取で発覚。

◇【神村 舞華】

性別：女 学年：1年 忍術：火遁の術 属性：自然

役職：対魔忍（火遁衆の筆頭格）

負傷：あり（1カ所）

負傷箇所 傷の症状 備考 頸動脈付近 擦過傷 青空

日葵より首を絞められたときに創傷

心傷：あり（1症状）

症状 状態 原因 ゾンビ症引き金を引き続ける反響動作

回復済み 恐ろしいものを見たことによる恐怖症

備考：なし

◇【速水 心寧】

性別：女 学年：1年 忍術：迅遁の術 属性：科学

役職：対魔忍（実務未経験）

負傷：あり（1カ所）

負傷箇所 傷の症状 備考 下腹部 淫紋外的施術ではな

く、魔術的なもの（但し淫魔族のものとは異なる） 魔界医療を以てしても、現状では治療不可

心傷：なし



備考：なし

◇【日ノ出 陽葵】  
ひので ひまり

性別：女 学年：1年 忍術：陽遁の術 属性：自然

役職：対魔忍（実務未経験）

負傷：なし

心傷：あり（2症状）

症状 状態 原因 フェティッシュ青空 日葵への執着

回復済み？ 恐ろしいものを見たことによる恐怖症 奇妙な性的

思考青空 日葵への恋愛感情 未回復 恐ろしいものを見たことによる恐怖症

備考：

本侵入事件の主犯格。

◇【青空 日葵】  
あおぞら ひまり

性別：女 学年：1年 忍術：調査中 属性：不明

役職：一般人

負傷：あり（17カ所）

負傷箇所 傷の症状 備考 左脛 開放粉碎骨折開放骨折：骨

が皮膚を突き破った状態 本人は転んだと証言／日ノ出 陽葵の鉄

球によるもの 左足（楔状骨く中足骨） 斜骨折 本棚を足に落と

した／日ノ出 陽葵の鉄球によるもの 左足指（1く4指） 爪の

損傷？離状態 本棚を足に落としたり／日ノ出 陽葵の鉄球によるも

の 左上腕背部 III度熱傷重度のやけど 穂稀なおの光遁の術に

よるもの 右大腿背部 III度熱傷 穂稀なおの光遁の術によるも

の 顔面 打撲 空中浮遊状態からの落下 顔面（額） 打撲

五車の森の丘からの滑落 鼻背部 打撲 神村 舞華による殴打

胸部 打撲 空中浮遊状態からの落下 背部 打撲 神村

舞華の投げ技 下腹部 内出血 神村 舞華による殴打 ほぼ

全身頭部および四肢 擦過傷 五車の森の丘からの滑落 ほぼ全

身 I度熱傷 神村 舞華による火遁術

心傷：なし

備考：

本件の【雨降洋館／鋼人洋館】に関して、生徒指導部主任：蓮魔零子へ事前に報告があり。

その際には『3人の生徒が侵入しようとしている。3年2人と1年1人』との話であり、既に穂稀　なお及び死々村　狐路が入手した情報より1年生が2人不足。ここでの不足者は、のちの五車学園に設置された監視カメラ映像の解析により、主計画者である日ノ出　陽葵と、その友人である速水　心寧を校舎裏に呼び出し、その際の本人の表情から引き留めの説得の試みが成功したと考えた為と思われる。

またここ最近の彼女の行動を調査したところ、生徒指導に加え眞田　焰による追加の訓練による怪我全身におよぶ皮下出血（状況に関してはE p i s o d e 3 8 参照）のことを気にする様子もなく図書館に入り浸って【雨降洋館／鋼人洋館】についての調査を熱心に行っていたようである。

今回の件では、一貫して【洋館探索】に関して否定的な立場を取っていた様子。

□『備考』

◇【青空　日葵】

校長の指示のもと、魔界医療による治療は左足の開放粉碎骨折のみに留め、左上腕背部および右大腿背部によるⅢ度熱傷は彼女自身の治療能力を調査することも兼ね自然治癒を促すⅢ度熱傷は自然治癒を試みる場合、完治まで約1年は要する経過観察を行うものとする。

また本人やその家族・友人達、上原　燐には『重度の怪我は多少の傷は残る恐れがあるが、すべて魔界医療によって治癒され短期間で完治する』と伝達している。

◇【日ノ出　陽葵】

青空　日葵に対する執着がとても強く、五車学園の地下病院にて入院後、事情聴取をするが中断となる。

この時、ルービンの恋愛尺度による計測では極めて深い愛情を持つ

ていることがわかっている。

何かの情報になればと『青空 日葵の好きなところ』を約200項目。約4時間かけて聴き取るが、一貫して分かる情報以外に特筆できる点は見当たらず。

聞いているこつちが恥ずかしくなったため、この聴取は中断する。このデータは後日、報告書―βに内容を転記・添付するものとする。

□『少女について』

本名：影本 鹿子「かげもと しかこ」

性別：女性 年齢：06歳 誕生日：6／15

血液型：A B 身長：108.8 cm 体重：18.18 kg

(BMI 15.36 (痩せすぎ))

趣味・嗜好：読書、アイスクリーム(バニラ味)

疾病・既往歴・特になし。BMIが痩せすぎの兆候を出しているが、洋館侵入後何も食べて居なかったことに起因していると校医の室井光彦は推察している。

経歴：

影本 鹿子および穂稀 なおに事情聴取を行ったところ。

元より五車の人間ではなく、外部の人間であることは確認が取れ、戸籍上も存在することも確認済みである。

家族は4人構成で父親と母親。そして妹の4人でピクニックに訪れていたそうだが、突発的な悪天候とカーナビの故障が相次ぎ、五車町近くの森林地帯で立ち往生する。彼女の父親がJAFに連絡し、救助を求めるも携帯電話の電波が森に遮られ不通で困り果てていたようだ。雨が止むまでの間は車の中で過ごしていたそうだが、どこからともなく五車で侵入者を追い払い、魔族を排除するために飼育している忍熊が現れ彼女の家族を襲ったものとみられる。

忍熊が他の侵入者に興味を引かれたときに、家族は車両から脱出し、一時的なセーフハウスとして逃げ込んだ先が『鋼人洋館』であったようだ。そこで彼等もまた例外なく首のない亡霊に襲撃をされ、彼女の妹および両親は亡くなったようだ。

身辺調査も一通り済ませたが、他に頼れそうな親族も存在しなかったため彼女の身柄は五車学園で引き取ることになった。彼女もまた例外なく、今後を五車で生きる者として対魔忍とはならずとも対魔忍の補佐を行うものとして五車学園の英才教育を受けることに決まった。

養子が決まるまでの間は、体調の兼ね合いもあるとのこと。五車に存在する政府公認の児童施設へと入れられる。

後日、調査隊を送ったところ廃車となった車両を発見。しかし車内火災があつたのか、全焼してしまい更なる詳しい調査は行えなかった。(周囲の焦げ具合より火災があつた時、雨で炎が消し止められたと見受けられる)ただし、現場に残されたタイヤから忍熊による詰め引き裂き痕、噛みつき痕が見受けられた。

本部に対し、本件を無害な一般人に対する暴走行為として事故報告書および再発防止策の立案・提出をする。

□『一貫して分かっていること』

侵入した生徒に対する事情聴取で、特筆できる事柄として。

・『速水 心寧』及び『青空 日葵』の両名は他の侵入した4人の救助のため洋館に侵入したこと。

・洋館内部にて対魔忍5人の指揮を一般人である『青空 日葵』が執っていたこと。

・約15カ所の負傷に加え、片足が粉碎骨折、2カ所のⅢ度熱傷を患った状態で3人の生徒(死々村 狐路、日ノ出 陽葵、神村 舞華)の運搬を行っていたことが3人の証言から分かっている。

逆に『青空 日葵』の口からはそのような内容が自らの口からほぼ一切話されることがなく、こちらが既に5人から聞き取りを済ませ、知っている情報を仄めかすと口にする程度であつた。本人にとつて都合が悪いような話については『思い出せない』と答え、それを『当時はがむしやらだったし、約2週間前の出来事だからよく思い出せない』と証言している。

更にこちらがよく思い出すように促すと『蓮魔先生は事件の約2週

間前に生徒指導した生徒を覚えているのか?』と、小賢しいクソガキしたり顔で軽口をたたく余裕を見せたため『青空 日葵、貴様を生徒指導した』と答える。

・『青空 日葵』が主に口にした内容は以下の通り。

☆(※1)『日ノ出 陽葵』がムードメーカーとなつて憂鬱な空気を防いでいたこと。

☆(※2) 足の負傷で行動に支障が出てしまい脱出を諦めた時『神村 舞華』が自分を背負ってくれたこと。

☆(※3) 仲の悪い神村との仲介役とリーダー役を『穂稀 なお』が担ったこと。

☆(※4) 青空 日葵の頭部を神村 舞華に碎かれかけた時に『速水 心寧』が間に入って助けてくれたこと。

☆(※5) 『死々村 狐路』については暴走した穂稀 なお注目を引いたことや黄泉よみと攘りりによって、洋館で何があったのか解明に努められたことなどを話した。

・他者の証言とのすり合わせ

(※1)：青空日葵への聴取中、扉の裏に隠れ盗み聞きしていた『日ノ出 陽葵』曰く。先陣を切つて探索したり、負わせた怪我で倒れるほど重傷なのに、ずっと他の皆を励ましていたり、身体を張つた一発即興演奏会ギャグで笑いを誘う『青空 日葵』の方がよっぽどムードメーカーだったと証言している。

(※2)：この時は5人を逃がすために、『赤い靄のドレスを纏った幽霊』を引き付ける囹役を一身に引き受けようとしていたことが『穂稀 なお』の証言から分かっている。

(※3)：のちの確認で本件に関して嘘はついていないが、本人の口から『青空 日葵』自身が5人を率いたことは言及しなかった。

(※4)：『速水 心寧』からは助けただけではなく、洋館内での約束事を守るために一度は洋館の外へ出られたのにも関わらず、助けに戻って来てくれたとの証言あり。(我々もその瞬間は確認済み)

(※5)：『死々村 狐路』より、情報共有したときに妙な心配事を呟いていたとの証言があった。黄泉録りをする事に関して何か危険を

及ぶことを警戒した様子だった、と。警戒の理由は不明。

また、そんな青空 日葵の口からも他の5人と共通して話したこと  
と言えば、『鋼人屋敷』には『ドレスを纏った首のない貴婦人』が存在  
し、その亡霊は人類や侵入者に仇成す存在であること。5人はその  
『ドレスを纏った首のない貴婦人』を直視してしまったことで、心神喪  
失状態に陥ってしまったことが話されている。

対魔忍が次々に狂気へと陥るなか、一般人である青空 日葵に対し  
『何故、貴様だけは何とも無かったのか?』という更なる問いかけをし  
たところ『現実味がなく、まるでゲームの世界に迷い込んでしまった  
みたいだった。暴走する5人を見ていたら、それが逆に私を冷静にさ  
せてくれた』との証言を行っている。

#### □考察

主に『青空 日葵』の証言記録の傾向からは、あまり自身に関係の  
ない内容について。特に自分のことよりも仲間の武勇伝が話される  
傾向があつた。

更に聴取の中で、青空 日葵がしきりに日ノ出 陽葵をかばう様子  
が散見された。理由は不明だが、恐らくこのような行為が日ノ出 陽  
葵の精神障害狂気状態に一因していると考えられる。

日葵関連』

□『青空 日葵』

◇【脱出の状況】

顔面から手を用いることのないヘッドスライディングの要領で、洋館から姿を現わす。

その瞬間を目撃し、本作戦に自ら志願してきた五車学園の用務員と対魔忍『沼津<sup>ぬまづ</sup> 彦四郎<sup>ひこしろう</sup>』の話では、顔面強打不可避の着地に関して、決死の覚悟の表情を浮かべたままの胸元がはだけた『青空 日葵』が上記の状況で出現したとのこと。

『青空 日葵』の背中には『日ノ出 陽葵』が幸せそうな顔をしてしがみつき、『青空 日葵』右手には大阪の道頓堀グリコサインのポーズを取った『死々村 狐路』の姿、左手には洋館内側へ向けて火遁術のパワー制御のために特別に制作された携帯式火砲を決死の表情で連射している『神村 舞華』、膝裏には『穂稀 なお』がしがみついていたという状況だったようだ。

沼津の咄嗟の判断による巨体を生かした泥遁の術「泥太夫」によって、着地地点に割り込むことで『青空 日葵』が致命傷を受けることを避けられたようだ。

そのあと『穂稀 なお』が『青空 日葵』の後頭部に対し、破壊されたバルトル穂希 なおの得物の銃底で追撃を加えようとしたため『上原 燐』が彼女に駆け寄り時間稼ぎとして沼津による泥遁の術で即座に引き離れたとのこと。

更にその後は『上原 燐』による『日ノ出 陽葵』を『青空 日葵』から引き離れた後、教員である蓮魔、五車学園生徒の黒田による尋問ののち、校医である『室生 光彦』の介入もあり簡易テントでの治療を受けにその場から離れる。

◇【再突入の状況】

周囲の警戒を行っていた五車学園の生徒である『氷室<sup>ひむろ</sup> 花蓮<sup>かれん</sup>』が『青空 日葵』の再突入に気が付き、蓮魔へと報告に入る。

その際、以前の問題行動や紫や校長から聞かされていた彼女の違和感に対する対策として、蓮魔、黒田、氷室、眞田、篠原の5名での静止を行う。

立案した作戦については備考参照篠原の土遁術で地面を隆起させ洋館侵入を妨害し、黒田と氷室で青空を取り押さえる作戦。(失敗)

結論から。やはり、『青空 日葵』を普遍的な女子高生として見るには無理がある。

奴は常に仮拠点の全体の動きを常に把握していた。

五車学園に在籍している1年生で、あれだけの視野の広さを持つものはどれだけいる？ あらかじめ黒田と氷室には、逃げ場を失った青空の確保に加え、篠原の土遁が成功するように注意を引く陽動として動かしていた。しかしその動きすらも『青空 日葵』は見抜き、5人の中で最も注意を寄せていたのは、忍法を発動させようと動いていた『篠原 まり』であり、その眼は常に彼女を注視していた。

そして篠原が手を地面につく瞬間に、私達では手出しの及ばない洋館の中に転がり込んだ。

■アサギ校長・八津(※紫先生のこと、本名：八津 紫)宛て個人文書

私は何よりも信じられないのは『青空 日葵』は室井の手当てを受けていたはずだった。にもかかわらず次に私が奴と出会った時には、皮膚から骨が飛び出して、通常では歪まない方向に捻れた脚を露出させていた！

添付した写真は確認したか？

あの足で。あの足で。だぞ!?

最期に奴を診ていた室井にも事実確認をしたが、「速水 心寧が洋館に取り残されているから」という理由で治療を拒否し、洋館で手に入れたライフルと松葉杖を片手に走り去ったそうだ。

あんな傷を抱えた状態で奴は「治療なんか」と吐き捨てて、速水



心寧の救助を優先してまた洋館内へと飛び込むように再突入していった！

校長は奴のあの異常行動を正確に認識されているのか？！

当時、五車学園に在学していなかった校長はともかくとして。私はもちろんのこと八津は洋館について、生徒会長としても！ 五車学園でどのような規定となったかよく知っているはずだ！

それは事前に図書館で調査を済ませていた奴も『入ったら最後』結末は、どうなるか知っていたはずだ！

だが奴はそれを承知の上で！ 負傷した状態で再度侵入していった！ あまつさえ眞田を暗に扇動したうえでな！ その結果、上原が真っ先に侵入していった！ あの原 燐が眞田よりも先に突入していったのだ！

……もうあの時の状況について、何が起こったのか……。

当時の状況を思い返すこと自体、目頭を押さえる程につらい。

何をそんなに彼女の正体について強硬手段を用いずに探ることを恐れているのか、私には分かりかねる。何度でも私は報告するが、奴は決して“ただの一般人”としてカテゴライズされるような人物ではない。

どこの日本国内に自身を辱しめ性的暴行を加えてきた人物の死体を、その日に、自ら率先して、報復される危険性を踏まえながらも、全裸であることを気にする様子もなく、調査に乗り出すような “ただの一般人” がいる！？

脱出の間際に、あの眞田さえも指摘をしたが、

恥ずかしげもなく洋館地下内部を全裸で右往左往徘徊し！

その全裸のまま、脱出することよりも先に自らを辱めた加害者の死骸を調査して！

天井から吊り下げられた逆さ吊りの死体に臆する様子もなく！

性的暴行を加えてきた人物の死体から嬉々として持ち物を物色、強奪し！

直前まで空中へ宙吊りにされていたのに疑問や恐怖、気にも留めていないような素振りです！

元気に満ち溢れ、満面の笑顔と大声を張り上げて、歓喜の舞として洋館内を走り回る！

そのような胆力を持ち合わせるような一般人が居てたまるか!!!!  
まだ校長や八津が奴を一般人だと言い続けるのであれば、もう一度よく検討するべきだ。直ちに尋問も行うべきだろう！

アイツは明らかにおかしい！

もう頭のネジだとか、倫理観だとか、価値観だとか、そういう次元で済まされる話ではないぞ！

うまく表現できないがとにかく常人から乖離した行動があまりにも目立つ！

対魔忍ならば対魔忍として雇用し、対魔忍としての『道徳を含めた義務教育とを受けさせるべきであるし！

対魔忍や五車、日本国の秩序を脅かすものなら更なる力を付ける前に即刻排除すべきだ！

#### ◆個人文書追記

前回、送付した文書にしては申し訳なかった。私としたことが、つい冷静さを欠いてしまった。

追記文としては、『青空 日葵』の忍法についてだ。

眞田は個人的な訓練ののちに『脅威の体力と回復力』を持つ忍法ではないかと推測したが、この辺りも再調査を進言・要求する。

今回、雨降洋館／鋼人洋館に侵入した生徒から『青空 日葵』が重傷を負った状態で生徒3人を同時に運搬したという情報が上がっている。これは『脅威の体力と回復力』の忍法によるものとは考えにくい。また、日ノ出 陽葵いわく。この運搬方法を躊躇わずに行ったそ  
うだ。

本人は『普遍的な女子高生』・『ただの一般人』として振る舞っているが、即座にその人間離れた行為を実行できる辺りから考察すると、自身の忍法の開花に関して自覚しているのではないかと考えられる。

尋問の際には、私も同席させてほしい。大した理由ではない。あの

クソガキの化けの皮が剥がして暴れられた場合、取り押さえる要員は必要だろうか？

それに、いまだ狂気的狀況にある日ノ出 陽葵が話していたことになるが、個人的にいくつか気になる部分があつてな。詳しくは『熱烈な愛の叫び』を参照してくれ。恋は盲目とは言うが……。

#### ◇【死体の調査】

銅色の肌の全裸の浮浪者について『青空 日葵』は非常に意欲的な姿勢を見せた。本人は死体の調査について陰湿な報復を未然に防ぐための死体調査だと説明してきたが……。

彼女が約1か月前まで「ただの一般人」として生活していたのであれば、この報告書から説明しなくても十分に理解してもらえらう。

また『上原 燐』からの報告によれば、十分な医学的知識にも長けていることが記録された会話内容から確認ができる。情報としては世間一般的に幅広く知られるような情報だが、医学を専攻している身でもないにも拘わらず、こうもスラスラと解説ができたのか疑問が残るものばかりだ。

#### ◇【怪我の具合について】

入院から1週間。魔界医療によって『青空 日葵』の容態は安定の一途をたどっている。複雑開放粉碎骨折をしていた左足も完治し、桐生佐馬斗の見立てでも何事もなく日常生活に戻ることのできるレベルまで回復した。

本人の治癒力を調査するために放置した実験である、左上腕、右大腿部、各1か所（計2カ所）に生じているⅢ度熱傷最重度のやけどについては、既に傷口自体は完全に塞がっている。皮膚にはケロイド状の傷跡が残るのみだ。

※ここで留意して欲しい情報として、Ⅲ度熱傷は完全に治癒するのに約半年（約110日）を要すること。それなりの頻度で医学治療を交えた傷の治療（手術も検討）をしなければ、その人物個人の治癒力

のみで完治することはない。

また本人はその部位に対して痛みの訴えは見られなかった。本人は自分で傷を確認できないことも相まってか今回の熱傷について軽く考えている様子が散見される。

本人を交えた治療状態に対するカンファレンスでは、カウンセラーありきの聞き取りが行われた。

傷が完治しているとはいえ、魔界医療も用いていないにも関わらず『魔界医療』のおかげで痛みはなく身体は快調なので問題ない」と話しているようだ。

これには室井は苦笑を浮かべ、彼女の両親ももうしばらく入院を推奨していたが「いいから早く退院させろ 勉強させろ 私の青春、夏色ハイスクール」との繰り返し発言しているようだ。勤勉なのは結構なことだが、いささか生き急ぎ過ぎにもほどがあるだろう……。

ただ鏡で見た時の傷跡（ケロイド状の部位を指して）が「海底火山が噴火して、形成された地形みたいで嫌だな」という独特な発言も見られる。もつと気にする部分はあるだろう。

□『侵入したことに對する生徒指導について』

校長と相談したうえ決定した『反省文を 5 10枚』提出させる。

『青空 日葵』にこの話を切り出した時には、腑に落ちない様子であり「生徒指導って、これだけですか？」と尋ねてきた。不服であれば増やすことも構わないと伝えたところ。少し悩んだ素振りを見せたのちに、その判断は対象者である生徒では判断しかねる配慮だと思われるためこちらに任せると差し当たりのない返事を返してきた。

のちに協力者として、ふうま小太郎経由での『青空 日葵』に対する処罰について、腑に落ちない事情を探らせたところ『青空 日葵』自身は停学か、二度とこのような事をしないように叩き込むための体罰として『真田 焰』から生徒指導を受けるものだと考えていたようだ。

あの時、室井が『青空 日葵』の所業について「お咎めなし」にしてはどうか」と進言してきたが、流石にそれは承諾しかねる処遇ではあった。それでも五車学園1年生に対しかつ、侵入した他生徒を5

人全員生存させた所業を考慮かつ吟味した上での生徒指導ではあるのだが……。

□『日ノ出 陽葵』

◇『青空 日葵に対する熱烈な愛の叫び』

・陽葵の日葵の好きなどころ

001. 眉がかわいい。

002. うぐいす色の虹彩が綺麗。

003. 鼻が小さい。

004. 悩んでいる時の顔がイケメン。表情については、094番

目の項目参照。(五車駅の監視カメラ映像より入手)

005. 同じ女だけど声が低くて安心する。

006. 照れる顔がかわいい。

007. 五車学園の中では身長が高い。

008. ほっそりとした体が綺麗。

009. 乳首の色がピンク色。

010. 乳首がかわいい。

011. 意外と筋肉質な背中。

012. 背中への乗り心地が安定している。

013. 馬乗りの乗り心地も安定している。

014. 寝顔が精悍。

015. 眠りが浅い。

016. ずっと寝言を言ってる。

017. 寝言が辛そう。

018. 悪夢を見ている時があつて辛そうに泣き出す。

019. 寝ている時に頭をなでると表情が和らぐ。

020. 寝ている時に手を繋ぐと安堵した表情になる。

021. 寝ている時に胸を揉むと、目を覚ましてボディブローが炸裂する。

022. でも殴る行為は無意識なのかすぐに謝罪してくる。

023. 大人っぽい発言が多い。

- 0 2 4. 同年代つぽくない。  
0 2 5. 年上のお姉さんと接しているみたい。  
0 2 6. 謎の安心感がある。  
0 2 7. 気にかけてくれる。  
0 2 8. 髪の毛からいい匂いがする。  
0 2 9. 耳の溝耳珠と対珠の隙間あたりが性感帯。  
0 3 0. 性感帯ここでは外耳および外耳道を指し示すを弄られると首が傾いてよろける。  
0 3 1. 髪留めのリボンが可愛い。  
0 3 2. 実は癖っ毛。  
0 3 3. それを隠してる。  
0 3 4. 泥まみれで泥臭いのだけど、体臭が好き。  
0 3 5. 我慢強い。  
0 3 6. 寝顔が子供つぽくない。  
0 3 7. 笑う顔がかわいい。  
0 3 8. 細かいところにも気がつく。  
0 3 9. あまり怒らない。  
0 4 0. 心配性。  
0 4 1. 見かけよりずっと大人に見える。  
0 4 2. 同じ対魔忍じゃないみたい。  
0 4 3. なお先輩や、コロ先輩も年下として見ているような気がする。  
0 4 4. ジト目が眠そうで癒される。  
0 4 5. 敬語で喋る。  
0 4 6. 緊迫した状況になると口調が崩れる。  
0 4 7. 崩れたときの男勝りな口調がすき。  
0 4 8. ヘビイメタルの色々な種類を知っている。  
0 4 9. ヘビイメタルを知らない私の為に即興で演奏してくれる。  
0 5 0. 少しひょうきん。  
0 5 1. 気遣いができる。  
0 5 2. 機転が効く。

053. 怖いもの知らず。
054. でも先生達に対しては動揺する。
055. 謝れる。
056. 知識に富んでいる。
057. 優しい。
058. わたしが大好き。
059. 声に覇気がある。
060. 困った時の仕草（片目を瞑って、後頭部をかく仕草）がかわいい。
061. 噂がすごい。
062. だいたい噂通り（噂は真実）。
063. 噂通りだけど人間性は別。
064. 優等生。
065. ものを教えるのがうまい。
066. たとえ話をよくする。
067. 半世紀以上前のネタを言う。
068. ネタに反応してもらえないと悲しそうな顔をする。
069. 友達想い。
070. 情報整理が得意。
071. 指揮がうまい。
072. クラスの委員長とかに向いてる。
073. サプライズ上手。
074. つよい。（戦闘経験）
075. 格闘術のセンスがある。
076. 合同の戦<sup>格</sup>闘<sup>闘</sup>授<sup>技</sup>業に出たら、他の男性対魔忍から絶対にモテる。
077. 見立てでは忍法抜きで中ぐらいの実力はあるんじゃないかな？
078. 忍法含めたら強さがわかんない。
079. そういえば日葵ちゃんの忍法を見たことがない。きつと日葵ちゃんの特性に一致してる。

080. 真面目な時は圧がある。  
081. 指先が細い。  
082. 指がえっち。  
083. 消火器を改造する技術力に長けている。  
084. 本当は力持ちなのかも……。  
085. だって、私、神村さん、コロ先輩を持ち上げちゃうんだよ

!?

086. ドラムが叩ける。  
087. キーボードが弾ける。  
088. ギターが弾ける。  
089. ベースが引ける。  
090. ボーカルもできる。  
091. 即席の楽器で演奏ができる。  
092. 作曲ができる。  
093. 音楽の評価は絶対に万点。  
094. 時々見せてくれるイケメン顔。(参考画像 挿絵参照)

095. 薬の知識がある。  
096. 胸部だけ幼児体型。  
097. 下半身がムツムチ。  
098. 特にお尻。  
099. 下半身からムツムツム♥って効果音が聞こえる。  
100. キレた時の烈火の如く噴火するのがいい。  
101. 眼光が鈍く光る時があって好き。  
102. 普段の学校生活では本当の力を隠してる。  
103. 都会っ子で私達にはない魅力がある。  
104. 荒事に慣れている。  
105. ヘビイメタルの種類に加えて、各種の特徴を把握して演奏できる。

106. 情報整理が上手。  
107. 私たちのことを妹のように接している。



- 1 0 8. 話に合わせてくれる。
- 1 0 9. ダブルひまりのコンビサインをしてくれる。
- 1 1 0. 心臓の付近の肌にある古傷が胸をときめかせる。
- 1 1 1. 笑顔に使い分けができる。
- 1 1 2. 冷静沈着な時は頼れる。
- 1 1 3. ちよつと大人っぽく背伸びをしている時がある。
- 1 1 4. 私のおっぱいが大好きで凝視してた。
- 1 1 5. 生存戦略を練る時は全力。
- 1 1 6. 正面から勝てない時は不意打ちする戦略家。
- 1 1 7. 首を絞めても怒らない。怒るけど、本気じゃない。
- 1 1 8. 本気で怒ったことはまだそんなに無いと思う。
- 1 1 9. 怒ってないのに対象を怖がらせるのがうまい。
- 1 2 0. 絶望的な状況でも諦めない。
- 1 2 1. 自分のことより私たちを優先する。
- 1 2 2. ライフル銃を扱える。
- 1 2 3. ライフル銃の狙いが正確。
- 1 2 4. 銃はハワイで親父に習った。

(青空 日葵の父親に尋ねるも、そのような経験はないと証言を得る)

- 1 2 5. なお先輩の攻撃でも冷静に対処できる。
- 1 2 6. 弱点を見抜く。
- 1 2 7. うなじに私の顔をうずめやすい。
- 1 2 8. 名前の相性がばっちり！
- 1 2 9. 身体の相性もばっちり！
- 1 3 0. 喜ぶ方の表情が豊か。
- 1 3 1. 弱音を吐かない。
- 1 3 2. 歯が綺麗。
- 1 3 3. ホワイトニングしているっぽい。
- 1 3 4. 歯磨きはちゃんとするように推してくる。
- 1 3 5. あと意外と噂は不良寄りなのに勉強は大事って話してる。
- 1 3 6. 状況の分析をしていることが多い。

1 3 7. 対魔忍としては前線より支援寄り、でも前線もできそう。  
1 3 8. 有事には手段に躊躇がない。

1 3 9. 寝ている時に鼻をつまむと口呼吸する。

1 4 0. 色んなものを拾う癖がある。犬っぽいよね！かわいいね！

1 4 1. 目が利く。

1 4 2. どんなに痛めつけられても、神村さんのことを怖がる素振りがない。

1 4 3. 度胸がある。

1 4 4. 目を見ていると奥底に私達にはないものを持つてる感じがある。

1 4 5. 素手なのに、武器を持った先輩2人を相手にしちゃう。

1 4 6. お尻が大きい。

1 4 7. お尻が柔らかい。

1 4 8. お尻が叩きやすい。

1 4 9. お尻を叩くと胸を叩いてくる。

1 5 0. きつとアナルは弱点。

1 5 1. 最後まで私を気遣ってくれる。

1 5 2. ジャケットのセンスをわかってくれる。

1 5 3. ジャケットの模様の好みが一緒。

1 5 4. 煽りのスキルが高め。

1 5 5. わたしが一番好き。

1 5 6. 長い髪。

1 5 7. うなじがセクシー。

1 5 8. 鎖骨もセクシー。

1 5 9. 肌がスベスベしてる。

1 6 0. いつもポニーテールだけど、ポニーテールがよく似合う。でも入院中の髪を降ろしているのも捨てがたい。

1 6 2. 眞田先輩からボコボコにされないように守ってくれた。

1 6 3. 感情に訴えることよりも、理論的に話すことの方が得意そう。

164. 狼狽している時はだいたい本気。  
165. でもその狼狽する姿もかわいい。  
166. 友達想い。  
167. 困った時の片目をつぶって後頭部をかく仕草がかわいい。  
168. 本気で困った時は、両目を瞑って後頭部をかく。  
169. 対魔忍装備の参考案を出してくれた。  
170. 将来は対魔忍技術部とか、諜報部に所属しそう。  
171. 日葵ちゃんに私専用の装備を作ってもらうのが夢。  
172. どんなことをしても私のことは『陽葵ちゃん』って呼んでくれる。

173. 入院中夜這いしても怒らなかった。  
174. 入院中、寝ぼけながらもベッドの中に招き入れてくれた。  
175. 翌朝思いつきり頬を叩かれたけど愛だと思う。  
176. つまり、飴と鞭。  
177. つまり、恥ずかしがり屋。  
178. だけど、甘えん坊。  
179. そこがいい。  
180. 許嫁認定してくれた。  
181. 消火器の妖精ピジンって呼ばれてた。  
182. 一人でいるときは鼻歌を歌って本を読んでいることが多い。  
183. でも歌のセンスが古い。ネタも古い。ネタの内容は化石レベルだよ。

184. 50〜150年前(約1920年〜2020年)の歌とか平気で口ずさんじゃう。

185. 包装用のリボンハサミで切っちゃえばいいのに、包装紙の開け方が丁寧。  
186. 睡眠薬を飲ませた後は、眠りが深いようだった。  
187. オムツ姿がかわいい。  
188. ゆっくりとオムツが膨らむ様子もかわいい。  
189. つまり失禁することに違和感がなく慣れているという事。

190. 大きなお尻に爪を立てるようになぞり揉むと艶っぽい声が出る。

191. お尻の割れ目をなぞったり、中指を割れ目に添わしても艶っぽい声が出る。

192. つまりお尻も性感帯。

193. でも乳首は性感帯じゃない。

194. 乳首から母性が溢れてる。

195. だけどお尻をあの方法で揉みながら、乳首をつねると感じてくれる。

196. その時の無意識ながらの仕草が扇情的。

197. 生唾を飲むぐらいに扇情的。

198. 前世はサキュバス。

199. インキュバスでも私は良い。

200. 日葵ちゃんは生粋の妖精ピクシーです間違いありません。

201. 生まれてくる性別を間違えてる。

202. 後ろから抱き着かれて愛撫されるのが好み。

203. 問題はこれをすると睡眠薬を飲ませているのに本人が起きることがある。

204. でも抵抗力は弱々しい。

205. この時。腕は力任せに押さえつけるよりも、足の拘束具を外して、うつ伏せにさせて、日葵ちゃんの手の甲に手を重ねあわせて指の間に指を入れて絡めた方が効果的。

206. この時、優しく手をにぎにぎする(握る)と手自体が性感帯になつてる。

207. 軽くイッてるのか、身体の全体が震える。

208. でも本人はそれを絶対に認めようとしなない。

209. その姿でこつちがムラムラする。

210. 理性では嫌がっても身体は正直。

211. 実質、これはSEX。

212. 普段の振る舞いは攻めなのに、身体はドM。つまり受け。  
213. 誘い受け

214. バリネコ

215. もうね、いぢめたときの目がね。いいの。

216. 私の加虐心を煽るの。えっちなもの。

217. サデイストホイホイ。

218. あ、そうだ！ ねえ、知ってる？ 日葵ちゃんの陰毛は、な

いんもう。

219. あれ？ 分かりにくかった？ 日葵ちゃんの陰毛は、な

いんもう！

220. 日葵ちゃんの陰毛は、ないんもうツ!!!

221. あ、『ねえ、知ってる？』って元ネタは『豆しば』っていう

らしいよ！ 2008年に（省略）

今から約70年前

222. まだ日葵ちゃんの好きな所、（聞き取れず）%\$#&個も言い終わってな

いー！

◇『本人の様子観察』

『青空 日葵』に対し、この『日ノ出 陽葵』による熱烈なアピールについて、一部伝達し交流について尋ねたところ、実に深刻そうな顔をしたあと。両手で顔を抑えたかと思えばシクシクと泣き始めた。その後、『この情報は膨張されている』『私は鹿之助くん一筋です』『入院先でそんなことをするわけがない』と答える。

しかし『日ノ出 陽葵』が『青空 日葵』について一切の嘘を言ったことがないことから、上記の内容はすべて真実であるとも思われる。ただ『日ノ出 陽葵』による主観が多く含まれている部分もあるので、情報の精査をする際にはそういった個所を除去する必要があるだろう。

□『上原 鹿之助』

『青空 日葵』は『上原 鹿之助』に対し恋心を抱いていることは充分に明確化されている。

しかし、『上原 鹿之助』は『ふうま小太郎』のように忍法の開花していない落第生ではないが、対魔忍としては落ちこぼれとして称して

もよい……まだまだ未熟で能力や戦闘力、学力（青空 日葵が介入した中間テストの結果は除く）を鑑みても、対魔忍の男として惚れるような部分は見当たらない。

この価値観の違いは、今こそ一般人というカテゴリーに居る奴が忍法の開花をしている対魔忍の血筋を引いたものであるとするならば猶更、理解できないものだ。アサギ校長、ここの嗜好からも青空 日葵についての調査を進めていくことを進言する。

□『最後に』

私は青空日葵の調査を任された訳だが、既に胃腸薬が手放せなくなってしまうた。

奴はこれまでの問題児とは、問題の方向性が異なる形で手のかかる生徒だ。違和感の持ち合わせた子供とはいえ、子供としての範囲で想定をし動きを予測しているとその斜め上を飛んでいく。そんな好奇心旺盛なタイプの問題児と云えばいいだろうか？

入院先ではどうやら大人しくしているようだが、あの普段 穏やかな室井が地下の病院に戻るとピリピリしているのが否応なしに理解できる。

この任。私が弱音を吐き、任務に対して妥協や甘えを求めるなど、らしくもないかもしれないが……八津が五車学園で教鞭を振るっている間は、すべて八津に一存したい。

◇『八津 紫からの返信』

私の不死覚醒の忍法は、貴様の過敏性腸症候群を和らげるために存在しているわけではない。

アサギ様に頼め。アサギ様が私に一存すると言ってくれば喜んで引き受けよう。

◇『井河 さくらからの返信』

蓮魔先生、お疲れ様だよ。(三；ω；三)ニヤーン…

あの優しい穏やかな室井先生がピリピリしているって、相当堪えているのかも……。

色々と爆発しちゃう前に、私からもお姉ちゃんに青空ちゃんの件は

伝えておくね！

私の忍法が一番監視任務に適していると思うんだけど、1年前に顔を見られちゃってるからなあ……。私達が対魔忍という情報を隠している以上、力になれなくて、ほんつとにゴメンね（泣）

最近目頭を押さえてマツサージしたり、目薬を指したりして辛そうだよ（汗）

蓮魔先生の引き出しの中に、ホットアイマスクを1ケース入れておくからよかつたら使つてね！

黒田ちゃんも蓮魔先生のことを心配してたよ！ 無理はしないよにね！

私も黒田ちゃんも、いつでも蓮魔先生の相談相手になるからね！

◇『井河 アサギからの返信』

監視任務ご苦労様です。

手紙を含め、そちらの進言に関して前向きに検討させていただきま

す。また監視任務の一存に関しても、なんとかできるような手配は済ませるわね。

◇『山本 信繁からの返信』

監視任務、ご苦労。

『青空 日葵』についてはこちらでも色々調べ、蓮魔 零子先生の負担が軽減できるよう努めてはいる。

だが本当に書面上の経歴では、どこにも彼女におかしな部分はない。もしもこの経歴が偽りであるとするならば、彼女はかつての米連に存在していたとされる特殊組織CIAとの関連性も考えられることになるだろう。もちろん、ありえない話ではあるが。

もちろん、君の気持ちは充分に承知しているつもりだ。その組織の中、懐の中に素性の掴めぬものを手元に置き、監視し、正体を探るというのはとても疲労が溜まるだろう。

しかし対魔忍とは元より、人魔結託した悪に対抗し正義を実行するため組織。

だが、どうかこれも任務の一環だと思って耐えて欲しい。

さらに荷を重くするようで悪いが『青空 日葵』。彼女は、時折かなり勘の鋭い片鱗を見せることがある。監視を行う場合には、くれぐれもこちらの意図を察知されないよう注意を払って頂きたい。



企画 『一周年記念＋100話投稿記念：設定資料集』

Episode85—IF 『対魔忍RPG プレイアブルキャラ化(1)』

〈対魔忍RPG プレイアブルキャラ化編〉

【青空 あおぞら ひまり 日葵 くぎぬき しんそう 釘貫 しんそう 神葬

レアリティ：R

属性：科学

HP：1600 (最大1818)

SP：160 (最大160)

ATK：100 (最大400)

DEF：100 (最大300)

SPD：65

キャラクターアイコン：

五車学園の制服を纏った青空 日葵の姿。あわあわとした頼りのない表情にへっぴり腰で、手には学園内に設置されている消火器を手をしている。

攻撃モーション：

消火器を相手に吹きかけて、消火器の底面で殴りつける。

死亡モーション：

自嘲の表情を浮かべながらうつ伏せに倒れる。

プロフィール

(新) クトゥルフ神話TRPG世界線から迷い込んだ異世界人。

この世界の一般人、女子高生『青空 日葵』の肉体を使用しているが、精神は『釘貫 神葬』と呼ばれる女性が憑依している状態。

対魔忍になることを強く拒み、自分を一般人だと思い込んでいる節が見受けられる。

ただの一般人、普遍的な女子高生と自称しているが、戦闘技術やとっさの判断、普段の素行が常識から乖離し、周囲を悪い意味で凍り

付かせることもしばしば。

学校での素行は良いはずなのだが、上記の行動のせいで何かと悪い噂が絶えることがない。

それでも彼女に取り巻く友人達は彼女がどんな人物なのかを良くも悪くも知っている。

また上原 鹿之助と行動を共にしている時が、もつとも一般人らしく振る舞えている。

ゆきかぜや大島 雫以上に貧乳だが、五車学園の生徒は彼女の貧乳について弄ることは暗黙の了解で禁忌としている。

ちなみに対魔忍になりたくない訳を本人は『公務員だから労災が下りない、賃貸が借りられない、ローン審査が通らない、任意保険適応外、ブラック企業そうだから役満』と説明している。

リーダースキル：「消火栓の妖精」

科学属性ユニットのCRTを小アップ（10%）＋部隊全体の炎無効化

スキル1：「ダイスの女神」（ラック10消費）

味方1人のCRT率の中アップ＋ATKの特大アップ（持続ターン3ターン）

必殺技：「消火器の妖精」（消費SP160）

ランダムな敵に3回小威力攻撃（150%）＋超高確率で暗闇状態にする。（80%）

台詞：「ヴウボッ オッ オッ オッ オッ オッ オッ オッ オッ ツッ ツ

ッ！ッ！ッ！ッ！

獲得時セリフ：

「くぎ……あ。あお、『青空 日葵』です……初めまして、これからお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。」

待機画面セリフ：

「特技はEng……工作。趣味はゆるキャンとカラオケです。あ、この物理学の本はただの愛読書ですよ。そんなにジロジロ見ないでください……。」

「機械いじりとか大工道具でのDIYが好きだったりします。個人的

には車の整備をしている時が幸福感に包まれますね。」

「紫先生を張り倒した時の話……？ あはは、いやだなあ。あくまでもただの噂ですよ。一般人の学生がそんなことできるはずがないじゃないですかー。」

強化時セリフ：

「この状況は『新クトウルフ神話TRPG』94頁 『訓練』、『C  
ALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』75頁  
『トレーニング』 『クトウルフ2010』145頁 『幕間での成  
長』 が該当するかな……。』

覚醒時セリフ：

「えっ。対魔忍世界では鍛えることで能力値の変動があるんですか。」  
「弱くても鍛えれば強くなれるルールブックっていいですね。」

回想：

百合。まえさき市でスネークレディに捕まった神葬。彼女の店に  
拉致された後、スネークポイズンで強力な媚薬を投与される。アルガ  
ルノーヴの書や釘貫 神葬個人に迫る尋問を受ける。首絞め、くすぐ  
り責めからの連続アクメオンパレード。本番なし。

ラストはEpisode22と同じ〈頭突き〉で一発逆転。

Wiki風コメント

- ・ゆきかぜより胸が断崖絶壁
- ・まな板にしようぜ!!!

- ・目の中が蚊取り線香みたいに渦巻いててすご
- ・炎王の親戚かな？

- ・開運の神楽鈴がクソ溶けそう。

・スキル1を他のSRのサポに回せばそれなりに強いが、タゲを逸  
らさないとかゴミカス性能

- ・快癒2、疾駆2は必須。

■死にやすいから奮迅の装があってもいいかも

・ラックに関してはガチャでそれなりの頻度で排出されるので困ら  
ない。必殺技はアリーナ用。

・上原鹿之助とセットにしたらHPとSPを除いた全ステータスが下降したんだけどバグ？

。俺もなつたわ、運営に聞いているところ

■仕様だつてよ

■ただでさえ低い能力値が下がったらそれはもうゴミなんよ

。ステータスの他になぜかSP消費も減少しているから必殺技を連発しやすくなったぞ

■SP上昇率も増加しているぞ

■鹿ちゃんが居るとき限定みたいだな

【暴走列車】釘貫 神葬

レアリティ：SR

属性：科学

HP：1600（最大4150）

SP：160（最大340）

ATK：100（最大600）

DEF：100（最大600）

SPD：89

キャラクターアイコン：

わんわんと大号泣（狂気：肉体的なヒステリー）しながら、メリケンサックを装着しているか何度も確認し（狂気：強迫観念に取りつかれた行動）、その身体を感染者のような痙攣で一生震え続けている（狂気：制御不能の全身チック（震え））

攻撃モーシヨン：

真つ赤な霧を浴びながら怒りに狂い出し、マナーモードバイブの状態でワン・ツージャブパンチ！（狂気：幻覚、殺人癖、暴力衝動、制御不能の全身チック）

死亡モーシヨン：

突然下着姿になって、白目舌出しアへ顔ダブルピース状態で仰向き

に倒れる（狂気：奇妙な性的嗜好（露出症）プロフィール）

クトウルフ神話TRPG世界線から迷い込んだ異世界人。

この世界の一般人、女子高生『青空 日葵』の肉体を使用しているが、精神は『釘貫 神葬』と呼ばれる女性が憑依している状態。

対魔忍になることを強く拒み、自分を一般人だと思い込んでいる現在、精神異常者。

なお種族としては本当に対魔忍でも魔族でもない、探索者と呼ばれる精神異常者。

上原鹿之助が任務の最中、オーク達に捕まったと話を聞きつけ一般人の化けの皮が剥がれた状態で対魔忍の任務に強制乱入する。

その救出任務の乱入の最中、狂気に蝕まれて無事に発狂。三度の飯よりも、上原鹿之助を思う思いが暴発爆走してしまう。

彼女とチームを組んだことのある対魔忍は、この時の彼女のことを『いつもは平常心を装いながら狂っているが、あの日はシンプルに狂っていた』と語っている。

ちなみに彼女の持つSPとは、鹿之助くんポイントの略称であり、決してスキルポイントの略称ではない。

リーダースキル：「常時発狂／狂狂狂狂」くるくるきやうきやう

部隊に上原 鹿之助が居る場合、毎ターン本人のSPが50%回復、部隊全体のSPも5%回復。

スキル1：「狂気：フィティッシュ（異常な執着）」（消費SP160）  
1体の上原 鹿之助に攻撃力の特大アップ＋防御力の超特大アップ＋クリティカル率大アップを付与（3ターン）（上原 鹿之助が部隊にいない場合、効果は発現しない）  
スキル2：「狂気：常軌を逸した振る舞い」（消費SP280）

敵1体の中威力（300%）で攻撃する＋麻痺を中確率で付与（40%）、上原鹿之助以外の味方1人に混乱を超高確率で付与（80%）。  
必殺技：「鹿之助くん！鹿之助くん！しかのすけくん!!!」（消費SP340）

味方全体の上原鹿之助に会心率（20%、3ターン持続）とSPD

を特大アップ（40%、3ターン持続）＋、敵全体に特大威力で（上原鹿之助、現在1人につき202%上昇（現状最大810%））4回攻撃する

台詞：「鹿之助くん！鹿之助くん！鹿之助くん！鹿之助くん！しかのすけくううんツ!!!」

演出：ちびキャラ（SD）の上原鹿之助が転びながら、泣きべそで敵方向に逃げている。鹿之助が敵集団中心部に入った所で釘貫神葬のちびキャラが白目を？いたままグリコのポーズのまま超高速で竜巻のようにクルクルと回転しながら現れる。敵全体と鹿之助の焦る演出にその状態のまま敵陣に突っ込みコミカルにボコスカ乱闘騒ぎを起こしたあと、鹿之助をお姫様抱っこしながら狂気的な笑みで画面のPLを見つめる。今度は鹿之助が白目をむいて気絶している。

獲得時セリフ：

「鹿之助くん!? 鹿之助くーん? 鹿之助くん、鹿之助くん鹿之助くん鹿之助くん鹿之助くん鹿之助くん鹿之助くん鹿之助くん鹿之助くん」

待機画面セリフ：

「鹿之助くうん……今日もかわいいねえ。ギヒヒヒヒヒヒヒッ!」

「いあ! いあ! シカア・ノ!!スケ! いあ! いあ! シカア・ノ!!スケ!!!」

「鹿之助くんがあれば、あとはもう何も要らない」

強化時セリフ：

「これだけの力を付けたら鹿之助くんを押し倒せるのでは???」

覚醒時セリフ：

「鹿之助くん、鹿之助くん、鹿之助くん」

「ああ〜正気度回復の音オ〜!!!」

回想：

鹿之助を昏睡レイプ。本番なし。

対魔忍の任務で鹿之助は、しくじり媚薬の霧を浴びて敵の手中に落ちてしまう。凌辱間際で発狂状態の神葬が乱入し魔族を惨殺する。

同人誌でありがちな股間が腫れあがっている!毒を吸い出さない  
と!⇒飲精⇒股間の腫れが収まらない!せや!前立腺を刺激しま

くって搾り取ったろ！ついでに私のことしか考えられなくさせてやる！⇒鹿之助、潮吹き⇒飲精⇒鹿之助、おもらし。それを更に飲尿する。

ラストは微睡む鹿之助を邪悪な笑みで腕で抱きながら、啜った体液の情報から健康状態に合わせた彼の夕食のメニューを考える。上原燐に車で送迎される形で五車町に帰ってくる。

#### Wiki風コメント

- ・立ち絵のほとぼしる涎がクソ汚ねえ
- ・顔が一般人じゃないよね、もう血に飢えた猟犬みたいな顔
- ・立ち絵も獣に近い
- 。ブレインドッグの親戚説があるな……
- デビルズドッグ説もあるぞ！
- ・ノフllケー？（難聴）
- 。つまりウエンティゴか

#### ■イタクアを招来しそう

・表情筋が対魔忍RPGX―G  
・お前のような一般人が居てたまるか  
・公式が2度も精神異常者認定しやがった  
・SDが（キャラクターアイコン）生理的に無理。マジキメエ動き。  
・鹿之助くん逃げて。超逃げて。  
・リーダースキルの部隊全体のSP5%回復とは鹿之助くんポイント5%回復なので、本人以外はあくまでもフレーザーとして見たほうが良い

。鹿之助くんポイント…

。確かにSPだけどさあ……

。こんなのが一緒とか逆にSPが下がるんだが？

■SPって正気度ポイントも兼ね合ってる？

■正気度はSAN値なんだよなあ

■鹿ちゃんのSONもヤバそうだな……捕食しそう（小並感）

■無事に鹿のSON値ンポは捕食されました

・上原鹿之助、【仕来り】上原鹿之助、【水着】上原鹿之助、フレ鹿之助と組ませたら暴走列車と鹿之助達にバカみたいな火力が出たぞ。俺に混乱付与されたわ

。鹿之助と組ませとけば最強かもな

・奥義の最終演出が確実に「こちら側」を認識してるよね……。

。こわ……

。御祓いしとこ……

・スキルとか奥義がピーキーすぎるんよ……

。ほんそれ リーダースキルとか読めねえから

■ガチでくるくるしながら恐怖をバラ撒く奴があるか

・鹿ちゃんが混乱しないのは既に慣れている説があるな

。燐ねーちゃんは混乱する模様

■混乱しない方がおかしいだろ

・5人目の新鹿ちゃんと組ませたらどうなっちゃうんだ……

。知らんのか、新しい釘貫神葬のキャラが出る

。次は七色に輝く

・回想を見た後だと、差分の輝く瞳とか、恍惚な顔とかいろんな汁

の意味がわかるような気がする……。

。本人の体液じゃない説

・未来編では鹿之助死亡確定だけど、彼女はどうしてるんだろうか

？

。絶対に良からぬ状態になってるぞ

。過去の鹿ちゃんを食い散らかすんだろ（性的に）

。ブレインフレイヤーは敵に回してはならない存在を敵に回して

しまった。

。鹿の体液を啜って健康診断と食生活を整える変態を敵に回して

しまったのが運のツキ……

。未来編にモブとして、既にそれっぽいのがいるぞ



【探索者の本領発揮】たんざくしゃほんりょうはつぎ 釘貫くぎぬき 神葬しんそう

レアリテイ：SR

属性：精神

HP：1600（最大6916）

SP：160（最大360）

ATK：450（最大810）

DEF：340（最大600）

SPD：85

キャラクターアイコン：

私服を纏った青空 日葵の姿。

片手には彼女のメインウェポンである〈改造した釘打ち機〉が握られている。

攻撃モーション：

その場で3回釘弾を放つ。

死亡モーション：

武器を構えたまま、白目をむきながら歯を食いしばり仁王立ちを維持し続ける。

プロフィール

クトウルフ神話TRPG世界線から迷い込んだ異世界人。

この世界の一般人、女子高生『青空 日葵』の肉体を使用しているが、精神は『釘貫 神葬』と呼ばれる女性が憑依している状態。

対魔忍になることを強く拒み、まだ一般人枠を保っている探索者と呼ばれる種族。

大切な親友たちが危機的状況に瀕している状態。探索者の特性をいかに発揮している。

でもやっぱり対魔忍の勧誘は、容赦なく一蹴している模様。

しかしそれでも上原 鹿之助経由の対魔忍勧誘に関しては保留と  
いう対応を見せている。

ちなみに対魔忍になりたくない訳を本人は『公務員だから労災が下りない、賃貸が借りられない、ローン審査が通らない、任意保険適応外、アットホームな職場、親切丁寧に指導してくれるという謳い文句、

昇給は歩合制、国営デリヘル、業界肉便器・便女べんじょシェアNo. 1、体育会系組織、組織のトップが感度3000倍経験者、要するに溝運ドフラック企業だから』と説明している。

また彼女の所有するSPとはスキルポイントではない。鹿之助くんポイントである。

リーダースキル：「探索者の意地」

部隊全体の防御力の特大アップ

スキル1：「クトウルフ神話知識」（消費SP150）

敵1体の防御力を特大ダウンさせる＋味方全体の攻撃力を特大アップ。

スキル2：「異界の魔術（ランダム効果）」（消費SP220）

味方1体の防御力特大アップ＋ダメージカット率付与（5ターン持続）

敵1体のDEF無視の特大攻撃＋呪いの付与

敵1体に麻痺＋暗闇状態を確実に付与＋中確率で混乱を付与する。

奥義：「釘貫 神葬」（消費SP360）

ランダムな敵に3回攻撃＋DEFを無視して通常攻撃＋中確率（40％）で石化状態にする。

台詞：「お前、カルティストだな？ だったら、家族お仲間もろともお星様にしてやるよ…ッ！」

演出：演出はシンプル。釘貫 神葬が武器を構えたまま敵の目前ゼロ距離まで近づく。そのまま弾丸が刺さると☆マークの出る3連撃の釘弾を打ったあとへ跳躍して元の位置まで戻る。

獲得時セリフ：

「大丈夫です。今度も私が居ます。私がついてます。……え？ むしろ心配？ ははは、ぬかしおる。でも、私って窮地に立たされると燃える質なんですよ。この状況も打開してみましよう」

待機画面セリフ：

「実は秋山凜子先輩と水城ゆきかぜさんとは面識があるのですよ。……向こうはきつと私のことは分からないでしょうけどね。」

「ふむ……名は体を現わす……か。過去の偉人はよく言ったものだ。

探索者も対魔忍も、そこは変わらなさそうだ」

「♪♪。えっ、あ、この歌ですか？ え？ 50年も前の歌……？ あ、あはは……し、知らなかったなあ。も、物知りなんですね！」

強化時セリフ：

「もつとルルブを読み込めば更なる高みに行ける……」

覚醒時セリフ：

「死ななきや安いですが、力を付けることは良いことです」

「鹿之助くんも、陽葵ちゃんも……否、対魔忍達でさえも——私が守護まもらねばならぬ」

回想：

本番あり。上原鹿之助とイチキャラブSEX。

対魔忍任務で鹿之助に付き添いラブホテルに泊まる神葬と鹿之助。神葬、誘い受けを本領発揮。

彼が昏睡している時には見せなかった超紳士的な対応で接する。しかし同意の元で、彼のアナルを嘗め回したあと前立腺を調教し始める。

Wiki風コメント

・ ついに私服姿で武器持ち姿が実装  
・ メイジャーの武器を拳銃ぐらいに小型化してちやつちくした感じだな。

・ メイジャーと相性は良さそう

・ 綺麗な釘貫神葬

・ でも目の中のグルグルは隠しきれない模様。

・ 武器を持っている手とは反対の手から禍々しい気配が放たれているんですが……

・ サラツと本部

・ 【暴走列車】のインパクトが強すぎてこっちが霞む

・ あれは別格だから……（震え声）

■ 公認の精神異常者だぞ

。アレに勝てるわけないだろ！

・アリーナでは奥義がすこぶる強い。レイド戦には向かないがストーリーイベントではその実力が思いつきり発動するかも。

。奥義演出も短いから周回にうってつけ

・マジで綺麗な釘貫神葬。回想シーンなんか紳士過ぎて逆に偽物説がある

。わかる。鹿の手前、猫被ってる感がハンパねえ

。アナル舐めの時点で変態心が隠せてねえよ

。注釈でアナル舐めの注意点、領域展開するなよ……

■ A型肝炎のワクチンをうってから（ワクチン3回接種、1回目の約1カ月後に2回目。3回目は6ヶ月後）アナルは舐めようね！  
じゃねーよ!!!

■（注意する部分）違うだろ！

。コロナイセンみたい副音機能があるからそれで再生してみ  
？いつもの釘貫だから

■ 鹿ちゃんを達磨にしたいとか言ってるんですけど…

※副音声の内容はEpisode23、Episode86に収録。

・鹿がスネークレディに召しあがられたことを知ったらどうなるんだらうか？

。間違いなく戦争が起きる

。知らんのか。大乱闘が始まる。

。皆さん 戦争が始まりました

。今の女が居る状態で前の女の話をするのはNG過ぎる

■ ほんとに鹿達磨になっちゃう！

。スネークレディと意気投合する線が微レ存？

■ それはそれで地獄なんだよなあ

■ 蛇は遊び、こっちがガチだから多分無理。分かり合えない

■ 絶対に流血沙汰じゃ済まない

・回想中に「ウエーハラのチンポ気持ちよすぎだろ！」って叫ばれて、コイツマジかって気分

。よかつたな。それが普段、五車学園で接している対魔忍達の気持ちだと思うぞ

。じゆるり！（迫真の舌なめずりボイス）

。なんで回想にギャグがあんだよ 教えはどうなってんだ教えは！

■お前、禁じられたギャグを 平気で使ってんじゃねえか！

■運営はわかってんのか!? 「回想」が生まれたのは人間がエロに甘えたせいだろうが！

■（課）金取んのかよ!?

■くそつたれ！（スカトロ）

■召喚士 ニヤル様「きちんと回想のエロを受けてもらいたかつた。」

。『神葬は良い奴だと思った、だから聞いてみたくなつたんだ』まさか……（絶望）

■そうだ。『シン』はソウだ。

。おと和姦わっか

■音MADが作成されるよ！ やつ対魔忍！

■こんなんで対魔忍の知名度を広げないでもろて……

■一枚絵を差し込む絵師の遊び心……

■身長差の問題を立ちバックとアングルで克服してるからな……。

■リボンで額の汗止めバンドにする徹底ぶりよ

。これ、エロいかエロくないか以前の問題だよなあ……

■一回、燐先生に処される

■恥 を 知 れ

。まだ青空 日葵の肉体なのか？

。これ、元の肉体だったらどうなつちまうんだ……

・対魔忍じゃないってことは、魔力無効化のブレインプレイヤーと真つ向から殺り合えるのか？

。未来でブレインプレイヤーを狩りまくってそう……

。タゴン。クトウルフ神話側にも居るし、ブレインプレイヤーも探

索者ならやりそう…

■ 殺れそう

。 鹿ちゃんの弔い合戦や……

■ え えらいことや……せ、戦争じゃ……

■ もう始まつてる！

■ ブレインフレイヤーの命（タマ）獲ったぞー!!!

■ 最近筋トレしてたよな？ カチコミと勝利の合図でマツサル

！マツサル！言いそう

■ ポーズも含めて想像がつくからやめろ。

■ 槍を片手に、人海へびょーん！

■ やめろ

・ スキル1だけなら、レイド戦でも活躍できるぞ。

・ 隠しスキルとかで鹿ちゃんと一緒にしたらステータス上昇機能無

いかな……

。 あったわ。 鹿之助の隣に配置したら、釘貫神葬の ATK が上昇したわ

■ どんだけ鹿之助好きなんだよ…… ATK が装備品なしで 91

6まで上昇したぞ

■ 鹿之助くん装備品説。

。 ねえ、なんか部隊編成画面で鹿之助きゅんを横に並べると彼女の

眼球が動くことない？

■ 御祓いに行つてこい

■ おはらい定期

■ バグじゃね？

■ 仕様だろ

■ 仕様じゃね？

■ 仕様です。

■ 仕様でした

■ 嘘だと言つてよ！運営！

☆今後の実装キャラ予定

Episode 100 記念に公開予定

閲覧者兄貴姉貴達にアンケートで選んで貰ってワースト3位+1  
枠を設定資料集化を予定。

+ 暫定事前情報

・【ステイール・ロータス教団教祖】釘貫 神葬

レアリテイ：SR

こんなに悲しいのなら、苦しいのなら……愛など要らぬ！

未来編の釘貫神葬。奇妙な力でポストアポカリプスの住人を纏め  
あげる。

・【ダブルひまり】日ノ出 陽葵&青空 日葵

レアリテイ：SR

仲良しな2人はいつも一緒。まさかの鹿之助よりも先に親友との  
共闘。

必殺技はもちろん『ダブルひまり』の合体技。橙色のジャケットが  
トレードマーク。

・【パラレルワールドα群】釘貫 神葬 “たち”

レアリテイ：SR

それぞれの世界線から集合した釘貫 神葬。計6人。円陣を組ん  
で敵に突撃する。

が、いつも鹿之助くんが原因で揉める。リーダースキル：MAPイ  
ベントの補助スキル持ち。

・【パラレルワールドβ群】釘貫 神葬 “たち”

レアリテイ：SR

それぞれの世界線から集合した釘貫 神葬。計6人。隊列を組ん  
で突撃する。

鹿之助くんに対してそんなに執着心はない。ちゃんと他所の世界  
の鹿之助だと割り切っている。

・【ダンシングガカポ】釘貫 神葬

レアリテイ：HR

虹色に輝く釘貫神葬。敵味方を狂気と恐怖のどん底に叩き落とす  
ことで有名人。

その動きは敵も味方もドン引きさせるのと同時に女であることを棄てている……。

青空 日葵に対する熱い風評被害。

・【ダークサイド】釘貫 神葬

レアリテイ：S R

正気度が “0” にまで落ちた釘貫神葬。禁忌の魔術を容赦、躊躇、遠慮、躊躇いなく放つ。

暴走列車とは別のベクトル方面で危険なオーラを放っている。

・【奇妙な共闘】釘貫神葬&スネークレディ

レアリテイ：S R

大乱闘不可避。まさかの鹿之助よりも先に因縁の相手と共闘。

カオス・アリーナのプロレス用スーツを纏った2人がリング（路上）で暴れまわる！

・【男装姿】釘貫 神葬

レアリテイ：H R

ショートヘアにボーイッシュな釘貫 神葬。

“水着姿”でこの度、参戦。半身を侵食している禍々しい紋様が特徴。

・【花婿姿】釘貫 神葬

レアリテイ：R

ボーイッシュな釘貫 神葬、第2弾。

花 “嫁” 姿の上原鹿之助が実装されたと聞きつけて実装。

・【入院ルーティーン】釘貫 神葬

レアリテイ：R

親の顔より見た病院服を着用したボロボロな釘貫 神葬。

学業の半分以上を病院で過ごしていることは対魔忍や魔族の中でも有名。

・釘貫 神葬

レアリテイ：S R

青空 日葵の肉体に憑依する前の釘貫 神葬。

ヨミハラに拉致されたところを対魔忍達に助け出された。



【対魔忍】 冷蔵庫

レアリテイ：SR

作者の本小説の評価に対する悪夢から生まれた産物。別名：低評価への恐怖、高評価への呪縛

3度もこいつが登場する悪夢を見ており、プロットへ下手に記録しただけにその夢の内容は今も作者の脳裏にこびりついている。

ウルトラハイテンションな高速二足歩行する冷蔵庫。2130s < 2200s 頃に製造されている。

小説URL：<https://syosetu.org/novel/262439/>

【対魔忍】 ぬこ

レアリテイ：HR

対魔忍に所属している猫。

小説家は現在プロットのみ頭在しており、あとは執筆するだけなのだが作者に肝心の時間が無くて未執筆の子。

その姿は、本当にただの『猫』<sup>キヤット</sup>である。昔、CIA考案のスパイキヤットなるアコースティック・キティーなるものが居てだな……。人は過ちを繰り返す……。

【大麻忍】 銀行強盗 “No Name”

レアリテイ：SR

構成だけのキャラクター。

その存在の確認は、実際のところ冷蔵庫よりも古い。釘貫 神葬よりは新しい。

対魔忍ではない。大麻忍である。小説化はしたい(切実)、でも時間がない(血涙)

※注意！

上記までの情報はあくまでも『対魔忍RPG プレイアブルキャラクター』企画の設定資料集です！

真実も混じっているかもしれませんが、すべて真実だとは限りませ

ん！

嘘の情報に惑わされないで！

著：釘貫 神葬

---

↳ 図解!!! 釘貫 神葬の装備一覧！編

Episode 15 『いざ、まえさき！』の私服解説

【探索者の本領発揮】 釘貫 神葬の私服解説



舗装されていない土の地面はアスファルトのように太陽光を反射することはないし、ガンガンにつけられたエアコンの冷房によって室外機が恐ろしい熱風を放つ訳ではなく、ビルが密集して風通しが悪いわけでもない。

いわゆるヒートアイランド現象は発生していない。ゆえに暑いと言っても、現在の気温が28℃前後で……。2018年の41℃越え、2022年6月25日時点の伊勢崎市40.1℃、前橋市の39.5℃越えに比べれば……。湿気がある分、すこし蒸し暑いぐらいだった。

あれ？ でも気象庁では、確かそんな40℃越えが起きているのは群馬県や栃木県、埼玉県のような内陸部だったような……？

ま、まあ、半世紀も刻が経てば、地球温暖化は多少なりとも改善されたのだろう。

「日葵はさー、俺と蛇子と同じぐらいに髪の毛長いのに、こんな猛暑でもさー。ケロツとしているよな……」

「え？ あ。そうですか？」

「そうだよー。何かおかしいよ？ 汗1つかいてないもん」

鹿之助くんはクリアファイルを取り出してパタパタと仰ぎ、蛇子ちゃんは襟元を少し緩ませて手でひらひらと微風を自分時自身に対して送っていた。

しかし、私が涼しげな顔で投稿していることに気が付いたのか、急接近してくる。その二人の目は虚ろで、さながらゾンビの様だ。

「いやあー……あはは……。そう、ですかね？」

「「そうだよ！」」

「日葵ちゃん、ワイシャツの下に半そでのインナーを着てるでしょ!?

それにタイツまで履いて！ それなのに汗をかいて無いなんて、絶対おかしいよ！」

「なあ、日葵い……。夏だっていうのに、なんで、どうして、そんなに着込んでいて汗1つかいてないんだ？ 教えろよお……。俺達、友達だろお〜?」

「いや、あ。あ。た、大したことはないですよ?」

「大したことないなら教えられるよなあ〜?」

「ねえ〜?」

二人は仲よさげに顔を見合わせて、にったり・にんまりと笑い合う。それからその張り付いた笑みでゆっくりと動く秒針のようにスムーズな動きで私の方へと振り向いた。

「ふ、ふうま君! たすけて! この暑い中、2人が! 2人が! ひつついて来ようとしてきます!」

「ふむ。悪いが青空さん。俺も汗1つかいていない理由が気になっている」

「ふうま君!」

即座に暴走しつつある2人のストップパー役になりそうなふうま君へと助けを求めるが……。

結果はご覧の有様。ものの見事に見捨てられてしまった。

そんな私に2人は両手の指をワキワキと動かしながら、私の服にしがみついてくる。二人とも、私より約10cm、20cm身長が低いのだが、この暑い中で身を寄せ合う行為は余計な熱を籠らせる。

突然のじゃれつき行為に私は組みつかれて……ウツヒョオ!!! 鹿之助くんが! 鹿之助くんが!!! ゼロ距離に!

アア→→→!!! 理性の音オ〜!!! 飛ぶとぶとぶトブ!!!

私の理性ががが! 理性がトンじゃううつ!!!

「あーっ! 日葵ちゃん! うなじに何か貼ってるー!」

「なんだって!?!」

「あー! とらないで! とらないで! 後生だから、とらないで!」  
ベリッ!

「うぎゃー!」

蛇子ちゃんは、陽葵ちゃん制圧時でもみせたようなフットワークで私の背後へと回り込むと、目敏く首裏に貼っていたシートを発見しひっぱり剥がした。

別に痛みはないが、その場の空気が叫ばなきやいけなような雰囲気気がゆえに叫ぶ。

「ぐいっ」

「これ……冷えピタシート?」

「……ええ、冷えピタシートですね」

「それが夏なのに汗1つかかない理由だつていうのか?」

「アツアツアツアツ……ふう……。そういうことになりませぬ。正確には3人の見えないところ……背中<sup>で</sup>汗をかいてますよ。ただ蛇子ちゃんが見抜いたようにインナーを着用しているので、ワイシャツが透けないだけです」

「それじゃあ、そのタイツもなのか? でもタイツは暑いだけで何も変わらないだろ?」

「コレタイツに関してはその嗜好品なので履いているだけです」

「し、嗜好品……。日葵ちゃん。この時季、タイツは好きだから履けるものじゃないよ……。?」

「そうですね……。? でも蛇子ちゃん見てください! 春の時期は、40デニールの黒タイツだったけど、今は肌色の20デニール肌色タイツですよ。通気性は抜群です! ほら、こんなに伸びる! こんなに透けてる!」

そんな蛇子ちゃんの指摘に通気性をアピールする。

うん。タイツは私の装備の中で外せない装備なのよ。そりゃね。真夏に履くものじゃないつてことは充分に分かっているし、履かない方が涼しいことも分かっているけどさ……。

何かが起こるかもしれないじゃん? でもタイツを通学用靴の中に入れておくと、いろいろ絡まるじゃん? 新品を入れておくのは勿体ないし、攫われたりした場合には持ち物を取られる可能性もあるじゃん?

その他にも、その色々な事に使えないのよ。いろいろなことに。夏のJKの脱ぎ立てパンツ（未洗濯）とムレムレタイツは色々な交渉材料にもなるんだぞ。蛇子ちゃん……。ここら辺のお話は対魔忍世界の住人だしわかる?

「抜群つて言っても、履いているより履いてない方が涼しいような気がするのだけど……。ひ、日葵ちゃんはお洒落さんなんだね!」

そっかー。でも分かってもえなかつたみたい。最大のフオロー

はしてくれているけど、再び正面に回り込んだ蛇子ちゃんの顔は引きつっている。

OK. 話題を変えようか。ところで、その右手に持った冷えピタをそろそろ返してくれないかな？ その冷えピタ24時間使える奴なんだ。まだ開封してから1時間も経ってないんだ。

「ところで日葵は、首に冷えピタなんか貼っていたんだ？ 俺にはそれがどうして、こんなに暑い日に汗をかかなくて済むことに繋がるのか、イマイチよく分からないんだが……」

「ああ！それは——」

「ああ、それはだな……」

と。ここで私に近寄り服を握りしめていた鹿之助くんが、服から手を離して首をひねっている。

私としても『よくぞ聞いてくれた！』と、ここぞとばかりに解説に入ろうとしたとき、先にふうま君が口を開く。

「首には太い血管が流れているんだ。そこを冷やすことで熱中症予防や身体を効率的に冷やすことができる。だから青空さんは首に冷えピタを当てていた。そういう事だろう？」

「Yes! おっしゃる通りです。この方法は熱中症対策にも有用ですので結構重宝しているんですよ。あとは適当な水分補給と、塩飴での塩分の摂取。これが夏場の健康維持の秘訣です」

「ああ、熱中症は状況によっては深刻的な健康被害をもたらすからな」「お。ふうま君、もしかして分かるクチですか？ もしや熱中症の原理とか、ご存じだったり？ 喩え話の『ゆで卵構造』とか」

「青空さん、タンパク質が熱変性をおこす温度は約60℃以上だから、その喩えは中々に古い情報じゃないか……？ 最新の熱中症の原因は、発汗による脱水症状やミネラルの不足。脳への血液の循環量が減少などによつて引き起こされて——」

ふうま君はあっけらかんと言った様子で、首に冷えピタシートを張っていた理由を2人へと説明してくれる。

私もここで普段こそ緊急事態にも関わらず、人の指示も聞けないぼんやりとして役に立たない友人だと思っていたが少しだけ認識

を改める。

ふうま君だが、そんな昼行燈な素振りや見かけによらず博識なようだ。

彼の新情報の解説と原理説明に『ふむふむ』と相槌を打ちながらも、『なるほど、なるほど』と言いながら、片目を瞑って後頭部を搔く。

この時、私としては本音としては、『あつぶねー!!!』と内心叫び声をあげていた。まさか、ゆで卵理論が古い情報だったとは……私が説明するよりも先に『彼が話を先に振ってくれてよかった!』と思う。危うく自信満々に古い情報を彼等に話して、ふうま君からの情報の修正。鹿之助くんの前で赤っ恥をかくところだった。

ちなみに、私の知っている古い情報の『ゆで卵理論』というのは、『脳のたんぱく質を生卵に置き換えて、その部分が茹で卵状になってしまいい』一度、茹で卵状になった卵は2度と生卵には戻せない” という不可逆的な理論上の元、脳に障害・後遺症が残る』という原理説明情報だ。

まあ、よくよく考えてみれば私の生きていた時代から半世紀も時間が経過しているもんな。私の知り得る過去の情報が常に正しい訳がない。私の時代での変化として、上杉謙信女性説は棄却されていたし……。

「ふうまちゃんが物知りなのは知っていたけど、それを実践に生かせる日葵ちゃんも色々知っているんだね。蛇子、ちよつとびっくりかも」

「俺も……。ふうまの話していること、ちよつとよくわかんないんだけど日葵はちゃんと理解して相槌と返事をかえしている感じだし、日葵がそっちの話もできるってことに驚いてる」

私達の会話のやり取りに2人はついて来れないのか、ただただ目を丸くして私達の会話を眺めていた。

確かに彼等はまだ高校1年生だ。ここら辺の医学的・生物学的な内容は中学生時代にふわっと授業の一環として触れた程度で、よほどの物好きでもない限り、忘れてしまうような内容で、それが一般的だろう。それに気温が30℃満たないのならば、学校側からもそれほど口



うるさい熱中症に関する注意喚起も行われなくても何ら不思議ではない。

それが日常生活で使用されない、自分にとって興味のある情報でなければ、人間の記憶というものは簡単に薄らいでしまう。これは仕方のないことだ。

「——と言った感じだな」

「なるほど、それが最新の情報でしたか……いやあ、危うく知ったかぶりで赤恥をかくところでした。教えて頂きありがとうございます」

「青空さんにとって為になったようなら何よりだ」

「……あ、蛇子ちゃんはそろそろ冷えピタシートを返して？」

「うん」

「ありがとう。……ああ〜♡」

ふうま君からの最新の情報にお礼を言っ、私とふうま君を眺めている蛇子ちゃんの手から冷えピタシートと取り返し、首筋に張り付ける。

ああ〜ひんやりとしていて、たまらねえぜ。

再び冷却効果で涼む私にふうま君は、満足そうに笑いかけてきた。だから私も同じように笑い返す。

「ところで……」

「はい？」

「青空さんは、どこでそのゆで卵理論を知ったんだ？」

「え？」

話はそこで一旦終わり、学校へ向かうと思われたのだが……。

意外なことに、ここでふうま君が話を繋げてきた。しかし、彼の問いかけ方に少し違和感を感じる。まるで尋問されているかのような圧を感じ取ったからだ。

涼み和んだ顔から、彼の表情を見つめ直す。……彼はまっすぐとこちらを見定めていた。しっかりと視線を合わせ、私から一瞬も視線をそらさない。〈心理学〉上では、彼はとても私に対して真面目に問いかけてきていることが分かる。明らかに友達間で交わされる駄弁のような軽いものではなく、非常に重要なやり取りでもするかのような目

で――

「……ソース……いえ、この情報を知り得た出どころ、源泉ですかね？  
このゆで卵理論は――T w i n t e r……ネットで見つけた情報  
ですね。でも、またどうして？」

「……………いや、大したことじゃないんだ。『ゆで卵理論』をどこで  
知ったのか気になったただけであって。……気分を害してしまっただ  
うであればすまん」

「いえいえいえー？ 別に気分なんか害してないですよー？ いま  
私、怖い顔をしてたかしら？」

私が問いかけに応えると、彼はすつと目を逸らした。まるで何かま  
ずいことを聞いてしまったかのように気まずそうな顔をする。

私も私で彼の尋問のような問いかけにムツとして答えてしまった  
のかと、この前の洋館事件でなお先輩に休憩を持ち掛けられた時のよ  
うに両手で自分の頬を挟み込んで、ほっぺたをぐりぐり回しながら笑  
顔を作る。

「ねえ？ 鹿之助くん。いま、怖い顔してた？ してた？」

「え？ 別にしてなかったとは思うけど……でも、ふうまも日葵も、す  
ごく真剣そうな顔はしてたな」

試しに私達の会話を傍から聞いていた鹿之助くんに印象を尋ねる。  
鹿之助くんは私達の会話のやり取りは真剣だったと捉えたらしい。

なるほど……真剣な顔、ね。私としても別に彼に対して怒ってはい  
ない。ただ、尋ね方に違和感を感じたのと、この質問には解答しなけ  
ればならない。はぐらかしてもまた別の機会で同じようなことを聞か  
れるという圧を感じ取ったために答えただけに過ぎない。

だが、それがふうま君にとっては、私が気分を害したかのような顔  
に見えたわけだ。この情報から手繰り寄せられる彼の思考は、彼は私  
に対して「失礼な質問をした」と思っているのだろう。しかし、そこ  
まで客観的に判断すると『ゆで卵理論』のソースについて尋ねること  
は失礼なことだとは思えない……。

つまり、ここから導き出される答えは、彼の『ゆで卵理論』は表面  
上の問いかけであって、核心は別のところにあるのだと思われる。



## Episode 86 『男の娘でも頭皮は男の子』

「あぢー……。なーあ？ そんなことよりも、早く学校に行こうぜ？  
あんまりのんびりと話してると遅刻しちゃうよ」

「それには蛇子も賛成かなー？ こんなに暑いのに走りたくないよー  
……」

考察を募らせているところで、項垂れた声を上げる鹿之助くと蛇子ちゃんから声がかかり私は現実に取り戻される。

そういえば、私達は鹿之助くと蛇子ちゃんが私の首元から冷えピタシートをひつぱり剥がした時から、この炎天下の下その場で話し込んでしまっていた。

こればかりは鹿之助くと蛇子ちゃんの言う通りだ。そろそろ歩き出さないとまずいだろう。現時刻を確認するために、スマホを点けて――

「日葵ちゃん。今、何時だった？」

「……………8時、丁度ですね。ちよつと小走りが必要かもしれません  
……」

「ええっつ!!!?」

共鳴する蛇子ちゃんと鹿之助くんの絶叫。

そりやそうだ。所詮30℃にも満たないザコ、ザーコ外気温だとしても、こんな真夏に小走りとはいえ走りたくはないだろう。しかし、8時ともなると小走りで登校しなければ間に合わないのは確実だ。

でも。元はと言えば、私とふうま君が道端で熱中症について語り合い始めてしまったのが原因だ。ここは走る事態になってしまった責任を取って、首裏以外にも貼り付けている分の予備在庫の放出をして熱中症対策を2人に取らせたほうがいいだろう。

「すみません。私が熱中症の情報について熱中、紹介してしまわなければこんなことには……」

「日葵。今うまいこと言ったつもりかもしれないが、その親父ギャグで寒くなるのは心だけだぞ」

真面目な顔をしながら繰り出した私のボケに対する鹿之助くんの

ツツコミ。恐ろしく速いツツコミ。私でなきや見逃しちゃうね。でもおかげさまで私の心はヒートアップよ。悪くないわ。

それに鹿之助くんには往なされるどころか反撃というオチであったが、蛇子ちゃんには効果がばつぐんだったようだ。

私の冷凍ビームで、150cmの身長が149cmにまで縮んだような気がする。本人は150cmだと言って149cmであることを絶対に認めないが、蛇子ちゃんの本来の身長は149cmしかないのだ。私は頭3/4分、ふうま君とは頭1つ分の違いがある。

「ははは……駄目でしたか。そうだ。控え用でストックを5枚、持ってきているのですが……走る前に皆さんも当てますか？ 当てておけば学校に着いたとき、汗びっしょりになりますよ」

「本当か!? 申し訳なさそうな顔で親父ギャグを言い出した時には『本当は悪いとも思っていない?』って疑ったけどよ! 用意周到なところは流石、日葵だよな!! よっ! できる女!」

「え?! 蛇子も貰っていいの!? ありがとう〜!」  
そういつて鞆から未開封の冷えピタシートを3枚取り出す。

私を取り出し配布するような言葉と同時に、鹿之助くと蛇子ちゃんの目が輝く。

鹿之助くんに至っては本当に調子がいいんだから。そんな部分も十分に推せる。お調子者の鹿之助くん。

……この2人は本当に……なんといえよいのやら……。はたから見ていて本当に子供っぽくて安心できる。

一方でふうま君はというと……。

「……………」

私がかつて幼女に対して行っていたような、ある種の餌付けをする私と2人の様子を一步引いた立場で見つめていた。彼は、そのところがまったく子供っぽくない。

それどころか——今もこうして2人に構う私の姿を眺めて、私が改めて何者なのか分析しているかのような……。今、私がこうして横目で彼のことを確認したことについても、疑っているような眼差しを——  
——きつと私の考え過ぎだと思いが、そんな気がしてならないの

だ。

「ほら、これはふうま君の分です。ちやつちやと貼ってチャツチャと行きますよ」

「……俺も、貰ってもいいのか……？」

「当たり前じゃないですか。これから小走りで学校に行くんですよ？

現在地から学校までの距離と私達の走る速度を計算したとき、到着時間はギリギリになることに違いありません。ふうま君は蛇子ちゃんと違って水筒なんか持って無さそうですから、きつと朝のホームルームが終わるまで水分補給はできませんよ？ 体温調節できなくて熱中症で倒れたいんですか？」

「……すまん……」

「なーに謝ってるですか！ さつさと首筋に貼る！」

当然、そんな彼にも押し付けるように冷えピタシートを一枚渡す。

彼は私の気分を害してしまったと思っっている手前、最初こそ受け取りはおっかなびっくりな手付きだった。しかし今度こそ私が口を尖らせて、本当に不機嫌そうな態度を取るとやはり申し訳なさそうな様子で謝りつつ、自身の首筋に冷えピタシートを貼りつける。

「ひ、ひまりくくっ！ く、くびに！ 髪が邪魔で首裏にうまく貼れないんだが!？」

「ふうまちゃん！ ちよつと手伝って！ ふうまちゃんは蛇子の髪を持ち上げて！ その間にサクツと貼るから！」

ふうま君の準備が整い「よし。走るぞ」となった時。背後から鹿之助くんと蛇子ちゃんの情けない声が聞こえて振り返った。

現在、蛇子ちゃんは慎重な性格な部分も相まって冷えピタシートのシールを剥がしていなかったが、鹿之助くんの方は既にシールを剥がして難儀したためシートとシートが引っ付きあって、ぐちゃぐちゃになっっている。

2人は私と違って長い髪の毛を結うこともなく、そのままおろしている。

蛇子ちゃんは、毛先の方で結ってはいるためその気になれば簡単に貼れるのだろうだが、あれはきつとふうま君に貼って貰いたいのだろう。

う。普段は何事もテキパキと片付ける彼女が冷えピタシートごときで手間取るはずはないのだ。実際に彼女は自分で襟足付近の髪の毛を持ち上げて後ずさり近づいてきている。ふうま君にうなじを見せつけるその素振りから、やりたいこと、やってほしいことの思惑が滲み出ていた。

一方で鹿之助くんはシンプルに1人ではできないことが分かる。彼は既に髪の毛も張り付き、ぐちゃぐちゃになった冷えピタシートを手に涙目で私に近づいて——アッ!!!!!!

「お、おうー!」

「ええい!!!」

本当に鹿之助くんは  
世話が焼けますが、そこが癒しですね!  
そんなに慌てなくても

しょうがないなあ!!!  
大丈夫ですよ。

十分に間に合いますからね)

私とふうま君は揃って、難儀している2人の首筋に冷えピタシートを貼り付ける。

ふうま君側は、ふうま君が蛇子ちゃんの髪の毛を持ち上げている間に蛇子ちゃんは綺麗に首筋にシートを貼り付け。

私は、焦る鹿之助くんに落ち付かせるような声掛けをしつつ、内心ではそんな彼の世話の焼けるちよつとダメな所に癒し鹿之ニユウムポイントを得ては彼に髪の毛を持ち上げて貰い、私がぐちゃぐちゃになったシートを綺麗に伸ばして鹿之助くんの首裏にシートを貼り付けた。

必然的に、鹿之助くんの髪の毛の匂いと、頭皮の臭いが私の鼻孔の中に

「アッ——」

ぶちっ☆

あああああっ!!! 鹿之助くん! 鹿之助くん! 鹿之助くん!

鹿之助くううううわああああああああん!!!

あああああ……ああ……あっあっ——! ああああああ!!! 鹿

之助くん、鹿之助くん、鹿之助くうううんあ!!!

ああクンカクンカ! スーハー! スーハー! クンカクンカ! スーハー

スーハー! いい匂いだなあ……くんくんッ!!!!!!

急速に私の体内へ鹿之ニユウムが蓄積されて行く! アセトシカアノニンが放出される! シカアルロンSONで満たされていく!!!

これは合法だ！ 私は抱き着かずとも、合法的に鼻孔を経由することで彼を抱きしめられることができている!!! ほっそりとした身体を後ろからギュツと抱きしめることはできてはいないが、鼻孔の中は彼の匂いでいっぱいだ。これは彼の髪に私の鼻孔を埋めていることも大いに関係がある！関係があるううううう!!! ああ！最高だ！最高だ!!! ウヒヤツハア!!! 彼の匂いは、女の子ちっくな市販の石鹸の匂いとちよつと汗つぽい酸っぱい臭いが混じっている!!! 最高だアツ！

んにやはあつ！モフモフ！モフモフ！髪モフモフ！カリカリモフモフ……きゅんきゅんきゅいッ！これは現実か？ 現実だああああああ!!! いやっほおおおおおお!!! にやあああああああああん！

何よりもしんはっけん!!! すごいのは、鹿之助くんは改めて生物学的には「男」なのだと再認識できたことだあつ!!! 今、彼の首筋、首裏の襟足から漂っている加齢臭……もとい男の娘臭は、確実に男の頭皮のにおいだ!!! わかるか？ 青空 日葵イ!!! これはおとこのにおいだ!!! ウイツヒヒヒーツ!!! これは決してどうせいのおんなの要素からは得られないきちようなえいようそだツツツ!!! 経鼻上栄養だ！わたしにはわかる!!! 前世で男しか抱いたことはないが、わかる！わかるぞ！とうひがおとこのにおい！おとこのにおい！おとこのにおい!!! いいいいいい!!!

ヒヤハ、ヒヤハツ!!! ヒヤハハハハハアーツ!!!  
「はあ………つ。はあ………つ。はあ………つ!!!」

「あ、あれ？ な、なあ。日葵？ さつきからなんだか、めっちゃ息が掛かってんだけど……」

「……おっと、冷えピタシートを貼る際に空気が入ってしまったので、空気抜きをしていたのですが、熱中してしまいました。ゴクツ……さあ、遅刻するわけには行きません。走りますよ」

うああああああああ!!! いやだああああああ!!! そんなああああああ!!! いやああああああ!!! はあああああああん!! 鹿之助くんのようなじいじい!!! もつとみてたいい



いいいい!!!なめまわしたいいいいいいい!!!ウゲゲゲゲゲゲ  
ヒツ!!!ギヒツ!!!ギヒヒヒヒツ!!!グフフフフ!!!

「今、生唾を飲まなかったか? それにさつき世話が焼けるけどそこ  
が癒しって——」

「あー!あー!待ってそれは言っていない!言っていないはず!それは  
言っていないはずだと思うんですけど?!?!?!なんで知ってるの?! そんな  
ことよりも走りますよ! ほら早く!!」

心の中で思っていた言葉が、どういう原理か鹿之助くん伝わって  
おり僅かばかりの動揺が出てしまったが問題ない。忙しい動きで  
鹿之助くんに自分のスマホをみせて時間を確認させてから、走る様に  
プリプリのプリケツではなく……背中を押し出す。

ううっううう!!

私の想いが鹿之助くん届いた!!

どういうわけか五車町の鹿之助くん届いた!!!

うー☆!うー☆!

今日こそ何事も起こらない楽しい日常になりそうだ。

## Episode 87 『休み明けの違和感』

7月初日の登校。

微妙に私に対する様子がおかしいふうま君と、ふうま君に冷えピタを首に貼って貰えて嬉しそうな蛇子ちゃんと別れ、私と鹿之助くんはいつもの教室にてホームルームルームを受ける。

そんな朝のルーティーンが終わったあと。

私は周囲を見渡し、洋館事件によって入院していた前後のクラスに対する違和感に気が付く。

「？」

「どうしたんだ？ 日葵。そんなに周囲をキョロキョロ見渡して」

「……鹿之助くん、この教室ってこんなに広がったでしたっけ？」

「え？」

既にクラスメイト達は朝のホームルーム後では自席を立ち友人と戯れるもの。次の授業の準備をするもの。私の周囲を見渡す行為に不安でも覚えたのか私の行動をじっと見つめるもの……。おおよそ、その3種類に分かれておのおの分散、展開していた。

そこへ私の言動に反応した鹿之助くんが、私の傍らまで近づいてきては同じように辺りをキョロキョロと見回す。

でも彼には私の疑問について理解に至らなかつたようで、数度周囲を見渡したあとにキョトンと言った様子で首を傾げながら私の顔を見上げていた。

「別に、俺は教室が広がったような気はしないけど……」

「そうですか？ でも……。……ひ、ふ、み……。やっぱりおかしいです。机の数を数えても、私が五車学園に来た時と比べて3人も少ないように感じます」

「それは……。……あ、お、おい！ ひ、日葵?！」

指をさしながら机の数を数えてみるが、やはり数が合わない。

数が足りないような違和感の真相を探るためにも生徒の名前が一覧化された名簿表を見るため、教卓へと走り出す私へ鹿之助くんが引き止める声が聞こえてくる。

普段であればその魔性の声色に耳を傾けてしまい、立ち止まってしまふところだったが、今日という今日は登校中に鹿之ニユウム、アセトシカアノニン、シカアルロンSONを午前中分、十分に摂取していたことで彼の〈魅惑〉的な声に惑わされることなく目的の場所までたどり着くことができた。

私がいっつものように、ただ荒ぶっているだけかと思っただか？ すべて計算込みの行動よ。(震え声)

さて、私のまぐれによる過剰摂取できた鹿之補助栄養しかのほすけに関する情報はさておき……。

教卓には電子パネルが備え付けられていて、普段であれば4桁の数字を入力しなければ引き出しは開かないような構造になっている。

いくら国立の小中高一貫の学校……もとい学園であっても、備え付けられている設備は時折過剰だと言えるほどの嚴重な金庫に似たものだった。

しかしこちらとて約2カ月間、ただ学園生活を送っていたわけではない。私は五車学園に入院期間を差し引いても1カ月も在学している。ゆえに、この4桁の暗証番号がどんな数列なのか、予め入手していた番号から割り出し〈鍵開け〉することぐらい、赤子の手をひねるよりも簡単な作業だった。

ピッピッピッピッ……ピピピッ

「ステンバイ……」

ピッピッピッピッ……ピピピッ

「ステンバイ……」

ピッピッピッピッ……カチャッ

「ンッ。ビューティフォー」

………幸いにも3回の施行で開錠された。

こういう引き出しは、〈物理学〉なり工具を用いて〈機械修理〉による破壊を試みての決じ開ける方が、私の技術として十八番なのだが……。手元に分解に適した工具が揃って、破壊工具3種の神器である大きな棍棒『エスカリバル』が無かったこと。後で痕跡を残さないように元に戻すことを考慮した結果〈鍵開け〉で丁寧に開けることに

したのだ。

引き出しの中には金属製のフレームで覆われ、濃い水色のプラスチックのような素材で本の縁が鋼鉄の金属で覆われた本が1冊入っていた。表紙には五車学園のスクールエンブレムが描かれており、それは7角形の盾のような形で中央に縦書きで五車の文字。その下のリボンには「GOSYA<sup>五</sup> ACADEMY<sup>車</sup>」と刻まれている。これこそ今回、私が違和感を探るために調査を済ませるための目当て資料として定めていた出席者名簿表だった。

いつも授業にやってくる教師陣はこの本の表紙に手をかざして、まるでマジシャンが超能力で本を捲るかのように手を触れずに開いている。大方、掌の指紋認証か何かで開くように設定されているのだろう。ゆえに私が本に掌をかざしても、その指紋では開くことはないことは承知済みだ。

——ならば開ける方法は1つだった。

同じく教卓の引き出し内に入っている工具箱からドライバーを取り出して、私の行動を眺めているクラスメイトに私が何をしているのか即座には察知されないように教卓の裏に隠れながらこの機械的な本の蝶番部分を「機械修理」で破壊しようと試みる。

こちらは丁寧に開けずとも『あとでまた壊れた部分を「機械修理」をすればよい』と判断したためだった。それに規定時間内に直せなくても持ち去って、最初から「無かった」ことにもできる。

だが、私が完全に分解するよりも早く、私の手で完全に解体される前に本の方が根を上げたようだ。プシュツという眼科受診時に目に吹きかけられる風のような音が響かせたあと、表紙に『UNLOCK ED』との文字列が表示されて本が自発的に開いてみせる。

「……よし」

一見すると、この重厚な出席者名簿表の水色のページは、プラスチック板のように固そうなのだが……。その手触りは私がかつて生きていた時代、2020s頃の小説の用紙と同じ材質にも似た柔軟さとシルクのような……。選挙に用いられる投票用紙のような高級感溢れるツルツルとした手触りだった。

中には基本的にこのクラスメイトの個人情報に記載されている。しかし、今回の目当てはそれではない。一気に最後のページまで飛び、出席者一覧表を探す。

5月、6月分の出席者名簿表はすでに差し替えられて見つからなかったが、7月分の出席者名簿が見つかった。さつそくそのページを用いてクラスメイトの数を勘定し始める。

「えっ日葵!? あれ!? 教卓には鍵がついて……え!? えっ?!」

当然の反応かもしれないが、一步遅れる形で私の元に走り寄ってきた鹿之助くんは目を丸くさせている。

彼の知り得る情報では、少なくともこの教卓には鍵が着けられていて、誰でも教卓の中身をみることができないのは知っているからだろう。今の彼の心境を〈心理学〉で探らずとも『え、なんで日葵そんなことできるの?』と言いたそうな、目をまんまるにして口はマイククラフトに登場するクリーパーのようなあわあわとした口から溢れ出る感情が一目瞭然だった。

「鹿之助くん。パスコードの文字数は4桁ですよ? 先生達が普段私達に見せている手の動きに〈目星〉をつけて、そこからおおよその『該当する数字』と『異なる4桁の数字』を用いることは最低限り出せます。あとはその4つの数字を確率の計算式『 $4 \times 3 \times 2 \times 1 \parallel 4$ !』に当てはめれば、おのずと答えがみえてくるじゃないですか。そんなに驚くようなことではないでしょう?」

「いや、そんな『簡単でしょ?』って感じで説明されても……。ええ……………?」

「……………」

「な、なあ。でも、その人が減ったと思うのは気のせいじゃないか? 久々に学校に来たからそう思うだけであってさ、そんなことよりも先生の使う名簿表を勝手に開くのはまずいって。他の連中は、クラスメイト気にも留めないかもしれないけどさ。バレたらまた蓮魔先生に怒られるぞ?」

「……………」

教卓に走り寄っては開錠し、問答無用で個人情報が掲載された名簿

表を躊躇なく開く私へ鹿之助くんはその行動を注意してくる。

しかし私にはあの時に感じた違和感とこの一段上に存在する教卓から見える景色から、その私の感じたことが『久方ぶりに学校へ来たから』という12文字で済まされてしまうような簡単に単純な問題ではないように思えた。

だからこそ鹿之助くんの発言を無視する形にはなってしまうが、彼の〈魅惑〉を振り切り。出席者表に人差し指を当てての〈経理〉情報で不正な資金のやり取りがなかったか細かく確認するようにクラスメイト達の名前をつぶさに確認していく。

「だから、なっ？ なっ？ もうその名簿を閉じて1時間目の授業の準備をしようぜ！ えっと、次の授業は——」

鹿之助くんも、私が普段の様子とは異なることに気が付いたのかもしれない。

一心不乱に出席者名簿に食らいつく私の対面でしゃがみ込んできた。彼は男……男の娘だが、対比の関係を位置どるかののように男の子らしく細かいことは気にしてない……いいや。あえて気づかない様子で振る舞っているようにみえる。

これは鹿之助くんの普段の素行の話にはなるのだが……。

普段のこのような状況。これがふうま君とつるむような状況であれば、こういう悪だくみにはどちらかと言えば積極的な様子を見せるのに……。

彼は明らかに話題を逸らしながら明るく振る舞い、正面から開いていた出席者名簿表に手を掛けて強制的に閉じさせてくるのだった。

だが——

Episode 88 『転校生』

「……。……やっぱりいいですね」

「えっ？」

「やっぱり居なくなっていると云ったんです。クラスメイトの駒宮こまみや幸子ちゃん」

「……………」

彼が出席者名簿表を閉じさせるよりも、私の方が情報を引き抜く方が早かった。

私の言葉に鹿之助くんは、唇を噛むようにしてそっと右下に視線を逸らした。

この様子は〈心理学〉上。彼の表情や目の動き、そして私を名簿から遠ざけようとしたような言動からは、何かを知っている上で隠し事をしているのだろう。同時にそれがネガティブな感情であり、何か考え事しているような顔でもあった。

「……鹿之助くん」

「！」

「鹿之助くんは、彼女が今、何処にいるのか……。もしかしてご存じなのでしょうか？」

「……………」

鹿之助くんは、本当に分かりやすい。

口に出さずともその行動の1つ1つに今の彼の心境がありありと映し出されている。

現在、彼の右手は片手で手垢を擦り落とすかのようにモゾモゾと指を動かしていた。私の問いかけには、小さな子供が親に核心を突かれたときのようにビクンッと身体を大きく跳ねさせている。視線は一切こちらには合わさずに、僅かに噛んでいる下唇が固定されているにも関わらず上唇だけが微かに動いて、なんとか私の問いかけに答えようとしているのを把握できた。

「あ、えと……。勘違いして欲しくないのは、別に私は怒ってないですよ？ だが、クラスメイトの駒ちゃん……。彼女が何処に行ったのか知っ

ているなら教えて欲しいのと……。いえ、現状はそれだけで十分です」

「……………」

「……場所、変えましょうか。何だかんだで今回の鹿之助くんの予測は外れて、クラスメイトからの注目を集めつつありますし」

ふとここで立ち上がり視線を鹿之助くん1点だけではなく、クラス全体へと広げる。

今、クラスメイト達は私達……というよりも、おもに教卓裏で何かガサゴソと作業をしている私へと注目を集めつつあった。

彼等の目つきから、まあ……。いつもの青空とそれに振り回される上原” という視線なのを察知する。

だから教卓の引き出しへ出席者名簿表を乱暴にしまって、そんな彼等から逃げるように蹲ったままの鹿之助くんの小さなおててを……。うえへひっ。水底に沈む絹豆腐を包み込むように優しく掴んで、廊下へと引っ張った。

……………

……

…

廊下へと出た後は、彼を防火扉近くの階段踊り場に連れてくる。

こう言ってしまったてはなんだが……。五車学園での私のキャラづくりは良い感じに馴染んでいると思う。

私がかかしらのタブーを犯したとしても『まあ、青空だしな』という感覚で片付けられているところは、初日から五車学園の教員である八津 紫先生によって『優等生：青空 日葵』の可能性を潰された身としては好都合なキャラ付け位置だった。

「……ヨシ。誰も尾行していないですね。……どうですか？ ここなら話せます?。」

「……………」

「……………」

場所を移し替えても沈黙を貫き通し続ける鹿之助くんに、私は困った顔して片目を瞑って片手で後頭部を搔く。



今回は彼の言いたくない気持ちを汲み取って話を　「なかったこと」にする選択肢はなかった。

駒宮　幸子ちゃんというのは、私と鹿之助くんの同じクラスの女子生徒の1人だ。

私がまえさき市の一件で退院したあとの席替えで隣の席になった女の子だった。

彼女はくすんだ海色の髪に、碧色の瞳、気の強そうな目つき。いつも小豆色のマスクをつけた女子生徒で……。彼女が現代社会の授業で問題をハンジロー先生斎藤　半次郎先生に当てられたときに、回答の助け舟を出して以来、少しずつ関係を持ち始めた私の友達の1人だ。

鹿之助くんがふうま君達との　「課外授業」　で居ないときなどは、彼女と一緒に食堂で昼食を摂っていたこともある。そんな私の日常に少しずつ介入していた友人だった。

駒宮ちゃんが、私と一緒に食堂へ向かう姿を見た五車学園の生徒が、ギョツとした顔で二度見するぐらいには学校生活での素行が良い子で……。私と鹿之助くんのようににだいたい登校時間の遅刻ギリギリで教室に滑り込むようなことは無かったし、授業をサボったり早退をしたこともないような子だった。

あとのクラスメイトの2人は友達ではなかったが、素行の良い部分では駒宮ちゃんと似たような存在ではあった。駒宮ちゃん……駒ちゃんとは違って、クラスの中では常にトップを争いあうような文武両道な成績優秀な2人だったと思う。

ちなみに、あの名簿表に名前がなかったことに関して　「課外授業」　が関係していないことは充分に承知している。鹿之助くんがふうま君達と　「課外授業」　に出かけていた時には、出席名簿表に鹿之助くんの名前は存在して机もそのままの形で残されていたのだ。……ここまで情報が出そろって居れば、彼等が何処に行ったのかなんて見当はついているのだが……。

この時の私は、なにか事情を知っているであろう鹿之助くんにも、真実を話されるまで私もソレを認めたくなかったのだと思う。

「……駒宮さんは……」

「！ 駒ちゃんは!?!」

「……ッ」

ここでやっと鹿之助くんが口を開いてくれた。視線を下に落とし合わせてはくれなかったが、私も彼の言葉に食らいつくように次の言葉を催促する。

でもそれは逆効果だったようだ。今度は上唇まで噛みしめて非常に重々しい雰囲気を漂わせ始めた。身体も少し震えている。

「いや……おれは……おれは……俺は言うぞ。日葵……。駒宮さんは

「転校」 したんだ……」

「転、校……?」

「………ああ」

「………」

本当に言いにくそうな鹿之助くんの言葉に、『ああ、やっぱりそうか』と小さな溜息をつきながら納得してしまう。

そうじゃないかなと……思う部分はあったが、こうも現実には冷酷で予想通りの結果を突き付けてくる。それでも……信じたくなくて……。

「もしかして、他の2人も?」

「………そうだよ。2人とも 「転校」 していった」

更なる私の問いかけに、鹿之助くんはその両目を目頭付近にしわができてしまうほどに固く閉ざす。まるで鹿之助くん自身もあまり触れて欲しくない話題のようで、考え込みながらも言葉を選ぶ……まるで戦争帰りの軍人が、戦友の死去をその遺族に告げるかのような苦慮に満ちた声だった。

「………そうですか………」

「あいつらは 「優秀」 だったからさ。こんな片田舎の学校よりも、都会のもっと設備と頭のいい学校があって、そっちに 「転校」

したんだって。……如影学園にょえいがくえんっていうんだけどさ。校長先生もこの卒業生でいい学校なんだって。だから、日葵はそんなに心配しないで大丈夫だって。きつと元気でやってるはずだよ……」

ここでやつと鹿之助くんが私の顔に視線を向けてくれる。その顔は今にも泣きそうでありながら、罪悪感に押しつぶされそうな声と表情だった。それでも、その中で私の気持ちに寄り添ってくれるような、やるせないながらも無理に笑顔を浮かべて励ましてくれる。

それでも、この五車学園は私の知り得るどの私立高校ですら見られないほど、充分に設備が行き届いた学園であることにも関わらず……そう更にそれを上回る学校・学園と聞いて疑問が湧いてしまうが……。きつと、それも鹿之助くんが私を安心させるためについている優しい嘘なのだろう。そうに違いないと思つて。

「……わかりました。教えて頂いて……ありがとうございます」  
これ以上は詮索はしまいと、端的にお礼を述べて私も彼から顔を背けた。

「……おう。机が無くなつたら “転校” したつてことだからさ。もう、もう無暗に出席表とか開くなよ？ 日葵の元いた学校ではどうだったか分からないけど、この学校じゃ個人情報保護に先生達がとにかくうるさいんだからな！」

「……肝に銘じておきます」  
「……。じゃ、もう教室に戻ろうぜ。次の授業の準備をしなくっちゃな！ 日葵は休んでいた分もあるんだし、今は俺の方が賢いかもな！」

峠は越えたのか彼はいつも通りの表情を浮かべて、小生意気な軽口を叩きながらも軽やかな足取りで教室に戻ろうとする。

だから私も彼の後ろについて歩いて——彼の半袖のワイシャツの袖口を掴んだ。

「……」  
「………駒ちゃん。最後に、私に対して何か言っていましたか？」

「………『お見舞いに行けなくて、ごめん』つて言つてた」  
「………そうですか」

彼の言葉を廊下で聞き届けてから教室の扉を潜る。

……  
……

…

「あ、先生。青空さんが帰ってきました」

「ヒョッ？」

新しい友人の転校の知らせにセンチメンタルな気分になりながらも、教室に入るとそこにはクラスメイトの西郷寺くんが私に向けて指をさしている。

その傍らには蓮魔先生が立っていて………手には、1限目開始までには直そうと思っていた半壊の出席名簿表を……—

ドサツ……。バサバサバサ……。

先生が振り向くのと同時にその手携えていた出席名簿表が、もう限界とばかりに彼女の手の空中分解……全壊して床に落ちる。

「……………」

途端に陰しくなる蓮魔先生の形相。

「アツ」

………今日も私は不運と踊ハードラックと踊ダンスつちまう運命にあるらしい。

## Episode 89 『真夏の昼間の悪夢』

「ひまりー……あづいいいいー……。はやく、はやく  
〃なんとかしてくれえ……！」

「今やっているとこですよ！ 鹿之助くんは、その部品を取って  
ください！」

「あゝいー……！」

ある日の3限目。

黒板にデカデカと自習と書かれたクーラーの効いていない教室で、私と鹿之助くん、そして夏の熱気によって亡者ようになったクラスメイト達に囲まれながら、FFに登場するモルボル張りに臭気を放つエアコンの修理に勤しんでいた。

自習の課題として作文の提出が求められていたが、そんなことよりも『エアコンの修理』の方が私や鹿之助くんクラスメイトにとって最重要事項であった。

しかし、その課題を未提出で済ませてしまうこと。それすなわち1学期の半分以上を『にゆういんぐらし！』で潰してしまった私にとって致命的な評価に繋がりがねない。私は変に目を付けられない為にも自身の隠れ蓑にし、五車学園卒業後は大学進学するためにも平均的、学年と時期によって上位でいる必要があるのだ。

だが、それでもこの熱射病になりかねない教室で自習をするのはそもそも話、生命活動が危うい。熱射病はなあ！脳に障害を残すことだつてあるんだぞ！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつつ！！！！」

そこで、私のクラスが自習であることをいいことに、授業をサボって遊びに来た陽葵ちゃんに私の課題を任せている。ここからだと彼女の姿は後ろ姿しか見えないが、ご覧の通り彼女は暑苦しい雄たけびを上げながら机に齧りつくように集中して私の代わりに作文を書きあげていた。

心なしか他の女子生徒が日焼け止めクリームを塗るような皮肉を展開するほどには、全力で作文を仕上げる彼女の周りの温度が3度ほ

ど上昇したような気がする。

いまだ彼女が私に抱き続けている感情を弄ぶのは恐縮だが、事態が事態なだけにこの際は有効的に利用させてもらっていた。

「青空！ お前の言う通り職員室で必要な部品を貰ってきたぜ！」

「はい！ ありがとう！ 西郷寺くん！ では今から臭気の原因である部品をそちらに渡しますので、持って来て頂いた部品を私に受け渡してもらって——」

「青空さん、脚立借りてきたよ！」

「あ！ 藏石さん！ ありがとうございます！ 今、この不安定な机の塔から降りますね！」

彼等はクラスメイトの西郷寺くんと、藏石さん。

西郷寺くんはこの前の『青空 日葵、出席者名簿表破壊事件』で蓮魔先生に対し、誰が教卓の鍵を開いて名簿表をこじ開けたのか告発しやがった男子生徒。

藏石さんは………ちよつと私もよく分からない女子生徒。クラスメイトではある。あんまり深い関係性を持っているわけではない。知人程度の間柄だ。

そんな2人だが、このエアコンの修理をしている間にも、役割分担として同じく自習をサボったクラスメイトが続々と必要物品を持って来てくれていた。

そんな最中に私は僅かばかりの青春を感じる。この一体感。天然のアドレナリンが分泌されて高揚感に満たされる。思い描いていた青春とは少し違うがこれはこれで充実して満足していた。

「よしっ！ これで通常通り使えるはずです！」

蓋を閉じて電源のスイッチを入れる。リモコンを操作して……今度こそ完璧な冷房のはずだ。

スイッチを押したのと共に冷風が、教室全体へと行きわたる。それと同時にクラスメイトからの歓声が上がリ、私は危険を顧みず脚立の最上段である天板に登ってプロレスラーがリングの上での勝利の仕草のように高らかにガッツポーズを取る。

勝ったな。



イッチを入れてクーラーを効かせてくれるはずです。そしたら、ゆっくりと涼みましよう?」

「そうだな……」

顎にまで滴る汗を拭いながら、バッグからハンカチを取り出して汗を拭き取る。

今日ばかりは朝に簡易メイクをしなくて正解だったと常々思う。仮にメイクをして、学校まで全力ダッシュをキメていようものならば今頃、血涙を流す真夏の亡霊が教室内に爆誕していたはずだ。

キーンコーンカーンコーン

……ガララッ

汗を拭き取っているとやがて朝のホームルームのチャイムが鳴り響き、教室の扉が開き担任の先生が入ってくる。

そんな姿を目にしたところで鹿之助くんは視線を送り、彼も汗をダラダラと滴らせながらまた項垂れながらもこちらを見つめているのが目に留まる。それから、お互いの『遅刻しなかった』という功績を称えるように、片手の親指を立てたG Jサイングッジョブを送り合う。

しかし、ここから事態は予想もしていなかった方へと転進する。

(あれ……?)

担任の先生は朝のホームルーム前に必ずエアコンのスイッチを入れてから、他クラスの授業に出かけていくのだが……。今日だけはなぜかエアコンのスイッチに触れることもなく、そのまま教室を後にしてしまったのだ。

当然、ざわつく生徒達。

「なんだよー。先生、エアコンぐらいいつもみたいにつけてくれればいいのにさー」

だが、先生が付けてくれないのなら自分達でつければいい。

そんな理論で西郷寺くんが、教室手前にあるリモコンを操作し電源を入れてくれた。

最初はまさかの故障を疑ったものだが、そんなことはないようだ。

「みんな、何度ぐらいにするー?」

「16℃」



「20℃」

「26℃」

「18℃」

「オツケー、平均を取って20℃なー？」

「はああああ……」

「涼しい……」

「夏はやっぱクーラーだよなあ……」

オークションの競りのような協議のあとで、彼がリモコンを操作して設定を済ませる。

私も鹿之助くんも全力ダツシユで登校したため、彼の調整には大賛成だ。女性の私としては、のちの冷え込みで体調を崩してしまわないか心配であったが……今はクラスメイトや鹿之助くんが涼んで勉強のしやすい環境で授業が受けられるならそれでもいいかなぐらいで考えていた。

そして、その異変は起きたのだ。

「……………？」

エアコンをつけてから約20分後……。

1限目の授業が始まった時の出来事。

何処からともなく、息苦しさを感じる。

酸欠というわけではない。この息苦しさの原因は悪臭だった。学生ならば1度は嗅いだことのある、粉っぽい粉末状の臭い。黒板消しに鼻を押し付けて思いつきり息を吸ったかのような悪臭が一定の周期で室内を漂っている。臭気だけに。

あたりを見渡してみるが、この異臭を感じているのは私だけではないようだ。

この教室にいる誰もが鼻を抑え、うつ伏せ、顔をしかめている。

「この教室もか……。ちよつとエアコンを消して、窓を開けて喚起するぞー」

「えー！ー」

「やだー！ー」

「ぶー！ー」

そんな先生の真夏に窓を開けるなどという正気とは思えない宣告に、一同はブーイングを飛ばすが無慈悲にも喚起の為に窓と扉が開けられた。おかげさまで悪臭を漂わせつつも、学びやすい環境が整っていた教室は一瞬で地獄と化す。

《悪臭の退散》と共にクラスメイトを襲う熱風。そんな1限目は、せつかく涼しい空気を外部に逃がしてしまうような形で幕を閉じた。当然、先生が居なくなった段階で再び西郷寺くんがエアコンの電源を入れるが……。結局、2限目も同じような状況に巻き込まれる。

2限目に至っては開幕から生徒が勝手にエアコンの電源を入れられないようにとリモコン自体を没収される始末だ。適度に水分補給をする私でも熱中症になりかねない室内のうだるような暑さで、まったく授業の内容が頭の中に入っていない。

そして2限目と3限目の授業準備時間……。

「こんな暑い中で勉強してしろって言われても無理だろ！ 暑くてやる気も起きねえよ！」

「じゃあ、どうする？ 職員室に行つて暑さで勉強ができないから、リモコンを返してくださいっていう？」

「もう行つてきたよ。ダメだって。他のクラスでも似たようなことが起きてて、悪臭の原因が分かつて業者が修理・清掃に入るまで渡せないって」

「さくら先生に話して秘密裏にリモコンを貰おうとしたんだけど、紫先生にバレちゃってえ……。『最近のお前等は弛んでいる！ 私の時代は扇風機で我慢したものだ！ そんなに涼みなければ倉庫にある扇風機で代用しろ！』って言われちゃって……」

「あの老害脳筋ゴリラ野郎……」

「扇風機を使つても、熱風は熱風なのにな」

「なー。先生と俺達の時代は気候がちがうっつーんだよ……」

紫先生が老害脳筋ゴリラ野郎とか言われていて草を生やしかけるも、ここは仏頂面で乗り切る。クラスには必ず1人は存在するとされているぼっち系陰キャのように〈聞き耳〉で探りながら、私は私で止まったエアコンを下から眺めていた。

教室の教卓側を前としたとき、エアコンは教室の後ろ側の天井に位置する部分に存在している。エアコンの真下には生徒たちの荷物をしまう小型ロッカーと、壁には正面の黒板よりも小型の黒板が設置されていた。

私の前世の思い出からの経験予測として。きっとこの黒板の粉が、エアコンに吸い込まれて悪臭を放っているのだろう。私は高校2度目だからこの手の臭気特定は容易なのだ。つまり原因が判明している今、あのエアコンのカバーを外してフィルターさえ掃除すれば、業者なんか呼ばなくても直せる見込みは高かった。

この時点で問題を挙げるならば、エアコンは天井に存在する。つまり、机の上に登った程度では手が届かないぐらいか。

「ひまりー。何見てんだ?」

「エアコンを見ています。あの臭気の原因はエアコンにあることが教室の備品配置によって判明しましたので……」

「あ、そっか。俺もなんでチョークっぽい臭いがするのかな?って気になっていたんだけど、俺達の背後にある黒板の粉を吸い込んで悪臭を循環させていたのか!」

「そういうことです。……鹿之助くん。ちよつと君の勉強机を借りてもいいですか?」

「? いいけど……何をするんだ?」

「エアコンを直します」

「えっ? ちよ」

鹿之助くんが止めるのよりも先に、自分の机の上に鹿之助くんの机を重ねて置く。

この不安定な足場に登ることは、フォークリフトに固定されていないパレットを重ねて天井の電球を替える現場猫並みに危険行為だが……。落下したとしても所詮3 m以内だ。私が仮に転んでも怪我する恐れは一切ない。

陽葵ちゃんが洋館へ行こうとしたときには、彼女達を引き止めるために1?の高さから落下しただけで死ぬ危険性があると力説したものだが……すくなくとも『新クトゥルフ神話TRPG』と『CA

LL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』には、そのような裁定は3m以上からでしか落下時の負傷の概念存在しない。つまり私は2.9m以内の高さであれば、どのような姿勢であれ……足から着地しようが、頭から着地しようが、無傷ままで居られるという事だ。

……この前、まえさき市でえっちなお店を開いている蛇子ちゃんに、五車学園の地下病院の天井に私の日程表カレンダーを貼り付けられ、私が剥がそうとして頭から流血したが……。あれは怪我した身体を酷使するような形で1度は失敗した〈登攀〉行為を再度強行したためのものだ。やはり3?を越えると失敗時の身体への損傷が大きいものなのだ。

それに……。今回、もし仮に私が1?の高さから転倒して負傷する可能性を考慮することなんかより、このまま学習効果の粗悪な環境である真夏の昼の悪夢のような教室で3限目の授業を受けるのはまっぴらごめんな話でもある。否やっぱり絶対に私なら1?ぐらいの高さであれば、そもそも入院するような流れにもならないだろう。

「おい！ なんかもた青空が突拍子もないことをし出したぞ！」

「な、なあ。青空の奴、何してんだ？」

「いや、わかんないよ。第一、入学初日の基礎能力試験で奇声を撒き散らしながら拳銃片手に、脳筋ゴリラの宝物のジャージを本人の目の前で地中に埋めてドヤ顔で引きちぎったアイツの行動なんか誰も予測できむわけがないだろ」

「そりやそうだけど……」

『馬鹿と煙は高いところが好き』っていうけど、それかな？」

「シッ！ 本人に聞かれたら病院へ道連れにされるぞ！」

「青空さん、やめときなよ！ 落ちたら 〃また〃 入院になっちゃうよ?！」

心配するクラスメイトもいるが、それよりも何気ないクラスメイト達の心のない言葉が私の心に刺さる。

(ヒソヒソと声は落としているが、私の〈聞き耳〉がお前等の声を全て拾っているからな?)

二段重ねした机の頂上で、内心クラスメイト達に悪態をつく。そんな野次はさておき、エアコンのカバーを開き中身を確認した。結論としては案の定だ。フィルターに黄色っぽい白色のチヨーク粉末が張り付いている。恐らくこれをエアコンの本体が吸引して、冷却した風として教室内へ悪臭を漂わせていたのだろう。

そんなフィルター自体を取り外すのは簡単だった。こんなのは素人でもできる。

「えーつと……。じゃあ西郷寺くん。これを3分以内に、廊下の流し台で洗って乾かして持ってきてください。この部分を綺麗にすればエアコンの悪臭が消えると思いますよ」

「俺……………俺!?!」

「このクラスに西郷寺くんはキミしかいないでしょ」

「お、おうー!」

最寄りに居る……あわあわとしながらも、私が机から転げ落ちてしまわないように机を抑えてくれている鹿之助くんではなく、西郷寺くんをパシリとして選抜し取り外したフィルターを持たせた。

彼は私の指示に対して、どもりながらも彼の友人数人を連れて廊下へと飛び出して行く。

いやー、それにしてもやっぱ若いっていいわ。両腕を天井に上げているのに、まったく肩が痛まないもん。そもそも肩が上がらないなんて悲惨な肩の具合の可能性が一切ないもん！ 腰も痛くないもん！ 若いっていいな。

……………

……………

……………

## Episode 90 『真夏の陽葵の乱入』

「あとは——鹿之助くんはリモコンを適当なクラスから調達してきてください」

「え、でも……」

「リモコンについての心配ごとでしたら基本的に学校に設置されているエアコンの型は同一の物なので、学内にあるものであれば他のクラスのものでも起動できます。あるいは窃盗的な心配事ですか？ であれば、リモコンはちよつと借りるだけなので発覚する前に返却すれば何も問題はありませんよ」

「そうじゃないんだけど……わ、わかったよ。行ってくるぞ。落ちるなよっ。」

「ははは、鹿之助くんはやさしいですね。大丈夫ですよーだ。私、DEX体幹には自信あるので」

「つとお上原、あぶねーな」

「ガタガタッ」

「わっ！ わわわ日葵落ち落ち落ちる！！」

「……なーんちゃって。鹿之助くんは早くリモコンの調達をお願いします」

「う、うん……」

「青空さん……洗って来たぜ？」

「……ありがとう」

西郷寺くんがフィルターを洗っている間に、他には何が必要か……そんなことを考えて鹿之助くんにお問い合わせをし、教室を出ようとしているところに西郷寺くんが教室へと戻ってくる。

あわや正面衝突しそうになって私は動揺のあまり机上から転がり落ちそうになるが、間一髪、鹿之助くんの方が西郷寺を躲して怪我をすることなく教室を出て行った。

良かったな西郷寺。いま鹿之助くんと衝突して彼を転がそうものならば、私は〈跳躍〉からの落下ダメージ込み〈マーシャルアーツ〉〈キック〉をお前の顔面に叩き込むところだったぞ。

鹿之助くんが西郷寺と衝突して転びそうになることは未遂で終わったので、それはさておき……。私は時間にシビアってわけではないが、あと2分で次の授業のチャイムが響く。それまでにはエアコンの整備を終わらせたいとは考えていたところだった。愛想のよい顔で彼からフィルターを受け取り、エアコンの定位置にハメ直す。

……私の想定では、これであの悪臭を完封できるはずだった。

……

……

キーンコーン

カーンコーン……

鹿之助くんがふうま君のクラスから、エアコンのリモコンを調達してきたところで授業のチャイムが響く。

「ひひひひひまりい……………」

「大丈夫ですよ。大丈夫です。次の時間で、私が何食わぬ顔で返しに行きますから」ピッ

「うううう……………」

「ほんと上原くんって情けないよね」

「もつと男なんだから、堂々としていればいいのに。ホンット頼りがいのない」

「分かる〜！ナヨナヨとして女っばいよね」

「格闘の授業では男の癖にビリッケツだし」

「まさに頼れない男の典型的だね」

「そうそう。将来の向いている職業も電気工事ぐらいなのに、青空さんが率先して直してるところとかさ」

「ほんとほんと。彼女、あんな男の何処が良いんだか……………」

チャイムによって返却するタイミングを見失った挙句に、窃盗の片棒を担がされた鹿之助くんはその場でバイブレータのような震え、加虐心を煽るような情けない声を上げた。

彼の声を聴いていると自然と口角がにんまりと上がってくる。それにこのニヤけは、鹿之助くんに対するクラスメイトの女子による性

的差別によるヒソヒソ話も含まれていた。

確かに彼女達の発言は、私にとって不快に値するものである。しかしそれは同時にこのクラスメイトの女子たちは鹿之助くんには、興味がないことを示していた。つまり、私が彼を独占していても誰も何も思わない、恋敵がこのクラスには存在しないということだ。いや。私としてはどんなに、ひ弱でナヨナヨしていたってこんな守ってあげたくなる男の娘の時点で胸のときめきが抑えられないんだが。

この日本に司法さえ、存在しなければとつくの昔に襲い掛かっているんだが？ てか、こんなかわいい男の娘に興味ないなんて、お前等の目は節穴かよお！

グヒツ、グヒビ、ギイヒヒヒヒヒツツという気持ちの悪い声が喉元までこみ上げてくるが、鹿之助くんの手前、押し殺してエアコンのスイッチを入れた。

ゴオオオオ……

「直ったなー！」

「やつと涼しい中、勉強ができる……」

「次の授業は何だっけ？」

「ああ、国語の——」

私がスイッチを押すのと同時に、先ほどまでよりも力強い冷房が下で待機している直撃した。いい風だ。とても冷やされていて、それでいて風量が先ほどよりも上がったような気がする。間違はなく私がチョークの粉まみれのフィルターを掃除したおかげだ。

これで快適な環境の中、勉学に励めるというわけだ。

「ところで、しょうぐん將軍」

二段重ねになった机を掛け声とともに飛び降りる。ドンつと両足から着地するが所詮は1？程度の高さ。私は若さも相まって何処にも怪我を負ってはいない。

この飛び降りには年老いた大人が、子供の真似をすると簡単に筋やら骨やらを捻挫するらしいのだが……私の肉体はそんな兆しを微塵にも見せることはなかった！

ひとまず重ねていた鹿之助くんの机を自分の手拭いで、乾拭きとし



てぬぐってから元の場所に返却する。この机を重ねた時、鹿之助くんの机の上に持つてくるか、私の机の上に持つてくるか数秒悩んだものだが、鹿之助くんが普段使っている机を、靴下は履いたムレた生足で踏むという行為には実に背徳感があつてよかつた。

いやあ。そしてこの瞬間も、彼の机をベタベタと乾拭きで……乾拭きだからこそ、私の……ぐへへへへ。

ガラララッ!

「こんにちはー! やっほー! みんなーっ!」

「おっ! 別クラスの日ノ出じゃん!」

「何?!」

「マジで?!」

「そうだよー! 日ノ出だよー! あのね、今日は先生の自主都合で自習だつてー!」

「おおっ!」

「やった!」

「はい! 藏石さん! 自習の課題は作文だから配つて!配つて!」

口元の緩みつつある私が机を戻していると、やがて教室の扉が開く。

そしてそこに立っていたのが、陽葵ちゃんだった。彼女は今、両手に自習の課題を持つてこの教室に入ってきた。本来であれば、彼女のクラスでは今授業を開いているということ……すなわち――

「♥♥♥! やっほーっ! ひまりちゃんああああん!!! 放課後まで待てなくて愛しに来ちゃった!!!」

「……」

「えええええ!? セっかく私という許嫁が遊びに来たのに、なんでそんなに嫌そうな顔をするのーっ!?!」

「い、許嫁……?」

「鹿之助くんは今の言葉は気にしないでください。彼女、洋館事件以来少しばかり妄想癖が入っているのですよ」

「いいや、これは真実の愛! いいや!純愛だよっ!」

「はいはい。いずれにせよ……別に嫌な顔はしていませんよ。苦虫を

噛み潰したような顔はしましたけど」

「どっちも同じ意味でしょーっ?！」

日ノ出 陽葵の乱入にクラスメイトの男子生徒は私に対する敵意と疑問視のような感情を向け、女子生徒の大半は『ああ、またか』という顔で私達のことを見る。

こっちもこっちで “いつもの青空と青空に振り回される上原” と同じような……ある種の風物詩のような目であった。とりあえずクラスメイト達の感覚的には “愛を絶叫する日ノ出とそれを拒絶する青空” ぐらいの認識に違いない。一部の層は何故、陽葵ちゃんの問題児の私にべったりなのか理解不能そうな不審な顔をしているが。

今日はたまたま陽葵ちゃんが授業をサボったため乱入は早かったが、この状況は放課後や昼休みになると発生する強制イベントだ。

このイベントで苦手な部分は、別に陽葵ちゃんが乱入してくることにあるわけではない。

「えへへへええ。ひまりちやあくん♥」

「暑いんだから、そんなに引っ付かないでください」

今日も砂糖よりも甘い——猫なで声を出しながらベタベタと粘性性の高いスライムのようにへばりついてくる彼女の顎やお腹を推す形で引き剥がしにかかる。

陽葵ちゃんは本当に毎日元気いっぱい、気分が落ち込むような生理の日でも朗らかな気分にならせてくれる。

しかし……私としては、鹿之助くんから私を取り上げようとする行為は許容範囲外だ。

彼女も私が鹿之助くんに対して強い好意を抱いていることは承知しているようだが、それゆえか……何かと彼に私達の関わり合い見せつけようと画策してくるのだ。今も頬を赤らめて私達の取っ組み合いを目を丸くしながらも釘付けになっている鹿之助くんに対してチラチラと視線を送っている。これはきつと鹿之助くんと私の間に防壁を立てようとしているのだろう。これには本当に頭が痛くなってくる。

何度でもいうが私は許嫁認定をした覚えはないぞ。入院中にたとえ話の流れで通い妻とは言ったけど。

第一、そんなにベツタベツタされると両刀使いのようなあだ名が出かけん。

私はNL、Normal Love。私達、新トモダチコレクシヨンまでの関係。どんなに親睦を深めようとも陽葵ちゃんと私の関係は、親友までの間柄にしかかなり得ないの。Are you OK?

「それで？ 聞くまでもないかもしれませんが、陽葵ちゃん。授業は？」

「サボったよー！」

「そんな……さも当然みたいに言わないでくださいよ……駄目ですよ。授業はちゃんと出ないと……大人になった時に基礎的な教養がないと困ることだってあるんですから」

「大丈夫、大丈夫！ 教養がなくても就ける対魔忍職業になるから！」

「そんな自信たっぷりと言わないでもらえます？ 第一、そんな職業はないですし……近い未来に絶対困ると思うんですけど……」

「そういう日葵ちゃんだって、授業をよくサボるって聞いたよ?!」

「最近はやがってないです。入院生活ルーティーンのおかげで授業の出席日数が厳しいのに、今サボったら学生の貴重な夏休みシーズンに補修が間違いないに発生するじゃないですか。いいですか、陽葵ちゃん。確かに学園での授業内容は日常生活で使う機会なんて多寡がしれていますが、知っておけば人生は豊かになるのでちゃんと授業は受——」

「そんなことよりも日葵ちゃんの教室、変なにおいもしないし涼しいね！ もう業者さんにエアコンの掃除をしてもらったの？」スンスン……

「おいコラ」

私のつぶやきによるツツコミは、陽葵ちゃんによる強制的な話題の切り替えによって流れを変えられてしまった。

陽葵ちゃんの反応は時折、天然なのか故意なのか判断に困るような切り返しをしてくる。

しかし、今回は分かるぞ。これは故意に話題を切り替えている。現にいつもならこちらの反応を伺うようにチラチラと構ってほしそうな横目で探ってくるのに、今日は完全にそっぽを向いて口笛を吹きながら露骨に話題を変えたからだ。これには異議を唱えねばなるまい。「そ、それは日葵が机によじ登って掃除してくれたんだ。そのおかげでって感じだな」

「えっ!!? 日葵ちゃん、エアコンの掃除をしたの!?!」

「……正確には蓋を開けて取り外しただけです。フィルターの掃除自体はクラスメイトの西郷寺くんにしてもらいました」

鹿之助くんが私の不和不和<sup>ふわふわ</sup>タイムを察知したのか、そっぽを向いて私の諭し行為から逃げ出した陽葵ちゃんの援護<sup>フォロウ</sup>をする。

「……もう。鹿之助くんがそういうなら私は話を流されてもまんざらじゃあないけどさ……」

話題に食いつく陽葵ちゃんは、そっぽを向くのを止めて首をグルリんとこっちに回した後、キラキラとした目で私を褒める初期動作に入る。

だから私としても、そんな彼女のベタ褒めムーブを仕掛けられ、褒め言葉に私が飲み込まれないようフィルターの掃除を手伝ってくれた西郷寺くんへ意識を向けさせた。西郷寺くんもソワソワしながら私達のグループに近づいてきては、陽葵ちゃんに褒めてもらいたそうな顔をしてたし。

「へへへっ……すごいだ——」

「へえ！ あのエアコンって私達でも掃除できるんだ……！ すっごい大きなエアコンだから、先生達が言うように業者さんが掃除しなきゃダメなのかと思ってた！ でもエアコンの何が変で、何処からあの変なおいがしているのか突き止めて的確に修理しちゃう日葵ちゃん、やっぱりすごいよ！」

「しかし陽葵ちゃんの容赦のない一言に、西郷寺くんは叩き伏せられる。」

「……あの、陽葵ちゃん。西郷寺くんの方をもっと褒めてあげて

もろて……」

「え？　なんで?!　上原さんと日葵ちゃんの話だと、西郷寺くんは臭気の原因に気が付くこともなく日葵ちゃんの指示で、フィルター洗っただけでしょ？」

「……」

あの……西郷寺くん。涙、拭いてもろて……。

「oh……今のは鋭すぎる一撃……」

「さ、西郷寺……どんまい」

「…………おう」

それにしても陽葵ちゃんは人をべた褒めするそういうところがずるい。『私、何かやっちゃいました?』というノリは苦手だが、エアコンのフィルター掃除なんてできて当たり前のことでも陽葵ちゃんからベタ褒めされると『私、何かやっちゃいました?』という自惚れのような気持ちにさせてくれる。

「日葵ちゃんさ……私がどんなに褒めても『ぷっぷくぷうー』な態度を取るけど、別にデレてもいいんだよ?　日葵ちゃんなら、いっぱい甘えさせてあげるから♥」コッショリ♥

「」

陽葵ちゃんの手を口元に沿わせた艶っぽいコッショリボイスをゼ口距離で浴びた西郷寺くんは完全に放心………機能停止に至る。陽葵ちゃんに恋心か下心を抱いている彼には、やはり致命傷か。

「……デレませんよ」

私も……。私が照れた様子スキを見せると陽葵ちゃんは更にべた褒めムーブを畳みかけてくるため、こちらとしても頬が緩んでしまわないように彼女の言う通りのむっとり顔でつつけんどんとした……ふてくされたような面で塩対応する。

「うひゃっ?!　なっ、な、ななななんで、この流れで俺に背中から抱き着くんだよ!!　ひまりい!!!?」

「」

そこから更に、一種のバリア機能を果たす鹿之助くんの背後に回って彼をあすなる抱きで抱擁する。女性耐性のない鹿之助くんはこれ

をされると思考が停止するのか、その場で石像のように微動だにしなくなってしまうのだが……。

そんな光景を見せられた陽葵ちゃんには仲睦まじい私達の様子にそこそこの心的ダメージがあるのか、文字通り『ベルサイユのばら』に登場する白目顔で凍り付いて追撃をしてくるのを止めてくれる。

## Episode 91 『日ノ出陽葵は天然』

「また闇と光がいちゃついでるぜ……」

「凸凹感スゲーよな。胸も、性格も、肌の色も……」

「俺、日ノ出にあんなこと囁かれたら墜ちちまうよ……」

「オレ、日ノ出に日サロ役を頼んで接点を持つと思うんだけど、うまくいかなかったんだよなあ。それをあの絶壁はどうやって……」

「まさか女性にしか興味がない……?」

「だったら普段のあの男女関係なく近い距離感で接してくれる態度はなんなんだよ、アレは絶対に男……いや、俺に気がある証拠だってー!」  
「なに馬鹿なこといつてんだよ。日ノ出は俺にこそ興味があるんだぜ? この前なんか合同授業で喉が渴いたって言ったら、飲みかけのペットボトルを『良かったら』って渡してくれたんだぞ?」

「はあ!? そんなわけないだろ。この前の怖い話をしてくれた時、日ノ出は俺に抱き着いて噛みつく真似をしてくれたぞ! あれは俺のことを所有物だつて示してくれたんだ!」

「そのぐらいなら俺にだつてやってくれたもんね! こっちは財布を落とした時、即座に拾い上げて『落とし物だよ! 今度は落としちやダメだからね!』つて言いながら『ぎゅっ』と手を包むように渡してくれたんだからな!」

「ああ!? その程度で気があると思うなよ! 俺だつてそのぐらいやってくれたぞ! まっ、俺はお前等と違って日ノ出が高台の荷物を取るとき『退いて貰うの悪いから』つて、あの豊満なおっぱいをぎゅうくくくつて、押し当てて貰ったんだからな! 日ノ出は俺に気があるんだ!」

「[[[[「なんだと!?!」]]]]」

「……?」

いつの間にかに外野がクソうるさくなっている。

最初はヒソヒソ話で済ませていたにも関わらず、だんだんと声が大きくなってやがるぞ。自分自身の発言時の声の大きさに気づいていないのか? 盛りのついた男子生徒共<sup>オスザルども</sup>。

そして私が6月に危惧していた通りに、陽葵ちゃんの人気はうなぎ登りのようだ。罪な女だな……陽葵ちゃん。

ちなみにそんな男子生徒たちの会話が聞こえた当の本人は、首を傾げ頭にクエスチョンマークを浮かべながら、右頬を人さし指でポリポリと搔いている。まるで事態をよくわかっている……まるで他人事みたいな顔をしていた。ほんと、罪な女である。

こっちの行為に関しては、ガチの天然っぽいから怖い。

陽葵ちゃん。こんなことを言っちゃ彼等や全世界の男に失礼だが、男は想像を絶するほどアレだぞ。『男は欲情している時、誤った判断をする確率が2倍に跳ね上がる』という論文が残されるぐらいにはアレだぞ。

——いつか陽葵ちゃんにも映画を見せよう。タイトルは『男と女の不都合な真実』約70年前、2009年の映画だ。キャッチコピーは『女の恋はココアタマですが、男の恋はココアッコで恋愛する!』

「……………あれ? ねえ、なんか……………また?」

その一部の男子生徒どもが騒いでいると、真面目に自習の課題に取り組んでいるクラスメイトから気になる一言が聞こえてくる。

何……………? と思い、鼻をひくつかせて周囲の臭いを〈目星〉と〈聞き耳〉で探ってみれば……………。

確かに臭う。西郷寺くんが掃除して、綺麗なのを確認してからセツトしたはずなのに、チョークの粉のようなまだ臭いがする。

時間が経つにつれて、悪臭は部屋全体に充満していき、熱を持った『陽葵ちゃんは誰が好きなのか』議論も中断されて、ざわざわと再び騒めき出す。

「……………」

直したと思ったのに直ってなかった件について。

「ひ、ひまりちゃん! 大丈夫だよ! そんなこともあるって!」  
「……………」

「そ、そうだけ! そんなショックにならなくても、うまくいかないことぐらいあるさ! な? なっ!? 日ノ出もそういつてることだし! そうだよな! 日ノ出!」



「う、うん！　こればっかりは上原さんに完全同意！　だからそんなに落ち込まないで!!」<sup>?</sup>

残念な結果に私が肩と視線を落とすと2人が手をバタバタと振りながら懸命に私のフォローに入ってくる。

別に悪臭を根絶できないことに対して、絶望しているわけではなかったのだが……。

いや、今はそんなことよりも、そろそろ課題に取り組むべきだ。私はこれまでの『にゆういんぐらし!』で後がないのだ。

でも、何故臭いを根絶できなかったのか、興味を引いてとても集中できそうにない。

どちらも熟さなきやいけないのはつらいことだ……斯くなる上は……。

「陽葵ちゃん」

「うん!どうしたの?!日葵ちゃんの為なら、なんでも力になるよ!」

「ん?　今何でもってするって言った……いえ。今の言葉は聞かなかったことに——」

「はい!　なんでもするよ!　ヨツンヴァインになってワンワン鳴けるよ!」

「……じゃ、私の代わりに課題をやってもらえませんか?　もちろんタダでは言いません。今度の休日、稲毛屋に行きましょう。課題を代行してくれたら、そこでアイスを奢りますよ」

「えっ!!!　つまり、それって……っ!　初デートのお誘い!」

「「「「?」」」」」

「……鹿之助くん。日ノ出陽葵ちゃんは天然なので、言葉選びが絶妙なだけです。……今話を真面に受け取らないように」

「おおおおおお。そ。そそそそそうだよな!」

「えー?　私はそんなつもりないんだけどな……?」

「それで、陽葵ちゃんはやってくれるんですか?　やらないんですか?」

「やるやる!　絶対にやる!　任せて!」

女の子同士でデートに向かうなど私の価値観からしてみれば異端な発言に、鹿之助くんはうぶな反応として脳天に落雷がぶち当たったかのような顔をしていた。……あと『陽葵ちゃんは誰が好きなのか』議論をしていた男子生徒共も。

一旦は衝撃を受けている鹿之助くんをなだめ、陽葵ちゃんの返事を急かして課題を任せる。承諾を得た後は、再び自分の机を移動させエアコンの真下に陣取り、今度は誰も使っていない教卓を移動させて、机を重ねる形で高さを調節し再びエアコンのカバーを開いた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおっつ!!!」

私の課題に取り組むことで絶叫をあげる陽葵ちゃんはさておき……さて……相変わらずフィルターには何も異物はないが、この臭いが続いているという事は、きつと内部の送風部位にまで粉が入り込んでしまっているのだろう。

つまるところ、この悪臭を取り除くには、その深部まで綺麗に掃除しなくてはならない。

たぶん私がこのような推理を立てずとも、他の教室でも私と同じように用務員さんである沼津さんがフィルターの掃除は一通り行ったのだろう。だけどそれで直ることがなかったということか。だから先の会話でもあったように業者が来るのに違いない。

「鹿之助くん、教卓の中に工具が入っているので取ってもらってもいいですか？ 今週の教卓のパスワードは7458です」

「……………はぁ……………」

私の言葉に鹿之助くんは怪訝な顔をする。

この前の一件によってせっかく割り出したパスワードが短時間で私が解析したという事にきつと信じられないのだろう。でも私が表情で『頼むよ』という顔を作ると、ため息をつきながらすごすごと教卓へと向かいコードを入力してくれる。

ピッピッピッピッ……カシヤツ

んん。やっぱりな。

パアーフェクトだ……クギヌキー……。

今度は一発だ。

……ギイヒツ。クキキキキキ……。

「んあっ?!」一発?! 日葵なんで教卓のパスワード知ってんだ?! この前の蓮魔先生がパスワードを変えてあの一件以来、先生達もこのクラスでは手元を見せないで入力してるのに!」

ふふふっ♪ 鹿之助くんは本当にこちらの期待通りの反応を返してくれる。

だからこそ、ちよつとばかりすごいことをやってのけて、からかつてしまいたくなるのだ。

「簡単な話ですよ。ハンジロー……もとい、齋藤 半次郎先生のメガネと懐中時計のおかげです」

「メガネとカイチュウ時計??」

「そう、眼鏡と懐中時計です。ハンジロー先生は鹿之助くんもご存じの通り、生真面目な性格なので眼鏡のレンズはいつもピカピカに磨かれていますし、懐中時計も埃一つありません。まるで鏡のようですよ」

「……鏡、反射か?」

「Yes!! Good. Very Very Good!! ええ、そこから割り出しました。ね? 簡単でしょ?」

「……俺には無理だよ」

鹿之助くんの回答にウインクをしながら、サムズアップ……グッドサインを送りながら手渡される工具箱を受け取った。

だが実際のところは違う。

この方法で暗証番号を割り出すには、教卓のキーパッドが眼鏡や懐中時計に反射するように光っていないなければならない。この教卓のキーパッドは光らないし、何よりも蛍光灯という邪魔な光が反射を邪魔し実際には何も映らない。反射させるには角度も重要だ。私がハンジローの装飾品からキーパッドの暗証番号を見抜くには、彼を見下ろすような位置取りに居なければならず、教壇は私達が今いる位置よりも1段(約20cm)ほど高い位置にあるため、この手法で暗証番号を割り出すことはできない。

つまり、これはあくまでも鹿之助くんを誤魔化すための表向きの解

決策だ。今後、彼がハンジローの懐中時計へどんなに目を凝らしたとしてもパスワードの情報を引き出すことは叶わないだろう。

——では実際のところ、どうしたか。

これも簡単な話。

この食堂では紙パックが出る。紙パックは基本的に内用液が漏れてしまわないよう、内部にパラフィンやポリエチレンなどのPE……つまり、プラスチックフィルムでコーティングされている。これを丁寧に剥がしてキーパッドの上に設置して先生がキーパッド入力後に剥がすことで、どのシートを押したのか指紋で判別することができるのだ。

あとは授業が終わった後にプラスチックフィルムを回収。押した数字を光に透かして判別して、前回と同じように確率として「 $4 \times 3 \times 2 \times 1 \parallel 4!$ 」の方程式を用いて……。1限につき『3回』間違えると蓮魔先生が乱入してくるから、毎回2回の施行を自分のクラスと他のクラスで重ねて……。これならば1日……。いや、半日もあればパスワードを簡単に割り出すことができる。ね？ 簡単でしょ？

本当は鹿之助くんはこの方法を自慢したい。だけど、今は我慢だ。エアコンの修理とか良い内容は仕込んでも構わないだろうが、キーパッド式の鍵の開錠方法なんてそんなに使う機会はないだろう。それに、この手法は学校の授業の内容を応用したものではない。わざわざ聞かれてもない教えられることもないやり方を公開して『私、何かやっちゃいました？』ムーブは命取りだ。

「それで、日葵はその工具を使って何をするんだ？」

「ああ。悪臭の原因はフィルターではなく、その送風機構にあると思われるので今から〈機械修理〉でさくつと直します」

「え、そんなにさくつくり直せるものなのか!？」

「そうですね……私の見積もりでは、3限目が終わるまでには修理できるか」と

鹿之助くんは驚いていたが、このぐらいは「技巧の授業や自宅で触れたことがあるだろう」と思い、これは『私、何かやっちゃいました

？』ムーブにはならない筈だと想定して、深い言及はせずに修理へ入る。

そして、それから40分が経過し、先ほどの冒頭Episode 89に戻るのであった。何がともあれ私の〈機械修理〉技能で、エアコンは完全に直せた。陽葵ちゃんと蓮魔先生の乱入こそあったが、蓮魔先生に首根っこを掴まれる形での連行前にクラスメイト達に簡易指示を出す。

『当面のあいだ』特にエアコンを使用する夏場と冬場の間は後方に設置してある黒板には使用禁止の紙切れを貼り付けてもらうのだった。

Episode 2 『桐生 佐馬斗』

「……」

「♪♪♪」

放課後。

ゴキゲンな私はふうま君に連れられる形で、五車学園の廊下の先…… “ある場所” へと向かっている。

その “ある場所” とは何を隠そう、私のぶち抜かれた横隔膜や粉碎開放骨折した左足、レーザー砲で焼かれた左上腕、右大腿部の熱傷を治してくれた…… “あの” 魔界医療を扱う『桐生<sup>きりゆう</sup> 佐馬斗<sup>さばと</sup>』先生という校医（その1）がいる研究室に赴いて、彼に会いに行くのだ。

更に今の私の手には紙袋が握られており、その中身は青空 日葵の母親から手渡された菓子折りが入っている。青空 日葵の母親曰く、これはマト 東京という場所で購入してきた1箱5万円の高級和菓子らしい。

首都 東京ではなく、マト 東京という呼び名が変わっているが、これもきつと時代の流れのせいだろう。しゅとが、どのようにしてマトに呼び名が変わったのか。訛りの経緯は分かりかねるがきつと時代の流れに関する事情が挟んであるに違いない。

「青空さん……？」

「♪。ん？ なんですか？ ふうま君？」

「その、今日は鹿之助の奴もいないのに、やけに上機嫌だな？」

「なっ……！ ふうま君、私は『鹿之助くんがいないと不機嫌になる』と、君の中ではそう思われているのですか？ 私はいつでもゴキゲンですよ？ そりゃ鹿之助くんが一緒なら、もつとハッピーですけど……」

「……そうなのか？」

「そうですよー！」

首都東京の読み方が、いつの間にかにマト東京なんて読み方へ変貌していることに關して時代ってこわいなく。ボロが出ないように知識のどつまりしとこ。と想いを歌に乗せながら考える私に、チラリと

ふうま君は左半面の顔だけを私側に向ける。その顔はまさに珍獣を見るような顔つきで、細目の彼はその目を更に細めていた。

「いやあ……それにしても、私を魔界医療で治してくれた桐生 佐馬斗先生ってどんな先生なんでしょうか？ 病院では基本的に室井先生や看護師さんとしか顔を合せなかったですし、私の数々の負傷を1カ月以内に直してしまっなんてきつとすごい名医なんでしょうね！ 楽しみですっ！」

「……」

「……ふうま君？ どうしたんですか？ なんだか、気分が悪そうですよ？」

私がるんるん♪気分になっっている半面、彼はまるで……まえさき市で3時間もウンコしていた方の蛇子ちゃんの手料理を見たときのようなゲンナリとした顔をしている。

まさにこの顔は、私の1度目の退院パーティを開いてくれた時、ケーキの中に赤茶色をしたタコの足が混入してあるのを発見した時のその時の顔だった。あの時は、私も蛇子ちゃんの料理センスに『うわっ……』とは思ったが、食わず嫌いは良くないという事から、西洋ワサビ醤油漬けにして食べてみたところ……それなりに美味しくはあった。

ちよつと人肉っぽいコシがあつて噛み切りにくかったことと『ワサビ醤油漬けにすると美味しいですよ』と勧める私をふうま君と鹿之助くんが私のことを信じられないものを見るような目で見ていたことがあつたけど……。

ちやんと弁明はしたし？ 食わず嫌いは良くないことと、せつかく蛇子ちゃんが『独創的な』手料理を振る舞ってくれたんだから、食べなきゃむしろ失礼という事は伝えましたし？ 味もそんなには悪いものではなかった。

……別にゲテモノ好きってわけじゃない。必要ならば何でも食べるだけだ。

冥王星ユゴスの科学者／医学的甲殻類をサツと茹でた時のように。……エビ好きに悪人はいねえ。

「悪いことは言わない。あの人使いの荒いおっさんに幻想を抱いたり、期待したりしない方がいいぞ」

「え？ それはどういう意味ですか？」

「……会えば分かる」

「えっ？ その言い方、性格に難がある方なんですか!? さくら先生みたいな噂ではすぐくおらかで優しい良い先生と評判なのに、私がい会いに行くといつも出張で居ない神隠しタイプとか、ハンジロー斎藤半次郎先生みたいに生真面目過ぎて懐中時計を手に、常に時間を確認して自分のスケジュールが第一にしている役所タイプだとか、さくら先生のように単身赴任中の多国語に精通した幽霊英語教師とか、室井先生みたいに人が自主退院したいって言っているのに監禁生活を強要する犯罪者タイプとかなんですか!？」

具体的に『人使い荒いおっさん』とバツサリ断言する割には、歯切れの悪い返事しか返してこないふうま君は私から目を逸らして完全に正面に向き直ってしまった。即座にそんな彼の前に回り込んで、後ろ歩きで進みつつこの五車学園における癖のある教師ラインナップを告げてみる。

そんな私の行為に、彼の表情は余計に曇り顔まで逸らし始めてしまった。

……なんだろう。鹿之助くんの時とは可愛くみえたけど、ふうま君にやられるとムツとしちゃう自分がいる。

……これは多分……体格と比較したときに可愛くねえからだろうな。

「そうだな……桐生先生は、挙げてくれたどのタイプでもないな……」

「え!! 今の悪人ラインナップに居なかったら、善人ラインナップ側の先生になっちゃうんですけど!? 生徒たちから老害脳筋ゴリラ先生と呼ばれているけど根は優しい紫先生、現代の水戸黄門こと悪即斬でクソが付くほど真面目な先生だけど悪きをしていないときは公平な対応をしてくれる蓮魔先生、ちよつと目つきがやらしいけど園芸大好きおじさん沼津 彦四郎さん、あと鹿之助くんの従姉さんと、私の蛮行を許してくれた校長しか五車学園には例えられる人物がいな



んですけど?!」

「その中にも……居ないな。いないっいたらいない。とにかく会えばわかるから。青空さんは桐生先生に対して何も期待しないように」

彼はそれだけを告げると、歩く速度を上げて後ろ歩きで先行している私を追い抜かして行ってしまった。私もそんな、歩く速度を上げた彼の後ろを小走りについていく。

表情は暗く、もつと暗くなっていく。ナイ牧師と名乗った男の瞳の奥に映る深淵ほどではないが。小走りで走ってついていく私が、ふうま君と並列走行して横顔を覗いたときには完全に目を前髪で覆い隠していた。

そんな彼の様子に、一癖も二癖もある先生なのだろう……と不安が募りながらそれ以上は彼に話しかけることもなく黙々と後へ続く。

……  
……  
……

「フハハハハハ！ 俺の紫！ 俺のムラサキは何処だア！ アイツめ、恥ずかしがって監視カメラに映らない場所にいるな!? 俺様を困らせるなんて、なんてかまってちゃんなのだ！ だが、それこそ探し甲斐があるというもの！ ムラサキイ！ お前のそんなシャイな部分も俺は愛しているぞオ！ フハハハハハッ!!」

「……………」  
「あつ…………ふーん…………？」

地下への階段を降り、キーロック付の重厚な防火扉を抜けた先。手術室と治療室、培養室にモニタールームが一体化した一室に桐生佐馬斗先生は居た。

彼は今、空中に浮かんだホログラム上に映し出されたモニターに映る五車学園の映像を舐めるようにして眺めている。……高笑いに加え、紫先生の名前を絶叫しながら。

「…………桐生先生。青空さん。青空 日葵さんを連れてきました」

「は、ははっ…………ど、どうも……………」

「なにッ!？」

一呼吸を置いたふうま君の言葉に彼は勢いよく振り返る。

彼の容姿を見て、私の第一印象としては決して悪いものではなかった。

確かに地下に降りた時、彼は俺の紫……おそらく、紫先生に対して熱烈な求愛をしていたが……誰だってそういう一面はあるものだ。私にだってある。

私達はノックをせずにこの部屋に入ってきたし、彼の立場から考えれば……自室に籠った青少年が両耳ヘッドホンでエロ動画を見ていたところを母親がノックも無しに部屋に乱入。マスターベーション行為を見られてしまったようなものだ。

この時、どちらに非があるのかと言われれば、ノックをせずに入ってきた母親。つまり私たち側に非がある。

だから、彼がこの誰も居ない部屋で油断していて紫先生に対して愛の求愛をしていたからって私の第一印象は悪いものにはならない。むしろ、今の光景を見られて悪くなったのは私の方だった。

桐生 佐馬斗先生は、外見はまだ二十代後半ぐらいの若造に見える。ただ手の甲における小皺具合から実際には30代中盤ぐらいだろう。

髪の毛はくすんだ黒色のショートヘア。その髪にはワックスが塗られたようにぴったりと頭の輪郭にそっており、両耳は髪の毛で隠れている。銀縁眼鏡を中指でクイツと上げ、輝く黒目と凛々しいその顔つきからは実に理性と理知性を感じた。

首には過去に事故でも遭ったのか、巨大な傷の修復痕が残っていたが、彼はそれを襟の高い白ワイシャツと小豆色あずきいろのネクタイ、白色の白衣（それも軍人が着用するトレンチコート型のもの）を着用して隠している。

体系はやせ型でスラっとした高身長なその姿は、彼をより一層仕事の出来る男として引き立てていた。

「フハハハハッ！ ふうま小太郎！ この俺がこの乳臭い小娘を連れてこいと言ってから、1カ月後にやっと連れてきたのかこのオマヌケ坊主め！」

「すみません。俺も任…… 課外授業」 とか、青空さん自身も入院していたこともあって遅れてしまいました」

ふうま君は大々的に表情には出さないが、『俺はできることならこの人と関わり合いたくなくなかったんだよなあ』的な表情を浮かべて、彼から目を逸らしていた。そんなふうま君を桐生先生は、それはそれは表現しがたいほどの罵詈雑言で咎める。

何もそこまで言わなくなつて……と思うほどに、ふうま君が可哀想になつて来るぐらいの罵詈雑言を浴びせられていた。

私達が悪いとはいえ、紫先生に対する熱烈な愛の叫びと ふうま君に対する言葉で薄々この先生がどんなタイプの先生か分かつてくる。確かに私が上げたどの五車学園教師陣ラインナップにも属しないニュータイプモデルだった。……この学園、登場人物全員キャラが濃すぎない???

それでも私を幾度となく魔界医療で助けてくれた先生だ。礼儀として、私は言わなければならぬことを伝えなければいけない。その為、私は今この場にいるのだから。

「それで、その隣で黙りこくっているクソジミ陰キヤが——」

「……あ。えっと、遅ればせながら『青空 日葵』……です。あの、こちら桐生先生お口に合うかどうか分かりませんが……良ければ食べてください」

私にもそれなりに酷い言動が飛び火してきたが、きつと機嫌が悪いだけだ。

『誰だつてそういう日はある』と自分を落ち着かせながら彼の元まで歩み寄って、持ってきた菓子折りを紙袋から取り出して両手で差し出す。

内心、彼の反応にちよつとドン引きしている自分も居て引きつった笑顔になつてしまったかもしれないが……——

「ハアッ！ そんなことで俺に気に入られるとでも思ったかー!!! 一般人などという畜生以下のマンカスマミれの野良マゾメスブタがアッ!!!」

バシッ……! ガスッ

ズザー——……

「あつ」

「フハハハハッ！ どうせ中身もつまらないものなのだろう?! 俺様の口に合うものか分からないものなど持ってくるぐらいなら持ち帰れ!!! 雑種めが!!!」

差し出した菓子折りは彼の手に振り払われ、はたかれた菓子折りは私の手を離れ右側の床に滑っていく。

固まる私に目の前の桐生は、高笑いを始める。

「……………」

私はなぜ初対面の人間にここまで酷いことを言われなければならないのだろうか。

悲しくなるのと同時に……なんだろう。すごく食道からこみ上げてくるものを感じる。

「……………」

——胃液ではない。

——もつとドス黒い感情のようなものだ。

——これはまえさき市の蛇子ちゃんに対して抱いた感情程ではないが……。

——今、目前でたかが五車学園のガキを相手にしているのだと余裕の高笑いを続けている男の鼻に一発、釘のようなヘキツクを叩き込み。眼鏡を挽ぎ取って、耳掛けのテンプル部位を両目に突き刺して突き倒しへ頭突きで顔面の骨を砕き、髪留めのリボンで四肢を拘束した後、二度とその減らず口を叩けないように喉仏に対してへ改造した釘打ち機をぶち込みたい感情に支配される。

「あ、青空さん。大丈夫……か?」

本来の役割はくせつ毛を抑えるためのものだが拘束具に転用できるためリボンを外す。

「あつ、あ、青空さん?」

髪留めのリボンを蓮魔先生が常日頃から所持している一本鞭のように地面へ垂れさせたところで、今度はふうま君が私に駆け寄っては解いたリボンを持って左の二の腕を掴んできた。

「……」

首だけを僅かに動かし、ゆっくり視線をふうま君側へと向ける。その手には私が桐生にはたき落とされた菓子折りが握られている。彼の手に握られた菓子折りの箱の端は、落下の衝撃で潰れてしまっていた。

私は彼の手に握られた菓子折りを受け取ることもなく、やらせない瞳で潰れた菓子折りを視線に捉える。

「……。……ふうま君」

「！ あつ、ああーっ！ そつ、そういえば伝え忘れていたんだが、鹿之助の奴からさつきメールが入ってきて、今日も青空さんと一緒に帰る……一緒に帰りたいから、用事が終わったらメールを入れてくれて連絡が入っていたんだ！ つ、伝えるのを忘れていた！ すまない！」

「えっ！ 鹿之助くんが!?!」

えっ！ 鹿之助くんがっ!?!

「あ、ああ！ 青空さんと2人つきりで帰りたい”らしい!!!”だから、あとで終わったら鹿之助にメールしてやってくれ、な？ なっ？ なっ!?!」

私の顔を見た瞬間に激しく動揺したような素振りをして、その後も緊張した顔持ちのふうま君の言葉で我を取り戻す。

そうだ。この場にはふうま君がいるのだ。桐生先生を壁尻にしてはいけなかった。目撃者は全員消せば済むことではあるが、壁尻にするのはまだ早い。

そうだ。感情的に殺しては駄目だ。殺すときは計画的に。カルティストならば家族一族皆殺しに。それが私のモットーだ。それに今ここで彼等を壁尻にしまったら、待っていてくれる鹿之助くんと一緒に帰れなくなってしまう！

それに菓子折りは気持ちだ。こちらが一方的に差し出しているもの。相手方が不要だと言っているのに押し付けるのは間違っているし、受け取らないことも一つの選択肢だ。善意の押し売りはよくない。しっかりしろ私。

パンパンッ!

「ビクウッ」

自分の両頬を両手で叩いて気持ちのリセット。そんな様子にふうま君が縦長に縮みあがったようなそんな気もしなくもないが気のせいだろう。

絶対このまま菓子折りを持って帰ろうものなら、私は『青空 日葵』の母親に怒られるだろうが青空 日葵の母親は私が桐生先生にちゃんと渡したかどうかなんてわからない筈だ。

そうだ。せつかく5万円もする菓子折りなのだ。食べなければ損というもの。せつかくだから他の人にあげよう! でも、角が拉げてしまっているから、いつもお世話になっている紫先生への贈り物には向かないだろう。こんなものを渡す行為はスゴクシツレイだ。もちろんその他の他人に渡すのも駄目だ。だからせめて、友達である鹿之助くんにあげよう!

「しますー!します!!! させていただきます! あとでメールを入れませぬね!」

「ホッ……」

ウキウキとしながら、ふうま君から菓子折りを受け取り持ってきた紙袋に入れる。

そんな様子にふうま君は、私に鹿之助くんが待っているという事を伝えられて安心したのか、安堵の溜息をもらしていた。

「あ、そうだ。今、鹿之助くんは待っているんですね? これ、今、桐生先生に突っぱねられちゃった菓子折りなんですけど……よかつたら、ふうま君、鹿之助くんのところをこれを持って行って一緒に食べてくれませんか? 私は食べたことないですけど、これ1箱5万円するのできつとおいしいですよ!」

「えっ」

「えっ」

「あ、ああ……いや5万円もするのか……と思っただな? その菓子折り?」

ふうま君に拾ってもらった菓子折りの入った紙袋を今度はふうま

君に渡して、鹿之助くんと一緒に食べてくれるようにお願いをする。

そんな私のお願いにふうま君は目を丸くしながらも受け取って、驚いたような声を上げたがやはり5万円の菓子折りは彼にとつて衝撃的だったようだ。

確かに私も学生時代、釘貫<sup>わ</sup>た 神葬<sup>し</sup>の母親が1箱12個入りの4000円もする美味しくもない砂糖を塗したカリカリのパン菓子を退職時に職場へ振る舞っていたことには驚いたものだが、彼の考えていることは感覚的にはそんなものだろう。

「はい！ 時として値段イコール美味しさと比例するものではありませんが、これは退職時の“お気持ち”のような粗品ではないので、きつとおいしいと思います！」

「そ、そうか。で、でも、その。お、俺は青空さんを桐生先生のところに一人にするのは心配だし……俺も残ってようかなと……」

さらにあの普段ぼんやりとしていて、マイペースなあのふうま君が、やや拳動不審気味に目を泳がせて私の心配をしてくれていた。

彼の心配する通り、桐生先生は人の神経を逆なでする天才だが……。これに対して私は何か……今以上の“特別な感情”を抱いたりしない。この苦難を乗り越えた先に幸せがあるのだから。

それに。この状況を心配するならば、私よりも君の視線の先に居る桐生先生のことをまず心配した方が良い。

この設備だけは無駄に素晴らしい片田舎の学園に鹿之助くんが居なければ私は理性を抑えきれず、今ごろ壁尻で辱しめた後にヒヨコミキサーか、お星様になっていたことだろう。

Episode 93 + Tips 『逆襲劇』 + 『□血液  
検査の結果』

「そのメスブタの言う通り、お前は用済みだ！ 帰れ帰れ!!このセンズリ坊主!お前が居ても単純に邪魔なだけだ!」

「桐生先生もああ言っていることですし、ここに残った方がきつと酷いことを言われ続けると思います。だから鹿之助くんと一緒に美味しいものでも食べてパアーツとストレス発散しましょ♪ あとから私も “絶対に” 行きますので……」

「……だ、だが——」  
「ね?」

「じ、じゃあ……俺はこれで……」

桐生先生の後押しもあつてか、ふうま君はすごすごと部屋を後にする。部屋から出るための上り階段までの間に、何度も振り返っては私を心配そうな顔で見っていた。

だから大丈夫だつて。鹿之助くんが待っていてくれる以上、変なこととはしませんよ。君も知っている通り。私、鹿之助くんが居れば悪さをしないことに定評のある女なので。

「ええい!くどいぞ!チンカス小童!貴様には俺様直々の引導を渡してやろうか!」

桐生先生の怒声にふうま君は逃げるように階段を昇って行った。それを私は優しい笑顔で手を振りながら見送る。

さて——邪魔者は消えた——。ここからは私の時間だ。

「それで、桐生先生。私に会いたい・用があるという事でしたが、私は何をすればよろしいのでしょうか?」

ふうま君に向けていた笑顔のまま、ゆつくりと今度は桐生先生側に振り返る。少しばかり口が開いて白い歯が見えるかわいい笑顔でだ。

「……ハアツ。ああ、青空くん。実は君の身体に興味があつてね。詳しい検査をしてみたいと思つたんだ。詳しい検査と言つてもちよつとした血液検査だ。さあその椅子に座りなさい」



先ほどまでの荒々しく礼儀知らずで無礼講な態度は何処へやら、彼は雑多な道具が並べられている機材をガチャガチャガサガサと音を立てながら何かを探し、私には一瞥もせず診察台を指さして私に座る様に指示をしてくる。

診察台は歯医者で用いられるような腕掛けリクライニング機能付きの椅子のような外見をしていた。歯医者で用いられる診察台と異なる点をあげるならば、その足元の部分が分娩台のようになっていてことと、この診察台で様々な「実験」でもしたのか血がこびりついたままだった。

「んー。……いい趣味の椅子」

「軽口を叩いている暇があるならば、サツサと座れ！この豚足メスブタ！俺様は貴様のように暇人じゃないんだ!!!」

「はい。はい、はい、はい、はいはいはい」

短気な奴に怒鳴り散らされながらも、流すように私もすました顔で軽口を叩きながら指定された椅子に座る。

「ッ!?!」

座った瞬間。椅子が変形し、自動的に金属製の手枷、足枷、首枷がはめられて行く。

機械的な拘束の仕方に皮膚の薄皮を挟むのではないかとヒヤヒヤしたが〈幸運〉にも肉が挟まれて痛い思いをすることはなかった。それでも一度、左手に新体操のリボンのように所持していた髪留めリボンが肉の代わりに機械の隙間に挟まって拘束が解除されるというハプニングはあったが、こちらが全自動全身拘束器具のしなやかな動きに衝撃を受けてわれを失<sup>スタン</sup>っている間に確実に再拘束されてしまった。

この拘束によって両足首、両大腿、腹部、首、両肩、両腕の計10カ所が固定され、逃げようとする試みは困難を極めることは想像に難くない。しかも、この拘束椅子……私が逃げようという素振りを見せると血圧計のように拘束部位の内側が膨らんで身体の自由が余計に奪われ……っ!

ガシャッ

抵抗も逃走も無駄と悟り、近未来の世界ではこんな便利な拘束具が

あるのかと技術の発展に関心もしながらその時を待つ。

完全に拘束され冷めたジト目で待機する私に、桐生先生は様々な機材が詰め込まれたままの箱を鉄製の回診用カートの上に置き、自分はフカフカのソファアーのような椅子に座り私と対面する。

それから奴は私が逃げると思っているのだらう。なにやらカタカタとキーボードを弄っている。弄ったその時から、拘束具の固定具合が一層強くなる。

「おや？おやおやおや？……んぐつ。採血ごときで先生は私が逃げ出すとも思っているのですか？」

「当たり前だ！あのふうまの小僧も尻尾を巻いて逃げ出したのだからな。貴重な実験体を今度は逃がさん」

「はいはい、ワロスワロ——……ス？」

鼻で嗤い、少し小ばかにするような態度を取る私だったが、桐生先生にはまったく効いていない。

ではこのタイプに一矢報いて、一泡蒸かしてやることのできる逆襲方法を模索していると、奴は機材箱から不衛生でぶつとい注射器を一本取り出した。

「……………ええ……………」

「フハハハハッ！ 流石にこれを見ても、そのつかみどころの無さそうなヘラヘラとした笑みを浮かべることなど出来なくなっただらう！ あまり大人を舐めるなよ！ このメスブタア!!!」

完全に身動きが取れない女子校生目前に、小物臭は拭いきれない桐生が勝ち誇ったような笑い声が聞こえてくるが、私は奴の取り出した注射器に注目しておりそれどころではなかった。

両手に持ったそれは明らかに人間のサイズではない。それは注射器と呼ぶには大きすぎて、むしろ浣腸器と呼んだ方が正しいだらう。針の太さも異常で、採血針の太さも普段献血で用いられている針より1周り程、太い。それ、私の腕の血管より太くない？ え？

そして私が目を丸くする要因になったことそれは……。

「え？ 桐生先生、それで採血するんですか？ なんか、メモリに1ℓ（1000ml）ってある様に見えるんですけど……………」

「ああそうだ！　これからこの注射器で貴様の血を一滴残らず抜いてやる！　二度と俺様の前でヘラヘラ笑えなくしてやる！」

「ははは……ちよつと冗談きついつすよ」

『冗談じゃないぞ、本気だぞ』と言いたげに、桐生先生の手の中にある浣腸器と針がギリリと光に反射する。

五車学園の丈が短い紺色のスカートが桐生の手で強制的に捲し上げられる。露わになる私のショーツとプルンとして若々しくしつとりとした大腿部。

おかげさまで引きつったかのような乾いた笑いが意に反して勝手に出ていくが、正直笑い事じゃなかった。

人間は基本的に全血液量の約20%以上が短時間で消失すると出血性ショックに陥るとされている。30%も失えばそれは生命の危機に瀕する量だ。

青空　日葵の現在の体重は約68kg。血液の基本的な計算式として体重1kgあたり70mlと仮定した時、体内血液量は4,760mlだ。その20%、30%ともなれば952ml、1428mlとなる。つまり、アレ一本分(1000ml)の血を抜かれた日には私はふつーに出血性ショックを引き起こす。

ま、ままま、まままあ？　『新クトウルフ神話TRPG』や『CALL of CTHULHU　クトウルフ神話TRPG』における失血の定理はSTR(Strength)に一存す、するし?? 『新クトウルフ神話TRPG』ならば35頁『それぞれの値が意味すること』、『CALL of CTHULHU　クトウルフ神話TRPG』ならば42頁『STR(strength,筋力)』にSTRがゼロになってもベッドから起き上がれない状態にあるほど衰弱している程度で死ぬわけじゃないし?? あ、青空　日葵の身体だけど？　い、今は釘貫　神葬ですし?? う、うふふ。　ベベベベべつに未知の駆け引きなんか、こわくなんかないですけど??

「か、勘弁してくださいよ。私の体重は約68kg、952mlの血を消失すると間違いなく出血性ショックを引き起こします。せめてもう2周りぐらい小さな注射器はないんですか？　あとシンプルに滅菌



らせればよいだけの話！　そして俺様は貴様の血が抜ければそれでよいのだ!!!」

「テメエが良くても私はよくねえんだよ！　魔界医療で治るとしても、やっていいことやつちやいけないことの分別ぐらいつけましようよ！　医療従事者でしよ?!?!」

「うるさいーうるさい!!!黙って採血させろ!!!」

「せめて200！　せめて400m1程度にして！　じやないと騒ぐぞ！　暴れるぞ！　この世の恐怖を感度3000倍にして宇宙的神話による恐怖をテメエに刻み込むぞ!!!　オラッ！　正気度ロールの感度3000倍!!!」

………

……

…

…

……

………

「……………サイアク。…………マジサイテー」

「モゴモゴとうるさいぞ、凡畜。今回の採血で身体に異常が出たならまた俺様のところに来て治せばいい話だろう」

「マジで、その眞田先輩論やめてくれますか？ 感染症によっては10年、20年後に発症する潜伏期間の長い病気もあることを御存じでしょうか？ その頃には私、五車学園卒業しちゃって立派な社会人12年目なんですけど」

「だから？」

「だから？ じゃないが。お前、あんまふざけたこと言っつと、ホントにお星様にしますよ？ ……ゴホン。……だいたい桐生先生はまた会いに來たいと思えるような人じゃないんですよ。もしかして自分が熱血漢で人格者だとも思ってますか？」

「凡畜に問われずとも、俺様は完璧な人間な事は充分に承知している」  
「ほざけ、この人格破綻者」

採血開始から、約10分。

最終的に私の血液は700mlも抜かれてしまった。ただでさえ、女子あるあるな生理現象で貧血気味だというのに更に血液を700mlも抜かれてしまった。

しかも、消毒も満足にされていないような不衛生な注射器と注射針で、だ。

もうこれは幻滅ってレベルじゃねーぞ。私はこんな奴に今まで横隔膜やら左足やら熱傷を治してもらっていたのかと考えるとぞっとする。これ、治癒力の高めな私ならいいけど、他の五車学園の生徒だったら、ワンチャン医療ミスからの事故死の可能性しかないんだが???

不祥事、やらかし、現場猫案件なのだが???  
あの私を監禁することで定評のある室井先生が、無害なお医者さんに見えるんだが？ まだアルバート・シャイニー医師/Mr. Sの方がマシだぞ。

「さあお前も用済みだ！ 帰れ帰れ！」

「言われなくとも帰りますよ……室井先生以下のクソ医者」

シツシツと羽虫でも追い払うような手首を動かす桐生を死んだ目で眺めながら部屋を後にしようとする。

携帯には通知が6通入っており、いずれもふうま君からのメールで約1分30秒おきに送信されたようだった。

すべてのメッセージには必ず写真が添付されていて、基本的に添付された写真には1箱あたり50,000円する差し入れのお菓子の1つを鹿之助くんが両手で持って小さなお口で美味しそうに食べている写真だった。

ああ〜、生き返るわあ〜。流石ふうま君、めっちゃ分かってる。

この画像の鹿之助くん、きやわわ(\*´ω`\*)

特にね。この小さなお口でハムツと食べていながら、突然写真を撮られたのか視線だけがカメラに向いている写真なんかは構図が最高過ぎるのですよ。彼は机に腰を掛けて足をブラブラさせていて、彼の背後の窓から差し込む夕日と影が教室内を照らしている光景なんか……もう、なんていうか、最高。もう、ぱっと目で女の子にしか見えないよね。私は別に女の子が好きじゃなく、Normal Loveだから男の子の方が好きなんだけど、これはね。もうね。ギャップ萌えてやつ？ アークシステムワークスの対戦格闘ゲーム『ギルティギア』に登場するブリジットくんちゃんみたいなの？ 私に敏感棒が備わってれば、きつと今頃股間がイライラしていたはずだ。それにこれはもう一種の芸術品だね。この写真を印刷して絵画として自宅に飾りたいぐらいに完璧で幸福な写真なのですよ。

見る麻薬、こちらはアヘアヘン、エクスタシー、鹿之助くんのマジックマッシュルームをペロイン。嗚呼、ガンジャ、ガンジャ。素晴らしき、大麻忍世界。ゾーンに入る。

ひとまず、そんなかわいい鹿之助くんの写真(差分6種)を各種6枚分スマホに写真とiCloud保存し、鹿之助くんに採血が終わったのでほっこりとした顔で今から戻る趣旨を伝える。

「……………そうだ。最後に2つばかり。桐生先生、先月と先々月。私の脚と横隔膜、それと熱傷を治して頂きありがとうございました」

階段を上る手前で振り返って告げる。本当はこんな医者に傷の手当してもらったことに遺憾の意しか覚えないが、それでも最低限。私は人として礼を告げる。

桐生は私の700mlもの血を冷蔵庫で保管するなり、さつそくよく分からない機材や遠心分離器に詰め込んで、興味など無さそうにしていたがそれでも何か気になることがあるのか私に向き直る。

「……………熱傷は覚えがあるが……………横隔膜？　なんのことだ？」

「2カ月前の、5月末のヤツですよ。この傷のことです。桐生先生が治してくれたんでしょ？」

「俺はそんな傷、治した覚えはないぞ」

「……………は？」

「そもそもこの失敗のしない俺様が魔界医療で治したとしたら、採血中にボタンの隙間から見えていた胸元の傷は残ってはいない。だが横隔膜が破られ、胸にそんな大きな傷跡が残るような傷ならば現代の医学では治療は難しいところだろう。しかし、今貴様が生きていますという事は、その傷は貴様の治癒力で治した証だな」

桐生の指摘に思わず、私は唇をすぼめた。

つまり、なんだ。この傷は……………私の説明書に存在する『CALL of CTHULHU　クトウルフ神話TRPG』の64頁「治癒」に関する技法と『新クトウルフ神話TRPG』（117頁）「通常のダメージの回復」によって治癒しただけとなってしまう。

いや、だがしかし。室井先生はあ(Episode29)の時に『いくら桐生先生の魔界医療で治癒されて、人の顔面に飛び蹴りを入れられるからと言っても』と言っていたはずだ。でも当の本人はそんな傷を手当していないという。

これがただ単に情報伝達のミスで……………いやでも……………その傷は現代の医学でも治療は難しいと言っている。じゃあ……………？

「なんだ、随分と顔色が悪いな？　これを期に少し？　せたらどうだ？

贅肉まみれの凡畜風情が」

「……………それは桐生先生が失血性ショックを引き起こしかねないギリギリの700ml採血したからですよ。ですが、なるほど、なるほど。残りの可能性として五車病院に入院する前に他の病院に搬送されたらしいですし、そこで魔界医療を受けた訳ですね！　いやあ、それはそれで安心できるなあ！」



「いや、それは考えられないな。まさに浅はかな凡婦らしい猿人類的思考だが、今の俺様は貴様を不快な思いにさせられて気分が良い！だから教えてやろう、この人間界で魔界医療を施せるのは俺と、俺の姉と、師匠——」

「あー！ じゃあ、きつとその病院にその人たちが居たわけですね！はい解決！ 謎はすべて解けました！」

墓穴を掘った発言を覆い隠すようにして、男の議論らしい大声での桐生の発言を押しつぶす。

そうだ。きつとそうに違いない。室井先生が桐生先生の魔界医療と言っていたが、室井先生としては既に魔界医療で処置がされていることに気が付いて、それがきつと桐生先生が処置したものだと思ったんだ！ だから、この話はこれでおしまい！

私の横隔膜は、私の説明書の『CALL of CTHULHUクトウルフ神話TRPG』の64頁『治癒』と『新クトウルフ神話TRPG』（117頁）『通常のダメージの回復』の技法も1枚噛んでいるが、それらが完治に導いたわけではない！ きつとそうだ！

……頼むから、そうであってくれ。もしも、この治癒能力が対魔忍に発覚しようものなら私の未来は真っ暗なんだ……。このまま、五車学園で一般人として普通の生活させてくれ……。

「じゃあ最後にもう一つ！ 先生つて、きつと魔界医療の医師としての腕はいいのじゃないか！」

「……お前のようなマンカスマミれのキッズに言われなくとも、魔科医師としてそうだが？」

内心ではすがりつくような思いで祈りながらも、散々人の身体を弄び、愚弄した正面の傲慢野郎に一矢報いるための話題を振る。

反応としては私の言葉に相変わらずの人を小馬鹿にしたような笑い方で、こちらの神経を逆なでしてくるものだがこんなことで本命を見失ってはならない。幸いにも700mも血液を抜かれている分、冷静さは保つことができている。

10分間の間。拘束具から逃れようと決死の抵抗も虚しくただただ淡々と大腿部から血を抜かれながらも、一発逆転してやるために頭

の中で構築していたこの男を不快にさせることのできる作戦を展開していく。

「でも見る目はないようですね」

「……………なに？」

「あの『お菓子』。何も気が付きませんでしたか？」

「俺は忙しいんだ。さっさと結論を言え」

「気が付きませんか……………それは残念です」

「……………」

奴は一見、興味無さそうな態度で振る舞ってはいる。しかし私の勿体ぶった言葉には、何か引つ掛かりを覚えたようで一通りの魔界医療治療可能性説を否定した後も、階段前にいる私のことを視界にとらえたままであった。

「どうやら桐生先生は紫先生にぞつこんのようですが……………。あの菓子折りは紫先生が『アイツに会う？ アイツは癖があるからな。お前が門前払いされないようにアイツが喜ぶ菓子折りを教えてやる』と言って選んでくれた菓子折りだったんですねえ」

だからこそ、ここまでの奴の言動や行動から奴に最もダメージを与えられる内容を『MMRマガジンミステリー調査班』の主人公キバヤシのような手の動きで盛大に披露してやる。

「なっ?!…なんだと……………っ?!」

効果は、ごらんの有様。

見る見るうちに悔しがる露骨な表情と震える桐生。

「あーあ。紫先生に報告しておきますね。『桐生先生は『紫先生が選んでくれた』菓子折りに、これ以上に無いくらいのケチをつけてました』って。あ。そうだ。今、ふうま君からメールが来たんですけど。菓子折り美味しかったそうです。あー、そっか、そっかー。私が報告なんかしなくても、ふうま君達がその菓子折りを食べて居るのを見たら？ ふうま君が事情を説明したら？ 紫先生からとってしてみれば何があったのか一目瞭然。箱の角は潰れちゃってましたし、紫先生はどう思うだろうなあー？」

私は片手を顎に当ててもう片手で銃の形を作って指を振りながら、

古畑任三郎が自身の推理を披露するかのようにグルグルと桐生の研究所を歩き回る。

「き、きさまっ、きさま……そっ、そういうことなら、さ、先に……っ」  
素っ頓狂で天然っぽい声のへ言いくるめ話術に、奴は見事に乗せられている。

やはり『紫先生』は奴にとってキーワードであることに違いはない。「ギヒヒヒヒッ！」後悔、先に立たずですよ。じゃ、おつかれっしたー。反省会はお一人で、ね？ きりゆうせんせい？  
そんな奴を一人研究室に残し、探偵コナンに登場する黒い人のようなギラギラ、ニタニタと笑いながら部屋を後にする。

出入り口の扉が完全に閉まってから10秒後。へ聞き耳を立てたところ奴の非常に悔しそうな絶叫が響き渡った。

「クスクス……」

紫先生の推奨の品なんて嘘だよバーカ。勝手に悔んでろ。

Episode 4 『五車学園プールとプールサイドでの思い出語り』

やあ。

私は『青空 日葵』。

元は『釘貫 神葬』というクトゥルフ神話TRPGから異世界転生してきた元探索者の現一般人。

今は五車学園の授業の一環でプールへやってきている。

輝く太陽。

火傷しそうなプールサイドの床。

鼻をつく塩素の香り。

楽しそうにはしゃぐ、スクール水着姿の学生達。

地獄の消毒用冷水とシャワー。

「……………」

私は仏頂面のまま、五車学園の制服姿でその光景を見学席で眺める。

それもプールサイドの日陰で、クラスメイト達が楽しそうにしているのをだ。

誰も彼もが更衣室で楽しそうな顔をして、スクール水着ではしゃいで……………」

「……………」

梅干しでも食べたかのように唇をすぼめる。

本当は私だつてみんなと混じって泳ぎたかった。

鹿之助くんの水着を眺めながら、泳ぎたかった。

でもそれは叶わなかった。

それもその筈。以前、魔界医療を専攻している医者 of 桐生先生の元で血液を600mlも抜かれたことが原因だった。あの一件以来、貧血によってぶっ倒れる事件が多発。『へ頭突き』ドラマリングガール』なんて不名誉なあだ名は生成されるし……………。気絶したところを野獣と化した陽葵ちゃんにはお持ち帰りされそうになるし……………。

そんな貧血でぶっ倒れるような生徒がプールに入ってみんなと共に泳げるわけもなく……。

ものの見事に教師からのSTOPで『見学』というオチだ。

(許さねえ……。ぜってえ、桐生の野郎を私は許さねえ……)

内心はそんなことを思いながら、プールサイドに設けられた見学席で仏頂面のまま冷えた炭酸飲料を片手に出入り口をガン見するのだった。

確かに私は泳げないかもしれない。

しかし、泳げなくとも私は前から気になっていた鹿之助くんの水着が、スクール水着(男児用)かスクール水着(女児用)どちらを着用しているかをじつとりと舐めるように眺めることができる。

それに対魔忍世界の現代では、私の過ごした現代とは異なり頭にプールキャップを被らずとも入水することができるようになっていた。いわばインヌタ栄えのナイトプール。さらに嬉しいこととして、女子の水着は鼠径部とうなじが協調された……前世では旧スクール水着型と呼ばれる水着。男子の水着は黒光りしたビキニ水着という奴だった。おかげさまで前世の時代よりも、普段よりも生徒達は色っぽく見えるのだ。

もしそんな状態で鹿之助くんを目視すれば私がどうなるか。………フツ。皆までは言うまい。間違いなく、彼のショットガンは、私にイクストリーム成功。ダメージ2倍の火力か最大のダメージと最大のダメージボーナス、尊さによって〈爆破〉する。間違いなくノックアウトだ。

これは盗撮不可避※2020s現法で盗聴はグレーですが、盗撮は犯罪です。絶対にやめましょう。

このために通販プライムで眼鏡型のカメラ、スパイダーカメラを大金をはたいて購入したのだ。絶対に鹿之助くんの水着姿をこの目と映像に収めるために、大金をはたいたのだ。

興奮しすぎで倒れてしまわないように対策もしてきた。万が一、彼の纏う水着が私にとって刺激が強すぎるものでも、鼻血を吹き出して昏倒しないようにイメージと期待を最大に膨らませて彼の入場を今

か今かと待つ。

「……………」

「…………あれ？　日葵？　日葵も見学なのか？」  
「……………」

「あれ？　おーい？」

でも現実はそのままでうまく行かないようだ。

やってきたのはスクール水着の鹿之助くんではなく…………普通の五車学園の男子制服を纏った鹿之助くんだった。

あつ…………♥！　かわいい！　スクール水着じゃないけど、真夏の昼間の太陽に照らされた鹿之助くんもかわいい！　髪の毛が輝いて見える…………っ！

「…………ええ、まあ。そうです。『見学』ですよ。先生から『貧血で何回もぶつ倒れる奴をプールに入れるわけには行かない』と宣告されてしまつて…………。プールの授業…………楽しみにしていたんですけどね…………。…………色々と残念です」

「そつか。でも、そんなに落ち込むなよな！　実は俺も見学だからさ、授業が終わるまでみんなが泳いでいるところでも見て涼んでようぜ」  
「…………そうですね」

「てか、なんだよその眼鏡。日葵に似合っていないぞ？　第一、日葵は目が悪くないだろ」

「ああ、これは一種のサングラスですよ。紫外線から目を守ってくれるんです」

「へえ…………。世の中には、いろんなものがあるんだなあ」

「ええ、世の中にはいろんなものがあるのですよ（そして、これは君を納めるカメラでもあるの。ゴメンネ）」

感心する鹿之助くんに対して、内心では謝りつつ鹿之助くんの方に首を傾げる。鹿之助くんは私から1つ分に席を空けた場所に座っていた。

やがてクラスメイト達が地獄の半身浴消毒液を浸かり、プールサイドへとぞろぞろと集まってくる。プールサイドは滑り止めの為に床がザラザラとした面になっているのだが、彼等はあの半身浴消毒液に

浸かってからというものの……足の裏が痒いのかひつきりなしに、足裏を地面にこすりつけていた。

アレ、無性に痒くなるよね。分かる。いつの時代もそこは変わらないのね。ノスタルジーだわ。

「鹿之助くん」

「うん？」

「私は貧血での見学ですが、鹿之助くんはどうして見学なのですか？」  
ここでふと、彼がプールの授業を見学している理由について尋ねてみる。

彼は私の見たところアトピー性皮膚炎では無さそうだ。今日も一緒に登校した様子からも何処か体調がすぐれないと言った様子は微塵にも感じられなかった。

「あー……えっとお……それはあー……」  
「？」

問いかけに鹿之助くんは非常に歯切れの悪そうなモニョモニョと口ごもる反応を示す。

私としてはどんな理由で彼がプールの授業を休んだのか、好奇心の赴くまま世間話でもするような気持ちでの質問だったのに対して、なかなか答えてくれない彼に対して私も眼鏡カメラを操作して感覚的なズームで、そのモニョる彼のかわいい顔を〈写真術〉で捉える。

鹿之助くんの目は右往左往し、顔の向きがちよっと天井を見上げ、両手がわたわたと忙しく動いていた。

そんな彼の様子はまるで、おサボリとはまた少し違う他人には言い出しづらいような事情が挟んでいるように見える。

そんな姿もかわいいよ。鹿之助くん。

加えて、私がそんな様子の彼を観察していることに気が付いたのか、彼はその動きをより一層強めた。

「その、あの……えっとだな——」

「あつ。わかった」

「えっ!?!」

「……さては鹿之助くん。泳げないんでしょ？」

「え？ あ……っ」

「恥ずかしがらなくなつて大丈夫ですよ。誰にでも得意不得意はありますし。——でも……そっかそっか。カナツチだったかあ……。そりゃ、プールの授業は見学したいよね。わかる」

「あつ、そう……！ そうなんだ！ お、おれ、実は泳ぐの苦手で！

いや、正確には苦手じゃないし、一応は泳げるんだけど！ ほ、ほら、学校のプールって深いだろ？。俺の身長だと足が届かないこともあつて……！ 水遊び自体は嫌いじゃないんだけど……わかるだろ？」

うんうん。と頷きこちら予測を展開すると彼はその慌てたかのような動きをピタリと止め、私の発言に対してぎこちなく頷いて非常に慌てた様子で事情を話してくれた。

鹿之助くんの身体的特徴を鑑みてから、理由を考えた場合もつともらしい理由に思えた。彼の言う通り高校のプールは小中学校と比べれば、明らかに深い。

実際に計測したことがないため五車学園がどうかは分かりかねるが、高校の授業で用いられるプールの水深は1.2メートルから1.7メートル。鹿之助くんの場合、浅いところから入っても首や顎が浸かるまでずっぽり行ってしまう。

「そ、そうだ！ 俺のことなんかよりも日葵は？ 日葵はどうなんだ？ 泳げるのか？」

「私ですか？ 私は……流れのないプールの中のような場所であれば、人並み程度には泳げますよ」

「おおー」

私の答えに、鹿之助くんは尊敬するかのような目でこちらを見てくる。そんな尊敬の眼差しを向けられると素直に嬉しい。これはちゃんとカメラに納めておかねばなるまいて。

しかし、この泳げることに関して1点補足しておきたいこともある。私が泳げるのは『新クトウルフ神話TRPG』66頁の“水泳”の項目、『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』80頁の“水泳”の項目が存在するからだ、と今では認識してい



る。

これ等には私が例え、如何なる服装……たとえば重厚な軍用ボディーマーを着用したとしても危機的状況でなければ問題なく泳ぐことができるといふものだ。

こつちの世界に来てから泳ぐ機会はなかったため、今もできるのかどうか不安ではあるが少なくとも前世であるクトゥルフ神話TRPG世界線では、平常時に溺れることなく泳げてはいたので問題ないはずだ。

そもそも青空 日葵が中学生時代はテロリストの一件で、約1年間は入院暮らしだったし、五車町に来たあともこの五車町には、学校ぐらいにしかプールが無いことも相まって調べることができないでいた。

「できることなら、安全に泳げる場所でまったりと泳ぎに行きたいところですが……群馬県は内陸部ですしねえ……泳ぎに行くには県外に行く必要があるんですよ……」

「まえさき市に行けば、市民プールとかあるかもしれないけど……アイツがいるかもしれないしな」

「……………アイツ?」

「ほら高位魔族のアイツだよ」

「ああ、えつちなお店で働いている蛇子ちゃんのことですか?」

「えつちなお店で働いている蛇子ちゃんって……おい。それ、蛇子に聞かれたら絶対に勘違いして怒り出すから、その渾名は止めた方がいいと思うぞ。てか、えつちなお店で働いている蛇子ちゃんってなんだ? 日葵、まさか……あの高位魔族にそんな渾名を付けて呼んでいるのか!? そもそも、どういう経緯でえつちなお店で働いている蛇子ちゃんって渾名になったんだ!? 確かに怒った時の蛇子にそっくりだったって言ったけど! まさか、その流れでつけたのか!」

私の言葉に鹿之助くんは身を乗り出して、私の呼称について静止をいれてくる。

そんな彼の顔は、目を見開いて驚愕しているようだった。これは誤解を解かねばなるまい。

「半分正解ですが、半分は不正解です。実は私と鹿之助くんがフードコートで別れたあと、えつちなお店で働いている蛇子ちゃんがわざわざ出向いて私に会いに来たんです。そこで、彼女がスネークレディと名乗ったので……愛称として『蛇子ちゃん』って呼び始めたのがきっかけですね」

「初対面の高位魔族を!? 愛称で?!」

「はい。彼女、私とお友達になりたがっていたので……」

「おともだちい!?!」

彼は先ほどまでの自信のない素振りは何処へやら……私の言葉に對して声を大きくしながら距離を詰めてくる。私はそれを逃げることもなく、ここぞとばかりの急接近のチャンスとして彼を迎え入れ、隣通しの席で座る。

……? おかしいな。彼の隣に座った時、なんだか冬場に下敷きで髪の毛をコスった時のような感覚を感じる。夏場だというのに……気のせいだろうか? 今、私が掛けているスパイダーカメラは静電気に弱いところがある。静電気が弾けて壊れでもしないと良いのだが……。

「……なにかまずいことでも?」

「いやいやいや! 日葵、まずいって! その話の最初から最後まで全部まずいって! 高位魔族とお友達——絶対にそれ何か裏があるぞ! 悪いことは言わないから、そのスネーク、レディだっけ?! 早めの絶交を告げた方が良いつて!」

「いやあ……そうしたいのは山々なのですが……。気に入られちゃったみたいで、ぜんっぜん……逃がしてくれないんですよねえ……」  
「ああああああ!!!」

鹿之助くんは片手を顔につけて天井を見上げる。鹿之助くんを困らせるような意図は私にはないのだが、困っている彼も非常にかわいいので、このまま淡々とした会話のままの態度を続けることにした。

でも、鹿之助くんに言われずともまずいのは理解している。

鹿之助くんには当時の状況を詳細にいう事はできないが、えつちなお店で働いている蛇子ちゃんとは最初の交渉が決裂した時に散々殴

り合ったのだ。

流石、高位魔族。あの時は手も足も出なかった。〈頭突き〉は刺さったが。

私が逃げ切った後も、ぴえんヶ丘どすこい之助な敗北が余程悔しかったのか、こちらの入院先を突き止めて脅迫電話まで送りつけてくる始末。どう考えても真面目な奴じゃないし、可能であれば全力で離れることこそが推奨されるような奴ぐらい分別はついている。

「でもね、鹿之助くん。この話には面白い話もあるんですよ？」

「嘘だ。この話の流れは、絶対に面白い話じゃないぞ」

「まあまあ、そこは聞いてみてから判断してくださいよ。……えっちなお店で働いている蛇子ちゃんなんですけど、実は彼女……すごく泣き虫なんです。気の強い女はアナルが弱い理論ですわね」

「??? 何言ってるんだ???」

「鹿之助くんがあのカルティ……ケモミミローブの集団に捕まったとき、私も鹿之助くんと合流するために彼女と別れようとしたんですけど……。蛇子ちゃんったら『日葵わたしと離れたくない』って騒いで……そこで頭を使ってお願いしたらギャン泣きしながらも見送ってくれたんですよ。いやあ、鹿之助くんにも見せたかったなあ。高位魔族な蛇子ちゃんが口元を抑えながらギャン泣きしている光景」

「ねえ、日葵。俺がふうま達を探したりアイツ等に捕まった時、マジで何してたの??? 話を聞けば聞くほどあの時の日葵スヶジュールの行動が特殊部隊上忍対魔忍のソレなんだけど……」

「今説明した通りですよ? きつと火事場の馬鹿力つてやつですわねえ……。あれは絶対鹿之助人としてのリミッターが外れちゃったくんが居なかったことで発動のでしょうねえ」

「はあ……俺の中での一般人の定義が壊れそうなんだけど」

「ん? 何か言いました?」

「……。いや。ところで、今の話……どこがおもしろい話なんだよ」「え? だって考えてもみてくださいよ。鹿之助くんが店先で怯えていたあの高位魔族が『私と離れるのが寂しくて』ギャン泣きしていたんですよ? 構図的にギャップ萌えからの可愛いを通り越して面白

い光景じゃないです???

「……………俺さ。いま少し考えてみても、あの高位魔族のギャン泣きしている理由が『日葵と一時的にお別れするから』なんて単純な理由だとは到底思えないんだけど。絶対に、日葵が何かしたんだろ? 高位魔族を泣かせるようなことをしたんだろ??? てか、高位魔族を泣かせるって何??? 俺には絶対に無理なシチュエーションなんだけど?」

「やだなー鹿之助くん。私を何だと思ってるんですか。私は何処にでもいる一般的な女子校生JK、青空あむぞら 日葵ちゃんひまりですよ? えっちなお店で働いている蛇子ちゃんには、ハンムラビ法典に誓って変なことはしてないです。」

「やっぱ何かしたんだな? 俺にはハンムラビ法典が何か分からないけど、ハンムラビ法典に誓ってつてことは、その誓約か何かには誓える程度には何かやったんだな!」

「はっはっはっはっ」

鹿之助くんの総ツツコミ交じりの話題に食いつく様子を横目で確認しながら、片目を瞑って後頭部を搔いて豪快に笑ってごまかす。

「『はっはっはっはっ』じゃないぞ!! 笑ってごまかすなよ!」

「でも、笑えたでしょ? 今の面白い話」

「その話を聞いていて俺はずっとハラハラしっぱなしなんだが!」

「ふふふっ♪ 楽しんで聞いて貰えたなら何よりです。あ、今の話。ふうま君とまえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんには内緒ですよ」

「まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃん!」

「そっちは、我が友人の相州 蛇子ちゃんのほうです。別にメヌケのような蔑称じゃないですよ。ほら、私には現状2人もお友達の蛇子ちゃんがいるので差別化を図るための渾名です」

「……………ひまり。学校ではえっちなお店で働いている蛇子ちゃんも、まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんも、どっちも蛇子の前で口にしない方がいいぞ。間違いない。間違いない。蛇子から問答無用で容赦なく墨を吹きかけられるからな? いくら日

葵が一般的なJKでも、アイツは絶対に容赦しないと思うからな？」  
「当然ですよ。この愛称は2人の蛇子ちゃんが同時に出てきた時に差別化を図る目的以外に使用しません」

「……………もう、日葵が本当に一般人なのか、疑わしくなってきたぜ……………」

「うふふ。私は何処にでもいる普遍的な女子校生ですよー♪」

クラスメイト達が水の中で、きやつきやと水遊びをしている中。

正面を向いて半分あきれたかのような溜息をつく、鹿之助くんの頭と半身にそつと自分の半身を預けるのだった。

バチッ

夏にも関わらず静電気が弾けたが……………メガネは無事なことを祈り  
つつ……………

Episode 95 『縁の下の力持ちな おじさん』

「マジで最近、散々だな……蓮魔先生には連続で怒られるし、桐生の野郎に血液をぶち抜かれるし、気が付けばもうじき一学期が終わろうとしているし……」

ある夏の昼休み、校舎裏の木陰の一角で満開に咲き乱れる花々にジョウロで水を与えながら私は涼んでいた。

ここは鹿之助くんも陽葵ちゃんにも知られていない、私が1人で落ち着きたい時に訪れることを許されている特別な花園だ。

それもそのはず。この花園に入るには有刺鉄線付きの高いフェンスを乗り越えるか、ボタン式キーロックの扉を突破する必要がある場所なのだ。ま、特別な花園と言っても何か特別な花壇があるわけではない。このフェンスの内側に入ったとてそこにあるのは、一定の周期で人間の死体が浮いていることに定評のある貯水槽と、特大のボイラー室。それと個人的に大好きな設備室である高電圧室ぐらいだ。

ここは生徒のみならず、何かしら仕出かすと何処からともなく姿を現す生真面目な蓮魔先生や怖いことで定評がある紫先生の目を盗むにはもってこいな場所である。そんな場所こそむしろ五車学園の不良共のたまり場になりそうな場所ではあったものの……実際にそのような輩がこの場所に定住することはない。何故ならば――

「おっ、青空ちゃん。今日も来てくれたのかい？」

いつもの鼻歌を歌いながら地面に生え伸びる花々に水を与えていると、不意に背後から足音もなく声が掛かる。

背後には見上げる程の巨漢が立っていた。鶯色うぐいすいろに1本の縦ラインの入った上下ジャージを着用した男性。日差し避けの為につば付きキャップを被り、オークにも勝るとも劣らない立派なでっぷりとした腹部を持つ巨体。その胴体は関取のようで横幅は『青空 日葵』の胴体の2倍は優に超えていたし、常日頃から用務員という力仕事を務めているためかその腕の太さはコマンドーの主人公、ジョン・メイト

リックス大佐のように非常に筋肉質で丸太のように太い。だがしかし、そんな巨体ながらもえつちなお店の蛇子ちゃんのように、音もなく背後に忍び寄ることへ長けている。……すごい漢だ。

そう。彼こそ、我等が五車学園の雑務を熟してくれる用務員さんと沼津 彦四郎さんだった。

「ああ。お疲れ様です。私がない間のお花のお世話。ありがとうございますございました」

「いやいやいや気にするな。その子たちは俺が介入しなくても、そんなに手の掛からない子達だろう？ ……そんなことよりも怪我の方は大丈夫なのか？ 先生間の話では、重傷で入院は夏休みまで続くと聞いたが……」

「ええ、問題ありませんよ。魔界医療のおかげですっかり良くなったので、ささっと退院しました。度重なる入院で出席日数も危うかったですし……」

「グフフフフフ。五車学園の生徒にしては勤勉な心持で素晴らしいことだが、健康あつての物種だ。無理はするんじゃないぞ」

「お気遣いいただきありがとうございます。ですが、それは彦四郎さんもですよ。この時期は熱中症には気をつけてくださいね。ギヒヒッ」

彼は私を見下ろしながら、まるで悪漢が生娘を襲う直前のような細目でニヤリと笑う。その口端だけ開いて笑いかける様子や、笑顔なはずなのに鋭利な白目が彼の人相を更にあくどく魅せる。

だが、私も同じようなものだ。テロリストから武装を奪い取った時や、まえさき市でえつちなお店で働いている蛇子ちゃんに一矢報いてやった時のような悪い顔で笑顔を返した。

「まさか青空ちゃんにそれを言われるとはなあ、君に比べたらおじさんはそんなに多い入院経験はないが……」

「熱中症は脳をやられますから。私の骨折や刺し傷、皮下出血なんかとは比較にはなりませんよ」

私の言葉に沼津さんは、またもや『グフフフフフ』とその巨大な腹部を上下に揺らしながら、笑い声を押し殺すように笑いだす。

あー……そうだ。一点修正したいこともある。オークに勝るとも劣らないでつぷりとした腹部と言ったが、実際にオークを見た上での感想としてはオークよりも腹囲は勝っているに違いない。オークは確かに体格が良く、筋肉質で不衛生なデブだ。だが、この今、目の前にいる沼津 彦四郎さんの方がずっとふとましい。具体的に、オーク達は頭部、首、胴体の存在をそれぞれ確認することができた。しかし、彼は首が存在しない。いや、実際にはあるのだろうが顎と一体化……あるいは胴体と一体化していた。太さではオークに勝ってしまうなんて……やはり、すごい漢だ。

いったい、その太っ腹なボディを生成するのにいくら資金を掛けたのか個人的に凄まじく興味がわく。

それでも親しい間柄でも礼儀は必要であるのと同時に、そのお腹を手に入れるには何万k c a lを掛けたんですか？なんて疑問はもつと親睦を深めてから聞くべきだろう。

「さて、こっちのシロツメクサですが、これは夏休みがあける前には花弁は散っちゃうんですよね？」

「ああ、残念だが……シロツメクサの咲く時期は3月～8月までだからな。青空ちゃんが2学期で来る頃には散っているだろう」

「そうですよねー」

幸福な花に視線を落として、彦四郎さんの言葉に後頭部を搔く。

1学期の終わりを知らせる期末試験まで残り僅かな期間しかなかった。期末試験のシーズンに入ってしまったえば、今日のように悠長な世話などできない。だが、このまま枯らしてしまうのももつたいないだろう。だからこそ今日の私がすべきことは既に決まっていた。

「彦四郎さん。このシロツメクサ、いくつかのアクセサリにしたいので摘んでしまってもよろしいでしょうか？ 友達にいくつか送りたいのと最近、不連続きなので運氣アップさせたんですよね」

「そんなことか。もちろんだ。そもそも俺と君ぐらいしかこの花に見向きをしないし、そもそも育てたりなんかしないんだからな」

「ありがとうございます」

彦四郎さんへペコリと頭を下げ、シロツメクサ、もといクロー



バーの絨毯に腰を下ろして近場のシロツメクサの花の根本を片っ端からへし折り摘み取り始める。

黙々と雑草を摘む私に、傍で彦四郎さんも屈んでは私の左隣に生え伸びている花を摘み始めてくれた。流石は広大な五車学園を管轄している有能な用務員さんというべきだろう。彼は私の摘み取る速度よりも1・5倍も素早く丁寧に摘み渡してくれる。

摘み取ったシロツメクサの花は、すべて花冠の材料として用いる。1本の茎の部分にもう一本のシロツメクサを交差させて、交差させた花をその下の茎に巻き付けていく。彼が材料を傍で集めてくれるから、私はそれをコツコツと編むことで花輪を形成させる。

「……なあ、青空ちゃん。先ほど、不運続きと言っていたが何かあったのか？ おじさんでよければ話に乗るが……」

「ははは、ありがとうございます。じゃ、遠慮なく——これは、ついこの間の話なのですが——」

地道にコツコツと花輪を編む私へ、彼はそんな黙々と幸運の願掛け品を作っているとそつと顔を覗かせて気遣う声掛けをしてくれた。

もちろん、私としては渴いた笑いを上げながら好意をそのまま受け止める。これから話す内容は、桐生先生とのやり取りや室井先生とのやり取りに関することだが、内容が内容だけに親や友人達に吐露できるはずもなく、その鬱憤を彼に話してストレス解消させてもらうことにした。

「——そいつは本当に大変そうだな。俺も最初こそ青空ちゃんのことを一部の五車の学生諸君と同じ大概な存在だと思っていたが、こう聞く限りだと青空ちゃんの場合、不幸が舞い込んできてそれに振り回されているみたいだなあ」

「ほんつとに。ツイてなさすぎなんですよ。私。だからこそ、こうして願掛けのアクセサリを作っているわけですが。ほい、1つ目つと」

「手慣れているなあ。……シロツメクサの花言葉は——」

『私を思つて』と『約束』ですね」

「グフフフ、この分野では敵わないな」

1つ目の花輪を腕に通して2つ目の花輪の製作へと取り掛かる。

その様子を沼津さんは褒めながらも、空を見上げながらシロツメクサの花言葉を思い出しているようだった。しかし、彼が思い出す前に私が花言葉を告げる。

そういえば、沼津さんとの交流のきっかけも、こんな花言葉から始まったんだっけか。

シロツメクサの花言葉は『私を思つて』と『約束』だが、彼と出会った時には校庭で四つ葉のクローバー集めをしていた時だった。クローバーの花言葉は『幸運』と『復讐』だったな。『幸運』も『復讐』も私の好きな言葉だ。

「様々な花言葉を知っているが、それも勉強で身に着けたのか？」

「いいえ。これは経験と習慣によるものですね」

「経験と習慣？」

「はい。私が旅行に出かけると必ず宿泊施設に花が咲いていて……その咲いている花言葉を知っていたことで救われたことが何度かあつて。それ以来、花言葉を調べることが習慣付くうちに覚えていったわけです」

「なるほどなあ。それが経験と習慣か」

私が花言葉に熟達しているわけを沼津さんへ話している間に、2つ目の花輪も完成する。

大体、前世にて私が花言葉で状況やその宿泊施設の特徴を見抜いている時は、その翌日から3日以内。近い将来に必ず私や友人達に対して不幸という名の厄災が降りかかっていたものだが……。沼津さんとの交流を始めて以来、特に事件が起きていないという事は今回は何も起きずに済む日なのかもしれない。ま、あれはクトゥルフ神話世界での出来事。対魔忍世界でもそうなるのは限らないということなのかも。「で？ 不幸続きということとは、あのキチガイ医師の桐生に無理やり採血をされたこと以外にも何かあるんだらう？」

「次は室井先生の関連のお話ですね——」

「彼か——」

その後も沼津さんは『どしたん？ 話きこうか？ (一)』と、人によつ

ては卑しい下心が見えるような顔と表現できる面持ちで私の話を傾聴してくれる。

しかし私としては彼がどんな顔をして人の話を聞いていようが、元からそういう顔であることや陰ながらに五車学園を支える縁の下の力持ちで真面目に働いていることを知っているから別に何とも思わないし、この人はそういう顔に見えてしまうところが損をしているようにいつも感じる。

いやホントに。私も十分な教師陣の手を煩わせる悪ガキ、温厚なふりをしてたまにボロが出ている彼の言葉を借りるなら五車のクソガキ的な立ち位置に居るが……。仮に私が彼ぐらいの40代程度の年齢だとして同じように五車学園のクソガキどもを相手にしながら用務員さんが務まるのか？と尋ねられたら絶対に無理なもの。

まず学校の用務員として勤めるための資格スキルとして、普通自動車免許、ボイラー技士、危険物取扱者（乙四）、刈り払い機技能講習にオプションで電気工事士と電気主任技術者（三種）を求められ……。雇われた先での通常業務では花壇の整理や、登下校の見守り、校舎内のごみ拾い、施設の修繕、警備、イベント時の会場設営、時には靴箱のDIYまでを仕事として執り行わなければならない。とにかくその多彩な資格を求められる採用条件も、業務内容も低賃金な給与も含めてハードルが高すぎる。

さらにその五車のクソガキから、暴力や心にもない言葉を投げかけられるというね……。彼曰く過去には『魂の色が汚い』だの『泥まみれの汚い男』だの言われたらしい。拳句の果てには、私と眞田先輩と黒田先輩みたいなのが学校の備品を破壊する。こんな低賃金で精神的にも肉体的にも追い詰められるふざけた職業は、医療福祉職以外に私は知らない。

生徒指導として眞田先輩に絞られている間、私と眞田先輩と黒田先輩が破壊したガラスと窓枠を彼が片付けてくれたと知り。図書室で洋館について調べる前に謝罪しに行ったとき、彼はそんな私の蛮行を笑って許してくれた。正直、逆の立場だったらそんな言葉を投げかけられる自信はない。それを彼は黙々と仕事としてこなしているのだ。

本当に心の底から偉いと思うし、誰にでもできる仕事じゃないことだとも理解している。

更に今は、彼は私の愚痴も聴いてくれているのだ。

「室井先生は、退院させてくれて言っているのにずうずうずうずうつとバカの一つ覚えみたいに『経過観察。経過観察。経過観察』つて言うんですよ。傷も完治して、今回は措置入院でもないんですよ？確かに緊急搬送されましたが、あくまでも任意入院なのに……あの監禁魔……」

「そつちもそつちで大変そうだな……。あー青空ちゃん？これは別に室井先生の肩を持つ訳じゃないが、俺達にも責任というものがあるからな。きつと青空ちゃんの意思を尊重したいとは思っているだろうが、万が一を考えた上での判断なのだろう、分かってやって欲しい」「……………わかってますよ。わかってますけど……………」

「ならどうすればいいか、わかるな？ 出席日数のことが気になるなら、今後は怪我しないように心掛けないといけないじゃないか？」  
「……………ええ、2学期からは注意します」

後半になるにつれて沼津 彦四郎さんの会話は、やはり男性的な会話となる。

最初こそ傾聴の姿勢で、同意と共感してくれる形で聞いてくれてはいたが、次第に問題解決を目的とした会話になっている。

まあ、こればかりは仕方のないことだ。男と女とでは脳の作りが違うのだから。男は「目的を解決するための解決脳」、女は「声を出して共感し合う共感脳」なのだ。

ゆえに私が求めている返事を返してもらうには異性の彼にではなく、同性の誰か。紫先生とか、もうじき1学期が終わりそうなのに出会ったことのないさくら先生とかに話を聞いてもらうのが最適なのだ。

でも彼に積もっていた悩み事を話したことで作業は進んだし、口に出すことで気分は晴れて、解決策は見つかった。おまけに今回の〈製作〉目標であった幸運の願掛け品は完成する。

出来上がったのはシロツメクサの花冠と腕輪だった。

それぞれが2つずつ。

腕輪の1つは一つ葉のクローバーを飾り付けた自分用。

もう1つが三つ葉のクローバーを飾り付けた陽葵ちゃん用。

四つ葉のクローバー飾りの花冠は鹿之助くん用だ。

そして、残り1つの花冠には帰り道の路上で見つけた六つ葉のクローバーを添えて――

「あ。そろそろ5限目かな……戻らなきゃ。彦四郎さん、お話を聞いてくださってありがとうございます……」

「いやいや、青空ちゃんの力になれたら何よりだよ」

「あと、お話を聞いてくれたお礼に……」

沼津 彦四郎さんに渡すのだった。

彼の手に対してシロツメクサの花は小さく、ちよつとでも扱い方を間違えれば簡単に潰れてしまうようなガラス細工のような繊細なものだった。小顔の彼が頭に乗せるには十分な大きさではある。

「俺に？……ありがとう。貰っておく」

彼はまた卑しいニヤリとした表情を浮かべながら、私から花冠を受け取るとつば付きキャップの上からかぶってくれる。とてもじゃないが、彼のキヤラとしては花冠なんて似合わない。似合わないが、それでも花冠があるのと無いのでは、彼が放っている陰気な雰囲気は多少なりとも陽気なものへと変える魅力はあった。

「……大切にしてもらえると作った私としても嬉しいです」

「ああ、大切にするとともに」

「じゃ、私はこれで」

「……………」

腕に3つの花輪を手にして彼へうやうやしく頭を下げてから、開閉音が不思議としなかった沼津さんが入ってきたであろう出入り口に向けて歩み出す。

「……………青空ちゃん」

「はい？…どうかされましたか？」

「俺からも青空ちゃんに伝えておきたいことがあるんだが聞いて貰ってもいいか？」

何処か真剣で覚悟を決めてはなし出すかのような彼の言葉に、後ろ髪を引かれ立ち止まった。

スカートのポケットからスマホを取り出して時間を確認するも、時刻は13時10分を指しており、5限目の授業が開始するまであと10分の猶予があった。だからもう一度、沼津さんの方へと振り返って肯定の意味を込めたあくどい笑みを見せる。

「……大丈夫ですよ。5分ぐらいなら時間あります。私みたいに長々と話されちゃうと困っちゃいますけど」

「じゃ、手短かに伝える。斎藤 半次郎先生は知っているよな?」

「え? あ、ハンジロー? あ、いえ。知ってますよ。ハンジロー先生のペースさえ乱すことが無ければ紫先生と同じでいい先生ですよね」  
「ああ……。実は、俺。半次郎先生とは親しい間柄だな。今度、日程が合えば夏休みに彼の自宅で勉強会をするそうなんだが、良かったら青空ちゃんを誘ってきてくれないか?と言付けを受けてな」

「ハンジロー先生が? 私に? へえ?」

願ってもない言葉に、少し信じられないような息が鼻から漏れ出てしまう。

斎藤 半次郎先生といえば、五車学園の現代社会の授業でお世話になっっている先生の1人だ。

紫先生や蓮魔先生とは違って授業以外では直接的な関わりが少ない先生で、ただ学校の先生としては尤も相応しいきちんとした身なりをしている。髪の毛を七三分けで纏め、まるでサラリーマンのようなストライプスーツを着こなしており、いつも銀色の懐中時計を持ち歩いて神経質そうに時計を見ているのが特徴だった。あれは間違いないマイペースな性格なのだろう。以前、他の生徒から授業時間外で授業の内容について質問を受けた時、不機嫌そうな顔をしてその生徒を無視していた。

年齢的には前世の私と歳が近く、五車町の中では室井先生の次に私好きな人だ。その次に沼津さん。具体的にハンジローの容姿について魅力部分を上げると、あの私達生徒を見つめるときに冷徹な目。私の祖と似た目で、どこか親近感と私の唸る好奇心が刺激されて調査に

乗り出したい気持ちを感じられずにいられない。

ゆえにハンジロー先生の前では “いい子ちゃん” で居るよう  
に心がけている。気に入ってもらえれば何か楽しいことが舞い込ん  
でくるようなそんな気がするし。それでも、噂やら入院の一件で毎回  
ボロが出てはハンジローは蔑んだ目で私を見るのだが。しかし、それ  
もまた良い。いつか鹿之助くんにもあんな目で見つめて貰いたいも  
のだ。

それはさておいても、そんな私のことをハンジローが興味を持って  
自宅に招待を？ もう、これはワクワクが止められないですね！

「……………」

「でも現状、即答は……できないですね。今年の夏休みの日程はカツ  
カツなので……。予定が合えばよろしくお願いしたいところですが  
ど……。ハンジロー、先生のことですから曖昧な回答は嫌いだと思いますし  
『今回は辞退させていただきます』と伝えて貰っても良いですか？」  
「そうか！ それは良かった！ 伝えておこう！」

「？」

どこか重々しい口調だった沼津さんは私の事態の知らせを聞くや  
否や爽快そうな声を出した。肌色のタイツを頭に被って後頭部側に  
引っ張られたかのようなにんまりとした笑顔を浮かべる。

しかし、『それは良かった』とは？ あ。はーん？ さては沼津さ  
ん、ハンジローとそりが合わないのか。まあ、あの人は気難しさMA  
Xな人ですし。

あのヒト付き合いが上手な、まえさき市で3時間ウンコしていた方  
の蛇子ちゃんですら苦手意識を持っていたので分からなくもないで  
すけどね。……ま、社会人ってそういうところが大変ですね。同じ職  
場に勤める以上、嫌な奴とも関係を築かなきゃならないという。

ま、私はハンジローのこと好きですけど。……まあ、好きってか核  
心としては興味が湧くようなタイプ。私生活とか暴いてギャップ萌  
えを感じたくなるようなタイプ。

「話はそれだけだ。もう行っても良いぞ」

「了解です、それじゃまた」

「おう」

軽く挙手する形の挨拶のちに今度こそ別れる。

いやー。それにしてもハンジローのお誘いに乗りたかった。

チクツシヨウ。えっちなお店で働いている蛇子めえ……。アイツが私の『〈魔族語〉か〈魔獣語〉で書かれた本』の文字判別を友人に頼んだところ判明しそうなので、東京キングダムでの待ち合わせはなしで。という連絡をそのまま承諾さえしてくれたら、ハンジローの元に行けたのに……。

ああ、シロツメクサの腕輪を作ったけど、やっぱり私はツイていない。鹿之助くんにあげる予定の四つ葉のクローバー付きの花冠を自分用にすればよかったかな。



## 15章 『稲毛屋のソフトアイスクリーム』 Episode 96 『稲毛屋道中』

「お姉ちゃんたち〜！ はやく、はやく〜っ!!!」

「鹿子ちゃん、舗装された道路とはいえそんなに走ったら危ないですよ」

「もうっ！ 心寧お姉ちゃんは心配性だなあ！ これくらいへっっちゃらだよ！」

7月の夏休みに入る前の貴重な土日。

数日前、陽葵ちゃんに対して結んだ約束を果たすため、私達はあの洋館を訪れた1年生メンバーで稲毛屋と呼ばれる駄菓子屋へと向かっていった。

そのメンバーとは、まずは私。『青空 日葵』、もとい釘貫 神葬。

そして今回の主役ともいえるソフトクリームを奢る約束をした日ノ出 陽葵ちゃん。

私の中で監禁病棟として有名な五車地下病院から、無事に退院できた影本 鹿子ちゃん。

そして陽葵ちゃんの親友であり、私の友達でもある恋愛クソ強女こと速水 心寧ちゃんの4名だ。

現在、鹿子ちゃんは引き取ってくれる身内が存在しないことが判明しているため五車学園系列の児童養護施設にて生活を送っている。

幼い身にも関わらずあの洋館で家族全員を失い、首のないドレスを纏った貴婦人に体中の体液を啜られるという悲惨な目に遭った彼女だが、今ではすっかりと元気を取り戻し健やかな毎日を過ごしているようだ。

のちに聞いた話だが、鹿子ちゃんの貧血は3日以内という異常な速さで回復したらしい。これは実に赤き霧／磯八目巾着鰻イソヤツメキンチャクウナギを被害者の顕著な症状でもあった。私が〈クトウルフ神話〉技能で判断を下した赤き霧／磯八目巾着鰻という神話生物で……決して誤りではないのだ。誤りでなかったのだ。火器の攻撃が通じていたことに

ついでには……まだ謎であるのだが……。

そんな鹿子ちゃんがこの場に居るのは、『気分転換に』と心寧ちゃんか彼女を誘った案があつてこそである。稲毛屋に行くのを誘ったところ目を輝かせ跳ねながらついてきてくれたのだ。

心寧ちゃんは、今ではすっかり鹿子ちゃんに懐かれてお姉さん気質がすっかり板についていた。自由奔放に道路を走り回る彼女を宥めながら、ドレスを纏った首のない貴婦人の奇襲時に鹿子ちゃんを守ることをできなかつたことを悔やむかのように傍に張り付いて御守をしている。

………とここでこの場に神村さんが居ないことについては、別に省いたわけではない。一応、声は掛けたが拒否されてしまっただけだ。

「ぶえー……。日葵ちゃんと一緒に『稲毛屋へおでかけ』って聞いていたから初デートだと思つたのに………どうして心寧ちゃんと鹿子ちゃんまで居るのお？」

「え？ デートなんて誰も最初から言つてないですけど……。心寧ちゃんと鹿子ちゃんが居るのは2人きりで遊びに出かけるよりも大人数で出かけた方が楽しいと思つたからです。陽葵ちゃんは心寧ちゃん達が居るのは嫌でしたか？」

「ぶー。日葵ちゃん、それはいぢわるな質問だよー？ もちろん、2人が居るのは楽しいけど………」

「けど？」

「私は日葵ちゃんとの初デートだと思つてたのー！ 2人きりなら、日葵ちゃんを物陰に連れ込んであーん♥なことやこーん♥なことができたのに………」

心寧ちゃんと鹿子ちゃんから、後方に約1？離れたところで私達は並んで歩いていた。

両手を後頭部に回してつるつるに処理された脇を晒しながら、何やらぶつぶつと不服そうに呟く陽葵ちゃんが何やら不穏な事を言っている。それ故に彼女がまたもや痴女みたいな恰好で私の目の前に現れたことも合理が付いた。

確かにその洋館侵入時にも着用していた衣服のような水着は、素肌を絡めハメ合うにはぴったりな服装だろうよ。

ちよつと身の危険を感じた手前、やっぱり2人を誘って大正解だと思ふ。

陽葵ちゃんの今日の服装は、洋館事件で着用していたオレンジ色のライダースジャケットに谷間が強調された例のモノキニを着用している。

そんな痴女みたいな姿で集合場所に現れた陽葵ちゃんに対して、思わず『チェンジ』の罵声を浴びせてしまったが、鹿子ちゃんも心寧ちゃんも別段気にする様子も見せなかったことや「五車町でならこの格好してても大丈夫だよ!」とゴリ押してくる陽葵ちゃんに負けてその格好で行動を共にしている。

いや……でもやっぱり、海水浴じゃないのに町中でその恰好は痴女なんだわ。

ねえ、誰か教えて。これは私の感性が間違っている？ この世界は対魔忍世界というアダルト世界だから普通のことなのだと思います。ところだが、私は知っているぞ。2カ月前、私が鹿之助くん達に連れられてまえさき市に遊びに出かけた時、都心部に居た一般人はそんな服は着用していなかった。ちゃんと肌の露出面積の少ない衣服を着用していたぞ。

私が前世も今世も女だから、男の感性はちよつとよくわからないんだけど……話でよく聞く男の情報から推察すると。少年だったら間違いなく陽葵ちゃん精通すると思うんだよね。

間違いなく聖心が乱れて揃ってピンピン、2つの双丘と鼠径部の強調、完璧に処理された脇下で股間のルルイエが急浮上するのですが？ やっぱ痴女だよ。陽葵ちゃん。その恰好は五車町でも、やっぱ痴女だつて。

その恰好が許されるのは対魔忍だけだよ。陽葵ちゃんは対魔忍にスカウト志望なの？ 違うでしょ？ もしそうなら止めときなつて。あんなブラック公務員に未来はないよ。

「ただでやれると思ったら大間違いですよ、陽葵ちゃん。私、同性から

黙って犯される趣味はないですし、その時は激しく抵抗しますからね」

「えへへへっー！　そうは言っても日葵ちゃんは私に力では敵わないのは五車病院で実証済みだからね！　負けそうになったら、搦め手も……♥♥♥　どんな抵抗も私の前では無駄なのだー！　にゃん♥　にゃん♥言わせちゃうよー！　日葵ちゃん壊れる。私がいっぱい愛して壊しちゃう！　私がいないとソワソワしちゃったり、また弄って貰えるのを待ち遠しになるように肉体改造しちゃう！　えへへっ♪」

「はいはい……そんなホモビの『課長こわれる』や対魔忍世界ならではなセリフをマジトーンで言われても困るのですが……」

「なにか言った!？」

「いいえ。なんにも」

悪巧みを浮かべた顔つきで指先をワキワキと動かし、今にも襲い掛かるようなライオンの真似をする陽葵ちゃんをあしらいなながらも、片目を瞑って後頭部を掻きながら真夏の道路を歩く。

心寧ちゃんが鹿子ちゃんの介護者だとするならば、私はさしずめ陽葵ちゃんの介護者なのだろう。

本音としては心寧ちゃんに看着貰いたかったのだが、今彼女は鹿子ちゃんの手一杯だ。となると、必然的に私となる。

私にあしらわれた陽葵ちゃんは私の周りをぐるぐると走り回り、ちびくろサンボの木の周りを回るトラのような動きをしていた。その顔はデレデレのバターのようにトロけきっている。

しかし、一瞬でも気を抜けば要介護者に私が頂かれてしまうシチュエーションは望んではない。

「でもでもっ！　日葵ちゃんも優しいよねー！」

「……なにがですか？」

「だって作文のなりすまし自体は失敗しちゃって、蓮魔先生にこつてり叱られて指導室送りにされちゃったのに約束通りちゃんと稲毛屋に連れて行ってくれるんだもん！」

「……。それは……」

「頼まれた任務を失敗しちゃったのに、アイスを奢ってくれる日程調

整の電話が来た時には本当に驚いたよ〜！」

「……。確かに、なりすましこそ失敗しましたが……。陽葵ちゃんの時間を割いてまでわざわざ代理してもらった分があったので……。この約束事は守らないと思っただけです」

「あはは！ それじゃあ、これは『優しい日葵ちゃん』じゃなくて『義理堅い日葵ちゃん』だね！ そんな日葵ちゃんも私は大好きだよ〜！」

「ああ！ もう、陽葵ちゃん！ この夏の暑い日にベタベタくっつかないでください！ 暑い！ 暑いイッ！」

「アツウイ！ アツウイ！ でも私は日葵ちゃんの匂いに包まれて幸せ〜」

搦め手で私を鎮圧すると言っていた陽葵ちゃんは有言実行と言わんばかりに背後から飛び掛かり、〈回避〉すら許されなかった私の動きを封じる。

本当に陽葵ちゃんの言う通り、私の素の力では彼女には敵わなかった。こちらを抱き枕のように包み込む彼女の〈組みつき〉はトリモチのように剥がれない。

さらに私のことを完封しつつあるのにも関わらず、本人は手加減をして余裕があるのだろう。背後から〈組みつき〉に来たにも拘わらず力の差を見せつけるが如く、わざわざ正面に回り込んでニタリと笑ってからドヤ顔を浮かべ、一呼吸を置いたのちに私の存在しない谷間に顔を押し付けて深呼吸している。陽葵ちゃんの2つのたわわは私のへそに直撃し圧迫。

合体した今の私たちの姿は、さながら寝違えたケンタウロスみたいな状態になっている。

「やめっ……ヤメロオー!!!」

「フアアア←ハアアアア→ツハ 良イツ→ タアイ← アタマガア……← アーッアーッ……！」

約2ヶ月前。

紫先生の15kgのバーベルを片手でクルクルと新体操のバトンのように回していた、まえさき市で3時間もウンコしていた蛇子ちゃん

ですら陽葵ちゃんに敵わなかったのだ。魔界医療に精通した桐生に血液を600mlも抜かれた私程度が、徐々に力をこめて封殺している彼女に敵うはずもなく、どうやっても引き剥がせない。

あー！ あー！ やめて！ 色々とこの身体を弄ってわかったことで、青空 日葵の身体は濡れやすいの!!! 野外プレイでこれはまずいってえっ！ 私のショーツがビチョビチョになるでしょうが！

やめて！ すみません！ マジでやめて！ 今日のは替えのショーツを持って来ないの！ やめろオ!!!

「スウー……ハアー……スウー……日葵ウム……」

おい！ 私の鹿之ニウムみたいなノリで放射能元素記号へと変換するんじゃない！ 私だって鹿之助くんを怯えさせないように、本人には多分まだ直接的には急性中毒尊死危険核融合物質：鹿之ニウムの存在は公開していないんだぞ!!!

そして押し倒されそうになっている感想だけど、同性でもめっちゃ怖い！

鹿之助くんには怯えて欲しいけど、怯えて欲しくないから陽葵ちゃんの前以外のアプローチで愛を囁くことにするよ!? 実演ありがどうね?!

でも、そろそろなんとかしないと、アメリカンフットボールにおけるタックルのように押されていては、その田んぼへと続く斜面に連れ込まれて本当に陽葵ちゃんに抱かれるだろう。もう半分、抱かれている!!! 私の両手首がいつの間にか後ろへと回され、陽葵ちゃんの片手に抑え込まれているし、もう片手が私のお尻を鷲掴みにしている！

あつ……♥ 陽葵ちゃんの指使いすごっ♥♥♥

こ、これは、思わず雰囲気流されて……♥♥♥

ええい！ 待て！待て！待て！

私ですら知らない青空 日葵の性感帯を同性の友人に撫で輪姦されて雰囲気流されるな私！年上としての威厳を見せつけるオ！今日は稲毛屋で陽葵ちゃんにソフトクリームを奢るのが目的であって、田んぼの斜面で炎天下と晴天の青空の元、青姦することが目的ではないだろう!!! 青空 日葵に重なる日ノ出 陽葵だけに。やかましい

わ!!!

これはもう頭をフル回転させる他なかった。

片手と両足で威勢のよいバッファローのように押し込んでくる陽葵ちゃんを抑え込みながら、両目を瞑って後頭部を搔きむし……れな  
い!? ぐぬぬ……。

とりあえず〈組みつき〉を試みている陽葵ちゃんを『CALL O  
f CTHULHU クトウルフ神話TRPG』の小技で引きはがす  
こと自体はそう難しくはないのだが……荒っぽい小技のため、友達に  
そんなことをするのは、やはり躊躇がある。しかし、このまま為され  
るがままになれば捕食○されることは間違いなく……。

Episode 97 『日葵ちゃんの良さ』

——否。

そうだ。

その為の心寧ちゃんの存在だった。

今、彼女は鹿子ちゃんを要介護しているが、緊急時には陽葵ちゃんの介護もできるだろう。

だからこそ、顔を上げて——

「こ、心寧ちゃ……た、助け——」

「五車町でも不意な物陰から飛び出しがあつて危険なのですよ」

「はい、ごめんなさい」

だが現実はそのままで甘くない。

既に心寧ちゃんへ助けを求めようにも、先走る鹿子ちゃんを追いかけて米粒ほどの大きさになっており……到底、助けは求められそうになかった。

「あーっ！ 恋愛クソ強女ア!? 心寧ちゃん!? アツー!?

突き付けられた現実ぜっぼうにあがる悲鳴。

私が動揺した瞬間を見計らつて、ここぞとばかりにさらに私を物陰に連れ込もうとする陽葵ちゃん。

土と砂利の道は、抵抗するのに不適切で踏ん張りが利かず押し込まれる。じりじりと着実に私を田んぼと続く斜面の淵まで立たせる。

今こそ斜面の淵に群生している雑草が突つ張りになって、そのまま斜面まで転がり落ちてしまうなんてことはないが……それも時間の問題だろう。

こ、これは、もう……『CALL of CTHULLU  
クトウルフ神話TRPG』の小技。あの荒業を使うしかないのか!?  
やるしかないのか……!?! いや、早まるな。駄目だ。陽葵ちゃんを傷つけるなんてことはできない。

ならば、あの手法で……!

ヒマリーー! やるんだな!?! 今……! ここで!



「陽葵ちゃん!? 陽葵ちゃん?!」

ああ!! 勝負は今!! ここで決める!!

私の決意は固まった。

ちよつとした賭けに出るが、これがうまく行かなかつたらすぐに第二プランに移ればよいのだ。鋼人卿と対峙した時と同じだ。

彼女を傷つけることなく、友達として一定の関係を保つたまま逃げ切るにはどうするべきか。

私はいまだに胸部に顔を埋めて深呼吸をしながら人の尻を揉み、撫でまわし、爪を立てて愛撫する陽葵ちゃんに対して迫真な声をあげる。それも私の胸部にめり込んで行く陽葵ちゃんが興味を持つような声色を使つてだ。

これをするには私の身体の可動域上、彼女の意識を私の顔へ……。簡潔に。顔を持ち上げさせることに成功する。

「なあに♥♥♥?」

「ゴクツ……」

彼女はこちらの意図する通りに、反応して胸の匂いを嗅ぐのをやめて私の顔を見上げてくれる。

それは思わず『このまま抱かれてしまってもいいな』と思つてしまうような……。甘く蕩け切った女が官能に支配されたかのような顔だった。

しかし、そんな彼女のかわいい顔とは裏腹に驚掴みにした私の尻を掴む力が強くなる。それは内心では野獣のようなケダモノが潜んでいることを決定づける証拠でもあると捉え、その場の雰囲気には流れまいと私も彼女が自ら私から離れるような言葉を告げた。

「陽葵ちゃん。私も、陽葵ちゃんのこと大好きですよ」

『大好き』の部分を感じが高ぶつて、まともな思考ではなからう彼女でも理解できるようにその部分だけ強調して愛を囁く。

彼女の性格は正直で素直。

この言葉かけは彼女の蛮行を更に加速させる危険性を秘めている。だが、それでも私の突然の求愛に愛撫していた両手の動きがビクツと細かく反応して、私を押し込む力が弱まる。

だがこの程度では彼女のへ組みつき状態から完全には逃れることはできない。

最低限できたことは、後ろ手で押さえつけられている両手の拘束状態から逃れる程度だ。だからこそ、私は彼女に頭を上げさせて彼女の期待を突いたへ言いくるめで放つてまずはその興奮状態にある彼女の動きを止めさせた。

「……」カプツ

そのまま私ながらの愛情表現の仕返しだとも言いたげに、彼女の首に腕を回し抱き寄せながら彼女の耳を優しく甘噛みする。

私の尻を揉みしだしている片手が離された。今、陽葵ちゃんの腕の動きは鎖骨付近から伝わる感覚的に、彼女はルパン三世くカリオストロの城く編の最後の方で主人公ルパンがヒロインのクラリスを抱きしめようとしながら堪えるように腕を広げ持ち上げているのが分かる。

しかし、これは抱きしめるか抱きしめないかの葛藤をしてではない。

完全に思考が停止しているかのような、不意を突かれたかのような動きの止め方だった。

「あ……。あ……。あ……」

そんな彼女を刺激しないよう抱きしめるのを止め、そつと脇にそれてへ組みつき状態から逃れる。

陽葵ちゃんは顔を真っ赤に染め上げて、その両目は嬉しそうにウルウルと好きな男性からプロポーズされて喜ぶ女性のような歓喜の渦に吞まれているようだった。

ここから彼女を絶望の淵に叩き落とすのは可哀想だとは思ったが、突然のヒマリウムで私は恐怖に晒されたのだ。ちよつとぐらい絶望も味わってもらってもいいだろう。

「ひ、日葵ちゃん……」

「へッ、このチョロイン」

「へ？」

「ハッハー！ なんですか、その狐か狸につつまれたような顔！ さ

ては騙されましたね！ うっそでーす!!! 陽葵ちゃんは大切な友人ですし、友達としては大好きなのは本当ですが恋愛対象ではありませんえーん!!!! ツシヤア！オラア！〈組みつき〉mnvr状態からの無事緊急脱出ウー！」

「ひ、酷い!!! 本気にしたのに!?! もうだまされないぞ!!! 次は問答無用だからね!!!?」

「へっへっへーん！ もう次なんてありませんよー。残念でしたねえー？ うえっうえうえ！ ギヒヒヒヒヒッ！」

陽葵ちゃんから逃れられた瞬間を狙ってネタバラシをする。

だが、ここで油断する私ではない。ふざけた笑い声を高らかに張り上げながら本気ダツシユで離れてしまった心寧ちゃんと鹿子ちゃんを追いかけるのだった。背後を振り返ればしばらく間を置いたのちに、しよげることなく少し怒った様子を見せる陽葵ちゃんが走り寄ってくる。

ちなみに、今回陽葵ちゃんの〈組みつき〉を引きはがす力以外の小技というのは『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』における72頁「素手の攻撃」4つ目■になる。これは私も前世ではよくやっていた手法で、力の差で敵わない相手に組みかれた時、肉を噛みちぎり激痛を与えて逃れる技だった。今回は甘噛みという手法ではあるが、好意を向けている相手には十分適応させられる技として応用を利かせられるようだ。

彼女に顔を上げさせたのも、動きを止めたのも全ては、この小技の為の事前準備にしか過ぎない。

.....

.....

...

「も〜！ 日ノ出お姉ちゃんも、青空お姉ちゃんも遅いよ〜!?!」  
「すみません。まったりおしゃべりしながら歩いていたら、いつの間にかに離されていました」

「あはは！ ごめんごめん！ 鹿子ちゃんはほんとに元気いっぱいだね！ 元気なのは良いことだよー！」

全力疾走によって汗を滲ませ、息を切らせながら10分後。

無事に(?) 私はなんとか鹿子ちゃんのグループに追いつく。

背後を振り返れば、陽葵ちゃんは寸差の場所で残念そうな顔で私のことを見ていた。その様子はまったく疲労など感じさせないかのような……ケロッとしたあり余る若い体力が彼女の持久力の高さを表しているようで……。

さてはオメー、体力馬鹿だな? あの時。流れに身を任せて組み伏せられようものなら、完全に体力の差で屋外でぐっちゃぐっちゃのドロツドロにされていたらな?

あぶねーあぶねー。今日も私は対魔忍世界にてささやかながらにも自分の貞操を死守できたようだ。

それはさておき心寧ちゃんは、事情を知らずに子供らしくぶんすこぶんすこ怒る鹿子ちゃんの両肩を掴む形で制御している。こつちもこつちで制御に苦労したかのような顔色だった。

「日葵ちゃん……」

「大丈夫ですよ、心寧ちゃん。今のところは……ですけど。洋館内で告げた陽葵ちゃんの様子について、察してくれて今後は制御を手伝って頂けるようならばそれが何よりの私の慰めになります……」

「陽葵ちゃん……」

「ん? どうしたの? 心寧ちゃん!」

一方で今度は2人の目を気にすることもなく、見境なしにこちらの片腕に蛇が巻き付くように絡んでこようとする陽葵ちゃんを振り払う攻防戦を繰り返す私達。

それを先走る鹿子ちゃんを御守していた心寧ちゃんはこちらを憐れむような目で見てくる。

洋館では心寧ちゃんには、陽葵ちゃんのストッパーになってほしいと告げたものだが、陽葵ちゃんの親友であり身近にいる彼女がこんな顔をするので。彼女も陽葵ちゃんの異変についてよく理解していることだろう。

「——でも陽葵ちゃんの気持ちも分かるような気がします。日葵ちゃんがこれで男の子だったら私もふうま君の次に……。もしかすると

ふうま君と同じぐらいに日葵ちゃんのことを好きになっていたかもしれません」

「え!? このタイミングで何言ってるんですか?! 心寧ちゃん!?」  
「だって、日葵ちゃんは……確かに毎日生成されている噂こそひどいものですけど……困った時はまるでヒーローみたいに颯爽と現れて、どんな絶望的な状況でも常に前向きで……。神村さんには『自分を大切にしないやつが大っ嫌いだ!』と怒られてましたけど……その代わりにいつも友達を第一に考えてくれるタフガールで——カッコイイですもんね」

「でしょっ!! やっぱり心寧ちゃんも日葵ちゃんの良さが分かってるね! あ、でも、日葵ちゃんは私を許嫁認定しているからその座は譲らないよ! 日葵ちゃんは私の物! あげません……あげません!!!」  
「ふふっ、それはもちろんですよ」

「オヨ。ヨ、ヨヨヨ……」

「!!  
♥♥♥♥」

心寧ちゃんは陽葵ちゃんを宥めるどころか、すごく優しい微笑みの顔を浮かべるや否や私の何処が惚れる要素になっているのか説明してきた。

私としては心寧ちゃんがそろそろ『陽葵ちゃん。日葵ちゃんが困ってますよ、それくらいにしといたほうがいいです』と言ってくれることを期待していたのだが……。

ここで、まさかの裏切り。

いや、心寧ちゃんの気持的には裏切ったとかそんな気持ちは一切存在しないのだろうか……。

おかげさまで陽葵ちゃんはさらに加速。

アニメウマ娘でマッククインが『ありがとう』を分けて貰おうとしたところ、激しく拒否するスペシャルウィークみたいなのを言い出している。

おまけに私が彼女達の流れに吞まれて、両手で顔を抑えながらマッククインの返事をそのまま真似ることしかできなかつた。

しかし50年前のネタであり、通じていない筈なのに陽葵ちゃんが

すごく嬉しそうな顔をした。もう、ものすごく嬉しそうな顔だ。もし、このシーンがアニメならば陽葵ちゃんの頭の周りに、デフォルメされたお花が咲き乱れるようなそんな顔だった。

「ねえっ！ 稲毛屋に行こーよ！ 稲毛屋に行くんじゃないの!？」  
しかし、ここで思わぬ助け船が出される。

それこそ洋館でなお先輩が救出した鹿子ちゃん存在だった。

その場に固まって歩みを止めた高校生3人組に対して、子供らしく地団駄を踏んで催促をしている。

「おっと。そうでしたね。ごめんなさい待たせてしまつて」

「あ。鹿子ちゃん。だから、いくら車通りが少ないからとはいえ、そんなに先を歩いたら危ないですつてば」

「日葵ちゃんと稲毛屋♪ 日葵ちゃんと稲毛屋♪」

彼女はきつと意図こそしていないのだろうが、子供だから許されるという特有の場の空気を読めない発言で私達の歩の進みを促進させる。

なんとか、再び陽葵ちゃんの抱擁から脱して一緒に並んで歩く。

稲毛屋はもうすぐだ。

## Episode 98 『稲毛屋』

稲毛屋は、我等が母校となる予定の五車学園の近所。

かつ五車町のほぼ中心部。

それも多差路の5差路の中心に位置する甘味処である。

蛇子ちゃんや鹿之助くん曰く。五車町に住まう子供たちは必ずこの稲毛屋に立ち寄っては名物品である『ソフトアイスクリーム』と『白玉あんみつ』の2<sup>T.W.</sup> トツプ<sup>T.P.</sup> メニニュー<sup>M.E.N.U.</sup>を食べることは、五車町に住まう上である種のノルマのようなものらしい。

さらに学園側が許可しているかどうかは知らないが、稲毛屋は学校の帰宅途中に寄り道して買い食いについて寛容な場所でもある。それゆえ、鹿之助くん、蛇子ちゃん、ふうま君と揃って帰るときに稲毛屋に寄っていくと他の五車学園の生徒が大体たむろしておしゃべりをしていることが多い場所だった。

外観として稲毛屋は木造建築の古き良き2階建て家屋になっている。

1階部分の半分以上が駄菓子屋となっており、2階部分がこの駄菓子屋の主である稲下さんの生活スペースのようだった。

1階部分には青色のトタンでできた軒の出があり、雨宿りにも適した構造になっている。稲毛屋を正面に左手側には紅色の布が掛けられたおしゃれなベンチ。右手側には2階部の側面に付けられた『駄菓子 稲毛屋』の看板がある。また先に五車学園があるのが見えた。

さらに生徒が集まるといふこともあり、稲毛屋の対面側にはガゼボ gazebo 西洋風あずまやが設置されていて、そこが人数超過時のたむろ場となっている。

おまけに外観の情報から、この建物が本当に古いことが推察できる。

2階や1階に窓が存在するのだが、その窓は現代で見られるような平坦なガラスではなく、少したわみが存在する昭和初期頃のガラスが用いられていた。また稲毛屋の壁に付けられているひし形のナンチョールという文字列が並べられた看板は色あせ傾き、ふち部位の錆

がこれがまた古っぽい良い味を出しているのだ。

店先には業務用クーラーボックスが1台置かれ、そのすぐ脇にはプラスチック製の特大ソフトクリームとコンビニで見かけるようなガラス製の小型の冷蔵庫。ソフトクリームと書かれたのれんに、また店主が描いたであろう木の看板が立てかけられている。看板には名物であるソフトクリームが描かれ『かいさー!』……恐らく買っていけとの方言交じりの文字が描かれている。

店内には奥に茶色の戸棚があつて、そこには駄菓子がいっぱい並べられている。天井にはくじ引きや、お湯で貼り付ける『いれずみシル』、今はもう製造が製造終了してしまつたはずの『ようかい／おぼけむり』（対魔忍世界では『ようまけむり』という名称になっている）などもあり本当に「昔ながらの駄菓子屋」という光景だつた。

「……………」

こうして改めて稲毛屋を眺めていると鹿之助くん達と来た時とは異なり、釘貫わ神葬たの中のノスタルジーが刺激される。ここに来ると懐かしい気分と同時に鼻の奥がツーンとして、うるつと涙腺が緩む。

前世ではゲームセンターや喫茶店の繁栄と共にこのような建物は衰退傾向にあり、バブル崩壊後のリーマンショックにおける不景気や中国の武漢より発生した感染症、戦争、時には神話生物やカルティストの手によつて次々に倒産していった。かつて、釘貫 神葬が生きていたころの駄菓子屋ももう潰れてしまつただろう。

「おぼちゃん！ ソフトアイスクリームーっー!」

「あいよ」

到着した矢先に、鹿子ちゃんが真つ先に稲毛屋の名物であるソフトクリームを頼む声が響く。

「はあ……………」

「? ため息なんかついてどうしたの?」

「…………大したことではないですよ。鹿之助くん達に連れられて、稲毛屋には何度か足を運んではいるのですが…………実際にこうしてまじまじと見つめるのは初めてでして、ちよつと幼い頃を思い出してしまつただけです」



「あ、日葵ちゃんは転校生でしたもんね。懐かしさを感じたのですか？」

「ええ。あんな穏やかな日常もあったな……と」

「日葵ちゃんの穏やかな日常!? なにそれー?! ちよつと気になっちゃうかも! ぜひ聞いてみたいな!」

「子供の時の些細な思い出ですよ。残念ですが、話を膨らませられるほどの思い出はないです」

脳内で『ひぐらしのなく頃に』のエンディングテーマである『why, or why not』が流れ、半分魂が抜けてしまったところで、陽葵ちゃんは興味深そうな顔で。心寧ちゃんは心配そうな顔で5差路の中央で立ち尽くす私の元へ寄ってきてくれた。

しかし前世での記憶ゆえに堂々と表立って話せる話題でもなかったため、話題に喰いついた陽葵ちゃんの深堀を拒否する形で稲毛屋店内へと進む。

「……」

ノスタルジーに浸った私ではあるが、この稲毛屋には違和感も抱いていた。

これは五車学園の生徒に限った話（と言っても、対魔忍世界では五車学園のしか私は知らないわけだが）となってしまおうが……。

放課後、そつと五車学園の他の生徒の会話に耳を傾けると話題が偏っており、大体はこの稲毛屋か、Y i k a z e Xと呼ばれる実況者についてを話している。

他にジャスコ……サテイ……もとい、イオンモールのような大型商業施設が五車町に存在せず、そういった建物はまえさき市に限られていることも1つの要因だと考えられるもの……。それにしても『Q. 憩いの場と言えば?』『ピンポン!』『A. 稲毛屋!』と二つ返事で返されるような場所がこんなに寂れた駄菓子屋というのも何か変だ。

早押しクイズのCMで有名な越後製華じゃないんだぞ?」

一応、五車町には絶滅危惧種の商店街やニュータウン(笑)クソしょぼホームセンター(嘲) 五車店など稲毛屋以外にも娯楽施設が……。

……娯楽施設は、まあ。一応ないこともない。

でもオススメの甘味処については、10人に聞いて9人が『稲毛屋』推しなのは、ちよつと私の探索者としての好奇心を刺激して来るものがあった。これが、きな粉棒のあたりが沢山出るとか……くじ引きの景品が豪勢で興味をかなり引くものとかだったら、まだわかる。

だけど……。その五車学園の生徒、それも初等部から高等部の全学生達を魅了しているのが『ソフトアイスクリーム』と『白玉あんみつ』、2つのメニューだけ、つてのはね？ 推すにしてもインパクトが弱すぎるんじゃないかと思う。

裏メニューとして、まえさき市のフードコート付近にあったパフェが出るのかならまだわかる。もちろん、私が知らないだけという可能性もあるだろう。しかし、あのまえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんが知らないのだ。その点を考慮すると存在しない可能性が高い。

「フフフッ♪ ここのソフトクリームは、いつも美味しいね！ お姉ちゃん達はソフトクリーム買わないの？ すつごく美味しいよ！ 食べなきや人生をソソしているよ！」

鹿子ちゃんは一足先にベンチへ座って、ソフトクリームのクリーム部分にシャブリついていた。口の周りをサンタクローズのヒゲのように白く染めながら、笑顔のまま私達へ向けて大きく手招きをする。

「あ、ではお婆ちゃん。私も鹿子ちゃんと同じソフトアイスクリームを下さい」

「あいよ」

「お婆ちゃん！私も私も!!!ソフトアイスクリーム！」

「はいはい」

「日葵ちゃんは!?!」

「じゃあ……そこのコーラでも買いますね。稲毛さん、えっと、その冷蔵庫の瓶コーラー本とこちらの陽葵ちゃんのソフトクリームの代金込みの金額です」

「あいあい」

「あと、『ようまけむり』と『いれずみシール』もそれぞれ数枚……5

枚ずつ、買います」

そんな鹿子ちゃんに釣られて心寧ちゃん陽葵ちゃんも稲毛屋に近寄って、鹿子ちゃんと同じものを注文していた。

私と言えば元々、陽葵ちゃんのア이스クリームは元々奢る約束をしていたため、ガラス製の冷蔵庫からコーラ瓶を一本抜き取り、天井から掛けられたシールを手に取ると陽葵ちゃんのソフトクリームの代金と共に支払う。

それを稲毛屋の店主は愛想のよい親近感の湧く様子になっこりとした笑顔で受け取ってお釣りを手渡してくれた。

キュポン。……………シユワシユワシユワ――

「ムシャムシャ」

「あーむ♪」

「ぺろぺろ……………」

3人は軒の出下のベンチに座る。私は彼女達の正面に立って、美味しそうにソフトクリームを並んで食べる姿をコーラ瓶を傾け飲みながら眺めた。

食べ方こそ三種三様だが、3人ともソフトクリームをととても美味しそうな表情で食べている。

こんな光景を眺めれば眺めるほど『あの救助活動がなければこんな未来は見られなかった』という感情と、あの時こそは探索者として介入したことに関して僅かばかりの悔いが生まれたが、そんな悔いも正面の3人を眺めているうちに溶けていくのを感じた。

「そういえば……………」

ここでふと稲毛屋の店主が、奥の座敷からノロノロと出て来て口を開く。

「そっちの小さなお嬢ちゃんは初めて見る顔だねえ、五車では見たことのない子だし……………お名前は？」

「わたし？ わたしは……………あつ。そっか。はじめまして！ わたしは影本 鹿子っていいいますー！」

「影本ちゃんっていうのかい、まだ幼いのにちゃんと挨拶できてえらいねえ。こっちのお姉ちゃん達とはどういう関係なのかな？」

「大きなお屋敷のなかで会いました！ コーラを飲んでるのが青空お姉ちゃん！フライパンとか鉄の棒で楽器で音楽を奏でられるんだよ！」

「ふむふむ」

稲毛屋の店主は、ナメクジのような速度で顔を動かし私を見つめる。

既にこの店主とは顔見知りではあるが、目が合ったためコーラを飲むのを止めて軽い会釈を返す。

「アイスを大きな口で食べちゃったのが日ノ出お姉ちゃん！ 青空お姉ちゃんが好きで、すつごく元気いっぱいなの！」

「もくっ♪ 鹿子ちゃん！ そんなに褒めないですよ！ あと日葵ちゃんのごことは好きなんじゃなくて大好きなんだよ！」

「大好きなの！」

「そう！ 日葵ちゃん大好き！」

「大好き！」

「大好き！」

「大好き！」

「大好き！ 大好き！」

「ゴブフツ!!!」

陽葵ちゃんのラブコールはいつものことだと気にしないように澄ました顔で振る舞ってはいたものの……。突然のラブコールにコーラを吹き出し、噎せたコーラが鼻から滴り落ちる。

「……大丈夫ですか？」

「だ、だいじょうぶ……。だいじょつ……。ぶ……。ゴホツゴホツ!!!」

「それで、いま青空お姉ちゃんにハンカチを差し出したのが、心寧お姉ちゃん！ アイスはバニラ味が大好きで私とおんなじ！」

「そうかい、そうかい」

「ゴーツホツ!!! ゴホゴホツ！」

激しく噎せる私を他所に紹介は続いていき、その間 私は心寧ちゃんに背中を摩られながら落ち着きを取り戻そうとしていた。

2人そろって大声で「大好き」コールは想定外だったんよ。

もう半分以上残ったコーラを飲み込んだ瞬間に鼻から息を吸ってちやつて、コーラが気管に入っちゃったよね。

そういえば、稲毛屋に来るたびに碌な目に遭ってないな……。

初めて稲毛屋に訪れたときは、蛇子ちゃんのおごりでアイスを食べようとして……そのお金が転がって排水溝に落ちちやうし。今回は突然の大好きラブコールでコーラを噎せるし。やっぱり、ついてない。

しかし、これは仕方のないことでもある。〈幸運〉ロールは『新クトウルフ神話TRPG』95頁記載「選択ルール：幸運を消費する」で〈幸運〉を用いて自身の運気を上げることができないと裁定されている。

この不運は元より定められている結果なのだから甘んじて受け入れるほかないのだ。

「んんっ……」

「落ち着きましたか？」

「なんとか……えっと、ハンカチは洗濯して後日返却しますね……」

「別に私の家で洗いますから、そこまでされなくても大丈夫ですよ」  
「……すみません」

私の唾液やらコーラやらが付着したハンカチを心寧ちゃんは嫌な顔一つすることもなく、受け取ると持参していたハンドバッグの中に入れてしまう。

その現場に近づいてくる女が1人――

「……ねえ？ 心寧ちゃ―― 駄目です」

「まだ何も言っていないけど!？」

「いまの陽葵ちゃんのことですから、このハンカチが目当てなのぐらい分かります」

「なんでそこまでわかるの!？」

「それは正直で素直な陽葵ちゃんだからですよ」

その過程で目敏い陽葵ちゃんが猫なで声で心寧ちゃんに近づき、そのハンカチを譲ってもらおうとするハプニングがあったもののその

ハプニングは心寧ちゃんの<sup>ディフェンス</sup>の防御力によつて未然に防がれた。  
G o o d J o b . 心寧ちゃん。

## Episode 9 『稲毛屋のソフトクリーム』

「そういえば。影本ちゃんを含め、他の子たちは皆うちのソフトアイスクリームを食べたけど、あんたは食べないんかい？」

陽葵ちゃんを甘やかさず最低ラインは守ってくれる心寧ちゃんに感謝していると、今度は稲毛屋の店主は私に声をかけてきた。

その顔は鹿子ちゃんの時と同じで、一切の悪意や敵意を感じる事がなく、好意さえも抱く様な朗らかな笑顔だ。

「え？ あ、私ですか？」

「そうだよお。まあ、名乗らずとも私はあんたのことは知っているし、初日以降もあのふうまの坊ちゃんをつるんでいるということには悪い子じゃないんだろうがね。ああ、噂もかねがね聞いているよ。なんて言ったって、あんたはいろんな意味で『有名人』だからねえ」

「は、はは……いろんな意味で有名人、ですか……。噂についてはお手柔らかな対応でお願いしたいところです」

「ま。ま。ま。その噂も悪いものばかりじゃないしね。……それで、アイスは食べていかんのかい？ ほれ。五車に来てから、まだ食べたことがないだろう？ こう言っては何だけど、稲毛屋のソフトアイスクリームは美味しいよ。高級アイスにも劣らない……。もう、ほっぺたが落ちてしまうほどにね」

「あー……。どうしましょ……」

稲毛屋の店主によるソフトアイスクリーム推しに、片目を瞑りながら後頭部を搔いて悩む私。

正直なところ、鹿之助くんも蛇子ちゃんも『美味しい美味しい』と言いながら食べ、鹿之助くんが密かに教えてくれたふうま君の夢の1つ『クラスメイト全員に稲毛屋のアイスクリームを奢る』とまで言わしめる稲毛屋のソフトアイスクリームにどんな味がするのか興味はある。

現に鹿子ちゃん、陽葵ちゃん、心寧ちゃんの3人が稲毛屋隣のベンチで、アイスクリームを食べている時に少し離れた位置から眺めていた時も、とても甘そうなバニラエッセンスの匂いがプンプンと漂って

いた。

それを食べていた3人の表情も、眺めているこつちすらも一口ぐらい口にしてみたくなくなってしまふほどに幸せそうな顔ではあつたこともある。

「日葵ちゃん！ 稲毛屋のソフトアイスクリームは本ツ当に美味しいんだよ！ よかったら食べてみて欲しいな！」

「あははは……そうですね。でも……」

稲毛屋の店主に加えて、陽葵ちゃんもキラキラとその顔を輝かせて勧誘の後押しをしてくる。

しかし、私としてはポケットから財布を取り出してひっくり返し、片手を受け皿のように広げて現在の所持金をこの場に居る誰にでも分かるように見せつける。

財布の小銭入れから出てきた硬貨は、ソフトアイスクリームを購入するには明らかに足りない100円未満の硬貨だった。

この様子に陽葵ちゃんは『ああん……それならしょうがないよね』という残念そうな顔をする。稲毛屋の店主も、私が『お金が足りない』ので今回は止めておきます』という趣旨が伝わったのか、眉を下げて店内へと戻って行った。

申し訳ないが……前回の洋館探索で出費が 約30万円の支出 “かさんだ” ほか

にも最近の株取引がうまく行かず大損を出したばかりでカツカツなのだ。そしてこれは青空 日葵の母親には内緒の案件だが、既<sup>生</sup>に<sup>活</sup>手出ししては<sup>費</sup>ダメな<sup>一</sup>お<sup>部</sup>金を株にぶち込ませてもらっている。

そう。倍プツシユで、大損を取り戻すのだ。

なあと私の〈経理〉情報に依れば、この大損は即取り戻せる予定だ。今回の投資先は最近ノリに乗りまくっている米連に本拠地を構えている『ノマド』という株式会社、それと『アーカムバイオ社』という株式会社だ。経営情報なども確認させてもらったが今後もこの企業は伸びる気しかない。そうとう経営者がやり手なのだろう。後者の企業に至ってはなんかもう、会社名から魅力しか感じない。だからこそ、今月はあまり余計な出費は抑えておきたいことも絡んでいる。



……ちなみにコーラは購入した。したけど。あれはあくまでも陽葵ちゃんや心寧ちゃんに余計な気遣いをさせないためだ。彼女達が美味しそうにアイスクリームを食べて居るのに、私だけが指をくわえてそんな光景を眺めていたら……そりゃ、ねえ？ 気にするなっの方が無理な話よ。

「それじゃあね、今回は特別だよ」  
「え？」

話も丸く収まった所で、瓶に残ったコーラを飲み切る。

他の3人も、残すは心寧ちゃんがコーン部分を食えば食べ終わるというところで、先ほど店内へと消えていった稲毛屋の店主がソフトアイスクリームを片手に店先に出てきた。

「いつも噂話でこっちは楽しませてもらっているからね。これはサービスだよ。是非とも食べていきな」

「えっ。……でも代金を支払ってませんし……稲毛屋さんも商売なのでですからこれは頂けません」

「いいの。いいの。さっきも言ったろ？ これはサービスだつて。子供が大人の経営の気遣いなんかするんじゃないよ。お代なんかいいから受け取りな、ほら」

「あ……ありがとうございます」

「いいな——」

「いいな——」

差し出されるソフトクリームに、両手を胸元で横に振り頂けないと首を振ったものの最終的には稲毛屋の店主に押し負けてしまい左手にソフトクリームを握らされる。

その光景を見た陽葵ちゃんと鹿子ちゃんがうらやましそうな声を上げた。

「日葵ちゃん、先ほどは炎天下でコーラを飲んでましたが、陽葵ちゃんと鹿子ちゃんが退いたのでこっちの日陰で涼みながら食べると更に美味しくなりますよ」

「そうなんですか？」

「日向と日陰じゃ温度差がありますからね、ほらどうぞ」

「それじゃあ……」

心寧ちゃんに促されるまま陽葵ちゃんの退いたベンチに座り、手渡されたアイスクリームを改めて見つめる。

……稲毛屋のソフトアイスクリームは、これまでに私が見てきたどのソフトクリームよりも完璧な形をしていた。まさにプラスチック製のシンプルなコーンの上に鏡餅のような丸みを帯びた極太のクリームが3段になって乗っている。

——まさに見本そのままのソフトアイスクリームの外見をしていた。

息を吸い込むたびに、今ゼロ距離に存在しているバニラエッセンスの香りが、鼻孔の奥。喉を通って肺の奥に吸収されて行くのがわかる。

先ほど、腹持ちの良い甘味料と糖分が多く含まれた炭酸飲料のコーラを飲んだにも関わらず、匂いを嗅いでいるうちにこのフワフワのクリーム部分を一口で頬張ったらどんなに美味しいだろうかという思考が頭の中を錯綜する。

また肺に取り込んだのと同時に、口腔内に存在する唾液線からダパダパと唾液があふれ出して、食べたこともないはずなのに直感でこれは美味しい食べ物だと私の脳が認知させていた。

みんなが見守る中、自然と口が開いていき——誰かに盗られてしまう前に、自分の所有物だと証明するために、ひとくち目を……。

「……………」

「? 日葵ちゃん? どうかしたんですか?」

——……………待て。何かおかしくないか?

「……………」

「ひまりちゃん? アイスクリーム溶けちゃうよー? つて、う

わっ！　アイス、溶けてる！もう溶けてるよ！日葵ちゃん!!!」

盗られる???

誰に  
?????

「ちよつとだけ……。ンフツ♪　あま〜い！」

「駄目ですよ。鹿子ちゃん、そんな食べ方をしては——」

「えー？　でも、勿体ないし……」

「そうだよ！　鹿子ちゃん！　これは日葵ちゃんのアイスなんだから！　勝手に食べちゃ駄目！」

「はーい……」

「いえ。あの、私が言いたいのは溶けて地面に滴ったアイスのしずくを指で舐めとる行為のほうですからね？」

陽葵ちゃん？

それとも、心寧ちゃん？

あるいは鹿子ちゃんに？

顔の角度は変えずに視点を目まぐるしく動かしてその対象を探す。

でもこれは私がサービスで貰ったもの。例え誰かに盗られたとしても懐は痛むことなんかない。

第一、盗られるなんてことはまずありえない話だ。例え盗られたとして、私の出費ではないのだ。だからどこも痛むことも損失を被ることもないはずなのだ。

——では、この異常にこみ上げてくる独占欲は何だ？

そもそもの話、私はこのソフトクリームを食べたことがない。食べたことがないのにも関わらず、脳はこのソフトクリームを “ 美味しいもの ” だと認知して副交感神経の反応が引き出されている。

そして五車学園の生徒に娯楽施設について尋ねた時、10人に聞いて9人が『稲毛屋』推しな事についても……どうも今の私の症状と無関係だとは思えない。

「……………」

「えーつと……じゃあ、青空お姉ちゃん？ もしかして、アイス苦手なの？ 鹿子が食べてあげよっか？」

「あつー待って！ずるい！ずるい！ 日葵ちゃん！ 私も食べたい！ 日葵ちゃんのアイス！ 私も食べたい!!!」

ふと詰め寄ってくる陽葵ちゃんと鹿子ちゃんの声に反応しながら、彼女の背後にいる稲毛屋の店主を横目で確認する。

彼女は——先ほどからアイスを受け取った私をずっと見ているような気がする。いや、気のせいかもしれない。彼女の視点は別段、私へと向けられてはいない。

でも今の彼女の行動は私に妙な引つ掛かりを生み出している。彼女は、ホウキとチリトリを片手に軒の出の先に出て、アスファルトの地面に落ちている幾ばくも無いゴミを拾い上げていた。私がちやんと食べたか見届けるまで店内には戻らないつもりなのだろうか？

いや、そんなわけではない。そんなことはあるはずはない。この思考は前世での知識と余計な経験のせいで猜疑心が働き過ぎているだけだ。

ここは鹿之助くんや蛇子ちゃん、陽葵ちゃんだつて馴染みの駄菓子屋で私も何度か飲食を行っている店だぞ？ そうだ。きつと私の考え過ぎに違いない。

いや、でも、しかし——

Episode 100 『信頼度を50アップさせるアイテム』

「ううっ……」

「!? 日葵ちゃん!? どうしたの!? 急かされるのそんなに嫌だった!?」

「……!」

「あーあ、青空お姉ちゃん泣いちゃったー。日ノ出お姉ちゃんが泣かせたー。いーけないんだ、いけないんだ。せーんせに言っちゃお♪」  
「えっ!? 私のせい?! わわわっ! ごめんね!? ごめんね日葵ちゃん!!! まさか、日葵ちゃんがアイスは半分溶けた状態で食べるのが好きだったなんて思わなくて! あっ! そっか! 日葵ちゃんはバリネコだから、ふにゃふにゃのアイスよりもカチカチの——」  
「ううう……ぐずっ……ひつく…………」

「先ほど日葵ちゃんが噎せ込んだ時に使ったハンカチですけど、ひとまずこれを使ってください。陽葵ちゃんは静かにしておいた方が良いでしょう。日葵ちゃんが泣き出しちゃったのは陽葵ちゃんのせいかもしれませんけど、今の発言内容の続きをその大声で叫んだら今度こそ “本当に” 日葵ちゃんから嫌われますからね」

「はい! 黙るね! ごめん!!!」

「……本当は転校前の懐かしさを思い出しちゃったんですよ。無理もないですよ。日葵ちゃんは慣れ親しんだ地元を離れて、引越してきたんですから……楽しい思い出が蘇っちゃったんですよ?」

溶けるアイスを片手に肩を震わせ、うっうっと涙をボロボロとこぼす私にバタバタと周囲が賑やかになる。陽葵ちゃんはこれ以上に無いぐらいにパニック気味な動作をしながら要らんことを口走っては手足をワタワタさせているし、そんな私を見て鹿子ちゃんは陽葵ちゃんを茶化すし、心寧ちゃんはその時、洋館で私が心寧ちゃんの腰を抱き寄せたときのようになんか今度は心寧ちゃんが私の頭を抱き寄せてヨシ

ヨシと頭を撫でてくれた。

どうやら、あの洋館事件で泣かなかった私が、今はアイス片手に号泣している姿はそれなりに彼女達にとつてはインパクトの強いものだったらしい。

ま、そりやそうだ。足がグシャグシャになつても自分を自己犠牲に最後まで脱出を諦めなかった奴が、こんな些細な事で泣き出したら動揺だつてするだろう。

「違うんです……違うんです……」

「では、どうしましたか？ 大丈夫です。もし日葵ちゃんが泣いている理由が何か変なものでも、ここには笑う人なんかいませんよ。居たら、きつと陽葵ちゃんがその日葵ちゃんのことを笑った人をボコボコにしてくれますから」

「うん！ そうだよ！ 日葵ちゃんのことをバカにする人が居たら、バリタチの私がボコボコにしちゃうからね！」

「じゃあ………実は私………」

「私……？」

自信たつぷりの陽葵ちゃんに、そつとこちらを覗き込んでくる心寧ちゃん。

「こちらは神妙な表情を作り、一呼吸を置いて。

「奥歯が……知覚過敏、なんです………！」

私の言葉に、心寧ちゃんの脳裏へ電流走ったかのような顔をする。

——速水に電流 走る—— $\wedge$  V ——

「？」

「ちかく………かびん？」

陽葵ちゃんは知覚過敏を知らないのかキョトンとした顔で首を傾げ、鹿子ちゃんもまた陽葵ちゃんが傾けた反対の方向に首を傾げていた。

「だから………だから………っ！ こんなにも美味しそうなのに食べられなくて………！ でも稲毛屋の店主さんに貰った手前、食べなきゃいけないけど食べられないことに申し訳なくて………どうしようっていう

感情の板挟みにされて……………っ!」

「……………そう……………なんですね?」

「そうなんですツ!!」(食い気味)

「ねえねえ、心寧お姉ちゃん。　ちかくかびん”　ってなあに?」

「知覚過敏というのは、特にむし歯や歯の神経に腫れが見られないのに冷たい飲食物、甘いもの、風にあたった時などに歯に感じる痛みのことです。聞いたことがあります、虫歯をドリルで削った時のような響く痛みだとか……………」

「うわ……………よくわかんないけど、痛そう……………」

「痛いよ……………私も鹿子ちゃんとおんなじで　ちかくかびん”　はよくわかんないけど、きつと。間違いなく、痛いやつだよ……………。だって、歯だもん……………」

「うつ……………うつ……………」

しくしくと心寧ちゃんの膝枕で泣いている私に、鹿子ちゃんによる疑問の浮上と心寧ちゃんの解説が入る。

そう。知覚過敏は冷たいものの他にも、過度に甘いものもダメなのだ。これで万が一稲毛屋の店主からソフトアイスクリームがダメなら『白玉あんみつ』でも……………と別の商品をサービスとして渡される可能性も予め潰しておくことができるだろう。我ながら完璧な作戦である。

冷たいコーラは飲んでしまったが、ちゃんと舌で奥歯ガードは可能なので私の発言に矛盾はないはずだ。

このアイスクリームの譲渡が、本当にあの顔通りの善意から渡されるものならば私の行為は最低だが、これまでの生理反応や情報からどうも何か裏があるような気がしてならないのだ。

だが……………知らぬが仏、言わぬが花なんて言葉がある様に、誰にも私の内心は見透かせないだろう。思うだけなら自由な発想だ。

「えーっと……………それじゃあ、そのソフトアイスクリーム……………私が食べてあげよっか?」

「陽葵ちゃん……………」

「私ならちかくかびん?もないし、稲毛屋のソフトアイスクリームを

もう一個食べられるなんて、こんな幸せなことはないよ!」

陽葵ちゃんはドンツ!ぽよん!と効果音のなる胸板を心強く叩き、その眼の瞳孔を極端に小さくさせながらキラキラ、口からはよだれをダラダラと……身体は正直な反応を見せながら、私の左手にあるアイスクリームを震える手で取ってくれた。

正直、こんな何か裏のありそうなソフトアイスクリームを陽葵ちゃんに食べさせることは避けたいが……あの様子では手遅れに近いものを感じ取る。

——麻薬中毒者に見られる一種の症状だ。

「……………」

「なんでそんなジト目でこっちを見るの!？」

「ジト目の元々こういう顔ですよ」

「嘘だよ! 日葵ちゃんの普段のジト目より0.5mm瞼が閉じてたもん! 今のは真正正銘のジト目だったよ!？」

「そんなことないですよー?」

「そんなことあるよ!!」

「そんなことないですつたら。……でも代わりに食べてくれるなら……お願ひしたいところではあります。このまま溶かしちゃうのは……アレなので」

「わかった! いったただつきまーす!」

私の言葉に、陽葵ちゃんは私からアイスクリームを受け取ることもなく私の手を一緒に丸呑みにするかのような勢いでソフトアイスクリームを頬張る。今の一口で、稲毛屋のソフトアイスクリームの1/2が消失してしまった。

危うく手まで持って行かれるかと思ってしまうような……そんな一口だった。

「あー! ずるーい! 鹿子も食べたかったー!」

「あ、ひゃあ、ひはほはんひほひははふんはへへふへ」

「あ、じゃあ、鹿子ちゃんには下半分あげるね」

「わーい! やったー!」

「うふふっ! おいひいねっ!」

「うふふっ! 美味しいね!」

「うん!」



そんな今の一口に、鹿子ちゃんも続く。私が返事を返すよりも先に、口の中と口の周りをクリームだらけにした陽葵ちゃんが許可を下し、私の手から稲毛屋のソフトアイスクリームの2/2部分に当たるコーンとその中のクリーム部分を手に取って食べ始める。

残されたのは溶けた稲毛屋のソフトアイスクリームまみれになった左手だった。

「心寧ちゃん、ハンカチ貸して頂いてありがとうございました。すみません、大人げなく泣いてしまっただけです」

「気にしないでください。私だって洋館で日葵ちゃんにいっぱい慰めて貰いましたから。お互い様ですよ」

「そういつて頂けるとありがたいです」

元気いっぱい組が、私に渡されたアイスを頬張ってはしゃいでいる間に、上半身を起こして少しばかり涙で濡らしたハンカチを心寧ちゃんに返却する。

そんな私に心寧ちゃんは優しく聖母マリア像のような微笑を浮かべると、頭を撫でるのを止めて元気付けるように肩をポンポンと叩き、再びハンカチをポケットへとしまう。

「ふへっ!? ゴックン! 今、心寧ちゃん?! 日葵ちゃんに『いっぱい慰めて貰った』って言った!?!」

私と心寧ちゃんがそんなやりとりをしていると、鹿子ちゃんと2人そろって上半身をフラワーロックのように左右に揺らし喜びを全身で表現していた陽葵ちゃんが、目の色と血相を変えながらこちらを見た。更にベンチへと座っている私達2人を割って入る様に勢いよく突っ込んで、鬼気迫る勢いで首をぐるぐるんと犬が水滴を振り散らすような動きで心寧ちゃんに問いかける。

「おや。おやおやおや。」

「なんだか、陽葵ちゃんの雲行きが怪しくなってきましたね。」

「……………え? い、言いました……………が?」

「ずっーい!!! 私は日葵ちゃんを『いっぱい慰めた』ことがあ  
るけど、『いっぱい慰められた』ことなんかないの!?!」

「え? えつと。え?」

「やっぱり心寧ちゃんも日葵が大好きなんだ！ふうまくんなんかよりも、やっぱり日葵ちゃんが大好きだったんだー！あゝーっ！こいつら、うまびよいしたんだ!!」

『うまびよい言うな』と内心思いつつも、陽葵ちゃんが釘貫神葬の時代。半世紀前のネタを知っていることに関して違和感を覚え首を傾げるが、陽葵ちゃん私のそんな様子に気を止める様子もなく私達二人の間に割り込んだままで、そのままザメザメと泣き始めてしまう。大降水である。

想定外の陽葵ちゃんの食いつきと泣き出してしまう様子に困惑する心寧ちゃん。

……陽葵ちゃんが何故か半世紀前のネタを知っていることは一旦置いて。もうね。なんかね。この光景を眺めている第三者的な意見としては、言葉の意味合い事故を引き起こしているのはわかった。

確かに私は心寧ちゃんを洋館の地下で『慰めた』。

あの時の光景を思い返すと、真つ暗で何も見えなかつたが……お互いに全裸で抱き合っていたこともあるし、客観的な視点ではある種の『慰め』のように見えるかもしれない。しかし、私の行った『慰め』は、陽葵ちゃんにも洋館地上部で行った相手を元気づける『慰め』であり、決してエッチなことはしていない。エッチな『慰め』ではない。それでも、えっちなシチュエーションではあったのは認めるが。

「う、うまびよい……？あの、陽葵ちゃん？うまびよいとは何のことかわからないですけど……。陽葵ちゃんも洋館でいっぱい日葵ちゃんに慰められましたよね???」

「違うもん！違うもん!!!!そんな言葉で誤魔化したってもう遅いもん!!!あゝーっ!!!交尾うまびよいいいいい!!!」

「ひ、陽葵ちゃん……」

「心寧ちゃん……」

「……日葵ちゃん?」

うん。私の推測は的を射ている。これは慰め衝突事故を引き起こ

している。間違いない。

だからこそ号泣する陽葵ちゃんを慰めようとする心寧ちゃんに対して、今度は私が心寧ちゃんの肩に手を置く。それから目の前のベンチにその顔面を突っ伏した陽葵ちゃんに視線を送り、まるで医者が末期患者を相手するかのようになく首を横に振って『私に任せろ』とハンドサインを送ってから……。靴底と靴裏から消臭兼公衆電話用の100円玉硬貨と緊急時の1万円札を取り出し――

「もう！心寧ちゃんとは絶――」

「陽葵ちゃん」

「なに?! 日葵ちゃん!?!」

「はい、稲毛屋のアイス」

「……」

「……………」

「……………」

私の呼び声には即反応して振り向く陽葵ちゃんへ、追加の稲毛屋のソフトアイスクリームを差し出すのだった。

ジュラシックパークでアラン・グラント博士が、ティラノサウルス・レックスの注意を子供の乗った自動車から発煙筒に向けさせた時のような、腕を左右に振る動きをする。

陽葵ちゃんはすっかり泣き止んでは、追加した稲毛屋のソフトアイスクリームに夢中な様子だった。……また、口が半開きになってよだれが零れているぞ。

現金な奴め。

「はい。あーん」

「えっ?!」

「あーん?」

「えっ ♥ えっ ♥ ♥ ♥!?!」

「……要らないの? 心寧ちゃ――」

「食べる！たべろう ♥ ♥ ♥!」

さらに彼女に畳みかけるように、ソフトアイスクリームを差し出す。

この時の私はあろうことか、聞き分けの悪い動物にエサを与える動物園の飼育員のような表情をしてしまったが、陽葵ちゃんはそんなことに気づいた様子は微塵もなく……。仕草として、サプライズに晒された乙女のように両手を口元に当てて心底驚愕する。

なかなか食いつかない彼女に対して目標を心寧ちゃんに切り替えた時、私の手をマイクを両手で握る様に包み込むとウルウルとした目の上目遣いをしたまま、犬っころのように跪いたまましゃぶり出した。

ああ——何かに目覚めそう。いまの視点を対魔忍世界流の表現で例えるなら、*脅迫され涙目の女の子にフェラチオされる男の視点*。表現として妥当だろうか。

こっちはこっちで加虐心が煽られて濡れる。

おかげ様で、今日の私の下半身は大洪水だ。すごい。

「はあ……」チラリ

「……………」ホッ

チロチロとした舌使いでソフトアイスクリームを舐める陽葵ちゃんから、少し目を離して溜息とともに心寧ちゃんにアイコンタクトを送る。心寧ちゃんは、陽葵ちゃんが落ち着いた様子を見てホッと一息つけたようだった。

「！」

しかし今の余計な行為が、ちろちろとしゃぶシャブする陽葵ちゃんの心にハッパをかけたようで——

……………

……

…

五車町の夜は早い。

時季は7月とはいえ、都心部では18時頃に日が沈むのかもしれないが、この五車町では17時には山の向こう側へと太陽が沈んでしま

う。いくら4人の集団とはいえ、女性のグループが月明かりだけが頼りとなる五車の田舎道を歩くのは少々危険だ。私がいる限り3人のこ

とはできる限り守るが、不審者が複数名いた場合には完璧な対処はしかねるだろう。

まだ現在の時刻は16時ではあるが、ここで稲毛屋の店主に別れを告げて私達は帰路に着く。

稲毛屋を発つ前に陽葵ちゃんの涎でベトベトになった手を稲毛屋付近の蛇口からあふれる水で手を洗う。

そんな私にピッタリと縋り寄る陽葵ちゃんの姿を、おやおやと微笑ましそうに眺める稲毛屋の店主に対していつもの本調子を取り戻しつつあるのか、私の性感帯弱を嬉々と話そうとするハプニングが発生したものの、なんとか彼女の口を塞いで阻止させた。

「ここがああの女のハウスね!」

「それでは、日葵ちゃん。また学校でお会いしましょう」

「ええ、ではまた学校で」

無事に鹿子ちゃんを施設に送り届けた後、私は心寧ちゃんと陽葵ちゃんに見送られて自宅に帰ってきたのだった。

「日葵ちゃん、日葵ちゃん」

「はい?」

「ここが、日葵あちゃんのハウスね…!」

「……あいあい」

「ええ?! 日葵ちゃん、私に対するツツコミが雑じゃない!? それは新妻に対する態度じゃないよね!? 日葵ちゃん?!」

「はいはい、陽葵ちゃん帰りますよー」

「あー! 心寧ちゃん引つ張らないで! 引つ張らないで! ひ、ひまりちゃん! またねー!」

「あいよー」

陽葵ちゃんに私の自宅が割れてしまったのは些細な問題にしか過ぎない……と思いたい。

デレツデレデレデレ♪ デレツデレ♪ デレツ♪

2階にある自室に入ると、更にどこから流れてくるリコリス・リコイルのED曲花の塔。どうやら部屋の窓が開いていてどうやらそこから流れているようだった。

そつと窓に近づいて外を眺めてみれば、陽葵ちゃんがスマホを掲げながらこちらに手を振り、心寧ちゃんによって未だ引きずられている光景が目に残る。

今度は、リコリス・リコイル ED 万能説ネタか……。

アレにも確か陽葵ちゃんの動きとそっくりなフラワーロックが出てきたような……？

………まあ……。でも、なんだかんだで楽しい充実した一日だった。

企画 『Episode100 話投稿記念：設定資料集2』

Episode99—IF 『対魔忍RPG プレイアブルキャラ化(2)』

【ダブルひまり】

ひので 日ノ出

ひまり 陽葵&青空

ひまり 日葵

属性： 自然

レアリティ：SR

HP：1184 (最大5384)

SP：100 (最大300)

ATK：214 (最大989)

DEF：199 (最大1100)

SPD：60

キャラクターアイコン：

お揃いの同じオレンジ色のジャケットを羽織った2人が並んでいる。

Gif画像では、時々先走ろうとする陽葵の肩を日葵が掴んで静止させる。

攻撃モーション：

青空 日葵が〈改造した釘打ち機〉を射出し、その釘弾に日ノ出

陽葵が太陽光を当てて変則的に敵を焼く。

死亡モーション：

目をぐるぐるさせて仰向けに倒れる陽葵に、日葵が庇うように覆いかぶさり決死の顔で倒れ込む。

移動モーション：

日葵の背中に陽葵が飛び乗り、陽葵が進行方向を指さしながら日葵が走って移動する。

プロフィール：

対魔忍高等部1年生の日ノ出 陽葵と探索者である釘貫 神葬こ

と青空 日葵。

片や対魔忍の任務で、片や個人的な観光で東京キングダムへ訪れていた。

五車学園で面識のある2人は、偶然にも東京キングダムの裏路地でばったり遭遇する。片や任務の傍ら東京キングダムの観光案内役として行動を共にし、片や観光の傍ら単独行動で任務をする危険性から、と同行をすることになる。

性格や戦闘スタイルも真反対の2人だが、なんだかんだで好んで2人であることが多く、ふたりとも「ひまり」という名前であることや陰と陽の関係、ボケとツツコミが一体化しているいいコンビということとで【ダブルひまり】という愛称で五車学園では親しまれている。

補足：セリフ発言者

・日ノ出陽葵『』

・青空 日葵「」

取得セリフ：

『やつほー！ダブルひまり！ここに参上！ 1+1は2じゃないよ！私達は1+1で200！ 10倍だよ！10倍！』「……ねえ、陽葵ちゃん。それは私のツツコミ待ちだったりする？それともボケ倒した方がいいやつ？」

待機セリフ：

『日葵ちゃん！この東京キングダムにはね、ペルソナ”ってお店があるんだけど、そこは実は情報屋なんだよ！』「ふむふむ……そういうえば、ペルソナ5の続きって出たの『ペルソナアアアアア！！』……陽葵ちゃん、急に叫ばないでもって』『スンツ』「うわあ！急に落ち着くなア！」

『ねえねえ！次の任務は潜入だけどこんな作戦どうかかな!?【高級娼館に奴隷娼婦に変装して諜報mission!】』「絶対ダメ。ガチの奴隷娼婦になる流れだから。なった奴、知ってるから！絶対にダメ!!!」

『必殺技を考えたんだけど、いちやいちやしている私達の間を敵を挟んで圧殺とかどうかな!?』「それは多方面から怒られる奴だから！



そんな危険なムーブはやめよ!」

『悪事はそこまで悪党ども!この対魔忍、日ノ出 陽まつ——』  
「あー!あー!すみません!すみません!この子、対魔忍に憧れているだけなんです!対魔忍ではないんです!すみません!すみませ……死ねエ!カルティストども!オラア!!!」

『私、来年の五車学園入学歓迎イベントのチアガールになれるよう、いっぱい応援の練習するんだ!がんばれ♥ がんばれ♥』「それ伊藤ライフ? ちよ、あとその手の振り方はダメだつてば。ん?コーラ? おい、まさか……コラー! サラツとTMのHOT LIMITを流すな!ランカ・リーのキメポーズしながらコーラをこっちに向けるな!陽葵イツ!」

『忍法の都合上、すぐ日焼けしちゃうんだよね……私は気にしても仕方ないし、日焼けするのも好きだからいいんだけど……』「うん、陽葵ちゃん。お願いだから大人になったら日焼け止めクリームを塗りな? 絶対に後悔するから」

『日葵ちゃん!いつも日葵ちゃんは不意打ち攻撃をするけど、それは正義の対魔忍としてどうかと思うんだ!』「いや、わたし対魔忍じゃないし……。そもそも話、殺し合いは試合とは違うんだよ……。?だから——『勝てばよかろうなのだああああ!!!』」W I Y Y Y Y Y Y Y Y N N N !!!  
ビジュアルチェンジ:

『ホント、日葵ちゃんって日焼けしてなくて肌が白くて綺麗だよね』「ひゃんっ!ば、ばか!急にそのいやらしい手付きで尻を掴むな!クリッ♥♥♥♥ ま、まめも摘まむなあつ♥!」

『ねえ、知ってる?おっぱいって揉むと大きくなるんだつて!』「やあつ……♥ まつて……まつて……! 胸を揉むのと、乳首は、乳首をつまんでコリコリ潰すのは違うくない!」

『スウー……ハー……スウー……ハー♥♥♥♥ ひまりちゃん……♥ お花のおいがするう……♥ わたし、ひまりちゃんも、この体臭もだいすきい……♥』「……私のこと。そういつてくれたのは陽葵ちゃんが初めてですよ。ありがとう」

強化時：

『えへへ♪ 2人で訓練するのって楽しいね!』『ええ。非常に同感です。励みになりますね』

覚醒時：

『陽葵ですーす!』『日葵です』『2人合わせてダブルひまり!』『200倍。パワー!』『ヤーツ!』

『日葵ちゃんもこれを期に、本格的な対魔忍スーツを着用したらもっと強くなれるよ!』『い、いや。完全対魔忍スーツデビューは……ま、ま、まだ、い、いいかな……』

リーダースキル：『ダブルひまり』

自然と科学属性のATKとCRT率を特大アップ+部隊全体の炎上無効+wave開始時的敵全体に暗闇を中確率で付与。

スキル1：『Vは勝利のピースサイン!』（SP100）

自身のATKを大アップする。

スキル2：『Wは私達のダブルひまりサイン!』（SP200）

部隊全体の最大HPと最大DEFを大アップさせる。

奥義：『ミラーソーラービーム!』（SP300）

効果：

敵全体にDEF無効の攻撃をランダムで6回、中威力で与える

演出：

日葵の上に陽葵が肩車のように乗っかる。

その間に、日葵が口を動かして呪文を唱えて2人とも透明化する。

敵がキョロキョロとしたところで、敵のど真ん中で陽葵の陽遁の術である必殺技が日葵の術で強化されて（太陽の光を虫眼鏡で収束させようなもの）炸裂。

消し炭になった爆心地で、陽葵と日葵が笑顔でそれぞれピースサイン1つを並べてWを作る。

台詞：

『日葵ちゃん、行つくよー!!』『あいさ!』『組体操サくボくテくンく!』『からのく?』『合体奥義!』『ミラー』『ソーラー!』『ビーームツ!勝利のV・V・V・Victory!』

## 回想1：

対魔忍として敵に追われることになった日ノ出 陽葵と、偶然その場を目撃したこと居合わせたことで追われることになった青空 日葵。追撃を迎撃しながらも最終的にはゴミ箱内に隠れて敵をやり過ごす。日葵があらかじめ観光の為にとっておいたホテルへ、2人でチエツクインをして悪臭を落とす。

ホテルのシャワールーム内でイチヤラブ百合ツクス。

最初は日葵がモシヤモシヤとした陽葵の髪を洗うのを手伝うが、代わりばんこで日葵の体を陽葵が洗うと言い出す。最初は渋る日葵だったが、陽葵のゴリ押しに負けて身体を洗わせる。身体の前面を洗い始めたあたりで陽葵が盛り、レズセ。向かい合って首引き恋慕姿でデーパーキスしながら股ぐらを念入りに洗う。

## 回想2：

1つしかないベッドで続きをしようとする陽葵だったが、襲撃を見越してSTOPを掛ける日葵。

しかし、そんなことで探索者が対魔忍を抑えられるはずもなく……。深夜にやっぱり盛る。シックスナインからの貝合わせ。そこから事後には、温かい紅茶を飲みながら甘々アフタートーク。

その後……。案の定、明朝に襲撃があったものの日葵が事前に入りに即席のバリケードを設置し、有事に備えたの逃走ルートを確認していたこともあって悠々と窓から脱出する2人。その後、東京キングダムのカフェで朝食を取り、五車町へ帰る。

## Wiki風コメント

・あの問題児にツツコミ役をさせるとは、何者なんだ日ノ出陽葵：  
。 普段の釘貫神葬って多分単独だと手のつけられないことをやらかしたりするけど、自分のペースをかき乱す系のマイペースな相手は苦手なんだと思う。

■ おっ、つまり2人ともボケ倒し始めたらツツコミが追いつかないな！

■ 現に神葬がツツコミを諦めて、敵の中心で組体操を始めてるぞ。神葬もガツガツ行くタイプだけど、ゴリ押しには弱いっばい？

■ごり押しに弱い……対魔忍じゃないか！

■キミ、対魔忍の素質があるかもよ？

・あすか&ききらに次ぐタツグキャラがこの2人なのか……

。アスカ&キララが攻撃特化型としたら、こっちは防御に特化しつつも持久戦にもってこいなキャラの組み合わせだと思う。

■部隊の科学と自然両方を一度に強化できるのも強い。

。あすか&ききららの時は奥義後にハイタッチしていたけど、こっちは二人でピースサインを並べてWを作っているのが仲良さそうな雰囲気かひしひしと伝わってすこ

■仲が良いのと信頼し合っているから、奥義で敵陣の中央で組体を始めちゃうんだろうな

■ツツコミ不在の恐怖

■陽遁の術を使用すると気絶するのに敵陣の中央で陽遁の術を使う対魔忍がいるらしいっすよ

■最初の日ノ出陽葵はその気絶言及してただけど、ダブルひまりの奥義を見る限り気絶してないのはなんで？

■気絶しても日葵ちゃんが連れて帰ってくれるから(信頼度MA

X)

■道中、敵を蹴散らすのに肉盾とか大きな棍棒に使われそう

■マイペース系のポケ役不在で神葬を1人にしてはいけない

・回想は一見の価値あり。百合ックスに至るまで丁寧に描かれている。神葬が爪はふやけさせてから切るのを推奨しているのに、陽葵がお風呂に入る前に爪を切るのも全てつながる。

。知能犯で草

■最初からやる気まんまん草

■言われて気付いた

。回想2のホットミルクより甘いアフタートークとかも良いよな。一線を越えたせいか親友の垣根を越えて、恋人になりそうな雰囲気がある

■一ω・鹿)ジー

■不倫かな？

■ 鹿ちゃんはどうなんだろうな？ 神葬が一方的な好意を抱いているだけみたいだし

■ 右手に鹿ちゃん、左手に陽葵ちゃんとかもあるかもな

■ ただし神葬はノーマルではある

■ あれじゃね？ フェネチルアミンとかオキシトシンとかのせいじゃね？

・ 恒例の部隊に鹿ちゃん混入

。 タブルひまりのステータスが下がりました

。 だからあれほど百合の間に男を挟むなど……

■ 待機ボイスは伏線だった？

【奇妙な共闘】

カリヤ&釘貫

神葬

属性： 魔性

レアリティ：SR

HP：1059（最大5624）

SP：120（最大340）

ATK：310（最大1100）

DEF：114（最大314）

SPD：65

プロフィール：

カオス・アリーナの人気戦士のスネークレディとカオス・アリーナの期待の新人青空 日葵。

その真の姿は、高位魔族カリヤと（新）クトウルフ神話TRPG世界線からの異世界転移者である釘貫 神葬。

二人の間柄は、お互いのことを『（二つ名＋）蛇子ちゃん』『ゼラトシーカーちゃん（あるいはゼラトちゃん）』と愛称で呼び合うほどの仲。

今回は、スネークレディことカリヤが裏世界の観光案内のために東京キングダムへ釘貫 神葬を呼び出した。

神葬もまた、裏社会の地位ある存在が東京キングダムを遊びつくす

案内をしてくれるという魅力に抗えず、警戒しながらも好奇心の赴くままにカリヤの誘いに乗って東京キングダムへ訪れたのだが……。  
キャラクターアイコン：

青白い魔獣の毛皮を羽織り、白のビスチェとスリットの入った紺のタイトミニスカート姿の普段着カリヤとフードを深く被りながらも動きやすいパンクファッションの釘貫神葬が少し距離を空けて立っている。

Giftではカリヤが神葬に触れようとするも、神葬は腰と腕を引いて避ける。

攻撃モーション：

釘貫 神葬が身を屈めて下段殴打を行い、上段はカリヤが蛇の覇気を使役しての攻撃を行う。

死亡モーション：

咄嗟にスネークレディを肉盾にする神葬。倒れる彼女を嘲笑うも、彼女が倒れた時にすっぽ抜けたハイヒールが脳天に命中して昏倒する。

補足：セリフ発言者

・カリヤ『』

・釘貫 神葬『』

取得セリフ：

「うっしやアッ！まえさきき市で人間風情に泣かされた高位魔族な方の蛇子ちゃん！行きますよ！」『目の前の敵よりも、まずは小生意気なゼラトシーカーちゃんから先に叩きのめして泣かせてあげようかしら？』

待機セリフ：

『今、あなた達に協力してあげるのは、ゼラトシーカーちゃんとはいつまでも敵対関係じゃなくてお友達になりたいから♪ そっちの方側にいる方が絶対に楽しそうだし♪』「ですって。言いたいことは色々ありますけど、信用はしないで利用できるだけ利用してあげてはいかがですか？……私の意向？【はあ？邪神クラスと友達関係？冗談じゃない】ですよ」

『アサギちゃん……それとゼラトシーカーちゃんだけは特別に私のことを本名のカリヤって呼んでもいいわよ♪』「カリヤ？ ナーガ種……。……ウゲツ！インド神話の英雄クリシュナに退治された、猛毒を持つナーガ族の王と同じ名前じゃないですか！やっぱ邪神かよ！」

『ゼラトちゃんったらね、つれないのよ？ 私がどんなに本名を尋ねても“青空 日葵”としか答えてくれないの』「おう。本名教えてんのに、他の仲間に不信感植え付けるのやめーや」

「へー、約15年前の蛇子ちゃんの髪の毛ってウェーブなしのストレートだったんですね」『そういうゼラトちゃんは8、90年前どんな髪型だったのかしら？ その頃も髪の毛とか束ねてそうね♪』

「カオス・アリーナの状況にリングネームとして“青空日葵”って言わせるの止めさせてくれませんか？」『別にいいじゃない♪ そのおかげでゼラトちゃんは誰からも人気の有名人よ？』「ぶっ飛ばしますよ？」『こわい♪こわい♪』

「蛇子ちゃん、蛇子ちゃん。【カ・ナマ・カー・ラジエラマ】って言うる？」『もちろん♪【カ・ナマ・カー・ラシエラミヤ……】「……ふっ」』その顔は何が言いたいのかしら〜♪？』

『ゼラトちゃんが対魔忍じゃないことなんて最初から一目瞭然よ♪ 倫理観が欠如して手段に見境がないもの♪』「あの邪神にはへ頭突きが有効だから、誰か頭を使って黙らせろ」

「ところで私のファイトマネーが未払いなんですけど」『ゼラトちゃんは私の所有物で奴隷闘士なのだからそんなものは不要でしょ？』「OK. 今宵のユニホームが決まった。私が労基署だ」

『ゼラトちゃんには “二度と” 得物制限なしのアリーナに参加させないことにしているの……』「いつやあははははあ！カオス・アリーナ頭上の特大モニターの取り付けは何処の業者がやったんですかあ？ 脆くて草。今なら私が特別価格で修理を請け負ってあげてもいいですよお♪ プークスクスー♪」

『アサギちゃんはすごくカワイイ声で鳴いてくれたけど、ゼラト

ちゃんはどんな声で鳴いてくれるのかしら……♡?』『「バッ、や、やめっ！わ、わたしに近づくなアーツ！』『ウフフっ♡♪』

『ん〜？ 何か言いたげな顔ね♪ どうかしたのかしら♪』『蛇子ちゃん、ふたなりなのに、金玉ついてないの……?』『そうだけど?』『臆病者じゃん』『ごっめーん♪ 今の上手く聞き取れなかったわ♪ もう一度。言えるものなら。言ってごらんさい?』

「蛇子ちゃんは親友のズボンちゃんみたい地球征服には興味ないの?』『今は1人の女の子を征服することに夢中だからね♪』『? 感度3000倍アサギちゃんのこと?』『……。次第にわかるわよ♪』

強化時：

『強さって、か・い・か・ん♪』『邪神にエサを与えないでください。手をつけられなくなります』

覚醒時：

『この漲る力がたまらないのよねえ♪』『邪神に供物を与えるのをヤメロオ!』

『私のお手並みご覧あれ♪』『人類は愚か』

リーダースキル：『邪神と狂信者』

・勢力戦専用スキル：

対魔忍勢力に対し部隊全体の与ダメージを中アップ+対魔忍勢力からのダメージを中軽減

・通常時スキル：

ノマド勢力の最大HPとCRT率を特大上昇

スキル1：『ファンサービス・アピール』(SP120)

自身のDEF特大アップ+最大HP中アップ+狙われやすい状態になる。

スキル2：『アクロバティック・ショー』(SP220)

部隊全体のSPを特大回復+HPを小回復+HP小回復継続

奥義：『デンプシー・ブレス・プレス』(SP340)

効果：

敵1体を高確率で毒状態と麻痺状態付与+ダメージブーストを付



与+DEFを中ダウン+超特大威力の攻撃

演出：

釘貫 神葬が身を屈めながら敵に急速接近。

デンプシーロールで敵をボコスカ殴っている間に、カリヤは神葬の真後ろから感電スタン状態で何もできない敵に対して釘貫 神葬ごと毒霧を浴びせかける。

神葬は毒霧をローリングへ回避しつつも、カリヤと黒紫色になった敵の頭上に存在する建造物に対して隠し持っていた火器で叩き落とし押しつぶそうとする。

建造物落下の衝撃で立ち昇る煙から無事に姿を現すカリヤに、神葬は険しい顔で中指を立てる。カリヤもまた神葬に対し、涼しい顔でせせら笑いながら優しく手を振る。

台詞：

「オラオラオラーツー！」 『ふふふっ♪隙だらけね♪』 「私は不死身の青空だーっ！」 『あら危ない♪』 「チツ！死にぞこないが！」 『ウフフ♪』

回想1：

米連の特殊部隊に取り押さえられる2人。

即無抵抗で地面に伏せる神葬に反して、カリヤはスネークポイズンで米連の兵士に応戦するが、ナノマシーンによって無力化され連行される。釘貫神葬の方はカリヤと共に親しげに東京キングダムを観光しているのを目撃され、有益な情報を持っていると判断され共に拉致される。

主な内容は強姦と機械姦。無力化されたカリヤは欲情した米連の兵士に強姦され、神葬は尋問のため機械姦に処される。

回想2：

回想1の続きだが、一瞬の隙をについて米連の施設から逃げ出す2人。

脱走した先で現地解散しようとするも、今度はカリヤに神葬が取っ捕まり拉致される。

主な内容はカリヤ攻めによる、焦らしプレイと寸止め地獄。オーガ

ズムの懇願強要。

Wiki風コメント

・今回はクトウルフ神話TRPG側しか知らなくても楽しめるネタが少しだけ仕込んであるわ

。共闘する相手が違うけどな

。共闘は闇乙ルートだぞ

■ 青山霊園にナパーム撃ち込みそう。

■ 共闘以外にも練り込んでいるな

・ 終始ギツスギスで笑う

。同じ対魔忍同士だってわかり合っているアスカ&きらら先輩みたい仲良くは行かないわな

・ いやじゃ、いやじゃ。待望のスネークレデイの新カードが異常者とのコンビなんていやじゃ！

。二次創作だから安心しろ

■ 4周年の五車祭で救われる可能性はある。

・ 既に2〜3回殴り合ったあとで、そこから『友達になろう』ってのは無理がありますよカリヤさん！

。スネレとしては殴り合った自覚は、最初のまえさき市のフードコートぐらいで後はお遊び感覚なのかもしれない

。スネークレデイのことだから、そもそも片手間にちよろつと遊んであげた程度の認識説

■ 片手間にちよろつと遊んであげた（エルボーでゲロ噴水、嘲笑いながら残飯を浴びせる、刺客を差し向ける、腹パンで数メートルノックバックさせる）

■ 人間はそれをちよろつと遊んでもらったとは思いません。

。結局、カオスアリーナでアサギと戦った時もお遊び半分だったしな

■ アサギと本気で殴り合ったのはZEROと対魔忍の蛇子ちゃん拉致事件時？

。高位魔族は基本長寿種だから、短命種の人間で考えるとほんの少しだけ小突きあった程度の認識はあるかもしれないな。

■長寿種は20回殴り合ってからがケンカしたことに1回カウントされる

■100回かもしれない

■または生命に瀕する程に殴り合った時とか

■人間の感覚で20回も殴り合ったらそれは絶対に相性の合わない最悪なタイプ認定なんよ

■友達同士でも3回殴り合ったら普通距離置くわ

■カワイイ（小突いて親睦を深めた感想）

。スネークレディはその人間の思考も知った上で友達希望している可能性もあるぞ！

■サデイストじゃんと思っただらもともとサデイストだったわコイツ

■女のカワイイは信用してはならない

■カワイイ（殴っても観光案内についてきちやう警戒心のゆるいアホ人間カワイイ）

。致命的に異種間コミュニケーションに失敗しているいい例かもしれない

・邪神と狂信者って、それは完璧な組み合わせではあるのに

。神葬、公式に狂信者確定

■狂信者といっても鹿ちゃん狂信者だろ

■対魔忍世界で片っ端からカルティストやら、呪文を使う魔術師を見つけてはカルティストスレイヤーやってるぐらいには狂信者

■ついでに親族もろとも根絶やしまでセット

■おっ、待てい（江戸っ子）オークも嫌っていることを忘れているぞ

・アサギ先生と肩をならべるほどって過剰評価すぎだろ。忍法すら開花してない一般人の癖に

。でもなんか今回の神葬の片手、未来ユキカゼみたいに電流帯びてない？

■もともと科学ユニットだから、少なくとも忍法ではないと思う。

。一般人じゃないから、異世界転移者の探索者だから！

■探索者を一般人カウントしてはいけない

■クトゥルフ神話TRPG世界線から見れば一般人なんだよなあ

■俺達の物差しで差し測ってはいけない（戒め）

■クトゥルフ神話TRPG世界線から見ても探索者は一般人じゃないぞ（83頁 法律の項目）

。感度3000倍も経験してないくせにな

■でも感度3000倍の存在は知ってるっぽい

。でも後にも先にも、スネに対して『玉無し』じゃんなんて言える奴は出てこなさそう

■そりやそうよ言ったら殺されるもん、聞き返すこともなく発言者を殺すもん

■失言ありきなのに生かしてること、友達になりたいのは本当なのかもな

・サラツと対魔忍側でも解析してない情報を言い当ててワロタ

。御屋形様が子供だった頃はAD2068だから現代がAD2078だとすると1998年？か1988年？

・こうしてみるとやはり探索者だなぁって思うわ

。息をするように面倒ごとに巻き込まれる

■回想でも、とぼちちりを喰らう

。邪神に目を付けられる

。邪神に愛される

■イゴ様の親戚の方かな？

。邪神を潰そうと画策する

■肝心の邪神は蚊に刺された程度の認識

■神葬って立派な名前を持ってんだから、カリヤに勝てや！

。カリヤだけでインド神話の邪神だと判断するのは探索者の嗜み

■ヘクトゥルフ神話〈技能かへ伝承（インド神話）〉ロール成功したんだらうな

・これ対魔忍側にも蛇子ちゃんいるけど、ノマドのカリヤが蛇子

ちゃん呼びなのは何を思うんだろう

。複雑な気持ちではありそう

。蛇子ちゃんと蛇子ちゃん似ているんだよなあ：髪の毛も虹彩の色も：

■神葬も同じこと言ってたぞ

■トイレの蛇子ちゃんとソープの蛇子ちゃんをそれで1回間違えたからな

■相州家自体は代々蛇化する獣遁の術の使い手で曾祖母は相当強い蛇らしいから、どこかでつながりがあるのか？

・神葬と友達になって何かいいことってある？

。現状、そこまでない

。ピンチに瀕した時は自分の命を投げうっても窮地に飛び込んでくること？

■愛が重いわ

。アルガルノーヴの書だっけ？あれが目当てなんじゃない？

■殺して奪い取った方が早いんだよなあ

。本人の意図しないとところで勝手に面倒ごとへ巻き込まれるから日常がマンネリ化はしなさそう

■それただの疫病神やんけ！

■【ダブルひまり】の時も日ノ出ちゃんのとばつちりで巻き込まれてたな

。長寿種の考えることだから真相はよくわからない

■神葬だけに？

■ ●三二一

■ ●三二一

■ けつなあな確定な

■ ●三二一

・回想は弱気のスネーククレディと強気のスネーククレディの2種類が見られる模様

。回想でもギツタギタにお互いをお互いに煽りと皮肉返ししまくってて草

。口喧嘩が五月蠅すぎて米連の兵士に猿轡を噛まされるところで笑った

——おまけ——

【ダブル蛇子<sup>へびこ</sup>】相州<sup>あいしゅう</sup> 蛇子&スネークレディ<sup>へびこ</sup>

属性：超人

レアリティ：SR

HP：1204（最大5879）

SP：160（最大360）

ATK：241（最大1289）

DEF：130（最大815）

SPD：67

キャラクターアイコン：

対魔忍スーツを纏った相州 蛇子は獣遁の術を用いて足がタコ状になっている。

スネークレディは『対魔忍アサギくカオス・アリーナ外伝』で着用したスーツを纏っている。

Giftでは、蛇子同士アイコンタクトを取っては敵に身構える。

攻撃モーション：

相州 蛇子が敵に墨を吹きかけ、スネークレディは鋭い爪先に斬撃を与える

死亡モーション：

スネークレディはうつ伏せに、相州 蛇子はその場にへたり込む  
プロフィール：

ひよんなことからエドウィン・ブラックの幹部であるフルストに拉致されてしまった相州 蛇子だったが、幸か不幸か偶然にもスネークレディの手によって買い取られることで生きたまま解剖されることや、キメラや亜人の実験材料になることを免れる。

スネークレディとしては、相州 蛇子の存在はふうまやゼラトシーカー（釘貫 神葬（青空日葵の姿））をおびき寄せる巻きエサとして、カオス・アリーナの奴隷闘士として彼女を手に入れたのだが、今日の

カオス・アリーナには既にイレギュラーが紛れ込んでその計画は破綻を迎えることになる。

偶然にもイレギュラーを静止させることで利害が一致したスネークレディと蛇子は、共にそのイレギュラーへお灸を据えるため共闘関係を築く。

補足：セリフ発言者

・スネークレディ』』

・相州 蛇子』』

取得セリフ：

「ふうまちゃん！ ふうまちゃんも日葵ちゃんに弁明して!!! 私がまえさき市でトイレに消えたのは、ふうまちゃんと2人きりになるためだったって！ 3時間もトイレに引きこもってないって！」『カオス・アリーナへようこそ♪ ふうまの坊や♪ でもあいにく相手をしている暇はないの。まずはあなたのところの活火山と核融合みたいな1人と1台を止めて、引き取ってもらうことを手伝ってもらえるかしら?』

待機セリフ：

『まさか、ふうまの坊やと会う前にあの滅らさず口の小娘共を対魔忍と共に塞ぐ日が来るなんてね』『ねえ、2人とも覚悟は当然できているよね?』

「『その絶望に満ちた顔は非常にそるけど♪ あなたの怒りはもつともよ。私も十分に理解できるわ』

『『スネークレディさん、落ち込まないで…。ね?ね? そのつ、私はスネークレディさんが日葵ちゃんに泣かされたとは思えないし…。私はスネークレディさんの言い分をしんじるから!』

「冷蔵庫ちゃんの冷凍庫には気を付けて!何か凄いレーザーが出るみたいなの!」『それはかなりふわつとした情報ねえ。人のことを心配している暇があったら、ヨダレを垂らしたデリカシーのないあなたの友人の捨て身攻撃に警戒した方が私は良いと思うけど♪』

『ねえ♪ 蛇子ちゃん、この文字列を言葉に出して読んでもらえるかしら?』「蛇子でよければ、いいですよ〜!えーつと…?…?」『カ・ナ

マ・カー・ラシエラマ?」『ふふっ♪やっぱり発音が難しいわよねえ♪』『ラシエ、ラシエ、シエ。シエ。シエ。……ジのところが難しいですね』『そっか♪音読してくれて、ありがとう♪』

『あなたにとってゼラト…… “青空日葵” ちゃんはどうな子だと思おう?』『日葵ちゃんですか?日葵ちゃんは私の友達で五車の外からやってきた一般人の女の子ですよ。私と同じ対魔忍の鹿之助ちゃんに好意を抱いてて……ちよつと変なところも多いけど、悪い子じゃないです』『ふふっ♪ そうなの♪』

リーダースキル：『ダブル蛇子』

部隊全体の魔性属性への与ダメージを中アップ+精神属性からのダメージを中軽減

スキル1：『太古の縁』(SP120)

自身に対するデバフ効果と異常状態に強くなる。

スキル2：『酒は百薬の長』(SP200)

最大HPを大アップ+HPを大回復+SPを小回復

奥義：『サーペント・スラッシュ』(SP360)

効果：

敵全体に暗闇と毒を高確率で付与+敵全体に大威力で攻撃

演出：

相州 蛇子が口から炭を敵全体に吹きかけ真っ黒になった所で、スネークレディの覇気である大蛇の波が敵全体を津波のように襲う。更にそこへ相州蛇子が忍者小太刀で斬撃を与える。

台詞：

『うふふふふ♪ 今回は相手が悪かったわね♪』『対魔忍だって魔族と共闘できるんだから!』

回想1：

あつたかもしれない世界線の話。

ローシヨンプルファイトで相手を剃り建つ梁型へ串刺しに出来れば勝ちというルールの下、取っ組み合う。まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんが敗北し、梁型に突き刺されることになる。



ふうまの坊やと神葬が到着した時には既に……NTR

「まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃん、アフターピル飲みな！持ってきたからほら！飲めエ!!」

回想2：

回想1の逆パターンで勝利する、まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃん。

まえさき市で人間風情に泣かされたえつちなお店を開いている方の蛇子ちゃんはトロールによって蹂躪されることになる。もちろん、まえさき市で人間風情に泣かされたえつちなお店を開いている方の蛇子ちゃんも不正を働こうとするが、不正用の道具が何者かによってすり替えられており脱出することができずトロールに蹂躪されることになる。

自身をこんな目に合わせた人物とはいえ、同時に自分を助けてくれた存在でもあるため最終的にはまえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんが、トロールの間を見てまえさき市で人間風情に泣かされたえつちなお店で働いている方の蛇子ちゃんを助ける。

「まえさき市で人間風情に泣かされた高位魔族な方の蛇子ちゃん、ネリコルト（切れ痔の座薬）……いる？」

# Episode 100—IF 『対魔忍RPG プレ イアブルキャラ化(3)』

【ステイール・ロータス教団きょうだん 教祖きょうそ】釘貫くぎぬき 神葬しんそう  
最終覚醒時：

レアリテイ：SR

属性：精神

HP：1450（最大5872）

SP：160（最大360）

ATK：455（最大755）

DEF：400（最大818）

SPD：55

キャラクターアイコン：

体全体をすっぽりと覆う赤ローブにペストマスクをつけた状態の女性。体の曲線美から今は女性であることがわかる。左手には黒を基調とした表紙に、銀色の縁取りをされた赤色の蓮の花と緑色の葉が開いて浮かんでいる絵が表紙を彩っている聖書（経典）を手の持つ。

Giftでは手に所持した聖書を右手で開いて左手を前に突き出しては閉じるという動作を行う。

攻撃モーション：

左手のローブの裾から〈改造した釘打ち機〉を取り出して釘弾を射出する。

死亡モーション：

ブツブツと何か唱えて、自分の両足に〈改造した釘打ち機〉を打ち込んでから倒れる。

移動モーション：

まるで幽霊が移動するかのようになり、足を動かさず滑るように移動する。

プロフィール：

次元侵略者・ブレインフレイヤーによって支配された終末世界に住

まう未来の釘貫 神葬の姿。

未来ゆきかぜや未来アスカが拠点とするレジスタンスの基地で、ステイル・ロータス教団と呼ばれる教団の教祖を務めている女性。

その姿は一定の周期で常に変化し続けており、一見しただけでは『釘貫 神葬』という概念のみの姿が残されたかのような存在にしか見えない。

かつてレジスタンスの基地で住まう当初は、炭酸水を専門としたBARや大工道具で機会を修理できるエンジニア、古参の彼女を知っている避難民は、彼女の事を元は敬語で話す愛想のよい日本人だと語っている。

習得セリフ：

「やあ。隊長くん、私も部隊に加入させていたたくよ。なに、そんなに警戒しなくなつたつて別に乗つ取つたりしやしないさ。青空ちゃんとの約束もあるしね」

待機セリフ：

「ふふふ。闇堕ち凜子ちゃんと、警戒した目つきの鋭いショートヘアのゆきかぜちゃんも良いが…私はやはりこの時代の彼女たちが好きだな…特に凜子ちゃんは私の命の恩人なんだ」

「人をまとめ上げるのに宗教は最適解だ。彼等はいつも救いを求めている。絶望から引き上げてくれる救世主を待ち望んでいる。だから私は彼等に生きる希望を与えていただけさ。それがどんな形の救済であつてもね」

「おっと。隊長くん、くれぐれも私をオーク系と同じ部隊に組み込まないでくれよ。彼等の凶体は無駄に大きいから、偶然にも私の手元が狂つてお星様になってしまうかもね」

「オーク族には善人などいない。『良きオークとは人前に姿を見せないオークだ』」

「少しだけ懺悔をさせてくれ…。…あの時、君を救うことができずに申し訳なかった。上原くんは彼じゃないことは分かっている…。だが今は少しでもこうさせてほしい」

「ん？扉の建て付けが悪い？どれ、私が直そうではないか。……こ

ういうDIYは得意でね、初期の頃レジスタンスに厄介になっていた頃はこれで生計を立てていたこともあるんだよ。未来の時代に存在する出入り口のバリケードもいくつかは私が作ったんだ」

「炭酸水は好きかい？炭酸水は熱中症にも効果的なんだ。身体に対する良し悪しは別としてドライアイスがあればいくらでもつくってあげるよ。そして未来では炭酸水は高級品さ。今の時代の君達は幸せだね」

「こっちの私…彼女はえらく真つ当に生き永らえているようだな。これも支柱があつたが故の結果か…。今はただ君たちに感謝するばかりだ」

ビジュアルチェンジ：

「今から100年前には、こういうアダルトビデオがあつたね♥  
トレンチコートを着た女性の下の服は全裸という露出プレイさ」

「ああ、上原くん…そんな目で私をみないでくれ。疼いてしまうじゃないか」

「そういえば、対魔忍世界では眼孔姦というジャンルには手をつけてはいないのかい？リヨナはそれなりにえっちだぞ♥」

「そんなに私を責めるな。私から見れば君達も大概だと思いがね。おびき寄せ、個のアイデンティティの破壊、社会からの孤立、組織への依存、極度の疲労、同族意識、そして他者への暴力を含めた『後戻りできなくなるプロセス』…私達は同じ穴のムジナ——まだ気づけないのかい？」

強化時：

「『初期化』されて、身体がなまっていたこともあるし訓練を付けてくれるのは助かるよ」

覚醒時：

「こんな世界だからこそ読書することが重要さ。ほら、おかげで新しい知識が身についた」

「学校の知識なんて社会に出てから使わないことが多いかもしれない。でもその知識は同時に人生を豊かにしてくれるものだから大切にね」

リーダースキル：『カルト教団教祖の説教』

部隊全体のATKを超特大UP＋最大SPを大アップ＋最大HPを中アップ＋DEFを小ダウン。

スキル1：『ワンショット・スカトロロジーポイズン』（SP260）

ランダムな対象に極小威力でDEF無効化30回攻撃＋超高確率で対象を毒効果付与

スキル2：『癒し手の奇跡』（SP200）

味方1人の全ての異常状態に加え、体力を大きく回復する。

奥義：『肉体強盗』（SP360）

効果：

相手の体力と自分の体力を強制的に入れ替える。この時、相手に残っていた数値ではなく残されていた%が自身の体力の割合に採算される。

演出：

聖書を開き、何かをブツブツと唱え始め、ペストマスクの下で神葬の目が深淵色に鈍く光る。やがて指パッチンをしたところで画面が真っ白に染まり、元の景色に戻った時には対象と神葬のHPバーが入れ替わっている。

台詞：

「君に選択肢があると思っっているのか？ 愚かだな。君に抗う術はない。残るのは絶望のみだ」

回想1：

ムラムラした結果、レイダーに自分の体をささげる。三穴レイプ。輪姦される前に最初に奥義を放って、理解が及んでいないレイダーが仲間に輪姦されるのを愉悦の笑みで眺める。

回想2：

回想1の続き。その後、元肉体に対する凌辱パーティーに加わったのちは、犠牲者の眼球を棒状のブツで押しつぶして硝子体が侵入する眼孔姦をどっぴりと楽しむ。さらにそこから成り代わった犠牲者を犯して達する。

肉便器として持ち帰る彼等に混じりながら、彼等の基地に帰還。

数日後、わざと感染者の血液を自らの指に浸して目をかきむしる形で体内へと取り込み感染。感染のクラスターを引き起こしてレイダー拠点を壊滅させてから、自身はさらにレイダーの別の肉体に乗り移って帰還。

Wiki風コメント

- ・今日のブツチギレのぶつ壊れ性能釘貫ちゃんはこちらですか？
- ・どっちの意味でぶつ壊れ？
- ・立ち絵が面白いぐらいに色気がないんですけど
- ・何なら登場するNキャラやモブぐらいの服装してんな！

■レイダーの方がまだ肌面積が広いぞ！

。ビジュアルチェンジでローブの下が全裸なことと、ポロリしていることがせめてもの救いかもしれない

■ポロリの仕方が勇ましますぞよなあ……

■これ自分のローブの端をガツと掴んで、片乳をぬるぼしてるよ

な

■雑。THE 雑な性の誘い。

■※ただし回想は、お前がリヨナられる側に回るんだよ!!!

。覚醒時の立ち絵ももう魔族側のエフェクト効果が付いてるよな

・オークに対する憎しみが深すぎる……

。ゴブリンスレイヤーさんみたいなことを言い出してますよ

。ニンジャスレイヤーも始めそう

。これも全て本編でスネーククレディとオークさん達が手加減しなかったのがアカンかったんや！

■なんでや！オークさんたちは野次馬やったろ！

・聞落ちしてて草

。お前がカルティストになるのかよ!!!

。カルティスト狩りが未来でカルティストの教祖になっていた件について。

タ

■カルティスト狩りの代わりにレイダー基地を壊滅させてワロ

■レイダーがカルティストだったんでしょ

■カルティスト認定万能

・眼孔姦とか始めましたよこの人

。鹿ちゃん、付き合う人は良く考えたほうがいいぞ

。これまでの情報で神葬の回想ってなんだっけ？

■眼孔姦、強姦、前立腺責め、飲精、逆レ、アナル舐め、昏睡レ、

あとは百合で受け側

■鹿、よく考える

■鹿もこの世界の釘貫に辟易してるっぽい

■New ウンコ

・スキルのスカトロジョーって糞尿のことだよな？

。紅……？

。紅とフェリシアに会わせてはいけない何かを感じた

。対魔忍は “対魔忍GOGO” とかで健全を目指しているの

に新たにウンコを漂わせるな

■糞食をしていたゲームが、健全を目指すのもおかしな話ではある。

。未来では清潔な水とか限られているだろうからウンコ攻撃は効

率かつ合理的ではある

■限度があるだろ！

■釘貫、お前そういうところやぞ!!!

■【探索者の本領発揮】でのA型肝炎ワクチンが伏線になるとは

■アナル舐めもウンコ……？

。『青空ちゃんとの約束』という過去からやってきたふうま一行と  
会っているよなコレ？

。未来編で未来ゆきかぜが過去ふうまを助けてもタイムパラドク  
スは起きなかったから、鹿ちゃんも向こうでは復活して無きそう

■にしては、鹿ちゃんに対してあまり執着してないっぽいんだよ  
な

■部隊編成に鹿チャレンジしたけど、特にステータス変動はな  
かったわ

■ステータス変動はないが、スキル2でやけに鹿ちゃんを回復す

ることが多い気がする。

。現代の問題児・青空 日葵（釘貫神葬）と、未来の問題児・釘貫神葬の両名を抱えたら流石に対魔忍もストレスマツハやる

■ 未来編のキャラは現代のキャラと共闘するのは一時的なものだから……！

■ そのための鹿ちゃん？

■ 過去の釘貫神葬も揃ったら無敵だろうな

■ 過去神葬もそろったぞ

・ ビジュアルチェンジで散々卑猥な事を呟いていたのに、突然イケボで諭してくるのを止める！

・ 決戦クエストにボスとして参戦!!!

。 味方だとそこまでつぽいのには敵になった瞬間、強敵になるのやめる？

。 リジエネはメカジローの時に散々だったじゃねえか！回復するな！

。 毒がホントに厄介

■ ウンコ爆弾やめろ!!!

・ ワンシヨットとは？（哲学）

。 ワンシヨット（30回射撃）

。 引き金を1度引いたら30発出ちやつたんでしょ。

■ 得物もだだ漏れじゃねーか！

■ ワンシヨットじゃないよ…それは連射だよ…

■ 極小威力で30回攻撃つてどれくらい？

■ 通常攻撃をDEF無視で30回攻撃+毒付与つて言ったら伝わる？

■ 覚醒しないとスキル1すら使えないやんけ！と思つたら奥義ばりの強さだった件について

■ アリーナ対策だろうな…

・ 誰も気づいていない様だから書いておく。未来釘、公式から精神異常者認定されていない

。 マジじゃん



■ え？これマトモ粹なの？

■ 世紀末世界へ転移したが、私はマトモ粹で人生を謳歌したい。  
じゃん

■ 未来で夢かなってるじゃん

。お前、正気なのかよお!?

■ おかげである意味、発言内容に信憑性が…うーん？

■ 露出と眼孔姦に言及してるんだよな…

■ マトモか？

■ 少なくとも普通の性癖ではないことは本人の口では暴露され  
たな

登場作品：

<https://syosetu.org/novel/270680/>

【ダークサイド】釘貫くぎぬき 神葬しんそう

属性： 精神

レアリティ：SR☒(レイド戦—配布SR)

HP：2828 (最大5728)

SP：100 (最大100)

ATK：181 (最大999)

DEF：100 (最大400)

SPD：80

キャラクターアイコン：

左手を背中に隠して、無表情のまま無防備に佇んでいる。その目は濁っていてどこを見ているのか分からない。

攻撃モーション：

左手に隠し持っている改造した釘打ち機を敵に打ち込む。

死亡モーション：

ブツブツと呪詛を唱え続ける。

移動モーシヨン：

千鳥足でふらふらとおぼつかない足取りで移動する

特殊モーシヨン：

奥義発動中のみのモーシヨン。右手を血で滴らせながら波打つ触手のように四肢を動かして何かを謳い始める。

特殊死亡モーシヨン：

奥義が発動した場合のみのモーシヨン。肌色の部分すべてにモザイクがかかったかのように全身が穴だらけになり、皮膚の柔らかい部分（瞼、耳、鼻）すべてそぎ落とされた状態で血だまりの中で動かなくなる。

プロフィール：

クトウルフ神話TRPG世界線から迷い込んだ異世界人。

この世界の一般人、女子高生『青空 日葵』の肉体を使用しているが、精神は『釘貫 神葬』と呼ばれる女性が憑依している状態。

対魔忍になることを強く拒み、自分を一般人だと思い込んでいる現在進行形 of 精神異常者。

既にその正気は闇へと葬られており、永久的狂気状態に浸っている。あれほど五車学園で新しい友人をつくり、親しくしていた彼等とも疎遠がちになり、いつも幽霊のようなふわふわとした足取りで誰もいない忍熊や忍蛇しかいないような森林地帯を歩きまわっている。

精神状態が危険な状態にあるため、対魔忍達から勧誘されることも任務を課せられることもないが、ふうま、相州蛇子、鹿之助と陽葵の4人のいずれかが任務に出るといつの間にか、まるで瞬間移動したかのように脇に存在している。

4人が分散した場合には、鹿之助≧陽葵<蛇子<ふうまの優先順位かつ任務の危険度に応じて出現する模様。彼女がどのようにして、任務の内容を知り誰にも気付かれず4人の手伝いへ同行しているのかはいまだに不明のままである。

取得セリフ：

「やあ、またお会いしましたね。貴方達の上層部は感づいているでしょうから釘貫 神葬です。『青空 日葵』？ 知りませんよ。そん

な女。そんなことよりもふうま君。3時間の蛇子ちゃん。鹿之助くん、陽葵ちゃん達はまだ無事ですか？ いえ、彼等が無事なら……今はそれだけで十分です」

待機セリフ：

「この報いは、私が選んで『青空 日葵』の肉体を乗っ取ったのですから当然の事態です」

「私は穢れている。そんなことは当の昔に充分承知ですよ」

「なんですか？ 立案させて頂いた娼婦を肉壁にする作戦に何か問題でも？ この作戦は相手方も稼ぎ頭を傷物にするわけには行かない為、こちらへの攻撃も躊躇するでしょう？ 非常に合理的で成功率も高い。対魔忍のあなた方には実害も及ばないのですから都合がいいのでは？」

「敵の強大な計画を阻止できることに比べたら、私や民間人の死は些細なことにはかすぎないですよ。コラテラル・ダメージです」

「(ブツブツブツ) うるっさいなあ……。何も知らねえガキの癖に……まずはテメエから消してやろうか。……なあーんちやつて★えへへ、ジョークですよジョーク。ほら昔みたいに笑ってくださいよ」

「拷問は好きです。相手の絶叫が私に生の実感を与えてくれる。命は命を喰らい生きています。命を喰らう私はいつか命に喰らわれることでしょうか。だからこそ、今は喰らう側にいるべきです」

「『死の恐れはないのか？』ですか？ 何故、どこに恐怖を感じる要素があるのですか？ 人は遅かれ早かれいずれは死にます。今では無いだけで。それにこの宇宙せかいの長い歴史の前では、そんな刹那の出来事は大した問題ではないのですよ」

ビジュアル：

「黙れ！ 対魔忍!! 私はまだ他の派閥ではなく、お前等と一緒に居てやるのは『憐れな修道者』を救う・救える利害関係上であることを忘れるな！」

「私を懐柔しようたってそう簡単に墮とせると思うなよ？ テメー等のやり口は知っているのさ。ああ！ 五車に滞在して理解したさ！ 嫌

というほどになー！」

「信じられるのは自分だけ。自分だけだ。やめろ……私に構うな……私が死んでも4人には関係ないだろ……ゆるして……もうやめてくれ……」

強化時：

「ありがとうございます。おかげ様で最前線で立ち続けることができます」

覚醒時：

「お願いです。私を強化するぐらいなら、他の対魔忍を大切にしてください……」

「——わかりました。あなた達を護りましょう。それがどんな手段になったとしても」

リーダースキル：『永久的発狂』

自身のDEFを除く、すべてのステータスが特大上昇。部隊全員のDEFが中上昇。

スキル1：『邪眼』（SP100）

敵1体に呪いを超高確率で付与する。

スキル2：『赤き閃光』（SP30）

敵全体に対してDEF無視の高威力攻撃を放つ。自身に中のダメージ。

奥義：『破滅の儀式』（3ラウンド＋術者の死（この死は蘇生石やリジェネでは回復しない））

敵全体と部隊全体は超高確率で恐怖状態に陥る（waveが切り替わっても同様に顕現する）＋3ラウンド後のラウンドより味方が1体姿を現し攻撃に加わる＋極低確率で味方に攻撃が向けられる。

演出：

釘貫 神葬が自分の手を刃物で切り付け、自身の周りに血の魔法陣を描き始める。そこから3ラウンドの間、特殊モーションが発現。また攻撃には加わらない。詠唱が成功すれば、敵と味方の間の中央頭上に6本の触手を垂らした高次元存在が姿を現わし、釘貫 神葬を細い管のような器官で全身を串刺しにする。（3ラウンドの詠唱中に死亡

した場合は高次元存在は顕現せず。神葬の蘇生不可)

台詞：

「ていび まぐぬむや なおんぐ かでいしゆとう なるぐうれ  
すてるふすないのみ なんどうむ くなあ くやるなく ねぶろつ  
ど づいん ふれげとる しぐな すてらるむ りんか にぐらる  
む え ぶふあにふおるみす さどくえ ねぶろつど づいん し  
じるむ だくた りんか おんぐ だくた——」

回想1：

前置きなしで、気が付いたら…の流れで、開幕から魔族に強姦されるシーンから始まる。

しかし終始無表情でマグロ姦となる。

必死に盛り上げようとするオーク達の存在がむしろ可哀想に見えるてくるまでである。

回想2：

回想1の続き。対魔忍（独立遊撃隊）に救助される。

自らを囮にした強行の陽動作戦に対して、一番効果があると思われる鹿之助と陽葵から説教をされる。それでも魂が抜けたかのような素っ気ない『神葬』に対して、泣きじゃくる鹿之助と激怒する陽葵とは『神葬』を押し倒して強姦の追姦をする。昔のように何か反応して欲しくて。

結果は惨敗に終わる。「満足できましたか？」と淡々と問いかける神葬に鹿と陽はもう昔の『青空 日葵』だったころの『釘貫 神葬』ではないことを理解して終わる。

Wiki風コメント

・【暴走列車】とは異なったベクトルでやばい釘貫 神葬

・あっちもあっちでやばかったが、こっちもこっちでやばい

・まだ暴走列車が可愛く見えてくる

・目がハイライトオフなのは、闇落ちの証拠よ

・利き手を背中に隠している…

・終始無表情なのも怖いわ

・なにを仕出かすか分からない恐怖がある

。存在が恐怖  
。死体が恐怖

■ 転がった死体もエグイんよな

■ 奥義は蘇生もできないし、グロい死体をずっと見なきやいけない

い

■ PLにSANチェックです

。お前が神話生物粹

・新ユニット紹介の奥義はなんなの？ 自分の血で魔方陣を書き始めて、奇妙な踊りを踊ったと思ったら中央にバケモノが顕現したんだが？

。新ユニット紹介で敗北して草。敗北するんだ…

・装備で、ほぼ無意味に近かった恐怖耐性装備しなきゃだめだ。ウェーブ開始と共に敵味方関係なしに恐怖で動けないけど、中央の怪物だけが敵と味方、すべてを蹂躪していくみたいな構図が生まれる。

。ただただ恐怖

。バグか分からないけど、奥義後からBGMが一切止まった。

■ オプションでBGMを止めて、voiceだけオンにしたら、神葬が踊りながら小声でずつと何か唱えていることは分かったわ

・スキル2の赤い閃光、ポケモンのポリゴン伝説を思い出す

・何が原因でこうなったのか分からないけど、ついに起爆させちゃいけない核爆弾の導火線に火を付けちゃった感じ

。命が軽すぎる

・助かっているのに、こんなに報われない回想ある？

。凌辱Ⅱ対魔忍の方程式があるけど、これはこれでまた別の胸糞でキツイ

。もう今後一切、本編みたいなふざけ合ったりじゃれ合ったりするシーンは拝めないんだなってわかる

。絶望感が画面越しから伝わってくるもん

。俺の観音様が寝てしまった

■ その線香しまえよ

■ その蠟燭しまえよ

■そのマツチ棒しまえよ

。そりやチンポで数々の対魔忍をヒンヒン言わせてたオーク達の士気も下がるわ

■回想のオークに同情する日がくるとは…

■勇気を出した泣きじやくる鹿ちゃんと、初めて怒る陽葵ちゃんにも同情したわ…

■A V撮影で、撮影中に嬢がずっとムツとしているぐらいにまで空気が悪い

■空気悪すぎで笑った。『ウエーハラのチンポ気持ちよすぎだろ！』の次に笑った

・信頼度MAXのビジュアルチェンジで、どんなふうにも下品にあえぐのかと思ったら怒りをぶつけられて当惑した

。またそのセリフが悲痛なんだよな…

。でも信用しているからこそ言及しているだろうな感はある

■通常版だとただの自暴自棄だもんな

。多分、これは考察ポイント。一度、対魔忍の組織を振り返る機会を与えられているのかも

・スキルとしては、舞舞じゃなくても回復役を置いてやれば連発可能なのは強いよな

。SP30を見たときは目を疑ったけど、修正しないしこれ別に運営のミスじゃないっぽい

。回復さえしていれば、いくらでも全体攻撃の火力を躊躇なく死ぬまでやってくれるのが強い

■死んでも生き返って連発するぞ

■回復が間に合わなくてもSR/ワイトと組ませてリジエネスれば、ずっと死に戻りしながらスキル2を連発してくれるぞ

■ワイトもそう思います

■こんな反動が強いスキルを死に戻りながら連発されると『本当に壊れちゃったんだな』感が酷い

・ついにふうま一門の傘下に加わって草、ふうまより先にお前が邪眼忍法に開花するのかよお！

。草

。呪いを掛けられるのは強いな

■回想で邪眼を使用しているのを見たけど、邪眼の対象になった相手は銃が玉詰まりで故障したり、対魔忍の襲撃で逃げ出そうとして失敗したり、とにかく致命的なものから軽いものまでその日の夜明けまで不運な出来事が連発するような邪眼っばい。

■これは間違いなく “呪い” ですわ

。レイドボス用で機能するかも

・恒例の鹿ちゃんと同じ部隊に所属させてみたんだけど、今回は何も変化なかった

。やめろオ!!!

。陽葵ちゃんとも組ませてみたんだけど、駄目だったよ

■ああ：

ぞ  
。ステータスの変動がないだけで、SP回復率が極小アップしてる

■確認した。しかも相州蛇子、上原鹿之助、日ノ出陽葵、1人につき効果が上がってるっばい

■おっ？ そこにSR／ホワイトを加えれば万事解決だな?!

■無限ループでスキル2の赤い閃光を連発できるな！

■悲報レイス、ダメそう。アプデ後から奥義放つと確定で長期の異常状態不具合が発生する

■バグ？

■わからん。前例のある釘だから隠しステータスとかかも

■ヒント：SR／ホワイト説明文、死者に一時的に生命を与え操る力を持つレイスと呼ばれる高位魔族、触れた時点までの記憶まで完全のコピー出来る

■あつ……ふーん？

・フレンドが【ダークサイド】組んでた時は奥義どうなるの？バケモノ2体？

。その場合は最初の1体のみが適応される

。代償を捧げているからか怪物の強さ2倍になる



。奥義を同時に発動させると怪物の強さは3倍にまで跳ね上がる

■レイドボスとガチで張り合えるぐらいに強くなるぞ

■味方にもその遠慮のない火力が飛んでくるぞ！

。戦力が2人抜ける分、敗北しやすくなってるから闇釘を生贄にするときは回復を多めに入れた方が良い

■おすすめはあやめ、不知火、舞、ヴォラードメルシー

■SR／ワイトは？

■奥義後即恐怖状態になるからあやめセット不可避

■あやめとセット…やっぱり紅じやないか！

## 釘貫くぎぬぎ 神葬しんそう

レアリティ：SR

属性：科学

HP：1600（最大4467）

SP：320（最大320）

ATK：214（最大400）

DEF：357（最大1211）

SPD：65

キャラクターアイコン：

銃剣を装備した改造した釘打ち機（ライフル仕様）を手にし、銀縁メガネを掛け、髪を後頭部に束ねた黒髪の女性がたたずんでいる。その装備は旧アメリカ軍のヘルメットに厚いケブラー製のベストを纏っている。

攻撃モーション：

フロントサイトを覗き込んだ正確な射撃を行っている。

死亡モーション：

まるで失神でもしたように崩れ落ちる。

移動モーション：

両手で銃剣付きの改造した釘打ち機（ライフル仕様）を持ちながら、

軍人のような走り方をする。

プロフィール：

新クトウルフ神話TRPGという世界に身を置く、探索者と呼ばれる人種の1人。一般人らしい身の振り方をするが、彼女の生きた世界と対魔忍世界との時代の差は約半世紀以上離れており、価値観の齟齬によってやはり何処か精神異常者に見える。

ヨミハラにて高級娼婦として売られる前の凌辱のち肉便器調教の過程を経る前に対魔忍達が阻止し救出した。救出後は、そのまま元の世界線に戻るまでのあいだ五車町でかくまうことになる。

既出の『青空 日葵（釘貫 神葬）』とは同一人物でありながら、別人でもある。彼等の言葉を用いるならば、多次元プレーンに存在する平行世界の自分のような存在に当たるといえる。

普段は五車学園に通いながら好奇心から対魔忍達の授業に混ざったり、合同格闘技の組手相手役や時には射撃武器の取り扱いに関する臨時教師の役を務めることもある。忍法が開花しなかったり忍法として貧弱な対魔忍に対して、足りないところがあっても、みんなで補い合えばよい・戦い方は1つじゃないと励ます姿が見られることも屡々。

対魔忍ではないものの対魔忍の人手不足の緩和の為、ライフフル仕様の改造した釘打ち機を片手に捕縛された対魔忍の救出任務に同行することももある。

取得セリフ：

「初めまして、釘貫神葬です。対魔忍の方々に助けられたこの御恩と好意・私の出来る範疇でお返しさせていただきます。」

待機セリフ：

「対魔忍の皆さんはまだまだお若いのに、影の舞台上で日常を護っているのですね。凡人の私としてはとても頭が上がらない想いです。お勤めお疲れ様です。これからも自分の身体を大事にしながら共に頑張りましょう」

「私を知っている？ はて？ 私はあなたにお会いするのは初めてだと存じ上げますが……え？ 困った時の仕草が同じなのですか??？」

「へえ……。あんな小さな女の子も対魔忍として働いているのですね……。『上原 鹿之助』くんですか……。えっ!? ふうま君と同年代で男才!？」

「あつ! すみません、凜子さんと少しお話してきます。――

やはりできる女性は違いますね。彼女は学園内でもこんなに人望があるのですか。ちよつとうらやましいです」

「へえー。『相州 蛇子』ちゃんの足は切れても再生するのですか。一家に1人ほしいですね! 適度な感覚で足を切断すれば食費を浮かせられる上、災害時や拉致時の非常食として、とても重宝できる存在になりそうです!」

「あの方が『二車 骸佐』くん……。キラキラネーム……。SNSで炎上したら大変なことになりそう……」

『『日ノ出陽葵』ちゃんって明るくていい子ですね。何も知ら無さそうな純粹無垢さがたまりません。このまま何も知らないで人生を全うして欲しいです」

「準の術、神速。不死覚醒、血仙蟲。ふうま一門の邪眼……。私も訓練を積みばアサギ先生や紫先生、ふうま君のような忍法を使えるかもしれません。ふふっ……。そんな顔をしないでください。私は至って大真面目でお話していますよ」

ビジュアル：

「これは対魔忍世界の洗礼……。ツ♥んくっ♥んあ……。っ♥♥」

「性に対して積極的な方が多いのですね♥ 若者が都心部への移住をしなければ、当面のあいだ地方の少子高齢化問題には直面しなさそうですね♥」

「浣腸やスカトロはいいぞ。そのケツからひしり出すのは排せつ物ではなく、貴様の尊厳だ」

強化時：

「すごい……。この世界に来てからというものの僅かな期間訓練するだけで、力を身に付けてられている気がする」

覚醒時：

「これなら、この世界のかわいい教え子達を護ることが出来る！」  
「ここまで鍛錬してもらえないなんて、ここでの私は愛されていますね……。なら期待に応えないと！」

リーダースキル：『探索者ムーヴ』

部隊全体のDEFと最大HPを特大上昇させる。

スキル1：『モトロフ・カクテル』（SP160）

敵全体に炎症ダメージを高確率で付与する。

スキル2：『鉄壁の守護』（SP100）

最大味方3人（上下左右）のダメージを肩代わりする。また自身のDEFを特大アップ+ダメージカットの防壁を貼る。

奥義：『神槍の一突き』（SP320）

効果：

敵1人に防御無視かつダメージカットのバフを無視した攻撃を3発確定クリティカルで与える。

演出：

月夜を背景に銃剣を装備した改造した釘打ち機（ライフル仕様）を装備した神葬が現れる。〈跳躍〉で高く飛び上がり、斜め45度の角度から対象に銃剣を突き立てる。

台詞：

「巴ちゃん譲りの神殺しの槍撃イ！ みせてやるよ！」

回想1：

対魔忍達が捕えた捕虜の尋問を代わりに勤める。内容は基本拷問。

LIVE中継でスカトロ、抜歯、電導ドリルでの膝砕き、窒息、水攻め、電気攻め、シガーカッターでパイプカット、くるみ割りと一通り拷問の責めをゲラゲラ笑いながら課す。

終始M男向けの回想。

回想2：

回想1で骨抜き（物理）にした対象にご褒美を与える。全身に釘を打ち込むだけで性的絶倒に達せる様に肉体改造を施す。本番なし。

Wiki風コメント

・何気に対魔忍に属するキャラで、黒髪、黒目、黄色肌のTHE日

本人って格好のキャラは今回が初めてな気がする。

。そして高坂先生やまり、三重士の磯咲（姉）に続くメガネっ娘でもある

■ コラボキャラは眼鏡を取ると強くなる

■ フォルムチェンジで眼鏡を撮る姿が見える見える

■ 眼鏡取りませんでした

・ 歳はいくつぐらいなんだろう。

。高坂先生やアサギの私服よりもちよつとババア寄りだよな。タクテイカルグローブやブーツは探索者視点から考えれば武装の一環なのだろうけど。

。青空日葵の時よりも服装に遠慮してるよな

・ コイツは間違いなく釘貫 神葬。間違いなく釘貫 神葬

。思想が釘貫 神葬

。丁寧な口調で嬉々として蛇子ちゃんを食用にしようと思案に至っているの、これは釘貫神葬

■ 蛇子ちゃんを非常食として見る人間はお前ぐらいです

■ 御屋形様もドン引きだろうな……………

。またウンコが出てきたよ…紅とタッグを組んだらウンコで盛り上がりそう

■ 日ノ出陽葵の時は回想レスセだったけど紅とはスカトロ？

■ ウンコ大好き成人がよお…

■ やったぜ。

■ ドスの利いたイケボで強制脱糞行為をかつこよく言わないで貰えます？

。ビジュアルチェンジ後にイケボで唐突に語り始めるのは間違いないからお前です

■ 未来編の釘貫神葬と同じことやらかしてんもんな

。ついに過去編の釘貫神葬が出てしまったか…

■ 過去というよりもナイ牧師に転移してもらわなかったor転移前ときの世界線じゃん？

・ その回想は我々の業界でも拷問です。

・俺達の対魔忍で知る釘貫 神葬（青空 日葵の姿）とこの釘貫  
神葬違くない？もつとDM気質じゃなかったか？やる側よりやられて  
喜ぶ方じゃ？

。青空日葵の肉体だからじゃね？ 多分、本質としてはこっちが正  
解だと思う

。思い出して欲しい。神葬はカルティストとその家系を嬉々とし  
て根絶やしにする奴ってこと

■本編でもまえさき市で鹿ちゃんに拷問凌辱に掛けようとした  
奴だぞ！

。平行世界、多次元プレインうんぬんがあるから世界線の違いつて  
部分で片付く部分もあるな

・流石はスネークレディ姉貴やでえ：  
。予想していた通り、後頭部で髪の毛を束ねてたな

■髪の毛を自然体にしてたら激しい運動には向かなさそうだも  
んな

。俺は髪の毛邪魔になるだろうからベリーショートヘアの髪型か  
と思つた

■それはそう。近接戦で髪の毛を掴んだ格闘技とかキメられそ  
うだもんな。

・またピーキーなスキルだな：  
。スキル2の上下左右つてなによ

■戦闘画面の並び順の事だと思ふ

■2番目配置で先頭のキャラ（→）と3番目のキャラ（←）5番  
目のキャラ（↓）を護る。

敵敵 ①④

敵敵 ☒⑤

敵敵 ③フ 黒丸を護つてこうなる。

■5番目に配置すれば2番目（↑）4番目（→）、フレンド（←）  
を護ってくれるのか理解

■逆に部隊編成でリーダー、3番目、4番目、フレンドにすると  
2人しか守ってくれない

■クセありすぎだろ：

■対魔忍RPGは戦術をウリにしているところもあるからね

■逆に4番目とフレンドを舞舞にすれば絶対に倒れない防壁ができる

■過釘はスキル2連打、闇釘を4とフレに設定して奥義を放てば防御陣として完全では？

・そしてサラツと対魔忍の忍法を習得するとか言い出してますよコイツ

。【ダークサイド】だと、有言実行で文字通りふうま一門の邪眼を習得して使っちゃってるんだよなあ……

。対魔忍の忍法って、原作だと1人につき原則1つの開花じゃなかったっけ？

■基本はな

■忍法が2つ開花する場合、片親が魔族で片親が対魔忍という法則がある

■あるいは紅みたいに『風遁』とふうま一派の『邪眼』を両立しているのかな

■だから原作では2種以上を扱う対魔忍は登場しない

■ここでも紅が絡むのか：

■忍法の話をしている時にウンコの話を挟むのはやめよう

■ウンコの話から離れよう

■ごめん

■俺は4つ上兄貴よりも3つ上兄貴が一番戦犯だと思っただけです

。そもそもお前、探索者だから対魔粒子持ってねえだろ!!!

■対魔粒子って何？ 教えてエロい人

■対魔粒子ってのは、対魔忍の力の根源をなす物質。対魔忍はその物質を身体や武器に纏わせて攻撃力や防御力を高めたり、体内でエネルギーに変換して超人的な身体能力を得たり、遁術などの超自然的な力を発揮できる（引用元と参考文献：対魔忍RPG wiki用語集）

■だから忍法が開花している対魔忍は基本的に常人よりも強い  
■現釘が成す術もなく陽葵から強引に押し倒され負けるのも対魔粒子の要因が一枚噛んでる

■現釘ちゃんとして人の子。対魔粒子のせいで対魔忍には正面からじゃどうあがいても勝てない

■生徒指導でほむほむとクレイジーサイコレス相手に大立ち回りしてたけど頑張ったほう

■大したことない風に振る舞ってたけど、初戦のスネレが異常に格上なだけ案件でもあった。

■裏付け証拠として、後日眞田には成す術もなく袋叩きにされたな

■ムラサキが手加減していたとはいえ歯が立ってないんだよなあ…

■対魔粒子は対魔忍が頭対魔忍になる要因の1つ。 >>>>ゴリ押しで勝てるから<<<<

■対魔粒子って、すべての人間が持つてるものじゃなかったっけ？

■それはネクロコロボの設定。原作対魔忍のみで見れば対魔粒子は対魔忍しか持ってない。

■つまり忍法が開花している対魔忍は意識・無意識に関わらず対魔粒子を扱える術を持つ

■詳しいことは対魔忍RPGのWikiを確認した方がいい詳細に書かれてるから

■NARUTOやニンジャスレイヤーのチャクラやカラテ粒子はあくまでも鍛錬による別の力

■探索者の場合はPOWから算出されるMPかな？

■そ。つまり、絶対に探索者が対魔忍の忍法を開花できるわけがないんだよ

■しかも数種類の忍法もな  
■俺達に例えば、魔法に触れたこともない俺達がFFの世界に来て魔導士適正も無い戦士職なのに『頑張れば、主人公専門の専門スキ



ルや白魔法と黒魔法と召喚術の取得ができます』とか言ってるようなもんだからな？

■博識の御屋形様、絶対『なにいつてんだこいつ』って思ったやろな

■無理なことを大真面目で話されても…

■あたまおかしいわ

■理解に苦しむ

■だから狂人なんだろ

■わかりやすい形になった公式の精神異常者判定

■でもさ。闇釘の『邪眼』は……？

■多分、対魔忍世界のものじゃないね。

■これまでの情報から導きだされる答えは、クトゥルフ神話TRPG世界線の魔術説が濃厚

。ふうま一門の邪眼に続いてチャレンジするのは、隼の術と不死覚醒の忍法の取得か

■3種もの忍法取得チャレンジしようとしてんのかこの女…

■3種で済めばいいけどな（呪文を数十種取得したうちの探索者

見ながら）

■探索者の好奇心は留まることを知らない

■そんなもんじゃ、あこがれは止められねえんだ！

■そりゃ、そんな話を聞かされたふうまも目を丸くするわ

■対魔忍世界の常識を覆しに来ないで貰えますか？一般人????

■実は井河アサギと八津紫の子孫だったりしてな

■百合同人誌ネタがまた現実化に…

■それはありえないだろ釘貫の方が古代人側の世界線軸にいるから

■井河アサギと八津紫が子孫説？

■そもそもまだ忍法を取得していないから子孫説は違うと思う。

■紫はアサギ狂なのでもかくとして、アサギさんはマトモ枠なので違う

■まさか過去編の釘貫のほうの問題？

■現代版神葬ちゃんはまだ丸くなった方なんです！パターン？  
■丸くなってねーよ。ゴリゴリの個性で異世界カチコミへ来るわ

。対魔忍忍法を取得する探索者は対魔忍だった!?  
■君は対魔忍になれる（クソコラオールマイト）  
。対魔忍忍法取得は全国の探索者に対する風評被害に繋がるからやめなさい

■探索者にも真面な人は居ます！  
■探索者には真面な人は居ません！  
。探索者はチート系の主人公だった?!

■いいえ、これはクトウルフ神話TRPG業界ではデフォルト性能です

■クトウルフ神話TRPG世界線このレベルの人間がゴロゴロ居るんだぜ？信じられるか？

■※あくまでも身体能力や魔術取得に関する特徴の事です  
■邪神も真つ青だよ  
■邪神はいい加減『たかが人類』と侮ってる場合じゃない

■現代対魔忍よりも現代探索者の方が数が多そう  
■対魔忍みたいに日本政府の管理下にならないから面倒そう…

■釘貫神葬みたいなのまみれだったら、邪神よりも先に世界が終わるわ

・結局、釘が五車学園で正面から戦って勝てる相手って同年代だとふうまぐらい？

。ふうまは男だから性別的な力の差で負けるだろう  
。鹿ちゃんにもワンチャン負けるのか…

■それはそれで喜びそう  
■闇釘、回想で鹿ちゃんに押し倒されてた  
。つまり、神葬は五車学園で最弱の存在？

■今更そんな情報貰っても、スクールカーストバグが発生するだけなんだが？

■こんなところで一般人枠情報出されても困る

■何がそんなに現釘ちゃんを強く魅せているんだ：

■っ「噂」

■そりや噂が酷いだけよ

■あとは見せ方かも

■噂でデバフ+バフが掛けられていて強く見えるだけ

■噂ひどすぎで相手が勝手に現釘ちゃんを恐れてるだけだぞ

■現に噂の無い相手にはボコボコにされてる。

■ちんぽ先生にも言われてたけど小賢しいクソ女ではある

■蓮魔先生をちんぽ先生って呼ぶのやめーや

■日の出ちゃんは小賢しいクソ女を否定してたけどな

■日ノ出ちゃんはホンツト良い子やで

■狂気期間が終わっても好きでいてくれるかな：

■貴重なりコリコ成分

■脈薄な鹿よりも脈しかない陽葵ちゃんと付き合っちゃえよ

■対魔忍世界だし、ちんちん生える薬とかあるでしょ

■ノーマルをビアンに変える薬とかも

■旭先生ごめんなさい。でも陽葵ちゃんは、ふうま君好きでも回想は男好きでもないっぽかったので：

。一般人と比較した時ムラサキや蓮魔に評価されるぐらいには強いのだろうけど、きつと正面から殴り合ったら対魔忍としては戦力外よ

■当たり前だよな。探索者であってMPあるけど、対魔忍ではないし対魔粒子持ってないし。

■つまり：弱いのに：ウワサとか振る舞いで強く見えてる：つて……コト!?

■あとは対魔忍や魔族以外に対しては強い

。基本的に現釘はvs対魔忍の場合、完全な勝利って無いぞ

■むしろ敗北しまっくってるまである

■紫（辛勝寄りの引き分けに近い敗北）、スネレ（逃走）、病院見張り（敗北）、室井（逃走失敗多数）、黒田&真田（敗北のうち、紫の棄権のため勝利）、真田（敗北）、神村（敗北2回）、穂稀（逃走）、蓮魔

(生徒指導3回)、日ノ出(敗北4回)

■ 日ノ出ちゃんに押し倒されすぎだろ!

■ XVerだと、既に回想や報告書含めて17回ぐらいは犯されてるぞ!

■ バリネコ・総受けの渾名は伊達じゃないな

■ 仲良過ぎで生理の周期とかもお互いに把握してそう

■ 対魔忍って生理あるの?

■ こわいこというなよ

■ 15章にもなるのにボロ負けしてる主人公とかクソ嗤える

■ 完全な勝利って、テロリスト3人とカルティスト数十名と、泥濘と鋼人卿ぐらい?

■ そのテロリスト仲間に入質にされたり、鋼人卿には対魔忍の介入がなけりやレイプされてたけどな。泥濘は逃走したけど肺をぶち抜かれたし。

■ 対魔忍世界に転移してからの完全な勝利ってカルティスト数十人だけじゃないですかー!

。 桐生には1回勝ってた

■ 血液を7、600ml抜かれてるけどな

■ プールの授業も貧血のせいで潰されてるぞ

■ 痛み分けじゃねーか!

。 意外と強くない釘ちゃん。

■ むしろ弱い

■ プレイアルキキャラ化してやつと真価を發揮してきた説

■ へ改造した釘打ち機が本体説

■ 本編でも振り回す日が楽しみだな!

・ ここは過去釘のスレなので、現釘の話を挟むのは止めましょう  
過去釘と言っても実際にはシンプルな釘貫だけだな。

■ 別段若くないもんな:

■ 若くなるどころか熟女化して実装!?

■ 若いアサギとか、若い不知火は出たけど老けたアサギとかは出てないよな!?

■ 未来のユキカゼとか蛇子、まりがいる

■ 熟女化つても、学生が20代後半の大人になった程度の話にしか過ぎないだろ！

■ こちとら素釘は10代の青空日葵から少なくとも30代ぐらいのファッションセンスでプレイアルキャラ化実装されてんやぞ！

■ 30代じゃ熟女じゃないよなあ：アサギもそれぐらいだし

■ 推定30だから

■ 人によっては三十路はおじさんとか熟女判定になるのであり

■ 俺は40代ぐらいがいい：

■ おめーの趣味は聴いてねえよ！

■ 30以上であの振る舞い方は落ち着きなすぎでしょ

■ 精神異常者つて、もしかして……精神年齢がどこかで止まってる？

・ますますスネークレディが神葬と友達になりたがる理由が分からなくなってきた。特別に強い訳でもなく、対魔忍世界基準で考えれば発言内容が普通に精神異常者だぞ？ 友達になる利点も利益もない。何故『本名で呼んで良い』なんてアサギと同格で扱われているのか理解できない。

。ただのプレイアルキャラ化としての設定じゃない？

。単純な理由じゃないと思うんだけどな

。異世界転移者というレアもの枠？

■ レアものでも魔界から来た高位魔族からしてみれば同じような存在だろ。魔界か異世界かの違いなんて

。高位種族の考えることは理解が及ばない。

。類友だったりしてな

■ 笑いながら残酷なことを平気でやる

■ タツグを組んだらやはり無双

。一般人枠を希望しているのに隠しきれない力に人間らしい愚かさが愛おしい説

対魔忍<sup>たいまにん</sup> “ぬこ”

レアリティ：HR

属性：超人

HP：920（最大2990）

SP：100（最大160）

ATK：50（最大300）

DEF：50（最大100）

SPD：97

立ちモーション：

ただの猫が毛づくろいをして座っている。

攻撃モーション：

獰猛な犬のように相手に飛び掛かり、爪で引き裂く

死亡モーション：

お腹を出して転がる。

移動モーション：

四つ這いの一般的に猫が見せる移動方法で移動する。

プロフィール

五車学園で雇われている猫。学園の人気者であり、気軽にその体をベタバタと触らせてくれることや人懐っこい仕草が多くの子女子生徒達の心を鷲掴みにしている。

だが、その裏の姿は五車学園の対魔忍達を支える諜報部のエキスパート・エージェント。その真の姿を知るのは五車学園における井河アサギと数名の教師陣しか知らず、また『山本信?』を含めた政府関係者ですらも、この猫の存在を知らない。井河アサギ、井河さくら、八津 紫の3名のみが知ることを許された極秘の最終兵器。（信頼度MAXで、ふうまもその1人に加わることになる）

主な活動内容は諜報活動がメインだが、時には要人暗殺なども請け負い今のところ無敗。

彼が対魔忍に忠誠を誓い対魔忍達を手助けするため居座っているのは、行き倒れていたところを井河アサギの妹である井河さくらが

拾って手当したことになる。

初期は普通の野良猫らしく、飼い猫になっても野良に戻っても良いというスタンスで居候をしていたが、五車町に存在する稲毛屋のソフトアイスクリームを食べ、彼等の存在が対魔忍であることや自分と似通った存在である情報を聞きつけて協力することを決意した模様。

取得セリフ：

「にゃーん♪ ゴロゴロゴロ……」

待機セリフ：

「みゃーお、みゃーお、みゃーお♪」

「うにゃーん♪」

「あーお♪ あーお♪」

「にゃーん♪」

「ゴロゴロゴロ……」

「みゃあ♪」

「ナーン♪」

ビジュアル：(CV：大塚明○)

「よう、缶切り。信頼度がMAXになったら、俺様のえつちな声が聞けると思ったか？ テメーの頭のなかはちゅーるかよ」

「信頼しているからこそ、雄の俺様は特別に雄の頭缶切りに話しかけている」

「諜報任務達成率99%の俺を信じろよ。お前等、頭缶切りより賢いからな」

「レアリテイSRの俺様が登場した暁には、ぜひ声を掛けてくれ。最強と謳われた一角の力をみせてやるよ」

「よう、缶切り。やっぱ気の強い女っていいよな、あの毛のないケツにツメを立ててヒイヒイ言わせてエ」

「アメリカ……ああ、この世界では米連つていうんだっけか？ その米連はかつてスパイキャットなる動物を育成したものだよ。結果は……残念なことになったがな」

『『青空 日葵』と『釘貫 神葬』アイツ等は似た者同士で俺と同じ故郷のニオイがする。仲間にいるうちは心強い味方にはなるだろう

が、取り扱い・運用には気を付けるんだな」

「殺すのは最後にしてやる」

リーダースキル：スネーク・キャット

MAPイベントでレアマップが出やすくなる。

スキル1：『へ組みつき』(SP70)

敵1体に麻痺状態を超高確率で付与する。

必殺技：『にゃんこの魅了』(SP160)

敵全体を混乱状態にし、自身が狙われにくくなる。

強化時：

「みやおーん♪ にゃあ♪ にゃあ♪」

覚醒時：

「にゃおーん！」

「ゴロゴロゴロ……」

寸表

【フル装備】井河アサギをSPDで差し置く最速のデバツプアー。

最大HPはどんなに強化してもHRの【稽古初め】真田焰よりも低い2990までしか上昇せず、DEFも最大強化時には100程度にしかならずあくまでもデバフ専門要員と言ったところか。

但し狙われにくくなるバフ効果で生存率はやや高めな調節にはなっている。

この猫の真価はリーダースキル。

マップイベントで上級を周回するお屋形様はHR／対魔忍、ぬこ

“ をサポーターやリーダーに決めておけば、石やチケット回収が想像以上に集まるかもしれない。

回想1：

クラクルやメルシー、葉月や弥生、カノンと情報交換し、彼女達ではなくマブい魔界の猫と交尾する。亜人との獣姦というよりも獣の交尾が無修正で展開される。マタタビをキメて、幸せな中出しをキメて終了。

Wiki風コメント

・ガチ猫参戦キター。



・声が渋くて笑う

。まさか潜入繋がりでスネークを採用するとは思わないじゃん

……

■BIG BOSS（股間）

。え？まさか回想シーンも大塚さん？

■そっくりさんやろ（震え声）

。回想でおうおうおうおwwwパンツパンツ（腰を打ち付ける音）  
おうおうおうおwwwパンツパンツ（腰を打ち付ける音）  
wwwwwwおつ……ウツ！じゃないんだわ……

・いったい、俺達の対魔忍は何処へ行ってしまっただ……

。現代の異世界転生者に「対魔忍になりたくない！」とか言われ  
ても妥当過ぎて草も生えない

・回想シーン、無修正でワロタ。

。獣の交尾シーンはモザイクかける必要がないからなあ

■おれたちはいったいなにをみせられているんだ（困惑）

。リリスは俺達の性癖を改造しようとしている

■これは間違いなくブラックリリス

。性癖3000倍

。次世代対魔忍ゲームではマジカミと同じようにGiftを導入する  
るので、回想シーンではこのネコ凹にネコ凸がぬるぬる抜き差しされ  
ます

■何その地獄

■獣の無修正交尾はニコニコでも容認されているからね

■一昔前のようつべでも全年齢で無修正の馬の射精動画とか上  
がってるし

■そのうち実写が搭載される。

■ママー、アレナニー？

■この前、ニュースでお茶の間を凍らせて、今度は俺達まで凍ら  
せにきやがった。

・地味にリーダースキルが便利。石とかチケとかめっちゃ集まりや

すい気がする

。そうかな？新イベでは渋いってスレでみたけど

■復刻推奨。調節は入ってないからザクザク手に入る

■箱イベは500から800になって走りにくくなったしな

・真面目な話、スキル性能としては悪くないんだよな舞と組み合わせれば確定でスキル1は連続発動できるわけだし

。紙といっても差し支えないDEFとHPに目を付けねばな

。必殺技では味方同士で殴り合わせて愉悦に浸ってそう

・クトウルフ神話世界から対魔忍世界に参戦する奴にロクな奴がいねーな

。ほかの言語（鹿之助）取得した奴、ウンコ大好きな奴、カルト狂信者、邪神招来する奴、一般人を装ってる精神異常者のほかに誰かいたっけ？

■それ全員同一人物う!!!!

。未実装だけど、家族になりたがるうるさい冷蔵庫とセルフ達磨と食人族とヤリマンと銀行強盗と原始人が残ってる

■クトウルフ神話TRPG世界から参戦するキャラに希望はなんでしょうか!?

■これはクトウルフ神話世界への熱い風評被害

■冷蔵庫と原始人はクトウルフ世界じゃなくね？別世界からの参戦じゃなかったか？

■それを差し引いても問題児だらけだろ…

■マシっぽいのが、銀行強盗というハードルの低さよ

■アイツは大麻忍だけどな

■ヤメロオ！最近対魔忍×クトウルフ神話TRPGの二次創作が増えたのにそっちにも風評被害が出るだろ！

■あの子ちゃんもきつとぶつ飛んでるって俺信じてるから（期待の目）

■各作者の許可が出るなら色々な異世界転生対魔忍とコラボしたい

■先駆者であるお胸が平の清盛兄貴の小説で我慢しよ？

■ 三次創作はうちよそバリ、デリケートな作品になるからな（T  
RPGで学んだこと）

■ うちよそは繊細。

・ 対魔忍GOGOの現代異世界転生者『大真しのぶ』ちゃんのぶっ  
飛び度が試されているな

。 異世界転生者全員がぶっ飛んでいると思わないであげて

。 勝手に上げられる難易度

。 公式が二次創作に劣るとかやめてくれよ……？

## 16章 『期末試験』

### Episode 101 『期末試験』

……

……

…

時期はついに期末試験のシーズン。

うつとうしい梅雨もようやくあけました。

皆様はいかにお過ごしでしょうか？

私は2日間かけて無事に筆記試験を終わらせました。自宅に帰って自己採点をしましたが、前回の追試よりもいい点数である60点ラインを統一する形でテスト結果が返却されます。

そして今日は、3日目の実技試験の日。

入院中、陽葵ちゃんから事前に聞かされていた期末試験の情報の元、キャンプセットを整えてウキウキで学校に向かいました。

でも、登校したその時、あることに気が付いてしまったのです。陽葵ちゃんから聞かされていた話では確かに3人1組でキャンプを行うと。しかし五車学園の生徒は誰も、そんな装備を持ってきていないのです。

最初こそ、キャンプを行うための道具は貸出なのかな？と思いましたが、それもそのはず。あれは陽葵ちゃんが盗み聞きをしてきた情報だからこそ、私は事前準備ができたわけで他の一般生徒は知るはずもないのだから。

……別にズルはしていません。私には情報収集に長けた親友が居て彼女が私に情報を回してくれただけです。

しかし、五車学園に通うあらゆる他の生徒達に『なんやコイツ』と白い目を向けられ、時には脳天に落雷でも受けたかのような虹彩が星型に裂けた紫髪のギャル（ネクタイの色が青色だったので恐らく私と同じ1年生）にスマホを向けられてパシャパシャと取られたりしました。

これには私も流石に『あれー？ おかしいなー？ おかしいなー？』とか思い始めていました。そしてこれから話すのは五車学園地下にある地下のシミュレーションルーム前に存在するカフェテリアで集合した時の出来事です。（本当にあった怖い話風語り出し）  
ところで、将軍。

ホント、なんでもあるな。この国立学園。

五車町の本体、あるいは本部は『五車学園の地下にある説』まで浮上してきたぞ。

……

……

…

バンツ！

「日葵ちゃん！」

バンツ!!

「本当に！」

バンツ!!!

「ごめんなさい!!!」

「いえ、お気になさらないでください。これはちゃんと私が情報の精査と確認を取らなかつたことがいけなかつたのですから、陽葵ちゃんは何も悪くないですよ。ほら、立ち上がってもろて——」

「でも、でもっ！ 私があんなことを言わなければ……っ！ 日葵ちゃんがそんな本気のキャンプ装備を持ってこさせて、みんなから白い目で見られることもなかつたのに……っ！」

「うん。みんなが私のことを白い目で見ている要因の1つには、このキャンプセットの件もあるのでしようけど、きっと今は特に別の大きな要因が関係していると思うんだ私は。ね？　だからまずは頭を上げてもら——」

「本当にごめんなさいっ!!!」

「陽葵ちゃん……人の話は最後まで聴こうね？」

この場には、期末試験の実技試験を受けるために季節外れのインフルエンザによって出席停止になっている生徒以外の五車学園の制服を纏った1年生全員と、採点を行う複数の教師陣が集結している。

その中心部で陽葵ちゃんだけはこの前『稲毛屋』に行った時のような痴女の服装で、キャンプセットを背負った私に対してドラゴンクエスト1に登場した3連土下座王子のような……。深々と頭を下げたジャンピング土下座をしていた。

それもその筈、陽葵ちゃんが仕入れてきた期末試験のキャンプをするという情報は誤りで——正確には、キャンプの対象は五車学園の2年生に課される実技試験の内容だったらしい。

結果的に私は最大級の無意味な事前準備をして、この場に現れたという事になる。通学途中で何故、不審な目で他の生徒が私のことを見てきたのかそれも分かってしまったような気がする。

『アイツ、ネクタイの色から多分1年生なのに何してんだろいうなあ……』って思われていたに違いない。

陽葵ちゃんの土下座はまだ続いている。この場所をわきまえない土下座の行為に『私が絶対に許さなければならぬ雰囲気』を作っているのか？と思った部分はあったが、あの陽葵ちゃんだ。きっとそこまで頭が回って無さそうな余裕の無さは本人の必死な声からひしひしと伝わってきた。

一瞬、その真意を確かめるために本当にすまないという気持ちで、胸がいつぱいならばどこであれ土下座ができるだろう。例えそれが高温に熱された鉄板の上でも……！』というフレーズが脳裏を過ぎったが流石に友達にそれを強要するわけには行かなし、陽葵ちゃん

なら実行しかねないと判断したため踏みとどまって何ともない顔で立ち尽くすのだった。

「……………」

……この状況で一番つらいことは、今日はまだ何も悪いことをしていないのに、何故か私が陽葵ちゃんに土下座を強要させているみたいに周囲から白い目で見られていることだろう。

——さつきからずつと頭を上げてつて言ってるのにな！

両目を瞑って後頭部を掻く。

あのね。この地下のカフェテリア出入り口付近に居た生徒なら知っているだろうけど、私は「さつき」この集合地点に来たばかりなんだよ。別に土下座を強要させているわけじゃないよ。むしろやめて欲しいぐらいなんよ。

だから、その白い目で見るのを止めてほしいのとヒソヒソと『クレイジーサディステイツクレズ』とか、『病院で日ノ出 陽葵を襲った肉食系女子』とか、『関わる人間全てを病院送りにする才女』とか『立入禁止区間を発狂しながら全裸で爆走した女だからしょうがない』って話すのをやめろ!!!

全部、私の耳に入って来てんだよ!!!

(Episode78)

逆だ逆ウー！私は陽葵ちゃんを襲っていない！あの日も！

(Episode66)

(Episode68~70)

あの日も！あの日も!!!私が常に彼女から襲われている側なんだが?!?!?

てか最後の噂を広めたの誰!? 発狂していたのは私以外の全員だし！私は発狂してないし！根も葉もないこと言いやがって、ぶっ飛ばすぞ!!!

「あつ！ 日葵！ いたいたく！ 今日の登校は一緒じゃなくて、い

つもより遅れるって言ってたから先に行っちゃったけど無事に迷子にもならず間に合ったみたいでよかったぜ……ええ……う？」

「ああ……………」

そして絶妙に最悪のタイミングで鹿之助くんが、人ごみの足元を潜り抜けるような形で姿を現す。彼もまた周囲の野次馬のようにいつもの五車学園の制服姿で、双方ともに私服と痴女服構成のダブルひまりのやり取りに惨状に目が釘付けと言った様子だった。

……だから私は何もしてないですって。鹿之助くんまで私と陽葵ちゃんを交互に見て戸惑うのはやめて。

「ひ、ひま……あ、日ノ出さ……えつと。あの……っ」

彼はすごい困惑している。まずは私に話しかけるべきか、陽葵ちゃんに声を掛けるべきか判断に困っていることが〈心理学〉に頼らずとも、無意識に伸ばされた片手や乙女のように指先を口元に近づける様子から見て取れる。

「じゃ、陽葵ちゃん。鹿之助くんが探しに来てくれたので、私は向こう側でふうま君達と合流したいと思います。陽葵ちゃんは心寧ちゃんと合流してもらって……ね？ お互い、実技試験を頑張りましょうね！」

ゆえにとりあえずキャンプセットを背負い直してから、このタイミングを見計らってしどろもどろにも差し出された鹿之助くんの手を取る。私が彼の手に触れると彼の手は驚いたかのようにビクンと震えたが、手を振り払うような素振りは見られなかった。

「日葵ちゃん!？」

「……………あつ。え、えと。日ノ出さん……。日葵と何があつたかわからないけど、ど、どんまい……。あ、あと制服も対魔忍スーツじゃなくて指定の制服に着替えてきたほうが——」

「行きますよ。鹿之助くん」

「う、うん」



それよりも致命的な反応を返したのは陽葵ちゃんのほうだ。

この光景にドン引いた鹿之助くんの手を引つ張ってその場を離脱する私を、絶望のしたかのような涙目で視線を送っている。今にも『マアア〜』と泣き出ししまいそうな顔をしている。

そのうちガンダムに乗り出して、撃破した機体を『ろうそくみたいできれいだね』とか言い出しそう。

まったく水星のためきみたいな顔をして。

更に鹿之助くんが陽葵ちゃんの痴女服に関して いつものやつ “痴女服” との言及を聞き逃さなかったが、ここでその痴女服について触れると話が広がりかねないためツツコミを抑えながらそつと胸の奥に言葉をしまった。

そうか、陽葵ちゃん。その痴女服はいつものやつなのか……。

そういう性癖もね。うん。対魔忍世界だから思わず心配になっちゃうけど、そういう性癖なら私は止めはしないよ。人様の迷惑や日本国の〈法律〉における公然わいせつ罪とかで警察の御厄介にならないければ、好きなようにすればいいんじゃないかな。

……それと。この瞬間で最も辛いことは、五車学園の生徒達の注目を浴びていることとは別に、鹿之助くんの手を引く私の進行方向の五車学園の生徒が何も言わずに道を開けてくれることが、私に対する生徒達の評価が言わずもがなで……はい。

Episode 102 『3人1組』

……

……

…

三連ジャンピング土下座をする陽葵ちゃんを群衆の中へ取り残したまま、迎えに来てくれた鹿之助くんの手を引きながら入学当初から親しくしている友人の元へ向かう。私の進行方向上に居る他の五車学園の生徒達が、海を割ったという伝説を残すモーセのように道を開いた先に彼等は居た。

今日も元気にふうま君を中央へ、バチクソやり合っている心寧ちゃんと蛇子ちゃんの姿。

それと、私が知らない女子生徒の姿も1人見受けられた。

彼女は五車学園の制服に薄橙色のつば付き帽子を被り、篠原さんとは逆の上縁メガネを掛けたピンク色のマッシュルームヘアをした子だ。この試験会場にいるという事と、首元のネクタイの色が青色なことから彼女もまた私と同学年であるようだ。

「おつ、青空さん。無事に鹿之助と合流できたか」

「ええ。私もちようど助け舟がほしいところに、鹿之助くんが人をかき分けて私を探しにきてくれたのを見つけたので、合流して来た次第です」

「それにしても……その恰好は準備万端って装備だな。登山用の装備か?」

「う……これは……」

「だが今回の期末試験の服装は原則制服らしいぞ。インナー程度であれば認められると思うが……」

「……………それは、あとでちゃんと着替えておきます……」

合流できたところで、今日も何気ないふうま君の何も考えていないような発言が私の心を傷つける。

「いやですね。ふうまくん、彼女の装備は登山用ではなくて平野のキャンプ用の装備ですよ」

「え？ そうなのか？」

「ここら辺の装備については実際に取り扱ったことのない人だとわからないですからねえ。うふふ♪」

「あ、はい。そうです。えつと……」

「はじめまして、持田<sup>もちだ</sup> めぐみといたします。青空 日葵さんですよね？ ほら、噂の転校生の」

「うっ」

彼女は持田めぐみと名乗り、私へペコリと緩やかに頭を下げてきた。『噂の転校生』という言葉に、ふうま君の何気ない発言で傷つけられた私の心に更なる追撃が突き刺さる。

のほほんとしたのんびりとした口調から、彼女がマイペースな性格が予見できる。

更にその……腹が出っ張っているというわけではないが、モチモチとしたふくよかなボディはサイレントキラーの名で幅広く知られる餅のようで——胸部の乳袋も白い布で包まれているがゆえにまさに餅だった。

「うわーん！ 日葵ちゃん！ 待って〜!!!」

「あうっ」

ここで人ごみをかき分けて、陽葵ちゃんが私達のグループに合流してくる。

合流と同時に大荷物の私の背中めがけ、大しゆきホルドの要領で陽葵ちゃんが飛び乗ってきた。お、おも……っ！

ま、まあ？ 確かに私も『陽葵ちゃんは心寧ちゃんと合流してね』って言ったし？ 心寧ちゃんがここでふうま君争奪試合会場に存在している以上、陽葵ちゃんも遅かれ早かれ来ると睨んではいたが……ま

さかこんなに合流が早いとは……。

「あく。日ノ出ちゃんだ。うふふ、青空ちゃんのこととは日ノ出ちゃんからよく聞いていて。今回の実技試験で自由にチームを組むことができたならよろしくお願いしますね？」

「……ひ、陽葵ちゃんから私のことをよく聞いている？ ……さか」

「うふふ」

そんな様子の私達へ向けて持田めぐみと名乗った彼女は、大麻忍あぎりのように自身の人差し指をその肉厚な下唇に当てて笑う。

更にここで気づきを得る。そういえば、陽葵ちゃん。私が洋館帰りでの入院時に『おもちちゃん』なる人物に色々話したと聞いていたような気がする。もしかして、今、私の目の前でまったりと話している人物こそ陽葵ちゃんに誘い受け&バリネコ日本語を教えた張本人おもちちゃんなのではないだろうか？

彼女も軽装であるもののキャンプセットを所持している。と言っても私の平地用のキャンプセットとは異なりピッケルなどを含めた登山用のキャンプセットのようではあるが……。

「装備が気になりますか？ わたしは登山が大好きなので、青空ちゃんの装備とは違って山用なんですけど」

「そう、みたいです。ピッケルとか登山用ロープ、全身ハーネスなどは私の装備品には含まれていないものですから……。登山用となるとやはり装備も軽量化されているものなのですか？」

「はい。その分、荷物も減って、活動しやすくなりますからね」

そんな私の視線に気が付いたのか、持田さんはのんびりふわふわとした口調で私の問いかけにも応じてくれる。

「あ、そういえば——」

ふと、ここで今回の期末試験の内容がキャンプではないのであれば『一体何をするのか?』とふうま君に尋ねようとすると、紫先生の声で館内放送が響き渡った。

「時間だ。これより期末試験：実技の部を開始する！ 今回の試験内容は部隊戦。こちらで指定した3人1組でチームを作り、他のチームとの戦闘訓練となる。負けたチームは再試とする！ それではこれよりチーム分けの発表を行う。電子掲示板にて自身の名前を確認後、各自集合後、隣の部屋で対戦表を受け取って作戦会議に移れ！」

あれほどガヤガヤと賑わっていた待合室は一瞬のうちに静まり返り、やがて張り出された組み合わせ表を確認しながら次々に退出していく。陽葵ちゃんもここでやつと私の背中から降りてくれた。

組み合わせによってときどき歓声や苦悶の声上がるが、やはり学生間でも相性の良し悪しがあるようだ。

この様子では好きなペアでチームを組んで対するチームに立ち向かうという方式にはなら無さそうだった。既にふうま君、鹿之助くん、陽葵ちゃんの3人はこの期末試験の方式に対して、この世の終わりのような沈んだ顔になっている。

——別に邪神が世界を牛耳っているわけじゃないんだから、その顔をするのはまだ早いぞ。

そんな私もできることならば、私も慣れ親しんだこの場に居る誰かとは一緒に組みたいものだが……駄目だったときは駄目だった時だ。うまく立ち回って再試験にならない程度には生き残ること・合格することに尽力を尽くそう。

……それにしても、私としては鹿之助くんのことが一番心配だった。

私は参加すらしたことがないが、体育の授業でのアスレチック踏破ではいつも最下位だし、日常生活においても僅かなフオローが必

要だと思うほどには心配でたまらない。出来ることならば護つてあげたくは思うが……。

「おつとおつ？ わたしは陽葵ちゃんと速水ちゃんと同じチームですね。よろしくです」

「そうみたいです、97組目……。」

「わっ。ほんとだ！ でも……。」

「……言っておきますが、陽葵ちゃん……。」

「わ、わかってるよ。日葵ちゃんと同じチームになれなかったことは残念だけど、まだ対戦相手として会えるかもしれないからね！ もし対戦相手になったら私が日葵ちゃんを屈服させるんだ！」

張り出された電子掲示板を眺めていると、持田さんが声を上げ、それに続いて心寧ちゃんと陽葵ちゃんも反応を返す。できる女の心寧ちゃんは、陽葵ちゃんがチーム決めの際に余計な事を口走ってしまったように先回りして持田ちゃんに対するフォローを入れていた。

陽葵ちゃんが私と同じチームに加わらないことに関して、持田ちゃんの気持ちを愚弄することを言い出すんじゃないかと思っただが……陽葵ちゃんも陽葵ちゃんじゃなくとそここのところは理解しているようだ。

でもやっぱ、まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんを牽制できるほどの恋愛クソ強女は一味ちがうな！ ちゃんと人の気持ちを察することに長けているわ！

……別に蛇子ちゃんは人の気持ちを察することに疎いってわけじゃないけど。

蛇子ちゃんは、ふうま君が私の前で鹿之助くんの好きな人が神村さんだって暴露しようとしたのを止めたりできる——むしろ私達のグループ4人の中で一番、フォローや空気の読み方が上手い友人なんだけどさ。

やっぱり陽葵ちゃんとのペアでは、心寧ちゃんは蛇子ちゃん梓なんよ。

されども陽葵ちゃんの『屈服させる』発言は頂けないなあ……。私が陽葵ちゃんに対して腕力では敵わないと言っても、私が陽葵ちゃんを分からせる方法方法を屈服させる方法なんていくらでもあることを彼女はまだ分かっていない様子だ。いつまでも『日葵ちゃんは誘い受け』だの『バリネコ』だのその入院中の渾名が適応させられると思っただら大間違いだって言うところを見せつけなきゃ……。 (使命感)

3人は私達へ向けて、それぞれ個性溢れる手の振り方で振ってから試験会場へと歩いていく。

さて、残されたのは私と、鹿之助くんと、蛇子ちゃんと、ふうま君の4人だが……。

「おっ！ 日葵！ ふうま！ 俺達の名前があつたぞ！」

「やったー！ 鹿之助ちゃんと一緒だ〜！」

「ああ、よかつたな」

「ええ、本当によかつたと思います」

続いて、鹿之助くんと蛇子ちゃんの2人が自分の名前を発見して手を取り合って喜んでいる。そんな2人を他所に、わたしとふうま君は顔を見合わせるが……。どうやらその中に私達の名前が入っていない。

更に気になることに――

「あの、鹿之助くんと蛇子ちゃんのところのチームですが……。1人足りないですよね？」

「ああ、確か3人で1人チームだよな？ 本当はあと1人居るはずなんだが……」

「ええ〜!? という事は蛇子たち2人なの?!」

「ちよちよちよちよつと待ってくれよ！ 流石に俺と蛇子だけで3人も相手にするのはキツいって！ 武闘派の日葵と蛇子の組み合わせなら大丈夫かもしれないけどさ、俺じゃまだ無理だつて！」

「ちよつと、鹿之助くん……。？」

「ちよつと、鹿之助ちゃん……?」

「でも、実際そうだろう!」

相手が乙女であるというにも関わらず武闘派という単語を強調する彼に反応して、鹿之助くんに詰め寄る私と蛇子ちゃん、ふうま君の背後に隠れる鹿之助くんのはひとまず置いて……。

そう。電子掲示板には2人の名前が書かれているだけであって、3人目の名前は空白だったのだ。

否、正しくは書かれているのだがその文字が空白だと言っても過言ではないほどに滲んでしまっていてよく見えない。〈目星〉を用いた観察眼を以ってしても見抜くことはできそうにない。それほど念入りな滲み加工だ。

「表記され方も何か変、ですね? その文字が滲んでいて……よく見えません。『水城<sup>く</sup> ゆきかぜ<sup>は</sup>』『相州 蛇子』『上原 鹿之助』とありますよ」

「もしかしてシークレットって奴じゃないか? でもシークレットにするような奴なんか、五車学園の生徒に居たっけなあ……?」

「その詳しいことはここで考え込むよりも、先生方に聞いてみた方がいいかもしれません」

「そうだな。蛇子、鹿之助。青空さんの言う通り、ここで悩むよりも前に居る紫先生に聞いてみた方がきつと原因の究明が早いかもしれないぞ」

「ううう……それじゃあ、ちよつと怖いけど行ってくるぜ……」

「うん。わかった。それじゃあ、またあとでね。ふうまちゃんに日葵ちゃん。2人も頑張つてね」

「おう、そつちもな」

「ご健闘をお祈りします」

私とふうま君の後押し付の見送りに、鹿之助くんは緊張した面持ちで。蛇子ちゃんはこれぐらいの不安要素には慣れっこなのか堂々と



した様子で前へ赴いて試験会場へと向かって行った。

待合室に取り残される、私とふうま君。

当然、先ほどから電子掲示板で自分の名前を探しているのだが見つからないのだ。それはふうま君も同じようである……—

……

……

…

——30分後……。

「ふうま君。私、気が付いてしまったのですが……」

「奇遇だな、青空さん。俺も気が付いたことがある」

「俺と青空さん、掲示板に名前が存在しないな？」

「私とふうま君、掲示板に名前がないですね??」

互いに顔を見合わせて、お互いに電子掲示板に指を指した。

## Episode 103 『カフェテリアでの閑話』

五車学園の生徒達が指定された試験会場へ向かうためぞろぞろと退出している中。

私とふうま君だけは待合室に設置されたカフェテリアの中央、向かい合わせのソファーに悠々と全身の力を抜く形で身を委ねていた。時間もできたことだし、ふうま君に指摘された服装に関してはロツカールームで既に着替えている。

私はなんだかまだ（多分）されたことはないけど、陽葵ちゃんに全身を嘗め回されているかのような謎の悪寒に悩まされていた。ゆえに首と背部を背もたれへ完全に預けて天井を見上げながら、FXで有り金をすべて溶かしたような顔で悪寒を振り払うため精神統一。

ふうま君は両ひざに両肘をつけて五指の指先を合わせながら前かがみになりながら神妙な顔している。

やがて、私の逆さまになった視点に映る最後の五車学園1年生の生徒の姿がカフェテリアからフェードアウトしていったのだった……。

「……………ふうま君」

「……………なんだ？」

「最後の生徒が部屋から出ていきました……」

「……………そうか」

「……………ふうま君？」

「……………どうした」

「ふうま君は最近、何か悪いことしましたか？ 私達だけこの部屋に取り残されるのって何か変なんですけど。これから蓮魔先生に呼び出しされて、こっつり怒られるような雰囲気なんですけど」

「……………。俺は……青空さんほど、悪さはしてないな……。確かにつまらん授業はよくサボっているが……」

「ああん!？」

「?!」

ふうま君の言葉に私は全身脱力させていた上半身に力を入れて素早く起き上がる。

仮にふうま君が私のタッチ圏内に居たのならば、えっちなお店で働いている蛇子ちゃんに展開したような鋭い〈頭突き〉が彼の鼻頭目掛けて突っ込んでいただろう。

私のそんな動きに彼は、片目だけを丸くして私の動向に驚いているようだった。ビビるわあ！

「今、聞き捨てならない言葉が聞こえた気がするんですけど?! なんですか?! 『青空さんほど悪さしてない』って!? まるでそれじゃ、私が極悪人みたいな言いぐさですね?!」

「い、いや、でも、そうじゃないか? 最近の青空さんの動向については噂でよく耳にするが……。病院で日ノ出さんを襲って、その日ノ出さんに課題を押し付けて……。エアコンを分解して、教卓の鍵をこじ開けて、出席名簿表を分解して、桐生先生を寝込ませて、つい先日も3年の上級生にドロップキックをかまして病院送りになっていたって聞いたぞ」

「お、おい! お前ツ! ふうま君お前! この野郎! 私が陽葵ちゃんに襲われている現場に居合わせてよくそんなことが言えるな!?! あと別に課題は押し付けてまーせーんー! あれは陽葵ちゃんとの合意の下で代理してもらっただけーすうー! エアコンは悪臭がするから修理したただけだし、教卓の鍵は適当に番号を押したら開いちやっただけだし? 期末試験前日の上級生にドロップヘキックをぶち込んで病院送りにした件は……。原因は上級生<sup>3</sup>が作りましたし、わたし悪くないんですけど!?!」

「……十分じゃないか?」

「十分じゃないですよ?!」

「あと……青空さん、『高位魔族』……。泣かせたんだって?」

「ふあつ、な、なぜその話を——ハッ! な……。泣かせてないです」

「鹿之助から聞いたぞ。まえさき市で青空さんが何かをして高位魔族を泣かせたって——」

「だから泣かせてないですってば。(殴られたので、ちよつと小突いたら)勝手に泣いただけです。あれも(事の発端を辿れば)私は悪くないもん!」

「青空さん……」

(もうっ! 鹿之助くんのおしやべり……)

鋭い尋問に足を組み、姉畑支遁のように頬をぷくくと膨らませて、そっぽを向きながら不機嫌そうにふてくされた顔をふうま君に見せる。これでまえさき市で人間風情に泣かされた高位魔族な方のえつちなお店を開いている蛇子ちゃんの話は強制終了できるはずである。これは明らかになふてくされた不機嫌な顔だった。

以前、ふうま君は7月の最初の登校日、私のこういう顔に謝罪してきたのだ。私としてはふうま君とはその話をしたくはない。だから話を中断させるためにも頬を膨らまして、更なる追及を強制終了させるのだった。

そんな私にふうま君は、前かがみだった上半身を起こして言葉には出さないが『参つたな……』とでも言いたげに前髪を左手で触り出す。

ちなみに上級生にドロップゴルシへキックをこまました件についてだが……。あれは、本当に。私は悪くない。

事の発端と経緯は、鹿之助くんが赤ネクタイの上級生男児に絡まれていたことであつた。

その上級生は以前、私の病室へとカチコミへとやってきた黙れドン太郎二車 骸佐の腰巾着野郎の1人だった。上級生をぶつ飛ばした後で鹿之助くんの話では彼が私に対して何か酷いことを言つたらしい。それで鹿之助くんが言い返したところ、下級生にもかかわらず先輩に舐めた口を訊いたとかで鹿之助くんの胸倉を掴み上げ、宙吊りにする程の喧嘩に発展したのだ。

まあ、その悪口に関して私はどうでもよかつた。別に私を苦手とする奴等が陰口を叩くなら好きにすればいいし、そんなに気に入らないなら、五車学園の3年生の小童程度の存在ならばテキストに相手に

なってやるから直接言いにくければいい。

……ただ。

——ただな？

その3年生の上級生とあろうものが、その発言を咎めた年下の<sup>鹿之助くん</sup>下級生の顔面を、あれは多分……ライターの火が付いたままの手。(表現としてはこうなるが、私が確認した時にはまるで掌から火を噴いていた様子ではあった(カルティスト予備軍として認定済み。徹底的に素性を調べ上げて、危険なら一族もろとも根絶やしにしないから))

そのような火の手で一般人である彼の顔を焼こうとしたのだけは許せなかった。それが例え脅しであってもな。

まあ、彼の顔面を殴るのは1000歩譲って許そう。あとで絶対お見舞いはしに行くし、顔面に青あざを作ったパンダ様相の鹿之助くんはきつとかわいいし、私の加虐心を煽ってくれるに違いないからだ。しかし、炎で彼の顔面を焼こうとしたことは許せなかった。顔面という将来、様々な場面で用いる外見的特徴に後遺症を残そうだなんて。例えそれが魔界医療で治せるものだとしても。

そんなことをしていいのは、カルティストとその一族のみだと決まっている。

ここまでくれば、あとはお察しの通り。

丁度、思いがけず、偶然、たまたま、奇遇にも、計らずとも、〈幸運〉にも私が曲がり角の先でその殴る瞬間に居合わせていたものだから。胸倉から手を離されて、尻もちを着いてカルティストの拳から逃げられない鹿之助くんへカルティストの拳が着弾する前に、助走からの〈跳躍〉で身長の2倍……飛距離(約3m)を稼いでから顔面に

『わーい！わーい！とリヤー！』  
ゴルシ式へキツクを叩き込んだよね。

その腰巾着の上級生は綺麗に吹っ飛んで、昇降口のガラス扉を突き破って体中をそのガラスでズタズタに引き裂かれたのだ。カルティストにしては柔らかい彼は、たかが女子生徒の一撃程度でガラスによる切り傷と脳挫傷で入院してしまった。

それも期末試験の時期とも重なってざまあみろって感じ。殺せないことは残念だが、殺すにはまだ期は熟していない。だから重傷を負わせる程度で済んで本当に良かった。まだ殺せない私を慰めるような彼のまるで電動マツサージ……いや、殺虫剤を吹きかけられた死にかけの蟲みたいに細かく足を痙攣させて、みじめな壊れた玩具みたいな拳動は気分晴らしにはできたし。

当然、いつものように生徒指導部の蓮魔先生に絞られた訳だが……。なぜか三者面談には発展はしなかった。なんでも向こうの親御さんから今回の件は内密にしてほしいとの申し出があったらしい。自身の息子が負傷しているのだから、こういうものは目の色を変えて詰問してくるものだと、ついでに親族の顔を割る良い機会だと捉えていたのだが……。

考えれば考える程に奇妙な話だ。この隠蔽気質、親族もろともやはりカルティストか。大ごとを隠蔽するための荒波を立てない工作活動に酷似しているな。

とにかく、蓮魔先生から絞られているからこそ、この場に私とふうま君がカフェテリアで取り残された状況を鑑みた結果、私はこれ以上に叱られるような行動に見覚えはないのだ。結果的に消去法で考えるならば、私としてはふうま君の方が何かをやらかしたと考えに至った。

ま。これが今。ふうま君の話している私が上級生にゴルシ式ドロップへキツクを叩き込んだ経緯の話だ。

ポコンツ

「あいたっ」

そんな色々な追求を免れるためのふてくされた態度を取っていると、厚紙のバインダーか何かで後頭部を一発軽く頭を叩かれた。

ふうま君と2人で取り残され、カフェテリア備え付けのソファアームに座った時のように、そのまま背もたれに背中と後頭部を預けて背後……天井を見上げる。

そこには今日も今日とて、藍色の髪を後頭部で束ねLEDライトのような赤い虹彩を持った紫先生が、呆れたかのような顔で私の背後に見下ろしながら立っているではないか。

「五車学園高等部、初めての期末試験前だというのに随分とリラックスしているようで何よりだ。青空、ふうま」

「……………」

「あ、紫先生。おはようございます。いやー、だって……このソファー高級ソファアーム張りにフカフカしてて座り心地が良いんですよ？　ここでリラックスせずについてリラックスするんですか。おっそうだ。紫先生もご一緒します？」

「不要だ。それよりもお前等の配属チームが決まった。無駄なおしゃべりなんかしないで黙ってさっさと私についてこい」

「ですって。ふうま君。私達の名前が電子掲示板に乗ってなかったのは仕様だったみたいですね」

「……………ああ。そうみたいだな」

紫先生の言葉に私達は立ち上がり、彼女の誘導に続く。

通路にはモニターが設置されており既に道中では、五車学園の教師らしき人物がバインダー片手に実技試験の評価をしている姿が散見される。

立ち止まると紫先生の叱責が飛ぶため、私も彼等に混じってまじまじとそのモニターの映像を眺めることは叶わなかったものの。

そのモニターから得られた最低限の情報として、五車学園の校舎と校庭、校庭付近の森林地帯とプール区画が映し出されているのが見え

た。これは期末試験の事前情報プリントに掲載されていた景色と同じ画面だった。さらに神経を研ぎ澄ませ（聞き耳）で周囲の様子を探る。なにやら複数のシミュレーションルーム室内から衝突音が聞こえたような気がした。

地下にも関わらず、五車学園の校庭を舞台に戦闘を繰り返していることについて疑問が沸き上がったが……。そういえば2カ月前に鹿之助くんやクラスメイト達がハードな屋外アスレチックを踏破していたこともあって、サバイバルゲームのように箱庭が設置されている部屋なのだろうと合点がいく部分もあって勝手に納得していた。

進行の並び順としては、紫先生。私、ふうま君の順で歩いており、私はご覧の通り大荷物だ。その荷物は正面の紫先生をすっぽりと覆い隠してしまうほどの量であったため、ふうま君が私に釣られて無関係な場所に行ってしまうぬように適宜背後を振り返っては、先頭に紫先生が居ることを示す。

またその道中での彼の仕草と表情だが、私が振り返ると注目はするが、その注目の仕方が……。どこか——何かを観察しているかのような……。あの7月の登校初日と同じジロジロとした目をしていることに気付く。

その異常者を見るような目は私としては気に喰わなかったが、ふうま君とは友人関係だ。必要以上に突っかかる必要はないと判断して見られている時は愛想笑いを返して置くのだった。



## Episode 104 『組み合わせ』

「この部屋だ。入れ」

「はい」

「はい」

紫先生はある扉の前で立ち止まると、鋼鉄製の自動ドアを開けてまるで囚人を牢獄へと促す看守のように私達へ中に入るよう促してきた。

私達はこれを特に拒否することなく室内に入る。

ここまで来ると流石にこれから蓮魔先生と紫先生が雁首揃えて、説教サプライズではないかと覚悟を決めることになったが、嬉しいことにその予想は外れることになる。

「……………わぁ…………」

私はこの部屋に入るのは初めてだった。

否、正確には2回目だが……。記念すべきその1回目が、真田先輩によつて半強制的に連行されたであり、この部屋をじっくりと見回すなんて余裕は与えられなかったことにある。

あの時は入室と共に投げ飛ばされ、槍撃を往なし、へ回避するのので精いっぱいであった。だからこうして、ゆつたりと周囲を見渡すことができたのは初の試みとなる。

私が普段の参加している体育の授業は常に地上で行われている。紫先生の監視下の元、中学生……中等部の学生に混じつてのランニングや腕立て伏せなどの基礎体力作りが主な内容となっている。

ゆえに今見ている光景は新鮮で……。今こそ普段映像越しで見ているようなそれらしい機材は設置されていないが、いつも鹿之助くん達はこの巨大なフィールドでアスレチック踏破などの専用機材を置いて訓練しているのかと驚いた次第だった。

……  
……  
……

通された室内は巨大な一面が白い部屋だ。

室内の床は東京の地下デパートに存在する光源のように見渡す限り正方形のライトが敷き詰められた空間で、天井はまるで地球防衛軍5で登場するベース228基地のような作りになっている。

肝心の壁はまるでダム の 壁面やブルドーザーの爪のような一定の間隔でくぼみがあつて、そして一定の間隔で非常口と思しき出入り口が複数存在していた。

私としてはおもむろに親指を突き出して、falloutシリーズに登場するVaultボーイのように親指を突き立てて左右の片目をそれぞれ一定の間隔で開いたり閉じたりしながら、ぐるぐると室内を見渡す。

「何をやっているんだ？」

ここでふうま君の声が掛かる。

私が紫先生の誘導そつちのけで立ち止まり、親指を立てながら左右の片目を交互に開いたり閉じたりしていることが気になった様子だ。

友人とはいえ、先ほどからジロジロとこちらを観察している彼からは気味の悪いものがあつた事だし、下手に隠すことで交友関係が崩れてしまう事は好ましくないと判断して説明へと入る。

「室内の体積を測っています。大体この部屋の1辺は約75mぐらい。私達が入ってきた出入り口は特殊防火設備にも似た扉構造かつ、大きいサイズの扉を用いているので高さを2m30cmと仮定した時、高さは約25m30cmですね。この部屋は壁にくぼみやら斜面があるので正確ではないですが、室内が直方体であると仮定した場合、体積は140、625?、底面積は5、625㎡ですね」

「……空間把握能力がすごいな」

「いえいえ、そんなことはないですよ。ゲームやコミック本で学んだ知識と小学生の面積と体積の算出方法を用いただけなので、方式さえ理解していれば誰でもできるちよつとした計算です」

「なるほど。……」

「青空ッ！ ふうまッ！」

そんな疑問を投げかけてきたふうま君に対して解説をしていると、一足先を歩いている紫先生からの怒号が飛んできて……はいはい、そんなに怒鳴らなくてもすぐに行きますって。

でも空間把握はとても大事なことなのだ。特に幅に制限のある室内での戦闘は、対象を壁際にどのようにして追い込めるかや、放火をした場合の煙……一酸化炭素の充満具合。攻撃の射程管理。爆発物の有効射程範囲などを計算するうえでかなり重要な判断材料となってくる。

怒られてはしまったが、今の調査は十分な情報の収穫ではあった。

「……うー」

紫先生の進む先に4人の集団が居るのが目に入った。

この部屋に入った当初や室内面積や距離を測っている際には、ひじきぐらいの大きさだった為『採点する教師の集団かな?』と思ったものだが、近づくにつれてその五車学園の制服姿や会話内容から、彼等が私達と同じ五車学園の生徒であることがわかる。

おまけにその4人中、2人は既に私は見知った顔だった。

「なんで俺がてめえみたいな箱入りお嬢様と組まなきゃなんねーんだよー！」

「奇遇だな。私も貴様のような不良生徒と部隊戦など願い下げだ。出来ることならば私は磯咲さんと組みたかったよ。だが、これも先生方の取り決め。せいぜい私の邪魔をしなれば、良い成績だけは取らせ

「やる」

「てめえア！何様のつもりだ!?!」

「二車くん、今回の期末試験での作戦なのけど……」

「見ろ、あいつ等は仲間割れをしている。作戦なんかが必要だと思うのか?」

「そ、そうは言っても、無策で戦闘を試みるのは——」

そこに居た見知った顔とは、鹿之助くんの、種れと黙れドン太郎神村 舞華と二車 骸佐だった。

今日も今日とて当然のようにバズーカ砲を持参している神村さんは、銀色に輝く金属製アーチェリー用の弓を片手に携えた、漫画ドリフターズに登場する那須 与一のような髪型をした女子生徒と口論している。

一方で二車黙れドン太郎 骸佐は大太刀を腰に差しながら、左右の両腰部にはホルスターと拳銃を身に着けた健気に話しかけているイエローゴールド色のメガネを掛けた優等生っぽい女子生徒と口数少ない一匹狼風を気取って話している様子が伺えた。

「……」

うん。なんだろうな。私の服装はごく一般的なキャンプで使用される軽装な服装から制服に着替えたおかげで馴染んではいるんだけど……五車学園の制服を纏った彼女達を見ると、ふうま君の指摘が無かったら今頃、私ひとりだけが場違いな場所に居合わせてしまっただかのような状況に晒されただろう。

仮にその場の空気を例えるならば……そう……大手企業の面接で私服の格好で来てくださいと言っていたのに、実際に会場に来てみたら参加者全員リクルートスーツだった時のような……。前世での苦しい思い出。しかも、建前を読み取れない学生として分類されて落とされるまでがセット。

お前が『「ラブな格好でええから」私服で来てください』って言ったんちゃうか！言ったん

ちやうか!? って、採用担当者の首を絞めなくなるやつ。……今回に限っては私が情報の精査を怠ったせいによるものだけど。

……まだ就活生が居るのにトイレ前の休憩室で同僚とゲラゲラと笑い話で不採用の話をする面接官。大手企業だからこそ笑えない。人の心とかないんか？

「ふうま。お前は弓走ゆほしりと神村かみむらのチームに入れ。青空は二車にしゃと磯咲いそさきのチームだ」

既に『なかよく・きょうりよく!』なんて不可能そうな雲行きが怪しい現場で、紫先生はさつくりと簡潔に私とふうま君をこの2グループで余った一枠に割り振った。

割り振られたチームの反応はまちまちだ。ふうま君が向かったチームでは……。

「げっ。寄りにもよって私のチームは不良生徒2人がメンバーか。まあ、青空と組まされるよりはマシかもしれないが……」

「青空に比べたら、ふうまの方がまだマシってのは……言いたいこと、わかんねーでもねーな」

「……………」

私を一瞥してから右手で後頭部の髪を掻き上げる神村さんと、初対面の弓走さんに汚物を見るような目つきでなじられる私。一呼吸置いて複雑そうな顔でこちらをみるふうま。

……。……そんな目でこっち見んな、ふうま。

そのグループの中で、最低の人気層に居る私をそんな目で見るんじゃない。

神村さんはともかくとして、既に弓走とかいう面識のない女子生徒

からボコボコにされているのに、私に与えられる追加の精神的ダメージがハンパないことになってるでしょうが。

そんな憐れんだ目で見られるぐらいなら、ジロジロと視姦されていた方がまだマシだ。

ああ……鹿之助くんが恋しい。鹿之ニユウムとアセットシカアノニ、シカアルロンSONに加えてオツキ♂シカアトシンの補充が必要だ。直ちに鹿之助くんとの触れ合いが必要だ。

鹿之メーターがWARNING！ WARNING！

「ふうま、貴様にも言っておくが私の邪魔だけはするなよ」

「ハンツ！ この場合、遠方からちくちくヤワイ攻撃をすることしか能がねえてめえが俺達に指示してんじやねえよ。てめえの存在の方が、邪魔になる間違いじゃねえのか？」

「貴様ア……。二度とその減らず口を開けないよう、ここで射貫いてやろうか!？」

そういえば今回はちゃんと最初に指定されていた通りに3人1組の団体戦のままで行くようだが、あっちのチームは連携がガタガタになりそうな予感はある。と言っても――

「あ、青空さん、こ、今回の実技試験……よろしくお願いしますね」

「……はい。今回はよろしくお願いします。……えと、磯咲さん。

……あと二車さんも」

「チツ」

「……………」

こちらは既に彼女の笑顔が引きつっているとはいえ、磯咲さんが友好的なので何とかかなりそうだ。

でも黙れドン太郎に対しては――怒っちやイカン。怒っちやイカン。どうせ、コイツとは期末試験の短い間の付き合いなのだ。こちらの勝ちが確定したところで、“背後からの不意打ち”で後頭部を

ノックアウト打撃して張り倒しても構わないだろうが今はぐっとこらえる。

「寄りにもよって不謹慎特盛爆走女と一緒に。まあ、この試験であのメヌケに引導を渡せることを考えりや、これはこれでありだな。俺の方が優れてるってこと、見せつけてやる」

……ああん？　いまお前、私のことを不謹慎特盛爆走女つつったか？

まず、どこからその渾名が生成されたのか尋問したいところだが……。

ふふ、面白いことを言うではないか小僧。

前言撤回。

やはりいつかおまえには、ミッドサマー流・患者の皮剥ぎマークか、血の鷲と化したサイモン、森の熊さんクリスマスチャン……好きな最期さいごを選ばせてやろう。

## Episode 105 『作戦会議《前半》』

「ではこれより、60分間の作戦会議時間を設ける！ 60分後、期末試験実技を開始する！」

紫先生はそれだけ告げると、バインダーでパタパタと顔を扇ぎながら、出て行ってしまった。

就活生時代の教訓を生かすならば、この期末試験開始前の60分間の作戦会議も恐らく採点に含まれていると考えるのが妥当だろう。『このグループディスカッションは選考に関係ありません』というクソ説明張りに怪しい動きでしたよ！ 紫先生！

つまり私はチームメンバーの意見を尊重し合いながら、最善策の作戦を立案すればいいというわけですね！（就活x回目の教訓）

だがしかし私は磯咲さんと黙れドン太郎の2人と作戦会議を開く前に、まずはふうま君御一行の様子を観察する。

第三者視点から彼等の動きを観察していると、今回の期末試験の内容は団体模擬戦だということを忘れていたようなやり取りをするパーティではあったが……先ほどの初顔合わせ時よりは改善の兆しが見えていた。

それは折り合いの付かない神村さんと弓走の2人に対してふうま君が仲裁に入り、なんとか団体模擬戦を成し遂げようと動いている姿だ。とても纏まるような兆しは見せていないが、それでも形だけでも2人を室内の隅に連れて行っては差し当たりのない会話を展開して仲良く……とまでは行かなくても、最低限の情報共有と共闘ができる状況は作れるように尽力している様子だった。

彼等の作戦会議場が遠い場所にあつて〈聞き耳〉盗聴することはできないが、それでもコロ先輩との交流によって僅かに鍛え上げられた〈読唇術〉で何を話しているのか探りはいれる。

今、彼等は自分達がそれぞれできることを話しているようだ。ふう



ま君はいつの間にかに手にしていたシンプルな刀。神村さんは洋館事件でも派手にぶっぱなしまくっていたロケットランチャー、弓走はあの見た目通り弓矢を使うことができるらしい。

ん？ んっ!?

い、今。

弓走が弦を引いて弓矢を実際に射ったように見えたのだが???

あれ？ つまり、という事は……この室内ではVRゴーグルを用いたバーチャル世界での模擬戦闘ではなく、実際に殴り合うような流れになることということなのだろうか？

ここに来るまでの間、確かに他の試験会場から激しい衝突音が聞こえていたこともあったが……。

待つて欲しい。ツツコミが追いつかない。想定していた期末試験で行われる模擬戦闘が仮想空間等ではなく、実際に相手を物理的にシバき合う内容に動揺を隠せない。……それでもワンチャンVRゴーグル使用の可能性はあるので、ひとまずは分析に思考を回す。

ふうま君のチームは『ふうま君の近接戦闘』、『神村さんの遠距離〜中距離戦闘』、『弓走の遠距離戦闘』と実にバランスの整ったグループとなることを指し示している。

一方でこちらは『青空わ 日葵たの近接戦闘』、『黙れドン太郎の近接戦闘』、『磯咲さんの中距離戦闘』と、弓走のような遠距離攻撃が可能な狙撃タイプがない。

紫先生との初模擬戦闘のように武器を貸出してくれるのであれば、迷いなく私は射程の長いアサルトヘライフルか12ゲージヘシヨットガンを選んで遠距離対策をしたものだが……今回は武器の貸し出しを行っていないらしい。恐らくこのキャンプセットを持参して来てしまったことに理由がありそうだが……。

とにかくふうま君のあの行動によって、こちらの方針もある程度さだまる。

黙れドン太郎によるイキリ無作戦での突貫は、私達の敗北……期末

実技試験の赤点の危険性がある。やはり勝ちに行くならば、磯咲さんが話していたように何かしらの作戦を立てるべきだろう。

「おい、露出狂の痴女野郎」

「おゝん？」

ここで黙れドン太郎から聞き捨てならない渾名が私に浴びせかけられる。これまで囁かれてきた噂を上回るような内容を遠慮なく浴びせてきた彼に対して、こちらとしても不機嫌かつ眉間にしわを寄せた形で振り返った。

「期末試験の短い間の付き合い」 だとしても、先ほどから失礼で許されねえ一線はあるのですよ。

背後には模擬戦が始まってすらいないにも関わらず勝利を確信しているかのような顔をした黙れドン太郎と、黙れドン太郎の独りよがりな暴走に付き合いきれない・巻き込まれる私に対して気の毒そうな顔を見せる磯咲さんがこちらを見ている。

「ちよ、ちよつと二車くん！ 青空さんに対して、そんな言い方はないんじゃないかしら？」

「うるせえな。どう考えても声を掛けてんのにすました顔で無視しやがるコイツが悪いだろ？」

「そうは言っても……。彼女はふうま君とその他のメスブ——生徒の方を観察していただけで聞こえていなかっただけの可能性だって——」

「おい痴女野郎、さつきからメヌケをジロジロと眺めやがって。やっぱテメエもメヌケに心を奪われてたって奴か？」

「！」

ここで黙れドン太郎の言葉に、磯咲さんが過敏と言っても差し支え

ないような反応をする。

先ほどまで私に対して比較的好意的——すくなくともあの場にいる4人の中では、もつとも好意的な反応を返してくれていた磯咲さんがその身をピクツと震わせ、私のことを敵視するような鋭い目つきで見つめ始めた。

……ははーん？ さては、お前も恋愛クソ強女こと心寧ちゃんと同じ『ふうまファンクラブ』の会員だな？

で、あるならば。私も完全な恋敵として敵対視される前に言わねばなるまい。ふうま君には悪いが、私は彼など眼中にないのだ。

「ははっ。まさか、まさか。私がふうま君を？ 冗談は休み休み言ってくださいね？ 私の好みはふうま君よりも鹿之助くんなのですが？」

「ああ、そうだろうよ。少なくとも俺の配下を期末試験直前に病院送りへするぐらいには、あのクソザコチビにぞっこんだよな」

「……………。ああ、あれは二車くんの配下の方でしたか……………道理で赤子の手を捻るような手軽さだったわけですな」

「不意打ちしかできねえ卑怯者のクセに、偉そうなことほざいてんじゃねえぞ……………」ギリツ

格下から売られた喧嘩は即購入スタイルに切り替わった私は、鼻で嗤いながらも奴には聞こえる小声で嘲笑う。

本当は鹿之助くんを『クソザコチビ』とけなした奴を、どう貶めて社会的に抹殺してやろうかと画策していたのだが、彼を不幸に貶めることはふうま君も道連れにする可能性があること。自らの一時的な感情で待ち受ける夏休みの約束の準備を無下にするは避けるため、ここは一旦ブクブクと沸き上がるような地獄の窯の蓋を閉じて静かに対応することはできた。

一方で黙れドン太郎は中二病満載の覆面とは逆の目で睨みつけ歯軋りしながら何かブツブツ眩く。

しかし、余裕を持った悠々とした私の言葉と黙れドン太郎にとって

ただの煽りでしかなかったこのやり取りに、磯咲さんは胸を撫でおろして私に対する敵対心ヘイトを解除してくれている。

だが今の彼女の中で何処か気になる部分でもあったのか、人差し指を自分の頬に押し当てながら首を傾げて視線は天井を向いていた。

「いやはや。いくら助走を多少つけたとはいえ、女子生徒の蹴り如きであんな大袈裟に吹き飛ぶとは……彼、当たり屋の素質がありますよ。無事に退院できたら伝えておいてください。次、鹿之助くんに手出ししたら、下半身のシャウエッセンを粉砕する貴様で末代にさせると」

「……じゃあこつちも良いことを教えてやるよ。転校生。あのチビは暴力的な teme エよりも、あつちの神村 舞華に——」  
「ああ、『憧れ』  
ているのでしよう？ そんなことは以前、本人の口から直接。聞かせて頂きました」

「はっ。じゃあ teme エの片思いは失恋に——」  
「ですが私はそれで構わないと思っております。彼曰く、彼女が好いている理由は体術に長けていて、とてもお強いこと。そしてその強さに準じた正義ヒールの味方として、こうありたい存在という前提条件ありきの憧れなのですから」  
「だったら——」つまり簡単な話です。今回で、その『憧れ』を塗り替えてしまえば済む話でしかありません」  
「……………」

「これは運命なのでしょう。私が神村さんと手合わせを行い張り倒したいという願いがついに叶うときが来たのです」

癩に障る黙れドン太郎の発言を私が一方的に押しつぶして発言の余地は与えない。

さらに私。釘貫 神葬の先祖が親戚一同の目前で旧支配者のキャロルを披露するかのような語り口調で、一筋の曇りもない満面のギラついた笑みを浮かべながら期末試験での私の目的も伝える。

最初に展開した相手の意見を捲し立てるように押しつぶすやり方は、前世での就活 y 回目の際に実演して失敗した手法ではあるが

……。相手に反論の意気消沈させるには持つてこいの技法だった。

こちらが良い具合に、ピリピリ度合いは弓走と神村のように燃え上がっている。圧倒的なタツパを持つ黙れドン太郎が、こちらの身長162cmに対して無言の圧力を掛けながらもゼロ距離で見下ろしてくる。私の上上げる顎の傾き具合からして彼の身長は180cmぐらいだろうか。あの高身長177cmのふうま君と目を合わせて話すために見上げる角度より強い気がする。

しかしそれでも奴を泣かせるには十分なタツチ距離だ。私には高位魔族を泣かせたことに定評のある〈頭突き〉があるのだ。こちらを殴ってくるようならば、そのクソ生意気なツラを眼帯と顎当てごと叩き割ってやる。

紫先生はこのグループディスプレイスカッションタイムも採点に入れていることは想定範囲だが、ここであらかじめ個人点数を落としておくことで最終結果では丁度良い点数になるはずだ。

「まつ、鹿之助くんの神村〃憧れ〃対象舞華〃対象についてはひとまず置いて……。それで？ 私に話しかけてきたってことは、何か用があるってことですよ。作戦会議時間は残り50分しかありませんし、ご用件を伺いましょうか？」

したがって程よく採点の点数を削れた頃合いを見計らって、話を本筋に戻す。

作戦会議中も多少は協調性は持ち合わせていることを評価してもらわないと私としても困るのだ。

「チツ。……。……とことん癩に障る野郎だ」

「なにか？」

「……。これは簡単な話だ。この期末試験、ふうまは俺が殺る。だからテメエは手を出すな」

「なるほど。ふうま君は二車くんが殺るとわかりました。手出ししなければいいのですね」

「ほう……？　多少は物分かりがいいじゃねえか」

「言ったでしょう？　私も神村（憧れ）舞華（存在）さんに関する対応がござい  
ますので。で？　作戦は？」

「実技試験が始まったら、ふうまを見つけて俺が潰す。テメエ等は神村と弓走を相手している」

「ええ、それはそうですね。では、作戦は？」

「あ？　だから今、言っただろ。アイツ等を見つけ次第、俺がふうまを潰してお前等は神村と弓走を対処する。こんな簡単な作戦がわからないなんて頭悪いのか？　テメエはよ？」

「はあ。今、二車くんがお話されているのは、作戦ではなく最終目標ですよね？　私はそこに至るまでの『作戦』を聞いているのです。日本語、伝わってます？　私の話は通じていますか？　もう一度だけ優しくお尋ねして差し上げます。目標じゃなくて、そこに辿り着くまでの過程となる作戦はどのようなものですか？  
do you understand? Tell me the strategy.  
わかるか？この野郎。作戦を教えろつつつてんだよ」

お互いに苛立ちのボルテージが立ち上っているのが分かる。黙れドン太郎は先ほどからちよいちよいにじみ出していた殺意の鋒先が私へと集中しつつあり、身体からは濃い紫色のオーラが肉眼で確認できるほどに具現化している。その調子なら、テメエの体臭もオーラで立ち昇りそうだな。

だが、その程度のチワワ級な覇気で私が凄むと思ったら大間違いだ。

その程度の殺気など、これまでに対峙してきたカルティストやら邪神やらに比べたら大したことはない。

こちら腕組みをしながら気怠そうに対応する。

「過程だ？　ハッ！　お前はあんなバラバラなチーム相手に作戦がいとでも思ってたのかよ？　確かに神村の存在は驚異的かもしれない。だが残りは何事にも無気力なメヌケと弓を扱う事しかできない雑魚だぞ？　お前等、2人で抑えられる話じゃねえか」

「……………」

あ、駄目だ。コイツ。

対魔忍世界らしい頭対魔忍な脳筋一点正面突破戦法で今回の期末試験に臨もうとしている。

それを裏付ける証拠として、黙れドン太郎はわざわざ彼等に背中をみせつけ視線を向けることすらせず、親指でふうま君御一行を指さす。まるで今の彼等は護衛付きの無害な獲物の集団であって、さほど脅威でもないとも言いたげだった。

ああー……。やっぱ対魔忍ではないとはいえ、対魔忍世界だからやっぱりいるんだなあ……。

私の命の恩人だからあまり悪くは言いたくはないけど、秋山 凜子さんっぽい思考回路の人。まっすぐ行ってぶっ飛ばす。まっすぐ行って右ストレートでぶっ飛ばすの人。

ところが私はふうま君御一行は充分に脅威だと感じていた。今、あのバラバラだったチームはふうま君が司会役を担うことによって、それぞれが繋ぎ合わされつつある。

おまけに時折こちらの様子も観察しているのか、チラチラと一瞥ではあるが確認している。

あっそうだ。おい、HUM<sup>ふうま</sup>。

お前さつき俺らがモメている時チラチラ見てただろ（因縁）

ミテナイデスヨ（裏声）

嘘つけ絶対、見てたぞ（確信）

ナンデ ミル ヒツヨウガ アルンデスカ（裏声）

あっお前さHUMさ、さつきユツ…誘導された時にさ、ジロジロ見てきたよな？

そうだよ（便乗）

イ、イヤ ソンナコト……（裏声）

見たけりや見せてやるよ（震え声）

「ねえ、あまりふうま君のことを過少評価するのは止めてもらえるかしらっ。」

「あん？」

「二車くんはふうま君の親戚で幼馴染ってことは知ってる。でも、いくら身近な存在のあなたでもふうま君の才能に何も気づけていないのね」

と、ここで私と黙れドン太郎のやり取りに口をはさむことができず、半ば空気状態にあった磯咲さんが口を開いた。

先ほどまでタジタジな様子からはうってかわって、自分の恋心を抱く相手を貶されたことや『ふうまファンクラブ』の一会員として黙れドン太郎に喰ってかかる目で対峙している。

「本当はふうま君と敵対することなんて嫌だけど……。試験だもの、やるというなら最大限サポートするつもり。今の作戦も何もないままでは、あなたは確実にふうま君に負けるわ」

「……ああ？」

「そうですね。私も磯咲さんに同感です」

「……！ 青空さん……！」

「二車くん。私には磯咲さんが話しているふうま君の才能について、何を指しているのか分かりかねますが……。私としては、彼には人を引き付ける力があると思います。……例えるなら『なろう系小説の主人公のような力』を持った存在に似ていますね。それを軽視するのはいささか……」

「ええ。私も青空さんのいう、なろう系……。？というは分からないけど、青空さんの言うことに一理あるかしら。彼にはあなたに無いような特別な魅力があるの。だから私達が敵として対峙するならば油断しないで挑むべきよ。私達が彼に勝つには、青空さんがあなたに尋ねたようなもつと具体的な作戦が必要になってくるはず」

「……」



流石に2対1の議論では分が悪いのか、黙れドン太郎は反論してくることもなく、ここでやっと背後に居るふうま御一行を一瞥する。

彼等は今、床に座り込んで地面を見つめて何かを話しているようだった。

遠目でもわかることとして、神村さんが『ああでもねえこうでもねえ』と何かを熱心に2人へ話している様子が伺えた。

「……ケツ。……そこまで言うんだったら考えるか……」

「それがいいわ。でもあと50分で何から話せばいいのかしら……」

やっと黙れドン太郎は観念したのか、その場に座する。

それを期に磯咲さんは私と顔を合わせて、ふうま君達がやっているような円陣を組むようにして共に座り込む。

ただし作戦を立てると言っても、磯咲さんと黙れドン太郎は今回の合否が決まるような場面でのグループディスプレイの経験はあまり経験がない様子で、二人とも首を傾げたり、腕組みをして両目を瞑っているばかりだった。

正直なところ、洋館事件の時のように私が中心となって引つ張ってもいいのだが……。

いや、ここは引つ張っておこう。彼等に敗北して、学生の貴重な夏休みを補講で潰すのは非常に勿体ない。

「ではまず、お互いに今回戦う相手についての情報を出しあいましょうか。相手を知ることが、作戦や戦略を練る上で対処法に繋がってきますので。……ご存じかもしれませんが、私は入院生活の方が長いので……いつもつるんでいるふうま君と、とある事件で共に行動したところのある神村さんの情報しか知りません。弓走さんについては完全に無知な状態なんですよねえ」

腹を決めたからには話は早い。

こういう作戦立案や話の流れを作ることは得意分野でもある。しかし、だからこそ2人の……特に、やつと協力する気になった、黙れドン太郎の下手なプライドをこれ以上に傷つけて話が停滞することを避けるためにも……。片目を瞑って後頭部を掻きながら、まるで自分自身も初心者であるように下手に出ての話題の提供をする。

「はあ……しかたねえな。じゃあ、教えてやる。弓走、アイツは……そうだな。一言でいえば融通の利かないお堅い優等生だ。俺達の部隊で例えるなら磯咲みたいなポジションで、弓術に長けている。ただ体術の授業では……努力はしているが実に結ばないところが見受けられるな」

「ふむふむ。ありがとうございます。磯咲さんは、何か彼女についてご存じなことはありますか？」

「そうね……。彼女なら五車町に昔から存在している弓の名門弓走家の跡継ぎってことかしら？ 二車くんの言う通り近接戦闘に関しては私達——青空さんは除いた5人の中では、体術を苦手科目にしているとところがあるのだけど……。その代わりとして弓術だけは天下第一でこの五車学園1年生の中では右に出るものはいないわね。目視していればほぼ100%の確率で弓を当てることができたり、曲射や貫通力の高い弓が驚異的だから、彼女と近接戦闘に持ち込むにしてもまず本人に辿り着く前にウニのようにされる方が高いわ」

「なるほど、なるほど……」

私は2人の発言を、キャンプセット内に入っている筆記用具を取り出してノートに記していく。

相手をする身としては、これは本当にやっかいなタイプかもしれない。

遠距離武器が磯咲さんの所有している二丁拳銃のみが、私達チーム唯一の遠距離攻撃武器だ。

拳銃の射程は精々20m前後。対して、弓走さんのアーチェリー用の弓の攻撃射程は一般的に90mにも及ぶ。明らかに攻撃が届かない。私の方も消火器を用意してはあるが、届く訳もなければ、こんな広大な場所では煙幕としての活用方法も不可能だった。

近づいて叩くにしても何か遮蔽物や死角生み出す物体なければやりにやらない。彼女がこちらの接近に気が付き、本人がその場から逃げ出して引き射ちしてしまえば、イタチごっこは免れないだろう。

特に今回のフィールド……。この真っ白な何もない空間が、彼女の援護射撃という特性を十分に発揮させるに違いない。部屋の隅に追いついで、タコ殴りにするにしても屋外張りに広いこの空間では一苦勞過ぎる。

さらにその状態で神村さんとふうま君を相手にしなきゃいけないというのは……。無理だ。現実的じゃない。

「ありがとうございます。では、次は神村さんについて情報共有を致しましょう。私が神村さんについて存じ上げていること致しまして——1度喰らって死にかけてたあのロケットランチャーの砲撃は強烈ですね。赤き霧——赤い幽霊を物理的に退けるだけの十分な火力もあります。ただし弾速自体はそこまで速いものではないので、遠距離対峙した場合には目視での〈回避〉は可能ではあるかと。しかし〈回避〉したとてロケットランチャーの炎に炙られることで1度熱傷を引き起こすだけの威力はありますから……。直撃はしなくとも爆炎による範囲攻撃が手痛いところですよ。ゆえに爆破による衝撃や熱波効果を狙われると厄介ですね。あと彼女個人について特筆できる部分としましては仲間想いな部分でしょうか」

「?????」

弓走に対する情報収集を済ませたところで、次は神村さんについて私の知りうる情報を2人に共有する。

すると黙れドン太郎は両目を瞑って考えることを止め、磯咲さんは顎に握りこぶしを当てて記憶を思い出すのをやめて、2人とも私の顔

を凝視してきた。その顔は瞬きの回数が増えて口が少し半開きになっている。

2人の状態を〈心理学〉で分析すると……目を丸くして……私の説明に何か分かりにくかった部分でもあったかな？

「……おい。テメエのこの前の入院は、授業外で神村とルール無用で殴り合ったことであつたのか？」

「冥途バズーカを喰らつた？ 目視で回……？ いったい、何を……いえ何があつたの……？」

「ははっ。そのお話はまた今度、時間のある時にですね。それでお二人は？ 神村さんについて何か知っていることはありませんか？」

「か、神村さんについては……ご、ごめんなさい。わ、わたしも青空さんが弓走さんを知らなかったように知っていることは何もないかしら……？ あっ。あっ、OBの眞田 焰さんを慕っていることとか、普段は校舎裏にいることとか、か、かしら？ ……ご、ごめんなさい。よく考えれば、何かしらあると思うんだけど……」

「神村は……あいつはお前が言ったバズーカ砲以外にも近接戦にも長けてんな。悔しいが素の力だけなら今回の6人の中で一番……俺と同等ぐらいか？」

黙れドン太郎の言葉に『なら神村さんの近接戦闘技術はぞんざい大したことなさそうですね』と言葉が出かけるものの、ここは今のところ保っている協力関係を持続させるためにゴクンと飲み込む。

「……………」

「おい、なに笑いこらえてんだテメエ」

「べ……………ベツに？」

それに先ほどはロケットランチャー……もとい、バズーカ砲の解説に偏ってしまい説明のタイミングを逃してしまつたが、神村さんが近

接戦闘に長けていることは私も承知している。

ゴキブリの空気炒めを止めさせるときに “背後からの奇襲”  
でへ組みつき、首を絞めに掛かったにも関わらず、彼女の技によって壁や机に叩きつけられて拳句の果てには殺されそうになった。その流れるような攻撃方法から彼女の近接戦闘が長けているのは言わずもがなである。

しかし彼がこうして共有してくれたことで、私はその説明の手間を省くことができた。

「では次はふうま君ですかね」

「目抜けのザコだ」

「おい？ 二車黙れトシ 骸佐くん？ 次、友達のふうま君のことを私の前でマヌケメヌケつつたら、その眼帯をひん剥いてこの筆記用具を用いて目玉を抉り抜きお前を物理的に完全失明目抜けにしますさせますからね？」

「青空さんに同じく」

「では私は右目をやるので、磯咲さんは左目を」

「了解したわ」

「……」

「ゴホン。話を戻します。まあ、彼は……色恋沙汰に疎い昼行燈ではあることは間違いないでしょうね。いろんな人から好意を貰っているのに気づけてないんですから。ちなみに。これは予想ですが、この期末試験が終わった頃には神村さんも弓走さんも彼にメロメロになつてますよ」

「！」

「冗談ですよ。磯咲さん。ま、もし本当にそんなことになっていれば、本物のハーレム系なろう系小説の主人公ですね。近い将来、口付けを迫られているのに『キムチでもいい？』とか聞き間違えそう」

「ふうま君は……そうね。授業はよくサボっちゃうけど、実は授業以外ではとても勉強家で戦術に長けているのよ。それに、ああ見えて人を扱うのが上手なの」

「ほう……」

私は鹿之助くんとは同じクラスだが、ふうま君とは別クラスの為に彼の授業の出席率についてはあまり詳しくはない。

詳しくはないが五車学園の制服を着崩し、遊び慣れているかのような外見によらず心の中では熱中症の話を語り合えることから、見かけによらず授業の内容を聞いている優等生タイプなのかと思っていたところがあった。

ああ、紫先生に連れられる待合室カフェテリアでの駄弁では『つまらん授業はサボっている』と言及していたような気もする。私はてつきり高校生男子が見せる『俺ワルだぜ』アピールの一環かと思っていたのだが……。そういうわけでもなさそうだ。

不良として分類されるには、迷宮のような五車学園の図書館という不良はあまり立ち入らなさそうな場所を把握していることもあったし。

だから磯咲さんの発言が衝撃的で思わず言葉を漏らしていた。

されども……戦術家で人を扱うのが上手いのか……。やはりうまく黙れドン太郎を丸め込んで作戦を立てたことは正解か。彼女の評価が的を射ていた場合、彼は他の2人を自分のペースに巻き込んで私達に対する作戦を練っていたに違いない。

先ほど私達をチラチラと見ていたことにも合点がいく。

Episode 106 『作戦会議《後半》』

ここでふと時計を確認してみる。

作戦会議に設けられた時間は、残り30分を切っていた。

……作戦実行に至るまでの事前準備を含め、時間が足りないような気がするが……。

今までのように出来るかぎり。諦めずに準備を整えよう。

「ふむ……。これまでの集めた情報を整理すると、弓走さんの射速がどれほどのものかわかりかねますが——彼女が一番やかいかいですかね。特に、この遮蔽物のないフィールドでは、私達を射貫くことは造作もないでしょうし。二車くんが想定していた通りに連携が取れていない状態であれば、いくつかやりようはあるのですが……」

「えっ?」

「何言ってるんだテメエ」

両目を瞑って後頭部を掻きむしる私に、2人はまたもや私的的外れな事を言い出しているかのような声を出す。

その素っ頓狂な声色に、後頭部を掻きつつも彼等の顔を確認する。2人は目を丸くさせながら私が突然〈他の言語〉を唐突に話し始めたかのような……それ以上の言葉として表現せずとも疑問を浮かべたかのような顔を浮かべていた。

「えっ?」

「え?」

「は?」

「……あの、なにか私。おかしいこと言いました?」

「……………」

黙れドン太郎は何も言わない。言わないが無言の圧力の中から、信じられないものを見るような気持ちを少しだけ察することができる。

「えつと、私達が驚いたのは青空さんが　〃遮蔽物のないフィールド  
〃　っていうものだから……………その……………」

黙るドン太郎の代わりに、磯咲さんが変わって理由を説明してくれ  
る。

「え？　だって、そうではありませんか？　この真っ白な空間で期末  
試験をするんですよ？　お二人はこれの何処が期末試験のプリント  
に掲載されていた学校敷地内（校庭）の景色に見えますか？」

「……………」

だから私も返事として、さも当然のように自分の違和感をそのまま  
伝えた。結果的に、2人はそのやはり少し引いたかのような、気の毒  
そうな者を見るような顔で互いに見合わせている。

「わ、私としましてはVRゴーグルでも被って、バーチャル世界で戦闘  
訓練でもやるつもりなのかと睨んでいたのですが……………皆さんの装  
備を見ると確実に現実で殴り合う流れじゃないですか。じゃあ、事前  
に情報として配布されていた景色はただの偽情報だということにな  
るじゃないですか！　まだ社会人でもないのに、これが教師のやるこ  
とかよおおお!!!　ま、それが現実での大人のやり口なのですが」

「…………えつと。1人でボケツツコミを展開しているところを遮って悪  
いとは思うのだけど。…………確認してもいいかしら？」

「はい、何をでしよう？」

「青空さんは五車学園に転校後も、入院していることが多かったのか  
しら？」

「え。まあ、そうですね……………あれ？　磯咲さん？　その言い  
方だと、まるで私が転校前も入院生活が多かった悪い意味での破天荒  
野郎だと思いませんか？」

「……………まさか入院のしすぎで、この部屋にすら入ったことないの



か？」

「はい。お恥ずかしながら……あ。ええつと、1回。1回だけ、ですが……。眞田先輩に連れられて入ったことはあります。その時もこの部屋と同じ真っ白な部屋でした」

「……」

今度は2人が、野獣先輩のンアー！（≧▽≦）と叫ぶような顔に悲哀と残念な心を混ざり合わせたかのような感情を浮かべて文字通り頭を抱え始める。

なんだ？ 何かまだ私の知らない情報があるというのか？

「青空さん……」

「えっ？ はい、はい？」

「これから貴女が立案してくれるでしょう作戦に間違いなく影響が及びそうだから簡潔に説明するわね。今回の舞台だけど、これは配布されたプリントの通り間違いなく学校敷地内になるわ」

「え？ でも……」

「いいから最後まで聴いて」

「はい、はい」

「規模としては、校舎、校庭、プール区画、森林地帯の4つの区間に分けられたその中の模擬戦闘。青空さんにその中で注意して欲しいことは、絶対にこの白い室内で模擬戦をするわけではないから、イメージを膨らませて学校の敷地内で戦闘を行うものだと思って作戦立案して貰えるかしら？」

そんな頭を抱えている2人ではあったが、このままで埒が開かないと判断したであろう磯咲さんがこの中で最も座高すら低い私に目線を合わせてくる。おまけに、ゆっくりと距離を縮めては両肩を掴んで、至って真面目で真剣な……まるで私が物事を知らぬ無垢な子供で、危険な行為をやめるよう諭す母親のような顔になった。

さらに少し鼻頭側へと落ちた眼鏡を中指でクイッと持ち上げる

……。キラリと彼女のメガネが光り、彼女の目元が光の反射で何も見えなくなる。

〈心理学〉上、彼女が嘘を言っているような様子はない。となると、〃学校敷地内になる〃 というのはどういう事だろうか？ まさか、この白い部屋の天井がダンボール箱のように開いて、地面が地上までせり上がるだとか？ でもそれだと、わざわざ他の部屋に生徒を小分けにした理由が付かなくなる。

これはその時にならなければ、なぜ彼女が白い部屋が 〃学校敷地内になる〃 なんて自身を持って言えるのか。私には分からない。

「あ、は、はあ……」

「それじゃあ、その上で。青空さんは、何か作戦が思いつくかしら？」  
「え、えー……？ 磯咲さんは何か……？」

「恥ずかしい話で残念だけど……。私はこれと言って何も思いつかないのよね。きつと二車くんも、ふうま君を倒すことしか考えていない猪突猛進なあの性格じゃ残り40分で作戦を立案するなんてできないでしょうし……」

「……………」

既に半分諦めたように微笑む彼女に、私も黙れドン太郎を一瞥する。

……。彼女のいう通り、こっちは確実に作戦立案に関して使い物にならないだろう。態度の悪い指示待ち人間のように、腕組みをしながら人さし指を細かく貧乏ゆすりしながらこちらを睨みつけてきていた。

もう一度固く両目を閉ざして後頭部を激しく掻きながら戦術の構築を始める。

「ふうま君から聞いたわよ。例の洋館事件では同行した3年生ではなく、あなたが全員生還させるために指揮を執ったんですってね。類は友を呼ぶとは言うけど……あなたが転校以来、彼とつるんでいる理由ってそういうところが似通っている部分があるからなのかしら？」

度重なる入院。そして医師とは思えない室井による所業によって、必要な授業出席日数や登校日数がデンジャーゾーンに陥っていることは周囲にもボチボチ周知されている事実だが……。ここで期末試験の実技に落ちること、それすなわち貴重な夏休みを授業で消費しなければならぬことに繋がるということだ。

磯咲さんの励ましの言葉でやる気を引き起こさせながら、両目を瞑りながら後頭部に火が付くんじやないかというレベルで後頭部を掻きむしり作戦を考える。

夏休みのお盆の時期には、人間風情に泣かされたえっちなお店で働くの蛇子ちゃんと会うのだ。その支度だつてしなくてはならない。ならば、鹿之助さんと有意義な夏休みを過ごす時間も限られてくる。

——ふと、1つの作戦が私の頭の中に浮かび上がった。

「——ととのいました」

まるで大喜利における謎かけを始める芸人のような私の発言に2人は注目の視線を送ってくる。

だからこそ私は、邪神の思惑を最高に最悪の形でおじやんにしてやる計画を閃いたときのような。ふうま君を反転したかのような左目を瞑ったドヤ顔で、閃いた作戦を説明し始めた。

「まず模擬戦が始まり次第、私達は森に身を隠します。こちらが特定される前に、先に相手の位置を特定することに専念してください。私達のチームは近接戦が主体なのに対し、ふうま君のチームは遠距離戦が主体なため、相手が私達の居場所を特定し先手を打たれることは悪い状況に追い込められて挽回すら許されなくなる状況に立たされてしまう可能性があります」

「そうね。居場所を特定されて超遠距離から永遠と弓走さんの矢で射られ続けるのは面倒だわ。『アクアシューター<sub>器</sub>』では彼女の弓矢の射

程には遠く及ばないでしょうし……」

「ええ、今回の模擬戦ではそこが突かれると痛い部分……。私達の弱点になります。ですので模擬戦が開始した時点で、私達は基本的に森の中にへ布陣することになるのです。これは相手の広範囲爆炎と曲射の可能な弓といった点を考慮した上での遮蔽物が重要になってくるでしょうから。例えば森が燃えた状態になったとしても炎と煙が僅かな時間、私達を隠してくれることになりますし……。相手方としてもこちらを見失うことは避けるため、むやみやたらな砲撃はしてこない筈です」

「それで？ どうやったたらその手法で俺はふうまをぶつ潰すことに繋がるんだ？」

「二車くん。童貞じゃないんだから、そんなに焦らないでください。ふうま君は模擬戦闘中に必ずあなたにぶつけさせますから」  
「……………」

私の言葉に黙れドン太郎は、梅干しの種をかみ碎き渋汁でも啜ったかのような、下唇を噛みしめ顎にしわが寄るような顔をする。

お 凶星か?? 凶星なのか？ 童貞？ DT？ ねえ、DTなの？  
えーマジ童貞!? キモーイ！ 童貞が許されるのは小学生までだよねー！ キヤハハハハ！

「ところで青空さんは色々荷物を持参しているみたいだけど、先ほど少しだけ覗かせてもらった時に見つけた……。貴方が得意とする武器があるじゃない？ あれは射撃武器として用いれないのかしら？」  
「……………」

「ほ、ほら！ あなたの代名詞や二つ名の」

ここで煽る私と黙れドン太郎の不和不和とした気配を察知したのか、磯咲さんが仲裁に入ってくる。さらにそこから磯咲さんは私のことをあまり刺激しないようにはしたいのか、消火器の存在について遠まわしかつオブラートに包みつつ言及してきた。

「……………ふっ」

……………。おい、黙れドン太郎？

鼻で嗤うのは自由ですが……。ご希望とあらば、お前も紫先生と同じく頭の鉄板から爪先まで真っ白にして差し上げましょうか？ んなら消火薬液で物理的な失明メヌケにさせてあげても良いのですよ？

「……………。ああ、消火器や消火栓のことですか」

「そ、そう。そうよ」

「一応、今回キャンプをするつもりだったので所持はしていますが……。消火器の射程はせいぜい3〜5 m程度。消火栓は10 mほど稼げるかもしれませんが……」

「……………が？」

「あれは相手を遠慮なく痛めつけるためのものであって、模擬戦相手には使えないです」

「えっ」

私の言葉に対して磯咲さんは、目を丸くしながら紫先生が退室していった扉を見つめ始める。

紫先生が出て行った扉がどうかしたのだろうか？

「え？」

「い、いえ。気にしないで続けて頂戴」

「えっと、ですから、本状況で使用するなら失明してしまわないよう、ちゃんと相手側にゴーグルを人数分配布する必要があります。それにそもそも彼等に消火栓私の武器が浸透していることもあるでしょう。まず消火栓の元まで無事にたどり着けるかどうか怪しいため、消火栓は運用しない方針で行きたいですね。それにどちらを用いたにしろ、弓走さんの圧倒的な射程には遠く及ばないでしょうし」

「はあ……………」

彼女は一呼吸を置き、床を見つめ始めてしまった。

これは……たぶん、推測だが……。大方、彼女の中で私任せによる弓走さんの無力化を期待していたが、その案が潰れたことにショックを受けてしまったのだろう。

一瞬、弓走さんの強力な射程を言及して、磯咲さんの士気を下落させてしまった自分に対して後悔の念が沸き上がったが……。士気の下落以上に正確な情報もなしで未知の敵に挑むことこそ、真のこの上ない危険が伴うこともある。これは（新）クトウルフ神話TRPGの世界線で学んだ生存に繋がる大事な方程式だった。

それにしても探索者他の仲間であれば、きつとここで私の情報を公開したときにそこからこの状況から、どうしようかと共に考えるものだったが……やはり、ただそこは一般人達の未成年達に打開策を練らせるとするのは厳しいものがあるか……。

「じゃあ、テメエは何ができんだよ。その大荷物はお飾りつてやつか？」

ゆえに私が彼女の士気をどのようにならげて模擬戦に挑もうか、片目を瞑って後頭部を掻きながら考えていると今度は黙れドン太郎が腕組みをしながら口をはさんでくる。

「……そうですね。一応、私が出来るとは……」

彼に触発される形で、今回所持してきたリュックサックの中身を開示する。

基本的なリュックサックの中に入っているものは、ネットで『キャンプ 持ち物』と調べることで出てくるような装備だった。

懐中電灯、調理器具、ロープ、ブルーシート、寝袋、着替え、水筒、双眼鏡、応急セットなどだ。もちろん、洋館事件で大活躍したコンドームも当然ながら入っている。

それ以外の特筆できる持ち物は……プラスチックナックルメリケンサック2つと、生理用

品やモバイルバッテリー、ハードカバーの本2冊、音楽機器、遺言と書かれたチャック付きポリ袋にICレコーダー、ダクトテープ、消火器などの個人的な持ち物だった。

……今回はキャンプの予定だったから、セラミックタイルを持って来なかったなあ。

それにまえさき市のカルティストから奪取した『クトウルフ・2010』が本物ならば。最低限の武器——『竹刀』で黙れドン太郎と共にへ近接戦闘（格闘）で最前線に立って、ふうま一行を一網打尽にするぐらいならできそうなのだが……。

ないものはしようがないだろう。これまでと同じように配られたカードで戦うしかない。

「今回、私は〈こぶし〉を用いたへ近接戦闘（格闘）が主体になると思います。ですが実力では遠く及ばないそうですから、ここは私が囷役でもやりましょうか」

「……………」

自嘲しながらの私の発言に、黙れドン太郎は機嫌が良くなったのかこちらを睨みつけるような覇気が少しだけ薄まる。

わかってないな。私が囷役を買っているのは作戦のこともあるが、黙れドン太郎が攻撃主体になることで君のプライドを尊重していることに。……気づいていないだろうな。その年で首領太郎だもん。

「私へ注目が浴びている間に、虚をついての奇襲攻撃とかどうでしょう?」

「……………小細工は好きじゃねえ」

「では二車くんの正面突破作戦を決行しますか? 私の見立てでは、神村さんの砲撃に加えて、弓走さんの雨矢の流星でふうま君に接近することなくGAME……GAME OVERだと思えますが……」

「それは駄目よ!絶対にダメ!今回が二車くんの個人種目ならそれでいいかもしれないけど、団体戦だという事を忘れないで欲しいわ!」

「……………」

磯咲さんの引き留めに、黙れドン太郎は眉間にしわを寄せて不快そうな顔をする。私の作戦に従いたくはないが、ふうま君に敗北することも嫌だという感情が、むき出しになった彼の噛みしめた歯から滲み出ている。

「……そうだ。そうです」

「？」

「ああ？」

ここで一度。手槌をポンッと打ち、2人の視線を集める。

「これを機会に皆さんの出来ることを話してもらっても良いでしょうか？ 私は先ほどお話した通り、今回武器の支給はないっぽいのでメリケンサックを装備した近接戦闘が主体になると思います。『二車くんをふうま君にぶつける案を通す』なら、耐久面には自信があるので私が主な囷。主に肉盾役を務めますがいかがでしょう？」

「……………」

「えっと、青空さんがそれで問題ないのなら私は異論はないわ」

「……………二車くんは？」

「チツ。わかった。わかった。テメエが今回の作戦立案者なんだ。やりたいようにやりやがれ」

「じゃ、決まりですね」

「……………」

「じゃ、各自の武器についてね。私は主に、この拳銃『アクションター』の水圧を変動させて相手を攻撃することができるわ。水圧を調節することで、威力や射程を伸ばせるけど……威力が高いウォーターカッターのような長期放出は短期間しかできないなどの制約があるわね。あとは『水鏡』を作り出して、神村さんの砲撃の威力を抑えられるかもしれないわ。ただ……私の水鏡による防御壁は直接的



な打撃——弓走さんの弓撃のような物理攻撃には効果があまり期待しないで欲しいの」

葛藤の末に黙りこくる憐れドン太郎の代わりとして、磯咲さんがそんな彼を見かねてか口を開く。当然、彼女の発言を要点だけかいつまんでノートへと転記するが、どうも彼女の言葉に引っ掛かりを覚えて

「……………水鏡？」

気が付いたときには不審な目を浮かべて、その言葉をそのままそっくり零してしまっていた。

「そっか、青空さんは見たことなかったかしら。これは口で説明するよりも実演した方が早いわね。ちよつと水筒の中身を使わせてもらうわよ」

私の言葉に彼女は隠す素振りも一切見せる様子もなく、その場で立ち上がる。私の水筒のフタを開けて、まるでマジシャンが消失マジックでも見せてくれるように。対魔忍世界流で例えるなら亀頭責めでも始めるかのように飲水口側に掌を向けて妖艶に水平に回し始める。私はその光景に目を皿のようにして、まるでリベンジマッチとしてあの私服で面接に訪れた私を嘲笑った面接官の最期のようにその顔を驚愕に見開くしかなかった。

——彼女は水筒の中身…………水分　　“だけ”　　を器用に取り出して見せたのだ。

それはまるで、両極が同一の磁石を近づけて、片側が空中に浮かんでいる光景とそっくりだった。彼女の掌の中で、それはまるで意志を持った水生生物のようにゆがき、脈動し、細かく震えている。彼女は

その水生生物を受け皿のようにして操っていたが、放り投げるかのよ  
うな仕草をした途端――

パシヤツ

それは彼女が言い放った　『水鏡』　のような……――

――クラゲの傘の部分のように大きく広がって半球状の盾を作り  
出した。

「……………」

「……そんなに呆気にとられた顔で、すごいものを見ているかのよう  
な顔で見つめられると照れるわね。これが水鏡。どう？　転校して  
きたばかりのあなたにも私の水遁この術カ。理解してもらえたかしら？」

探索者だからこそ、わかる――その力。

彼女が今、さも当たり前、できて当然かのように私に見せてくれた  
行為は――

以前、コロ先輩が披露してくれた過去サイコメトリ感知のような私の世界におけ  
る超能力に分類されるものではない。

どちらかと言えば呪われた力。呪力や魔術に近いものを感じた。

前世の魔術らしい、私の説明書に記述された魔術から選抜するとす  
れば……そう。

《魔術師からの保護（レイの霧の創造）》。扱い方によっては《溺愛  
死（深淵の息）》に近いものを感じる。

彼女が魔術を知覚し駆使できているという事は、すなわち彼女の一  
族はカルティストの可能性が浮上する。五車町にはトンデモ国立学  
園や怪しい駄菓子屋以外にも、やけにカルティスト予備軍が多すぎる

ことに唸り声があがるが、声を押し殺す。

カルティストは抹殺すべきものではあるが……まだ私は彼女が何か世界を危機に追いやるような計画を実行しているという情報を掴んでいるわけではない為、本来であれば喉に突き立てていたであろうシャープペンシルを握る力を弱めて、泳がしておくことにした。

この場では人の目が多すぎる。

このカルティスト予備軍を抹殺するにはまず家族構成を調べ上げて、行動パターンを把握して、それから――

「……………はい。ご講演、ありがとうございます」

準備が整えばいずれ殺す・殺せるチャンスは訪れる。

彼女がカルティストとしての片鱗・その薄汚ねえ尻尾を見せるその瞬間こそ、彼女やその親族の命日になると感情を募らせて。今はそつと返事をした。

「……………俺は身体能力向上が主な技だ。自身の攻撃力や防御力を底上げする力だが、効果が切れた後の負荷がかかる。当然、連発は不可能だ」

私が磯咲さんに対して注目をしていると憐れドン太郎は、彼の出来ることを最低限淡々と告げてきた。磯咲さん側に集中しすぎてしまい、彼が前半何を話しているのかよく聞き取れなかった。

それでも最低限、攻撃力や防御力を底上げる力と効果が切れるという内容、連発は不可能という情報から彼はドーピングドン太郎という事がわかる。つまりその程度でしか自身を強化できない憐れあわドン太郎だ。

こちらとしても、彼が既に話した内容を聞き返すのは癪だったため重要な部分だけ切り抜いてノートの方に転記させてもらった。

Episode 107 『トイレの破壊神（めがみさま）』

……  
……  
……

「——情報が纏まりました。お二人にはこれが打開策に見えるかどうか、どうか分かりかねますが……。少なくとも作戦立案にあたって前提条件である——二車くんは『ふうま君を張り倒したい』。私は神村さんに関する「懂れ」の調査『神村さんを張り倒したい』。磯咲さんは『期末試験の単位を落とすたくない』という目的とお互いの情報、相手チームの弱点を元にした作戦を提示します」

「……………」

いよいよ期末試験も開始15分前となり、磯咲さんはこれから私より発せられるであろう作戦内容に対して身を乗り出すような形で顔を近づけてくる。

一方で黙れドン太郎は相変わらず私に対してそっぽを向き『 teme は何様だ?』と問い詰めたいぐらいには腕組みをしてふんぞり返り続けているが、眼帯の付けていない片目だけでチラチラと視線を送って来ている。

まあ、最初に黙れドン太郎の目的を言及したことで彼のプライドを傷つけることはなかったようだ。

うまく行ったことを確認しながら直筆のノートに手を添え、頭の中で構築した作戦に至る前の相手の情報について共有を済ませる。

「これから対峙する相手がどのような武器を持っているようとも、何かしらず必ず弱点はあります。まず神村さんの武器であるバズーカ砲。これは高火力で、連射も効く。装弾数は無限のように見え、遠距離から範囲攻撃のできる一見最強の武器にも見えます」

「……………」

「——ですが。一方で、その高威力と範囲攻撃……そして彼女の性格を逆手にとってしまったえば、何も恐いことにはございません。こちらが相手に接近さえしてしまえば自分が巻き添えとなってしまうため、この攻撃を封殺することができます」

「……………」

「と言っても、そういった弱点を克服するためにも彼女自身が近接戦闘に長けているのかもしれないが……。そこでこちらのお願いでして、ふうま君との接敵が叶ったのちは囷の私がたどり着くまでの間、彼女を抑えることを意識していただきたいです」

「目抜……ふうまを相手にする片手間でも可能ならな」

「できる限りのことはするわ。弓走さんの脅威は残されたままだけど、彼女を野放しにしておくことも何か考えがあつてのことなのよね？」

「もちろんです。次に弓走さんの武器の弓矢ですが、こちらは消音武器であり、なおかつ私達にはない超遠距離射程や曲射、剛腕で矢の威力を更に底上げする部分は脅威です。しかし連射に関してはバズーカ砲ほどの融通が効かない筈。弾数も限られているはずです。たとえ弓番えで連続攻撃に出てきたとしても3本が一度に限界でしょう。彼女の腕は少しばかり筋肉質ですが……それでも番え弓にするとうことは、弓の一本一本もさして重くはなく軽い材質を使用しているはずであり、この場合は磯咲さんの水圧拳銃アクアシューターがあれば、弓矢の軌道を逸らすことができるかと思えます」

「……………」

「弓走さんを真つ先に仕留めに行かないのは、神村さんの砲撃と比較してしまえばこちらを一網打尽にする範囲攻撃でもなく威力も存外大したことないこと。彼女達は互いに遠距離武器を用いているので固まって攻撃するよりも分散して攻撃してくると予想が付けられること。相手チームの長所やこちらの戦力をすり合わせた場合、予想される布陣では弓走さんはプール区間近辺に現れるであろうこと。磯咲さんの武器で着弾の軌道を逸らせるからですね」

「……………」

「最後のふうま君。彼は刀のみで特筆することがなく、最も注意するべきは磯咲さん曰く勉強家であること、人うまく扱うという特筆した能力で戦いの中で臨機応変の戦略を練られることが一番厄介になると思います。これから伝える予測される相手の動き、そして作戦が順調にうまく運んだら、新たな策略を練られる前に二車くんは彼を即無力化してください」

私の問いかけに黙れドン太郎は僅かに了承の意を返す。今、彼の意識は完全にふうま君達へのグループへと向いている。

同様に視点を広げてみれば、向こう側は作戦会議すらも終わったのか、こちらを見つめながら指をパキパキと鳴らすクラツキングでこちらをへ威圧する神村さん。丁寧な準備運動ストレッチを行う弓走。近づいてきてこちらの作戦を盗み聞きこそしてこないが、じっと私達を見つめるふうま君が開始の刻を待っていたのだ。おっと、ふうま君と目が合ってしまった。

……だから、そんな目でこつちを見んなよ。ふうま。

私とそのグループで人気ランク最低層に居ることは充分にわかったから。もうその視線に恐怖を覚えるレベルだから！

「二車くん、最後に1つだけ。これは予測される相手側の動きですが、向こう側がこちら側の弱点手の内を知っているのであれば更地……遮蔽物の少ない校庭側へと誘い込もうとしてくるでしょう。——最初の目標は……二車くん、あなたです。誘い出すネタ罠はふうま自身であり、私なら君の分家に関するコンプレックス耐え難い衝動を刺激しておびき寄せてくることでしょう。あとは釣り出されたら、君が接近する前に遠距離戦を得意とする弓走さんと神村さんのクロスファイアで決着。ここで私達のチームの最高火力が離脱するわけですから、残党狩りは仮に作戦が無い状態でも彼等にとって造作もないですよね？」

「……………ああ、クソが。お前等が信頼しているふうまなら、その作戦を立ててくる可能性はあり得るな」

「きつと、その作戦で二車くんが釣れなかつた場合時には……潜伏している私達を神村さんの砲撃で森を全体的に延焼させて、遮蔽物の少ない校庭側にあぶり出してくる……のかしら？」

「そこまでは流石に見通しは立てられませんが、絶対としてはありえない話ではないでしょう。だからこそ、その状態にも陥らない作戦の立案検討をする必要がありました」

「……………」

「本作戦は時間を掛けながらも、接敵後は短期決戦で決着をつけに行きます。私が囷になるので、お二人は奇襲の形でふうま君を叩いてください。これまでの情報を考慮すれば、ふうま君を叩くことで遠近両立型の神村さんがふうま君の援護に現れるはずですよ」

「……………」

「彼女達がふうま君を切り捨てたのなら、それはそれで結構。少なくともふうま君がいる状態では、鹿之助くんが『憧れ』。今の神村さんならば、容易に手出しはできないことは確証を得ているので。二車くんがふうま君を叩いている間は、磯咲さんは常に二車くんの援護をお願いします。兎に角ふうま君に接触して乱闘に持ち込んでしまえば、弓走さんの弓撃はともかく、神村さんの砲撃は無力化できるはずですよ。ただし接近するまでは砲撃や弓撃は必ず飛んできません。それを先ほど私に見せていただいた水鏡や水圧（拳銃）射撃で去なして欲しいのです」

私の作戦に磯咲さんは力強く頷いてくれる。ドドン太郎は、まあ、無反応に近いが私の作戦をおおよそ聞いていれば問題はないだろう。

この作戦は、誰が欠けてもうまくは行かない。特に男として腕力へ長けたふうま君に闘志を燃やすドドン太郎も、カルティスト墮ちした際には抹殺予定の磯咲さんも、当然、囷となる私もだ。

模擬戦の面子がドーピングドン太郎と、水を操るカルティスト予備軍と、一般人なんて酷い組み合わせだが……向こう側の暴力団員の娘、由緒正しいお嬢様、遊び慣れた博識の青年という組み合わせと比較すれば……………。

やっぱ向こうのメンツの方がいいな。

私と神村さんを交換したら、完全に邪教一派と探索者による対決に近いものを感じるもん。

「さて、と」

ここで私はやらなければならぬことがあるゆえに、荷物をまとめたのちに円陣を組んだ状態から立ち上がり周囲を見回す。

そんな私に続いて磯咲さんとドドン太郎も立ち上がった気配がして、更に退室していった紫先生が教室に入ってきたが……別に作戦時間を切り上げて開始しようって話ではない。

与えられた時間は最大限に使って事前準備に取り掛かる。それが私のモットーだ。

だからこそ、ゆかり<sup>紫先生</sup>んへ向けて選手宣誓でもするかのように左手を挙げて……。

「紫先生！ 期末試験に入る前にトイレに行きたいです!!!」

米粒大ほどまで離れた紫先生にも聞こえるような、親しみのある渾名呼びでの超クソデカボイスで、トイレタイムの宣言を放った。

……

……

……



ぐすん、ぐすん。

みんな、酷いわ。

私は殴り合いありの期末試験を開始する前に失禁防止のため、他に誰かがトイレに行きたがっているのをさりげなく誘うために恥を忍んで「トイレへ行きたい」って選手宣言しただけなのに。

揃いも揃ってあんなにも異端児みたいな目で、集中線の如くこつちを見なくたっていいじゃない。

男共は尿道も長いし膀胱を殴打された程度では失禁しないだろうが、乙女は膀胱から外部までの尿道は短いのよ!? 女の子が大抵トイレを我慢して失禁する原因は、男性に比べて女性は尿道が短いことも一つの要因なんだからね!

この私がせっかく時間を作ったトイレタイムに、神村はついて来なかった。

それどころか、すれ違い様に『おまえ、マジかよ……』と軽蔑したかのような目でボソリと呟いたの聞き逃さなかつたからな! お前は絶対に対魔忍世界らしく腹パンからの腹圧性公開尿失禁させてやるう! 覚えてろよ!

「そ、それじゃあ、青空さん……。私達は先に、シミュレーションルームで、ま、待ってるわね」

「まだ作戦会議時間が5分ほど残っているとはいえ、開始5分前行動は大人として当たり前の行動だ。いつまでも腹部に力を込めていないで、早く個室から出てくることだな」

「……………」

——ぜってえ、神村を含め弓走の奴も泣かせてやる。

そもそも何がお嬢様だ。お嬢様言葉どころか、気の強い男勝りな口調じゃねえか。

これは折檻ですわよ。正しいお嬢様語を叩き込んで差し上げますわ。

さて、私のトイレタイムについてきてくれた磯咲さんと弓走は一足先にトイレから出て行く。

そのタイミングで私もトイレットペーパーを大量に手を取り陰部の尿を拭きとる。

弓走はあんなことを言っていたが、別にウンコは出ていない。まあ、でも……ウンコを肛門から拭きとるぐらいには大量にトイレットペーパーを引き出してはいた。

いやあ、五車学園のトイレットペーパーね。すっごい柔らかいのよ。もう鼻セレブぐらいに柔らかいの。

本来、こういう国立の施設って経費削減のために備品は安いもので抑えようとするから、格安業務用のペーパータオルを薄切りにしたかのような、紙やすりみたいなトイレットペーパーを使っているものだけだ……。五車学園のトイレットペーパーは破天荒な生徒と教員に反して備品が高級感溢れる優しい感じがするの。

そりゃ、もう使うしかないよね！

前世では学費回収の為、大学のエアコンの設定温度やら、総務課からの汚職情報、コンセントから電力を抜き取ったりしまくったものだけ、五車学園では私はこのトイレットペーパーで学費を稼ぐ！

《left》 うおおおおおおおーッ！ 《/left》

ガラガラガラガラーツ!!

「……そろそろ、やろうかな」

洋式の便座から立ち上がり、洗浄のボタンを押す。

先ほどからヒヨヒヨとうるさい音姫のスイッチを切断して……。背後を振り返り、手元のスイッチを押しながら、便座の排水バーを引く――

「ぬわーーーーーっつ!!」

そして排水音がかき消える程の野太い絶叫を上げるのだった。

――駆けつける教師陣と期末試験が終わり立ち寄る野次馬。

便器から溢れかえる大量のトイレトーパーと私の薄められた濃縮尿。

「トイレ……詰まらせちゃった……。サランラップすっぱんすっぱんかラバーカップを貸してください……」

私は涙目でジエスチャーをしながら、そう告げた。

Episode 108 『囧とは派手に散るものよ……』

「……………」

トイレでのひと悶着ののち、肩身を縮こませながらドドン太郎と磯咲さんが待つであろう地点へと歩みを進める。

シミュレーションルームの出入り口付近では、私が引き起こした惨状を報告する教師と紫先生の力強くも大きな溜息が私の背中を情け容赦なくブスブスと刺していた。

「……………」

しかし、これは仕方ないことなのだ。

大いなる計画には常に犠牲はつきもの。これはやむを得ない犠牲。コラテラル・ダメージにしか過ぎないと自分に言い聞かせる。コラテラル。コラテラル。

それはさておき、私がトイレへ行っている間にシミュレーションルームは劇的ビフォーアフター張りにその景色を一望させていた。

これこそまさにVRSR……バーチャルリアリティシミュレーションルームと称するべきだろう。

かつて私の時代では、VRゴーグルを通してでしか再現できなかった世界が、肉眼もまま目前に広がっている。

室内に入ったとたんに視界が森林地帯に覆われていたこともそうだが、壁も普段五車学園の校庭から眺めている時のように、どこまでも続きそうな青い空と太陽が天井や壁を覆っていた。

その中でも何よりも驚愕したことは、全てホログラムで再現されているにも関わらず物体が実物化していることと同時に粘着質な空気感も再現されていたことか。樹皮にそつと手を触れてみればどこに

でもあるような木の皮の手触りだったし、地面に生え伸びた雑草を引っこ抜けるわ、抜いたものはそのまま私の手中に存在したままだった。

ここまで再現できることに脱帽の極みだが、明らかに先ほどの白い部屋のとはとにかく空気が異なっていた。深呼吸をすれば鼻や肺に森林浴をした際に感じられる森の空気が入ってくる。空気には、どこか湿気すらあるように感じられる。これは加湿器から再現される霧吹きなどで表現される湿気とはまた異なっていた。

「……………」

「やっと来やがったか。尻尾撒いて逃げ出したかと思ったぜ」

そんなホログラムで構成された森林地帯を抜け、先ほど磯咲さんと共にドドン太郎と別れた集合地点まで戻ってくる。

うるせー。こっちは、<sup>ラバーカップ</sup>すっぽんとゴム手袋で詰まらせたトイレを速攻で直してたんだっつーの。

内心では黙れドドン太郎に悪態をつきながらも、彼等の様子を観察する。

彼等の準備は既に済んでいるようだった。ドドン太郎は得物である大太刀を抜刀し、その刀身を天井に浮かぶ疑似太陽でギラギラと反射させている。一方で磯咲さんは彼の傍らで二丁拳銃を引き抜いてクルクルと回しては両サイドについたホルスターに拳銃をしまう動作を行っていた。

また磯咲さんは、既にこちらの〴〵やらかした〴〵事情でも察したかのような気まずそうな顔もして…………。

「は、ははは、それは面白い冗句ですね。言ったでしょう？ 本作戰は誰が欠けても成功しえないのですよ。その様子ですと、お二人は準備万端っぼいですね」

「…………ええ、こっちはいつでも行けるわ」

「は、は。ははははは……………」

これにはメガネが光に反射して目元だけが見えない磯咲さんの顔色に渴いた笑い声しか出なかった。

「そういうテメエこそどうなんだ？ トイレ帰りでやつと準備が整ったのか？」

あまりの気まずさに笑い声をあげ、彼女からそつと目をそらす私へ高圧的な物言いでもドン太郎が挑発を仕掛けてくる。

彼に関してはどう『そういうタイプの人種なのだ』と割り切つて、肩をすくめては持参してきた荷物の一部を地面に広げることで準備が整っていないと伝える。

「なんだ？ まだ期末試験直前にもなつてまだ準備でも始める気か？」

「ええ、そうですよ。期末試験の内容がまさかの団体模擬戦であることに度胆を抜かれましたが、それでも赤点は取りたくありません。残された時間の許す限り、事前準備に時間は割くのが私のやり方ですの  
で」

私の言葉に付き合いきれないと言った様子で、ドン太郎はその場を離れ樹木に寄りかかりながらこちらを観察し始めた。

その間に森林地帯で身を隠すには不向きな色合いをした上着を脱ぎ、森林地帯からこちらが発見しにくくなるような地味めな服装に着替える。作戦のためにトイレへ持ち込んだ小物を片手に、追加でリュックサックから消火器と双眼鏡、メリケンサックを取り出す。

荷物を広げつつも、その過程でまるで雪でも口に入れるかのようにホログラムの土を放り込み、トイレで調達した水を使って泥を生成し白い素肌や顔面に塗りたいくる。うん、味はおいしくない。これは粉<sup>まこ</sup>うことなき土だ。This is Dirt. 土の味だ。『ぺつ。ぺつ』と吐き出してしまいたくなるような衝動に駆られるが、ぐつと

堪えて口腔内の土を咀嚼する。

ふと視線を上げれば、狼狽する磯咲さんと口元が引きつった表情のドドン太郎がこちらを凝視しているが、これも必要な事前準備なんだ。分かってほしい。うゝおゝえつゝ。

ちなみに、味は普通の土だった。泥の味と僅かな雑草の苦み。へ地質学でわかることは、これは五車学園の土だ。ほのかに野生生物の排泄物の味がするが、大丈夫。既に破傷風の予防接種は済——

「おゝうゝえゝつゝ！ゝ！ゝ！ゝ　オゝ　ロロロロロロロロロロロロ

「r」

「!?!?!」

「!?!?!」

「……で、では……これより、期末試験を開始す、する！」

事前準備が完了する前に咀嚼した土を胃袋の中身も含め口から吐き出す私へ、磯咲さんが介抱のため背中をさすってくれた。

そのタイミングで時間がやってきたのか、スピーカー音越しに紫先生の無慈悲だがどこか戸惑ったかのような声が響き渡った。

……

……

…

私のSCP1079IJP S C P 1 0 7 9 I J P 嘔吐と紫先生の期末試験の開始の宣言から早20分。

ひとまず進展としては彼女達に五車学園の制服を脱ぐように指示を出して、その目立つ白色のワイシャツを脱ぎ捨てさせた。森の中で紺色のズボンやスカートはまだしも、白色のワイシャツは目立ちすぎる。

「どうですか？」

「そうね……まだ青空さんが見越した通りの布陣で展開しているわ。

見通しのよい校庭にふうま君、少し離れたところに神村さん、そこから遙か遠方のプール近くに弓走さんね」

「ふむふむ。やはりプールを押さえ磯咲さんの『水鏡』を封じに展開してますか……なるほど。では手筈通りで構いませんね。では——  
「おい」

「……二車くん。こういうのは我慢比べですよ。安心してください。作戦は順調ですし、そろそろ動きますから。えっと、磯咲さんはそのまま神村さんの様子を教えて頂きたいのですが、今どんな調子ですか？」

「そうね……私達が布陣している森の方を警戒している……って感じかしら？ あと先ほどから上着の裏生地に入っているのを止めて、貧乏ゆすりをしながら後頭部の髪を掻いているわ」

「それはよかった。それはコソコソ隠れている私達にイラついている証です」

それから私達はまだ森の中に身を潜め、〈隠密〉行動を取りながら移動と攻撃のチャンスを伺っている。

開幕から予見した通りにふうま君は『当主がうんぬんかんぬん』とドドン太郎の劣等感を煽り、彼を誘い出そうと策略に打って出てきたが、予め彼へ何を言われようとも後で一矢報いるために今だけは我慢するように言い聞かせたおかげで、ドドン太郎即脱落という初期から絶望的な事態に立たされることはなかった。

幸いにも相手方にはこちらの居場所は発覚しておらず、こちら側だけが相手の居場所を突き止めているという状況だ。

これは銃撃戦や遠距離戦を行う上で、不意打ちするであれば非常に有利な状況であろう。しかし、こちらのまともな遠距離武器は磯咲さんの所持している拳銃のみ。ふうま君達もこちらの手の内のある程度は理解しているのか、森林の境目から20m範疇に入っただけでも来ようともしない。

だから現状できることとして、主な偵察は眼鏡を掛けていることで私よりも更に眼の良い磯咲さんに任せている。私はその偵察の情報



を元に、間に合わなかった事前準備の続きに取り掛かりながらドドン太郎へ情報を共有しながら彼をなだめる。男手かつチームの最高火力という面ではある種の要となっているドドン太郎は、紫先生が開始の号令を発動する前と同様に樹木へ背中を預けているままである。だが位置関係上としてはドドン太郎が一番安全な場所にいることには変わりない。

また彼にはおっぴろげにした大太刀の納刀はさせた。せつかくの〈隠密〉奇襲作戦が、ドドン太郎の大太刀の反射による輝きで居場所が発覚することは避けたかったからでもある。

「さて、と。事前準備はこんなもので大丈夫ですかね。即席の事前準備ですが、囃役としては十分に機能できると思います」

「……………」

「お待たせいたしました。ついに二車くん達の出番ですが……………もう一度、作戦の内容を確認をしておきますか？」

「要らねえよ。はあ……………。散々こつちを煽つてきやがったあの目抜けを思う存分、叩きのめせると思うと血が疼いてしかたねえな」

「左様ですか。ではせいぜい活躍、期待していますよ。磯咲さん、二車くんのサポートをよろしくお願いしますね」

イキリ黙れドーピングドン太郎の発言にははいはいと流しながら、磯咲さんには片手で謝るような仕草をして偵察を交代する。すれ違い様に彼女の様子も観察するが、彼女自身もまたイキリ黙れドーピングドン太郎の自信過剰な性分や、もしくはふうま君を目抜けと蔑む様子に辟易しながらも、こちらにアイコンタクトを取って森林地帯を抜けた先にある校舎側裏へと身を屈めながらイダドドン太郎と共に消えていった。

「さて、囃役として派手にやりますか……………」

現在の偵察ポイント付近に存在する木へそろりそろりとへ忍び歩

き〱を兼ねた〱登攀〱して、そこから太陽光の反射に注意を払いながら双眼鏡を用いて校庭を陣取る3人を私が偵察する。

未だにふうま君御一行も御一行でこちらが潜んでいる森林地帯を監視を続けていた。磯咲さんから渡された情報もほぼほぼ正確で、ふうま君と神村さんの意識は完全に森側へと釘付けになっており、これからイダ〱ドドン太郎と磯咲さんが襲撃する予定の校舎側への警戒は手薄だ。

ただ主な警戒を森林地帯に置いてはいえ、代わりとしてプール施設近辺に陣取っている弓走が広域の警戒。特に2人の背後を警戒しているようだ。流石に弓道に精通している辺り、目も良いのだろう。イダ〱ドドン太郎と磯咲さんが何処から奇襲してきたとしても、あの場所ならば2人を援護できる素晴らしい布陣だ。

「さーて、気付けよー？ こっちに気付け……」

木の上から3人の姿を確認した私は、そのまま双眼鏡を頭上より高い位置に持ち上げ、わざとキラキラと太陽光に双眼鏡のレンズを反射させる。

「——しめたッ！」

ドスッ！

私の胴体を狙ったであろう寸分の狂いのない弓撃が木の幹に突き刺さる。

「ぐうっ!!」

相手側に手ごたえが伝わるように弓矢が着弾したフリをする。大きな声で悲鳴を上げ双眼鏡を地面に落としたところで、今度は見覚えのある橙色の閃光が校庭側から放たれ……ッ！

しかし、こちらの砲撃は双眼鏡を自身の頭上で煌めかせていたこと  
もあつてか初撃は頭上を反れ、砲弾は周囲の枝を引き裂き葉を焦がす  
程度で済む。

即座に弓矢と砲撃の二撃目が飛んでくるが、こちらも既に想定済  
だ。彼女のバズーカ砲が着弾する前に〈跳躍〉と〈登攀〉を組み合わ  
せて、偵察として用いていた木陰から滑落するように滑り降り――  
ヴあっ?!

バキイツ！ スデン!!!

――ズガアアアアアアアアアアアン!!!

着弾による爆風と共に木の枝から飛び降り、飛び降りた先の枝が脆  
く……そのまま尻から地面に叩きつけ……うごおおおおおお  
おっおっおっおっおっ……し、尻がア！割れるうううううううう  
い！

「ぐぎゃ……ぐぎゃぐぎゃぐぎゃぐぎゃ」

割れるような尻の痛みに、尻を片手で抑えながらダンゴムシのよう  
に蹲り地面の雑草を驚掴む。……すごい痛い。すごい痛いッ！

ヴヴヴヴヴヴ……し、尻は強打してしまつたが、ある意味〈幸運〉で  
もあつた。ダンゴムシのように蹲る私の頭上からバズーカ砲で粉碎  
された燃え朽ちた木々の破片が背中や頭上にパラパラと降り注ぐこ  
とはなんとなしにわかつた。あそこで木の枝が折れてなかつたら、今  
ごろ神村のバズーカ砲を直撃を受けていたはずだ。

相変わらずケツからの着地でケツが割れるほどに痛い、這う這う  
の体で他の木陰の影、かつ窪地に移動することで更なる砲撃の餌食に  
なることだけは避けられた。

ケツは2つに割れたが『CALL of CTHULLHU クトウ

ルフ神話TRPG』(61頁) “肉体的な損傷(負傷)” 『新クトウルフ神話TRPG』(116頁) “通常のダメージの効果” 基準として考えた場合、この尻への痛打の一撃はかすり傷にしか過ぎない。念のため、尻を抑えながら涙目になりながら自分の尻を揉むが、問題なく身体は動きそうだ。

それに私は囷役なのだ。この程度で終わりにしてはいけない。

そうだ。お前達の攻撃目標はここにいるぞ。

「ばばばば馬鹿野郎！ か、かかか神村さん！ いくらここが屋外に見えようとも実際にはシミュレーションルーム！ 屋内ですよ！？」  
お くない！ いくら建物が広いと言っても、バックブラストも延焼も発生しなかった洋館事件とは状況が違います!!! そこは弓走さんの弓術の連続狙撃が出番でしょうが！ 本当にバズーカ砲を放って、木々を燃焼させる人がありますか!? こつちを煙で巻いて窒息死でもさせるつもりですか!?!」

「うるせー!!! こつちの作戦に口をはさむんじゃねー!!! さつきからコソコソ、コソコソ、コソコソ！ ネズミみたいに逃げ回りやがって！ だったらネズミらしくテメエを焼き殺してやる！ テメエ等が最初の挑発で出てくりや最速の短期決戦で片付く予定だったつーのに！ 二車と磯咲はどうしたア!? 俺の想定通り、やっぱテメーが今回も囷かア!?!」

木陰に隠れたまま、樹木を装甲にしながら声を張り上げて注意を引き付ける。

声色から神村は相当ご立腹な様子だ。

チラリと顔を半分出してふうま御一行の様子を伺うが、私の大声の罵声に反応しているのは彼女だけのようだ。現在の位置では弓走の様子は分かりかねるが、少なくともふうま君は作戦会議中に神村さんから私が取るであろう行動を話したのだろう。私が囷役であることに核心を持ったのか、イダードドン太郎と磯咲さんの警戒のためこち

らに背中を向けているのがわかる。

神村はというと……。疑似太陽とはいえ20分間も炎天下のなか放置され、こちらの潜伏活動が気に喰わなかったのか、バズーカ砲を構えることも止めてツバが飛び散る勢いのまま怒鳴り散らし返していた。

「ああ！　そうですよ！　ご明察の通り、今回も私が囿役ですよ！

こちらら真つ向から〈砲〉やら〈弓〉なんて得物を持った相手となんか、やり合ったことないんですもん!!!　なのに、なのに弓でなんかで射抜きやがってえ……。痛え……。痛え……。つ！　ち、血が！　血が……。あつ！　こ、こちらら一般人だぞ！　一般人！」

「一般人だア!?　何言つてんだよ！　テメエはアよツ!!!」

ズガアアアアアアアアン!!!

ズガアアアアアアアアンツ!!!

ズガアアアアアアアアアアアアアアンツ!!!

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ  
!!!!!!

「うわあああああつ……。い！」

ふたたび激しいバズーカ砲による連続砲撃。

先ほどの集中砲火に比べれば狙いは正確ではないが、それでも私の周囲に着弾した爆風と熱風が私を襲う。木陰かつ窪地で身を屈めているため一発一発が致命傷になることは避けられているが、まるで戦争映画で砲兵に晒される歩兵のように着弾した土やら小枝が身体に20ゲージショットガンのように叩きつけてくる。

さらに爆炎交じりの爆風は周囲の木々を容易に引火させては燃え広がって行く。ただのホログラムの演出光景だと思いたいところだ

が、明らかに彼女が延焼させている木々からは熱と痛みを感じられた。

近未来の日本国すげーな、おい!?

ここまで本物に近い状況の再現に感心しながらも、内心では『これが期末試験の内容!?' 実技試験企画者や五車の教師共は生徒達を少年兵として育成しているの間違いじゃねーの!?'と悪態も同時に付いていた。

ここは私の時代から半世紀も刻が経過した未来の日本国。それに対魔忍世界線だ。人魔外道と対抗するために、この方針が義務教育として制定されたのだろうと思うこと以外に考えが付かなかつた。これが私立の学園とかであれば、まだ異常であると言い切れるのだが……五車学園は国立ゆえにこの試験内容に関して、他にそれらしい別の理由が思い浮かばないのだ。

「ぐっ……」

だが、十分に時間は稼げた。あとは磯咲さんとイダドドン太郎の奇襲に賭けるが、このままでは試験で本当に命を落としかねない。

着用していたインナーと鹿之助くん用の勝負下着であるブラジャーすらを脱ぎ捨て、インナーは引き裂きマフラーのように顔……主に口元を覆うように巻く。

何故か私だけ早々に上半身全裸だが、煙に巻かれて一酸化炭素中毒で炎の中に取り残されるのだけは勘弁願いたかったからだ。

これは試験なのだから教師陣がそれまでに私を救出するかもしれないが、一酸化炭素による中毒死は本当に恐ろしい。だからできる対策を万全にして『私はここだよ』と消火器を作動させてからスイッチを――

「これで終いだアアアアッ!!!」

ズガアアアアアアアアアンツ  
!!!!!!

「ぬわーーーーーっっ!!」

私が遮蔽にしていた樹木に神村の爆炎が直撃する。

その砲撃は、ゲマから放たれたメラゾーマがパパスに直撃した時のようなキノコ雲を立ち昇らせ、後方から響く私の音割れポッターと化す絶叫と、周囲へ消火薬液を撒き散らし続ける消火器と、私のキャンピキットの荷物と炎と共にすべてが燃え尽きてしまったのだった。

さて、さっそくだが開始された期末試験の状況は芳しくない。

先ほどまで私が滞在していたところは、神村さんのバズーカ砲の連射によって完全に焼失してしまっており、立ち上る黒煙がホログラムで構築された天井まで届いている。しかし天井には私が発見できていないだけで換気扇でも回っているのか、立ち上った黒煙が室内の空気を一酸化炭素で満たしてしまう……という状況に陥ることはなかった。

それでもホログラムで構築されている筈の森で、炎は他の木々に延焼していく。そのため一部分だけ炎の森が出来上がってしまった。生木のいぶられる悪臭がこつちまで漂ってくる。

てか、止めなくていいのか五車学園の教師陣。

紫先生？ ムラサキせんせい？ ゆかりーん???

あの、今、採点してらっしゃられるのですよね？

生徒が1人、しかも一般人の生徒が神村さんがバズーカ砲で放った爆炎に飲み込まれて真っ黒こげの煤まみれになっているんですけど。

誰も期末試験のストップも、消火活動も、救助にも来ないんですけど？

これは安全管理どうなってるんですか？  
それともこの世界ではこれが普通なんですか？

私、五車学園が国立学園だからという理由と、五車学園以外にこの世界の学校を知らないから、この状況が正常な光景なのか、異常な光景なのか。すごく判断に困るんですけど。

一般常識を働かせて考えることなんてできない。  
繰り返すようで悪いが、対魔忍世界は私の生きていた時代よりも半世紀以上先の未来の世界なのだ。

かつての私の時代で例えるならば『昭和の価値観と令和の価値観が



同じであるか?』と問われれば、それは間違いなくNOに違いない。昭和では当たり前だった体罰が、令和では治外法権気味ではあったが処罰の対象となっていたし。アダルトビデオなども獣姦や強姦、露出などのジャンルも過激なものや本物は個人撮影を除いて時代と共に消えていった。これを対魔忍世界の状況に照らし合わせた場合、下手をするとやはり北斗の拳のように暴力で解決するのが普通な世界になっていたとしても何もおかしくはないのだ。

あのナイ牧師とやら、本当にトンデモない世界に転生させやがって！

だが、今さら悪態をついてもどうにもなるわけでもない。テロリスト襲撃後の入院期間中に一般的な教養問題を身に着ける他にも、ちゃんと他所の学校がどのような事を期末試験として出題してくるのか調べるべきだったかもしれないと深く後悔する。

されどもそんな私を差し置いて、他所に戦闘はまだ続行していた。

「二車ア！ 磯咲イ！ さっさと出て来やがれ!!! 囀の青空はとつくに果てたぞ！」

神村さんの絶叫が聞こえる。

どうやら今では、ついに彼女も索敵に回ってしまったようだ。

すまない。

すまない……。

すまない……。

彼岸島のお師匠が吸血鬼を殺害するときのように謝罪しながらその様子を遠目から観察する。

本来であれば、もう少し耐え凌いで、せめてドドン太郎と磯咲さん

がふうま君と神村さんに接敵するまで時間を稼いだかったのだが……。いやあ、いささか彼女を焦らし過ぎた。あそこまでバズーカ砲を掃射してくるとは。

次に短気なヤツを煽る際には、焦らし過ぎないように気を付けよう。

次があるかどうかわかんないけど。

「クソが！ 役に立たねえな！ 所詮はメヌケの友人か！」

「んもう！ やるだけやってやるわ！」

やがて2人は目標強襲開始作戦地点への移動が完全に済み、森側とは反対側の校舎裏から姿を現してふうま君へ向けて突撃していく。

予定よりも早い撤退によって囷役にもならなかった私のせいで、2人は神村さんの砲撃と弓走の雨の中を決死の顔で駆け抜けていた。

その攻撃の矛先は全て私のチームメンバーの最高火力であり、相手にとつては尤も脅威となるであろうドン太郎へ集中砲火が向けられている。しかし私が磯咲さんが指揮した通りに動いてくれているおかげで、早々なドン太郎の脱落は阻止することができていた。

彼女の “水鏡” によって神村さんの砲撃は地球防衛軍2から登場しているシールドベアラーのような弧を描く盾でほぼほぼ防ぎきり、弓走の弓術は彼女の水圧2挺拳銃から放たれる鉄砲水で軌道を逸らし着弾寸前のところで直撃を免れている。

いやあ、ほんとゴメン。

予定では2人が接触するまで時間を稼ぐはずだったんだけど……。思ったより神村さんの砲撃が銃弾のカーテンと称賛している程、精密でとても時間を稼ぐ余裕なんかなかったんだ。こればかりは分かっ  
てほしい。

かつて対魔忍世界で経験したクトゥルフ神話事象系事件である洋

館事件にて、なお先輩によるレーザー銃と神村さんのバズーカ砲によつて、本来、火器の攻撃が通じない筈の赤き霧／磯八目巾着鰻という神話生物がその身をたじろかせていたのも何処か納得できてしまった。これは苛烈過ぎて嫌にもなるだろう。やはりあの場合、シンプルに奴の特殊装甲よりもこちらの火力が勝つていたと考えることが妥当だ。

……おつと。

心の中で謝罪しながら考察を重ねているうちに、事態は進展しドンドン太郎と磯咲さんが最優先第一撃破目標であるふうま君と接敵した。それからもうま御一行の動きはこちらの想定通りに……。まるで手のひら上で踊るマリオネットのように行動してくれる。

ドドン太郎による近接戦に持ち込まれるふうま君に対し、神村さんが駆け寄つて彼の援護に向かう。されども磯咲さんが神村さんの進路を妨害して……。今度は弓走が超遠距離から2人の援護射撃を

こちらもちちらで全て作戦通りだ。

あーあ。

神村さん。

今のは最高のチャンスだったのに……。

やはり君はそのチャンスを不意にするのですね。

ま、君にはできない芸当なのはわかつていたことでもあったのだけ  
どき。

「ふう、ヴウ、まアツ!!! 俺はここで目抜けの当主様をぶっ飛ばして、俺こそがふうま宗家の当主に相応しいってことを証明してやる!!!」

「まだそんなこと言っているのか、だから俺は宗家とか分家のお前の上下関係には興味ないって言ってるだろ。俺だって好きで当主に

なつたわけじゃないんだ。それに俺達の親父がいた頃とは違うんだ  
——」

無事にふうま君へとドドン太郎をぶつけられたおかげか、心なしかドドン太郎がイキイキとしているように見える。何か当争いのこととで揉めているようだが……ここからではふうま君が何を言っているのかよく聞こえない。

以前、鹿之助くんに病室にてあのドドン太郎とふうま君の関係性について説明してもらった時ことがあつたが、やはり何度考えても時代遅れの風習に固執しすぎているのでは？と疑問に思うことはがある。これが両親とかの相続絡みで、宗家のふうま君がすべての権利を所有しているという話であればドドン太郎がブチギレる要因や言いたいことはわからないでもないのだが……。

ここは2つの意味で、外からやってきた私には一生理解できない『仕来り』なのだろ。それでも、まあ……。無粋にも『五車町を出たら、そんな身内による仕来りは無意味で無価値である』と思ってしまうのだが。

さて。そんなふうま君とドドン太郎による個人的な問題は差し置いて現状、煤まみれの真つ黒な私でも客観的に分かる戦況がある。

それはふうま君とドドン太郎このまま戦闘を続行したら『どちらが最後まで立っていられるか』ということだ。それは圧倒的な確率でドドン太郎で間違いないだろう。彼の持つ大太刀という武器の性質とふうま君が所持している日本刀の性質。2人の技量。力の差。いずれを見比べてもやはりドドン太郎が全てにおいて勝っている。

ただし——

「セイツー！」

「ふっ飛べアー！」

「ぎやあつー！」

神村さんと弓走の援護射撃が加わった状態では、恐らくドドン太郎

の方が劣る。

今は磯咲さんが、神村さんの近接攻撃を何とか往なしながら「水鏡」を器用に使って弓走の弓術を凌いではいるもの……。明らかに格闘術では神村さんには技量で劣っている上、向こうも本気で期末試験で赤点を取りたくないのか。あるいは「勝ち」にきているのか。それともふうま君の指揮もあるからか、息の合った攻撃で磯咲さんを追い詰めつつある。

このままでは磯咲さんが倒れ、2人がふうま君に加勢し形勢逆転してしまうのも時間の問題だろう。

それにふうま君も状況を見越してドドン太郎の怒りを煽り、攻撃を単調化させることで〈回避〉を行ない時間稼ぎをしているようだった。

「うるせえツツ！ 黙って俺と戦え！ 邪眼じやかん 夜叉鬨やしやどくろ・累かさね」  
エ  
!!!

ここでドドン太郎が大太刀を左手で制御しながら、必殺技を叫びながら邪気眼が発動した中二病男児のように片目を右手で抑え始めた。

「……………ブフオツ……………ンンツ」

これには梅干しでも食べたかのように口をすぼめ、咄嗟に視線をドドン太郎から地面へと移すことで笑い出してしまうことを推し堪える。

……あ、あぶねえ。まさかの必殺技っぽい技能の宣言に危うく激しく吹き出すところだった。

じゃあ、じゃ、があん……やしや、どくろ……かさねえ……！  
じゃあないんだよ！

次に視線を彼等に戻した時には、なにやらドドン太郎はフォルム

チェンジでも凶ったのかいつの間にかに武者鎧姿になっていたが……。近未来の日本ということもあるし、仮面ライダーのような即変身セットが販売されていてもおかしくはないということ、特にこちらとしても気にするような要素でもなかった。

そんなことよりも今は共感性羞恥心で死にそうになっているのだが？ 予期せぬところでこちらのメンタルにダメージを与えて来ないで欲しいのだが?!

あの場で乱戦している4人も誰一人としてドドン太郎の必殺技宣言に笑わず、戦闘を続行できているところは単純にすごいと思います。(小並感) きっと死に物狂いで乱闘しているゆえに、ドドン太郎による必殺技の宣言に気が付いていない説もあり得る話ではあるのだが。

さてはて、やはりアイツは中二病全開だったのか……。

右目にオサレな眼帯付けて居たし、そのカツコイイとか思ってたような臍脂色の籠手や脛当ての存在からは、そんな気がしていたよ……!

ドドン太郎。それは許されるのは中学生までなんだ……流石に、高校生にもなって太刀を振り回しながら必殺技を叫ぶのは……私もやったことがあるけど、ここぞって時に叫ぶのが一番いいと思うんだ。

まあ。まあ。まあ。

誰しも人間はこういう恥ずかしい過程を経て大人になっていくものだからね。

少し先の未来で、必殺技を叫んでいた自分を思い返して恥ずかしい黒歴史に悶絶するといいいのさ。

誰しもが通る道だから。

大丈夫だから。

安心して欲しい。

プププ……

Episode 110 『敵を騙すには、まず味方から』

——さて。

2人は存分にいい働きをしてくれた。

『戦争は数だよ兄貴！』という名言通りにドドン太郎と磯咲さんの2人は、ふうま御一行の3人へ押され気味である。

現在の戦況を分析する間もなく磯咲さんにも限界が訪れ、多勢に無勢の攻撃はドドン太郎へと一点集中することだろう。

けれども私を除く、敵味方を含めた全員が1つの大きな過ちを犯していることに関して、誰1人として気が付いてないようだ。

とはいえ、これは目先の敵に意識を集中しすぎたことや、神村さんによって不用意な誤解を生みだされたことによる副次効果の仕方のないことなのかもしれない。

かつてこの私でさえも、クトゥルフ神話TRPGの探索者として事に巻き込まれた当初はよくやらかしたものだよ。

だからこそ……。

「——」ぎげんよう。弓走さん？」

私はまるで映画『ランボー 最後の戦場』にて、主人公ランボーが機関銃手の背後にゆつくりとマチェットを振りかぶりながら姿を現したのようにその姿を確実に現にする。

「はっ……」

弓走は私の丁寧な声掛けに予期すらししていないかのような間拔けな声を上げながら、私からみれば周囲の動きが緩慢な流れになった空間で背後を振り返る。



そう。最大の過ち。それは――

森林地帯を這って逃げた私を勝手に死亡・敗退判定を下して、側面に回り込んで背後からへ忍び歩きながらへ隠れるへへ隠密状態の私に気づけなかった、戦闘不能状態の確認不足による愚かさだよオーツ!!!

「ブブーツ!!!」

「グツ!!! しまっ――」

期末試験開始前から口に含み咀嚼していた胃酸混じりの泥を思いつきり、彼女の顔面目掛けて吹きかける……ッ!

これは『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』67頁 “奇襲” の技法を応用した完璧な攻撃かつ目潰しだ。

これで、弓走は私の攻撃をへ回避することは不可能な状態に陥る。クトゥルフ神話TRPGの世界線の住人ではないため、彼女にこのルールが適応されるかどうかは不明だが、少なくとも一端の学生程度が攻撃者の攻撃が見えない以上『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』76頁 回避と『新クトゥルフ神話TRPG』57頁 回避にはこの対魔忍世界でも適応できそうな尤もなルールとして掲載されている!

「あらあらあら? わたくしとしたことが、公衆の面前で毒霧くしやみをしてしまうなんて、はしたないですわ。ごめんあそばせ?」

「あお……青空ア……ッ!」

「そうそう。弓走様もお嬢様なんですって? では、そのような口汚い言葉はお控えなすって! お嬢様としての品が落ちますわよ! でも、辞世の句を聞かせてくださいましたし、今すぐに楽にして差し

上げますわ。さあ、墓前のお花は何がよろしいかしら？」

エセお嬢様語を展開しながら、必死に目を擦りこちらの視界にとらえようとする弓走が体勢を立て直す前に武器を構える。

メリケンサックを構えたジャブで顔面、まずは鼻頭を一発殴りつける。

「ガッ……！ うぐああああああ!!!」

痛みで顔面を抑える弓走。

彼女の得物である弓を掴む手が緩む。即座に得物をへ近接戦闘（格闘）からのマヌーバで奪い取り、へキックで蹴飛ばして彼女が拾い上げることを容易には叶わないように武器を取り上げた。

矢だけがまだ彼女が背負っている空穂うつほの中に取り残されたままであり、あれを小型ナイフの応用として突き刺されることは避けたいものであったが、こちらがそこまで執拗な武装解除に奔走しなくとも彼女にはそれだけの行動に至れる余裕はなさそうだ。

現に目の痛みと、異物を何とかしようとする行動と、鼻頭に走った痛みと、私による次の攻撃から逃れようとする行為を同時に処理しようとしており、その動きはさながらパニックを引き起こしているかのような混乱ぶりであった。

当然、目の中に私の唾液どころか土まで混入した彼女が目を開けて私の攻撃を避けるなんて器用なことができるはずもなく――

「シイッ！」

「ビクッ

今度はわざと彼女の顔面に直撃しないかのような風を切るジャブ音を彼女の耳元で響かせて、自然と顔面を庇うために両手が持ち上がった所に――

「オラオラオラオラオラッ！ オラーアッ！……あ。で、ですわ  
〜！」

身を屈めて、そこまで鍛え上げられていない柔らかい腹部目掛け  
へ近接戦闘（格闘）をオラオラッシユを連続で叩き込む。お嬢様語は  
添えるだけ。

……だが私も鬼ではない。私のことを散々罵って分の清算として、  
数発殴って満足した後は『新クトウルフ神話TRPG』選択ルール：  
121頁「ノックアウト打撃」で気絶させるまでにとどめる。本命  
は弓走ではないのだ。

私の真の敵は、森林地帯で倒れたはずの私の登場にあっけにとられ  
ていた磯咲を昏倒させた――

その細目を白黒させながらも、背後から姿を現した私へ銃口を向け  
今度こそトドメを刺そうとしてくる神村にあり――

――させるかよ。

「ッ……!!!」

私の行動に神村は、バズーカ砲の引き金を引くのを躊躇う。

その間に迅速な行動で距離を詰めて、彼女と接敵する。

「やあ、神村さん？ 地獄から帰ってきたぜ。こ  
れからは私が引き継ぎます」

「テメツ――」

「吹っ飛べ」

「ヴッ！」

私の手に携えたコレのおかげで私は神村によるこれ以上の被弾を  
抑えつつ無傷のまま、勢いを殺すこともなく攻勢へと打って出ること  
ができた。

その将来垂れ乳になりそうな特大の牛乳うしちちに向けて、唸れ！ 私の  
へいぶっ！！！！

私が神村へ無傷のまま接近するために行ったことは別段、特別にクトウルフ神話TRPG世界線の新しいルールではない。

少なくとも私はこの手法をこっちの世界に来てから2回以上は使用している。

仮にこの行為が五車学園の教師に見られていたとしても、ギリギリ一般人枠として見て貰える程度の技法でもある。

その技法も、まえさき市のシヨツピングモールの裏方のカルティストに対して利用し、今私が対峙している神村に対して使用したものだ。

——そう、もう言わずもがなの慣れ親しんだ行為である技。

定番と化した荒業その1！『クトウルフ神話TRPG系統』では装甲は重量に含まれない！』ことを利用した気絶中の『弓走ゆみほしり 颯はやて』を肉壁として利用させてもらった。

もちろん。ただ弓走を神村からの砲撃に耐え凌げる肉盾役として選んだわけではない。

神村さんは非常に仲間想いで仲間は見捨てないような昔ながらの不良ってやつだ。そんな彼女が期末試験前にいがみ合っていた相手とはいえ、共に戦う仲間を見捨てその仲間と共に砲撃ができるか？と問われれば間違いなくNOだろう。

それに彼女は、つい先ほども私達の目前で、自らチャンスふうま君を逃し、味方を含めた砲撃が行えないことの証明も示してくれている。

もし彼女が私が囮として、森の中で果てていると予想していたのならば——

磯咲さんとドドン太郎がふうま君に接敵した瞬間にふうま君ごと

砲撃を浴びせれば、彼女たちはどのような形であれ勝利を掴み。勝つことを目的としたこの期末試験に合格できたのだ。

——だが、彼女はそれをしなかった。

つまり彼女には、いがみ合ったとしても彼等に仲間意識を持っていくのと同時に、如何なる手段を以ってしても勝利を掴むという行為に対する認識が甘いところがある。いかにも学生らしい青臭い小娘らしい考えだ。

私の行為は、その甘さへ付け込む隙があり、うまく行くという確証があつたから実行できたというわけだ。

Episode 11 『手加減無用のキャットファイト』

「吹っ飛べ」

ガッ!!!

「ヴっ!!!」

ゼロ距離まで近づいて、弓走を肉壁として防護壁にしながら彼女の隙間を塗って神村に牛乳うしちちへと一発へこぶしをめり込ませる。

いくらその乳が脂肪の塊とはいえ、メリケンサック付きのへこぶしによる一撃は衝撃を完全には緩和できないらしい。

バズーカ砲を持っていない方の手で自身の胸元を抑えては、まるで《心臓発作》でも受けたカルティストのように前かがみのまま殴られた部位を抑えて後ずさる。

「青空ア！」

神村もまたデス・ブレス胃酸混じりのくしゃみを浴びた弓走のようによく吼える。

このまま『弓走 颯』を肉盾として起用したまま付け込める隙へ連撃と行きたいところだが、あくまで『弓走 颯』の存在は神村との距離を安全に縮めるための存在でしかない。

それに……。この神村から見れば卑怯とも言える手法を用いたままでは、仲間思いな彼女はきつと本気で殴り合う事ができずに、鹿之助くんが “憧れ” する単純な強さとしての “憧れ” の発揮には至らないだろう。

だからこそ、今更ではあるが十分な接敵に貢献してくれた弓走に敬意を払い、神村特攻の肉盾である彼女をそつと地面に転がして身構え

た。

……。 ……少なくとも今のへこぶしへ一撃で、砲撃と共に弾け飛んで行った私のパパス式絶叫を収録した27, 500円の遺言用ICレコーダーの元は……。

……取れていないがこれから神村に追加加算として清算してもらうので、問題はない。

「ごっからは小細工なしです！ どちらが “憧れ” に近いか勝負と行きましようか！」

「ぎけんなア！」

神村が体勢を立て直すのを待つ私に対して怒り狂ったかのように咆えたところで、こちらも某黎明卿のように腕を大きく横に広げて口元だけギラついた笑みを見せる。

まずは走り寄ってくる神村に対しへ近接戦闘(格闘)で殴りかかる。シャドーボクシングのように軽くステップを踏みながら、メリケンサック付きの拳で彼女の顎や喉仏、眉間や眼孔を狙ったメリケンサック付きのへこぶしへを突き刺す。

既に彼女と一度。洋館事件にて拳を交えているが……やはり単純に言えば強い。

私の方が彼女より小柄なため体格差ビルドによるハンデも生じているのかもしれないが、少なくとも触覚を持つ黒い黒豆のような昆虫を使った料理を止めさせるため、保護の目的で手加減してのへ組みつきで取り押さえようとしたところへ応戦する形で簡単に捻じ伏せ返してきただけの実力はある。

この期末試験では、あの時のような “保護” の目的をいつさい兼ねていない——これまでの経験を生かした全力の手加減抜き攻撃で仕留めかかりに行っているのに、すべて直撃寸前のところでへ回避されていく。

おまけに彼女はへ回避をしながらも私の振るった腕の動きをしつ

かりとその目で捉えており、瞬きすらしている様子はなかった。

カウンター（応戦）を放つて来ないのは、まだこちらの力量を計っているからだろう。

これが、鹿之助くんが “憧れ” を抱くほどの彼女の強さ……。恐らく授業で執り行っているらしい合同格闘技の授業以外にも、ヤンキーという事もあってそれだけ現場の喧嘩慣れしているという事か。

「チイツ！ 憧れか何か知らねえが、人様の急所ばかり狙ってきやがって！ あんまりチョーシに乗ってんじゃねエ!!!」  
「あれ？ そうですか？ すみません。それは意図してませんでした。では他の部位を狙うように努めますね？」  
「ぶつ殺す！」

こちらの挑発に乗る大ぶりの右ストレート……！

〈応戦〉は……間に合うかわからないが、やってみる価値はあるだろう。

否。やってみる価値が有るか無いかの問題ではない。

——今回の死闘（実技試験）で〈応戦〉以外の選択肢は存在しない。

特に今回の戦闘では勝利することを念頭に置きつつ、その上で〈回避〉よりも〈応戦〉で神村をぶちのめしたい私が勝っている。単純な勝利を掴むのであれば、ふうま君のように〈回避〉を連続して相手が疲れを見せたところに打撃を打ち込む方が良いのだろうか……。この期末試験ではドドン太郎のように私情を挟んだ上で勝利を掴みたいのだ。

これは自分でも言っていて悲しくなってくるが、何しろ彼女より私の方が胸部の空気抵抗が少ない。では、この身体的長所を利用しない手はないな？

彼女の拳に合わせて、太極拳のように左足を後方に引き下げ身体を



半身に翻して避ける。彼女の拳が私の左乳首を掠めたが、掠めた程度で乳首がロストするわけでもない。大きく振り抜いたところを左手腹部に向けて蜂のように突き刺し〈応戦〉するッ！

ドチュツツという肉が潰れる音。

手ごたえありだ。

神村の顔が下痢でも漏れそうになっているかのような痛みの表情に歪む。完璧なカウンターの<sup>戦</sup>による一撃が刺さったことで、私のアガツた口角に口まで開いた笑顔になる。銃火器とスタンロッドを構えたテロリスト3人を相手に乱闘した時のように気分もノツてきた。

さあ、みつともなく おしっこ をぶちまけてごらんさい！  
失禁と共にテメエの尊厳もぶち壊して差しあげますわよ!!!

公開処刑だ！ 公開処刑!!!

「ぐっ……」

「ハッハー！」

「……イッ ツテエなッ！」

神村は尿道括約筋を限界まで活用したのか、足を内股に捻り下唇に力を入れて失禁を耐えてみせる。

今度はそのまま力を込めた左手でボディブローが飛んできた。

これも〈応戦〉として拳をはたき落としてから、膝打ちを前かがみになって膀胱を抑える彼女の後頭部に肘打ちを叩き込ませてもらうと動く。

「喰らえやアー！」

ガスッ！

「イツアツ！」

今度は〈応戦〉に失敗したようだ。左手のボディブローを〈受け流し〉として、はたき落とししたところまでは完璧だったのだが……。そのまま彼女は身をひる返し、遠心力を掛けた裏拳をこっちの左顔面にぶち込んできた。眼球から頬骨、鼻背にかけて鈍痛が走る。

ドバーツ！と、喉の奥から口の中が鉄錆の味で満たされる。

げっ……。当たりどころが悪かったのだろう。斜眼にでもなったかのように歪む視界でもわかるのは、唇や上半身に生暖かい体温ほどの液体が滴り落ち、地面を赤く染めていた。

「ゴフツ……ゴホツゴホツ……」

………なんだ？

神村の〈こぶし〉？

私のようにメリケンサックを着用しているわけでもないただの〈こぶし〉にも関わらず、まるで〈キック〉を受けたかのような重量感のある一撃だ。ビルドが私より勝っていると仮定しても精々一回り程度しかないだろう。だがビルドが一回り上ならば、もっと彼女はデブであるか身長が2？はあるはずだ。今の彼女の身体特徴を考慮しても到底SIZ16体重が100kg以上あるようには見えない。

つまり、ここから導きだされる答えは筋肉が異様に発達していると考えるのが妥当かもしれない。だが、あの腕の細さでオリンピックの重量挙げ選手並みの筋力だとも考え難い。

クソっ……。！ このままじゃ、入院中や稲毛屋道中の出来事のように陽葵ちゃんと同様に力技で押し切られる……。ツ！

神村の攻撃を受け続けていれば私の方が先にくたばっちゃうー！

しかしそれでも〈応戦〉のみでの勝利という縛りは解きたくない！

「ハっ。わかりやすい気難そうな顔しやがって。随分とマシンな顔になったじゃねえか！」

「…………ぺっ。それは、お互い様ですよ。……ヤクザモンの娘っ子風情が……こんなもんじゃありませんよ？」

ならば今度はこちら側の攻撃として、まえさき市でえっちなお店を開いている方の蛇子ちゃんを泣かせた実績を持つ〈頭突き〉を放つ。身動きが取れなくなったところで一気に片をつける！

私の頭部に対して彼女は拳を突き出し〈応戦〉でカチ割ろうとしてくるが、その彼女の右フックを潰すつもりで突き刺しにかかった。彼女の手から伝わる振動。ボキボキボキツという骨のきしむ音。突き出された拳が引き延ばされたゴムが収縮するように引っ込められる。

バキツ！ ゴキンツ！

奴の泣きっ面も拝みながら一気に片付けようと顔を上げたところで、右頬を固い鈍器のようなハードカバーの本で殴られたかのような強い衝撃と片顎の関節が外れたかのような音。

日本酒を5合飲みほしたときのようにふわふわとした視界ではあったが、神村の勝利を確信したかのような嫌な笑顔を浮かべていること。

また奴のローファアの踵部がブーツ状にアレンジされた靴であり、〈跳躍〉で飛び上がりながら私の顔面へ回し蹴りを放ってきたことはわかった。

だがこちらにも、鼻から濁流のように滴る血液が潤滑油として機能し、蹴りの一撃が滑ったおかげで衝げっげげきはうまく緩和できたはずに違いない。また口の端もバツクリ裂けてしまっているようだが、どうせ魔界医療で治癒すれば、すべてが元通りになるのだ。

それに、この程度の怪我で探索者が止まらなかつたら大間違いだっ  
て見せてつけてやる。

だから激しく後方に吹き飛ばされても、転がりながらすぐに立ち上がって拳を構える。

「チツ！」

煩わしい羽虫を見るかのような目つきになる神村。よって奴を煽るために、顎を引きながら不敵な笑みをもう一度、浮かべてやる。

——しかののすけくんの　「憧れ」　は私のものだ。お前じゃあない。

奴の攻撃は私なんかと比べ者なんかにならないぐらいに、パワーも、スピードも、一撃の重さも格上かもしれない。

……悔しいがドドン太郎のいう通り。彼女こそがこの6人の中で最も格闘技術に長けて、強い。のだろう。されども、それを理由に負けるわけにはいかないのだ。その程度の理由で負けるわけにはいかない。

では。勝つにはどうすればいいのか。

単調な攻撃では、早々にも私の攻撃に慣れてしまった奴に〈応戦〉カウンターされてしまう。

〈応戦〉おうせんのために攻撃を待つか？

いや。ビビってると思われるのは癪に障る。

ならば。更に戦法を変える。ひと手間加える。

次の神村の攻撃は、またもや私の腕の長さよりもリーチのある……安全靴のように鉄板を仕込んでいるのかと疑わしくなる蹴り技のヤクザキックだ。それも助走付きかつ慣性の法則入りの。

私はこれを〈組みつき〉で受け流す。

最初の〈組みつき〉で彼女の足首を掴み、次の〈組みつき〉で衝撃を受け流す。これは『CALL of CTHULHU クトゥルフ 神話TRPG』における技法の……えーっと……なんだっけ？

いや、今はルールなんてどうだっていい。

ルールに記載されているならば、私はそれを実行できるのだから。とにかく攻撃をへ受け流しして、今度は忌々しい蹴り技を放つ彼女の足首を掴んでへ応戦がてら空手に置ける瓦割りの要領で膝の皿へメリケンサックでの一撃をクリーンヒットさせる。彼女は自前のプロテクターで脛と膝を保護しており、メリケンサック程度の打撃では致命的なダメージを与えられないことは理解している。

だからこそ、今回は膝の皿を狙った……膝関節を狙わせてもらった。人間の足はどのようにしても可動域以上に折り曲げることは叶わない。だからこそ、今の膝への一撃は逆側へと折り曲げられたのは相当に響いただろう。これはいくら装甲に身を固めていようが、守りようがない人間ならではの弱点の1つだ。

「ぎっ……………ッ!!!」

よほど効いたらしい。神村は膝を抑えて、こちらを睨みつけながらも足を引きずって立ち足はだかる。今ので彼女の凶悪な蹴り業は封殺した。ついでに私の片顎関節を砕いたと思われるバニーホップもだ。

「うえへへへ………次は何処の関節を外して欲しいですか？　肩？」

「それとも——首？」

「ほぎぎやがれエッ!!!」

そのまま今度は重撃のへこぶしを突き出してくるが、洋館でやられたことをお返しするように突き出されたへこぶしをへ応戦としてへ組みつきで手首を掴み、勢いは殺さずに小柄な身長差を活かして懐へと潜り込む。そのまま腹部を狙うと見せかけて……！ 肘の裏側から掌底打ちの要領で天井に突き上げるようへこぶしを振るうッ！

「ああつ……………ッ!!!」

いくら籠手で前腕を護ろうが、この攻撃は関節までをは護り切れまい。

無駄。

すべては無駄な抵抗なのだ。

そして実にかわいい悲鳴。加虐心がぞわぞわと刺激される。支配欲で子宮がイライラする。

だから……——もつと！ 呻いてみせろオツ!!!  
テメエのための断末魔レクイエムをよおッ!!!

Episode 112 『フェラルグールの狂奔』

……  
……  
……

お互いに酷い有様だ。

はたして何ラウンド殴り続けているのか……最初から数をかぞえていない。

私は主に上半身全裸のまま、ちびくろサンボのように泥で真っ黒に染め上げて、顔面や胴体の裂けた皮膚から血液がダラダラと穴の開いたドラム缶のように垂れ流れている。

おまけにこの死闘でくせ毛を抑えるための髪留めや後頭部で結っていたリボンははじけ飛び、まるで髪の毛は平成初期のヤマンバ・ギヤルみたいだ。それは勝利を目指した代償の……とてもじゃないが鹿之助くんには見せられない格好だった。

神村も神村で流血などしておらず、創傷と言っても擦過傷程度の傷ばかりでピンピンしているように見える。だがあれから何度も追撃を加えた関節を逆側に捻じ曲げる一撃は効いているのか片足を引きずり、逆側に捻じ曲げられた片腕の肘先を植物におけるシダレヤナギのように力なく垂れ伸ばしている。

ここまで拳を交わしてへ心理学の観点から理解できたこともある。今、ヤツは、蹴り技を封殺され、片腕はともかくとして片脚が折れているとまでは行かなくても関節に損傷を受け、満足に身体が動いていない彼女はこちらに恐れのような感情を抱いているのかもしれない。

彼女の最初期ほどのように連続した攻勢から一転し、今や私が一歩彼女側へと歩を進めると、彼女は一步後ろへと下がるのだ。だが痛む関節では満足に距離を取ることも叶わない。

攻撃を仕掛けて来ないのであれば——こちらから仕掛けさせてもらおう。

再び足を一步前へ。

彼女が片足の膝を庇いながら動き出した瞬間を見計らって、一気に懐へと飛び込む。

これまでの神村であれば二度も三度も懐に飛び込まれたのであれば、対策として私に対して膝蹴りなどで〈カウンター〉を叩き込んでいただろう。しかし、これでのキャットファイトの最中に既に奴の片足の関節は反撃できない程度に破壊している。

それに奴が私にカウンターとして蹴り技を叩き込むには、安定した立位保持状態を放棄せねばならず。更なる攻勢によって体制を崩せば私はポーナス・タイムとして “伏せ状態” の神村を思う存分蹂躪することが可能となる。

もちろん。そんなリスクを神村は取らないだろう。

リスクを取っていたとすればこのような距離を取る選択などせず、とつくの昔に〈カウンター〉が飛んできていた筈なのだから。

いいねえ……その顔。

尋問で輪切りにしたカルティストの表情に似て、最高に濡れてくる。

彼女の中では私とは十分に距離を取っているつもりだったのだろう。それが懐に入られたことで交感神経を刺激されその瞳を散瞳させていた。

きつと頭の中では、また関節を狙った一撃が加えられるとそう思っていることだろう。

本人は咄嗟のつもりだろうが、必然的にヤツの意識はこれまで重点的に狙い続けてきた関節へと意識が向かい、その部位を護るような体勢に入る。

さらに今の動きは1歩で急に接近してきたようにみえたはずだ。私としては、一步踏み出した後にその足が地面へ着地する前に更にもう一步踏み出しただけの……〈近接戦闘（格闘）〉における訓練をすれ



ば誰でもできる歩法にしか過ぎないのだが。

——けれど、違うんだよなあ？

防御のためによたつきながらも更なる距離を取ろうとするのを見計らって、奴のまだ健康な足の指先を爪を叩き割る勢いでストンプ  
〈キック〉で踏みつける！

「ウツ！」

からの〈跳躍〉飛び上がり顔面回し蹴りに対するお返しとして、ハイキックを顎  
めがけてパイルバンカーのように射出するッ！

「……チイツー！」

だがまたもや私の攻撃は仰け反る形で〈回避〉されてしまった。

だが〈回避〉されることは大した問題ではない。

奴は今、私のハイキックを避けるために視線は晴天を映す天井を仰いでいる。しかも軸足は私の度重なる攻撃で重心を支えきれずに体幹はブレた状態で、だ。

ならば、これから小柄な私が畳みかけようとしているコンボ技は見えない上に、〈回避〉など困難を極めるに違いないだろうか？

じゃあ、〈回避〉はおまえ神村にとって最悪の一手だな？

仰け反らせたところで素早く射出した足を地へと着き、今度はその分厚い胸部装甲近くの胸倉と腕に〈組みつき〉、受け身を取らせる余裕すら与えず重心が揺らいでいる脚へ体重を移動させて、大外刈りの要

領で固い地面へ<sup>叩</sup>押し倒す。<sup>伏せ状態</sup>の  
そのまま仰向けに寝転がった所を、顔面を踏み抜くように足蹴り！<sup>〈キック〉</sup>  
足蹴り！足蹴り！足蹴り！<sup>ストンブ・〈キック〉</sup>——ガアツ！

……

……

……

まだ神村は私の前に立ちふさがる。

『お前も探索者か？』と疑ってしまうほどに異常なタフガイだが、それでも私が優位に戦闘は続いている。士気も、威勢も私の方が勝<sup>まさ</sup>っている。

顔面を始めとする全身から流血している状況を考慮すれば人のことを言えた質ではないが、この邪魔者のいない戦闘によって今の神村の右半面の顔はジャガイモみたいになっている。

やはり『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』(61頁) “肉体的な損傷(負傷)” 『新クトゥルフ神話TRPG』(116頁) “通常のダメージの効果” におけるかすり傷状態は最高である。普段であれば貧血を引き起こし倒れてしまうような流血状態であっても、それが明確にSTRを消失するものでなければ失血による昏倒などあり得ないのだから。全身には痛みという無慈悲な暴君が全身を支配しつつあるが、初戦は人間の小娘による殴打によるものだ。これまでの怪我の要因に比べればなんてことはない。

ここですと、ふうま君とドドン太郎の方に視野を向ける。

向こう側もまだ勝負がついていないのかと思う反面。ドドン太郎は相変わらずふうま君に何かをキャンキャンと武者姿で咆え、ふうま君はふうま君でさつきからこつちをチラチラ視線を寄こしていた。

いくら、ドドン太郎が中二病で前置きのない男のゴだからって、戦闘中によそ見したら危ないよと注意しようとしながら、私の返り血で真っ赤に染まった神村の胸倉を掴み彼女の後頭部を地面にたたきつけて――ぐぶツ！　グゾガツ！　わたじの喉仏に綺麗な正拳突きを！　ご、呼吸がツ！

「ゴガアツ！」

「ウらアツ!!!」

神村ア！

テメエは!!!

そろそろツ!!!

いい加減にツ!!!

沈めエツ  
!!!!!!!

スパイダーマツがビルの壁に張り付くように神村へ飛び掛かる。

勢いづいたまま奴の胸元に馬乗りになって押し倒す。

胸倉を掴み上げ獣のような叫び声と共に裂けた口から鮮血を迸らせた威嚇行動をしながら、文明人の欠片もない原始人の如く激しい殴り合いに熱中する。

殴り合いの最中で、見事に奴の鼻頭と人中部へ〈頭突き〉をクリー

ン・ヒットさせる。

また痛みで動けなくなつたところを、まるで振り子時計の要領で顔を殴つて、殴つて殴つて（格闘）て——殴り返されて、転がって、立ち上がって——

ドドン太郎も！

いつまでも遊んでんじやねえッ！

野郎ふうまは片目しか見えてねえし！

〈回避〉しかしてねえだろうがア!!!

ふうまをサツサと始末しやがれッ!!!

片目の遠近法ハンデがあるのに勝てねえから！

テメエは分家止まりなんだよオツ！

「あ、青空さん！」

「なぶ、なぶでづか？ ふうまぐん？」

ここここでふうまくんからの声がかかる。

喋る度に私の口から血が散弾のようにビュッビュと零れ落ち、既に地面は血と砂利交じりの赤黒い舞台の上で、痛みで呂律が上手く回らないがまさかのふうま君からの私へと声掛けにどうしてかは分からないが、現代人の言語での反応をせざる負えなかった。

「ヴガアッアッ あッあッ あッッッ！ッ！ッ！ッ！」

「ごおえッ!?!」

その気がそれた瞬間。神村が私の背中にまだ動く方の膝で膝蹴りを入れてくる。

まさにこれこそ、決定的な成功と呼ぶべき蹴り技だろう。

彼女の膝蹴りが背骨へとピンポイントで突き刺さり、電流が走ったかのような神経痛が全身に駆け巡る。

瞬間的な出来事ではあったが痛みにはこらえきれず、私はわきに転がった。

その隙に神村はよろよろと立ち上がって地面に乱雑に転がったバズーカ砲を手に取る。たぶん、私のメリケンサックの要領で棍棒として用いるのだろう。

だが彼女は、私とドドン太郎。背後にいるふうま君ごと、撃てるほど冷酷ではない。

しかし、これまでへ近接戦闘（格闘）でしか戦ってこなかったヤツが、そんな得物に頼るといふ事はヤツ自身も限界が近いという証明でもある。

いいぞ。その硬派のヤンキーを気取った仮面を剥ぎ取った状態で私の手に勝利を収めることは、何よりも　「憧れ」　に近づける。

「ず、ずっと言おう、言おうと思っていたんだが……」

「は、い？」

だからこそ神村もなりふり構わない攻撃――

飢えた獣のように歯をむき出しに噛みしめて、バズーカ砲を金属バットのよう振りかぶった攻撃に出てきたところ見計らって――

こちらもうま君の言葉に応じながらも死肉を漁るもの／墓所の食人鬼のような眼光を煌めかせてへ応戦トドメの必殺による尊厳破壊強制脱糞公開処刑腹圧性尿失禁を誘発させる尿管結石痛級メリケンサックへパン

チを――

「さ、さつきから、モニター越しに鹿之助が見ているぞ！」

「えっ!?!」

ゴシヤツ!

……五車学園だけに。

そんな効果音が顔面から聞こえた気がした。

それが期末試験中の最後の記憶。

ふうま君の言葉に固まって。〈応戦〉のタイミングがズレた所を村さんのバズーカ砲が、私の顔面にフルスイングして、ぷっつり意識が落ちてしまった感じ。

まさかあそこで鹿之助くんを出汁に使われるとは思わなくて——ほんの一瞬、ハイな意識が現実へと引き戻されてしまった。

……正確には、彼の言葉によって私が道中に見たモニターの光景を眺める鹿之助くんの姿を連想してしまったことも敗因の1つになる。

ははは。チクシヨウ。

やっぱり、磯咲さんが警戒した通り……——

ふうま君が最大の脅威だっ——

Episode 113 『試合に負けて、勝負にも負けた』

……

……

…

「——ハッ」

次に意識を取り戻して目が覚めた時には、あの白い部屋だった頃のVRシミュレーションルーム——ではなく。

この対魔忍世界における『青空 日葵』の両親の顔より見つつかある病室でした。

神村による鋼鉄のバズーカ砲フルスイングによる顔面ホームランが後を曳いているのか、視界がまだぼんやりとしていて焦点が定まらず目頭を少し抑える。

耳もキーンという音が響いて、まるで自分から数メートルの地点で爆弾が爆ぜたかのような酷い耳鳴りだった。

五感の約半数が機能しなくても最低限わかることは、手には何かすごく温かくスベスベするものが手を包んでいること。いつの間にか全身が病院のレンタル衣服が着用されていること。そしてあれほど神村のバズーカ砲によつて熱傷に加えた煤まみれとなった身体は、期末試験中ほど酷くはなくバツクリ抉られ引き裂かれられて全身血まみれだった私の怪我也も触れてみたところサツクリと切れているだけであつて、既に止血が済まされており大したことはないことがわかる。

では先ほどまでの光景はなんだったのか？ 夢だったのか？ それとも現実なのか？ 先ほどまでの死に物狂いの死キャットファイト 闘で見た光景や負傷とは明らかにことなる状況に、温かい何かから手を引き抜き口元に左の指先を当て、右手を左肘に当てながら首を傾げる。

そのまま辺りを見回そうと上半身を起こして——

ポヨンッ!

「うわああああん!!! 日葵ちゃああああああん!!!」

「うわっ!?!」

「シヨックで死んじやったかと思つたあああ! 大丈夫だよね!?!  
ちゃんと生きてるよね!?!」

まだ満足に視界が戻らない状態であつたが、次第に収まる耳鳴りから聞こえてきたのは馴染みのあるハスキーな大声と、私よりも高い体温を持つ人物。私の腹部目掛けてモシヤモシヤとした髪と2つの柔らかい双丘が直撃する感覚。おまけに誰かが抱き着いてきたことはわかつた。

この過度なスキンシップをしてくる人物は1人しか私は知り得ないのだが。

「え、ええ。大丈夫ですよ? 陽葵ちゃん。ちゃんと生きて、ます……よ?。」

「うわああああああん!!!」

時間と共に次第にぼやけて見えていた視界が少しずつ正常な状態まで戻って行く。

やがて普段からボワボワのくせつ気のある髪の毛なのに、更にアフ口ちつくに髪を膨れ上がらせて泣きじやくる陽葵ちゃん。

ベッドサイドには試験中に熱でも出たのか、デコに湿布を貼り付けて心配そうな顔をした鹿之助くん。

病室の奥隅には静電気で髪の毛がボサつき、毛先が縮れて焦げている心寧ちゃんが隣にいるふうま君の右腕を抱き。

ふうま君を挟んで反対側では首筋を摩るまえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんがふうま君の左腕を抱き。



両手に華だが逃げ場のないふうま君の顔は、私の目覚めに顔が引きつっていた。

病室の出入り口の近くでは、ヒビの入ったメガネに煤までもが付着したおもちゃんが病室内に滞在していることがわかる。

「あれ？ 皆さんお揃いで……ああ。鹿之助くんも」

「えと。あ、ああ……。おはよう。日葵」

「おはようございます。……すみません。今から変な事を聞くのですが、まだ現実と夢の境が付いていない状態でして、期末試験つてどうになりました？ 私の最後の記憶だと神……いえ、対戦相手から金属バットバズーカ砲で頭部を顔面ホームランされたあたりから記憶が無いんですけど……。あれは夢ですか？ それとも現実ですか？」

そこか現実感の無い状況に頭の整理が追いついていないため、確認のため期末試験の顛末を室内の6人へと片目を瞑って後頭部を掻きながら尋ねる。

アレが夢であれば、『夢オチなんて、サイテー！』な展開だが、今まで私が見て来て体験してきた出来事がただの夢ならば笑えないし、これまでの経験則から考えれば十分に夢オチの三文字で済まされてしまう状況もあり得るからだ。

「それは現実だな。青空さんが倒れた後、かみ……彼女が骸佐を倒すために俺の加勢に加わって俺達のチームが勝って期末試験は終了した」

ふうま君の言葉に頭を抱える。

自惚れでも何でもなくあの戦闘は、私がふうま君の言葉で平常心をかき乱されなければ勝てる戦闘だったのだ。

当初の目的である “憧れ” についても塗り替えることは叶わなかった。

『鹿之助が見ているぞ』だなんて、あの程度の言葉で冷静さを失って

しまった自分が情けない。

しつかりしてくれよ。釘貫 神葬。

鹿之助くんを出汁にされるなんて案件は、約2カ月前の生徒指導で紫先生からされたばかりだ。

この世界線は対魔忍世界なのだ。

わかっていないはずだ。敵に弱みを握られることはこちらの生命線が危機に瀕することぐらい。

けれども、クトゥルフ神話TRPG世界線とは違って、闇に対して自ら深入りさえしなければ、ある日なんの脈拍も前触れもなく、宅配便で友人や親兄弟姉妹の挽肉と顔面の皮を剥いだデスマスクが送られてくる。

……そんな展開の発展には陥らなさそうなのが不幸中の幸いかもしれないが。

それでも対魔忍世界線では生命線よりも貞操の方を心配したほうがいいだろう。

約2ヶ月前は横隔膜をぶち破られたが、次は処女膜をぶち破られるかもしれない。

死ななければ処女膜ぐらい安いものでしか過ぎないが。

「ああー……。つてことは、私達が再試験ですね……。うわああっはああああ……。再試やだあ……。貴重な学生の夏休みを再試なんかで潰したくない……。」

しかし、今だけは後悔や安堵はそつと隣に置いて、みんなの前でみっともなくそのままゆっくりと上半身を倒して後頭部を枕に沈める。更に両手で顔を抑え嘆く。

悔しい。口惜しいことには変わらない。

試験に落ちたことも。敗北したことも。勝利を確信しながらドヤ顔で作戦を共有した上で失敗したことも。もう、恥ずか死しそう。

なにぶん今年の夏休みの御盆はまえさき市で人間風情に泣かされたえっちなお店を開いている蛇子ちゃんと会わなきゃならない強制

イベントが控えている。

『敗北者は全てを失う』なんてアダルトゲームありがちな展開だが、そもそも対魔忍世界でごもつともな展開であり……。敗者に対する妥当な末路にうんざりした気持ちに支配される。

「あー……その件なだけどな？ えー……」

「大丈夫ですよ。日葵ちゃん。これは紫先生からのお話なのですが、今回の期末試験は勝敗はあまり重要視していなかったようです。団体戦でちゃんとチームワークが発揮されているかを重視していたみたいですよ」

「……………え？」

「うん！ それは速水さんのいう通り！ 日葵ちゃんのチームも1+1+1で3以上の成果をちゃんと出していたという結果が降りたみたいだから、日葵ちゃんも無事に期末試験・実技の部、合格だよ！ 蛇子が保証しちゃう！」

非常に後悔する私に対して、ふうま君は言い出しづらそうに言葉を濁していたがそんな彼の感情を察知して恋愛クソ強女こと心寧ちゃんがふうま君の代弁をサラリと伝えて教えてくれる。

心寧ちゃんの言葉に反応するようにして、両手で覆った顔の半面を覗かせて様子を伺うが心寧ちゃんは何しろ彼女は表情が出ない。それが本当かどうか悩みどころではあったものの。続くようにしてふうま君を挟んで反対側に居る、まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんが私の期末試験の合否と信頼できる優等生蛇子ちゃんを保証を付けてくれた。

「……………ほんと？」

「うふふ、意外と日葵ちゃんって疑い深かったりしますー？ 私達も勝敗に関わらずちゃーんと成果に見合った動きをしていたという事で、ちゃんと合格もらえましたよ？ ね〜？」

「ねー！」

両手で顔を覆うのを止めベッド柵越しに4人を見つめる私へ、おも  
ちちゃんまでもがフォローを入れてくれる。

「はあー……」

ここでやつと変な緊張で強張った体が溜息とともにほぐれて全身  
が脱力する。いま一度、顔面を両手で抑え、おしぼりタオルで顔面を  
拭いたときのように掌を下へと下ろす。

このまま安心感から2回目の意識消失してしまいそうになるが、身  
体の芯に力を入れることで意識を繋ぎ留める。

それに……私のお腹に顔を埋めて顔をこすりつけてくるじやれつ  
く犬のような陽葵ちゃんをこのままにするのは、普通に怖かったし。  
負傷してピリピリする私の左乳首が舐められそうな予感がしたし。

「そー……」

ペチツ

「あいたー！」

そろりそろりとさりげなく乳房に伸びる手は軽く叩き落とした。

「その、それで……。大丈夫なのか？ 身体の方は……さ？ 日葵は  
初めてシミュレーションルームを使つて、その上での模擬戦闘を行つ  
たから、かなり体に負担がかかったと思うんだけど……」

病室内のお見舞い客が一巡する程度に話した頃合いで、陽葵ちゃん  
の次に私に近い位置にいた鹿之助くんが声をかけてきた。

「……っ？」

「あー……えーつと、だな——」

如何せん理解していないような不可解な顔をしていることに気が付いたのか、あのシミュレーションルームでの負荷について説明を挟んでくれる。

どうやらあのシミュレーションルームでは、状況に応じてホログラムを実体化させるほかにも、負傷した際に過度な表現や描写を行うことで実際にはそこまで大した怪我や状態でもないにも関わらずさも致命傷であるかのように演出することができらしい。

鹿之助くんの説明によつて、病室から目覚めた時の私の身体に負傷がそこまで深手ではなく、脳処理ではあの期末試験での出来事が夢で片付けられそうになっている仕組みを把握することができた。

なあーるほど？　そういう仕組みだったわけだ。

これを過去の事象とすり合わせるならば、1883年オランダにおいて国事犯を用いたとある実験と状況が似ている。

内容は確か1人の人間からどれだけ血液をとったら人間は死ぬものかというもので……被験者をベッドの上にしぼりつけ、その周りで「ヒトは三分の一の血液を失ったら人間は死ぬ」と話し合いをする。それから被験者の足の親指に切り傷を作り、用意してある容器へ被験者が血液がポタポタと滴っていることが分かるように細工する。数時間後、実験者は『どれぐらいになったか？』『まもなく1/3となる』と被験者の前で会話したところ、その被験者は静かに息を引きとったという話。

確かノーシーボ効果だったか。自分の「思い込み」が身体にマイナスの影響を及ぼす、否定的な暗示によつて及ぼされる現象。

洋館事件で骨折した時に乱用しまくったプラシーボ効果とは真逆の原理。

私の場合は特に拘束などはされていないなかったが、ホログラムによつて過度な演出を視覚効果から経てしまったことで実際よりも極めて重症だと思い込んでしまったというわけか。

途中からいつ意識が吹き飛んでもおかしくない怪我を神村さんに

負わせているのにやけに頑丈だとは思ったんだけど……。そういうことだったのか。

すげーな五車学園。

設備が最新鋭設備過ぎて、やっぱ半世紀前の時代の私にはついていけない技術力だよ。

夏休みは遊ぶことばかり考えていたが、もつと技術に対する理解を深めるために学習の機会を設けた方がよさそうだ。

「……そういうことでしたか。説明していただきありがとうございます。あの時、確かに対戦相手から蹴り技を受けて頬が口裂け女みたいにバツクリ切れたかと思っただけですけど……。今、触ってもそんな傷が存在しないのはそんな仕組みによる演出があったからなんですね?」  
「おう。あとあのシミュレーションルームで戦闘訓練をする際には、防護膜が個人に与えられるつても聞いたことがあるぞ。……。その、日葵と神村さんみたいな肉弾戦は演出だけじゃ軽減できないから打撃が直撃する前に空気の膜で衝撃を緩和するんだってさ」  
「へえー……。?」

空気の膜。これはちよつと何を言っているかは分からないが、多分、磯咲さんで言うところの水鏡。私の感覚で言えば空気の防弾チョッキや通販プライムで付属しているエアークッション緩衝材のようなものだろうか。

完全に攻撃をシャットアウトできない辺り《肉体の保護》の魔術とは違う。……。《セフデカーの皮膚》あたりが妥当か?

「ん?」

いや、ちよつと待って欲しい。

そんなことよりも……—

—空気の膜より、いま重大な事を口走らなかつたか？

Episode 14 『ごめん、慰労会にはいきません』

「わあっ」

上半身に乗りかかったままの陽葵ちゃんごと勢いよく再び上半身を跳ね起こして、鹿之助くんの顔を凝視する。

現状の彼の様子は、そつと私から目をそらして左下を見ている。その顔はまるで禁忌の箱の中身を見てしまい隠し通そうとする子供のような顔だ。

このままこの場に目撃者がいなければ、ベッドからも跳ね起きて助走をつけながら殴りかかってくるアームストロング上院議員BBのようにふうま君に駆け寄っていたのだが。……この場では目撃者が多すぎるために掛け布団を掴んだへこぶしを握りしめる程度で抑える。

だが勢いを殺さず、そのまま首を4人側へ――

特に実技試験の最中に「モニター越しに」鹿之助が見ているぞ!」と発言したふうま君の顔へと……。喧嘩番長シリーズの如くへ目星へビームが貫通するよう祈りながらメンチビームを飛ばした。

渾身のの上院議員へパンチは飛ばないが、私の目星はイクストリーム成功してスペシャル貫通させる自信はあるぞ?! おい?!

……。

彼もまた私と視線を合わせず、目線を左下へと――

「……………」

「……………」

「…………えっと。私の期末試験。試験室外から眺めていたひと……………」



少し震えたような声で自身の左手を挙手する。

この部屋に滞在しているふうま君を除いた5人に対し、あのガチバトルを目撃した、してしまつた人物を自己申告で炙り出そうとする。

「はいー!」

「はあ〜い」

「はい」

「……はい」

真つ先に陽葵ちゃんが目をキラキラさせながら挙手する。

続いておもちちゃんがゆるふわふわしながら手を伸び伸びと持ち上げ、続いておもちちゃんと陽葵ちゃんの様子を見てからそつと心寧ちゃんが。最後に蛇子ちゃんが小さく手を上げた。

ふうま君は当事者だつた為、挙げようが挙げまいが現場に居合わせたので……。

鹿之助くんは——アツガイ。

God d a m n .  
ガツ デ ム

ここで挙手しないのは彼なりの優しさか。それともドン引きしているのか。

でも、もう。

蛇子ちゃんに腕を腕を握りしめられての行動だつたけど……ふうま君が対戦相手の名前を伏せていたのに、鹿之助くんは『日葵と神村さんみたいな肉弾戦は』って口走っている時点で……つまり——ふうま君のいう通り、私の実技試験を見ちやつてたんだよね？

そうだよね？

「「「「「「……」」」」」」

病室を包み込む沈黙。

「……」

「……………どのあたりから見てた？」

「……」

スツ…………と。

鹿之助くんとふうま君のように目を逸らし、言いにくそうな顔をしたらたまえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃん。

あ。

もう。

これは…………。

絶対、ロクなタイミングじゃない。

「えつと——」

「えつとね！ 私達が実技試験を終えた後からだから、私が日葵ちゃんオラオラオラッ！の雄姿を見始めたのは弓走ちゃんを最高の笑顔でボコボコに叩きのめしてから、一撃でノックアウトしゅーりゅーけん！したぐらいの時からかなー！」

「あつ——陽葵ちゃ…………ん……………」

恋愛クソ強女こと心寧ちゃんが私の心情を察して、陽葵ちゃんの正直な一言を発する前に言葉を発そうとする。

しかし遺憾ながら、それよりも先に陽葵ちゃんは心寧ちゃんの言葉を掻き消す勢いと大声で、具体的な試験内容の一部を手ぶり身振り付きで意気揚々と話してしまった。

「……」

うーん。この。

うーん。

「?!」  
「!？」

その発言で真っ先に反応したのは他でもない、鹿之助くと蛇子ちゃんであり……。

この顔は洋館事件以来の学園復帰後。教卓の暗証番号を解読したときに見せてくれた鹿之助くんの驚愕した表情と瓜二つだった。

2人はその顔のまま、発言者である陽葵ちゃんの顔を見た後に私を凝視してくる。

「……」

ふうま君は頭を抱えたそうにガクリと首をもたげる。

OK. OK.

今や私の表情は『素人は黙つとれ——』と、あの表情だが。

……これで私の友人たちが、どこからあの実技試験を目撃していたのか大凡の目安はついた。

おそらく真っ先に私の実技試験の見学に来たのは、陽葵ちゃんと心寧ちゃんとおもちちゃんのグループだ。

鹿之助くと蛇子ちゃんの反応から察するに、私が弓走をフルボッコにした光景は見えていないらしい。でも陽葵ちゃんのおかげで無事に『今日』『試験会場で』『私が』『弓走に対して』『暴力行為を』『オラオラッシュで激しく致したこと』が判明してしまったな……。

うん。

これは見事に状況説明にふさわしい5W1Hだ。

いいね。

社会人になってもそのスキルは役に立つからね陽葵ちゃん。

じゃあ、次は私と一緒に発言のTPO——TimeとPlaceと  
Occasionを覚えよっか？

超Very bad.

「……………」

頭が重力によって下へと引き寄せられる。ポケモソの首をもたげるキマワリみたいになる。

再び上半身をリクライニング、ゴー……。

正面から見たチベットスナギツネのような虚無な顔で、無言のまま白い天井を見上げながら今一度両手で顔を覆う。

やっぱ化けの皮つて、こうやっていずれは剥がれるんだな。

はい。完全に半壊していたネコの皮が崩壊しましたー。

もう修繕不可能ですうー。

「あつ。ああ〜！ でっ、でも、蛇子は！ 蛇子は！ 日葵ちゃんがまえさき市で鹿之助ちゃんを助けられるだけの力があるってこと今回の件を通して、思ったよ!? 誰かを護るために強くなることはとても大事なことだよね！ ねっ!? 速水さん?!」

「え、ええ。日葵ちゃんの忍耐力に神村さんと十分に渡り合えるだけの実力が備わっていたからこそ、私達は誰一人として欠けることなくあの洋館から脱出できたわけですし。あの期末試験の出来事は日々の培ってきた努力と訓練の結晶ですからそんなに悲しむことはないと思います」

「うんうん！ そうだよね!! 速水さんもそう思うよね!!」

「はい。むしろ実力が最大限に発揮されていて……確かに実技試験としては負けてしまっただけ……。あつ、磯咲さんからも事情をお伺いしたのですが……本作戦は、また日葵ちゃんが考えたんですよね？ であるならば不利な状況を一転させて相手を逆に追い詰めたことが合格点に至ったと考えられるのではないのでしょうか？」

「そうそう！ 隙を辞さぬ二段構えの囮作戦とか、びっくりしたよね！ へ、蛇子はびっくりしたよ!? 実は日葵ちゃんは囮なんかじゃなくって、一般人なのに実は実働部隊で攻撃対象から逃れることで勝利への道筋をつくったところとか?!」

「はい。神村さんの爆炎で生じる煤を利用して、全身に黒色迷彩を施して完全に気配を消し、弓走さんの背後から攻撃に加わった際には二車さんや磯咲さんもある種の囷として機能している二重作戦に驚きました。日葵ちゃんのおかげでそういう戦術もあるのかと私達は学ぶ機会を得られましたし……」

ふうま君をあいだに心寧ちゃんと蛇子ちゃんが、彼ピ争奪戦を放棄し協力するようなフォローが地味に深く刺さる。

「ごめん、そのフォローは響きません。いま、絶望の淵にいます。この友の認識を南北に分断する原因を私は作りました。……本当は、あの頃（半壊した猫被れた頃）が恋しいけれど、でも今はもう少しだけ、意気消沈をします。私の作ってしまったこの要因も、きつといつかみんなの理解を乗せるから。」

「しっ、鹿之助ちゃんもそう思うよね!？」

「おっ……お、おう！俺は、俺は日葵ができる奴だっけ知ってるけど、こうした形でも分かりやすい形で皆に実力が伝わったのは良いことだったんじゃないか？俺さ、あの神村さんに対して恐れずに立ち向かって張り合っていた日葵はすげーと思ったし！観戦していて、めっちゃ勇氣もらえたぜ?」

「陽葵ちゃん……?」

「うん！私も！私も！日葵ちゃんすううつつごとく！カッコよかったよ！私達には思いつかないような戦術とか編み出してたし！さすが、私が惚れた日葵ちゃんなだけあるうって思った！ねっ!?おもちちゃん!」

「はい。日葵ちゃんのこと、紫先生も『次回の模擬戦の訓練相手は青空で決定だな』とか。『動きが洗礼されていて良い教材になる』とか。『途中で戦法を切り替えた柔軟さは学ぶべきものだ』とかって、称賛してましたし。そんなに嘆かなくても大丈夫ですよ?」

「……………」

蛇子ちゃんと心寧ちゃんが私を励ますために、私と最も親しい関係上にある鹿之助くんと陽葵ちゃんを扇動してくれる。陽葵ちゃんは心寧ちゃんの圧に気づいていないかのようないつもの調子で私を励まし、鹿之助くんは蛇子ちゃんに促されながら、気にして無さそうな振る舞いをしてきている。

おもちゃちゃんも紫先生の発言をピックアップしてくれて……でもそれは褒められているのかな？ 私のやったことは、そんな模範的な教材になるような動きはしてないと思うんだけど。

もう落ち込みムードに入っていた私は、だからこそ……

「……具体的に、良かったと、思うのは、どんな、ところ？」

やや震えたような声になりながら、2人へ具体例を――

「真つ黒こげになりながらも恐怖に屈せず、上半身全裸のまま男らしく正面突撃したところ？」

「弓走ちゃんや神村ちゃんの砲撃を防ぎながら、1対1で戦うときは正々堂々と戦ったところ？」

「」

蛇子ちゃんと心寧ちゃんの声にならない悲鳴が聞こえたような気がする。

エネルギー波の爆発をモロに受けたコックカワサキみたいな顔になっている。

きつと2人としては、私と最も仲の良い鹿之助くんと陽葵ちゃんに最大限のフォローをしてもらって元気づけるつもりだったのだろう。

されども、その私と最も親しい2人はデリカシーに欠けた男の子と正直で素直な女の子なのだ。

心寧ちゃんや蛇子ちゃんのようにオブラートに包みながら、フォローなど器用なことができるはずもなく――

疑問形になりながらも率直な感想を私へと教えてくれた。

スローモーション撮影のような動きで、再び両手で顔面を覆い隠す  
私のご尊顔。

「……みんな。今日はお見舞いに来てくれてありがとう。私はもう大  
丈夫なので、しばらく一人にしておいてください」

……

……

…

「わア……あ……」

誰もいなくなった病室でちいかわみたいな泣きに入ってしまう。  
もうしばらく五車学園にはいきたくないです。

次回。

青空 日葵の五車学園、不登校編！ おたのしみに！

………つら………まぢ、むり。

# Episode 14 | EX 『Holyhock・デモ版』

□ 『自主トレーニング用シミュレーション・難易度【Holyhock・デモ版】』

2078年 夏季休暇期間中のみ限定公開。

自主トレーニング用シミュレーションとして、難易度【Holyhock・デモ版】が追加設定された。

適正訓練可能者は

- ・【現役対魔忍】
- ・【五車学園卒業生】
- ・【五車学園教師】
- ・【五車学園高等部3年生】が対象となっている。

一部『水城 ゆきかぜ』や『神村 舞華』、『独立遊撃隊メンバー』など一定の水準を越えた対魔忍も参加可能である。本件への参加可能資格については本人たちに通達済みである。

一般的に、試験の内容は守秘義務が設けられ外部での他言はご法度という徹底管理が行われた。

しかしそれでも同訓練者しかいない待機室では多少なりとも訓練の情報共有が許されている。

□ 『訓練内容について』

デモ版を体験した対魔忍の情報によると。

訓練内容は最終ステージで登場するラスト・エネミー“Boss”ともいうが、人質や訓練者と最も親しい間柄の人物を肉盾にしながら武装解除を促して来たり、人質ごと自爆テロを実行するために20?の距離を走り寄ってくるものだという。

対魔忍達は人質を傷つけることもラスト・エネミーを自爆させることもなく、無力化させなければならない。



また道中に登場するノーマル・エネミーの怯みにくい耐久性に加え、味方を犠牲にした陽動作戦、理不尽な角待ち、背後からの奇襲、武器の強奪、目潰し、人体の急所への集中攻撃、マウント状態から執拗な男女平等顔面パンチ、フェイント、的確に狙ってくる関節への攻撃は、訓練に従事した対魔忍達を精神的にも肉体的にも酷く苦しめたとの報告あり。

□予測される将来的な効果

デモ版での訓練経験に励むことで、任務に従事する対魔忍の失踪率低下を目指す。

□『発案者である八津 紫のコメント』

本内容は、とある対魔がたった1回分の戦闘で実際に遭遇した状況を再現したものだ。

本訓練を通じて

◇狡猾な手口を用いる対象の排除する手法。

◇力技に対する対策を練ってくる対象の排除方法。

◇自身の弱点について理解を深めて欲しい。

……時に。

シミュレーションに登場するすべての敵の笑顔や笑い声が、悪巧みを考えている時の『青空 日葵』と似ているとの報告や噂話を耳にするが他人の空似である。

そのような噂話は、対魔忍となる本人の不登校を促進させる原因となるため控える様に。

◇『インシデント・レポート』

対象：上原 鹿之助

最終目標の人質役として保護対象が『青空 日葵』の姿を模しての登場となった際に、要救助・保護対象が終着地点を起点にラスト・エネミーの殺害を手始めに道中の敵を片っ端から薙ぎ倒していく事件が発生。

上原 鹿之助が初期地点に配置されたノーマル・エネミーから逃げ回っている間に、保護対象であるはずの『青空 日葵（異常個体）』は既存の設定に反して上原 鹿之助の目前に現れる。

この際、最も注目すべき事象は『青空 日葵（異常個体）』は上原鹿之助の忍法が直撃にしたも拘わらず、自然消滅せずに「怖がらないで」と発言したことにある。

さらに戸惑う対象の正面で両膝を突いて跪き、上原鹿之助の両手を包み込むようにして「安心して。鹿之助くんのごことは私が護るから」と詰め寄る事態までも発生する。

その後は事前殲滅した道に戻る形で対象の手を引き、終着地点まで雑談を交えながら上原鹿之助を誘導。

自主トレーニング用シミュレーション難易度【Holyhock・デモ版】の終了直前時点にて自然消滅する。

異常事態の発現の際。

システムの強制終了は受け付けなかった。

さらにシミュレーションルーム出口にて上原鹿之助を出迎えたふうま小太郎・相州蛇子の話では、その時の『青空 日葵（異常個体）』は非常に暗い表情であり、上原 鹿之助の手を強く握りしめて離そうとしなかったようだ。

しかしそのような行為は一時的なものであり、こちらが介入・アクションを起こす前の段階で即座に上原 鹿之助の手を放して開放。

退室していく上原鹿之助に向け笑顔でぎこちなく手を振りながら見送り自然消滅となる。

また以降の訓練では、この異常個体である『青空 日葵（異常個体）』は姿を現さず。

その後の上原 鹿之助単独による訓練でも発現せず。

原因については、いまだ調査中。

ps :

当然のことながら本訓練は『上原 鹿之助』の自己訓練を目的としたものであり、トレーニング機材同士が衝突する様には設定していない。

□ 『訓練参加者・成績一覧』

対象：井河 いがわ アサギ

役職：五車学園校長

忍法：隼の術

成績：結果としては問題なし。

一言：

一通り体験はしてみたけど、一般人を元にした動きなら猶更行動に躊躇いが無さ過ぎね。

対象：井河 いがわ さくら

役職：五車学園教師

忍法：影遁の術

成績：結果としては問題なし。

一言：

うーん。闇の世界で長生きした下級魔族がモデルかなあ？ 力で敵わないからこっちの裏を搔いてくる行動とかそれっぽいね！

対象：八津 やつ 紫 むらさき

役職：五車学園教師

忍法：不死覚醒

成績：保護対象を人質に囚われた時の対処法が苦手という結果となる。他の項目は問題なし。

一言：

アサギ様の人質になるなどあり得ない。修正を求む。

対象：蓮魔 はすま 零子 れいこ

役職：五車学園教師

忍法：透過曲撃

成績：結果としては問題なし。

一言：

面憎らしいガキめ。

対象：上原 燐うえはら りん

役職：五車学園臨時教員

忍法：雷遁の術

成績：結果としては問題なし。

一言：

敵の陽動作戦での動きに関しては野外戦での応用が利くこともあるな。私の授業にも取り入れよう。

対象：水城 ゆきかぜみずぎ

役職：現役対魔忍（五車学園1年生）

忍法：雷遁の術

成績：結果としては問題なし。

一言：

間違いなく性格の悪い魔族を敵役モデルにしたでしょ。

対象：ふうま 小太郎こたろう

役職：独立遊撃隊―隊長（五車学園1年生）

忍法：“未開花”

成績：結果として、フェイント、マウント状態からの攻撃、関節への攻撃。近接攻撃の対処法が苦手という結果になる。

一言：

訓練のモデルが誰であれ、ひとまず明確な目的をもって連携する複数を1人で相手取るのは自殺行為に等しいですね。独立遊撃隊のメンバーを単独行動させることは控えます。

対象：相州 蛇子あいしゅうへびこ

役職：独立遊撃隊―隊員（五車学園1年生）

忍法：獣遁の術

成績：結果としては問題なし。

一言：

蛇子は忍法が発動していれば身体能力が高いから問題ないけど……。武器を奪われたときに武器がないと力を発動できない子には相性が悪いかも……。

対象：上原うえはら 鹿之助しかのすけ

役職：独立遊撃隊―隊員（五車学園1年生）

忍法：電遁の術

成績：冷静な判断が必要。保護対象に攻撃を加える。

補足：シミュレーション側の致命的なバグにより成績結果不明。

一言：

（青空）日葵って本当に一般人なのか？ 対魔忍とかじゃなくて?? あとさ。俺の訓練の時に現れたヤツ□『異常個体の顕現』参照。変かもしれないけど、本物の日葵みたいだった。ごめん……変なこと言ってるよな。

対象：神村かみむら 舞華まいか

役職：現役対魔忍（五車学園1年生）

忍法：火遁の術

成績：結果として問題なし。

一言：

殺意は感じるが技にキレがねえし、本物が与えてくる恐怖はこんなもんじゃねえ。モデルは攻撃行為が目的じゃねえ、攻撃行為はあくまでもブラフなんだ。アイツの行動には常に何かしらの別の目的、裏がある。そこを再現し忘れるなよ。

対象：穂稀ほまれ なお

役職：五車風紀隊―隊長（五車学園3年生）

忍法：光遁の術 “集光”

成績：武器の奪取、角や背後からの奇襲時の対処が苦手という結果となる。

一言：

バルドル穂稀 なおの光遁の術のエネルギーをコントロールする主力武器が奪われた後は複数個装備していたクナイビット穂稀 なの補助装備。光遁の術でクナイの形状になるで凌げたけど、今回を期にメインウエポンの他にも敵にも敵に有効打を与えられるサブウエポンを携帯することにしたよ。

対象：死々村 狐路

役職：五車風紀隊―隊員（五車学園3年生）

忍法：魂遁の術

成績：武器の奪取、背後からの奇襲が苦手という結果となる。

一言：

攻撃手段が奪われるのは致命的。今後はナイフとか補助装備も装備します。

対象：氷室 花蓮

役職：五車風紀隊―隊員（五車学園3年生）

忍法：氷遁の術

成績：目潰し、関節を狙った重点攻撃、フェイントによる対処法が苦手という結果となる。

一言：

実にルール無用の下劣な魔の住人らしい立ち回り方ですね。反吐が出る。

対象：黒田 巴

役職：五車風紀隊―隊員（五車学園3年生）

忍法：〔未公開〕

成績：結果としては問題なし。

一言：

敵の強い方が、毎回蓮魔先生の手を煩わせる青空日葵を彷彿とさせますね。こちらをどう出し抜いてやろうか画策している時の顔です。

対象：秋山 凜子あきやま りんこ

役職：現役対魔忍（五車学園3年生）

忍法：空遁の術

成績：結果としては問題なし。

一言：

執拗な顔面への攻撃についてだが。女性対魔忍の中には経験のない子もいるんじゃないだろうか？ 正式版がリリースされた際には座学だけではなく、一度本訓練受けることで魔族にはこういうタイプもいることを認識したほうがいい。トロールに対する座学のように受動的な授業では為にならない。

対象：鬼崎 きららおにさき

役職：現役対魔忍（五車学園3年生）

忍法：「未公開」

成績：忍法は未使用。冷気を操る力に固執している。結果としては問題なし。

一言：

一つ気になることがあるのだけど、目潰しの方法が敵の口から吐き出される黄色の霧状の液体なものには理由でもあるの？ ……いえ、ね。例のセクハラ1年生青空 日葵だと思われるの事をへゲロイン<って呼ぶ子が居たから気になっただけ。

対象：眞田 焰さなだ ほむら

役職：現役対魔忍（五車学園卒業生）

忍法：火遁の術

成績：結果として人質に囚われた際救出方法に難あり。引き続き陽動や短期突入戦のみに運用となる。

一言：

これモデルは青空 日葵だったりしねえの？ なんつーか、目の奥底の鈍い輝きが似ててさ。てか、私を差し置いて訓練モデルになって

ンじゃねえぞ。これは夏休み明けは特訓が必要だな？

対象：仲森なかもり 奈々華ななか

役職：現役対魔忍（五車学園卒業生）

忍法：鉄壁覚醒

成績：敵の陽動作戦にめっぽう弱く、保護対象を人質に囚われた時の対処法が苦手という結果となる。

一言：

人質を取るなんて卑怯です！背後からの奇襲とか、仲間を犠牲にした囷とか素のオーク族程度じゃ考えて来ませんよ！あと敵の形が人間型実体でしたけど、モデルはレイス系やバトルロイドですか？まさか人間じゃないですよ？普通は自分の命を捨て駒にしてまで陽動なんかしないです！

◇『異常個体の顕現』

対象：青空あおぞら 日葵ひまり（異常個体）

役職：上原鹿之助（以下、対象と表記する）の訓練時に現れたバーチャル存在。本来は保護対象。

忍法： // 未所有 //

成績：自爆犯ラスト・エネミー殺害後、無表情で淡々と装備を強奪。真顔のまま他個体を湧き潰しする形で殲滅。  
リスボーンキル

一言：

No data. ゆえに訓練中の発言を抜粋する。

「怖がらないで」（対象の電遁の術が被弾したにも拘らず発言「本来はここで自然消滅する筈」）

「安心して。鹿之助くんのごことは私が護るから」（対象の前に跪き対象の両手を両手で包み込む）

「上着とか持っていればよかったですけど……その恰好対魔忍スーツを指していると思われる。寒くないですか？」（道中の雑談）

「手裏剣が得意なの？ じゃあ、その手裏剣しゅりけんに爆弾を仕込むのはどうかな？」（道中の雑談）



「ふふふつ。変な鹿之助くん。まるで幻影でも見ちゃったみたいな顔だよ?」(道中の雑談)

「うん。また明日。また学校でね」(消滅直前時、やるせない笑顔で手を振り対象を見送る)

16章 『期末試験』（裏）

Episode—Insid e16—1 『一方、その頃…』

……

……

…

「……………♪」

「……」

「」

期末試験の実技試験直前。

日葵ちゃんと別れてから、私は大親友の心寧ちゃんと友達めぐみちゃんなどで試験会場に足を運んで、いまは対戦相手の確認をしているところ!!!

もしも期末試験の相手が日葵ちゃんだったら、どんな風に押し倒してどんな声で啼かせちゃうか……そんな楽しい想像を膨らませてね！

日葵ちゃんはね！ かわいいんだよ！

私の熱狂的なアプローチのおかげで、この前の稲毛屋での道中では私のことを好きって言うってくれたし！ 『はっはっはー！ 騙されたー！』とか言ってたけど、日葵ちゃんは恥ずかしがり屋さんだからね！ あれはきつと照れ隠しかな！

それか感激のあまり身動きが取れなくなった私へのフオローかも！ じゃないと私の耳を甘噛みして、洋館内での私の愛情表現をそのまま返してくるわけがないからね！

それに今回の相手が日葵ちゃんなら、なおさら力技では私には敵わないし！

日葵ちゃんがどんな忍法を使うのか見たことないからわかんないけど！ 忍法を使われちゃう前に私がかもつとも得意とする体術や、こ

の式神を纏わせた鉄球攻撃で組み伏せられる自信しかないし！

「今回の期末試験……私達は駄目かもしれませんがね。開始前から敗北宣言など情けない気持ちでいっぱいですが、再試験を受けることになるかもしれません……」

「うふふ。笑うしかない状況というのは、任務でもままありますけどお。今回もその状況に似てますねえ」

掲示板を見る2人の半ば諦めたかのような顔を見てから、私も2人に割って入るようにして手揉みして対戦相手名を確認する。

さてはてー？ 今回の期末試験：実技の部の相手チームはー？

ま！ 確認なんかしなくても日葵ちゃんが相手だろうけどね！（確固たる自信）

97組目の対戦相手

・水城 ゆきかぜ

・相州 蛇子

・上原 鹿之助

「うん」

……………。

どうして心寧ちゃんめぐみちゃんが無言なのか——特に大親友の心寧ちゃんの顔が落ち込んでしまつて、めぐみちゃんもいつものようにマイペースな笑顔を振り撒いているけど、笑い声が何処か濁っているのか理解できたかも。

そつかあ……。私達の対戦相手は、ゆきかぜちゃんかあ……。

私と赤い糸で結ばれている筈の日葵ちゃんが、私達の対戦相手として当たらなかったことはそれはそれとして悲しいことだけ……。勝敗で期末試験の合格の有無が決まる勝負事で、ゆきかぜちゃんとは当たりたくはなかったかなあ……。

そういえば、日葵ちゃんはゆきかぜちゃんを知っているのかな？

一応、日葵ちゃんがゆきかぜちゃんの事を知らなかったかのため  
に、説明のシミュレーションはしておこうかな？

えーっと。

水城 ゆきかぜちゃんというのは、私よりも褐色肌でツインテール  
の同級生！

日葵ちゃんと同じぐらいに可愛くて、強くて……。本人の性格はサ  
バサバしているけどそのおかげで男女から親しみやすいつて言われ  
ている優等生なの！

そのサバサバしているけどフレンドリーな性格で先輩や同級生、中  
等部の後輩からも人気者でね!? 学園中の人気者という点では日葵  
ちゃんと同じなポジションでもある存在でもあるの！

あとね！ あとね！

この対魔忍の育成学校である五車学園高等部1年生で “新時代  
の対魔忍” として、1年生 なの に！ 数々の任務に赴いて  
は、実績を多く上げている超優等生でもあつて……！

さらに！さらに！座学に関しても常に学年トップの成績で、私は足  
元にも及ばないんだよ！（▽）ドヤア！

……大体、こんな感じかな？

1年生なのに数々の任務に赴いていることについて。どれだけす  
ごい事が説明するには、きつと私や心寧ちゃんやめぐみちゃんと比較  
してあげれば一目瞭然だね！

私達が対魔忍として任務に出たことは、中等部の時にちよこつとは  
あるけど……。

あくまでもそれは外の世界の学生が行く社会科見学みたいなもの  
だし……。

その当時の任務の内容は現役で働いているベテランの対魔忍の先  
輩と一緒に『中継地点から五車学園までの伝令役』が主な内容で、超  
優等生のゆきかぜちゃんみたいに、ゆきかぜちゃんが主体となった現  
場の経験……『敵の殲滅任務』や『ヨミハラに囚われた4人の一般人』

救出任務』とかはまだ経験したことはない。

それにゆきかぜちゃんのお母さんは、アサギ校長先生の相棒でもあったとされる最強の対魔忍の相方、伝説の対魔忍！水城 不知火さんでもある。私が生まれたぐらいに起きたクーデターでは、鎮圧に成功したこともあるって……とにかくすごいお母さんの元に生まれた超超超優等生なのだ！

……うん。そんな相手が今回の期末試験で戦わなきゃいけない……というのは……

ハッ！

いけない！いけない！

弱気になっちゃだめだよね！

相手がどんな相手でも私達は対魔忍だし！

超超超優等生のゆきかぜちゃんと戦えるって、私達の対魔忍としてのスキルを上昇させる超チャンスなんだからむしろ戦えて光栄だよね！ 日葵ちゃんだったら、きつと優等生のゆきかぜちゃんと戦えることを喜びながらこの状況を前向きに考えるはず！

私だってこの実技試験でなんとか勝ち残れば合格をもらって、夏休み日葵ちゃんの家で日葵ちゃんのいっぱいしっぽりできるし、するんだもん！

この前の稲毛屋へ遊びに行ったときに日葵ちゃんのおうちの場所は判明したし、ちゃんとスマホのマップにもピンを立てたから！

えらいぞ！ 過去の私！

次に遊びへ行くときは、いつでも！何度でも！日葵ちゃんの道案内がなくても辿り着けるぞ！

でも1人じゃ、ゆきかぜちゃんと上原くんと蛇子ちゃんのトリプル対魔忍に勝てるはずもない。

だから私がここでしなきゃいけないことは……。

「えーっと、心寧ちゃん？ めぐみちゃん？」

「……どうかしました？ 陽葵ちゃん」

「はあい〜？」

「これは迫る苦難を乗り越える最高のチャンスだよ！ 絶対に勝とうね！」

2人の中で、いつものように右手で小さなガッツポーズを作って2人が元気になるように明るい声で声を掛けるよ！

「……………はあ」

「そうですね〜……………」

あれ？ あれれれれ？

なんか2人ともノリが悪いぞ???

クラス合同の格闘組手の授業では、私がこうすると2人とも笑いながら『おーっ！』って頭上に拳を突き上げてくれるのに…………。

今日の心寧ちゃんは表情は変わらないけど肩を落としながら溜息混じりで少し俯いているし、めぐみちゃんも のほほんとした笑顔だけどいつものように拳を上げてくれない…………。

「どうしたの？ 2人とも？ 絶対に勝とうよ！ 勝ちに行こうよ！

負けたら不合格！ 再試験だよ!! 頑張ろうよ！」

「……そうは言ってもですねえ……………」

「陽葵ちゃん。念のために聞きたいのですが、今回の相手が誰か分かっていますか？」

「もちろん！ ゆきかぜちゃんですよ。上原くんですよ。蛇子ちゃん！」

「ちゃんと誰が相手かは理解しているみたいですね。安心しました」

？ 変な心寧ちゃん。

でも安心したってことは、今の私の発言で和ませることに成功したのかな！

やったあ！……あつ！ やったぜ。投稿者：太陽対魔忍（7月13日（水）09時14分22秒）

「陽葵ちゃん……。自信たっぷりなドヤ顔ですが、状況を正確に理解してない時の顔をしていますね」

「ふふう。いつも元気いっぱいポジティブ思考だからねえ」

「いつものような平常運転で、現実逃避ではないとは理解できませんが……」

「これは悪い方向に考えない、ひたすらひたむきさのゴり押しであ〜」  
よし！よし！

2人とも仲良く並んでこっそりおしゃべりできるぐらいには元気が出たみたい！

この調子で洋館事件の日葵ちゃんがやってたように、やる気を上に向かせて……。

「陽葵ちゃん。お聞きしたいことがあるのですが」

「ん?! 何かな?!」

「ゆきかぜさん、上原さん、相州さんの3人を相手に私達はチーム戦を挑むわけですけど、何か陽葵ちゃんには勝てる作戦プランがあるのですか？」

「ん？ んーつとね……」

いつもの表情は変わらないけど真面目な顔をしているような心寧ちゃんの問いかけに、一瞬だけ目を逸らす。

……何も思いつかない。

今は何も思いつかないけど、私達には3人に負けないものは持っている筈だ。

そうだ！

「気合！」

「……………」

「♪」

私の言葉に心寧ちゃんとめぐみちゃんが、ニッコリと口角を上げて笑ってくれた！

私も2人に持ちうる限りの最大限の笑顔を返しちゃうよ！

そうだよね！ 私達の気合は、ゆきかぜちゃんや上原くん、蛇子ちゃんなんかに負けたりしないもん！

特に上原くんには、私は上原くん以上に日葵ちゃんに対する熱情では、ぜつつつつつたいに！負けないもん！

「陽葵ちゃん」

「なにかな!?!」

「こんなことはあまり言いたくはないのですが……残念ながら、気合だけではどうにもならない時もあるのですよ。もし陽葵ちゃんが本当に勝ちたいなら今回は何か作戦がないと……相当、厳しいと思います」

口元だけ微笑む心寧ちゃん言葉に、少し考え込む。

そっか。やっぱり必要なのかな。作戦。

でも、何かゆきかぜちゃんに勝てる作戦なんかあるのかな？



ん流の作戦考案!』

「日ノ出! 今回は制服での実技試験であると事前に伝えておいたはずだが、なぜ貴様は対魔忍スーツを着用している?」

「あっ! ご、ごめんなさい! 蓮魔先生!」

「まったく貴様は、待合室で私服姿だった青空と同じで……私服潜入任務でもその対魔忍スーツを着ていくつもりか!」

「ごめんなさい! ごめんなさい! 今すぐ着替えてきまーす!」

実技試験開始直前。

心寧ちゃんに尋ねられた作戦について何か無いか考え込んでいたら、いつの間にかに試験会場に居て蓮魔先生から叱られていた。

一応、道中までの間に心寧ちゃんが私に着替えるように言ってたっぽいんだけど……完全に作戦について熱中して考えていて、ぜんぜん気が付かなかった。

走って更衣室に戻って対魔忍<sup>いつもの勝負服</sup>スーツから制服に着替える。ブラウスを羽織って、ボタンを閉じて、スカート履いて、ネクタイをキュツと……。

ネクタイ、かあ……。

今年の夏休み、日葵ちゃんとしつぱりするときにはネクタイをリードとして使った遊びとかもやってみたいなあ。

わん。わん。わん。ってヤツ。『なんか犬っぽくねえな』って言うやつ。あのおつきくて、たつぷたぷのお尻をぺちぺち叩いて——

……  
……

…

「これより、30分間の作戦会議時間を設ける！ 30分後、期末試験実技を開始する！」

「さて。本番の作戦会議の時間になりましたね。陽葵ちゃんの方は何かゆきかぜさんや上原さん、相州さんに勝てる作戦は思いつきましたか？」

「え、えつとね」

「一応、陽葵ちゃんが着替えている間に私達も色々意見を出し合って考えてみたのですが。あのゆきかぜちゃんに勝つのは難しいというのが私達の結論ですかねえ？ 私の風遁の術 “空集虚散” でゆきかぜちゃんの周囲を低気圧にして倒しちゃうって手も考えたのですが、低気圧を発生させることでゆきかぜちゃんの雷遁の術の強化、渦雷<sup>うずらい</sup>発達した低気圧の中心付近で発生する雷のこと。低気圧は気温が高いほど勢力を長時間維持するため、低気圧の移動に伴って渦雷の被害が広範囲に及ぶこともある。台風などもこの渦雷を引き起こす。を広範囲に発生させちゃう危険性も考えられるんですよ」

「持田さんの風遁の術でゆきかぜさんの身動きを封じて、陽葵ちゃんの陽遁の術で目くらましして、私の迅遁の術とスピードに特化したアンドロイド・レッグで即決着というのも作戦も考えましたが……」

「風遁の術 “空集虚散” は相手の『周囲の気圧を弄る』忍法なので、その場合だと心寧ちゃんももれなく私の術の餌食になっちゃうんですよねえ」

「……………」

2人が考えてくれた作戦を聞きながら、どうやってゆきかぜちゃんを倒すべきか知恵を振り絞って考えてみたけど……、……結局のところ私は2人以上に何も思いついていない。

何度考えてもゆきかぜちゃんの能力と私達の能力をすり合わせた時、忍法への慣れも実戦の経験も忍法の最大出力も全てにおいて彼女

に劣っている。その中でも私達がゆきかぜちゃんに勝れることと言ったら……や、やっぱり気合？

でも心寧ちゃんは『今回は気合だけじゃどうしようもない』って言ってたし……。

「うーん……」

「あらかじめ言っておきますが、私達も陽葵ちゃんに何か作戦プランがあるなら最後まで付き合いますし、ゆきかぜさんに勝てるように尽力を尽くしますよ」

「せっかくの夏休みですもんね。制覇しがいのある、良いお山も見つけたのでチャレンジ予定ですし、可能なら再試験は避けたいのは一緒です」

2人とも私が何か勝利までのプランを立案してくれるのを待てる顔をしてる。

「ちよつと待ってね！ ゆきかぜちゃんに勝てる作戦を今からも一回考えるから！」

「はあ」

「私達も私達で互いに使えそうな案を考えておきます」

……良い案が思いつかない。ゆきかぜちゃんの力が強大すぎて、どうやっても気合以外で勝てる要素が見当たらない。

……だめだめ！弱気になっちゃ！

こんな時、日葵ちゃんならどうするかな？

この場に日葵ちゃんが居合わせてたら……きつと、今もこうやって困った時の仕草で両目を瞑って後頭部を掻きむしって……。

「こんな時、日葵ちゃんならどうする、日葵ちゃんならどうする、日葵

ちゃんならどうする？ 日葵ちゃんならどうする？ 日葵ちゃんならどうする？」

「おやあ〜？ 今までに見たことのない珍しい仕草をしていますねえ〜。あんな風に考える陽葵ちゃんは初めて見ました〜」

「……ああ、あの仕草は日葵ちゃんの仕草の真似ですね」

「陽ま……？」

「青空 日葵ちゃん、持田ちゃんが期末試験前の集合地点で持ち物についてお話しした人ですよ」

「ああ〜！ 噂の転校生！ 入学初日に五車学園全生徒の目の前で靴を頭に被って非常ベルを連打しながら消火器の先端を口にくわえながらジャズを奏で、演奏に合わせて体育館の窓ガラスを片っ端から頭で叩き割った誘い受けバリネコ印象派ファンキーフレンズの青空 日葵ちゃんですね〜？」

「……混ざってますが、情報に何一つ偽りが無いのがまた……。……大体あってます」

「最近、立ち入り禁止の洋館に全裸のまま不法侵入して洋館内をひっかきまわした挙句、脱出と同時に上級生である眞田先輩と黒田先輩に飛び蹴り入れたら返り討ちにあって入院した日葵ちゃんですね〜！ うふふふ〜！ ……そんな人の仕草の真似っこをするなんて、本当に陽葵ちゃんは日葵ちゃんが好きなんですな〜」

「前から仲が良かったですが、その洋館事件以降、好きな感情に拍車がかかりましたね」

「そうだ!!」

天井を見上げながら力強く立ち上がる！

ありがとう日葵ちゃん！

日葵ちゃんのおかげで作戦が思いついたっ！

見よう見真似の作戦だけど期末試験！ 私達が制覇しちゃうよ！

「心寧ちゃん！めぐみちゃん！最高の作戦を思いついたよ！ 今回の作戦！私に任せて！」

「ほんとですかあ？ それは楽しみです」

「陽葵ちゃん。作戦会議をするときは、声を抑えてください。こちらの手の内が漏れてしまったらその最高の作戦も残念な結果に終わってしまいますので」

「ごめんね……！ えっとね今回の作戦なんだけど」

「えっと、陽葵ちゃんが大好きな日葵ちゃんぐらゐの普段の声の大きさをいいですよ」

「わかった！」

私の反応で遠く離れた3人も私の方を振り向いたけど、心寧ちゃんという通りまだこちらの手の内の作戦が漏れちゃったわけじゃないからこれはセーフ！

この作戦がきつとうまく行けば、私達はゆきかぜちゃんや上原くん、蛇子ちゃんに勝てるはずだもん！

ひまつちちゃんの名にかけて！

きかぜちゃん孤軍奮闘へ口へ口大作戦!』

「それで……陽葵ちゃんはどんな作戦を思いついたのですか?」

「名付けて! 『雲隠れゆきかぜちゃん孤軍奮闘へ口へ口大作戦!』」

「かわいい作戦名ですねえ。具体的にどんなことをするんですか?」

「簡単に言えば、私が陽遁の術で敵を焼くための火の玉を出現させた時みたいに限界まで忍法を使わせて疲弊させたところで、みんな飛び掛かってゆきかぜちゃんを倒しちゃおう! って感じかな!」

「なるほど?」

「消耗作戦というわけですね?」

「うん! でもそこに至るまでの事前準備とかがあるんだけど……」

ここで2人に対して、この発想に至った大元である日葵ちゃんが当時に考えていたことや作戦について簡潔に伝える。

心寧ちゃんは私と一緒に洋館の大冒険を経験しているから、日葵ちゃんの考え方や作戦についてはある程度理解していると思うけど、めぐみちゃんは私が話した程度にしか日葵ちゃんについて知らないと思ったからね!

「まずこの作戦に行きついた経緯である、洋館大冒険での日葵ちゃんの動きについてから話すね。日葵ちゃんはね! 私達と合流したあと移動するときは『索敵陣形』として常に凹陣形を組んでいたんだよ!」

「ええ、最前衛に日葵ちゃん。両左右にコロ先輩と陽葵ちゃんがついて、後衛には私となお先輩。日葵ちゃんの指示で彼女の真後ろである殿部しんがりには神村さんが配置について後方の警戒をしていました!」

「ほえ、まさに『噂の』転校生って感じですねえ。最前衛に体術の訓練で上位に食い込む神村さんではなく自分を配置する様子から

恐れ知らずの怖いもの知らずって感じが伝わってきます〜」

「ええ。本当に。……………あの時、足も折れていたのに」

「うん！ それでね。あの時の状況から日葵ちゃんの行動の原理を考察すると、先に洋館に潜むと噂されていた『赤いドレスを纏った首のない貴婦人』という未確認霊体を見つけたこと。すなわち何よりも先に相手の居場所を特定することが不意打ちから逃れる意味合いで大事にしていたことだったんだと思っただー！」

私の言葉に心寧ちゃんは頷きを返し、めぐみちゃんもニコニコとしながらも私の話を遮らずに聞いてくれる。

でも。今の話の中に出てきた『赤いドレスを纏った首のない貴婦人』は私と日葵ちゃんを急接近させるために現れた私達の為の『恋の赤いドレス姿のキューピッド』だったと思うんだけど！ その話はまた今度にしよう！

「それで……………この事前情報を踏まえて、今回対戦するゆきかぜちゃんチームの忍法をすり合わせるとね。ゆきかぜちゃんの忍法は攻撃に特化している一方で、上原くんの忍法は索敵型。蛇子ちゃんの忍法は攻撃と索敵の両立型だって気づいたの！」

私の言葉で2人が互いに顔を見合わせる。

2人も私の言いたいことに気が付いたみたい！

私もうつかり見落としていたもんね！

もう♥ この気づきを得られたのも、日葵ちゃんのおかげ♥♥♥

間違いなく生涯の伴侶だよ！

これはもう踊っちゃう。インド映画みたいに踊っちゃう♪

(日葵ちゃんの日葵ちゃん) 美味しいヤミー感謝感謝！また(日葵ちゃん) いっぱい食べたいな！ デリシヤ、シヤ！シヤ！射ヤ！射ヤ！射ヤ！射精ヤツ！(日葵ちゃんのトコ顔) ハッピースマイル！

絶対に期末試験に合格して、お礼に日葵ちゃん食べなきや（使命感）。じゆるり。

やってみせろよ、ヒマリィー！

（相手がゆきかぜちゃんでも）何とでもなるはずだ!!!

?? ( ? ^ ω ^ ) ???

人 ( ^ ω ^ ) ??? ( ^ ω ^ ) ???

?? ^ ω ^ ???

?? ^ ω ^ ???

?? ^ ω ^ ( ? ^ ω ^ ) ???

人 ( ^ ω ^ ) ??? ( ^ ω ^ ) ???

?? ^ ω ^ ( ? ^ ω ^ ) ???

人

?? ^ ω ^

「なんですか……その不思議なダンスは……」

「連邦に反省を促すお腹が幸せダンスだよ！」

「連邦に促す？ ダンスですか？」

「……」

このダンスは日葵ちゃんじゃなきや、きつとわからないかな！

なんて言っただって！ 半世紀以上前のダンスだからね！

「ダンスは置いといて！ ゆきかぜちゃんの存在についてなんだけど……。ゆきかぜちゃんの圧倒的な火力とか、実地経験が豊富だとか学園で成績トップだって情報で驚異に見えちゃうし。実際、十分危険な存在なんだけど、日葵ちゃんの流の考え方を参考に情報を整理するとね。むしろ、ゆきかぜちゃんチームで最も危険なのは私達の居場所を特定できる『蛇子ちゃん』と『上原くん』の存在かなって」

「……。今のダンスに私の全思考回路が持つて行かれたような気がします……言われてみれば、陽葵ちゃんの言う通りかもしれない。相州さんの忍法は獣遁の術。それも獣化できる忍法で下半身をタコ化できます。小耳に挟んだ程度の情報ですが、タコ足2本と両手を用



いた四刀流の戦闘力もさることながら、変身した時のたこ足の吸盤が1つ1つが超感度センサーみたいになっていて肉眼以外の感覚器官で“存在”を察知できると聞いたことがあります」

「へえ〜。タコ化した時の吸盤は超感度センサーになってるんですかあ〜。私の気圧変動による風遁の術と相性は悪そうですね、だからこそ考えられそうな作戦がありそうですね〜」

めぐみちゃんがニヘラと笑う。

私にはめぐみちゃんの風遁の術が蛇子ちゃんの獣遁の術にどこまで効果があるのかないのかわかんないけど、だからこそ考えられる作戦って何のことだろう？ そのところは何も思いついてないけど……。

「えっと、それでね！ 上原くんはというと、ゆきかぜちゃんのような雷を操る雷遁使いと違って生命体に存在する電気を操れる電遁と呼ばれる忍法使いっぽくて……。みんなの話ではあんまり戦闘向きじゃないし、個人の戦闘力も高くない最弱の対魔忍って言われてるけど、これもいろいろ物知りな日葵ちゃんの流に考えてみたんだ！」

「はい〜はい〜？ それでそれで〜？」

「きつと、その体内に存在する電流……静電気とかで上原くんは相手側の位置を特定できるだけの力を持っているんじゃないかな?! 現に混在した待合室のカフェテリアで、上原くんは身長が低くて周囲の見通しが悪いのに私と日葵ちゃんの居場所を特定して現れたし！」

「元氣な陽葵ちゃんのやり取りを耳にした可能性はありますが……。その線考えても……できない話ではないですね」

「それにもっともつとよく考えたら、2人もゆきかぜちゃん程じゃないけど対魔忍として任務に出撃しているらしいし、私達に比べれば実地に関しては先輩になるのかも？」

「ええ〜そうなんですか〜？ 初めて聞きましたけど〜……」

「これは3人と仲良くしてる日葵ちゃん情報だからね！ 以前『3人そろって“課外授業”に出かけてる』ってボヤいた時があつて、もう

これは確実に対魔忍任務だと思ったよ！ 可哀想な日葵ちゃん！  
洋館大冒険で分かった事だけど、あれだけの實力があるのに日葵ちゃんだけを仲間はずれにするなんて！ あーん！もつとあの時に「慰め」てあげればよかったー！」

「でもでも、そのぶん陽葵ちゃんは日葵ちゃんと仲良くできたのであれば、それはそれでよかったじゃないですか。それだけでも日葵ちゃんにとって十分な慰めになったと思いますよ〜？」

「……そうかな？」

「そうですよ〜」

「そうかも！」

「……………コホン。何故日葵ちゃんが「任務」に組み込まれなかったのか、なんとなく想像が付きましますのちに速水心寧はこの発言について次のように語った。『日葵ちゃんは悪い人ではないですし、一緒にいれば心強い存在であることはわかってはいます。私も彼女にめいいっぱい励まされた側の人間ですから。ですが私の知っている範囲での日葵ちゃんの日常生活を考慮した上で対魔忍任務に同行した場合、そこで作用する……その、生徒指導の際に眞田先輩と黒田先輩を相手に回した時のような副次効果や五車学園に転校してからの期間を考えるとまだ任務に出るのは早いかなって思っただけです。……深い意味は少しだけあります』後日聴取内容(筆)・蓮魔 零子が、ひとまず今は置いときましょう。つまり、陽葵ちゃんが言いたいのは『今回の期末試験では「火力」のゆきかぜさんばかり注目が行ってしまいますが、他の2人の存在も「索敵」という観点では十分脅威であり、既に私達は相手側からゆきかぜさんのみに注目してしまうような潜在的な心理戦を仕掛けられている』と言いたいわけですね？」

「うんーそういうこと！」

！  
流石、心寧ちゃんだ！ 私が言いたいことを纏めて説明してくれた

おかげで話が脱線しかけたけど、無事にめぐみちゃんに話が伝わったと思う！

「それでその情報を踏まえた上で『雲隠れゆきかぜちゃん孤軍奮闘へ口へ口大作戦』についてなんだけど、逆に2人。蛇子ちゃんと上原くんにごつちの位置情報さえ感知されなければ、ゆきかぜちゃんから当てずっぽうな攻撃はされるかもしれないけど、目を付けられたうえでの集中砲火は免れられるんじゃないかな?!」

私の言葉に心寧ちゃんとめぐみちゃんはまた顔を見合わせる。

先ほどまでとは打って変わって希望が見えたような……。日葵ちゃんが洋館でムードメーカーとして私達を引っ張って、私達も外に出られる希望が見えたときのような顔をしている。

そう！　どんな絶望的な状況の中でも、突破のための脱出経路は模索すれば必ず見つかる！

それは私が日葵ちゃんに教えてもらった大切なこと!!!

「それと。日葵ちゃんは分散を最も怖がってたし、あの場面では各個人撃破……孤軍奮闘状態になっちゃうことを防いでいたんじゃないかな？　そもそも大好きな日葵ちゃんと心寧ちゃんが必死になつて私のことを止めていたのに洋館へ入って行っちゃったのは、私達を魔法か何かで操って分散させて孤立させるのが目的だつて3年生のなお先輩も話していたと思うし」

「え〜？　日葵ちゃん、侵入を制止していた側なんですか？　私が聞いた話だと、率先して侵入していったって聞きましたけど〜？」  
「きつと噂話で聞いたからだよ！　日葵ちゃんは最初から洋館探索に乗り気じゃなかったもん！　噂よりずっと真面目で、心配性で、直前まで洋館に入ろうとした私達を止めていた側だったよ！」

「はい。私も入館直前で日葵ちゃんに止められて、洋館探索を中断した側だったのでその情報は間違いありませんね」

「それは意外ですね〜。……話を戻しまして〜、えつと消耗戦の前に相手チームへ攪乱戦を仕掛けるわけですね〜？　それが主な、ゆきかぜちゃん孤軍奮闘へ口へ口大作戦の部分になると〜？」

「そうだよ！ 察しが良いね！ めぐみちゃん！」

指をビシッとめぐみちゃんに指して褒める。めぐみちゃんもまた『うふふ』と笑って自慢げな顔をしている。

「雲隠れというのは、もしかしてゆきかぜさんのチームメンバーを孤立化させて順番に撃破しようということでしょうか？」

「心寧ちゃんも流石！ そういうこと！ あとはね、雲隠れの意味には私達の居場所が特定されにくくなるように森の中に布陣してゲリラ戦法で戦おうって意味もあるよ！ 残りは作戦名通りヘロヘロにするためにも、なるべくたくさんゆきかぜちゃんに雷遁の術を使っ  
て貰おうって思ってるかな！ 私の経験談とまた洋館大冒険での出来事になっちゃうんだけど、どんなすごい対魔忍でも忍法の出力には限界はあるはずだと思うんだ！」

そう。この案も私自身のこともあるけど、どつちかと言えば日葵ちゃんが私に見せて教えてくれたこと。

恋の赤いキューピッドが私と日葵ちゃんがくつつけるチャンスをくれて、日葵ちゃんが私を背中<sup>ラブホテル</sup>に背負いながらコロ先輩と神村ちゃんを抱きかかえて、私のせいで折れた脚のまま洋館から連れ出してくれた時。

あの火遁衆期待の新星だって言われているゆきかぜちゃんと同じ  
梓組の神村ちゃんが “火遁術切れ” を起こしていたことを私はちゃんと覚えている。私みたいに忍法の最大出力分を放射しちやつたからって限界を迎えたからって気絶はしてなかったけど。

それでも最強の対魔忍の一角だって、忍法を使い過ぎれば限界が来るんだって情報は、日葵ちゃんのコリコリとプニプニをしゃぶった味と共に忘れられない。

そういえば話はそれるけど………日葵ちゃんの忍法ってなんなんだろう？

クラス合同の格闘授業には参加したことなかったぽかったし、黒田

先輩と眞田先輩による生徒指導や洋館大冒険の出来事で考えるなら、卒業生の仲森<sup>なかもり</sup> 奈々華<sup>ななか</sup>先輩みたいに自己強化の戦闘特化型の忍法なのかな？ でもだったら……なんで入院先や稲毛屋の道中で私に押し倒されそうになっているのに忍法が発動しなかったんだろ？

いや、きつと日葵ちゃんのことだから私にケガさせないために忍法が発動をしなかったのかも！ あの優しい日葵ちゃんならあり得る！

いよおーし！

もちろん勝ちに行くつもりだけど、早く期末試験が終わったら日葵ちゃんの応援に行こうつと！

きつと蛇子ちゃんはふうまくんの応援に向かうだろうけど、上原くんは日葵ちゃんの友達として応援に行くだろうし、私も一緒に見学すれば日葵ちゃんの忍法について何かわかるかもしれない。

もしそれで忍法が分からなかったら、日葵ちゃんの忍法について本人に直接聞いちゃおう！

「ん〜……でも、その作戦はゆきかぜちゃんに対して効きますかね〜？」

「え〜？」

「だってえ〜、ゆきかぜちゃんは対魔忍として様々な任務についているので〜。自分の忍法の残量ぐらいいは見当がついていると思いますよ〜？」

「あ、あつ。そっか……」

これはめぐみちゃんの指摘したとおりかもしれない。

神村ちゃんも対魔忍として任務に出ているけど、あの時の火遁術切れば本人も赤いキューピッドから逃げるためにがむしやらに連射していたこともあったわけだし……。

冷静に向かってくるゆきかぜちゃんには効果がないかもしれない

よね……。

何か孤立させることの他に、ゆきかぜちゃんを倒すための良い案が思いつくように願掛けをしながら、日葵ちゃんのマネをして片目を瞑って後頭部を搔いてみる。

「……………ゆきかぜちゃんを倒す方法。何か他にあるかなあ？」

何も思いつかない。

時間は刻々と過ぎていく。

こんなとき、日葵ちゃんだったらどうするかなあ…………。

なんとなく後ろを振り返って…………。

ゆきかぜちゃんのチームを見て——向こうは準備万端らしい。

ゆきかぜちゃんはキリツとした顔で二挺のライトニング・シューターを抜いているし、蛇子ちゃんは笑顔で変身して四刀流の抜刀済みだ。上原くんも……………余裕そうに笑って、ゆきかぜちゃんと蛇子ちゃんの後ろで両手を組んで頭の後ろに回している。

蓮魔先生も私達のチームの作戦会議が終わるのを待っているようだ。

「いえ。ここまで作戦の筋道を立ててくれた陽葵ちゃんの立案した作戦『ヘロヘロ大作戦』の手法で行きましょう」

「?」

「心寧ちゃん?」

「私も…………日葵ちゃん譲りの考案で話すべきか迷ったのですが…………あの事件の日、敵味方すべてにおいて常に彼女は煽動の中心でした。ひよつとするとあれらの行動にも特別な意味があったんだと思います」

「……………」

「……………私は日葵ちゃんではないので、彼女の真意を想像することしかできませんが、あそこの振る舞いから予想できるのは、きつと陽動だったんだと思うんです。私が地下で洋館の主に囚われた時も、

ずっと相手をその気にさせて気を逸らせて、真の手の内考察『上原  
燐および眞田 焔を煽動し応援として呼び寄せたことと思われる』  
筆：蓮魔 零子は隠したままだったんです」

「それって……。燐先生と眞田先輩、蓮魔先生と黒田先輩を巻き込ん  
だ……？」

「はい。陽葵ちゃん達が脱出した後の話です。……日葵ちゃん、あんな大怪我だらけだったのに私を助けるために『必ず全員で生きて脱出する約束をしたから』って戻って来てくれたんです。こうやって力強く自分の胸板を叩いて……。これ以上は日葵ちゃんのことはいいですね。すみません。……私が言いたいのは、日葵ちゃんの煽動のような、ゆきかぜさんも自分の忍法の残量を管理できないように別のことに集中させてしまえば良いと思います」

はっ。

以前、稲毛屋で日葵ちゃんが心寧ちゃんを慰めたと話していたような気がする。私はてつきり交尾リソコしたと思ってたけど、これは間違いない心寧ちゃんも日葵ちゃんに慰められてる……！

それになんか心寧ちゃんの反応も少しおかしいぞ！ いつもより俯きがちだし、私から顔を逸らしちゃったし、指を組んでモジモジ動かししてる！ まさか……!?

でも稲毛屋までの道で、日葵ちゃんが男の子 “なら” 好きになっ  
ていたかもって言ってたし？

日葵ちゃんは女の子だから大丈夫だよね！

でも、それはそれとして心寧ちゃんはそのシチュエーションは心底  
うらやましいかも。

私だったら間違いないあのベッドで押し倒してるね！ 何度か押し倒して  
るけど！ もっと押し倒してる！

「なるほど、なるほど。わかりました。では作戦はく何か閃いた  
ような顔をしている陽葵ちゃん案の『雲隠れゆきかぜちゃん孤軍奮闘  
へ口へ口大作戦』にしましょう。私の忍法で相手を無力化させること

も容易ですけど、この場合は徐々に負荷を与えて不安を煽った方がよさそうですね」

めぐみちゃんという言葉に自分でもわかるほどに明るい顔になる。

この作戦が実戦経験のある3人にどれだけ通じるかわからないけど、それでも今回は上原くんが相手でもあるし、私は負けられない戦いになりそうだ。



Episode—Inside16—4 『チマチマ  
と削る単純作戦!』

今、私達は五車学園の校庭と校舎、プール設備、森林地帯がシチュエーションとして設定されたシミュレーションルームで、私達はゆきかぜちゃんのチームに索敵系の感知がある状態でも今どこにいるのか分からないような森の最深部に潜伏しているところ!

まだ試験は始まってないけど、陣取りは大事だもんね。

木陰に潜むなんて、陽遁の術者として自分の忍法が最大限が発揮できないかもだけど今回は陽動じゃなくて消耗戦だからたまにはこういうのもいいよね!

「では、まずは誰からやりますかあ〜?」

「うーん、やりやすい順番とか索敵の脅威を考えた時、やっぱり最初は上原くんかなあ」

「ゆきかぜさんを最後に残すとするなら、上原さんを仕留めた後は相州さんですね?」

「うふふ〜了解です〜。そうですね。私の奥義で頭が痛くなっちゃったら、この鎮痛剤を使ってくださいね〜」

「わあ! ありがとう!」

「使わせて頂きますね」

……  
……  
……

「では、これより組み合わせ16組目の期末試験を開始する!」

館内放送で響く蓮魔先生の号令と共に私達は森の縁に近づいて3人を偵察する。

幸いにも3人はばらけた様子はなく、私達と同じように3人固まった状態でまずは全方位にむけてこちらの位置を探っているように見えた。

「うん、やっぱり」

「何がやっぱり何ですか？」

「上原くんを見て」

「？」

私の視線誘導に2人は上原くんに注目する。

今、私達の視点では彼は私達の居場所の特定に勤しんでいるのか、ゆきかぜちゃんと蛇子ちゃんの後ろで艶のある長い髪の毛を静電気で浮かせて電遁の術でこちらの居場所を探っているようだった。

「髪の毛が持ち上がってるよ。あれはね、きっと電遁の術が発動している証拠」

あの動きは、日葵ちゃんのクラスがプールの授業だった日で見た光景と同一の現象だ。

制服姿のまま2人並んで見学席で何かを楽しそうにおしゃべりしていたのをよく覚えている。できることならば、私もあの2人に混ざりたいとも思えるような微笑ましい光景だった。

上原くんも日葵ちゃんに好意を抱いているのか、日葵ちゃんがそつと横に座ったり、首を傾けて彼の頭に頭を乗せた時に顔を赤らめ、まるで少女人形のような御淑やかな座り方で照れていた。

その時に彼は意図をしてか、してまいかはわからないけど、その髪をふわふわと持ち上げて電遁の術が発動させているのを私は見逃さなかった。

「！ 見つかった！」

やがて上原くんが私達の潜伏場所に向けて指をさす。

バチバチバチバチバチバチッ！！

その場から離れたところをゆきかぜちゃんの雷遁が襲い掛かってくる！

ゆきかぜちゃんの雷遁の術を実際に体験するのは今回が初めてになるけど、これはすごく凄まじい高威力！

ライトニングシューターから放たれた雷の弾丸は、たった1発だけなのに私達が潜伏していた茂みを真つ黒こげに焦がしちやった！

「追撃が来ます！ 私が囿になるので、2人は遮蔽物の多い深部への移動を！」

「りよゝかあいゝ」

「気を付けてね！」

「ふふふふ。それじゃあ、ぼちぼち発動させちやいましょうかねゝ  
！奥義“空集虚散”ゝゝ！」

ここで心寧ちゃんと別れて、ターゲットを分散させる。

完全に日葵ちゃんの戦術をマネするのなら、本当は分散しないで私達も固まって行動したほうがいいのかもしれないけど、今回はゲリラ戦法に出ること。めぐみちゃんの風遁の術を全力で使用する事を考えた場合、分散した方が安全なのだ。

めぐみちゃんは心寧ちゃんと別れた後にあとに即ゆきかぜちゃんの周囲、校庭一带に“空集虚散”の負荷を付与してもらう。木陰の間からしか彼女達のチームの姿は見えないがあの場合にいる3人の誰も彼もが頭を抑え始めた。

めぐみちゃん曰く、“空集虚散”は周囲の気圧を弄る忍法らしいが、あれは頭痛が痛そう。

でも森の縁でゆきかぜちゃんの攻撃を攪乱している心寧ちゃんへの射撃が僅かに鈍って、やや追い詰められ気味だったけどなんとかダウンしないで逃げられたみたい！

「！」

「――」

「――」

何か遠くで3人が話しているのが聞こえる。何を言っているのかはよく分からないけど、また上原くんの髪が静電気で少しふわふわしているから、忍法でこちらの居場所を特定しようとしているのかも。でもやっぱり「空集虚散」が効いてはいるのか、先ほどまで程よりに私達の居場所の特定は正確じゃない。頭の横を押さえながら見当違いの森の中を指さしている。だけど……。

「いたっ！」

「喰らいなさいー！」

わざと心寧ちゃんはその上原くんが指定した場所から顔を出して、ゆきかぜちゃんの雷遁と蛇子ちゃんのタコ墨の攻撃を発動させる。もちろん、反射神経と移動能力を強化する迅遁の術の使い手である心寧ちゃんが、めぐみちゃんの「空集虚散」の負荷を受けた2人の攻撃が直撃することもなく、回避に専念してすべての攻撃を避けていく。

特に蛇子ちゃんのタコ墨は五車では有名で、体に付けば魚臭さが三日三晩消えないと恐れられているから、一回でも被弾しちゃうと一生その吸盤センサーで追われちゃうので入念に回避し、またその墨を踏みつけてしまわないようにその場所には近づかないようにしていた。

時々、蛇子ちゃんが見当違いな場所に墨の攻撃をしているけど、踏

んだら最後までこまでも追いかけれちゃうので遠方で見守っている私が心寧ちゃんに指示を出してその場所の墨を踏んでしまわないように電話で連絡して報告している。

私達の作戦はうまく機能していた。上原くんは索敵結果を誤認識させながらも、あえて心寧ちゃんがその場から姿を現してはゆきかぜちゃんと蛇子ちゃんに攻撃を入れさせる。2人は少しずつだけど、忍法を使っていく。

これを何度も。何度も何度も繰り返す。

「……！」

「……！」

「……！」

やがてまた3人が何か話しているのが見えた。攻撃も止み、煩わしい雑音もないから耳をそばだてて何を話しているのか掴む。

「さつきから速水さん、蛇子達に姿を現すばかりで一方に攻撃して来ない……。一体どういう意図なのかな？　今回は攻守交替の防衛線じゃないのに……」

「もしかして……！　鹿之助！　もう2人の位置は!?!」

「か、変わってないぜ？　さつきと、同じ場所、でも森の奥に、隠れてるな」

「………てつきり、奇襲の為の陽動だと思ったのだけどそれも違うみたいね」

「となると奥に隠れた2人に意識を向けさせつつ、さつきから攻撃で姿を現している速水さんが攻撃の機会を伺っているのかな？　……」

「ところで鹿之助ちゃん、大丈夫？　結構辛そうだけど……」

「へ、へっ！　おれは、大丈夫だぜ！　こ、こんな頭痛ぐらい！　俺は2人みたいに強くないから、ふうまが俺に教えてくれたリーダー役として、2人の役に立たないと……。それに、これくらいは役に立って、今度は俺が日葵に迫る危険を素早く察知して事前に護れるぐらいに

強くなりたいたしさ……」

「うふふふつ。ならもつと頑張らないとだね！ きつと今の言葉、日葵ちゃんが聞いたら絶対に喜ぶと思うよ！」

「へ、へへっ」

「ねえ。その『日葵ちゃん』って、5月に編入された例の転校生”よね。あのふうまを含めていつもつるんでるけどどんな感じの子なの？」

ゆきかぜちゃんのその質問は私も気になって、隣のめぐみちゃんに術を弱めて貰って、心寧ちゃんには一旦陽動を中断させる趣旨を電話で伝えて耳をそばだて続ける。

鹿之助くんが日葵ちゃんに対してどう思っているのか。恋敵になるのか、それとも日葵ちゃんが一方的に上原くんのことを好きなのか。見極められる判断材料になりそうだもんね！

すごく気になるんだもん！

「蛇子の認識だと、日葵ちゃんは普通の面白い女の子かな？ ふうまちゃんと同じように知識に富んでいるところもあるし、努力家かな！

ひょうきんにこつちを笑わせに来てくれたりもするし……」

「お、おれは普通じゃないと思うんだけど……」

「ちよつと？ 鹿之助ちゃん？」

「いや、でも、だってさあ？」

「じゃあ鹿之助はどう思うの？」

「うーん……。俺が良く知る日葵はトラブルメーカーで好奇心旺盛？

遠慮のない行動が大胆不敵すぎて扱いに困っちゃうヤツ……？」

割といつも騒ぎの中心には日葵がいるな。でも、俺はそんな日葵のことが嫌とか苦手じゃなくて……蛇子の言う通り知識が豊富だから勉強の教え方とかうまいし、発想と機転の転換が奇想天外だし、俺の窮地にはいつも日葵が守ってくれて……。……あと、こんなことを言うのは恥ずかしいんだけど……。どこからともなく颯爽と現れてゲームの騎士みたいに助けに来てくれる俺の尊敬できるヒーローだ

と思ってる、かな？ もしも一緒に任務に出られるなら、日葵アイツが居れば、日葵ひまりと一緒なら、どんな苦難も難関も突破できちまう……。瞳の奥に不思議な煌めきを持った女ヤツかも」

むむむつ。

ごまかしているけど、それは上原くんも暗に日葵ちゃんが　好き  
“　　”　　って言いたいのかな!?”

私は暗にじゃなくて明に押していくタイプだけど、それぐらいの恋の動きは読めるよ!

上原くん!　日葵ちゃんについて考えて話している時ずっと右の口端と頬の間を右手の人差し指で搔いてるもんね!!!　顔も紅潮しているし!

なんだかんだ言いながら日葵ちゃんのこと意識してるねくくく!!!

「……………ふーん。そうなんだ」

「そんなことを聞いてくるってことは、ゆきかぜちゃんも何か日葵ちゃんのことでも気になることでもあるの?」

「まあね。あの子とは1度、転校してくる前。中等部3年生の時に会ったことがあるから」

「えっ!　　そうなのか!?!　何処で出会ったんだ!?!」

「ねえねえ!　その時の日葵ちゃんってどんな感じだったのー!!!」

「……………そうね。ちよつとぐらいなら話してもいいかしら……。あれは殲滅任務に従事していた時の話よ。今でも忘れもしない……。彼女は、対魔忍からテロリストを護る盾として活用された人質で——」

話し込むゆきかぜちゃんに蛇子ちゃんと上原くんが顔のパーツをすべて真ん丸にしている。

私も顔のパーツが真ん丸になっちゃうっ!

まさか日葵ちゃんゆきかぜちゃんと面識があったなんて!

でも、あの日葵ちゃんが人質になるなんて想像できないなあ……。

「えっ、え。そんな状況。どうやって助けたんだ？」

「本当は試験に集中しなきゃだけど、蛇子もかなり気になる」

「助けてない」

「「え？」」

ぴしやりと発したゆきかぜちゃんの言葉に、2人と同じく私も固まっちゃう。

えっ。助けてないって、それはどういう意味なのかな……？ でもでも日葵ちゃんはテロリストに人質として捕まって居ただよね？

あ、そっか！ 風の噂でその時はアサギ先生も出たって聞いたから、アサギ先生が日葵ちゃんを助けたのかも！ 最強の対魔忍なら人質救出も余裕だろうしね！

今すぐにも森の中から飛び出して3人の話に混ぜりたいけど、絶対に集中砲火されちゃうし話に混ぜるどころか話が中断しちゃうと思うから今は盗み聞きするだけで我慢する。

「彼女は自身が人質として囚われた時。私も、さくら先生も、アサギ先生だって動けない中で “自分の命と引き換えに” 隙を作ったの。道中で拾ったらしい拳銃を隠し持っていて、真正面からテロリストへ目と鼻の先の距離で撃ち合ってたね。ま、事前に蛇子ちゃんから御守りとして渡されていた治癒の墨で一命を取り留められたんだけど」

「えっ……ええ、ええ……？」

「ひ、日葵ちゃんって五車学園に来る前……。中等部の頃から、はちやめちやだっただ……。」

「それから1年後に学園に転校してきたって聞いて、ある意味私も助けて貰ったような形になったからお礼を伝えに行こうと思ってたんだけど……アサギ先生から『会っちゃ駄目』って言われてたからいつも遠巻きで見ることしかできなかったの。ふうん。2人から見て彼女はそんな子なのね」

ええええ???



思わず上原くんと同じ反応を返しちゃう……。  
アサギ校長先生が助けた訳じゃないんだ……。

でもちよつとわかったこともあるかも！

それが理由で日葵ちゃんの居るところでは、ゆきかぜちゃんが居なかつたんだ！

やつぱり日葵ちゃんはすごいや！

神村ちゃんにも言われてた自分の命を大切にしないところが目立つちゃうけど、転校してくる前から窮地から脱しちゃう実績を持つてたんだね！

「ま。要人保護の目的で五車町に転居したじゃなくて、五車学園に転校してきたってことは、あの子も隠れ対魔忍だったってことよね。なら、最初からあの子が人質になるようなへまさえしなければよかつた話でもあるけど」

「う、うん……対魔忍なら、ね……」

「そ、そうだな……対魔忍、ならな」

あんなツンツンつつけんどんなこと言ってるけど……。中等部時代の実地任務での実績『殲滅作戦』で日葵ちゃんに助けられているなら、実は『ヨミハラで4人の一般人：救出任務』でも助けられていたりしてね！

『救出任務』での出来事はあまり喋りたがらないから詳細は知らないけど！

成功した裏には日葵ちゃんが居たりなんかして。あははは！

そんな偶然あるわけないよね！

ところでそっぽを向いちやつたゆきかぜちゃんの背後で、蛇子ちゃんと上原くんが何か神妙な顔でアイコンタクトを取り合っているよ！

なんだろう？ 何か今のツンデレ発言で気になることでもあったのかな？

「さて、休憩時間はこれぐらいにしましよ。鹿之助、リーダーの反応は？」

「あ、えと、さつきと同じ、かな」

「蛇子ちゃんの方も休憩してどう？ まだ墨は吐けそう？」

「うん。墨が少しでも当たれば、蛇子の吸盤で鹿之助ちゃんのリーダーのお手伝いができると思って連発したんだけど……今の休憩でまだ撃てそうかな？ いまのところ全部回避されちゃってるけど十数回は放てそう」

「よかった」

「——な、なあ。もしかしてなんだけどよ。さつきから隙を見せているのに攻撃して来なかったのって……こっちに、ゆきかぜもいるし……。勝てないことを見通して日ノ出さん達、引き分けに持ち込もうとしていたのか……？」

「あるいは蛇子達の忍法切れを待っていたのかも。疲弊したところで攻勢に打って出てくる算段とか」

「考えられるわね。要するに今回の実技試験。勝って合格するには待っているだけじゃダメってことね」

あつ！

今のわざとだったの?!?!

私としては日葵ちゃんの話をしていたから、様子見していただけだったんだけど！

でも、やった！

こつちの意図が上手くゆきかぜちゃんのチームに伝わった！

でも忍法切れ狙いの作戦がバレちゃってる！

ただゆきかぜちゃんを孤立させちゃう作戦は分かってないみたい！

これは無事に第二段階に移せそうだし、ゆきかぜちゃんがこつちを見てきている辺り、森の中に引き込めそう！

「うわあーはッはッははー。ばれてはしかたないー。そうだよー。」

時間制限を越えたらユキカゼちゃん達も私達と同じ失格なのだ——」  
「そこっ!!」

バチバチバチバチバチバチッ!

「うひゃあっ! て、てったい! 撤退! 心寧ちゃんもポイントA  
まで逃げて!」

ここで心寧ちゃんの案である陽動を更に放つ。根の葉もない根拠のない発言で、本当に時間制限があるかどうかはわからないけど……。不安を煽ればきつと私達の目的はうまく果たされる。

少し休憩して忍法の回復をしていたのはこちらも同じだからね!

日葵ちゃんの話をしながら休憩しているとき、めぐみちゃんの忍法の負荷を軽減してこっちも回復に努めてたし!

状況としてはほほほ同じなのだ!

ダメ押しで私も心寧ちゃんに対して指示をいれる。たぶん、これで3人は攻撃が届かなくなっちゃうから森に侵入するほかに選択肢がなくなるはずなのだ。

『まだ上原くんの索敵が正確に機能している』、『休憩もしたから大丈夫』という誤認識を抱えた状態で。

……

……

……

先ほどの煽動がうまく行ったおかげでゆきかぜちゃんのチームは私達を追って森の中に入ってきてくれた。

森の中にもめぐみちゃんの奥義忍法である “空集虚散” が校庭よりも微量だけど撒かれている。これは私達にとっても軽微の頭痛を誘発させることになっちゃうけど、めぐみちゃんが忍法の対策である頭痛薬を事前に配布していたことで症状は特にならない。

いざとなれば、私の陽遁の術で高気圧を発生させちゃえばいいからね！

私の場合はゆきかぜちゃんや神村ちゃんと違って、陽遁の術を発動させちゃうと潜伏する筈なのに輝いちやうし、攻撃として火の玉を放つちやうと同時に忍法切れで気絶しちやうから最終手段だけどね!!!

私はめぐみちゃんと解散し、心寧ちゃんと合流する。

めぐみちゃんは倒されちやうと奥義忍法を発動できなくなつちやうから、今は最深部で来るべき時を待ってもらっているところかな。

彼女達が森に侵入してから、先ほどよりも頻回に姿を見せる心寧ちゃん。

それを「逃げるなあ！」と叫びながら追いかけるゆきかぜと蛇子ちゃん。私はそんな攻撃と追跡に専念している2人の後を必死に追いかけている上原くんの背後からこっそりつついていつている。

身体能力の高い2人は『心寧ちゃんを追うこと』と『時間内に私達を倒す』ということに夢中で、先ほどまでよりも上原くんへの気配りがおろそかになっていた。

リーダーとして活躍していた上原くんも先ほどから心寧ちゃんの姿を常に捉えていることもあるし、2人へ私達が今どこにいるのか伝える必要が無ければずっと走り続けていたこともあって、息は絶え絶えになってうまく自分の状態を伝えることもできないみたい。

そしてチャンスはやってきたよ！

やったー！

早い動揺！私でなきや見逃しちゃうね！』

ここで1つ日葵ちゃんの話をしようかな。

学園のみんなも知っている通り、日葵ちゃんは毎日噂が生成されているほどに人気者で、親しくなった異性同性両方にモテる理由が私にはよくわかる。

個人の戦闘能力。

巷の噂を除いた実績。

対魔忍わたし達を纏めあげられる統率力。

前線の実働部隊として適した忍法。

そして神村ちゃんやその身が凍り付いちやうような幽霊に対しても臆さないその強い精神力。

すべて対魔忍として必要な要素だよね。

噂だけで毛嫌いする人もいるけど……。

現に私は初めて出会った時から日葵ちゃんに好意を持てたし、上原くんだって日葵ちゃんと常に一緒に居るし、日葵ちゃんの強さを知っているなら上原くんもきつと日葵ちゃんのこと是对魔忍としても、異性としても大好きに違いない。

暗に好きだって言ってたし！

でも日葵ちゃんとしては、私よりも上原くんを好いているのは火を見るよりも明らかだ。

彼と2人きりできるときだけは私には見せたことのない甘いメスの顔をしている。

上原くんは鈍感な男の子だから、特別扱いされていることには気づいてないみたいだけど……。

同性ならば誰だって、上原くんに対するあからさまな日葵ちゃん態

度で気付けるはずだ。

『日葵ちゃんは上原くんが好きなんだ』って。

私にだってそんな表情を向けてくれる時もあるけど、あくまでもそれは私が病室で押し倒すことに成功して、性感帯の愛撫によって日葵ちゃんをエツチな気分させられたときだけ。

どんなに本気で好きだって伝えても、いつも流されちゃう。

本気になつてもらえない。

まるで私が一時的な冗談でも言っているみたいな反応だ。

例えるなら……。

……そう……。

私と日葵ちゃんが本当の姉妹だとして、妹の私が本気でお姉ちゃんに恋愛対象として好きだって伝えていのに流されちゃうような感じ。

だからこの期末試験。私はゆきかぜちゃんに敗北したとしても上原くんだけには負けられない戦いがある……！

日葵ちゃんが私にも愛情を注いでくれるのであれば、私は上原くんとその与えられた愛を喜んで分かち合えるけど……。

日葵ちゃんの愛が1人にしか向けられないのであれば、私はその座を絶対に勝ち取らねばならない！

対魔忍として、本当はこういう私情を持ち込んだじやいけないことはわかってはいるけど……。

それでも今日は。今日を境には。

上原くんに勝って、日葵ちゃんに対魔忍として強い私になびいて貰いたいのだ。

「……………」

「さつきからちよこまかと!!! いつまでも逃げ回ってないで対魔忍らしく正々堂々と戦いなさい!」

「追いかけても追いかけても追いつけない! 先ほどから、蛇子達と何回も遭遇しているのに!」

「でもそれって相手は逃げ場を失いつつあるってことよね! いい加減この鬼ごっこを終わらせてやるわ! 行くわよ! 蛇子ちゃん!

鹿之助!」

「うん!」

「はあ……………はあ……………つ! はあ……………! ま、まって……………少し休——」

私達の作戦の思惑通り、時間切れに焦るゆきかぜちゃんと体力に余裕のある蛇子ちゃんの2人は姿を現しては逃げ続ける心寧ちゃんを追って森の最深部へと駆け出していく。

心寧ちゃんが時々、振り返っては見せるジト目とか鼻で嗤うような仕草が、2人の闘争心を燃え上がらせているっぽいかな。

一方で上原くんはというところ…。背後から尾行してもわかるほどに体力のある2人から引き離されて、ほぼ孤立。単独行動の状態になっっている。

だからこそ、上原くんの進行方向上に回り込んでタイミングを見計らって……………!

「行けっ! 私の式神!!!」

ブンツ!

「ひゃあ……………うはあっ!」

ゴツツ!!!

「よしっ！」

私の鉄球に憑依させている式神はへろへろになっっている上原くんのおデコに向けて、思いつきり衝突させて上原くんを吹き飛ばす。

上原くん突然の私の登場に反応できず。また鉄球に突き飛ばされたことで、そのまま連続で後転するようにコロコロと転がって木の幹に衝突する形で停止する。

これで索敵特化の上原くんを分断することは成功した！

彼が進路を塞ぐ私をなんとかしてゆきかぜちゃんや蛇子ちゃんを探しても彼が2人に追いつくには、時間がそれなりにかかるだろう。

上原くんに勝って、彼よりも強いことを証明して、私は日葵ちゃんに対魔忍として認めてもらいながらも惚れてもらうんだもん！

「いたたたたあ……」

「上原くん！ ここから先は通さないよ！」

「うわあっ！ ひ、日ノ出さん!? それに、と、通さないって……」

「そおれっ！」

ブンッ！

「ひいっ！」

メキヤツ！

「ひいひいひいひいっ！」

今度の鉄球の攻撃は彼には当たらずに木にめり込む。

ただでさえ日葵ちゃんや蛇子ちゃんよりも小柄な彼は、地面に這うことで攻撃可能範囲を小さくして避けて、ゆきかぜちゃんや蛇子ちゃん



んの方向とは真逆に逃げていく。

やっぱり彼自身には攻撃能力はないっぽい！

それでも私もここで上原くんを見逃がす気なんてさらさらないし！  
鉄球を水ヨーヨーみたいに手元に引き寄せて彼を追いかけろ！

「ホラホラホラホラ！　どんどんいつくよー！」

「ま、まって！　まっつけてくれえ！」

「実戦では『待って』は効かないよ！」

向こうの森の中ではまだ心寧ちゃんとゆきかぜちゃんと蛇子ちゃんの追走撃は続いているらしく、ゆきかぜちゃんの雷遁の術による激しい炸裂音や地上から上空に立ち昇る雷がチラチラと木陰の隙間から覗ける。

上原くんも最初は当てもなく逃げ惑っていたが、次第にゆきかぜちゃんの雷遁の術の方向へよろけながらも進んでいた。

私もそんな彼の背後から、頭上で鉄球を振り回しながら追いかける！

このシーンを日葵ちゃんがよく口走るネタ流に言うなら『甘寧、かんねい一番乗り！』かな！？」

「ひいっ！　ひいひいっ！」

「捕まえた！　えっと、甘寧！　一番乗りい！」

「わあっ！　は、放せよお！　ヒっ！　ゆ、ゆきかぜ！　蛇子！　た、たすけてえ!!!」

でも私から逃げていく彼の動きは疲弊していることもあってか、とつても遅くて、私が走りながら追撃の鉄球の甘寧攻撃をするまでもなくちよつと走っただけで彼の元まで追いちやった。だから逃げる彼の襟首をむんずと掴み上げることで、こちらの鬼ごっこはあっさり  
と終わらせちゃう。

宙に浮いた上原くんは手足をバタつかせながら、こちらを弱々しく

殴ろうとしたり、先に行ってしまったゆきかぜちゃんや蛇子ちゃんに助けを求めているが、誰も助けになんか来ないし、彼の腕の長さでは私へ届く距離は彼の首根っこを掴んでいる手とか腕ぐらいにしか当たらない。

……。

ますます分からなくなってきちゃった。

日葵ちゃんは対魔忍の彼の何処に惚れたんだろう？

上原くんは私たち女性対魔忍よりも強い対魔忍の男の子なのに。私でも簡単に取り押さえられるぐらい、こんなにも弱っちいのに。

もしかして上原くんの実力を知らないとか？

それでも一緒に学園生活を送っていれば、彼の強さは簡単に気づけると思うんだけど……。

不思議な日葵ちゃん。

バチッ！ バチッ！

彼を掴んでいる私の手の中で、彼の忍法の静電気攻撃が弾けるけど……。本当に強めの静電気程度の威力しかないから放してしまう……こともなく。ほぼ決着はついている。

「えっへへー♪ この勝負は私の勝ちだね！ 『棄権』って宣言するのと、荒っぽくなるけど一撃入れられて気絶するの……どっちがいい？」

「ゆ——」

「あ、そうだ『唐突』。上原くんは私と同じで日葵ちゃんが大好きなもの同士だから、これはアトバイスになるんだけど……」

「ひゃ、ひゃいつ!?!」

「私も心寧ちゃん達と合流しなきゃだから、この期に及んで2人を呼ぶようなら荒っぽい方法での気絶をしてもらおうからね!」

私の言葉に、彼は出かけていた言葉を飲み込んで目を左右に泳がせ

る。

えーつと、こういう時は……。

恐ろしく早い動揺！

私でなきや見逃しちゃうね！

上原くんもどこかで日葵ちゃんに助けて貰ったりしたのかな？

『日葵ちゃんが大好きなもの同士』って言った途端に顔を赤らめてるよ！

やっぱり、凶星だね〜!?

それと……なんだか……。

思いつきり、私の鉄球をオデコに受けたせいで……当たった場所が赤くなりつつあるけど、後で冷やしてもらえばいいよね。

「き、棄権します……」

「ヨシッ」

上原くんの言葉を聞いてから、現場猫のポーズをして手を離す。

組手ではあるあるな話だけど、降参や棄権と見せかけて奇襲をしかけてくる対魔忍もいるみたいだから彼からは決して目を離さずに、甘寧、一番乗りのポーズで鉄球を振り回していつでも彼の脳天に鉄球を振り落とせるように動向を見守る。

上原くん？　ここではね。上原くんが蛇子ちゃんやゆきかぜちゃんに話していたように、いつもヒーローのように颯爽と現れて、私達を護ってくれる日葵ちゃんは現れないんだよ？

「ゆきかぜ……蛇子……ごめん」

彼は怯えた様子で震えながらも、地面の土をほじって指に刷り込ま

せた泥を使つて自分の首に一本線を付けてくれる。

これで完全に彼は脱落となり、この期末試験中では脅威とはならなくなつた。

「いよーしっ！ 上原くん撃破〜！」

「ううう……」

その場に乙女チックなぺたん座りでへたり込んで、女の子っぽくシクシク泣き始める上原くんを放置して、2人を引き付けている心寧ちゃんの元へと急ぐ。

相変わらず森の中からは遠目で見ても分かるほどに、ゆきかぜちゃんの雷撃が空高く伸び、おまけに暗闇が広がる森の中で一カ所だけ光が煌めいている。

つまり！ 私は広大な森林で心寧ちゃんを探さなくても、ゆきかぜちゃんの雷遁の術が放たれた場所へと向かえば自然と合流でき、なおかつゆきかぜちゃんは術を消費続けるという私達にとってWINWINになる作戦なのだ！

わあっはっはっはっはー！

完璧な作戦だね！

!!!  
』

「

「つとおおおっ?! 蛇子ちゃん?! 大丈夫!？」

ゆきかぜちゃんの雷遁の術の矛先の近辺で、心寧ちゃんとめぐみちゃんが待機しているであろうと見通して森の中を疾走していた矢先のこと。

上原くんを撃破後の次目標である蛇子ちゃんが、道中で転がっているのを発見する。

予想外の人物が私の知らないところで転がっていることに驚いちやつて、思わず駆け寄って手を差し伸べちやつたけど、そういえば今回は敵同士だったことを思いだした。

だから大声を出して驚いちやつた自分の口を抑えて、周囲を見渡して敵を探る。

もしかしたらゆきかぜちゃんが今の声を聞きつけて、私目掛けて襲撃してくるかもしれないからね!

心寧ちゃんとおもちちゃんが一緒なら、孤軍奮闘中のゆきかぜちゃんを倒せるかもしれないけど……私一人だけじゃ絶対に無理だもん!

ガサガサガサ……

「……ッ!」

「ああ……やっぱり陽葵ちゃんでしたか……。めぐみちゃん、陽葵ちゃんですよ」

「日ノ出ちやくん! 陽葵ちゃんも無事に上原くんを撃破できたんですねえ〜!」

口を抑えながら茂みの物音にびっくりして飛びのいたところで、ア  
ンドロイド・レツグからプスプスと黒煙を蒸かしている心寧ちゃんと  
めぐみちゃんが木陰から姿を現した！

めぐみちゃんは私と別れた時とちつとも格好は変わっていないなかつ  
たけど、心寧ちゃんは囿役をしてからずっと逃げ回っていたせいか服  
がびつたりと皮膚にくっついて、ブラジャーが見えちゃってるかな！  
でもその白をベースに桃色のレース模様のブラジャーかわいいね  
！ 物静かな心寧ちゃんにすごく似合っている!!!

でもそれはそれとして、茂みから現れた2人の登場がゆきかぜちや  
んかと思つたから、びっくりして尻もちついちゃった。

「えっ?!.. えっ?!.. なんで2人ともここに居るの!?! だってゆきかぜ  
ちゃんは向こうで...:あつ!それよりも心寧ちゃんのそのブラ  
ジャーかわいい! 何処で買ったの!?! 五車町の洋服店じゃないよ  
ね?!..」

「これは東京百貨店で購入しました。...:似合ってますか?..」

「うん!もしも心寧ちゃんが日葵ちゃんだったら間違いなく抱き着い  
ているぐらい!..」

「うふふ。私としては速水ちゃんの下着よりも、尻もちなんかつい  
た日ノ出ちゃんの方が心配ですね。大丈夫ですかあ?..」

「大丈夫! ありがとう! おもちちゃん」

差し出された手に掴まって立ち上がる私に、引き上げてくれるめぐ  
みちゃん。

心寧ちゃんもおもちちゃんに続いて、私を引き起こしてくれる!

「それとおく...:ゆきかぜちゃんについてですが、あれは優等生なの  
に捕まえられない私達に向けて、彼女半ばヤケクソになっているっほ  
いですよ?.. 無事に冷静さを欠かせる作戦は成功ですね!..」

「あるいは相州さんの上原さんの2人と逸れたことを考慮しながら、  
こちらの作戦を見抜きわざと物音を立てる行為。雷遁の術を使うこ

とで、私達をおびき寄せようとしているのかもしれませんが」

引き起こしてくれた後は、現在のゆきかぜちゃんについて教えてくれる。

嬉しそうなめぐみちゃんだけど、冷静な心寧ちゃんはめぐみちゃんの発言をたしなめる。

うーん……。

今の話に関しては、どちらかと言えば私もめぐみちゃんの意見と同じなのけど……。

「……………」

「陽葵ちゃん、どうかしましたか？　少し浮かない顔ですね？」

ちよつと考え込むなんて私らしくないかもしれないけど、でも日葵ちゃんなら何か気になったことがあればこういう風に考えるはずだ。右手の人指し指を左の肘先にくつつけて、左の人指し指を左の下唇にくつつけるポージングをしながらね！

仮のお話で、心寧ちゃんの推察通りだとした場合。冷静さを欠いていない状態なら猶更、忍法を温存しないで発散しちゃっていることに説明がつかない。

だって森の深部に潜む前にゆきかぜちゃんは、私達の作戦の一部である忍法の切れの消耗戦を部分的に見抜いていたし……。

うーん……。

どうして心寧ちゃんはそんな風に思うんだろ？

うーん……………。

うーーん……………。

うーーーん……………。

「……………」

あ、そっか！

「心寧ちゃん！ 『雲隠れゆきかぜちゃん孤軍奮闘へ口へ口大作戦』作戦中での情報収集した情報になるんだけど……ゆきかぜちゃん、私達がゆきかぜちゃんの忍法切れを狙っていることを気づいているみたいなんだ！」

「あら。そうなのですか？」

「うん！ だから心寧ちゃんの言うおびき寄せるために雷遁の術を放出している推察は、違うんじゃないかなって思った感じかな？ 気付いているなら温存しなきゃ！ だし！」

そう。心寧ちゃんはその時、ゆきかぜちゃんと蛇子ちゃんの攻撃を回避することに専念していたから、私の知っている情報知らないんだと思って私が得られた情報を心寧ちゃんに共有する！

あとね！ あとね！ 実はこれも、日葵ちゃん譲り！

既に座学でも習ってるし実施したこともあるけど、実戦で即時に活用できた場面は日葵ちゃんの時が初めてかな？

洋館大冒険の時、死体の山の部屋で心寧ちゃんが居なくなっちゃったとき『得られた情報は即共有する様に』って教わったもんね！

あつ！

上原くんや蛇子ちゃんが話してた日葵ちゃんが勉強を教えるのが上手いって言ってた一面が分かったような気がする！

学校では座学で習ったらそれで次に使う時まで終わりなことが殆どだけど、日葵ちゃんの場合はすぐに実践の場を持たせてくれるから頭に入ってきてやすいんだ！

「ではめぐみちゃんの言う通り、ゆきかぜさんは冷静さを欠いているのかもしれないですね」

「ウフフ。陽葵ちゃんが立案したゆきかぜちゃん孤軍奮闘状態にはできたので、焦っているのかもしれないね」

「あ、それと……」

「はっ」



「蛇子ちゃんがここで寝転がっているのは……またどうして……？」

ここでさつきから足元で転がっている蛇子ちゃんについて2人に尋ねてみる。

蛇子ちゃんは完全に伸びちゃっているみたいで、半目で白目を剥きながらうつ伏せに倒れていた。しゃがみ込んでお尻をツンツン突いてみても反応がない。

だから触っちゃう！ ツンツンって！

ツン！ツン！ ツンツン！ つんつんっーん！ つ、つ、つつつ  
っー！ つんつんっーん！

……やっぱり完全に気絶しているみたい。どこをつつきまわしても反応ないもん。日葵ちゃんほどじゃないけど、プリプリのお尻がおでんみたい。

えっと、他には………あたりには彼女の武器である短刀が転がって、片手の1つには短刀が握られたままだね！ 下半身もタコ状に変化しているし……心寧ちゃんかめぐみちゃんの奇襲を受けてこんなことになっちゃっているんだと思うんだけど……。

「ああ、それはですね………」

「ああ〜！ どうやら身体能力としては蛇子ちゃんの方が上のようですが、ゆきかぜちゃんの方が持久力として高かったみたいで、熱心に心寧ちゃんを2人で追いかけている間に蛇子ちゃんが孤立したんですよ〜」

「ええ。だからめぐみちゃん案の相州さんのみを吊り上げるおびき寄せ作戦を発動したんです」

「おびき寄せ作戦？」

心寧ちゃんの言葉に首を傾げる。

私は何も閃かなかったけど、作戦会議中にめぐみちゃんが何か専門の作戦を思いついたとか言ってたような……？

もしかしてそれかな？

「はあい〜！ 名付けて『密林のタコさん漁』です〜！」

「これは相州さんの獣遁の術である。『Devilfish化』と掛けあわせた作戦名ですね」

「おお！ トンチを利かせてるんだね！」

「相州 蛇子さん、3分クッキングです」

「♪ウ♪ツ♪ツ♪ツ♪ウ♪ ♪ウ♪ツ♪ツ♪ツ♪ウ♪」

唐突に始まる3分キューピットクッキング。

これは母音でリズムを刻みながら小躍りしてノリに乗るしかない！ 『此方も抜かねば……無作法というもの……』みたいな名言があるもんね！

乗るしかない このノリのビッグウェーブに。

「はい〜今回のタコさん漁では、主に蛇子ちゃんの墨を用いました〜。先ほど校庭の方で撒き散らしていた墨（200ml）にネクタイ（1本）を浸しまして〜。聴覚や視覚ではなく蛇子ちゃんの触肢の五感のみを頼りに私側へとおびき寄せたのです〜！」

「獲物が罠に掛かったところで、めぐみちゃんの忍法を最大出力で発揮してもらい、相州さんの動きを止めた訳です。そこから私が背後から助走をつけて首筋目掛けた足刀回し蹴りを叩き込んで」

「撲殺☆タコ娘の活け造り、いっちょ上がりです〜！」

「どうやら激しい頭痛で思考が回らなかつたみたいですね。最後は奇襲に対する抵抗もなく、あっけなかつたです」

ほわほわとした嬉しそうな顔で状況を忍法を発動させるときにする腕をつき出す動作をして説明するめぐみちゃんと、自慢のアンドロイド・レッグを器用に動かして蹴り技を見せてくれる心寧ちゃん。

心寧ちゃんは心なしかやり切った顔をして、どこか嬉しそう！

おでんをツンツンするみたいにつづいても起きない蛇子ちゃんを見下ろすときの顔がなんだか、前髪が目元の影になっついて怒ってい

るみたいでちよつと怖いけど、口元がちよつと上がって微笑気味だから、全体的な気持ちとしては嬉しいみたい！

「すごい連携だね！ 私が上原くんを追い詰めている間にそんな激闘があつたんだ！」

「ですから、残るはゆきかぜちゃんだけになってます」

「ええ。幸いにも彼女は先ほどから忍法を乱射しているので居場所はわかってますし、遠巻きに観察して忍法切れを引き起こしたところで勝負をつけに行きましょう」

心寧ちゃんの言葉に大きく頷きを返して、蛇子ちゃんが離脱した跡地を離れる。

目指すはゆきかぜちゃんの元！

まさか、こんなにも私が立案した『雲隠れゆきかぜちゃん孤軍奮闘へ口へ口大作戦』がうまく行くななんて思わなかったけど私達は3人もいてまだ誰も離脱していない！

日葵ちゃんが口走るネタ流に走るなら『戦いは数だよ！兄貴！』だね！

……

……

…

「ふーっ！ ふー……っ!!!」

「どうかな？ そろそろ限界かな？」ヒソヒソ

「30分はあの調子ですし、そろそろだと思えます」ヒソヒソ

「最初よりも雷遁の威力も落ちてますね」ヒソヒソ

あれから木陰に隠れてひっそりとゆきかぜちゃんの様子を観察する。

ゆきかぜちゃんも周囲の草木が電撃で枯れた広場の中央で、苦しそうな顔をして、体中からは大粒の汗を流しながら雷遁の術を放ち続けている。

めぐみちゃんのいう通り、先ほどよりも雷遁の威力は落ちて……私の上原くんを倒したときみたいに上空高いところまで雷撃が立ち上る……なんてこともなく、いまはゆきかぜちゃんの周囲1?ぐらいの放電が限界みたい!

周囲に雷遁の術を飛ばせるなんて、まるで【雷輝らいぎの対魔忍】である上原くんのお姉さんの燐先生みたいだね! 燐先生みたいに身体は光ってないけど周囲はピカピカだね!

でも腕も持ち上げるのもやっと思いたい! 姿勢はラジオ体操第一の体を前後に曲げる運動みたいに身体を前かがみだし、時々、上体を逸らせては降ろすみたいない行動ばかりだもん。

「じゃあ、最終作戦を確認するね!」

「はい」

「は〜い」

「Yの字を描くように陣取りして。配置についたら3方向からの同時攻撃で決着を着けるよ! 合図は私の合図で、近接攻撃で仕留めるの。万が一ゆきかぜちゃんが逃げちゃったら即座にめぐみちゃんの風遁の術で足止めして! 足止めできたら、私の式神鉄球攻撃でやつつけちゃう! いいかな!」

「りようかいです〜」

「それで行きましょう」

お互いに了承を取って、ゆきかぜちゃんが中央にYの字型の配置につく。

まさか優等生のゆきかぜちゃんを私達で倒せるときが来ちゃうなんて……思ってもなかったから緊張で少し手が震えちゃう!

それに!それに! 今回は作戦の相性や忍法の相性とかもあるけど、私は1度も忍法を使ってない。使わないでの勝利が目前なのだ!

すごくない!?

ねえ、これってすごいよね?!!

えっへへー♪ 日葵ちゃんがこのことを聞いたら喜んでくれるかな?  
な?

きっと喜んでくれるよね!

『陽葵ちゃん、わたしを抱いて♥』なんて言われたら――……

きやーっ♥♥♥!!!

ルパンダイブ不可避!!!!!!

当然だよね! 学年トップ、成績優秀、才色兼備、実地経験豊富なゆきかぜちゃんを私達が協力して打倒したなんて聞いたら絶対に驚くし、いまは上原くん一筋でも私の方にも興味を持つてくれるはず!

逆の立場なら、私は日葵ちゃんの勝利をお祝いしちゃうもん!

上原くんを倒してー。ゆきかぜちゃんも倒してー♪

私か! 私達が対魔忍だ! 最強の対魔忍だ!

わあっはっはっはっはっはー! ハッピーな未来しか見えないよ!

日葵ちゃんも対魔忍なら強い私を見てくれるはずだもん!

だから興奮で震えちゃってる自分の右手を左手でぎゅっと包み込んで押さえるよ!

今だけは我慢だ!

「うっうっうっうっ!」

バチバチバチバチっ………!!

高ぶる心を落ち着かせて分析すると、ねらい目は今かな?

まだゆきかぜちゃんの忍法は完全に切れちゃってないけど、あれだけへろへろなら十分だと思う!

呻き語を上げるゆきかぜちゃんが忍法を発動して、次の忍法を放つ

までのタイムラグの間に決着をつける！

バチバチ！ ……バチツ……………バチっ…………

「今です!! メグミ||チャン、ココネ||チャン! ユキカゼちゃんに、  
ジェットストリームアタアアアツク!!!」

「ええいつー!」

「ヤアッ!」

「とりやー!」

私の合図で一斉にゆきかぜちゃん目掛けて、3人で四方八方の位置から飛び掛かる。

心寧ちゃんによる迅速の術ありきのアンドロイドレッグによる足刀に、おもちゃちゃんの登山用ピッケルでの襲撃、そしてちよつと離れたところから私の式神入りの鉄球攻撃だ!

「…………」

肝心のゆきかぜちゃんは気怠そうな顔で上体を持ち上げて、私達のジェットストリームアタックを見てくる。その目は本当に気怠そう  
で、両手に持っていたボルト・シューターまでも手放して…………まるで  
勝利を諦めたかのような顔だ!

行ける! 勝てる! 私達だって作戦があれば、ゆきかぜちゃんに  
勝てるんだ!!!

うおおおおおお!

友情パウワーツ!!!

ヤーッ  
!!!!!!

「そんな…………そんな…………攻撃で…………」

バチッ!

ジェットストリームアタックが直撃するまで残り2秒と言ったと

ところで、ゆきかぜちゃんが何かブツブツ呟いている。

でもあの状態から何かをするにしても何もできない筈だ！

忍法も切れかけているわけだし！

今だって少ししか放電できないし！

次の攻撃を打つのだって力を溜める時間が必要なはずだもん！

その切れかけの雷遁の術で攻撃してきたとしても、相手にできるのはせいぜい1人か2人ぐらいが限度のはずだし！

3人に勝てるわけないでしょ!?

「そんな攻撃で！ 私が倒せると思ったかあああああああああああああああ  
あああ!?!」

バチバチバチバチバチバチバチバチバチバチイイイイツツツ!!!

周囲の景色の色彩が真っ白に霞んじやうほどに、まばゆい閃光。

ゆきかぜちゃんの身体が稲妻のように金色こんじきに輝いて――

どこにそんな余力があったのか――

私達が事態を判断して、攻撃を中断して森の中に逃げ込むのよりも  
先に――

両手……………ううん…………。全身から放出される激しい稲妻が私達  
を包み込んで――

あはは！

やっぱりゆきかぜちゃんは強いや！





「16組目の勝者。 水城、上原、相州」

蓮魔先生の淡々とした声のおかげで、ぼんやりとした意識がスツと現実へと戻される。

身体がまたちよっぴりしびれているような感覚があるけど、ゆっくりと上半身を起こして片膝を立てながら周囲を見渡せば、周囲の景色は『何も設定されていない真っ白な空間のシミュレーションルームの冷たい床の上だった』。

日葵ちゃんなら今の状況をこんなふうと考えて描画しそう！ そんなことが思い浮かぶ。

おもちちゃんと心寧ちゃんの方にも視線を向ける。2人は髪の毛が焦げて縮れたまま、ゆっくりと立ち上がって私の方へと歩いてきていた。私の髪の毛もこころなしかボワボワ……ライオンの鬣たてがみみたいになっっちゃってるかな？

2人が到着するまでの間に、ゆっくりと大の字に寝っ転がって真っ白な天井を見上げる。

あーあ！ 負けちゃった！

でも、やっぱりゆきかぜちゃんは凄いや！

あんなに最大出力みたいな電力を出していたのに私達を殺さない程度には加減できたなんて！

シミュレーションルームの演出効果もあるんだろうけど、ちよつと  
しびれた程度ですぐに気絶状態から復活できたということはそこま  
で電圧が高くなかったという証明でもあるよね！

つまり、これって……。

ある意味では、私達はゆきかぜちゃんを追い詰めるところまで追  
詰められたんだ！

さて、まだ気絶状態にある蛇子ちゃんに寄り添う上原くん、汗  
びっしょりのゆきかぜちゃんが近寄って行って蓮魔先生に医療班を  
呼ぶように伝えている。

「あはは……」

「陽葵ちゃん……」

「どうやらゆきかぜちゃん、まだ力を温存していたみたいですね。  
完璧な演技に騙されちゃいましたあく……」

私の元までやってきた2人はフラフラだ。

だからもう一回上半身を起こしてから笑いながら2人を出迎えて、  
試験中におもちちゃんと心寧ちゃんからやってもらったように手を  
伸ばして、手を掴んで2人をその場に座らせる。

当然だけど、負けちゃったことに対して2人は残念そうだ。

私も今回は勝てると思って、少し浮足立っちゃったことも裏目に出ちゃったっぽい。

「うん……でもさ。今回の一件。逆に考えてみない?!」

「?!」

「私達は最後まで誰一人欠けることもなく、全員で五車学園1年生学年トップで、実地経験も豊富なゆきかぜちゃんをあそこまで追い詰められたんだよ!? これは誇れるべきところじゃない?! 確かに試験の試合では負けちゃったけど、私達は今回の試験を通して『対峙する相手の中には、自分が弱っていると見せかけて本当は余力を残している存在もいる』ってことが学べたから、今回の試験は私達の成長の大いなる一歩に繋がったと思うんだ! 何も成果を得られない状態と比べれば、私達は勝負には勝ったはずだよ!」

「……………」

だから2人を励ませるように、前向きに捉えて敗北を慰める。

「……………うふっ」

「……………ふふっ」

「うふふふふふふふ!」

「ふふふふふふふっ」

2人の顔が悲しげな表情から、じんわりと明るい表情になる。

「……………そうですね。私達はただ敗北したわけじゃないですもんね。

あの絶望的な状況から、陽葵ちゃんの大作戦であそこまで追い詰め、更に学びまで得られましたからね」

「そうだよ!」

再試験にはなっちゃうけど、今回の試験は悪いことばかりじゃなかったもん!

「また頑張ろう？次は再試験だけど、再試験で合格すればきつと問題ないよ！」

「はい。ゆきかぜさんを相手に、私達の力でここまで善戦できたわけですから。再試験がどんな相手でも怖くないですね」

「再試験も同じメンバーだと良いですね〜！ この役割分担方法で再チャレンジです〜！」

「えっ！ じゃあ、また日葵ちゃん流の作戦でいいの!？」

「いいですよ〜！ いいですよ〜！ これだけの打開力があるなら次も是非、採用して考えてくださ〜い！」

「じゃあ！また再試験の時は日葵ちゃん流に考えてみるね！」

「あつ。ではこのあと、今回の作戦を日葵ちゃんにお話してみて……。作戦についてのアドバイスを聞いてみたりするのはいかがでしょう？ 陽葵ちゃんが困っているなら日葵ちゃんは手伝ってくれると思いますし……。私からも日葵ちゃんに私達の動きを説明して連携行動の助言をお願いしてみます」

「！ 流石、心寧ちゃん！ そうしてみよう！」

2人とも完全に敗北の悲しみを忘れ去ったような晴れやかな笑顔だ。

やっぱり、その顔が一番だよね！

反省も大事だけど、いつまでもクヨクヨしてても何も変わらないし！

いつまでも過去の失敗を引きずっているより、次の問題をどうするか考える方が大事だもん！

私達是对魔忍だから憂鬱な顔で任務にあたるよりも、明るくハツラツとした顔で任務に従事したほうが皆に笑顔を与える存在になれるしね！

「それでは16組目の合格者を発表だが——」

「それじゃあ、再試験がんばるぞー！ えいえい？」

「「おーっ!!!」」

遠くで蓮魔先生が合否発表をしているが、アレは私達には関係ないものだ。

だから蓮魔先生の発言を遮らない程度の大声で2人の士気を上げられる掛け声を発する。

2人の士気は最高だ！ もちろん私も！

「えいえい？」

「「おーっ!!!」」

「えいえい？」

「「おーっ!!!」」

「えいえい？」

「……………」

「お……………っ!？」

「おほっー!？」

「おーっ!!!」

「……………」

ここで2人の声が裏返る。元氣よく天井高くに突き出した拳が震えて居たり、肘が伸びて居なかったり、震えていたり、目を私から逸らして下を向き始めちゃった？

「……………」

「あれ？ 2人とも？ どうしたの？ ほら！ もう一回！ えいえい？」

だからもう一度――

「……………日ノ出 陽葵？」

「え？ ひゃっ！ は、はすま、せんせい?!?!」

ええっ!?

背後からヨミハラの魔界の門から現れた異形の怪物のような声が聞こえたと思つて振り返つたら、恐ろしい顔の蓮魔先生が居るんだけど!

だから2人とも静かになつちやつたんだね!?

待つて! 私、蓮魔先生のこの顔を見たことあるよ!

60年前の話題になった漫画一覽を履修したときにこんな顔の登場人物を見た気がする。

「……………あっ!」

あっ! 確か進撃の巨人っていう漫画のイエレナの顔芸だ!!!

これは夢に出そうなくらいに怖い!

たすけて! 日葵ちゃん!!!

「私は今、合格者発表をしているのだが……日ノ出 陽葵。大人しく合否判定も聞かずに友人達とおしゃべりとは随分と余裕な様だな?」

「え、えっと。だって、私達……実技試験……ゆきかぜちゃんに負けちゃったし。再試験だから合否判定なんか聞かなくつてもいいかなーって……?」

「ほう? では合格を自ら破棄し、今一度試験を受けると? 貴様等はそう言うのだな?」

……………え? 合格?」

「……………え? 合格?」

「そうだ。16組目は全員合格だ」

「え?」

「えっ?」

蓮魔先生の言葉に耳を疑い、心寧ちゃんもめぐみちゃんも騒めく。

「えっ? えっ?」

「なんだ? やはり不服か。では日ノ出陽葵、速水心寧、持田めぐみ。貴様等3人は不合格ということだ。再試験——」

「ま、待ってください! 試験開始前に負けたチームは再試験だっておっしゃりませんか?」

「ああ」

心寧ちゃんの質問に蓮魔先生はあつけらかなとした様子で返事をする。

でも、やっぱりそうだよな?!

試験開始前に『負けたチームは再試験だ』って言ってたよね?!

私、紫先生がそう話したの日葵ちゃん達と一緒に聴いたもんね?!

「それは建前の話だ。本試験では、勝敗に関わらず、チームワークが発揮されているかどうかを重点的な採点を行っていた。つまり、1+1+1=3以下でなければ合格。これはそういう試験だ」

「えっと。それは……つまり、先生方は私達に嘘をつかれて居たという事ですか?」

「ふむ。速水は『嘘をつかれていた』と捉えるか。その認識なら半分正解だな」

「……半分……?」

「いずれにしろ、貴様等如きが実地経験豊富な水城、相州、上原を相手に勝てると思ってい「思っていました!」

「……日ノ出は、まずそのポジティブ過剰な性格を治せ。対魔忍の任務でその過剰思考は命取りになるぞ」

えー!? 今回は単純な忍法のぶつけ合いじゃなくて、日葵ちゃん流の作戦立案をしたし、ゆきかぜちゃんには負けはしちやっただけど途中

までうまく行ってたのに！ 勝てない要素はそこまでなかったと思うけど……。

ううん。きつと蓮魔先生が言いたいの『人の作戦の真似事だけでうまく行つた気になつただけのポジティブ思考ではダメだ。自分の物として会得しなければ意味がない』ってことかな？

でも、蓮魔先生の口調だと最初から無理な対戦相手をぶつけて来たみたい。それにさっきから、左手に持ったクリップボードに備えられた紙をペラペラとまくって、何かを書き込んでいる。

「ところで貴様等の誰が、水城のグループをそれぞれ孤立させる案を思いついた？」

「それは——」

「はい!!!」

「日ノ出ちゃんです〜」

「……」

勢いよく挙手する私に、心寧ちゃんとめぐみちゃんが中央に居る私へ手を向けてくれる！

それをすごい目で見つめる蓮魔先生。

まるで信じられないかのような顔をして……。

失礼だけど、そう思うのは当然かも！

今回の作戦立案は日葵ちゃん流の作戦に基づいて考えた作戦だからね！

もう、ほんつつとに日葵ちゃんを愛してる！

日葵ちゃんが居なかつたら絶対にここまでうまくことが運んでなかつたもん！

そもそも日葵ちゃんが五車学園に運命的な転校をしてくれなかつたら、私も心寧ちゃんもきつと今頃まだ洋館内で彷徨って……きつと、この場に居なかつたらどうし……。

あー！ だめだめ！ 落ち込んじゃ！ 情報収集はある程度大事にすることとか、日葵ちゃん無しで危険な場所には入ったりしないっ



て決めたんだから。

これはもうあの元気の出る踊りを踊るしかないね!!!

(日葵ちゃんの日葵ちゃん) 美味しいヤミー感謝感謝! また(日葵ちゃん) いっぱい食べたいな! デリシヤ、シヤ! シヤ! シヤ! 射ヤ! 射ヤ! 射精ヤツ! (日葵ちゃんのトロ顔) ハッピースマイル!

?? ( ? ^ ω ^ ) ???  
?? ( ^ ω ^ ) ???  
人 ( ^ ω ^ ) ???  
??? ( ^ ω ^ ) ???  
^ ω ^  
??? ( ^ ω ^ ) ???

???? ( ? ^ ω ^ ) ???  
?? ( ^ ω ^ ) ???  
人 ( ^ ω ^ ) ???  
人 ( ^ ω ^ ) ???  
人 ( ^ ω ^ ) ???  
人 ( ^ ω ^ ) ???

???? ( ? ^ ω ^ ) ???  
? ( ^ ω ^ ) ???  
????

□

あ!!! そうだ!!! 日葵ちゃん!!!

「あ!!! そうだ!!! 日葵ちゃん!!! 蓮魔先生! 合否発表の邪魔をしたことはごめんなさい! 全員合格でお願いします! えつと私、今回の作戦がうまくいったことで日葵ちゃんにお礼を言いに行かないといけないから先に抜けます!」

「おい待て日ノ出。その不思議な踊りの内容以外にも、まだ 『その作戦』 とやらについて聞きたいことが——」  
「今から日葵ちゃんの試験の応援にも行くんだけど! めぐみちゃんもよかったらどうかな?!」

「あ、はい。一緒にします。本場の日葵ちゃんの作戦を見てみたいですよ」

「おい——」

「心寧ちゃんは、ふうま君の応援に行くでしょ!? 途中の試験会場まで一緒に行こうよ!」

「ええ。もちろん」

「貴様——」

「それじゃあ、蓮魔先生 採点ありがとうございます!」

「人の話を最後まで——」

不審な目で私を見ながら呼び止める蓮魔先生をシミュレーションルームに置き去りにして、バスガイドさんみたいに2人を引っ張りながら出入り口に走る。

先ほどまで気絶していた蛇子ちゃんも気絶した状態から戻ったみたい。

上原くんもほっとした様子で、首筋を摩っている蛇子ちゃんに試験は無事に合格できたことを伝えているっぽいかな? そうだ!!!!

日葵ちゃんの試験を見に行く前に、上原くんに謝らないと!

オデコに鉄球をぶつけちゃったことを謝って、恨みつこ無しな関係に戻ろう!

「上原くん!」

「わっ。ひ、日ノ出さん……」

「そんなゆきかぜちゃんに隠れちゃうほど怯えないでよ! ただ単に謝りに来ただけなのに。試験では鉄球を当てちゃってごめんっ!」

「おう……それは別に気にしてないからいいぜ。今回の試験はさ、そういうものだと思う」ところどころで上原くんも、日葵ちゃんの応援に行くよね!」

「お、おお……そのつもり、だけど……?」

「じゃあ、日葵ちゃんに会う前にオデコまだ赤いから医務室で診てもらった方が良くかも! 式神の鉄球を頭に当てちゃったし、冷やすための湿布を貼ってもらってから来た方が良くよ!」

「それは……そうだな……。日葵を心配させるわけにもいかないし、わかった。助言サンキュー。ちゃんと手当してもらってから行くよ」

「じゃー！」

いよおーし！

これで日葵ちゃんの試験内容を前半は独占して私は見ることができきる！

我ながらに邪魔者を排除した完璧な作戦だね！ うーん！ これは試合には負けたけど、確実に勝負には勝ったし、事後処理でも私の方が上原くんには勝ったね！ 間違いないよ！

わあっはっはっはっはっはー！

17章 『へ幸運で埋め尽くして』  
Episode 115 『2度目の悪質タックル』

「スウー……。ハアー……」

嗚呼。どうして現実世界の青空はこんなにも蒼く、地平線の彼方で続いているというのに私の心は晴れないのだろう。

鹿之助くんや陽葵ちゃんのお見舞いが終わった後。

私は室井と顔を合わせるのが面倒だったため、いつものように病室を抜け出して気分転換に出かけていた。

ここは五車学園の地下から最も遠い場所である五車学園の屋上。

ここから一望できる景色として、期末試験も終えて下校していく五車学園の生徒が見える。学生によって実技試験に対する反応はマチマチだが、五車学園1年生の約2/3は楽しそうに帰宅している。本来であれば半数は失格になるという試験内容であったはずなのに、あの様子から察するにまえさき市で3時間ウンコしていたほうの蛇子ちゃん達の情報に誤りはないのだろう。

彼等は夏休みを友人達とどのように過ごすか話し合っており煌びやかな青春を楽しんでいるようだ。

「あーあ……。やっちゃまったよなあ……。絶対にドン引きだよなあ……」

一方でそんな学生達を眼下に私は死んだ魚のような目でブツブツとぼやきながら、体重を転落防止柵にかけて1人反省会を開いていた。

「スウー……。ハアー」

何を隠そう。この青空 日葵。もとい釘貫 神葬は、五車学園高等部1学期の期末試験の実技試験にて『鹿之助くんの「憧れ」』である神村 舞華を相手に、結果の合否を賭けた模擬戦闘を手抜き無しでやってしまったのだ。

まあ、手抜きなしで暴れまわったことはさほど問題ではない。最初からその赴きで挑んだわけだし。

紫先生に採点される程度なら、手抜きなしの戦闘などは然したる問題ではない。

何よりも問題だったのは、その光景を鹿之助くんや陽葵ちゃん。私  
が普段つるんで行動を共にしている全員に見られていたという致命的な要因にある。

しかも鹿之助くんの 「憧れ」 を塗り替えるために、神村 舞華に勝つことができればここまで落ち込まなかった。この鬱憤とした気持ちも多少なりとも晴れていただろうし、鹿之助くんに神村 舞華に打ち勝つ光景を見て貰えれば現状よりは彼女よりも私に対して興味憧れを持ってくれていただろう。

だが、現実はそうじゃない。負けたのだ。

私は奴に。

神村 舞華に。

模擬戦闘中に、ふうま君の妨害があったとか。途中まで私の方が優勢だったとか。

そんなのは理由にはならない。

社会人になれば結果がすべてなのだ。過程など評価されない。

他人の手柄をさも自分がやったかのように魅せる奴が上席に昇格できる。



てほしい。

米津みたいにクラウチングスタートのポーズで着地して、撥ねてきた宮本を追いかけるガッツなんかないわ。ただでさえ実技試験でへろへろなのに追撃で轢殺タツクルなんか喰らった日にはもう起き上がることもできないわ。

それでも後日、夏休み明けに轢殺タツクルを決めた人物にツケを払ってもらうため、相手が何者なのか確認のため上半身を起こす。

「だめ！ 日葵ちゃん!!! まだ早まっちゃダメ!!!」

「へ、蛇子ちゃん……?」

そこには私を決して離すまいと……柔道におけるうつ伏せの状態のように両足を大きく広げ、上半身で私をしつかりと固定する——まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんが、両目をぎゅっと瞑りながら押しえつけていた。

身動きしようとするたびに、女子高生とは思えない腕力で拘束しにかかってくる。

え。ちよ。え? 蛇子ちゃん???

あ!痛い痛い痛い! キマってる! キマってる!

「日葵ちゃんにとって今回の実技試験は散々な結果だったかもしれないけど、生きていればきつといいことはあるよ?!だから飛び降り自殺なんかしちや駄目!ここで死んじやったら鹿之助ちゃんがすつごく悲しむよ!!!鹿之助ちゃんだけじゃないもん!ふうまちゃんや私だつて……!!!」

え? 飛び降り自殺?

えーつと……。わたし、そんな気はサラサラなかったんですけど……?

ぐあっ!痛い痛い痛い! 一本! 一本入ってる!

だ、だいたい五車学園で飛び降り自殺したところで、死亡率は低そ

うだし……飛び降りたら下校していく学生達を肉クッションにして互いに不幸になるリスクと魔界医療で治療される確率のほうが高いから……!!

そもそも飛び降り自殺なんて周囲に迷惑をかけるような高リスクの自殺よりも、もつとローリスクで確実に自殺できる方法とかも知ってるし……!!

や、やめて……!!

痛い痛い痛い!!!

は、はやく。はやく! 彼女の誤解を解かねばならないだろう……

!

本当に痛いんだってば!!!!!!

「蛇子ちゃん、待つて。あ、あつ?! 待つて。待つて……!! 私、飛び降り自殺なんかしようとしてないですよ! 屋上でたそがれていても状況は何も変わらないから、今日のところは家に帰ろうとしたただ、で、すっ」

「嘘だよ! 日葵ちゃん、いま絶対に飛び降りようとしてた! そういう顔をしてたもん!!!」

「そ、そういう顔……」

蛇子ちゃんに言われて、彼女のケツをドラムと化したタツピングを一旦中断し、自分の左手で頬を掴んで押しながら考えてみる。

きつと彼女の言いたい自殺しようとしていた顔というのは、絶望の虚無チベットスナギツネの表情から、社会人が自宅に帰宅する時の表情に切り替わったことでも言っているのだろう。

「日葵ちゃん! お願いだから、考え直して! 日葵ちゃんは確かに手段を選ばないところとかあるし、平気な顔して対魔忍蛇子達だって無茶だっと思うようなことを平然と遠慮なくやってのけちゃうこともあるけどそれは決して欠点じゃないよ!」

「蛇子ちゃん。蛇子ちゃん。フオローしているつもりだろうけど、



まったくフオローできてない。もうパニックで割と直球な意見が出ちゃってますよ」

「それはごめん！だけど日葵ちゃんが飛び降りちゃうのだけは絶対に阻止しないと——」

「あだだだだだだだだだッ!!! はいはい！ わかりました！ わかりましたよ!!! これでいいですか!?!」

こっちの関節をガチで外しに来ているんじゃないかと思うほどの怪力で抑え込みに入る蛇子ちゃんが落ち着けるよう、無抵抗の示すため持ち上げていた上半身を地面へと寝そべらせて上空を再び仰ぎ見る。

彼女の拘束を無理に引き剥がそうとせずに全身の力を抜く。まるで身体で降参であることを伝えるように。

やめて……!! それ以上は……!! 自殺する前に、圧縮されて圧死しちゃう……!!

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

しばらくの沈黙。

次第に弱まる拘束力。

刺激しないようにゆっくりと首を持ち上げて蛇子ちゃんを見つめてみる。

蛇子ちゃんは涙目になって、その頬をぶくーっと腫らしながら怒っているような表情を作っていた。まるでひまわりの種を頬袋に詰め込んだハムスターみたいだ。

「あの……………自殺はしないので、放してもらっていいですか?」「妙な動きをしたら——」

「しませんって。家に帰ろうとしただけですもん次は本当に私が潰されちゃう」

放してくれない蛇子ちゃんに、半分泣きべそをかく様な表情で表情で再び青空を仰ぐ。

やっと全身の力を抜いて無抵抗を示していることで、蛇子ちゃんもようやく抱き着きホールドをやめてくれる。

まずは蛇子ちゃんが私の上から退いて、私も蛇子ちゃんからローリングしながら離れる。それからお互いにゆっくりと起き上がって、ひとまず日陰のベンチに歩いていき一息つく。

「ハァー……」

「た、溜息なんて酷い！蛇子は日葵ちゃんを心配して——」

「ああ、お気になさらず。この溜息は蛇子ちゃんとは別案件ですよ。……主に実技試験です」

「そう？」

「そうです」

「そっか」

ベンチで膝に片腕で頬杖をついて溜息をつく、私に蛇子ちゃんは私の顔を覗き込んでくる。

でも正直な事を言うと蛇子ちゃんに対する溜息だよ。これは。

身長は149cmしかなくて、お胸以外の外見は普遍的な女の子って感じなのに、いったいどこからそんなパワーが出てきたのか。……理解に苦しむ。火事場の馬鹿力という奴だろうか？

でも、まさかねえ……自殺すると思つて轢殺タックルをしてくるなんてねえ……。

「？ なに？」

蛇子ちゃんの顔をじーつと見つめる。

黄緑色の髪に、金色の光彩。顔のパーツが全体的に中央に寄つてお

り、あどけなさの残る可愛らしい童顔だ。

まだまだ子供の。そんな子供が私の自殺の心配を、ね。

「蛇子ちゃんは、どうして屋上へ？ 私はてっきり既に鹿之助くんとふうま君と帰っていると踏んでいたのですが」

「それは日葵ちゃんが病室にも教室にも居なくなっちゃったからだよ？ 帰りのホームルーム中に陽葵ちゃんが鹿之助ちゃんのクラスに乱入したんだって。鹿之助ちゃんに日葵ちゃんが病室にいないことを伝えて、でも教室にある荷物はそのままで……鹿之助ちゃんと陽葵ちゃんが2人揃って蛇子達のクラスに『日葵ちゃんがいらないから一緒に探して！』って入ってきたの」

ああん。その病室の出入り口に面会拒否の看板を立てかけたはずなのだけど。校医の室井が入る前に陽葵ちゃんが入っちゃったかあ……。

そつかあ……。陽葵ちゃんだもんね。陽葵ちゃんなら仕方ないね。

そつかあ……。

「そつかあ……」

「それに心配してくれているのは、鹿之助ちゃんと陽葵ちゃんだけじゃないよ。速水さんに獅子ししがみさん。舞華ちゃんに、磯咲さんやまりちゃん、まいちゃん、清水先輩しみず、3年生の穂稀先輩やコ口先輩も日葵ちゃんが居なくなっちゃったことに心配して、風紀委員や友達の3年生へ掛け合って一緒に学園中を探してくれてるんだからね！」

「……。うん？ ……なんか私の知らないところで大ごとになってません？ それ」

「なってるよ！」

なんだろう。

自殺するつもりはないけど、今すぐにこの場から消えなくなったぞ。

え。これ、探してくれた皆になんて説明しよう。

すごく心配させてしまったことは申し訳なく思うけど……失踪した理由は『屋上にて実技試験でミスったことに関して、たそがれていました』とか説明しなきゃダメなやつ？　ダメなやつだよね？

いや、ここは『外の空気を吸いに出かけてました』ぐらいで説明しよう。『ご迷惑をおかけしまして申し訳ございません』をつけて。

「あー……」

「日葵ちゃんは嫌がるだろうと思つて敢えて先生方には伏せてたんだけど……。あまりにも見つからないから、ふうまちゃんのお姉さんである時子先生にも内密で掛け合つて日葵ちゃんを探してもらつたんだから！」

「……………あー」

「でも、よかった。蛇子は日葵ちゃんが無事でいてくれて」

無事でいるなんて大袈裟な……。

そんな風に思つてしまったけど、蛇子ちゃんは私が飛び降り自殺しようとしたように見えたんだもんね。

大袈裟、ではないか。

「この度は心配おかけして、誠に申し訳ございません……」

「もうっ！ 『誠に申し訳ございません』だなんて、蛇子と日葵ちゃんは友達なんだから『ごめんね。』ぐらいでいいんだよ？」

「……………ごめんね」

「うん！ いいよ！ でもまずは日葵ちゃんが見つかったことをみんなに伝えるね」

私の言葉に蛇子ちゃんはにっこりと笑つてスマホを取り出す。

わあお。

流石、現代っ子。スマホをフリックして高速で文字を打ち込みメールを送っている。私にやまだ無理だね。せいぜい、ぼちぼちタップし

て文字を打つのが限度かな。

Episodell 6 『鹿之助くんの好きなところ』

まえさき市で3時間ウンコしていた蛇子ちゃんが、私を発見した趣旨を他の捜索隊に連絡し始めてから早1分。

ちよつとのぞき込んだだけでも呆気にとられるような長文を彼女は書き終えていた。

「送信つと♪ あ、でもやっぱり学園中を探し回って心配したことで大変な思いをしたことは事実だから、日葵ちゃんにお礼の埋め合わせをしてもらってもいいかな〜?」

「お。現金なやつですね。いいですよ。まえさき市にまた遊びに行つたとき、大福やパフェでも何でも好きなものでも奢りましょうか?」  
「あはは! やったあ! でも、それもいいけど、蛇子はもつと別の事が知りたいな〜」

メールを送信し終えた彼女はニヤリ、ニシシと笑う。

「ふむ。別のこと」

「うん。質問なんだけど……聞いても良いかな?」

「なんでもどうぞ」

「じゃあズバリ! 日葵ちゃんは鹿之助ちゃんが大好きなのは明らかですが、告白はいつするのかな!?!」

「ミ。ユっ?!」

想定外の質問に声が裏返る。

蛇子ちゃん……ぶっこんで来たね。

私もなんでも答えると言ったことと総動員をさせてまで心配かけ

させてしまった手前。誤魔化したり質問から逃れることはできず、普段は半目の目を丸くしながら目を逸らしたあとに両目を瞑って片手で後頭部を搔く。

「こ、こくはく……ねえ……」

「答えにくい？」

「……………ちよ、ちよ、ちよつとね」

「じゃあ、ちよつと質問の難易度を落として……日葵ちゃんは鹿之助ちゃんのどんなどころに惚れたの？」

興味津々と言った様子でグイグイ距離を詰めて尋ねる蛇子ちゃん。

これがお年頃の乙女つてやつか。

ぐいぐいくるじゃん。すぐぐいぐいくるじゃん。遠慮の二文字がないじゃん。

まあ、蛇子ちゃんの質問の手口が完全に〈説得〉における交渉術。

【ドアインザフェイス】

『最初に「大きな要求」をして断られたあとで、本命の「小さな要求」をすると承諾してもらいやすくする』という技法なのだが、これは確かに断りにくい。

でも『それぐらいなら答えてもいいかな』と思ってしまう。それこそ完全に〈説得〉の話術に囚われてしまっただけだが。

うーん……。鹿之助くんに惚れたところ……。ね。

「最初は……その『芯の強さ』かな……」

「芯の強さ？」

「うん。私の転校初日。私が紫先生による基礎能力試験に強制参加させられたことについて、蛇子ちゃんはご存知でしょうか？」

「もちろん！ あの日のことは鹿之助ちゃんから事情は大まかに聞いたし、日葵ちゃんとは初日の放課後から友達になったんだもん。忘れてないよ」

「ははは、ありがとうございます……。その際、彼は五車学園に来て右

も左も分からない私に声を掛けてくれて……詳細は省くけど、とにかく彼には色々と助けられたんです。紫先生に無茶難題を突き付けられたときも、クラスメイトは息を潜め荒波を立てようとしないう中で、彼だけが紫先生を止めようと動いてくれて……。その……。周りの空気に流されない『困ったことがあるら助けろ』と言った筋を通す、相手が何者であろうと臆さずに言及できる『芯の強さ』かな？　そこに惚れた感じ……ですね」

「……」

「いやっ、でもっ。ま、まあ？　それだけじゃなくて、小動物みたいな外見の〃可愛さで好きになった部分もありますけど？？」

鹿之助くんに惚れた経緯を真剣な顔で聞いてくれる蛇子ちゃんに気付いて、ちよつと照れてしまいおどけたような声でオチも付属させる。

「でも……。やっぱり鹿之助くんは、私には存在しない……。あの正義への情熱と輝きが眩しくて、一緒に居るとかつて活力に満ち溢れていたものが湧き上がるような気がして……。若かりし頃を思い出して、懐かしさを温かい気持ちにさせてくれるんです……」

オチをつけたのにそんな私の一面も認めてくれるように私のことを笑わず、話をうんうんと頷いて聞いてくれる蛇子ちゃんから逃げるようにして日差しがあたる場所まで出向く。

真剣な蛇子ちゃんに視線を合わせられなくて、おもむろに左手を頭上の太陽に突き出して重ねる。指先の隙間から零れた日の光が私の目に吸い込まれて行く。でも太陽の光は眩しくて、私はそんな光を隠しながらも太陽が見えるように指先で影を作る。

「日葵ちゃん、つてや」

「ん？」



「やっぱり蛇子達とは違って、本当に対魔忍<sup>外から来た</sup>じやないんだね  
「モヒョオツ?!」

彼女の言葉に思わずヒヤリとして、ギョツとした顔で蛇子ちゃんを見る。

一瞬にして『嘘だろ?! 私の正体に気づいたか!? え!? いまは鹿之助くんが好きになった経緯しか話してないんだが!? どこで釘貫神葬要素が漏れ出ちゃった?! え!? え!? どこどこどこどこどこどこ?!』と焦るも、蛇子ちゃんの顔を見る限り、たぶん。たぶん私が考えているものと違う別の意味か、そのままの意味らしい。

蛇子ちゃんの顔は非常に優しい笑顔をしている。

即座に〈心理学〉で彼女が私に対してどのような感情を抱いた上で、そんな発言をしたのか表情筋を使つての探りを入れるも私の正体に関することでは言及していないように見える。あの優しい顔の裏側に私の弱み『釘貫神葬であること』を握ったことを出汁にして脅迫してくるような素振りは見られないし、本当に優しい微笑んだ顔と……わたしの恋心に対する応援や祝福するような顔だ。

ギョツとしたことを誤魔化すようにして、片目を瞑りながら左手で後頭部を搔く。

「えへへっ。そんな日葵ちゃんに蛇子からワンポイントアドバイスもしてもいいかな?」

「あ……は、はあ……。なんででしょうか?」

「これは余計な一言かもしれないし、無粋かもだけど……。蛇子は鹿之助ちゃんに告白しても良いと思うよ?」

「ンッッ」

蛇子ちゃんの後押しに顔が、梅干しでも食べたかのようにキュツとすっぱい顔になる。両目を瞑って後頭部を搔く。

更に普段出ないような青空 日葵の声の4、5オクターブ高い声が喉の奥から零れ出た。

それに顔が熱い。夏の炎天下に照らされての暑さではない。皮膚の真皮から火が吹き出ているかのような熱さだ。

「い、いやあ、でも私学生だし？　今は恋愛に集中することよりも、学生の身として勉強に集中するべきだし？　告白して付き合うのは……あのつ。その、えつと」

「ふーん？　じゃあ、日葵ちゃんは舞華ちゃん本名神村　舞華に鹿之助ちゃんを取られちゃってもいいの？」

「それは困る！　困ります！　……でも……でも、さ……大学進学とかさ。就職とかさ……。それにまだ知り合って2カ月だし……鹿之助くんは私のことどう思ってるか……。つきあって一夜を過過ぎして子供がか起ききちちやちつつたら大変だし……。……。そのう……。もによもによもによもによ……」

「……………日葵ちゃんって変なところ奥手だよね！」

俯き両目を瞑って左手で後頭部を搔く私の隣で、からかうようにケラケラと笑い始める蛇子ちゃん。

これは完全に手玉に取られている。

くっ！　殺せ!!!

「それに、なんかたまに年寄りみたいなことを言うよね。もしかしてだけど、鹿之助ちゃんに好きって伝えられないのはそのギャップに葛藤していることもあるのかな？」

しかしその伝えられた彼女の言葉が、どこか自分の中で腑に落ちたような気がする。

そうか。ギャップか。

実際問題、告白できないのもそういうことが私の中でリミッターとしてかかっているのかもしれない。正直なところ告白するという行為に対して『釣り合わないんじゃないか』という言葉が脳裏を過ぎる。

なにぶん、身体はピチピチの16歳でも、精神は……ハンジロー先

生と付き合うぐらいがお似合いの精神なのだから。

それに――

「そ、そそそそそそうかも！ そうだ！ それだ！ ギヤツプのせいだよ!!!きつと!!!」

「ふふふふふつ。そっかくそっかく」

つい ギヤツプ” に対して想いを募らせ、伏目になってしまった私が誤魔化すためにできたことは、テンパリながらも意地悪そうな顔をした彼女の問いかけに答えることだけだった。

……

……

…

鹿之助くんがどうして好きなのか。

心配させて学園中を探し回らせてしまった蛇子ちゃんにお詫びとして『彼に惚れた部分』を話したのち、ひと段落ついたところで彼女はベンチから立ち上がる。

「ふふふふ。日葵ちゃんの安否は確認できたし、日葵ちゃんがどうして鹿之助ちゃんが好きなのか経緯も聴けたことだし蛇子はそろそろ戻ろうかな！」

「分かっていると思いますが、蛇子ちゃん。この話は――」

「チツチツチツ。日葵ちゃくん？ 日葵ちゃんには私がそこまで無粋な女に見えるのかな？ どうして日葵ちゃんが鹿之助ちゃんを好きなのかはここだけの話。誰かに話したりなんかしないよ」

「ならば結構。以上をもちまして、私から特に言及することはございません」

「うん♪ でも告白して気持ちを伝えるなら早めにしたほうがいいとおもうな！ この先、何があるかわからないし鹿之助ちゃん対魔忍が明日も居るか

「どうかわからないよ！」

「……人生は上り坂、下り坂、まさかがありますからね」

それでも私の護れる範疇であれば、彼に降りかかる火の粉は振り払うつもりだが。

「うふふふふっ！ うまいこと言うね！ 分かっているなら急がなくなっちゃー！ それじゃあ、またねー！」

「はい。また明日」

人の恋愛事情を見抜いてウキウキ調子に乗りまくっている蛇子ちゃんを見送って、私は再び屋上のベンチに座り上空を見上げる。

しっかし、蛇子ちゃんの『チツチツチツ』と発言した時の仕草。

あの人差し指をメトロノームのように左右に動かすポーズを見たのは何年ぶりだろうか。平成初期のドラマ、古畑任二郎のドラマで見たぐらいの懐かしさを感じた。

「……………ふふ」

蛇子ちゃんのおかげで少し元気が出た。

だからベンチの背もたれに背中を預けて、また空を見上げる。

先ほどまで褪せていた空が、気分が晴れ渡る青空に染め上げられていた。

そうか。これが青い、SCP-8900-EX青い空ってやつか。

「あつ、そうだ！」

「!？」

元気も出たところで再び蛇子ちゃんが戻ってくる。

まるでフロアリングの床を靴下で滑っているようで、底面だけを使って器用に滑るかのような動きだ。

「あのね！ 鹿之助ちゃんが、日葵ちゃんにお話したいことがあるって言ってたから、メールでこの場所のことを伝えておいたからね！」  
「ファッ!? えっ!? 鹿之助くんが来るの!!? 今から!? ナンデ!? アイエ?!」

「うん。だから日葵ちゃんはこのまま待っててね♪」

つい先ほどまで鹿之助くんに対する好きなところを話して、蛇子ちゃんに告白するよう後押しされたばかりなのでソワソワとしてしまう。

もしかして蛇子ちゃんが全てお膳立てをするために私にあんな話をしたのだろうか？ 心寧ちゃんも恋愛クソ強女としてできる女だが、蛇子ちゃんもこういう根回しの強さに関しては引けを取らないだけに何ともいえない。

でも多分、今回はそういうのじゃないだろう。

あまりにも急すぎるからだ。

今の姿は神村さんと殴り合ったせいでポニーテールのリボンが弾け飛んだり、髪留めが粉碎して私のくせ毛がボンバーしていて今、彼に好きだって伝えるのはハードルが高すぎる。

彼が五車学園の何処に居るのか分からない以上、ここまでの距離から到着する時間を逆算することはできないが……たぶん購買部に赴いて髪留めを買って整えている暇はないだろう。

思わず狼狽しながら、片目を瞑りながらグシャグシャになってしまつて整えられていない頭部に触れる。

「ふふふふふ。やっぱり日葵ちゃんは鹿之助ちゃんが好きなんだね〜? 蛇子は鹿之助ちゃんが日葵ちゃんに何を伝えようとしているのか知ってるけど、これは私の口からは言えないな〜♪」

「っ！っ！」

「結果は後日聞かせてね♪ お邪魔はできないから私はおいとまするよ〜！」

「~~~~ツ!!」

そわそわしてしまっている私を見透かすような小悪魔的な笑みを浮かべる蛇子ちゃん。彼女はそのまま私にもう一度手を振って階段を降りて行ってしまおう。

ま、まままままま！　おおおおお落ち着け私。もちつけ！わたし!!!!

まままままず身だしなみを整えよう！頬のガーゼ保護は外さない方が良いでしょう?! ヤマンバギヤルの髪型は何かで抑えないと……あっそうだ！頭に撒かれた包帯をうまく使って簡易的な髪留めに活用して……!!

Episode 117 『第2ラウンドの短期決戦』

「——ふふふふふふつ」

屋上に設置されている自動販売機のアクリル板の反射を使って身だしなみを整える。

よし。これで、多少なりとも自分の身なりをまともな状態にまでもってこれたはずだ。今であれば鹿之助くんに出会ってもそこまで恥ずかしい思いはしないだろう。

だから鹿之助くんが到着するまでの間に、探させちゃったお詫びとして自動販売機でジュースを1本買ってベンチで待つ。

「ふふふふふふふふ……」

「うわっ。……何1人で笑ってんだよ。気持ち悪い」  
「!？」

されど、運命とは残酷なものだな。

数分後。屋上に現れたのは鹿之助くん……ではなく。

神村さんだった。

彼女は期末試験にて度重なる私の関節攻撃は致命的な打撃となっていたようで、首から骨折時に用いる三角巾で片腕を吊り下げ、片足は松葉杖を用いての補助歩行する形でその姿を露わした。

また実技試験中、何度もへキツクによる踏みつけの追撃を与えていた顔面には大量の絆創膏が貼られている。

「……………」

「そんなドン引きした顔すんじゃないよ。俺をここまでボコボコにしたのはてめえだぞ」

『まさか、そこまでボロボロになるなんて』……なんていじめの主犯格みたいなきことを言うつもりはないが、私より彼女の方がよほど重傷に見える。

あの時は殺意はあったが、息の根を止めるつもりはなかった。つまり殺したかっただけで死んでほしくはなかったという事だ。

あくまでも鹿之助くんの “憧れ” を塗り替える殺意で試験に挑んだのだから。

「いやあ……ちよつとやりすぎたかなと……。……その節は、すみませんでした」

「ハッ。その辺は端から気にしちゃねえ。そもそも先公どもが止めなかつたってことは、試験中のこれぐらいの怪我は想定内の出来事だつてことだ」

「は、はあ……」

彼女の言葉に合点がいつていないかのような弱々しい返事をする。

「だけど彼女の言う “想定内の範囲” には私も思い当たる節はあった。消火器と遺書用のICレコーダーで私の敗退演出をしたときも五車学園の教師陣、紫先生は試験の一時中止をかけることはしなかつた。」

まあ、つまり。彼女のいう通りそういうことなのだろう。

改めて考えても五車学園やベーンな。

「ンだよ。煮え切らねえ返事だな。試験時の殺気に満ち溢れたためえは何処に行つちまつたんだ？」

彼女はそのまま私の方へと近づいてきて、ベンチへとドカツと音が鳴るほどの勢いで腰を下ろしては足組までもはじめ、背もたれに背中を預けてくる。

老後、脊椎圧迫骨折しそう。



「あー……私、オンオフが激しい女なので……。ちよつと、今はオフな気分なんです……」

「チツ。拍子抜け野郎が……」

そのまま苛立ちを露わにしながら懐からタバコを取り出して、私の隣でモクモクと煙を……。

「……………」

「……………」

沈黙。

ニコチンの副流煙が私を包む。

これから鹿之助くんに会うのに、服にタバコに臭いが付くのが嫌で立ち上がって彼女からそつと距離を取る。

前世ではタバコは嗜んでいたが、口臭や体臭がキツくなったことと、タバコ税がアホ程高くなったこと。タバコでついうっかり民家を19件燃やしたトラブルがあったので今世では遠慮したい嗜好品だ。タバコを吸いに行くと言いつつ単独行動を取ったり、ZIPPOライターをカチャカチャ開閉することは格好が決まると、ライターの存在は唐突な洞窟探検や地下道探索の際に役立つから好んでいたんだけど……。

「……………それで何か御用ですか？」

悠々とタバコで一服する彼女とは対照的に、猫背になりながら私は肅々とここへと来た理由を尋ねる。

次第に鹿之助くんがこの場に現れる予定なのだ。

タイミング的に鹿之助くんが私に告白……なんてことはないだろう。あの蛇子ちゃんが私から鹿之助くん側に告白する様に推奨してきたわけだし。

なににせよ。どんな話であろうとも鹿之助くんの “憧れ” で

ある神村 舞華が目の前に居たままでは彼にとって話し辛いことは違くない。

結局、彼の “憧れ” を塗り替えることもできなかつたし。彼の心はまだ正面の女に向いているに違くない。

「邪険にすんじゃねえよ。用がなけりやここに来ちやいけねえってのか?」

「そんなことはないですけど……」

「だったらいいだろ別に」

そのまま彼女はふんぞり返った姿勢でスパスパとタバコを吸い続ける。

ふーむ。このまま彼女がここでタバコを吸い続けるというのならば、やはり鹿之助くんの到着と同時に場所を変えたほうが良さげか。

「……………ところでよ」

「はい?」

「次学期の合同格闘技訓練。てめえは参加すんのか?」

「……………それって体育の授業でやる奴ですよね?」

「おうよ」

「あー……………どうでしょう? 私、体育の授業は中等部の学生と混じって体力作りしかしてないので……。そう言った格闘訓練の授業に出られるかどうかは紫先生の判断次第ですかね?」

「チツ」

私の弱々しい返事が気に喰わないのか、舌打ちをしながら左手で後頭部の髪をかきあげ始める。

今回は別に煽るつもりは一切ないのだが、流石に上の空の断言できないあいまいな返事が好みではないことは伝わってくる。

「……………なら今度でいい。もう一回、俺と勝負しやがれ」

「……は？」

「勝負だよ。勝負！てめえの都合がついて、そっちの怪我が治ったらでいい。……俺は今日の勝負には納得してねえからな！だいたいふうまめ。真剣勝負を最後の最後で邪魔しやがって。俺はあんな形での勝利は望んじやいねえ！……それともなんだ？ てめえはあんな負け方で満足つて言いたいのか？ 負け犬がよ！」

あ？

『負け犬』の言い方にカッチーンと金槌で石でも殴ったかのような、火打石をぶつけ合ったかのような音が脳内に響く。

満足して いる わ け ね え だ ろ 。

こちららテメエをボロボロに泣かすまで叩き潰して鹿之助くんの“憧れ”の座を塗り替える予定だったんだ。それがふうま君の作戦勝ちとはいえ、邪魔が入ったせいで作戦・計画全てが灰燼に帰したんだから。

だが、その申し出は願ってもない展開に違いない。だから、ここではスイッチが入りかけるが心押し殺して……。

「……そうですね。私もあの勝敗に納得してませんし、その申し出。是非ともこちらからもよろしくお願いしたいところです。次に手合わせする際には、リベンジマッチとさせてください。今度は邪魔者なしで思う存分、殺り合いますよう」

「ああ、てめえが持つてる忍法技すべてを完封して、次こそその悪魔みたいな笑みを浮かべられなくしてやるから覚悟しとけ」

神村さんはようやく満足できる質問を得られたようで、満足そうな顔でまたもやタバコを吸い始めた。

しかし私を見つめる目は標的を定めた狩人の目であり。私もまた彼女が指摘してきた薄ら笑いと、いつものジト目で彼女と視線を合わせる。

「それで……話は変わるんだけどよ……」  
「……………」

と、ここで彼女が急にしおらしい乙女っぽい……否。ポケモソの短パン小僧が仕草としてしそうな人差し指を人中にこすりつける行為をして、照れるかのような乙女の顔になる。

「てめえは『ふうま』と普段からつるんでるよな？」

「ん……。ええ、まあ……家の方向が同じなので通学するときとか、帰宅時に稲毛屋に寄り道する程度ですけど……」

「！ その程度でも構わねえ。……今度さ。ふうまの野郎に、『稲毛屋のアイス』と『美味しい茶菓子』どっちが好みか聞いてくれねえかな……………」

「……………」

稲毛屋のアイスと聞いた瞬間、あの 稲毛屋の怪しいソフトクリームが脳裏に過ぎったがそんなことよりも今は神村の表情に釘付けになる。

おい。ま、まさか……。嘘だろ……………」

思わず眉間にシワが寄り、ウサミちゃんがかまくくんを疑うような表情になる。神村はそっぽを向いていて私の表情の変化に気が付いていない様だ。

あゝ、間違いない。これは恋焦がれた乙女の顔だよコンチキショウ。

「あるいは知ってたりとかよ……。知ってたら教えて欲しいっつーか……………」

さらにもにより始める神村 舞華。

「……………」

ふうま小太郎。

やっぱアイツなろう系小説主人公だよ。

磯咲さんやドドン太郎には冗談っぽく説明したけど、まさか現実でこんなことが起きるなんてこっちは想定すらしてないっつーの。現実には小説より奇なりとは言うが、構築されて行く？ふうまファンクラブのメンバーを考慮してみればこれは奇妙なことになっている。

もしかすると、もしかしなくても……ふうま君ってゲームで言うところの主人公か何か？

でもこの世界はアダルトゲーム：対魔忍の世界線だから……。ふうま君が主人公だとすれば……。卒役の長とか？ え？つまり悪役チンポマン？ 対魔忍をアヘアへさせる凶悪魔羅持ち？

……まさかオークの血筋が混じっているとかねえよな？ あるいはサキュバスやインキュバスの遺伝子を持っているとか？

前者なら殺さなきゃいけないし、後者なら自分の貞操の死守を心構えなければならぬ。

しかし、ふうま君……どういうわけか関わったヒロインを片っ端から陥落させているような気がする。

ここまで多方面の人間から好き好きって好かれることはほぼない話だ。

学内でのふうま君の評価は、一部の層（ドドン太郎の取り巻き）とかでは「目抜け」ってバカにされているし……。磯咲さんのような例外は存在するが、授業をサボっていることを考慮れば真面目な生徒からの心象はよろしくない可能性が高い。

私が五車学園に来てからもう2カ月。既にふうま君のことが好きな女子は、心寧ちゃん、磯咲さん、神村さん。そして幼馴染のまえさき市で3時間ウンコしていたほうの蛇子ちゃん。

きっと私が認識していないだけで、もっと存在しているのかもしれない。

彼はラノベの主人公か？ と疑わしくなるほどに彼はモテモテだ。好みの問題もあるかもしれないが、鹿之助くんとふうまくん。2人

が横に並んで全国100人にアンケート調査をしたら、67人ぐらいは鹿之助くんが選ばれる自信があるぞ。

フアンザの検索ランキングでは「男の娘」がランクインしてるぐら  
いなんだからな???

ちよい悪青年風情が、男の娘に敵うと思うなよ  
?????

おまけに「ふうま君が好きなんじゃないか?」疑惑人物はまだいるぞ。

見方を変えればドドン太郎ごと二車 骸佐もふうま君に熱中して  
いるし、いや。……。

……あれは好きの裏返し行動じゃないのか……!?

『好きだからこそ意地悪しちゃう』的な!? お家がどうのこうの  
言っているのはあくまでも建前であって、男同士だし……そんなきつ  
かけがないとふうま君と関われないとか?!

ありそう。ありえるな。

鹿之助くんが話していた家来とかそういう武家の要素で捉えた場  
合、男色家だという要素が加わってもおかしいことはない。

『ふうま君』とは………わ、私にとつては……。たまにジロジロと  
視姦してくる程度の通学を共にする小悪党じみた顔つきの友人でし  
かない。

てか、私としてはあの人の事を見透かすような……『私釘貫 神葬という存在』  
探りを入れて考察しているような目付きが、前提の話として好きでは  
ない。

むしろ、距離を置きたくなる。

……で、でも。だ、大丈夫だよな? 知らず知らずのうちに私もふ  
うま君の謎の魅力に惹かれて恋心とか抱いてないよな?

鹿之助くんが大好きだよな  
??????

変わらないよな……  
?????

よし。一回、心を落ち着けて頭に思い浮かんだ人物の名前を口にしてみよう。

「……………鹿之助くんと陽葵ちゃん」

よ、お、ーしっ！

大丈夫！ 私はふうま君なんか眼中にない。

今日も元気に、鹿之助くん……一筋じやなかったけど鹿之助くんは好きだ!!!

陽葵ちゃんはね。女の子だからね。

あまりにも存在感が強すぎてふと頭の中に浮かんできただけであつて……。

インパクトがね。強すぎるんだ。彼女は。

今も思い浮かんだ顔の中に、困惑する鹿之助君と徐々に拡大しながらチーク姉さんのバーン顔をした陽葵ちゃんが脳裏に現れたからね。

人の脳内の中でも主張がナンバーワンだったからね。

最終的にバーン顔顔をの晒した陽葵ちゃんが私の画面いっぱいに迫ってきたからね。うん。

と、友達としては好きだよ？ 大好き。

でも恋愛対象ではないかな。

言い寄って来てくれるのは嬉しいけど。今の状態はきつと洋館事件でのシヨツク狂気状態の反応によるもので、言い寄ってきているだけだと思う。正気に戻ったら陽葵ちゃんも Normal Love に戻るよね。寂しくなりそうだけど。

うん？ 待てよ？

ドドン太郎がふうま君のことが好きだと仮定した場合。これは鹿之助くんもふうま君は好きになつちゃう可能性があるんじゃない？

でも今は神村さんに “憧れ” を抱いているわけだし……。流石にそこまでは……？

「……………」

神村はいまだに私が話半分で相槌を打ちながら聴いていることに気づかず、ふうま君について延々と語り続けている。

おや？

……………なんだか、鹿之助くんが好きなのは神村さんなのに、神村さんはふうま君ばかり話題に持ち上げている今の様子に腹が立ってきたぞ？

「俺さ、あいつのこと今回の期末試験で——」

「神村さん？」

「あん？」

ゴツ！ バキイツ！

だから彼女の正面に立ちほだかり。

私の不意打ち攻撃によるへこぶしで、神村の右顎を左拳でスパァーキイング!!!

「ガハッ!？」

チツ！

激しくぶつ飛ばしたが、意識消失してねえ！

これは顎への一撃が浅かったツ!!!

だが今度は鹿之助くんが説明してくれた空気の膜とやらでの防護壁は無しだ。

歯で唇の裏側を切ったのか、それとも私の実技試験中で創傷した傷口が再び開いたのか。そんなのは私にとつてどっちでもいいが、神村の口から血液が飛び散り、ついでにタバコを吹き飛ばす。

五車学園を記念すべきタバコでの不慮な事故（大炎上）20回目として飾るわけにもいかないの、タバコはそのまま踏み消す。



「てめ……………まさか……………てめ、てめえも……………」

「神村さん。私はふうま君についてあまり存じ上げませんし、彼のことが好きでも嫌いというわけでもございません。ですが、あなたがふうま君に対するノロケ話を続けるというのならば（これから到着する鹿之助くんを傷つけない為にも）私はあなたを黙らせる義務があります」

なるべく憤怒の感情を押し殺しながら、鹿之助くんの感情を弄び……あまつさえ、期末試験で同組になった程度の関係性でふうまの野郎にうつつを抜かしやがるこのクソ売女に優しくも丁寧な口調、指関節を連続でクラッキングしながらほんのり笑顔を浮かべながら近づく。

「ハアア??? やっぱてめえもふうまのことを——」

「うるせー！だからふうまのことは眼中にねえつつつてんだろ!!」

黙って殴らせるやア！ 私はいつの身長と顔と性格は私の守備範囲外なんじゃボケエ!!! だいたい、てめえを好いてる人の気持ちも知らねえでさあ!!! オラア！立てよ！次は松葉杖じゃなくて車椅子生活を余儀なくさせてやるからよおツ!!! 都合がいい時は今だよクソツタレ！第2ラウンドの短期決戦じゃゴルア!!!」

「アア!? 上等じゃねえか！ そっちがその気ならやってやるよ!!!」

こうして期末試験後の第2ラウンドは火蓋が切って落とされたのだった。

オイオイオイ、殺すわコイツ。

楽しい夏休みをぶっ壊してやる。

## Episode 118 『出席停止』

さて期末試験も終わり……。

日時は、神村と殴り合った翌日。

テスト用紙の返却と成績通知書を貰って、待ちに待った学生の限られた夏休みと、来てほしくなかった夏休みがやってくる。

テスト用紙返却しかないこの期間は、ほぼ夏休みに片足を突っ込んでいると言っても過言ではなく……。

この短い1週間未満の期間中に様々な友達と夏休みの日程を立てたり、テスト結果の点数を競い合ったり、五車学園の場合は実技試験もあったのでそこで拳を交わしたライバルと挨拶を交わしたりする青春等が本来は謳歌できるのだろう。

しかし私と言えば……

「ゲエーッホオ?!ゴッホゴホゴホッ!!!ガハッゲヘッゲヘエッ?!  
ゴポッ……!」

自宅で一人虚しく……まさかの季節外れの新型インフルエンザに罹患し、出席停止の自宅待機を命じられてベッドの中で悶え苦しんでいるのだった。

ブバーッ!

「ゴホゴホゴホッ!ガハッ!!!ゲホゲホゲホッ!?!?!?」

実技試験が終わったあたりから『なんか、身体がダル重だなー』と  
か思っていたのだが、まさかインフルエンザとは。

そういえば実技試験前に罹った生徒が居るってそんな情報があったような……？

よりにもよって真夏に新型インフルエンザに罹患したこともそうだが、なによりも一番驚いているのは今年のインフルエンザ私が70年前に罹患したインフルエンザよりも症状がクソ重い……！

これって身体が16歳の少女に逆戻りしているからか？

それとも時代の流れと進化の過程で、ウイルスが強化されて行ったんじゃないかと疑ってしまうほどに症状が重すぎて……。

脱水と発熱、あと咳に殺されそうになっている。

おまけに前日神村と殴り合ったことが……最悪の状況。閉じた傷が咳と共に開放。血で。血でおぼれ……

「(づ)ぼ(づ)ぼ(づ)ぼ……カヒュー……！ カヒユツ……ツ！ ゴホゴホゴホツ！」

ダバダバダバー……

まさに今の絵面は、明治時代のドラマでしか見たことのないような状況。

結核で苦しむ患者が、大量の血反吐を吐き散らすシーンで用いられる入れ物である桶に……私はインフルエンザで使うという。

てか、いまA・D・2078年やぞ!!! まさか季節外れのインフルエンザでこんなことになるなんて……。

しかし、血反吐を吐き散らしているのは昨日神村さんと殴り合った時に出来た傷口が開いてできたものだから……。インフルエンザウイルスに関していえば、関係ないと言えば関係なかったりする。

いわばこれは、合併症みたいなもの。

でもこのインフルエンザ何かがおかしい。解熱剤を飲んでいるのに熱が39.8℃ってどういうこと!?

抗インフルエンザ薬やら、咳止めとか飲んでるのに一向に病状が安定化の目途が立っていないんだが?!

マスクを変えても変えてもすぐに裏面が血まみれになっちゃう。

一時期マスクを外して諦めたことがあるけど、天井のアレどうしようか……？

パソコンのペイントツールで霧吹きをかけたように、天井の壁紙が咳とくしゃみで吹き飛んだ血液で染まっている。

いや、マジで……。米津先生、私の人生を不運<sup>アンラッキー</sup>で埋め尽くさないで。〈幸運〉で埋め尽くして……。うえるかむ。ハッピーライフ。はっぴーかむかむ。どんと、私の人生の最終章。

死神が……！ 死神が見える！ 黒いスーツに赤いバラの花束を持った宮本さんの格好をした死神！ 私が一体何をしたって言うんだ！ 私は最近なにもわるいことをした覚えはないぞ!? チキシヨウ！

こんな日には……………。

株価を見て、動画投稿サイトに『レトロ曲』歌ってみた動画をアップロードして、社会人になった時に有用な資格一覧表を確認して。マルカリで出品した貴金属の買取価格を調査した後に、映画を見ながら通販プライムやブラックマーケットで対まえさき市でえっちなお店を開いて人間風情に泣かされた方の蛇子ちゃんとの邂逅に向けた物品の準備を買い漁るに限る。

「ゴホツゴホゴホツ……クソガア……ゲフツ」

熱中症対策で披露した部位に片っ端から熱冷却シートを貼り付けながら、鼻水をじゆるじゆるさせながら作業に取り掛かる。

こういう時に一番気をつけなきゃいけないことは、発熱の意識の混濁によって普段では購入しないような余計なものを売り買いしてしまわないようにすること。とにかく、こう、気分がクラクラしている時に限って株で失敗したり、余計な洋服をカートにぶち込んでしまったりする。

「あつ………………。このトップスかわいい………………。これも………………。これも………………。」

「ヒャア！ 今こそ株の空売り時だぜええええゲエエエエエエ  
!?!?!?」  
ゴバツ！ ゲボツ！ ゴホツ！ゴホツ！」

「神様、仏様、邪神様…………。頼むから早くインフルエンザ治って…………3  
日目の山場を乗り越えて4日目から、症状が治まったワンダフルデイズを謳わせて」

今日はそんな感じの一日目。

溺れる者は藁をもつかむとは言うが、まさにその通り。

本当の今日の予定は、ハンヴィーが止められているガレージに降りて行って、いろいろまえさき市で購入した工具の改造とか、消火器を小型化した武器化したりとか…………。いろいろやりたいことはあるのだけど、それだけはこの体調の悪いときだけはやっちゃダメな現場猫も真っ青な死亡猫事件に直結しかねないから手は出さない。

ああ…………つら………………。

18章 『夏休み前の幕間』  
Episode 119 『今日もわちやわちや』

インフルエンザ。

完治とまではいかないけど、無事に4、5日が経過した辺りで病状が落ち着きました。

あと2日後。五車学園の方も7月20日、つまり私の自宅待機期間終了と共に夏休みへと突入することになるんですけど……。

「ひまりちやあああああん！ 5日間も会えなくて、とつても！寂しかったよおおおお!!!」

「うるさっ……や、やめろお！ 抱き着いてくるあああああつ！」  
「陽葵ちゃん。日葵ちゃんは病み上がりなのですから、そんなに激しい抱擁をするのは控えておいた方が……」

「そうですね！まだ病み上がり、つてかまだ自宅待機期間だから保菌者キャリアとして感染力が残っているって……ああああ!!! 私のマスクを奪うな！ ちゅーはだめ！ ちゅーはだめツ!!! 感染うつるぞ！インフルエンザア!!!」

「ここが日葵ん家と部屋なのかあ……。な、なあ。これってDJって人が使う機材だろ？ どうしてこんなものが部屋に……でも、なんつーか……予想通りって部屋で安心したよ」

「鹿之助くん?! ねえ、それどういう意味!?!」

「鹿之助ちゃんが言いたいの、大人びたって意味だと思うな！ この椅子フカフカ〜！ クルクル回る〜！」

「蛇子ちゃん！ 遊んでないで助け……」

「青空さんの本棚。TRPGと音楽と経済学、あとは科学系の書物ばっかりだな……この本、読ませてもらってもいいか?」

「別にいいですよ……つてもう勝手に本棚から取り出してるう?!  
ふ、ふうまくん！ 本に飛沫ウイルスがまだ付着しているかもだか

ら、触ったあとは手をアルコール消毒して!? ね?!」

既に私の家の中はダンスフロアってほどに濃密な人員が訪問していた。

ソーシャル・ディスタンスなんてあったもんじゃない。

密です。密。M I ・ T H U 。三密です。密閉。密集。密接。密。

密。密。密。みつ。M e t o o .

密のゲシュタルト崩壊。

ゆりこです。

あ、いや。冷房をガンガン利かせながら窓を全開に開放しているから、二密かな？

で。

いつものように陽葵ちゃんがマスクもつけずに、ギラギラとした真夏の太陽のような笑顔で私に飛びつき。

心寧ちゃんが青空日葵の母親から出された500mlペットボトルのオレンジジュースの封を開けクピクピを飲んでいる。

鹿之助くんはきよろきよろとあたりを見回しながら壁に立てかけられたギターやらDJミキサーやらカーディオイド式正面の音を拾ってくれるマイクの収録マイクをまじまじとながめていた。

蛇子ちゃんは私の3面自作デスクトップパソコンの前でゲーミングチェアに座りくるくると回って遊んでいる。

ふうま君は私が生前にためになった80年前の経済学の書物を本棚から取り出し本を読み始めていた。

オイオイオイ、まだこちとらインフルエンザの自宅待機期間中だつていうのに。

お見舞いに来るってレベルの立ち振る舞いじゃないぞ！ お前等ア！

「ねえ!? みんな?! お見舞いに来てくれるのは凄く嬉しいけど、私

が罹患した病原体は『インフルエンザ』なんだ!? ただ風邪じゃないんだ!? まだ自宅療養・隔離期間中なんだ?!?!! ねえ、知ってるうつ!? インフルエンザって呼吸器の疾患で死ぬ!病気なんだよ!」

陽葵ちゃんに組みつかれているため、発言の要所要所が力強い発言になってしまいが周囲を見渡しても誰も気にした様子は一切見られない。各々がそれぞれ好きなことをしながら私の部屋に滞在を続けている。

この景色デジャウがあるぞ。2019年にコロナウイルスが蔓延したときに、感染者の1人が『このジュース、味がしない』と言って回し飲みをしたところ全員感染したあの現場に似ているぞ。

間違 いたく クラスタ案件 だぞ!

お前等全員、夏休み自宅待機コースだからな! いいのか!? いいんだな?!

今年の季節外れのインフルエンザウイルスはやばいからな!!! 感染したら覚悟しろよ!!!

「だつてえ〜。ここで日葵ちゃんに会いに来なかつたら、夏休みに一緒に遊ぶ約束ができないじゃん……」

「メールとか、電話とか他の方法があつたでしょ!? 陽葵ちゃん!」

「蛇子は最初その方法で連絡を取ろうつて言っただけどね……」

「日葵ちゃんって意外と一部の層から人気があるので、予定が先に埋まっちゃう前に直接会いに行つて約束をしようつて……」

「ああ、なるほど……」

ああ。蛇子ちゃんと心寧ちゃんの言葉に納得。

これは多分、陽葵ちゃんがゴリゴリ・ゴリ押ししまくつて私の家に凸してきた流れだな。たぶん。

おそらく陽葵ちゃんと心寧ちゃんの他にも、ふうま君、まえさき市で3時間ウンコしていた蛇子ちゃん、鹿之助くんがセットで居るとい



う事は普段から登下校を共にしている3人に連れて来てもらったとかそのあたりだろう。

どんなに陽葵ちゃんが土地勘に長けていたとしても、流石に私の家へ1度しか訪れたことがないのに間違わずに遊びに来られるとは思わないし……。

てか、『一部の層から人気』ってどこの層だよ。こんなロクな噂でんこ盛りの悪名高い転校生が、夏休み中に目前の親しい友人達以外から誘われるわけがないだろ?!!

「……ってそんな理由で納得できるかあー!!」

「でもーでもー！直接会いに来たワケは、それだけじゃないよ!」

「陽葵ちゃんに関しては、何も言わなくても行動で示して貰ってるから言わなくていいよ?!」

「違うもん!」 日葵ウムの<sup>ヒマリウム</sup>光合成も一つの目的だけど、もっと別に目的はあるもん!」

『日葵ウムの光合成も一つの目的』!? いやらしい意味にしか聞こえないから、大っぴらにそういうことを暴露するのは止めようか!? 陽葵ちゃん!?

陽葵ちゃんのその発言はマッドな科学者が『貴様のフォトリック・レゾナンス・チャンネルに俺のクアンタム・ハーモナイザーを入れるぞ!』と叫んでいるのと同じニオイがするからやめようか!!!?

なんとか接触感染に至らない部分を押しながら、陽葵ちゃんを引き? がしにかかるがぐいぐいと陽葵ちゃんは急接近してくる。

日常的に鍛えているというのにも拘わらず私の方が完全に力負けしている……。

紫先生のダンバーベルで筋トレしているのにナンデッ!?

はなれろよお!

感染するぞ!!!?

「その目！ 信じてないなー?!」

「違いますうー!!!  
この目の前の超濃厚接触者  
日ノ出 陽葵ちゃんを引き? がすのに必死なだけですうー!!!」

「でも本当だから！ 上原くん!?」

「あ、う、おおう」

「陽葵ちゃん?! 五車学園では『人の話は最後まで聞きましよう』って習わなかったの!?!」

と、ここで陽葵ちゃんは私から一転。

アニメのツツコミみたいにビシツ!と人差し指を鹿之助くんへと向ける。

鹿之助くんは、私のギターやら隠しそびれたポスターに見とれたかのようなまじまじとした視線を向けていたもの。陽葵ちゃんからの突発的な指名に、組んず解ほくれつしている私達を恥じらうような視線を向けつつも通学鞆の中から紙束を取り出して、陽葵ちゃんにへ組みつきくされて動けない私の元まで持ってきてくれようとする。

ウイヒヒヒヒ!

私の元まで歩み寄ってくれて、小柄な体でちよこんと乙女のようにカーペット上に正座しようとする彼からしか得られない栄養素を補給! 補給! 補給ツ! 補給ツ!

これは鹿之ニユウムだー! ギヒヒヒヒヒツ!

……ジャネエーツ!!!!  
何度言ったら分かるんだーア! ポン コツ学生どもがアツー!!!

感染するから、それ以上、私に近づくなアーツてエーツ!!!

「えっと……これさ。夏休みの宿題な。あと期末試験の筆記テスト結果の答案用紙」

「ああ。ありがとうございま……鹿之助くんそれ以上、私に近づい

ちや駄目。ソーシャル・デイスタンス。ソーシャル・デイスタンス！  
6フィート！ 6フィート!!!離れて！」

中国武術『発勁』のような手の動きを鹿之助に向け近寄って来ようとするのを阻止する。

「しようがないにやあ……………」

「陽葵ちゃんはその場で座つてろオ！」

「きやんっ！」

『しようがないなあ…………』とでも言いながらも陽葵ちゃんが鹿之助の元まで近寄って行つて答案用紙集を代わりにとつて来ようと動く。しかし即座に血眼になりながら彼女のスカートを捻り掴み振り上げながら制止する。

なんとしてもこの超濃厚接触者日ノ出 陽葵ちゃんを鹿之助くんに接触させるわけにはいかない！

ゆえに6フィート(1.8?)ほど距離を空けて、壁に立てかけてあるマジックハンドを用いる形で鹿之助くんから答案用紙を受け取り点数を確認した。

……………うん。

今回も無事にある程度いい成績だ。そして夏休みの宿題も一般的な高校生に合わせた範疇の課題ばかりで夏休みの最後の日あたりにまとめて溶ける範疇なので問題はない。

「んもう！ 日葵ちゃんったら乱暴なんだから♥ でも私はそんな攻めの日葵ちゃんも好「はいはい」

「あ！ でもでも、お見舞いや夏休みの日程や日葵ウムの光合成以外にも用事はあったでしょー!?!」

「……………みたいですけどお……………。なら猶更さあ？ ポストに投函でもよかったのに……………」

げんなりしている私に、陽葵ちゃんは赤ん坊が近づいてくるようにハイハイで歩み寄って来ては容赦なく人の点数を覗き見してきた。

しかし見られて困る点数でもないのです、ここは無抵抗のまま一緒に点数を眺める。

「あの……ところで日葵ちゃん。そろそろ窓を閉めてもよろしいでしょうか？ 冷房を最低気温で利かせてくれているのに、窓を開けているせいで熱気が入って来てしまつて空調の意味を為していないので……」

「心寧ちゃん、それは諦めて。せっかく皆さんの貴重な夏休みを私のインフルエンザで潰すわけには行かないですから」

「……」 ショボン

とここで心寧ちゃんが、胸元の服をパタパタと動かして胸チラをしながら、可愛らしく手で扇いで鎖骨と谷間を見せびらかしているが即座に却下する。

最初は扇風機あたりでも回そうかと思つたのだが、どの角度に扇風機を設置してもインフルエンザウイルスが5人のいずれかに直撃するため断念したのだ。

でもあざとい。あざといわ。心寧ちゃん。すべて分かつてやつてるんでしょ。この恋愛クソ強女！ これは私には持ち合わせていない強かき。つよい。

蛇子ちゃん。人のゲーミングチェアでグルグル回っているだけでは駄目なんです……ッ!?

「わはー！ ふうまちゃん！」

違う……ッ！ これはただグルグル回って遊んでいるだけじゃないッ！

これは既に仕掛けているッ！ 恋愛クソ強女が扇情的な心理戦を幼馴染へと仕掛ける前に、先手を打ってふうま君の視線を釘付けにし

ようと動いていたのだ！ それに恋愛クソ強女は気づいた！

今、蛇子ちゃんの胸は回転が停止するたびにばるんばるん跳ねている！ おい！ やめろ！ その攻撃は恋愛クソ強女に対してフィジカルの強さで仕掛けているのかもしれないが……。

お胸がマリアナ海溝の私にも効く……ッ！

ところで。これ鹿之助くんが巨乳好きだったら、私。詰みじゃね？  
てかそもその話、五車学園にはフィジカルおっぱいしかいなくね？  
？ クラスメイト達も最低ラインがCカップ。平均基準がDとE  
カップ。転校してから2カ月あまり。それ以下のバストサイズを私は見たことないんだけど？

日本人の平均のバストサイズBとCカップだぞ???

どうなってんの？ このニュータウン????

フィジカルおっぱい が ニュータウンなの????? おかしくね

???

顔面格差も程々に存在するが、意気揚々とその胸囲格差でマウントを取らないで欲しいのだが?????

「……」チラッ

さて、そんな混沌とした室内でふうま君の反応はというと……。

「青空さん。この小さなCD—Rはどうやって聞けばいいんだ？ C  
Dを取り出すにも開くような構造が見当たらないんだが……」

彼は彼女達の胸チラそつちのので、今度は私が〈機械修理〉と〈電気修理〉で組み立てたオリジナルの音楽コンポに興味を持っているよ  
うで、自作のMDディスク片手に四苦八苦していた。

ふうま ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ

ゝ！ゝ！ゝ！ゝ？

この昼行燈!!

気持ちはわかるよ!?

男の子だもんね！ そっちの機械の方が気になるよね！ 男の子だもんね???!

わからないこともないさ?!

でもさ！ でもさ！ それは今じゃないんだよね！

暗に胸の大きさバトルしている乙女の戦いに私を巻き込まないで貰っていいかな!?

「……………。それはそのまま使うものです。挿入口に金属側が右側に来るように、VHSをビデオデッキに差し込むようにコンポの中に入れてください」

「ふい・えち・えすを、びでおでつきに差し込む…………?」

「あつ…………。…………すみません。今の説明は忘れて。MDコンポの使い方…………今のダウンロード世代の子にはなんて説明すればいいかな…………」

何やら恋愛クソ強女とフィジカルおっぱいの視線が私へと向いているような気がするが、気にしてはいけない。私はたぶん御存じの通り、ふうま君に微塵も興味はないのだ。両目を瞑って後頭部を掻きながら、ジエネレーションギャップによる葛藤を押し殺してうまい説明方法を考える。

「青空さん、V・H・Sってなんだ?」

「えっと、お気になさらず。そのフロッピー……カセットテ……ケースをUSB端子に差し込むように機械の穴に全部差し込んで下さい。そうです。そうそう。あとは壁面に描かれたボタンを押して……スマホの再生機能とだいたい同じです。あつ、ツマミで音量調節できるのと、再生する前に音量を確認してください。たぶん、前回のままなら110?だと思うので45?ぐらいにすれば個人で楽しむ分の音量になると思います」

「……………」

怪訝な顔でこちらを見つめてから、おぼつかない手の動きでコンポに触れるふうま君。

わかるよ。VHSなんて古代化石のツールを喩えに出されて説明をされても分かんないよね。

今の子はフロッピーディスクの金属部をカシヤカシヤ触ったりしないもんね。カセットテープにA面B面があつて入れ替えたりも、伸びたテープを鉛筆で巻き直したりしないもんね。

何なら河川敷に不法投棄されたエロ本の存在も、概念すら知ら無さそう。

でも対魔忍世界だし河川敷には『不法投棄された肉便器が転がっている』なんてスケールの違いのドエロが落ちているかもしれないが。

今のは私が悪かった。焦り過ぎて説明方法が時代錯誤すぎだ。

陽葵ちゃん引き剥がしたら、ちよつと落ち着くね。ごめん。

Episode 120 『五車学園勢との夏休みの日程調整』

「はい！ 日葵ちゃん！」

バサツ

「？」

ふうま君にMDコンポの使い方を遠方から説明していると、今度は陽葵ちゃんが私の正面に紙束をドサリと置く。

視線を移してみれば、そこには壁に掛けてあったはずの7月のカレンダーが私の目の前に……。

「夏休みの日程調整しよっ！」

曇りのない彼女の笑顔のはずなのだが、どこか鈍く目の奥が輝いているように見える。まるでこれは休みの日は所狭しと自分の予定を振り回し込もうとしているかのようなそんな目だ。

だがな陽葵ちゃん。私もちゃんと自分の日程を確保しているからな。

そんな思い通りに日程が組めると思うなよ。

「……はいはい。まず陽葵ちゃんは手を出して」

「はい！」

「はい。手指消毒。私の飛沫菌が付着しているからちゃんと消毒してね」プシュプシュ

ひとまず鹿之助くんから成績表を受け取るときに使用したマジツ



クハンドを用いて、少し離れた位置に設置してある速乾性アルコールジェルを手練り寄せる。それから雨乞いの儀式のように両掌を差し出す彼女の掌に2回プッシュして手指消毒させる。

私の手の動きに合わせて、オウム返しを行う彼女に少し和む。

「えーっと、それで……7月は……っと」

「あつ。まずは私からいいですか？」

自分の部屋にあったカレンダーではあるが再度日程を確認していると、冷房の真下で涼みながらふうま君へ胸チラアピールしていた恋愛クソ強女が拳手をし、カレンダーに自身の頭が覆い被さるように四つん這いになって真っ先に口を開く。

「はい、大丈夫ですよ」

「これは私がどうのって話ではないのですが、日葵ちゃんにコロナ先輩となお先輩がお話したいことがあるので、この日からこの日まで日葵ちゃんの日程が開いている日があれば教えて欲しいとおっしゃってました」

心寧ちゃんは自身のスマホを片手に、五車学園が夏休みに突入した日である2078年7月20日(水)、21日(木)、22日(金)、25日(月)、26日(火)を順番に指さして伝えてくれる。私は即座に心寧ちゃんにもアルコールジェルを差出して消毒させながら首を傾げる。

おそらく洋館事件後のお見舞いで依頼した魔族語で書かれた本の言語の特定が済んだのか……。

あるいは特定が済んでなくとも、おおよそはその案件だと思う。

「それなら……最短だと21日ですね」

「21日ですね。わかりました2人にメールで伝えておきます」

「お願いします。あと他の細かいこと……時間とか待ち合わせ場所と

かって聞いて貰えたりしますか?」

「ええ、今からなお先輩にそれも確認しますね。わかったら教えます」

わあ……。心寧ちゃんもすごい……。

流石、現代っ子……。

私と会話しながらも画面を見ずに、まえさき市で3時間ウンコしていたフィジカルおっぱいのようにスマホをフリック操作だけで文字を打ってらあ……。

「なあなあ。俺もそっちに行つていいか?」

と、ここで私から6フィート離れた場所でちよこんと膝立ちしている鹿之助くんが混ぜて欲しそうな顔をしながら、人中を伸ばしながら軽く背伸びをしてカレンダーを覗き込もうとしている姿が目映る。

「ダメです」

が、これを一蹴。

「なんで!?!」

同時に当然の反応が返ってきた。

ごめんね。でも、これは別に意地悪しているわけじゃないのは分かってほしいところではある。

私としては鹿之ニユウムを補充したいところなのだが……。

「先ほどから申し上げている通り、本来であれば私は自宅待機期間中なので。感染うつしたら大変ですよ」

「ええ!?! でも日ノ出さんや速水さんは傍まで近寄ってるじゃんか?!」

日ノ出さんに至っては日葵にめっちゃ身体をぐりぐり押し付けてるじゃんか!!!?」

「それは、心寧ちゃんの場合、窓の傍なので感染リスクがそこまで高くないからであるのと、陽葵ちゃんはもう何を言っても私のいう事を聞かないので諦めているだけです」

「……………♪」

今日の陽葵ちゃんに対して諦観モード私へ、ドヤ顔を浮かべた彼女は腕に組みついてきてはフィジカルおっぱい蛇子ちゃんよりも爆乳な胸を私に押し当ててゼロ距離まで身体を密着させてくる。

おい、陽葵ちゃん？ お前、そんなにまでして楽しい夏休みを季節外れのインフルエンザで台無しにしたいそうだな？

あれだぞ？ 私はちゃんと警告して感染対策も万全にしているのに押しかけて来たのは陽葵ちゃんだし、適切な距離を取ろうとしてもグイグイ近寄ってきているのは陽葵ちゃんだから、感染しても自己責任だし私はお見舞いには行かないからな???

葬儀には出てやる。

「…………」 ショボン

「んー。日葵ちゃんが鹿之助ちゃんのことを心配で近づけたくないのはわかるし、病気に罹ってほしくないって思っていることもわかるけど……。蛇子はその対応じゃ鹿之助ちゃんがあまりにも可哀想だと思うけどなー？」

ここでこの不公平な対応に蛇子ちゃんから鹿之助くんへフオロが入る。

改めて鹿之助くんに視線を移すが……おっっ♥ おっほおっ♥

ドスケベな顔をしてしょんぼりショゲている。あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝっ！ 本当は傍まで近寄せたいく!!!

鹿之助くんも陽葵ちゃんみたいに隣に置いて夏休みの日程を組みたいくくく!!!

されども今年のリクエスト外れ性インフルエンザを舐めてはいけない。

これは今日の情を取るか明日を取るかの選択なのだ。5日間のう

ち約4日間、死にかけて私が言うのだ。これほどに説得力のある発言はないはずなのだが……。

「日葵ちゃん。日葵ちゃんはマスクを着けているけど、鹿之助ちゃんもマスクをつける形ならどうかな？ 蛇子、学校の授業でお互いにマスクをしていれらうつりにくいって習ったことがあるけど」

「……」 チラッ

あゝあゝ!!! ずるいゝゝゝゝ! 鹿之助くんのその目配せは卑怯だわゝゝゝ!

「……………まあ、それならいいです」  
「……………」

「ただし。このカレンダーに触れたら必ず手指消毒をすること。私のくしゃみ射線上に立ち入らないこと。私が口から大量流血しても素手でそれに触れないこと。むやみに自分のマスクの口元を弄らないこと。家に帰ったら徹底的に手洗いうがいをすること。いいですね？」

「え? 大量流血?」

「え? 大量流血?」

「いいですね?」

「お、おう!」

「え? 大量流血?」

本当はマスクを着用した状態でも1?は距離を離れたほうがいいのだろうか、私の細かい指示にだんだん蛇子ちゃんの顔が物申したそうな……:ポプテピピックでポプ子が顎にシワを寄せるような顔になりつつあるため、適度なところで中断する。

鹿之助くんは蛇子ちゃんが持参していた未使用のマスクを受け取ると私の隣、陽葵ちゃんの反対側へとやってきた。

ああああああああああ!

鹿之助くん家の匂いがするう！　これはシカアニマル臭ウ！　5  
3位ワツカみたいな顔になるう！

「それでさ。7月の月末から8月の1週目の辺りって日程はどうなってるんだ？　今度、俺とふうまと蛇子で海へ遊びに行く予定があるんだけど……よかつたら日葵も一緒にどうかなって思ってたさ」

「大丈夫。予定なんか無かつたことにはできません」

「え？　でも日葵ちゃんこの日に既に投資・株取引って——モガッ?!」  
「本当か?!　やったぜ！」

陽葵ちゃんが余計な事を口走る前に、左手の平を陽葵ちゃんの口元にパーンと塞ぐようにして強制的に黙らせる。

はい。お覚悟。接触感染。

株取引も重要だが、そんなものはこの夏の日の思い出に比べたら些細なものにしか過ぎないのだ。

陽葵ちゃんの腕を振りほどき、彼女の口を塞ぎつつ即座にマジックハンドで机上から筆記用具セットを取り出し、元の予定を黒く塗りつぶして海の日程を組み込む。

まあ、御盆の前だが準備の過程に必要なものもこの海で採取できそうだし、おまけに鹿之助くん達と海に行けるといいうならば断わる理由などあるはずもないのだ。

投資・株取引、お金なんてね……——

社会人になってから地道に稼いだって間に合うんだよ！

ひと夏の思い出に比べたら安いものさ!!!

「モガー！モガガー！」

「日葵ちゃん。こっちの8月のこの日程はどうでしょうか？　鹿子ちゃんを連れて川遊びとか考えているのですが……」

「川遊び！　いいですね！　大丈夫ですよ！」

こうして私のDIYと株取引と筋トレと謳ってみた収録だらけの夏休み日程は、陽葵ちゃんのくぐもった叫び声と共に日程が定まっていくなかった。

……  
……  
……

「うーん。今年の夏休みはかなり充実した1カ月半になりそうですね」

カレンダーに指を添わせて確認をする。現状定まっている大型日程として

- ・『夏休み初日に、なおコロ先輩の元へ』
  - ・『鹿之助くん達と海に行くこと』
  - ・『絶対に外せない観光』
  - ・『(青空両親の) 実家帰省』
  - ・『鹿之助くん家に遊びに行く』
  - ・『鹿子ちゃんを交えた川遊び』
  - ・『陽葵ちゃんと遊ぶ』
  - ・『稲毛屋に遊びに行く』
  - ・『まえさき市で買い物』
- が既に決定している。

この間に私事として、筋トレやらDIYやら収録やら自己学習などが含まれている。

まあ、私としてはこの5人以外から夏休みの期間に誰かから誘われることはないと思っていた手前。心寧ちゃんが言っていたような先客で予定が埋まるなんてことはなさそうではある。

Episodel 21 『青空、東京キングダム行くつてよ』

「ねえねえ、日葵ちゃん。カレンダーに書かれたこの『絶対に外せない観光』ってどこに行くの？」

五車学園の友人達と日程調整のひと段落がついたところで、私達を遠巻きに眺めていた蛇子ちゃんが箇条書きにされた日程表を眺めやってくる。

それからカレンダーの8月、私が絶対に忘れてはならないようにと1日だけ明らかに彩られたお盆『絶対に外せない観光』の詳細を尋ねてきた。

ここはあのまえさき市で人間風情に泣かされたえつちなお店を開いている蛇子ちゃんとの約束の日なのだが………きつと私がここで『まえさき市の蛇子ちゃんに会いに行きます』なんて正直なことを言おうものなら、まずは鹿之助くんからのSTOP。事情を説明されてこの場にいる全員から確実に猛反対されそうな予感がする。

だが私にはお盆の蛇子ちゃん日程を蹴るわけにもいかないのだ。

本当は蹴りたいけど。

その選択肢はあの高位魔族邪神に赦されていない。

むしろ、邪神高位魔族を野放しにすることが一番危険。

邪神は制御できないからこそ、邪神なのだ。

人間風情が制御できる等と実におこがましい。

「ああ。その日はちよつと東京キングダムっていう人工島に観光へ出かけます」

ここで嘘をつけばボロが出るかもしれないし、変に隠そうとすれば好奇心旺盛な陽葵ちゃんがさらに突いてくるかもしれない。

それにこの場には普段はぼんやりしているが、博識なふうま君の存

在もある。

彼はMDコンポ前でMAD音楽を聴いているように見えるが、片耳だけはこちらに向けて会話を聞いているように見えた。

ゆえに誠実な返事したのだった。

「それで次の日程——」

最終的にその何気ない彼女の質問に対して、行先のみを伝えてあつけらんとした顔をしたまま次の話題で話を流そうとする。

「」「」「え？」「」「」

……。

ふっ。やれやれだぜ。

……どうやら私の答えはまずつたらしい。

サラツと流すつもりで答えた行先のせいで、一瞬にして部屋の空気が凍り付く。

凍り付いた上に、私の次の日程の話の方が流されてしまった。

だが、その東京キングダムってそんなに危険地帯だっけか？

えっちなお店で働いている蛇子ちゃんに会いに行く過程で、既に情報収集は進めている。

しかし調査した〈図書館〉による東京都庁によって掲載された情報によれば、第二の首都として東京湾に建築された人工島で移転企業募集中と表記されている——ニュータウン（笑）五車町よりも発展した島って認識だったのだけど……。

「この日は東京キングダムに行くの？」

「具体的に東京キングダムには何しに行くんだ？」

「オススメできないな……やめとこうぜ？」

「最初からあそこはハードル高いんじゃないかな」

「詮索しませんが行かない方が良いと思います」



まさかの質問と否定の総攻撃である。

あの 前向きポジティブ娘である陽葵ちゃんですらオロオロしながら、私が東京キングダムに赴くことに関して心配そうな顔をしている。

要するに陽葵ちゃんからしてみれば、洋館事件鋼人邸よりも東京キングダムのほうが危険な場所らしい。

あるえー？　なんか私の調べた〈図書館〉の情報と皆の反応が乖離していないか？

これは入念に入念を重ねた——かつての日本国総理大臣である検討使が有事に備えたあの瞬間のような準備に取り組んだ方がいいのではなからうか？

まえさき市でえつちなお店を開いている方の蛇子ちゃんを、お星様へと還らせるぐらいの得意武器による重装備。

「待つてください。そんなに一度に話しかけないで。私は聖徳太子じゃないんですよ。一度に聞き取れる人の声は1人から3人までです」

私の言葉に今度はMDディスクの音楽を聴いていたふうま君まで『聞き捨てならない』とでも言いたげに近寄ってくる。

カレンダーを中心に集合した5人はアイコンタクトを送りながら、お互いに不安な意志を送り合っている。

「質問は順番に。順番にお願いします。答えられる範疇なら話しますから」

「え、じゃあ私から。東京キングダムには誰かと一緒に行くの？　お父さんとお母さんとかと？」

「いえ。1人ですね。1人で観光に行きます」  
「ビュッ」

私の言葉に陽葵ちゃんの表情が、目の前に鉄骨が落ちてきたあげく前髪を掠めて驚いたときのような顔になる。

その他の4人といえば……………。

……………。

∧；∧ ∧；∧

∧（・ω・）（・ω・）∧∧

（・・ω）と（つとノ（ω・・）

— つ 「カレンダー」 且とノ

と」』 「」つ

まるでくだらないダジャレでも話した時にレスされる2chの

<sup>アスキーアート</sup>

A A 【審議中】のように顔を見合わせ始めてしまった。

「えっと、青空さんは1人で東京キングダムには何をしに行くんだ？」

「あー……………主な目的は先ほど申し上げた通りの観光です。〈図書館〉ざつくり調べた限りだと海中に浮かぶ第二の都市として設計されたものらしいので……………よくまあ、この地震大国日本でそんなものを作ろうと思ったのか。首都直下型地震の埋め立て地の地盤沈下による液状化と湾内津波に対する防災対策の仕組みや構造を实地調査しに行くってのが主な目的ですね。絶対、2020（2021）東京オリピックみたいに建設費の中抜き事案臭がするんです」

もちろん東京キングダムに赴く目的は今適当に組み立てた捏造にしか過ぎないが……………。

今の詳しい目的について言及したところで、鹿之助さんと陽葵ちゃんは私の小難しい話には着いては来れなかったようだ。

ゲームのようなNow loading……………に加えて  
ダイヤルアップ<sup>ビ―！ガガガガ！ゴォー！</sup>接続音中みたいな顔を始めている。

頭上には？？みたいなマークが浮かんでいる。

最初に話題から振り落とせるような理由を話してみただけなんだけどね。

「えっと。それはつまり1人で観光しにはいくけど……現地で誰かがイドとかと合流してと調査するって感じ……なのかな……？」

「うーん……ガイド……は……。予定に組み込んでないですね。自分の足で自由に散策しながら調査するのが好きなので……。そのあたりは必要に応じて依頼の予定です」

鹿之助くんはここで復帰するが、陽葵ちゃんはまだ話から脱落している。

その顔は目を丸くした宇宙猫だ。

更なる質問は来なさそうではあったが、私の調査内容に理解ができなそうま君、蛇子ちゃん、心寧ちゃんの3人はまたもや顔を合わせて審議中な状態になっている。

「あのさ……。これまでの日葵の性分から俺達が『やめとけ』って言うても行くと思うから、その上で助言してもいいか？」

「はい」

「東京キングダムって、まえさき市のあの店以上に……。たくさん、そういう……。魔族の店があるんだ……」

「ああ、だから！」

「……だから？」

おっと。いけない。

思わず声が震えながらも説明してくれる鹿之助くんに対し『だからまえさき市でえっちなお店を開いている蛇子ちゃんが指定してきたのか。点と点が繋がったのと、魔族だらけなら相手にとって有利な場所ですね』なんて口走りそうになって発言をこらえる。

そういえば、貰った名刺の源氏名にスネークレディって書かれていた他にも『カオス・アリーナ』とかなんか色々書いてあった気がする。

結局バタバタしちゃってカオス・アリーナも調べられてないし、あっちの蛇子ちゃんから貰った名刺もどこにやったっけ……。あ

れがあれば、蛇子ちゃんの元まですんなり行けるとか何とかメールで書いてあった気がするけど。

2枚あったし、行きと帰りのチケットとして役に立ったりしないかな……。

「だから??? 『だから』って何だ? 日葵」

「いえ、話を遮ってすみません。続けてください」

「……。魔族の店があるから、日葵の直感で良さそうだなとか思ってたところに入るなよ? あと悪そうだなと思つた店にも入っちゃダメだぞ」

「え、つまり魔族の店の全店に入っちゃダメ……ってコト?!」

「あたりまえだろ?!?!」

冗談のつもりでいかかわムーブをするも、鹿之助くんは『おまえは何を言っているんだ』おじさんのような顔を始める。

「本当の東京キングダムは怖いところなんだからな?!?!いくら日葵みたいな規格外な存在でも気軽に観光に行くような場所じゃないんだぞっ?!」

「ん?ん?ん?んんんん??? いま、鹿之助くん。わたしのこと『規格外な存在』って言いました?」

「あ、あ、あ。え、えつと。鹿之助ちゃんが言いたいののは、日葵ちゃんがどんなに神村ちゃんと互角に殴り合える実力があつてもすごく危険な場所だつて言いたいんだとおもうよ! えつと、だから心配しているだけで他意はないかな?!?!」

鹿之助くんは私の実父かと思うほどにひどく怒り出す。

いつものように私の心にナイフを突き立てるようなデリカシーのカケラもない単語が出てきたが、即座に蛇子ちゃんのフォローが入る。

「……………わかりました。すみません。魔族の店には入らないようにします」

「絶対にダメだからな。まえさき市の時みたいにくまなく逃げられないからな！」

あ。

うん。そっか。

そうだった。

鹿之助くんは私とフードコートで別れた後、ケモミミフードの集団に捕まっちゃったから知らないんだっけ。

あの後、えつちなお店で働いている蛇子ちゃんが私に直接会いに訪れて殴り合ったことについて。

たしかプールの見学席で面白おかしく茶化した話をして、『頭を使っ·て·お·願·い·し·た·ら·蛇·子·ち·ゃ·ん·が·ギ·ヤ·ン·泣·き·し·な·が·ら』無事にその場は逃げられた体で話したんだっけ。

実際のところは現在進行形で逃げられてないんだわ。

だから東京キングダムにいくわけだしね。

本当は行かないことが一番、お互いのためになるんだろうけど……………

どうしてもね。あつちに聞き分けのないその蛇子ちゃんが脅迫してくる以上ね……………

## Episode 122 『流転する思考』

「青空さん、俺からも助言をさせてくれ。絶対に裏道とか裏路地とかには極力侵入しないことが最善だ。表側は商業地区だから比較的安全だけど、裏路地や裏道は特に危険だからな」  
「と、なると観光に行ける場所が限られてきますね……」

東京キングダムへと向かうことをカミングアウトした私へ、鹿之助くんが身を案じた助言に便乗するように、ふうま君も口を挟んでくる。

それを私は左手を口元に当てて右手を肘に付けながら、表面上では神妙な顔をして忠告を聞き入れているかのように装う。

されども相手側から指定されている『東京キングダムZ街Y丁目X番地』は明らかに裏路地付近なんだよなあ……。

しかし、そのことを言及しようものならまた話は余計にこじれるだろう。

それに5人の反応を漠然と〈心理学〉して内心を伺ってみたが、全員ガチっぽい反応だ。

心底、私のことが心配で、同時に観光地に東京キングダムを選択したことは、啞然とするほどに驚きに満ち溢れたものだったのだろうな。

チクシヨウ！

これは私の〈図書館〉にて調べた情報が誤りだったってことじゃないか！

じゃあ、つまり古い情報と表面上は煌びやかな情報を掲載し続けている東京都庁はまたやりやがったな?!?!

2022年の年末あたりで暴露された『苦しむ人を助けたいとか善人のような立ち振る舞いをしながら現実では社会的弱者を食い物にして儲けているだけの悪質NPCを運営していた組織』と深いつながりのあった東京都庁だから！

公約を守れないからって、公約の書かれたホームページを物理的に

消去した東京都庁だから仕方ないのかもしれないが！

既に公文書開示がゆりこのりこ十抜けの紛失事件と同じ、汚職の臭気がしてきたぞ！

この世界でも都道府県が信用できないとか世も末だな！

……でも、これ表沙汰になってないだけで、クトウルフ神話TRPG世界線上よりもさらに国が腐つてたりしない？ むしろ前世の方がマシだった説ない？

なんか……えらい事になってるな。

もしかして対魔忍世界の表社会西暦2078年では年間約15万人の行方不明者や失踪者が本当は出ているけど、マスコミは総スカンしているから新しい形の戦前みたいになっていたり？令和3年（西暦2021年）時点では、公に認知されているだけでも年間約8万人の失踪者が出ている

刻の日本国発表!!

いまは例のカルト教団が問題（報道開始から6カ月経過）です！

そんなことよりも国会議員の除名について……ええ！ 日本国は平和です！ 行方不明者に失踪者？ そんなもの居ません！ 日本国は安全なのですから！ みたいな???

国民の洗脳はまず『メディアの情報統制と偏見・切り抜き報道』つて私達の時代から言われているから。

どんな極悪非道な所業でも、加害者が “上級国民” かつ癒着があるならばメディアの方から忖度してくれるからね。

そして海外のメディアから日本国ではこんなことが起きている！ っって指摘されてやっとうり腰を上げるのまでがセット。

ハハッ。オールド メディア ジャパン。

たすけて！ 対魔忍！

対魔忍が治安維持しているから、この醜悪で絶望的で残酷な現代日本が多少はマシになっていると信じたい！

「……」

個人の思想で『対魔忍になりたくないーい!』とか選択肢を選ぶことは自由かもしれないけど……。

外野が迂闊に『対魔忍なんか辞めろ』とかあの子達に流布できるような世情でもないのかも……？

うーん……。

頭の中で思考が激しく流転する。

同時に葛藤も生まれる。

でもあの時は、年端も行かない子供が高級娼婦として強姦されたり危険地帯に放り込まれる姿は見過ごせなかったし……。

もしも仮に今もこの世界のどこかで『秋山 凜子ちゃん』や『水城 ゆきかぜちゃん』が対魔忍に従事していたとしたら……凜子ちゃんの方はもうそろそろいい大人だろうし、本人の意思決定に委ねるけど……。ゆきかぜちゃんに関しては、また対魔忍になるのは辞めるように助言しちゃうかなあ……。

本人の意思で良いことだと思うことは結構だし、志は偉いさ？でも年端も行かない若造が勉強もせず世界を救えるのはハリウッド映画の中だけだし……。

無知のままじゃあ現実世界なら本物の悪い大人の駒や食い物にされるのがオチだからなあ。

裏バイトとか、オレオレ詐欺とか、連帯保証人とか、美人局とか、マルチ、ねずみ講、靈感商法……現代の大人でも様々な特殊詐欺に引っかけられるのに、子供なら猶更……。

騙すのも簡単だよな……。

承認欲求を与えるのも、洗脳するのも、手駒にするのも……。

対魔忍組織がどんなところか私は知らないけど、これまでの情報から照らし合わせるとカルト教団臭が拭えない。

カルト教団なら、ぶっ潰さなきゃ。

対魔忍は治安維持に必要な存在なのかもしれないけど、カルトならどのみち終着地点は凡そ目星はついている。



だって。

そもそも。

普通は。

ちよつと考えればわかると思うんだ。

一般人4人を助けるために、魔族の街と謳われているヨミハラの高級娼婦へバックアップなしに対魔忍2人だけで突入したらどうなるかぐらい……。

ワンチャン対魔忍組織に内通者が居て、私達をエサに対魔忍2人も奴隷娼婦化を目論んでいた可能性も否めないんだが？

助けに来てくれたことは、現地世界民の協力者として心強かったし嬉しかったけどさあ。

最終的な結果は世間を知らない無知な若僧の若気の至りってやつだったような……？

「……………えーつと。じゃあ、逆に東京キングダムに行ったことがありそうな皆さんのオススメのお店を教えてください。観光の過程で立ち寄れそうな場所があれば行きたいと思うので……」

悪態と真実と過去の状況など様々な思考が異常な速度で積もっていく中、これ以上は大人しく何も言及しないことも考えたのだが……。

既に化けの皮が？がれている以上、逆に何も発言しないことこそ怪しまれると思う。東京キングダムに精通していきそうな5人に対して『無難な質問を尋ねることでは怪しまれないように』と、カモフラージュを加える。

「そうだな……。青空さんの観光は聞いたところによると現地調査の意味合いの方が強そうだから、まずはクラブ　「ペルソナ」　に足を運んでみてはどうだろうか？　情報料は必要になってくるが、そのの

「マダム」　なら信頼できるし、安全なはずだ」

「クラブ　「ペルソナ」　のマダムですね。覚えておきます」

東京キングダムは余程治安はよろしくない様だし、情報料……。

情報料が必要ということはつまり私の〈知識(EDUロール)〉によれば、ふうま君が教えてくれた場所は歌舞伎町における総合案内所か。

情報料には、いわゆる山吹色のお菓子を大量に包む必要がありそう。まさか魔族だらけのお店で慈善事業家のようにタダや僅かばかりの御布施で情報を教えてくれるなんてありえないだろう。

まえさき市でえつちなお店を開いている蛇子ちゃんについて詳しく知りたい時は寄ろうかとも思ったが……逆に蛇子ちゃんへ私の情報を売られる可能性もあるという事だ。

あくまでも情報として知っておくだけにして利用するかは状況に応じてにしよう。

「蛇子は安全と言われて思いあたるようなお店はないから、どこのお店もおすすめてはできないけど……。東京キングダムって道が入り組んでいるから迷子にならないように。大通りから外れちゃだめだよ？ 人通りが少なくなったりしたら元の道にすぐに戻ってね？」

「そんなあー。子供じゃないんですからあ、迷子になんかなったりしませんよ。安心してください。〈ナビゲート<sup>土</sup>地<sup>勘</sup>〉には自信があるので！」

近所のおばちゃんが手首をくねくねさせるような動きをするのと同じように左手を動かし、笑い飛ばすもやはり蛇子ちゃんは心配そうな顔をしたままだ。

表面上はヘラヘラとしながらも脳裏では神妙な顔で思考を巡らせる。

ひとまず『対魔忍組織がカルトだったら、事情を汲み取りながらも対魔忍化洗脳の手段・手口にに応じて情け容赦なくぶつ潰す』という事は頭の片隅に置いて。

東京キングダムは道が入り組んでいるのか……。

つまりこれは逆に考えればあっちの蛇子ちゃんを撒くのに逃走経

路として使える——違う。

この場合は地の利は向こう側にあるから、追い詰められないようにしないとイケないということだろう。

「日葵。親切なお兄さんとかに声を掛けられたり、ギャングに絡まれたら即逃げろよ。『絶対に』だぞ。戦うなよ」

「エー?」

「エー?」

「『えー?』じゃないってば!」

「冗談ですよ。冗談。分かりました。ちゃんとその忠告に従いますね」

「ご、ごめんね!」

鹿之助くんもおすすめというよりも、気迫のある顔で終始注意喚起を行ってくる。

ちいかわの腕をグルグルするダンスで茶化すも怒られてしまった。陽葵ちゃんが私の隣で同じ動きをしながらハチワレの真似をしてくれるも、とてもじゃないが誤魔化しきれなかった。

これもまた実技試験で化けの皮が?がれた弊害なのだろうが、よほど彼の中では私は好戦的なキャラだと思われるらしい。

いやー。これまえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんから『いつ告白するの?』とか聞かれたけど、告白してもフラれるでしょう。

鹿之助くんの外見は護りたい系男子だが、実情と本人希望としては護りたい系男子だ。それについては彼が話してくれた。『将来の夢』である『正義の味方』で薄々察せる。

私としても護りたい側の人間ではなく、護りたい側の人間なので方向性が衝突している。

告白は無理だよ。

絶対にフラれるもん。

何かムードのある時とかじゃないと。

決定的過ぎて『ハンジロー先生がお似合い』とか建前で自分を誤魔化していたけど、もう騙せないよ。

でも蛇子ちゃんも明日は何があるか分からないとも言っていたし、可能性は低いと思いたいが……。乙女を片っ端から口説き落とす系なろう系主人公ふうま君の存在もあるしな……。

これは機会があるときに言わないと今後一切、本当にチャンスを得られなくなるのかも……。

「あ、私からも注意喚起です。港湾地区には近づかないようにしてください。あの場所……特に港は東京キングダムの玄関口になっていて街を支配している組織同士の小競り合いで衝突が頻発しているところなので……」

「危険地帯ってことですね。わかりました。そちらにも行かないようにします」

鹿之助くんへ好きと伝えるタイミングについて考えている間に、心寧ちゃんの注意喚起が入る。

元より東京湾なんて超が付くほどに汚い海へ近寄る予定など一切予定になかったため、生返事のようにウンウンと首を振りながら承諾する。そのあたりについては最初から向かうと予定はないので問題はない。

「むー。みんな注意ばかりでまったくおすすめのお店を教えられてないよー?」

「そうは言ってもさ……」 チラッ

「うーん……」 チラッ

陽葵ちゃんのむすつとした言葉に、蛇子ちゃんと鹿之助くんがチラッと視線をこちらに一瞬だけ向けてくる。

「……………わはは」

私は2人からのまだまだ物申したそうなアイコンタクトをしかと受け取ってから、両目をつぶって後頭部を搔く。そのまま、はにかみながら応じる。

「大通りで、日葵ちゃんが入っても大丈夫そうな場所で、魔族のお店じゃないところでオススメするなら私はあそこかな！ 日葵ちゃんが転校してくる前。米連との交流の一環としてケイリーちゃんと行ったあのお店！」

「ああ。あのお店ですね」

「えっと店名は『華優麗華』だったかな?! アジア風の店内でね！ お値段も良心的だし、料理もすつごく美味しいんだよ!!! 店が開いているのは夕方からだけど、美味しいからぜひ食べに行ってみよう！」

心寧ちゃんは、ともかくとして。

こういう時の陽葵ちゃんのあつたかい言葉は心に沁みる。

そうそう。そういうのでいいんだよ。そういうので。

『華優麗華』ね。立ち寄れる時間があれば立ち寄ってみようかな」

「えへへ！ 行ったら何を食べたか教えてね！ 私のおススメはね！

バニラのアイスクリームが乗ったメロンソーダと、八宝菜と青椒肉絲と炒飯とパクチーのスープと……」

陽葵ちゃんにとって余程楽しい思い出だったのか、永遠と美味しかったものを話してくれる。

全部は流石に食べきれそうにはないが、あつちの蛇子ちゃんと遭遇する前に食べに行こうかな。

そんな気持ちにさせてくれて、ちよつとだけ自然な笑いが零れた。

19章 『対魔忍世界の夏休み』（前編）  
Episode 123 『完全アウェイ』

夏休み初日。

私は親の寝顔より見た白いブラウスに、スカートゴムまで伸びる青色ネクタイ、丈の短い紺色スカートである五車学園の制服を着用し、五車学園へ訪れていた。

それにしてもこの世界の五車学園のスカートは短すぎやしないだろうか？

青空 日葵の肉体  
この身体じゃ、ちよつとお尻がはみ出しそうなギリギリなラインなんだけど？

今こそ感覚がマヒして気にもしてないが、突風が吹くと捲れそうになってヒヤツとする。

そうそう。これは誰に弁明するわけでもないが、今回は別に筆記試験や実技試験の再試験に来たというわけではない。

なお先輩とコロナ先輩に会うためにやってきたのだ。

恐らく手渡している小冊子に描かれた文字……。

魔族語の種類が判明したのである。

夏休みに入ったというのにもかかわらず、五車学園高等部3年の先輩方とすれ違うことがある。

そのイソイソとした忙しない動きと、前世での高校生活経験・時期などを重ね合わせた状況から推察するに、彼等は大学進学のためにオープンキャンパスや願書を取りに行く段階なのだろう。

私もあと3年もしないうちに彼等と同じような行動をすることになる。

記憶の引継ぎ付き転生ボーナスのおかげで、願書を取りに行くことや進学予定の大学オープンキャンパスの誘導を見失う……なんて事態にはならないだろうが。

それに現世では自分のことだけのみならず、人生の先駆者として鹿之助くんや陽葵ちゃんの手引きとなれる存在になるつもりだ。

AO入試の手順とか、一般試験の申請とか、入学時の面接訓練、学力向上など教えるべきこと、やることはいっぱいある。

そういえば……………。

コロ先輩やなお先輩は一体どこの大学に行くのだろうか？

今後の就職活動や将来設計に視点を置いたとき、現代での認識は確実に『大学に行つて当然』の時代だろう。

いや。私の元居た時代よりも当然を越えて義務教育レベルの進学率になっているかもしれない。

そもそも高卒と大卒では収入が違う。

就職も最終的に最終学歴によって決まる。

……………と、言うのが私の元の時代の認識だった。

それに海外と比較してしまえば、日本の大学は入学だけが面倒で卒業は簡単といわれるほどのだからお金があつて入れるなら入った方が良い。

五車町に大学があることが一番望ましいのだが……………。

あいにく五車町には大学はおろか、短大、専門大学すら存在しない。結果、五車町を出ないという選択肢は存在しない。これは五車町にとっては最悪の過疎化悪循環スパイラルである。

五車町に残るのは『現代社会に押しつぶされて地元帰りした一般人』か、『大学への進学を諦めて地元根付いている一般人』か、『社会人として外に出たが伴侶を連れて戻ってきた一般人』などだ。

2人が進学するのなら、それはニュータウン（笑）五車町の外。まえさき市や埼玉のほうに行くのだろうか？

「えーっと、3-C、3-C……………ここですわね」

そんなことを考えながら心寧ちゃんから伝えてもらった3年生の教室へと脚を運ぶ。

「なおコロ、なおコロ、なおコロ……………なおコロ♪ なおコロ♪」

教室に入るための扉に備わっている小窓からそつと教室内を覗い

て、自作のリズムを刻みながら、なお先輩とコロ先輩の姿を探す。

コソコソしている姿を傍から見れば、それは何とも悪事を働く5秒前って感じた。

べ、別にやましいことをしているわけではないのだが、ついこのあいだ名も知らぬ3年の先輩を期末試験の前日に病院送りにしたこともある。

それ故の行動だった。

その先輩が3—C教室の中で追試の準備をしていた日には気まずい……で済むどころが、正当な因縁をつけられ大惨事大戦に発展しかねない。

夏休み初日から暴力沙汰で楽しい長期休暇が消失とか、私は嫌だぞ。

「コロ先輩……居た！ うっっ」

教室が通常時よりも賑わっていないことから、即座に自席で座り友人達であろう人物2人と話しているコロ先輩を発見することはできない。

しかし私としてはとてもじゃないが、教室内に入ってコロ先輩の元に行く気は瞬時に失せてしまった。

そのコロ先輩の元でおしゃべりしている2人の姿……。

ここからでは後ろ姿しかみえないが、あの蓮魔先生カラーの太刀の鞘と白いハチマキ、雪ん子の藁合羽のような髪型と水色の髪色には見覚えがある。

あれは間違いなく蓮魔先生カラーの太刀持ちは黒田先輩だし、水色の髪の先輩はたぶん氷室先輩の姿だ。

黒田先輩とは洋館事件以来。氷室先輩とは私が陽葵ちゃんと心寧ちゃんのクラスの窓ガラスを（頭突き）でぶち破った際に廊下で交通整理を行っていた時以来……でもないや。氷室先輩も洋館事件（外）で顔合わせしているっけ。記憶に薄いけど。

いずれにせよ、今日のところは悪いことは何もしていないが私から



してみれば会いたくない2人であることは間違いない。

まあ、相手は18歳。

私は……彼女達よりも年上だが、蓮魔先生の前に引きずり出されるのは勘弁してほしい。

ワンチャン、蓮魔先生もわたし釘貫神葬よりも年下説もあるけど。いまの肉体は16歳だからな！

現世では年齢マウントはやめておいてやる。

てか年齢でしかマウント取れない大人とか、存在そのものが恥ずかしいし。きつと変な目で見られるだろうし。

そういえば、洋館事件でなお先輩は五車風紀隊の隊長とか委員長とか言っていたような気がする。となると親しいコロ先輩も風紀委員の1人なのだろうか？

「！」

「あっ」

ここで窓からチラチラ様子を伺う私にコロ先輩が気づいて、視線が合ってしまう。

別にやましいことをした後つてわけではないが、とにかくあの2人……特に蓮魔先生大好きっ娘の黒田先輩とはなるべく会いたくないのだ。

だからコロ先輩の気づきによって黒田先輩と氷室先輩も振り返るかのような素振りを見せた為、咄嗟に扉の影に隠れてしまった。

とてもじゃないが、もう一度教室の中を覗くなんて蛮勇じみた自殺行為はできる気がしなかった。

それに私の目に狂いが無ければ、教室内になお先輩は無く。コロ先輩しか居なかったような気がする。

「……………よし」

であるならば。

最終的にコロ先輩の元からあの気難しい風紀委員が居なくなるまで。なお先輩がこの教室に到着するまでの間、私は女子トイレにでも隠れていよう。2人が居なくなったら接触する形で。うん。それで行こう。

それが面倒なことに巻き込まれず、変な気遣いもせず、穏やかな日常を過ごせるルートに違いない。

足音で私の存在に気付かれない為に、抜き足差し足へ忍び歩きで教室から離れ――

「妖精ちゃん」

「ぴゃあ!？」

熊を刺激しないようにしながら逃亡するかの如く、後ずさりしながら3―C教室から離れる私に突然背後から声が掛かる。人が全神経を足に向けている時に限って、その声の掛け方が耳元に向けて、ねっとりとしたASSMRのようなこそばゆさがあって飛び上がったしまった。

咄嗟にファイティングポーズを取りながら背後を振り返れば、女子生徒用制服を纏ったなお先輩が小悪魔チックに微笑みながら、私の反応を興味深そうな眼差しで見つめている姿があった。

いいや。なお先輩だけではない。

その背後には私と面識のない面識のない女性……………。いや、彼は男児か？ なお先輩と同じように女子生徒用の制服を纏った男性が興味深そうな顔でこちらを見ていた。

彼は水色のショートボブのサイドテール型の髪型をしており、その毛先は浅紫色に染め上げられていた。陽葵ちゃんのようにパツチリと開いた眼からは深度にに応じて変化していく水辺の岸色の虹彩をしていた。

首には男らしさを演出してしまう喉仏を黒のチョーカーで隠し、手首には可愛らしいシユシユで手首のゴツさを隠している。私が見れば彼女にみえる彼の性別を判別できたのかは、彼の体格にもあるだろ

う。彼の胴体は女性の△形に比べて▽形……に近い□形をしていたこと、そしてほぼなめらかではあるが膝の皿の凹凸具合はやはり男性における膝の骨格だった。

そんな2人の登場に、せっかく3—C教室から離れたというのに身構えながら背後に後ずさりしたせいで元の位置まで戻ってしまおう。

「どうしたんだい？ そんな中腰になりながら後ずさりなんかして」「ちよ、ちよつ。な、なんでもないですつ！ それよりも、な、なお先輩！ 急に驚かせに来るのは止めてもらえませんかね!? 寿命が縮んだかと思っただけですけど!」

「ふふふ、ゴメンゴメン。あまりにも妖精ちゃんが前方に全集中して僕達に気づいていないようだったから。つい驚かせたくなっちゃってね」

なお先輩は動揺しまくる私をからかうようにケラケラとお腹を抱えて笑う。

「と、ところで、そちらの御仁はどちら様でしょうか?」

「ああ、彼かい？ 彼は僕の友人の——」

「も〜！ なーお？ せっかく彼女にも僕が男か女かどうという反応をするか様子見したかったのに、〃彼〃なんて単語を使ったら僕の性別がわかつちやうじやないか」

「ははっ、ごめん。でも妖精ちゃんは、観察眼が鋭いからね。君の性別は既に見抜いていると僕は思うかな」

「そうかな？ こほん。僕は藍野あいののぞみだよ。えへへ。紹介にあつた通り、なおの友達。今日は君が面白い本の言語を解析しているって聞いて実際に見せて貰おうと思っただけだ」

「ああ、そうでしたか……。はじめまして。私は青空 日葵と申します」

彼は下級生の私に対しても、女性っぽい仕草で可愛らしく頭を下げ

てくる。私も応じる様に彼ほど可愛らしい振る舞いはできないが、一呼吸を置いて心を落ち着かせてから堂々と頭を下げた。

正直、彼よりも女子力が負けているような気がしてならない。それどころか、滲み出る雰囲気から明るく陽気なオーラが出ていてその点でも負けているような気がする。

「えっと。なお先輩の御友人ということは、同じ可愛いものが好きな同志という仲でしょうか？」

「そんなところかな♪ 僕となおそれぞれ目指す場所は違いかもだけどね！」

「2人とも立ち話はここらへんだよ。さあ、妖精ちゃん。コロちゃんなら教室の中にいるよ」

彼はいつの間にかに私の背後。教室側へと回り込み、コロ先輩＋αβがいる教室を指さししてくるが……私としてはその中に黒田先輩と氷室先輩がいるのだ。

いまは絶対に中に入りたくない。

「あー……えっと」

「あれ？ どうかしたのかな？」

「ええー………どうかしたって言いますか、どうかしているんですけども………」

「うん？ ああ！ 大丈夫。黒田さんも、氷室さんもちよつと生真面目過ぎるところがあるだけで、君が何も悪さをしていないなら必要以上には怖がることはないさ」

教室内は入ることを渋り『前門の男の娘、肛門の美少年』に挟まれて動けない私。

もによもによと口籠る私の心情を瞬時に察して後門の美少年が耳元で囁くようにおだやかな口調で私の両肩を掴みにかかる。

「なっ、なお先輩?」

「本当に妖精ちゃんってこうしてみると不思議な子だよ。黒田さんと氷室さんの2人は怖がるなんて」

「いやあ……それはまあ……」

「僕は分からないこともないよ。黒田さんも氷室さんもどつちも怖いもんね」

「の、のぞみ先輩……!」

「それは妖精ちゃんの経歴を、のぞみは知らないからさ。彼女のこれまでの活躍を知ったら反応が変わるだろうね。そうだね……当時の妖精ちゃんは『洋館の怪物』や『脱出不能のループ空間』はまったく怖くないって振る舞いだっただ」

「えっ……その洋館って……。『雨降洋館』?」

「ああ」

「それは、なおが疑問形になるのもわかる気がするかなあ……」

「ええ……? あ、わ、わははは……」

驚くのでみ先輩と、事情を説明するなお先輩の言葉に完全に目を逸らして、はにかむようにぎこちなく笑顔を作りつつも片目を瞑りながら後頭部を搔く。

だが赤き霧／磯八目巾着鰻の場合は、瞬時にそれが慣れ親しむことはないクトゥルフ神話TRPG世界の神話生物だつて理解できてしまったことと、あの時は一般人である陽葵ちゃんとかコロ先輩とかアイツから護らなきゃいけない存在が居たために気を強く保てたのであつて……。正直、赤き霧／磯八目巾着鰻の存在の方が脅威として考えた場合、未恐ろしい。

あの時は犠牲者を考慮して逃走の道こそ選んだが……。

それに――

血が出るのであれば、殺せる。

そう。最終的にぶっ殺せばいいのだ。

ループ空間に関しては情報収集の賜物だ。あれで、脱出に関する情報が一切残されていなかったとしたら途方に暮れていたかもしれない

い。

「それじゃ、行こうか」

「え？ ちよ——え！」

「大丈夫。大丈夫。僕達が一緒だから」

「そうだよ！ 『雨降洋館』の怪談に比べたら、ちつとも怖くない、怖くない」

「あ、あ、あ、あ、あああああああああ！」

なお先輩は注射を怖がる子供をあやすように同じ単語を二回連続で語りかけながら、私をコンパスのように180°反転させると両肩に手を置いたまま3—C教室に押し込もうとする。

自身の両足をびったりと地面につけて堪えようとするも、のぞみ先輩までもが加勢してくる。流石に男で2人にへ組み付き、され押しされようものなら、腕力で私が敵うはずもない。既になお先輩によってほぼ耐えられなかったのだ。

そのままずると雪かき櫛で運搬される雪のように運ばれていくのだった。

Episode 124 『言いくるめ』の貴公子』

「おまたせ。コロちゃん」

おかえり。藍野ちゃんも一緒なんだ。随分遅かったけど、何かあった？

「なんにも。教室の外で妖精ちゃんとはったり出会ったから、少し雑談を挟んだぐらいさ」

「ど、どうもー？ 噂の妖精ちゃんでーす？」

なお先輩とのぞみ先輩から物理的に背中を押されるがまま、コロ先輩達が待機している3-C教室へ入る。

美少年と女装系男の娘に両肩を掴まれたまま、私はコロ先輩の元まで運ばれて、黒田先輩・氷室先輩の間に割って入る形で2人に顔見せすることになった。

第一印象は大事というし、引きつった笑顔になってしまったが無理矢理に愛想笑いを作りながら、間に割って入った3人の顔をそれぞれ確認する。

いらっしやい。来るの待ってた

「……………」  
「……………」

コロ先輩は後輩を出迎える先輩のようにニコリと小さく微笑んで出迎えてくれたが、他の2人は駄目そう。もう駄目そう。駄目だ。駄目。

蓮魔先生大好きっ娘は戦艦クラスの眼光でこつちを睨んでくるし、雪ん子藁合羽っ娘は完全に冷め切った女傑のような目でこつちを見おろしている。

「ダッ

「はーい。逃げない。逃げない。大丈夫。大丈夫」

むりむりむりむりむり！ 無理だつて！ 今逃げなきや、いつ逃げるんだよ!?

この瞬間から睨みつけてくる2人に打ち勝つプランを練ったけど、背後から不意打ちの後頭部へキックからの離脱以外に作戦思いつかなかつたもん！

作戦の段階でもヒットアンドウェイしか思いつかないってことは、絶対に正攻法で勝てる相手じゃないって直感してるってことだもん！

無理だつて！殺気を感じちゃう！

まだ何もしてないのに殺されちゃうよおおおっ！

そんな必死の思いを他所になお先輩は、まるで社交ダンスでも踊る様に私を引き寄せる。

怯える子供をなだめるように抱きしめてポンポンと頭を触りながらコロ先輩の前に戻しちゃう！

やめて！

そんな優雅に戻さないで！

「青空 日葵」

「青空 日葵さん」

「うひ、は、はひ……お二人とも洋館事件以来でしゅね……」

逃げられないよう、なお先輩に抱きしめられながらを押さえつけられている以上。緊急脱出することが叶わず、震えながらもできたことはNTRビデオに登場する歪なダブルピースを作りながら、どう2人の逆鱗に触れてしまわないよう立ち回ることだけを考えていた。

「お久しぶりね。ところで死々村さんに見せてもらったのだけど、これは何かしら？」

氷室先輩はコロ先輩の机の上にあった冊子をひったくるように手



に取ると私の眼前へと突き付けてくる。

それはまごうことなきコロ先輩に言語解析を依頼したときに渡した写本ワス異本の一部だった。

「な、な、ななななにつて、ほ、ほほほほん？　ででですがが??」  
「そんなのは見ればわかるわ。私が言いたいことは、あなたがどうしてこの本を学園内に持ち込んでいるかってことよ」

それはつまり……えっ。

もしかして、そのニュアンスは……これは何か危険な本ということだろうか？

つまり氷室先輩は、写本の一部に書かれている内容を解析することができたという事なのか？

だとすれば何の言語で書いてあつて、なんて書いてあつたのか是非ともお話を聞かせて頂きたいところなのだが……。

ひとまずは……。

勝ち確演出入りましたーッ！

ここで言語だけでも判明すれば、人間風情に泣かされたえつちなお店の蛇子ちゃんにこの本を投げ渡して速攻逃げられるウーッ！

今の状態は一昔前のパチスロで言えば、7セブンが3つーッ!!!

「えっ。え。え。え」

「いい？　五車学園へ学習に無関係な不要な私物を持ち込むこと、それはすなわち五車学園校則第3条の学内生活について（4）項に違反しているわ！」

はい、違つたー。

これただ単純に学内生活の校則に違反しているって説教の話だったー。

言語の判別・解読できちゃったのかと思っただろ!!!

私の淡い期待を返せ!

背面姿、雪ん子がアーツ!!!

「え、あああ……す、すみませ——」

内心では悪態をつきつつも、私について偏見を持っていない のぞみ先輩の手前。

表面上では震えてマナーモードバイブのように振動して怯えた演出をする。

「それは違うよ氷室さん。その冊子は妖精ちゃんが図書室で見つけた書物の言語調査をしたいと言っていたから、そのページを印刷して持って来てもらってきてもらったものなんだ」

そんな演技をしていると私に頭上から、落ち着きながらも凜としたなお先輩の声が掛かった。

ふと頭上を見上げてみれば、彼は私に対してウイंकをして口裏を合わせる素振りをしてくれているではないか。

な、なお せんぱあい!!!

このイケメン系美少年の貴公子め! 私の性癖が美少年スキーだったら、確実に今の一撃でトウUNKしてたぞ!!! 男の娘スキーでよかったな!!!

ちなみに。

のぞみ先輩は男の娘には入らない。

個人的なジャンル分けとしては女装男子によって生じた男の娘だと分類している。

美少年穂希なお先輩タイプ：女装ではない。特に彼の場合は自分好みなものを装飾していたら、いつの間にかに女っぽく見えるように

なってしまうただけ。あくまでも女性に見えるのは副産物であり、男らしい服を着用することでまた彼のポテンシャルである美少年というジャンルは新たに輝きを見せることだろう。要するに顔の整った美しい少年。男の娘上原 鹿之助くんタイプ・女装ではない。こちらは生粋の天然記念物。両親の遺伝子がイリユージョンなコラボを果たして生み出された存在。美少年のような男っぽいカッコよさ全振りではなく、自然体で愛くるしさと満ち溢れたジャンル。美少年と共有している点は、いずれも天然記念物という点。女装男子にしか見られない『自分を可愛らしく魅せよう』という意図が加わっていない自然体。すっぴん。奇跡の産物。男の娘にも様々なジャンルがあるの。一概には言えないが、少なくとも私の定義の中、天然記念物という視点では鹿之助くんは男の娘であり、のぞみ先輩は男の娘ではない。鹿之助くんⅡ先天性男の娘。のぞみ先輩Ⅱ後天性男の娘。基本的にアダルトビデオに登場する男優は後者の存在が多く産出されている。女装男子藍野のぞみ先輩タイプ・自身を可愛く魅せようと思った or 女性に憧れて女性のような姿をしているジャンル。嗜好として可愛いもの好きなお先輩とはまたちよつと違う。女装男子の過程を経て最終的に男の娘というジャンルに行き届いているが、大元としては彼の場合『女装男子』の方が適切。文化記念物。彼のヒザの皿と肩幅、体系は男らしさを隠しきれていない。それともそこまで隠すつもりはないのか。まあ、女装男子と言ってしまうと色気がないからここは男の娘という表現にすることで艶っぽいカモフラージュを施している。このジャンル分けは誤ってはならない。

誤れば私の脳内などで戦が起きる。

ふたなりで例えるなら『玉あり』『玉なし』、玉無しなら『陰核が陰茎』『陰核と陰茎は別』レベルの戦争が起きる。

「そうなの？」

「は、はいー……」

「ならいいけど……でもこの文字列の本は見たことないのよね……。まさか勝手に持ち出し禁止の禁書を印刷したわけじゃないわよね？」

物によつては持ち出しに応じて校長先生への持ち出し許可が必要なものもあるけど。これは図書貸し出し規約6条に――」

「おいおい。氷室さん？　いくら妖精ちゃんやんが学園中を震撼させている問題児だからって、そういう偏見だけで尋問に取り掛かることはとても良いことだとは思えないね。そんなに捲し立てるよう詰問して疑いにかかることは同じ風紀委員、風紀隊の隊長として見過ごせない行為だよ」

「……」

なお先輩に叱られた氷室先輩は少し萎縮しているように見える。

「それと今回の件は僕もコロちゃんも一枚噛んでいる案件だし、その過程で君が提示しているような学則に違反した咎があれば君達を招集してまで言語解析に勤しむわけがないじゃないか」

虚言にも関わらず、筋が通り過ぎている言い分に氷室先輩は完全に黙る。

その表情は非常に不服そうな顔だが、風紀委員・風紀隊という立場の中ではなお先輩のほうが上なのかもしれない。

あるいはなお先輩が五車学園で会得している人望によるものか。

なんだこの美少年!?

味方につけると無敵か!?

〈言いくるめ〉力、たっけーえな！

「とはいっても穂稀さん。彼女は疑われても仕方ないほどに数々の不良行為が目立ってますので。これまでに我々、風紀委員として把握していることとしまして、今回の私物の持ち込みを始め。平穏時の緊急ボタン連打、病院内での暴走、学内の備品破壊（主に窓ガラス）。禁足地への不法侵入。立ち入り禁止地区への不法侵入、上級生等への暴力行為を数回。同級生への暴力行為。卑劣な行いなど前例が多すぎます。そう思われなければ日々の素行から疑われないように振る

舞うべきでは？」

氷室先輩をへ言いくるめ〳〵黙らせたなお先輩に対し、今度は黒田先輩が嘸みついてくる。

ぐうの音も出ない関西人のイジリ発言も驚きな、事実陳列罪に私は酸っぱい顔で両目を瞑り後頭部を搔く。

この場で私の素行について何も知ら無さそうであろうのぞみ先輩を一瞥したが、こっちもこっちで幻滅していそうな顔で私を見ている。

きっと彼も私に対するイメージが相当ダウンしたのかもしれない。くっ……。ここでも化けの皮が剥がされた！ 余計なことを……。

「黒田さん。僕が氷室さんに注意したのは、必要以上に彼女を疑い学則に基づいて処罰・追い詰めようとしたからだよ。勿論、妖精ちゃんの『素行が悪い』ことは僕も知ってる」

アアーツ！ まさかのなお先輩までも私の事実を認めてしまったあー！  
これには俯くほかないーツ！

「……だけど、それを理由に彼女の行い『全てが悪行』と決めつけるのは止したほうがいい。決めつけは真実を濁してしまう事だつてあるのだからね」  
「……………」

なお先輩の言葉で黒田先輩も黙る。

さらに俯くのを止めて見上げる私に対してウインクを飛ばしてくる。

〈心理学〉で彼の心情を探り、言葉をあてるならば『だから怖くないって言っただろ？ ちゃんと僕も付いているんだから』って副音声がついてそう。

あああああああ！

いまのはキユンとした！

いまのはキユンとしたわ~~~~!!!

このイケメン学内で絶対にモテるでしょ。なお様ファンクラブ作ろうぜ！

『???ふうまファンクラブ』とは別に『言いくるめ』の貴公子』ファンクラブ作っちゃおうぜ！

Episode 125 『本題と利害関係』

「……ありがとうございます。なお先輩」

「礼には及ばないさ」

氷室先輩と黒田先輩の詰問と事実陳列罪に対し、イケメンオーラ全開でへ言いくるめ〳の貴公子として私を守護してくれた先輩に礼を述べる。

そんな私に彼はニコリと笑って、またもや頭をポンポンと優しく撫でながら私を背後から抱きしめていた手を引く。

「それで……コロ先輩、この書物の言語……何か分かりました？」

さっぱり  
「……」

私の問いかけにコロ先輩は肩をすくめて首を横に振る。

だから、友達の2人にも見てもらったけど……  
「……」

コロ先輩は氷室先輩と黒田先輩に目配せする。

「……私には分かりませんでした。蓮魔先生に拝見して頂いてはどうでしょう？」

「私も。残念だけど見たことのない文字だわ。でも文字の形状が古代語に類似していることから考えるに歴史ある魔族が用いている言語じゃないかと思うけど……」

現状こんな感じ  
「……」

「……僕もみせてもらってもいい？」

もちろん  
「……」  
「コクリ」

「……」

のぞみ先輩は愛らしく人差し指を自身のこめかみに当てながら、目

を瞑りながら指で頭をノックし始める。

「どうだい？ のぞみには、この言語がわかるかい？」

「……。……うーん……。？ 見たことがあるような……。……気はするんだけど……」

「「「「……」」」」

何かしらの進展に期待してか、あるいはその動きによって、この場にいる全員が彼を注視する……。

「ごめん。思い出せないや」

思い出すには至らなかつたらしい。

残念だが、先輩方による魔族語の言語解析は惨敗に終わった。

黒田先輩は蓮魔先生に見せる案を提案してくれたが、私としては蓮魔先生にこれを見せるのは避けたい。

まず図書室に存在している本ではないことが発覚してしまうこと。

次にへ言いくるめ〳の貴公子が誤魔化してくれたにも拘らず、その顔へ泥を塗る状況に繋がってしまうこと。

最後に、蓮魔先生は私が洋館に突入しようとしたとき、ヴェールの裏側を知る者のような目していた。

五車学園の教員という立場から学生に比べれば言語に精通しているかもしれないが、上記のリスクを冒して更に面倒なことに発展するぐらいなら地道に自分で解析をした方が100倍良いだろう。

既にこの本絡みでえっちなお店で働いている人間風情に泣かされた方の高位魔族な蛇子ちゃんにウザ絡みされているのだ。

本当は会いに行きたくはないのだが、この夏休みの期間には蛇子ちゃんとその友人に会いに行つて本を見せる約束をしている。

そっちの方で何か少しでも情報を拾えればいい。

拾った情報を繋ぎ合わせて、真相に辿り着くことは何十回もこなして来た。



それにここで文字の意味が分かったとして。

それは爆弾ごと投げ渡して全力で逃走するか、本を投げ渡して反応を伺ってから全力で逃走するかの違いだ。

幸いにも『東京キングダム』<sup>【会場】</sup>については、この世界の友人達から口を酸っぱくして十分に警戒する様に言われているし。

「あー。確認して頂いて、ありがとうございます」

「力になれなくてすまないね」

「いえいえ。それと蓮魔先生に関してですが……別に先生の手を煩わせてまで知りたいわけではないので現状は大丈夫です。困ったら頼りに行きます。それよりも氷室先輩。歴史ある魔族というところのよ  
うな魔族を指すのですか？」

「んー、そうね。でもこの程度なら言わなくても、もう習っている内容だから分かるんじゃないかしら？」

「えー……ならば確認になるのですが。その歴史ある魔族って高位魔族のことを指していて、かつナーガ族、吸血鬼族、レイス族、淫魔族、鬼族、鬼神乙女族の6種族のことで合っていますか？」

「そうよ。安心したわ。ちゃんと授業には出ているようね」

氷室先輩による『不良だから、どうせ授業にも出席してないでしょ』みたいな態度に僅かに腹が立つ。でも残念ながらその内容はあくまでも確認にしか過ぎない。

私は魔族については一切合切、習ったことなどない。

だがな。既に鹿之助くんからまえさき市のフードコートにてちゃんと教えられている。4章 『群馬県まえさき市』Episode 1

8

「ははは……。ちゃんと授業には出てますよ。社会人になったら学校の勉強を使うことはほぼないですけど、知っていれば知っている分だけ人生を豊かにしてくれるものなので……」

この言葉に黒田先輩と氷室先輩は心底意外そうな顔をしている。その反面、コロ先輩となお先輩はお互いにアイコンタクトを送りながら私の発言に信憑性があるのだろう。うんうんと頷きあっているのが伺えた。

のぞみ先輩は私に関する情報が、どこまで真実なのか考え込んでいるような顔をしている。

と、まあ……ここまで出そろった情報で分かることは、まえさき市でえつちなお店で働いている方の蛇子ちゃんはナーガ種であり、大々的に掲げられた『のミヤンマー語に類似した文字列と本の文字とは完全に異なるので、他の5種から絞って調査していけばいいだろう。』

幸いにも氷室先輩によつて古代という時代世紀が判明している。ここまで情報が割れれば個人での解析はそう難しくない筈だ。

しかし……そういえば、えつちなお店を開きながら人間風情に敗北した蛇子ちゃんは『親友なら文字を読めるかも』とか言ってたような気がする。ナーガ種の親友とはどんな存在なのだろうか？ 同じナーガ種？ それとも異種族？

「ところで先輩方は、高位魔族6種でナーガ種の親友と言ったらどんな種族が思い浮かびますか？」

「ナーガ種の親友の種族？」

「それは……同じナーガ族じゃないかな？」

「利害関係……ではないのよね？」

利害関係……！

氷室先輩の言葉を聞いた途端。

孤島のグルメ、井の頭五郎みたいな顔になる。

そういうのも考えられるか……！

「利害関係も含めてでお願いします」

「うーん……」

「結構難しい質問だね」

5人とも首を傾げ始める。

このことから分かることは3年生であつても異種族同士の親友関係は思い当たらないらしい。

「利害関係を含めてもナーガ種は、ナーガ種としか……。あつ！ 美貌を追求する仲なら淫魔族と仲良しかもいけないよ！」

「私はナーガ族はナーガ族と最も親しい関係にあると思ひますが……」

「そのナーガ族がお酒好きで金払いがいいのなら、鬼族と親しいかも  
しれないね」

力比べ関係なら鬼神乙女ど？  
「……？」

「難しいわ。消去法で考えるなら、まずナーガ族が影で陰湿に活動するものとして、豪快な戦闘を好む鬼族と鬼神乙女は候補から外れるわね。次にナーガ族は極めて強力な力を持つ個体が多いから、知略系のレイス族と淫魔族も外れるかしら？ となると、そこで考えられるのは影で暗躍することを得意とするナーガ族か……吸血鬼族だと思うわ」

うーん……三者三様だ。

条件によつて親友の存在は多種多様な形態になつてしまふらしい。民主主義に習つて多数決、候補として多く出たもので考えるならば『ナーガ種』になつてしまふ。

私は蛇子ちゃんの友人について何も知らない。

ゆえに漠然としか先輩方に質問できない。

「……わかりました。一緒に考えてくれてありがとうございます」

これ以上、ここにも更なる進展は得られないだろう。

されど十分に情報は集められたと思う。

だから5人に頭を下げ、コロ先輩に託した小冊子を回収して教室を後にしようとする。

「まって。  
……………」

「あ、はい。コロ先輩、なんででしょうか？」  
もう1人友達を呼んでいるの。彼女が来るまで待って

「……………」

去り際に〈聞き耳〉で判別がつくぐらいの声の大きさとでコロ先輩から呼び止められる。

どうやらまだ誰か来てくれるようだ。まさか、こんなにこの言語解析に3年生が集まるとは思っていなかった。

そのおかげでその人物によって無事に調査中の言語が割れればいいのだが。

Episode 126 『超フィジカルおっぱいオバケ』

……

……

……

「んー。言語について正確に調べたいのなら、僕達なんかよりも言語学をマスターしている高坂先生こうさかに聞くのが1番なんだけどねえー」

「今、出張中ではないのよね」

「高坂先生？ 聞いたことのないお名前です。どなたですか？」

「英語の先生だよ。高坂こうさか 静流先生しずる。妖精ちゃんは会ったことないのかい？」

「……。ないですね。めっぼう顔合わせをするのは、紫先生と蓮魔先生、あと校医の室井……先生と彦四郎さんの4人なので」

「それは貴様が毎度問題を起こさなければ会わずに済む話では……？」

「うひい！ 殺さないでー！」

「貴様の——人をおちよくるところが——一番に癪に障る」

まあまあ。彼女は入院期間とかもあるから、高坂先生と会えないのは仕方ないと思うな

「……彦四郎さん？ 彦四郎さんって誰だい？」

「もしかして事務員の沼津さんのことじゃないかしら？ 泥だらけの深緑色のジャージにつば付きキャップを被つたいやらしい目つきで女子生徒を見つめる太った男の人」

魂の色が汚い人

「……。僕の記憶にはそんな人物は存在しないな。僕は可愛くないものが嫌いだからね。泥まみれの汚い男なんか、見た瞬間に忘れていよ」

「ねえ、青空ちゃん。すぐ僕の後ろに隠れるけど黒田さんとの対話……超余裕だったりしない？」

コロ先輩が呼んだとされるもう1人の友達が到着するまでの間。五車学園の先輩である、コロ先輩、なお先輩、のぞみ先輩、氷室先輩、黒田先輩と、5人の先輩に囲まれながら雑談でもして過ごしていた。

今回の件に関しては、なお先輩が誤解を解いてくれたおかげで居心地も教室内に入る前と比較すれば悪くはなく、それなりに円滑なコミュニケーションは取れている。

黒田先輩の心象は相変わらず悪いようで鋭い眼差しがザスザス刺さる。

ただ直接対峙したことの無い氷室先輩からは必要以上に詰問してくるようなことは無くなった。

それどころか氷室先輩は、私の知らない学校の事(主に規則や校則)について色々と手厚く教えてくれたりもしていた。

氷室先輩に対して特に驚いたことは『あまりにも入院生活が多くAO入試や推薦入試枠は取れないだろうし、大学に進学できないかもしれない』という話を持ち掛けたところ。

周囲がざわついたあとに、一呼吸あけてから彼女が五車学園校則四章第20条2項に休学という申請規則があることを教えてくれたことだろう。

内容としては『傷病その他のやむを得ない事情のため累計3カ月以上、1年未満出席することができない学園生徒は、その事情を証明する書類を揃えて休学願(第8号様式)を校長に提出しなければならぬ。』というものだった。

既に室井による私を監禁して自己退院させない趣旨の発言はICレコーダーで録音し、自宅のパソコンの中には保管済みである。

あとは室井から入院期間の証明書を受け取れば、私がやむなく五車病院に幽閉されていたことが証明できることだろう。

幸いにも本について疑った佐びとして、氷室先輩が休学願を職員室へ赴いて持って来てくれた。

ボールペンでの記入だったため、仮に誤字や失敗しても良いように

数枚貰ってきてくれて、ワンツーマンで書き方を指導してくれる辺り……本当は面倒見のよい先輩ではあるのかもしれない。

私との出会い方が最悪だっただけで。

先輩集団の中それも全員風紀委員所属の学生達に1年の私が囲まれているという状況は、夏休み期間も様々な理由で登校している学生にとっては珍しいというより……。いつもの悪さをした青空と現場を取り押さえた風紀委員の面々に見えたのかもしれない。

タイミングによっては校長先生に提出するための休学願を執筆している瞬間もあった。

その時は、さしずめ周囲から〈威圧〉されながら夏休みに反省文を欠かされる青空日葵の姿のように見えたことだろう。

3—C教室前を通る生徒達が、学年を問わずに一旦こちらに視線を送ってから通り過ぎ去って行く。

——ガラララララッ

休学願を書き上げ、あとは必要書類を添付し校長先生へと提出することになって、道行く学生たちがこちらを覗き込む光景を何度か目撃した後。

ついに扉が開かれる音した。

必然的に視線も新たな来訪者側へと向かう。

「おまたせ。さくら先生に頼まれごとされちゃって。待たせたわね」  
ほんとは、でも長いこと時間がかからなくてよかった

——私は。

その人物を見た瞬間に目が丸くなり、左手が自身の口元へと延び息を?む。

私。

釘貫 神葬にとって見覚えのある人物が、五車学園3年生の制服を纏った状態で佇んでいた。

真っ先に目についたそれは、Pカップはあろうかという爆乳。

陽葵ちゃんもダブル蛇子ちゃんも篠崎さんも、神村さんも十分爆乳だが……。いま目の爆乳は、爆乳という単語では収まりきらない超乳級のおっぱいを持った存在。

『青空 日葵』の対義語。

超フィジカルおっぱいオバケの最終形態。

アレはおっぱい大好きな絵師がアニメキャラの胸を盛りに盛りまくったら完成したかのような超乳と例えるのが一番いい大きさだろう。ガルパンの家元みたいな。

メジャーで総丈を測ろうものならば30cmはくだらないそんな乳だった。

その人物のその他の髪の毛はくすんだ金髪をしていて、その長い髪の毛は両サイドツインテールとして結んでいる。やや細目で、氷山の水底で眠る氷結した氷のような色合いをした瞳。気は強そうで吊り上がった細い眉。唇を固く閉ざし、心なしか形も『へ』の字を描いている。

むちむちとした大腿部はサイハイソックスで覆われ、赤ネクタイであることからきつと3年の先輩だ。身長は私なんかよりもはるかに高く、ふうま君（177cm）ほどあり――

アレ？ キララ先生。

数年前にお会いした時よりも、なんか身長が縮んでませんか？

「あんたが噂の転校生……」

キララ先生はツカツカツカと歩み寄って来ては、顔見知りの登場に茫然として座ったままの私の前に立ちはだかる。

しばらく会わない間に、姐さん系の気風から気高い騎士……。

例えるならエバンゲリオンに登場するアヌカ・ラングレーみたいな



氣質になっっているが、そんなことなどはすぐには気にならないぐらいの相変わらぬドでかいお胸のドスケベボディが私の正面、視界いっぱいの特盛下乳が広がる。

顔面格差ならぬ胸面格差である。

このおっぱいは今の私にとっては酷い暴力だ。

爆乳 harassment.

キララ先生による再会の歓喜によるパフパフは普通に窒息するの  
で、再会パフパフされる前にそっと逃げ幅の広い窓側へと反れて逃げ  
る。

「……」  
なお

「あ、ああ！ 妖精ちゃん紹介するよ。こちら——」

「知ってます。キララ先生ですよ？ 鬼崎おにざき キララ先生」

「え？」

「は？」

「？」  
え？

「……えっと、きららさんにどうして “先生” が付いているのか  
は置いといて。……妖精ちゃん。君は彼女を知っていたのかい？」

なお先輩がキララ先生のことを紹介しようとするが、私としては彼  
女……彼女？

まあ。彼女を知っているのと、まさか対魔忍世界こんなところで奇妙な運命のめぐりあわせとして出会うとは思わなくて、自分が青空 日葵であることも忘れて釘貫 神葬として『知ってます』アピールをしてみました。

「えっ？ あんたとは初対面のはずだけど……どこかで会ったかしらっ？」

「えっ」

「え？」

「あ」

ここで自分が今、『青空 日葵』であり『釘貫 神葬』の姿ではないことを思い出す。

「あ、ああー！そっか！そうでした！そうですよね！すみません！」

「……………本当に噂通り不思議な子……………」

「きららさんも彼女が　　<sup>妖精ちゃん</sup>不思議ちゃん”　と呼ばれている所以が分かったかな？」

「ええ。まあ。ちよつとね」

左手を顔の左半分に合わせてながら、まるでアメリカ……………米連製のアクション映画でヒロインが狼狽するかのような動きをする私にキララ先生はキョトンとした顔をしている。

コロ先輩の方を見てキララ先生がコロ先輩の友達なのか、視線を送るとコクリと頷いてくれる。

「すみません、キララ先生！驚かせてしまつて。いやあははは！でもまさかコロ先輩のお友達がキララ先生だったなんて思いもよりませんでした！ちなみにこちらが例の言語なんですけど、先生にはなんの言語か判別つきますか？」

ちよつと挙動不審なギクシャクした動きになつてしまつたが、コロ先輩から回収した魔族語が描かれている冊子を渡して確認してもらう。

「……………」

キララ先生もそんな挙動不審な私に、若干引きつった顔で不審者でもみるような視線を送つてはいたが渡した冊子を取り、ペラペラと頁をめくつて確認し始めてくれた。

Episode 127 『致命的な勘違い』

「妖精ちゃん。妖精ちゃん」

「どうかされましたか？ なお先輩」

キララ先生が小冊子の言語を確認してくれている間に、いつのまにか背後で立っていたなお先輩が身を屈めて耳打ちを始めたので応じる。

「これは僕の興味本位の質問になるんだけど……君ときららさんはどこで出会ったのかな？」

「ああ。キララ先生とは以前とある繁華街で災難と遭遇した際にお会いしまして。裏の世界の怖い人たちに囲まれていた時に共闘して知り合った感じですね」

私の説明に、なお先輩は納得しているようなしていないような仕草をしながら頷く。

でもへ心理学で探りを入れれば、本心は約6割、納得していないのが顔つきとして現れている。

無理もない。今の説明には若干のフェイクが混じっている。

これは渡した情報から直接的に『釘貫 神葬』へ繋がってしまったわな  
いようにするためだ。

ゆえに彼女のとの正確な出会いを説明するならば、出会いは私が  
釘貫<sup>元の</sup>神葬<sup>肉体</sup>だった頃。

まだ私が（新）クトゥルフ神話TRPG世界線の住人であった頃の  
話まで遡る。

……

……

……

当時の出来事から現在まで某アニメに準えるならば、きつと「あら

すじ”としてはこうだ。

私は何処にでもいる探索者、釘貫 神葬。

同探索者で親友の雷いかずちともえ 巴と遊園地へ感度3000倍になる怪しい薬の調査に出かけて、ハゲた緑尽くめのデブの怪しげな取引現場を目撃した。

例の取引に興味深々。夢中になっていた私は、背後から襲撃してきた対魔忍世界のオークに気づかなかつたのだ。

私はその場で気絶させられ、目が覚めたら……。

ヨミハラと呼ばれる地下都市の一角に存在する『高級娼館アンダーエデン』という娼館に囚われの身となってしまった！

2人の対魔忍と共に探索者としてアンダーエデンを脱出する私達。

釘貫神葬が逃げ延びていると奴等にバレたら、また身体を狙われ周りの友人達にも危害が及ぶ。

(その後は色々あつて) ナイ牧師の転生によって対魔忍世界に訪れることにした私は肉体の名前――

「青空 日葵」

と名乗り、対魔忍から離れ対魔忍世界で一般人枠で人生を謳歌するために、父親の転勤の都合でやってきた新天地。五車学園に転がりこんだ。

たった1人の異世界人、見た目は子供、頭脳は大人。

私の名は釘貫 神葬！

：

……

……

……

：

はい。

はい。じゃないが。

まあ、クトウルフ神話世界線に居た頃、その拉致された先。

アンダーエデンの調教部屋で目が合わせたのと同時に知り合った探索者の1人が、正面で本を読んでいる……女性。

女性……女性、が『鬼崎おにざき キララ』先生だったというだけの話だ。なお先輩に説明した『裏の怖い人』たちというのは、主にオーク共と奴隷商人のオーク。

『共闘した』というのは、一足遅れて救出に来てくれた対魔忍2人と協力関係を築いたことを指している。

そういえば。

キララ先生と私、その他に2人。

高級娼婦として売られそうになっていた探索者同胞が居たものだが、彼等は元の世界で元気にしているだろうか？

「……………」フツ

あーあ。過去の思い出を振り返ってたら、懐かしくなってきた。あつた。

そのヨミハラのアンダーエデンへ救出へ来てくれた2人の対魔忍。

『秋山あきやま 凜子ちゃん』と『水城みずき ゆきかぜちゃん』

あの2人も、この世界の何処か。

遠い場所にある対魔忍組織内で元気にしているだろうか？

腐ったこの世界で対魔忍が必要な存在かもしれないが、あの結果に懲りているのなら大学進学や社会経験を踏まえて最低限必要な知識を身に着けて対魔忍の道を歩むか、対魔忍を辞めて普通の職に就いてくれていると良いんだけど。

「えっと、転校生。あんた名前は？」

「……………」ああ（今は）『青空 日葵』です。キララ先生」

「青空 日葵ちゃんね……。どうしてあんたが私のことを 先生」

って呼ぶのかは分かんないけど、ひとまずこの本は返させてもらおうわ」

「ありがとうございます。……いかがでしたでしょうか？ 私にはまだ対魔忍世界（魔側）の語学は疎くてどの魔族の言語か判別がつかなかったのですが……先生なら何かわかりました？」

「そうね……」

キララ先生は平常時にはつり上がっている目尻側の眉の角度を平坦にして、困ったような顔をする。

この顔は、言うべきか言わないべきか悩んでいる時の顔だ。でも流石は先生。

既に何かしらの情報を掴んでいるらしい。

表情や仕草まで一緒なのだ。

これは確実に彼女（？）で間違いない。

やっぱり情報通なホステスのママは違うね！

「どんな情報でも構いません。得られた情報を足掛かりに更なる調査を進めることは私の得意分野ですので」

「そう……。なら、この言語は鬼族の言語じゃないことは確かかしら……？」

『鬼族の言語ではない』ですか……」

「ええ、コロちゃんの方から大体話は聞いているけど、青空ちゃんはその本の解読をするために情報を集めているのよね？ 力になれなくてごめ——」

謝ろうとする先生を遮り、熱烈な1人拍手を送る。

お気になさらず。キララ先生。

言語に関しては先生の専門分野でないことは理解していますから。

ただ。先生は『こっちの世界の生活歴が長いので知っているかなー？』程度の質問でしたし。

「流石は先生。流石キララ先生ですよ。サスキラ。十分です。これで古代語の吸血鬼族、レイス族、淫魔族、鬼神乙女の4種類まで調査の範囲を狭めて調べられそうです」

「あ、ありがと……えっと。青空ちゃん。………学園内の噂で耳にしている人物像とは、かなり違うわね？」

「ええ。よく言われます。……フツ。噂は所詮うわき。ということですよ」

「そ、そ、そ、そう……」

「この場に蓮魔先生がいらっしやれば『火のない所に煙は立たぬ』と仰られるでしょうね」

せつかくド肝を抜かれたかのような顔をしているキララ先生へ、したり顔をしながら恰好をつけているのに蓮魔先生大好きっ娘が余計な一言をボソリと呟く。

いいんだよ。そういう余計な事は言わなくて。

上級生への暴力行為はともかくとして、他は偶然の産物だったりするんだから。見逃してよ。

まあ、これで五車学園にキララ先生が在学五車学園の制服を着用しているという事は生徒として在学・在籍しているということは、鹿之助くんの恐怖症も、陽葵ちゃんの狂気状態も先生の力があれば早期に治せるだろう。

それ以外でも2人の精神状態が今後、神話生物共に狂わせられたとしてもキララ先生に治療および支えてもらえる期待ができるのだ。〈精神分析〉の勝手がわからない私にしてみればこんなにも心強いことはない。

ただ心配な要素としては、五車学園の校医は揃いも揃って曲者揃いなので……。

ですが、精神的ケアがお得意のキララ先生なら大丈夫でしょう！

個性：おっぱいで生徒達を治療して行ってあげてください！

でも〈精神分析〉をするのに筋肉はふぱふは人を選んで治療してく

ださい！ 鹿之助くんには刺激が強すぎると、子供は窒息死してしまいます！

「ところでやっぱり引っ掛かるのだけど……。私のことを別の誰かと勘違いしてない？ 青空ちゃんみたいなのは一度会ったら忘れられないような存在感だけど、私にはあんたと出会った記憶がないのよね」

ここで再びキララ先生が腑に落ちない顔をして私のことを見つめる。

嗚呼。『釘貫 神葬です』って一言正体をこの場で暴露できれば、すぐにわかってもらえるのだろう。

だが背後にはコロ先輩、なお先輩、のぞみ先輩、黒田先輩、氷室先輩までもが事の成り行きを見守っている。

同じ探索者<sup>世界の同胞</sup>だって伝えたいもどかしさが非常に歯がゆい。

だから確認のために、もう一度。鬼崎<sup>わにぎさき</sup> キララ先生の名を呼ぶ。

「ハハア。まさか。『おにぎき キララ』先生ですよね？」

「私は、『おにさき きらら』よ？ やっぱり人違いね」

「……」

「……濁点の有無など誤差では？」

「……別人の可能性を誤差で片付けようとする下級生と出会ったら、インパクト強すぎて絶対に忘れられないわよ」

キララ先生は腕組みをはじめ、私の方が誤解していることをジト目を細めながら指摘してくる。

いやでも。その胸に油を投与しなきや実現できないような人外離れしたデカパイおっぱいと、女性の姿なのに<sup>オトコ</sup>漢らしさムンムの身長が高いことと、なお先輩・のぞみ先輩以上にガチガチの女装をしているのは、間違いなく〈精神分析〉に長けたキララ先生だと思っただよ



なあ。

そのおっぱいの大きさはね。現実的じゃないです。  
かくなる上は……。

「キララ先生」

「何?」

「失礼します」

「えっ。きやあああああああああああつ  
!?!?!?」

股間に生えていると思わしい『TRICK上田二郎級―馬級デイルドの付属品(なまもの)』具合を確認するため、スカート越しから彼女の股にぶら下がっている筈の巨根・デカマラーを掴みにかかる。

……………うん?

あれ?

ない。

無くなってる。

「ごっちも失礼します」

「ちよあああああああああああつ  
!!!!!!」

股間に馬級デイルドが付属していないことについて、私の知っている鬼崎おにざき キララ先生と目の前の鬼崎おにざき きららさんは別人であること。本当にただの他人の空似の説が濃厚になってきたが、オネエでいることに飽きてシーメールからニューハーフへTSしたことを考慮する。

だって、ほら。

ここ対魔忍世界だし。そういう薬もあるかもしれないし?  
(新クトゥルフ神話世界)  
私の前世世界にも感度3000倍なんて薬が出回ってくるぐらいだし?

目を瞑って五感の触覚に全神経を集中。

制服越しに胸を、スカートは捲り上げて生尻もニギニギと鷺掴みにする。

だ、だって、ほ、ほら。

世界には同じ顔の人間が3人いるって言うもんね？

か、確認は大事だもんね？

彼が私の想像しているキ、キララ先生で、あるならば、これぐらいのスキンシップは笑って、愛のホールドで押さえつけてくる程度だ、だし？

……。

……。

……。

うん。

「uおっndば bいetぶ rるogenん wぶordるenん！」  
(訳：こりや裏切られたね！)

□

□

□

□

□

「なっ！ なあっ……!!!」

胸も、尻も。天然の生乳と生尻。

これは油やシリコンの類じゃない。これは生粹の脂肪による柔らかさだ。

嘘だろ……!?! この世にはこんなデカパイが実在するなんて……!

要するに彼女は鬼崎おにやまき キララ先生ではない。

同姓同名異性の同じ容姿、外見上は一寸の狂いもないドツペルゲンガーのような対魔忍世界側の住人。

つまり、きららさんのいう通り別人。

ケツ。紛らわしいドスケベボディしやがって。

このオツパイセンがよオ——

「んんんなあにいすんのよおおおおおツツツ!!! このバアカア女アアアアア!!!」

ベエツチーン!!!!!!

エバにおけるアヌカ（以下略）のような悲鳴と共に、教室内にきらさんの怒りの平手打ちが私の胸部ギリタツタ崖に突き刺さる。

「ヌッッ」

目を瞑って触覚に全神経を集中させていたため、見えないその攻撃をへ回避＜することはできない。

うん。もうこれ、平手打ちというよりも相撲における張り手、だね。斜めから突き刺さり払い上げるタイプの張り手。

ビルド2ダメージ・ポーナス1D6以上を優に超えていそうな一撃が私の胸部を正確に捉える。

空に打ち上げられた衝撃で、地面の木の葉が巻き上がるように私の身体が宙を舞う。

「おぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ!!!?」

まるで——

まえさき市でえつちなお店を開いている蛇子ちゃんに投げ捨てられたときのような——

錐もみ回転の動きで、空中での激しい横回転を加えながら激闘のデジャウと共に吹き飛ばされる。

このパワーは絶対に人じゃない。

人間とは到底考えられないような拳に吹き飛ばされ、硬く尖った鉄パイプと木製の机をクッションにして、私はこっちの世界の鬼崎おにざききからオツパイセンを怒らせたことを深く後悔するのだった。

胸はデケエのに心の器はちいせえなア!?(開き直り)

20章 『夏だ！海だ！水着だ！開戦だーッ！』  
Episode 128 『くさぶき城―海水浴場』

照りつく太陽。

晴れ晴れとした蒼天。

見渡す限りの砂浜。

砂浜へ波状攻撃を続ける波。

浜辺に立ち並ぶ色彩豊かなビーチパラソル。

遠方から響くは黄色い声。

ほんのちよつとの磯の匂い。

まさに学生時代の夏休み。

年に1度は求めていた景色が眼前に広がる。

「海だ……」

私は鹿之助くんに誘われて海のある大地の海岸沿い降り立っていった。

場所は茨城県の太平洋に面した沿岸沿い。

この地は茨城くさぶき―海水浴場と呼ばれている。

群馬県民の他にも埼玉県民やら栃木県民やらが集結する対魔忍世界では “比較的” 安全らしい海岸沿いらしい。

念のため東京キングダム情報を調べる片手間に今回の浜辺町について調査をしたが、これと言って怪しい点は見つからなかった。

このことから地域に根付いたローカルな問題はないのだろう。

仮にこの手の〈図書館〉の情報検索で引つ掛からない情報があるとするならば、既に現地で活動しているナニカを警戒した方がいいということだ。

怪しい宗教団体にしかり、神話生物にしかり、ヤリモクの男共にしかり、盗撮魔にしかり。

「やはり一年に1回ぐらいは海へ遊び来るのは娯楽として外せない要素だよな」

「夏休み期間に開放される五車学園プールとかでは得られない解放感と気分転換だよーねー!」

「なあなあ、早く海辺に行こうぜ!」

爽やかな青一色のキャンパスを目前に考えふけている間に、通学を最も共にする3人も私の両隣りに並ぶ。

彼等の言う通り、五車町は内陸の群馬県である以上……海はない。

だからこそ彼等はそれぞれの仕草で海へ来たことに対する感情を爆発させていた。

ふうま君は左手で目元に影を作って広大な海水に目を見張り、まえさき市で3時間ウンコしていた蛇子ちゃんは陽キャさながらなインヌタ栄えしそうなジャンプで喜びを表現し、鹿之助くんは私達よりも一歩リードした砂浜に躍り出て大手を振りながら目的地の方角へと催促する。

「鹿之助ちゃん、急ぎすぎだよー!　まずは水着に着替えないと!」

今にもその五車学園の制服姿のまま、海辺まで駆け出してしまいうな鹿之助くんを蛇子ちゃんが制止する。

ふうむ。

それにしても鹿之助くんは、私を含め3人がラフな私服で来たというのに彼だけは何故、五車学園の制服姿なのだろうか?

いよいよ本当に外出先に来ていけるような服を持っていない説が脳裏を過ぎるぞ。

あるいは持つてはいるものの着用することに抵抗があるか、だ。

確かに、人間風情に泣かされた高位魔族の方の蛇子ちゃんと殴り合った時に購入した衣服は私の大喰いの泥濘による一撃で血反吐に塗れてしまったわけだし……。

またこの夏休みの期間で、私の方から彼の私服を購入するためにどこか旅行計画を立ててみるのもありかもしれない。

たまには誘われるばかりの外出より、こちらから勧誘するのもアリな筈だ。

そのためには刻々と着実に近づいてくる例の案件を突破しなきゃ。だけど。

「あ……あ……ああ……！そ、そうだよな、着替えないと、だよな……」  
「？」

それにしても鹿之助くん。先ほどから頬をピンク色に染め上げて私の方をチラチラと目配せしてくるが、これはどういう趣旨があるのだろうか？

ざっくりと自身の身なりをチェックするが、今日のコーデイネットは別段変な部分はないはずだ。

いつもの有事に備えた衣服にアロハを混ぜている。

サングラスなどのアクセサリーに加え、臨機応変な対応が可能なように2種類の水着と小物が入ったハンドバッグ。

浮き輪、救命胴衣、熱中症対策に持参した冷たい飲み物が詰まったクーラーボックス、〈ブラックシヤック〉兼スイカ割り用の小玉スイカ、活動拠点用パラソル兼〈大きな棍棒〉、塹壕を掘るための軍用スコップ兼〈大型ナイフ〉……。

いずれも探索者として普通の、至って標準の『CALL of CTHULLU クトゥルフ神話TRPG』（152頁）に持ち物に頼る”に抵触する程度の標準的な装備だ。

「水着？ ならどこかの物陰にでも隠れて、さくつと服を脱げばいいんじゃないか？」

「もーっ！ふうまちゃん!？」

「な、なんだよ……」

「ふむ。ふうま君の案は実にお金をかけない方法として名案だと思

ますが、海に限らず人の集まる場所には一定数の輩が現れるもの。私としては物陰ではなく更衣室で着替えたいですね。その近辺には貴重品を預けるための信頼できるロッカーなどもあるので、そちらで荷物も預けたいのですが……いかがでしょうか？」

「お、おとおお俺は日葵の案に賛成だぞ！俺は更衣室があるならそっちで着替えたい！」

「おおー日葵ちゃん！今日も事前調査はばっちりって感じだね！」

私の案に鹿之助くんはふうま君の元に走り寄って来ては激しくキツツキのように首を縦に振り、蛇子ちゃんは私がハンドバッグから取り出した手帳の中身を背伸びしながら覗き込んでいる。

ふうま君の方も、乙女心をちよつとよくわかつていない様子の表情を浮かべているが、まあ下に水着を仕込んでいるとはいえ、こんな世界ならば生脱ぎ動画や写真も加工次第で金になるだろう。

私の時代でさえAirDropを用いた盗撮動画や画像の共有やporno hubやらEXVIDEO、FC5などによく流出していたのだから。

微銭をケチったせいで、自分のつゆ知らぬ場で回りまわったの痛い目を見るのは避けたい。

まあ、それでも更衣室内部に盗撮機が隠されていないとは限らないだろうが。

「まあ、お前達がそういうなら俺は構わんが……」

「じゃ、決まりですね。更衣室はこっちです」

初めてまえさき市に訪れた時のように3人を先導する形で、メモを片手に引率する。

これもまたインペリアクロスの陣形を取り、今回はまえさき市よりも人通りは多いため3人……（特に小柄で簡単に人の波に飲み込まれてしまいそうな）鹿之助くんと蛇子ちゃんがすぐに目に入る位置でお守をすることになった。



「こういう時、日葵ちゃんが居ると頼りになるよね」  
「だな」

蛇子ちゃんと鹿之助くんがヒソヒソ話をしているので、視線は向けずに〈聞き耳〉を傾けて会話を盗み聞く。

どうやら2人は私を称賛してくれているらしい。

これには、思わず口角が上がることを押さえるにはいかなかった。

「な、なあ……蛇子。やっぱどうしてもあの水着じゃなきゃダメか？」

「何言ってるの。あの水着だからこそ、鹿之助ちゃんらしさがあると蛇子は思うな！」

「ううう……でもよお……」

「でもアレ以外の水着は持ってないでしょ？」

「そ、そうだけど……」

「大丈夫だよ。もう一人の陽葵ちゃんの話では『日葵ちゃんは多様性に特化してるから理解力もある』って言ってたし」

「そ、そうかなあ……？」

続けて2人はまたもや何か気になる話を小声で続けている。

間違いなく話題としては、鹿之助くんの水着に関する内容らしい。

私が五車学園で拝観できなかった鹿之助くんの水着のお話である。

そして陽葵ちゃんの情報、私が多様性に特化しているから理解力があるって話は一体何のことだろうか？

も、もしや鹿之助くん、見かけによらず露出癖があつて際どいブルーランパンツの水着を持って来たとか???

鹿之助くんのアレの大きさは当然のことながら知らないが、アレがクツキリわかるぴっちり水着パンツとか?????

い、いけない……想像を膨らませすぎて口角が上がるレベルじゃない。

歯がむき出しになつちゃうほどに口から笑いが零れてしまう。

い、いったい、鹿之助くんはどんな水着を持ってきたのだろうか？  
もう既にw k t kが止まらない。キター（。▽。）。ギヒッ。  
ギヒヒヒヒッ。

……  
……  
……

「日葵ちゃん。着替え終わったー？」

「ええ、こちらは問題なく」

設備の行き届いた建物内の更衣室前にて、男性陣である鹿之助くんとふうま君と別れ、私と蛇子ちゃんは女性更衣室で水着に着替えを済ませる。

当然のように盗撮カメラらしきものは備え付けられていたが、ネジ山を叩いて破壊、あるいはカメラ自体を回収させてもらった。

全部、必要な部品だけ引っこ抜いて海水に浸して粉にしてやるからな。

さて水着の話をしよう。

本来であれば、お胸が断崖絶壁マリアナ海溝であっても肌の露出がちよつと過激なマイクロビキニ系の露出が際どい水着を着て鹿之助くんを脳殺したいと思っていたのだが……。

私は何分、悪い意味で洋梨体系なものであることケツがデカイ。

身体の至る所に古傷である銃創やら大喰いの泥濘に貫かれた刺突痕が残っていること歴戦の戦士みたい。

ゆえに元来の身体の持ち主である『青空 日葵』が所有していた中学生時代に使っていたと思しき色気のかけらもない競泳水着をやむなく着用していた。

マイクロビキニは止む無く青空家でお留守番である。

実のところ……当日直前まで陽葵ちゃんの勝負服である橙色ジャケツトの下に着用しているような、メッシュ系素材のモノキニビキニの着用も検討したのだが……。

やはり皮膚に残された銃創痕が隠しきれないことや、一緒に海へ訪れた鹿之助くん、蛇子ちゃん、ふうま君が、そんな傷だらけの私とつるんでいるところを第三者から見られてどのように思われるか考慮した結果として、着用を断念せざる負えなかった。

しかし、この古傷はなかなか周囲への威圧感が出ているので、小心者なチンピラ程度の不埒な輩を露払いするにはうってつけかもしれないが……。

わざわざ生傷を晒さずとも世間一般には紋々もんもんタトウーストツキングなる便利な道具が存在しているのだから、生傷痕ではなくそちらを周囲への〈威圧〉用代用品として利用すればよいし……もう一種の水着とは別に持ってきていてもいる。

準備は万端だ。

「おおー。日葵ちゃん、意外とシンプルな水着だね！」

「……………」

「日葵ちゃん？」

「う、うん？」

「ぼんやりしちゃってどうかしたの？」

更衣室内で蛇子ちゃんと合流する。

いつもなら何かしらの返事ができるのだが、この日ばかりは蛇子ちゃんの水着に釘付けになり何も言い返せることはなかった。

彼女の水着は至って普通の……。

普通の？

私の時代ではハレンチな水着でも、この時代では普通なのか？

……普通のフリル付きホルターネックのビキニだった。

白い肌が黒色の水着を強調し、その腹部のくびれ具合と縦割れのおへソ。

ちよつとばかりの腹筋によって引き締まった腹部は、プロポーシヨンは道行く男共の視線を独り占めできることだろう。

拳句の果てにはその約150cmの小柄な身長にDとEカップもする二つのたわわが……………。

もう……………なんか、なんていうかね……………。

水面張力が働いている、コップから零れそうな水。

暴力的であった。もはや暴力である。これは断崖絶壁の貧乳青空日葵に対する暴力である。

「いえ……………えつと……………」

「？」

「いえ……………すみません。思わずしなやかで綺麗なそのスタイルに釘付けになってしまいました。そのホルターネックの水着も素敵ですよ。蛇子ちゃんは背中も綺麗なので肩甲骨とかも丸みを帯びていて撫でたくなるような肌ですね」

「えっへへー♪」

フィジカルおっぱいに殴られて半分思考停止しながらも、彼女を褒めると嬉しそうに笑顔を見せる。

さあ、私はこの紋々のタトゥーストッキング（腕）をいつ着けるべきだろうか？

こう言つては何だが、まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんはあどけなさの残る童顔のカワイイ女の子だ。

五車町にいるときは周囲の顔面偏差値が全体的におっぱいと合わせてインフレ気味だからさほど気にならなかったし、まえさき市シヨッピングの日はさほど周囲を気にしていなかったから気づきに遅れたのだが……………。

要するに周囲からひときわ目立つほどに、彼女はかわいい。

てか、鹿之助くんもかわいい。

ふうま君はそこそこカッコイイ。

私は彼等と比較したらビミョーかもしれないが……。

とにかく、チンピラ・輩に囲まれたら面倒な事になりそうなのは何となく察した。

『鹿之助くんと2人きりで海を楽しめる瞬間があつたら良いな』と  
思っていた時期が私にもあるけど、今回ももしかすると洋館事件み  
たいに団体行動を心がけなければならぬだろう。

……

……

…

「おっ。着替え終わったか」

女子更衣室から出た先には、シンプルかつ無地な青色の短パン水着を着用したふうま君が、他県の顔面偏差値平々凡々な女子達からキヤイキヤイ囲まれながら私達の着替えを待っていた。

あれは逆ナンパだ。

ふうま、あの野郎。

五車学園を離れてからもこうやって影で??ふうまファンクラブのメンバーを稼いでいるのか。

ふうまコノヤロウ。

「ふうまちゃん！ おまたせー！」

無自覚系・女たらしのふうまの所業にメラメラとたぎる思いを馳せている私をよそに、隣に立っていた蛇子ちゃんが即座に動く。

ふうま君に群がるナンパ女どもを千切っては投げ千切っては投げの要領で斬り込んでいき、彼に抱き着きピツタリと胸を押し付けるような形で彼女アピールをして烏合の衆を散開させる。

やっぱりそこらへんの女性では、まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃんのスタイルを含めた美貌勝る存在はいない。

もちろん、そこには私も含まれている。

蛇子ちゃんの登場で直ちに彼女達は『ケツ、彼女持ちかよ』とブツクサ文句を垂れながら雑多な人ごみの中に消えていった。

「……あれ？ 鹿之助くんはどちらへ？」

と、ここで彼の傍らに鹿之助くんがいないことに気が付く。

私としてはあのモブにもみくちやにされながら、鹿之助くんも囲まれてヨチヨチされているのかと思っただがそんなことはなかった。

私の人生におけるモブ共め。

鹿之助くんに関わらないことで九死に一生を得たな。

ある程度培ったヘキツクと、親から受け継いだ 初期値 1% へマ

シャルアーツが炸裂するところだったぞ。

「ああ、鹿之助のやつなら……」

ふうま君の視線が男子更衣室の入り口に向けられる。

自然と私もそちらへと視線が向く。

「ううう……」

居た。

彼は男子更衣室の入り口で身体の大半を隠して、こちらの様子を伺っていた。

まるで凶暴な肉食獣に怯えて物陰から様子を覗き込む小動物のようだ。

今の状態から分かることは、彼の視線は、私達の集団………というよりも私に向いているような気がする。

自意識過剰かもしれないが……彼と視線がかなりの頻度で合うのだ。

でも視線を合わせても先に彼が逸らしてしまうのだが。

………ということは、私が凶暴な肉食獣に見えるってこと?!?!?

まって、そんなことはナイヨー? 怖くないから出ておいでー?

あ。ついでに。

彼はあの女の子のように長い髪の毛をサイドテールのように髪の毛を結っていることがここから観測できる。

「水着に着替えてから、ずっとあんな調子でな……」

ふうま君は困ったように片手で前髪をいじる。

「もー。鹿之助ちゃん、大丈夫だってば！ 鹿之助ちゃんが一番、海に行こうとしてたじゃない。早くこっちにおいでよ」  
「ううう」

見かねた蛇子ちゃんが笑顔で手招きをするが鹿之助くんは出てこない。  
「出てこないどころか、更衣室内に引っ込んでしまった。」

かわいい。

かわゆい。

かわゆす。

かわいいの三段論法。

鹿之助くんは、かわいい。

ギヒヒヒヒッ！

「……」 チョイチョイ

「？」

アーケードゲームのもぐら叩き状態の鹿之助くんに見惚れていると、背後から蛇子ちゃんが突いてくる。

「……………」 スッ

彼女は言葉には現わさなかったが『鹿之助くんを迎えに行つてあげて欲しい』というサインをジェスチャーで私に伝えてきた。



「では荷物を少しの間だけ、お願いします」  
「おっけー♪」

パラスルやクーラーボックスなどの私物を待機する2人に預け、私は救命胴衣片手に男子更衣室へと近づく。

流石にズカズカと男子更衣室内に入るわけにもいかないので入り口で立ち止まる。

「鹿之助くん。大丈夫ですか？ 何処か具合でも悪いのですか？」

「い、いや、そういうわけじゃないんだ。ただ……」

「ただ？」

「ただ、その俺の持ってきた水着……その日葵に見せるのちよつと勇気があって、さ。でも、えっと、でも持ってきてちやったし、もう着ちやっただけど……、その、見せる自信が出ないんだ。……その、だから。その、日葵は俺の水着……見ても、笑わないでいてくれるか？」

鹿之助くんは、カーテンの扉一枚隔ててなんか随分な前置きをしてくる。

大丈夫だ。むしろ私としては早く魅せてほしいのだが。

早く！ 早く！ Hurry up!!!

くそっ……じれってーな!!! ちよつと、やらしい雰囲気になってくるじゃないか！

いや、これはそういうプレイか??? 焦らしプレイ???

「んもう。何言ってるんですか。大丈夫です。どんな格好でも笑いませんよ」

「ほ、ほんとか？ じゃあ……」

すごすごと鹿之助くんが出てくる動きが見えたので、私は振り返って蛇子ちゃんとふうま君に引っ張り出しが成功した趣旨を送る。

それから、鹿之助くんの方に視線を――

（。D。）

……今、この更衣室のどこかで落雷の音が聞こえなかったか？

ドツピユツ♥ピツシヤン！みたいな音。

モジモジと内股になって恥じらいながらも男子更衣室から現れた鹿之助くんの姿に、私はあんどりと口が開くのを止めることができなかった。

でもそんな私に鹿之助くんがショックを受けてしまわないよう、自然な姿勢で口元を隠した。

だって、その場には……。

だってさ。

だってさあ……？

「よ、よお……その、笑わないで、くれて、さんきゅー……な？」

恥ずかしさのあまり、泣きそうな顔になりながらも、不自然な笑みを浮かべ姿を現した彼に釘付けになる。

〈改造した釘打ち機〉が貫通したようになる。釘貫する。

そこにはワンピース型のフリルスカート付水着を纏った鹿之助きゅんが居たのだから。

「

私は転生前も、転生後も生まれついでの子だ。

だが今こそ、男性等における股間に雷撃が落ちるといった感覚を子宮で感じ取っている。

やばい。やばいわ。こんなの誰が想定していたよ？

学校でプール開きの日に彼はもしかするとスクール水着を着用しているかもしれないと妄想を膨らませていたが、それが現実になるなんて想定なんかしてゐるわけないでしょうよ。いや、いいなーぐらいでは思ってたけど、ここは学校じゃないんよ。公共の場なんよ。公共の場でその恰好は破壊力の塊なんよ。

鹿之助の状態について、再度その御尊顔、御身体、御召し物を肉眼で認識する。

今、彼は普段下ろしている長い髪をハイツインテールで髪のを結わき、朱色のシユシユで髪留めしていた。白のホルターネック式の根元には黄緑色の蝶結び状のリボンがデザインされており、スクール水着の生地はエナメルのように光を反射させている。フリルスカートの色合いもカキ氷にメロン味のシロップを振りかけたような色合いで、私の視点からでは拝見することはできないが、しゃがみこんで彼の腰元まで視点を降ろせば歩きたびにふわふわと持ち上がるスカートすそ越しに彼の玉袋をみることができるともかもしれない。

キンタマ☆キラキラ☆金曜日

さらに左の足首にはピンク色のリングバンド、右大腿部には白のフリルが付いた黄緑色の装飾品を身に着けている。右肩には黄色生地の特トバックを掛け、鹿之助も鹿之助くんで夏の海を満喫しようとしたのか、なんか、オイルとか、シユノーケルとか、シヤベル（園芸用こて）とかが入っているの見える。

「エンツ!!!」

「あぁっ！ひ、ひまりい!?!」

「プパア——」

ああ……駄目だ。

直視したらこれは私が死ぬ。神々しくて死ぬ。鼻から血を吹き出して死んでしまう。

既に理科室に存在する刺激系の化学物を直に臭いを嗅いでしまった青年のように毒物によって致命を喰らったかのように、あまりの衝撃で背後に二、三步フラついてしまう。

なんか。海に来たばかりだけど、目標の8割を達成して満足した私が今ここにいるわ。

ふら付いて仰け反る私に、鹿之助くんが私を思っただ直ちに私の手を掴んで転ばないように咄嗟に引き寄せてくる。

オーバークルとはこのことを言うのだろう。過剰な鹿之ニユウムひやくの摂取に私は完全に急性鹿之射線症よ。間違いなく日爆ひやくだわ。日爆。鹿之射崩壊。

だが小柄な鹿之助くんが、蛇子ちゃんより大柄な私をふらつき倒れそうになるのを防げるわけもなく……。

むしろ鹿之助くんが私の手を掴んだことで、元から重心が安定せずバランスの取れない私が自分を制御できるわけもなく――

「わあっ！」

鹿之助くんが私に覆いかぶさるようにして転倒してきた。

――

自身の意識とは別の意識化で、咄嗟に彼を抱き枕を抱きしめるようにして保護に回る。

自業自得とはいえ、叩きつけられた背中、腰、肩に鈍痛が走るが別にどのような怪我をしたところで行動に影響が及ぶわけではないのでこれはセーフだ。

そんなことよりも――

「わあっ……はっ……はあっ、はっ、はあっ……」

2人で纏めて転んだことで鹿之助くんと私の距離は、未だかつてない程に接近していた。

彼は支えきれずに自分もろとも転んだことにびっくりしたのだろう。

涙目になった鹿之助くんの驚いたような、困惑したかのような小さな溜息の風が私の顔面に掛かる。

彼の爽やかな口の匂い。

天然のルビーのような紫がほんのり混じった緋色の瞳。

「……………」

近い。

それぐらいいしか分からないほどに私達の近い。

まるで創作界限で時折見られる、異性と狭いロッカーの中に隠れた時ほどの距離。

それは背面の鈍痛を忘れさせてくれるほどに濃厚なひとときだった。

今、何も言わずに首を少し動かし顔を斜めに配置して、彼の唇に数センチ自身の唇を近づけるだけで、彼のふるんとした柔らかい唇を重ね合わせ彼を独占できるだろう。

「おい！大丈夫か？」

鹿之助くんのマットとして寝そべりながら濃密な時間を過ごしている私にふとふうま君の声が掛かる。

同時に現実には引き戻され、まだ告白もしていないのに私は今何をしようとしていたか自身を咎めるような冷静さを取り戻す。

「ああ、すみません。ちょっと立ち眩みしてしまいました、転んでしま

いました。鹿之助くんは大丈夫でしょうか？頭は打ってませんか？」  
「あ……。あつ……。ああ、大丈夫……。だ。日葵が護ってくれたから……」  
「ならよかった」

私はふうま君の手を取り、立ち上がる。

同時に鹿之助くんのは、海上自衛隊が海での漂流者をへりで救助するように抱きかかえたまま抱き起こした。

いつもなら雰囲気ブレイカーふうまに憤りを覚えていたところだが、この瞬間だけは感謝する。

本当に私は何をしようとしていたんだ？

告白して、互いの距離感を確かめ合って、それからキスがセオリーだろうが。

何、過程を3つ4つ吹き飛ばして愛撫とセクロスの前段階であるキスの過程にぶち込もうとしてんの??? 恋愛のABC恋愛のABCとは。1980年代に流行った言葉。Aとはキス（接吻）の事を指す。Bはペッティング。ペッティングとは愛撫の事。Cはセックスを指す。2022年の現代でも既に死語であり、対魔忍世界の西暦2078年での感覚では、われわれの時代から見た第二次世界大戦時代の流行語のような感覚となる。のAキス（接吻）を何いきなりやろうとしてんの????  
お前、女だから許されるかもしれないけど、男が逆のことをやったら暴行罪で起訴されてもおかしくないことしようとしていたよな???  
マジで、客観的に自分を見ような????

「……………」

さて、ひと段落ついたところで周囲を見渡す。

周囲の観衆は私達が転んだことで立てた物音に驚き視線をこちら

に向けていたが、その殆どは他人には無関心な様で私達が無事であることが確認できるとすぐに各々の休日を謳歌するための日常に戻っていく。

残りわずかがまだ私達に興味を引いているのか、視線を向けたままだった。

周囲を見渡し現状を確認する私は置いて、やがて蛇子ちゃんも近寄っては鹿之助くんの安否を確認して彼をからかって談笑している。

ん？ 自分を客観的に視る？

この世界は対魔忍世界？

「それじゃあ！ 気を取り直して、ビーチに行こう！」

蛇子ちゃんの仕切りでムードを取り戻し、今度はふうま君を先頭に来た道に戻る。

建物から出た私達をまばゆい太陽が私達の素肌を照り付ける。刺すようなチクチクとした紫外線の他にも、何かが心の奥底に引っ掛かって太陽のような感覚が心を刺され、後ろ髪を引かれる。

この杞憂が何を指し示しているのか、左手を口元に当てて右手は左肘に付けながらへINTロールで……――

Episode 130 『迎え撃て！（いざ行かん！）  
水着チャレンジ！』

念には念を入れよ。と私の頭脳が囁いている……。

「すみません、蛇子ちゃん。忘れ物をしてしまったみたいで、少しだけ待っていてもらえますか？」

「そうなの？ 鹿之助ちゃん、ふうまちゃん。日葵ちゃんが忘れ物しちゃったんだって」

「そうか、待っているから早く取って来い」

「早く来ないと置いて行っちゃうからなー！」

「すみません。すぐに戻ります」

一旦3人と別れ、来た道をそのまま一人で更衣室に戻る。

何度も自分達を客観的に捉えた時に発生するあの不安がぬぐえない。

杞憂かもしれないが、そもそもこの世界は対魔忍世界なのだ。

元居た世界のクトゥルフ神話世界とは異なり、男よりも女が狙われやすい世界。故意に狙われる世界。男女平等生贄よりも女性優先生贄世界なのだ。

ならば鹿之助くんが女性の水着を着て、女である私を脳殺するほどに麗鹿之助平パワーが有り余っている存在ならば私も対策を練るべきだ。この世界で舐められたらお終いなのだ。

その為の準備は常に探索者として既に致している。

持ってきてよかった、もしもに備えたもう一着の水着。

……

……

…







ビーチサンダルでペタペタと地面を走る音と共に脊髄に何か棒のようなものが直撃する。

まるでメタルギアライジングリベンジエンスの雷電がアームストロング上院議員に顎を殴られ前半身が地面にもみじおろしになった時のように吹き飛ぶ。

地面が砂浜だったことと、砂浜の中にガラス片が混じっていないなかったことがもつともな幸いだらう。

仰向けに寝転がり直れば、その今の重い一撃はヘヴィ子ちゃんがリアットの要領で私に腕を叩きつけてきたのだと理解するまでさほど時間は掛からなかった。

「日葵ちゃん!!それは駄目だつて!!公の場で　何が　つていうのは具体的に言えないけど、それは駄目だつて!!」

「駄目ですか?」

「……っ！　そんなっ……純粋な目で何がダメなのか分からないような目で見てもダメだよ!」

重いへパンチを繰り出したヘヴィ子ちゃんの言葉に、片目を瞑って片手で後頭部を掻いて笑ってごまかす。

だが道理には叶っている筈だ。

この世界は人魔が結託し外道の蔓延る対魔忍世界。そんな世界で、私は顔面偏差値に加えスタイルはパンピーだから狙われる可能性は低いものだとしても美女がグループで大半を占めている状況など狩る側だと思っている悪人からしてみれば恰好の獲物に違いないのだ。

「日葵ちゃん、今すぐ着替えて……!　流石に日葵ちゃんがそんな恰好で海を満喫するのは賛同できないかな……!?!」コソコソ

砂浜でぼんやりと座る私へと彼女は持ち合わせていたバスタオルを肩にかけ、乳首と存在しない乳房を覆い隠した。

「うーん。……とはいってもですね。ここが比較的 안전한海辺でも、現地の脅威というものがありませんので……」

「でもだからってその水着は駄目かな……ッ!? 鹿之助ちゃんも異性の水着ワンピース水着を着ているけど、日葵ちゃんも異性の水着短パン水着を着て逆ペアルックにする必要性はないと蛇子は思っちゃうな……ッ!?」

「いえ、これはそういう意図ではありません。これは、鹿之助くんがいくら生物学上男の子でも、客観的に視れば私達は『男1女3』のグループです。私はともかくとして、蛇子ちゃんと鹿之助くんはかわいいのですから、危険が迫ることが推定できます。ゆえにここは客観的なグループとして『男2女2』の編成であるほうが無難であると考慮した結果になります」

「なんで!! 日葵ちゃんは、なんでそう変な方向ばかり思い切りがいの!?」

「フフフ……」

ヘビイ子ちゃんは右手で顔の半分を覆ってツツコミを入れる。その姿はグレイス・ジョーンズの姿と重なって笑い声が漏れる。本人は意図していないんだらうけど、脳裏にSNSで出回っていた画像と一致したからだった。

「まあまあまあ、考えてみてください。これは私の身体的特徴ド無乳を生かした……私だからこそ実現できる必勝法ムキムキなのです? 生かさなない点はないでしょう?」

「だからって……」

「それに。蛇子ちゃんはお胸に大きいタマタマを持っているので男装とかできないじゃないですか。私だからこそできる立ち回りです」

「そうだけ……でも蛇子、言い方の方も嫌かな?」

「フフ……すみません。公共の面前で “おっぱい” って公言するよりいいかなって」

「“公衆の面前” を気にするなら、もっと他のところを気にする必要があると蛇子は思うよ?」

からかう私に蛇子ちゃんは露骨にげんなりとした顔をしながら肩を落として溜息をつく。

向こう側にいる生物学上の男性陣は、ここからどうするべきか・どうなるのか事の成り行きを見守るつもりのようなのだ。

それにしても鹿之助くんのフリルスカート付のスクール水着は眼福なんじゃく。かわいいねえ。かわいいねえ。

でもふうま君が隣にいるのは頂けないな。離れて鹿之助くん。

ふうまの野郎はソイツは地元民も引き寄せていた超すけこまし。

「ともかく、そのような客観的理由から私の断崖絶壁マリアナ海溝を最大限に活用した〈変装〉ではないでしょうか？」

「日葵ちゃんって……」

「はい」

「真面目な顔して突拍子もないことも言うよね」

「真面目に考えた対策案なので」

「これが!？」

「〃これが〃?!」

ロクでもない考案だとも言いたげに声を張り上げる蛇子ちゃんに私も釣られる。

蛇子ちゃんは心底信じられないものを見ているような顔で私のことを見つめるが、こちらも本気の意を伝えるために真剣な顔をして応じた。

「はあ……その顔じゃ、どんなに説得しても納得してもらえない感じだよね」

「よくわかりましたね」

「日葵ちゃんだからね」

即答する蛇子ちゃん。

「ン、ーッ！普段、あつちの陽葵ちゃんに対して言っていることがブーメランで帰ってきたー」

「それじゃ、きつと蛇子の今の心境は陽葵ちゃんに対して接している日葵ちゃんの気持ちかな。そのまま遊ぶのはまずいよ。せめて乳首は隠そう?。」

私はタダでは引かぬことを前提にヘビイ子ちゃんはチラチラと鹿之助くんの方に目配せをしている。皆までは言わないが、鹿之助くんもドン引きの可能性があるとでも言いたげだ。あるいは目のやり場に困るだとか？

だが待つて欲しい。

鹿之助くんだって、女性もののフリルスカート付スクール水着を着用しているのだ。

私も男水着短パン水着単体着用の挑戦チャレンジしたって何も問題はない筈だ。

それにこういった見方もできる。

この世が現代かつてのように多少なりともジェンダーが配慮され、経過した未来世界でもあるならば――

私の性別を生物学的上の男性・女性という区切りではなく、今だけポリコレにおけるAタイプ・BタイプのBという区切りにしておけばBタイプであれば、乳首や乳房を露出させていても何の問題もない。ま。

その線は望み薄だが。

「……」

ぐぬぬ……。

これに関しては蛇子ちゃんも引き下がるつもりはないらしい。妥協はしたくないのだが……。

「わかりました。私の負けです」

「ホッ……」

「ニップレスはあいにく持ってきていないので、首からタオルを掛けることにします。ヘヴィ子ちゃんもこれで妥協してください」

「……。妥協ができる要素が何処にも無いんだけど……。でも、なんでも男物の水着の用意は万全なのにニップレスは持ってきてないの?」  
「男水着チャレンジをするのにニップレスなんかいらなからず」

持ち物から長めのフェイスタオルを取り出し、アントニオ猪本のように首からぶら下げる。

客観的に見ても乳首は今のところ隠れた。これならば文句もでないだろう。

「……」

ヘヴィ子ちゃんは、唇を尖がらせて視線を左上に持ち上げている。納得するか、更にツツコミを入れるか悩んでいる……そんな顔だった。

だから彼女が新たな決断を下す前に、立ち上がって後方で待機している鹿之助くんとふうま君に手を振る。

「さあ!話は無事にまとまりましたYO!いぎ、うなばら!Let's  
I a Go!!!」

〈大きな棍棒〉にもなるパラソルを片手に、拠点設営のために私は一歩先に走り出した。

Episode 131 『幼子、目を離すべからず』

……

……

…

海水浴場での時間は本当に迫りくるまえさき市で人間風情に泣かされた高位魔族な方の蛇子ちゃんとの会合約束を忘れさせてくれるほど幸せなひとときだった。

泳げないという鹿之助くんにはライフジャケットを着させてから海で泳ぐ練習をしたり、砂浜で小さな塹壕を掘って掘った砂で大きな砂の城を作ったり、スイカ割りをしたり、夏らしいサイダー瓶を飲んだり、海の家でカキ氷とか、焼きそば、フランクフルトを食べたり……。あとは空になったペットボトルへ、海水を大量に集めて海での収穫を行ったりもした。

何よりも私の楽しさのピークは、日焼け止めクリームを塗布したところか。

ヘヴィ子ちゃんはふうま君に。鹿之助くんには私が塗りたくらせて貰った。

ギヒヒヒヒッ！

純白のパラソルの下、レジャーシートの上でうつ伏せになって『リ』の字になって寝そべる2人。

ヘヴィ子ちゃんは慣れっこなのか、それとも大好きなふうま君にクリームを塗ってもらえたことが嬉しかったのか、鼻歌を歌いながら総受けの姿勢だった。

鹿之助くんは鹿之助くん——ああああああ！

当時の憧憬を浮かべるのも愛らしくも尊く幼子の御神体！

私が彼の背中にクリームを塗った時、『ひゃんっ』という可愛らしい……実に可愛らしい声で鳴いてくれるというぐ褒美までもが顕現した。

本来であればクリームを人肌に温めてから塗布すれば、このひんや



りとした感触に悲鳴を上げることなどなかったのだろうが、私は彼を鳴かせたかった。

あえて、もう一度言おう。

私は可愛い鹿之助くんを見たかった。

ヒンヒン鳴かせたかったのだ!!!

結果は大成功。必死に薄汚ねえ笑い声が漏れないように、こらえて塗布した甲斐があったというもの。

何よりもワクワクしたのは、彼のワンピース水着の紐の裏。背部にまでねつとりと触手のように手を入れて、ろっ骨付近、臀部登頂部まで入念に塗り込むことができたことか。

モロチン。鹿之助くんも最初こそ『流石にそこまでは……』と遠慮がちではあった。

が、しかし『水着も動いているうちにズレて素肌が晒される部分も出てくるから入念に乗っておいた方が良い』『鹿之助くんが女水着で海を満喫していたことが日焼け痕によってクラスメイトにバレてしまいますよ』と悪魔のように甘く囁きながら〈威圧〉込みの〈言いくめるめ〉したことで塗らせてくれたのだ。  
先の世界へ突入させてくれた

でも、臀部の登頂部はフリルスカーツで覆い隠されているので、どんなにも鼠径部へキツキツに食い込んだとしても日焼けなんかしないんですけどね。

弱みを握り、小声で捲し立てて、相手に考える隙を与えない〈言いくるめ〉さまさまよ。

鹿之助くんの背中を私がヌリヌリ……

私の短パン水着の下はヌレヌレ……

んほおっ ♥♥♥

心のオチンチンがオッキボッキしゆるう  
!!!!!!  
イツヤフウー!!!

本当に誘ってくれてありがとう。

一生に一度のような最高の思い出です。

あと別の意味合いでも、男水着チャレンジを行ってよかつたと思う。

最大限の性的興奮に至ったせいか、短パン下に着用しているショートビキニは水に使ってもいけないのにビタビタになっていた。

ありがとう。ありがとう。男水着。

時に海水浴の途中でヒメスナホリムシに素肌を晒している至る所の部分を噛みつかれまくられ、痛い思いをする羽目になったが前世と変わらない状況にホッと息を落ち着ける場面もあった。

思い出語りはさておき……。

私の男水着チャレンジの効果に関しては、上々の戦果をあげていた。

胸部が対魔忍世界なのに極めた絶壁。

貧を通り越した無。

これまでに得てきた勲章とも呼べる負傷の数々。

“傷跡” によつてだ。

男水着チャレンジをしていること。傷跡。女にも拘わらず恥じらう様子もなく堂々と振る舞ったことも幸いして、私達のグループにウザ絡みしてくる現地のチャラ男ナンパ師などの現地の脅威から鹿之助くんと蛇子ちゃんを護ることができた。

海水浴場内を取り締まり離岸流にさらわれた人が居ないか監視するライフセイバーのように私は砂浜や道行く人々を監視していたが、そういう輩は少なくない。むしろ半世紀前と比較してみれば増えたと言つても間違いないだろう。

女友達同士で遊びに来たであろう女性たちが、身長180cm前後の男共に囲まれて迷惑そうに、時にはどこかへ連れていかれるような光景を何度も目の当たりにした。

彼等は決まってライフセイバーや海水浴客の目の届かないフナムシが大量繁殖しているような岩陰のほうに歩いていく。きつと向こうにヤリ場のような場所があるのに違いない。

「次はスイカを食べようよ！ 蛇子、お腹空いちやっただ！」

「おいおい、さつき焼きそばと焼きイカを食べたばかりだろ？」

「遅めのお昼ご飯としてね！ でもスイカはデザートとして食べたいなあって思ったの。せっかく日葵ちゃんが持つて来てくれたスイカをふうまちゃんが割って、クーラーボックスで冷やしているんだから！ そろそろ食べごろだと思おうし」

蛇子ちゃんの提案でふと我に返る。

楽しかった今日一日の思い出を振り返っていただけで、数分意識が上の空になってしまったようだった。

彼等もまた現地にそのような危険が潜んでいるようとも実際に巻き込まれた訳でも絡まれた訳でもないからか、“起こるかもしれない”などという杞憂など微塵も感じていないようだ。

きっと明日も同じような日常を過ごさせるのだと思っっているような顔だった。

私の人生は自分でも生きづらさを感じるような警戒し続けの人生だが、それでいい。

人類が思っている以上に平和は脆く、神の気まぐれによって文明など瞬く間に崩壊・消滅するのだから。

警戒し続けるぐらいが丁度いいのだ。

まあ私としてはグループ内にふうま君がいる限りは、脅威はぐっと下がっていると思う。彼の身長は177cm。ひよろつとした体格だが、それでも腹筋は割れていたし手足の筋肉もある程度ある。男役の私がいるとはいえ、やはり身長が160cm前後程度では自分より身長の高い相手には舐められやすい部分がある。その弱点を彼がカバーしてくれているのは大いに助かっていた。

「あのなあ、そんなにいっぱい食べると太るぞ？ この前もまえさき市で色々買い食いをして+6kg太——」

「フンッ！」

「おごっ！」

2人のやり取りを眺めていると、ふうま君が余計な一言を告げてヘヴィ子ちゃんによるヘヴィなボディブローが腹部に突き刺さっていた。

あれは重い。重い一撃に違いない。

具体的に鬼崎<sup>漢ッ</sup> キララ先生<sup>バ イ セ ン</sup>とくりそつ死語。1970年代に流行。『くりそつ』とは『そつくり』の意味な鬼崎<sup>オッ</sup> きらら先輩<sup>バ イ セ ン</sup>の一撃並みに重そうだ。鈍い音がここまで聞こえてきた。

ヘヴィ子ちゃんの眼は逆三角形になっていたことだし、彼女としては本当に嫌な話題だったらしい。ただ愛しのふうま君が相手だったということ、手加減はしているっぽいけど。

ほんとと、ふうま君は乙女心が分かっていないのだろう。女の子の前で体重の話はNGだというのに……。

よくもまあアレで多方面から恋愛感情を抱かれるものだと、少し関心する。

まあ、鹿之助くんもふうま君と似たような歯に衣着せぬ物言いをしてしまうところもあるので、私の傍らでヘヴィブローを眺めているであろう彼に注意喚起を――

「……？」

あれ？

いない。

さつきまで、私の隣で私が持ってきたジュースを飲んでいた鹿之助くんが居なくなっている。

忽然と。

もしこの光景をアニメで例えるなら、彼が居た場所に点線の点滅が反映してピッコンピッコンなっている頃合いだ。

「……鹿之助くん？」

振り返って海水浴客でゴった返す浜辺に〈目星〉をつけて彼を探す。

……居ない。

一人で何処に行ってしまったのだろうか。

……嫌な予感が背筋を伝う。

あんな可愛い女装した男の娘が一人でどこかに消えてしまっていた。

傲慢な言い方をすれば、今まではふうま君と私という男役バウンサーが居たらから厄介ごとに巻き込まれないで居られたのだ。

彼一人では、血に飢えた狼の群れの中へ世間を知らぬ子羊を放つようなものだ。

この海水浴場で単独行動は様々なリスクが脳裏を過ぎり、心の奥をザワザワと騒ぎ立て始める。

「蛇子ちゃん！ ふうま君！」

「？」

「ぐぐぐぐ……？」

「鹿之助くん！ 鹿之助くんが何処に行ったか何か聞いたりしてませんか?! いなくなっているのですが?!」

焦燥に駆られ、いつもより声に張りが出てしまう。

脳内は既にぐるぐるし始めている。海水浴場での誘拐、ナンパ師の拐かどわかしし、一人で海に入ったことで溺れ、離岸流による太平洋への進出。よくない想像が駆け巡る。大袈裟だとは思うところはあるが、油断こそ一番恐ろしい結果を生む引き金になりかねないのだ。

「そういうえば……鹿之助のやつ、どこへ行ったんだろなあ」

「あれー？ 本当だね。さっきまで日葵ちゃんの隣でくびくびジュース飲んで休憩してたと思うんだけど……」

2人も私が尋ねるまで鹿之助くんが居ないことに気がつかなかつたらしい。

いつから居なくなつた？

両目を瞑つて後頭部をかきむしる。

「そんなに心配しなくても大丈夫だろ。そのうちひよっこり戻つて来るさ」

狼狽える私にふうま君はいつもの樂觀的な反応を返してくる。

でもやっぱり私としては彼が心配だ。外見は本当に幼女のような子なのだ。私でも簡単に拉致できそうなのに、大人の男が彼を攫う方法など簡単に連想できてしまう。

現にまえさき市で、彼はケモミミフードの男たちに拉致されているのだ。あの時と状況は違えど、やはり……。

「それじゃあ蛇子達はここに留まつて鹿之助ちゃんと日葵ちゃんが入れ違いで戻つてきた時用に待機しておくね。鹿之助ちゃんが戻つてきたら、ここに留まる様に伝えとく」

「ありがとうございます。30分ぐらい探してきます」

そんな私を見かねてか、察することに長けた蛇子ちゃんは心情を汲み取つて協力の申し出をしてくれる。

おかげで私の搜索範囲はより自由なものとなつた。

彼女に頭を下げて、彼が存在した痕跡である砂浜に残つた足跡に対し〈追跡〉と存在に〈目星〉をつけるのだった。

Episode 132 『NTRするときには狂犬に気をつける』

……

……

…

海水浴客でゴった返す海辺で、小柄な鹿之助くんを搜索し始めてから早30分。

結果から言うとまだ彼は見つかっていない。

彼の足跡をたどる形で〈追跡〉をしたが、繁忙期のビーチはそもそも人だらけ。

そんな数分前の自分自身の足跡すら他人の足跡で塗り替えられてしまうのに都合よく彼の足跡だけで追走することなどできるはずもなかった。

一度は高台まで登って彼の姿を確認しようと、搜索方法を変えてはみたものの……高台では色とりどりのパラソルによつて覆い隠されてしまい常人よりも更に小柄な彼は見つからない。

本人は嫌がることを承知の上だが、迷子センサーにも駆け寄り放送してもらおう形で鹿之助くんを呼んでみたが反応は無し。

蛇子ちゃん達の元に帰っていることもなかった。

一瞬カルティストの存在が脳裏をよぎるが、これだけの海辺に潤沢な生贄の素材が湧き水の如く存在しているのだ。

いくら彼が可愛い男の娘だからといって、肉付きの良い素肌を晒した女性がそこかしこに居る状況で彼が選出されるというのは到底考えにくい。

そもそも彼の外見は “小学生” でも通じそうな外見をしているのだ。初潮すら迎えていない無垢な女兒を狙うよりも邪神と交配させて安定的な母胎を選出した方が効率的だ。

一部の神格は男体でも無差別に孕ませる個体もいることには居るが、その程度であればわざわざ生贄を調達しなくてもカルティストが

自ら命を差し出すに違いない。

以上から彼がカルティストにまた拉致されたとは考えにくいことだった。

それよりも可能性として考えられたのは――

「……まさか、溺れて……？」

身近に存在する最低最悪の想定が傍に迫る。

他人は『考え過ぎだ』とすぐに嗤うが、ここが対魔忍世界であれ『死』など瞬く間、刹那、今この瞬間に起きてもおかしくはない突発的なものなのだ。

両目を瞑って後頭部を片手で搔く。それから左手を顎に付けて、右手を左肘に付けながら思考を巡らせる。

彼が行きそうなところは粗方探し回った。

カルティストが潜みそうな暗部も調査した。

だが、どこにも居なかった。

やはり考えられるは海――

「あははは……ぐめんなさあい」

「いや時間とらせねえし、ちよつとだけ。な？ いいだろ？」

「でも友達も向こうで待っていると思うし……既に1人にしちやいけない奴が暴走し始めている気がするから、はやく戻らないと……」

「大丈夫さ。そんなことはないね。その友達は今頃バカンスを楽しんでいる筈だよ。そうだ、君にピッタリな “特別な” ジュースがあるんだけど “それだけ” でも飲んで行かない？ 引き止めちゃったお詫びに、ね？」

「特別なジュース？」

「そう♪ 君みたいに特別なかわいい子にだけプレゼントしているものなんだけど、この近くの海の家で俺の知り合いが調査してくれる裏メニューでさ。ジュース飲むぐらいいいでしょ？ ああ、もちろんお代なんかいらさないし、すぐに友達の下に戻るからさ♪」



「……………でも」

「ああ！すっかり忘れてた！その特別なジュース特別な入手経路で仕入れているから大規模な在庫を確保してないって知り合いが言ってたなあ！今すぐ行かなきゃなくなっちゃうかもしれない」

「……………ち、ちよつとだけなら……………」

「いいねえ！ わかるう♪」

海底に沈むルイエすら浮上させてカチコミを仕掛ける勢いで海中搜索のため全力疾走する私を他所に、ふと……………どこかのチャラチャラしていそうなナンパ男と新たな被害女性と思われる会話が耳に着く。

海の中を搜索するためフェイスタオルを投げだし乳首を世間に晒した私だが……………この会話に思わず足を止め、慣性の法則で砂浜を滑りながらゾンビの首が振り切れるほどの勢いで首をひねり会話のあった方角を見定めた。

普段であれば、世間知らずの女性がまたナンパ野郎どもの食い物にされていると傍観しながら海に突撃していたことだろう。

だが今回ばかりは事情が異なった。

その被害者の声は鹿之助くんの声に『そっくり』だったからだ。

即座に人の波、人海の中から〈目星〉を見つけながら彼を探す。

「……………」

けれども彼の声が出たはずなのに何処にも彼はいない。

声のした方角に進路を変更、駆け寄りながら賑やかな海辺で彼の声だけを聴き取ろうと〈聞き耳〉をそばだてる。

聞こえてきたのは、明らかに私やヘヴィ子ちゃん、ふうま君から離れていく彼の声とナンパ男の声。

彼が向かう先、あの方面は岩陰が数多くひとけ人気がないほうだったはず。

海の家うんぬんと抜かしていたが、到底そんな売り上げに悪影響し

か及ぼさない場所に海の家があるとは思えない。  
あるとすればカルテイストの根城だ。

「……………」ギリッ

口の中から奥歯を噛みしめるような音が聞こえる。

心なしか顔面から滴る汗が震えで流れ落ちていくのが分かる。

眉間を含めた顔面の中央が収縮して、むず痒くなる。

鹿之助くんを食い物にしようとしているゲスの声を取り込むたびに、横隔膜が熱く波動がこみあげてくる。

やはりあれはカルテイストなのだ。

鹿之助くんを食い物にしようとしているカルテイスト。

ナンパ男を装ったカルテイスト達の撒きエサ役一員。

私がそう判断したのだから違いはない。

「ヒッ」

大地を力強く踏みしめ、肩を大きく揺さぶりながら、駆け足で彼等の軌跡をへ追跡する。

その他に時々聞こえてきたのは私とすれ違う人が悲鳴を上げた声だった。

念のため振り返っても第二の刺客が私を狙っているという様なこととはない。

恐らくこの体中の弾痕や刺突痕が異様なのと、こんなこともあるのかと紋々のストッキングが海パンのすそからはみ出ているのが周囲の客の不安を煽ったのだろう。

あとはビーチに破棄されたガラス瓶に反射する私の顔が般若のようになんでいたことによるものか。

……………

……………

…  
やがて鹿之助くんの姿を確認できる。

彼がチャラ男が案内した通りの海の家内部に入って行くのが見えた。

それも何処かおぼつかない足取りで、だ。

即刻、彼等に追いついて彼を取り戻す面持ちで挑んだのだが、〈隠密〉すらしない秋山 凜子の如き正面突撃のせいでカルティスト一行の見張り役に遭遇し、即座に彼をカルティストから救助することができなかつた。

結果的に私が例の海の家カルティストの根城に到着した時には既に鹿之助くんは千鳥足で海の家内部、2階へと階段を昇っている状態だった。

鹿之助くんをナンパしたカルティスト（以下、チャラ男）は彼のか細くて艶やかな腕を肩に背負い、くつきりとしたくびれに手を回しながら彼を運んでいる。

わゝたゝしゝでも、そんなことしゝたゝこゝとゝなゝいゝのゝにゝいゝ！ゝゝ

例の海の家は海の家にしては活気がなく、非常に薄暗い……立地の悪い民家のように見えた。あらゆる雨戸という雨戸は締め切られ、1階の窓には錆びついた鉄柵がはめられている。電気も付けておらず、とてもこれが営業中の海の家だと言い張るには難しいものがあるだろう。

しかしこれを海の家ではなく、カルティストの根城だと評するのであれば “如何にも” な もつともらしい民家へと認識の早変わりが可能だ。

そして、この状況はこれは一步、遅かつたというべきだろうか？ それとも間に合ったというべきだろうか？

私が到着した時には鹿之助くんはゲスから提供された “特別なジューズ” とやらを既に飲んでしまっていた。

このワイングラスに残された飲み残しからは、ひどく甘ったるい匂

いが漂つてもいた。

酒入チヨコのような匂いと似ているが、アルコールとは別の香りだ。

詳しいことはこの液体を持ち帰って〈科学（薬学）〉や〈医学〉等で分析する必要があるが、言わずもがな真面ではないものであることは確かだ。

私がカルティストの根城に近づき、何食わぬ顔で1階の男に鹿之助くんと同じ注文をしようとしたら撲殺されかけたのだ。

されど私の〈組みつき〉に死角はない。最初の〈組みつき〉で手首を掴み、次の〈組みつき〉で攻撃を往なして、声をあげられる前にバーの男は締め落とした。

警戒しながらカルティストの根城に忍び込み、彼等が消えて行つた階段を覗き込む。

ピシヤリと閉じられる襖の音。

姿が見えなくなる刹那、2本の足の一本には見覚えのあるフリル付きの黄緑色をしたリストバンドを着用しているのを探索者の鷹の目は決して見逃さない。

間違いない。鹿之助くんで、間違いない。

「……………」ゴキゴキゴキボキボキ

軍用スコップを肩で担ぎ上げたまま、指の関節をスムーズな動きにするためクラッキングを行う。

軽いストレッチを行つて2つの眼で叩き潰す目標を見定める。

穏やかに彼を取り戻すことができるならば、それはそれでいいだろうが。

きつとそうはいかない可能性の方が高いだろう。

既に2人戦力を削いでいるとはいえ、カルティストであることは明白であること。

またゲス共の背丈は180 cm前後、比べて青空 日葵の背丈は160 cm程度。

外見は男に見えるとしても、身長160cm程度のチビ1人が友達を助けに来たとして、奴等は何を怖がる必要がある？

それに相手側が1人でなかった場合であっても数的有利につけ込み、こちらを畳んで来ようとしてくることも想定できる。

仮にそのような事態に陥った場合、さしずめ目前NTRレイプが開催されるかもしれない。

間違いなく私の脳と性癖がNTRによって粉々に破壊されてしまう。

だが今回の乱闘騒ぎは前菜とさせてもらおう。

これから私は東京キングダムに赴くのだ。

ウォーミングアップとして荒事に身体を慣らし、本番に備えたスムーズな戦闘を心がけよう。

ここは人目のつかないカルティストの根城。

周囲は海。

私にとって、この地は好都合な独壇場と言っても過言ではない。

Episode 133 『異世界転移知識無双』

「……………」

流石にカルテイストの根城内では、足音を殺し、息を潜め、気配を消した〈隠密〉行動を取っての侵入を試みる。

海の家を模した民家の2階、ふすま1枚を隔てた室内の一角に屈強なゲスのカルテイストに囲まれる鹿之助くんの姿を確認する。

……………

……

…

「ふあああ…………？ えつと…………そ、そうら…………おれ、おれえ…………彼氏まつへる、から…………帰らないと…………」

「どこへ行くって？」

「おいおい、これからお楽しみだっというのに逃がさないぜ♪」

「その彼氏とやらも海で他の女と新しい出会いしてるに違いないな」

彼は雑魚寝同然の布団の上に乙女座りをしたまま、呂律の回らない口調でその身を小さくしながら怯えた様子を見せていた。

その目はトロンとしていて焦点が定まってはいない。

既に正午過ぎだというのに、どこか寝ぼけているようなそんな反応だ。

殺意が滾ると同時に、そんなトロンとして今にも溶けてしまいそうな鹿之助くんを見ているとこっちまで余計な内蔵まで燃え広がって、受精効果を高めるため子宮が降下を感じ取る。

「それにドエロいハメ取り素人AVにも出演するって承諾しただろ？」

「ど、どういしょお……？」

「ほら直筆のコレだ。破るってんなら違約金1000万払って貰わねえとなあ？」

「ロリガキ風情がこの金額払えんのかア!? おっおッ!!!」

「ひっ……ご、ごめんなさ……どにやらないで……」

室内で繰り広げられる威圧行為に彼は、DVで暴力被害に遭って咄嗟に両手で顔を護るような仕草をする。

かわいい。ギヒヒヒヒッ♥

おっと。

ごほん。

ふむ……なるほどお？

私の耳がおかしくなければ、彼はAVに出演する契約を結んでしまったらしい。

あの様子じゃあ、掘る側というよりも掘られる側としてだろう。

今の彼はあのフリルスカートに手を掛けて、陰部を曝け出さなければどう見たって女の子にしか見えない。

ひとまず、いつもの慣れ親しみのある手荒な方法で奪還する前に、3種類の交渉を手段として挟むことができそうだ。

暴力で解決することは単純明快で、歯切れのよい解決策であることは違う。

だがその段階に至る前に自身を成長させる過程として交渉を持ち込んだって良いだろう。

なに。

最終的に殺すことは確定しているし、殺してやるし、殺すが、それはあくまでも最後選択肢にしてやろう。

野郎ぶっ殺してやるう。

「つてことで早速、始めようか♪ アンタのエッチなところを俺等に見せて——」

撮影機材を手にした男が鹿之助くんのワンピースのフリルスカートに手を掛ける。

「ああ、こんなところに居たんですね。探しましたよ」

彼のスカートが捲られる前に、私が襖を捲って先に侵入する。

「ふえ?」

「お?」

〈隠密〉状態を解除し姿を現した突然の乱入者に、鹿之助くんは事態を理解できていないような目で。

イレギュラーの参上に、小規模な団体を形成しているカルティスト共は私へ鋭い睨みを利かせる。

撮影機材を持った男の手が鹿之助くんのクアंटム・ハーモナイザーを映し出す前に私へと向けられた。

ゆえに口だけは余裕の笑みを浮かべながら【推しの子】の表紙のような片手逆ピースサインを送って撮影してもらおう。

「あ、あえ……? ひまい……? なんれえ……ろうしへえ……?」

「私の名前は葵あおいですよ。別の友達と名前を間違えるなんて、君は本当にかわいいですね。でも少し小憎たらしくもあります」

後ほど僅かに漏れ出た本名で自分が特定されないように偽名で誤魔化そうとする。

「あ……あおい……だっへ……?」

「ですです」



彼は思考するだけの力も残っていないようだ。彼には満面の笑顔を向けて腕を大きく広げる。まるで抱擁するために待機する天使のように。救世主の登場に不安が少しでも和らぐように。

「おいおい、あんちゃん。ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ」「てか、どうやって入ってきた？ 下には仲間がいるのに……」「土足で上がり込んできやがって！ どういうつもりか知らねえが、痛い目に遭いたくねえならさっさと回れ右して帰んな！」

鹿之助くんへヘラヘラと笑顔を向ける私へ大男が私の進路を遮って〈威圧〉してくる。

その手には私よりも三回り以上も大きい、青筋の浮かび上がった無骨な男らしい握り拳が作られており、既に殺気立ったスレッズジハンマーのような肉塊は戦意に満ち溢れている。

だが動じない。

私も挑戦的な上目遣いで挑発し、口元はヘラヘラしたまま引きさがるつもりはないと意思表示する。

「おっと、そうでしたか。そうでしたか。それは失礼しました。それじゃあ、私の彼女を引き取ったら退散しますね」

「……………」

「……………何か？」

大男を反れて鹿之助くんの元まで向かおうと左に一步踏み出したところで、大男もまた私の進行方向を塞ぐように動き目力を加えてくる。

ひとまずプランナープランナー：彼氏として登場して囚われのお姫様を救出する作戦は上手く行きそうにない様子だ。

「回れ右して、サツサと、失せろ。って言ってるんだよ」

「ええ。彼女を回収したらね」

「話の通じねえ奴だなあ？」

「彼女はヒョロガリチビのテメエの元に帰りたくないんだとよギャハハハ!!!」

「そうなの？鹿ちゃん」

「……ええと……あ。……あう……」

問いかけに対し、鹿之助くんは上手く言葉が出てこないらしい。

両手で頭を抱えて言葉に示そうとしているが、くも膜下出血発生から2週間以内に現れる後遺症の1つである失語症が発現したときのように思った通りの言葉が口から出てこないように口をもごもごと動かしている。

否。

彼の心理状態を〈心理学〉で内情を探るならば、言葉が出てこないことに加え。

最愛の妻が発見されてはならない瞬間を愛しの旦那様に発見されて、気まずくて言葉が出てこない乙女のような心理的な反応も伺える。

やはり、鹿之助くんは可愛いですね。

「帰りたくないってよ！ギャハハハ!!!」

「テメエに聴いてねえよこのボケカススカタン」

「あ？？」

「ん？」

なかなか言葉の出てこない鹿之助くんの代理者としても言いたげにゲス男が下卑な笑い声と共に彼の発言権を奪った。

結果、心の声そのまま漏れ出た上に明らかかな一触即発な事態に大人の男が3人そろってゾロゾロと私を取り囲み始める。

どうやら男水着チャレンジのおかげで今のところは男に見られて

いるらしいが、実際には私は女である。

性差も持ち合わせておきながら、人数程度でしか圧倒できないとは情けねえ奴等だ。

ま、圧倒すらできてねえけどな。

そんなお前等がこれからAV撮影の被検体を選んだ鹿之助くんも一見しただけの外見では女だけど、実際のところは男だけだ。

——ピシヤツ

私の背後に回り込んだ1人が出入り口である襖を閉じてしまった。

これで私がか騒動を引き起こしても、チエイズで逃げ切る前に捕縛される確率が高まる。

しかし、こちら鹿之助くんを奪還するまで引き下がるつもりは毛頭ない。

最終的には暴力。暴力で全てを解決する。

「いやいやいや。いやいやいやいや、彼氏さん。彼女さんは自ら進んで同意書にサインされているんですよ。我々が企画したAVに出演するって」

大男を正面に背後へゲス男とチャラ男が私を取り囲み、交渉の場も持たずに暴力に発展しかけた時。

もつとも鹿之助くんに近い、撮影機材を持った現場監督風の男が遠巻きにA4用紙程度のチラつかせてくる。

奴としてはこの場を穏便に済ませたいように見えた。

短気な性格を振りかざしているカルティスト共と私を含めた4人より冷静なようだ。

カルティスト一団の役割で考えるならば、奴が頭……教祖の役割が該当するだろう。

ヤツは〈法律〉がどうだの、違約金がどうだの、互いの同意がどうだの、自分は慣れた監督だからこういう事情や法律に詳しいだの、鹿

之助くんを連れて帰るのであれば私を営業妨害で訴えるのだの……。

以上の内容を、素人には分からないようなわざと小難しい言葉を使い、恐喝し、さらに捲し立てるような早口で「言いくるめ」てくる。

「……………」

魂胆が透け透けなんだよ。

きつと何もわからねえ浅はかな若者だと思ってるんだろうな。

浅はかな若者に見えているならば、結構。

欺いてやるには丁度いい目くらましだ。

「——だから今回の撮影は同意を得た合法であんたの彼女さんは……」

『A V 出演被害防止・救済法』

「うん？」

「民法のA V 出演被害防止・救済法……知っているでしょう？ 様々な法律に長けているA V 撮影のカントクさんなら。当然。2022年6月23日に施行された性をめぐる個人の尊厳が重んぜられる社会の形成に資するために性行為映像制作物への出演に係る被害の防止を図り及び出演者の救済に資するための出演契約等に関する特則等に関する「法律」についてご存じのはずだ」

だがな。

人を見掛けで判断するとどうなるか教えてやろう。

齧った程度の「法律」知識で出し抜けると思ったなら大間違いだ。

リアル「法律」マウントには「法律」でマウントし返すぞこの野郎。

幸いにも、この法律の成立は2022年6月15日。私にとつてはつい最近の情報だ。前世では公金チューチュー、私達の福祉に繋がる吐き気を催す法律だと蔑んだものだが、まさかこんな時代で役に立つとは思わなかった。

つまりプラン2プラン2「法律」でボコボコにして穩便に納める作

戦の出し抜き作戦を施行する。監督がマトモならば、この法律は提示されたくない情報だろう。

悪人だからこそ、ちよこつとその分野の知識に長けている。それっぽく取り繕い、周囲を焚き付ける。

——でなければ素人を騙せない。

これは我々の業界では基本的戦術だ。

マトモなようなことを話しながらもマトモじゃないから、カルティストの教祖のような立ち位置をしているわけだが。

「あ、ああ！当然、知っているとも！ ほら、でもね、彼氏くん。僕らは正式な契約を交わして同意の上で——」

「当たり前です。事業者の義務 出演契約等に関する特則 第1節 締結に関する特則というもの出演契約締結時の契約書等の交付と、契約内容の説明の義務化があるわけですから。ところで今回の撮影は『撮影時の出演者の安全を確保する義務』を確保されているのですよね？」

「も、もちろんだとも！」

AV監督の言葉に、スウ。と目を細める。

男のアナルは、無理やり男根を捻じ込もうものなら裂けてしまう――

——女性よりも裂肛しやすい繊細な敏感アナルなのだ。

と言っても、女性でも解さなければ確率的には裂けることには裂けるのだが。

まあ、この場にほぐす為の前戯用の道具が置かれていない、そんなことも知らなさそうなヤツの『安全を保証する義務』に対する肯定は疑わしいものに他ならない。

アナルを4〜5 cm広げられるように開発・調教するのにだつて人によつては数カ月、怪我を伴わない前戯の段階ですら数時間を要するこ

とも分かっているかどうかすら疑わしい。

だが今はアナル論議や、アナル拡張に必要な時間を説くつもりはない。

あまり追い詰めすぎても私の追い詰める楽しみが端的な達成感しか残らなくなってしまう。

故にここはアナル拡張について追及はせずに敢えて泳がせる。

『安全を保証する義務』と『鹿之助くんのアナルの安全性の保証』については受け流して対応する。

「じゃあ、同法には『契約から1か月間の撮影の禁止』とありますが、こちらに関しては何かありますか？ その契約書、明らかに

2078年8月3日

今日の日付になっていますけど?」

次の指摘に対して監督の男はアマゾン奥地の苦い芋虫汁でも食わされたかのような苦い顔をしている。

ありがとう前世時代のクソ法律、こんな半世紀後の未来で役に立つとは思わなかったよ。

でも滅べ、クソ法律。2023年の現代を生きるものにとっては新作『男の娘』や『スカトロ』『拷問』モノのAVが出ないわ、自分達の福祉に繋がられてしまう悪法でしかない。

「で、あるならば。この契約には法律上の規定内ではない。つまり違法つてわけだ。鹿ちゃん、どうでしょう?これを聴いてもまだAV出演したいですか?」

「で、でたいわけ……ない……」

「はアーい!来ましたアツ!出演契約等に関する特則 第3節 無効、取消し及び解除等に関する特則ウ!出演者は撮影時に同意していても、公表から1年間は無条件に契約を解除することができるの発動ウ!!!」

ヒヤア! 我慢できねえ! 収穫の時だ!

最高峰のしたり顔で、左手を頭上に持ち上げて指パツチンを一度高らかに鳴らす。

鹿之助くんの出演拒否への宣言のおかげで、カントクが鹿之助くんと結んだ契約は完璧で究極の灰燼に帰した。

これを喜ばずして、いつ喜ぶ？

〈法律〉でマウントを取りに来たからそうなるのだ。次はもつと〈法律〉に疎い奴を引っかけるんだな。

うーん、マウントを取ってきた輩にマウントを取り返すのつてぎもぢいぢいいいいい！Foooooooooooo!!!

Episode 134 『トラップは最後の最後でほんの少しささやかに』

「……………」

完全に総監督は黙らせた。

<sup>ブレイン</sup>頭脳を論破したことで脳筋側の大男、ゲス男、チャラ男の殺気度が増したような気がするが、まだ手は出してこない。

私を取り囲んだまま、頑なに鹿之助くんの元まで近づけるつもりもないようだ。

「はあー……。鹿ちゃん、帰りましょう。みんな待ってますよ」

「うん……………」

鹿ちゃんに近づけない以上。

私はどうすることもできないので片目を瞑って後頭部を掻きながら、もう一方の片手を水星の魔女でミオリネに手を差し伸べる血塗れスレッタのように突き出して彼が自ら這ってでも来るように促す。

ゆっくりとだが這いつくばりながらも近づこうとする鹿之助くん。

だが薬の影響でまっすぐ進めない。

それどころか潰れたカエルのような動きで立ち上がることすら困難そうだ。

やはり傍まで迎えに行つて彼を支えるなり、背負うなりして立ち去る必要があるだろう。

「……………」

うーん……………。

持ち去つてきたグラスを〈薬学〉で成分分析をしなければわからない



いが、強めの精神安定剤でも飲まされたのだろうか？

グラスの残り香から推察するに高濃度のアルコール……とは考えにくいだろう。

彼の様子から推察するに昏睡<sup>マッロ</sup>にはならない程度のデートレイプドラッグ辺りとか、歩けないことから筋弛緩薬が投与されたって可能性が考えられる。

「……」

「おおっと、私としてはこのまま私達を見逃して足を洗う方が賢明だと思いますけどね。こちらのグラスは既に回収させて頂きましたが、彼女の動きを見る分に正常ではないことは確かです。このまま見逃してくれたら通報はしないで差し上げましょう。つまり民事訴訟はない……状況的によつては刑事事件に発展することもなし。どちらがあなた方にとって有益なのか、少し考えればわかると思います  
が」

そして鹿之助くんが動けない今、やはり私が動くと遮る大男。

ダメ押しで隠し持ってきたグラスを取り出して指先でグラスのフォルムをなぞりながら、背後でこちらの隙を窺っているチャラ男の顔の前に差し出す。

チャラ男はまさか現物を証拠品として押収されるとは思っていなかったのだろうか。

〈心理学〉で内情を探らずともわかるほどに激しい動揺を見せていた。

さあ。

これは脅しが込められた〈威圧〉に近い〈誘惑〉。

ダメ押しのプラン3プラン3最後の警告。慈悲(大嘘)。断れば死で償わせるのみ、〈魅惑〉の離脱交渉だ。

これがうまく行こうが行くまいが、最終的には残るプラン4、最終手段となる。

死は早いか・遅いかの違いだ。

「……」

一瞬だけ周囲の空気が凍り付いたかのような、時が止まったかのような錯覚が起きる。

「——やれやれ、ですね」

ただ刻が動き出したのも、瞬く間だった。

「ウオラアッ!!」

「……」

私が背後にいるチャラ男とゲス男にグラスを見せている間、大男による己の筋力に任せた「へこぶし」が炸裂する。

力任せのスイングは失神不可避のフックと言っても過言ではなく、重々しい空を切る音が響く。

だが黙って殴られるほど私も優しくはないし、このような状況で背面攻撃など程度想定の内だ。

初撃は「回避」に専念し「へこぶし」を見定め、身体を斜めに躲すことで一撃を振り抜かせる。

「ま、ご自身で経験なされるとよろしいかと」パリイン

「ゲッ!!」

振り抜かせ様に「回避」に用いた遠心力を使って、手に持っていたグラスをチャラ男の顔面に叩きつける。

ガラス片が碎ける音と、内部に残った残留物がチャラ男の粘膜に降りかかる。

鹿之助くんが大半を飲んでしまったゆえに、効き目はさほどではないだろうが即効性という面では真水に混入したインクの染みのよう

に確実に奴を汚染することだろう。

「このガキヤア！」

バチバチバチバチツ

「ひゃあ、これは危ない」

ガラス片が飛散し顔面でグラスを叩き割られたチャラ男が動けないところで、今度はゲス男の攻撃だった。

この攻撃には直ちに〈受け流し〉の姿勢を取る。

槍で突くような手の動きに対して手首に〈組み付き〉、〈組み付き〉したまま衝撃を直進方向へ往なし逃れる。

奴の手には接触型の〈スタンガン〉が握られていた。

青白い火花が飛び散るソレは痛そうだが、それよりも電流による『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』の  
“スタン” 状態に持って来られるのは面倒だ。

「ゴアアアアア!!!」

再び大男による獣のような雄たけびと共に、両手で指を組んだ〈こぶし〉によるスマッシュによる一撃。

バイオハザードで飛び掛かるゾンビの脇を潜り抜けるようにして、  
またもや〈回避〉する。

……………正直、東京キングダムに向かう前の肩慣らしにもならない。  
い。

まえさき市でえっちなお店を開いている蛇子ちゃんやら、強制訓練  
連行の眞田先輩との戦闘と比較すれば緩慢な動き過ぎる。

だがいつものように非日常に片足を踏み込んだという臨場感は私

の脳内麻薬を激しく分泌させてはくれた。

スリリングな駆け引きが私に生の実感を与えてくれる。

まあ、〈回避〉行動の致命的失敗に至らなければNTRな状況には陥らないだろう。

そんな小手調べにもならない3人組の存在よりも、この事態で一番厄介なのは――

「……………」

鹿之助くんの隣で気配を消し息を潜め、カメラを用いて私の動きを機材に納めている例の<sup>カルティストの教祖</sup>カントクの存在だ。

先に暴力での壊滅を求めてきたのは大男であれ、マスコミのように切り抜き映像……………私がチャラ男をグラスでぶん殴って怪我をさせた一部分だけを “切り抜き” されてSNSにアップロードされた日には、たまったものではない。

都合のよい編集上の動画では私は悪者であろうし、五車町というクソ田舎にいる以上……………即特定とまでは行かなくても警察の事情聴取やらが挟まることになれば、コイツ等を抹消しにくくなってしまう。

それにSNSでは、人は怒りの感情に駆られて煽動された時こそ最も騙されやすい状況となる。

であるならば、私がやらなければならないことはただ一つ。

「よいしょっ、と」

「あんっ♥」

「……………。鹿ちゃん。私の情緒と理性が乱れるので色っぽい声を出すの止めてもらえますか？」

「ら、らあってえ……………♥」

攻撃してくる男共をのらりくらりとした身のこなしで〈回避〉しながら身動きの取れない鹿之助くんに近づく。

カルティストの教祖は手を出してこない。

それどころか、手に持ったカメラをガツチリと握りしめたままレンズを私達へと向けたままだ。

それを私は蔑んだ眼差しを向けて、まずは鹿之助くんをまえさき市での事件同様に首で抱えた。

徒手搬送法の消防士搬送による背負い込みだ。

あの時と同じように何か硬い<sup>ナニ</sup>♂。スティック♥ペロペロキャンデイが押し当てられているが、私はもつと押し当てたって一向にかまわん！

前回は生存本能を刺激されての勃起だったと思うが今回の要因はなんだろうか？

やっぱり、薬物？

対魔忍世界だし、超濃厚な媚薬も混入していたとか？

「呑気にだべってんじやねええええええ!!」

「ああ、すみませんね」

「ぐぎやつ!?!」

駆け寄ってくるスタンガン持ちの全体重を込めた捨て身の突進攻撃を身を翻す形で〈回避〉し続ける。

いつまでもそんな得物を持って振り回されるのは面倒なため、すれ違い様に片足を突き出してタコ焼きをひっくり返すように引っかけで転倒させてやった。

バレリーナが円舞曲<sup>ワルツ</sup>を舞うようにすり足でクルクルと回転しながら〈回避〉する。

「わああああ♥ああああ♥ああ♥あああつ♥」

どうやら鹿之助くんは恐怖を感じているらしい。

力が入らないなりに、毛皮のフェレットの首巻のように、がっちり私の身体にしがみついているは色々押し当てて私の理性<sup>のうみそ</sup>へ着実にダメージを与えてくる。

「おっおっおっ?おん?おん?おん???おんおっおっ♥」

のうみぞ、こわれる。

「ふざけんなああああ!!!」

「よっ」

再び大男のリアットのような前腕を振り回した攻撃。

私の胸部を狙った攻撃のようだったがアルゴリズム体操のように、バーベルを首に乗せたまま行うスクワットののように頭を下げればぶつかることなどなかった。

ありがとう。紫先生。

ありがとう、紫先生のバーベル。

筋トレの動きを〈回避〉として流用できる日が来るなんて想定してなかった。

「あっ♥ああああああっ♥♥♥」ドピユ

「あっ!?!ドピ!?!ああ?!あああああッ  
!?!?!」

そんなことよりも私の左肩と右肩が大変なことになっている。

右肩側からはしがみつく鹿之助くんの嬌声がモロASMRのよう  
に響き。

なんか、なんか。

語彙力を落ちてしまうのだが、左肩側からは。  
なんか。

ナニかの発射音が聞こえてきた。  
つづいて

びゅるるるうー。どくっ、どぶっ。  
って音。

なんか。

発射音側を見たら、ガチで私のほうが見境がなくなっちゃうような鹿之助くんの生理反応。

なんか。

独特な。

なんか。

尿とは違う。

なんか。

粘液状の。

なんか、生暖かい液体が左肩——具体的に鎖骨を通って乳房を汚して行っているような感覚がある。

布地が無ければ耳の外耳道と呼ばれる腔内<sup>ホール</sup>へホールインワンして  
そんな勢い。

明らかにカルティストが私を仕留めようとしている危機的状況なのに、鹿之助くんのえろえろ成分で状況と情緒と理性がやばいんだが？

白濁した懸濁液のフレンドリーファイアで私の獣性が暴走しそう  
なんだが???

ウウツ。

オデ。

オマエ。

ステイック。

マルカジリ。

「ヒヤ!?ど、どういうことだ?!?!  
?!!こいつ、ちんちんがついてんじやねえか  
!」

「えっ!?お前、男だったのかよ?!」

「こ、こいつ、こいつのこと……彼氏って言ってたよな……!? つまり  
お前達……ホモか!」

「そういうのも114514!うん!おいしい!!!美味しい展開だね  
!」

鹿之助くんによる男汁放流案件でどよめく一同。

無事にシリアスブレイクです。

シリアスが壊れたじゃん。

シリアスが続けたかったの。

どうしてくれんのこれ。

ついでに今この時でも、私が男水着チャレンジによる〈変装〉が女ではなく男として見られていることは喜ぶべきか、それとも悲しむべきか判断に悩む。

きつとむき出しにしている素肌のあちこちが傷らだけで、そんな外見を晒している女など逆に考えづらい存在なのだろう。

だが、この同時に脱出のチャンスを見逃す私でもない。

男汁が乳房どころか腹部のへそ穴まで侵食したところで、相手側の動揺の隙を狙って襖を踏み倒す形で包囲網から突破する。

「あっ！」

「待てコラー！」

「騙しやがってえ！逃げられるとも思ってたのか!？」

「ええ！で、これは置き土産！」シュツ

包囲網突破と共に外に立てかけ持参していた軍用スコープを手にして監督のカメラ目掛けて〈投擲〉する。

「ヒッ！」バキヤツ

《無欠の投擲》を扱ったわけではないが、アンダースローで放り投げられた軍用スコープは見事に刃先が監督の所持していたカメラに突き刺さりメモリーカード部分を真っ二つに粉碎する。

「よしッ！」

N i c e   s h o o t .



これだけの破壊力と命中精度ならば、この世界では野球選手にでもなれるんじゃないか？

階段を駆け下りながらも、小さくガッツポーズを作る。

指紋べつたりのスコップをその場に放置するのは、致命的と言えぱ致命的だが少なくともSNSを中心とした数多の不特定多数に動画が拡散されるよりは幾分かマシな証拠だろう。

それに証拠は最後まで完璧に隠滅してナンボだ。

既にそつちの準備は整っている。

Episode 135 『クトゥルフ世界の（てめえの焼死体の上で）様式美解決法（マイムマイムを踊つてやる）』

階段を使つて、鹿之助くんを両肩に背負つたまま駆け降りる。

鹿之助くんによる白濁した懸濁液のフレンドリーファイアを視界へ入れないように配慮しながら背後を振り返れば、踏み倒した襖を続くようにして逃がすまいと決死の顔をした大男、チャラ男、ゲス男の3人が追いかけてくるのが見えた。

「イッッ！」

「ギャッ！」

「ギッ！」

しかし振り返つたあたりで彼等の痛みに対する呻きが聞こえてくる。

誰も彼もが痛みの原因となつたであろう患部——足の裏を手で押さえている姿が見えた。

あれは間違いなく私がグラスをチャラ男の顔面で叩き割つた時の破片でも素足で踏んだのだろう。

人間であるからにはある程度は踏まないようにするだけの知能はあるかもしれないが、仕草とあの声は完全に破片を踏んだ時の絶叫だ。

もし彼等の攻撃を反撃もせず私がのらりくらりと土足で〈回避〉し続けていたと思われていたならば、お門違いだったと身に染みただろう。

これまでの〈回避〉行動で円舞曲を披露しながら飛散したガラスの破片を更に広範囲へと散開させてもらった。

これで奴等は満足に歩くことなどできない。

降りるたびに体重が素足の裏に加わる階段を通過する等もつての

外。

板の間でもガラス片が肉に食い込んでそれなりの激痛が走るはずだ。

そんな負傷状態で塩を塗り込むかのような行為となる砂浜まで追いかけることなんてできるわけもない。

端から私は土足で上がり込んでいた以上、そのような怪我など生じる訳もない。

素足の鹿之助くんは既に私の両肩の上だ。

世界共通言語である暴力で解決しながらも、*“頭を使って”* とつておきの切り札をさりげなくここぞとばかりに発揮させる。

さあさあさあ。

It's show time!

その逃げられない足のまま、タバコの不始末、可燃物への引火、大炎上。

フアラリスの雄牛の刑に処してやろう。

「あっ♥あっ♥あっ♥あっ♥あっ♥あっ♥あっ♥あっ♥」  
「……………」

……………でもまずは、右肩からずっと聞こえてきている生ASMR  
鹿ちやんをまずなんとかしちやおうかな。

クリがピン立ちしている彼のY字の股間へ顔面を押し付けて深呼吸をしたくなってしまうほどに、栗の花の匂いを漂わせる棒状のナニカから、とめどなくナニカが流れているし、変に生暖かいからなんかいろいろ変な気分になってくるんだが???

対魔忍世界だしコレを直接的な表現をしても構わないような気がするけど、直接的な表現をしたら色々吹っ飛びそうな予感がするし。

てか、男のゴつて一発出したらスッキリするモンじゃなかったっけ？

今から約100年前。釘貫神葬の義務教育での保健体育の教科書では、そんなことを学んだような気がするけど？

ねえ賢者タイムは？賢者タイムどこ？

クスリでおかしくなってるの？ それとも元から絶倫なの？

ねえどっち!?

私が先におかしくなっちゃうよおおおおお！

なんて心情を表に吐露するわけにもいかず……。

「着火」

ポーカーフエイスの仮面を被ったまま、鹿之助くんにはこれから行く盛大なバーベキューキャンプファイヤーを見られてしまわないように砂浜でオーシャンビュー側向きで鹿ちゃんを安楽な姿勢で寝転がした。

私は2階でくすぶっている奴等が行動を起こす前に、海の家の灰皿の近くでタバコの灰を落としながら最終的には畳を炎上させる。

あつという間に火の手は広がり、白煙が立ち込め、奴等は視界を奪われる。

あの足に加えて煙に巻かれホワイトアウトした視界では熟練の同胞探索者でもない限り、激痛のなか急こう配の階段など到底降りることなどできないだろう。

私はなんて温情があるのだろうか。

彼等に死に方を選ばせてあげるなんて。

一酸化炭素中毒か、焼死か。

バーカウンター裏のお友達は焼死を選んだよ。

ヤツは田舎における名物怪異：くねくねのように全身を炎で彩ってタンパク質が燃焼させる臭いを漂わせている。

君達には好きな方を選んで貰おう。

ご丁寧にあの部屋は錆びついていそうな重々しい雨戸が閉められている。

はたして煙が充満するまでの僅かな時間に、雨戸を開けて2階から飛び降りて逃げるという選択肢は取れるかな？

——ああ、なんて私は優しいのだろう。

着地狩りができるように外で待っていてあげるだなんて。

それに。

既に彼等は足に食い込むガラスの痛みは十分すぎるほどに堪能し尽くしている。

そんな状況で飛び降りる勇氣など湧くだろうか？

仮に飛び降りることができたとしても、打ちどころが悪ければ私が追い打ちが待っている。

——そうそう。

おまけで、ささやかながらプレゼントも用意した。

それは“当然の推論”の観点からしても私が存在を描写せずともあつて当然のもの。

消防署から住宅用消火器の設置を推奨され、炎上真つただ中の一軒家にも存在している屋外に放置された消火器だった。

彼等が階段を下ることができて、炎が行く手を遮っている時はその消火器を使つて火を消せばいい。

カルティスト共の命運は私の手に握られているという全能感に、高揚しギラついた笑顔を隠し切れない。

タバコの不始末で炎上させた記念すべき20軒目は、カルティスト共の根城荒廃した海の家でした。

燃えろよ燃えろよ民家よ人間よ証拠よ、全て燃えろ。

1 犠牲者の怨嗟の炎が宿っているかのように激しく燃え広がる最中、周囲に〈目星〉を行い更に消すべき証言者が居ないかどうか確認するが特にそういった脅威は見当たらなかった。

……  
……  
……

結局、彼等は誰一人として飛び降りてくることはなかった。

必死に腕を錆びついた立て付けの悪い雨戸の隙間から伸ばしてなんとかこじ開けようともがいていたが、既に煙は2階にも充満しているようで腕一本分の隙間からは白煙が立ち上っていた。

ものの数分間に雨戸の隙間から伸びていた複数本の腕は1本、また1本と植物が枯れるようにパタリと萎れてしまう。

やがて火の手は更に強まり、雨戸からの脱出を諦めた人物が階段を下る様子が遠巻きながらも観察できた。

例の監督の姿だった。

彼は這う這うの体で救済措置として設置した消火器を手に取り――

「バーン」

――パァーンツ！！！！

指でピストルを作り手にした消火器に狙いを定め、射撃音を口にした私の声とほぼ同時に聞いた破裂音と白煙が周囲へ舞う。

あれは放置された消火器を使用した瞬間に、内部のガスが圧縮され底面が破裂し爆発した音。

こんな寂れた民家の屋外に設置された消火器など、潮風やら雨風に晒され錆びつき拳句の果てには〈法律〉の消防法に基づいての交換や点検などもされている筈もない。

消費期限はとつくの昔に切れている。

そんな状態で使用しようものならどうなるか。

「フツ」

大炎上する民家から誰も出てこないことを確認し、鼻で笑って現場に背を向ける。

この調子で炎上し続けてくれるならば私に関する証拠は残るまい。カルティストとは親族もろとも根絶やしが基礎だが、手掛かりがない状態で私に辿り着くことは不可能だ。

そもそも今回はタバコの不始末による焼死事件。

1人は焼死、3人は一酸化炭素中毒死、1人は消費期限の切れた保管状況が劣悪な消火器を使用したことによる爆死。

その結果からどうやって私と鹿之助くんに〈目星〉を付ける？

「まったく……」

いつものように殲滅したカルティストは放っておいて、ひと段落ついたところで安楽な姿勢のまま砂浜に寝転がしている鹿之助くんの方へと近寄る。

「ほおっ ♥ おほっ ♥ ほお ♥」

彼は寝転がした姿勢が悪かったのか、彼はうつ伏せになり愛らしい喘ぎ声を上げながら砂浜に自身の股間をぐりぐりと何度も打ち付け男らしい行為にふけている。

ありや女には無理だ。

なめらかな素肌にはチラホラとヒメスナホリムシが喰らいついている姿が散見されるが、その痛みですら今の彼にとっては快樂の何者でもないらしい。

そんな彼の芋虫のように悶える姿にキュンとしてしまう。

キュンとしてしまうが、ここは堪えて優しく彼を諭してみる。

「はあ……。本当に鹿之助くんは手が掛かるんですから。私なんかよ  
り『かわいい』のですから、少しぐらいいは周囲に対して警戒心を持つ  
て欲しいですね。そもそも私の到着が遅れていたら、今ごろ取り換え  
しのつかないデジタルタトゥーを世間にばら撒かれるところだった  
んですよ?」

「♥♥♥♥♥」

フリルスカートのすそからはみ出す小山から無色透明と化したデ  
ビデビの粘液汁を垂れ流す彼の下まで歩み寄り、ヤンキー座りをして  
彼を覗き込み様子を観察する。

今の彼では説教混じりの小言はソフトな言葉責めに。見下ろす行  
為さえも視姦として快楽に置換されているらしい。

もしもアニメの世界なら今頃、彼の両瞳には♥マークが並んでいる  
ことだろう。

「……目を離れた私も悪かったかもしれないけど……こんな調子  
じゃあ、ますます目が離せなくなるじゃないですか……」

ため息をつきながら焦げた肉の臭いのするカルテイスト殲滅現場  
から離れるため、下半身に私が首から掛けていたフェイスタオルを巻  
きつけてお姫様抱っこで抱え込む。

私の腕の中で生まれたての赤子のように全身の筋肉を丸ませて、可  
愛らしい仕草をして抱きかかえられる彼は何処からどう見ても愛ら  
しい彼女だ。

振動による肉の悦びが身体の芯を刺激続けているのか、抱き上げて  
も彼の表情は恍惚とした表情のまま変化することはなかった。

「……………2人の元へ戻る前に、その鹿之栗汁を何とかしなければな  
りませんね」



今の発言でどこか期待の眼差しに変わった彼を見つめながら、焼け崩れる音を反響させる海の家を背景にふうま君とヘヴィ子ちゃんの待つ浜辺へと戻るのだった。

ザザーツ……ザザーツ……

夕日が街の裏に沈み、空が陽葵ちゃん色に染まった頃。

私と鹿之助くんは、あの騒動のちに何かをするわけでもなくふうま君と色んな意味でヘヴィな方の蛇子ちゃんの元に戻って、2人でパラソルの下で海を眺めながら時間を潰していた。

正確には鹿之助くんが男達に盛られたクスリでボンヤリとして動けない間、私が傍について海を眺めながら正気に戻るのを待っていたという次第だ。

最初は警察にでも通報しようかと検討したもの……。

前世での警察の調査に対する不信感や事情聴取、人の不幸を面白がる週刊誌等によるセカンドレイプ。

既に私刑として民家に火を放ったこと。

実際の被害者が男性の場合による性被害の泣き寝入り率。

日本国の被害者晒しの加害者擁護などを考慮した結果。

今回は未遂——介入によって被害を未然に防げたこともあって彼の今後を考慮し通報はせずに事態の解決は他の観光客の火の手に関する通報の処理のみで見送りとした。

ゆえにこちらはクスリが抜けるまでの間、ただただ海を眺めて3時間ほど浪費する。

「……………」

「……………」

当然。

警察にも告げていないのだから、ヘヴィ子ちゃんやふうま君に今回の件は伝えていない。

伝えるわけもない。

だから彼を抱きかかえて彼等と合流した後は『鹿之助くんは遊び疲れちゃったから、少し休憩したいみたい。2人は海を満喫して来て』と伝えたところ、あれから心配性の私のために定期的な生存安否確認報告を除いて、一度も拠点へ戻って来ていない。

「……………」

「……………」

あれから色々大変だった。

足腰は立たず下半身だけは勃ったまま大惨事の鹿之助くんを引き連れて、共同シャワー室に連れ込み湧き出る穢れを洗いながして……………」

彼が正気に戻るまでのあいだ脱水や水中毒を引き起こさない程度に適度の緩和ケアとした水分補給をさせ、日の傾きと共にパラソルの角度を調整し、移動は基本お姫様抱っこで……………」

理性が何度吹き飛びかけたことか。

——やばかった。

対魔忍世界にやってきて一番理性がやばかった。

カルティストを始末するときだって、理性を働かせた誰の目にも止まらないような慎重に配慮しての殲滅行動だったはずだ。

今の彼といるとその周囲の目など気にせず獣性のままに一発とは言わずに冷静さを取り戻すまで、恋愛のBによる愛撫ヌキを続けようかと血迷ったこともあった。

だけど、私達はまだ友人だ。

そういうことはしてはいけない。

ここは私の視点から見ればこの世界はアダルトゲームの対魔忍の世界線だが、それを実行することは現実的によろしいことだとは到底思えない。

そもそもそのような早まった行為に至った結果。

『交友関係が深まるどころか破綻するという尤も避けたい事態へと

発展することだってある』し

〈医学〉観点から『薬物セックスによって鹿之助くんがED勃起不全・勃起障害に陥ってしまったらどうする?!』と自分に言い聞かせることで踏みとどまれた。

記憶を思い返すたび、曲：ロウワアのMVに登場するユダが片手で顔面の半面を覆うという仕草を何度したことか。

「……………」

「……………」

「♥」

でも今は、今だけは。

自分へのご褒美として少しだけ彼と現状に甘えさせて頂き、彼の隣に座ってぴったりと肌をくっつけ合い、身を寄せ合って夏の海を眺めていた。

恋人でもないのにえっちな事に発展するのは倫理的に問題なので、この行為だけでも十分に満たされるような気がした。

また私が男役を務めていること、身体には幾十ものカタギらしからぬ傷跡やタトウーストッキングによって輩の接近をあらかじめ排他できている。

それがまた完全な2人だけの特別な時間が構築できていて――

「う……………」

「……………どうかしましたか。鹿之助くん」

「う……………」

「大丈夫ですよ。私が居る間は私が鹿之助くんを護りますから。安心して調子が戻るまで休んでくださいね」

また時々、彼は俯いた状態から小さく言葉を漏らしながら視界を正面に向けていることがある。

約1時間前からこの調子だが呂律がはつきりしない以上、まだ完全

にはこつちには戻ってないのだと思う。

だから私が最大限できることとして優しく微笑みながら母親のように優しい声で彼を労い、潤いに満ちた彼の長い髪を手で梳かすのだった。

「……………」

彼のつるつるむっちりとした大腿部で鹿乃助平棒は挟み込むように隠されており例のアレは見えない。

だが、私が触れるたびに『とぶとぶっ♥』と、股間から鹿之栗汁を迸らせていないことから、ある程度クスリは抜けているらしい。

私の中で悪魔が『お触り開放！放題！ファイバータイム！ヒーハー！』と叫んでいるが、一方の天使は『ステイツ！ステイツ！まだです！まだです！もっと意識がはっきりしてから愛撫しなさい！』と叫んでいる。

私の煩惱！うるせえ！

「……………」

「……………」あ、ありがと……………」

「!?」ガタツ

「?!」ビクウ  
!!!!!!

飲み物を取ろうとクーラーボックスへと顔を背けた時のことだ。

顔を背けた瞬間、はつきりとした呂律の鹿之助くんによるお礼の言葉に身を震わせて彼を見てしまう。

彼もまた私の俊敏な動きに対して、身を細長く跳ねさせながら驚いた私を見つめてきた。

「……………」

「……………」

「……………鹿之助くん？」

「……………お、おう……………」

「もう大丈夫なの？」

「た、たぶん……………？」

ぎこちなくも返事を返してくる彼はいつも通りの彼のようにも見え  
えた。

凝視する私から少し顔を背けて目だけはチラチラと……………秘部全開  
放状態の乳首や私の海パンに目を向けてくる。

目のやり場に困ったかのような仕草や、腕を口元に持って行っては  
恥ずかしそうな顔をした彼は間違いなくシラフの反応だ。

「……………そっか。それはよかった」

「う、うん……………」

「……………」

「……………そ、それで……………」

「はい？」

「おれ……………。……………お店の人に誘われてジュースを飲んで動けなくなっ  
た辺りまでは覚えているんだけど、そこからかなり記憶があやふやな  
んだ……………。でも危なくなった途中で日葵が迎えに来てくれて、そして  
俺がいつの間にかここにいてるってことは……………。もしかして、俺は、  
また……………？？」

「ええ。また、鹿之助くんを救っちゃいました」

体育座りに姿勢を変えながら両膝に顔の側面を乗せて、鹿之助くん  
の横顔をみようと少し前かがみになる。

相変わらず彼はこっちを見ようとしないが初々しい彼のことだ。  
きつと照れているに違いない。

だからこそ、彼の質問には調子に乗ってピースサインを作りながら  
満面の笑顔で返事をした。

「一時はどうなるかと思いましたよ。彼等のタバコの不始末で海の家は燃え始めるし、誘拐した彼等は道連れにしようとするし、〈法律〉を振りかざされて大人用のえっちなゲームの導入部如くAVだって撮られかけたんですからね！」

「え？ ……えーつと…？ ……せ、正確かどうか……確証はないんだけど……俺が覚えていることとして、日葵がこれまでに見たこともないぐらいに目を見開いてギラギラに輝かせて、日葵の方が半世紀前の法律を振りかざして司法無双していたような覚えがあるんだけど……？」

「ははっ。夢でも見ていたんじゃないですか？こまけえこたあ良いんですよ！」

鹿之助くんの鋭い正確なツツコミにやる夫のアスキーアートのように手を動かして渦巻く矛盾を〈言いくるめ〉ゴリ押しで片付ける。

ガハハハと豪快に笑う私に、やっと鹿之助くんは辻褄が合わなさそうに納得していない顔をしながらも視線をしっかりと向けてくれた。その反応がクスリでぼんやりしている頃の彼よりも、その鮮明な反応がより嬉しくて。

普段の自然体の表情がブルアカのアスナのようなニンマリ顔として浮かんでしまう。

「…でも、さ。本当にありがとうな。今回も助けてくれたこと」と

「いえいえ、礼には及びませんよ」

「今回だけじゃなくてさ、前回も…。その前も…。学校でもさ、勉強のこととかで気にかけてくれて、その他でも常日頃から色々助けてくれて…日葵が居なかつたら俺はきつと…。」

ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。ア。アアアアアアアッ  
!!!!!!!?

段々と声がか細く、しんなり、しおしおとしおらしい鹿之助くんの表情で私の情緒が掻き乱される！





「その、日葵との関係なんだけどよ……」

「はい?」

「……。その。嫌だったらいいんだ。嫌だったら」

「……。やけに勿体ぶつた言い方で焦らしますね?」

鹿之助くんの特大の前置きと大きな深呼吸が挟まれる。

心の奥底でこれ以上ないぐらいの期待が膨らむ。

こちらの期待なんて裏切られた時……。というよりも、私にとって位にすぐわないことを言われたときにショックを受けるからするべきではないが、これには期待をしてしまう。

「と、友達以上の関係になっちゃダメかな?」

「モキユ

やばい。

やばい。

青空 日葵から釘貫 神葬が飛んで行ってしまいそう。

やばい。

今、自分がどんな顔をしているかも上手く表現できない。

イシキ、消し飛ぶ。

ウッオッオッオッオッオッオッオッオッオッオッ!?!?!

。(デスボイス)

「いいいいいい嫌だったらいいんだ!嫌なら俺は日葵を尊重するぜぜぜ!!!?」

どうぶつの森におけるハニワのような表情が拒絶反応と捉えたのか、同様に言葉が震えはじめ動揺し始める鹿之助くん。

待って。違うの。私の情緒が追いついていないだけなの。違うの。違うの。これは、違うの。

公衆の面前での “ホイッスルシャウト” を堪えているだけな

の。

「と」

「と、と？」

「と、ととととととと」

初々しい生娘みたいな反応が出ちゃう。出ちゃう。中身はそんな歳でもないのに。出ちゃう。

「ととととととと友達以上のかかかんけいってててててて??？」

それは、もう。

蓮魔先生に問い詰められたときの反応とほぼ変わらない。

パニックは伝染するとはいうが、私の混乱で鹿之助くんもマナーモードバイブの動きを見せている。

この世界では彼とは同級生だが、転生者の年上として情緒を押さえなきやいけないのに治まらない止まらないカルビー。

「と、とと友達以上の関係って、ほら、そのつ、あれだよ。アレ」

目を泳がせて可愛らしい挙動不審な鹿之助くんの顔をまともに見ていられなくなる。

もう小悪魔ちつくなブルアカのアスナのニンマリ顔とか無理。

日焼けのせいかな、それとも興奮のせいかな、顔から火が出るほどに熱い。

片手で口元を押さえ彼から顔を背ける。

両目を瞑って後頭部を搔く。

「あ、アレね。ア、アレ」

「そ、そう。アレだよ。アレ」



あのね!!! 鹿之助くん!!!?  
でもね!!! 鹿之助くん!!!?

もうそれはプロポーズだよ! プロポーズ!!!!  
でも恋人の告白じゃあないよね!?!?! コレエ?!!

もうあれじゃん、これあれじゃん!?! 結婚の時のアレじゃん! 籍  
を入れるときに言われるアレじゃん!!! 恋人すつ飛ばして結婚の申  
し出じゃん!!!

結婚を前提にお付き合いしてくれってことじゃん!!! 添い遂げてく  
れってことじゃん!?

え!? 私達、出会ってまだ3か月目なんだけど!?

神村さんとの殴り合い見た上で?! コレってそれも受け入れてくれ  
たうえでの申し出だよね!?

もうそういう風にしかな聞こえないんだだけど?!?

両手で自身の口元を覆い隠す。

一呼吸おく。

彼の顔を見つめ直す。

その表情はとても真剣だ。

真摯で本気の告白に圧倒される。

私の思い違いだとか、彼の “憧れ” である神村のこととか、今  
日の事件のとか、他に色々と考えなきゃいけないことが全てひっくり  
められて誓いの言葉によって吹き飛ばされる。

前世では諸事情や一族の事情で恋人や伴侶を作ることに対して諦  
めていたものだが……。

転生後ではその諸事情の問題発生率の低下も考慮し、対魔忍世界で  
は一般人枠として人生を謳歌したい上で、いずれは、相手が鹿之助く  
んとでなくても “そういう関係” を築き上げたいと思っていた。

だから心の奥底からずっと慕っていた彼から願ってもないような  
言葉を告げられて、顔から炎が噴き出しているような熱さに苛まれ  
る。

心臓がとびぬけそうなほど鼓動が高鳴る。

群衆の声が一掃される。

心拍数が上昇する。  
視野が狭まる。  
身体が硬直する。  
息が吸えなくなる。  
喉がカラカラになる。  
鹿之助くんしか見えなくなる。  
飛ぶ。飛ぶ飛ぶ飛ぶ。トブ。

「ど、どうかな……？」

まさかの鹿之助くん側からの告白に喉を詰まらせ、身を固まらせて  
既に36秒<sup>3ラウンド目</sup>。

私の視界は集中線で覆われ、ほほを桃色に染め上げながらも勇気を  
振り絞った鹿之助くんの顔だけが五車祭<sup>ピクアツ</sup>される。

Episode 137 『ムードブレイカー蛇子』

「——は——」

それは胡蝶の夢のような出来事に  
赤面したまま返事をする直  
前の出来事だった。

「はろろーん♪ 本当にあなた達つてどこまでも凸凹コンビよね♪  
こんなところで何をしているのかしら〜？ 呑気に逢引？」

本来ならばここに居るはずのない女の声、もによった私の返事を  
掻き消すように聞こえる。

今日は “会合” する予定ではない筈の女の声。

「ッ！」

最絶頂まで上り詰めていた高揚が地面にたたきつけられたかのよ  
うに下落し、恐怖と警戒の色に塗り替えられていく。

背筋の毛、ほぼ全身の毛が逆立つ。

大事な鹿之助くんの返事をほっぽり投げてしまうほどに、突発的に  
表れた邪神に対して砂ぼこりを撒き上げながら身を翻し、SPY+F  
AMILLIのルナ・フォージャーが牛の暴走を静止させた時のように  
身構える。

「……………」

「あら〜？ そんなに殺気立つちゃってえ♪ かわいいお顔が台無し  
よ♪ 台無しにするなら私の手でグツチャグチャにするんじゃない  
と♪ ね？」

私達のパラソルの真裏。

死角に値する位置に、あの女がクスクスと嘲笑いながら佇んでいた。

凶悪な気配どころか何なら鹿之助くんが教えてくれた瘴気すら微塵も感じ取れない私でも危険を察知できる存在。

経験から伝わる生理的嫌悪感。

対峙しただけで圧力に押しつぶされそうになる心。

既にまえさき市の遭遇戦で切り札の1つを消費し、満足に渡り合えるだけの対策装備も無く――

コイツといま争うのだけは適切ではないという焦燥感。

その女はこの夕暮れのビーチで、肩に青白い獣の毛皮を羽織り、ノースリーブの白のビスチェとスリットの入った紺のタイトミニスカートを纏った――

――スネークレディの姿だった。

一難去つてまた一難。

ヤリモクの男達は簡単に蹴散らせたがこっちはそうもいかない。

そもそも来週には東京キングダムで会う手筈だったにも関わらず、わざわざこっちのバカンスに邪魔をするために顔を見せるなんて何が目的だ？

しかも絶妙にタイミングは最悪。

彼女はこちらの殺意の塊マッで殺す覇気に晒されても、ヘラヘラとした緊張感など僅かにも見せない無防備な状態を曝け出している。

いつでも私達など虫ケラのように握りつぶせると思っっている邪神特有の慢心だ。

「え、えっと。ひ、ひまり？ どうしたんだ？ だ、誰が……？」

「はあい♪ 元気になっていたかしら？ ボウヤ♪」

「ひっ！ な、なんでお前がここに……」

ただならぬ気配で躍り出るように身構える私に鹿之助くんもパラ

ソルの裏から顔を覗かせる。

本当ならば彼を護るためにもパラソルから体の一部を出すことは  
“完璧な遮蔽” から逸脱する行為のため制止したいところだっ  
たが、こちらの装備品が男水着のみである以上、不意な彼の動きに警  
戒心を割くりソースは残されていなかった。

緩慢な動きでスゴスゴと出てきた彼は、まえさき市でえっちなお店  
を開いている方の蛇子ちゃんを見るや否や身体を硬直させる。

私を護りたいと言っていたのに、動けなくなるなんて情けない……  
なんて言わない。

こいつは私にだって規格外過ぎる存在なのだ。

まえさき市では知らなかったからこそ、あのような魔族語本の解説依頼無鉄砲な行動に

打って出られた。

だがあの休憩所で鹿之助くんから高位魔族の存在や脅威について  
説かれ、タイムマンで一戦を交えたからこそわかる。

アイツはまずい。

私の世界線では十分な『グレード・オールド・ワン』級の脅威。

だからこそ制止のリソースは割けなかったものの私が左手で彼を  
隠し、毒牙から彼を私が護る。

これではプロポーズの過程で『護りたい』と言ってくれた鹿之助く  
んの面目は丸潰れだが、コイツの相手は別。

元を辿れば、私がまえさき市で迂闊に魔族語で書かれた本を迂闊に  
見せびらかせなければこんなことは起きなかったのだが。

やはり『無知は罪』そんなことを頭の片隅で考える。

「ヤボ用がちよつとあつてね♪ 今から帰るところなのだけど、出向  
いた先に見知った顔が居るものだから『御挨拶に』って立ち寄っただ  
けよ♪」

「それはそれは……ご丁寧にありがとうございます。『ああ！こんに  
ちは、またお会いしましたね』（棒） さ、挨拶は済んだでしょ。とっ  
とと早うはよ去いね」

「イヤ〜ン、そんなに邪険に扱うなんて酷いわあ♪ 乙女心が傷つい



「ちやう♪」

「もう乙女つて年齢としでもないでしょう」

「あらあらあ？ その発言はブーメランが刺さっているんじゃないかしら♪ そ・れ・に♪ それが友達に対する口の利き方なのかしらあ？」

「と、ともだち？ 日葵、コイツと友達なのか?!」

「……………」

「意外？ ゼラトシーカーちゃんと私♪ 友達になったのよ♪ ね？」

せせら笑う彼女に手の甲で羽虫を跳ねのけるようにしっしっしっしと手首を動かす私に、この女はお返しとばかりに余計な事を鹿之助くんに暴露する。

背後を確認しなくても左耳から伝わる困惑する彼の声から、私と奴を交互に見ていることがなんとなくわかる。

こいつは。本当に。余計なことしか。暴露しない。

「ぜ、ぜらと……………」

「日葵ちゃんの本名に近い名前よ。彼女と親友の間柄なのにそんなことも知らないの？」

まえさき市で人間風情に泣かされた蛇子ちゃんの顔がニコニコとした愛想のよい表情からスウと真顔に戻り、殺意と敵意むき出しで睨みつける私へと視線を合わせてきた。

そんな彼女からは敵意は感じられることはなかったが、明らかに青空 日葵を依代にしている『釘貫 神葬』に対して語り掛けている。

私の “正体” について対魔忍世界で唯一存在を知覚している。理解者であるとも言いたげな顔だ。

「……………」

鹿之助くんが私のことを不審な目で見ている……ような気がする。目の前の蛇子ちゃんから一瞬たりとも目を離すわけにはいかないので、不審な目で見ているのは私の思い過ごしかもしれない。

だが私の後ろめたい正体について触れられているせいで、彼の視線が気になつてしようがない。

そんな内心を見透かすかのように正面の蛇子ちゃんほんのり微笑む。

人類を誑かし、破滅へと陥れる邪神の如く。

「……………要は愛称つてことですよ」

だから彼をへ言いくるめ〳〵て誤魔化すために『ゼラトシーカー』について、それっぽい真実だけ伝えて誤魔化す。

今日ほど鹿之助くんがヤク漬けにされて可哀想な目に遭っているにも関わらず、この瞬間だけは再びクスリで脳みそトロトロ鹿ちゃんとして頭を回さないで欲しいと願う。

《思考力マインドブラスト》してしまいたくなる。

「……………あ。『ゼラトシーカー』は本名に近い名前だから愛称なのか」

背後から腑に落ちたかのような、小泉文書を読み上げながら納得しているかのような鹿之助くんの声が聞こえてくる。

もしかすると別の意図を汲み取っているかもしれないが、今の私としては結果オーライだ。むしろ誤った認識で納得してくれた彼へ内心ホツと一息つく。

鹿之助くんの不信感を煽ってきた挙句、私に心的ストレスを与えてきた蛇子ちゃんを一発へ頭突き〳〵でぶん殴って泣かせてやりたいところだ。

「ふふふっ♪ それじゃあ♪ 挨拶もできたことだし、またね♪ 近いうちにまた会いましょう？ ゼラトシーカーちゃん♪」

「はいはい」

「……………」

後ろ手でヒラヒラと手を振って、別れを告げる蛇子ちゃんが人混みの中に掻き消えるまで見送る。

彼女が背中を向けた途端、蛇に睨まれたような重圧感は消え少しかけ肩の力を抜くことができた。

しかし……………。

「……………」

「はあああああ……………」

ご覧の有様である。

鹿之助くんは緊張の糸が途切れて溜息をつきながら夕方の空を見上げている。

そう。

完全に雰囲気**が**ぶち壊されたのだ。

もう告白プロポーズに対して返事できるような雰囲気ではない。

ムードブレイカー蛇子によって。

うやむやになってしまった。

完全に蛇子ちゃんが視界から消え去った所で両目を瞑り後頭部を搔く。

本当に覚えてろよ。あの邪神。

近い未来、超科学の〈物理学〉演算で故郷の宇宙へショット&リリースしてやるからな。

……………

……………

……………

「…………あれ？ 2人ともすごく疲れたような顔をして………… ——もし

かして!？」

あのバカを宇宙の彼方へリリースする計画を練っている間に、まえさき市で3時間ウンコしていた方のへヴィ子ちゃんかへとへとになっっているふうま君の手を恋人繋ぎで引きながら目をキラキラと輝かせながら戻ってくる。

「いえ、色々トラブルが重なりましてね……」

だが。

あの場にさらに護るべき対象を1人で抑えられたこと自体はへ幸運だっただと考えるべきだろうか。

なろうのヤレヤレ系主人公のように前髪を掻きあげながら当たり障りのない返事で何事もなかったかのように振る舞いながら2人を迎える。

日も暮れてきたことだ。

太陽が完全に沈み、彼女のような完全なる魔の者が跋扈する前に五車町へと帰った方が良いだろう。

## 21章 『東京キングダムでの騒動』

Episode 138 『劇的ビフォーアフター』

魔都” 東京』

五車町を発つ朝は早い——とかはない。

明朝の出発とか五車駅に停車する電車の運行状況的に無理。

何度でも言ってるが、五車町はニュータウン（笑）はニュータウンが付属したただの田舎町。

電車とバスを乗り継いで約3時間も移動手段に用いないと都心部に出られない超クソ田舎町。

そんなクソ田舎に存在する五車駅の運行状況、終電時間は——  
なんとということでしょう。

上りの最終列車がまさかの22時42分には通過していく。

本当に人をバカにしているかのようなニュータウンのトレインだ。

始発すら、最速で6時37分。

毎年恒例、年2回のイベント。コミックマーケットに向かうものなら、到着した時点でもう入場が開始されている。

五車駅の隣のコイン精米場の方が24時間営業でよっぽどニュータウンだわ。

そもそもコイン精米場ある時点で、そこはニュータウンじゃないんだわ。  
田舎なんだわ。

この街をニュータウンとかに制定した阿呆には、頬がおたふく風邪レベルで腫れあがるほどに往復ビンタを叩きつけてどこがニュータウンなのか数時間説教に明け暮れたくなるような時間だ。

ゆえに五車の始発も終電もそんなものだから、この真夏のクソ暑い中。

必要な機材や装備をリュックサックに詰め込んで鈴虫やコオロギの合唱を自然のBGMとして聞きながら、闇夜に紛れて終電間際の上

り電車に乗って目的地である東京キングダムを目指していた。

私が『東京キングダムに行く』なんて夏休み前の<sup>インフルエンザ・タイム</sup>出席停止期間に伝えたものだから、先日は何故か意気揚々な陽葵ちゃんが自宅へ訪れて『東京キングダムかいつ出発する？ホテルは取った？私も同行する』『ホテルとベッドIN』など掛け合いを行ったものだが、同行は丁重にお断りした。

一般人は退いていた方がいい。

当日、東京キングダムは（もしかすると）戦場と化するのだから。

……と言っても彼女のことだ。始発前から五車駅に張り込んで私についてくる……なんて行為に至るのは予測しやすい。

ゆえに脳内で悪態をつきながら、前日の終電間際の電車に搭乗しているのが回想顛末である。

……

……

…

乗り換えに乗り換えを挟み、東京都の大地を踏み締める。

遠方には東京キングダムへ渡るための大橋が霞んで見えた。

到着した時点で既に時刻は明朝3時を過ぎ去っていたが、半世紀以上も未来の東京の電車運行というべきか。

終電などという概念は消失しており、緊急事態が発生しなければ24時間電車が稼働し続けているようだった。

「はぁー……やっ到着いた……」

丑四つ時だというのにも関わらず、大勢の育ちの悪そうなウェイに絡まれて不快な思いをした。

五車学園の運行状況が主な原因だが前日に出発してよかったと心から思う。

サイゼリアのくたくたのほうれん草みたいになりながら、本日宿泊

予定の『東京百景ホテル』の前で緊張の紐を緩める。

五車町から東京に訪れるまで様々な悪意とハプニングに見舞われたものだが、なんとか装備一式を死守し五体満足十処女膜を保つことはできた。

(……<sup>約50年</sup>半世紀近く経った程度で治安が悪くなりすぎでしょ)

でも元の現世に置き換えると半世紀の時間の経過による治安の變化も何処か納得できてしまう。

2010年で考えた場合、半世紀前は1960年。日本国内では学生運動によって〈投擲〉火炎瓶が合法フイーバーしていた頃合いだ。

(でも、この治安の悪化はおかしいって)

また首都 東京都が “魔都” 東京都などと禍々しい名称で呼ばれるようになったのか理解できたような気がする。

今、私が降り立った東京都は東京の中心部に近い場所だ。にも関わらず。

その場の治安が既に渋谷区の裏路地レベルなのだ。

『渋谷区の裏路地の様相が東京都全土を覆ってしまったかのように』と言えば、私と同じ現代<sup>とき</sup>を歩むもの達には伝わりやすいだろうか？

歌舞伎町のトー横レベルの治安が東京都全体を覆っている。

だがそんなニューヨークのような世界に片足を突っ込んだ都市部でも、電車の外から見る景色は絶句し目を白黒させてしまうような有様であった。

私を知る『かつての東京都』とはモニュメントとして高層ビルが数多く立ち並び、シンボルの東京タワーと東京スカイツリー、墨田区の金色のウンコがそり勃つ、それはまあ、近代日本の首都と呼ぶには相応しいような場所だった。

県境を流れる江戸川は、酷い緑色に汚染し、時にはプランクトンの

大量死滅で紅く染まるような……。

ちよい混沌とした場所だったのだが……。

現世ではそのような川は存在せず、関東平野の名に相応しいのっぺりとした地上ばかりの……東京タワーやスカイツリーはおろか金色のウンコすらない平面一色な光景となっていた。

都市の最中心部……渋谷や池袋など、かつて商業施設が並んでいた場所は、要塞のような巨大なダムのような壁に囲われていた。

まるで東ドイツと西ドイツを隔てたベルリンの壁のようだ。

その巨大な壁の向こう側には、地上200階はくだらないような高層ビルが幾重にも立ち並んでいる。

ビルの形もバリエーション豊かな槍の穂先のような形状の物からツインタワーのような形状をしたもの、竹を斜めに切ったかのようなバンブートラップ型のビルだつてあった。

(正気か？<sup>2078年</sup> 現代の建設会社???)

いわゆる大陸プレートが4枚も重なり合っているような地震国家日本では考えられないような建物構造ばかりであった。

要塞のような形状のベルリンの壁の手前側には、和風建築の建物は一切残されておらず……いずれも煌びやかでヨーロッパ風の建物に建て替えられている。

(かつては中国——ここでは中華連合か。私の時代では中華連合が日本の国土を買い占めるといふ惨状だったが、これではまるでヨーロッパ辺りに土地を買い占められたようだ)

また対魔忍世界では、東京の住民の半数は地下に移住したらしい。都心の至る箇所に巨大なクレバスのような人工的な亀裂があり、クレバスの壁面には窓らしい四角形が幾千も備わっていた。

カーテンで遮られているものの溢れ出た蛍光灯の光が点灯し、都心部は煌びやかなネオンの看板などで囲まれており、とても私の知る東



京都とは似ても似つかないサイバーパンクな光景と評するしかない。まるでアニメ『PSYCHO-PASS』にて登場する夜景の東京都のような……。

表の見せかけの華やかさを隠れ蓑に、渦巻く暗澹が手招いている。また電車の窓から初めて上記の景色を一望した時には、ディスプレイア世界の住民層区切りの街づくり化に失笑してしまった。

明らかに上級国民、中級国民、低級国民の3層に分けられたそれは、日本国として超えてはならない一線を超えてしまったかのような、後戻りできないような、取り返しのつかない——半世紀前の価値観を持つ私では極めて異質な異世界に見えた。

さらに言えば夜にも関わらず、東京都は物理的に暗雲が立ち籠るかのような空気の濁りを見せており、噴霧ミストや光化学スモッグのようなモヤが首都全体を覆っている。

こんなモヤだらけの空間じゃ、冬の透き通った日ですら富士山を拝むことはできないだろう。

(……本当に酷いな。日本国家はどこまで没落していくつもりか)

これも人魔外道の結託による混沌への凋落、混沌の化身も勝利のアー顔ダブルピースを晒してしまうほどの日本の未来なのかと思うと、精神的に参ってしまいそうになる。

世界線が違えど、この世界には対魔忍のような存在が現れるまで日本を護る八百万の守護神は存在しなかったのか。

(——嗚呼。シヨツギヨ・ムツジヨ)

そう考えると『ニュータウン(笑)五車町は武家の仕来りを重んじてしまうような訳あり因習村ではあるがマトモな方なのでは?』と錯覚してしまう。

「はあ……………」

溜息を一つ吐き、考え込むのは一旦中断する。

東京キングダムに赴くための装備を背負い直してから、東京百景ホテルのエントランスホールから入る。

屋内は大理石で覆われた天井と壁、シャンデリアが吊るされた高級な内装をしていた。

田舎者だと思われると魔都東京では文字通りカモにされやすいことはホテルに至るまで存分に堪能したので、田舎者ムーブのような周囲は見渡さず慣れた手つきでフロントまで赴く。

「夜分遅くにすみません。こちらのホテルに予約している青空ですが……」

「いらつしやいませ。青空様ですね。ようこそ。東京百景ホテルへ、お待ちしております。長旅お疲れになりましたでしょうか？今日はこのままごゆるりと当ホテルでおくつろぎになってください」

「ありがとうございます」

ホテルにチェックインと共にホテルマンから部屋の鍵を受け取る。

部屋番号は4階の2044号室と、これから東京キングダムに旅立つ私としてはあまりよろしくない数字かもしれないが数字はあくまでも縁起担ぎにしか過ぎないと自分に言い聞かせエレベーターに乗って目的の部屋に入った。

……

……

……

室内は一般的なビジネスルームのように見えた。

一通り盗撮用のカメラなどが付属していないかチェックを行うが、最低限の高級ホテルを選んだ甲斐もあってかそのような仕掛けもなく、そのまま机で出入り口扉を封鎖して最高に羽休め場所として朝風呂を浴びる。

既に空は白んでいたが、ついて来れなかった陽葵ちゃんをからかう

ために魔都東京の夜景をフィルムカメラで撮影して帰宅後現像できることを楽しみにした。

入浴を済ませ湯気立つ身体にバスローブをまといながら、持ってきた携帯非常食を美味しく召し上げベッドへと寝転がった。

本当に五車町から東京都へ到着するまでに色々あった。

具体的には群馬県を南下して、埼玉県に突入し、東京に入ってからが一番ヤバかった。

これまでに受けた私の恥辱は、痴漢6回、盗撮5回、ひったくり3回、援助交際の誘い14回、置き引き未遂2回、スリが7回……乗車しているだけでもこの犯罪行為に見舞われた。

いずれも未遂に終わり、だいたい私の装備が重かったようで犯人側が荷物の奪取を諦めたり、盗撮野郎のSNSのアカウントを特定して逆炎上させてやったり、痴漢で人の陰核にまで触れてこようとした奴の玉を潰したりして撃退をしていた。

「二番ひどかったのは、アレだな」

SNSで盗撮された挙句、所在地を晒される行為もアレだったが駅から出た瞬間に援助交際の誘いを受けたことか。

目玉が減圧症のようにギョロっとしていてインスマス面のアイツは明らかに危険なオーラを纏っていた。

生理的に受け付けないとはいえ、赤の他人ゆえにやんわり断ったら暴言を吐かれて殴られそうになり、現場を目撃した警察官が仲裁してくれて安心できたかと思いきや殴ってきた奴とグルで背後に回り込んできたヤツが確実に一発ぶん殴ってきたこととか。

(私がクトゥルフ神話TRPG側の住民じゃなかったら、後頭部のワンパン一撃で気絶していたかも?)

片目をつぶって殴られた場所を搔く。

軽めのたんこぶができています。

〈応急手当〉として冷水を浸したタオルを押し当てた。

——本当に日本とは思えない治安の悪化状況に思い返すだけで、うんざりする。

途中から被害件数の勘定をやめたものだが、実際にはきつともっと狙われている。やはりSNSに盗撮写真を貼られた内容にも書かれていたが、田舎娘っぽさがいけないのだろう。

でも現代の東京の奇抜に奇抜さを掛け合わせたファッションにはついて行けそうにもない。

具体的なファッション例を挙げるなら、A・D・2078において一般的な若者(男)の服装といえど、トラ柄のつば付きキャップを被り、黒のタンクトップにダメージジーンズ、茶色の皮ベルトと稚拙な強盗犯のような朱色のバンダナを逆三角形に折ってマスクが標準らしい。初遭遇時には面を喰らった顔を露骨にしまった。

「……ダメだ。東京旅行1日目の出来事が濃厚すぎて、興奮して眠れない」

ベッドに入って、部屋を暗くして、適当にゴロゴロしていれば眠くなるかな?と思ったが一向に眠れず上半身を起こす。

致し方ないので明日、東京キングダムに持っていく予定の装備一式を確認のために布団の上に広げて再確認し始めるのだった。

# Episode 138 — Tips 『東京キングダム対策装備』

◇〈改造した釘打ち機〉

ジャンル：

〈改造した釘打ち機〉 遠距離武器 現射程3m

道具解説：

改造された釘打ち機。

安全装置が外されており、釘を銃弾のように射出が可能となっている。

仕入れ先：

まえさき市で購入

作者説明したいだけ  
備考情報：

釘貫 神葬が独自の改造を施して射撃武器として活用できるようにしたもの。

ドラムマガジン式の弾倉になっており、装弾数は200発。

攻撃力としてはクトウルフ神話TRPGにおける〈頭突き〉程度の一撃しかないが、釘貫 神葬は前世(クトウルフ神話TRPG世界線)の頃からこの武器をこよなく愛用している。

ただ同時にこの武器を持ち出すときは、”最悪” に対峙することを想定しているようだ。

しかし別段、何か《魔力を付与する》などの魔術的な改造は施していない。

普段であればアタッチメントや追加機能を加えるほどの改良を重ねている。

また威力の高い射撃武器が目前にあっても、用途として瞬間火力や遠方狙撃目的に該当しない場合、必ずやこの〈改造した釘打ち機〉を用いる。

今回はアタッチメントを自作して所持するのよりも先に目的の日がやって来てしまった。

コメント  
独り言：

『釘で貫け。さすれば、神をも葬る』……か。私の親も大層な通称を授けてくれたもんだ」

アイテムデータ：〈改造した釘打ち機〉

『クトウルフ神話TRPG クトウルフ・コデックス』77頁

〃 「クトウルフ・ホラーシヨウ」における武器〃 掲載

◇ 〈改造した釘打ち機〉ストレート弾倉

ジャンル：

武器（弾倉） \* 4本

道具解説：

既に改造した釘打ち機に装填されているマガジンは、ドラムマガジン

仕入れ先：

通販プライムでの入手後、改造。

備考情報：

小型で軽量化されたストレートマガジン。

1本につき100発入る。

ドラムマガジン製よりも装填できる釘の数は少ないが、陽葵ちゃんから貰った対魔忍スーツ（上着）のポケット内に収納しやすいこと。

残弾が200発のドラムマガジンがあればリロードすることはないだろうが、残弾がなくなった時用の備品。

フレージャーのつもり。

コメント  
独り言：

「こつちを装填するとロングマガジンのモーゼルC96みたいになる……」

アイテムデータ：No. Date

弾倉（再装填ルール）

『クトウルフ神話TRPG』69頁

〃 火器の再装填〃 掲載

『新クトウルフ神話TRPG』109頁

“ 火器の再装填（ペナルティー・ダイスの可能性） ” 掲載

◇手斧

ジャンル：

〈近接戦闘（斧）〉近接武器 射程タツチ距離

道具解説：

キャンプ用品として販売されていた金属製の手斧。

斧自体に釘抜きボール機能が備わっている。

仕入れ先：

五車町のホームセンター

備考情報：

本来はキャンプ用品。金属製。グリップ部分が滑り止め素材となっている。

ファイティング・ナイフ備考：一撃火力重視 or 竹刀備考：対人ガチ装備 or 手斧備考：最大火力重視のいずれを所有するか迷いに迷ったものの、最終決断として釘貫き機能が付与しているためボールの代用品として持ってきた。

最終決断時点で所持する近接武器候補に竹刀が上がっていたが、所持に余分なスペースを取るため断念。

釘貫 神葬は、既に東京都での置き引き・スリ・ひったくりの被害に遭い、重量のある手斧のおかげで未遂で終わったことを安堵しているところである。

独り言：  
コメント

「本当は近接武器は竹刀が良かったんだけど、あの軽い材質じゃ絶対に盗まれてたでしょ……。手斧なら〈投擲〉武器にもなるから妥当だったかな……」

アイテムデータ：手斧／小鎌

『新クトゥルフ神話TRPG』401頁

“ 表17：武器 ” 掲載

アイテムデータ：竹刀

『クトゥルフ神話TRPG クトゥルフ2010』36頁

“武器の表” 掲載

◇閃光玉  
フラッシュユバン

ジャンル：

消費武器

道具解説：

周囲一帯に対し、まばゆい閃光を放つだけで正規品のような騒音は発生しない。

仕入れ先：

自作。材料はくさぶき城の海水＋五車町の家電売り場の電球、100円ライターと2種類が出来上がっている。

備考情報：

お手製のフラッシュユバン。

現在、五車怪談として語り継がれている『線香花火の怪』とは、釘貫 神葬がお試して効果を確認した時のフラッシュユである説が濃厚。

現場から逃げる前に「何の光イ?!?!」と対魔忍が集結したが、現場に居合わせてしまった本人は花火だと上手くへ言いくるめた。だが駆けつけた八津 紫と津島優紀子により、その言い分はおかしいと指摘されへ言いくるめを看破され叱られた。

やらかし当時の言い訳コメント：

「あー！違うんです違うんです！昔見たアニメでやってたから！夏休みの宿題のヤツのために致し方なく試……—そうそう！わかってくれますか！津島先生津島 優紀子：対魔忍、五車学園で教師をしている。忍法と特殊な刀捌きによって催眠をかけ、対象の意識や記憶を保ったまま彼女の声に逆らう事ができなくする対魔忍組織の尋問官!!!これは旧アメリカ海軍SEALも御用達の秘密武器にもなったみたいですよ！めつくらまし！めつくらまし！——ええっ?!紫先生!!? さつき正直に話せば怒らないって言ったじゃないですかー！嘘つきいー！」

アイテムデータ：フラッシュユ・ガン

『クトゥルフ神話TRPG クトゥルフ・2010』35頁



“フラツシユ・ガン” 掲載

◇陽葵ちゃんから貰った橙色のライダーズジャケット(対魔忍スーツの一部)

ジャンル：

たいせつなもの

道具解説：

雨降洋館での様々なお詫びとして陽葵ちゃんから貰った対魔忍スーツ(上着)

仕入れ先：

日ノ出 陽葵ちゃん(開発者：対魔忍技術部対魔忍スーツ製作班)

備考情報：

釘貫 神葬自体は、日ノ出 陽葵から貰ったこのライダーズジャケットがまさかの対魔忍スーツの一部であることを知らない……。

本章で所持に至る経緯は『最後になるかもしれない』から記念にとお試して羽織ったことが事の始まり。

夏場にジャケットを羽織るなんて頭がおかしい行為だと思われがちだが、元より釘貫 神葬は探索者である。夏場に “厚い皮のジャケット” を羽織ることなど、何もおかしいことはない。

元より厚い皮のジャケットは『クトウルフ神話TRPG』『新クトウルフ神話TRPG』に登場する探索者御用達由緒正きお手軽衣類装甲であり、釘貫神葬も同じ認識である。

また実際に着用したところ半袖の状態より涼しいことに気付く。

さらに従来のジャケットよりも動きやすいことに気が付き、即採用。

お気に入りのポイントは陽葵ちゃんがオーダーメイドで追加設定してくれたポケットの数の多さと、その利便性、色合いもデザインも好き。

なお繰り返すが、上記の耐熱・冷却効果は対魔忍スーツであるからである。

さらに他の隠された性能を知らない……。

独り言：  
コメント

「陽葵ちゃんには『おとなしく五車で待つてたから特別な着衣写真を  
見せてあげる』って言えば、ご機嫌直しに使えそう」

アイテムデータ：No Date

扱いは『クトウルフ神話TRPG』66頁

「戦闘のスポット・ルール」 装甲の扱いに基づく

◇陽葵ちゃんから貰った革手袋（対魔忍スーツの備品）

ジャンル：

たいせつなもの

道具解説：

陽葵ちゃんから貰った対魔忍スーツの備品

仕入れ先：

日ノ出 陽葵ちゃん（開発者：対魔忍技術部対魔忍スーツ製作班）

備考情報：

ジャケットに付属していた革手袋。

こちらでも使い勝手が良く、手斧や〈改造した釘打ち機〉を振り回し  
た際。手汗で滑り落ちることを未然に防いでくれることに気が付き  
持参。

タッチパネルなども革手袋をつけたまま気軽に操作ができる為お  
気に入りになりつつある。

なおこちらにも貰ったライダーズジャケットと同じ対魔忍スーツの  
一部である。

独り言：  
コメント

「手の甲のお日様マークとかおしやれだな……」

アイテムデータ：No Date

扱いは『クトウルフ神話TRPG』66頁

「戦闘のスポット・ルール」 装甲の扱いに基づく

◇魔族語が描かれた同人誌

ジャンル：

たいせつなもの

道具解説：

言語解説が必要な本の同人誌。

仕入れ先：

自作。魔族語の書かれた本。

備考情報：

釘貫神葬の意識が灯った当初から手にしていた本を同人誌に書き  
写し厚みを加えたもの。

正式名は『アルガルノーヴの書の写本』。

なお先輩やコロ先輩、その他4人の先輩方に解説してもらうために  
渡した奴を改悪したもの。

微塵も情報を回したくないのである程度、文章構成などを並べ替え  
てしまつて居る。

外面だけは一応、原本っぽく改良を加えた。

独り言：  
コメント

「まえさき市で人間風情に泣かされた蛇子ちゃんの話では、蛇子ちゃ  
んのお友達が読めるかもしれないって話だから別に本物じゃなくて  
も良いよね（☆ 素直に教えてくれるとも思わないし☆ だいたい  
高位魔族につけ狙われる原因になった魔族の本きぼくざいを持つてくるわけ  
ねーだろ！バーカ!!!アホアホ高位魔族!!!」

アイテムデータ：オカルト本

『クトゥルフ神話TRPG』104頁

“オカルトの本” 掲載

（釘貫 神葬が本の内容を無茶苦茶に並べ変えた為、書物の分類が  
変わった）

◇雨降洋館／鋼人屋敷で略奪入手した金品・装飾品

ジャンル：

たいせつなもの

道具解説：

赤、青、緑、黄色の宝石付き指輪とか金目の物

仕入れ先：

雨降洋館

備考情報：

そろそろ質屋で換金したいのと山吹色のお菓子の代わりにならないかなー？と思つて持つてきた。可能なら現ナマ現金のことが欲しい。

コメント  
独り言：

「この貴金属の価値が分かっていない以上、東京キングダムの質屋に足元を見られてへ値切り〜されるかもだし。確かクラブペルソナの「マダム」だったっけ？ その人に情報料として渡せればワンチャン？ぐらいで考えてる。でも情報屋ほど『信頼』できないものはないと思うなあ……。『信用』はしてもいいかもしれないけど」

アイテムデータ：No. Date

10章シナリオ中に取得したキーアイテムとして処理

◇スネークレディちゃんの名刺

ジャンル：

たいせつなもの

道具解説：

源氏名であるスネークレディの名前と電話番号が書かれている。

黒を基調とした名刺、文字は桃色。光を吸収して暗闇で発光する蓄光機能付き。

仕入れ先：

スネークレディ本人と、五車に潜入している “ 工作員 ”

備考情報：

スネークレディの源氏名と携帯電話番号の書かれている妖艶なデザインを用いた名刺。

対魔忍世界2度目の入院の際、スネークレディからの電話と日程調整Episode33では無くしたことにしていたが実際にはへ言いくるめ〜しようとしただけで、手持ちとしては2枚所持。

スネークレディ曰く、渡された名刺があれば問題なく彼女の元にま

で辿りつけるらしい。

メールでは “使い” とも話をつけてくれるらしい。

でも絶対にロクでもない予感しかないので、自力で東京キングダムZ街Y丁目X番地に向かう予定。

それでこそ探索者じゃけえ！

あとは無事にたどり着けると良いね！

コメント  
独り言：

「行きと帰りでうまく使えたりしないかな？ …… “無事” にな

んて保証はないし、無理か」

アイテムデータ：No Date

4章と6章のシナリオ中にそれぞれ取得したキーアイテムとして  
処理

◇盗撮用メガネ（修理済み）

ジャンル：

技能補助道具

道具解説：

五車学園で鹿之助くんの水着を盗撮する用のメガネ

仕入れ先：

通販プライム

備考情報：

度は入っていない。

デジタルカメラと同じ性能をしている。

SDカードは新調している。

フラッシュバンでの目の保護のためにサングラス仕様に改造した。

コメント  
独り言：

「画質は荒いけど、現代のデジタルカメラのような性能があるのは技術革新を感じる」

アイテムデータ：装備と所持品

『クトゥルフ神話TRPG クトゥルフ2010』40頁

“ 技能の成功率を高める道具” デジタルカメラ掲載

◇工具キット

ジャンル：

技能補助道具

道具解説：

〈機械修理〉や〈電気修理〉に用いる工具セット

仕入れ先：

青空 八雲（青空日葵の母親）から拝借

備考情報：

青空家にあつた工具セット。

母親からは工具を持ち出すことは容認されている。

地下の車庫が主に釘貫 神葬の様々な装備を整えるための工場こうばになつている。

母親である青空 八雲は工具が紛失していても、いつものように青空日葵が利用しているのだろうと思つて気にも留めていない。

独り言：  
コメント

「〈機械修理〉に〈電気修理〉、〈物理学〉。なんだかんだで組み立てる機材はあらかじめ必要だからね」

アイテムデータ：装備と所持品

『クトゥルフ神話TRPG』334―337頁

〃品物・装備・サービス〃

『新クトゥルフ神話TRPG』33頁

扱いは 〃10 経済状態を決定する〃 （装備と所持品397頁）に基づく

・道具の必要性について

『クトゥルフ神話TRPG』77頁

〃 機械修理〃 掲載

『クトゥルフ神話TRPG』83頁

〃 電気修理〃 掲載

『新クトゥルフ神話TRPG』60頁

〃 機械修理〃 掲載

『新クトゥルフ神話TRPG』69頁

“電気修理” 掲載

◇フィルムカメラ

ジャンル：

道具

道具解説：

普通のフィルムカメラ

仕入れ先：

通販プライム

備考情報：

性能としては特筆すべき特徴のないフィルムカメラ。

せっかく五車の友人達には東京キングダムに観光しに行くつて  
言った手前、何か観光地の思い出を記録として残せるものとして持っ  
て行こう！

……そんな軽いノリで持参したもの。

コメント  
独り言：

「こっちはデジタルカメラと違って加工しにくいものだから、思わぬ  
ものが撮れるかもしれない」

アイテムデータ：装備と所持品

『クトゥルフ神話TRPG』334―337頁

“品物・装備・サービス”

扱いは『新クトゥルフ神話TRPG』33頁

“10 経済状態を決定する” (装備と所持品397頁) に基つ  
く

◇未完成のパイプ爆弾+ベルト

ジャンル：

道具

道具解説：

未完成のパイプ爆弾をガンマンの弾薬ベルトのように身体の前面

部に装備している。総数は8本。自爆特攻の脅しは〈威圧〉や〈値切り〉などの技能と合わせることで有効になるかもしれない。

仕入れ先：

自作。ホームセンター五車支店の突っ張り棒（容器）、花火の導火線（通販）、内容物（五車町の農家より譲ってもらった）

備考情報：

通販プライムで入手できる導火線や黒色火薬、クソ田舎町（笑）五車町で農薬は集められたが、金属パイプと化学薬品の到着が遅れ実物運用化は間に合わなかった。

と言っても色々と不穏なものをかき集め始めた釘貫神葬に対し、対魔忍側が入手する前にSTOPをかけただけなのだが。

材料が足りず、求めていたような起爆には至らないものの脅し用として持ってきた。

釘貫神葬の中で、自信たっぷりな部分は導火線と導火線の接続部。

独り言：  
コメント

「世の中には総理襲撃事件に使われた暗器をテレビの地上波で詳しく構造を解説するメディアがいるそうですよ？ 不謹慎だけど、当時の私としてはあの解説は有難かったなあ」

アイテムデータ：パイプ爆弾 〓 未成品〓

『新クトウルフ神話TRPG』333頁

〓 10 経済状態を決定する〓 （装備と所持品397頁）に基づく

『クトウルフ神話TRPG』334—337頁

〓 品物・装備・サービス〓

完成していれば『クトウルフ神話TRPG』71頁 〓パイプ爆弾

〓 級の威力は備わっていた。

◇防水の風呂敷

ジャンル：

道具

道具解説：



防水加工された風呂敷

仕入れ先：

通販プライム

備考情報：

手斧とか改造した釘打ち機とか、陽葵ちゃんから貰った橙色のコートなど包み込んでしまったための風呂敷。

突然の雨でも、水が染みにくい撥水加工が施されている。

独り言：  
コメント

「天気予報情報によると雨は降らなさそう……」

アイテムデータ：所持品

『新クトゥルフ神話TRPG』33頁

扱いは “10 経済状態を決定する” (装備と所持品397頁) に基づく

『クトゥルフ神話TRPG』334―337頁

“品物・装備・サービス”

◇モンブランケーキ

ジャンル：

飲食物

道具解説：

五車町の物価の約2倍するモンブラン。

仕入れ先：

東京駅付近、東京百貨の駅構内の出店

備考情報：

東京キングダム魔族と高位魔族を煽り散らすための一品。きつと、おいしい。

独り言：  
コメント

「アゴキな商売だねえ」

アイテムデータ：所持品

『クトゥルフ神話TRPG』153頁

扱いは “当然の推論” に基づく

◇麦茶&ショットグラス（プラスチック）

ジャンル：

飲食物

道具解説：

市販のペットボトル紅茶

仕入れ先：

五車駅前の自動販売機

備考情報：

東京キングダム魔族と高位魔族を煽り散らすための一品。

コメント  
独り言：

「ワーツハツハツハツハ!!（グビグビグビ……）麦茶だこれ！」

アイテムデータ：所持品

『クトゥルフ神話TRPG』153頁

扱いは『当然の推論』に基づく

◇懐中電灯、ホイッスル、ダクトテープ、マジックペン（油性）、ライター

ジャンル：

道具

道具解説：

探索者の頃から手放せない何気ない装備。

仕入れ先：

五車町、通販プライム

備考情報：

暗所対策、騒音装置、修理道具の一部、筆記用具その2、放火用

コメント  
独り言：

「無いと安心できない……。探<sup>職</sup>索<sup>業</sup>者の性<sup>病</sup>って奴かな？」

アイテムデータ：装備と所持品

『クトゥルフ神話TRPG』153頁

扱いは『当然の推論』に基づく

『新クトゥルフ神話TRPG』33頁

“10 経済状態を決定する” (装備と所持品397頁) に基づく

『クトゥルフ神話TRPG』334―337頁

“品物・装備・サービス”

◇その他、日用品

ジャンル：

道具

道具解説：

財布とか、衣服靴とか、地図・筆記用具とか、腕時計とか、着替えとか、リュックサックとか

仕入れ先：

五車町など

備考情報：

持っていて当たり前のもの。当然の推論。

ただし今回の東京キングダムに赴くにあたってスマホの所持をしていない。

コメント  
独り言：

「ノーコメント」

アイテムデータ：装備と所持品

『クトゥルフ神話TRPG』153頁

扱いは“当然の推論”に基づく

『新クトゥルフ神話TRPG』33頁

“10 経済状態を決定する” (装備と所持品397頁) に基づく

『クトゥルフ神話TRPG』334―337頁

“品物・装備・サービス”

Episode 139 + Tips 『廃棄都市 東京  
キングダム』

「おお……」

夕刻。

西日に照らされ公共バス内で揺られながら、東京キングダムに続く唯一の陸路である『東京キングダム大橋』を渡る。

レインボーブリッジのような作りの大橋は私の冒険心を大いにくすぐった。

相変わらず光化学スモッグによって視界は良好……とは言いが、それでも刻々と近づいていく東京キングダムの様相に好奇心が膨らんでいくこの気持ちを抑えることはできなかった。

本土の魔都 東京から東京キングダム行バスで渡る直前、民間の観光地案内の書店から適当に冊子を1冊購入し、到着の間までに『東京キングダム』について理解を深めていた。

—— Tips 『◇廃棄都市 東京キングダム』 ——

東京湾上に浮かぶ東京キングダムは鹿児島県の桜島1/2もの面積を持つ人工島で構築されている。

島と本土までの距離間は10km。

そんな本土と島を唯一陸路で結んでいるのが『東京キングダム大橋』である。

前回、私が〈図書館〉で調べた東京キングダムの情報は現在に陥る“以前”の姿にしか過ぎなかった。

元は第二の首都として政府の一大プロジェクトである東京湾に建築された人工島。

調べ上げた通り “昔は” 移転企業募集中をしている島だったようだ。

当時の正式名所は『東京キングダム・シテイ』

しかし企業の勧誘に失敗したあげく、東京湾地下鉄工事が大幅に遅れたらしい。

東京オリンピック2020（2021）の国立競技場建築時みたい  
に。

どうせ中抜き大国日本国のことだ。様々な委託企業が中抜きをしたのだろう。

で、この結果<sup>ありさま</sup>。

何だったら政府自体が中抜き正確には将来的な利益よりも、目前の取引で政府関係者に還元されるシステムが横行していた可能性も考えられる。

でも不思議なもので、この世界を見ていると開催までにこじつけたところだけ見れば2020東京オリンピックの国立競技場はまだマシな部類だったのだと錯覚してしまいそうになる。

あとは東京大震災時での耐久性次第ではあるが……。

まあ、最終的には『東京キングダム・シティ』は未完成のまま交通手段が不便な人工孤島となり果てて、定住者までもが減っていき……。

沈みゆく泥船からまともな人々が去った代わりに、逃げ遅れたやつと密入国者や犯罪者、魔族などが住み着いた廃棄都市になったようだ。

「次は、終着地『東京キングダム』『東京キングダム』。お忘れ物にはご注意ください。バス車内での所持物の紛失、盗難。島での事故や負傷、行方不明等につきましては、本会社は一切責任を持ちません」

強めの念を押された不穏なアナウンスで、視線を本からフロントガラスの先——目的地地点へと向ける。

バスは東京キングダム大橋の端に設置されているバス停で素早く

停車すると、搭乗ドアを開けた。

少数しかいない乗客が急ぎ足でぞろぞろと降りて行く中、私も席を立ち運賃を支払い堅牢に隔られた運転席のほうに目を向ける。

運転手は両手でハンドルを固く握ったまま、緊張した面持ちで正面だけを見ていた。

「ありがとうございます」

「……………」

支払いと同時にバスの運転手に対し、安全運転をして送り届けてくれたことにお礼を告げる。

運転手は私のことを珍獣でもをみるような、それこそ自殺者……気の毒そうなものを見るような目で一瞥してきた。

私が最後の客として降りた瞬間。

ガタン——バルルン！ ブウウウオオオオオオオン!!!

自動ドアを私の荷物ごと挟みかねない勢いで閉じ、強盗から逃げるようなアクセル全開の乱暴な運転で本土行きの東京キングダム大橋の方へと走り去ってしまった。

……………よほど治安が悪いのだろう。

それこそ、魔都 東京でのヤリモク男、パパ活おじさんやら汚職警官の存在が霞んでしまうような…………。

降り立った私を最初に出迎えてくれたのは、真夏の熱波とジトジトとして生暖かい風。

生ごみの腐った臭い。

よだれが垂れてしまいそうな飯所の香り。

生々しい事後のホテルルームのような香りが混ざり混ざって混沌としている。

思わず腕で鼻を塞ぐも、数分もすれば慣れてきた。

熱烈な悪臭の歓迎に圧倒されながらも、まずは帰りのバスを確認しに行く。

「……うーわ、バスないじゃん」

悲報。

帰りのバスなど無かった。

東京キングダムから魔都 東京へ戻るには、10 kmもある東京キングダム大橋を徒歩で帰るか、心寧ちゃんが近づいてはいけないと助言してくれた港湾区から船を使う、あるいは泳ぐこと以外に本土に渡る術はないらしい。

一応、東京キングダム大橋は “一般道路” である以上。

ヒッチハイクをする形で自動車などに乗せてもらって、島を脱出するという手段をとれなくもないだろうが……。

犯罪者だらけの人工島から魔都 東京へ出ていくような人々や物資が真面なわけがない。

〈幸運〉にも本土行きの車へ乗せてくれる人がいたとする。

だがきつと相応以上の対価を求められるか、あるいは私自身が商品として変換されかねない。

ゆえに、そちらの方面では期待してはならないことは充分に承知している。

ただ幸いにも東京キングダム大橋の電灯は整備されているようであり、夜に女性が1人で暗闇の中を渡らなければならぬというような事態には陥ら無さそうだった。

まあ、その為にも職業病の一種とも言える所持品の中に『暗所を照らすための懐中電灯』を用意しているし………想定の時点では問題はない。

しいて言うならば大橋という逃げ場のない場所で囲まれると厄介だが。

橋の端から身を乗り出して、橋げたから海面までの距離を測定する

がおおよそ50メートル。

これはオリンピック競技の『高飛込』における5倍の高さを意味し、集合住宅で換算すれば15階分もの高さになる。

暴漢を肉のクツションにすると仮定しても、とても飛び込む気にはなれない。

また別の方向性として、再び〈幸運〉を引き当て東京キングダム行のバスと再会したとてバスが暴漢に襲われる私を助けてくれる可能性も極めて低い。

魔都 東京での出来事や、バス車内のアナウンス情報から客観的分析すれば、運転手視点から助けを求める行為は路上強盗と仲間。釣り餌にしか見えないだろう。

きつと助けを求めても無駄、見て見ぬふり。

私が運転手ならば『東京キングダム大橋』で車線上に暴漢に襲われ助けを求めてきた女が現れたら迷わず助けず轢殺。暴漢に捕まっても苦しまなくて済むよう車輪で頭を砕けるよう念入りに。

救助を求めてきた人間が善良な存在だと、どこにも保証はないのだから。

ならば平等な死を与えることこそが慈悲だろう。

「……帰りは徒歩かあ……」

嘆いたところでどうにもならない。

〈聞き耳〉で周囲の状況を偵察してみれば既に誰かの注目を集めているような気がする。

帰り道の事に関して人間風情に泣かされた蛇子ちゃんによって大橋を封鎖されることも考慮して、今夜はどこか別の宿泊施設とか一時的な隠れ家になりそうな場所とかを探したほうがいいのかもしれない。

これで宿泊施設が蛇子ちゃんと友好的なら詰みかもだけど。

……



…  
…

道中、娼婦やら男娼に絡まれながら東京キングダム大橋から続く大通りへとまっすぐに歩みを進める。

繁華街まで訪れたところで日は完全に沈み、東京キングダムはアブノーマルな都市へと様相を一変させていた。

「はぁー…：…：…」

かつての日本では絶対に見られなかったような景色に声が零れる。道路に面したビルのテナントには堂々と娼館やら、アダルトグッズ売り場、飯所などが入っている。

更にテナントすら覆い隠してしまうほどに、お祭りの日のテキ屋のような屋台や公園のフリーマーケットのような店舗が立ち並び、売られているもの飲食物から、食べ物類のお土産品、ハズレばかりのくじ引き店などが所狭しと並べられていた。

また散策している間に東京キングダムには、東京キングダム大橋のような街頭が設置されていないことにも気が付く。

されどもそのようなインフラ設備が整わずとも、この都市は都心部のように明るかった。

中国や台湾のネオン街のように至る所に眩いばかりの看板やら設置され、ネオンが辺りの照明として機能している。

これも日本国の法律が及ばないところだからであろう。

そのネオンの看板は、中国の増築に増築が加えられた九龍城砦の看板のように歩道を覆い隠すように宙に突き出して設置されている。

建築法ですらこんな調子なのだ。

刑法やら民法、日本国憲法など〈法律〉を振りかざした打開方法は一切通用しないに違いない。

東京キングダムのためだけに原発を1機、稼働させているのかと疑わしくなるほど至る所に設置されたネオンの光はラスベガスのように

に虹色の色彩に放つ。

そんな廃棄都市で身を引き締めながらも今日の宿探しと観光を兼ねて、あたりをうろつくことにした。

……

……

……

Episode 140 『表通り東京キングダム観  
光』

「はあああー……、あはっ、あはっ………あはっはっはあ……」

東京キングダムに訪れてからというものの、眼下へと広がる光景に  
圧倒に圧倒を重ねられ驚きが隠せず情け無い声ばかり吐露してしま  
う。

この街では “百鬼夜行” と称しても何ら誤りではない数多の  
魔族が我が物顔で表通りを通過していくのだ。

まるでドリームランドのレン高原……いや、ドリームランドのダ  
イラスリーンの街と評するのが正しい景色だろう。

裏側には不健康そうな建物ばかりが乱立し、右を見ても左を見ても  
恐ろしく危険な生物ばかり。

正気度こそ削れるような遺伝子に刻み込まれた邪悪な素質は微量  
ではあるものの魑魅魍魎が跋扈する姿は、それだけで日常世界の裏側  
として東京キングダムを観光するのに見所として十分な機能を果た  
している。

2、300万円の札束片手にぶいぶい言わせながら、時代錯誤の足  
軽甲冑を着用したとキャラが濃すぎる笑い声を上げ続ける青肌やら  
赤肌の顔面を能面で覆い隠した頭に角の生えた鬼。

並みの男を欲情させるのには十分すぎる豊満なバストと美貌、ただ  
し背中には蝙蝠のような翼、両側頭部からは悪魔バフオメツトのよう  
な羊角が生えたサキュバスのような女性。

子牛ほどの体格をした犬っコロ。勿論ただの犬じゃない。全身か  
ら青白い炎を燃え上がらせ頭が2つに1つの頭部につき2対の目が  
3つ、鋭い牙と爪の他にも屍肉を漁るハゲタカのような荒れ放題の剛  
毛な毛並みと灰色の皮膚を持つ、牙のような角を生やしていた。

筋肉だるまの人間の皮を剥いで炭火焼きにしたようなチアノーゼ

色の肌をした紫色の鋭い爪を持つ、つくねの集合体に似た鉱石の怪物。

頭部は人の形と顔を横ついているにも関わらず、胴体や腕は鳥類に酷似した人語を僅かには理解できている素振りを見せる歪な生き物。

二足歩行で筋骨隆々、上半身は牛なのに下半身は人の姿をしたヘギリシア神話に登場するミノタウロスまで、古今東西あらゆる怪物が揃っている。

さらには、いずれこの世界から一掃する予定のオーク族もあった。チラホラと人間の地元住民の姿もあるが、鹿之助くんが話していたようなギャングっぽい半グレ集団だったり……。

人間の女性の大多数のグループがあると思えば、みな娼婦だった。彼女たちは自らが娼婦であることに対して何の疑念も湧かない……頭のネジが外れたかのような顔をして薄い布切れ一枚で店先に並んでいる。並べられている。

彼女達は『娼婦という職業に誇りを持って従事している』や『お金がなくて仕方なく』とは言い難い、どこか勤めていることに対してあたりまえ、当然だ、常識だと魅せている表情に違和感しかなく寒気を覚えた。

価値観の相違とは異なる……あの表情を例えるならば……そう——催眠アプリで常識改変されて、自身が白昼堂々と露出度の高い衣服を纏っていることや秘部を晒していることに疑念を持たない・持てない顔——と例えるのが一番近いような気がする。

他にはアサルトライフルを抱えた2020sでは最新鋭だった装備をした兵隊の用心棒。

全身を鼠色で覆い隠し顔には粗悪なガスマスク、手にはAK47シリーズ系統の武器を持った路上強盗だつて存在している。

あとは本土から訪れた男性客だとか。自分は可能性に満ち溢れていると疑うことを知らない若者だとか。そのあたりの姿だった。

この地を簡潔に纏めて例えるならば漫画『BLACK LAGOON』のロアナプラを舞台として、道行き交う人々の中に魔族を混ぜた

ような感覚が適切かもしれない。

この例えならばドリームランドに詳しくない人々に説明する上では伝わりやすいかも。

つまるところ……。

「ゲへへ。姉ちゃん仕事先をお探しかい？　うちの店はどうだい？

1人お客を取るたび9割の取り分があるよ娼婦側の取り分が9割とは言ってない」

「俺、こういう地味系の子を探してたんだよ！なあ、一晚。俺と甘い夜はどうだい？」

「可愛子ちゃん、僕達とミッドナイトを過ごすつもりはないかい？

ああ、まって僕は怪しいものじゃないよ。そのクラブでホストとして働いているんだけど、上司に『客を獲るまでホールに帰ってくるな』って言われちゃってさ……。そこでかわいい子猫ちゃんな君にお願い。哀れな僕を助けると思っただけのクラブの同伴してくれないかい？　不当な客引きは「風営法」違反です。店の中では基本飲み放題。水が” 飲み放題な？”だし、3000円ポツキリお会計が3000円ポツキリとは言っていない。で済むし、クラブ限定の肉料理や美味しくて甘いジュース、高級ワイン、表では購入できない気持ちよくなれるおくすりなんかもあってね。豊胸作用もあるんだ……。♡　面白い話で君を絶対に退屈させないよ？　キミが面白い話の種になるから。ぜーんぶ実質無料実質とは：条件付きで無料の特典付きさ♡」

「うきよきよきよきよきよつ！　アタチのブラッドドッグを恐れず興味津々で観察してくるとは！　あなた観光客でしゅね！　そのデカ尻でアタチの股間の銚ほしをパンパンしてくれたら——」

「ウエーイ♪　ウエーイ♪　ウエーイ♪」

「このロンギヌス槍に突かれて堕ちなかつたオスは居ねえ。よう、あんちゃん。俺に抱かれてみねえか。S字結腸強制極楽浄土連続アクメキメさせてやるぜ？」

こうなる。

こうなった。

どうしてこうなった？

どうしてこうなった???

この状況が3〜5分おきに発生する。

最初こそまともに対応していたが、どいつもコイツも認知症患者、酔っ払いのように同じ内容を繰り返しながら代わる代わる勧誘されて宿泊施設探し・楽しい観光どころの騒ぎではなかった。

楽しかった思い出なんて表通りがラスベガス以上のネオン街の景色と、魑魅魍魎の姿をまじまじと間近で観察できたこと。

あとは表通り側でSMショップに立ち寄って、修学旅行生を誘惑するような木刀……の代わりに草津市名物品の竹鞭が我が物顔で傘立ての中に突っ込まれて販売されていたことに目を丸くしたぐらいか。

思わず竹鞭を修学旅行のノリで手に取ってしまった。

どこからともなくオークの店員が現れて『お客さんはそっち側ですかい？ 総受けっぽい顔して攻め側とはとんだお客さんもいたモンだグヘヘ』『こっちの竹鞭なんかどうですかね？ 妖精の羽のように軽くしてしなやかでゲス。生意気なメスの大事な部分を強弱付けて愛撫するのにはピッタリでゲスよ？ きつと潮を噴いて悦びますぜ！』とセールスポイントを大声で受けたりすることもあった。

その他にこの都市で唯一満喫できたことと言えば、フィルムカメラを取り出してうまく取れているかもわからない自撮り写真を撮影したこととか？

自撮り写真を一枚撮影するだけでも、変な輩が割り込んできて撮影の邪魔をしてきやがる。

でもだいたいそういうことをするのは、バカモノ若者ばかりだ。

気安く私に肩組みしてくるな。

さりげなく手を胸に当てようとするな。

当たらなかつたからつて故意に胸を揉みに来るな。

あまつさえ揉める胸が無くて露骨にがっかりするんじゃないやねえ。

男水着チャレンジができる程に胸が無くペチャンコおっぱいでて、最初に一番がっかりしたのは私なんだからさあ！

親父の転勤で訪れた五車学園では周囲が見渡す限りの巨乳だらけでどれだけ絶望したことか!!

ヘビイ子ちゃん！陽葵ちゃん！心寧ちゃん！駒水ちゃん！彦四郎さん！石蔵さん！持田さん！神村！磯咲！弓走！篠崎！眞田先輩！黒田先輩！紫先生！蓮魔先生！燐先生！ふうま君のお姉さん！私のクラスメイトオ！

そしてトドメの――

おにぎき鬼崎 きらら オ ツ パ イ セ ン !!!

おかしいだろお!?

溢れんばかりの巨乳、爆乳、魔乳率ウ!?

日本人の平均バストはBくCカップなのにさあ！

左見てもおっぱい！

右見てもおっぱい！

対魔忍みみたいな乳しやがって！

おっぱい学園！ i s ! F u c k ツ！

ちなみにこれは〈医学〉関連の雑学となるが『おっぱいの大きさを決める大きな要因はストレスの有無』にあるとされる。

当然両親から受け継ぐ遺伝子も関係はあるものの、思春期時代に女性ホルモンの分泌が増えることで女の子のおっぱいは大きくなる。

つまり、おっぱいを大きくするには成長期にどれだけ多くの女性ホルモンを出せるかポイントなのだ。女性ホルモンとは普通に生活していれば脳下垂体より分泌されるものであるが、それを分泌を阻害する要因なるものがストレスなのである。

そこから “青空 日葵” の肉体から考えられることは、目覚めた瞬間から一人ぼっちで屋上にて他者を寄せ付けなさそうな魔族語の書かれた本を読み、容姿に執着しない陰キャタイプな上、学校ではいじめに遭って両親には相談できない環境にいたことから相当なストレス負荷が掛かっていたと推測できる。

それこそ自殺を考えても何もおかしくないような……。

隔世遺伝を考慮しながらも、とにかくストレスの方向からの断崖絶壁が形成されたことに分からもなくもない。

一方で五車学園の面々はさぞかし、ぬくぬくと温室育ちなのだろう。

あとは一族伝来でお胸は大きいか、だ。

でも、きつと今の私には目前の百鬼夜行の魑魅魍魎集団のように亜人らしい外見的特徴がないから絡まれるのだ。

だからこそその小娘風情が反抗してきても簡単に力でねじ伏せられるとでも思われているのだろう。

話が二転三転してしまったが、最終的に。

客引きなどは片っ端から無視して最初から存在しないものとして扱うことにした。

だが正直、東京都ほどの治安悪化ではないのかもしれないと思うところもあった。

あつちは軽犯罪が幾度となく繰り返され、時には警察と結託して強姦行為に及ぼうとしてきたものだが……こつちではそういう経験をしていない。

例えば、私がそういう輩を片っ端から無視しても――



「チツ。もしかして 〃唾付き〃 か？ とつとと行つちまえよ貧祖  
な売女」

とか。

「ギャアーツハツハツハ！ フラれてやんのー！」

「うるせえ！ 次行くぞ！次！」

だとか。

「ああん。つれないなあ……。でも今はそういう気分じゃないんだね？  
わかるよ。僕はいつまでもここで君のために待っていてあげるから、  
街のことで何か困ったこととか匿って欲しい時があったら、僕に  
会いにきて欲しいな……。♡ 外での辛い思い出なんか永久に忘れて  
しまいたくなるほどに溺れさせてあげるからね♪」

だとか。

「もほおきよおっ!?!無視するなでしゅ?!?」

だとか。

「ウエーイ……」

だとか。

「え？メス……？ でもその胸はどっからどうみても男<sup>オス</sup>………  
なあっ?! ……竹槍……だど？ 俺のチンポが……竹槍……。うお  
おおお！人間のメスになじられたのは初めてだ！もっと罵ってくれ  
！お前の言葉の暴力で俺を突き刺してくれ！」

だとか。

たまーに面倒臭いタイプが混じっているし、この都市ではフリーの女性の立ち位置は社会的に低いものとして扱われている弊害からか罵声を浴びせられることはままある。

Twitterだったらフェミさん激おこ案件ですよ。

だが魔都 東京に滞在していた時ほど、物陰や裏路地、ホテルに連れ込んで強制レイプ⇒GOのような流れや行為には遭遇していない。

それに私が段々と様々な出店で食べ歩きやら、アダルトショップに立ち寄り商品を眺める（冷やかし）行為ばかりを続けていたら、娼婦化への勧誘の頻度は減っていった。

きつと縄張りなど気にせず遊びまわる私を客だと認識したのか。

あるいは廃棄都市を女1人で彷徨く相手に言い表せぬ違和感を抱いたか。

客だと理解してもらえれば直接、手を出して来ないあたり、ここら一带の街の支配者は個人ではなく団体様なのだろう。

元締めがしつかりと和平交渉を行い締結しているからこそ、表沙汰では利益をもたらす相手に不要なちよっかいは出して来ない。

ゆえに。

ここで私が注意すべきことは、東京キングダムZ街Y丁目X番地までの道中。

裏路地に侵入してからの身の振る舞いだ。

表では他の組織や他者の目がある。

ゆえにこれまでは強引な勧誘は見られなかったのかもしれないが、裏では他者の監視が消える。

私を新たな駒として既に目をつけている組織もいることだろう。

東京キングダム大橋よりも向けられている視線はより多くなっている。

それもそうか。

こんな初潮直後ピチピチの16歳——生娘の肉体が金にならないわけではないのだから。

つまりそれらに警戒し、目的地点まで向かわなければならぬ。

⋮  
⋮  
⋮

## Episode 141 『東奔西走』

予測した通り裏路地に入った瞬間に、（シックスセンス）で脳が危険アラートをかけたたましく響かせる。

危険なサインは既に要所要所から滲み出ていた。

あのネオン街のような煌びやかさは一体どこへやら。

裏路地ではスナック看板など小さな出店の看板などこじんまりしたものがぼちぼちと並んでいるのだが、プラスチック製のそれらは廃墟街のように面白半分には叩き割られていた。

最低限の建築法に乗っ取って窓らしい窓はあるが、いずれを覗き込んだとしても内部は闇が広がるばかり。

壁なども中途半端に引き剥がされた痕の残るチラシ跡やグラフィティ（エアロゾールアート）が至る所に施され、とても先ほどまで異種族が蔓延る賑わった？華街が広がっていた街とは思えないような光景だった。

当然、地面も酷い有様だ。

かつては舗装されていたアスファルトも適度な感覚でひび割れ、穴が開き、ヒールのような不安定な靴ではさぞかし歩きにくいだろう。

電動キックボードに乗ろうものなら間違いないく走行距離20?も持たずに激しく顔面から逝く。

清掃員なども居るはずがないので辺り一带にゴミが散乱している。

この光景を私の時代で例えるならば、まるで夏祭りやキャンプ場でバカ騒ぎするDQNやウェイ達があつたあとのような………………。従業員による掃除前の競馬場などの賭博場における建物内の床のよう………………。超大型台風の暴風雨が過ぎ去ったかのような有様だった。

「…………えーっと、こっちかな?」

おまけに『釘貫 神葬。東京キングダムの裏路地にて迷子になる』という惨状。

スマホを持ってきていない以上、あらかじめググールマップの地図を拡大印刷して代用品として持参してはいる。

持参はしているが……。政府一大プロジェクト『東京キングダム・シティ』は公開以前より破綻していることから、グーグルマップ地図では大通りしか衛星映像として地図に掲載されていなかった。

ならば現地や魔都 東京などで『観光するぶ』などの冊子を購入し、地形やルートの把握しようと検討していたのだが……。まあ……。様々な勢力が対面切つての大勝負を仕掛けている繁華街に、そんな敵対勢力の保有土地情報を知られてしまいそうな地図が堂々と売られている筈もなく……。

土地勘の把握に関してはハッキリ言つて詰んでいる。

ましてや私が目的地にたどり着けない、土地勘の把握がままならぬ  
い他の理由として――

「チイツ！ あの女！どこ行きやがった!？」

「こつちに逃げて行つたぞ！」

「居たアツ！」

「逃がすな！とっ捕まえろ!!」

「あー……。もう。なんでこうなつちやうかなあ」スタコラ

「ゴラァ！逃げるんじゃねえ!!」

「……………」サササササツ

追われる身に転身していた。

いや。誰に弁明するわけでもないが今日は本当に何かきつかけになるようなことはしていない。

裏路地を平然と歩いていただけなのに。

背後から屈強な魔族がニヤニヤして近づいてきたから離れようとしただけなのに。

すれ違いざまにブルーハワイシロップみたいな薬液色をした注射を身体にぶつ刺されそうになったから脱兎の如くその場から逃げ出しただけなのに。

今や追われる身ですよ。追われる身。おかげさまで東奔西走なんのその。

今回ばかりは私に何の非はないはずなのだ。

でも捕まったら良からぬことになるのは、魔都 東京で経験済みなのでひたすら走って逃げる。

本当は迎撃して殲滅した方が早いのだろうけど、出席停止期間中に鹿之助くんから “力強く” 釘を刺された以上、約束は護らねばなるまい。

これまでの逃走劇から察するに、相手はチンピラレベルの相手なのだ。

したがって、ゴミ箱の中身を路上にばら撒くなどをして障害を作り上げては逃げるの繰り返し。

されど流石は魔族といったところか。

私の『新クトゥルフ神話TRPG』における139頁 “キャラクターがハザードを作り出す” を用いて時間稼ぎしているにも関わらず力技で全て突破してくる。

あの突破力を例えるならアレ。

陸上競技でハードル競争における『飛び越えずハードルを片っ端から薙ぎ倒しながら暴走列車のように駆け抜ける選手（この時、走行速度は常に維持されるものとする）』みたいな感じ。

フィジカルでゴリ押し。

……対魔忍かな？

おかげさまで夜の蛇子ちゃんに遭遇する前から、現在の追っ手である怪物姿の脳筋対魔忍達をどのように撒くか “頭を使って” いるハメになっている。

やがて導き出されたのは、滑りやすいタール液状のもの——就活生が自己PRで大好きな潤滑油ローションを床に転がすなどをしては相手をすっころばせては距離を取るといふ面倒くさい方法での対策だった。

〈幸運〉にも最後尾を走っていた白い追跡者は、私の突破した時に生

まれる隙を許さぬ二段構えの潤滑油障害ローションハザードに巻き込まれて割と激し目に転倒して無事にチエイスからリタイアして行ってくれた。

魔族も人間らしいところがあるのだな、と思った。

「あ、ここなら撒けるかも」

逃走開始から早10分。

撒けそうな路地を見つけて速度を落とす。

慣性の法則によつて荷物と身体が進行方向に引っ張られるも、角を急カーブで曲がる。

曲がった先は地上を走って逃げるには行き止まりにしか見えない構造の袋小路だった。

しかし今なら私は奴等の視界から逃れている。

そのままハリウッドの映画のアメリカの街並みでよくみられる屋外式の非常階段目掛けて〈跳躍〉し、よじ登りにかかった。

こちらら助走もついているならば〈跳躍〉にて垂直方向に身長分飛び上がり、頭上？？？上にあるのハシゴを掴んで非常階段の踊り場に辿り着くことなど何の造作もなかった。

登った勢いそのまま駆け上がるものなら金属音が反響して居所がバレてしまいそうなので、なるべく壁際。陽葵ちやんのくれた橙色で目立つライダースジャケットを脱いで息を潜めて〈隠密〉行動を取る。

鹿之助くん達と遊びに行った『くさぶき城―海水浴場』で、ほんのり焼けた肌の色は私を闇にとけ込ませてくれることに違いない。

ただ、私を一方的に追いかけてきている魔族の熱狂的なファンが私を発見し再度追いかけてくるかもしれないので、リュックサックの中から〈改造した釘打ち機〉を取り出して『CALL of CTHULHU』クトウルフ神話TRPG』69頁 “火器のスポット・ルール” 慎重な標準。『新クトウルフ神話TRPG』109頁 狙いを定めるルールを用いて現れるであろう対象に狙撃の姿勢に入る。

〈改造した釘打ち機〉をもつと改造してアタッチメントを増やしたり、追加機能を加えたり、ライフル改造を施したかったのだが……こ

ればかりは時間が足りなかったのだから仕方がない。

「チツ！ あのアバズレ、ちよこまかちよこまかとオ……ツ！」

一歩遅れて魔族の集団が到着する。

彼等は私が大通りで見たような首が1つ分足りないケルベロスのような畜生を連れてはいかなくなった。

赤い肌の鬼族の話では “ブラッドドッグ” という名称だったか。

ゆえに彼等の頭上に位置する非常階段によじ登って〈隠密〉することは得策だと判断したのだ。

既に私が作り出したハザードの影響によって彼等の衣服はボロボロだが、あくまでも衣服だけの話に限ったものだろう。

1名は既に脱落済み。その他11名を除いて、他の4人はピンピンしているように見える。

「いつてえ……」

「大丈夫か？」

「捕まえたら、まずは俺が真っ先にブチ犯してやる……」

「ああ、捕まえたらな。今日はお前に最初を譲ってやるよ」

「ガゲゲツ！ この先は袋小路だぜえ？ 逃げる場所を誤ったなあ?! お嬢ちゃん!？」

「鬼ごっこはお終いだア♪」

一行はジリジリと距離を詰めてくる。

こちらにも最もMOV値足の速かった影のような存在の最も高い奴に標準を定めながら、いつでも引き金トリガーが引けるよう指を掛けつつ〈隠密〉状態を継続していた。

しかし彼等は頭上にいる私を通過して、そのまま袋小路らしい通路ばかり警戒している。

やはり人間らしい面も兼ね備える彼等もまた、頭上は絶対の死角であつたか。



「お嬢ちゃん？ 逃げ込む場所を間違えたなア♪」  
「人間の小娘風情が！逃げられると思うなよッ！」

私のせいで派手に転んだ魔族が、鼓膜がビリビリと震撼するほどの怒りに震えた声で叫ぶ。

うん。まあ。でも……。

そつちには誰もいないのだが。

このまま物音を立てずに彼等を観察し狙撃の姿勢を続ける。  
いきなり注射器を突き立ててこようとした連中だ。

チエイスの最中での武器のお披露目会はなかったが、懐に別の武器を持つているかもしれない。

と、思った矢先に何人かが懐から銃のようなものを抜いた。

2020sのアメリカで警察官が所持しているスタンガン（射出型）のような得物。

……やはり隠れていて正解だったかもしれない。

火器など現代日本の日常からは掛け離れた思いがけない武器だが、まあ無法地帯だしそれぐらいは当然なのかもしれないと思う。

前世ではよく魔術を扱うカルティストが拳銃や自動小銃を所持していたし。

現世でもネズミ色の工事用ヘルメットとガスマスクを被った路上強盗がカラシニコフ系の自動小銃を携えていたし。

つまりあいつ等はカルティストなのか。

カルティストなら装備に納得できる。

なるほどカルティストか。

「分かれるぞ。俺とお前はこつちの通路を調べる。お前とお前はそつちの建物内だ。負傷したお前はここに残って、炙り出しで逃げてきたアマをとっ捕まえてくれ」

「ああ」

「あんな大荷物で全力疾走だったんだ。物音も立てずにそんな遠くま

では逃げられやしないさ」

「ああ」

「またすり抜けて逃げられないよう、怪我の手当てしとけよ」

「ああ」

「ガゲゲヘツ、先に楽しんでても良いからな」

「ああ」

彼等は見当違いの地点とこで分散する。

リーダー格と他3人はそのまま通路の角や、近場の建物内に侵入していく形で姿を消してしまった。

Episode 142 『歪み始める歯車（大切な  
制御装置の欠損）』

さて、この場に取り残されたのは？ 上空の外付け非常階段の隅で狙いを定める私と、私を『ブチ犯してやる』と意気込んでいた魔族が取り残されている。

奴は通路側から身を隠し、手ごころなゴミ箱を乱雑に引き倒して椅子のように座った。

引き倒したことでゴミ箱から生ごみが散乱したが、気にした様子すら見せない。

モラルハザードもいいところだ。

離脱するなら今だが、このまま〈隠密〉状態を維持して階段を上がって行っても屋上から逃げられるとは限らない。

それどころか方角的にこちらを監視しているヤツの視界に入ってしまうかもしれない。

とはいえ、地上に戻れば戻った際の〈跳躍〉着地音でバレる可能性がある。

それどころかアイツが他の仲間を呼んでまたもや逃走劇<sup>チェイス</sup>を再開しなければならなくなってしまうかも。

（……。確か、鹿之助くんに言われたのは『親切そうな人物に声を掛けられたり、ギャングに絡まれたら逃げる』と『絶対に戦うな』だっけ。だとするならば――）

カツンツ……

「誰だ！」

非常階段の隙間から小石を一つまみ掴んで、監視者が非常階段上の私に気づかないよう〈投擲〉をして注意を逸らす。

放り投げられた小石は上手くコンクリートの地面に落ちて、静寂な裏路地に音を響かせた。

「おい！出てこい！」

「……………」

「俺は腹の虫どころが悪いんだ！」

「……………」

「てめえが出て来ねえってんなら俺から出向いてやる！」

男は頭上で〈隠密〉している私にも気付かずに、棍棒のような武器を構え警戒した様子で、場所へ最短距離で近づき物音がした箇所を調べ始める。

当然、そこには誰もいない。

小石を落とした張本人は頭上に居るのだから。

他に隠れてこちらを搜索している魔族もいない様子だ。

(……………ふーん……………)

さらに男が近づいてきてくれたおかげで私も、追いかけてきた魔族について気づけたことがある。

この私を『ブチ犯してやる』と言った魔族には見覚えがあった。

奴は全身緑色の肌をしていて、エルフのようにとがった耳、髪の毛が1本もないハゲた頭。

体長が2？強もあって、でっぷりと肥沃したビル腹に饅<sup>す</sup>えた皮脂のような臭いを放つ汚らしい存在。

そう。対魔忍世界でお馴染か知ったこっちゃないが「オーク」だ。

まあさき市で高位魔族な方の蛇子ちゃんの取り巻き役として姿を現したアイツ等の1体。

「……………チツ。俺がバカみたいじゃねーか」

オークは誰もいないことを確認すると自分の愚かさに嘆いているようだった。

ヤツの調査の期間に逃げ去ることも考えたのだが……気が変わった。

今は丁度、五車学園の<sup>一般人達</sup>学生達の目もない。

「ヒュイヒュイ♪」

口笛を吹いてオークの視線を頭上にいる私へと注意を向けさせる。

「あ?」

パスツ　パスツ　パスツ

呑気な声を上げながら見上げたオークに対し、すかさず〈改造した釘打ち機〉を不意打ち攻撃として打ち込んだ。

右目と左目と喉笛。

完璧で正確な3連射撃だった。

対魔忍世界にて〈<sup>私の愛する最終必殺兵器</sup>改造した釘打ち機〉の記念すべき最初の犠牲者はオークとなった。

身長が2? 強もある奴が3? 上空に居る私を見上げようものなら、私の攻撃範疇ではゼロ距離射程圏内に居ることは確実。

喉笛と眼球に釘を打ち込んだ時、確かに奥底まで突き刺さった手応えがあった。

そのままオークは壁に寄りかかった人がそのまま倒れるような受け身を取ることのない姿勢で後頭部から地面に叩きつけられる姿を見下ろす。

綺麗に右目と喉笛に刺さった釘は貫通して、オークを地面に縫い付けている。

「あゝゝゝゝ！ がアゝゝゝゝ!!!」

奴は死を迎える間際、1人で闇の中に取り残されることになったが、それでも叫ぶ元気は残っているようだ。

しぶとい奴。その生命力には辟易する。

それとも当たりどころが悪かったかなア？

「ギヒヒヒヒヒッ」

「カヒユツ……ゴポツ……ガアッ……ゴポゴポゴポ……ツ！」

私が傍に現れ嗤ったことを感知したようだが、喉笛に風穴が開いているおかげで叫び声は微かな掠れ声にしかない。

腕を振り回すが頭上の私には届かない。

左目と喉笛。致命的な部位を “貫通” した釘弾は奴を地面に縫い付けている。

オークが咳き込むたびに喉笛の傷口から血あぶくがゴポゴポと噴き上げ、LDL<sup>悪玉</sup>コレステロールたっぷりの不健康そうなドロツとした血液が下水に流れていく。

そのまま奴の腹部をクッションにする形で荷物ごと降りた。

「ゴポオーツ!!!」

腹部へ急激に加えられた圧力によって消火器のように排出口から血と唾液が噴き上がる。

パスツ

その光景をツマミに窒息していく奴の柔らかかそうな眼球の奥、篩骨しごこつの隙間から脳へ直接、致命的な一撃を加えられるよう釘を打ち込む。まるで銃火器にサイレンサーでも着けているかのような乾いた音。

まさに圧縮されたガスが釘を射出している心地の良い音色だ。  
眩いマズルフラツシュすら焚かれず暗闇で光る私の暗器。

脳みそを一閃されたオークは『ビクンツビクンツ』とその身を全体的に反射的に震わせたが、それ以上は大きな動きをみせることはなかった。

ははは、面白い。

成人向けエロ同人のクリムゾンみたいだ。

(……あ。……し、鹿之助くんには『戦うな、逃げろ』って言われたけど別に戦ってないもーん。一方的な蹂躪だったし？ ちよつと暗殺しただけだから、これは戦ったことには入らないよね！)

肉の塊となったオークを足蹴にしながら我ながらに機転の良さへ感心する。

後付けの理由付けにはなるが、彼との約束はどのような形であれちゃんと守っているのだ。

自画自賛と感心しながらも示談交渉としてオークの荷物を漁る。

「……………むう」

これと言って大きな収穫はなかった。

やはり立場としてはギャング……。ギャング以下のチンピラ風情なのだろう。

私を追いかけてきた理由は不明（おそらく性欲？）。どこかに所属している組織に関する名刺を持ち合わせず、まともな武器は巨躯を活かせる近接武器のみ。

示談金込みの財布には1万円札数枚程度で、その他に目新しいものはない。

指示してきた組織の情報とかあれば排除しようかと思ったのに。

……………おおよその見当はついているが。

グチユツ……又チチチチ……ポチヤン  
グチユツ……又チチチチチ……ポチヤン  
グチユツ……又チチチチチ……ポチヤン  
グチユツ……又チチチチチチ……ポチヤン

さあ。ここへ戻ってきた追っ手は、骸となった彼を見て何を思うだろうか？

殺せない代わりに、せめてもの置き土産として4本の釘を手斧の釘貫機能で引き抜き、釘を排水溝に落として殺害時に用いた凶器を断定しづらく手を加える。

ザンツ……ベリツ  
……ブチツ……

それからついでに私を『ブチ犯してやる』と豪語していたこのオークの陰茎を木の幹から枝を切り落とすように切断した。

緑色に着色された柔らかかデイルドふにやちん君Lサイズサイズの海綿体で構築された物体は、腐った瓜のように頭こうくを垂れる。いまさら媚びても遅い。

それと、これは生き残った4人の〈幸運〉を讃えたプレゼント。

又チユ……又チユ……又チユ……クチユツ……

射貫いて陥没した目玉をまるで箸で魚の目玉を挟むように釘を用いて円を描きはじめる。

鹿之助くんの緊張した初心者アナルの周りを愛撫しほぐすように、優しくゆつくりと丁寧に穴を拡張していく。

グチツ……グチユ………クチユ……

新鮮な切り取った陰茎をアーチ橋を描くように折り曲げて、先端と



切断部をそれぞれオークの二つの眼孔を支柱穴としてぶち込む。

それぞれの先端が凹つとへこんだ保護眼球キャップに対して、しっかりとハマるように。

芸術品を仕上げている間にも、野犬が死肉を貪り肉を引きちぎるような・臆に指を入れ愛撫しているような粘着質な音が微かに聞こえる。

ともあれ、これでアーチ状セルフ眼孔姦の出来上がりだ。

「はい、あーん」

ギユツ ギユツ ギユツ

切り取ったは良いものの。材料として使い道のなかった辜丸は、そのまま斧で顎をこじ開けて柏餅に餡子あんこでも詰めるように喉の奥へと押し込む。

辜丸を繋いでいる精索を口からはみ出させて 〃辜丸を飲み込んでいる〃と一目で分かるようにしていること。

アへ顔のように赤い涙を目尻から零しながら、だらしなく舌を外気に晒しているのは対魔忍世界アレンジとして私のこだわりポイントだ。

本当は辜丸の使い道について、あの4人組のリーダー格の家族の住所とか控えていけば、そちら側に郵送してやるのが一番効果的なのだが何分調査には時間がかかる。

♪

ガツガツ

仕上げにオークの下あごの犬歯を手斧で叩き割って、記念の討伐トロフィーとして自分のポケットに入れた。

オークの牙でネックレス作りとか楽しいかもしれない。

「ギヒヒヒヒッ！」

ペチツと頭を叩いて完成の合図を出す。

汚いアへ顔を晒した緑色の自<sup>セル</sup>辜丸<sup>フ</sup>舐<sup>ア</sup>め<sup>ツ</sup>舐<sup>カ</sup>め眼孔<sup>カ</sup>姦ハゲの出来上がりだ。

ほんの少しだけ憂さ晴らしができた。

この面白い顔をみた4人も、アへ顔ピエロの顔を見て笑ってしまふに違いない。

奴の衣服で指先に付着した穢れた血液を拭い、その場を後にする。

まえさき市で人間風情に泣かされた高位魔族の方の蛇子ちゃんに会う前からこんな調子なのだ。

あといくつ因縁をつけられるか分かったものではないが、今度はあらかじめへ改造した釘打ち機を陽葵ちゃんのライダーズジャケットの裏にへ隠す。

着物の腰帯の結び目のようにホルスターへ設置し、即座に銃を抜けるようにする。

裏道を歩く間の最初の警告として、手斧は血を滴らせたまま抜き身で持って歩くことにした。

Episode 142 — Tips 『東京キングダムの各勢力 “5強”』

〜一方、その頃……①〜

日ノ出 陽葵「ジェットヘリに乗ってやってきました！東京キングダム！この闇の街で日葵ちゃんを探しちゃうよー！」

日ノ出 陽葵「けど……闇雲に探しても見つかるわけないよね！」

日ノ出 陽葵「日葵ちゃんならこんな時、どう動くかなあ……」

日ノ出 陽葵「……」ウーン

日ノ出 陽葵「まずは、自分の足で歩いて情報収集かな？ 肌身離さず持ち歩いている日葵ちゃんの写真があるし！ 聞き込み！聞き込みつと！ こんな大きな町なら日葵ちゃんの姿は絶対に見られている筈だよね！」

……  
……  
……

日ノ出 陽葵（わあ……！道端に堂々とアダルトグッズが売買されているなんて……！ 何度か軽い任務で来たことはあるけど、東京キングダム恐るべし……！ 日葵ちゃんも対魔忍だけど、こんな街で一人つきりなんて危なすぎるよ！ 早く合流しちゃわないと……）ジロジロ

「今日はやけに若い女の子がくるでゲスなあ。お嬢ちゃんも竹鞭に興味があるんでしようねえ。攻めっぽい顔した攻め側なら納得でゲス」

日ノ出 陽葵「ううん、違うよ！ 私は人探しかな！」

「人探し？」

日ノ出 陽葵「うん！この子なんだけど、おじさん見てない？」

「……おや。この子は……」

日ノ出陽葵「知ってるの!？」

「ゲへへへ。知ってますとも、そりや知ってますとも。この子なら店内で鞭を振るって聞き分けのないメス豚を躡けてるでゲス」

日ノ出 陽葵「え？ し、躡……？」

日ノ出 陽葵（でもこの前、日葵ちゃん家に遊びに行ったときは『東京キングダムの強度を調べる』みたいなこと言ってたと思うんだけど……寄り道かなあ？）

「ええーええー！ なんでもパートナーのケツを愛撫スパンキングするためには鞭の使い心地を検証しているのだとか」

日ノ出 陽葵「ええっ!? パートわナーたしのお尻を叩くのに扱いやすい鞭を?! ひ、ひまりちゃん……♥ そんなに私のことを♥」ヌレツ♥

「おやおやあ？ その様子じゃお嬢さんが本命っぽいでゲスなあ……？ 攻めっぽい顔して受け側なんてたまげたなあ……」

日ノ出 陽葵「あ、あの……それで……日葵ちゃんは今どこに……？」

「ゲエーッヘッヘッヘッヘ！ 店の奥でゲス！ 店の奥でゲス！ ついてくるでゲスよ！」

日ノ出 陽葵「日葵ちゃん……♥ 今、新妻が行くからね……♥」クラツ……フラフラ……

く一方、その頃……②く

上原 鹿之助「なあ蛇子？」

相州 蛇子「ん？ どうかした？」

上原 鹿之助「その、さ。日葵って蛇子から見ても外から来た一般人なんだろ？」

相州 蛇子「うん。蛇子はそう思ったかな！ 日葵ちゃんは間違いなく私たちとは違うし、対魔忍じゃないよ」

上原 鹿之助「……」

相州 蛇子「……確かに不思議なところもあるけど、その不思議なところも外の世界では普通の振る舞いなのかもしれないし！」

上原 鹿之助「お、おう。不思議なところに関しては、俺もそう思

うんだけど……。それでさ、蛇子から背中を押してもらったアレの話  
なんだけどさ」

相州 蛇子「うんうん！ あれから返事もらえたの?! どうだった  
!？」キラキラ

上原 鹿之助「まだちゃんとした返事もらってないけど……」

相州 蛇子「ズゴー」

上原 鹿之助「その、うまく行ったとしてさあ？ 日葵が外から来  
た一般人で、俺が対魔忍だってこと、受け入れてもらえるかなって  
……」

相州 蛇子「？ どういうこと？」

上原 鹿之助「俺、ときどき考えちまうんだ。蛇子も言った。外の  
世界では普通かもしれない。って部分をさ。……じゃあさ、俺達対  
魔忍が外の世界の悪いヤツ等を二度と悪さできないようにやつつけ  
たり、悪い奴のところ忍び込んで情報収集したりすることは、外の  
世界では普通じゃない……ってことにもなるだろ？」

相州 蛇子「それは……」

上原 鹿之助「あの時はその場の勢いで日葵を護りたいってことを  
伝えられたんだけど、だんだん時間が経つにつれて返事とかその後の  
ことを話すのが怖くなっちゃってさ」

相州 蛇子「……」

上原 鹿之助「ご、ごめん。任務中なのに……。おれ今日は変な事  
言っただけだからだな。『俺は正義の対魔忍なんだから悪い奴をやっつ  
ける!』……今は、それでいいよな？ 細かいことは、ちゃんと  
そういう関係になってから考えるのでも」

相州 蛇子「うん……。……そうだね」

一方、その頃……③

八津 紫「なっ……!? それは本当か!？」

高坂 静流「ええ。確かな情報筋から仕入れた話。東京キングダム5  
強のうちの沙無羅威が動いているだとか、ノマドがヨミハラから秘密  
裏に傭兵や兵士を動員・結集させているだとか色々不穏な動きを見

せているわ」

□東京キングダムの勢力 “5強” について

現段階では5つの勢力が東京キングダムをパイのように切り分け分割統治している。

◇鬼武衆原作ではCHAPTER33で登場

鬼族で構成された団体

本拠地店は東京キングダムではあるが、近年はヨミハラにも拠点を置くようになった。

頭領の名は速疾鬼。

またの名を “不死身のラーヴァナ”

幹部は四鬼と呼ばれ、それぞれの名は 峠金鬼、椿隠形鬼、

長谷川風鬼、眠水鬼。

◇クラブ・ペルソナ原作ではCHAPTER08で登場

東京キングダム1位、2位を争うクラブ。

5強の1つに加えられている所以は、凄腕の情報屋でもあるオーナー “マダム” の影響力が1つの要因である。

◇沙無羅威原作ではCHAPTER33で登場

頭領の名はニールセン

幹部の名はサイレンス

頭領のニールセンがノマド大幹部フルストの腹心であり、傀儡のような存在。

最終的な実情としては、フルストおよびノマドの私兵部隊である。

◇獣王会原作ではCHAPTER25、30、33で登場

獣人を多く抱えた組織。

現在の頭領が拾った捨て子やストリートチルドレンによる構成員十人程度の零細ヤクザだったが、今や家族同然の絆で勢力を拡大。

頭領の名は十蔵。構成員からは “親父” の名で親しまれている。

幹部は灰狼一郎太、トラジロー、白熊タローの3名。

うち、近い将来に頭領である十蔵の引退後は灰狼一郎太が跡目を引き継ぐと思われる。

◇龍門原作ではCHAPTER08、25で登場

中華連合（2020sでは中国と呼ばれた国）の出先機関。

秘密裏に強化人間やクローン人間、人体改造などの技術を研究しており要警戒組織。

頭領は不明。

幹部は多数存在している者の、現状判明しているのは弩竜のみ。  
はて？二車忍軍？知らない団体ですね。

□ヨミハラについて

東京の地下300m地点に存在する闇の無法都市。

魔界へと続く門が存在している。

縦横5km四方ほど、高層ビルがすっぽり入るほどの高さがある広大な地下空間で、日本の首都直下でありながら政府の力も対魔忍の力も及ばぬ魔の巣窟。

一般人が迷い込めば1時間も経たないうちに金か命か、尊厳を全て失う極めて危険な街。

ヨミハラに高級娼館アンダーエデンも存在している。

中心街では都心並みの賑わいを見せているが、表通りを外れた地区は貧民街、スラムが立ち並ぶ。

エドウィン・ブラック率いるノマド傘下の魔界の住人を中心にしたマフィア組織がヨミハラ一帯を支配しており、エドウィンブラックが羽休めする屋敷にあるらしい。

（各情報の出典・引用元：対魔忍RPG CHAPTER38、対魔忍RPG攻略wiki 用語集 ヨミハラ）

八津 紫「くっ……」

高坂 静流「それだけじゃない。米連で活動していたエドウィン・ブラックが東京キングダムへ訪れたという情報と、先ほどカオス・アリーナを根城にしているスネーククレディが市街へ現れた話もあるわ」  
本当か？「八津 紫」

高坂 静流「ええ。少なくとも実際にスネーククレディの姿はこちら

でも確認しているし。と言っても見たのは一瞬だけで、上機嫌のまま身綺麗な私服姿でどこかへ消えちゃったけど。東京キングダムで活動している対魔忍達には既に通達済だし、本部（五車学園）にも東京キングダムでの活動は控えさせている状態よ」

八津 紫「」

高坂 静流「例のあの子の情報はまだ何も得られていないけど、まだ彼女について調査を続けるつもりながら心して紫も動いてね」

八津 紫「ああ……。わかった」

……

……

……

高坂 静流「余計なお世話かもだけど」

八津 紫「なんだ？」

高坂 静流「あの子がノマドと繋がっていると疑うには早計過ぎるじゃないかしら？」

八津 紫「……………」

高坂 静流「いちいち動きがあからさま過ぎるのよ。蓮魔の報告書も読んだけど、彼女の言う通り本当に狡猾な子ならわざわざ友達に魔族との密会を大声で話すかしら？ 確かにあのぐらいの年頃の子は自慢話でしちやうかもしれないけど……報告書通りなら普通は隠し通すものじゃない？」

八津 紫「ああ」

高坂 静流「それに仮にノマドとの密会だとして。ノマドのトップであるエドウィン・ブラックがわざわざ赴くのも大袈裟過ぎる歓迎じゃないかしら？ それもヨミハラから幹部数人や私兵部隊まで募って、同所属のスネークレディまで集めるなんて抗争でも引き起こす気と考えるのが普通よ」

八津 紫「何が言いたい？」

高坂 静流「ふふっ。ちよつと頭の固い同僚にアドバイス♪ でも……ちよつと気になるのがスネークレディの方かしら？」

高坂 静流「彼女、常に享樂的で自分自身が楽しむ目的以外の出来



事ではあまり興味がなさげだし、密会するってタイプじゃないのよね。かといって招集を受けたからと言って真面目に抗争に参加するタイプかと言えば違うし………いったい、何が目的なのかしら？」

八津 紫「わかった。わかった。気を付けるようにはする」

## Episode 143 『情報屋のマダム』

「……はあ」

今日は溜息しかついていない気がする。

あれからやつとこさ『完全な裏路地』ではなく、大通りほど華やかさは無いが都心部の住宅街程度の光源を放つ程度の『路地』まで戻ってくる事ができた。

まえさき市で人間風情に泣かされた蛇子ちゃんとの会合場所まで、あともうちよつとな気がする……と言いたいところだが、未だに迷子なことには変わらない。

海辺で重いパンチを繰り出した3時間ウンコしていた方のヘヴィ子ちゃんから忠告されて、<sup>土</sup>へナビゲート<sup>地</sup>があるほうだから余裕だと笑っていたが、まったく笑い事じゃない。

東京キングダムに来て裏路地に入ってから、ずっと逃げ回って、鹿之助さんの約束通り戦闘はせずに暗殺して回っているばかりで口々に道や地形を覚えるもへつたくれもない。

血吸いの手斧と高位魔族の蛇子ちゃんの名刺のおかげで、ある程度の小物の露払いは出来ていることはいるのだが、それでもやはり一見するだけでは都会人から田舎者としてSNSに晒されるタイプの芋娘だからだろう。

命知らずな輩はいる。

アレだ。

『バカでもわかるように説明に工夫したところで、そもそもはバカは説明を聞いていない』という格言と似ている。

この世からお引き取りしてもらった人間も居るが、あれも別に戦ってはいない。

あくまでも追いはぎ・強盗被害に遭ったから『正当防衛』で突きつけられた銃をへ組みつき<sup>マ</sup>mnve<sup>モーバ</sup>で奪い取って、眼球に一発分だけ

返し刀しただけ。

あくまでもこの世には無くなった方が世界のためになるものを私の力で消し去っただけ。

〈法律〉など無意味な司法を東京キングダムで判例を掲げるのも変な話だが、2023年03月21日に発生した『池袋集合住宅地強盗事件』では被害者がハサミで強盗の喉を突き刺し殺しているが、正当防衛が成立している。あれと同じ。

示談金は拳銃を2挺もらっているので実質、平和な “和解” もしている。

誰に弁明するわけでもないが、勘違いしないでほしい。

ちゃんと最初のチェイス以来『新クトゥルフ神話TRPG』206頁の公平な警告も3つ発信していた。

・最初の警告では、  
抜き身で血吸いの手斧を携えて、私は危険な人物であることを周囲に知らしめ。

・二つ目の警告では、  
脅された時に蛇子ちゃんの名刺を見せて、高位魔族に招かれている関係者だと伝えた。

・最期の警告では、  
彼等にとって最初で最後のチャンスを不意にしてしまわないように武装解除をしてから大人しく “ゼロ距離” まで近づいてあげたのだ。

ここまでやっても引かなかった向こうが悪い。

まえさき市で鹿之助くんが生贄に捧げられそうになった時みたいに、サーチ&テストロイ見敵必殺したわけではないのだ。

ちゃんと私は段階を踏んだ。

てか、状況によっては銃弾の込められた拳銃を突きつけられる時もあった。

拳銃を突き付けられている時点で逃げられないし、もう正当防衛で

殺すしかないでしょ。

鹿之助くんと約束で、戦っちゃいけないんだから。

でも最後はお互いに笑顔で示談金も貰って実質和解もしているの  
で、平和なルートを辿っているはず。

「はあ。……(こ)こ、ほんとにどこお……?」

路地で前髪を掻きあげながら、涙目になりつつ片目をつぶって後頭  
部を掻きながら周囲を見渡す。

北西にある東京キングダム大橋から見えた商業地区近くには最も  
高いビルが4本立って見えていたが、現在の位置からだとそのビルは  
千葉県側、北東方向にある。

「えー、だからあ……。えーつと、東京キングダムZ街Y丁目X番地は  
……」

印刷した紙媒体のググルマップに目印を付けていたものを取り  
出して、現在位置と照らし合わせる。

おおよその位置はつかめたような気がするが、気がするだけだ。

不正確な情報では目的地にたどり着けない。

もう諦めての帰り道は見えているビルを目指して帰ればいいので  
楽だが、諦めたらそれはそれで面倒なことになるのは確かだった。

「キレそう……」

早めに東京キングダムへ訪れたにも関わらず、時間が既に押ししてい  
ることに對して自分自身に憤りを覚える。

苦肉の策としてスマホを使って蛇子ちゃんに直接連絡を取って、  
やっぱり “使い” を寄こしてもらうことも考えたが、そもそも今  
日はスマホなんか持ってきていない。

仮に東京キングダムで恥辱と凌辱に塗れた陰惨な目に遭った時、ス

マホからあらゆる情報が流れ出て五車学園の友人達が狙われることになるのは避けるためだった。

公衆電話を利用……ということも東京キングダムに訪れる前には考えていたが、そもそも東京キングダムに公衆電話がねえ。

示談金としていろいろ譲ってもらって和解してきた奴等もスマホすら持ってねえ。

このまま諦めて帰ることも思い浮かんだが、絶対にあの高位魔族は五車町へやって来る。

その時、両親や五車学園の皆に危害が及ぶのは明白だ。

1人2人なら護れるかもしれないが、相手の目標が絞れない以上は不特定多数の人数を一度に護るのは無理だ。

……できないことはないかもしれないけど……一生、護りきることは現実的じゃない。

「お困りかしら？」

途方に暮れていた時、ふと小道から女性の声が掛かる。

高位魔族の蛇子ちゃんよりも低めのトーンで神経質そうな……少し威圧感のある声だ。

その顔は見えない。

建物の影が、丁度その女の顔を隠している。

現段階でわかることは、彼女は薄生地ワイン色のパーティドレスを纏っていた。

彼女の体形が露骨に浮き彫りになるロングタイトスカートであり、どこかの店の客引き娼婦かと一瞬間違えたが……。

彼女の気品さから見て、そこら辺の安っぽい娼婦とは異なることに気付けた。

それに。

一帯の足元はこんな凸凹とした不安定な足場にも関わらずドレス

と同じ色をしたヒールを履いており、野蛮な悪漢だらけの街でその衣装は致命的だ。

ただ者ではないのだろう。

鹿之助くんが話していた『親切な奴には気を付けろ、逃げろ』という約束事の下。

脱兎の如く離脱・状況に応じて正当防衛・不意打ちによる暗殺ができるように〈改造した釘打ち機〉ではなく、ギャングから示談金として奪った拳銃に〈居合〉の姿勢で左手を伸ばす。

右手には血のこびり付いた手斧が握られているのだ。

この状態の私に話しかけてくる奴など、きつと碌なヤツではないことに違いない。

「身構えないで。別にあなたの敵じゃないわ」

「……………」

建物の壁面に背中を接して、同時に周囲も警戒する。

ゆつくりと近づいてくる彼女が陽動であり、本命の襲撃者が別にいるなんて状況はこの東京キングダムではザラに遭遇してきた。

「大丈夫よ。私一人——と言いたいところだけど、あなたが鬼神の如く暴れ出しても鎮圧できるよう少し離れたところに護衛が居るぐらいかしらね」

最初の警告は済ませた以上、二度目の警告として血塗られた手斧を彼女に突き付ける。

だがしかし、彼女は意にも返していない様だ。

ハンドバッグからゆつくりと扇を開きながら取り出すと口元を隠しながら挑発的にフフフと笑う。

されども彼女の振る舞いはこれまでに襲撃してきたチンピラ達とは異なる。

私に対する振る舞いは油断ではない。余裕に近いものを感じる。

最期の警告を出す前に、彼女はその姿を完全に光の下にあらわす。サツマイモ色の髪型をした女性だった。

ストリートな長い髪は肩や鎖骨に罹る程度まで伸ばし、首には大粒の真珠によるネックレスを掛けている。

唇には濃いベージュ色の口紅を塗っており、また顔に大きな傷痕でもあるのか、それともこちらに表情を読まれることを避けているのかわからないが、顔の1/2を隠してしまうような無機質な仮面を着けていた。

「……………」

「やはり口だけじゃ信用できないわよね。それじゃあ、これはサービ  
ス」

女は再びハンドバッグの中を漁ると、小さく折りたたまれた用紙を人差し指と中指で挟んで地面に投げ捨てるように渡してくる。

左手で拳銃を握るのを止め、右手で手斧を突きつけながらも投げ渡された紙を拾いバツサバツサと動かしながら内容を確認する。

「……………」

「どう？…これで信用してもらえるかしら？」

女はパタパタと仰いでいた扇をパチンと閉じて、威圧がさりながら猫なで声を出しながらも見透かしているような顔をしている。

私に投げ渡されたもの、それは私が今もつとも欲しているもの。

念願の『東京キングダム地図』だった。

丁寧に各区分の店名などが所要所に書き記されており、ふうま君から聞かされていた『クラブ・ペルソナ』の位置すら地図一枚で掌握できる。

今自分が何処に居て、どこに向かわなければならないのか非常にわかりやすくありがたい一品だった。

私が東奔西走していた裏路地の情報まで細かく書かれているので

あれば、逃走経路を練るには十分な程に精巧な作りに見えた。

「……………」

手斧は突きつけたまま片手で受け取った地図を折り畳み、陽葵ちゃん色のジャケットの内側ポケットへしまおう。

天之美緑のような出来事にうっかりと彼女をへ信用してしまいうになるが、私が迷子になつて途方に暮れている時に、丁度仮面の女が現れて地図を渡してくれる状況。

あまりにも話が出来過ぎている。

この女が私を狩場に誘い込むために渡してきた地図の可能性もあることを踏まえて警戒は解かない。

「……………礼は言わせて頂きます。ありがとうございます」

「気にしないで。とある人から『あなたが困っていたら助けてあげてほしい』って事前に言われていたから助けてあげただけ」

彼女の言葉に、これまで遭遇してきた人たちを振り返ってそれらしい人を思い出す。

「……………」

即座にはピンと来る人は居ないように思えたが――

「……………ふうま君？ クラブ・ペルソナ？ じゃあ、貴女は…………… マダム？」

「とある人は匿名希望だからその名は伝えられないけど。そうね。その名前は私の通り名で間違いないわ」

構えていた手斧をゆっくりと下ろしながら、警戒を緩めていく。

マダムは余裕の表情と姿勢を取ったままだ。



〈心理学〉で彼女の発言に偽りが無いか探りを入れたところだが、表情の大半が仮面で覆われて読めないこと。

立ち姿だけであれば大胆不敵そうな堂々とした立ち振る舞いから、嘘を話しているように見えない。

「そうそう。私の正体について掴めたところだけど。別にあなたのこととは知っているから名乗らなくてもいいわ。あなたは、五車町全体……特に五車学園で人気を覇している噂の転校生。青空 日葵ちゃん、でしよう?」

「ふむ……………」

こんな無法地帯で女性という性別にも関わらず勝者側として生き延び、情報屋と言われるだけはあるかもしれない。

東京キングダムでは口にしていない私の仮の名をしつかりと抑えていた。

畏怖すらも覚えるその情報収集力は、探索者として見習わねばならない部分だろう。

もしかすると五車町での蛮行を彼女は知っているかもしれないが、そこに触れずに『五車学園で人気を覇している』という相手を不快にさせない言い回しには感服すら覚える。

リップサービス  
私のとっても大切な親友2人  
鹿之助さんと陽葵ちゃんは、どちらも『オブラートに包む』ということが苦手だからな。

だからこそ、私も完全に警戒を解いた証として彼女の目前で背負っていたリユクサクサクを降ろして荷解きを行う。

それから鋼人屋敷で入手した宝石付きの指輪を2つ適当に取り出して、躊躇せず彼女に投げ渡す。

「おっと。……………これは何かしら?」

「最近手に入れた宝石です。魔法を使う悪人が身に付けていたものでして……………きつと質屋に持って行けばそれなりの金額になるかと。情報屋なら最も価値を見出してくれる質屋を御存じだと思います。学

生ですから、この程度のものしか持ち合わせていませんが……。マダムさんは……情報屋でしたよね？」

「ええ。つまり、これから貴女が会合する相手の情報が欲しいのかしら？」

彼女の問いかけに、こちらは口元だけをにっこりと歪ませる。

「いいえ。それは口止め料です」

「口止め料？」

「はい。先ほどあなたは匿名希望さんが『私が困った時に助けてあげて欲しい』と言っておられました。私がこの島に上陸してからというもの危機にしか苛まれていなかったにも関わらず、あなた方の介入なかった」

「……………」

「それにおっしやられましたよね？ 護衛が一人、私が “鬼神の如く暴れ出しても鎮圧できるよう少し離れたところに居る” と。……まるでこれまでの正当防衛を見ていたかのような口ぶりでした。だから、それはこの街で私について知り得た情報の口止め料です」

左手の人差し指を口元に沿えて、他言無用のジエスチャーを笑顔のまま彼女に送る。

見られた以上。

存在を消したほうが早いかもしれないが、例の姿を見せていない護衛の件もある。

赤き霧／磯八目中着鰻のような不可視の存在かもしれないことに留意し、〈聞き耳〉をそばだてサーチするも風の音しかしない。

しかし風の音に乗って “マダム” の警告通り、他に誰かから見られているような気配はする。

不可視の護衛がついているならば、ここで殺すのは分が悪い。それに風。

まさかとは思うが……彼女がカルティスト候補者で地下世界の絶

対的支配者／飛行する翼無きポリープを従えているとしたら……。

だからこれがこの場で考え得る最善策だった。

そもそもこの女がクラブ・ペルソナ、マダム　「本人」　である保証はどこにもない。

お試して消してみたが影武者だった、その可能性も考えられる。で、あるならば。ここは友好的に振る舞っておいた方が良いに違いない。

彼女も私が言いたいことは分かったのか、受け取った2つの宝石付きの指輪を掌で転がしたりネオン光で透かして〈鑑定〉しながら、片耳で私の話を聞いているかのような素振りをする。

「いいわよ。交渉成立。スネークレディとエドウィン・ブラック。両名にはあなたの知り得た情報を渡さないであげる」

「……」

流石に全方面への口止めは厳しいか。

彼女の言葉に軽く下唇裏の肉を噛む。

私は料金を奮発して鋼人屋敷の宝石を彼女に渡したつもりだったのだが、彼女の方が商売の才は上のようだ。

私について得た情報の相場は彼女にとつてどれほどの価値に値するか分からないが、価値のわかる格上に宝石をへ値切り〈されてしまったような気がする。

否。

これは高位魔族の蛇子ちゃんと『エドウィン・ブラック』なる人物にも口止めしてくれると条件提示してくれている、のだ。

決してこちらを格下と見下し足元を見ている条件提示ではない。

「嗚呼」

されど私としては高位魔族の蛇子ちゃんや『エドウィン・ブラック』なる人物に情報が渡ることなど微塵にも気にしていなかった。

どのような形であれ本日、彼女等とはめぐり合う日程なのだ。

どのような情報を売られたとしても、逆にこちらから情報のバーゲンセールを開いてやるつもりだったのだから。

それに彼女の場合、情報屋などに頼らずとも東京キングダムにカオス・アリーナという根城がある以上。

これまでに遭遇してきた輩は、差し向けてきた手駒の可能性は十分に考えられる。

まえさき市でもあれだけの数のオークを従えていたのだ。

チンピラを十数人こさえていてもおかしくない。

他者に頼らずとも、こちらの力量をこれまでの過程で推し量っていることも想定内だ。

当然、こちらも 前提条件 縛り〃 を付けて〈近接戦闘（斧）〉と〈改造した釘打ち機〉を振り回している。

ゆえに私がつともこの状況で警戒しているのは――

「いいえ。私が口止めをお願いしたいのは、影ながら私を手助けするようマダムあなたに依頼してきた 匿名希望さんの方ですね。確かに蛇子ちゃんあなたは高位魔族として十分に恐ろしい存在ですが、庇護を依頼してきた匿名希望さんによる先見の明が私にとって不利に働くかもしれませんから」

「明らかな脅威目前の高位魔族よりも正体不明の何者かを優先的に警戒するのね」  
「フツ。『タダより高いものは無い』と言うでしょう？」

「フッフ♪ 口止め件については承知したわ。あなたが五車学園で注目的になるのも分かる気がするわね」

「ははっ。ご存知でしょうけど、実情はそんなに心地よいものではないですよ。――では、急いでいますので」

マダムが扇子で扇ぎながら妖艶に微笑んでいる間に、リュックサックの中身を戻してその場を後にする。

少なくとも 匿名希望さん への口止めのおかげでしばらくの間は私が誰と会合したのか知られずに済むだろう。

しかし……………。

仮に “匿名希望さん” がふうま君だとして片田舎の青年が、一介の廃棄都市の情報屋と繋がっているのはどうということなのだろうか？

友達を疑うのはあまりよろしくないが、ふうま君には私の中で色々と疑惑が上がっている。

少年兵だとは考えたくないが、今後は彼の動向や視線にも気を配った方がいいだろう。

それと上着の内ポケットに入っているマダムから貰った地図によれば、現在地から目的地を計算したとき。予定時間よりも少し早めに現地に集合できそうだ。

いいや。この場合、少し早めに到着できるならば。

その時間を使ってでも受け渡された東京キングダム地図が正確かどうか裏をとった方が有意義な時間の使い方かもしれない。

Episode 144 『いえーい！陽葵ちゃん、見てるうー？ これから東京キングダムで高位魔族と会合を開いちゃいまーす！』（NTRビデオ風）

匿名ふうまさんの根回しのおかげで、無事にペルソナ “マダム” から重要な情報を受け取り終えた私は貰った地図を頼りに周辺一帯の調査に乗り出す。

また “マダム” から貰った東京キングダムの地図についてだが――

――結論から言おう。

この『東京キングダムの地図』は一寸も狂いのない正確な地図だ。なんなら地図上では通行可能にもかかわらず現地では行き止まりであっても、アマチュア―― “ちよつとした才能か初歩的な訓練を受けた” 人の〈跳躍〉パルフェールを活用すれば突破できるような場所だったり、建物内に続く廊下を経由することで短時間の間に目的地へ着くことすらできた。

……………恐らく。

間違いない、この便利な地図は東京キングダムにおいて最も他の組織が欲しがるといえる超貴重品なのではないだろうか？

ここまで精巧な地図ともなると、逃走経路のみならず侵入経路としても非常に有用になるだろう。

だからある程度地図の有用性を確認した後は他人には見せないように陽葵ちゃんのオレンジジャケットの内側ポケットにしまい込んだ。

それから頭に叩き込んだ最短ルートを通って東京キングダムZ街Y丁目X番地まで赴く。

頭の中の地図はGPSほど正確じゃないが、それでも目的地まで

へナビゲートする分にはルートを簡単なものに変換してくれていた。

警戒しながらも足を踏み入れた会合会場は小洒落たBARだった。

桃色のネオンが、街灯の灯らない裏路地をエロティックにぼんやりと全体的に照らしている。

妖艶な雰囲気になが引き締まる。

仮に罠だとしてもこの場にいる全員を振り返りにしてやろうと意気込む。

また少なくとも相手側も本が本当に目的であり、蛇子ちゃんが五車病院へ直接連絡するほどに欲するような価値のある書物であるならば。

『書物の所在と無事を確認するまでは相手側も一時的な無力化を致す可能性はあるだろうが、完全な再起不能状態になるまでの罠は仕掛けて来ないであろう』という見通しはあった。

だが、私の意気込みは空を切ることになる。

店前に設置された数組のテーブルと椅子には多様な魔族が待ち構えていた。

その場にいるほとんどが侵入してきた私に無関心のようにだった。

居酒屋のように雑談を交えながら酒をかつ喰らい、ツマミを濁流のように流し込んでいる。

新しい来場者に『ちよつと珍しい客が来たな』あるいは『メスの子が迷い込んできた』ぐらいの目で見えてくる程度である。

たまに血の滴る抜き身の手斧を直視して面倒ごとに関わらないで置こうと自ら距離を取る魔族すらいた。

これを例えるなら、まるで創作で見られるような人外の里に人の仔が迷い込んできたような反応だ。

声を掛けられたとしても、無法地帯には似つかわしくないシワ一つ無いタキシードを着用したオークが両手を突き出して自身が無害だとアピールしながら『お飲み物は何になさいますか？』と気さくに声をかけてきたり……。

こちらの警戒心むき出しの殺気に傭兵のような出で立ちをしたオークが『ここは初めてか？肩の力でも抜いてビールでも飲んでリラックスしな。オメコの面倒はしっかり見ててやるよ』『又へへへ……』と煽ってくるなど……。

面白い奴だな。

気に入った。

殺すのは最後にしてやる。

さて、このBARには大通りの商業地区と同等の人間の姿がかなり見受けられた。

集団で私をフクロにする罠にしては亜人率が低い。

これまでに裏路地で襲撃してきた魔族とえば、最低限人の形はしている者（頭が1つ、目玉が2つ、耳が2つ、鼻が1つ、口が1つ、首が1本、中央には楕円柱状の胴体があつて。

腕が二本、足が二本、二足歩行する存在ではあつたが、人間から見れば異形、亜人のような生物が大半だつた。

オークとか、ツブロックオークとか、モヒカンヘアのオークとか。それがこの場所では——どうだろう？水色のフードを被つた健康的な肌をした若者や、ウェーブの掛かつた水色髪をしたビキニアーマー装備の女性、眼鏡っ娘メイドや青年執事すらいる。

私の視点では、どこからどう見ても人間にしかみえない。

そりゃあ……。髪色が金髪だったり銀髪だったり、光彩の色が独特で人間らしからぬ色って言ってしまうえばそれまでだが。

五車町では基本みんなカラフルだし。

鹿之助くんだって、栗色の髪に緋色の瞳をしているし。

陽葵ちゃんも黄色がかつたクリーム色の髪に赤橙色のメッシュ、橙色の瞳だし。

紫先生も金青色の髪に赤い虹彩だし。

私は髪の色こそアジア系、日本人らしい黒髪だけど、虹彩の色は北



欧系のヨーロッパな黄緑色だし。

眼の色や髪色で『人間じゃない！』と細かくツツコむのはヤボだろう。

時代が時代なら『差別だ！』とネットリンチの刑に晒される。

しばらく周辺をウロウロ徘徊していると、腫れ物に触るような対応をするオークのウェイターに空席を案内される形で席を確保することになった。

案内されたテーブルは円卓で12時、3時、6時、9時の方角に椅子が設置してある席だった。

上座である6時の席に着くと表紙が皺皺のメニュー表を手渡され、ノンアルコールシャンパンを注文するとウェイターは去って行った。

邪魔者が居なくなった間に、リュックサックからこれまでのチェイスによってグシャグシャになったモンブランケーキを机に設置する。席は確保したので次は自撮り写真だ。

フィルムカメラでここぞとばかりにマクロスのキラツ☆ポーズをとりながら自撮り写真を撮って取って取りまくる。

時には背景の写真もパシャリ。

盗撮用のメガネカメラに備わったズーム機能を使って周囲の状況を偵察。

うむ。

余すことなくそれらしい窓やら非常階段・屋上などを確認したものの……。

……うん。

フィルムカメラだからどんなふうに取れているか確認できないし、フィルムカメラなんて古臭い撮影機器のせいで周囲から悪目立ちし始めている。

でも観光のノリを辺りに撒き散らしつつ、だいたいの狙撃ポイントは抑えた。

ああ！クソツタレ！

敵地にこのこ誘い込まれていることなんて十分承知だが、本当に

視線から〈隠れる〉場所がどこもねえ!!!

(……………塹壕、作るかあ……………)

いつのまにか座席に置かれたシャンパンには蓋を開けるだけで手を付けず、持ってきた手動ミキサー済のモンブランケーキを自前のスプーンで掬って頬張る。

ついでに自前のショットグラスも取り出して麦茶を注いでイッキする。

店から出された商品には一切、手を付けない。

グラスの底面やシャンパン自体にデートレイプドラッグが塗布・混入されているようなものならば一発でお陀仏だから。

「うゝはあああああああゝ」

仕事終わりのおっさんのような声を上げながら麦茶を一杯飲み干す。

ここまで来るとヤカンでも持って来て、和風家屋の縁側で麦茶の直飲みすらしたくなってしまふ。

夜空を見上げてみれば、満天……………とまではいかないもののどんよりと濁った空にいくつかの星が瞬いているように見えた。

紫白い月がとても薄い雲に隠れて朧月夜と化している。

今宵の天気はほほ快晴らしい。

残りの時間。魔都 東京では見えなかった星空の彼方へと高位魔族の蛇子ちゃんをリリースする計画を再度練り始める。

……………

……………

人力手動ミキサー食モンブランケーキを半分ほど頬張ったところ

で、逃走と緊張による汗が引いてきた頃合いだった。

手ごろな涼しさになったところで再び陽葵ちゃんから貰った橙色のライダーズジャケットを羽織る。

このジャケットは本当に不思議なものだった。

外気温はうだるような暑さで汗で背中だけがひんやりとする程度なのに、この上着を纏った瞬間から覆われている部位が適温の冷房や除湿機の掛けられた部屋にいるような感覚に包まれるのだから。

見た目は本物の皮……に見えるただの化学繊維を用いたライダーズジャケット——クトウルフ神話TRPG世界線では「厚い皮のジャケット」のようにしか見えないのだが……。

さてはて、一方でまだ蛇子ちゃんとそのお友達は姿を現してはいない。

武装を適度に整えつつも手斧を机上に置いて1000円のライターを取り出しポケットからタバコの箱を懐から——

「ああ、そっかあ……」

こつちの世界ではニコチン処女であったことを思いだす。

神村は未成年にも関わらずスパスパと喫煙していたものだが、厚生労働省が掲載している『Q. 未成年の喫煙について』の情報を知っている以上は危険を冒してまでの喫煙は遠慮したいところだ。

例え魔界医療で肺癌など、いとも簡単に治せるような時代であっても、だ。

けれども、こんな時はどうやって時間を潰したらいいか分からなくなる。

あまりにも露骨に調査をすれば相手にも余計な警戒心を与えかねない。

そんな暇つぶし用のスマホであるかもしれないが今回はスマホすら持ち合わせていない。

やることもなく高位魔族の蛇子ちゃんとそのお友達が到着するまでの間は手持無沙汰になる。

しかたなくへ改造した釘打ち機から釘を一本取り出して爪と皮膚の間に詰まったカスを取り除きながら時間を潰すことにした。

「ソフツ♪ お待ち遠さま♪ 随分とくたびれたような顔しているけれど、まだ始まってもないのにそんな調子で大丈夫なのかしら？」

爪の間の汚れも粗方取り去り、だらしない恰好で椅子へ寄り掛かったまま星と朧月夜をぼんやりと眺めているところへ待ち人が来る。

時間丁度に訪れた彼女は、くさぶき城の海水浴場で出会った時と同じ衣装でケラケラとこちらを嘲笑っていた。

「よっこいし面白いち死語：1972年から流行」

今や聞くことも無くなった掛け声で、勢いづけながら上半身を起し対面側にいる彼女と対峙する。

「心配されなくても、既に様々な波乱に巻き込まれながらも無事にここにいるわけですから……あとは言葉なんか交わさなくてもわかりませんか？」

「ウフフフ♪ そうね。ゼラトシーカーちゃんの孤軍奮闘っぷりは、じっくりたっぷりと観察させてもらったわ♪ もちろん、尖ったメッセージも、ちゃんと♪ ね♪」

蛇子ちゃんは獲物を見定めたかのような目をしながら、母のような綺麗な三角形の舌をペロツと出して唇を舌なめずりしてみせる。

「それじゃあ、後続の部下の人たち私と接触するの嫌がったんじゃないですか？ あのメッセージを確認した後ならば余計なちよっかいから手を引くと思いますが……」

「ええ♪ そこはゼラトシーカーちゃんの推測通り♪ でもね？ 私

の親友がどうしても貴女の力量を計り続けたいって言い続けるものだから♪」

「ケツ。それじゃあ、十分に計れたんじゃないでしょうかね」

「私は止めたのよ?」

「あーはいはい」

蛇子ちゃんをあしらい視界に入れつつも、その親友とやらを確認するため周囲を見渡す。

しかしそれらしき人物は見当たらない。

だが腕時計は待ち合わせ時刻を指している。

「……で。友達は何? ……遅刻ですか?」

「みたいねえ♪ ウフフ♪」

「……露骨な格下扱いですね」

待ち合わせ時間に遅刻してくる——人間風情に賜う礼儀などないとも言われているかのような、明白な格下への態度に下瞼が痙攣してしまう。

「そんなにカリカリしたって彼が来るわけじゃないんだから、友達同士水入らずの雑談もしながら気長に待ちましょ♪」

蛇子ちゃんは私を宥めながらも穏やかな口調のまま、ゆったりとした足取りでテーブルに指を添わせながらも近寄っては円卓の右側、3時方向へと座った。

それから頬杖をつけて目の前の小動物をどう弄んでやろうか企む——嫌ににやにやとした笑顔を浮かべて嘗め回すように見つめてくる。

「……………」

「♪」

「……………」

「♪」

「……なんでしょうか」

「別に？ そわそわして落ち着かない新しい友人を眺めているだけよ  
♪」

露骨に不機嫌な顔をしててもその表情を崩すどころか更にニヤついたり——されどナイ牧師とは一味違った嫌な顔をしてくる。

本当にコイツは邪神だ。

人間の皮を被った邪神に違いない。

「ところで届いたシャンパンは飲まないの?」

つい先ほどまでベロベロと舌で嘗め回すように、こちらを鑑賞していた蛇子ちゃんは封が空いたままの瓶に詰められたノンアルコールシャンパンを指さす。

「どうやら手付かずの飲料が気になったらしい。」

「ええ」

「それじゃあ……♪ 飲まないのであれば私がもらってもいいかしら?」

「どうぞ」

ゆえに欲しがったタイミングで、毒味を兼ねてグラスにシャンパンを注ぎバーテンダーがグラスを差し出すように渡す。

「ありがと♪ ここっつてむさ苦しくて弱いオスしかないじゃない? だから身の程知らずも多くて……追い払ってたら喉が渴いちやつたのよね♪」

彼女は渡されたシャンパングラスを躊躇ためらいなく傾けて上品に飲み干す。

「ふう♪」

「……………」

毒や薬物が混入されていることも加味し、今度は私が彼女を観察するが10分。

20分経過しようとも、デートレイプドラッグが混入や塗布されて

いるような予兆を見せることは無かった。

それどころかシャンパンの中身を殆ど飲み干し――

「ゼラトちゃんも♪ 麦茶ばかり飲まないでこっちもどう？」

ウェイターから真新しいグラスを注文しては、アルハラアルコールハラメント上司のような顔『私が出したお酒ノンアルコールを飲めないって言うんじゃないでしょうね？』とへ威圧しながら私へと差し出してくる。

蛇子ちゃんの身体に異常が出てないことから “1杯だけ” なら……とはならない。

私は人間で、蛇子ちゃんは高位魔族。

人間だけに通じる薬物が混ざっているかもしれないことを考慮して首を横に振って断る。

「なあに？ 私の注いだお酒が飲めないって言うの？ それはマナー違反じゃないかしら？」

ほら見たことか。

顔や態度のみならず、言葉にも出してきた。

「ああ、わたし未成年なので。ノンアルコールシャンパンでも20歳を越えるまでは飲めないんですよ」

「ここは廃棄都市 東京キングダムよ？ 腐りきった日本政府の法律を厳守したところでここでは意味ないわよ♪ それにい、こういうのは楽しんだもの勝ちでしょう？ 大丈夫よ♪ ここではみんな普通にやっている事だし♪ 中にはゼラトちゃんより歳下なのに薬物を楽しんでいる子だって居るのよ？」

当たり障りのない学校の道德の授業で習ったかのような模範解答を答えるも、模範的な問題集のような受け答えで飲ませようとしてく



る。

しかも日本人特有の同調圧力まで加えてきた。

ここまであからさまだと、やはり仕込まれている可能性は大いにあるが、蛇子ちゃんの意地悪な性格 のことだ。

ただ私の反応を見て、純粹にからかっているだけののような気もしなくもない。

「ははっ、それはそうかもしれませんが。でも肝臓を大事にしたいので成人を迎えるまでは止めておきます」

最終的に注がれたグラスは机を経由する形で受け取りはしたものの、内容液はそのまま地面へ破棄する形で容器をテーブルに置く。

それに対する蛇子ちゃんは、諦めたような残念そうな顔をしている。

「……ところで♪ 今回はちゃんと例のモノは持ってきたのかしら？」

不意に彼女の視線が、私の不機嫌な顔からリュックサックへと向けられた。

「もちろん」

形式上の友人関係となったと言えども、必要以上に膨らませて話す話題などなく消極的で淡白な言葉で答える。

「私も見せてもらえたりするのかしら？」

「お望みなら」

軽く荷解きし、背中側へとしまい込んだペラペラの同人誌を取り出す。

これはなおコロ先輩達にも〈鑑定〉してもらった際に使用した冊子だった。

それを蛇子ちゃんへ見せつける。

「あらあ、なあに？それは??？ この前見せてくれた偽物より更に杜撰な装丁された本ね。本物はどうしたのかしら？」

ヤツとしてはこちらの行動を全て見抜いていたかのような……しかし私らしい行動とでも言いたげな顔をしながら、分かり切ったような質問をしてくる。

「本物なら今頃米連行きの船の上にもあるんじゃないですかね？」

だからこちらも最初から本物を見せるつもりすらないと、分かり切ったような表情をしながら肩をすくめて、小粋なジョークを飛ばしながら持参のショットグラスに麦茶を注いでは茶をかつ喰らう。

「……ゼラトちゃん♪ この場でふざけるのはよろしくないんじゃないかないかしら♪」

笑顔を崩さないものの何処かジメジメとした陰湿で加虐的な微笑みを浮かべる蛇子ちゃん。

まるで今にも本物の在処を吐きたくなるように、まえさき市でのような肉体言語に移ろうとしているのか。

脅しのように指先を波打たせながら机を叩いて催促してくる。

「まさか。シラフですので至って真面目ですよ。てか、蛇子ちゃん、まえさき市みたいなちやぶ台返しはNGです」

「ウフフッ♪ ゼラトちゃんは前例があるからね♪ これは核心を突かれてまた不意打ち行動にしないための私なりのほ・け・ん♪」

「わはは、笑える。……面白いジョークですね。そんな何度も同じ手

法で目くらしするわけないでしょう。蛇子ちゃんは 〃何度も同じ不意打ちが通じちゃう系の高位魔族ちよろい” でしたっけ?」

だがその程度の〈威圧〉で屈する私でもない。

こんな危機的状况、世界滅亡カウントダウンに直面した時に比べれば大したプレッシャーではない。

高位魔族の蛇子ちゃんは、言葉は通じるが話は通じないタイプではない。

ゆえに話が通じているだけ、どうしようもない驚異や怪異の段階でもないのだ。

更に言ってしまったえば、こちらはいつでもまえさき市での出来事のように一矢報いるような装備は整えている。

『別に暴力に訴えるならば、暴力で解決すればいい。お望み通り釘弾で風通しのよい身体にしてクールダウンさせてやる』と脳裏では闘志をメラメラと焚き上げながら、彼女の指先の動きを真似しながら茶化して、歯をむき出しにしながらヘラヘラと笑う。

『そもそもの話。今回の待ち合わせって『本の言語が何語か特定する』ことが目的だったじゃないですか。別に蛇子ちゃんの御友人が読めれば判明するって話ですし、別に『ゆずる』という話でもなかったでしょうに。で、あるならば本物である必要性など皆無では? だいたい高位魔族が初対面で力技でも欲しがる書物をおいそれと持つてくると思っただんですか? 『本物の在処は私しか知りません。これは私の身の安全と今後を平穩に過ごすための保険です』とでもいえば私が同人誌しか持って来なかったことに納得いただけますか?』

おまけとしてド正論とマシンガントークとしつぺ返し論法で蛇子ちゃんを殴りつける。

今の反撃で彼女の顔は更に気持ち悪いぐらいの笑顔へと変貌させる。

「おっ、ところで反論が無いぞ？」

これはレスバクソザコ高位魔族か？

……

……

…

「——ふむ。これがお前の “お気に入り” か……」

「……この小娘が……」

蛇子ちゃんと睨み合いながら、雑談という名の寸止めジャブを飛ばし合っている間。

やがて円卓の左方10時側の方角より一組の男女の声が一際はっきりと聞こえる。

特に男性の方から耳を疑ってしまうような美声。

もとい聞き覚えのある声だった為、なおさら必然的に視線がそちらへと向く。

この状況は “気が付けば” と表現するのがもつとも正しいだろう。

彼等はまるで影の中。

虚無の闇からぬるりと忽然と現れたかのように、その姿を顕現させていた。

男の方は、ウルフカットをオールバックにした銀髪の人物。

アニメで例えるなら『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』に登場する『オルガ・イツカ』に加齢と苦勞と渋さと険しさを加えたような顔をしている。

中世時代の海賊団の船長が纏うかのような闇から這い出たかのような漆黒のコートを一色に身に纏い、肩にはワインレッド色のスカーフを巻き付けていた。

やけに幅の広い襟は彼の頭部下半分を覆い隠している。

肉のこそげた頬は髑髏しやれこうべを彷彿させ、睨みつけるだけで人を殺せてしまいそうな鋭い眼光はレスバクソザコ蛇子ちゃんとは一味違った危険な雰囲気を感じ取ることが出来る。

対面した瞬間に、高貴な身分の人間とでも出会ったかのように自然と背筋が伸びていく。

その異質な佇まいは魔や闇の者を誘惑するかのようなカリスマ性が滲み出ている。

一方で女の方は……。

男の三步下がった所で態度の悪い……高慢ちきな性格を漂わせる風格で佇んでいた。

彼女は桃色の長い髪は地面スレスレまで生え伸び、襟足辺りから逆Vの字に裂けているようだ。

男と同じような黒をベースとした服というよりも……スリングショットの水着の上に逆バニーならぬ――

金太郎の前掛けの逆。

逆金太郎前掛けとして一枚布を纏っただけの服装だった。

外装としてカリスマ性溢れる男の方が、肩に撒いているのと同色であるワインレッド色のマントを羽織ることで、背後側面からは彼女の格好がわからないようになっていた。

まあ、正面から見ると痴女や娼婦と称してもさほど変わらない露出を誇っているのだが。

しかし腰へ西洋の剣、刃先が金色のロングソードを差していることから、男の娼婦＋護衛のような存在なのだろう。

……もしかしなくてもあの衣装は陽葵ちゃんのモノキニビキ二よりも露出度が高い。

その露出面は下着から乳輪の下半分が露出するほど。

あれは痴女だよ痴女。

間違はなく痴女。

そんな彼女の肌は陽葵ちゃんのようにこんがりと焼けていて、その

中東系の褐色肌の色は日焼けによるもの……というよりも、日焼けにムラが見られないことから地肌の可能性が高い。

「やあつと到着う？ 随分と遅かったわね♪」

「ああ、露払いに手間取った」

「あー……」

「何をジロジロと見ている」

呆気にとられ、漆黒の衣装を纏った男に釘付けになる私へ情婦っぽい桃色髪の痴女の方が高圧的な態度でにらみを利かせてくる。

しかしそんな売春婦な側近についてや、遅刻してきたことに対して謝罪の1つもないという憤りは何処へやら。

既に頭の中は『どうしよう、今日は色紙なんか持ってきてきてないよ』と思うことではいっぱいになってしまいう程に漆黒の男に対する知的好奇心に支配されていた。

「紹介するわね♪ 彼女が ”私の友達” お気に入り のゼラト・シーカーちゃん♪  
ゼラトちゃん、こちらが私の “親友” エドウィン・ブラックよ」

「あー……はい、初めましてブラックさん」  
「ああ」

彼がエドウィン・ブラック……。

席から立って一礼する私へ、彼は直立不動のまま一言だけ呟く。

そういえば情報屋の “マダム” の口からそんな名前を聞いたような気がする。

でもそんなことよりも私の好奇心が瞬く間に膨れ上がっていく。遅刻して来たのに謝罪の一つもない、最初の挨拶で会釈すらしてこない、礼儀知らずな異国要素が強めな部分を差し引いても、自制しなければならぬはずの欲が膨らむ。

聞きたい。

多分、このタイミングを逃したら一生聞くチャンス逃してしまうような気がする。

それに既に無礼を働かれているのだ。

1回ぐらい突拍子もないことを尋ねたってお互い様のはずだ。

よし、聞こう！

聞いちゃおう！

「初対面で失礼ですが、ブラックさん。声優をやっていたりしません？歌手として『ベリーメロンの歌』とか——若本規〇という別名とかで」

0.01%程度の可能性に賭けて質問として投げかける。

大丈夫、ソシヤゲのガチャぐらいの確率だ。

ワンチャンある。

「？」

……………。

……今、TRICKの『ポーン』というような効果音が響いた気がする。

不可解な眼差しを向けるエドウィン・ブラックさんに向けてへ心理学で核心を突かれて動揺しているか探りを入れるも、どうやら間違はなく『何を言っている？』と身に覚えのないような顔をしていた。

なんだ。

ただの声のそっくりさんだったか。残念。

顔がオルガ・イツカっぽくて、カリスマ溢れる闇から現れた悪役にはピッタリな渋い声。

まさかのワンダフルな組み合わせに心がときめいてしまった。

「わかもと、のり……？」

「」

「すみません。やっぱり今の話、忘れて貰っても良いですか」

私の突拍子もない話に目を白黒させる桃色髪の痴女と、笑いを必死にこらえるレスバクソザコ蛇子ちゃんは差し置いて、話をなかつたことにする。

「貴様の無駄な知識欲を埋めるために集まったわけではないだろう？ さつさと本題に移ろう」

「はい」

彼は円卓の正面、下座。

12時の方角へ座る。

彼の正論に今度は私がレスバクソザコ探索者となり、彼へ献上でもするように同人誌を差し出した。



Episode 146 『そこのお前！高位魔族1人に含まれる脅威は邪神1体分だぜ！』

エドウィン・ブラックさんとやらが私の同人誌を蛇子ちゃん経由で受け取った。

コミケのブースにやってきた客のように、同人誌を興味深そうな顔をしてペラペラと早読している。

その間することもない私は、彼の容姿や仕草へ注意深く〈目星〉をつけながら並行作業として感情の動き（心）に注視（理）して観察していた。

目の動きを見る分に、蛇子ちゃんの時と比べて所要所に視点が留まって読み解くことができているような素振りが見受けられる。

だが私が文字列を自由自在に並べ替えている以上、おおまかな内容は把握できたとしても正確な情報は入手できないだろう。

されど妨害があつたとしても彼は書物の単語の意味を捉え、時には立ち止まり頭の中でたちまち文章を組み替えて読める文章に組み替えているようにみえる。

彼が文字を追う目つきが時折興味深そうに眼を細めていることから、そう察することができた。

「……………」

彼がページを巻き戻しながらもじつくりと読みふけている間に、更に情報収集を加速させる。

ごく自然な手付きでリュックサックから鹿之助くんを盗撮した伊達メガネを取り出し、メガネクロスで噴き上げるふりをしながらエドウィン・ブラックさんと桃色髪の痴女の姿を〈写真術〉で捉える。

これで五車町に帰還したあとでも撮影した映像の現像。

からの肉眼では見落としてしまった彼の仕草や情報を再分析することができらう。

彼の容姿は蛇子ちゃんのようにサラッと一見する分には人間に見えてしまう。

でも瞳は蛇目ではないからナーガ族ではないし、頭に角が生えていないことから鬼族って訳でもない。

更に言えば興味の惹かれる美貌と美声。

一睨みされただけで下半身が恐怖で濡れる——ンン、ツ……知的好奇心がくすぐられたものの。

渋おじ系だとしても、鹿之助くんほど心が揺さぶられる感情の隆起が起こり得ないことから淫魔族である可能性も排除できるだろう。

もともと鹿之助くんは淫魔族ではない。

鹿之助くんは私と対極して輝かしいキラキラとして内面に女の子のような可憐さを持ち合わせた少年だが、淫魔族ではないのだ。

このことからエドウィン・ブラックさんは淫魔族ではない。

はい。Q・E・D。証明終了。

されど先ほど初見時に直感した際の背筋が凍るような異物感から人間ではないことはわかる。

元より私の肉眼では瘴気とやらを確認することはできないが、そもそも話。

蛇子ちゃんほどの高位魔族ナーガ種が、ただの人間と親友の間柄で群れているとは考えにくい。

蛇子ちゃんにとって “有益な情報を持つ” 私は例外かもしれないが、明らかに私が彼の登場を眺めていた時に蛇子ちゃんとの会話をしていた彼は蛇子ちゃんと対等——否。

あの蛇子ちゃんよりも格上のような立ち振る舞いだった。

ゆえに残された高位魔族の種類から考えられるのは3種類。

・鬼神乙女

・レイス族

・吸血鬼

の3種類だ。

鬼神乙女も乙女の二文字から候補から除外……したいところだが、私には彼が男に見えているだけであの闇の衣を剥いでみたら女であ

る可能性も考慮して、候補には加えたままにしておく。

鹿之助くんや藍野先輩の件もあるし。

男装系女性って可能性もある。

闇から出現したことや、やせ細った髑髏のようなやせ細った容姿は神出鬼没なレイス族——亡霊や幽霊らしさがあるものの、彼には完全に足が地に足のついた2本の足があった。

残りの候補とされる吸血鬼ならば口の中に牙でもありそうなものだが……。

口数が少ない寡黙な彼は口の中を見せるほどには喋らず、この種族も候補として残るだけの微妙な分類だ。

「……………」

「如何でしたでしょうか？ この言語、蛇子ちゃんの御友人であるブラックさんなら何か分かりましたか？」

ある程度の時間をおいた段階で興味深そうに熱中している彼へ声をかける。

私としては彼が私の同人誌の言語について理解していることを既に察知しているが、ここは敢えて気づいていないかのような素振りで尋ねてみる。

「ふむ……………」

彼は私の同人誌をゆつくりと閉じ円卓<sup>テーブル</sup>へ乗せると、右手を顎に当てて考えるような素振りをする。

それから隣の桃色髪の痴女へと片手で指示をし同人誌を回収させる。

彼女は私を書いた同人誌を返却してくるわけでもなく、石油王から指示を受けた側近のように自分の懐へと忍ばせてしまった。

「……………」

こちらからの質問に対して何も答えることはなく、大胆不敵な態度で足組を始めたかと思えば、あまつさえ両目を閉じてしまった。

「……」

「♪」

返事が無いため、右側——円卓の3時の方角へと座った蛇子ちゃんの方に視線を移す。

彼女の表情は相変わらずだ。

私がエドウィン・ブラツクの様子を観察している私を見つめていた時と同じような微笑を浮かべて、こちらを見つめ続けている。

前かがみ姿勢のため、衣服でより強調された豊満なバストが机上へ腰をかけていた。

これには無言のまま肩を竦めて顎で『蛇子そちちゃんらが何か話しかけて欲しい』とジェスチャーを送る。

にもかかわらず、彼女は彼女でペットを観察する飼い主のような笑みを浮かべたまま私から視線を離そうとしない。

『……………』

しばらくの間、沈黙が続く。

周囲から聞こえてくる外野の魔族達の談笑の声だけが円卓周囲を包んでいる。

「あの……」

沈黙に耐え切れず片目をつぶりながら後頭部を掻きつつ、もう一度彼へと声を掛ける。

「興味深い」

「へ？」

「実に興味深い書物だった」

「ああ、はい。それは良かったです。……………それで。何の言語か判明したのであれば、ぜひ教えて頂きたい所存でござりますが……………」

彼はまるで私の質問など最初から聞いていないかのような感想を聞かせてきた。

致し方ないので再び同じ質問を、先ほどよりも力強く強調した声で尋ねる。

同人誌の方も返却して欲しいところだが、返してくれる様子が皆無いため諦めの域に達していた。

「——この書物の原本は何処ある？」

「……………はい？」

……………なんだろう。

話に通じてない気がする。

私、いま確実に『言語が判明したなら教えて』って尋ねたよな……………？

その返事が原本の所在？

「あー……………すみません。言語と原本の所在、なんの関係が？」

「……………はあ」

「えっ？」

え？ えっ？ ため息つかれたんだが？

しかも会話に参加していない “桃色髪の痴女” から。

質問を質問で返されて、ため息をつきたいのはこっちの方なんだが？

会話の文脈が繋がってなくて困っているのもこっちなんだが？

それとも話の繋がらない会話になっているのは、互いのIQが20

離れていることによる弊害か？

私の方がIQを20落として話さなきゃダメなやつか？

いちからか？ いちからせつめいしないとだめか？

むほうちたいでも ヒトのカチカンと ブンカでは セイジャからモノをぬすんだら ドロボウってところからか？

「……………」

「♪」

助けを求めるのは癪だが、今回の仲介役である蛇子ちゃんへ再び視線を送る。

されど私の方をニタニタと笑ったままで彼女側の動きはない。

それどころか両手を組んでその上に顎を乗せて困惑する私を視姦してくるばかりだ。

使えねえなあ！

こつちのレスバクソザコ高位魔族は！

「……………貴様が書物の言語を知ったところで何かできるわけでもあるまい」

話が再び凍結したところで彼から『理解力の及ばない私のために』と。

百歩譲つての精神を滲みださせながら説明をされる。

「まあ……………そうかもしれないませんが……………」

え？ なんて？

なんで『私が悪い』みたいな流れになっているの？

またもや片目を瞑って後頭部を掻く。

「もう一度だけ聴いてやろう。原本は何処にある？」

彼は足を組んだまま横暴で高圧的な態度のままうつすらと目を開け、膝の上で指を組み、眉をひそめる。

この期に及んで情報を出し渋る私と視線を合わせてくる。

その目を見た瞬間、脳内で張り巡らされた私の強気は忽ち萎縮してしまった。

視線を合わせただけでも関わらず、グレート・オールド・ワン以上の神格と対峙したときのような嫌な汗がドツと流れていく。

「あー……中華連合国の船の上——」

「……………」

「と、言いたいところですが、言いたいところですが、あいにく原本は私にとってこの会合を穩便に済ませる保険ですので、どこにあるかなんて……言えないですね。一旦、お話は持ち帰らせて頂きます。まあ、ご希望ならご住所を教えて頂ければ後日ゆうパックで郵送しますよ（※本物を郵送するとは言っていない）」

「……………」

「分かりました。負けましたよ。負けました。着払いじゃなくて元払いにしておきますね。わはは。私ってやつさしー。出血大サービスです」

蛇子ちゃんの時のように、適当に誤魔化そうとした瞬間に彼の眼力が強まり逆らえない圧に圧倒される。

辛うじてできたさやかな抵抗は、軽口を叩きながら逃げの姿勢に移行することだけだった。

お話持ち帰り社会人ムーブ！

99%の確率で断る常套句！

前向きに検討してやるぜ！

「分かってない様だな……。ブラック様は 今すぐ、素直に吐けば命だけは助けてやろう」とおっしゃられている。あまり私達をお

ちよくるなよ人間の小娘」

ここで軽口に耐えかねた桃色髪の痴女が口を挟んできた。  
この女も眼力が凄まじい。

明らかに海の家で囲まれたときのような人間による眼力ではない。  
下手に数人ばかり人殺しに関与したことがある探索者の眼力すら  
も凌ぐ目力だ。

その姿は非常に人間そのものと酷似しているが、恐らく本質は魔族  
とかなのだらう。

外見から考察するに痴女の魔族——淫魔族とか？

それに『命だけは助けてやろう』ねえ……。

たぶん、本物の在処を正直に話せば本当に “命だけ” は助けて  
くれるのかもしれない。

でもその先の処遇は——

対魔忍世界だし、口封じなどで肉便器やら奴隷娼婦墮ちがなんとな  
しに予測できる。



」

私が高位魔族総動員の脅しに次の言葉——いつもの調子で誤魔化しのへ言いくるめ〱のために口を開き言葉を発する前に、斜め後ろの左右から何者の気配を察する。

一言で言ってしまうえば嫌な気配だった。

2020sの真夏の玄関扉を開いた途端に感じる、ジメジメとした生ぬるい空気が頬を撫でるような空気の感触。

完全に正面の高位魔族2体と痴女の魔族1体から目を離したくない、振り返るはずの首をもたげて正体を掴みにかかる。

私は視界の外から攻撃されることが苦手なのだ。

「……………」

「……………」

「……………」

首をもたげた先には殺気に満ち溢れた小豆色をした4つの瞳孔と深緑色の肌。

顔面の骨格がガビガビの岩みたいに尖っている醜悪で無骨なオーク顔。

額にはパイロットゴーグルのような水泳ゴーグルのようなものを巻き付けている。

くすんだ紫色の髪はドラクエに登場するスライムファングのように整えられ、おばあちゃんにでも買ってもらったのかマントが一体化したかのような土色の服を着ている。

それぞれの片手には私の所持している手斧など比べ物にもならない、総丈は5<sup>150センチ</sup>フィートの銀色に輝く巨大な斧が握られていた。

2体とも銀の巨斧を握りこぶしの筋肉が浮き立つほどに力強く握

りしめている。

まるで私の回答次第で、この転生して得た命を薙ぎ払ってやるだけでも言いたげに。

「あら。どうも」

「……」

「……」

私の愛想笑いを浮かべた挨拶に2体は反応しない。

「ご苦労さん、ですね。突っ立ってないで掛けてはいかがでしょうか？」

円卓の席は余ってますよ」

しかしここでビビッて舐められては、今後いっさい立つ瀬が無くなることだろう。

だがら不敵な笑みを浮かべたまま新しい追加の訪問客へ顎で椅子に腰をかけるように促す。

「それとも君達は私の足。拉致要員ハイエースでしょうか？」

「ウフフフフフフフ」

なかなか動こうともしない来客に質問を投げかけている間、次に動いたのは蛇子ちゃんだった。

私どころかオークすらも視線を蛇子ちゃんへ注視させる。

視線の先で彼女はドツボにハマる面白いジョークでも聞いたように両目を瞑って笑い始める。

先ほどのニタニタした笑みはどこへやら、身体を引きつらせながら笑っていた。

心底今の私の窮地に陥った状況が面白可笑しいらしい。

よく分からないが、きつと高位魔族ならではのギャグセンスだったのだろう。

「フッフッフ♪ アーッハッハッハッハッ♪ ご、ごめんなさい  
ねえ♪ あ、あ、あまりにもおかしくって♪」

そのうち腹を抱えてゲラゲラと笑い始める。

エドウィン・ブラックの隣で立ちんぼの桃色髪の痴女が、高級レス  
トランで場にふさわしくない客を見るかのような疎ましそうな目を  
向けているが、蛇子ちゃんの大笑いには止まる様子を見せない。

エドウィン・ブラックの方は蛇子ちゃんの方に興味がないのか、一  
瞥すらしようとしない。

今のところ私の中での高位魔族ランキングは

『エドウィン・ブラック〕スネークレディ蛇子ちゃん〕桃色髪の痴女(名称不詳)』

と、なっている。

実際の力量など計り知れないが。

「クッフッフ♪フッフ♪ ねえエドウィン？ ゼラトちゃんってば、面  
白い子でしょう？」

「……………」

「ただの虚勢…………？せ我慢だろう」

エドウィン・ブラックは私を見つめたまま微動だにしない。

代わりに桃色髪の痴女の方が代弁する。

ああ、私の振る舞いは？せ我慢に見えているのか。

そのように見られることはかなり侮辱的だが、軽視してくれること  
はとてもありがたい。

「ふう…………♪ いまはエドウィンに話しかけているの♪ ゆるゆるの  
お口を開くのはベッドの上だけにしてもらえるかしら？」  
「なんだとツ…………!？」

痴女の言葉に薄ら笑いを浮かべる私を他所に、高位魔族同士で一触即発な気配が漂い始める。

勝手に仲違いを始めて、勝手に自滅してくれることは理想だが——しかし蛇子ちゃんの方はからかっているような振る舞いで、こちらの思惑通りな同士討ちというわけにはいかなさそうである。

ひとまず、持参したショットグラスに麦茶を注いでグラスを口元へ運びエドウィン・ブラックへと視線を合わせて様子を伺う。

「それで？　ゼラトちゃんは怎なの？　この脅しで本物の在処は話すつもりになったかしら♪」

ここでやつと友人同士の仲介役を担うつもりになったのか、蛇子ちゃんもケラケラと笑いながら頬杖をつく。

意地悪っぽい顔を浮かべて、答えが分かり切っているかのような質問を投げつけてくる。

「ええと。何度でも説明しますが……事前に蛇子ちゃんにも説明させて頂いたとおり、あれは保険なんですつてば。ここで、私が、仮に。仮に馬鹿正直に話したとしましょう。命だけは助けて貰えて、その直後の人生も真つ当に生きながらえる可能性はどこにあるんですか？　……第一、答えるわけじゃないじゃないですか。本の在処をどうしても知りたいあなた方が、唯一の情報源である私を殺せるわけがないですから」

「ええ♪　その通りね♪　でも——」

「殺さずとも喋りたくなるようにはできない」

エドウィン・ブラックの殺気が膨れ上がる。

覇氣に加え、凍てつくような言葉使いに周囲の雑音が一瞬にして途絶える。

彼を縁取る輪郭が不明確なものになる。

ジワジワと服に染み出していく血液のようににじみとなりて、黒色の輪郭の仕切り線が空間へと切り替わっていく。

深淵とも呼べる空間からは私がこれまでに出会ったこともない神話生物の触肢のような物体がちらつく。

身体の全てがきわめて柔軟で、手足のほとんどはクラゲの足のよう絡むこともなく不規則な動きで震え、エドウィン・ブラックの命令さえあれば『おまえのことなど容易に貪り殺せるぞ』と圧を掛けながら――

ここぞとばかりの迫真の脅し。

私が本当にただの小娘、*青空 日葵*。であれば股ぐらから黄金水を無意識に撒き散らしていたに違いない。

蛇子ちゃんの瘴気を捉えられずとも、彼の瘴気は凡人ですら理解でききる。

できてしまう。

それほどの妖気。

先ほどまでバーで飲み会を開いていた魔族が一同に立ち上がり円卓から離れ――いいや。

彼等は避難するわけでもなく、中央にいる――私を見ている。

エドウィン・ブラックを縁取っている空間が分裂して公衆電話の出入り口大のポータルのようなものを形成する。

その中から物々しい近接武器を構えたオークや、東京キングダムでは見たことのない魔獣が船底に開いた穴から流れ込む海水のようにワラワラと姿を現す。

この場にいるあらゆる魔族が害意を突きつけてくる。

私を挟むように左右に立っていた色黒オークがそれぞれ肩を掴み、肩の関節を外すギリギリ手前の力を加えてくる。

控えめに言って絶体絶命のピンチかもしれないが、袋叩きに遭うことなど探索者時代の経験から想定内だ。

大丈夫。

割とあること。

まだ焦る段階じゃない。

探索者ならよくあること。

カルティストの拠点に赴いたら、カルティストと結託している神話生物にも囲まれるとか。

探索者ならよくあること。

まだ焦る段階じゃない。

割とあること。

大丈夫。

「ハハア。何を人間の小娘一匹にマジになっているんですか？ 高位魔族ならもつと精神的な余裕を持たれてはいかがですか？」

「……………」

「——ですが、余程。あなた方にとって、あの本はプライドを捨て去っても手に入りたいものようですね」

「蛇子ちゃんと桃色髪の痴女の痴話喧嘩で得られた余裕を使って、あの〈追跡〉してきたオークを血祭りにした時の笑みを浮かべる。」

鷲掴みにされている両肩がミシミシと家鳴りのような音とプレス機に指を挟んだかのような激痛が同時に走るが、表情は崩さずにエドウィン・ブラックと対峙する。

大丈夫だ。足の骨を折った時や頭皮を抉られたときの痛みに加えれば大したことはない。

ついでに落ち着いて考えてでもみる。

彼等は弱いからこそ群れている。

これまでに対峙してきた 本物の邪神、神格の振る舞いを思い出せ。

彼等は常に唯一無二の存在。

奉仕種族は彼等に使っているだけであり、神格クラスはその他の種族を意にも留めないものだ。

こちらは準備段階から対神格用装備で臨んでいる。

情報不足という致命的な欠点はいまだ健在しているが、これはもう闘争の中で情報収集をしていくほかないだろう。

上記の点にさえ目を瞑ればも恐れることなどないのだ。

彼等は私に正気を失わさせるほどのパニック衝動すら引き起こさせぬ人外なのだ。

これまでと比較してしまえば脅威としては低い部類だろう。

わたしは逃亡宣言・後日郵送・誤魔化し、と。

3つの警告——譲歩して直接的な対決から逃れる努力はした。

それでもなお追撃を加えて今の道を選択したのは彼等だ。

私に非はない。

おまけに五車学園の一般人たちはこの場に存在しないのだ。

情報屋の口止めも済ませた。

護るものが何一つない上に、振る舞いを見られてしまう恐れもない。

これが何を意味するか。

私は自由にできる。

そっちがその気なら私はいつでも、くさぶき城でのプロポーズ・ムードぶち壊し案件の鬱憤清算も含めて好きに暴れられることを思い出させてやろう。

Episode 148 『最終勧告』

「では、その気になってからまた来よう」

「ブラック様が慈悲を与えてくださったというのに……人間とは、実に……愚かだな」

席を立ち、ギラギラとした性欲に塗れたかのような目の色をした群衆の中へフェードアウトするエドウィン・ブラックと桃色髪の痴女。

「♪」

彼等が群衆の中に消えたのを見送って、私の表情をジトジトと確認してから席を立ち上がる蛇子ちゃん。

「♪」

「……蛇子ちゃんには行かないのですか？」

「勇ましいゼラトシーカーちゃんの姿は、ここで見納めかもしれないから目に焼き付けとこうと思っただけ♪ 明日には忘れていけるだろうけど♪」

「ハッ、お望みならまた一番最初に泣かして忘れられない思い出にして差し上げましょうか？」

「ウフフ♪ 焦らないでゼラトちゃん♪ また遊び相手になっただけだろうか、凌ぎ切れたら考えてあげる♪」

蛇子ちゃんも逃げるように群衆の中に消えていく。

さて――

「つと。そうだ。素人質問で恐縮ですがあなた方はオーク？なので  
しょうか？」

「……………」



「……………」

「私の知っているオークという種族よりも、かなりお肌が濃いガングロたまごちゃんですけども」

「……………」

「……………」

「あと、その額のパイロット？メカニック？ゴーグルですか？ なかなかイカしてますね。私も欲しいのですがどちらで購入されました？ 普通に通販プライムでポチりたい」

「……………」

「……………」

両肩を鷲掴みにされ前腕を除いた腕どころか振り向くこともままならないため、夜景を見上げるようにして深緑色の巨体のオーク達と視線を合わせる。

私の知るオークとは、目の前のオークよりも建物からぞろぞろと姿を現したような全体的に丸みを帯びていて肌の色も宇治抹茶色をしていたと思うのだが……生憎にもオークの種類は知らない。

だから今回を期に自己紹介でもしてもらおうと思ったのだが——  
……返事はなかった。

無視されて不機嫌そうな顔を作り、ジャケットの中で腕組みをするフリをする。

さらに暴徒から示談金として譲ってもらった2挺〈拳銃〉をホルスターからゆつくりと抜く。

「まあいいです。一度しか言わないので耳をよくかつ穿って聞いてくださいいね。今、私は最高潮に機嫌が悪れません。なぜなら無視された挙句。トイレに行つて手も洗つてねえような輩に両肩を掴まれているからです。今なら見逃して差し上げられます。とつとつ、森へお帰りなさい」

ここでやつとまともな反応として私の言葉に両肩を掴むガングロ

オークちゃんどもはゲラゲラと下品な声で笑い始めた。

その笑い声に釣られて共鳴する様に他の群衆たちも爆笑し始める。十分だ。彼等にも3つの警告を済ませた。

1. 敵意のある笑顔
2. 不用心にも懐へ腕を入れさせた。
3. 最終勧告

殺していい。

——バンツ！

ジャケットの下から〈拳銃〉を完璧に引き抜き、  
“未照準”の

“二丁拳銃”、“ゼロ距離”での〈射撃〉として肩を掴んでいる右オークの心臓へと1発ぶち込む。

マズルフラッシュが私の顔を明るく照らす。

1発目を右オークのだるんだるんに伸びきった腹部にブチ当てた時点で、左の肩を掴むオークが怯みながらもその巨軀を活かし私を引きずり倒そうと力任せに引っ張る。

——バンツ！

だがこちららも椅子ごと引き倒されながら左側のオークの心臓に目掛けて発砲する。

枝が突き刺さった風船のように、銃弾は柔い肌と破裂させて的確に心臓めざして皮膚に潜り込む。

鉛玉は脈打つ肉の膜を破壊するだけでは飽き足らず、呼吸器をつかさどる袋も貫通。

粘液入りの水風船が破裂したように入り口から赤紫色のドロドロの液体を噴出させる。

肩を掴む力が弱まり、2体は失神でもしたかのように不自然な姿勢

で仰向きに転がる。

「だから言ったでしょうに」

引き倒された勢いで後転をして立ち上がり――

――バンツ！ バンツ！

心臓を狙った程度の一撃で意識を失い、倒れ込んだ2体のガンダロオークへすかさず更に1発ずつ、『新クトウルフ神話TRPG』116頁「ゼロ耐久値の効果」として気絶し無抵抗な彼等を確殺する試みをダブルタップとして顎下から脳に目掛け弾丸を追加する。

私の肩を掴んでいたオーク達が二度と起き上がることはなかった。弾丸が処女膜をぶち破る亀頭のようにぶち抜けたところで、奴等の四肢が電気ショックでも受けたかのように大きく跳ねたのが最後の生命活動だった。

代わりに彼等の生命活動を維持していた体液が穴から吹きこぼれる。

こぼれちゃったプルシユカのように。

足元に転がった肉塊を足蹴にしながら、陽葵ちゃんから貰ったジャケットの襟を整える。

両手の拳銃を素早くジャケット内のホルスターへ片付け、左手で〈改造した釘打ち機〉へと持ち替える。

一方で右手はリュックサックに突っ込み背負い直す。

数発の銃撃で目の前のオークが大した抵抗も成す術もなく倒れ込んだことで、周囲で私を嘲笑う声は水を打ったように静まり返っていた。

この場にいる群衆の誰もかもが目の前で起きた出来事を信じられないとでも言いたげな顔をしている。

硝煙の臭いに刺激された魔獣共が警戒した犬のような唸り声を上げ始める。

だからここで元々の低声よりもトーンを2、3オクターブ下げて周囲をへ威圧する。

まえさき市で鹿之助くんに説明した時のように、言葉を区切ってわかりやすい言葉を用いて。

「——今なら殺さないでやってもいい。見逃せる。だが一線を越えたらもう後戻りはできない。そちらは私を痛めつけるだけの簡単な仕事、こちらは簡単な殲滅活動。依頼を続けるか、それとも逃げ帰るか。好きな方を選ばせてやる」

私の周囲へ赤い霧が漂いつつある。

だからこそ、最終警告を入れてやる。

彼等の命をへ値切り、考え改めさせる。

不要で無駄な命のやり取りをせずに済むように。

「ど、どうする?」

「ど、どうするって言ってもよ……」

「金ももらっちゃまったし、やるしかねえだろ?」

「ここで逃げ帰ったら俺達が殺される」

「でもアイツの目つき、普通じゃねえよ」

命をへ値切り、まごつく一部の魔族達。

このことから、目の群衆が軍隊のように練度の高い特別な存在には到底見えなかった。

金という単語や練度から言えば雇われたオークや魔族の集団なのだろう。

まごついている間に、360°の狙撃地点へ不審な人影が現れていないか一通りのへ目星をつけるが、まだ人員は配置されていないようだ。

「ビ、ビビンじゃねえ! 依頼の話じゃあ、相手は人間の小娘だぞ! 銃

を持つてるからなんだ！あの格好を見ろ！奴は対魔忍じゃねえ！どっからどう見ても銃で武装しているだけの非力な人間の小娘だ!!!今のハイオークチーフを殺したのもただの偶然！ビギナーズラックツ！数で囲んでたたんじまえっ！」

足並み揃わない傭兵部隊の後方、群衆の中で待機している魔族が叫ぶ。

なるほど、なるほど。

足元で転がっている gangs ロオークちゃんは『ハイオークチーフ』というオークの種類なのか。

勉強になった。

それはそれとして。

ううん……なんだか、あの魔族の集団が気の毒に見えてきた。

きっとただの金で雇われているだけの傭兵なのだろう。

アーマード・コアで見たことのある展開だ。

『騙して悪いが仕事なんでは……』と核心的な情報は何も伝えられず、ただ集められただけの傭兵一団。

油断をして人間の小娘だと侮ってくれることに越したことはないが……。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!!!!」

殺したハイオークチーフの亡骸から、戦闘ではない証拠となる示談金として破損していないゴーグルを拾い上げる。

もう一体のハイオークチーフの亡骸と、和平交渉となる示談金を支払ってもらうか話しかけている間にグラランド・セフト・オート5でブーツの裏にこびりついた脳ミソに話しかけるトレバーと類似こちらが隙を見せたと思ったのか。

あの場の誰かの煽動で近接戦を得意としてきそうなオークが斧を背負って威勢よく飛び掛かって来る。

オーク共の雄たけびと濁流によってこちら共鳴してしまう。

これまでに我慢して堪えていた暴力と破壊の噴流に抑えが利かなくなる。

「哀れだな……お互いに」

静かに呟いて〈改造した釘打ち機〉の銃口を先頭のオークの瞳へ突き付けた。

Episode 149 『お客様アー!!! お客様の中に  
対魔忍はいらっしやられませんか!!?』

次に一呼吸を置いたとき。

そこは鋼人屋敷の死体部屋のように、幾重にも亡骸が折り重なり住宅材料と化した屍山しさんげつが血河の牙城の中心で――

私はバーの備品である背もたれ付きの椅子に寄りかかって寛いでいるところだった。

私とってはつい先ほどの出来事のように感じられたオーク族やら魔獣その他魔族の人海戦術の波を停止させることができたらしい。

「……まだ書物の在処を話すつもりはないのですが、続けますか？」  
「ぐっ……」

屍山の接合部。

淫魔族から剥いだ表皮カーテンを捲り上げて麻醉弾を打ち込もうとしている魔族に話しかける。

どうやら先の私は敵の狙撃から身を隠せる遮蔽物が無い以上、塹壕製作として先鋒として突っ込んできた魔獣やオークの死体を肉壁の砦の材料として構築したようだ。

五車町に来て趣味活動として身体になじませていたDIY。

そして鋼人屋敷で陽葵ちゃんと共に潜った屍の洞窟の存在が、組み立てる際の参考経験として役立った。

この砦の材料として活用させてもらっている死骸は、いずれも眼球を通じて脳が物理的に破壊されている。

これらはいずれも『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』69頁 『未照準』、68頁 『ゼロ距離』での射撃で殺害した釘弾によるものだった。

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』6

9頁 “未照準” は私の命中率を著しく低下させてしまうものだが、“ゼロ距離” は私が意図しないところで命中率の上昇をさせてしまうため〈改造した釘打ち機〉の真価や貫通状態を未然に防いでいる。

要するに、釘弾を相手の体内に食い込み固定する役割・魔族達の死骸から必要以上に血液などの体液を滴らせないようにしてくれる……ある種の止血として機能しているということだ。

「ふう……」

また東京キングダム<sup>TM</sup>の戦闘のさなかである気付きも得られた。

これはこれまでの戦闘経験と彼等の身体構造で得られた確信。

全ての出来事の点と点が繋がった瞬間。

経験による成長。

『対魔忍世界』と『クトウルフ神話TRPG世界』の相違。

クトウルフ神話TRPG世界ではありえない現象。

『負傷について』

流石の私達<sup>探索者</sup>ともいえど、クトウルフ神話TRPG世界では頭や心臓を丸ごと吹き飛ばされたり、魔術で消し炭にされたり、ウオシユレットで肛門から内臓をズタズタに引き裂かれたり、溺死させられた場合には生命活動を停止させてしまう。

だからと言って多少の負傷——頭皮が頭蓋骨から剥離したり、斧で頭蓋をカチ破られて脳が欠けたり、心臓に銃弾をぶち込まれたり、四肢を振じられたり、時には脳みそだけ切り取られて缶詰に詰められる……宇宙空間に放り投げられることで即死してしまう——というようなことは “なかった。”

状況に応じて仲間が外傷に〈応急手当〉や〈医学〉を施してくれたのであれば、一命を取り留めることが殆どだったし……。

重傷を引き起こさない限りは、ほぼ “かすり傷” だ。



それこそ首の皮一枚で医療機関に担ぎ込まれば、最短で1週間。最長でも3カ月前後の入院で、神話的存在の猛毒に犯されることや魔術的な異常状態、心の傷を除けば、あらゆる肉体的負傷は完治させられる。

たまに不運な奴は、ロボトミー手術の失敗で「知能INT」の低下や四肢の切断に至ることもあったが、だからと言って日常生活に影響を及ぼすことは少なかった。

ところがどっこい。

どうやらこの対魔忍世界の住人達は、眼球を通した先にある脳みそや心臓などの身体を維持する機能を一部でも損傷・あるいは破壊されてしまうと死んでしまうらしい。

それらは人間や動物と身体構造が似通っている魔族達にも言えるように……。

(……………脆いな。なんて脆すぎる肉体構造の住人なのだろう)

魔族の中には対魔忍世界らしい男性器によく似た触手を背中から生やしたオークやら、心寧ちゃんのようにサイボーグ手術、時には肉体改造を行っている奴もいたが、この脆さならば納得以外の何者でもない。

極めて妥当な選択だ。

きつと、そんな身体改造でも施さねば長生きできないのだろう。

この過酷な世界では。

もしかすると私が考えているよりも対魔忍達も脆いのかもしれない。

こんな簡単に死んでしまうような、か弱い肉体で殺し合って日常生活を送っていたなんて私の常識では考えられない。

このままでは一般人であり対魔忍や魔族よりも、もっと脆い——鹿之助くんに対する感情や関係が過保護気味になってしまいかもしれない。

(いや。この場合は『鹿之助くんにだけ』に限った話だけではない、か………)

陽葵ちゃんや蛇子ちゃん、心寧ちゃん、紫先生にだって目が離せなくなってしまうそうだ。

——とにかく。

まえさき市でカルティストの脳みそをかき混ぜただけで死んでしまった理由も、今なら根拠を得て納得できる。

戦術として『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』67頁 “一部が隠れていた場合” にあるように、部位狙い——で、五車学園にて生物学の授業で習った重要な臓器を狙った攻撃はこの世界の住人である即死に至らせる効力を持ち、驚くほど効果的だった。

たった1本の釘で1人の魔族を屠れるのだから。

それに私を取り囲んだとしても12秒に攻撃できる人数には上限があったし。

よって。

一騎当千の力と独壇場を得られていた。

転生直後では成れないと思っていたEpisode3映画の主人公『ジョン・ウィック』にでもなった気分だ。

少なくとも私は、まえさき市で大喰らいの泥濘に横隔膜を破られ、テロリストの弾丸を胴体へ一身に受け止めても死ななかつたこと。

足を折ってしまおうが、背中に穴が開こうが、病院でいつも通りの期間で完治したことから身体の作りとしては『新クトウルフ神話TRPG』『クトウルフ神話TRPG』側の身体であると考えてよい。

「……」

攻撃が止んでいる間は死肉の砦の中で、椅子に座りながら水分補給がてらこれまでの戦況を振り返る。

今回は東京キングダムの情報収集から出遅れている以上、現場での情報収集は欠かせなかったし。

まず乱戦の最中、インキュバスとかいう魔族女性を誑かす系の魔族らしいに《魅了》の魔術を仕掛けられたようなのだが……いずれの容姿も私の好みでなかった以上、術中・策略に嵌められることはなかった。

「だいたい対魔忍世界におけるインキュバスというのは、男の子なのに超かわいい存在鹿之助くんみたいなタイプ」が存在しないっぽい。

ことごとく目前に現れるインキュバスは、イケメンやらチャラ男やら巨根やら、筋肉ムキムキマッチョマンの変態しかいないことが残念でしかない。

「違うんだよなあ……」。

「それは私の癖じゃないんだよなあ……」。

鹿之助くんみたいなのが居たら即堕ちだったのに。

間違はなく男の娘淫魔族目掛けて、ズキユンばきゅん走り出してる。

「てか筋肉ぐらい誰でも肉体労働や筋トレで時間をかければムキムキになれるんだよ。」

「肉体美を意識しながら意気揚々と出てきた筋肉ダルマへ、無意識の「はあ？」と冷徹してしまう日が来ようとは……」。

「だいたい、こつちが趣旨を変えて1人ずつお見合い会場風に出迎えても《魅了》できないとはどういうこと？」

「これまでの淫魔族は、高位魔族じゃないから仕方ない感じ？」

「まあ失格者を1人ずつ釘弾で殺したのは、タワーディフェンス系恋」

愛ゲームっぽくて面白かった。

(まっ、牙城の隙間を埋められたのは、彼等の皮膚のおかげだし……。特殊示談交渉として内臓を開いて〈医学〉的に合法人体解剖ができたのは良かったな)

インキュバスを蹴散らし、魔獣やオーク部隊を壊滅させて死骸を有効活用していた頃合いでトロールやらオーガやら鬼やらの傭兵団が突っ込んできたがこれも大したことなく……。

申し訳ないが……拍子抜けしてしまった。

あの程度の実力ならば夢幻世界の鄙陋な四つ腕／陸猿顔アワビの巨人の方が悍ましく恐ろしい。

十中八九。驚異的であつた神話生物と、凶体だけで拍子抜けなオーガやトロールの違いは恐怖と知性の有無だろう。

夢幻世界の鄙陋な四つ腕／陸猿顔アワビの巨人は神を崇め奉るために様々な口にするのも憚られる儀式を用いるほどの知能を持ち合わせていた。

一方で拍子抜けだつたオーガやトロールには、目の前の目標をがむしやりに攻撃するぐらいの知性しか感じられなかった。

だから事前準備してきた電球タイプの閃光玉で知能の低い連中の視界を纏めて眩ませて、眩んだ眼球や顎下の骨のない柔らかい部分に鉛玉の方を「ゼロ距離」から「貫通」込みで叩き込むだけ。

転がった死骸は装甲用の肉盾として活用しながら自分の陣地に引き込む。

広範囲で活動できるように手斧で丸太を切るように、頭部と四肢切断で分割して運搬。

狙撃から身を護る土嚢の代用品として一時的な陣地形成の材料に変換。

血液や内臓は目潰しや転倒用のブービートラップとして転用。

骨なども殺傷力のあるトラップに使えた。

頭は敵陣に〈投擲〉して挑発や〈威圧〉、魔術師の呪文詠唱キャンセ

ルに使う。

私に本の在処を吐かせる役目を果たせなかったウンコ製造機も、今では立派な障害物<sup>ハザード</sup>として生まれ変わり、私の役に立ててさぞかし天国で喜んでいるに違いない。

(……………知識ほど勝るものはないな)

ぬくぬくと敵地の中心で防衛陣を築き上げる私へ催涙ガス弾のよ  
うな桃色の煙が吹き出る円筒を投げ込まれたこともあったが…………。

ああいうのは焦<sup>ヒビ</sup>った方の負け。

吸い込む前に当然の推論で配置されている三角コーンを虫網のよ  
うに使って無力化。

時には死体のアナルに突き刺して完封。

2019―2021に発生した香港でのデモ活動家や、消防隊が同  
僚のアナルヘアコンプレッサーを差し込んだ事件から学んだこと  
が役に立った。

今やそのガスも防衛陣地内に配備してトラップの一環として機能  
している。

クジラの死骸がガス爆発を引き起こすように、彼等の死骸を使って  
起爆するように細工した。

あの桃色のガスは吸い込むとお盛んになるようだ。

戦場で無防備におっぱじめ、騎乗位や正常位は頭を切り落とすや  
すくてとても助かった。

新しい素材であらたなブルービートラップを強化する。

屍山血河の防壁を構築する。

相手側は牙城を突破して私に本の在処を吐きたくなるようにさせ  
る。

私はそんな彼等を材料にDIYをする。

ああ。楽しい。

とても楽しかった。

停戦状態が開放されたとき、再び互いの総戦力で潰し合う。

敵も決着を着けて来ないということは、双方にとって楽しい戦場になっっているに違いない。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

鼻歌を歌い、斧にこびりついた人油を拭い取りながら心情を振り返る。

そういえば。

頭を空っぽにしながら殺し合える楽しい戦闘は久方ぶりであった。クトウルフ神話TRPG世界線では殺害することも躊躇ってしまような形相や知恵、凶体をした存在ばかりだったのだ。

今日のようにハツラツと純粹に己の技量を高める殺し合いを楽しめることなんて夢の中での模擬戦でもない限りなかった。

恐怖におびえることもなく、仲間から咎められることもなく、やりたいようにできる。

この状況が愛おしい。

テロリストの一件も含めて——ずっと他者の視線のせいで私と相手側が白熱し血沸き肉躍るような戦い方が出来ていない。

まえさき市のカルティストどもは鹿之助くんの手前、彼を早期に救出することを重きに置いた屠殺行為だったし……。

五車学園での期末試験では、あくまでも模擬戦だったもの……。

「鹿之助くんの憧れ」を塗り替えるために神村を張り倒すことが目的でもあったから、今回とは戦闘の方向性<sup>ベクトル</sup>が違った。

ありがたいことに場には警告を無視した殺している種族と戦闘狂な魔族しか存在していない。

臆病で賢い連中は、脅した時点や第一波、オーガ種の頭が投げ込まれたあたりで離脱している。

それが故郷へ帰ったのか、それとも私を罠に嵌めるための別動隊なのか判別がつかないが、いまはさほど重要じゃない。

彼等にとつては悪い知らせかもしれないが〈改造した釘打ち機〉の残弾もまだまだあるし、少なくとも金で雇われた傭兵団を殲滅する分だけの釘弾は充分に残されているし、なんだつたらきつと余るだろう。

彼等が新しい死体を築き上げる度に、私は死体から魔族の身体構造についての追加情報を得られる。

死線を潜り抜けるたびに彼等の技術や魔術を学ぶことができる。

経験のチャンスを得られる。

ただ一つ気にすることと言えば――

「蛇子ちゃんと、エドウィン・ブラックと桃色髪の痴女……………」

指折り数えしながらも3体の高位魔族の顔を思い浮かべる。

私がこれまでの戦闘で、まだ手の内を彼等に探られないよう探索者の武装として情報を制限して戦っているように。

彼等も高位魔族としての技や手の内を明かしていない。

蛇子ちゃんにだけは “触れられちゃいけない” ことはこれまでの経験から把握してはいるが……………。

屍城から釘弾を回収できるとしても、高位魔族を相手にする場合。〈改造した釘打ち機〉の残釘弾では足りない可能性が出てきていた。

（ふーむ…………。オークが持っている〈ショットガン〉は『水平 “2連式” 散弾銃』だから欲しいし、示談交渉の時間かな？）

屍に作った覗き穴から逃げ去った高位魔族達を探すが見当たらない。

そろそろ顔を見せても良い頃合いだろう。

彼等が登場したら今のようには行かないかもしれない。

高位魔族達の代理として、建物の窓からライフル銃を構えている人

間のように見える軍帽<sup>ベレー帽</sup>を被った女魔族の姿が確認した狙撃ポイントから見えた。

これだけ傭兵団を蹴散らしているのにも拘らず、狙撃部隊は動揺もせずに待機していることから、あつちは金で雇われた傭兵……ではなく、ブラツクか蛇子ちゃん辺りの私兵なのかもしれない。

やはり狙撃部隊を狙撃し返すために長距離射撃が可能なヘライフル……もといスラッグ弾を撃ち出せるヘショットガンが必要になってくる。

私がこれまでに城の材料にしてきた傭兵達はいずれも近接戦を得意とする魔族や魔術師の手先であり、銃を所持していなかった。

だが……そんな奴等が大半を占めていたからこそ、防陣の素材にはうってつけだったわけだが。

(よし、乱戦でも始めよう。乱戦中の相手を正確に狙撃する芸当には技術力が必要になるし、下手に距離を取って戦うよりも近接戦の方が安全で私は銃を手に入れられる。あわよくば同士討ちで敵の頭数を減らせる)

思い立ったら吉日のノリで構築した砦からオークの死体を2体ひっぺりはがし、身を護る前後装甲の盾として携える。

脂肪と筋肉質で覆われた彼等の肉体は人間よりも頑丈で、丈夫で凶体も大きい分『クトウルフ ダークエイジ』48頁、扱いは43頁に記載されていたヘラージシールドのように転用しやすかった。

「……………せつかください……………デコレーションとか? ……おっほ! ギヒヒヒヒッ! デコる死語:デコレーションの略とか乙女っぽくていいじゃん! まさに現代JKって感じイ?!」

湧き上がるハイテンションに身を任せながら、適当に屍の眼球から釘抜き肉盾用のハイオークチーフの眼球に満遍なく突き立てていく。やがて彼の眼球がゴルフボールの凹凸面のように釘の底面で覆わ



れる。

鼻を削ぎ落とし、歯をへし折り、顎の骨を砕き、血反吐を顔じゅうの穴穴から滴らせる――

映画『スクリーム』のゴーストフェイスのような顔を形成させる。他のオーク種が身に纏っていた鎧を剥ぎ取って肉盾に縛り付けて耐久値を強化する。

「おお、こわいこわい」

ここぞとばかりに乙女らしい行為であるデコレーションを施した肉盾を構える。

目標は正面のビルの一角で縮こまって休憩をしている魔族。

これまでに私が休憩している時に強襲をたくさん仕掛けてきたのだ。

強襲を仕掛けられても、サプライズに喜んですぐに戦闘に応じてくれる筈だ！

恐怖が歩いてやってくる。

ヤア！ヤア！ヤア！

——ダアンツ！　ダアン！　ダアンツ!!!

牙城からのっそりと現れた私に激しい銃撃の豪雨が浴びせられる。痛めつけるだけの相手に対して鉛による致死性の攻撃の連続。

これは、もっと本気で楽しみたいということだ！  
放たれた散弾が肉盾に食い込む。

デコった鎧が銃弾をはじく。

鯉のぼりのように自由にたなびく腕や足、四肢を引き千切る。

引きずられる足の皮が地面に擦られて、きしめんのように垂れる。

胴体がレンジで過剰加熱した魚のように身がポンツと音を立てて綿を飛び散らせて破裂させる。

私が一步前へ踏み出すたびに零れ落ちた内臓が踏みつぶされてグニヤリ、プチリと気泡緩衝材のような音を立てる。

プチリという破裂音と共に肉盾が食ってたドロドロの内容物を吐き出す。

私の靴底が黒く染まる。

されど私に一切の負傷ダメージはない。  
与えられない。  
与えられることはない。  
肉盾がある以上。

——ザッ。ブチッ。  
——ザッ。ビチッ。  
——ザッ。グニユ。  
——ザッ。ベチャッ。  
——ザッ。バキッ。  
——ザッ。バビユッ。  
——ザッ。ミチャッ。

ゆえに余裕を誇張するために大群の軍靴の足音のように一定のリズムを刻んで前進を続ける。

「うわあああああああつ!!!」

「こつちにくるなああああああッ!!!」

「ひいひいひいっ！キモい！キモい！キモい！キモい！キモいキモいひいひいっ!!!」

「ブラックの野郎騙しやがったな！こいつはア！ただの人間の小娘じゃねえ！こいつはただの人間の小娘なんかじゃ——」

魔族達のゴスペルソングが、足を一步踏み出し軍靴を響かせるごとに、強く、大きく、歓声が、感情の連鎖が、増す。

まるでカルティストが信じ崇め奉っていたはずの邪神に、ぐちゃぐちゃのハンバーグになるまで捏ねられる光景と重なる。

脳裏でチカチカと断片的にフラッシュバックを引き起こして、邪神招来LIVE会場の最前線にいるような高揚感に包まれる………ッ！

——ズダーンツ！

「うおほっ——ベツ！」

突然、肉盾のゴーストフェイスの鼻先から上がまるで脳内で小型爆弾が起動したように爆せて、血肉が私を染め上げる。

白くプルプルとした大小様々な蛆の塊のような内臓の一部が視界を塞ぎにかかってくるが、ハイオークチーフから示談で頂いたゴーグルのおかげで視界は確保する。

どうやら私が完全に視界を覆っていることを良いことに、あの狙撃部隊の1人が頭を狙って来たらしい。

されど彼女には感謝しなければならぬだろう。

彼女の攻撃を波切りにノルマンディー上陸作戦のような弾丸の雨嵐の中で、私は視界を再び確保することができたのだ。

視界の先には悪夢でも見ているかのよう<sup>まぞくども</sup>に口角を持ち上げてひきつらせた、覚悟を決めたような顔の決死隊が、銃口やらレイピア、青白く輝く炎を私へと向けて、快進撃を制止させようと一同に攻撃を加えようとしているところだったのだから。

——ダアンツ！

——ゴオオオオオオツ！

それを私は目視し〈回避〉する。

正確にはオークが放った〈ショットガン〉の一撃を目視し〈回避〉。

「ギヤアアアアアアアアアッ!!!いやああああああアッ！」

放たれた青白い炎に向けては持っていたほぼ骨格と血糊、皮だけになっ<sup>て</sup>ていた前面肉盾を突き出して攻撃をやり過ぎした。

肉壁を受け取った魔族は、スペインで開催されるラ・トマティーナ参加者のように全身を赤く染めながら、俳優からぬいぐるみを受け

取ったフアンのような黄色い声を上げる。

銃弾の〈回避〉は『CALL of CTHULLU クトゥルフ神話TRPG』76頁〈回避〉に基づいており、青白い炎は目に見えた発動の瞬間が不明瞭だったため装甲でダメージを引き受けたと言った次第だった。

「ツカマエタ」

「うわっ！うわああア?!?!ぎやああああ!!!」

肉盾装甲を手放し、ショットガンを突きつけていたオークの1撃目を放った腕を掴み、わざとカタコトの日本語かつジト目だった目玉をガン開きにして恐怖を刺激する。

「誰か！だれかッ！こいつを引き剥がしてくれえ！」

「馬鹿野郎それをこっちに向けるな——」

ダアンツ!!!

「ギヤア！」「グゲツ」「ブパツ!!」

ザンツ!!!

「ち、違、俺がやったんじやなあああガアツ?!」

恐怖に支配されたオークは何も考えずに私が握った手を力任せに振り払って2発目を私の胸部目掛けて放とうとする。

誰かが制止の声を上げたがもう遅い。

ゼロ距離での射撃攻撃による〈ショットガン〉に対して、こちらは『新クトゥルフ神話TRPG』104頁の「遠距離攻撃と投擲武器」に基づいて攻撃に対し〈応戦〉する。

2発目を放ったと同時に斧を振り上げる形で、標準を脇へと逸らし

奴の股ぐら目掛けて遠心力の加わった斧をへ近接戦闘（斧）として突き刺す。

ここで彼等には悲しい知らせがある。

『新クトウルフ神話TRPG』の109頁には「疾走する対象」、近接戦の中に射撃する」というルールが存在する。これ等は射撃を行うものにとって悪い結果を引き起こす可能性を格段に引き上げるもので――

焦ってへシヨットガンを放ったオークの誤射によって他の傭兵数人が巻き込まれ吹っ飛んだ。

「ギヒヒヒヒヒヒヒッ！  
森の妖精はだれにも止められない！」

「生け捕りなんか知った事か！痛めつけるどころか、俺達の方が先に全滅しちまう！」

「撃ち殺せ！」

「殺せ！」

「殺せ！」

「コロセ！」

「殺せエツ!!!」

「やめろッ！お前等！殺すなって依頼だろ!?小娘1匹に乗せられ――  
バアッ!」

こんな乱戦になった状況ですら何人かはまだ冷静を保ち、射撃攻撃主体の部隊に近接戦を繰り広げる私へ対し射撃を制止する者も現れたが、所詮は烏合の衆の集まり。

射撃音と着弾音を輪舞曲としてへ応戦とへ回避でケルト民謡曲のダンスのように爽快に踊り狂いながらジグのステップを踏み同士撃ちの連鎖で被害を広げる。

乱戦に入った時点で頭上からの狙撃部隊による攻撃も止むかと思ったが、そこは私が見通しが甘かった。

——ズダーンツ!!!

「ツたああああ?!?!」

肩甲骨側に近い首筋へ一撃、弾丸が突き刺さる。

「やったか?!?!?  
?!?!」

魔族側の歓声上がる。

しかし、不思議と痛みはなくそこで撃たれたことに衝撃で気が付く程度だった。

狙撃から逃れるための1歩として、自身の身体に何も起きていないならば戦場を駆け回り始める。

——ズダーンツ！ズダーンツ！

なお戦場を駆け回る私へ実働部隊は射撃を続ける。

傭兵団はいわば捨て駒なのだ。

一方で狙撃部隊は練度の高い軍隊のような実働部隊。

そんな実働部隊が捨て駒に対して誤射に注意を払うかと言えば——それは2022年に開戦したウクライナ侵攻でロシアがPMCワグネルに仕向けた実戦を思い出せば推測など即思いつく。

「ギャピツ?!」「グエツ!!」「ペエツ?!」

「ははっ！ナイスショット！最高の援護射撃ですね！先ほどの誤射はチャラにして差し上げます！」

「ハアっ?!」

「お前等！上の建物にコイツの仲間がいるぞ！ぶち殺せ!!!」

——ダアン!!ダアンツ！

——ズダーンツ！ズダーンツ！

しかし傭兵団に実働部隊が気を払わないならばそれもそれで結構。乱戦に乱戦を重ね、誤射の回数も増やし次第にヘイトを私から実働部隊へと差し向ける。

気が付けば、私、へ言いくるめで焚き付けられた傭兵団、私兵部隊の三つ巴状態だ。

私はどちらにも組みはしないが、次第に信長鉄砲隊のように三段撃ちも始める。

死体から武器を剥ぎ取ってはへショットガンをへ射撃し、武器を入れ替え、新しい武器を？ぎ取ってはへ射撃を繰り返すことで狙撃してくる彼等を自らの手で葬る。

死体を適度に補充して攻撃をいなし、同業者の死体蹴りを躊躇してしまふ奴等を嘲笑う。

狙撃部隊の攻撃は乱戦時に受けたラッキーショットを除いて被弾していない。

それもそのはず。

一見すれば奴等は “私の頭上” という優位な位置を陣取ることができているのだろう。

だが、私に対しては何の意味もなさない。

狙うにしても肝心の私は近接戦の中(109頁)で疾走しながら(109頁)、大柄なオークを掩蔽と遮蔽(109頁)にし、時は完璧な遮蔽(123頁)にして、遮蔽を通して対象を射撃(123頁)しているのだ。

『新クトゥルフ神話TRPG』のルールに状況を当てはめたならば、彼等には5つものデバフが付与状態悪化されていることになる。

その際の敵の射撃命中精度など1/5にすら満たない。

更にそこから『CALL of CTHULHU』クトゥルフ神話TRPG』のへ回避へに基づいて選定された弾丸をへ回避する。



(……………さて、と。同人誌は奪われてしまいました……。存分に楽しんで、場もかき混ぜて、情報も収集を済ませましたし……。適当な塩梅で私も撤収しましょうか)

仲間割れが開幕した間に、オークや他の小柄な魔族が持っていた〈シヨットガン〉とその弾薬を手早く回収し牙城まで撤退する。

早くも私の手中には2本の〈シヨットガン〉が収められていた。

1挺は6ゲージから4ゲージほどありそうな大筒の〈シヨットガン〉、もう一挺が12ゲージから8ゲージ級の〈シヨットガン〉であった。

いずれも私が乞いに焦がれていた “2連式” の〈シヨットガン〉である。

(どこまで通じるか分かりませんが……。2連式なら単純火力だけで高位魔族と渡り合えるかもしれません。突破力も殲滅力もダンチ段違いの意ですしね)

——ズダーンツ！　ズダーンツ！　ズダーンツ！

外では私を除いた激戦区で傭兵団と私兵による銃撃戦が未だに繰り広げられていた。

口封じか、敵前逃亡か、それとも裏切り行為によるものか。

私兵に対し銃口を向けた傭兵団たちは1匹残らず高所狙撃によって1人、また1人と数を減らして行っている。

それは戦闘と呼ぶには非常にお粗末で——映画『ザ・ハント』冒頭のような一方的な狩猟ゲームと化していた。

(あ、そういうえば首に一撃貫つたんだっけ。別に痛くはないけど、今のうちに〈応急手当〉しておこう)

ふと、実働部隊によるラッキーシヨットを思い出し〈応急手当〉の

ためにバックの中からダクトテープを取り出す。

「……………」

患部の治療のため、ジャケットを脱いだ途端に自分の目が開いていくのを感じる。

「……………信じられない」

気が付けば声が自然と漏れていた。

私は確かに首筋に銃撃を喰らっていた。

けれどもそれは〈幸運〉にも陽葵ちゃんがくれたジャケットの襟が弾丸を防いでくれたようだ。

引き抜いたそれは弾丸と呼ぶにはあまりにも細長く、映画『ジュラシックパーク ロストワールド』に登場する麻酔銃の弾丸のような構造をした弾丸であった。

これが仮に突き刺さっていたとしたら……………わたしの意識は落ちていたかもしれない。

（陽葵ちゃん。ありがとう）

私の脳内での陽葵ちゃんは相変わらず自己主張は激しいが、彼女の加護に感謝をしながら再びジャケットを羽織り直した。

……………五車町に帰ったら彼女のムチムチほっぺたにキスしたって良いだろう。

（さて。〈シヨットガン〉の改造は後回しでいいか。あの傭兵団が片付いたら次は私だろうし…………。流星にデバフ効果なしに何十挺の銃火器による連続射撃攻撃は私も〈回避〉できないかな）

楽しかった時間を名残惜しみながら離脱の準備を整える。

「お、おひ……！ に、ニンゲン！ で、でてこい！ 出てこない、と無実の、こいつを、ころひゆ、殺すぞ！」

得られた新たな武器を背中に背負い内ポケットから地図を取り出して、屍山の裏口から戦地を後にしようとしたときだった。

私兵による銃声が減った方角から何とも気の抜けた脅迫声明が聞こえてくる。

人質作戦などは対魔忍のような正義の味方には効果的な作戦なのかもしれないが……あいにく私は対魔忍ではない。

私の身近な大切な人達に危害が及ばなければ、他人がどうなろうと知ったこつちやない。

「……………」

念のため。

離脱する前にその人質が私にとって大切な人物ではないかだけを確認する。

「は、はやくでてこい！ おれは、ほつ、ほんきだぞ！ こいつを殺すぞ！」

「ひっ…………うぐっ…………エグツ…………た、助けて…………助けて…………」

よかった。

顔は土嚢袋を被せられていてわからないが、アレの体格は私にとって五車学園生徒いずれの大切な人達の体格ではなかった。

命乞いできるだけの元気もある。

スクール水着をハサミで切って穴をあける系のアダルトビデオのようにボロボロな服だが、服装がビルで遭遇した紫橙赤の対魔忍に似ていることから対魔忍の同族かそれに近い存在だろう。

殺すなら殺せばいい。転生直後のビルで私の失態で対魔忍が凌辱

されかねない展開を作ったことに対して尻拭いをしたただけであって、今回は私に過失はない。捕まったあの対魔忍が悪いのだ。

この世界では肉便器堕ちになるよりかは、死は救済になるだろう。助けて見返りがあるなら検討するが、私があのだ魔忍を助けたところで見返りどころか損失(キミ、対魔忍の素質があるかもよ？(勧誘))しか得られない。

それどころか助けを乞う姿は演技で中身は魔族かもしれない。

特に顔を土囊袋で覆っているところが一番怪しい。

てか、反抗的<sup>デロイ</sup>な傭兵団が降伏か殲滅されてしまった今、のこのこホイホイ正面切って救出作戦とか実働部隊に『蜂の巣にしてください』と言っているようなものでは？

そもそも私の目的は『高位魔族に本の言語を解読してもらって五体満足のまま五車に逃げ帰ること』だし。別に『人質のあの人を助けること』じゃないし。

「……………」

脅迫声明を完全に無視して身体の両面に死骸を括り付けて城を後にする。

悪いな。

人質になっている対魔忍。

災害現場のスリーワード『自助』『共助』『公助』は知っているか？

私はこの天災とも呼べる大群相手に自助で精いっぱいなんだ。

第一、対魔忍なら私よりも強いはずだし『公助』が来るまで待つてくれ。

人質にされるぐらいなんだ。

つまり対魔忍達は仲間意識が強いってことだろうか？　じゃあ、そのまま待つてくれ。

一般人枠で人生を謳歌したい私のために注意を引いてくれ。

Episode 151 『人間風情が高位魔族3人に勝てるわけないだろ!』

……

……

…

さて。

人質にされた対魔忍を見捨て、逃げ出した私の顛末を話そう。

最終的に逃走ルート先で、二進も三進も行かなくなってしまうしまった。

やむなく元の屍山血河の牙城に逆戻りとなった釘貫 神葬です。

2体の魔族の胴体に死体を引つ提げて裏道から退却しようとしたところ『待つてました』と言わんばかりの〈アサルト・ライフル〉やら〈アンチマテリアルライフル〉を構えた私兵部隊の待ち伏せに遭遇し、死体が肉盾として機能しなくなってしまうました。

私兵部隊ですが、私がそうであるように彼等もまた確実に戦いの中で成長しているようです。

根城から持ち出した死体がい物にならなくなったため、示談交渉で新しく得た〈ショットガン〉を用いて私兵部隊を6人前後殺してまわりつつ、肉壁の補充に動いていたのですが……。

私が転がした私兵部隊を肉盾を補充する前に、彼等は後方へと仲間の死体を片付けてしまい。

破損して〈投擲〉するには丁度良い大きさとなってしまうた肉盾から露出した部位を正確に狙撃してくるようになってしまった……。

バカ野郎!

陽葵ちゃんがくれたジャケットの存在と、私が探索者じゃなかったら死んでたぞ!!!

「ハア……。困ったなあ。まさか肉盾タンクわざ技を克服しちゃうなんてエ

……。包囲網を狭めているみたいだから、急いで逃げ出したいけど、

もう疲れちゃって 全然動けなくてエ……」

これまでの示談金でパンパンになったリュックサックを人をダメにするクッションのように扱い、死体の天窓から紫白い月を見上げる。

このままだと、私の牙城が私兵部隊に解体されてしまうのも時間の問題だろう。

というか、こちら情報を出し惜しみをしている状況ではなくなりつつある。

マダムには『情報のバーゲンセールを開いてやるつもりだ』とかイキっていたところもあるけど、情報のバーゲンセールを開くのはエドウィン・ブラック、蛇子ちゃん、桃色髪の痴女3人の情報を引き抜く代わりにこちらの情報も差し出すことを想定していた。

それがどうだ。

今じゃ彼等の力の一部を見ることもなく私だけが情報開示しているではないか。

「……………よつこら瀬戸の内」

ブラインドシャッターを指で広げるように、淫魔族の皮膚を捲り上げて外の様子を観察する。

……刻々と状況は悪化している。

どこからともなくわらわらと現れた私兵たちが、手際よく乱戦会場で地面へ転がっている魔族やら武器やらを片付け始めていた。

これでは盾を取っ替え引っ替えしながら正面突破することすら厳しい状況に立たされている。

それに彼等の装備は一体なんなんだ？

目に狂いがなければ、彼等の装備は2010sにおける陸上自衛隊が装備していた89式自動小銃に見えるのだが。

更に彼等が着用している戦闘服もまた、特殊な構造の防弾チョッキのような役割を果たしているようにみえるのだが。

こちらの武装が〈シヨットガン〉(2連)や〈改造した釘打ち機〉である以上、『殺しにくい強敵』なだけであって決して殺せない集団ではないのだが……。

私の味方が誰もいない以上、連携し統率の取れた連中はとにかく殺りにくいっいたらありやしない。

とにかく死体を意地でも引き渡そうとしないところが厄介。

仲間を引き渡さない・回収しようとする習性があるからこそ、救助隊の何十人かを行動不能・戦闘不能にする大腿部を狙った狙撃を喰らわせたなら、鬼のようなアンチマテリアル〈ライフル〉の反撃・一斉砲火の報復行動を喰らったし。

「あーあ」

でも私としては傭兵団を交えて戦っていた時のような、獣じみた狂奔の方が命の輝きがあつて楽しかったのに。

ちまちま引きこもって籠城戦は他の同胞探索者が居なければ盛り上がりがない。

絵面も地味だし。

♪

「……」

こちらが追い込まれていることを良いことに、蛇子ちゃんに加えてエドウィン・ブラックと桃色髪の痴女までもが私兵部隊に護られる形で顔を見せてくる。

彼等が現れた時点で淫魔族製品のブラインドシャッターから離れ、椅子に座る。

まだ私は “切り札” をいくつか隠し持っている。

こちらの情報のカードを切って全て手の内を明かせば、この場から離脱……あの場の高位魔族の1人ぐらいは葬ることはできるだろう。できるだろうが……。

現状の情報では高位魔族の力を知り得ない以上、達成率は極めて低いものとなってしまふ。

それに手の内を明かしたが最後、いずれは死体の肉盾作戦のように対策を練られてしまうに違いない。

情報は力なのだ。

本をつけ狙ってくる以上、今後の衝突も考えて身の振り方を考えねばならない。

「ゼラトちゃん♪ どうかしらあ？ そろそろお話する気にはなつたあ？♪」

「……………」

カラカラとした笑い声を上げながら蛇子ちゃんが催促をしてくる。その声はまるで駄々をこねる子供を目前にして、子供が駄々をこねるのを自発的に辞めるのを待つ母親のような声色だ。

「ゼラトちゃんの大暴れのおかげでこちらも大損害……と言っても主にエドウインの損害だけ♪ ウフツ♪」

「余計なことを言うんじゃない！」

「彼は気にしてないのだから、別にいいじゃない♪ そうよね？ エドウイン♪」

「……………」

「貴様ア……！ブラック様が我々に対しても冷酷無比だとでもいうのか?!ブラック様の友人と言えど限度があるぞ！ブラック様は亡くなった兵士1人1人に——」

「はいはい。愉快的仲間達のノロケ話をしたいなら余所でやって頂戴」



ふむ。

あの統率の取れた私兵達はエドウィン・ブラックの兵士だったのか。

蛇子ちゃんが傭兵達について言及しないことから、彼等の雇い主もエドウィン・ブラックだと考えるのが妥当だろう。

あの高慢な桃色髪の痴女の反応を見る分には、蛇子ちゃんが本当のことを話しているようにも見えるが確証はない。

私が追い込まれている以上 精神的な余裕は向こう側が勝っているのだ。

現状では〈心理学〉で見透かせるような状態ではない。

仮にその話が本当ならば、再度新たな情報のカードを切つてエドウィン・ブラックさえ葬ることができれば……あるいは葬れずとも再起不能にすることができれば、私兵達の足並みは崩れるに違いない。違いないのだが、殺せるに至るまでの道筋が見えない。

エドウィン・ブラックに対する情報不足だ。

「お友達としての助言としてそろそろ降伏すべきだと思うわよ♪ 女中ちゃんもカンカンだし？ 強情なゼラトちゃんのことだから、今この瞬間もどうやってこちらを出し抜こうか考えていると思うけど♪」

蛇子ちゃん的心情を見透かす発言に、ぐうの音も出ない。

こちらはいつものような軽口を叩かずに、左手を口元、右手を左肘に当てて思考を張り巡らせている真つ最中だった。

なんならブラインドシャッターを閉じてこちらの表情すら見せていないのに的確に思考を読み取って、人間では敵わない高位魔族らしい格の違いを見せつけてくる。

「大人しく降伏して……♪ 本物も渡せば悪いようにはしないわ♪

お友達同士の仲介役としてエドウィンとも話をつけてあげたし、命を助けてあげるだけじゃなくて特別待遇も約束して、あ・げ・る♪」

彼女の言葉が甘い毒のように私を（誘惑）する。  
されど殴り合った経験から “特別待遇” という甘露の響きに、  
私の直感が従ってはならないという警告を常時発している。

「そうね♪ ゼラトちゃんにはカオス・アリーナ専属の女戦士として、  
たつくさん稼がせてもらわなきゃね♪」

ほら、やっぱり。

ろくでもない将来が約束されていますね。

邪神の誘いなんて所詮そんなもんですよ。

彼女の言葉を前世の言葉で翻訳するならば……。

『我が謁見の間で神楽を舞続けよカオス・アリーナ専属の女戦士』ってことですね。

分かるんだよ！こちとら邪神共と世界の命運を賭け何年目だと  
思ってる?!

あと、この隠語のやり取りは3カ月前のまえさき市でもやった気が  
する！

あの時は蛇子ちゃんから司祭の勧誘をされたっけなあ?!

「……………」

再び死体のブラインドシッターを開けて高位魔族の様子を伺う。  
私の反応に、蛇子ちゃんは飛び切りのご満悦だ。  
勝ち誇った残酷な笑みを浮かべて私が屈服する瞬間を今かと待ち  
望んでいる。

エドウィン・ブラックは腕組みをしたまま無防備な姿勢でこちらを  
見つめ。

桃色髪の痴女は既に臨戦態勢だった。腰に差していた西洋の剣を  
抜いて、私が覗いていることに気付くと、西洋の剣から黒炎をほとば  
しらせている。

もちろん彼等の周囲にはエドウィン・ブラックの私兵が89式自動小銃を突きつけていて――

「――降伏すると思えますか？」

まあ、この状態ならまだ突破口を考える時間が残されていると思って要求を突っぱねた。

「じゃ、タイムオーバー時間切れね♪」

しかし私が牙城に引きこもるよりも先に、蛇子ちゃんは投げキッスでもするかのような仕草を取り、ふうつと息を吹く。

「!？」

その吹き出された息は冬の息のように白く、またたく間に拡散して霧のような形態となって牙城を包み込んできた。

こちらも死体のブラインドシャツターを閉じて白霧から逃れる。

浴びこそしなかったが冥王星ユゴスの科学者／医学的甲殻類による噴霧器の攻撃行為に対策としてできたことは〈回避〉することだけだった。ただちに気温の変化や凍傷の状態を確認するが、どこも変化はない。

「……………良かった」

――ポトツ

そう思った矢先に、天井から何かが落ちてきた。

――ポトポトツ

背後を振り返って、落ちてきたソレが何であるか確認する前に、今度は半身を翻した背後から半固形のカレーが地面に叩きつけられるような音が聞こえる。

——べちや

今度は目の前に。

何が落ちてきたのかは一瞬では理解できなかった。

それはアボガドの表皮みたいに黒くて、大小様々な大きさでありながらも一塊はパンぐらいの固形物。それらは石鹼をストープで熱したような異臭を漂わせながらブクブクと沸騰したかのようにあぶくを湧き上がらせている。人が死体が腐っていくような甘い匂いに化学製品を混ぜたような、一言では表すのは難しい異臭がして、ときどき爆ぜたバブルからカピタ膿腫のような緑肌色がチラホラと散見してきた。毛細血管のような虫喰い穴だらけの断面図は、宿主が死してなお呼吸をするかのようにいやらしくくぱくぱと弁を開いては閉じてを繰り返している。

次第に私が形成した牙城が腐食して崩落していることを理解するのは、さほど時間はいらなかった。

「ああっ!!クソがッ!!」

悲鳴に近い絶叫を上げて脱出経路を探す。

このまま閉じ籠ろうものなら私が肉塊に押し潰されて城の一部になってしまう!

城の一部になるだけならまだしも、城の肉と一緒にジワジワと時間をかけて溶かされてしまう!

「げえっ!」

ああ、最悪だ。

スネークレディのヤツ、正面以外の経路を腐食の霧で塞ぎやがった！  
その最後の脱出口である正面も上空にふわふわとした白霧と同じ成分の霜が、時間をかけて降下してきている。

外に仕掛けた罠の数々が、滞在地点のように崩壊している。

あの人質作戦の甘々オークとは違い、こっちは考える時間すら与えないつもりか。

銃弾も防いだ陽葵ちゃんのジャケットのジッパーを閉めて、防御を固める。

全方面・完全に地面へ霧が接着する前に、無事な肉盾を引っ張り剥がして背中・盾として構え外へと転がり出た。

天井が降りてくるサンドウィッチトラップから逃れるような姿勢で逃れたため、全身に汚らわしいオークの血を纏うことになるが知った事ではない。

命あつての物種だ。

脱出の間際。

私の視界へ映ったのは、あの白霧のせいで瞬時に何もかもを溶かす強烈な災害のような毒霧だった。

彼女の毒霧は城の固定に使っていた金属製の釘すら再利用できないほどにシロアリの巣のような形状にしている。

「ッー」

牙城を飛び出し背中を守った肉盾すら溶ける。

正確には溶けるにおいがする。

ただちに盾をウエポンパージし、正面の脅威に生身一つで対峙しようとする。

「動くな」

だがそれよりも先制攻撃として冷徹な女の声と、全身のあらゆる血

にまみれた皮膚に空洞の筒状の物体が力強く押し当てられた。

「——チェックメイトだ」

そこから私ができることといえば押し当てられたブツが、近づいてきたエドウィン・ブラックの私兵による銃口だと肉眼で確認を取ることでだけだった。

## Episode 152 『本格的な尋問』

「ブラック様、制圧いたしました」

「ご苦労」

振り回していた武器を取り上げられ、腹ばいを強要され、両手は後ろに回され、持参したダクトテープと私兵部隊持ちのナイロン製のフレックスマスクで結束バンドで後ろ手に拘束される。

「ご丁寧に足は膝を折り畳むように拘束しちゃって、まあ嚴重なことで。」

これではまるでハードコアなBDSM系のAVを撮影するかのような格好だ。

あと私の所持品のダクトテープは自縛用で持ってきたわけじゃないんですけど？ 人の持ち物を漁って、勝手に使わないでもらえます？

おまけに畳み掛けるように銃口を押し当てられ、オーク共の返り血を拭うことも、立つことすら許されていない私へエドウィン・ブラックが歩み寄って来る。

「♪」

無論、ブラックの隣には言葉に表さずとも分かるほどにツヤツヤテカテカした『超満足！』な蛇子ちゃんも一緒だ。

幸せで満たされた陽葵ちゃんみたいな顔してるなア！お前さア！

女騎士のような『くっ……殺せ！』という状況はまさにこのことだろう。

ん？

なんかデジャヴを感じる。

ついこの間、五車学園でも女騎士になったような……？

定期的に女騎士みたいな状況になっている気がするなあ……？

いずれにせよ。

ここで生き長らえれば死よりもつらい凌辱の宴が待っていることは確定している。

であるならば、抵抗して不慮の事故で死んで次の同胞探索者が高位魔族共を蹴散らすことを祈ることが得策なのかもしれない。

しかし相手もそう簡単に殺してくれるとは思わないし、どうやって死のうか考えると鹿之助くんや陽葵ちゃんの顔が脳裏にちらついて自殺への思考切り替えができない。

『新クトウルフ神話TRPG』11頁 “勝者と敗者” の第二段落目に基づいている――

――私が死ぬことによつてエドウィン・ブラックの “地球を隷従させようとする根本的な計画を阻止できるならば、1人の探索者の死は小さなこと” なのだろうが、唐突に死んだところでエドウィン・ブラックの計画は阻止できる算段がつかない。

それどころか今、死ねば……被害は “より” 拡散するような気すらする。

正直、極論を言つてしまえば私は世界がどうなろうと知つた事ではない。

だけれども、その絶望の未来となつてしまった世界を生きる私の大切な人達が苦しむことはとても耐えられない。

ああ。そうだ。

『新クトウルフ神話TRPG』210頁にはこんな一説もあつたつ

け。  
“探索者わたしたちの死” にもあるように “どんな時でも探索者わたしたちの死は重要なイベント” であるべきだ。それが “英雄的だったり、重要な意味を持ったり、素晴らしい逸話となる” ような……。

――ならば、刻の探索者として。



この場面では動けなくなるまで、この場では抵抗すること——いや。

絶対に目覚めた時に所持していた書物を決して譲らないことが最善の選択に違いない。

でも相手側も私の行動など把握しているかのように、突きつけられた数多の銃口は生命維持に不要な四肢へと向けられている。

ああ。返り血がじわじわとカーゴパンツに染み込んできて、ぬるぬるとローションのように気持ちが悪い。

染み込んだ血液がメンソールでも塗られたように化学反応を引き起こして、じんわりと熱を帯びているような気もする。

「……………」ギリツ

「ふむ……。ここまで追い詰められた詰みの状態であれ、なお瞳の奥の鈍い輝きは未だ鈍らず、か。倫理観に欠け、脅しも効かなければ、人質交渉も通じない、時には己の死すら厭わない。力技では口を割らぬ、ニンゲンの小娘にしては厄介な存在だな」

「ゼラトちゃんは特別な子だからね♪ ウフフフフフフッ♪」

「日常の中での『鉄砲玉』のような振る舞いについては、対面前よりフルストから聞かされていたがよもや『ここまで』とは」

無警戒さながらな悠々とした足取りで2フィート以内にまで高位魔族共が寄って来る。

相変わらず不敵の笑みを浮かべたエドウィン・ブラックの表情からは内情が読めないが、スネークレディの方は既にこちらを完全な新しいペットとして見ているような目で見下している。

そうだ。

エドウィン・ブラックの言う通り、今の私は詰んでいる。

一族伝来の肉盾技法をスネークレディに潰され、起死回生・一撃必殺の〈改造した釘打ち機〉を握ることすら許されない。

おまけにこんな危機的状况なのにムラムラ、えっちな事をしたくなるような気分にもなつて——

邪念を払おうとするが無性に秘部がイライラしてくる。

無意識下で陰核を太ももで擦り合わせて内股オナニ——自慰しないように堪える。

だがこちらの意に反する生理ように半透明の分泌液がドロツと、下腹部から抽出されて流れ出ていくのもわかる。

落ち着け……………私。

これはきつと〈医学〉的な可能性の話として、レイプや首絞めツクスのように身体が危機を感知して性欲が高まっているのだろう。

決して私がいじめられていることによって、マゾっ気が生じているわけではない。

そもそも元来より私にマゾヒズムの感性はない。

「ねえ、エドウィン？ 約束通り私の取り分はゼラトちゃんでもいいわよね？」

「それは成功した暁での報酬だ。お前は交渉に失敗しただろう？」

「ん？んくくく？ 失敗？ 何を言ってるのかしら？ 籠城する強情なゼラトちゃんを引き出せたのは私の手柄だってことを忘れていない？」

「ああ、だが元の契約やくそくでは——」

「わかっているわよ。元の契約やくそくのことぐらい。第一、たのしい♪たのしい♪尋問はこれからじゃない♪ ……あ♪ エドウィンもゼラトちゃんが欲しくなっちゃったの？」

「……………」

「ふふふっ♪ それはダメっ♥ ゼラトちゃんは私が飼うって最初から決めてるんだから♪」

高位魔族共の会話の内容が既に『ヤンデレの女の子達に死ぬほど愛されて眠れないCD』カオス混沌を混入したような内容だが、景品と同じような扱いをされている私はちっとも嬉しくない。

ムラムラした感情に毒されつつあっても嬉し……嬉しくなんかない。

そもそも先の話の流れである『カオスアリーナの女戦士として飼う』ってことは、要は体のいいペット——クトウルフ神話TRPG世界の文言に言い換えるならば邪神の眷属化というポテンシャルになるのだろう。

謎のムラムラで下腹部は強い熱を持ち、眷属化という待遇に好奇心の方は湧くが、嫌悪感の方がまだ強い。

それに飽きたらアレだろう？

ダンボールに入れて『いい人に拾われてね』とか言われて道端に置き去りにされるのだろうか？

いいや、スネークレディのことだ。

川へ流すに違いない。

丁寧に四肢切断してからかな？

あと日常生活に戻れないようにポルチオ淫紋体外式ポルチオ：もう二度と腹部を締め付ける下半身用衣類を纏えないねえ……。とか薬漬感度3000倍け、性感帯開発とか施してからかも？

良い人（オーク）に拾われて、性的な意味での人豚肉便器になるまでがセツト。

対魔忍世界だもの。

これ以上ない説得力のある理由のはずだ。

また、たとえば眷属化というポテンシャルになったとしても日本国には、日本国憲法 第20条に信教の自由が定められているのだ。

誰が対魔忍世界の邪神を信仰するものか。

私は、私の神を信仰し偶像崇拜を続ける。

「おあずけしちやってごめんね♪ さて♪ ゼラトちゃん？ どうして本の在処を話したくないのかしら？」

蛇子ちゃんは伏せた身動きの取れない私と、なるべく同じ目線になるようにしやがみ込む。

小悪魔的な笑みを浮かべ、人間が犬を撫でるように気安く手を伸ばし人の頭に触れて撫でようとしてくる。

これまでの経験から奴に触れられることは避けようと身じろぎするが、あらゆる方面から銃口を突きつけられ、背中を踏みつけられて逃れることはできず成されるがままになる。

あれだけ “触れられること” を拒んでいたのに……屈辱。

“触れる” 手の動きがいやらしくてその手で秘部を弄ってイかせてほしいと……ああ！違う！何か身体の調子がおかしいだけだ！その変な感情を押し殺せ！

「いったい何が原因なんだ！クソツタレ！

……とにかく。

とにかくだ。

彼女達には身の保身——保険の趣旨を既に伝えていたが、あの解答ではもつともらしいが納得できないとでも言いたげだった。

「……………私にはアレに何が書いてあるのか、読めないですが想像はつきます。貴女方に渡せば今よりも最悪な事態に陥ることが未  
来視できますから」

ご褒美をもらえるメス犬のように尻尾を振って媚びてしまいそうになる必死に感情を抑えながら、煩惱を堪えて睨みつけて返答する。

「♪」

されど蛇子ちゃんがこの程度を意に返すはずもなく、本心を白状した私に気味の悪い笑い声を漏らす。

頭を撫でる彼女の細い指先が、頬へと延びていく。

滑らかな動きで指は涙のように頬を伝っていき、恋人の下唇をやさしく捲るように触れる。

やがて。

じつとりと湿る私の首元を、まるで首にナイフを当てているかように念入りに触れてくる。

でも本人の触り方は子猫をあやしているかのような手付きだ。

表情もどこか愛おしげな小動物をみるかのような魅せられる表情。

唾液を飲み込むだけで、締め付ける彼女の細い指先の僅かな存在を感じる。

肉体が彼女の愛玩具ペットになりたいと屈しそうになるが、急に火照ってきた身体の変化のせいだと自分に言い聞かせて平常を保つ。

「やあああつと♪ 本音を話してくれる気になったのね♪ 少し素直になつて、友達の距離感を狭めてくれているみたいで嬉しいわ♪」

「……ははっ。友達？ 冗談は顔だけにしてくださいよ。こちらは蛇子ちゃんの強制的な脅迫わがままに合わせてあげているだけです。本気で友達だと思っているなら、こうなる前に仲裁やらもつと友好的な別のやり口があつたのでは？」

「そうかもね♪ でも私としては作り物じゃない、ゼラトちゃんの心の奥底から怯えた泣き顔が見たかったしい……このやり方に間違いがあつたと思わないわ♪」

「……まあ、わからないことはないかもしれませんがね」

「あらそう！私とゼラトちゃん♪ ついにお友達としての類似点があったと見つかつたみたいね♪」

「ええ。私もまえさき市で蛇子ちゃんを泣かしたときは満足感を得られましたし。蛇子ちゃんの『コ、コノ！』って余裕のない捨て台詞が――」

この期に及んだ私の事実を含んだ言葉に、喉仏を撫でる蛇子ちゃんの手が驚掴むように力が入る。

「コキュッ」

彼女の手の位置から必然的に喉輪をさされている状態になる。たった少しの締め付けなのに呼吸ができなくなる。彼女の手には全く力が入っていない筈なのに苦しい。なのに下半身は悦んで、我慢していた絶頂に至りそうになる。足ピン状態で激しく初期痙攣に及ぶ。

「ウフフ♪」

最初は余計な真実を口走った私への牽制行為だと思っただが違うらしい。

締め付ける力は血圧計のように徐々に強まり、流石にこの期に及んだ才ホ顔すら浮かべられなくなる。

首を絞められてみっともない顔のうえ、視界がチカチカとハジける。

全体的に薄暗い桃色だったカラフルな色彩が、スチール映像のように変貌しつつある。

耳の中が水が入ったようなくぐもった音になる。

足が感電したかのように地面めがけて激しくのたうつ。

暴れているのに芋虫を踏み付けるみたいにエドウィン・ブラックの私兵から足で押さえられていて苦痛を外部に逃せられない。

口の中にたまった唾液が成す術もなく口端から零れる。

口端からあぶくが吹きこぼれる。

視界が空へとぐるりする。

死――

Episode 153 『やべーぞ！レイプだ!!』

「カ……」

「♪？」

「ゴキユツアーーーーッ!!! ……ゲーエツホ!!! ゴホツゴホツ!!! ゴホツ  
ゴホツ!!! ゲツホゲホツゲホツ!!!」

辛うじて吐き出せた言葉にヤツの手が緩む。  
空気を吸い込むのと同時に激しく噎せ込む。

「考え直した？」

「げほっ、げほっ……。 ……まさか。ゴホツ。レスバ、クソザコ……。高位魔族♪」

「うんうん♪ ゼラトちゃんはやっぱりその威勢じゃなくっちゃね♪  
こんな些細な前戯ふれあいで心が折れていないようで安心したわ♪」

ヤツは満足そうな笑顔を浮かべてそのまま立ち上がり、エドウィン・ブラックと桃色髪の痴女の方へと向き直る。

蛇子ちゃんから縊死寸前まで首を絞められたことで、沸き上がった性欲がライン超えたことで邪淫が鎮火し頭の中がクリアになった気がする。

無防備にも背中を見せている蛇子ちゃんの意識がエドウィン・ブラックへと向いている間に思考を張り巡らせ、作戦を練る。

私の両腕は後ろ手で拘束され、足は折り畳むように拘束。

銃口も突きつけられているが、これは私がああ桃色髪の痴女の勝利宣言後も抵抗したがゆえにこの状態になってしまったことにある。

暴れた結果、奴等はボディチェックを省いたのだ。

ジャケットの裏、腹には未成品のパイプ爆弾が巻き付けられており、荷物さえ奪還できればライターを武器に脱出のチャンスを作り出せるのかもしれない。

しかしそれ至るにはまず私の四肢に銃口を突きつけ踏みつけ身動きを封じているエドウィン・ブラックの私兵を何とかしなければならぬ。

幸いにもエドウィン・ブラックの私兵によって私のリュックサックの中身は床へぶちまけられており、探して取り出す手間は省けている。

自分の荷物に〈目星〉をつけて、どこにライターが転がったかも把握済みだ。

敵の銃弾をローリング〈回避〉しながらライターの奪還。

拘束からの脱出。

脅迫へと洒落込みたいところだが、攻撃の順序として私がライターを取得するよりも先に彼等が銃の引き金を引く方が早いと『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』65頁 『戦闘 DEX (機敏性) と攻撃の順番』にも明記されてしまっている。

『新クトゥルフ神話TRPG』側でも108頁 『火器とDEX順』で火器の射撃の方が早い定義されている以上、打開策はほぼない。

(……………)

一応、これらの先制射撃を覆して防御や攻撃に転じる術もなくはないのだが…………。

高位魔族3人に、この手の内を明かすのはまだ早いし、『魔族』という括りから盤面をひっくり返す 『切り札』 の存在への理解があるかもしれない。

窮地で新たな打開策としての起死回生のために使用するよりも、やるなら不意打ちがいい。

あるいは、もつと相手を攪乱させるための——確実なトドメへとつなげる一手として使うべきだというのが私の考えだった。

「……………」



ライターを使った打開策に至るまでの道筋を完成させるよりも先に駆れの相談事が終わってしまう。

未だに噎せながらも再び3人の圧に晒される私。

「ゼラト・シーカーと言ったか」

次に口を開いたのはエドウィン・ブラックだった。

まさかの青空日葵ではなく、ゼラトシーカー呼びにギョツとしてしまふ。

でも、そう言えば蛇子ちゃんの初回紹介で愛称呼びであったこと。

『蛇子ちゃんの紹介もあったから……』と自ら名乗っていないことを思いだす。

「い、ゲホッ。いえ、ゴホッゴホッ。本名は青空 日葵、それは愛称です」

だから自己紹介も兼ねて対魔忍世界での個人名を改めて名乗っておく。

どうせ蛇子ちゃん辺りから本名に関しては筒抜けだろう。

それに蛇子ちゃんのみならず、フルストなる人物も私に探りを入れていたようだし。

この情報カードは切ってしまったても問題はないはずだ。

「……………」

「……………」

ただの自己紹介  
余計な一言で眼圧が更に強まるエドウィン・ブラックの横で、彼に自身の表情が見えないことを良いことに顔を背け笑いを押し殺し始める蛇子ちゃん。

笑う蛇子ちゃんにイラつく桃色髪の痴女。

「……年頃の小娘であれば泣きわめいて許しを乞う頃合いだが、先ほ  
どから貴様にはそれが見られない。スネークレディに甚振られても  
未だ原書の所在を吐かない。瞳の奥の名状し難い淀みは輝いたまま。  
随分と苦痛に対して強い免疫を持ち、かつ強情な性格なことは充分に  
理解した」

ブラックはまるで私の振る舞いが尊敬に値すると褒めたたえるよ  
うに一歩前で出て来て賞賛の言葉を浴びせてくる。

「そりやどうも。……で？　ンン、ッ！失礼。……その勇気を讃えて  
賞状でもくれるんですか？」

「いいや。そろそろ浸透してきた頃合いだろう？　隠しても無駄だ。  
分かっている筈だ。身体は正直なのだからな。ならばここは苦痛の  
種を変えて、どこまで威勢が続くか我慢比べとしよう」

浸透してきた？　身体は正直？　苦痛の種を変える？　我慢比べ  
？

彼の言葉に一抹の不安を抱える。

今やスネークレディに首を締め上げられ死にかけたおかげで頭の  
中は透き通るような脳内だが、それ以前の身体に起きた謎の発情の件  
もある。

パチン

その不安に応じるかのように狂気の笑みを浮かべた蛇子ちゃんが  
指を一回鳴らしたかと思えば、魔族の威厳など微塵にも感じられない  
——落雷に怯えるフクロウのヒナのようなオークの集団が現れる。

同時に四肢へ銃口を押し当てていた彼の私兵も離れる。

銃口は向けたままその場から緩やかに後ずさっていく。

あ……………やばい。

これは……………やばい。

「た、確かにアンタらは俺達の雇い主だし、こ、こいつが暴れまわった時に真っ先に逃げ出したのは本当に悪いと思ってるがよ……………」

「無理だで。あの狂犬にイラマチオさせるとか……………絶対にオラ達のイチモツが根元で噛み千切られちまうだで」

「日本人のメスにしてはデカケツで好みなんだけど、アレは胸が……………あとキンタマ引きちぎって腕を振り上げて高笑いを始めるタイプは好みじゃないっぺ……………」

「オ、オデ。まだ女の子になりたくない……………」

「絶対にあのタイプは下半身にも貞操帯……………それもトラバサミが付いているぜよ……………」

やばい。

やばいやばいやばい。

やばいやばいやばいやばいやばい。

何が行われるか一瞬で理解する。

ナチュラルに選ばれた対魔忍世界らしい尋問・拷問の種類ジャンルの登場に絶句する。

目前のオーク達は弱腰の引き腰だが、この世界の理ことわりならば間違いないくやられる。

鹿之助くんとは、少ししかエッチなことしていないのにEpisode23えつちな妄想、Episode25全裸を視姦、Episode30おみまい、Episode86頭皮嗅ぎ、Episode94超密着、Episode119おみまい2、Episode129超密着2、Episode130男水着チャレンジ、Episode136下半身強制鎮静化、対魔忍世界の洗礼と言っても過言ではないガチの凌辱が始まってしまいう事に焦りを隠せない。

やべーぞ！レイプだ！！

水城 ゆきかぜのことについて物申せなくなっちまうよ！

「大丈夫よお、ちゃんと抵抗できないように縛ってあるんだから♪」

「そ、そうかあ？」

「だどもお……」

「それにここでまた逃げるならあなた達もお友達の仲間入りにさせてあげるけど？ オークならオークらしく欲望に忠実になればいいじゃない♪ どっちがお好みかしら？」

「ヒエツ」

「そつ。それなら……フ、フヒツ！」

まずい。

オーク達の目の色が変わった。

表情を強張らせた畏怖の感情から、これまでの鬱憤を晴らすかのような復讐と欲望に彩られた気味の悪い笑みに徐々に切り替わり始める。

そのうち『(処女膜も膻性交肛門も肛門性交扁桃腺もオーラルセックス角膜も瞳孔姦くも膜も脳姦)奪えば全部ウ！』とでも言いだしそうな気迫を漂わせる。

ヘラヘラと笑うこともできず、両手足を拘束されているため立ち上がれず、うつ伏せになったまま潰れたカエルのように這って逃げるこ  
としかできない。

ヤツ等は機敏なハイエナのように取り囲んでから、じわりじわりと  
にじり寄ってくる。

高位魔族……と言ってもそれぞれの反応は各々まちまちだが『やつ  
と人間らしい感情』『最大級に嫌がることに)当たった』『愚者』おつかものと  
でも言いたげな表情を向けている。

「ゲヘヘ……先ほどはよくも仲間を殺してくれたなあ？」

「代償はその体でたっぷり払って慰安とさせてもらおうぜよ」

「もう逃げられねえからなあ？」

「ザーメン風呂で溺れさせて、一生の思い出を作ってやるだで」

「ヒヒッ。肉袋だっぺ。肉袋」

オーク共はやっぱり滅ぼすべきだ。

事前情報なしにこんな緑色の車止めポールの太さもある先端だけが毒々しいムラサキ色の例のアレを見せつけられながら強姦とか、普通の少女ならばトラウマものである。

あと脳姦などされたら対魔忍世界の住人はか弱いゆえに死んでしまっただろうから、身体があっち側の肉体で良かったとも思う。

眼孔姦は普通に私の性癖範囲内、脳姦はギリ守備範囲内だし。

そんなことを脳裏に浮かべながらばら撒かれた持ち物へ目指して這い進む。

エドウィン・ブラックも部下に指示を出し、私の武器になりそうな装備のたぐいも回収させてしまう。

「ぐえっへっへっへっへえ……っつかまーえた♪」

ああ、無情にもオークの1匹が私の右足を掴んだ。

Episode 154 『けつなあな確定な』

「やめっ……やめろおおお……!」

「ああああああああああああつ!」

「うううううううう……っ」

場の雰囲気盛り上げ、貶める前戯としてまずは鬼ごっこが開かれる。

逃げるたびに、秘部を自ら地面に擦り付けて自慰行為に勤しむ発情した芋虫のように這いずり回り、なんとか装備品の元までたどり着いたところで足を掴まれ引き摺り戻される。

そんなやりとりを早6巡目。

うつ伏せのまま乱暴に引き摺られ、起死回生の道具から引き離される私はクツソ情けない……。

子供がくずり出すような、被虐心を煽り立てるような、涙目の情けない顔を浮かべてうめき声をあげることしか許されていなかった。

「ギャツハツハツハツハッ!」

それをオーク共は、品性の欠片すら感じられない笑い声と手拍子を響かせて悦び蔑む。

一方で高位魔族達は――

エドウィン・ブラックは、私の醜態を酒のつまみに魔王の如く椅子に鎮座し、真顔のまま優雅にブランデーを回し。

蛇子ちゃんはぐずり声上がる度にニヤついて『がんばれ♪がんばれ♪ ゼラトちゃんなら突破できる♪ がんばれチャチャチャッ♪』とふざけた馬鹿にしたような応援を送り。

桃色髪の痴女はこの痴態の何が楽しいのか理解するほど下劣ではないのか、眉をひそめながらも上司の命令のもと佇む衛兵のように立ち尽くしていた。

お前等、ぶっ殺してやる。

ぶっ殺してやるからな！

ぶっ殺すからな！

今日じゃないけどな？ いつかな！

ぶっ殺す！

「抵抗できなけりや悪鬼羅刹もただの女だなあ！」

「おい、クソ女！ これから7日7晩、穴という穴を犯しまくって一生オデ達の肉便器にしてやるだよ！ オデ等の仔も孕ませてやるだ！」

「クソ女はクソ女らしく、腹いっぱいオラたちのクソを食<sup>ウンコ</sup>わせてやるだで！」

「ザー汁はウンコにトッピングしてやるっぺー！」

「胸にもかけてやるぜよ！ 胸に！」

「」「ギャハハハハハッ！」「」

オーク共は私を取り囲み、好き勝手言い始める。

ふうん？ なるほど？

つまり穴という穴——眼孔姦、鼻腔姦、外耳姦を含めた強姦<sup>レイプ</sup>の後は、スカトロと飲精プレイか……。

いずれも対魔忍世界らしいハードな性行為だ。

ただ眼孔2つに、鼻穴2つ、耳穴2つ、膾穴1つ、尿道1つ、へそ1つ、肛門1つ、口1つのため、彼等の竿の数に対して穴が6つも余ってしまうところに知恵の浅さを感じずにはいられない。

友達でも呼ぶつもりなのか？

まあ——いずれも私の性癖守備範囲内であるゆえにセーフラインだ。

ただ欲を言ってしまうと、あまり受け側スカトロは好きじゃないんだな、これが。

どちらかといえば、摘便したい側なんだ私は。

どうか想像を豊かにさせて欲しい。

私の親友であり、もしかしたらプロポーズを受けて将来の許嫁になるかもしれない鹿之助くんが、拘束され浣腸液を腹いっぱい詰めた姿を。

刻々と刻む時計の針ともにグリセリン浣腸液で解された滞留便は液体になって腹圧と行き場のない内臓内をグルグル！グルグル！

ヒツヒツ！フツフウー！

尊厳の限りに漏らさんと内股になってケツ穴けつなあなに全集中する姿。

ヒトの生理現象に抗う、愛くるしい無意味な行為。

じつとりと彼の全身にまとわりつく真珠のような甘じよっぱい冷や汗。

それらは真冬の窓ガラスに付着した結露のようでキラキラとした宝石のように輝いている。

彼の蛙腹をそつと撫でただけなのに、お腹の中に子供が入っているかのように脈動する。

やがて我慢できずに開放された出口から液体が吹き出す!!!

オラッ！イケッ！鹿之助ツツツ!!!

ケツアナハイドロポンプだッ！

彼の便秘は解消されることになるだろう!!!

ビビブツビツビツ！マリオ64のボム兵の声



まさに一石二鳥。

思わぬ快便によって人間の4大欲求食欲、睡眠欲、性欲、排泄欲の1つ、排泄欲が満たされるのと同時に性的欲求と感覚が混ざり合って誤認反応してしまう肉体。

チカチカと点滅する視界！  
フラッシュユ！

背徳感に溺れる脳みそ！  
ドーパミン  
ブレイン

刺激される前立腺！  
メスイキスイツチ

下半身の一角獣！  
ユニコーン！

花開く薔薇！  
アナールローズ

未消化便！  
トウモロコシ

嗚呼、人前で漏らすという行為に慣れない彼は 尊厳を踏みにじられた と勘違いし、恥辱のあまり尻と目尻から一筋の涙をホロリ……。

でも違うんだよ！これは!!愛だよ！愛なんだよ?!?!?鹿之助くうん!!!  
ンアンンンンンっ！なんてえっちなんだ！えっちなろう!!!えっちな  
だと言え！えっちなだな!!!ええ!!!エツチコン口点火！エチチチチチチ  
チチチw

＼ 勃 ／

これは一生、忘れられない思い出さいつこうのプレイになることだろう！

ああ、えっちなだなあ！

そのシチュエーションだけでカレーとご飯3杯＋1杯行けるぞお  
！私はアツツ!!!

……………待てよ？

この時の鹿之助くんは受け——つまり “ネコ” ……。

人ではあるが、ネコ……ジャコウネコなのだ。

ここはコピ・ルアクジャコウネコの未消化の排泄物から作られる  
コーヒーのことを堪能する方が適切な行為ともいえる。

ココアの直飲<sup>じかの</sup>みだつてできる。

そこから派生だつて……素敵だあ ♡

スロー ♡ スロー ♡ コーン ♡ コーン ♡ スロー ♡

ゴホン。

話を戻そう。だからア、スカトロつて言うのはあ……あくまでも相  
手の尊厳を破壊するための一種の手段であり、寵愛 ♡ の照れ隠し  
……。

オーク共が話している糞尿を相手に喰わせることは……すなわち  
一種の拷問と性的興奮、尊厳破壊につながるだろうが、不器用な奴等  
の——奴等なりの愛情表現なのだ。

ただ一般常識として〈医学〉的に考えれば食糞<sup>しよくふん</sup>は体内の白血球を著  
しく減少させ相手を様々な疾病に患わせてしまう可能性を高める危  
険な行為。

A型肝炎ワクチンの接種や抗生剤を判断に飲ませるなどして、安全  
管理の徹底が大事だろう。

安全管理を軽視したスカトロは、愛情表現と相手に伝わらぬ自慰<sup>オナニー</sup>  
でしかない。

奴等は照れ隠しで私には耐性が無さそうで、一見するだけでは愛の  
感じられぬ輪姦……レイプ&スカトロを尊厳破壊の選択したようだ  
が……残念だったな。

バカが！スカトロを選ぶなど、凌辱するはずの相手に対する愛情表  
現が隠しきれておらぬわ！

私の中でスカト口は守備範囲内の眼孔姦よりドストレートな性癖だよ！

ああ！私を力で屈服させることができるなら、ミルクセーキ作ってやってもいいぞツ!!!

「フヒツ……おつと……あうう、や、やめろっ……やめて……」  
「げへへ……」

コピ・ルアクのおかげで折れかけていた尻慰ケツイが回復、2度目の警告を発する。

1度目はこれまでのやり取りから済ませている。

当然、無視するオーク。

既に起死回生の道具を手に行っていることもつゆ知らず……。

前かがみになって私の足を掴み、見せ槍の位置にまで引きずる。

「お願いだから……」

3度目。

「何もできねえくせに」

「てめえの蜜壺にぶち込んだらどんな声で鳴くか楽しみだっぺ」

包囲網が狭められる。

奴等の下腹部は、先端に真っ赤な花をつけた極太サボテンのような熱感の塊を奮い起こしており――

蜂に刺されたかのようなアレルギー反応を引き起こした海綿体ル  
ルイエは膨張と共に気味のわるい病的な蕁麻疹のようなイボを浮か  
び上がらせ――

「やめろっつってんだろ!!!」



よおーく覚えときやがれエ!!!

「グゲツ?!」

「よっー!」

即座に重心をずらしオークの首でネックレスのようにぶら下がる。

これは少し警戒を緩めていたエドウィン・ブラックの私兵による狙撃、麻酔針タイプの弾丸による攻撃から生きた肉盾で身を護り、あわよくば誤射を狙う意図があつたからだ。

——カチツ! チリチリチリ……

〈組み付き〉した状態でライターで腕諸共ダクトテープを焼き溶かし、ナイロン製の結束バンドも火で炙りながら〈S T R R o l l 〉で無理矢理引きちぎる。

「アチチチチチチチチチツ!」

過程でオークの腹毛が焦げているが知った事ではない。

ついでに垂れ下がった髪先の先端にナニかが接触している感覚があるが、髪の毛先は切ればいい。

「アツツジャツツジャツツジャツツジャツツ!」

「ギャアアアアツ!!あのタイプはがんにがらめに拘束しないとだめだっぺー!」

「チンポちよん切られるだで!!」

「アレで対魔忍じゃないとか何者だがや!」

「あわ!あわわわわわ!気絶させれば終わる話ぜよ!」

——ブオンツ!

ここで田舎者オーク達のうち首を絞められていない……されど焦った田舎者オークによるへパンチが私のへそ目掛けて繰り出される。

私を鎮圧するための作戦。

とても仲間想いなイヤツなのだろう。

「ギヒっ♥」

良い台詞だ。

感動的だな。

だが無意味だ。

——ドゴオツ！

「オゴオツ!?!」

繰り出された攻撃はこちらのへ回避によって私ではなく、現在進行形で首を絞められているオークの左肺に突き刺さる。

「かひゅ……ぐっふッ！」

「ギヒヒヒヒヒッ！」

だたでさえ窒息気味にも関わらず、味方からのフレンドリーファイアで貴重な酸素を吐き出してしまう。

「カツ……コッ……」

息を吸おうにもそれは赦されていない。

痛みと息苦しきで元々青い顔を更に青くするオーク。

弱々しいへこぶしは私にさしたダメージを与えられない。

両膝を着き、首をもたげ、前かがみになつてくれたおかげで先ほどよりも安全な盾……肉かまくらを形成してくれる。

“完璧な掩蔽”だ。

「うわっわっわあ！す、すまねえ！」

「ゲエツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤア!!!」

〈組み付き〉で首を絞められているオークが顔を青くして脂汗をタラタラさせているように、私も “対象の首を絞める” 技を継続しゲラゲラ嘲笑いながら煽り返す。

今のはかなり効いたはずである。

人間の腕力の一撃などはたかが知れているが、オークの握力は人間の数倍はあるに違いない。

これは先ほどまで完全にキマっている筈なのに、オークは私の〈組み付き〉を力技で引き？がしかけてこと。

そしてオークやらオーガやらの四肢を手斧で切断している際に断面図から得られた〈医学〉情報である。

そんな中での同族による渾身の一撃。

力が抜けたおかげでヤツの引き？がしは最初の過程に戻る。

でも、うまく力が入らない。入っていない。

かわいそうになあ？

——ベリベリベリッ!!!

「!」

ここでライターで自らを炙り後ろ手で拘束された腕の拘束が引きちぎれる。

黒く焦げた陽葵ちゃんのジャケットに拘束されていた時に使われていたダクトテープが旧時代のロックスター衣装のようになびいている。

そのまま足の拘束も焼きちぎりにかかる。

「はあっ!？」

「ハヒユツッ！ ガハッ！ゲハッ！ゴホッ！」

オーク達の信じられなさそうな声を霸切りにへ組み付きを自ら解除し、倒立後転の着地の姿勢で身構える。

首を絞めていたオークを気絶させる意図など最初からなかった。

君達には生きた肉盾として私を包囲している状態でなければ困るのだ。

「ギヒヒヒヒッ！次は地面に固定する拘束具で入念に身動きを封じることですねえ！」

生還ののちプロポーズの返事と共に、ウエディングパーティーの出し物にへ製作（コピルアク）へ製作（ミルクケーキ）という新たな目標めがけて、淫夢くんのように片腕を振りかざし意気揚々と叫ぶ。



## Episode 155 『ハツタリ』

オークどもの宴から離脱した私へ、既にエドウィン・ブラックの私兵がへライフルを構えている。

だが水城ゆきかぜや秋山凜子のような対魔忍の敗北シーンの離脱ムーブから、見事に四肢の自由が利くようになるまでの時間は稼げた。

絶対と言っても過言ではないほどに、私兵共は目の前のオークが生きてようが死んでようが構わずにへライフルを掃射してこちらの活動を制止に掛かってくることだろう。

蛇子ちゃんの話では彼等は大損害を与えられたのだ。

それもへ手斧へ改造した釘打ち機へショットガンへというふざけた装備の小娘1人によって。

彼女なりの浮足立たせるための過大評価だったとしても無傷で済んではいないのは事実だ。

彼等は『再度大損害を引き起こさせる前に止めなければならぬ』と考えるはずだ。

「全員動くんじゃねえ!!! テメエ等も! 手がかりも! 何も全部吹き飛ばぞ!! 離れろ! 離れろツ!」

だから未だに田舎者の方言オーク達が生きた肉盾として機能している間に、腹マイトにしていた未完成のパイプ爆弾を1本取り出してライターに近づける。

今までになく腹からの力強い声を上げて、般若のように顔を歪ませては周囲を睨みつけてへ威圧する。

「ヴヴヴヴーッ!」

まるで狂犬病を患った猟犬のように犬歯をむき出しにして唸り声

を上げる。

私の腹にパイプ爆弾が巻き付けられていること。

既に手に握られたパイプ爆弾はいつでも着火できるような状況であることを360°全方位へぐるぐる回って見せつける。

「ライフル」兵にとつてしてみれば、当たり前どころが悪ければ確実に爆裂四散すると理解できるように、念入りに、だ。

「お、お、お、お」

「俺のギャランドウが……編み込みのギャランドウが……」

「い、イカレてる……この女……。この状況でまだ逆転できると思ってるべ……それに発情したまま短時間で笑ったり泣いたり怯えたり怒ったり……情緒不安定のキチガイだ」

「お、オデ、だから、やめようって言ったんだ……人間の小娘1匹を脅して犯すのにあんなに破格な金額なのはおかしいって……」

「ご、後生にするで。許してほしいだで、許してだで……」

最寄りのオーク達には確実に「威圧」が通ったのであろう。

態度がありありと私の気迫に押し負けている。

その証拠にオーク達の腰部から生え伸びるエリンギは、えのき茸のように細く萎びている。

両手を銀行強盗の被害に遭った銀行員のように上へ上げ、黒目のない赤い単色の眼を白黒させていた。

中には土下座のような姿勢を取る緑色に腐った大福もいる。

とてもじやないが、数秒前まで人のことを強姦しようとしていた連中には見えない。

「なんの真似？」

ライターを導火線に接しながら、私兵部隊に注意を払っていると側面より蛇子ちゃんの声が掛かる。

人が『動くな』と制止したにもかかわらず、彼女だけはヘラヘラと

緊張感のない顔を浮かべて◎のように展開している外円側の私兵と同じ距離に位置していた。

この状況で近づいてくるなんて、人の話を聞かぬ高位魔族だな！  
性的興奮絶頂期の陽葵ちゃんか！お前はア！

「お前も人の話を聞かぬ高位魔族だな！」

「十数分前まで追い詰められた弱っちい人間の言うことを聞いてあげる義理はないもの♪ それに♪ 『動くな』と『離れろ』なんて、言っていることが支離滅裂よ？ まだオークから犯されてないのに脳細胞は大丈夫？」

蛇子ちゃんの指摘に内心『うるせー』とは思う。

しかし焦って支離滅裂なことを喚き散らしても、伝えたいことは伝わらない。

当然至極な指摘ではある。

だから、いつでも導火線に着火できるような状態は意地しつつも軽く深呼吸をして高ぶった神経を落ち着かせる。

だが落ち着きを相手に与えるようなことはしてはいけない。

武装もなしに真つ向勝負では高位魔族には敵わない。

決して冷静に考えさせる隙を大衆に与えるな。

私の祖先による人の心に隙に漬け込んで揺さぶらせるやり口を思い出せ。

「うるさい！」

「凶星でかわいなお顔真つ赤つかねえ♪」

「じゃあ、近づくんじゃねえ！ 攻撃してくりやあ爆弾導火線に着火するぞ

！ 私も吹き飛ぶがヘライフル銃を構えている奴等も当然範疇内だ！」

警察官に包囲され、切羽詰まった銀行強盗のように唾を飛ばしながら吼え続ける。

少しでも〈爆破〉を脅しにチャンスを生み出すことさえできれば……なんとか挽回できると信じて。

「だって♪ どうするの？ エドウィン♪」

「……………つまらん茶番だな」

「そんな戯言たわごとが私やブラック様に通じるとでも？ お前達、惑わされるな。制圧しろ」

やはり他の高位魔族にも通じてない。

だが第一段階はそれでもいい。

こつちも邪神と同格の高位魔族相手に “ハツタリ” がご都合主義のように「うわー爆弾だー」とビビッて逃げ出してくれるとは想定してない。

「で、ですが……………」

「構わん。あのような円筒状の物体が本物の爆弾だとして、本当にお前達まで巻き込まれるだけの威力を持っていると思うのか？」

「……………いえ」

桃色髪の痴女が浮足立つ私兵達を律するが、直接的に手を下すことになる〈ライフフル〉を構えた彼等はドキマギした様相で私へと狙いを定める。

〈心理学〉でまじまじと彼等を観察すれば、額から一筋の冷や汗が流れ出ている。

『本当に引き金を引いて良いものか？』そつとトリガーに添えている指に躊躇いの動きが見える。

「ああ?! 桃色髪の痴女野郎、テメーはおつむまで売春婦かよ?! 導火線に火を点けて、爆発するのがーっただけどでも思ってたのかあ?! 起爆すれば必然的に胴体に巻き付けてある爆弾も連鎖的な誘爆を引き起こす! 〈物理学〉として連鎖的に引き起こされた “爆風は影響範囲

と威力を底上げする！”指揮した話じゃあ、安全圏内だと推定しているみてーだが……〈数学〉はからつきし、その調子じゃ大学で学位を取ったこともなさそうだなア?!”

だからこそ桃色髪の痴女の痴女をオモツクソに貶しながら、必死に彼女が指揮を執っているエドウィン・ブラックの私兵達を〈言いくるめ〉で畳み掛けて更に惑わす。

「それになア！……人間は、死んだらそこまでのですよオ」

今度はエドウィン・ブラックへと語りかける。

ぶつきらぼうな物言いではなく、先ほどのように穏やかな口調を使つて。

ただし方言オークから指摘されたような『まだ逆転できると己を信じ切っている』笑顔を添えて、だ。

私兵達を完全に無力化させるには、中間管理職の桃色髪の痴女などよりもその更に上の上席を黙らせた方が早い。

それに高位魔族である彼には〈言いくるめ〉など通用しないことも分かっている。

ちよつと考えるだけの時間があるならば〈言いくるめ〉というものは、看破されてしまうような脆いもの。

だからと言って青空日葵の母親のように1時間から数時間も掛けるのんびり〈説得〉しようものならば、肉盾を封じられたときのようにハツタリに対する対策を練られてしまう。

もちろん。蛇子ちゃんが私を恐れていないように〈威圧〉が通るとも、これまでに一回もうまく行ったことのない交渉術である〈魅惑〉に賭けるつもりもない。

だからこそ、ここでは〈言いくるめ〉のように短時間で相手の気持ち揺さぶる技能<sup>カード</sup>を切る必要がある。

「ブラックさん、貴方は高位魔族だから自信を守り、私を蘇らせる術な

ど知っているのかもしれないが……。仮に私がここで大爆発を引き起こして死んだとして。次に蘇ったとき、それが「私」だっていう証拠はどこにもない」

これは確証を経ていない不確かな情報。

されど仮にも私とはクトゥルフ神話TRPG世界線から転生して、青空 日葵の肉体に憑依した状態。

ここで私が肉片と化し、彼等が私を蘇らせたときに私がその時も憑依しているとは限らないのだ。

この世界へ転生することになったきっかけであるナイ牧師の発言では「次の人生は1度きり」 とも釘を刺されている。

つまり、だ。

身体の構造や脳組織は「青空 日葵」 なのだから……蘇生後も「青空 日葵」 である可能性がもつとも高い。

巻き込んでしまった青空日葵には頭は上がらないが、そもそも蘇生された場合。

青空 日葵が、私が転生してきた以前の青空 日葵であるという保証もない。

ある意味、スワンマン沼男と似ている状況になる。

どちらにせよ。

どんな凌辱や拷問を課そうが青空 日葵は彼等が追い求める書物が何処に隠されているかなんてことは知る由もないだろう。

当人が死亡することで、奴は調査への重要な足掛かりの1つを失うに違いない。

現に彼等は、私の命の<sup>演説行為</sup>価値切りに対して横槍を入れて来ないことから私の命にはそれだけの価値がある証明にもなっている。

「それに。あなたは気づかれていますしやられるのではないでしょうか？」

「……………」

直接的な言葉には表さないが蛇子ちゃんは『私の存在』について既に3カ月前に気が付いているのだ。

続いて本日、様々なカードを切った。

『同じ高位魔族、それも蛇子ちゃんよりも格上の存在が気づいていないわけがない』と、暗にその趣旨を伝える。

エドウィン・ブラックは何も答えない。

蛇子ちゃんはどこか他人事。どこ吹く風で、半身だけを私に向けエドウィン・ブラックと私。どちらの反応も見られる地点特等席で行く末を見守っている。

「要するに私が死ねばそちらはゲームオーバー。あなた方は一生どんなにあがいても求めている書物を手でできないのですよ」  
「……………」

「そうだ。賭けをしましょうよ。私を静止させると同時に導火線の炎を止められるかどうかの賭け。本当にこの手に持つパイプ爆弾がハツタリかどうか。……………蛇子ちゃんの連絡からお会いするまでに約2カ月もの期間、この私が何も準備してこなかったと？」

鼻で笑いながら導火線の根元で、ライターの花打石に親指の力を籠める。

これは〈信用〉だ。

対魔忍世界へ訪れて、これまでに積み上げてきた私の〈信用〉。

〈信用〉とはこれまでに私が見せてきた手の内から、それらの行為がどれほどまでに “自信に満ちているか” 表したものだ。

『新クトウルフ神話TRPG』、『CALL of CTHULHUクトウルフ神話TRPG』とでは意味が少し異なるものの、このハツタリを押し通すにはどのカードよりも〈信用〉が一番効果的な技能カードとなるはずだ。

エドウィン・ブラックが分析した通り私は『(条件に応じて)己の死を厭わない存在』なのだ。

ならばどのように動くか、彼の中での私の動きは簡単に読めること

だろう。

「……………これ以上の被害は看過できない。退け」

「ブラック様!？」

「……………」

「……………承知、致しました。全部隊撤退」

通った!

喜び舞として文明堂ダンスを踊りたいところだが堪えて、エドウィン・ブラックと蛇子ちゃんから視線を外さないようにする。

桃色髪の痴女はそのまま私兵達を連れて通路の先へと共に姿を消してしまう。

さあ、あとは私も必要な荷物を纏めてこのまま私自身を盾にそそくさと離脱して五車町で引きこもり生活を送るだけだ。

あとは公衆電話のタウンワークから職業：対魔忍を探し出して、エドウィン・ブラックと蛇子ちゃんが謎の書物を狙っているとタレ込むべき――

【待て】

「はい」

桃色髪の痴女と私兵達が消えて行った方向とは別方向の通路へ、エドウィン・ブラックの眼へ睨みつけながら逃げ出す私へ彼から再び声が掛かる。

正直なところ足早に立ち去りたかった。

おもな理由としては、高位魔族の頭数が減り最も逃げ出しやすいチャンスを用意にはしたくはなかったこと。

また蛇子ちゃんは桃色髪の痴女の方を追いかけて行ってしまったことにある。

だけでも、どういうわけか彼の制止に抗えず逃げることを中断してしまう。



「先ほど賞状を欲しがっていたな？」

「あー……あー………？？」

エドウィン・ブラックからの突然の申し出に固まる。

……そんなことを言ったような気もする。

言ったような気もするが本気じゃない。

ちよつとした冗句ジョークのつもりだった。

それに賞状を受け取るぐらいなら、お前のところの私兵に奪い取られたままの〈手斧〉と〈改造した釘打ち機〉を返却して欲しいのだが……。

【言っただろう？】

「はい。言ったかも？ 言った？ 言いましたっけ？ 言いましたね？」

「ああ。だからくれてやると言っている。【その場で待て】」

「はい……………」

「……………」

「あつ、でも。今の私としては賞状よりも〈手斧〉と〈釘打ち機〉の方を返して欲しいのですが？」

「……………」

「あれ、えっと。実は……借物で……？ 夏休み明けに返却しないと

怒られちやいそうで……」

【本当か？】

「もちろん嘘ですが？」

「……………」

「……………」

「……………いいだろう。賞状に加えて景品と共にくれてやる」

「ええ」

【貴様が武装解除したらな】

「は？ なんてそんなことになるんですか？」

「……………」  
「そもそもこっちは武装なんか奪われて無いんだが？」

「……………」冗談だ」

「冗談、ですか」

「ああ、和んだだろう？」

「いいえ」

「そうか。では、そのまま【待機しろ】」

「いいでしょう」

「……………」【賢明な判断だ】」

逃げなきゃいけないのに脳が語りかけてくる。

『もらえるモンは貰つとけ』『言ってみる価値はあったな』『この無法地帯で武器の携帯は賢明な判断だ』と声が、私がささやきかけてくる。

えーつと…………？

でも賞状なんか貰ってどうするの…………？

夏休み明けに鹿之助くんや陽葵ちゃんに自慢でもする？

『みてみてー！高位魔族からサイン貰っちゃった☆』つて？

陽葵ちゃんは全身全霊で褒めてくれるだろうけど、鹿之助くんは怒り狂い出しそうではある。

いいや、この場合は陽葵ちゃんも心配しそうだなあ。

なんとなく2人の反応が容易に想像できることが、特に2人を心配させてしまっていることが辛い。

彼は洋館事件時に私が所持していたような衛星電話を取り出すとどこかへと連絡を取り始める。

きつと〈手斧〉と〈改造した釘打ち機〉の追加に関する連絡だろう。

…………。

…………。

…………。

……………何かがおかしい。

でも流石に未完成のパイプ爆弾だけでこの夜の街を脱出するのは心もとなさ過ぎる。

今度はエドウィン・ブラック以外に追い込まれて次こそお陀仏という可能性だってある。

やっぱり武装は必要だ……………よな？  
待たなきや。

Episode 156 『よくある嫌がらせ』

待機時間の間に私兵にばら撒かれた荷物を一通り詰め込み終えてからエドウィン・ブラックの方を見やる。

彼は私が冗談で欲しかった賞状を片手に内容をジロジロと文章を添削する教師のように眺めてはブランデーをチビリチビリと飲み干していた。

景色で用意してくれると言ったへ改造した釘打ち機が見当たらないが、やはり何かがおかしい。

そもそも武器なんて、どこかで現地調達すれば済む話だ。

確かに得物がないことは少し心もとないのは分かるが……どうして真偽も定かでない奴の言い分を素直に聞いてやる必要がある？

彼の私兵が私のハツタリを完封するための時間稼ぎのためへ言いくるめくられたことも念頭に置いて離脱のため足早に通路へと向かう。

300ラウンド  
360秒6分間は待つてやったのだ。

これ以上は待てない。

充分、待つてやったはずだ。

「お・ま・た・せ♪」

逃げ出そうとしたところで、蛇子ちゃんが戻ってくる。

タイミングが悪い女だ。やはり時間稼ぎだった。

ああもう！ これじゃあ、逃げられる最大のチャンスの逃したようなものじゃないか！

片目を瞑って片手で後頭部を搔きそうになるが我慢する。

「……………」

「……………」

「もく。始祖の高位魔族に一般人、二人そろってそんな露骨なふく

れっ面にならないでほしいわね。これでも臆病なゼラトちゃんの不  
信感を募らせないようにつて急いだのよ?」

“急いだ” と言うわりには悠々と歩き、一筋の汗もかいていない  
のだが。

しかし彼女の後に続く紐付きアヒルの散歩玩具のように引きずら  
れる物体に合点がいった。

華やかなラッピング包装された60cm(縦幅)\*60cm(横幅)\*  
170cm(高さ)の立方体は、まるで季節外れのクリスマスプレゼント  
トのようだ。

もちろんラッピングされた箱の上部に、私の〈手斧〉と〈改造した  
釘打ち機〉が乱暴にダクトテープで貼り付けられている。

それ私のダクトテープだろツ!!!勝手に使うんじゃねえ!

「……。それはそれはお気遣いありがとうございました。景品はそこ  
に配置、賞状は机上に置いて。2人は御退場願えますか? 取るもの  
取ったら離脱しますので」

「フッフッフッフッフ」

「……………」

しかしながら2人とも動かない。

蛇子ちゃんは1990sのテレビ番組で放映されていた——豪華  
賞品のパジエロを当てるためのルーレット番組に登場する豪華景品  
の横で佇むバニーガールのように動かない。

『パジエロ、パジエロパジエロ♪』の掛け声とともに、《無欠の  
投擲》でお前にダーツをぶち当ててやろうか。

エドウィン・ブラックは賞状を片手に直接取りに来るまで待機する  
つもりのようだ。

「はい。素直に渡してくれないやつですね。帰ります。それではみな  
さんご機嫌よう」

だが私はそこまで馬鹿じゃない。

違和感はあるが、たぶん好奇心に釣られて残った部分もある。

何か術中に陥っていたとしても、エドウィン・ブラックは私に何をしました？

奴の手の内の1つであることを考慮して思い出してみるも、ただ呼び止められて普遍的なやり取りを少し交わしたぐらいだ。

あの会話の中で気になることを思い出しても……。

強いて言えば武装解除リラックスマスを求められたぐらいだ。ハツタリを除けば、全部お前等に奪われたっていうのに。

第一。

あんな私を陥れた挙句ハメようとした高位魔族2人組の間に挟まれに向かえばどうなるかなんて考えなくても答えが出そうなもの。

人間を犬猫と同じ愛玩生物と同等に見るのも大概にせえよ？

発言にそんな意味を込めて2人のいない街角方面にヒグマとの遭遇時の対処法の動きで撤退する。

「貴様がどこまで冷酷に成し遂げられるのか差し測っていたのだが、私としたことが確認しそびれた項目があつてな」

街角を曲がり、2人の姿が見えなくなった瞬間に踵を返して脱兎の如く逃走しようとしたところで意味深なエドウィン・ブラックの声が聞こえ、力強く踏み出した一歩目が止まる。

「ゼラトちゃん♪ 景品はいらぬのかしら？ 要らないのならその田舎者オークのエサにして、終わったらこっちで処分しちゃうけど……いいわよね？」

続けてあざとい声色をだして悪辣な蛇子ちゃんの追撃まで加えら

れる。

——ガタツ　ガタガタガタツ

続いて箱が自発的に動いて地面が擦れるような音。

……………まさか、な。

こんなあからさまな高位魔族の罠に引っ掛かりに行く私ではないが、クトウルフ世界線で嫌ほど同胞たちに差し向けられた嫌がらせの数々や鹿之助くんの顔が脳裏を過ぎり、素直に逃げ出すという選択肢が取れなくなる。

「……………」

私はまだ邪神共の手のひらの上で踊り続けなければいけないのか。

「……………フツ」

「フツ♪」

私がジト目で恨めしそうな顔をしながら半面覗かせた途端に鼻で笑いやがって!!!

クトウルフ神話TRPGの邪神共はたった1体の神格を除けば基本白痴であり自我や感情というものが感じられない上位存在であったが、こっちの邪神共はどいつもこいつも人間に似た意図を表しているのが腹立つ。

ああ！畜生め！

そのラツピングされた景品の中身だけ確認したら帰る！

私は絶対に東京キングダムから帰ってやるからな!!!

二度と来るか！　こんな無法地帯！

「……………暇じゃないんです。早く中身を見せたらどうですか？」

「もちろん♪」

——バリバリバリッ！

乱雑に引き剥がされる包装紙。

「さあ。貴様はこれにどのように対処してみせる？」

「クスッ♪ あの対魔忍の子の時ように見捨てて逃げ帰る気なのかしら？」

私の反応を嘗め回すように観察する高位魔族。

中身が開示された途端、馴染みある挑発にハラワタがグツグツと煮えくり返る。

自然と未完成のパイプ爆弾とライターを握る手が強まり、わかつてやっている彼等に対して青筋すら立つ。

景品の中身は等身大のリカちゃん人形のようなだった。

正面は透明なケースで覆われていて中身が一目瞭然なもの。

リカちゃん人形と違う点を挙げるならば、まずプラスチックのケースに保管されている中身は全裸の人間であること。

その全裸の人間は自由な身動きが取れないように、分娩台に乗せられているかのような卑猥な格好で四肢と首を針金で拘束されていること。

その他の備品にはバイブやアナルバイブ、媚薬瓶、オークの白濁ローション、ネコミミ尻尾などのアダルティなグッズの数々。

また説明文らしきところにはその人物が生前に身に着けていたものがセットで梱包されているようだった。

これがただの他人だったら、蛇子ちゃんの言う通り頭に袋を被せられた対魔忍の時と同じように見捨てていただろう。

私には関係のない存在に用はない。

しかし、ケースの中の人物は——

「この子、私の記憶違いでなければゼラトちゃんのお友達じゃなかった



たかしら♪ ……お名前は……………そう、『駒水 幸子』ちゃん♪」

鹿之助くんの話では、6月に転校したはずの駒水ちゃんE p i s o  
d e 8 8の姿だった。

スネークレディの商品説明に歯がガチガチと細かく鳴り始める。  
常識が通じない土人が、わが家に土足でスカズカとあがり込んでき  
たような心境だ。

第三次世界大戦で侵略やテロを受けた当該国やかつての同胞の心  
境がわかるような気がする。

「ゼラトシーカー。貴様はどのように出る？ 逃走か。それとも我々  
に立ち向かってくるか」

「とおつても♪友達想いのゼラトちゃんのことだもの、絶対に彼女を  
助けに戻るに違いないわ♪」

人の気持ちも知らないで、賭けを続ける高位魔族に飛び掛かって宇  
宙の彼方へと封殺してやりたい衝動に駆られる。

だが奴等はわかってやっているのだろう。

あえてやっているに違いない。

これは第三次世界大戦の時と同じ。

モラルをかなぐり捨てた敵への挑発行為だ。

……心頭滅却。

頭に血が上った状態では冷静な判断はできなくなる。

0.5ラウンドの時間を置いて冷静になるように語りかける。

再び建物の影に姿を隠して、両目を瞑って後頭部を片手で搔く。

そこから左手で握りこぶしを作り口元へ当て、右手は肘に添える。

さあ。ここからどうやって駒水ちゃんを助けるならばどのよう  
に動くのが最適解だ？

相手は生半可なカルティストではない、邪神。

それも2体。

こちらの存在を知覚済み。

うち1体はどんな手段を講じてくるかもわからず、従者達は既に蜘蛛の子を散らすことに成功している。されど体制を立て直せば襲撃してくることは想像に難くない。

何よりも警戒しなければならいのは、彼等は人間社会に対して白痴ではない。

むしろ逆。

賢知な存在。どうすれば人間が嫌がるか熟達しているし、馴染みもある。

知恵が回るぶん下手な邪神より厄介だ。

おまけに先ほどから姿を見せないが痴女の存在も踏まえなければならぬ。

武器が必要だ。

でも主力武器は奴等の手中にある。

返してくれるようなことを言っていたが、どこまでが真意かわからない。

……。

待てよ？

いや、これが狙いなのか？

私を長考させ更に未<sup>ハツタリ</sup>完成のパイプ爆弾を無力化させる時間を稼いでいる？

装備を整えるために離れるか……？

ダメだ。

スネークレディのあの発言。

私が逃げ出したとわかったら容赦なく駒水ちゃんをオークのエサにして嫌がらせを実行してくるだろう。

無策で助けに向かうことは絶対にしてはならない。

だがクトウルフ神話TRPGに則ったルールで考えるならば、現状の装備では奴等を打ち負かすことは絶対にできない。

つまり、ここは逃走を選ぶ選択肢が最も賢い。

されど見捨てて逃走を選べば、あの邪神2体が今後、私の身内を人質に使った嫌がらせ行為を控える……いや、次はもつと親しい友人を人質に扱う可能性も捨てきれない……！

もし、あの場で拘束されていたのが鹿之助くんだったら……。

「……クソが」

私の今のこの葛藤すらも奴等は想定済みなのだろう。

その上で状況を楽しみ、試練を与えてきている。

まるで神様にでもなったように。

Episode 157 『現地調達』

「……………考えさせてください」

「フウ〜ン♪」

絞りきった雑巾から滴る水滴のような声で、こちらを試す高位魔族達にタンマをかける。

街角の奥から「ようやく弱点を見つけられた」と言わんばかりの、スネークレディの楽しげな声が聞こえる。

背中をコンクリート敷きの壁に付けて両手で顔面を覆う。

どう転んでも打開策が見えない袋小路に追い詰められているのはわかる。

仮に私がここで未<sup>ハッタリ</sup>完成のパイプ爆弾を突きつけて『駒水ちゃんを開放しなければ全員まとめて吹き飛ばす!』と追加の脅迫を講じても通ることはないだろう。

それこそ救助に入ると思っているスネークレディあたりに友達を吹き飛ばせるわけがないと、「そう。やってみれば?」と言われてもしたら、おしまいだ。

できないことを晒せば、<sup>ハッタリ</sup>信用でこの場を通そうとしていることがバレてしまう。

無防備であることが一度でも露見してしまえば、制圧など赤子の手をひねるよりも簡単に違いない。

今、私が私を自衛できているのは、私が魔族語の本の情報を持っているという価値と未<sup>ハッタリ</sup>完成のパイプ爆弾が起爆すれば情報を失うという価値を両立できているからこそ、無事でいられているのだ。

私の武器が〈近接戦闘(格闘)〉や体術のみならば、エドウィン・ブラックは直接手を下さず〈ライフル〉銃を構えた私兵部隊だけで十分に事足りるだろう。

(嗚呼。……チクシヨウ)

考えてばかりでもだめだ。

猶予を与えたばかりにパイプ爆弾を起爆させずに制圧できるとい  
う別の対処法を編み出されても私は終わる。

それに次の奴等の出方として予測できる次の行動は、駒水ちゃんを  
対価に自発的な武装解除を促してくるはずだ。

これまでの経験から割合的にはそうだった。

いまはあくまでもこちらの出方を伺って……否。反応を楽しんで  
いるだけだ。

飽きたらいずれそうなる。

対魔忍世界というところも考慮すれば、衣服や靴も含めた装備品す  
ら解除させる。

これまでの非礼の詫びとして、全裸土下座とオークに命じて尿を  
ぶっかけさせ、飲尿を命じる。

顔面便器による尊厳破壊まで手の内が読める。

私ならばそうする。

正義の味方が無様に凌辱される瞬間ほど優越感に浸れるものは無  
い。

「……わかった。わかりましたよ」

「何が分かったのかしらあ♪」

顔面を覆うのを止めたタイミングで、建物の影から首だけをニョ  
キッと生やすスネークレディ。

鳥のような羽毛があれば、今ごろ私は細くなっていたに違いない。

「か、んがえるにもこんな鬱蒼とした場所じゃ考えが纏まらないって  
ことですよ。大通りの賑やかな場所での後の行動を考えさせてい  
たいただきますー！」

震える声を押し殺して、旦那に対し愛想が尽きた嫁が放つ『実家に

帰らせて頂きます！』のニユアンスでその場から離脱を試みる。

ひとまず武器だ。

邪神を相手取るのに作戦も魔術も使わず素手だけで挑む探索者など聞いたことは無い。

とにかく今はハツタリ以外の武器が必要だ。

『私が見てきたこれまでの探索の中で、奴等に対抗できそうな武装を模索しろ』と思考を張り巡らせつつ、表向きとしては思い立ったように行動を開始する。

「逃げる気？」

鋭いスネークレデイの一声が無防備にも背を向けた私へと刺さる。

「なあゝに言ってるですか、蛇子ちゃん。今ちよつとばかり賑やかな場所で考え事をするって話したばかりでしょうが！ あっ……ふん？」

「……その顔は何が言いたいのかしら〜♪」

「ははーん？ 高位魔族ってことは人間よりも長寿だったり？ つまり……夕ごはんは昨日食べたでしょ！ 朝ごはんなら8時間後ですよ！」

先ほどまでの絞り出した声とは打って変わった明るくふざけたような声でスネークレデイの一言を往なす。

「ボケ始めちゃった蛇子ちゃんだと話にならないでしょうから、ブラックさんこれは貴方に宛てた発言になります」

彼からの返事はない。

返事はないが聞いているものとして扱って続ける。

「私に駒水ちゃんの処遇について考える時間を与えることは、すなわ

ちそちらもこちらの対抗策を練られるでしょう？ そちらは私の自爆行為を阻止できない以上、長考する時間は互いにとつて有意義だとは思いますがねえ！ ギツヒツヒツヒツヒツ！」

素の笑い声を上げながら、こちらの余裕をアピールして〈魅惑〉する。

彼女を助けるのか見捨てるのかの濁しもバツチリだ。

これは性的な拷問に掛けてでも私から情報を得たい彼等にとつては充分な交渉材料であろう。

私が駒水ちゃんを助け出して高位魔族の包囲網を突破する作戦を考案している間に、先にそちらが自爆させない方法を思いついたのであれば施行すればいいだけの話でしかない。

おまけに私が仮に救出の打開策を練り終えたとしても、現段階の話では最終的にはあの場所へと戻るのだ。

「そうだ。私のことがそんなに心配なら、そちらさんは頭数だけは充分に揃っているのですから考える間、本当に逃げないか監視役・尾行役を着かせてはいかがでしょう？ 十分、腕の立つ狙撃手も居るところですしねえ！ ギヒヒヒヒツツ！！！」

大声で煽りながら着実に現場から離脱する。

……

……

……

うつそだろ……？

……どうやら先ほどの交渉術〈魅惑〉は通った……？

………今まで一度たりとも成功した実感がない〈魅惑〉術が？

いや、うぬぼれるな。あくまでも泳がせているだけと考えるべきだ

ろう。

一応 “マダム” と 遭遇した地点までは無事に辿り着くことができる。

周囲を見渡すが人っ子一人見当たらない。

〈目星〉をつけて周囲を調査をすれば、やはり私兵が闇夜に紛れてつけてきているのだが。

「さて……」

壁を背に店先のオーニングの下に隠れ、頭上から覗き込まれない位置でマダムから受け取った地図を確認する。

尾行している狙撃手たちを撒けるようなルートもあることにはあるのだが、早期から逃げられたと判断されて駒水ちゃんに危害が向かうことは阻止したい。

ゆえに尾行しやすい道を敢えて選んで大通りを目指す必要がある。

「よし」

ある程度ルートを頭に叩き込んだのちに荷物を開いて、青空日葵の母親の工具を取り出し〈機械修理〉で腕時計を分解する。

閃光玉となる予定であったライターも解体して火打石をパイプ爆弾と組み合わせる。

正面からの狙撃に注意を払いながらパイプ爆弾を片手での着火式に変化させることは、タイムミリの迫る時限爆弾を〈電気修理〉で解体した時のようなスリルだ。

とにかく見栄えは悪いものの、両手を使用しなければ脅威を發揮できなかつたそれを自爆程度ならば片手だけでも発動させられる（ように見せかける）段階に至ることはできた。

「あとは……」



また作業をしている合間に、あの高位魔族達を黙らせる武装が思い浮かべる。

〈改造した釘打ち機〉と比較すれば『邪神に “アレ” が通じるのか?』という疑問は残るが、エドウィン・ブラックは差し置いても蛇子ちゃんは『グレード・オールド・ワン』級、ギリ『伝統的な怪物』級の邪神だ。試しもせずに完全に通じないと可能性を破棄するのはまずい。

……

……

…

「おい早く水を持ってこい！」

「私の店が！私の店がぁー！ツッ！」

「火が燃え移るぞー！」

「チクショウ！対魔忍め！むごいことをしやがる！」

「早く火を消せーツッ！」

「うわぁ……」

未完成のパイプ爆弾の火打石に指を掛けながら大通りを抜けた先は火の海だった。

片翼の邪竜／混沌の使い魔のような黒煙がクソの詰まった大腸のように膨張しながらモクモクと上空へととぐろを巻いている。

大通りにいる人々の大半は押し寄せる津波のように侵食していく炎に対して必死に対策を講じていると言った方が良さげか。

残りは逃げて行く人々やら、火事場泥棒、資金や家財を運び出す人々、それを狙う路上強盗、応戦する護衛で構成されている。

この混乱は、一言で言えば混沌だ。

また不運な事に私が対策武器を調達しようとしていたSMシヨツプが火事の火元らしい。

セクハラな手付きで竹鞭のレクチャーをしてくれた店主が映画『PLATON<sup>プラトーン</sup>』の表紙のように両腕を天に持ち上げ嘆き悲しんでいる。

消防車など現れるわけない廃棄都市では、近隣住民による昔ながらのバケツリレーや水の魔術、消火器での消火活動で行われ、誰も爆弾をこさえた女に気づいていないようだ。

パリで定期的に発生する暴動のような光景を目の当たりにしながらも、あの高位魔族2体をしばき倒すための得物が残されているか確認する。

……………<sup>グッドラック</sup>だ。

店先に乱雑にまとめられていた竹鞭は、避難時に蹴り飛ばされたおかげでかろうじて火の手から逃れていた。

「うくううう！あんまりだ……あアアアんまりだ  
アアアア!!!」

SMショップの店主がPLATONのポーズから変化し地面に額をこすりつけて泣き叫んでいる間に、そっと転がった竹鞭を回収し、火事場泥棒に加担する。

(……………)

それにしても東京キングダムの上には政府による一大プロジェクトの名残のある適当な感覚に消火栓がいくつか備わっている。

備わっているのだが、誰もそれを扱おうとしていないのは印象的であつた。

正常に機能してればバケツリレーや水の魔術などで消化するよりもよっぽど効果的には違いないのだが、この島の連中は消火栓がどういうものか分かってないのかもしれない。

はたまたいくつかの手順を踏んで放水に至る消火栓を扱うよりも、魔術やリレーの方が簡単なのか。

あるいはパニックでそこまで視野が広がらないのか。  
もしくは消火栓をこじ開ける道具がないのか。

恩を売るため封をこじ開けるなどをして消火活動に参加したいところであるが……。

こつちもいっぱいいっぱいな状況なのだ。

一応、店先で泣き崩れている店主には、少しばかりの心持の対価として持ち合わせの現金全部——主にセルフファッサー眼孔屍姦オークから頂戴した金銭で支払いを済ませつつその場を後にする。

「……………」

一方で……。

こんな大火災を引き起こしたのは対魔忍らしいが、どのような対魔忍なのだろうか？

少なくともビルの屋上で見た紫黄赤の対魔忍ではないだろう。

水城ゆきかぜちゃんやんは雷使いだったし、紫の対魔忍は常人よりも素早く動けるタイプの対魔忍、黄色の対魔忍は影を自由自在に移動できるタイプの対魔忍だったはずだ。

それこそ神村みたいにロケットランチャーから激しい火球を飛ばせるようなやつだとか？

放火は日本国憲法において死刑に値する極めて重罪な犯罪なのに……。

こんな大通りの人目のつく……。もしかしたら監視カメラとかで映像として納められているかもしれない場所で放火するだとか、怖いものなすぎだろう。

対魔忍がやったってバレてるってことはきつと姿も見られているだろうし……。

放火した対魔忍は後先考えないことで無敵か???

魔族が話していた通り、公共事業が消火活動できない場所での放火とか本当にエグい。

“放火をする” という行動の観点からはとても仲良くできそう

な気はするが、もうちょっと上手な放火のやり方と離脱方法をレクチャーしたいものだ。

(2)』

さてSMシヨップからかっぱらってきた竹鞭を筒状に束ねる。

剣先は素早く振るうことができるように空洞にして、持ち手部分には未完成のパイプ爆弾を詰め込み、竹刀の形が崩れないような補助具にする。

それから形が崩れないよう髪留めで固定し、私が東京キングダムに持ち合わせることを断念した近接武器である『竹刀』を〈製作〉した。

ブンツッ！ ブンツッ！ ブンツッ！

ブオオオン！

お試しで竹刀を振り回してみる。

空を切る良い音。

振りかぶったソレは刀で切りつけるといよりも、野球選手がバットをフルスイングするような棍棒的な扱い方だ。

だが、これでいい。

竹刀の形状になるよう整えているが、竹鞭を素材に使っているため振りの動作に合わせて先端が鞭のようにならざるを得ない。

悪くない出来だ。

本来、竹刀を振るう場合は『クトウルフ2010』における〈日本刀〉技能を26頁 を用いることで初めて扱うことができる。

しかし、この自作竹鞭竹刀を『新クトウルフ神話TRPG』のルールに当てはめてしまうことで私はこれを〈近接戦闘(格闘)〉で振ることができるようになった。

武器として〈近接戦闘(刀剣)〉の技能に分類されそうなものではあるが、竹刀は『新クトウルフ神話TRPG』61頁における〈刀剣〉条件を満たしていない。

そのおかげで、竹刀を大きな棍棒Ⅱへ近接戦闘（格闘）武器として振るうことができるのだ。

監視役の私兵へ見せつけるように、西洋の騎士がレイピアで誓いを立てるときのように眼前で竹刀を立てる。

これが高位魔族に一矢報いるための種のある種の秘密兵器。

竹刀が秘密兵器などという、剣道部に所属している中学生が中二病を患った際に対テロリスト装備として挙げてしまいそうなほどに滑稽な装備だが滑稽な装備だからこそ光るものが存在するのだ。

「またもや私だけが私に関する情報カードを1つ切ることになりそうだが……。」

あの高位魔族達には身体でわからせる必要がある。  
私の友人を人質にとるとどうなるのか。

五臓六腑、骨に染みわたるまでトコトン追い詰めて二度と人質を交換条件に隷属させようなどという選択肢が上がらないほどに。

駒水ちゃんが本物か偽物かあの距離では定かではない。

しかし毒を食らわねば皿までという言葉があるように、罠であろうが一回確認はしてやる。

もし本物ならば正体を確かめつつも救出するチャンスへと繋がるのであればエビで鯛を釣るようなものにもなる。

……

……

…

「ほおらね、私の言った通りだったでしょ？　ゼラトちゃんには――

――ちよつとお？　正気？」

「……」

竹刀を携え、屍山血河を築き上げた場所。

駒水ちゃんが囚われたままの地点へと戻ってくる。

既にパッケージはスネーククレデイの手によって開封されていた。あまつさえ彼女の手には一升瓶程の太さのバイブが握られており、駒水ちゃんは全力で身をよじって逃げ出そうとしているところだった。

私の帰りが数分遅れていればツマミ食いされていたであろう。

そこへ打開策として持ち合わせてきた私の軽装に、スネーククレデイもエドウィン・ブラックも白い目で見ると見る。

エドウィン・ブラックに至っては愚者を見るような目で一瞥したのちに、両目を瞑り私という存在が虫けらのような意識すら向ける程の相手ではないような邪神特有の反応を見せる。

至って普通の反応だ。

客観的に考えても、邪神相手に自作のみすぼらしい竹刀で立ち向かうなどと正気の沙汰ではないだろう。

誰だってそう思う。

普通はそう思う。

されどその常識が撃ち破られた時、アイツ等がどんな顔をするのか想像するだけでゾクゾクしてくる。

「さ、やりましょうか……」

真剣な顔をしながら中段の八相の構えを取りながらスリ足で近づく。

未完成のパイプ爆弾などと比較すれば、竹刀など有効射程も殺傷力も耐久力も何も期待できない貧弱すぎる装備。

「そんな装備……でねえ？ 私のことナメてるの？」

スネーククレデイの刺すような殺意の籠った一言が、私の表皮をチリつかせる。

これまでのおふぎけ混じりの発言からは考えられないような気迫に圧倒されて、踏み出した足が強張る。

「……ギヒヒヒヒッ」

しかし殺意には殺意を。

顔を笑みでいびつに歪ませ、白い歯をギラギラと見せつける。

そのまま絞るように竹刀を力強く握りしめ前進を続ける。

前進するたびに握りしめる手は強固にしながらも肩の力を抜いて手首を柔らかくする。

元より探索者なのだ。

なにも完全に正気<sup>まっとう</sup>なままでクトウルフ神話TRPG世界を生き抜いてきたわけでもない。

そもそも竹刀の持ち込みは、最初の近接戦闘用武器として候補に挙げていたもの。

ナメていると思うならば上等。

そのままそつちも舐めてかかってみろ。

まえさき市の時みたい泣きっ面にしてやる。

「……」

「はいはい分かったわよ。はあ……」

退かぬ意志を強く表す私と対するエドウィン・ブラックは椅子へ優雅に腰を掛け、傍にいるスネークレディを顎で指示する。

スネークレディとしては、うんざりした顔で一升瓶級のバイブをほっぽり投げて対峙する。

彼女は私の装備に対して心底がっかりしているのだろう。

ヤツの気持ちは理解できる。

あんなに大胆不敵なハツタリにハツタリを重ねていた奴がこんな装備に戻ってきたら溜息の1つや2つ吐きたくもなる。



「はあ……興覚めだわ。ホント興ざめ。あんな大口を叩いて大層な武器でも持つて帰って来るのかと思えば……」

「……………」

「ねえ、ゼラトちゃん？ そんなふざけた装備で私に立ち向かってくるってことは、それ相応の覚悟があるってことよね？」

おどける様子もなく、楽しげな声も出さず。

ただ口元だけ笑みを浮かべて語りかけてくる。

ファツションショーでランウェイを歩くモデルのような無警戒な歩み。

死にかけの獲物をどのようにして捌りいたぶってやろうかと考える猫のような表情。

「もちろん。蛇子ちゃんも済みました？ まえさき市の  
ように泣かされる覚悟は」

倒置法を用いながら、周囲に〈目星〉をつけて潜伏している狙撃兵の配置の確認を済ませて彼女を煽って対抗する。

『お前は前座だ』と言葉には表さず態度で示す。

「随分と偉くなったものね。逃げ帰ることしかできなかった弱人間のクセに♪」

「ははっ。弱小人間の癖に高位魔族から逃げ帰ったという実績は認め  
てくれるのですね」

「……………イチイチ癩に障る小娘だこと……」

「なら黙らせてごらん」

小言を呟くヤツに煽り前回のニタニタした啖呵を切るのと同時にスネークレディが視界から消える。

正確には消えたわけじゃない。

まえさき市と同じように正面から背後に回り込みに来たただけであ

り、スネークレディの〈組み付き〉攻撃を屈みながら〈回避〉する。凶器の笑みを浮かべた彼女の攻撃は決して避けきれないような不可視の理不尽な一手ではない。

目まぐるしく飛び回り目障りな羽虫のように素早く、キラビーのような致命的な一撃なだけだ。

2度目ともなれば、ちゃんと動きを見て〈回避〉に専念さえすれば避けることは可能だった。

奴の手の内を知っている私をもっとも警戒すべき攻撃とは、触れられること。

しかし、要は当たらなければ問題のない話だ。

とにかくこれまでに培ってきた初戦や五車町で積み重ねた経験値を活かしてヤツに身体を触れられないよう身を振じって躲し続ける。

屍山血河の牙城を一瞬に腐敗させた白色の毒霧の存在もあるが、こちらは生け捕りにするつもりならあまり気にする必要もないかもしれない。

「ふうん♪ 少しは成長しているみたいね？ でも私を躡ける気なら、避け続けるばかりじゃダメじゃない？♪」

「！」

私が魔族共にやってきたように眼球を狙ったかのような指先を槍のように伸ばした刺突<sup>目潰し攻撃</sup>攻撃——SEKIRONINのように奴の頭上に “危” 印が見え〈受け流し〉の防御を——

「♪」

——違う。

この攻撃はフェイントだ。

まえさき市では顔面への攻撃を防御した際に、ストマックブローを叩き込まれたのだ。

それにコイツには触れられちゃいけない。

素肌へ触れた（受け流し）をした日にはどんなことが起きるかわかったものじゃない。

だから攻撃を受ける前提での防御ではなく、奴の右から放たれた攻撃を同じく右側へ幅跳びのように大きく飛びのいて再びへ回避する。

「フフフッ♪」

こっちはノーダメージRTAでも走っているかのように決死の（回避）の連続。

おかげさまで息が上がりつつあるのに、相も変わらずスネークレデイは息も乱れず余裕の表情だ。

それに『グレード・オールド・ワン』級の怪物と対峙して、アドレナリンがドバドバ分泌されて脳は覚醒状態にあるにも関わらず、身体が睡魔に襲われているかのような重いだるさを感じ始めていた。

ヤツも私の身体の異常には気づいているようで、先ほどのような落胆した声色からは一方的な攻撃を楽しんでいるような素振りが見られる。

「……………！」

もしやと思い、直ちに距離を取る。

が、休ませる気も身体の異常を調査させる気もないのか高速移動で接近され、鈍くなった動きの身体に3連続、4連続のフェイント交じりの連撃が加えられる。

「……………」

「あらあら？ 顔色が悪いわよお？ だからと言って、これ以上手加減してあげるつもりはないけど♪」

鞭のような速度の（こぶし）を振るいながら、ケラケラと囓うスネークレデイ。

クソが。

下唇を噛みしめる。

牙城を瓦解させた腐食させる毒霧攻撃は霜のように白い色が着色されていたが、もしかすると我々が吐き出す二酸化炭素のように無色のまま毒霧を浴びせることも可能なのかもしれない。

それが今の私でもわかる身体を蝕む異常状態だと考えるのが妥当だ。

されど状況を逆に捉える。

私はまた奴の情報を1つ得られた。

宇宙の彼方まで吹き飛ばすための歩みを着実に進められている。

だが彼女ばかりに集中しても居られない。

時には視野を彼女から周囲へと向けて狙撃手の動きを確認する。

そのたびにイラつくヤツが少しずつ力を開放するがとにかく直撃さえなければ、こっちの勝機は残されている。

……それに周囲の観察で分かった嬉しいことある。

邪神を味方につけている私兵部隊はスネーククレイが負けるだなんて微塵にも思っていないのだろう。

それこそ『まえさき市で泣かされた』という事実も、私が言い出したたわごとだと思っているのかもしれない。

彼等は窓の傍で滞在しているがヘライフル銃でいつでも引き金を引ける状態にはなっておらず、約束されたイベント戦を鑑賞している。

これは好都合であることに他ならない。

「よそ見する余裕なんかあるのかしら?」

スネーククレイの激しい連続攻撃。

獲物を中央に捕らえとぐるを撒く蛇が獲物を執拗に攻撃するが如く四方八方からの攻撃。

重くなる身体に足がもつれて体幹が崩されて行く。  
まずい。



「ウフフ♪ そうよねえ♪ そっちにはゼラトちゃんの本命の武器があるものね♪ その武器はブラフなんでしょう？ 不意打ちの代名詞といえればゼラトちゃんだもの♪ ……でも♪ もう使う機会なんて与えないけど♪」

何もかも見抜いていると自信たっぷりのスネークレディ一言と共に攻撃が苛烈を極める。

漫画で例えれば『南斗の拳』の百裂拳。アーマードコアVIで言えば、初心者殺しのバルテウスミサイルのような流星群じみた鉄拳が飛んでくる。

旧日本軍の銃弾のカーテンと呼んでしまっても差し支えないだろう。更にいくつかはこちらのミスを誘発させようと魂胆が孕む連続攻撃が含まれる。

仮にこれがアクションゲームならば、クソゲーと呼ばれても納得してしまうような鬼畜の難易度。

「捕った♪」

遊び飽きたのか、ついに蛇子ちゃんの右手が私の胸倉を掴む。

握り拳が捻りを加えてきて、陽葵ちゃんから貰った大切なジャケツトから嫌な音が聞こえる。

ここまでしつかりと腕を伸ばした状態で胸倉を掴まれてしまったのは、切り札の1つであり蛇子ちゃんを泣かせた実績すらある（頭突き）も彼女の額に突き刺せない。

「ッー」

『まだ負けてない』と彼女の加虐欲を誘うような顔をして、野球のバットを振るうようにまだ拘束されていない腕に握られた竹刀を振るうも――

「♪」

パシッ♪

余裕の表れのつもりなのか、容易に私の竹刀よる一撃を軽々と受け止めてしまっ——

——受け止めて、しまったな？

「獲った」

ここぞとばかりに復唱と共に、こちらも勝ち誇った顔の蛇子ちゃんを嘲笑うような表情をする。

彼女は自分がまたもや私が小細工を仕掛けていることに気付いたのか掴んだ竹刀を握りつぶしにかかる。

捕まれた竹刀はたちまち私の一夜城の如く黒く墨のように溶けて、掴まれた箇所からポトリと飛ぶ鳥が落ちたように折れてしまったが問題はない。

「きゃっ………な、何これ!？」

蛇子ちゃんは胸倉をつかんでいた手を離す。

そのせいで私は背中から倒れ込んでしまうが大した問題ではない。

ギラギラとした笑みを浮かべながら身体を起こす。

蛇子ちゃんに視線を向ければ彼女はチャドクガの幼虫に刺されてアレルギー発作を引き起こした患者のように左手を凝視しながら右手で手首を押さえている。

息を切らせながら後退りしながらよろけ始める。

その表情は非常に狼狽えており——

奴が “われを失っている” 間に、期末試験で神村に対して行った行為のように低姿勢で素早く左右にダツチを踏んで接近し、折れた竹刀のまま彼女の懐へ飛び込む！

「シィィエエアアアツ！」



期末試験で弓走に放った昇竜拳の勢いで、下から上に切りあげるように股ぐら目掛けて竹刀による〈跳躍〉込みの〈近接戦闘（格闘）〉一撃を叩き込む。

ベツチーンッ!!!

「ピギイツ♥♥♥?!」

綺麗に蛇子ちゃんの下半身、ωの中央に紫電一閃がぶち当たった。たぶん陰核辺りにクリーンヒットしたのだろう。

今までに聞いたこともないような甲高い青いスライムの断末魔のような悲鳴が一带に響く。

昇竜拳の要領のまま〈跳躍〉にて3?ほどの高さまで舞い上がった視野だからこそ分かることだが、今の蛇子ちゃん表情は私の背筋を指でなぞってくれるようにゾクゾクとするような叩かれ慣れてない女の顔をしている。

身体は破傷風の症状の1つのように弓なりに仰け反り、力強く食いしばった歯が口の中から見え、涙目になっている両目の目尻からは大粒の涙が溜まって今にも零れそうだ。

目は大きく見開かれており、まさにカルティストが脆弱な人間の手によって崇め奉っていた邪神様が退散されるとは思っていないような驚愕と悲痛に満ちた顔をしている。

「泣きを入れたらもう一発ッ!!」

「ヒッ」

バシーンッ!

上空に飛び上がった状態から今度は兜割りの要領で蛇子ちゃんを脳天目掛けて竹刀を振り下ろすが〈回避〉されてしまい、渾身の一撃

は地面を叩く。

衝撃で竹刀の腐食した部分が更に砕け散るが、〈大きな棍棒〉が〈小さな棍棒〉に変化した程度の変化でしかない。

まだ武器として充分に扱える。

全体重を掛けた兜割りによる一撃を〈回避〉されてしまったことは遺憾だが、即座に立て直して先ほどやられたように蛇子ちゃんの胸倉……彼女の服に胸倉はないのでアンダーバストラインの服を掴みかかる。

引き上げるように掴んだため、ブルルンと大きな二つの乳房がむき出しになるが、別にNormal Loveである以上彼女のお胸のポロリにトキめいたりなどはしない。

むしろこの状況で夜勤明けのような睡魔による苛立ちも相まって、その豊胸を見せびらかされるのはクソ腹立つ!!!

そのままビルの各種窓からこちらを鑑賞していた狙撃手たちの対策——生きた肉盾として運用する。

「ちよつと離しなさい！な、何をするのよ！」

衝撃を受けて我を失ったかのような蛇子ちゃんも服を掴む私の手首・それも即素肌を掴みにかかる。

しかし、それは触れられてはならないと警戒した女の手とは程遠い。

今や彼女はただの一般人の女性の艶やかな手付きのそれだ。

「……………む……………？」

先ほどまで優勢だった蛇子ちゃん変貌、そして「触れられたら終わり」であるはずなのに、ベタベタと触られてもピンピンしている私へエドウィン・ブラックも興味を持ったようだ。

視線をこちらに向けている。

取り乱し蛇子ちゃんに何が起こったのか。

これは、私が武器として振り回していた竹刀の効果だ。

『竹刀』とは、まえさき市のカルティストから奪った——『クトウルフ2010』に掲載されていた武器の1つ。

元のデータとしては殺傷力はほぼ皆無な得物である。

ただし、私がこれまでに扱ってきた武器には付与されていないスタン” という特性が付与されている。

スタンというのは『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』61頁 によれば、ある程度の僅かな時間。衝撃を受けてわれを失わせる一撃。

『CALL of CTHULHU クトウルフ神話TRPG』61頁によれば、スタンを引き起こさせるには一定の確率で成功させる必要があるのだが、『クトウルフ2010』によれば用いている竹刀にはその必要はない。

私がまえさき市で蛇子ちゃんを泣かせた（頭突き）は相手の戦意もろとも失わせる一撃だったが、こちらは違う。

攻撃する気力を一方的に奪う神器なのだ。

つまり蛇子ちゃんが私に攻撃を一撃でも加えれば勝ち確であったように、私も竹刀で蛇子ちゃんに一撃でも攻撃を加えられたならば私の勝利は確定されるシロモノである。

だからあくまでも一方的な防戦で攻撃する余裕がないように見せたり、駒水ちゃんが囚われているショーケースに近づいて意図を逸らしたり、目に見えない毒霧に追い込まれることは想定外ではあったものの。

蛇子ちゃんが私の攻撃を受け止めてしまう程度の余裕のない我武者羅な攻撃を演出する必要があったのだ。

「よっいっしょっつと」

漫画『ドリフターズ』で島津 豊久がエルフを迫害する領主の隊長

を抱えるように、蛇子ちゃんを肉盾を持ち上げる要領でつるし上げる。

「降ろしなさい！降ろしなさいよお！降ろして！」

ヒステリックにキーキーとわめく彼女は私をムラムラさせる。

欲情していく精神をこらえながら、声で泣きわめく蛇子ちゃんを盾とし駒水ちゃんが拘束されたパッケージに近づいて〈手斧〉を回収する。

囚われた駒水ちゃんの右手を拘束している拘束具を破壊して〈手斧〉を渡し、自ら拘束具を外すように指示する。

スパーンツ！

それから蛇子ちゃんの尻を “背後からの奇襲” を用いて竹刀で一回シバく。

「あつアツあああああ~~~~~!!!」

蛇子ちゃんの情けない超かわいい悲鳴によって私の心の中のオチンチンが鹿之助くんを愛でたときのようになオツキボツキする。

だが、このサンドバッグはこれから存分に叩きたい放題なのだ。

ニチャア……と粘り気のある笑みが漏れてしまう。

まえさき市で誓った報復は50%完了したようなものだ。

あとは私がやられたように存分に辱しめてやる。

スタンで〈攻撃〉に転じることのできない蛇子ちゃんが、より一層恐怖に怯えたような〈頭突き〉を喰らった時のように何が起きたのか理解できていない表情をしている。

髪を振り乱し、暴れて抜け出そうと試みるが……。

——竹刀のスタン効果は脱出それを許さない。

ひとまず、蛇子ちゃんの尻を竹刀で新たにシバいたことでスタンの効果時間は更に延長したはずだ。

〈改造した釘打ち機〉も回収し、私の装備はほぼ完ぺきに回収したと言っても過言ではないだろう。

「お、おっ、覚えてなさい！ゼラトシーカー！絶対にカオス・アリーナで奴隷戦士として地獄を味合わせてやる！」

「はいはいはい。で、ブラツクさん。私のパイプ爆弾の対策は講じることはできましたか？ まだであれば私も公衆の面前で蛇子ちゃんを泣かせて自尊心をズタズタにできましたし、もう駒水ちゃんを連れて帰ろうと思うのですが……いいですよね？」

「……………」

彼からの返事は何もない。

彼の赤い瞳に見つめられていると、睡魔とは違う——  
意識が混濁してくるような気がするが——

スッパーンッ！

「うっあっあっあああ~~~~~!!!」

催促と気付け薬として、24秒経過するごとに蛇子ちゃんの背後から尻を竹刀でぶっ叩く。

フー！ ヤツの情ツツツさけない悲鳴が私の心を満たしてくれる。

竹刀が裂き割れ状になっている分、普通の竹刀で尻を引っぱたかれるよりも致命的な一撃になっているはず。

それこそSMショップで販売されていた頃の竹鞭で尻を叩かれて  
いるような……。

タイトなスカートが裂けて、赤いミミズ腫れ混じりのプリンツとし  
たベビーなおケツが露出してやがるぜ！

こうなりやあ、高位魔族もただのオンナノコだなあ！ ギヒヒヒヒ  
ヒツ！

でもヘビ子が悪いんだよ！私の武器を破壊してその一本に束ねて  
いる竹刀を竹鞭に分解したんだから！

あと、これは予言になるのだが……。

今こそ攻撃の手段を封じた蛇子ちゃんをあしらっているが、仮にス  
タン状態から復帰した暁には私は無事では絶対に済まないだろう。

良くて殺され、悪くて彼女の言葉通りカオス・アリーナで報復30  
00倍のしつぺ返しをされるに違いない。

だから私は自己防衛のために彼女を尻を必要以上に引っぱたくこ  
とを止める選択肢がない。

私は悪くない。

蛇子ちゃんが自ら痛めつけて欲しいと望んだ……望んでいるのだ。

つまり、こうなることを望んでいるってことは……蛇子ちゃん、実  
はドマゾなんだろう？

「……………」

「なるほど。……その沈黙は肯定と受け取らせて頂きますね」

スパーンツ！

「あああああああつー！」

蛇子ちゃんの尻を叩きながら、メス奴隷パッケージから抜け出し地  
面にへたり込む駒水ちゃんには下がるようにジェスチャーを送って

この場から離脱させようと促す。

「…………ごめんなさい……………歩けそうにもなくなつて……………」

スパーンッ!

ヌズボオツ!?!?

「ビクッ!

「ふほおっ?! ふっほおおおおおおおお?!」

ごめん。

蛇子ちゃん。

今のは当てつけで尻を叩いて、竹刀の先端を尻穴アナナルに突き刺した。

たまには予測不能な躰を加えないとね。

ペットを電気ショックでしつけるのと同じ要領。

さあ、私はどう動くべきか。

駒水ちゃんを連れて離脱したいところだが……………。

背中には荷物の詰まったリュックサック。

右手には竹刀の尻尾を振って悦ぶ半泣きの蛇子ちゃん。

左手には半壊したハツタリ仕込みの竹刀とが握られており。

とてもじゃないが駒水ちゃんを背負う余力なんかない。

目の前には高位魔族の1人エドウィン・ブラック。

周囲にはヘライフル∨銃を構えた狙撃兵。

少し離れたところで身を寄せ合つて縮こまる方言オーク達。

リュックサックを駒水ちゃんにまかせて彼女を直接背負うことも

選択肢として挙がったが…………万が一、彼女が敵側に洗脳されていたと

したら?

ただでさえ私が蛇子ちゃんの毒霧にやられて窮地なのに、更に窮地に叩き落とされてしまう。

だからと言って彼女を置いていくわけにもいかない。

こんな時こそ複腕のある神話生物がうらやましくなる。

私も追加で4本ほど欲しい。

対魔忍世界は私の知っている現代よりも近未来で民間でもサイボーグ化とかの技術があるし、将来は自由腕でも取り付けようかな。

千手観音アタックとかロマンだもん。

ロマン。



22章 『蠕ウ隶舌☆纒九? 縛ツ哥代←縛ゆj』  
Episode160 『だいはくはつ』

「覚えてなさい! 覚えてなさいよお!」

「ははっ。ところで人質作戦は懲りましたか?」

「だ、だれが……」

「はあー……その様子だと反省の色ゼロですね。だと思いました。ですが、そう来なくっちゃ! 高位魔族をいたぶり甲斐がなくなるので返事としては100点満点です。二度と人質など取ろうなんて考えすら引き起こさなくなるように念入りに抜き刺しスパンキングでつけて差し上げましょう」

「や、やめ……っ」

スパパパパパパパパパパパパパパパパーン!!!

ズツ、ぬっぽおおおッ!!!

「ひぎいー……っ!」

「ギエツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ! そのセリフが聞きたかったア! 『ひぎい』頂きましたー!」

ミドルバスターズの新聞紙ブレードの要領で、泣きじやくる蛇子ちゃんの真つ赤にはれ上がったお尻へさらに16連撃を加える。

時には竹刀の先端を蛇子ちゃんにスローインツ!

竹刀を引き抜いた後に付着している赤黒い物体が蛇子ちゃんが溶かした炭のあとか、それとも蛇子ちゃんの血便ウンコかもうコレわかんねえなア!!!

絶叫と同時に今度は私が腹を抱えるように大笑いしながらホストクラブでボトルが入れられたときのようなシャンパンコールを入れる。

ところで、まえさき市で3時間ウンコしていた方の蛇子ちゃん、竹刀を引き抜かれてウンコを漏らしたほうの蛇子ちゃん………2人を鉢合わせたらいったいどんなことが起きるのだろうか？ かなり興味ある。

さて現在、停戦しているこの状況から離脱する方法として。

背中にはリユックサックやへ改造した釘打ち機を含めた装備一式。右手にスタン状態の肉盾子ちゃん。

左手に竹刀。

右足側からダミーパイプ爆弾付きのベルトを垂らして、かなり複雑な顔をした駒水ちゃんをしがみつかせ。

左足のみを使つてなんとか離脱しようともがいていた。

この離脱の手法ならば、仮に駒水ちゃんが裏切りの牙を剥いてきたとしても利き足のつま先を槍の穂先のように尖らせたへキックを顔面に叩き込んで離脱できる安心設計だ。

離脱の間際ライフル兵からの麻酔弾の銃弾の嵐に巻き込まれたものの、肉盾子ちゃんこと蛇子ちゃんが殆ど代わりに弾丸を引き受けてくれた。

おかげで彼女の前面、主にへそ近辺と乳房はハリネズミみたいになっっている。

まるで海外のハードコアなSM動画を見ている気分だ。

いやあ……。

それにしても人間だったらオーバードーズを引き起こしている頃だろうけど、高位魔族は邪神なだけあって頑丈なんだなあ！ 頑丈なダーツ版を手に入れた気分。

さらに私は蛇子ちゃんについて理解を深められたのかも。

やっぱ、このタイプはまともにやり合っちゃいけない。

封印しよ。封印。

宇宙の彼方にサヨナラバイバイしたいところだが、今日のところはシンプルに生コンで固めて水底に封印。

ライフル、生コンクリート、ダイナマイト。  
今日だけで探索者の邪神封印の三大神器、揃っちゃうな。

「えーつと？」

「……………」

「いつまでついてくるつもりですか？」

「……………」

「そろそろ諦めて見逃してもらえませんか？」

「……………」

「そっちの攻撃のせいで蛇子ちゃんがハリネズミなんですけど？」

「……………」

「実弾なら死んでましたよ？」

「……………」

「無抵抗の高位魔族を攻撃して心とか痛まないんですか？」

「……………」

カルガモのヒナのように後をついてくる、重い腰を上げたエドウィン・ブラックと私兵部隊へ声をかける。

彼は相変わらず何も答えない。

牛歩で退却する私に対して威厳を保ったまま警戒しているようだ。

彼を取り巻く闇から、私にとっては神経を逆なでされるような気持ちの悪い触手やら西洋の剣らしいものが顕現していた。

それらは脈動しながら、嫌に闇を引き立てるような白い眼球と赤目が百目の妖怪のように不規則に付属している。

いずれも宙に浮かぶ《魔力付与されたナイフ》のように刃先を向けた攻撃態勢には入っているが、あくまでも牽制の範疇らしい。

やはり肉盾子ちゃんや桃色髪の痴女、その他の隊員を束ねる総大将だろうか。

きっと私の情報バーゲンセールも『すべては開示していない』と先見の明による行動なのだろう。

しかし可哀想な蛇子ちゃん。





た。

……………最悪なことは連続するものだ。

爆発は1度のみで済まなかった。

誘爆を引き起こしたかのように連続し、私達の周囲を囲うように連鎖的な爆音が響く。

音が重なり合って分かりにくいが……少なくとも5回は大きな爆発があったはずだ。

地面の小石が細かく跳ね上がり、まるで砲弾が数？先に落ちて来たかのような振動だ。

揺れが更に激しくなる。

でもエドウィン・ブラックは爆発音にすら動揺していない。

熱烈な視線は徹底的な防御陣を施行する私一点へと向けられている。

瞬間移動からの空爆が降りそそぐ大地に降り立ったかのような非日常。

続いて建物崩落の音。

すくなくとも私の知る年代までの現代の建物は、建築法によって最低限鉄筋コンクリートで建築されているはずなのだが……。

やっぱり中抜き案件か。

東京キングダムの貧弱性が露わになった気がする。

あちこちから悲鳴や助けを求める声、延焼による黒煙が立ち上りはじめた。

対魔忍によって炎上するSMショップとは比較にならない規模での騒動。

おまけにあちらこちらから怒声や情けを求める声、銃声までもが聞こえてくる。

まるで情勢が不安定な抗争地帯で僅かに保たれていた均衡が、爆発騒ぎを鹵切りに各組織の開戦を促してしまったかのような。

もちろん、私の所業じゃない。

大規模な爆発物を仕掛けられるぐらいなら、とつくの昔に先の戦闘や自爆での脅し、目前の高位魔族の封印の用途で用いている。

そもそも “高位魔族から逃れる” たったそれだけのことのために東京キングダムを全方面を敵に回す所業など、正気の沙汰じゃない。

狂気の沙汰ほど面白いとは思いますが私にだってそれぐらいの分別はつくし、至る前に切り札の一つは使う。

第一、当日までに材料が揃わなかったというのにできるわけがない！

更に弁明するならば、今日の高位魔族の追跡から逃れたら私は鹿之助くんのおうちに招かれて遊びに行く約束があるんだぞ！

他にも心寧ちゃんと鹿子ちゃん、危なっかしい陽葵ちゃんと川に行く約束とか！

Twinterで募集かけたTRPGのコンベンションだってある！

その近い将来は、純粹無垢な鹿之助くんを排泄だけでイける男の娘にする調教予定だってあるんだ！

未来にこんな大事で重要なイベントが控えているのにやるわけがない。

「ブラック様！」

またもや両乳房をバルンバルンとたわませて桃色髪の痴女が戻ってくる。

ポロリしないのが不思議なぐらいの揺れだ。

その表情は明らかに狼狽え、凜とした表情は完全に消え去っている。

た。

それからエドウィン・ブラックへ耳打ちを始める。彼は頷きもせず、淡々と未だに視線を私へと――

「む」

……………なんだ？

あんなに決して逸らさなかつた赤目が、一瞬だけ視線が桃色髪の痴女の方へと向けられる。

報告の中で気になることでもあつたのか？

……………嫌な予感がして〈聞き耳〉をそばだてる。

「境……………壁……………、援軍の臃、アレクトラ、リー

……………ブラック様には直接事態の確認を願いたく――」

ほれ見たことか。

周囲の雑音が強すぎて完全には聞き取れなかつたが、嫌な予感が的中した。

辛うじて聞き取れた単語から推測するに、援軍が居るらしい。

それもかなりの数。

臃やアレクトラというのは人物ではなく部隊として見るべきか。

彼がどれだけ本が欲しているのか、もう十分すぎるぐらいに理解した。

ただよくわからなかつたのは境と壁という単語だ。

あの痴女の焦り具合から推察するに前半の2つの単語は、彼女も想定していない事態が起きたと考えられるだろう。

ペチ。ペチ。ペチ。ペチ。ペチ。

「あつあつ！ んあつ♥ んっ♥ んっ♥」



現状でできることとして、距離をジリジリと取りながら蛇子ちゃんのケツを愛撫程度の威力で叩いておく。

色っぽい声で喘ぐものだから桃色髪の痴女が奇々怪々なモニUMENTでも見るような目で眺めてくるが、私だって好きでやっているわけではないしお前だけにはそんな目で見られたくはない。

今の蛇子ちゃんはある種の時限爆弾。

タイマーが0になった時、私は人生の中で指20本の1つには入るであろう恐ろしい拷問を彼女から受けることになりかねない。

事前に身を守るため仕方のない行為なのだ。

正当防衛。 正当防衛。

Episode 161 『エドウィン・ブラック』  
S 探索者』

「……………」

尻をペチペチ叩いて高位魔族のケツドラムセッションを開いている目でエドウィン・ブラックが左手を軽く上げてなにかの指示を送る。

途端に海岸で波が引いていくように銃口を降ろして物陰へと去る兵士達。

彼の初動に対して私も駒水ちゃんを建物の影に押し込めるように〈隠す〉。

そのまま蛇子ちゃんの尻を適度に叩きながら、ダークソウルに登場する深淵歩きアルトリウスの構えを取る。

個人の嫌な直感というのはほぼ当たるといえるが、それはその人物が『これまで得て来た経験をもとに判断するからだ』と、聞いたことがある。

そう。

レイプされた生娘の如く、地面でぐったりとする蛇子ちゃんのケツをシバき続けながらも嫌な直感は直実に近づいていた。

「ゼラトシーカー」

「……………」

「私は貴様を逃がすわけにはいかない」

おもむろに右手の平の中央にあるホクロを見せてくる。

否。あれはホクロなどではない。

一見、ホクロにみえたそれは肥大化して……宙に浮かぶ立体的な球体を形成する。

ゴルフボール大ほどの黒い球体が浮かび、それは細く光る赤い稲妻を纏っているように見えた。

黒い球体が現れるのと同時に、背後から向かい風でも吹いているかのような逃走方向への足取りが重くなる。

私の長い髪がエドウィン・ブラック側へとたなびく。

最初は向かい風に対して踏ん張り逃げ切ろうと下半身に力を入れて抵抗するも、見る見るうちに力に抗えなくなる。

しかし、次第にそれが彼の能力が風を操るものではなく重力に変化を与えるものだと感じづく。

例えるならばブラックホールに吸い込まれるかのような引力であつたと言えばいいだろうか？

「ッ！」

「ぎゃっ！」

やはり私の判断は誤りではなかつたようだ。

奴の球体に近づいた物体がどうなるか分かつたものではないが、あの黒い球体がブラックホールだった場合。

吸い込まれた人体はきつと冷凍ミートボールのようになってしまふことだろう。

彼は私を逃がす気はないと言っていたが駒水ちゃんや人質兼肉盾の蛇子ちゃんに対しては気にもかけていない様子だ。

もしも私よりも先に駒水ちゃんがブラックホールの中に落ちてしまえば、どうなつてしまつていたかなど想像に難くない。

事前に彼女を建物の影に避難させていたおかげで、建物の壁が地面のような役割を持ち彼女の落下を防いでくれるはず。

しばらくは地面や壁の室外機しがついて耐え凌ぐも、映画『タイタニック』の沈没ラストシーンのように身体がふわりと浮く。

地面が壁にでもなつたかのように周辺のもものが滑り落ち始める。

強制的に彼の方向へと強制的に引き寄せられる。

吸引力が増していく穴に対して私の筋力（STR）も持たずに滑り落ち――

「ダメっ!!!」

「うあっ!?おっ、っ?!」

蛇子ちゃんもろとも黒い球体をめがけて落下する寸前のところで、今度は腹部に強い締め付けられるような痛みが走った。

痛みの代償として得られたものとして、自身が宙ぶらりんになっていることに気付く。

まるで高所現場で転落したものの腰の安全ベルトによって一命を取り留めたかのような不安定な姿勢だ。

キリキリと締め付けられる腹部の痛みには視線を向けると、どうやらパイプ爆弾のベルトが駒水ちゃんを避難させた建物側に続いているようで……どうやら落ちる間際のところまで駒水ちゃんが引き止めたようだ。

ズルッ………

だけでもやはり私に加え蛇子ちゃんもぶら下がっている以上、その救援活動も長くは続きそうにもなかった。

彼女が探索者ならば私達を武器や装甲へと置換することで100kg越えの体重も難なく引き上げることができるのだろうか——  
追い打ちをかけるように引力も収まることを知らないでいる。

「駒ちゃん、いい！ 離してくださいー!」

折角助けた彼女も落ちそうになるほど、建物から上半身乗り出してしまっている。

あれでは時間の問題だ。

助けたのにこのままでは共倒れでは本末転倒。

腹が振じ切れる痛みにも耐えながらも、上空となった位置で踏ん張り続ける彼女へと指示を送る。

「やだ！ やだ！ 離さない！ 絶対！ 絶対に離さない！！」

だからといって彼女も素直に指示に従うつもりはないらしい。

両目をぎゅっと瞑ってまで全力全身に力を込めているのが伝わってくる。

「大丈夫！ ヤツは私を殺すつもりはないし落ちても大丈夫だから！」

「青空ちゃんはご主人様の恐ろしさを知らないからそんなこと言えるの！ 3度も助けてくれた青空ちゃんを私は裏切れない！」

「……あ？」

なんとか手を離してくれるように画策する私へ、駒水ちゃんの発言が何かおかしくて拍子抜けた声が出る。

なんか、いまの言葉にツツコミを入れたいところだが、ますます引力は強固な角度へとなっていく。

建物に隠れていた駒水ちゃんの胸部が完全に露出し、こちらから腹部まで見えるようになれば落ちることなど瞬く間に違いない。

「大丈夫だってば！ 私にいい考えがある！ だから離して！ このままだと、一緒に落ちる！」

「堕ちても良い！ 青空ちゃんとなら何処へでも堕ちる！ 堕ちてみせる！」

ん？ んんんん???

やっぱり何かおかしい。危機的状況なのに。

それすら越えてしまう駒水ちゃんのパワーワードはなんなの？

陽葵ちゃんとは感性の違いで危険なおいがし始めてるんだが？

「……………ああ、もうー！」

「…………………………」

聞き分けのない駒水ちゃんに舌打ちをして、未だに手のひらと球体をこちらに向けるエドウィン・ブラックを見下ろす。

球体の大きさは既に野球ボールほどの大きさからハンドボール大になっている。

……………なるほどなあ。

あの球体が大きくなればなるほど、奴の力である引力は強力なものになるってわけか。

やっとーっ、手の内をみせてくれた。

高位魔族封印作戦がまた1歩前進したというわけだ。

ギヒヒヒヒッ！

「はいはい！ わかりましたよ！ わかりました！ 根負けしました！ 落ちてくるなら、勢いよくお願いします！ 私の胸に飛び込むように力強く！」

「青空ちゃんが望むのなら喜んで！」

……………。

うーん……………この世界の私の友達って、どうしてこう……………。

言うことを聞いてくれない陽葵ちゃん2号に向けて、この状況で考えられる最善策の指示を送る。

少なくとも彼女が私をクッションにすればあのブラックホールへ先に巻き込まれる可能性は低いと考えてのことだった。

私の指示通り駒水ちゃんは自由落下速度よりも素早い速度で抱き着くように腹部に落ちてくる。

「ぐうっ!？」

「青空ちゃん!？」

片手に蛇子ちゃん、片手に竹刀を握っている私は彼女を受け止めることはできず……。

……モロに腹部へのへタツクルを受けることになったが、おかげさまで引力に引き寄せられるよりも更に速く加速する。

そのまま超装甲の蛇子ちゃんへ、サーフボードのように飛び乗って……。

「やあブラックさん！〈物理学〉における慣性と減速度と運動エネルギーの法則はご存知でしょうか?！」

三位一体。

文字通りの肉弾となって、ギラギラとした笑みのままエドウィン・ブラック目掛け突っ込む。

蛇子ちゃんはブラックホールの餌食になってしまう可能性が極めて高いだろうが、ギリギリを求め過ぎれば私も巻き込まれることは彼も承知だろう。

いずれにせよどう転んでも、高位魔族を一人消せることになる。ギリギリでブラックホールを消失させようものならば、蛇子ちゃんを葬り。

事前にブラックホールを消失させれば蛇子ちゃん＋私＋駒水ちゃんの肉弾へ砲撃が落下の加速を加えたブラック目掛けて、異世界転生トラックの如く突っ込む。

この勝負、どちらに転んでも私の “勝ち” だ。

これまでありがとう蛇子ちゃん。

泣き顔を2度も見られて私は満足したよ。

さよなら蛇子ちゃん。

「ああ。当然」

しかし途端に重力の向きがエドウィン・ブラックとは逆向きへと――かつ地面と同方向。

本来の地球の重力側へと変化する。

「ハア!？」

唐突なチート能力じみた重力方向の変換行為で、ちいかわのうさぎみたいな声が出てしまう。

勢いづいて落下する肉弾は無重力空間をワンクッションしたかのような静止が加わると、そのまま地面に落ちてしまった。

危機的状况を打破するために企てた即席の合体技が音を立てて崩れる。

「遊びは終わりだ」

「!？」

今度は私の身体だけが力任せに宙に浮かされる。

空にでも落ちるように。

「お？ お？ おっ？ おっ！おっおっおっおっおっおっ！」

「……」

「おほほほほほっ！」

空へ落ちる間際、洗濯機の脱水モードのような回転が加えられ、耐え難い遠心力によって所持品が強制的に分離される。

三半規管がかき混ぜられ、どちらが上か下か方向感覚を失ってしまいう程の重力変動。



口から出てきた言葉は溺れ死ぬボーちゃんのモノマネぐらいしか出てこない。

「ツ！ ぐ主人様！」

【動くな】

「っ」

なぜかエドウィン・ブラックと私をぐ主人様呼びする駒水ちゃんが立ち上がるも、彼に圧力を掛けられ跪く形でたちまち動けなくなる。

「褒めてやろう。ゼラトシーカー」

「……………っ」

「人間の小娘にしては知恵を振り絞りよく頑張った。だが人間と魔族では生まれ持った素質や寿命が異なる。実力では私の足元にも及ばんな」

「……………づお……………え……………——エレエレエレエレ……………」

逆さづりの状態でようやく、怒った子供がシリアルの箱を投げたあとの中身のようなグロッキー状態から解放される。

口からゲーミングオウトが飛び出ていく。

先ほどの急激な振り回し行為で竹刀や未完成ハッターのパイプ爆弾は私の手を離れ、ヤツの手中へと収まってしまった。

胴体から伸びる他のパイプ爆弾も千切れて地面に落ちている。

「さあ、貴様はここからどうする？」

挑戦的にエドウィン・ブラックは嗤う。

やっと高位魔族も人間っぽい感情を見せたかと思えば、それが嘲笑いだとはやっと私のことを認識こそしたが舐められているらしい。

されどその挑戦に乗ってやるように袖で吐瀉物を拭いて辛うじて残された〈改造した釘打ち機〉を奴に向けて——

カチカチッ

「どうした？」

釘が出ない。

「無傷で返却されるところでも思ったのか？」

壊されている。

「ああ……」

これでは成す術もない。

Episode 162 『一難去つて、つぎ災難』

さあ！困ったぞ！

空中浮遊して早<sup>16</sup>ふん<sup>36</sup>ラウンド！

〈改造した釘打ち機〉は破壊されていて、修理には青空日葵の母親の工具箱が必要。

その肝心の工具箱は地面で散らばっていて、工具を収集するには私は地上に降りる必要がある。

もがいてもどうすることもできない！

だが例えどうにかすることができたとしても、いま絶対に地上へ降り立つべきではない。

なぜなら――

「ゼラトちゃん♪ 早く降りてらっしゃい♪ 生きていたことを後悔するぐらいに虐めてあげるから」

地上では、もっとも危惧していたことが現実起きていた。

ヒンヒン泣き鳴いていたサーフボード肉盾子ちゃんが完全に復活した。

相変わらず尻は丸出したが、顔は青筋立て、目は完全に室井先生並みの糸目だ。

乱れた髪をぎっくりとしか直してないところからかなりの怒りが伝わる。

この場がアニメならば彼女からドス黒い炎がメラメラと湧き上がっていたに違いない。

きっと私は殺される。

散々惨い目を覆いたくなるような拷問を加えられたあとで殺されるパターン。

人生の中の苦痛で指10本のうちには入ることが起きるかもしれない。

「あー、蛇子ちゃん。火に油を注ぐわけではないですが、その苦情はブラックさんに言ってももらえますー？ 私も好きで空中浮遊しているわけではないんですよー。この状態はいわば彼に魔術で吊り上げられてこうなってるんですー」

「エドウィン。降ろして」

「……」

「エドウィン？いい加減、あの減らず口が止まない小娘を地面に降ろして頂戴。もう我慢ならないわ、絶対に泣きわめきながら懇願させる。指の数本は振り千切って絶対に泣かせて命乞いさせてやる」

余裕のなくなった蛇子ちゃんが地上でエドウィン・ブラックに詰め寄って血気盛んに抗議しているのが見える。

「おー、こわいこわい」

一方で詰め寄られている彼は血気迫る蛇子ちゃんに一瞥もせず、駒水ちゃんに近づいてなにやら色々と話しかけているがここからでは何を離しているのか〈聞き耳〉をもつてしてもよく聞こえない。

ただ遠目からでもわかることは駒水ちゃんは素肌に脂汗を滲ませながら、蛇子ちゃんや彼に対して怯え空中へ持ち上げられた私を見ようともしなかった。

まあ、元の手筈では私を裏切るつもりだったのだろう。途中で心変わりしたようだが。

この程度は想定内の範囲だ。こちらもそのつもりで動いていたし。蛇子ちゃんから危害を加えられていないことから、駒水ちゃんの所有権は彼にあると考えるのが妥当か。

「はあ……」

こうなってしまった以上、仕方ない。

こういうことがあると『人質は見捨てるものだ』『友達など要らない』と前世と同様にろくでもない経験が積み上がってしまう。

いずれはこうやって友達だと思っていた人間に裏切られる。

まあ、今回もそうだったように次回も友達を見捨てられるほどの徹底した利己主義にはなれないのだろうか。

反省会は東京キングダムから抜け出してからするものとして、次の打開策を練るだけだ。

しかしこの状況で私に出来ることといえば……。

空中でバランスを取りながら、わずかでも程度でも動けるようになること。

〈改造した釘打ち機〉が何故射出されなくなってしまったのか検査を行うこと。

震災に加え爆発音が周囲で響いていたことを思いだし、高所から状況を把握しようと見渡すぐらいだった。

まず無重力間での〈低／無重力行動〉に関しては数分で移動などの行為をどうにかなるようなものでもなく、やっとの思いで倒立回転し続ける身体を制止させられるのが限界だった。

次に切り札である〈改造した釘打ち機〉が射出されなかった件だが、普通に弾倉の釘弾がすべて抜かれ、チャンバーの中は空っぽ。更に引き金が引けないような細工が施されていた。

陽葵ちゃんと同じジャケットのポケットに弾倉が残っているため装填自体は可能なのだが……これを再び最終兵器として振り回すためには〈機械修理〉で修理しなくてはならない。

最期に震災にあった東京キングダムだが、依然として津波の心配はなさそうだ。

海面側が特に引き波になっていないことから内陸部での地震であったのだろう。今頃、世間一般的な家庭では番組のテロップに『津波の心配はありません』との表示が加わっているに違いない。

(…………むう)

地上での私の処遇については、蛇子ちゃんがエドウィン・ブラックに食ってかかって時間稼ぎとなっている以上、まだこちらに意識を向けられるまで時間が掛かりそうだった。

せっかく通常ではありえない高所から周囲の状況を見渡せているのだ。

ここは陽葵ちゃんや鹿之助くんへのお土産としてカメラで東京キングダム大橋と雲一つない綺麗な夜景、地平線に映る照明を撮影したいところなのだが……。

あいにく荷物は地上で飛散している。

……………。

しかし、今の景色。

妙に違和感がある。

爆発が発生する直前までには感じられなかった肌がざわつくような、血液が逆流するかのようなゾワゾワとする神話生物と対峙しているような異質な感覚。

思考の中で何か引つ掛かっているのに、それが何か分からない。

「……………」

左手を口元、右手は肘に当てて違和感の解明に至ろうとする。

プラネタリウムで邪悪な神々や宇宙人が住まう星々と月を鑑賞するように夜空を見上げる。

上空には星が無かった。

雷雲のような真っ黒な雲が頭上を覆っている。

今にでも雨が降り出しそうな天候だ。

会合前まで見えていた朧月夜が見えないほどに暗雲が全てを覆い隠しており、ずっとと焦げ臭――

「……あ」

わかってしまった・気づいてしまった  
〈INTロール〉に成功の瞬間、サーツと血の気が引く。

推理が誤っていることを祈りながら爆発炎上した黒煙が立ち昇る行先を見つめる。

確信した。

この仮説を桃色髪の痴女の耳打ちに当てはめた場合、状況が合致してしまう。

繋がってしまった。

「あのう!?!蛇子ちゃん、ブラックさん!?!私を巡って揉めている場合じゃないかもしれませんよ?!」

バランスを崩し前のめりに転がるように狼狽した動きになってしまいが、どうでもいい。

直ちに地上で状況の把握が済んでいない高位魔族2人へ悲鳴を上げる。

それでもなお、私を手中に収めているからであるだろう。2人は気にも留めない。

あるいは私がまた余計な作戦でも企てているとも思っているのか。ジロリと一瞥するか、嫌に気持ち悪い笑顔で応じてくる程度だった。

「ちよっとお!?! マジだから! マジなやつだから! 少しばかり話

を聞いてもらえませんか？　お願いします！何でもしますから！  
なんでもするとは言つてない」

慣れないへ低／無重力行動で体を動かすたびに、重心がしつちや  
かめつちやかになる。

1人空中でタイムショック時のような動きをして、さらに三半規管  
がやられる。

この魔術は実に、暴漢を拘束するには本当に実に合理的な魔術だ。  
動けば動くほど。もがけばもがくほど。状況は悪化し、最後には抵  
抗しようとも思わなくなる。

されど手遅れになる前になんとか、頭上を指さして頭クルクルパ  
なジェスチャーを地上の連中に送る。

「……………チィッ！」

ダメだ。反応を得られない。

でも理解はできる。この事象、変化は地上からでは気づけない異変  
だ。

私だってブラックに82フィート……25？上空で呑気に夜景を  
見るまで気づけなかったのだから。

「駒ちゃん！　駒水ちゃん！　もうこの際、裏切りとか心底どおーで  
もいいから！今起きていることに比べたら些細すぎてどうでもよく  
なるから！ちよつとその建物の中に入ってエレベーター使って屋  
上まで登ってもらえませんか？ね？お願い。五車の友達としてのお願  
い！その分からず屋の高位魔族じゃダメなんですよ！事態の緊急  
性を何も理解してない！緊急避難速報が流れてもテレ東が平常運転  
だからって避難しないアンポンタンと同じぐらい理解できてない！  
今後の生死にかかわるから！ね！ねっ!？」

代役として全身全霊の絶叫を地上でバツが悪そうな駒水ちゃんに



浴びせる。

もう高位魔族が動かない以上、彼女に頼る他なかった。  
アメリカ……米連のことわざに軋む車輪は油を差される  
と言うものがあるが、口うるさい私の主張のおかげで彼女は恐る恐る  
といった動きで何度かエドウィン・ブラックの顔色を窺う。のちに許  
しを得られたのか、私が指定した建物内に逃げ込むように走って侵入  
する。

この際、細かいことは言いつこなした。

彼女が屋上に到達するまでの間。期末試験の時と同じように黒煙  
の切れ目のおおよその距離を測定し、事態と状況の解析に勤しむ。

「青空ちゃん……!」

「よく来ました!ありがとうございます!そのままこのハシゴを上がって展望  
台に昇ってもらえますか?」

空中浮遊しながら無重力で身体を動かしたために、その余韻で宇宙  
飛行士のようにぐるぐる反転していると屋上へ全裸で現れた  
彼女が現れる。

指示を立て続けに入れて事態の把握に向かわせる。

急かしたい気持ちを堪えて、彼女が確実に一段一段登るのを見守  
る。

彼女が足を踏み外して頭を打ってしまえばそれだけでおしまいな  
のだ。

「……………」

「上空と地平線を見比べてみていかがでしょうか? 爆発炎上する建  
物! そこから上空に昇る黒煙! 溜まり範囲を広げ続ける暗雲!  
地平線は透き通った空気! この異常事態についてご理解頂けま  
すか? このまま悠長に地上の高位魔族の痴話喧嘩を繰り広げてた  
ら、みんな死にますよ!」

「…………あ。……主人様あ!!」

「エドウィン・ブラアアックツ！ スネエークレデイ！ ガチでマジでヤバイ状況だから雑談を中断してこつちを見ろオ!!」

駒水ちゃんもまた高台に昇って異常事態に気が付いたようだ。

落ちないように注意を払いながらも地上で絶賛大揉め中のエドウィン・ブラックへ、私と共にキヤイキヤイ騒ぎながら意識を向けさせようとする。

異常とは爆発炎上した黒煙の煙が空で無散するわけでもなく。

一定の高度でとどまり、停滞し蓄積しているという状態だ。

どれほどの地帯が黒煙で埋まってしまっているのか、駒水ちゃんがエドウィン・ブラックの注意を引こうと動いている間におおよその計測は済ませた。

……私達が滞在している空間はおおよそ直径200?の球体を形成しているように見える。

最悪なことに “内側” に居る状態で。

桃色髪の痴女が話していた内容と照らし合わせれば、排気口など存在しない可能性が極めて高いだろう。

仮にこの私達を閉じ込めている空間が完璧に密閉され空間であり、激しく燃える炎が大量の酸素を急速に消費しているとしたら？

結果については小学生の理科の授業で習うような内容だ。

どうなるか私達の命運など、想像に難くない。

「ご主人様！ お願いします！ 青空ちゃんを地上に降ろしてあげて！ このままじゃ死んじゃうー！」

「そうだぞー！エドウィン・ブラック！死にますよ！自殺はできないけど、窒息死しますよ！私という貴重な情報源失ってもいいのか!? ああん?! わかったらさっさと地上に降ろしてください！お願いしますー！」

「……………」

ここでやつとエドウィン・ブラックが億劫そうな緩慢な動きで高所へと居る私の視線でとらえる。

蠅ハエでもみるような疎ましそうに蔑んだ目も、上空へと向けられたことで先ほどまでとは少し異なっているように見えた。

「おっ？… おっ？… お？… ……お？…」

持ち上げられた身体は空気抵抗を受けながら徐々に地上へと下ろされる。

ジェットコースターで急降下したときのような感覚。

男性が例える玉ヒュンというものを感じながら地上へと向けて降下していく。

「よしっ！ やつと話が通じましたね！ 協力ありがとう！ 駒ちゃん！ もう十分だから焦らずに地上に降りておいで！」

「……………うん」

降りながら駒水ちゃんに声をかける。

彼女からの返事はなかったが、同じ異常事態を観察した者として指示通り動いてくれることを願う。

地上では満を持したかのような顔の蛇子ちゃんが私を待ち構えている。

さあ！ 困ったぞ！

ついにフヨフヨと、あまり丁寧ではない降ろし方で地上へと――

Episode 163 『人生とは思いつりいかないものだ』

「……………」

「……………」

地上へと降り立たなかった。

そのまま地上約10フィート……………3?の地点で身体が浮かされたままになる。

逆に考えよう!

ここは2度も人間風情に泣かされた蛇子ちゃんがジャンプしても届かない地点だ。

やったぜ。

「おかえり♪ ゼラトちゃん♪」

「ただいま、蛇子ちゃん」

「遊覧飛行は存分に楽しめたかしら?」

「ぼちぼちって感じですかね。そっちは私の処遇について決まりました? いまだブラックさんの力で空中浮遊をされているところを見ると、駒水ちゃんと同様に私は彼の所有権に属する形にでもなるんですかね?」

「ソフ♪ それはまだ審・議・中♪ でも絶対にカオス・アリーナで働かせてあげるからね♪」

「ははっ、雇うつもりなら別にいいですけど。必ず “労働契約書” を見せてくださいね。ふざけた書類提示したら労基署の抜き打ち訪問以上に泣かしますよ」

「大丈夫よ♪ どんな劣悪条件でも最後に入団を懇願するのはゼラトちゃんだから♪」

「3度目の正直って知ってます? 1度目は蛇子ちゃんの配下、2度

目はブラックさんの部下、3度目はアリーナの観客に蛇子ちゃんの泣きつ面を披露することになりそうですね？ フハツ☆ 広がる痴態！」

「んにイツ！」

「おほおっ☆」

青筋の立った蛇子ちゃんが手を伸ばし飛び跳ねながら胸倉を掴みかかりに来るが、それをムササビが飛び立つような姿勢になって即〈回避〉する。

しかしマジギレというわけでもないらしい。既に彼女の手の内を知っているからこそその考察になるが、私に本当に危害を加えるつもりならば毒霧でも浴びせ地獄を見せた方がよほど簡単はずだ。

「ゼラトシーカーよ。先ほどから猿の1つ覚えのように騒いでいたようだが、そこまで何を気にする。命乞いでもする気にでもなったか」

空中でおちよくる私とキレる蛇子ちゃんを割って入るようにエドウィン・ブラックが仲裁に入る。

くだらないことで揉める子供の仲裁に入る大人のような実にいい顔だ。

「ええ。このままだとみんな死ぬでしょうし、最後の悪あがきとして自覚の共有と共に恐怖を与えるために命乞いしました」

「……………ほう？」

「と言っても、私も確証を得ているわけではないのですが…………ギヒヒッ」

私としては意図しないところで道連れに出来ることは、エビで鯛を釣るような事態なので明るい声でにんまりと笑う。

「詳しく説明してみせろ」

「ああ、それならブラックさんの側近さん？から報告を受けた方が早いと思いますよ。私の話はそれからでも」

初々しく頭を下げながら、路地からひよつこりと現れた桃色髪の痴女の方を指さし彼の視線を誘導する。

桃色髪の痴女の顔は窶<sup>やっ</sup>れ憔悴しきつてていた。主やその部下、仇敵の手前、必死に隠そうとしているが『どのように説明すれば納得してもらえるか』と一瞬だけ見せた苦悩した顔や、あの勇ましい眼力が鈍って見えることが何よりもの証拠だろう。

彼女に随伴している私兵達は調査に出かけた当初よりも数を減らしている。

桃色髪の痴女よりも精神状態は不安定のようにで89式自動小銃を抱き枕のように抱き寄せるもの、真つ青な顔をしているもの、ブツブツと独り言をつぶやいている者など……。

彼等が辛うじて規律と正気を保つことができていたのは、桃色髪の痴女の指揮や鼓舞のおかげなのだろうと推測できた。

確実に彼等も事態の把握を済ませているに違いない。

「報告申し上げます……」

痴女は私を一瞥したあとで、エドウィン・ブラックへ小声で耳打ちをし始める。

「4」

もう内容を盗み聞こうとも思わない。

空中で寝返りをうつように反転して、天を見上げながらソファーにでも寄りかかるような安楽な姿勢で報告が終わるのを待つ。

こうしている間にも黒煙は着々と累積している。

それを示すように指先をかき混ぜるように動かすと、あの私兵達が怯えて面白い。

もつと怯えろ。お前たちは死ぬんだ。もう助からないゾ。  
ギヒヒヒヒッ！

「……おおよその事態は把握した。ご苦労だった」

「はっ。ありがたきお言葉」

「さて、ゼラトシーカー。貴様の話も聞かせてみせろ」

さて。

痴女の話聞いた上でも彼は動じる様子は見せなかった。

豪胆なのか、打開策があると驕おごっているのか。

どちらにせよ。

いつかは慌てふためく彼のご尊顔でも拝みたいものだ。

「要点だけ纏めるならば、私達は空間に隔離されていて。その空間から脱出が出来ない状態にある。先の爆発によって周辺が炎上。このまま事態を放置すれば隔離された全員一酸化炭素中毒で窒息死するのも時間の問題って感じですかね」

「……………」

「更に付け足すならば、私が空中浮遊時にそちらの私兵部隊からの攻撃が無かったこと。今、そちらの隊員の数が減っていることから推察するに——鎮火活動で私にちよっかいを掛けている場合でもない状態。でしょうか？」

「……ククククッ」

私の推測に彼は満足したようだ。

彼が肩を揺らし、口を開き歯を噛みしめて笑う様子をまったりと眺める。

次にどのような手に出るのか観察していると、またもや彼の闇が分離しはじめ魔族が大量に表れたポータルを形成し始めた。

「ああー。私は何処へ連れていかれるのでしょーねー？」

まるでコルトコンベアに乗せられた機械部品のようにドナドナさ  
れていく。

無論、行先はポータルの中だ。

大量の魔族がなだれ込んできたことや、私がこれから潜らされるこ  
とからこのポータルは一種の両双方からの移動が可能な転送装置ファストトラベルの  
ようなものなのだろう。

しかしこの事態なのだ。もう抵抗はしない。したところでどうに  
かなるほど甘くはないことは承知している。むしろそうやって着々  
と手の内を明かしてくれることはこちらにとって好都合だ。

「はいー。潜り抜けた先はー？ デッテデー」

某ネコ型ロボットが秘密道具を取り出した時のようなSEを口ず  
さみポータルを潜り抜けた先は——先ほどと変わらない同じ地点で  
したとき。知っていました。

ええ、分かっていましたとも。

(まー、魔術的な移動手段は予め潰していますよね。せつかく魔法的  
なそれで閉じ込めたのに逃げられたら本末転倒ですもん)  
「ほう」

そのままコルトコンベアのような流れでUの字を描きながらエド  
ウィン・ブラックの元まで連れ戻される。

「その顔、まるで分っていたかのような反応だな」

「ええ。ブラックさん。過去にあなたがどのようなことをしてきたか  
私は知る由もないですが、相当な恨みを買っているようですね？ 私  
があなたに一矢報いるつもりならば。まずは逃げ道から塞ぐのが最  
初の1手でしようし」



「面白いことを言う。この空間が貴様やスネークレディを狙っているものだとは思わないのか？」

「ははっ。それこそ面白いご冗談ですね。確かに私も東京キングダムで恨みを買って漁った自覚はありますが、恨みを買う相手などあなたの見せてくれたポータルから現れた魔族ぐらいなものですよ」

「脅して済ませるつもりだったのだがな。アレを跳ね返してくるとは……よもや笑えたな」

「ええ、本当に。……仮のお話で私や蛇子ちゃんに向けられた作戦であるとしても、生還できたあとの周囲への悪影響をもたらすやり口が巧妙すぎてですね。……1時間、2時間そこらの即席で練られる計画ではなさそうですね。以上を考慮した場合、私達が標的ではないと至った次第ですね。蛇子ちゃんが標的だとしても人間風情に2回も泣かされちゃう系高位魔族ですし。もつと雑な計画だって殺せませよ」

足元で蛇子ちゃんの殺意と瘴気と眼圧が増すが、肩をすくめて見下ろしながら『悪気はないが、事実でしょ』と表情で応じる。

ブラツクの方は私の回答に満足したらしい。右手で顎をこすりながら満悦した笑みを浮かべている。

「それで。高位魔族はどうかわかりかねますが、人間は一酸化炭素中毒で容易に死んでしまいます。そちらとしては私に死なれたら困るでしょうし……。空間から脱出するまでの間だけ、休戦にしませんか？ ほら、利害一致もしますし……。こうやってのんびり話している間にも酸素は消費されていますよ……。チツクタツク、チツクタツク、チツクタツク……」

魔法少女村の網走のような口調でへ言いくるめ展開する一方で、桃色髪の痴女が指示を仰ぎたさそうにエドウィン・ブラツクを一瞥する。

蛇子ちゃんは……——ヒエッ。

こ、この女。休戦する気配が微塵にも感じられないだが???

舌なめずりしながら両手をワキワキさせて……。

むしろ休戦協定を結んで自由行動が可能になった瞬間に背中から刺してきそうなオーラを放ってるんだが???

煽り過ぎたか？

それとも虐め過ぎた？

でも最初に私の友人を人質に取るって一線を越えてきたのはそっちだってこと忘れてない?????

私は報復しただけなんだけど???

「ふむ。……残念だが、その申し出をこちらが飲むことは無い」

これまでが上手く行き過ぎた反動か、それともこれまでに積み重ねてきた〈信用〉が音を立てて崩れ去ったためか。

残念ながら思い通りに事は運ばないらしい。

当たり前だ。エドウィン・ブラック側にとって、私を空中に固定し捕縛すること——すなわちほぼ王手まで詰められたのだ。わざわざ異常事態程度が発生したぐらいでちやぶ台返しされるなどたまったものではないと考えているに違いない。

諦観する私から視線を外し、彼はそのまま指示を待つ痴女とスネークレディ、駒水ちゃんに命令を下している。

この距離だ。〈聞き耳〉を敬そはだてずとも、痴女には壁の案内を指示し痴女の部下には鎮火活動の継続。

スネークレディには彼と同行するように話しているのが分かる。  
駒水ちゃんには私の監視を指示している。

(……一度、そちら側の陣営を裏切った駒水ちゃんを監視に着けるとは何を考えている?)

怪訝な顔をする私へ、彼はそのまま愉快な仲間を引き連れて障壁がある方角へと歩いて行ってしまふ。

私は宙に浮かべられたままだ。これには片目を瞑って後頭部を掻きながら地上から不思議な顔で私を見上げている駒水ちゃんと顔を見合わせるほかなかった。

Episode 164 『空中で動けないなら、空を飛べばいいじゃない』

エドウィン・ブラックと愉快な仲間達が立ち去ってから、176ラウンド早約3分。既に立ち昇る黒煙は球体の1/3を覆い隠してはいるが、鎮火自体には成功したのかもしれない。映画『ミスト』の冒頭のように白い煙がまるで地上民を飲み込む事態には陥っていない。

ただ酸欠の症状として前頭葉と後頭部によろしくない頭痛の症状がじんわりと響き始めていた。

おまけに戦争でも始めたのか、あちらこちらから銃声や断末魔、命乞いまでもが聞こえてくる。

夜勤明けの脳内で音が反響するかのような忌々しい音色だ。

いずれにせよ、どの観点から観測しても非常によろしくないことには違いない。

現状を楽観的に捉えるならば、またもや私はエドウィン・ブラックについて理解を深められた。私が未だに空中浮遊していること——すなわち彼が仕掛けてきた重力変動の魔術は、彼がその場から離れても効果は継続することを把握した。

——要するに魔術ではないのか？ はたまたファストトラベル系の魔術のみを無効化させるものか。その原理が解明されていないが、ひとまずはヨシとしよう。

ポジティブ娘の陽葵ちゃん流に考えるならば、彼のおかげで私の脱出のプランは導かれたようなものだ。

人間である私や駒水ちゃんを死に至らしめようとしているこの空間から脱出することができた暁には、この空中浮遊状態のまま東京湾を走って渡ればいい。天草四郎も認める舞空術となることだろう。

問題はないッ!! 10kmまでならッ!!

「さて、想定も済ませたところで……そろそろ脱出しないとまずいですね。窒息死します」

「……………」

「そこで駒ちゃんには五車学園の友達プライスで協力を仰いでもよろしいでしょうか？」

「……………」

「ああ、心配しないで。ちゃんとブラックさんからの監視の指示には逆らわない範疇のお願いですから、命令違反で怯える必要はないですよ」

二人の状況に置かれ気まずさMAXな駒水ちゃんへ、裏切りなど気にしていないような表情を作って諭すような声色で懐柔に取り掛かる。

こんな悠長な会話を繰り返している段階ではないのだが、ここで激昂して駒水ちゃんを責めたてる愚行は避けるべきなのはわかる。

彼女がブラックを裏切って一度は私側についてくれたのは献身的に彼女を救おうと動いたこと以外にも、もしかすると “私となら逃げられるかもしれない” と思わせることができたのかもしれない。

当然だ。五車学園でも伊達に〈信用〉を積み重ねてきてないからな。紫先生の基礎能力試験、問答助け舟の一件、黒田先輩と眞田先輩相手の生徒指導、洋館事件。

駒ちゃんが失踪する前。私について知っている案件とさえはこの辺りだろう。

五車学園で彼女は私のことを良くも悪くも知っている。

「最初のお願いはブラックさんに吹き飛ばされてしまった私の筆記用具を取ってもらえませんか？ あ、油性ペンだけでいいですよ」

「……………」

「マジックペン、油性ペンだけですよ？ 凶器でも何でもない。安全・安心です」

「……………はこ」

すごく簡単なお願いの〈値切り〉に彼女はしぶしぶと言った表情であるが応じてくれる。

彼女がオークやオーガ、トロールをへ改造した釘打ち機で塵殺した現場を見ていなかったのは不幸中の幸いだろう。あの現場を見られていれば、先端の尖った油性ペンを渡した時点で暴れかねない女として道具を何一つ渡されることのない状況に陥りかねない危ういところであつた。

「ありがとう♪ ……よっころシヨット」

学園で見せていた笑顔で彼女から物品を受け取り、辺りを見回す。挙動不審な私の様子に釘付けになる駒ちゃんを他所に、私は油性ペンの蓋を足蹴に空中でへ跳躍し最寄りの壁。アイボリーカラーの壁面キヤンバスへと向かう。

「!?」

「？」

空中浮遊状態のままへ跳躍で空を飛んで移動しただけなのに、彼女は何をそんなに目を見開いて驚いているのだろうか？

「♪」

ちゃんと逃げる意志はないことを見せるため、建物にへばりついた時点で油性ペンで落書きをはじめ、おどけてみせる。

A・D・2078のバンクシーだと言わんばかりにこの時代では既に版權の切れたであろう●ツキーやマンパンアンを堂々と描く。ゆるせたかし。

「ハハッ！ 今日も良いテンキー」（裏声）

「なんのつもりですか……?」

「……」

「……………」

「……すみません。学園の時みたいに和ませようとふざけただけです。真面目に作業します」

マジレスに頭を下げて空中宙返りしながら本命の作業を開始する。私が刃牙流ではなく、ドラゴン○流の舞空術で壁際までやってきたのは数式の構築が目的だ。

本当であればエドウィン・ブラック御一行のように遮断している壁の調査に赴きたかった。

だがしかし休戦が受け入れられなかったならば、この場から推測を立ててあの障壁がどのような手段を用いれば破壊できるのか、そのためには如何なる手法が必要なのか割り出す必要がある。

状況から見ても魔術的なものだろう。対魔忍世界の最先端の超科学的な技術や私の世界の〈物理学〉上では考えられないような出現の仕方だった。

硬度としても高位魔族が3人出向いたとしても突破できないほど強固な代物。さらに先ほどから響く銃声から考察するに複数人が同時に四方八方からの銃撃を加えたとしても破壊できないらしい。

やはりその中でも気になるのは魔術を無効化する術も発動している割には、私は空中浮遊したままであること。球体状の檻は正常に機能していることだろうか？ こっちはいったいどういう仕組みで機能し続けているんだ？

「となると、やはり爆発……」

下手を打つと1回の爆発で空間内の酸素を全て使い切った挙句、障壁が壊れた瞬間に外気の酸素を爆発的に吸収しバックドラフトすら発生しかねないという致命的な状況に陥りかねないが、遅かれ早かれ酸欠死に至るのであれば誤差の範疇だろう。

ただちに必要な情報は、爆心地からの有効爆発範囲（爆発の影響範囲）、威力から導きだされる爆弾の必要数（個数）、爆発物の影響半径、爆発の期待値の算出、爆発物の形態だ。

いずれも私の得意分野である〈物理学〉から値を算出できそうではあるが、それでも何分か時間が掛かる。

こんな時、電卓やスマホ、欲を言えばExcelがあれば小難しい計算式を立てなくても自動計算式を済ませてくれるのと思う。

「……………青空ちゃん……………？ ……青空ちゃんって、もしかして実は……………？」

らくがきじみた汚い走り書きで計算を始めたところで、駒ちゃんが猫を被っていることを見破ったかのような指摘をしてくる。

無視すればいいだけの話だが、気になるものは気になってしまう。

「駒ちゃん、大変申し訳ないのですが……………。この計算式を間違えると死に直結しかねますので、今は話しかけないで頂けますでしょうか？」

「……………」

建物の壁に一心不乱で数式を並べるさまはまるで、ドラマ『ガレリオ』のワンシーンのようだが、そんなドラマのようにカッコよくはいかないものだ。

まあ、私の生死が掛かっているのだ。多少みつともなくても仕方がないだろう。

……………

……………

……………



Episode 165 『魔族を率いる頭領としての器』

「……………」

まったく。

高位魔族は揃いも揃って壁の破壊に成功していないらしい。

「……………できた。うっぷ……………」

めまいと頭痛によって吐き気を堪えながら、完成した式を見ながら必要物品をまとめる。

必要物品はC4程度の爆発物。

期待できる威力は12ゲージショットガンをダブルバレルで接射時の射撃時の約4倍、最大火力時には8倍もの威力が見込める。影響範囲もC4と同程度の威力ならば198?以降なら安全圏内、地下施設に避難できるならば133?以降の地点を安全地帯として拡張できる。

が、必要数……………これが今後の大きな課題になる。

東京キングダムは商業施設が数多くある分、爆発物自体を60個揃える分には困らないであろう。

——しかし今回は逆に数が多すぎても困るのだ。

爆発物数が過剰な場合、誘爆しないよう可能な限り爆発物を地下1階以上の地点に移動、もしくは見落としも含めて爆発の威力を調節しなければならぬ。

「ぐう……………頭が……………いたい……………」

「駒ちゃん、なるべく壁に寄りかかって安楽な姿勢を取ってください。

……………私の散らばった荷物の中にハンカチとかあるので、それで口を抑

えて」

「ううう……青空ちゃん、ごめんなさい……私、青空ちゃんを裏切つて、ううう……ご主人様の命令通り気絶させて拉致しようと……わたし……ごめんなさい……」

「大丈夫です。大丈夫ですから、まずは落ち着いて」

死を悟ったかのように彼女はぐったりとしながらうわごとのように贖罪の言葉を並べる。

私に出来ることは陽葵ちゃんから貰ったジャケットを渡し、素肌を隠させながら励ますことぐらいだ。

現状では咳き込む彼女に近づくことはおろか、寄り添って背中を摩ることすらできない。

一難去つてつぎ災難、厄介ごとは連続していく。

視野を広げれば一定の感覚を保ったまま、魔族の集団が私達を取り囲んでもいる。

いずれも淀んだ目をしていて、むすつと不貞腐れた顔で何を考えているのか読めない。

動きが制限された危機的状况で、必要物品を揃えなければならぬに……。まさに泣きっ面に蜂と表現するならば現状を指し示すのかもしれない。

因果応報とは言うが恐らく私がこれまでに虐殺してきた魔族の敵討ち、弱っているところを狙ってエドウィン・ブラックに献上するための供物として出向いてきたか。

それとも高位魔族の代行と担うつもりか。

あるいは人間の小娘を人生最後のレイプお楽しみとするののために集まってきたのか。

後者ならば道理にかなっている。これまでの経験から言えば邪神ども高位魔族へ献上される前に味見も理解できる。

駒ちゃんに至っては状態で抵抗などままならないほどに酸欠でグ

ロッキーで『犯してくれ』と体現する様にこの街で全裸なのだ。

エドウィン・ブラックが駒水ちゃんを監視役として置いていったことも、裏切りの代償として強姦の輪姦が命令を下されたと考えれば妥当かもしれない。

ただ不可解なのは、取り囲んでいる魔族はいずれもこれまでに攻撃する機会があったにも関わらず手を出して来なかったことだけが気になる。

「……………」

ただ敵のマシニングンを目前した歩兵のように誰が一番最初に犠牲になるか決めあぐねていたのかもしれない。

あいにく〈改造した釘打ち機〉は壊れたままだ。結果〈跳躍〉の連続で入手した〈手斧〉を振りかぶる形で構える。

奴等も薄々感づいているだろうが、今の私は空を飛びまわることができるのだ。

人類最強として歌われた合田沙保里の風船割りの要領で頭をスイカ割りにしてやる。

「ま、待ってくれ！」

『時間も惜しい』と思いこちらから飛び掛かろうとした矢先に、スイカ割りを開幕するには手ごころなサイズの頭部をしたオークが両手の前に突き出して無抵抗を晒す。

どうせ演技だ。

油断させたところにブスリ。そうに決まってる。

だからオークは殺す。一番最初に。殺す。

「はっ、は、話だけでも聞いてくれ！ アンタ！ あの高位魔族と傭兵の集団相手に大立ち回りしたって噂の人間だろ!? オレたちはアンタと、そっちの半裸の女に危害を加えに来たんじゃない！ オレ達は

高位魔族に睨まれようが、魔族に取り囲まれようが平然としているア  
ンタに！ 圧倒的なアンタに従いに来たんだ！」

オークはそのまま両膝をつき、半分仰け反りながら私が神になった  
かのような祈るようにして指を組んで見せる。

「……………っ」

光景が重なる。

記憶がフラッシュバックされる。

ああ、やめろ。

やめてくれ。

私に対して祈るな。

嫌な記憶を蘇らさせるな。

先祖は神なんかじゃない。

ただの奇妙な人間だ。

私もちがう。

ただの人間。

やめろ。

祈るな。

やめろ。

申し出をしてきたオークに続くように私達を取り囲んでいた魔族も近づいてきては同じように膝を付き、頭こぶを垂れ、身動きできない私の自由従順な配下な手足にでもなつたかのような忠誠を誓い始める。

「…………やめ……………つ。……………どうい風ふうの吹き回し？」

「信用できないかもしれないが、信用しなくなつていい！オレ達はアンタに従う！今はそれさえ分かつてもらえれば！ゲツホゴホツ！……ここにいる連中はアンタに従いたくて集まつた。さつきブラツクとアンタが話している内容は盗み聞かさせてもらつたツ！このままじゃ壁の中のオレ達全員死にまうんだろ！？死ぬのは嫌だ！オレ達を指揮してくれ！ここにこのいつら、全員そうだ。皆おなじだ。だから、こんなほぼ魔族しかいないような街で平然と我を通せるアンタに従つて悔いなく死にたい。今だつてそうだ。アンタは他の連中とは違う！無差別に殺し合つたり、壁を破るのに無作為に攻撃するわけでもない。その壁の数字の羅列を見据えてどう打開するか知恵を振り絞つてる。俺は馬鹿だから分からねえけどよ、丸のついた60とか133とかの数字はそれだけ用意するものがあるつてことだろ！？でもアンタはブラツクのせいで自由に動けねえ！手伝わせてくれよ！」

煙を吸い込んで噎せながらも必死に力説するオークをへ心理学で真の狙いを探る。

「もしも性器の味見が目的ならば、背後で全裸の駒ちゃんに意識が向くはず。」

「……………」

「なあ。頼むよ。ここから出られるならなんだつてする。オレ達はアンタの敵じゃないんだ。ただ生き残りたいだけなんだ。たのむ……」

されどオークはオークらしからぬ演説と継りつくような一心不乱の願いを私へと突き付けて来た。

「……………」

その揺るぎない気迫と勇気を振り絞った気骨は気に入った。

いずれ殺すにしても、奴の言う通り今は猫の手も借りたい状況なのだ。いいだろう。オークとの仲良しごっこなどまっぴらごめんだが、現状は利用するだけ利用してやる。

私が満足に動けない以上、時間も足りなければ人手も足りない。とにかく争って言い合っている時間も惜しい。

使えるものは何でも使って打開する。

魔術だろうが、敵だろうが、家財だろうが、死体だろうが、怪物だろうが、自分の命だろうが。

そのやり方が探索者としての在り方でもある。

どうせ死ぬならあがきにあがいて、前のめりに倒れて死んでやれ。

——いいだろう。こちらの世界でも「奇妙な共闘」の開演だ。

## Episode 166 『老獪な策略』

「分かりました。いいでしょう」

〈手斧〉を収め宙で安楽な姿勢を取る。

「本当か?!」

オークも神からのおつげを得た信者のように、その気味の悪い顔を明るくさせていた。

「ええ。今は一刻を争います。早速ですが皆さんに頼みたいことは6つ。まずはあなた方は何ができるのか、わたしに教えてください。次に地図を提示しますので現在地について教えてください。さらに続いて飲食店や商業地区にあるブタンガスの徹底的な回収および指定する箇所への設置。それと、なんでもいいので実弾が装填された狙撃用のライフルを1挺回収。あと遠方からでいいのでエドウィン・ブラックとスネークレディ……それと桃色髪の痴女が何処で何をしているかの偵察。それとこれからリストアップする物品の収集を指定する時間内をお願いします。」

ここにいる魔族は随分と覚悟がキマっているらしい。

私から攻撃されることも厭わないように近づいてきては食い入るように説明を聞き始め、弱点をひけらかすように自身の特性についても話してくれる。

私なぜ東京キングダム of 精密な地形が記された地図について余計な探りを入れてくることもなく——地元住民らしい追加情報を淡々と報告しては私はそれを書き記す。

そのうち調達品を聞いた全体の7割が爆発物で爆発四散した肉塊ごとく散っていき、3割のうち1割がその場に残って私と駒ちゃんの

護衛、2割が自由に動ける遊撃隊として滞在している。

念のため、駒ちゃんを足元に寄せて防御の構えを取っているが、誰も危害を加えようとはしてこない。いずれも私の顔を窺うばかりだ。

それにしても……体長2？はあるオークを見下ろす位置に居るとは実に悦に浸れるものだな。

その気になれば、いつでもその頭を叩き割ることができる。

……

……

……

ひとまず残った地元民の情報を収集したことで現在地の把握は済ませた。

マダムから貰った地図に、先ほど上空で計測した壁の距離を書き込み、おおよその壁があるであろう円を描く。

魔族で編成された遊撃隊を指揮し、詳細なボタンガスの配置箇所・集合地点を共有したところで、平行作業としてリストアップしていた物品の回収に向かわせる。

第二収集部隊の面々には私兵部隊を葬った位置、おおよび葬った亡骸が安置されているであろう場所も伝えたので狙撃用ライフルの1挺ぐらいはすぐに見つかるだろう。

きつとあれだけ仲間想いのエドウィン・ブラックの私兵達のことだ。数人程度の墓守を配置し装備や遺体を冒読しようとする私の一時的な配下共と交戦することになる。

私という一筋の希望が現れたことで士気を高めて向かっていった魔族達も何割か死ぬに違いない。あわよくばお互いに潰し合って、重体のオークを持ち帰って来てくれたのならばなお良い。



「さあ、急げ。急げ。死にたくなければ、急げ」

文字通り高みの見物で、戦国時代の武将にでもなったかのように指先ひとつで魔族を指揮する。

これまで他人を指示する立場になったことはなかったが、自分で調達できない以上彼等をとにかく指揮するしかない。

今の自分の姿が先祖と重なる。

そのたびに頭にノイズが走って、かつて前世の記憶が蘇る。

忌々しい記憶。

前世で私が家を飛び出すまでの記憶。

先祖におべっかを使って取り入れられよう、お気に入りになろうという家族・親戚たち。

家族たちの心理を全掌握している上で、反発する私を気にかけるアイツの卑しい顔。

虫酸が走る。

大丈夫だ。私は違う。

わたしは大丈夫。

私は先祖アイツみたいにはならない。

「ほ、ほう、報告申し上げます!」

怯えているかのような顔をして、足元で膝をつき震え声の魔族の声で正気に戻る。

いけない。

今は過去の記憶を走馬灯のように走らせている場合じゃない。

「……なんででしょうか?」

「エ、エドウィン・ブラックとその側近、スネークレディ、両名はここから北西の壁側にて地元住民を相手に蹂躪を繰り返しています!」

伝令の言葉に目を丸くしてギョツとする。

2人そろって私の前から消えて、どこで何をしているかと思えば………。

「はあー……」

「!」

大きな溜息を吐く私に、この報告気分を損ねたと感じ取ったのだらう。

魔族がビクツと縦長に細く伸びる。

「あー、違います。違います。報告してくれたあなたに対する溜息ではないです。『高位魔族が2人も揃って何をしているのかなあ』と思いでいます」

「は、はあ……?」

「だいたい予測はつきますけれども、2人が地元民を蹂躪している件くだんは、今回の爆発事件の首謀者はエドウィンブラックの一派だと決めつけて襲い掛かった——けれども返り討ちに遭っている状況ですか?」

「は、はい。そ、そうだと思われま……たぶん?」

「ははっ、そりや大変だあ。顔の割れている有名人は引く手あまたな人気者でうらやましいことで。ケツケツケツ」

高位魔族を煽るようにケラケラと嗤って変に強張っている魔族の緊張をほどこうとする。

私の皮肉たつぷりの発言で——

「……」

「……」

「……」

ダメだこりや。

魔族も笑ってくれているけど、緊張がほどけた笑いじゃなくて上司に愛想笑いを浮かべた部下みたいな顔になっている。しかも表情筋が硬く苦笑いみたいになっている。

「また彼が率いている壁外の部隊についてなのですが……」

苦笑いの愛想笑いを浮かべる魔族は続けて、ブラックの伏兵について言及をし始める。

そういえば桃色髪の痴女あたりが、おぼろ朧とかアレクトラとかリーという固定名詞を耳打ちをしていたのを思い出した。

「続けてください」

「はっ！ 臙率おぼろしのびぐんいる臙忍軍は壁外の周囲へ広く展開し、ブラックではなく貴女を探している様子です。またアレクトラ部隊は強行突破しようとして壁に攻撃を続けていますが破壊には至っていないようでした！ 他の部隊についてはこちらからも確認できておりません！」

伝令係の魔族の言葉に視線を左下に向けて、左手を口元に当て、右手を左肘に添える。

一酸化炭素中毒になる現状を除けば今は壁があるがゆえに、ブラックの残りの兵隊からの強襲による危機から逃れられているのだろう。前述を踏まえれば壁が無くなった途端にその臙忍団なるものやアレクトラの部隊がエドウィン・ブラック＋蛇子ちゃんと共に私の捕縛に向かってくるに違いない。

まさに鬼に金棒。空中浮遊している状態では満足に行動できない上に、自由の効かない状態でなだれ込まれたら一貫の終わりだ。

今こそ味方として動いている地元民で構成された魔族達もパワーバランスが崩壊すれば向こう側につくに違いない。

では私がこの場から駒ちゃんを引き連れて最善を選びながら逃げ切るならばどのようにすればいいか……。

「……………。承知しました。ひとまずは彼等の乱闘騒ぎに巻き込まれないように爆発物回収組には設置数だけ把握しつつ動いて貰ってください。また臙忍軍とアレクトラなる集団の配置を教えてくださいか？」

「はっ！」

伝令の魔族に地図を渡し壁外の各部隊について記述させる。

記述したものを確認して、あえてアレクトラ部隊の目前に○をつける。

「なるほど、ならば……………こちらの集合地点と物資の配置箇所を微調整

します」

伝令の魔族に地図を見せて、合流ポイントを指定する。

「え、で、ですが………そちらには………」

当然の反応。

「構いません」

されどそれでいいのだ。

私達はアレクトラなるものの集団の前で作戦を展開する。

伝令の魔族は目を白黒させて納得していない、私の状態から伝令の魔族も追われている身であることは承知であろう。にも関わらず、敵前に出ようとするなど正気ではなさそうな顔をしている。

「は、はい………では………」

「……ああ、ええと。あとは物資回収の際に蛇子ちゃん——嗚呼、スネークレディに関してはサデイスティックで無差別テロな一面があつて周囲へ毒をまき散らすので、極力、彼女の視界に入らないように」

「は、はっ！了解いたしましたー！」

私の一言でそそくさと魔族は去っていく。

場の空気を和ませるには至らなかつたが、今の情報はありがたい。

私に従う魔族達は忠実でいい奴等だが、またもや指示によつて何割かは死ぬことになるだろう。

お互いに利用し合っているのだ。利害関係が崩壊した時、また敵に戻り相手との対峙。きつと彼等も理解している。

ならばどのように立ち回れば良いかわからだろう。

それにしても……高位魔族共にとっては湧いてくる虫けらを片つ

端から叩き潰すような作業のおかげで、私へ差し向ける脅威は着実に減らしていること。

死体が増えることで酸素の消費量が減っているのも本当ありがたい。

Episode 167 『無敵の再武装』

「……………」

「うわっおっかねえ顔。……アンタ人間なんだよな？ ……：……：……言っちゃあ悪いがこの状況で人間がするような顔じゃなかったぞ？」

唐突な足元からの声に我に返る。

視線を降ろせば先陣をきって私へ司令塔になるよう進言していたオークが、息を切らせながら依頼していた狙撃ライフルをまるで木の棒でも握るように引っ提げて帰ってきたところだった。

所々に切り傷があり、その様子から狙撃用ライフルの強奪は簡単なものではなかったことが見て取れる。

物資回収で生き残った何人かは地面に寝転がって一息ついている様子が見られた。

ヨシヨシ。あの傷では助からない瀕死のオークもいるな。

「(苦勞)」

オークの言葉には耳を貸さずに目的の品だけ受け取り、試しに構える。

駒水ちゃんの目も気にして、おぼつかないような手さばきで弾倉を引き抜いて弾薬を落としそうになりながら装弾数を確認。さりげなくチャンバーチェックも行って状態を把握する。

——3＋1発も入っていれば十分だ。

スコープ付きのかなり手入れが施された狙撃銃だが、私との争いか……それともオーク達による強奪によるものか、肝心のスコープは壊れている。

通常の照準器だけで狙えるようにアタッチメントを外して、トリガーには指をかけずにひとたび構える。

恐らく銃の反動によつて空中で回転することにはなるだろうが、この球体は直径200?程度。このライフルの基本射程が110?だとして、220?までは私の通常時の命中力での狙撃は私にとっては造作もない。

「よし」

再装填を済ませる。ライフルスリングで肩から掛け――

「ところでよ、いくら夏場とはいえ裸にジャケットはどうかと思うぜ? そつちのお嬢ちゃんは、服をどうしたんだよ?」

「あ、えつと……これは……」

「ここらの娼婦ですらマシな格好をしているし、東京キングダムでそんな恰好でうろつくなんざ『犯して欲しい』と言ってるようなもんだ――あいてえ!」

………これだからオークは。

ドラゴンクエストに登場する腐った死体のような卑しい手つきで駒ちゃんに唾を付けようとするオークの禿げ頭を銃口で小突く。

もちろん奴は振り返る。

トリガーには指をかけて、弾丸で大脑を貫通させられそうな経路である柔らかい眼球を狙う。

「……………」

「ひっ……………」

振り返ったオークが銃口を突きつけられていることに気付いた途端、伝令の魔族のように縦長に細く伸びあがる。

私が目を放した途端にコレだ。油断も隙もあつたもんじゃない。



「ち、違うんですよ!」

「……………何が違う? 言ってみろ」

「あ、あくまでもアンタの付き人が夏場とはいえ、娼婦よりも酷い恰好をしてたから……適当な廃墟から人間の娘つ子用の服を持ってきたんですよ! 別に手を出そうってわけじゃ——証拠!」

奴の懐からぐしゃぐしゃの何着かの衣服が取り出される。

銃口をマジックハンドの代わりにして引取り、検品を行う。

当然、銃口は向けたまま引き金には指をかけている。

全裸よりも淫猥に見える衣服を投げ捨てて、無いよりはマシな衣服をオークへと投げ返す。

「ほ、ほら! あと、えづいていたから水も持ってきたんでえ!」

オークは汚いものでも放り投げるように選定した衣服と未開封のペットボトル水を駒ちゃん足元へと投げつける。

そのまま生着替えを眺めるようなことはせず、両手を挙げたまま私の方へくると振り返った。

「良い心がけですね。それに気も利くようだ」

「へ、へへっ」

肩ヘライフル銃を乗せたところで、ゆっくりと手を降ろして手揉みをしながら愛想笑いを浮かべるオーク。

されどオークだ。こちらの形勢が逆転した途端にてのひらを回転させるに違いない。

「……………」

「だ、だから、そ、その目。ゴミでも見るような目は止めてくれよ。最初からアンタを頼るつもりがないなら、アンタの指示であっても銃な

なんて物騒なモン渡すわけがないだろ……？」  
「ええ。そうですかね？」

ここまでのやり取りで出払っていた魔族達が続々と指定した物品を持って帰って来る。

あの場にいる誰も彼も私とオークとの揉め事の仲裁をするつもりはないようだ。全員が気の毒そうな顔をしている。

オークから視線を放して、戻ってきた魔族達を集める。

オークは許されたと思ったのか、肩の力を抜く。  
さて。

宙に浮いている以上、私に出来ることは少ない。

持ってきた材料を確認して上空から簡易ガスマスクの作り方を伝授し、劣悪な環境下でも活動できるように装備を整えさせる。

まさか空っぽの業務用の次亜塩素酸ナトリウムを主成分とした塩素系漂白剤のケースと透明のマジックテープ、スポンジでガスマスクができるとはこの場にいる誰もが想定していなかったようで物品を持ってきた時の怪訝な表情が意図を理解した途端に納得しているような表情になる。

1つを駒ちやんに装備させて延命治療を計る。

彼女はオークから受け取った服を纏い、先ほどよりは幾分かマシな格好にはなる。

と言っても渡された簡易ガスマスクを被ったことで首から下はちよいえつちななのに、顔面が残念な事になっているジャックオーランタンのようだが。

また投げ渡されたペットボトルには手を付けず、封だけ開けて眺めていると言った様子だ。

「いいね。ありがとう。これは良い武器だ。ありがとう」

更にリストアップされた物品の中から更にへショットガンも受け取る。

これだけの大混乱な現場なのだ。武器はゴロゴロと手に入るし、  
〈ショットガン〉は狙撃銃よりも入手は楽だったようだ。

2連式のダブルバレルショットガン。

これは良い。本当に良い武器だ。ほれぼれする。

「ご報告申し上げます！ 指定のあった物品を目的地に配置が終わりました！ 指示のあった物品の超過分は可能な限り地下へと移動も済ませました！」

「ご苦労様。では皆さん？ 指定のあった地点に移動を開始いたしました。ほら負傷者に手を貸してやりなさい。防御陣を張れる魔術師の方々は手製のガスマスクを着用して、他の方々を内側に囲うに展開を。私の付き人は円陣の中央へ」

指示でぞろぞろと魔族達が1つの生命体のように固まって移動を開始する。

伝令の魔族がソワソワとしながら時折、チラチラ顔色を窺ってくる。

ヘリウムガスでプカプカと浮かぶ風船のような私をオークが紐づけて引っ張ることで移動する状況に至っている、このみっともない移動方法に物申したいわけではないだろう。

そうだ。ここからが正念場だ。

……

……

……

# Episode 168 『作戦は奇をもって良しとすべし』

「アレクトラ様！ あれを！  
……！  
ヤツが『青空 日葵』か  
……」

球体上の端。

壁の向こう側で部隊を展開するアレクトラ部隊との初顔合わせを行う。

「はい。……………報告書にあつた通りの似顔絵です。……………  
……………ですが、どうして魔族に  
……………関わっているのでしょうか？  
……………」  
「ふんっ。そんなこと私の知った事ではない。『ブラック様の能力で浮かせられているところを地元民に捕えられた』  
……………その程度の実力だったただだ  
……………」  
「狙撃銃も所持していますが……  
……………」  
「所詮は人間の娘。多勢に無勢だったただだ。実にくだらない  
……………」

などと壁の向こう側で会話でもしているのだろう。

私達を捕えている壁は、あらゆる音も遮断しているようだ。

しかし五車学園の洋館事件で、コロ先輩から〈読唇術〉を鍛えあげられた私に死角はない。

伝令の魔族が位置情報を教えてくれたアレクトラという部隊長の姿には妙な既視感があつた。

彼女に似ているキャラを例えて表現してしまえば、葬送のフリーレンに登場する断頭台のアウラをベースとして、髪の毛を明るい鮮血のような赤毛にして、下半身の露出度を限界まで高め紐ショーツ1枚のみのヘソを囲うように淫紋のある痴女と言った方が伝わりやすいかもしれない。

手には身の丈以上の大鎌のような形のハルバードを持っている。

キリツと吊り上がった目尻や威風堂々といった態度。こちらを嘲るときに見せた顎をしゃくつての笑みから、彼女の気の強さも感じ取れる。

そして彼女の胸は爆乳だが、五車学園の蛇子ちゃんや陽葵ちゃんよりは小さい。

上には上がいるのだ。魔族と言えども胸のレベルは五車学園勢には敵わない。

「それではみなさん。ラストスパートです。私が指示するのと同時に魔術師の皆さんは人類史におけるローマ軍の歩兵戦術テストウドを組んで下さい」

「……………」

「あー…………テストウドを存じ上げない？ 人間の方もいらっしやるので伝わるかな……………と思ったのですが……………。比喻がマイナー過ぎました？」

「……………」

「ゴホン。要するに、私や他の方々のように魔法盾が使えない者ののために全員をすっぽり覆えるドーム状の防御盾を張ってほしい訳です」

アレクトラ部隊を目前に身振り手振りでフードを深くかぶった魔術師——カルティスト候補生たちに指示を送る。

しかし反応としては悪く、いずれも何故そんなことをしなければならぬのかよくわかっていない顔をしている。

「……………まあ。できなければ、脱出を目前にしてこの場にいる全員死ぬだけです」

淡々と結論を説明する私に、この場ではなんの役にも立たない魔術師達が魔術師たちのケツを蹴り上げて詰め寄る。

私が指揮するよりも肉体言語を含んだ詰め寄りは実に効果的だっ

たようで、何故そんなことをしなくてはならないのか分かってはいないが実行することだけは渋々、承諾してくれる。

「よろしい。これより脱出の最終作戦に入ります。魔術師の皆さんは私の合図——背後にいる赤毛の牛みたい痴女の魔族に対して発砲したら即座に防御陣を展開してください。その他の魔族の方々は魔術師の方々の耳を塞いで、合図もお願いします。腕が複数本ある方は自分の耳じゃなくて魔術師の耳の保護を優先してください」

背後をチラリと見やる。

アレクトラ部隊も私達の一団が何かをしているのは確認しているが、何をしようとしているのかはまだ把握は出来ていないらしい。

ただし何か起きてても、壁が消失したのと同時に私を取り押さえられるような配置についていること。またアレクトラの部隊も壁の破壊に専念し始める。

ああ。それでいい。

愚直に私を目標目指して突き進んで来ればいい。

そのまま動くな。理解に至る前に死ね。

「な、なあ?」

肩にかけてたライフルに手を伸ばしたところで、足元から最初に共闘を申し出てきたオークの声が行為を遮る。

なんだ。

これから《ナーク魔物を捕えし見えざる球》破壊のメに入るといふのに……。

「別に俺はアンタの作戦にケチをつける訳じゃないんだが、今アンタが説明した作戦だとアンタはオレよりも高い位置にいる。デカイオレは屈めがめばコイツ等が展開するドームの中に入れるけど、オレよりも高い位置で宙に浮いているアンタは入れないんじゃないか……

？ 今までの様子から、どんなに引つ張つても一瞬しか地面には下りられないんだろ？」

ああ、良い質問だ。

オークによる疑問は、部隊の全体内の数人を動揺させるだけの十分な揺さぶりをかけるだけの発言力を持っていた。

さて、彼等がどのような魂胆にせよ。これである程度、二重スパイが誰かまでは判明したな？

だからこそ、私は何事もないかのような屍山血河を築いたときのよ  
うな快活な笑顔をにんまりと浮かべる。まるで死など恐れていない  
かのような、背陣のアレクトラのような自信の表すように。

「それが何か問題ですか？」

「え？ ……………いや、よ…………でも、よ？ ……………え…………？」

「あなた方の目的は私に協力して生き残ること。その結果さえ得られれば、私が生き残ろうが死のうが関係のない話でしょう？ だから――  
―どうでもいいでしょう。そんなこと」

吐き捨てるような言葉を足元の集団へ投げて、ライフルを構える。

先ほどの揺さぶりで動揺しなかった連中のうち、追加で更に何人か  
が動揺する。それは〈心理学〉など不要な程には。

「――」

潜り込んでいたスパイが動くよりも先に〈ライフル〉のトリガーを  
引く。

目標物は直線距離の200？先にあるボタンガスの集合物だ。  
問題ない。

『CALL of CTHULHU クトゥルフ神話TRPG』6  
8頁 “長い射程” に基づいて、有効射程範囲内だ。

「ざまあみろだ」

パァーンツ!!!

——キンツ!

BOOOOOOOOO MMMMMツ!!!

〈ライフル〉の狙撃が目標物に直撃。

ガスの集合体に火花が飛び散って無事に起爆。激しい爆発。

爆発他の爆発物を誘爆させ効果の影響範囲と爆発威力を底上げさせる。安全圏である私達から約2? 範疇を除く一帯の建造物やら地元住民、高位魔族もろとも吹き飛ばす。

例え建物を遮蔽や掩蔽にしたとしても爆心地から半径165? 範疇は何処に逃げてても無意味だ。

期待値で考えたとしても、これは神格ですら強制的に退散させるほどの高威力。

間違いなく人間風情に2度も泣かされた蛇子ちゃんと桃色髪の痴女は消し炭だろう。

今度こそ——さようなら、蛇子ちゃん。

さて……。エドウィン・ブラックこれにどのような対処をしてみせるのだろうか?

こちらの目論見通り抹殺することが叶えば御の字なのだが……。

ボタンガスへの射撃による反動と爆発の衝撃波で、サマーソルトでも繰り出したように私の視界はひっくり返る。

反転しながら手際よくボルトアクション〈ライフル〉の再装填を行い、突然の爆風に呆気に取りられているアレクトラ部隊——逆さまの視界で大将首である彼女へ向けてそのままトリガーを引く。

パァーンツ!!!



「ガアツ——?!」

「アレクトラ様!」

Critical Hit.

ライフル弾は彼女の眉間——ではなく。

左側の角に突き刺さる。

まだ彼女には、ここで死んでもらうわけにはいかないのだ。この場では角への衝撃で脳を揺さぶり動きを止める程度に留めなければならぬ。

こちらの計略通り彼女は顎を殴られたボクサーのようにガクンと両足の膝をつく。指揮官が狙撃されたことで周囲の部下の足並みが一時に崩れる。

指揮官を守るために駆け寄る者。壁の消失を把握した者。指揮官がやられたことで戸惑う者。壁が無くなった事に驚く者。

これから起きる事象を知っているのか、逃げ出す賢い者もいるが——もう遅い。

魔族ならば地獄の業火に焼かれたことはあるか？

ん？

さあ、死ね。

消し炭の時間だ。

「青空ちゃん!!!」

「あぶねえっ!!!」

アレクトラ部隊——最後のあがきを確認したところで、突如として浮遊感が消失し自由落下を得る。

なるほど。これはエドウィン・ブラックは爆発の後の悲劇がきつかけで力尽きたと考えることもできるだろう。

良かった。

このまま一生、3? 上空に浮いた状態の人生など考えたくもなかった。

ただでさえ五車学園では周りから浮いているのに物理的にまで浮いていたら、そのうちどこかに飛んで行ってしまふところだった。

ともかく。

——この勝負はもらった。

勝ち誇る私を他所に、落下姿勢はジャーマンスープレックスを掛けられた人のような姿だったが、私の真下に居たオークと駒水ちゃんがかやつちしてくれたおかげで硬いコンクリートに頸椎を打ち付けるには至らずに済む。

私が1人と1匹に抱えられた途端に、上空へ青白いミズクラゲの傘に見たこともない文字がつづられた半透明の盾が展開される。

「来ますよ！……ここが正念場です！」

まんぐり返しの不自然な姿勢のまま抱きかかえられた状態で声を張り上げ、魔族達を鼓舞する。

格好が決まらないなあ……。

ゴオオオオオオオオツ——

カツ！

少し遅れてフラッシュ・バンのようなまばゆい閃光と同時に、衝撃波が可視化されたかのような龍状の赤い波が防護壁の外へ襲い掛かる。

あれはバックドラフトだ。

バックドラフトとは、熱された一酸化炭素に急速に酸素が取り込まれて結びつき、二酸化炭素への〈化学〉反応が急激に進み追加の爆発を引き起こす科学現象。

飲み込まれた人物は魔族とはいえど、ただでは済まされない。激し

い熱風が表皮や肺を紙のように焼き尽くす。

伝令の魔族が教えてくれた臆忍軍も、この事象を知らなければ何人かは犠牲になって混乱状態にあるはず。

生き残れるのは爆心地から166?以上離れている地下に避難した奴と、私たちと行動を共にした奴以外には居ないだろう。その他に生存者が居たとしても今頃、地中深くでモグラのように震えて隠れているに違いない。

防御盾内の魔族達は追加の閃光と爆発に対して恐怖しおののく。

魔術師たちは炎の龍に飲み込まれないようにと必死に詠唱を続ける。

駒水ちゃんはひっくり返ったままの私を抱きしめ続ける。

伝令役の魔族は震えながら祈るように私の手をかたく握る。

オークも駒水ちゃんに習って覆いかぶさるように抱きしめてくる。

お前は抱き着くな! 気持ち悪いっ!

「お前は抱き着くな! やめろバカ! 退けよツ! 臭いんですよ! このデブウ!!」

「くさい!? デブウ!?!」

〈近接戦闘(格闘)〉による銃底での殴打で覆い被さっていたオークが、もぞもぞとノロノロとした動きで離れていく。そこに私の〈キシツク〉も混ざる。

しかし奴としては気にすることもなく、学内でいじられる年下のように身をよじらせるだけで反撃してくる様子は見せない。

むしろ私の暴言の方がよほど傷が付いたような顔をしている。

オークが私から離れたあたりで、バックドラフトは消失していた。

「魔術師部隊! 防御壁を解除!」

声を張り上げて身を守っていたドームを解除させる。

そのまま魔族達を掻き分けるように押しつけて、閉じ込めていた円

球体の壁があつた場所に手を伸ばす。

『……………』

魔族達は食い入るように生唾を飲み込み、立案した作戦の行く末を見守る。

まあ、既にアレクトラに対して狙撃が通つた時点や私達が何事もなく呼吸ができていること、バックドラフト現象が起きたことを考えるなら間違いないだろうが……。

「——ご照覧あれ」

手を伸ばすのをやめて微笑みの表情を浮かべ、身体を使つて壁が消失したことを指し示す。

背後にいる彼等の方へ振り返つて、リズムカルなバックステップを踏み国境線を跨ぐように境界線を越える。

一時的な私の忠実な僕達しもべに、これ以上のない報酬として目標の達成を知らしめる。

「お、おお……。おおお……っ！」

私に続くようにして幾人かの魔族が外側へと歩む。それはまるで生者へとにじり寄るようなアンデッドのような足取りだ。

やがてそれは水面に滴つた水滴が作り出した波紋のように次々に他の魔族達にも伝染していく。

生を実感し、振り上がる拳、湧き上がる歓声。

無事に小目標達成と言つたところだ。